明治三十八年十一月二十日印刷
明治三十八年十一月廿五日發行

非賣品

編輯兼發行者　東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地
國書刊行會

代表者
理事　豐川良平
同　市島謙吉
同　今泉定介

印刷者　東京市京橋區新榮町五丁目三番地
本間季男

印刷所　東京市京橋區新榮町五丁目三番地
東京活版株式會社

煤拂
東鑑康富記親長卿記○按に年中恒例記に拂字掃に作れり
すゝはき
年中恒例記御ゆとのゝ上日記女房私記○按にすゝはきは拂ひすつる故にいへりこの詞は殿上の女房方のよひ初し詞也すへてあら〳〵しき詞もしくはいひにくき詞なとはよひよき樣に名付るは女房方にて古來よりのならはせなり
すゝとり
滑稽雜談○按に俗稱なり古來諸家の日記等の中に此稱なし
掃塵
閫書引障志○すゝ拂の漢名なり
除殘
歲時記異集○屋塵を掃ふを除殘といふとみえたり
○正誤
歌林四季物語冬部云御すゝはらひとて內侍所あらぬ御殿にてもすゝけをとらせおはしましそめし事は陽成院の御ときよりとなんこの事さして公事にあらすかもんへそのつかさのものする御ことわさとてたゝかりそめなる事になん云々
按に陽成院の御ときよりと見えたれとたしかなる所見なし且此書僞書なれはとるにたらす再按に四季物語と題名なせる書二通りあり此書は歌林四季物語と歌林の二字を冠らせたれと奧書は桑門蓮胤とありて跋あり此物語は土佐守貫之の枕草のおもむきを寫侍る云々とあり又普通の四季物語と稱する書は奧書に日野山陰蓮胤書と見えたり徒然草に引たる四季物語は全く長明の作としられたれと此書は印本にて文章も巧ならすして更に證據なき事をしるしたれは僞書なる事明なり

云
藝苑日渉民間歳節云十二月家々掃ニ除塵煤一謂ニ之煤除一
華實年波草云煤掃或說ニ煤掃ニ十三ヲ用ルコト此日鬼宿ニアタリ吉日ナレハ煤ヲ掃フトナリ云々
古事記傳神代十二之巻云凝烟和名抄に唐韻云炲煤灰集レ屋也和名須々とあり萬葉九三十九丁廬八燎須酒師競冠辭考云ふせやにたく火の煤とうけたり十一二十七丁に難波人葦火燎屋之酢四手雖有すはすゝひの切りたるかしこれらも凝烟のことなり○八拳垂摩氏とは垂を多流々と訓るは非なり自垂物はみな多流とこそいへ多流々とは物を他より令レ垂に云言なり火を繁く燎且久に經て凝烟の多き由の祝言なりさて於ニ高天原一者と云るは盛に燎て烟の高く起登ることをいみしく云る詞にて宮造りを於ニ高天原一氷木高知と云と同意なり次に地下者と云に對ひたればたゞ上はといふことをつよく云るなりさて高天原と云から其處に坐神の宮の御巢を云そは炊の烟は御巢に懸る物なれはなり
閩書引ニ漳志一云臘月廿四日毎家掃レ塵
歳時紀異集云吳中十月廿七日掃ニ屋塵一曰ニ除殘一
○和歌
萬葉集巻第九挽歌
見ニ菟原處女墓一歌
葦屋之菟名負處女之八年兒之片生乃時云々智奴壯士宇奈比壯士乃廬八燎須酒師競云々　右高橋連蟲麻呂之歌集中出
又巻第十一古今相聞往來歌
寄レ物陳レ思
難波人葦火燎屋之酢四手雖有己妻許増常目頰次吉
右作者未詳
○釋名
すゝはらひ
東鑑康富記親長卿記宣胤卿記年中恒例記○按にすすはらひの事は太古よりありしもゑるへからす古事記に天の新巣のすゝの八拳たるまでたき擧てなと見えたるによりて考るに八拳たるまてこりつもりたるすゝを其まゝにやは置へきはらひきよむる事ありしなるへし諸のけかれをはらひなと古代ののりとに殘りたりましてや現然にすゝけよこれたるをはらはさらんや又東鑑に御煤拂の事有ニ相論一新造者三箇年之内其憚ありなと見えたりこれ今の世にも新造の家は必す三箇年を經されはすゝ拂の式をせさるもこれらによりしなり

日として屋中を掃除すると見えたり和漢共に行事を迎ふるの儲に屋中を掃除して萬の事の清からん事を欲するなり別して異なる事もなきなり

或說に煤拂と云事は陽成院の御宇より初ると云りいふかし古書に所見かつてなき事なり

本朝食鑑云煤卽梁上灰塵倒掛者也屋上古塵及燈燭之積煙經レ年所レ成其庖竈上梁厨棟最多者薪煙之舊積也若レ燒ニ松薪一之家者不レ日成ニ倒掛一雖ニ高堂大厦之上一而不レ可レ無俱是本邦呼稱レ煤臘月擇レ日掃ニ去一家中舊積塵一此稱ニ煤拂一

日本歲時記云十二月十五日の後屋中の煤塵を掃へし煤塵を掃に世人多く期日を定て恒例とす然れとも或風雨の變あれは期日に拘らす十五日の後風雨なき暖日を用へし閩書に障志を引て臘月廿四日每家掃塵とあれは中華にも有事にや是又期日に拘とみえたり

日次紀事云十二月初八日清水寺本堂樓門等煤拂六坊勤レ之

南京大佛煤拂云々

又云初十日清水寺千手堂釋迦堂煤拂

又云十三日貴布禰社煤拂此日宿直社司勤レ之

又云十五日石淸水八幡宮煤拂神事云々

又云二十日嵯峨淸涼寺釋迦煤拂釋迦開帳修ニ法事一其後住職以レ綿拂拭

知恩院煤拂今日東山知恩院法然上人之像開ニ厨子一拂ニ煤塵一是稱ニ法然煤拂一宗門男來拜ニ法然像一倭俗佛龕謂ニ厨子一

京極誓願寺彌陀像煤拂在職レ綿拂ニ拭之一

續節序記云十二月十三日煤拂今日の比より廿日まてに屋中の煤塵を掃を煤拂と云世人期を定て恆例とす新に來る陽を迎るの意なるへしといつの比よりと云事を聞す閩書に障〔漳カ〕志を引て臘月廿四日每家掃レ塵とあれは中華にも有事にや

四季草木行事云十二月御煤拂　十三日　武江御城の煤拂はむかしは廿日にてありしかと大猷院殿御忌日故家綱公御代よりは十三日に成なり町人足參りて拂ひし也夷大黑福祿壽の三服〔幅カ〕一對を狩野家の中より每年被レ仰にて書あくれは表具を被ニ仰付一御床に掛りし町方はてはお祓古札納めふとく乞食體の族呼ありきて代物を請て是を納る勿論此比は煤竹箒賣ふれありく云々

和訓栞云すゝ炲煤をいふ倭名抄に見ゆ古事記には凝烟をよめり新嘗のすゝなと見えたれは嘗灰の義なるには萬葉集に廬屋たきすゝしきそひてと見えたり云

すなはち百年に一年たらぬ附喪神の災難にあはしと
なり
日次紀事云此月二十日以後撰ニ吉日一禁裏有ニ御煤拂一
主殿寮獻ニ拂レ煤之箒於禁裏院中一同箒柄南座獻レ之煤
拂以後至ニ正月左義長一不レ被レ用ニ竹串調味一
當代年中行事略云十二月御煤拂擇ニ吉日一
初獻ひつかさ供レ之
二獻自ニ御臺所一供レ之
箒主殿寮同柄南座調進常御殿殿上人非
藏人等御椽側侍男居衞士勤レ之云々
年中下行帳云御煤拂日限不レ定清涼殿衞士勤レ之箒三斗主
殿寮伴氏同柄南座三斗御髮上松明主殿寮伴氏御髮上役
人衞士一斗
女房私記云す丶はきの御祝　御盃三つ肴に居出る
初獻あつ物かすのここさしたうふさんせう　二獻そろ　三獻みそすりかけて出るくたもの　御てうし出るひとへ
衣にて御はいせん
年中恒例記云御煤拂在レ之於ニ内儀一御祝參也常御所
御會所御厩以下ハ御會所同朋仕レ之上樣御有所は御
末同朋御末ハ御末男衆幷御末同朋仕也御煤拂の御祝
參雜煮參也御美女方ヨリ參也御所同朋御末同朋御末
男衆御美女等於御末サウニ御酒給レ之ス丶ハキノ
具道エサシハウキ柄刺箒ノコイ布一人ニ一色ツツ被レ下レ之
御す丶はきの道具モサウニモ御倉より御下行在レ之
御す丶はきの御餅大草調ニ進之一
滑稽雜談云唐韻云煤灰集レ屋者也　○閩書云　障志云臘
月廿四日每家掃レ塵　○梨窓二筆云正惠子云日本の人
十二月に煤拂と云事をなして家の内の隅迄拂動かす
も此惡鬼を驅出す法式追儺の事を云の　あやまれるなるへし
○當世において禁裏院中の御煤取を始として貴家比
屋のわかちなく十二月十三日以後是をいたす廿日に
は諸家の寺院に此事を行ふ其由未レ考在家には此日
をはつる廿日とて吉事に不レ用猶可レ考
歳時故實大概云近世多くは十三日を用ゆ
是は柳營にて十三日に御煤納ありそれにならへる
期日なるへし民庶も今日を專らにする也
貝原氏の歳時には十五日を用ると見えたり近世年中
行事の書には禁裡にては吉日を撰て御煤拂ありと見
えたり
吉日を撰む事は陰陽家より日時の勘文と云ものを
奉りてそれにて定めらる丶なり
閩書云臘月廿四日每家拂レ塵と云々是は廿四日を期

當時年中行事云煤拂陰陽頭勘文にゑたかひて日時定らる勾當内侍兼日殿上入をふれもよほして各まゐりあつまる其外御簾屋大釘衛士等の者をはそれ〳〵の奉行の人もよほしによりて參る刻限典侍一人ひとへきぬ着て劔璽の間（近代此間あり）より劔璽の案なから（二かい厨子）を舁出して常の御所の御座のうへに大宗（宋か）の屏風一双引めくらしてゑはらく其内に安す神祇伯劔璽の間の煤をほらひ掃除せしむ事終て本やく人劔璽をもとのことく舁入其後吉方よりはらひそむすのこの分は衛士手のものあまた召くして掃除せしめ御簾疊も新調或は古物を掃除してこれを調是も手のものまゐりて合力するなり此間便宜の所にうつりましますす其所にて一こんあり初こんかちむ二こん（てんかん）供しをはりて御盃とをりて御前を撤す其後女中にもこふ御見廻伺公公卿めされたゝ殿上人内々の衆は殘りなくめし出されてかちんてんかくなと給御乳母是をやくす勾當酌伊豫さかなにて御とをしあり其日は女中老若によらす世俗にうちかうふりとか云綿をかつく也いかなる事にか故はゑらす勾當内侍にて嘉例の祝義有り内侍所にても近年嘉例の事有と云なり掃除の事をはりて本殿に還御常の御所にて御盃まゐるあつものそろ〳〵かうゑやうの物三こん有り女中にもあつものそろ〳〵例の折敷一つにするゑてたふ盃は女中計とをる天酌迄の事はなし

禁中年中行事略云御煤拂（吉日をえらひて是あり）初獻ひつゝかさより奉る二こん三獻御臺所より奉る御輿寄御門の脇にて豆腐煮山椒味噌をかけ何もへ下さるゝあつかへの獻といふ等主殿寮より上る同柄南座より調達す常の御殿は殿上人非藏人御椽頰は侍男居は衛士勤む清涼殿極﨟衛士内々外樣は衛士勤む

恒例行事略云御煤拂是は吉日をえらひて有也御獻あり初獻こさしかすのこ豆腐櫃司より上る二獻索麪三獻するめくたもの白てん餅男居より上る等は主殿寮柄は南座より調進す長橋の車寄の御門の脇にて豆腐を煮山椒味噌をかけて下さるあつかへの獻といふ常御殿は殿上人非藏人御椽側は侍男居は衛士つとむ

附喪神記陰陽雜記云器物百年を經て化して精靈を得てよく人の心を誑すこれを附喪神と號すといへり是によりて世俗每年の立春にさきたちて人家の具足をはらひ出して路次にすつる事これを煤拂といふこれ

れと諸家の記錄によりて按に二百年前のむかしは大概十二月二十日前後の吉日にて且晴る日を撰まれてすゝを拂ふ事諸日記に顯然たり扨又西土にても此事所見ありいはゆる臘月廿四日毎家掃塵と閩書にみえ吳中十月廿七日掃二屋塵一と歲時記異集に記したるによれは千萬里の海陸を隔且國異にて人異なりといへとも風俗一致にして人情も又かはらさりしなり

古事記神代巻云於二高天原一者神產巢日御祖命之登陀流天之新巢之凝烟訓二凝烟一云二州須一之八拳垂摩底燒擧摩弖二字以レ音地下者於底津石根燒凝而云々

和名類聚鈔燈火部云炲煤唐韻云炲煤臺梅二音和名須々灰集レ屋也

東鑑云嘉禎二年十二月六日己丑霽爲二大膳權大夫奉行一召二陰陽師等於御所一歲末年始雜事日時勘二申之一御煤拂事有二相論一文元朝臣申云新造者三箇年之內可レ有二其憚一云々親職晴賢等朝臣之先達者雖レ無二指文一皆所二記置一也至二新造一者無レ煤之故歟有レ煤者可レ拂歟云々所詮此條無二證處一然者無二煤拂御沙汰一可レ宜歟之由被二仰出一之間各不レ申二子細一也

康富記云寶德元年十二月廿日參二給事中文亭一煤拂也

親長卿記云文明二年十二月十七日晴雨御所御煤拂也秦仲朝臣以量等祇候予菅宰相等合力了依レ無人一也番衆所煤拂冷泉亞相已下各沙汰也

宣胤卿記云文明十二年十二月九日今日禁裏御煤拂云

御ゆとのゝ上の日記慶長三年つちのえいぬのとし云十八日はるゝ云云御すゝはきの御ふれありこよひより御ゆとののうへならしますさけの御くはりあり　十九日はるゝ御すゝはきいつものことくあり常の御所はかりにうちに御ゆとのゝうへにてかちん御てんにて二こんまゐる女御女中みな〳〵御いはひまゐるをとこたちするにてあつ物御いはひありゑいしほうけん權すけ殿かんろしつねの御所の御さのうへにたいそう(大宋)の御ひやうふ一さうたてられて御はらひありゆふかた御すゝはきの御いはひ三こん常の御所にてまゐる初こん三つさかな二こんそろ〳〵三こんかうちまゐるしゆこう女御御しやうはん女中もそろ〳〵御すはりありめてたし〳〵長はし御すゝはきにはいつも御さか月御いたゝき候へともわつらひにて御まいりなしゑゆこうよりゑろ御まなまいる一せうゐん殿より梅枝すいせんつはきの見事なるえたゑん上あり

古今要覽稿卷第七十四

●時令部

●すゝはらひ　煤拂

すゝはらひの事は中昔より慥に所見ありといへとも神代にすゝの事みえたりいはゆる天の新巣の凝烟(スヽ)の八挙(ツカ)垂まて燒(タキ)擧てと(古事記)みえふせやたきすゝしきほひてとも葦火燎(タク)やのすゝたれと(萬葉集)みえたれは古代よりすゝを拂ひし事もありしなるへけれと時日をさため吉日を撰みてすゝをはらひし事は嘉禎二年より慥にみえたりその年十二月六日己丑霽爲二大膳權大夫奉行一召二陰陽師等於二御所一歲末年始雜事日時勘二申之一御煤拂事有二相論一文元朝臣申云新造者三箇年之內可レ有二其憚一と(東鑑)みえたるによれは此以前よりもありし事しられたりしかりといへとも禁中にては此頃煤拂の事ありしやいなやしるへからす東鑑は全く武家の記錄にして殊に鎌倉將軍家の進退事實を記したる日記なれは禁中の見合にはなりかたしといへとも嘉禎二年は將軍賴經公御在世中なれは萬事何事にかきらす大內の御式をうつされ給ふへき事と推はかられたりしかれは禁中にても其頃は御煤拂ありしなるへけれと定式の御行事にはあらさりし故諸家の記錄中に見當らされとはるかに後れて親長卿の記に文明二年十二月十七日晴雨御所御煤拂也としるし宣胤卿記に同十二年十二月九日今日禁裏御煤拂とみえたれは此頃よりは禁中にても恒例となりて年々十二月中にすゝを拂はせ給ふなりさて東鑑にみえしことく新造の御殿は三箇年の內はすゝけをとらせ給はぬ事にして今の世にいたるまていやしき賤か家居までも其規定を守りてとらす又煤拂の時日は嘉禎二年の頃より十二月の中吉日良辰を撰み且雨なとの降ぬ日を用ゐられしとみえて親長卿の記御ゆとのゝ上の日記等にも幾日晴御所御煤拂也幾日はるゝ御すゝはきいつものことくありなとみえたるにてしられたりさて近世は柳營にても十二月十三日を定日とさため給ひしによりて貴賤おしなへて此日を用る事となれり武家にても舊家は古來の仕來もあれは各々其定を用ゐて日の晴雨善惡にかゝはらすすゝを拂ふ事な

の長明か四季物語と引たれは其比迄は正しきも傳はりけんをいつのほとにかたえて今行はるゝは後人の僞作せしにても有へきか猶考へし

十二月部云ついなの夜はをけらのもちひつくみの鳥なとやきて奉り御かれいひの御まはりに奉れはこれも物の怪えやみやらひぬへき本文侍るとなんいはしのはさみ物ひいらきのほこはなやらふ家には百敷ならてもある事なれともことに大内にはかふもりのつかさの例としてつかふまつれり此なやらふ事はもろこしにも侍れとわきてわか御國には神武のすへらきの六とせの春よりものしたまふ事にていみしき御ためしなり云々

按に此ならやふ事は我國には神武のすへらきの六とせの春よりものしたまふといふはたしかなる證據なし尤此物語は僞書なれはとるにたらす日本紀神武天皇六年に倒語を以て妖氣を拂ふ事あり是を思ひたかへ追儺も此年よりと書あやまれるなり

公事根源云慶雲二年天下疫癘さかりにして百姓おほくうせたりしかは土牛をつくり追儺といふ事はしまりき異國の書には農事の爲に時をしめさむとて土牛を立るよしみえたり

按に慶雲二年とあるは非なり續日本紀類聚國史小野宮年中行事等三年なれは二年にはあらす又異國の書には農事のために時をしめさむとて土牛を立るよしみえたりとあるも心得かたし後漢書禮儀志云季冬之月立二土牛六頭于國都郡縣城外丑地一以送二寒氣一とみえ月令集説云旁磔謂四方之門皆披二磔其牲一以攘二除陰氣一とあるによれは農事の爲に時をしめさんとて土牛を立るにはあらす陰氣を逐除せむために用ゐしなり作二土牛一大儺と續紀にみえたるも此意なり

新書玉燭寶典○按に先レ臘一日大儺謂ニ之逐疫ーと後漢書禮儀志にみえたり又儺人は厲鬼を逐もの也いはゆる儺人所ニ以逐ニ厲鬼ー也と禮記にみえたり

なやらふ

延喜式小野宮年中行事源氏物語江家次第河海抄○按に河海抄に儺を追事なり鬼やらひといふ追の字をやらふとよむなりとみゆ

追儺

延喜式小野宮年中行事榮花物語雲圖抄濫觴抄○按に古へついなともなやらふとも云り其證は源氏物語紅葉の賀になやらふとていぬきかこれをこほち侍にとみえ榮花物語月の宴につごもりのついなに殿上人ふりつゝみしてまいらせたれはとあれは其頃ついなともなやらふともいはれしこと知られたり

おにやらひ

年中行事秘抄河海抄建武年中行事公事根源○按に河海抄に儺を追事鬼やらひといふ追の字やらふとよむ也又儺の一字を鬼やらひと讀なりとみえ又行事秘抄に金谷を引て云陰陽之氣相激化爲ニ疾癘之鬼ー爲ニ人家ー作レ病とあれは此疫鬼をはらふを鬼やらひとはいへり又後漢書禮儀志にも惡鬼を禁中に逐ふとあるもこの義なり

行儺

月令廣義引ニ呂覽ー○按に行儺といふも追儺といふに義同し行字やるといふ意あれはやらふといふ義にて行儺と名付たり

害除

同上○按に同書に驅ニ疫癘之鬼ー謂ニ之害除ーとみえたれは是も義上におなし

逐除

同上○同書に行儺今所謂逐除也とみえたれは義明なり

逐疫

後漢書禮儀志○同書に先レ臘一日大儺謂ニ之逐疫ーとあれは儺の別名なること明かなり

○正誤

四季物語

詮攷曰印本には歌林四季物語と題す今所レ引は寫本にて四季物語と題し文章大に異なり徒然草に鴨

○和歌

躬恒集
　しはすのつこもりのよなのおにを
鬼すらも都の内とみのかさを
　ぬきてやこよひ人にみゆらん
久安六年百首
　歳暮　前大納言隆季卿
九重の雲の上よりやらふなの
　ほとにともなふふりつゝみ哉
新撰六帖
　歳のくれ　衣笠内大臣家良公
百敷の大宮人もきゝつきて
　おにおふほとに夜はふけにけり
夫木和歌集卷第十八冬部
　歳暮　宣旨
ふる年といふなをやらふ音たかみ
　春をいつらと人や聞らん
年中行事歌合
　三十五番
　右追儺　内大臣
今はたゝ一夜になりて葦の矢の
　いるかことくに年そ暮ぬる
右又いるかことくにといへる古今の歌の心もより
所ありて負ましき由判者申き持
右追儺とは年中の疫氣を逐はらひ侍る心にや光源
氏物語になやらふなと申侍るも儺を追にて侍なり
やらふとは追と云詞なり殿上の侍臣桃の弓あしの
矢をとりて鬼を射なり此こゝろにて侍るにこそ

○釋名

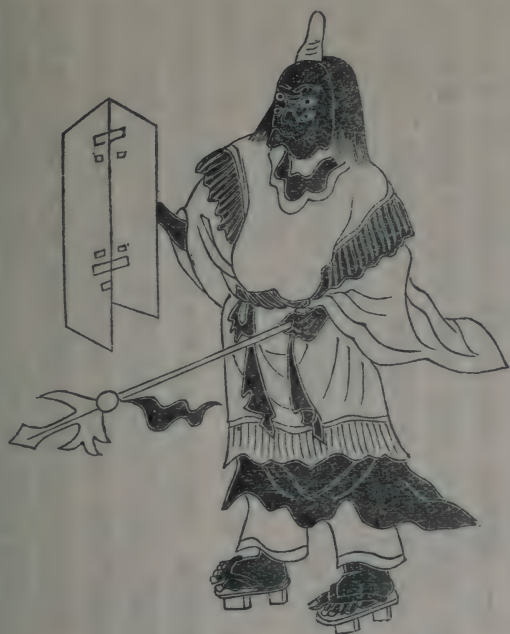
那
續日本紀延喜式內裏式河海抄○按に那は儺の音な
り禮記月令の注にも難音那とあり是なやらふとも
なやらひともはたらかせていへり年中の疫氣をは
らふ義也此事の始て行はれしは文武天皇慶雲三年
十二月より也或は元年よりとも二年よりともいふ
說あれと正しからす

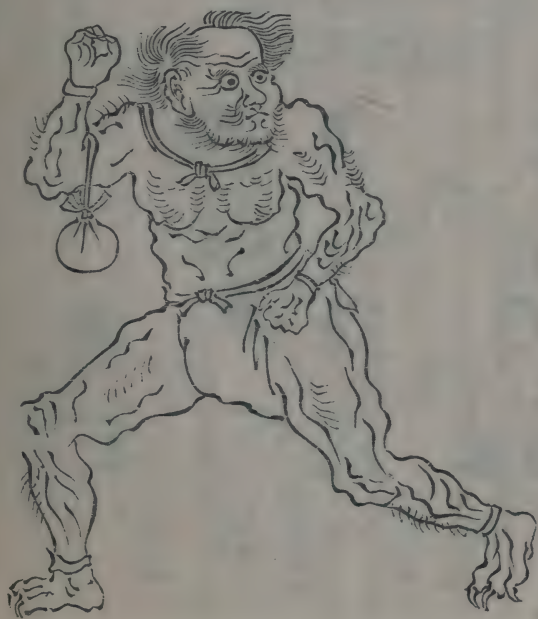
難
周禮禮記月令集說○按に義上におなし禮記月令の
注に難與ㇾ儺通とみえたり

儺
續日本紀延喜式內裏式論語後漢書荊楚歲時記南部

レ樂在二殿前一

月令集說云季春惟國家之難仲秋惟天子之難此則下及二庶人一又以二陰氣極盛一故云二大儺一也旁磔謂四方之門皆披二磔其牲一以攘二除陰氣一不三但如二季春之九門磔攘一而已舊說此月日經二虛危一司命二星在二虛北一司祿二星在二司命北一司危二星在二司祿北一司中二星在二司危北一此四司者鬼官之長又墳四星在二危東南一墳墓四司之氣能爲二厲鬼一將三來或爲二災厲一故難磔以攘二除之一事或然也

同上方相氏之圖論語圖云以二熊皮一蒙二其頭一黃金達二四目一自執二戈楯一今世謂二之魅頭一

格致鏡原引二建康實錄一云孫輿公嘗著二假面一戲爲レ儺至二桓宣武家一溫覺其應對不レ凡推問之乃輿公

同上疫鬼之圖

皆赤幘執桃木而噪入各人家室逐疫鳴鞭而出各家或用醋炭以送疫黃冠唱童子餘曰甲作食殉云々

東京夢華錄云至除日禁中呈大儺儀並用皇城親事官諸班直戴假面繡畫色衣執金鎗龍旗教坊使孟景初身品魁偉貫金副金鍛銅甲裝將軍用鎮殿將軍二人亦介冑裝門神云々自禁中驅祟出南薰門外轉龍彎謂之理祟云々

月令廣義云呂覽歲前一日擊鼓驅疫厲之鬼謂之害除亦曰儺又行儺今所謂逐除也結黨連群通夜達曉家至門到責其送迎孫興公嘗戲爲儺至桓宣武家南部新書除日太常領樂吏幷護童侲子千人晚入內至夜于寢殿前追儺燃蠟燭燎沈檀上與親王妃主以下觀之賞賜甚多是日衣冠家子弟多覓侲子之衣而竊看宮中者秦中歲時記除儺皆扮作鬼神狀內二老人儺翁儺母

樂府雜錄云驅儺用方相四人戴冠及面具黃金爲四目衣熊裘執戈揚盾口作儺々之聲以除逐也云々侲子五百小兒爲之衣朱褶青襦戴面具以晦日於紫宸殿前儺張宮懸樂太常卿及少卿押樂正到西閣門丞並太樂署令鼓吹署令協律郎並押

政事要略所載侲子之圖

（本條式云侲子八人紺布衣但依唐說圖之）

幹節解女肉抽女肺腸女不急去後者爲糧因
作方相與十二獸儛嚾呼周偏前後省三過持炬
火送疫出端門（東京賦曰煌火馳而星流逐赤疫於四裔）
荆楚歲時記云按禮記云儺人所以逐厲鬼也呂氏春
秋冬紀注云今人臘前一日擊鼓驅疫謂之逐除晉陽
秋王平子在荆州以軍圍逐除以鬪故也玄中記顓頊
三子俱亡處人宮室善驚小兒漢世以五營千騎
自端門傳炬送疫棄洛水中
玉燭寶典引續漢書禮儀志云季冬之月先臘一日逐
疫侲子持炬火送疫出端門門外騶騎傳炬出宮
司馬闕門外五營騎士傳火棄洛水中云々
南部新書云除夜儺入殿前燃蠟熒煌如晝
唐志云大卜季冬帥侲子堂贈大儺天子六隊太子二
隊方相氏右執盾導之唱十二神名以逐惡氣鼓吹
四者令帥鼓角以助子之唱
事文類聚云昔顓頊氏有三子亡而爲疫鬼一居江
水中爲瘧鬼一居若水爲魍魎蜮鬼一居人宮室
區隅中善驚小兒爲小鬼於是以歲十二月命
祀官時儺以索室中而驅疫鬼焉東海度索山有神
荼鬱壘之神以禦凶鬼爲民除害因制驅儺之神
云々
通志略云周制夏官方相氏掌蒙熊皮黃金四目玄衣
朱裳執戈揚盾帥百隸而時儺以索室毆疫月令季
春命國儺九門磔禳以畢春氣仲秋天子乃儺以達
秋氣季冬命有司大儺旁磔以送寒氣後漢季冬先
臘一日大儺謂之逐疫其儀云々北齊制季冬晦選樂
人子弟爲侲子如漢法合二百四十人百二十人赤
幘皂衣執鼗百二十人赤布袴褶執鞞角方相氏執戈
揚盾又作窮奇祖明等十二獸皆有毛角鼓吹令率
之中黃門行之冗從僕射將之以逐惡鬼于禁中隨
制季春晦儺磔牲於宮門及城四門以禳陰氣秋分前
一日禳陽氣季冬旁磔大儺亦如之選侲子如北齊
法令八隊二時儺則四隊問事十二人赤幘褠衣執
皮鞭工人二十人其一人方相氏如周禮一人爲唱
師著皮衣執捧鼓角各十人未明呼鼓譟以入方相
氏執戈揚盾周呼鼓譟而出合趣陽明門分詣諸城
門唐制季冬大儺及州縣儺禮竝如開元禮
廣東新語云儺用狂夫一人蒙熊皮黃金四目鬼面玄
衣朱裳執戈揚盾又編茅葦爲長鞭黃冠一人執
之擇童子年十歲以上十二以下十二人或二十四人

陽は善陰は惡なり故に陽を尊み陰をいやしむなり陰邪の氣は凶惡にて人をそこなふ物なれは是を追拂ふなり

和訓栞云なやらふ源氏にみゆ儺のやらひなり又なやらはんともはたらかしていへり神代紀に逐をやらふとよめり今鬼やらひといへり

又云なおひ儺追の義也尾張國國府の社なとにいへり遠江國淡路國玉神社にも古へありし事にてなおへ祭といひしとそなやらふと義通へり正月十三日の夜旅人を捉へ土餅を負せて逐ふなり茅にて小人形を作りて儺に負す也元亨釋書に筑紫觀音寺に正月上旬行人を捉て駈儺を行ふよしみえたり浮屠修正の法にして神事と心得るは非なり鬼走の條考へ看へし

藝苑日渉（民間歲節）云按本邦追儺（此讀云ニ那耶郎夫一又云ニ隱儺耶郎伊一）之儀始ニ于慶雲三年一（見ニ類聚國史一鴨長明四季物語曰始ニ于神武六年一）陰陽寮誦ニ祭文一侍中執ニ桃弓葦矢一（延喜式曰陰陽寮儺祭畢親王已下執ニ桃弓葦箭桃杖一）大舍人寮裝ニ厲鬼一方相氏執レ矛率ニ侲子二十人一偏巡ニ宮門一逐レ疫出ニ四門一（東陽明門南朱雀門西殷富門北達智門其義詳見ニ延喜式公事根源等一）今民間疫除所レ唱鄙俗雖レ可レ笑亦甲作食レ殉之類而風俗所レ向雖ニ聖人一所レ不ニ敢廢一也與ニ朝儀一雖レ不ニ相同一均之驅儺之遺風耳

因併ニ錄之一云

周禮（秋官）云方相氏掌下蒙ニ熊皮一黃金四目玄衣朱裳執レ戈揚レ盾帥ニ百隸一而時難以索レ室毆（去）疫

禮記（月令）云季春之月命レ國難九門磔攘以畢ニ春氣一仲秋之月天子乃難以達ニ秋氣一季冬之月命ニ有司一大難旁磔（難音那磔音責）出ニ土牛一以送ニ寒氣一征鳥厲疾乃畢ニ山川之祀及帝之大臣天之神祇一（註云季春惟國家之難仲秋惟天子之難此則下及庶人又四方之門皆磔レ牲皆所ニ以禳ニ陰氣一土能制レ水故作ニ土牛鷹隼之屬一）

論語（鄕黨篇）云鄕人儺孔子朝服而立ニ阼階一（孔安國曰儺驅ニ逐疫鬼一也恐ニ驚先祖一故朝服立ニ於廟之阼階一也）

後漢書（禮儀志）云先レ臘一日大儺謂ニ之逐疫一其儀黃門子弟年十歲以上十二以下百二十人爲ニ侲子一皆赤幘皂製執ニ大鼗一方相氏黃金四目蒙ニ熊皮一玄衣朱裳執レ戈揚レ盾十二獸有ニ衣毛角一中黃門行レ之冗從僕射將レ之以逐ニ惡鬼于禁中一夜漏上レ水朝臣會侍中尚書御史謁者虎賁羽林郎將執事皆赤幘陛衞乘輿御ニ前殿一黃門令奏曰侲子備請逐レ疫於レ是中黃門倡侲子和曰甲作食レ殉胇胃食レ虎雄伯食レ魅騰簡食ニ不祥一攬諸食レ咎伯奇食レ夢强梁祖明共食ニ磔死寄生一委隨食ニ觀錯斷一食巨窮奇騰根共食レ蠱凡使下十二神追ニ惡凶一赫ニ女軀一拉ニ女

又云法道仙人開基寺多在ニ播州ニ皆修ニ追儺法ニ見ニ加東郡朝光寺儺ニ寺僧蒙ニ鬼面ニ被ニ彩服ニ携ニ炬斧劔錫杖等ニ別被ニ鳥甲ニ人如レ追ニ彼鬼ニ鬼逃去

又云山州菩薩池之東北隅有レ塚名ニ魔滅塚(マメツカ)ニ爲ニ疫鬼降伏ニ築レ之勸ニ請貴布禰神ニ蓋除夜撒レ豆也取ニ魔滅之義ニ乎

歳事故實云追儺なやらふ夜は貴賤となく大豆をうち疫鬼を追本朝にては慶雲（按に豆を打事は慶雲の頃よりにはあらす至て後世なり）の比よりはしまれる事なりされとそのもとは唐土上古よりの正禮也むかし顓頊氏に三子あり生て身ほろひぬ其靈疫鬼となり一は江水にをる是を虎とす一は若水に居す是を罔兩蛾鬼とす一は人の宮室匹隅の所に居て人の小兒を驚す年のあらたまるに隨ひおとろへをおひあたらしきをむかへんために今夜家内の惡氣をおひしりそくるとなり譙周か論語の注に儺はこれを赱りそくる也とあり追儺といふは年中の疫氣をはらふ意也方相氏の官とて黄金の面に四目あるをきて熊の皮を着しくろき上衣にあかきもすそをして戈をとり盾をあけ侲子を百二十人四行にたて桃の弓棘の矢にて四方を射赤丸の五穀を以て惡氣をはらふと後漢書禮儀志にあるなり大豆も赤丸の五穀の數なれは後の人も此遺風によりて今夜大豆をうつなり

溫故日錄云追儺ひかる源氏になやらふなと申侍るも儺を追にて侍るなりやらふとは追といふ言葉也按するに儺は疫を追はらふ事なり戯のやうなれともいにしへの禮にて周禮禮記論語にものせたりそれより後世々の禮儀志に赱るさすといふ事なし殊更文選にのせたり張衡か東京賦に詳なり云々

國朝佳節錄云本朝儺法亡今士民除夜戸上挿ニ魚頭拘葉ニ投ニ炒豆ニ皆儺之遺意

續節序記云追儺は疫を追拂ふ事也戯のやうなれとも周禮禮記論語等にも出たり此外世々の禮儀志にも記され侍る也また此夜赤丸五穀をましへそ丶きまく事後漢書の注にもみえたりおにやらひは鬼を追拂義也源氏物語なやらふと侍るも儺をやらふと云事也やらふとは追といふ意也鬼とは陰の字を訓せり陰邪の靈氣をさして鬼と云なり鬼といふは眼大く角ありて夜叉のことくおそろしき形ある物也とことはり知らぬ人はおもへりさにはあらすた丶陰邪の氣也陰陽の二つはそなはるへき物なれとも陽は正しく陰は邪なり

古今要覽稿卷第七十三

●時令部

●那　儺二

當時年中行事云追儺香をくゆらかしもてまいるかヽしめ給ひて返し給ふ女中次第に取渡してきく其後勾當内侍又御殿中を持てめくる云々

四條家年中行事云十二月追儺とは惡鬼を追やる心也十二月晦日の夜禁中にて行事也御とねりの役なり限四にしてすさましき面を着て手に大ほこを持則鬼神の形となりてせん花門より入て東の庭より通りたき口の戸に出天上人御殿の方に立て桃の弓あしの矢にて是をいる年中のゑきれいを拂ふ心なり云々

羅山文集云儺雖レ近ニ於戲一而古之禮也故聖人猶朝服而立ニ於阼階一記ニ於周禮一載ニ於漢志一見ニ歷代之史集一不レ可ニ勝數一我國昔神世既雖レ有ニ驅レ鬼故事一然權ニ輿于文武帝慶雲三年一以降每歲行以爲レ恒其朝廷儀式未レ及レ論焉民間除夕到レ今所レ行者挿ニ杜谷樹於門戶壁間一此國諺所レ謂比比良木是也其葉有ニ稜角一如レ刺蓋禦ニ邪鬼一也又爆レ豆撒ニ之屋内一唱曰鬼分外福分內古人所レ云暗中信レ手頻拋擲打ニ著諸方鬼眼睛一是也按漢舊儀逐レ疫之夕方相氏率ニ隷童一設ニ桃弓棘矢土鼓一且射レ之又取ニ赤丸五穀一以播ニ灑之一夫五穀菽豆在ニ其中一杜谷樹與ニ棘矢一亦不ニ甚遠一也方相侲童所ニ唱和一其辭八十言脅十二神食ニ諸惡鬼一亦不レ過ニ於鬼外福內之四言一云々

日本歲時記云十二月晦日俗に隨て今宵儺豆をうつへし

儺豆をうつ事節分の夜する人侍れと禁中の追儺も十二月晦日のよしふみにみえ侍る又もろこしにも金吾除夜追ニ儺名一とあれは今宵その事をなすへし

和漢三才圖會時候部云儺所ニ以逐レ疫蒙ニ熊皮一黃金四目玄衣朱裳執レ才揚レ盾可ニ畏怖一也以索ニ室中疫鬼一而驅ニ逐之一

又云筑前太宰府觀音寺駈儺捕ニ寺四傍路人一頭蒙ニ鬼面一身被ニ彩服一名爲ニ儺鬼一引過ニ殿庭一此夜當所男女入レ寺打ニ是鬼一爲ニ驅儺一鬼甚困極國俗自レ古有レ之此日觀音寺四畔無ニ行人一當寺鑑眞所レ建也

禮一者宜レ除レ之則如レ言而得ニ國泰安民一行基自作ニ男女二鬼面一今傳有レ之是本朝儺之始也云々

東宮年中行事云十二月ついなの事きんちうにおはします時うちの御かたのなりこゑにしたかひて宮つかさとものあしのゆみやをもちてあひまちこれをおふ

今案式のことくにはもゝの弓なりしよしゆみやをたてまつるといへりしかれともさんたいは□□本ノマヽやうはりたてまつるとはの院とうくうの御時内裏におはしますあひたとしことにこの事あり

建武年中行事云追儺大とねりれう鬼をつとむ陰陽寮の祭文をもちて南殿のへんにつきてよむ上卿以下これを追殿上人とも御殿の方に立て桃の弓にている仙花門より入て東庭をへて瀧口の戸にいつこよひ所々にともし火をおほくともす東庭あさかれひたいはん所のまへみきりに燈臺をひまなく立てともすなり

河海抄云なやらふとて追儺十二月晦日也云々除夜に儺を追事也鬼やらひと云追の字をやらふとよむ也又儺の一字をも鬼やらひとよむ也始レ自二禁中一迄二于何家一行レ之

下學集時節門云追儺節分夜於二禁中殿上一侍臣以二桃弓葦矢一驅二惡氣一謂二之追儺一也

公事根源云大寒の日夜半に陰陽師土牛童子の像を門口にたつ陽明待賢門は青色の土牛をたつ美福朱雀門には赤色なり談天藻壁門は白色なり安嘉偉鑑門には黒色なり郁芳皇嘉殷富達智の四門には黄色をたつるなり青色は春の色ひんかしにたつ赤色は夏の色南にたつ白色は秋の色西にたつ黒色は冬の色北にたつ四方の門にまた黄色の土牛をたてくはふるは中央土の色也木火金水に土は離れぬ理あり慶雲二年天下疫癘さかりにして百姓おほくうせたりしかは土牛をつくり追儺といふ事はしまりき云々

又云追儺卅日けふはなやらふ夜なれは大舍人寮鬼をつとめ陰陽寮祭文をもて南殿の邊につきてよむ上卿以下是をおふ殿上人とも御殿の方に立て桃の弓あしの矢にている仙花門より入て東庭をへて瀧口の戸にいつこよひ御前に灯をおほくともす東庭朝餉臺盤所のまへのみきりに灯臺を隙なくたてゝともすなり追儺といふは年中の疫氣をはらふ心也鬼といふは方相氏の事なり四目ありておそろしけなる面をきて手にたてほこをもつ又侲子とて廿人紺の布衣きたるものを卒して内裏の四門をまはるなり云々

寶積寺緣起云文武天皇慶雲三年丙午天下大疫醫藥咒術不レ得二能治一之震襟不レ安行基菩薩奏曰用二儺

艮	
朝臣	朝臣
御殿内	
朝臣	朝臣

又御殿ニハ三堺ニ書レ之城外服暇之外皆悉書レ之四位朝臣五位六位名字小舍人不レ入之追儺了逐電放レ之及ニ明朝ニ之時爲ニ大失禮ニ

濫觴抄云追儺慶雲二年乙巳文武九十二月始之今年天下疾疫之故也年中行事曰天下有レ事時不レ退レ鬼云々或曰慶雲三年丙午始作ニ土牛ニ大儺云々

年中行事秘抄云十二月三十日追儺事

月令云命ニ有司ニ大儺旁磔出ニ土牛ニ以送ニ寒氣ニ儺陰氣始ニ於此ニ

金谷云陰氣將ニ絕陽氣始來ニ陰陽相激化爲ニ疾癘之鬼ニ爲ニ人家ニ作レ病黃帝使ニ下方相氏ニ黃金四目身著ニ朱衣ニ手把ニ桙楯ニ口作ニ中儺儺之聲上以驅ニ疫癘之鬼ニ昔高辛氏子十二月晦夜死其靈成レ鬼致ニ病疾ニ奪ニ湌人祖靈祭物ニ驚ニ祖靈ニ因レ之以ニ桃弓葦矢ニ逐ニ疫鬼ニ靜ニ國家ニ又河邊幷道路散ニ供之ニ解除祭イ無ニ除咎ニ矣

長保三年十二月廿八日女院崩給今年追鬼歟但京中儺云々

延曆八年十二月廿八日太皇太后宮崩無ニ追鬼之事ニ

追儺刻限事

寛德元年十二月卅日記云今日追儺也上卿權中納言資平卿以下參入以ニ左少辨資仲ニ奏云刻限漸到早申行如何仰云天下之動靜唯依ニ追儺之遲速ニ而近年不レ待ニ刻限ニ急行退出故災孽頻發人民不レ安於ニ于今ニ者慥守ニ刻限ニ可ニ申行ニ者上卿資平以下深所ニ畏申ニ云々相ニ待宣旨ニ之間及ニ曉明ニ畢

月舊記周官方相氏蒙ニ熊皮ニ黃金四目玄衣朱裳執レ戈揚レ楯帥ニ百隷ニ而時儺論語鄕黨之篇鄕人儺孔子朝服而立ニ於阼階ニ注云儺者謂レ驅ニ疫鬼ニ朝服立ニ阼階ニ者爲ニ鬼神ニ或驚怖當レ依レ人也今世打ニ細腰鼓ニ戴ニ胡公頭ニ及作ニ金剛力士ニ逐除卽其遺風也

漢舊儀曰東海之中度朔山上有ニ大桃樹ニ屈蟠三千里東登間曰ニ鬼門ニ群鬼所ニ出入ニ也造レ帝作レ禮以レ時驅レ之立ニ大桃人門戸ニ盡參ニ鬱壘與郎之象ニ以縣レ華

案國史云慶雲三年天下大疫始作ニ土牛ニ大儺長保二無レ之依ニ母后御中陰間ニ也　參議二人行事ニ承平　一人行事天曆元天德[]應和二康保三

門不可帶弓箭歟
年中要抄曰、近衞衞府公卿皆帶弓箭、雖無所據可從例歟、大將儀曰、大將及諸衞督皆帶弓箭、此事無所據、又不見舊例、然而近代帶之、未得其意、〈府武少將以上〉左右〈執弓箭之日、大中將帶參議以上不執云々、候殿上時如之、況於中重行事、又已執挑弓葦矢等、何重帶之哉、可尋之〉衞門佐帶弓箭哉否事　予案、建禮門不開於中重行事、仍不帶、有信問、予說不帶之前例、慥可尋之、故行親帶之云々、　左右衞門督近來帶之、次又有不帶之人、
諒闇年如常〈天曆八、長保三年無之、依母后四十九日內也、延曆夫人薨、未葬間無追鬼事云々〉　參議二人行事例〈承平二年、公賴實賴〉　參議一人行例〈天曆九(有明)天德元(賴忠)應和二康保二〉
長樂門外東廊設王卿侍從內舍人等座〈西上對座、就中親王南面、大臣北面〉
紺幔曳度柱外〈雨儀〉
裏書云、儺逐疫也、索室而毆疫鬼
周禮方相氏、黃金四目、玄衣朱裳、執戈揚楯、帥百隸而時儺、月令云、命有司大儺、金谷園記云、陰氣將絕陽氣始來、陰陽相激化爲疾癘之鬼、爲人家作病黃(按黃下帝脫歟)使方相氏黃金四目、身着朱衣、手把桿楯、作儺儺聲以驅疫鬼、昔高辛氏子十二月晦夜死、其靈成鬼、致疾病、奪滄人、祖靈祭物驚祖靈、因以桃弓葦矢逐疾鬼、靜國家、又河邊幷道路散供之、解除咎矣、○張平子東京賦曰、卒歲大儺、毆除群癘、方相秉鉞、巫覡操茢、侲子萬童、丹首玄製、桃弧棘矢、所發無臬、飛礫雨散、剛癉必斃、○文武天皇慶雲三年十二月、天下疫疾、百姓多死、始作土牛大儺、○後朱雀寬德元年十二月卅日、上卿權中納言資平卿已下參入、以左少辨資仲奏云、刻限漸到、早申行如何、仰云、天下之動靜、唯依追儺遲速、而近年不待刻限急行退出、故災孽頻發、人民不安、於今者慥守刻限可申行者、上卿資平以下深所畏申也
雲圖抄云、十二月晦日追儺事
御殿無別御裝束儀、刻限南殿事了、儺王率侲子入仙華門、經東庭出瀧口戶、侍臣於孫庇射之、〈女官獻葦弓箭〉逐電下格子、儺之先、是行事藏人獻儺木振鼓等於臺盤所

追儺

巽	朝臣	朝臣
坤	朝臣	朝臣
乾	朝臣	朝臣

件分配押殿上小壁也、上ノ長押ノ下ヨリ七八寸ナ垂テ押之也
往古書追儺分配、近代無分配兩字、又角字不書、或書巽角也
南殿四角書近衞司也、御殿入職事也

はしりありき給もをかしき御ありさまをみさらんこと丶よろつに忍ひかたし

榮花物語（月宴）云安和二年八月十三日御門おりさせ給ぬれは東宮くらゐにつかせ給ぬ御年十一なり云々はかなくとしもくれぬれはうへわらはにおはしませはつこもりのついなに殿上人ふりつ丶みなと式てまゐらせたれはふりけうせさせ給もをかし云々

江家次第（十二月）云追儺（近例用雨儀私云北山要抄云近例外辨用雨儀私云長樂門東廊西上對座親王南面上卿北面晴時廊前立七丈幄二字）中務省以分配文付内侍所（近代不然）藏人押分配於小壁（殿上西戸南腋其高與立蔀等）戌刻王卿着外辨（西上對座上卿北面）衞府帶弓箭以紺幕曳度柱下（辨少納言著其外）亥一尅中務丞奉諸門分配簡（著軾奉之四枚近代一枚）

裏書云分配中務式曰年終行儺者前晦二日少輔已上點定親王幷大臣以下次侍從以上及丞錄内舍人等應預事者造奏文當日早旦令内侍進奏又仰寮令進大舍人歷名其分配門別參議以上二人侍從十人省丞一人内舍人四人史生四人大舍人五人四門分配東宣陽門南承明門西陰明門北玄暉門（大舍人）東陽明門南朱雀門西殷富門北達智門

上卿見之下參議參議見下侍從座侍從見了返上卿上卿返給丞（分配人不具者上卿于時差定近代無此事）錄取簡於長（自幕下出之）樂門召計（史生代召六位）陰陽寮以桃杖弓葦矢進上卿以下内侍渡南殿（近代不然）（上卿褰上裳）又雖有渡御不着御帳内近代殊不出御近仗陣階下（帶弓箭往年著靴近例不著靴也）兵衞陣建禮門（今夜衞府公卿著弓壺胡籙六衞將佐縫掖壺箙持桃杖幷桃矢）座（指笏取弓矢帶弓箭之人）插之於衞次立承明門巽壇上陰陽寮於壇上授矢（弓葦）桃弓葦矢於闈司（入折櫃傳給之女官女官入自長橋置石灰壇）方相率侲子參入立版南三丈（松八把在前侲子八人在後）王卿率侍從大舍人等列立方相後（去承明門二許丈西上降雨時立壇上）陰陽寮下部八人給饗方相（出自安福殿給初入自月華門）件饗近代不見陰陽師率齋郎入自月華門允一人（着深沓）立版讀呪詞（存寮式）撤饗（同寮人）方相先作儺聲以戈叩楯三箇度群臣相承和呼追之方相經明義仙華門出北廊戶（御物忌時猶度見天曆六年記）上卿以下隨方相後度御前出自瀧口戶（出自承香殿馬道向東陣西宮抄猶挿笏執杖近例不然又或經南殿前到燈臺之中或其期斜向明義門方）殿上人於長橋内射方相主上於南殿密覽還御之時扈從人忌最前行逢方相振鼓儺木儺法師等種々事（有故實）自有殿上人候御座方護（或放格子踏之或白木燈臺衞之其事無紀極雲圖云行事藏人獻儺木振鼓等於臺盤所御殿每門白木灯臺立柱）南殿庭殿上小庭朝餉壺並打燈臺不開建禮門時衞

外四方之堺東方陸奥西方遠値嘉南方土佐佐渡與里乎知能所乎奈牟多知疫鬼之住加登定賜比行賜氐五色寶物海山能種々味物乎給氐罷賜移賜布所々方々爾急爾罷往登追給登詔爾挾二姧心一氐留里加久良波大儺公小儺公持二五兵一氐追走刑殺物曾登聞食登詔

凡追儺料桃弓杖葦矢令三守辰丁一造備其矢料蒲葦各二荷攝津國每年十二月上旬採送

內裏式云十二月大儺式晦日夜諸衞依二時剋一勒二所部一屯二諸門一近仗陣二階下一近衞將曹各一人率二近衞一（左近衞五人右近衞四人）開二承明門一先共北面立二門內壇下一共置レ弓登レ階開レ之（將曹倚立）訖引還闈司二人出レ自二紫宸殿西一居二門左右一大舍人未レ叫レ門之先闈司二人各持二桃弓葦矢一（木工寮作二備之一）昇レ自二南階一授二內侍一卽班二給女官一大舍人叫レ門闈司就レ版奏云儺人等率亙參入止其官姓名等（謂親王以下參議以上）叫レ門故爾申勅曰萬都理禮闈司傳宣云令二姓名等參入一中務省率二侍從內舍人大舍人等一陰陽寮陰陽師齋部（其數具二所司式一）執二祭具一方相（取二大舍人長一爲レ之）著二假面黃金四目玄衣朱裳一右執レ戈左執レ楯侲子廿人（取二官奴等一爲レ之）同着二紺布衣朱末額一共入二殿庭一列立陰陽師率二齋部一奠祭陰陽師跪讀二呪文一（今按立讀レ之）訖方相先作二儺聲一以レ戈擊レ楯如此三遍群臣相承和呼以逐二惡鬼一各出二四門一（方相出二北門一）至二宮城門外一京職接引鼓譟而逐至二郭外一而止

類聚國史（七十四卷）云文武天皇慶雲三年是年天下諸國疫疾百姓多死始作二土牛一大儺

御記云延喜八年十二月廿九日仰二大臣一去年晦夜處々或不二追儺一人々云今年愁啄此依レ不レ儺二疫鬼一云宜仰二所司一勤今（令カ）儺

小野宮年中行事云十二月晦日追儺事

當日中務省以二分配文一付二內侍一奏レ之所司裝束訖亥一刻天皇出二御南殿一式不レ御二御帳內一方相一人（取二大舍人長大者爲レ之）侲子廿人（取二官奴等一爲レ之）共入列二立殿庭一（其裝束等見二式文一）

中務式云凡親王以下次侍從以上闕二追儺陣一者不レ預二元日節祿一

源氏物語（紅葉の賀）云三尺のみつしひとよろひにゑなゝゑつらひすゑて又ちいさきやともつくりあつめて奉給へるを所せきまてあそひゝろけ給へりなやらふとていぬきかこれをこほち侍にけれはつくろひはへるそとて云々

又（まほろし）云年暮ぬとおほすも心ほそきにわか宮のなやらはんに音たかゝるへきことなにわさをせさせんと

萬童丹首玄製桃弧矢棘所レ發無レ臬(マト)と東京賦みえたり又追儺の夜ふりつゝみをもて禁中にふる事も中むかしより物にみえたりいはゆるつこもりのついなに殿上人ふりつゝみなとしてまゐらせたれはふりけうせさせ給と榮花物語みえ歌に九重の雲の上よりやらふなの程にともなふゝりつゝみ哉と久安百首みえたりこれ西土にもある事なり擊レ鼓驅レ疫と呂氏春秋冬紀見え逐ニ惡鬼ー鼓吹と唐志みえたり猶儺の式くはしき事は延喜式內裏式小野宮年中行事江家次第年中行事秘抄等にみえたり後世節分の夜豆をいりて打事は後卷に辨せり

續日本紀文武天皇紀云慶雲三年十二月是年天下諸國疫疾百姓多死始作ニ大儺ー

延喜式太政官云凡十二月晦日儺者中務預點ニ親王及大臣已下次侍從已上ー分ニ配諸門ー丞錄內舍人大舍人等亦同事見ニ中務式ー當日戌時親王幷大臣已下着ニ承明門外東庭幄座ー少納言辨外記史候レ之依レ例行レ事事見ニ儀式ー

又大舍人寮云凡年終追儺前一日錄ニ供レ事官人舍人等名ー申レ省及裝ニ束御殿ー前進舍人十人當日戌刻官人率ニ追儺舍人等ー候ニ承明門外ー待ニ省處分ー頒ニ配四門ー東宣陽門南承明門西陽明門北玄暉門亥一刻舍人叩レ門其詞曰儺人等(ナヤラフヒトラ)參入止某官親王門候止申卽方相爲レ首親王已下隨レ次入立ニ中庭ー陰陽寮儺祭畢親王已下執ニ桃弓葦箭桃杖ー儺出ニ宮城四門ー東陽明門南朱雀門西殷富門北達智門其方相假面一頭黃金四目後鞁赤兩面四尺若有ニ損壞ー者內匠寮修理緋皁袷袍各一領緋皁單裳各一腰料皁緋帛各一疋侲子八人紺布衣八領料紺調布四端楯一枚長五尺廣一尺五寸桙一枚長九尺緋幡一流料帛二尺並納ニ寮庫ー當レ時出用侲子裝束度ニ主殿寮ー事畢返納若有ニ破壞ー申レ省受替其弓箭杖受ニ陰陽寮ー

又陰陽寮云儺祭料五色薄絁各一尺二寸飯一斗酒一斗脯醢堅魚鰒乾魚各一斤海藻五斤鹽五升柏廿把食薦(スコモ)五枚匏二柄缶一口陶鉢六口松明五把祝(ノトノ)料當色袍一領袴一腰

右預前申レ省請受依レ件辨備十二月晦日昏時官人率ニ齋部等ー候ニ承明門外ー卽依ニ時尅ー共入ニ禁中ー齋部持ニ食薦ー安ニ庭中ー陳ニ祭物ー訖陰陽師進讀ニ祭文ー其詞曰今年今月今時時上直符時上直事時下直符時下直事及山川禁氣江河谿壑廿四君千二百官兵馬九千萬人已上音讀位置衆諸前後左右各隨ニ其方ー諦定レ位可レ候ニ大宮內ー爾神祇官宮主能伊波比奉里敬奉留天地能諸御神等波平久於太比爾伊麻佐布倍志登申事別氏詔久穢惡伎疫鬼(エヤミノ)能所々村々爾藏里隱布留乎波千里之

古今要覽稿卷第七十二

●時令部

●那　儺一

那といふは儺の音にしてなやらひとも又鬼やらひともいへるは今の世の追儺の事也此事の皇國にて行はれしは文武天皇慶雲三年諸國疫疾流行して百姓多く死せるにより始て大儺すと(續日本紀)みえたるを始とせり然るに四季物語神武天皇六年にはしまるよしみえたるは僞作なれは論なし日本紀には神武天皇東征し給ふ六年に倒語を以て妖氣をはらふ事みえたれは此等の事によりて此年より追儺の事始れりといひしならんか此説とりかたし河海抄には慶雲元年甲辰十二月始て土牛をつくり大儺を追とみえ濫觴抄には同二年乙巳十二月始之或曰慶雲三年丙午始て土牛を作り大儺すと同書にあるそ續紀と符合し且其うへに類聚國史小野宮年中行事江家次第等皆慶雲三年とあれは三年に始れるといふを正しとせりさて追儺の式のあらましは禁中よりはしまり十二月晦日の夜に行はるゝ也此夜戌刻に官人追儺の舍人等を率て承明門の外に候して省の處分を待(省は中務省なり)四門に頒配す四門は東は宣陽門南は承明門西は陰明門北は玄暉門なり亥の一尅に舍人叩レ門其詞曰なやらふ人等率て參入と某官親王門に候すと申方相を首として親王以下次に隨て入中庭に立陰陽寮の儺祭畢て親王以下桃の弓葦の箭桃の杖をとりて儺して宮城の四門を出鬼を逐方相は黃金四目の假面をつけ玄衣朱裳を着る侲子八人紺布衣を着と(延喜式)見ゆこれ政事要略に載る圖に合り又內裏式に方相假面黃金四目玄衣朱裳を着右に戈をとり左に楯をとり侲子廿人紺布衣朱末額をつく共に殿門に入列立す陰陽師齋郎を率て奠祭し訖て方相先儺聲をなし郎戈を以て楯をうつ如レ此する事三遍羣臣相承和して以て惡鬼を逐て各四門を出とみえたり是西土にいはゆる方相氏蒙ニ熊皮一黃金四目玄衣朱裳執レ戈揚レ盾師ニ百隸一而時難と(周禮)みえたり是を以て考ふるに方相の形狀裝束儺の式等も粗舊くは皇國西土ともに同しき事志られたり桃の弓葦の矢を用る事も同しく西土にてもする事なり方相乘レ銊巫覡操レ茢(アハカラ)侲子

る本說を見すといひなから古記の中云節分の大豆打事云々といへるはとりとめさる說にしてとりかたし字鏡集に鯙音はとみえコヒと訓せり康熙字典に博雅を引て黑鯉謂二之鯙一と玄るしたり

年中故事要言云節分ニ煎豆ヲ撒テ鬼ハ外福ハ內ト唱ルコト國ノ風俗ナリ是疫鬼ヲ防ク術也古ハ內裏ニ追儺トテ鬼ヲ追事ノ侍リ是ハ十二月晦日ノ由記錄ニモ侍ルハ民ノ上ニ豆ヲ打テ鬼ヲ防モ上ヲマナヒテスル事ナラハ晦日ニ此事ヲシ侍ヘルヘシ世諺問答ニ曰ク今夜ハ惡鬼ノ夜行スル故ニ禁中ニモ昔ハ陰陽寮祭文ヲ讀テ上卿以下是ヲ追四目アリテオソロシケナル面ヲキテ手ニ干戈ヲモツテ內裡ノ四門ヲマモル也マタ殿上人ナト御殿ノ方ニ立テ桃ノ弓葦ノ矢ニテ射拂フコレヲカタトリテ豆ウチテ鬼ヲハラフ事ハシマレルニヤト云々鬼トハ方相氏ノ事也目ノ四アルオソロシキ面ヲキルマタ侲子トテ二十八緋ノ布衣キタル者ヲ率內裏ノ四門ヲマモルナリ委ク公事根源ニ見エタリ此事ハ文武天皇慶雲三年十二月ニ初ル此年諸國ニ疫癘オコリテ百姓多ク死ス因テ追儺ヲ行ハル、由續日本紀ニ見エタリ儺音ハ那オニヤラヒト訓鬼ヲ追ハラフ義ナリ

按に節分に煎豆を撒て鬼はそと福は內と唱ること國の風俗なり云々古は追儺とて鬼を追事の侍り是は十二月晦日のよし記錄にも侍れは民の上に豆を打て鬼をふせくも上をまなひてする事ならは晦日に此事を玄侍るへしといふはあやまれり古へは禁中に追儺は追儺にて行はれ節分は節分にて御式ありし事延喜式小野宮年中行事等に詳なり

拾ひ〳〵や鬼は出らん

京には役おとしとて年の數錢をつゝみて乞食の夜行におとしてとらする事を思ひて

かそふれは我八十の雜事錢
やくとていかゝおとしやるへき

○釋名

節分

弘仁式延喜式小野宮年中行事清少納言枕草子金谷園記政事要略今川大双紙花營三代記臥雲日件錄○按に節分は立春の前日をいふなり冬の節分れて春にうつれるこれを節分といふなり又大豆打事は時の邪氣をはらひさけんかためなり本草綱目にも大豆は時氣をさけ拂ふとみえたり世俗大豆を打にあきの方より始むる事は花營三代記にみえ鬼は外福は内の四言を唱ふる事は臥雲日件錄文安年にみえたり文安四年より今茲天保庚子迄歷年三百九十四年なり是よりふるくは鬼は外福は内と唱ふる事諸家の記錄の中又は作文の中をさくれとも更に所見なし

湊投

類書纂要○按に吳越の風俗歲除の夕炒豆をうち且殯し且祝すを湊投といふと同上にみえたれは是又節分の異稱なり

○正誤

塵添壒囊抄云節分ノ夜大豆ヲ打事ハ何ノ因緣ゾ是更ニ慥ナル本說ヲ不レ見由來ヲ云人ナシ但或古記ノ中ニ云節分ノ夜大豆打事宇多天皇ヨリ始レリ鞍馬奧僧正谷美曾路池端方丈穴ニ住ケル藍婆惣主ト云二頭ノ鬼神共ニ出テ都ヘ亂入ントシケルヲ毘沙門ノ御示現ニ依テ彼寺ノ別當奏申子細アリ主上聞召ス明法道ニ宣旨アリテ七人博士ヲ集テ七々四十九家ノ物ヲ取テ方丈ノ穴ヲ封シ塞テ三斛三斗ノ大豆ヲ熬テ鬼ノ目ヲ打ハ十六ノ眼ヲ打盲テ抱ヘテ歸ルヘシ又聞鼻ト云鬼人ヲ飡ントスルヲハ鰯ヲ炙串ト名付テ家々ノ門ニ指ヘシ然ラハ鬼ハ人ヲ不レ可レ取ト云御示現也ト云々

按に節分の夜大豆打事宇多天皇より始れりといふ事は信用しかたし去かはあれと故道遊軒は壒囊抄の說をも捨へからすと申されしと也正月七日若菜を獻る事此御宇よりはしまれはこれらによりて豆打事も此御時よりといひ出しならんか且たしかな

用二己歲之數一此外人々以二大豆一配二紀年之數一與二孔方兄數枚一以二白紙一包レ之自摩二遍體一則授二是於街頭疫拂一厄拂受レ之而聲唱二逐レ疫詞一而祝レ之伴爲二鷄鳴一而去今夜乞人以二綿巾一覆二頭面一自稱二疫拂疫落一終夜往二來街衢一至レ曉而止矣紀貫之土佐日記載二鯔首枸枝等事一然則昔日用二鯔首一者平月令季冬日大儺旁磔按旁磔謂四方之門皆披二磔其牲一以禳二除陰氣一不下但如二季春之九門磔攘一而已上又本草曰辟二禳時氣一以二新布一盛二大豆一斗一納二井中一一宿取出每服七粒佳　本朝除夕投二炒豆一或食レ之出レ自二此義一

藝苑日涉民間歲節云立春前一日謂二之節分一至レ夕家々燃レ燈如二除夜一炒二黃豆一供二神佛祖先一向二歲德方位一撒レ豆以迎レ福又背二歲德方位一撒レ豆以逐レ鬼謂二之儺豆一老幼男女啖レ豆如二歲數一加以レ一謂二之年豆一（トシノマメ）街上有二驅レ疫者一兒女以レ紙包二裹年豆及錢一文一與レ之則唱二祝壽驅邪之辭一去謂二之疫除一（ヤクハラヒ）後漢書禮儀志引二漢舊儀一云方相帥二百隸及童女一以二桃弧棘矢土鼓一鼓且射レ之以二赤丸五穀一播二灑之一

廣東新語云小除祀レ竈以二花豆一灑レ屋

太平御覽引二龍魚河圖一云歲暮夕四更取二二十豆子二十七麻子家人頭髮少一合二麻豆一著二井中一咒二勅井一使下其家竟年不レ遭二傷寒一辟中五溫鬼上

類書纂要云吳越風俗歲除亙擊二炒豆一交二納之一且餐且祝曰二湊投一

事物紀原云撒二豆穀一漢世京房之女適二翼奉子一擇レ日迎レ之房以（オモヘラク）其日不吉以二三煞在一レ門故也三煞者謂二青草烏鷄靑牛之神一也凡是三者在レ門新人不レ得レ入犯レ之損二尊長一及無レ子奉以謂不レ然婦將レ至レ門但以二穀豆與二草一禳レ之則三煞自避新人可レ入也自レ是以來凡嫁娶者皆置二草於門閫內一下レ車則撒二穀豆一既至レ蹙二草於側一而入今以爲二故事一也

○和歌

夫木和歌集雜歌

ひゝらき

貞應三年百首、木　民部卿爲家卿

世中は數ならす共ひゝらきの
色に出てもいはしとそ思ふ

宗長手記

大永六年十二月廿五日節分の夜大豆うつをきゝて

福は內へいりまめの今夜もてなしを

達御出管領奉公外樣番々廻テ被レ勤之十月中ニ被二仰出一樣體如二常行始一云々

下學集云節分夜於二禁中殿上一侍臣以二桃弓葦矢一驅二惡鬼一謂二之追儺一也

四條家舊法云今の風俗に節分の夜鬼は外福は內と豆をまく事此夜を百鬼夜行といへは百千の鬼神色々に身をへんし此間かなたこなたとへんまんしてゑやうけをなさんとするよし又祝儀の事兼好か言置事のよし口傳多し

世事根元云節分の夜豆を打事譜に記せる物なし事物紀原に漢の世房といふ者の女を翌奉といふ者に嫁しけるに翌奉日を期して迎へんといふ世房いふやう此日不吉也三殺門に有といへり三殺とは靑草烏鷄靑牛といへる三鬼也此鬼門にあれは始て入來る人內に通る事ならすまけて入ぬれは人を損し且子孫なしと翌奉いふやうさなきに非す婦人門に入んとする時豆と草とをもて拂ふ時は三鬼怖れて去るといへり是より婦人を娶に草を門の閫のうちに置て輿より下るときまめをもてうち散しぬといへりこの事節分の夜にかきらすといへと惡鬼を除ふことなれは此夜に移して行ふも故あるにや

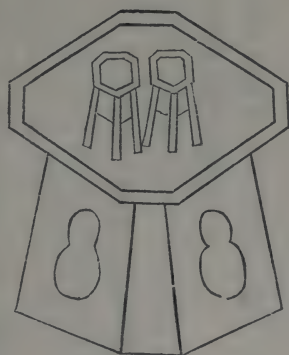
歲時故實大概云節分（立春の節の前日なり）今宵門戶に鰯のかしらと枸の枝を挿て邪氣を防くの表事とし又炒大豆を升の器に入て夫を晴に打はやして祝ひ賀す又厄拂と號して乞食人は市中を走り廻りて滑稽なる祓詞をはやし祝ひて錢米を乞ひあるく事なと皆今宵の俗習なり

（鰯のかしら枸或は大豆等又厄拂なと一々に下に注す）

按に今宵大豆をまくは古人追儺の遺風なり其追儺といふは除夜の儀にて（俗には大儺といへり）節分の夜の事にはあらすされとも俗習都鄙共に今宵此大豆まく事を營み祝へは是又俗に隨ひて爰に記すなり

日次紀事云此日御泥池（ミソロカイケノ）艮隅中村貴布禰社祭相傳寛平年中疫癘盛行依二神託一而此處勸二請貴船神一今夜舁二神輿一而巡二池邊一其後入二豆於升一而撒二四方一追二疫鬼一于今有二豆塚一　塚之名二豆塚一或作二魔滅塚一貴布禰奧院所　素盞嗚神也宜哉祓二疫鬼一也

又云同夜家々門戶窓欞挿二鰯魚首幷枸骨（ヒヽラキ）條一傳言此二物疫鬼之所レ畏也又熬二大豆一放二家內一是謂レ打レ豆或謂レ拍（ウツ）レ豆凡一家之內執レ事者勤レ之是稱二歲男一高聲呼二鬼外福內一而禳レ疫索レ福其後合家各食二熬大豆一則

此まめ　御前にて御手つからまかせられ候　右三色ともに一度に出る
禁中にては長橋御まき候　女院にては中らう衆御まき候　御てうし出るひとへ衣にて御はいせん云云
禁裡院中内々御儀式云　節分に入レ夜御盃事有此時豆打事あり御盃過て後此豆を内侍一間一間に打也豆事左に圖す

木地
小さき四角なる行器に煎豆を入て三方にのする也是を御前へ獻す御盃過て内侍此行器を二つならへまん中を左の手に提持右の手にて後へ三度打事也此時女房はゝつき袴ひんふくすへらかしなり。

恒例行事略云常御殿は御兒男居御厨子所は生駒山國御臺所は仕丁頭うつなり本草に辟ニ禳時氣一以ニ新布一盛ニ大豆一斗一納ニ井中一一宿取出毎服七粒佳也といふこと是等の故實にや
日次記事云若年内有ニ節分一則其夜　禁裏被レ撒ニ熬豆於　殿中一而逐ニ疫鬼一在レ春亦然今夜撒ニ大豆一謂レ拍云々
今川大双紙云節分の夜の鬼の大豆をも御年男きんす（勤）る也云々
年中恒例記云御小袖ノ間ニハ大豆ヲ自ウタル丶也外ハ役人在之常ノ御所已下伊勢守ウチ被レ申候也御スエハ伊勢同苗初云々節分御館ニウタル丶大豆勝栗伊勢守進上也
花營三代記云應永卅二年正月八日己卯節分大豆打役昭心カチクリ打アキノ方申酉ノアヒ也アキノ方ヨリウチテアキノ方ニテ止云々
臥雲日件錄云文安四年十二月廿二日明日立春故及レ昏景富毎レ室散ニ熬豆一因唱ニ鬼外福内四字一蓋此方驅儺之樣也
成氏年中行事云十二月朔日御祝如レ常節分之夜御方

をおほくともして四目ありておそろしげなる面をきて手にたてほこをもて內裏の四門をまつる(も歟)なりまた殿上人とも御殿のかたに立て桃の弓蓬の矢にておひはらふこれらをかたとりてまめうちて鬼をはらふ事はしまれるにや此內裏にて鬼おはれし事は慶雲二年(按に二年にあらす續日本紀によるに三年なり)十二月百姓おほく疫癘になやまされしゆゑにはしめられたるよし承およひし

元長記云文龜四年正月十一日云々赴二晩方一參二近衞殿一外不レ詣二他所一歸レ宅被レ下二佳例美物一祝着了節分也打二大豆一祝着候儀如二例年一

宣胤卿記云　永正十四年十二月六日　云々　今夜節分也打二大豆一云々

御ゆとのゝうへの日記云慶長三年(つちのえいぬのとし)正月一日(はるゝ雪すこしふる)朝御さか(盃)月まいる四はうはいあり云々せつふんの御さか月一こん御こふあはかちんくりまめまもにてまいるまめいつものことくうたせられてのちなかはし御うちあり一日の御さか月三こんいつものことくまいりて女中をとこたち御とをりありこわく御まつまいる御はいせん大すけとのなかはしいよとのなといつものことく五きぬはりはかまにてまいらるゝ云々

當時年中行事云十二月節分散しあふらを供す夕方常の御所例の御座にて御さかつきまいる先芋(かはらけ二つに入)を供す次にまめ(かはらけ二つに入)を供す次にをりひつ二つまめを入て三方にすゑてもて參る陪膳三方なから御前にさしよすをりひつ二つのふちを合て二つなから御左手にとらせ給ひてをりひつの中なるまめのうへにおほひたるかはらけを右の御手にて柄の方へ三反うたせ給ふ柄の方若御うしろの方ならは御うしろさまにうち給ふ也うちをはらせ給ひて三方におかせ給ふ陪膳とりて勾當につたふ勾當二の折を左の手にて取右の手にてうしろさまに立なから一まに三反つゝうちて御殿中御ゆとのゝうへ迄をうちめくる此間にかはらけに入たるまめを御としの數まいる云々

當代年中行事略云十二月節分　初獻　二獻等大隅大炊頭幷自二男居一供レ之
大豆拍事　常御殿　勾當內侍　御厨子所山國對屋御淸所　仕丁頭拍レ之

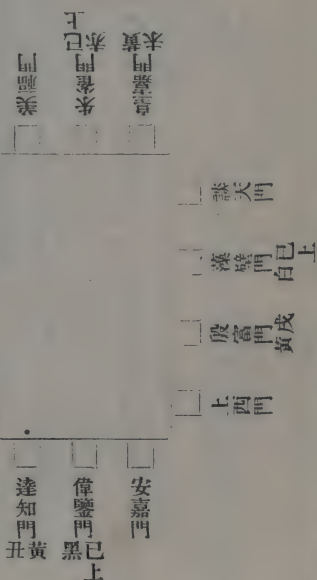
女房私記云節分の御祝　初獻　まも　二獻まめ　三獻　折にまめ入出る

門ニ（陽明待賢二門各青色美福朱雀二門赤色郁芳皇嘉殷富達智四門黃色談天藻壁二門白色安嘉偉鑒二門黑色）立春之日前夜半時乃撤

清少納言枕草子（すさましきものゝ條）云かたゝかへにゆきたるにあるしせぬ所ましてせつふんはすさまし云々

年中行事秘抄云大寒日夜半諸門立ニ土牛童子像ヲ
陽明待賢門青　美福朱雀門赤
郁芳皇嘉殷富達智門黃　安嘉偉鑒門黑
談天藻壁門白

弘仁陰陽式云凡土牛童子等像請ニ內匠寮ニ大寒之日前夜半時立ニ於諸門ニ（陽明待賢縣犬養山二門各）青色壬生大伴二門赤色達部若犬養伊楯部丹治比門黃色玉手佐伯二門白色海養猪使二門黑色也

政事要略云土牛陰陽式云土牛童子等像請ニ內匠寮ニ大寒之日前夜半時立ニ於諸門ニ（陽明待賢二門各青色美福朱雀二門赤色郁芳皇嘉殷富達智四門黃色談天藻壁二門白色安嘉偉鑒二門黑色立春之日前夜不時乃撤）
土牛之色諸門之中八門方色四門黃　黃是土色五行大義云未辰丑戌土之位者（具見ニ拜四方部ニ）今此四門已當ニ土位ニ憖爲レ視レ諸作レ圖注レ左

金谷園記云土牛送レ寒禮云季冬之月礫出ニ土牛ニ以示ニ農耕之早晚ニ也若立春在ニ十二月望ニ則策レ牛人近レ前示ニ其農早ニ也若立春在ニ十二月晦及正月初ニ則策レ牛人當レ中示ニ其農平ニ也若立春在ニ正月望ニ則策レ牛人近レ後示ニ農晚ニ之也

世諺問答云問て云せつふんのまめうつ事は何のゆゑにてか侍る答としこしと世俗にいひならはしてこよひは惡鬼の夜行する故に禁中にもむかしは陰陽寮さいもんをよみて上卿已下これをおふ御所にともし火

古今要覽稿卷第七十一

●時令部

●節分

節分往古は大寒に入前日土牛童子の像をつくりて夜半時大内の諸門にたて丶寒氣を送り出し立春の前日夜半時乃撤する也此事弘仁延喜の御式小野宮年中行事等にみえたり今の世には立春前一日のみ御式あり（古今異同ありていにしへ行なはれし事も今なく今行なはる丶御式もいにしへなき事あり）さて節分と追儺とは後世同しき事のやうに心うれともむかしは差別あり追儺は十二月晦日のみにかきりて別日は其式行なはれさるなり又中むかしより節分に大豆打事始まれり此事の起りは以二赤丸五穀一播二灑之一と（後漢書）みえ呉越風俗歲除互擘二炒豆一交二納之一と（類書纂要）みえ歲暮夕四更豆麻と家人の頭髮とを井中に入井を咒勅すれは其家竟年傷寒五瘟の鬼をさくるよし（太平御覽引龍魚河圖）みえたりこれらによりて皇國にても大豆打事始まれりさはあれと時代たしかならす應永の頃よりはたしかに所見あれは其以往よりありし事は明かなり又門戸にひひらきの枝なよしのかしらをさす事は寛平延喜の御時既にありしと見えてこへ（小家）の門のなよしのかしらひひらきと（土佐日記）みえたるにて考られたり中むかしよりは鰯をいはしにかへ用ゐたりしは藤の爲家卿の歌にひ丶らきにいはしをよみ合せ給へるによれは是も六百年前よりの事なり扠又此夜炒豆に頭髮と錢との三物をつ丶みて乞食の夜行の者におとしてとらする事は宗長手記大永六年のくたりに見えたれはこれも大永より以前に始まりしなり

延喜式（陰陽寮）云凡土牛童子等像請二内匠寮一大寒之日前夜半時立二於諸門一（陽明待賢二門各青色美福朱雀二門赤色郁芳皇嘉殷富達知四門黃色談天藻壁二門白色安嘉偉鑒二門黑色）立春之日前夜半時乃撤

土佐日記云こへの門のなよしのかしらひ丶らき云云

小野宮年中行事云十二月陰陽寮大寒入日立二土牛童子像一事

慶雲三年十二月辛未朔是年天下諸國疾疫百姓多死始作二土牛一大儺

式云土牛童子等像請二内匠寮一大寒之日前夜半時立二於諸

にや必竟生花合期せされは綿を用る故に古書にはきくにきするとのみ見えて花といふ字はみえす然るを近世は生花ある年も恒例にて行はるゝ故にそれにひかされて古書を見誤たるものなりさて今は老をのこひすつることはたえてわたきすることのみれいとなりしなるへし

又曰殘菊といふ題にて　時過て誰かは今もきせ綿のそれかと匂ふ霜のしら菊　此歌なとによりて霜をいとふ爲にきせわたをするといふにやこれも菊のにほひたるを九日のきせわたとまかひてよめるなり

按にこの說よしされとも此歌出所いまた考す

和訓栞云菊のわた七月朔日よりきせて九月九日に大內へかさしまゐるともいへり　秋すてにけふ九日に成ぬれは菊のきせ綿とりて花つむ

按に七月朔日よりきするといふはあやまりなり又この歌出所いまた考す

松の落葉 藤井高尙 云菊にわたきするは花の香を綿にうつして其うつしの香をもてはやす爲にそ有けるそは淸少納言の枕草紙に九月九日は曉かたより雨すこしふりてきくの露もこちたくそほちおほひたるわたなともいたくぬれそほちうつしの香もてはやされたるとあるにてしられたりさるを春曙抄といへる此冊子のちうさくに菊に綿をきするは菊をもて遊ふあまりに寒夜をふせかんとのこゝろさし也と解るやうのひか說もあれは今委しくとき明してん後撰集にとなりに住はへりける時云々と詞書有て伊勢の御の歌をのせたり九月八日にとなりの菊にわたをきせにつかはすは九日の重陽宴にうつせる香をもてはやさんとてそ又のあしたそのわたをかへすにてもしるへし折てかへすといへるは菊の花にきせたる綿を枝なから折てかへすにてしかするは道の程にうつせる香のうすくやならんと思ふ心しらひにこそこれを見て知へし

按に春曙抄に霜をいとふ爲にするわさなりといひたるをひかせつなりとかきたるまてはさることなから猶うつしの香のみをもてはやすわさと心得たるはひか事なりうつしの香のみめつることゝしては古歌のこゝろにもたかひ物語なとに見ゆるおもむきにもそむくをや古歌の意をよく考へたらんには明らかにしらるへきを何とてかく大かたには見すくしけん

垣ねなる菊のきせ綿けさみれは
　　またき盛りの花さきにけり
按にこれは生花のさかさる故にまたきさかりかと驚きし意なり

夫木和歌集巻第十四

　　　　　　　　従二位行家卿

建長八年百首歌合

いろ〳〵に菊の綿きぬ染かけて
　　またき映ろふ花とこそみれ
按にこれはまたさきあへぬとみしにはやうつろへるかとおもふよしなり

幸隆聞書

　菊花半開

咲くきくはまた村々のまかきをも
　　花につくろふけふのきせ綿
按にこの歌古書のむねにもたかはす一首の作意もたくみなるにや

　〇正誤

世諺問答云菊に綿きする事いつの比よりはしまるともみえ侍らすたゝ菊をもて遊ふあまりに寒霜をふせかんとの心さしとそおほえはへる

按に此書はかりそめにかゝれたるもの故ひろく古書をひかるゝにもおよはさりしなるへし

春湊浪語云九月九日菊にきせわたすることふるきためしにて云々されとこれをなすこと何の故といふ事しれる人すくなくて歌物語の抄物にも詳ならぬにや或は九日に菊の花さかさる時花にかへて色々にそめし綿をおくといひ又霜をいとふ爲に綿おくともいふこれは能人の御説にもみえたれともふるきものにそれとおほゆることをみされはいかゝならん云々かのわたを九月八日のくれより菊におほひ置はなの香を夜のほとにうつし其綿を九日にとりもちて身の老をぬくひ捨れはわかかへることの有といふ厭の爲にする例成事なるへし

按に菊の花さかさる時はなにかへて綿をおくといふを誤とおもひてふるきものにそれとおほしきことみえすといひたるはくはしからぬことなり九日に生花あれは生花を用ゐ生花なき時は綿を花にかたとりて用ることすてに上にいふかことしまた花の香を夜のほとにうつすといへるも臆説なり諸家の集に菊の花にきせてと書たるはひとつもなき

數ならすきみか齡をのはへつゝ
名たゝる宿の露とならなん
返し
露たにも名たゝる宿の菊なれは
花のあるしは幾世なるらん
後撰和歌集巻第七秋下
隣にすみける時九月八日伊勢か家の菊にわたを
きせにつかはしたりけれは又のあしたとりてか
へすとて　伊勢
數ならすきみか齡をのはへつゝ
名たゝる宿の露にならなん
返し　藤原雅正
露たにも名たゝる宿の菊ならは
花のあるしや幾世なるらん
忠見集
九月九日菊にわたかつけたる
よろつよも人の若ゆる菊の上に
まゆを廣けて露をまつかな
九月九日に菊のわたおほひたり
花の香をけさはいかにそ君の爲
まゆひろけたる菊の上の露
按にこの二首はいつれも屏風の歌なりわたかつけ
たるわたおほひたりといへるはもとよりわたをお
ほひてありしを見てよめる心なりまゆとはわたな
りそれに喜悦のまゆをひらくといふことをかねて
よめるなり
散木集
九月九日にきくしてかほなてよと人の申けれは
よめる
ちるこにてなほめる顏の花なれは
なつ共菊の徵しあらめや
保憲女集
あえよとて菊の白露のこへとも
すきにし齡かへらさりけり
頼實集
九日翫菊
おいせしと思ひ〳〵てのこへとも
霜いたゝける白菊の花
新撰六帖第一帖
九日　右京大夫行家（夫木集ニハ信實ト入）

御障子のうちに置內侍ひとへきぬ着てもてまいる常の御所の西庭に菊をうゝ大黑これをやくす下行有夕方常の御所にてこふゐはにて一こんまいる其後西の間のすのこにおはしまして砌の下にうへたる菊に綿をおほはる綿包紙ありは陪膳の人もて參るひとりのれう白三輪赤三輪黃三輪都合九輪なり主上院女院中宮親王なとはこきくとかいひて志へのやうに小輪あり白きには黃赤には白黃にはあかきをするなり女中も次第に持參しておほふ綿きせはてゝ包紙は菊のもとに殘しおく次の人包紙をそのうへに重ぬ各かくのことくしはてゝ後また一人のれうをおしきにすゑて菊のもとに置て內々の小はんの乘こそりておほふ

恒例行事畧云九月九日御菊居これは常の御殿西の御緣きり隱しといふ所の御庭に陰陽師大黑菊をうえる其枝に菊わたを付させ給ふよしひとりの料赤黃白三輪つゝ九輪なり上に小さき菊綿を志へのやうにおかるゝなり白には黃黃には赤あかには白をおかるゝよし女中かたも付給ふとなり

女房私記云九月九日重陽といひて菊の花をもてあそふこと常のことし夜に入て御殿の南階に菊花を多くうえ其菊に赤白黃色々のそめわたを丸き菊の花につくりて枝に付るなり女房皆小袖袴中結御陪膳也其後別當より女藏人まてみな右のわたをきくにおほふことなり簾外階前に燭左右に立てその前に右のわたを大たかにつゝみ廣ふたにのせ內侍簾中より持出るなりまた今日よりあふひを菊にとりかへるなり

菊に綿をおほふ時のうた

山人の折そて匂ふ菊の露

　うち拂ふにも千世はへぬへし

按するにこれは八日のことなり以上二書九日と志るせしはあやまりなり

幸隆聞書云菊のきせわたはひろさ三寸はかりに丸くつくりて色は白赤黃三色にするなり禁中には九月八日にきくにわたをきせて諸家より奉るを淸涼殿御簾外に立ならへらるゝよし宗恒物かたりなり

〇和歌

伊勢集

　隣なりける人のもとより九月八日菊にわたかつけにおこせたりけるつとめて取りてやるにつけて

を御らんして　諸ともにおきゐし菊のしら露もひとり袂にかゝる秋かな

按に紫の上在世にはこの露にしめりたるわたもて身をのこひてともによはひのはへんといはひなとせしを上のなきあとなれはひとり袂にかゝるとなけかれしなりにほふみやの卷に草の花をかそへたる所に老をわするゝきくと見えたるもおもひあはすへし

紫式部日記云寛弘五年九月九日に菊のわたを兵部のおもとのもて來てこれとのゝうへのとりわきていとよう老のこひすて給へとのたまはせつるとあれは

菊の露分るはかりに袖ぬれて
　花の主に千世はゆつらん

此歌新勅撰には九月九日從一位倫子菊のわたを給ひておいのこひすてよと侍けれはと有て二三句わかゆはかりに袖ふれてとあり

清少納言枕草紙云九月九日の曉より雨すこし降て菊の露もこちたくそほちおほひたるわたなともいたくぬれうつしの香ももてはやされたるつとめてはやみたれと猶くもりてやゝもすれはふりおちぬへく見えたるもをかし

後嵯峨辨內侍日記云寛元四年九月八日中宮の御かたより菊のきせわたまいりたるかことにうつくしきを朝かれひの御つほの菊にきせて夜の間の露もいかゝとおほえ侍りしに九日のあした誠に咲たるやうに見えわたされておもしろく侍りしかは辨內侍

九重やけふ九日の菊なれは
　心のまゝに咲せてそ見る

按に誠にさきたるやうにといひ心のまゝにさかせてそみるといへるにて花さかさる時きすることあきらかなり以上諸書に菊にきするとのみいひて花にはきするとはいはすこれまたはなさかぬ時の證なり九日に花さきぬるとしはわたきするに及へからすされはこそきくのきせわたをよめる歌多く聞えさりけれ又曰忠見集に花の香をけさはいかにそとあるも其日さきたるといふことにはあらす

當時年中行事云九月八日內藏頭菊のわたを獻す女中かたの沙汰として菊の花に作りて院女院御所々々女中にたふ后はおはしまさぬ時も后の御れうとて少し小わたに作りて菊のえたにおほひておしきにすゑて

古今要覽稿卷第七十

●時令部

●きくのきせわた

菊に綿きすることは伊勢集忠見集等にはしめて見えたれは其比よりはしまりけるならはしにやあらん正しき行事にはあらさるなり何故に綿をきするそといへは先菊は仙境にさける花にて延年の功能あるといへるより九月九日毎に菊の露にて身をしめして千とせの齡をのふるなと祝ことせしならはしなり九月九日の菊の露よはひをのへわかゝへるなといふならはし有し證は古今六帖異本第一九日貫之ぬれきぬと人にいはすな菊の露よはひのふとそわかそほちつる貫之集に延長四年九月廿四日法皇六十賀京極御息所被二奉仕一時屛風歌菊いかてなほ君かちとせは菊のはな折つゝ露にぬれんとそおもふ九月九日壬生忠峯かもとより折きくのしつくをおほみわかゆてふぬれきぬをこそ老の身にきれとよみておくれるかへし露ふかき菊をしをれる心あらは千世のなき名はたゝんとそおもふ忠峯の歌はをりつる菊の露おほけれは若かへるへきしなはありなからわか身の老はいかにもわかかへるましけれはこの露はわか爲にはぬれきぬなるへしとよめるなりかへしはさはいへと露深き菊を折りつる心根かそのまゝ千世をねかふきさしなれはその千代をねかふといふ名のたゝてやはあるへきといへる心なり曾根好忠集九月上老にけるよはひもしはものふはかりきくの露にそ今朝はそほつる中務集長月の九日にきくにて面のこひたる人有おいにける身にはしるしもしらきくの花の名たてに成にけるかなこれらにてきくの露にそほちつれはよはひをのふるといひならはせしことあきらかなり（ここに引中務集は倭學講談所藏古抄本なり他本にはきくのわたにておもてのこふ女と有）九日に花咲あへぬ年は綿を菊の花のかたにつくりて八日の夕に菊にきせ置露にしめりたるを九日にとりて其綿にて身をのこひて齡をのへ老をのこひすて若かへるなといふましなひにせるよしなり（伊勢集忠見集紫式部日記清少納言枕草紙新撰六帖辨内侍日記等に見えたり）然るを近代は霜をいとふ故といふ説もあるはあやまりなり

源氏物語（まほろし）云九月に成て九日にわたおほひたる菊

ハ御イキミ玉ノ心ナリト云ヘリ生見玉ノ祝ノ事世俗ニテハ親アル人親ヲ祝スルヨシナレトモ御所カタワラハ有無ニヨラス御祝アル也是ハ八日ヨリ十三日マテノ内吉日ヲエラヒテ御厨子所高橋大隅兩家ヨリ奉ル七獻幷ニ五ツ居二ツ居ノ御獻アリ

○釋名

生御靈
慶長板節用集
生見玉
親元日記及年中恒例記
生身玉
世俗通用
御めてた
御ゆとの丶上日記
御めてた事
當時年中行事
いきぼん
武藏兒玉郡邊の方言
○正誤
恒例行事略云御目出度事イッノ比ヨリ始レルニヤ永記永正元年ノ所御湯殿記弘治四年元龜三年ノ所ナトニ見エタリ
弘賢曰永記の永正元年よりも上に引る親長卿記の文明八年のかたふるく御湯殿の上日記弘治四年よりも上にひける明應四年のかたふるし
○右いきみたまは塙氏の未調進本をもて補レ之

日宮門跡御比丘尼衆内々の男衆ふれもよほされて伺候あり正親町院の御時までは宮門跡御比丘尼衆等伺公あり舊院御時もたゝ一度をの／＼祇候にて今出川前右府晴季公抔も座につらなられしとかや其後はをの／＼召はあれと祇候はなし長座窮屈人々暑氣にたへさるによりて斟酌ある也其ゆゑに日をかへて伺公あれは是も御三間にて二獻まいりて天盃たふ天酌まではなし各伺公の時は十一獻十三獻に及て夜あけはなるゝ事のみにて有けるとなり今はさまてはなけれと毎度曉天に及ひ御座已下公卿の御座にいたるまでかまへやうみな月に同し女中をの／＼まろすゝしを着用先初こんはうそう御盃一こんまいりて女中呑とをる二こんそろ／＼御そへくしまて供して後男をめす公卿すのこの座につくそろ／＼を公卿の前にすへわたしてのち内侍御前の御汁をもてまいる公卿にも汁をたふ御はし下る内侍御かへをもて參る公卿にもたふ藏人すゝの鉢に入てもていつ公卿給はりて御盃參る女中とをりて藏人酌にて公卿に座なから殿上人は公卿の座の末にて召出してたふ其後公卿の座のうしろに候す三こん御ひらは第一の上﨟の酌なり女中の座をいさり出て女中公卿以下召出て御とほりをたふ四こんまん御そへくしありは次の上﨟の酌なり勿論御前の御陪せんはとほしの樣前におなし五こん鳥は天酌なり六こんうりを供すれは公卿侍臣にもうりたふみな月のことし御箸くたりて後各給はる此度は又次の典侍の酌なりもし上﨟分の人不足の時勾當内侍人數にくはゝるなり七こんひとつものを供して後五すへを供す御右の方のはしにあり此度は公卿の酌なり第一第二をいはす公卿の中可レ然人なり女中は座なから男は召出さる酌の人手前は次の人酌にかはる也常の事なり天酌の比よりうたひなとうたひて公卿の座のまへにかはらけのもの二出る也天酌の後公卿たかひにとりてあたふ事はてゝ入御みな月におなし

當世年中行事云七月御目出度事八日より十三日迄の内撰二吉日一俗生見玉ノ饗應ナト申候ト同事此御獻御厨子所ヨリ調進院中へ同被レ進レ之

恒例行事略云御目出度事日限不定八日ヨリ十三日マテノ内日ヲ撰テ御祝アリ御盃五ツ居二ツ居七御厨子所高橋大隅兩家ヨリ奉ル御所々々ヘモ進セラレ女中カタ堂上方ニモ下サル假名記ニ御目出度事ノ御祝ト

年中恒例記天文年去七月十一日御生見玉一獻有レ之御所々々御參日野殿公家少々御供衆祇候申サル丶也

親俊日記云天文七年七月八日若公樣御生見玉御一獻あり十二日與力衆生見玉嘉例儀也貴殿え御樽進上之

弘賢按與力衆は政所代被攝の官なるへし故に親俊へ進物有しにや親俊も又政所へ樽進上せしなり

同八年七月八日若公樣御生見玉十一日與力衆如二例年一生見玉十二日貴殿へ爲二御生見玉一二種一荷進上之同十一年七月八日公方樣御生見玉十一日與力衆嘉例生見玉進上之十二日貴殿え御樽進上之生見玉恒例

申次記永祿七年伊勢貞助云七月九日千疋御折紙如二例年一御生見玉參二三寶院殿一十一日に御進上も有レ之索麪一折蓮若根一折御樽三荷爲二御生見玉一參一乘院殿此外御所々ヨリ參何も式日は不レ定

公家之儀

親長卿記云文明八年七月十一日參內若宮御方以下有二御祝之義一いきみたまと云々

御ゆとの丶上日記云明應四年七月六日御めてた御さか月二宮の御かた三宮の御かたおかとの御ふた御所ほうあん寺殿大ゑやう寺との御ふた御所あんせん寺とのよりも御さはりなけれとも御さかな三色一かまいるのこりの御所々よりはなかはしへ御申ともありしふたゆふめしてかたはせらる丶御さかつきの御かた八こんまいる十日めてた御さか月まいる宮の御かさふしみとの御むろくわしゆ寺の宮はしゐんの御かつしき御所も御參りありおり五かう御たる二かまいるふしみ殿より御かはらけのもの三色一かまいるくろとにて九こんまいる三こんに宮の御かたしやく五こんにふしみとの六こんに御かつしき御所はかりまいらる丶七こんにてんゑやくこと／＼くにたふ御ともに六らうよしらうなとまいるめしてうたわせらる丶御ひし／＼とめてたし／＼十三日ゑもかはら殿よりめてた御さか月まいらせらる丶御いはゐありてあなたへ御かはらけのもの二色にて一かまいらせらる丶あんせんしとのへも御かはらけのもの三色にて一かまいらせらる丶明應七年七月九日宮の御かたふしみとの一宮三宮めうほう院殿御むろ御かつしき御所大しゐんの御かつしき御所めてた御さかつきまいる

當時年中行事云御めてた事盆前此事有日限不定也兼

古今要覽稿卷第六十九

●時令部

●いきみたま 生御靈 御めてた 生見玉

生見玉は佛說にもとつきしことなり孟蘭盆經世俗より事おこりてつゐには公家にも行はるゝことになりしなりそのはしめさたかならす寬正の比より書記せし物も見えたり親元日記

佛說于蘭盆經西晉三藏法師竺法護奉詔譯云善男子若比丘比丘尼國王太子大臣宰相三公百官萬民庶人行二孝慈一者皆應下先爲二所生現在父母過去七代父母一於二七月十五日佛歡喜日僧自恣日一以二百味飲食一安二孟蘭盆中一施二十方自恣僧一願使中現在父母壽命百年無レ病無二一切苦惱之患一乃至二七世父母一離二餓鬼苦一生二人天中一福樂無上レ極

　弘賢曰佛說によれはウラホンヱはもと現在の父母の壽命をいのると過去七世の父母の菩提をいのるとかねて修することなるを後には過去の父母のみをまつる事になりしゆゑにその以前に生見玉を祝ふ事になりしなるへしされはこそ孟蘭盆會は早くをこなはれて公事となれるに生見玉はいと後の世にきこゆゑかも世俗の風儀なり公家にをこなはるることはもとも內々の義にて公事根源世諺問答なとにもゑるされすたゝみゆとのゝうへの記に御めてたと見えたるか生見玉のことにて卽今も御所にては生身玉とはいはて御めてたことゝいふなり

武家之儀

親元日記云寬正六年七月十一日新造御生見玉文明五年七月十一日公方御生見玉御祝也貴殿御出仕晚

弘賢按貴殿とは伊勢守家をさす也伊勢守政所蜷川は政所代にてありしなり

十二日貴殿生見玉御祝御內方悉一種一瓶進上之御一家少々如レ上武田殿女中樣御出終夜一獻あり奉公方衆少々同前文明十三年七月十日貴殿南禪寺慈聖院御墓へ御參御歸路に東とのえ御出御一獻あり御生見玉なり親元應□昨日より御極代被レ送二進之一

東山殿年中行事永正六年大館尚氏去七月十一日女中御所之爲二生見玉御祝義一御參賀有二御一獻一云々

弘安元年七夕　　後九條內大臣
かさゝきの川風たちぬ七夕の
　　もみちのとはり浪やかくらん

同　　同
あけかたのふしのけふりや星合の
　　空の別のおもひなるらん　　信實朝臣

六帖題新六一
別れをはかたへのあたやつけつらん　本ノマヽ
　　七夕つめのあか星の影　　前中納言定家卿

一字百首イ
なか月の有明の月のあなたまて
　　心はふくるほしあひのそら

正嘉三年毎日一首中
七夕の祈るたむけやうけつらん
明てそかへるかちのことのは
同

文應元年毎日一首中
君すめは千代もかきらしかめのをの
河瀬にうつす星合の影
同

文永四年毎日一首中
夕立に水まさるらんあまの川
はるかにわたせかさゝきの橋
同

六帖題六一
けふきてやたちかさぬらん天の川
いほはたにおる雲の衣手
安嘉門院四條

弘安三年稲荷社百首
七夕のいほはたころもきぬ〳〵に
天の川浪たちわかるらし
參議爲相卿

古集百首中
なこりをやなれもしぬらん七夕の
別をおくるかさゝきの聲
正三位知家卿

秋歌中
天の河あきは淺せの浪のうへに
紅葉を舟のはやこかるなり
後九條内大臣

弘安元年百首折御歌
天の川雲にみたるゝ七夕に
たれかしのふのころもかすらん
同

柿本影供百首
七夕もおなしかはらにたつたひめ
急けもみちの秋のうき橋
従二位家隆卿

家集七夕
いまはとて人はおくとも七夕の
秋のあふきの名をは忘れし
喜多院入道二品のみこ

家五十首
七夕に心をかしてあちきなく
あかぬ別れのよそにくるしき
前中納言定家卿

建保三年内裏七夕七首
天の河あくるいは戸もなさけしれ
秋のなぬかの年のひとよを
衣笠内大臣

御集
七夕のよそて（とイ）のすかたたちかくす
きりのとはりに秋風そ吹く

盥の水にうつらましかは

同

同

聲のあやは音はかりしてはたおりの

露の衣をや星にかす覽

讀人不知

永延二年七月七日實資朝臣家歌合鈴蟲

七夕にかしや玄つらんすゝむしの

雲ゐはるかに音そ聞ゆる

法橋顯昭

喜多院入道二品親王家五十首

待かぬるこゝろにさよや更ぬらん

月かたふきぬ星合のそら

順德院御製

百首御歌

さをしかのつれなき妻もある物を

まつをうらみの星合の空

皇太后宮大夫俊成卿

顯輔卿家歌合七夕

七夕にたえぬ契をそへんとや

はねをならふるかさゝきの橋

源師光

正治二年百首

天の川絶ぬ契りの渡りにや

はねをかはせるかさゝきのはし

入道前太政大臣

嘉元二年一百首七夕

かきつくるかちの七はの思ふこと

猶あまりある秋の夕くれ

安嘉門院四條

弘安元年筥根に奉る百首

ゆみはりの月もいりなは天の川

やその浪ちに舟やまよはん

前中納言定家卿

建保四年百首

天の川ふかきわたりもうつろひて

月のかつらそ色に出ゆく

同

同三年內裏七夕御會

七夕のてたまもゆらにおるはたを

をりしもならふ蟲の聲哉

民部卿爲家卿

千首歌

あまの川あき風さむき（みィ）七夕の

くものころもやけふ重ぬらん

同

同

あまの川てたまもゆらにおる絲の

なかき契の秋はかはらし

同

家集七夕心を
一夜にはいつあひみける七夕を
ゑらてや人の恨みそめけん　　後頼朝臣

堀川院御時百首七夕
彦星のあまのいはふね舟出して
こよひやいそにいそ枕する　　顯仲朝臣

同
七夕のあかぬわかれの涙にや
はなのかつらも露けかるらん　　權中納言師時卿

光明峯寺入道攝政家百首
あまの川みつかけ草のうち靡き
玉のかつらも露こほるらん　　前中納言家持卿

插頭花六四
彦星のかさしの花はつまこふと
みたれにけらし此川の瀬に　　讀人不知

久安百首
年をへてまれに逢よの明行けは
みる人くるしたなはたのいと　　待賢門院安藝

後久我太政大臣

千五百番歌合
あひみても猶ゆくすゑの契りをや
むすひかさぬる七夕の絲　　後鳥羽院御製

同
七夕の雲のたもとやぬれぬらん
あけぬとつくる秋風のこゑ　　土御門院御製

百首御歌
我いのるねかひのいとの年をへて
あはてしもやは秋の七夕　　後京極攝政

正治二年百首
七夕の待てし秋は夜さむにて
雲にかさぬるあまのはころも　　民部卿範元卿

同
ひこほしのゆき逢影をうつしつゝ
たらひの水やあまの川浪　　建禮門院右京大夫

家集七夕の心を
七夕にけふやかすらんのへ毎に
みたれ織なる蟲のころもは　　同

同
きかはやなふたつの星の物かたり

家集七夕の心を
心して今宵の空はくもるらん
星合のすかた志るくかもみん　同

同
天の原ふりさけみれは七夕の
ほしのやとりに霧たちわたる　躬恒

家集七夕歌
雲はるゝ天のさよ橋たえまかも
と渡りわくらし七夕つめは　中務卿のみこ

御集
あまの川つきのみ舟ののほりせに
みかく光りやわたる玉橋　大納言經信卿

家集海路七夕
星合の影をうつせはなこの海も
あまの川せの心地こそすれ　仲實朝臣

堀川院御時百首
わたし守ふなよとめすな七夕の
年にあふよは只こよひのみ　俊頼朝臣

家集七夕歌中
七夕のあまのたまゆかこよひさへ
流れやすらんあかぬ涙に　同

同
彦星のみけしのあやを急くとや
はたおる蟲の今宵しもなく　同

同
七夕の袖にひまなくつくすみは
逢瀬にけふや洗ひすつらん　同

同
老ぬれは七夕つめに事よせて
鳥もわたらぬみつはをそくむ　正三位知家卿

光俊朝臣御すゝめける百首
あまの川とりもわたらぬ明ほのに
おきて露ふむ庭の草むら　西行上人

家集七夕歌中
急きおきて庭のを草の露ふまん
やさしきかすに人や思ふと　宜秋門院丹波

千五百番歌合
七夕のあはぬ絶まとかそへしは
此世にみする月日なりけり

雲の塵なき星合のせは
慈鎮和尚

賀茂社百首御歌
をさめとのくるゝの妻戸おし明て
けふ七夕にかす物やなに
前中納言定家卿

伊呂波四十七首歌
らのへうし紐の玉ゆらときかせは
天のかつらに雲やまく覧
實清朝臣

久安百首
ひこほしのかへさの舟をしむとや
七夕つめは天のひれ振（つ歟）
前大納言忠良卿

正治二年百首
七夕のくもの衣に風たちて
うらめつらしきほしあひのそら
慈鎮和尚

同
たなはたの心やこよひ晴ぬらん
雲こそなけれほしあひの空
源師光

喜多院入道二品親王家五十首
七夕にまをのにひいとひきかけて
くる事たえぬ星合のそら

祭主輔親

同
彦星の物わすれせぬあかつきは
七夕つめもかくやわふらむ
此歌は七月六日ある人わつらひて侍るをつかむまつる所よりめしけるに歌よみてといひけれはよめりと云々

好忠

三百六十首中七夕
空をとふをとめの衣ひとひより
あまの河浪たちそきるらし

小大君

七月七日ひきたるおくにくものいかけるをみて
さゝかにのもろてにいそく七夕の
くものは衣風やたつらん

實方朝臣

かくよめるをみてかへしける
彦星のくへき宵とやさゝ蟹の
くものいかきも玄るくみゆ覧

前大納言隆季卿

正治二年百首
ほしあひの空はこよひに天の川
もろてに急けつまむかへ舟

太宰大貳兼宗卿

秋は露けきころとなるらん
前大納言隆季卿

久安百首七夕の心を
さぬるよの天の川原にいそ枕
そはたてあへす明そしにける
前參議親隆卿

同
待れつる月のなかたち入ぬまに
はや舟てせよ天のわたせに
皇太后宮大夫俊成卿

同
七夕のなふちはさしも遠からし
なと一年にひとわたりする
花園左大臣家小大進

同
七夕のあまの河守こゝろあらは
かへさ渡すなかさゝきの橋
源　兼　昌

永久四年百首七夕後朝
朝風に河なみさわけ一夜つま
たまゆらたにも立とまるへく
讀　人　不　知

建長八年百首歌合萬八
七夕の袖つく夜半のあかつきは
川せのたつは鳴すともよし

御集七夕
こひ〳〵て稀に逢よは天の川
かはせのたつは鳴すもあらなん
鎌倉右大臣

建長八年百首歌合　前中納言顯朝卿
天の川くたしかねたるともしつま
渡りを急くぬさたむくなり
同

同
七夕のわかれをゝしみ天の川
やすのわたりにたつもなかなん
俊　頼　朝　臣

家集七夕をよめる
とりにとも木にともむかし契りしは
今宵の星の逢せ思へは
同

永久四年百首七夕後朝
七夕はあめのおしてのやへ霧に
道ふみまよひ又やかへると
家　長　朝　臣

九條大納言家にて七夕歌七首當座にてよみける中
しをれきてこよひはかりや久方の
天のは袖もほしあひの空
嘉陽門院越前

老若五十首歌合
はらふらんまくらそみゆる夕まくれ

寛和二年七月七日集三條院瞿麥合　　兼盛

なてしこにけふは心を通はして
いかにかすらん彦星のそら

能宣朝臣

同

時のまにかすと思へは七夕に
かつをしまるゝなてしこの花

此歌異書に云左すはまちひさきませゆひてなて
しこ二本はかりうゑたるにゆひつけたると云々

讀人不知

おなしすはまのなてしこにつけたる

七夕やわきてそむらんなてしこの
花のこなたは色の勝れる

能宣朝臣

同

ちきりけん心そなかき七夕の
きてはうちふすとこなつの花

このうた詞書七夕ひこほし雲のうへにありまた
つりしたるかたなとありすはまのすさきにみえ
(つ歟)てと(に歟)てと云々

平祐擧

家集七月七日

天の戸はさしやしつらん彦星の

かしふり立て歸るふなちよ（ち歟）

惠慶法師

屛風七月たなはたまつりたらひの水いれてかけみる

天の河かけをやとせる水かゝみ
七夕つめのあふせしらせよ

康資王母

寛治五年從二位藤原親王家歌合雲葉

あふこともなれすやあるらん七夕の
まとほにきたる天のは衣

如覺法師

家集七夕を

七夕の絶ぬちきりを結ひおきて
雲の下ひもけふやとくらん

藤原親重

七夕近歌花抄

七夕の雲のはたゝておる衣
うらめつらしくうちかさぬらん

俊惠法師

歌花抄

七夕の別るゝけさのたもとには
秋のしら露おきはしむらん

皇太后宮大夫俊成卿

千五百番歌合

七夕のあかぬなこりの袖よりや

同萬十七
七夕のふなのりすらしますかゝみ
　清き月よに雲たちわたる　　同

家集外歌中
ひとゝせに一度わたる天の川
　いくらはかりのひろさなるらん　　同

同
かさゝきの橋つくるより天の川
　みつもひなゝんかち渡りせむ

秋歌中萬代
あまつ風あふくともゆめ風たつな
　こは七夕の織れるにしきに　　延喜御製

七月七日人にたまはせける萬代
あまつほし行かふ秋の夕暮に
　物うらやみもせられぬるかな　　人丸

家集
天の河はしうち渡すいもかいへに
　たえす通はん時またすとも　　同

同
彦星のつまゝつ舟の引つなの
　たえんと君に我おもはなくに　　讀人不知

延喜六年亭子院歌合明玉
思ひやる心のこらすゑくるれは
　七夕つめのわかれかなしな　　躬恒

七日夜六一
七日ひははやすくれとも久かたの
　天の河きり立わたるへく　　西行上人

家集七夕を
天の川けふの七日は長き夜の
　例しにもひくいみもゑつへし　　和泉式部

家集
詠むらん空をたにみす七夕に
　餘るはかりの我身とおもへは　　同

同
一日たにやすみやはする七夕に
　かしても同し戀こそはすれ　　藤原義孝

家集和歌中
露くたす星合の空をなかめつゝ
　いかて今年の秋をすくさん

同萬十
天川かちのおときこゆ彦星と
七夕つめとこよひあふらしも
同

同萬十
彦星と七夕つめとこよひあはん
天の川とになみたつなゆめ（せイ）
同

同萬十
あまの川せことにぬさをたてよさす（まつるイ）
心は君をこひきはませと（さちくいイ）
同

同萬十
こま錦ひもときかへし（はイ）七夕の（彦星イ）
つまとふよひぞ我もえのはん
讀人不知

同萬八
天の川うきつの浪とさわくなり
わかまつ君し舟出すらしも
同

同萬八
天の川かは浪立ぬえはらくは
やそのふなつにみふねとゝめん
同

同萬十
秋風のふきたゝよはすえら雲は
七夕つめのあまつひれかも
人丸

七夕萬十
わか戀るにほへるたもとこよひしも（もかイ）
天の河原にいそ枕まく
讀人不知

題不知萬十
はたものゝふみきもちきて（ていイ）天の川
うち橋わたす君かこんため
同

同萬十
天の川きりたちのほるたなはたの
雲のころものかへる袖かも
同

長歌萬九
ひさかたの、あまのかはらに、のほりせに、たまはしわたし、くたりせに、ふねうけすえて
同

題不知萬十
彦星の川の瀬わたりさほ舟の
ゆきてとまらん河つおほえす（しそおもふイ）
中納言家持卿

よりはにかゝる天の河浪　同

海道名所歌菊川七夕
浪にいさうつしてみはや菊川の
名もたよりある星合のかけ　信實朝臣

建長八年百首歌合
今宵とてあまゝをいのる星合の
かなふとみるそ光なりける　陀阿上人

七夕の心を
星合のそらたのめとや成ぬらん
けふしもそゝく秋のむら雨　權僧正公朝

建長八年七月七夕七首中
遠妻のくへき秋也いとの網の
玉のさゝかにかねて云るしも　同

家集七夕の歌中
よひの間に月のまゆをはひらけとも
露そわかれの涙也ける　清輔朝臣

家集七夕
七夕やおのかきぬ〳〵成ぬらん
空なる雲のなかのたえぬる

同七夕言志
七夕の雲の旗てにおもふらん　同
こゝろのあやも我にまさらし　從二位行家卿

光俊朝臣すゝめける百首古來歌
幾年もゆきめくりても七夕の
ちきりはたえしよはの下ひも　同

弘安元年百首七夕
七夕のおるあさぬのゝあき衣
むねあひかたくなと契るらん　赤人

家集
七夕のいほはたてゝおるぬのゝ
あきさり衣誰かそめけん　讀人不知

詠七夕歌萬十
天の川やすの河原のさたまりて
心くらへはときまつなくに　山上憶良

同萬八
袖振はみもかはしつへく近かれと
渡るすへなし秋にし有らねは
人丸

同
定めおく星合の空のゑるしとて
　秋のゑらへにことちたつなり
法橋顯昭

同
七夕のあふ夜の庭におく琴の
　あたりに引はさゝかにのいと
寂蓮法師

寶治二年百首乞巧奠
見るまゝに庭の灯火かすかにて
　七夕まつり夜はふけにけり
信實朝臣

家集乞巧奠
夜もすから星合の空にたてまつる
　香のけふりや雲と成るらん
源仲正

正治百首
たきものを雲の衣ににほはせて
　七夕つめのくれをまつらん
三條入道左大臣

寶治二年百首乞巧奠
ゑら露の玉のをことの手向して
　にはにかゝくる秋のともし火
常磐井入道太政大臣

後九條内大臣

同
おく琴のかひやなからん星合の
　あきの別れは引もとゝめす
民部卿爲家卿

同
七夕のあはすはなにゝゑら露の
　玉のをこともけふはかさまし
正三位知家卿

同
ひこほしの行あひの空に手向して
　いたゝきまつるこの夕哉
光俊朝臣

同
すへらきの南の園に御いてせし
　その夜の秋はこよひ也けり
民部卿爲家卿

嘉祿四年百首乞巧奠
たましきや雲井の庭におく琴の
　おのつからなるほし合の空
入道前太政大臣

乞巧奠の心を
庭の面にひかて手向る琴のねを
　雲ゐにかはす軒のまつかせ
參議爲相卿

嘉元二年百首七夕
歸るさの袖ぬらすらしかさゝきの

織女のあまの岩舟ふなてして
　こよひやいかに磯まくらする　藤原基俊

銀河なみたつなゆめ彦星の
　つまむかへふねきしによるなり　權少僧都永緣

あふほともなくてわかるゝ織女の
　心のうちそ空に志らるゝ　阿闍梨隆源

なか〳〵にうらやましきは織女の
　絕すあひみる契り也けり　肥後

七夕のあまの羽衣かさねても
　あかぬ契りやなほむすふらん　紀伊

織女の逢瀨のなとかまれならん
　けふひく絲のなかき契りに　河內

こひ〳〵てこよひはかりや織女の
　枕にちりの積らさるらん

夫木和歌集卷第十一秋部

七夕

六百番歌合
ほしあひの空のひかりとなる物は
　雲井の庭にてらす燈し火　後京極攝政

同
七夕はくもの上より雲のうへに
　心をわけてうれしかるらん　慈鎭和尚

同
くれ竹にすくる秋かせさよ更て
　まつるほとにや星合のそら　前大納言兼宗卿

同
秋ことにたえぬ星合のさよ更て
　ひかりならぶる庭のともし火　前中納言定家卿

同
たれもまたけふ七夕をまつりつゝ
　いのる心は空に志るらん　正三位經家卿

同
やとことにかけをうつせは七夕の
　あふせは志けし天の河なみ　正三位季經卿

今日きてやたちかさぬらん天の河
いほはたにおる雲の衣手
九條三位入道知家

天の河あきはあさせのなみの上に
紅葉の小舟はやこかるなり
左京大夫行家

秋風にけふ七夕の天つひれ
おもふかたにやまつなひくらん
右大辨入道光俊

さしもはや年に一たひわたすへき
おもへはつらし鵲のはし

堀川院御時百首和歌
七夕

天の川あふ瀨ほとなき七夕に
かへらぬ色のころもかさはや
春宮大夫公實

銀河夜の長月もあるものを
なとはつあきとちきりそめけん
權中納言匡房

織女にかせるころもの露けさに
あかぬけしきを空にしる哉
權中納言國信

銀河そらにこそしれ棚機の
くれをまつまのあきのこゝろを
右兵衞督師賴

ひこほしのまれに渡せる天の河
いはこす浪のたちなかへりそ
修理大夫顯季

彥星のいそきやすらん天の河
やすのわたりに舟よはふなり
源顯仲朝臣

渡守ふなよとみすな織女の
としにあふよはたゝこよひのみ
中宮權大進仲實

織女のかへるたもとのしつくには
銀河なみたちやそふらん
木工頭俊賴

棚機のあかぬ別れのなみたにや
花のかつらも露けかるらん
左近權少將師時

藤原顯仲朝臣

古今要覽稿卷第六十八

●時令部　七夕

●和歌三

古今六帖
七日の夜
伊勢集
珍しくあふたなはたは餘所人も
影みまほしき物にそ有ける　ふかやふ

佗ぬれは常はゆゝしき七夕も
うらやまれぬる物にそ有ける　人まろ

國もせに常にあふなは立ぬれと
逢みることはたゝこよひなり　いせ

朝またき急き引らんけふのをに
心なかさをくらへてしかな　貫之

銀河みたえもせなんかさゝきの
橋もわたさてたゝ渡りせむ

一とせに一夜はかりを七夕の
いつも逢とのなをはたつらん

たなはたは今やわかるゝ天の河
川きり立てちとりなくなり

夕つくよひさしからぬを天の河
はやく七夕こきわたりなん

つもりぬる年おほけれと天の河
君か渡れるかすそすくなき

天の河夜ふかく君はわたるとも
人忘れすとは思はさらなん　みつね

なぬか日のはや暮なゝん久かたの
天の河霧たちわたるへく

新撰六帖
たなはた　衣笠内大臣家良公
銀河やそ瀬のふねの年ことに
ひと夜わたせとたれか契りし　前藤大納言爲家

天祿四年七月七日うへの御つほねにて一品宮の
らんこのまけわさし侍ける時の扇に
恒德公
あま津風あふくともゆめ霧立な
こは七夕のおれるにしきそ
かくて御あそひありけるにかはらけとりて
中納言保光
年ことにいのる中にもたなはたの
今夜はことに心あるらし
延文百首歌奉りける時
等持院贈左大臣
織女のなみたの露にあまの河
みつかけ草やなほなひくらん
正治二年百首歌に
從二位家隆
篠わけし道たにあるを天の川
かへるあしたの袖をしそ思ふ
七夕後朝と云ことを
源重之
たもとこそ思ひやらるれ七夕の
あけ行そらの天の羽ころも
おなし心を
平師氏
立かへり思へは遠きわたりかな
あけゆく空のあまの川なみ
八日のあした選子內親王よりりうたんの露おき
たるにつけて露おきてなかむるほとを思ひやれ
とありける返しに
法性寺入道前關白太政大臣
天の川あけ行ほとの露けさに
いつくもおなし空をなかめて
又卷第十四雜上
七夕の心を
民部卿資宣
七夕も哀れとやみる年をへて
かすてふ絲のなからふる身を
津守國量
七夕のちきりことなり天の川
みをはやなからかはらさるらん
後九條前內大臣家百首歌合に
後嵯峨院中納言
秋のよをことそともなく明ぬとは
七夕つめやおもひ decimals

露はゆふへの物とやはおく

新續古今和歌集卷第四秋歌上
待七夕と云ことを　洞院攝政前左大臣
天の原そらなる河のわたし守
あきにはあへす御船よせなん
後九條前内大臣家歌合に　土御門院小宰相
あまの川かは音すみて彦星の
つまむかへ舟まつやひさしき
弘安元年百首歌奉りける時
安嘉門院四條
天の河やその船出も見るはかり
雲なかへしそ星あひのそら
二品法親王守覺家五十首歌に
源師光
七夕にまをのにひ糸ひきかけて
くることたえぬほし合の空
題しらす　後賴朝臣
むかしよりいかに契りて七夕の
人やりならぬ物おもふらん
建武元年七月七日内裏にて七首歌講せられける
に　前大納言爲定
七夕の行あひになひくはつを花
こよひはかりや手枕にせん
藤原雅朝朝臣
織女のあまの羽ころも露ちりて
行あひの空にあき風そ吹く
崇德院御時奉りける歌の中に
皇太后宮大夫俊成
七夕はうらめつらしく思ふらん
今夜は雲のころもかへさて
正治二年百首歌に　前大僧正慈鎭
たなはたの心やこよひはれぬらん
雲こそなけれ星合のそら
貞和三年七月七日花園院に人々三首歌奉りける
時七夕雲を　後八條入道前内大臣
星合のこよひはかりはあま雲の
よそにへたてぬ契なるらし
七夕を　中納言兼輔
たなはたを渡して後は天のかは
浪たかきまて風もふかなん

題しらす　平義政
あまの河とわたる鴈やたなはたの
　別れし中にかよふたまつさ
又巻第十三戀歌三
かたらひける人の七月八日の夜きて物語して歸
ぬるつとめて　赤染衛門
七夕のきのふ別れし袖よりも
　あくれは今朝そわひしかりける
新後拾遺和歌集巻第四秋歌上
嘉元百首歌奉けるに七夕　贈從三位爲子
淵はせにかはらぬ程も天の川
　としのわたりの契りにそしる
おなし心をよませ給うける
　花園院御製
鵲のわたせる橋のひまをとほみ
　あはぬ絶まの多くもある哉
百首歌めされしついてに　御製
年をへてけふより外の逢せをは
　たかしからみそ天のかは波
弘安元年百首歌奉ける時
　入道二品親王性助
きても猶うすき契や恨むらん
　年にまれなるあまの羽ころも
織女契と云ことを　入道一品親王法守
七夕のこひも恨もいかにして
　ひと夜のほとにいひ盡すらん
又巻第八雜秋歌
題しらす　爲冬朝臣
更になほすゝしく成ぬ星あひの
　影みる水に夜やふけぬらん
七月七日住吉より都の方へまかり侍けるに天河
と云所にて日のくれにしかは舟をとゝめて河原
におりゐ侍て　津守國基
たなはたは思ひしらなん天の川
　いそく渡りに舟をかしつる
百首歌奉し時　藤原資衡朝臣
ひと夜をも契りになして織女の
　うときもなとか恨やはする
七夕露を讀せ給うける　後二條院御製
織女の契りまつまのなみたより

くるゝ待まやくるしかるらん

おなしき七月七日三首歌講せられけるに七夕契久といふことを

前關白左大臣近衞

いく秋も絶ぬちきりや七夕の
待にかひあるひと夜なるらん

入道二品親王法守

九重のにはのともしひ影ふけて
星合のそらに月そかたふく

題しらす

從二位行家

いくとせを行めくりても七夕の
契りはたえし夜半のした帶

貞和二年七月七日三首歌に七夕契久と云る事を

前大納言經顯

織女のまれにあふせも年ふれは
渡りやなるゝ天のかはなみ

七夕地儀といふ事をよませ給うける

院御製

天の川としのわたりは遠けれと
なかれてはやく秋もきにけり

百首歌奉し時七夕

前大納言忠季

かさねてもうらみやはれぬ七夕の
あふ夜まとほの雲の衣は

題しらす

源兼氏朝臣

いつのまに紅葉の橋を渡すらん
しくれぬさきの星あひの空

中務卿宗尊親王

天の川おもふか中に船はあれと
かちより行かかさゝきのはし

後二條院御製

いく秋かわたしきぬらん銀河
おのかよりはのかさゝきの橋

元弘三年立后屛風に七夕

前參議經宣

七夕のいをはた衣かさねても
秋のひと夜となにちきりけん

秋歌の中に

前大納言爲家

たなはたの雲の衣のきぬ〴〵に
かへるさつらき天の河なみ

內大臣

織女のあかぬわかれの歸るさに
今こんとしをまた契るらん

文保百首歌奉りける時　法印定為
たなはたはうきて思ひや增るらん
たつかは霧のけさの別れに
正安三年七月七日七首歌めしけるついてによませ給うける　後二條院御製
別路にかたみもとめす夕つく夜
あかつきやみの星合のそら　和泉式部
年ことに待もすくすもわひしきは
秋のはしめの七日なりけり
延喜十六年七月七日亭子院殿上の歌合に
讀人しらす
別れてはわひしき物を彦星の
きのふ今日こそ思ひやらるれ
又卷第十四戀歌四
題しらす　よみ人しらす
彦星のかさしの玉のつま戀に
みたれにけらしこの河の瀬に
七月七日內より今夜さへよそにやきかん我ための天の河原はわたるせもなしとの給はせけるに

天の河ふみみることのはるけきは　女御徽子女王
わたらぬせとも成にや有らん
星會見ける夜忍ひて人をみて後にいひつかはしける　兼盛
天の河かはへの霧のなか分て
ほのかに見えしつきの戀しき
題しらす　芬陀利華院前關白大臣家新少將
たのますよ又あふ事もかたのなる
天の河原の遠きわたりは
新拾遺和歌集卷第四秋歌上
七夕歌に　躬恒
久かたのあまの川きりたつ時や
七夕つめのわたるなるらん
銀河かちのときこゆひこほしの　赤人
七夕つめとこよひあふらし
貞和二年百首歌奉る時　後岡屋前關白左大臣
さはるへき契ならねと七夕の

紀　友　則

あまの河こひしき時ぞ渡りぬる

瀧つなみたに袖はぬれつゝ

元德二年七月七日七首歌講せられける時七夕草

といへる事をよませ給うける

花園院御製

ふけぬるか水かけ草のうちなびき

すゝしく成ぬ天のかは風

七夕船

天の川かはへの霧のふかき夜に

妻むかへ舟いまかいつらし

題しらす　左京大夫顯輔

七夕のあまのいは船こよひより

秋風ふきてまほにあふらめ

文保二年七月七日內裏にて詩歌を合られける時

七夕地祇といへることを　民部卿爲藤

天の川その水上はきはむとも

あふせははてもあらしとぞ思ふ

文永八年七月七日白川殿にて人々題をさくりて

歌つかうまつりけるついてに七夕橋

後嵯峨院御製

かつらきの神ならねとも天の河

あくるわびしきかさゝぎの橋

七夕の心を　後西園寺入道前太政大臣

明ゆけはあまの河なみ立かへり

後のあふせやなほ契るらん

正中二年百首歌奉りける時　前大納言經繼

銀河ひと夜はかりの逢瀨こそ

つらき神代のうらみなりけれ

題しらす　後伏見院御製

七夕のいほはた衣まれにきて

かさねもあへぬ妻やうらみん

前中納言冬定

たなはたの五十機衣おく露に

ぬれてかさぬる秋はきにけり

正安三年內裏にて七夕七首歌講せられける時

從三位爲理

七夕の雲のころもはたゝ一夜（重イ）

かさねてうとくなる月日かな

りけれは　伏見院御歌
彦星のあふてふ秋はうたてわれ
　人に別るゝ時にそありける
近衞院の御事に土左内侍さまかへて籠り居て侍
けるもとへ又の年の七月七日讀てつかはしける
　備前
天の川ほし合のそらは變らねと
　なれし雲井のあきそ戀しき
新千載和歌集卷第四秋歌上
貞和二年七月七日三首歌講せられける時七夕契
久といへることをよませ給うける
　法皇御製
秋をまつとしのわたりは遠けれと
　契りそ絶ぬかさゝきの橋
題しらす　後伏見院御製
まち渡る絶まは遠き月日にて
　今日のみかよふかさゝきの橋
元德二年七月七日内裏にて三首歌講せられける
時七夕橋といふことをつかうまつりける
　前中納言公脩
あふ瀨をやたとらすわたる夕つくよ
　光りさしそふ鵲のはし
七夕契をよめる　津守國道
銀河あきをちきりしことのはや
　渡すもみちの橋となるらん
百首歌たてまつりし時七夕
　入道前太政太臣
忘れすよたむけの庭のつゆとおく
　玉のをことのよゝのそらへは
元亨元年九月廿六日龜山殿にてうへのをのこと
も題をさくりて歌つかうまつりけるついてにお
なし心をよませ給うける　後宇多院御製
七夕はわれてまたあふ鏡かと
　あきのなぬかの月やみつらん
題しらす　大納言經信
天の原ふりさけみれは七夕の
　ほしのやとりに霧たちわたる
　中納言家持
天の河夜ふかく君はわたるとも
　人しれすとは思はさらなん

前中納言匡房

天の川あふせによする白波は
　幾よをへてもかへらさらなん
　太宰大貳重家

たなはたの逢瀨はかたき天の川
　やすの渡りも名のみ也けり
　後光明照院前關白左大臣

七夕の契りは秋の名のみして
　またみしか夜は逢ほとやなき
　源義詮朝臣

年をへてかはらぬ物はたなはたの
　秋をかさぬる契なりけり

百歌首の中に
　太上天皇

更ぬなり星あひの空に月はいりて
　秋風うこく庭のともし火

七夕の心を
　後嵯峨院御歌

たなはたに心をかして歎くかな
　明かたちかきあまの河かせ

七月七日讀侍ける
　西宮前左大臣

七夕の契れるあきも來にけるよ
　いつと定めぬわれそわひしき
　つらゆき

戀歌の中に

稀にあふといふ七夕も天の川
　わたらぬ年はあらしとそ思ふ
　後伏見院御歌

寄七夕戀といふ事を

さらにこそ忘れしことのおもほゆれ
　けふ星合の空になかめて

又卷第十五上雜歌

七月七日龜山院より七夕歌めされける時よみ侍ける
　後西園寺入道前太政大臣

苔衣そてのゑつくを置なから
　ことしもとりつ草のうへの露

おなし心を
　藤原秀行

天の川とわたる舟のみなれ棹
　さしてひと夜となと契りけん
　高階師冬

はつ秋はまた長からぬ夜半なれは
　あくまやをしき星合の空

又卷第十八下雜歌

秋のはしめつかた近くさふらひたる人のみまか

まれにあふ夜の數やかたらん
　　　　　　　　平重時朝臣
天の河いかなる水のなかれにて
　　としにひとたひ袖ぬらすらん
文保百首歌奉ける時　　前大納言實教
七夕のひれふる袖のあき風に
　　かへるは今朝の別れなりけり
又巻第十一戀歌一
題しらす　　　　　　よみ人しらす
秋のよに人を見まくのほしけれは
　　天の河原を立ならすかな
宣耀殿女御の御方にさふらひける女に文つかは
して侍けるを返して侍けれは
　　　　　　　　藤原實方朝臣
七夕の契るその夜は遠くとも
　　ふみみきといへかさゝきの橋
風雅和歌集巻第五秋歌上
七月七日讀侍ける　　凡河内躬恒
けふははやとく暮なゝん久かたの
　　天のかは霧たち渡るへく

文保三年奉ける百首歌に　後山本前左大臣
心をはかすともなしに天の川
　　よその逢せにくれそまたるゝ
文永十年内裏にて七夕七首歌講せられけるに
　　　　　　　　前参議隆康
あふ事をまとほに頼む七夕の
　　契りやうすきあまの羽ころも
題しらす　　　　　　清輔朝臣
思ひやるこゝろもすゝし彦星の
　　妻まつよひの天のかはかせ
　　　　　　　　よみ人しらす
天の原ふりさけみれは天の川
　　きりたち渡るきみはきぬらし
尚侍貴子四十賀民部卿清貫し侍ける屛風に七月
七日たらひに影見たる所　　伊勢
めつらしくあふ七夕はよそ(空イ)人も
　　影みまほしき夜にそ有ける
七夕の歌の中に　　　　紫式部
大かたを思へはゆかし天の川
　　けふの逢瀬はうらやまれけり

行あひのわせはほに出にけり

題しらす　山邊赤人

天の河かはせの波のうちはへて
わかたち待しけふはきにけり

二星待契といへることを　後二條院御製

こゝろあらは河波たつな天の河
ふな出まつまの秋のゆふ風

題しらす　よみ人しらす

天の河かはおときよしひこほしの
秋こく舟の波のさわくか

天の川きり立わたりひこほしの
かち音きこゆよの更ゆけは

題しらす　源兼氏朝臣

天の河もみちの橋の色よりや
こその渡りもうつろひにけん

祭主輔親

天の河あきの契りのふかけれは
夜はにそ渡すかさゝきのはし

百首歌奉し時　中宮大夫師賢

七夕の秋のひと夜の契こそ
けふいつはりのなき世なりけれ

題しらす　院御製

織女のいほはた衣をりしもあれ
なとかは秋をちきり初めけん

六條院宣旨

あひみても恨はたえし七夕の
まれにかさぬる天の羽ころも

正安三年七月内裏に七夕七首歌奉ける時

前大納言爲世

稀にたにあはすはなにを七夕の
としつき長き玉のをにせん

堀河院百首歌におなし心を　祐子内親王家紀伊

七夕のあふせのなとか稀ならん
けふひくいとの絶ぬ物から

題しらす　源公忠朝臣

稀にのみ逢とはすれと天のかは
流てたえん物にしあらねは

圓光院入道前關白太政大臣

天のかは契りかはらす行水に

萬葉集
彥星と七夕つめとこよひあふ
　天のかはらになみたつなゆめ
　　　山邊赤人

亭子院歌合に
　　　よみ人しらす
天のかはわたりてのちそ七夕の
　ふかき心もおもひしるらん

龜山院位におはしましける時七月七日人々に七首歌めされけるによみて奉りける
　　　前大納言爲家
銀河たえしとそおもふ七夕の
　おなし雲井にあはんかきりは

家の六百番歌合に乞巧奠
　　　後京極攝政前太政大臣
星合の空のひかりとなるものは
　雲井の庭にてらすともし火

七夕の心を
　　　前大納言有房
織女の露のちきりの玉かつら
　いく秋かけてむすひおくらん

八日前栽の露置たるを折て法成寺入道前攝政のもとにつかはすとて
　　　選子内親王
露おきてなかむる程をおもひやれ
　天の河原のあかつきの空

□□百首歌奉りける時
　　　入道太政大臣
ふけゆけは河せのなみの立かへり
　またそてぬらす天の羽衣

題しらす
　　　源兼氏朝臣
七夕の雲のころもをふく風に
　袖のわかれはたちもとまらす

閏月七夕と云事を
　　　前中納言定房
契ありておなし文月の數そはゝ
　今夜もわたせ天のかはふね

又卷第十二戀歌二
七夕によせて戀の心をよみ侍ける
　　　藤原範永朝臣
わたるらん織女よりも天の川
　おもひやる身そそてはぬれける

續後拾遺和歌集卷第四秋歌上
前大納言賴經家にて早秋の心をよみ侍ける
　　　藤原基隆
彥星の妻まつ秋もめくりきて

嘉元百首歌奉ける時七夕の心を
　　二品法親王覺助
逢ことの年にかはらぬ七夕は
　たのむ一夜やいのちなるらん
秋歌の中に
　　平政村朝臣
露しけき袖をはかさし七夕の
　なみたほすまの秋のひと夜に
堀川院百首歌に
　　俊頼朝臣
七夕のかへる袂のしつくには
　あまの河なみたちやそふらん
七夕に讀侍ける
　　小侍從
稀にあふ秋の七日のくれはとり
　あやなくやかて明ぬ此夜は
又卷第十二戀歌四
七月五日七日にと頼めける人の返事に
　　前右近大將道綱母
天の河なぬかを契る心ならは
　ほし合はかりかけを見よとや
七月七日こんと申たる人に
　　和泉式部
七夕にかしてこよひのいとまあらは
　立よりこかし天の河波
逢かたき人に七月七日つかはしける
　　伊勢
いむといへは忍ふ物から夜もすから
　天の川こそ羨まれけれ
　　法成寺入道前攝政太政大臣
けふしたに契らぬ中は逢ことを
　雲井にのみも聞わたるかな
閏七月七日民部卿成範につかはしける
　　小侍從
天津星そらにはいかゝ定むらん
　思ひたゆへきけふの暮かは
續千載和歌集卷第四秋歌上
百首歌奉し時
　　前中納言爲相
天のかは水かけ草のいく秋か
　かれなてとしの一よまつらん
　　中納言家持
七夕のふなのりすらしあまのかは
　きよき月夜に雲たち渡る

古今要覽稿卷第六十七

●時令部　七夕

●和歌二

玉葉和歌集卷第四秋歌上

弘長百首歌に七夕を　前大納言爲家

久かたの雲井はるかに待わひし
あまつ星合の秋もきにけり

平　爲　時

彥星のつまこひ衣こよひたに
袖のつゆほせあきのはつかせ

龜山院に奉りける七夕歌の中に

安嘉門院四條

またれつる天の河原に秋立て
もみちをわたす波のうきはし

乞巧奠の心を　入道前太政大臣

庭の面にひかてたむくる琴のねを
くもゐにかはす軒の松風

題しらす

萬葉集
彥星のつまむかへ舟こき出らし　山上憶良
天の河原にきりのたてれは

天曆元年七月七日うへのをのこともに歌讀せさせ給うけるついてに　天曆御製

戀渡る年はふれとも天の川
まれにそかゝるせにはあひける

七夕を　花山院御製

あかれしのこゝろや深き七夕の
年に一たひまれにのみあふ

七月七日讀侍ける　馬内侍

思ひやり天の河原をなかむれは
絕まかちなる雲そわたれる

大僧正行尊

彥星のまれにわたれる天の川
いはこす波のたちなかへりそ

守覺法親王家五十首の歌中に　野宮左大臣

何となく秋にしなれは彥星の
あふ夜を誰もまつこゝちして

風颯々之聲ニ　　　　野美材
露應ニ別涙ノ珠空ク落ツ　雲是殘粧ノ髻未レ成ラ
風從ニ昨夜ノ聲彌怨　露及ニ明朝ノ涙不レ禁　江相公
去衣曳レ浪霞應レ濕　行燭浸レ流月欲レ銷　菅三品
詞託ニ微波ニ雖ニ且遣ル　意期ニ片月ニ欲レ為レ媒　菅輔昭

あまの河とをきわたりにあらねとも
　きみかふなてほとしにこそまて

ひとゝせにひとこそおもへとたなはたの
　あひみんあきのかきりなきかな

としことにあふとはすれとたなはたの
　ぬる夜のかすそすくなかりける

新撰朗詠集上
　秋
　　七夕

代ニ牛女ニ惜ニ曉更ヲ
今宵織女渡ル天河ヲ　朧月微雲一似レ羅ニ　白

宮人懷レ私之願似レ面不レ同　墨客乞巧之情隨レ分應レ異ナル　野美材

七月六日代ニ牛女ニ言レ志
爭敎ヘ七夕ノ縮テ為サ六更ノ課ニ　秋風ヲ計會新ナリ　齊名

牛女惜ニ夜闌ヲ
泣計ニ露珠ノ叢底ノ宴　愁望ム月鏡ヲ嶺南ノ舍　以言

乞巧屢風
雲霞帳卷風消息　烏鵲橋連浪往來ス　藤相公

月為ニ渡河媒ニ
似レ告ニ前行ヲ臨ム浪ニ　夕欲レ迷ハント歸路ニ隱ルノ雲ニ　秋　菅忠眞

ちきりけんこゝろそつらきたなはたの　友則
　としにひとたひあふはあふかは

たなはたの雲のころもをひきかさね　堀河右大臣
　かえさてぬるやこよひなるらむ

いたつらにすくる月日をたなはたの　惠慶法師
　ぬるよのかすとおもはましかは

河都麻度比能欲曾

右七月七日仰見天漢大伴宿禰家持作之

又卷第十九

豫作七夕歌一首

妹之袖和禮枕可牟河湍爾霞多知和多禮左欲布氣奴刀爾

又卷第二十

七夕歌八首

波都秋風須受之伎由布幣等香武等曾比毛波牟須婢之伊母爾安波牟多米

秋等伊幣婆許己呂曾伊多伎宇多弖家爾花爾奈蘇倍弖見麻久保里香聞

波都乎婆奈波名爾見牟登之安麻乃可波幣奈里爾家良之年緒奈我久

秋風爾奈妣久可波備能爾故具左能爾古餘可爾之母於毛保由流香母

安吉佐禮婆奇里多知和多流安麻能河波伊之奈彌於可婆都藝弖見牟可母

秋風爾伊麻香伊麻可等比母等伎弖宇良麻知居流爾月可多夫伎奴

秋草爾於久之良都由能安可受能未安比見流毛乃乎月乎之麻多牟

安乎奈美爾蘇弖佐閇奴禮弖許具布禰乃可之布流保刀爾左欲布氣奈武可

右大伴宿禰家持獨仰天漢作之

菅家萬葉集卷上

秋歌三十六首中

希丹來乎不飽別留織女者可立還波路無唐南（岐イ）

七夕佳期易別時　一乖再會此猶悲
千般怨殺鵲橋畔　誰識二星淚未晞

同上卷下

秋歌三十七首中

銀河秋之夜量與碍麻南流留月之景緒駐部久

銀河秋夜照無私　天岸流月影不跡
四時古花月影閑　可怜九重宮可憐

和漢朗詠集上

秋

七夕

憶得少年長乞巧　竹竿頭上願糸多

二星適逢未叙別緒依々之恨　五夜將明頻驚涼

彦星之川瀨渡左小舟乃得行而將泊河津石所念
天地對別之時從久方乃天驗常弖大王天之河原爾璞月累而妹爾相時候跡立待爾吾衣手爾秋風之吹反者立坐多土伎乎不知村肝心不欲解衣思亂而何時跡吾待今夜此川行長有得鴨

反歌

妹爾相時片待跡久方乃天之漢原爾月叙經來

又卷第十五 當所誦詠古歌

七夕歌一首

於保夫禰爾麻可治之自奴伎于奈波良乎許藝弖天和多流月人乎登祜

古挽歌

七夕仰二觀天漢一各陳二所思一作歌三首

安伎波疑爾二保敝流和我母奴禮奴等母伎美我美布禰能都奈之等理弖婆

右一首大使

等之爾安里弖比等欲伊母爾安布比故保思母和禮爾麻佐里弖於毛布良米也母
由布豆久欲可氣多知與里安比安麻能我波許具布奈妣等乎見流我等母之佐

又卷第十七

天平十年七月七日之夜獨仰二天漢一聊述レ懷一首

多奈波多之船乘須良之麻蘇鏡吉欲伎月夜爾雲起和多流

右一首大伴宿禰家持

又卷第十八

七夕歌一首并短歌

安麻泥良須可未能御代欲里夜洲能河波奈加爾敝太弖弖牟可比太知蘇泥布利可波之伊吉能乎爾奈氣加須古良和多理母理布禰毛麻宇氣受波之太爾母和多之弖安良波曾能倍由母伊由伎和多良之多豆佐波利宇奈我既利爲弖於母保之吉許登母加多良比那具左牟流許己呂波安良牟乎奈爾之可毛安吉爾之安良禰波許等騰比能等毛之伎古良宇都世美能代人和禮母許己宇之母安夜爾久須之彌往更年能波其登爾安麻能波良布里左氣見都追伊比都藝爾須禮

反歌二首

安麻能我波波志和多世良波曾能倍由母伊和多良佐牟乎安吉爾安良受得物
夜須能河波許牟可比太知弖等之能古非氣奈我伎古良

天河浪者立友吾舟者率榜出夜之不深間爾
直今夜相有兒等爾事問母未爲而左夜曾明二來
天河白浪高吾戀公之舟出者今爲下
機蹋木持往而天河打橋度公之來爲
天漢霧立上棚幡乃雲衣能飄袖鴨
古織義之八多乎此暮衣縫而君待吾乎
足玉母手珠毛由良爾織旗乎公之御衣爾縫將堪可開
擇月日逢義之有者別乃惜有君者明日副裳欲得
天漢度瀨深彌泛船而棹來君之檝之音所聞
天原振放見者天漢霧立度公者來良志
天漢瀨每幣奉情者君乎幸來座跡
久方之天河津爾舟泛而君待夜等者不明毛有寐鹿
天河足沾度君之手毛未枕者夜之深不良之
渡守船度世乎跡呼音之不至者疑梶之聲不爲
眞氣長河向立有之袖今夜卷跡念之吉沙
天漢湍每思乍來之雲知師逢有久念者
人左倍也見不繼將有牽牛之嬬喚舟之近附往乎
一云見乍有良武
天漢瀨乎早鴨烏珠之夜者闌爾乍不合牽牛
渡守舟早渡世一年爾二遍往來君爾有勿久爾
玉葛不絶物可良佐宿者年之度爾直一夜耳
戀日者氣長物乎今夜谷令乏應哉可相物乎
織女之今夜相奈婆如常明日乎阻而年者將長
天漢棚橋渡織女之伊渡左牟爾棚橋渡
天漢河門八十有何爾可君之三船乎吾待將居
秋風乃吹西日從天漢瀨爾出立待登告許曾
天漢去年之渡湍有二家里君將來道乃不知久
天漢湍瀨爾白浪雖高直渡來沼待者苦三
牽牛之嬬喚舟之引綱乃將絶跡君乎吾念勿國
渡守舟出爲將出今夜耳相見而後者不相物可毛
吾隱有檝棹無而渡守舟將借八方須臾者有待
乾坤之初時從天漢射向居而一年丹兩遍不遣妻戀爾物念人天漢安乃川原乃有通出二乃渡丹具（略解云出二は歲の誤具は曾の誤と隨ふべし）穗船乃艫丹裳舳丹裳船裝眞梶繁拔旗荒（同上云荒は荻の誤）本葉裳具世（同上云具は曾の誤にてそよとよませたり）丹秋風乃吹來夕丹天川白波凌落沸速湍渉稚草乃妻手枕迹大船乃思憑摎來等六其夫乃子我荒珠乃年緒長思來之戀時盡七月七日之夕者吾毛悲鳥

反歌

狛錦紐解易之天人乃妻問夕叙吾裳將偲

左尼始而何太毛不在者白栲帶可乞哉戀毛不過者
萬世携手居而相見鞆念可過戀奈有莫國
萬世可照月毛雲隱苦物叙將相登雖念
白雲五百遍隱雖遠夜不去將見妹當者
爲我登織女之其屋戸爾織白布織弖兼鴨
君不相久時織服白栲衣垢附麻弖爾
天漢梶音聞孫星與織女今夕相霜
秋去者河霧天川河向居而戀夜多
吉哉雖不直奴延鳥浦嘆居告子鴨
一年爾七夕耳相人之戀毛不過者夜深往久毛
一云不盡者佐宵曾明爾來
天漢安川原定而神競者磨待無
此一首庚辰年作之
右柿本朝臣人麿歌集出
棚機之五百機立而織布之秋去衣孰取見
年有而今香將卷烏玉之夜霧隱遠妻手乎
吾待之秋者來沼妹與吾何事在曾紐不解在牟
年之戀今夜盡而明日從者如常哉吾戀居牟
不合者氣長物乎天漢隔又哉吾戀將居
戀家口氣長物乎可合有夕谷君之不來益有良武

牽牛與織女今夜相天漢門爾波立勿謹
秋風吹漂蕩白雲者織女之天津領布毳
數裳相不見君矣天漢舟出速爲夜不深間
秋風之清夕天漢舟榜渡月人壯子
天漢霧立渡牽牛之楫音所聞夜深往
君舟今榜來良之天漢霧立渡此川瀨
秋風爾河浪起暫八十舟津三舟停
天漢川聲清之牽牛之秋榜船之浪躁香
天漢川門立吾戀之君來奈里紐解待
一云天川河向立
天漢川門座而年月戀來君今夜會可母
明日從者吾玉床乎打拂公常不宿孤可母寐
天原往射跡白檀挽而隱在月人壯子
此夕零來雨者男星之早榜船之賀伊乃散鴨
天漢八十瀨霧合男星之時待船今榜良之
風吹而河浪起引船丹度裳來夜不降間爾
天河遠度者無友公之舟出者年爾社侯
天河打橋度妹之家道不止通時不待友
月累吾思妹會夜者今之七夕續巨勢奴鴨
年丹裝吾舟榜天河風者吹友浪立勿忌

彦星頭刺玉之嬬戀亂祁良志此河瀨爾

七夕歌一首井短歌

久堅乃天漢爾上瀨爾珠橋渡之下湍爾船浮居雨零而風不吹登毛風吹而雨不落等物裳不令濕不息來益當玉橋渡須

反歌

天漢霧立渡且今日且今日吾待君之船出爲等霜

右件歌或云中衞大將藤原北卿宅作也

又卷第十秋雜歌

七夕

天漢水左閉而照舟竟舟人妹等所見寸哉

久方之天漢原丹奴延鳥之裏歎座津乙諸手丹

吾戀嬬者知遠往船乃過而應來哉事毛告火

朱羅引色妙子數見者人妻故吾可戀奴

天漢安渡丹船浮而秋立待等妹告與具

從蒼天往來吾等須良汝故天漢道名積而叙來

八千戈神自御世乏孋人知爾來告思者

吾等戀丹穗面今夕母可天漢原石枕卷

己孋乏子等者竟津荒磯卷而寐君待難

天地等別之時從自孋然叙手而在金待吾者

彦星嘆須孋事谷毛告爾叙來鶴見者苦彌

久方天印等水無河隔而置之神世之恨

黑玉宵霧隱遠鞆妹傳速告乞

汝戀妹命者飽足爾袖振所見都及雲隱

夕星毛往來天道及何時鹿仰而將待月人壯

天漢己向立而戀等爾事谷將告孋言及者

水良玉五百都集乎解毛不見吾者干可太奴相日待爾

略解に千可太奴をほうかたぬとよみて上に泪ともいはて十といへるはいかゝ干は在の誤にてありかたぬかといへり

天漢水陰草金風靡見者時來之

吾等待之白芽子開奴今谷毛爾寶比爾往奈越方人爾

吾世子爾裏戀居者天河夜船榜動梶音所聞

眞氣長戀心自白風妹音所聽紐解往名

戀敷者氣長物乎今谷乏牟可哉可相夜谷

天漢去歲渡代遷閉者河瀨於踏夜深去來

自古擧而之服不顧天河津爾年序經去來

天漢夜船榜而雖明將相等念夜袖易受將有

遙媄等手枕易寢夜雞音莫動明者雖明

相見久厭雖不足稻目明去來理舟出爲牟孋

古今要覽稿卷第六十六

●時令部　七夕

●和歌一

萬葉集卷第八（秋雜歌）

山上臣憶良七夕歌十二首

天漢相向立而吾戀之君來益奈利紐解設奈

一云向河

右養老八年七月七日應令

久方之漢瀨爾船泛而今夜可君之我許來益武

右神龜元年七月七日夜左大臣家

牽牛者織女等天地之別時由伊奈宇（略解云宇ハ牟ノ誤）之呂河向立意空不安久爾嘆空不安久爾青浪爾望者多要奴白雲爾涕者盡奴如是耳也伊伎都枳乎良牟如是耳也戀都追安良牟佐丹塗之小船毛賀茂玉纏之眞可伊毛我母（一云小棹）毛何朝奈藝爾伊可伎渡夕鹽爾（一云夕倍爾毛）伊許藝渡久方之天河原爾天飛也領巾可多思吉眞玉手乃玉手指更餘宿毛寐而師可聞（一云伊毛左禰而師加）秋爾良安受登母（一云秋不待登毛）

反歌

風雲者二岸爾可欲倍杼母吾遠嬬之（一云波之嬬乃）事曾不通

多夫手二毛投越都倍伎天漢敵太而禮婆可母安麻多須辨奈吉

右天平元年七月七日夜憶良仰觀天河（一云帥家）

秋風之吹爾之日從何時可登吾待戀之君曾來座流

天漢伊刀河浪者多々禰杼母伺候難之近此瀨乎

袖振者見毛可波之都倍久雖近渡爲便無秋西安良禰波

玉蜻蜓髣髴所見而別去者毛等余也戀牟祠時麻而波

右天平二年七月八日夜帥家集會

牽牛之迎嬬船己藝出良之漢原爾霧之立波

霞立天河原爾待君登伊往還程爾裳襴所沾

天河浮津之浪音佐和久奈里吾待君思舟出爲良之母

湯原王七夕歌二首

牽牛之念座良武從情見吾辛苦夜之更降去者

織女之袖續三更之五更者河瀨之鶴者不鳴友吉

市原王七夕歌一首

妹許登吾去道乃河有者附目緘結跡夜更降家類

又卷第九（雜歌）

泉河邊間人宿禰作歌

獨不レ然手𥜿足礙周容以爲レ度詭隨以爲レ遷鳶肩以立羔膝以前低顯出跨嬌笑承拳破レ怒而嬉レ枘鑿相便臣羞見レ之執方愈堅柔和熱軟滑稽宛轉突梯炙膏截善諞移易是非眥洿者蹇簧口電舌聽者舞抃臣欲レ歿レ之喉若レ有レ鏤人之巧レ官鑽レ隙尋レ岐頻𦗲銀女時更色衣意匠所發隨觸二其機一右官左調我獨差池時行兮遺娟皎志兮逢レ疑法吏蘖事以牀二是非一翻レ手升降我執弗依甘即曲罰以爲二世嗤一彼實盜躑邇名レ之爲二隨夷一凡此拙疾更僕不レ了竊聞天孫司天之巧幸逢レ歡且仰瞻皎々乞與餘恩實臣蒙之再造也辭訖收聲屛息俯伏以聽命寥廓中若レ有レ所レ令曰朂哉某我巧不レ可レ加於汝亦猶汝拙不レ可レ加二諸人一也相二汝下民一淫巧滋新至德有レ世塡々瞋々道術相忘野鹿摽薪煩告瀆訓巧二於說言一非下以二泄民之天一者上邪刑羅憲綱巧二於法術一非下以二賊民之質一者上邪雕龍騁馬巧二於譚辨一非下以二離民之歎一者上邪揺仁提義巧二於文章一非下眩民以二多方一者上邪瑰譏魍貪巧二於機械一非下淪二胥民一以敗者上邪是以知詐漸妄レ民極挑レ巧盱盱以爲レ誕瑣瑣以爲レ狡相譸相張相敚相矯世巧靡レ究帝心是懆我之所レ有豈自秘寶獲二罪於帝一無レ所二事禱一朂哉某保爾之拙庶近六道楊子聞靈音覘而懼少焉怡而悟於レ是再拜稽首低承靈命退而引酒以自歌曰彼木者擠不少而自如兮彼獸者狙時レ巧而卒自屠子巧者自巧吾不レ知二其巧一愚者自愚吾不レ知二其愚一兮遊二無爲一兮爲レ遮休二無用一兮爲レ居吾不レ知抱朴翁之從還二眞子之徒一兮

賦彙錄要卷之三

秀水吳光昭箋略　門人陳書同輯

周處風土紀七月七日其夜灑二掃於庭一露二施几一筵設二酒脯時果一散二沓粉於筵上一祈二請於河鼓織女一乞レ富乞レ壽無レ子乞レ子唯得レ乞二一不得兼求三年乃得言之頗有下受二其祚一者上

(此卷雖多誤脫暫從於原本也)

三雲殿一謝朓七夕賦淸弦愴兮桂觴酬雲幄靜兮香氣浮

搖星

庾信賦控二玉勒一而搖レ星跨二金鞍一而動レ月

乞巧賦　宋梅堯臣

孟秋七日夕戸未レ扃余歸レ自レ外見家人之在レ庭列時花與二美杲祈織女一而丁寧乞二天巧之付與一惡二心手之鈍冥一余既寢而弗レ顧又鳥辨二乎列星一兒女前曰故事所レ傳餘千百齡何獨守レ拙迷猶未レ醒遂起坐而歎曰吾試語レ女口其各聽夫芒忽之間變而有レ氣氣而有レ形形而有レ生生而有レ靈愚々慧々自然之經賦既定矣今返妄營則何異高山之木兮不レ能レ守二枝葉之亭一亭欲レ戕而爲二犧象一兮利レ塗飾二乎丹靑一且復天巧與二人巧一將不レ同也天孫又安得レ此而輒私二天之巧一者總二陰陽一運二四時一懸二日月星辰一而不レ忒二其璇璣一鼓二雷風雨雪一而不レ失二其施一生二萬物一死二萬物一而物得二其宜一此天之所三以仕二大巧一而不レ虧二人之巧一者非二他直心口手足一也心巧二於慮一口巧二於辭一手巧二於技一足巧二於馳一亦各有レ極不レ可二強爲一故慮之巧不レ過レ多智謀使レ爾多謀多智則精鶩而魄離辭之巧不レ過レ多辨言使レ爾多言多辨則鮮レ仁而行遺技之巧不レ過二多能藝一使レ爾多能多藝則藝成而跡卑馳之巧不レ過レ多二履歷一使レ爾多履多歷則速老而筋疲如レ是則吾馬用而乞レ之吾學二聖人之仁義一尚恐沒而無レ知昔乞二世間之輕巧一以汨二吾道一而奪二吾之所レ持吾殃守レ此而已矣爾勿二吾疑一

元楊維楨

楊子振二衣內寢一蹀二足外庭一龍大迫レ氾織阿弦晶天高無レ雲仰見二明星倬彼雲漢一復道其帛二兩宿一東西脈々相望已而童子有下請二於前一者上曰今夕七夕天女停レ織帝命二嬪於河西一而河鼓是匹神官役二烏塡一者蓬翼兩旗既褰七襄攸レ輒是以人間之世穹レ樓開レ張雜組經緯瓜果招レ靈蛛絲格レ瑞可レ壽可レ嗣可レ當可レ貴心開目明手便足利凡有レ所レ求靡レ不レ如レ意先生以レ拙累レ官曷不二隨而祠一レ之乎楊子聞言將信將疑爰命二童子一與峻几薦潔危列二瓜果一揷二竹綏一仰叩二靈匹一俯邇二凡辭一再拜稽首稱レ臣而誓告二於天之孫一曰切念微臣某實病二至拙一靈已莫レ鍼神機莫レ扶冥心頑戸倥蒙偏骯謇言耆行䜌类䝁䟪他人有心百慧橫生擧レ一反レ三椎縱逹衡算無二遺策一籌無レ不レ成臣獨不レ然闒レ聽塞レ明利在而趨害萠而背レ百鼠兩端觀望進退動輒得レ宜步無二狼狽一臣

遂蹀足周除瞬目層穹矚靈漢之好仇經四氣而相
從抽彩縷弄玄鍼映柔陣之驪禽引纖指而幽尋
怨輕絲之多亂傷弦月之易零歸間房而含態襲
長夜之悄々復有中朝逐臣江皋怨士消春日兮水離
帳秋風兮乍起望皎々之空裏排雲旗而旖施乃睇傾
河邀靈駕驪鳥鵲之既梁羌超搖而先迁顧戀遑以屈體
甘柔嬺而善化替博謇之常度皆時俗之罟僞於是玉
避席獻欷襄玉帕乎若天惝乎若有遺也玉復稱曰爾
其歡讌未申晨暉欲潋新知不故生別何寠惆夕漏之
不永撫曉㵳而斷魂怨今歡之易沒數來愛之難原
復歌曰凌天津兮心憂纖御忽兮不可留歘雙情兮何
期衷四候之悠々悼往歡而來愁兮永還路而自惆於
是明星耀輝若華赧傲漢汒惝慌河梁淼渺㖸靈會
其何在睠天庭而逾香

歷代賦彙外集逸句

周　庚　信

兎月先上羊燈次安覩牛星之曜景視織女之闌干於
是秦娥麗妾趙豔佳人窈窕名燕逶迤姓秦嫌朝妝之
半故憐晩飾之全新此時併舍房櫳共往庭中縷
條緊而貫矩鍼鼻細而穿空

賦彙錄要卷之三

秀水吴光昭箋略　門人陳書同輯

荆楚歳時記七月七日牽牛織女會天河人家婦女
結綵縷穿七孔針或以金銀鍮石爲鍼陳瓜果
於庭中以乞巧有喜子網於瓜上則以爲得

吹筠

庾信文平陽擊石山谷爲之調大禹吹筠風雨爲
之動

龍杼

張文蕭七夕詩鳳律驚秋夜龍梭靜夜機

淺瀨

儲凡義侍淺瀨寒魚少䕺蘭秋蝶多

雲花

三融樂府香風流梵琯澤雨散雲花徐凌銘梵偈
宵唱雲花盡翻

玉女

法苑珠林諸天玉女持萬金瓶盛甘露住虛空中騎
寶玉與羣臣宴序三女司秋金鳥反照

雲幄

西京雜記成帝設雲帳雲幄雲幙於甘泉殿世謂之

凱二而高視應與二梁楚一而騈レ聲

唐　闕　名

若夫銅儀改レ候金氣迎レ辰驚二飛灰於素管一送二流水於清旻一聽二涼風之嘆響一視二秋露之凝津一月蒼々而上レ桂風蕭々而吹レ銜步二廣庭一而延佇仰二層漢一而馳レ神惟暮序之靈匹仰二良宵一而展會息二龍杼於仙機一駕二羽橋於淺瀨一耀二九微之華彩一澄二八極之氛靄一儼二翠鳳一以翔鑣擧丹現二而振弼一籠二霧轂於雕輦一疊二雲花於綺蓋一舟容二裔於水濱一駕透二迤於煙外一若乃仙娥侍レ轂玉女承レ騑口簫後唱洛鼓前揮裴二九宵之雲幄一曳二五色之霞衣一珮搖レ星而玉振扇掩レ月而紈飛陵二紫宮一而沉レ景轥二黃道一而騰レ暉始徘徊而好二密契一方阻而情達悵此夕之行盡恨二前秋之未レ歸怯二霄光之不レ駐泣二晨露之將レ晞於レ是虯水移レ箭魚關驚レ鑰槎客河低鍼樓月落兮一筵二於俄頃一解二雙袂於今昨一河漢忽其無レ梁秋期杳其無レ度街二別緒一而惆悵對二離居之寂寞一思二纏綿於曉雞一情顧二眄於歸鵲一浩長歌二於耿介一予二孤影一其焉託歌曰悲莫レ悲兮離別長怨莫レ怨兮私自傷歛二橫波一而向秋野垂二玉筯一兮沾二羅裳一歌響既畢恍然如レ矢獨盈々兮一水間空望々兮三秋日

明　陳　山　毓

楚襄王與二宋玉一遊二雲夢之浦一舍層臺府深坻二略江潯一涉二漢湄一浮二三相之浩淼一溯二七澤之潾漪一蒹葭蒼々以拂レ珮白露塗々而漸秪於レ時炎精弛レ故金帝乘レ新臨二朏月一迫二蕭辰一商風權輿涼雲烟熅白門蓮肅元穹就レ旻爾乃東沼芷熑西冥扶魄霄兎翔而一足幽娥揚而半額徵光乘凡繁象夜天浮二清質之澹淡一散二澄揮之嬋娟一玉漿氷凝綺筵霜潔輕袿搖二米微一波揚二冽鏡一涼輝兮長河明天孫嬪兮施二蘭旌一時則唐勒景差便娟徐來王乃揄毫選牘爰命二宋玉一宋玉於レ是稱曰爾其長嬴送レ夏白藏迎レ秋熛燿停レ駿涼飅褰レ幬於レ是天媛嬖屑駕言子歸殿織々之素牛靜二机々之輕機一結霓裳曳雲裲被二白玉一翳二玄芝一指二霧轂一弭二霞輜一竚二晼晚之落景一睇二沉寥之升規一於レ是橋成漢曲駕肅河陰倭遲星道紆餘煙潯越二修渚一而釋レ轡集二長幕一而褫レ袊遡二滂淹一以遙矯究二徂曠之遐心一爾乃跨二此沚一兮佇二南陽一舒二赬顏一兮遲二清揚一展二朱唇一揚二青蛾一履二會筵一叙二離歌一歌曰竚二涼年一兮從二奔軺一並雲幄兮亂清霄籥珮解兮抽二無聊一獨嬋媛兮今夕時既道兮不レ可レ朝於レ是離宮麗妾別館佳人靚レ妝晚罷妖レ飾夕新哀二湛々之玄露一驚二肅々之猋風一

樓翦鳧洲於細柳披鶴籞於長楸啓魚鈴而分帝術
授虹壁而控神州擁黃山於石磴洩玄灞於銅溝
列瑤䆗而送燠闢銀牓而迎秋君王乃排青幌搖
朱鳥戒鸞輿靜鸞掖繞震廊而轉步儀雲阡而縱
跡嘯陳容於金牀命淮仙於桂席翔翠旱於雲旬
迎簫吹於鳳驛佇靈匹於星期春神姿於月夕於
時王繩甚色金漢斜光煙凄碧樹露濕銀塘視蓮潭之變
彩睨松院之生涼引驚蟬於寶瑟宿蘭燕於瑤篚
絲臺兮千仭豹樓兮百常拂花筵而慘惻披葉序而徜徉
結遙情於漢陌飛永睇於霞莊想佳人兮如在怨靈
歡兮不揚促遙悲於四運詠遺歌於七襄於是蚪箭
晥靜魚扃夜飾忌帝子之光華下君王之顏色握犀
管展魚牋顧執事招仲宣仲宣跪而稱曰臣聞九
變無津三靈有作布元氣於浩蕩運太虛於寥廓辨
河鼓於西壖下天孫於東㙮循五緯而清黃道
正三衡而澄紫落海人支石之機江女穿鍼之閣鄙
塵情於春念擬仙契於秋諸於是光清地邑氣斂天
摽霜凝碧宙水螢丹宵躍麟軒於霧術褰羽旆於星
橋徵赤螭而架渚漾青翰而乘潮停翠梭兮卷霜
縠引鴛杼兮制冰綃舉黃花而乘月豔籠黛

葉而卷雲嬌撫今情之恨促指來緒而傷遙既而丹
霄萬拱紫芳千篇仙御逶遲靈從攙弱風驚雨驟煙
廻電樂媧皇石巨野之龍莊叟命雕陵之鵲駐麟駕
披鸞幕奏雲和汎霞酌碧瓶玉室之饌白兎銀臺之
藥荷葉顏鮫芙蓉青雀上元錦書傳寶字王母瓊箱薦金
約綵襟魚頭比目縫香繊燕尾同心縛羅帳五花懸珉
砌百枝然下芸幬而曬枕弛蘭服而交筵託新歡
而密勿懷往眷而潺湲於是羈鸞功鏡旅鶴驚弦悲
侵王履念起金鈿儼歸裝而容曳整還蓋而遷延洞庭波
兮秋水急關山晦兮夕霧連謂河漢之無浪似參商之永
年君王乃背彤砌涉玄室沖想自閑神情如逸痛
靈妃之稀偶喜沉思之可畢荊豔齊升燕佳並出金聲
玉韻蕙心蘭質珠櫳綺檻北風臺繡戶雕窗南向開響曳
紅雲歌面近香隨白雪舞腰來掩清琴而獨進凌絳樹
而輕廻盧女黃金之盌張家碧玉之杯奉君王於終夕夫何
怨於良媒俄而月還西漢霞臨東沼鳧氏鳴秋雞人
倡曉王闕控鶴瓊林飛鳥君王廼馭風殿而長懷俯
雲臺而自矯矜雅範而霜厲穆沖衿而煙渺迎十
客召三英香酒薦酎吹簫蘭旌娃館疎兮綠草積歡房
寂兮紫苔生聳詞鋒於用殿披翰藪於雲扃方絕元

七夕口占

三秋靈匹此宵期萬古傳聞杲二是非一兒俗未レ能還自笑金針乞二得巧絲一歸

七夕　金元好問

天街奕々素光移雲錦機間漏箭遲誰與乘レ槎問二銀漢一可レ無二風浪一借佳期

七夕舟中苦熱　元馬祖常

背憶銀牀桐泣露更思玉椀蔗流漿天孫初嫁龍綃薄却恐銀河人レ夜涼

七夕　元吳師道

木槿籬邊絡緯哀臥看河漢遠天迴西風不レ管扁舟客次下樓頭笑語來

七夕　明石瑤

七月七日風雨多御橋南望水增レ波鴛鴦日向沙頭宿不レ管牛郎信若何

七夕　明馮琦

天空露下夜如何漫近雙星已渡レ河見說人間方恤緯可レ知天上不レ停レ梭

歷代賦彙卷第十一

七夕賦　齊謝朓

金祇司矩火曜方流素鍾登御夷律鳴秋朱光既夕涼雲始浮盈多露之藹々升明月之悠々步廣階而延眛屬天媛之淹留嗟斯靈之淑景招好仇於服箱邁嫦娥而擢質凌瑤華而檀芳厭白玉以爲飾霏丹霞而爲裳翹龍駕之容裔亂鳳笙之凄鏘騰燭光於西極命二妃於瀟湘軾帝車而指玦凌天津而上翔帳漢渚之夕漲忻河廣之既梁臨瑤席而宴語綿含睇而蛾楊嗟蘭夜之難永泣會促而怨長忘織阿之方駕客長庚之未光撫鳴琴而脩悅浩安歌而自傷曰淸絃愴兮桂觴酬雲幄靜兮香風浮龍鑣蹀兮玉鑾整睠二星河一兮不可留兮雙袂之一斷何四氣之可周斯乃嚮像恍惚彷彿幽曖耳之無聞目之無續故鍾皷聞而延三隱白日沉而李後對豈形氣之所求亦理將其如來君王壯思風飛沖情雲上顧楚詩而縱轡瞻蘭書而競夾實併精之多暇聊餘日之駘蕩賦幽靈以去惑排視聽而玄住晒陽雲於荆夢賦洛篇於陳想乃澄心而閑邪庶綢繆於茲賞

唐王勃

若夫乾靈鵲識之端地輔龍參之始憑二紫都一而授曆按二玄丘一而命レ紀鳳毛鍾二桂闕之祥一麟角燦二椒庭之祉一馳二朱軒於九域一振二黃麾於萬里一抗レ芝館而星羅擢二蘭宮一而霞起則有星慈霧洽二聖渥一天浮庭分王禁邸瞰金

間轉盻盻深更涼河只向尊前落徵月偏來酒面明後夜玉琴彈二別鶴一獨應乾鵲夢魂驚

次韻端臣姪七夕　宋范　浚

萬古東西隔二女牛一停レ梭期會豈悠々蝦蟇輪破青天暮烏鵲橋横碧漢秋莫放癡兎歡徹レ曙且レ容老子强登樓擧レ瓢更取天漿酌一洗胷中萬斛愁

七夕感興　宋戴　禹

家家懽笑迓二星期一我輩相邀只酒巵矯俗何須標二犢鼻一甘愚不レ解候二蛛絲一新秋光彩月來處半夜清涼風起時一曲玉簫塵外意此音除是鶴仙知

五言絶句

閏月七夕織女　唐王　灣

耿耿曙河微神仙此夜稀今年七月閏應レ得兩廻歸

七夕　元張　昱

乞與人間巧全憑此夜秋如何針線月容易下二西樓一

七言絶句

七夕　唐權　德　輿

今日雲駢渡二鵲橋一應レ非脈脈與二迢々一家人競喜開二粧鏡月穿針拜二九霄一

乞巧　唐林　傑

七夕今宵看二碧霄一牽牛織女度二河橋一家家乞巧望二秋月一穿盡紅絲幾萬條

七夕　唐竇　常

露盤花水望二三星一髣髴虚無爲二降靈一斜漢沒時人不レ寐條蛛網下二風庭一

秋夕　唐杜　牧

銀燭秋光冷畫屏輕羅小扇撲二流螢一天階二夜色一涼如レ水臥看牽牛織女星

七夕　唐李　商　隱

鸞扇斜分鳳幄開星橋横過鵲飛廻爭將二世上無一期別換得年年一度來

秋登二涔陽城一　唐李　群　玉

穿針樓上閉二秋煙一織女佳期又隔年斜漢夜深吹不レ落一條銀浪桂秋天

秋日田園雜興　宋范　成　大

朱門乞巧沸レ歡聲田舍黄昏靜掩レ扃男解レ牽レ牛女能織不レ須邀レ福渡レ河星

七夕　宋朱　淑　眞

金井西風梧葉稀穿針樓上月光微天孫也赴今宵約不レ賜人間巧樣機

七夕　唐李賀

別浦今朝揞羅帷午夜愁鵲辭穿レ線月花入曝夜樓天上分二金鏡一人間望王鈎錢塘蘇小々更值一年秋

七夕偶題　唐李商隱

寶婺搖二珠珮一嫦娥照二玉輪一靈歸二天上匹一巧遺二世間人一花梟香千戶笙竽溢一四隣一明朝曬二犢鼻一方信阮郎貧

壬申七夕

巳駕七香車心待二曉霞一風輕唯響珮日薄不レ嫣花桂嫩傳レ香遠揄高送レ影斜成都過二卜肆一曾妬識二靈搓一

七夕（此詩出于前卷或執有誤乎。）　唐傅若金

耿耿王京夜遙々銀漢流影斜烏鵲樹光隱鳳皇樓雲錦虛張月星房冷閉レ秋遙憐天帝子辛若會二牽牛一

七言律

辛未七夕　唐李高隱

恐是仙家好二別離一故敎迢遞作二佳期一申來碧落銀河畔可要金風王露時清漏漸移相望久微雲未レ接過來遲豈能無レ意レ酬二烏鵲一唯與二蜘蛛一乞巧絲

七夕　唐溫庭筠

鵲歸鸞去兩悠々青瑣西南月似レ鈎天上歲時星右轉世間離別水東流金風入レ樹千門夜銀漢橫レ空萬象秋蘇小橫レ塘通二桂檝一未レ應清淺隔二牽牛一

池塘七夕

月出西南露氣秋綺寮河漢在二鍼樓一楊家繡作鴛鴦幔張氏金爲二翡翠鈎一銀燭有レ光妨宿燕畫屏無レ睡侍二牽牛一萬家砧杵三篙水一夕橫塘是舊遊

七夕　唐劉威

烏鵲橋成上界通千年靈會此霄同雲收喜氣星橋滿兩拂香塵月殿レ空翠輦不レ行青草路金鑾徒騁白楡風綠盤花閣無レ窮意只在遊絲一縷中

七夕　唐羅隱

絡角星河菡萏天一家懽笑設二紅筵一應レ傾謝二女珠璣篋一畫寫檀郎錦繡篇香帳簇二成排窈窕一金針穿罷拜二嬋娟一銅壺漏報天將レ曉惆帳佳期又一年

奉レ和七夕應令　宋韓琦

今宵星漢共二晶光一應笑羅敷嫁二侍郎一斗柄易レ傾離恨促河流不レ盡後期長靜聞天籟疑鳴珮醉折二荷花一想艷粧誰見宜猷堂上宴一篇清韻振二金鐺一

七夕　宋陳造

龍桂鳳扇一相迎知費靑禽幾奇レ聲天上經年終舊約人

塡石流蘇翠帳星渚間環珮無レ聲燈寂々兩情纏綿忽如レ故復畏秋風生二曉路一幸廻郎意且斯須一年中別今始初明星未レ出少停レ車

七夕　唐　溫　庭　筠

鳴レ機札札停二金梭一芙蓉澹蕩生二池波一神軒紅粉陳二香羅一鳳低蟬薄愁二雙蛾一微光奕々凌二天河一鸞咽鶴唳飄颻歌彎橋銷盡愁奈何天氣駘蕩雲取レ淹平明花木有二愁意一露濕綵盤蛛網多

七夕　明　盧　柟

銀閣含秋星欲レ爛天孫脈□度二河漢一仙環玉珮那可レ聞佳人夜半開レ簾看階前月色疑有レ霜獨坐穿レ針向二畫廊一東方日出烏鵲曉天上人間柱斷腸

五言律

七夕泛レ舟　唐　盧　照　鄰

風杼秋期至鳧舟野望開微吟翠塘側近レ想白雲隈石似友機罷槎疑二犯宿來一天河殊漫々日暮獨悠哉

七夕　唐　杜　審　言

白露含二明月一青霞斷二絳河一天街七襄轉閣道二神過袨服鏘二環珮一香筵拂二綺羅一年年今夜盡機杼別情多

奉レ和七夕宴兩儀殿應制　唐　李　嶠

靈匹三三秋會仙期七夕過槎來入レ泛レ海橋渡鵲塡レ河帝縷升二銀閣一天機罷二天梭一誰言七襄詠重入五絃歌

奉レ和七夕宴兩儀殿應制　唐　蘇　頲

靈媛垂二秋發一仙裝警夜催月光窺レ欲レ渡河色辨應來機石天文寫針樓御賞開窺觀樓鳥至疑向鵲橋廻

牛女

彩席秋期緩針樓別緒多奔龍爭渡レ月飛鵲巧塡河朱喜先臨レ鏡含レ羞未レ鮮レ羅誰能留二夜色一來夕倍レ還梭

七夕　唐　楊　衡

漢浦常多レ別星橋忽重遊向雲迎二翠輦一當月拜二珠旒一寢愧凝二霄態一粧奩開二曉愁一不レ堪鳴レ杼日空對白榆秋

七夕　唐　祖　詠

閨女求二天女一更闌意未レ闌玉庭開レ粉序羅袖捧二金盤一向レ月穿レ釘易臨レ風整レ線難不レ知誰得レ巧明且試相看

七夕　唐　劉　禹　錫

河鼓靈旗動姮娥被二鏡斜一滿空天是幕徐轉レ斗爲レ車機罷猶女石橋成不レ礙槎寧知觀二津女一竟夕望二雲涯一

其二

天衢啓雲帳仙馭上二星橋一初喜渡二河漢一頻驚轉二斗狗一餘霞張二錦幛一輕電閃二紅綃一非二是人間世一還憐後會遙

七夕穿針

憐從帳裏出想見夜窗開針歌疑月暗縷散怪風來

織女贈ニ牽牛一　梁　沈　約

紅粧與ニ明鏡一二物本相親用持施ニ點畫一不レ照離居人任秋雖ニ一照一一照復還塵々生不ニ復拂一遲首對ニ河津一冬庭寒如レ此寧遽道陽春初商忽云レ至暫得奉衣巾施衿已成レ故每聚忽如レ新

望織女　梁　范　雲

盈盈一水邊夜夜空自憐不レ辭精衞苦河流未レ可レ塡寸情百重結一心萬處懸願作ニ雙靑鳥一共舒明鏡前

奉使江州舟中七夕　梁　庾　肩　吾

九江逢ニ七夕一初弦値ニ早秋一天河來映レ水織女欲レ攀レ舟漢使俱爲レ客星槎共逐レ流莫レ言相送レ浦不レ及穿ニ針樓一

七夕

三匣卷懸レ衣針樓開ニ夜扉一姮娥隨ニ月落一織女逐レ星移離前忩促夜別後對ニ空機一倩語彫陵レ鵲塡レ河未ニ可飛一

詠ニ織女一　梁　劉　孝　威

今鈿已照耀白日未ニ蹉跎一欲レ待黃昏至含レ嬌渡ニ淺河一

七夕　陳　江　總

漢曲天揄冷河邊月桂秋婉孌期ニ今夕一飄颻渡ニ淺流一輪隨ニ列宿動一路逐ニ彩雲浮一橫波翻瀉淚束素反ニ緘愁一此時機杼息獨向紅粧羞

賦ニ昆明池一物得ニ織女石一　隋　虞　茂

隔ニ河圖一列宿淸漢象ニ昭回一支機就ニ鯨口一拂レ鏡取ニ池灰一船疑海槎渡珠似客星來所レ恨雙蛾斂逢レ秋遂不レ開

七夕　隋　王　眘

終年恒弄レ杼今夕始停レ梭却鏡看ニ斜月一移車渡ニ淺河一長裙動星珮輕帳揜雲羅舊愁雖ニ暫止一新愁還復多

七夕看ニ新婦隔レ巷停一レ車　隋　陳　子　良

隔巷遙停レ幰非ニ復爲來遲一只言更尙淺未ニ是渡レ河時一

七夕　唐　張　文　恭

鳳律驚ニ秋氣一龍梭靜夜機星橋百枝動雲路七香飛映月回雕扇凌霞曳ニ綺衣一含情向ニ華幄一流態入ニ重幃一歡餘夕漏盡怨結曉驂歸誰念分ニ河漢一還憶兩心違

七言古

七夕曲　唐　王　建

河邊獨自看ニ星宿一夜織ニ天絲一難ニ接續一抛レ梭振躡動ニ明璫一爲下有秋期眠不上レ足遙從今夜河水隔龍駕車轅鵲

古今要覽稿卷第六十五

●時令部　七夕

●詩下

詩賦

佩文齋詠物詩選

五言古

七月七日詠ニ織女一　晉 蘇 彥

火流涼風至少昊恊素藏織女思北沚牽牛歎ニ南陽一時來嘉慶集整駕卬王箱瓊珮垂ニ藻蕤一霧裾結ニ雲裳一金翠耀華輜軿轅散ニ流芳一釋レ轡紫微庭解レ衿碧琳堂歡讌未レ及レ究晨暉照ニ扶桑一仙童唱ニ清道一盤螭起騰驤悵々一霄促遲々別日長

七月七日　晉 李 充

朗月垂素景洪漢截皓蒼牽牛難レ牽レ牛織女守ニ空箱一河廣尙可レ越怨此漢無レ梁

七夕　宋 孝 武 帝

闕庭鏡天路餘光不レ可レ臨沿風被ニ弱縷一迎輝貫ニ尢鍼一斯藝成無レ取時物聊可レ尋

七夕夜詠ニ牛女一應制　宋 謝 莊

輟レ機起ニ春暮一停箱動ニ秋衿一璇居照ニ漢右一芝駕肅ニ河陰一容裔泛ニ星道一逶迤濟煙潯陸離迎ニ霄佩一倏爍望ニ昏簪一俱傾環氣怨其歇泱年心珠殿釭未レ沬瑤庭露已深夕清豈淹拂弦輝無ニ久臨一

七夕詠ニ牛女一　宋 謝 靈 運

火逝首秋節新明弦月夕月弦光照レ戶秋首風入レ隙凌峰步曾崖憑雲肆遙賑徙倚西北庭竦踊東南覿紈綺無ニ報章一河漢有ニ駿軛一

七月七日夜詠ニ牛女一　謝 惠 連

落日隱ニ櫩楹一外月照ニ蘆攏一團々滿ニ葉露一析々振條風蹀足循ニ廣除一瞬自矖ニ曾穹一雲漢有ニ靈匹一彌年闕相從遐川阻暱愛脩渚曠濟容弄レ杼不レ成レ藻聳轡騖前蹤昔離秋已兩今聚夕無レ雙傾河易迴レ斡欵情難ニ久悰一沃若靈駕旋寂寥雲幄空留情顧ニ華寢一遙心逐ニ奔龍一沈吟爲レ爾感情深意彌重

七夕　梁 簡 文 帝

秋期此時浹長夜徙ニ河靈一紫煙凌鳳羽紅光隨ニ玉軿一洛陽疑劍氣成都怪ニ容星一天梭織來久方逢今夜停

大棘天高鴈影斜秋風零落兎園花他鄉七夕聊持ㇾ酒短髮頻年獨憶ㇾ家乘ㇾ月佩環飛欲ㇾ墮隔ㇾ河機杼望猶賒虛傳乞巧人間鴈拙官潘生老自嗟

七夕偏逢レ雨雙星莫レ渡レ河人間怨二機杼一天上阻二風波一對レ酒青楓落看レ雲白髮多乾坤俱逆旅何處獨悲歌

閏七夕

勿レ謂期難レ再相將秋巳深尋常河漢影奄忽女中心環佩響如レ昨機絲愁至レ今奈何兒女輩重欲レ效二穿鍼一

七月六日　袁宏道

瞥レ眼花成レ實驚レ心鳥作レ橋婆々巫覡笑齋沐老僧朝薄月踈二煙竹一回風怒二水條一餘生施二靜嶠一轉覺世途遙

賔鶯谷七夕露坐

山亭漠々冷二秋煙一只在二懸藤古石邊一眼裏何曾離二好竹一耳中恰似レ有二鳴泉一稍開二僻徑一通二斜月一坐看明河憶二去年一巴水正長天正濶綠楊門外有二酤船一

七夕偶成

天上一昏一旦人間甲子周年不レ分黃姑織女夜々烏鵲橋邊

其二

兒女紛々巧乞先生老矣何求不レ用丐靈鳥鵲唯宜二梱守班鳩一

七夕宴集和二陳大史一　王維楨

靈匹今宵會言尋二隔歲盟一同レ懽吾在レ此競レ巧句雙成

雲似二仙鬟裊一月疑二玉珮明一塡レ橋鵲共去、怪底樹無レ聲

陳子詩期二七夕宴集一忽雨渝盟廼依レ韻嘲レ之

仙筵卽共賞風雨却二寒盟一不レ及双星信河梁約竟成坐令二佳節邁一空對二客燈明一懽宴知誰第笙歌急二夜聲一

七月八日夜集二陳子舘一

仙媛方怨レ別仙子復尋レ盟天上鵲橋斷人間燕市成杯含二孤月白一河間二二星明一佳會知難レ數酬歌盡漏聲

湖南草堂七夕留レ客　汪道昆

梧桐秋色下二江村一客有二羊裘一過二蓽門一但得二物情一容二野老一肯將二人事一乞二天孫一雙星想像明河水五夜淹留濁酒尊休作二燕歌一悲二遠別一空令二游子坐銷レ魂

七夕行

天孫婀娜錦衣裳結レ好夫君河漢傍握レ手盟言夜未レ央有レ如逝水無二相忘一大道青樓多二女郎一紛紛薦糈羅二椒漿一願施二膏沐一傾二朝陽一聲價十倍邯鄲倡誰叩二天閽一愬二上皇一盤空霹靂侵二人牀一女郎辟易多彷徨河漢冥々不レ可レ望盧家少婦習二流黃一夫壻遠戍甘二糟糠一孤燭煌煌照二洞房一何用隣女分二餘光一

七夕　吳明卿

其二

鄰家乞巧候二天孫一日轉參橫不レ掩レ門拙癖病來逾自愛臥陪孤影度二黃昏一

其三

共レ君閒傍二小溪一行愛弟東莊看二犢耕一說與曼殊能許未レ雖レ游二族姓一不レ求レ名

其四

沈郎徵事近何如旗鼓蕭翁尙有レ餘嗜爾相看無二一句一可三能消二盡腹中書一

七夕篇　林　應　亮

白露零二階除一長空耿二秋色一蟾蜍照レ影月中寒烏鵲塡レ橋雲外直鵲橋絡繹亘二明河一寒光縹緲靜無レ波黃姑野外驅二青犢一織女機中罷二金梭一停レ梭踦レ犢行相見羽蓋香車速二流電一金璫染レ露鳳同飛寶釧飄レ空雲一片飛鳳忽嗜雙片雲空繾綣七夕懽娛妾自知五夜風波君莫レ怨天雞早唱天潢斜霓裳豹舃天之涯翠練流レ涕分二暮雨一玄霄別思夢二飛花一飛花暮雨兩悠々天上人間一葉秋誰家搗レ素悲二青海一誰家乞巧在二朱樓一朱樓朱箔傍レ星懸美人雜踏金闌邊千條綵縷風前弄九曲金針暗裏穿玳瑁筵中欣レ得レ巧流蘇帳下喜レ逢レ仙甲帳華筵相接續到處秋光看不レ足已聞嬉結二金盤寘一那堪夜奏淸商曲纖月高々照二錦幃一中庭少姉賞心違坐看畵牖雙螢度愁絕金河一雁飛若得二天孫時賜一巧還來燈下剪二寒衣一

七夕後一夜小集　宗　簡　齋

朱明已去入二朝昏一月皎星高難レ杜レ門此地賓朋方レ夜聚當頭牛女始愁言蛩微庭戶知二秋氣一風爽樓臺濕二露痕一搔レ首銀河猶耿々無レ情有レ恨對二金樽一

七夕雨霽有レ思

雨久今宵霽天爲二牛女一憐留レ歡無二夜々一恨レ別有二年年一遙憶閨愁益重添客夢牽不レ如レ聽二滴瀝一還可二酒杯傳一

七夕集二後穀山房一

子所二藏修一處人稱翰墨場浮レ杯當二美夕一行レ樂不二詩常一河顯星能合秋新夜漸長螢光類二牛女一相與過二地塘一

七夕宿二茶洋驛一聽レ泉　吳　明　卿

行廚依二曲燈一驛署枕二盤枕一竹色淸秋好泉聲永夜多稍疑開二雪洞一忽似レ響二雲和一起視二雙星爛一盈盈隔二絳河一

七夕東齋與二二客一對レ雨

祇堪三裝點嫁二衣裳一

七夕宮詞　　陳　　樵

內人拜レ月金鋪レ戶鳳宿二梧枝一秋葉下露華入レ袂玉階
寒織署錦工催二祭杼一月下二金鈿一照レ骨明同心絲綸紅
生レ縷素瓜碧寶上二華樓一夜闌颷馭下二銀州一

七夕曲　　郭　子　章

天河盈々一水隔河東美人河西客耕レ雲織レ霧兩相望一
歲綢繆在二今夕一雙龍引レ車鵲作レ橋風廻二桂渚一秋葉飄
拋レ梭投レ杼整二環佩一金童玉女行相要兩情好合美如
レ舊復恐天雞催二曉漏一倚レ屛猶有二斷腸言一東方未レ明
少停候欲レ渡不レ渡河文涓君亦但恨生別離明年七夕還
當レ期不レ見人間死離別朱顏一去難二再歸一

七夕集二之美宅一送二茂秦一　　明李　于　鱗

祖席陳二瓜菓一征衣理二薜蘿一雲邊看二露掌一花裏出二星
河一仙吏揮二金椀一佳人罷二錦梭一新知天上少秀句鄴中
多踈拙時名棄懽娛虜騎過秋風吹二鬢髮一落日渡二滹沱一
匕首荊卿贈刀頭桂客歌明年見二牛女一能不レ憶二羊何一

蕪陰七夕與二介孺兄一飲別　　葛　震　甫

江客爲レ秋別更當二星夜期一天孫不レ賣レ錦何處剪二相
思一

七夕雨

砭レ骨早秋聲人天風雨爭強爲二中夜坐一空憶去年晴機
上鴛鴦濕河邊蟖蝀生老來兼二病起一彌重會離情

七夕集二城西一是日立秋　　謝　寓　中

蓴羹鱸鱠與二杯盤一客醉烏栖露已溥滿レ耳秋聲初入レ聽
一年夜月未二曾看一星當二愁眼一明猶晦事到二驚心一暑亦
寒縱說二支機一還有レ石不レ堪門外郎波瀾

七夕

思結暮雲中情深一夕裡歲々歡レ逢レ時只待秋風起

其二

亦有二經年別一又驚幾日秋難レ將二今夕眼一更自望二牽
牛一

其三

未レ竟一夕喜先動隔年愁明朝河漢廣相去兩悠々

其四

蕭々衆樹鳴澎湃晚潮聲欲レ問二支機石一風波尙未レ平

七夕病中　　王　世　貞

病骨蕭然一葉秋踈簾不レ捲絳河幽茶瓜酒果從レ無レ分
不レ起人天兩地愁

レ曳レ羅通宵道意終無レ盡向レ曉離愁已復多

七夕　張文恭 一作二張文瑞詩一

鳳律驚二秋氣一龍梭靜二夜機一星橋百枝動雲路七香飛映レ月迺二雕扇一凌レ霞曳二綺衣一含情向二華幄一流態入二重闈一歡餘夕漏盡怨結曉驂歸誰念分二河漢一還憶兩心違

七夕賦詠成レ篇　沈叔安

皎々宵月麗二秋光一耿々天津橫復長停レ梭且復留二殘緯一拂レ鏡及レ早更新粧彩鳳齊レ駕初成レ輦雕鵲塡レ河已作レ梁雖二喜得一レ同二今夜枕一還愁重空明日牀

早秋京口旅泊章侍御寄レ書相問因以贈レ之時七夕　李嘉祐

移レ家避レ寇逐二行舟一厭見南徐江水流吳越征搖非二舊日一秣陵凋弊不レ宜レ秋千家閉レ戶無二砧杵一七夕何人望二斗牛一祇有二同時驄馬客一偏宜三尺牘問二窮愁一 宜一作レ題

七夕　楊大年

金壺漏滴正迢々靈匹相從在二此宵一月魄嬋娟烏遠レ樹河流淸淺鵲成レ橋雲輕天上楡花沒風細爐中麝炷飄寂莫堪レ憐觀二津女一無レ眠耿々望二靑霄一

七夕　傅與礪

耿々玉京夜迢々銀漢流影斜烏鵲樹光隱鳳凰樓雲錦虛張レ月星房冷閉レ秋遙憐天帝子辛苦會二牽牛一

和二黃預七夕一　陳無己

盈々一水不二斯須一經歲相過自作レ疎坐待常禽報二佳會一徑須飛雨洗二香車一超騰水部陳篇上收拾愚溪作賦餘信有三神仙足二官府一我寧辛苦守二殘書一

七夕　李忠定

銀河淸淺界煙霄欲レ渡何須烏鵲橋今我去レ家千里遠却憐牛女會二今宵一

七夕　陳幾叟

天上銀蟾曲似レ鈎人間簫鼓萬家浮從來世事俱兒戲不二獨秦娥乞巧樓一

次韻王學士七夕新秋　吳幼淸

煌々桴鼓引二雙旌一道是天孫大禮成金鏡南飛光欲レ半銀潢西去寂無レ聲佳期一夕人誰見別思千年恨未レ平最恠河東五星麗應レ嫌抱レ措要二中更一

七夕　陳尙德

但把凡身小品論寧須三楊レ頷問二星辰一女郎戀レ別淚如レ雨遙托二金針一度與レ人

七夕　劉文淸

天孫今夕渡二銀潢一女伴紛々乞巧忙乞得巧多成二底事一

風駕二鳴鸞一啓二閶闔一霓裳遙裔儼二天津一五明霜紈開二
羽扇一百和香車動二畫輪一婉孌夜分能幾許靚粧治服爲
レ誰新片時歡娛自有レ極已復長望隔レ年人

奉レ和三七夕侍二宴兩儀殿一應制　杜審言

一年銜二別怨一七夕始言レ歸歛レ淚開二星靨一微步動二雲
衣一天遙(ハルカニシテ)兎欲レ落河曠鵲停レ飛那堪レ盡二此夜一復往弄二
殘機一

七夕

白露含二明月一青霞斷二絳河一天街七襄轉閣道二神過袨
服鏘(ナラシ)二環珮一香筵拂二綺羅一年々今夜盡機杼別情多

七夕　崔顥

月帳星房次第開兩情唯恐曉光催時人不レ用穿針待沒
得心情送レ巧來

七夕　羅隱

閨女求二天女一更闌意未レ闌玉庭開二粉席一羅袖捧二金
盤一向レ月穿レ鍼易臨レ風整レ線難不レ知誰得レ巧明旦試
相看

七夕　李長吉

別浦今朝暗羅幃午夜愁鵲辭穿レ線月花入曝衣樓天上
分二金鏡一人間望二玉鈎一錢塘蘇小々更値一年秋

七夕賦詠成レ篇　許敬宗

一年抱レ怨嗟二長別一七夕含レ態始言歸飄々羅襪光二天
步一灼々新妝鑒二月輝一情催巧笑開二星靨一不レ惜二呈露一
解二雲衣一所歎却隨二更漏一盡掩レ泣還弄昨霄機

奉レ和三七夕宴二玄圃一應制二首

牛閨臨二淺漢一鸞駟涉二秋河一兩懷縈二別緒一一宿慶停
レ梭星模(ウツシ)二鈆裏靨一月寫二黛中蛾一奈許今霄度長嬰離恨
多

七夕　劉威

烏鵲橋成上界通千秋靈會此宵同雲收喜氣星橋滿雨
拂二香塵一月殿空翠輦不レ行青草路金鑾徒恨白楡風彩
盤花閣無レ窮意只在遊絲一縷中

奉レ和三七夕燕二兩儀殿一應制　蘇廷碩

雲媛乘レ秋發仙裝警レ夜催日光窺欲レ渡河色辨レ應レ來
梲石天文寫針樓御賞開竊觀棲鳥至疑向二鵲橋一廻

七夕賦詠成レ篇　何仲誼

日々思レ歸勤理レ鬟朝々佇望懶レ調レ梭凌風寶扇遙臨
レ月映レ水仙車遠渡レ河歷々珠星疑レ拖レ珮冄冄雲衣似

明月青山夜高天白露秋花庭開粉席雲岫敞針樓石類支機影池似泛槎流暫驚河女鵲終狎野人鷗

七夕曝衣篇（按王子陽園苑疏太液池邊有武帝閣帝至七月七日夜宮女出后衣曝之）　沈雲卿

君不見昔日宜春太液邊披香畫閣與天連燈火（一作華）灼爍九微（一作衢）映香氣氛氳百和然此夜星繁河正白人傳織女牽牛客宮中擾々曝衣樓天上娥々紅粉席曝衣何許曛（一作昨時夜）半黃宮中女綵提玉箱珠履奔騰上蘭砌金閨宛轉出梅梁絳河波裏碧煙上雙花伏兎畫屏（一作歛）風四子盤龍擘斗帳舒羅散縠（一作綵）雲霧開綴玉垂珠星漢廻朝霞散彩羞衣架晚月分光劣鏡臺上有僊人長命綹中看玉女（一作寶媛）迎歡繡璹瑁筵中別作春珊瑚（一作琅玕）牕裏翻成晝椒房金屋寵新流意氣嬌者不自由漢文宜惜露臺費（一作產）晉武須焚前殿裘

七夕泛舟二首　盧照鄰

河葭肅徂暑江樹起初涼水疑通織室舟似泛仙潢連橈渡急響鳴棹下浮光日晚菱歌唱風煙滿夕陽

奉和七夕兩儀殿會宴應制　李乂

桂宮明月夜蘭殿起秋風雲漢彌年阻星筵此夕同倏來疑有處旋去已成空睿成作鈎天響魂飛在夢中

牛女　宋之問

粉席秘期緩針樓別怨多奔龍爭渡月飛鵲亂塡河失喜先臨鏡含羞未解羅誰能留夜色來夕倍還梭

奉和七夕宴兩儀殿應制　劉憲

秋吹過雙闕星仙動一靈更深移月鏡河淺度雲軿殿上呼（一作徵）方朔人間失武丁天文茲夜裏光映紫微庭

奉和七夕兩儀殿會宴應制　趙彥昭

青女三秋節黃姑七日期星橋度玉珮雲閣掩羅帷河氣通仙掖天文入睿詞今宵望靈漢應得見娥眉

他鄉七夕　孟浩然

他鄉逢七夕旅館益羇愁不見穿針婦空懷故國樓緒風初減熱新月始登秋誰忍窺河漢迢々問斗牛

七夕賦詠成篇　岑文本

潤色者也旣而玉井影上銅水聲移醉天尉湛々之恩乞星躔奕々之巧以言聚二丹螢一而成功雖レ歎處堯日之南明問靑鳥而記事猶恨晤漢雲之子細遙隔羽服之化忽列仙衣之衿云爾謹序

本朝一人一首

七夕　山田三方

金漢星楡冷銀河月桂秋靈姿理二雲鬟一仙駕度二潢流一窈窕鳴二衣玉一玲瓏映彩舟所レ悲明日夜誰慰別離憂

七夕　吉知首

冉々逝不レ留時節忽驚レ秋菊風披二夕霧一桂月照二蘭洲一仙車渡二鵲橋一神駕越二清流一天庭陣相喜華閣槮二離愁一河横天欲レ曙更歎後期悠

七夕後朝　中原廣俊

仙娥其奈漢河頭歸處天明怨不レ休別涙數行朝露落去衣一對曉雲愁前期何夜唯占レ昨後會從レ今又待レ秋乘レ興難レ忘風月味欲レ從下此席萬年遊上

小池七夕　布瑠高庭

星夕臥二池邊一遙瞻肆遠レ天不レ知烏鵲意何似レ遠二神仙一

節序詩集

七夕

七夕宴二玄圃一二首　高宗皇帝

羽蓋飛二天漢一鳳駕越二層巒一俱歎二三秋阻一共叙二一宵歡一璜虧夜月落髻碎曉星殘誰能重二操抒一纖手濯二淸瀾一霓裳轉二雲路一鳳駕臨二天潢一虧星凋二夜髻一殘月落二朝璜一促レ歡今夕促長離別後長輕梭聊駐レ織掩レ涙獨悲傷

七夕　玄宗皇帝

長安城中月如レ練家々此夜持二針線一仙裙玉珮空自知天上人間不二相見一長信深陰夜轉幽瑤階金閣數螢流班姬此夕愁無レ限河漢三更看二斗牛一

七夕汎舟　梁鍠

雲端有二靈匹一掩映拂二粧臺一夜久應レ搖レ珮天高響不レ來片歡秋始展殘夢曉翻催却怨塡河鵲留レ橋又不レ廻

奉レ和二七夕兩儀殿會宴一應制　李嶠

靈匹三秋會仙期七夕過査來人泛レ海橋渡鵲塡レ河帝縷升二銀閣一天機罷二玉梭一誰言七襄詠重一作レ流入二五絃歌一

同賦山居七夕

江以言

金商七月之候銀漢二星之期綺節麗辰之標名露布於四民之令詞人才子之傳頌風羅於萬代之文聖上裝金殿排石渠列星位召風人香粉曉散遙笑秦城宮掖之雲玉卷晴披長嘲周王羽陵之露蓋乃聖範好文宸號鑒古之至也于時仙星增飾綵雲爲衣裝居霧帳相待鵲翅之南北襲備霓裳只從龍歸之去留至如夫楡風吹兮易亂桂月臨兮欲晴口刀尺經四母（以下闕）

田氏家集

七言七月七日代牛女惜曉更各分一字應製一首（探賜人字）

恠來靈匹少相因天上仙殊地上人箭漏應寛周歲會銅壺莫從一霄親銀河夜鵲塡毛晩禁樹晨雞拍翅新同作星難囑口斗廻杓直指北方辰

江吏部集

七夕守庚申同賦織女理容色應製（以嬌爲韻）

寄言織女意搖々容色理來結契遙頻整玉簪霞袂擧閑臨粧鏡月眉嬌燕蘭湯沐非同日漢李聲華倖九霄乞巧慇懃天可許徘徊自耻馬卿橋

本朝文粹

七夕代牛女惜曉更應製　野美材

夫七月七日靈匹佳期也仰秋河之耿々瞻白氣之弈弈守夜之人以此爲應登仙之語信而有徵今夕詔侍臣曰伉儷相親天人惟一易離難會今古所傷宜代牛女深惜曉更臣奉綸綍敢獻蕪詞原夫二星適遇未叙別緒依々之恨五夜將明頻驚涼風颯々之聲時也香筵散粉綵縷飄空宮人懷私之願似面不同墨客乞巧之情隨分應異臣有一事非富非壽家貧親老庶不擇官云爾

七夕陪秘書閣同賦織女雲爲衣應製　江以言

金商七月之候銀漢二星之期綺節麗辰之標名露布於四民之令詞人才子之傳頌風羅於萬代之文聖上裝金殿排石渠列星位召風人香粉曉散遠咲秦城宮掖之雲玉簾晴披長嘲周王羽陸之露蓋乃聖範好文宸旅鑒古之至也于時仙星増餝綵雲爲衣裝居霧帳相待鵲翅之南北襲備霓裳亦從龍歸之去留至如夫楡風吹兮易亂桂月臨兮欲晴裁無刀尺經西母之路而彌縫染有淺深逐子高之駕而

古今要覽稿卷第六十四

●時令部　七夕

●詩上

懷風藻

五言七夕一首　大政大臣藤原朝臣史

雲衣兩觀ㇾ夕月鏡一逢ㇾ秋機下非ニ曾故一援息是威猷鳳蓋隨ㇾ風轉鵲影逐ㇾ波浮面前開ニ短樂一別後悲長愁

五言七夕一首　從五位下山田史

金漢星楡冷銀河月桂秋靈姿理ニ雲鬢一仙駕度ニ潢流一窈窕鳴ㇾ衣玉玲瓏映ㇾ彩舟所ㇾ悲明日夜誰慰別離憂

五言七夕一首　出雲介吉智首

冉々逝不ㇾ留時節忽驚ㇾ秋菊風披ニ夕霧一桂月照ニ蘭洲一仙車渡ニ鵲橋一神駕越ニ清流一天庭陳ニ相嘉一華閣釋ニ離愁一

五言七夕　大宰大貳紀朝臣男人

犢鼻標竿日隆腹曬書秋風亭悅ニ仙會一針閣賞ニ神遊一月斜孫岳嶺波激子池流懽情未ㇾ充ㇾ半天漢曉光浮

五言七夕　但馬守百濟公和麻呂

仙期星織ㇾ室神駕逐ニ河邊一咲臉飛ニ花映一愁心燭處煎昔惜河難ㇾ越今傷漢易ㇾ旋誰能玉機上留ㇾ怨待ニ明年一

五言七夕　左大臣藤原朝臣總前

帝里初涼至神衿翫ニ千秋一瓊筵振ニ雅藻一金閣啓ニ良遊一鳳駕飛ニ雲路一龍車越ニ漢流一欲ㇾ知ニ神仙會一青鳥入ニ瓊樓一

經國集

五言小池七夕一首　瑠　高　庭

星夕臥ニ池邊一遙瞻肆遠天不ㇾ知烏鵲意何似ㇾ達ニ神仙一

本朝麗藻

七夕佳會風爲ㇾ使以ㇾ知爲ㇾ韻　御　製

靈匹佳期素在ㇾ斯涼風爲ㇾ使ニ去來儀一感通鵲翅成ニ橋路一韻訪龍蹄促ㇾ駕崖且託歡情飄至報追傳別恨咽中知一從蘋末迎ㇾ秋起念ㇾ化自蕙末ㇾ得ㇾ移

牛女秋意　儀　同　三　司

何爲靈匹久相思一歲唯成一會期行佩應紉冷露玉鬟蛾且畫遠山眉未ㇾ終秋夜難ㇾ來意已至朝雲欲ㇾ別時此恨綿々無ニ說盡一蒼茫天水間阿誰

七夕於ニ祕書閣一同賦ニ織女雲爲ㇾ衣應製以ㇾ秋爲ㇾ韻並序

寶治二年百首乞巧奠

ひこ星の行あひの空に手向して

いたゝきまつるこの夕かな　正三位知家卿

乞巧奠の心を

庭の面にひかて手向ることのねを

雲ゐにかはす軒のまつかせ　入道前太政大臣

正嘉二年毎日一首中

たなはたの祈る手向やうけつらん

明てそかへる梶のことのは　民部卿爲家卿

かすとよめる歌

古今和歌集卷第四上秋歌

なぬかの日の夜よめる　凡河内躬恒

七夕にかしつるいとの打はへて

年のをなかく戀やわたらん

堀河院御時百首和歌

七夕　春宮大夫公實

天の川あふせほとなき七夕に

かへらぬ色のころもかさはや　權中納言國信

織女にかせるころもの露けさに

あかぬけしきを空にしる哉

夫木和歌集卷第十一秋歌

七夕　民部卿爲家卿

寶治二年百首乞巧奠

七夕のあはすはなにゝしら露の

玉のをこともけふはかさまし

寛和二年七月七日東三條院瞿麥合

ときのまにかすと思へは七夕に

かつ惜まるゝなてしこの花　能宣朝臣

此歌こと書に云左すはまちいさきませゆひてなてしこ二本はかりうしたるにゆひつけたると云云

賀茂社百首御歌

おさめ殿のくるゝの妻戸おし明て

けふ七夕にかす物やなに　慈鎭和尚

家集七夕の心を

聲の綾は音はかりしてはたをりの

露の衣をや星にかすらん　建禮門院右京大夫

永延二年七月七日實資朝臣家歌合鈴虫

七夕にかしやしつらんすゝむしの

雲ゐはるかに音そ聞ゆる　讀人不知

也只是織女祭リ也

公事根源云庭上にふみを置てさをのはしに五色のいとをかけて一事を祈るに三年の内に必叶といへり云々

七夕考魚澄葆光作云本邦ノ俗七夕小竹ヲ立テ五色ノ短冊ヲ附ル事物ニ見エス今管見ヲモテコレヲ言ンニ白居易ノ詩ニ憶得少年長乞巧竹竿頭上願絲多ト見エタレハ竹竿ヲタテヽ願ノイトヲ懸ルコトハ古クヨリ有シト見ユ

晋書列傳十九阮咸字仲容任達不レ拘與ニ叔父籍一爲ニ竹林之游一當世譏ニ其所爲一咸與レ籍居ニ道南一諸阮居ニ道北一北阮富而南阮貧 七月七日 北阮盛曝レ衣錦綺粲レ目咸以レ竿掛ニ大布犢鼻褌於庭一曰未レ能レ免レ俗

崔寔四民月令云七月七日作レ麴合ニ藍丸及蜀漆丸一暴ニ經書又衣裳一習俗然也

玉燭寶典引ニ竹林七賢論一云阮咸字仲容籍兄子也諸阮前世皆儒學内足ニ於財一唯籍一生棄レ事好レ酒而貧舊俗七月七日法當レ曬今案方言曰曬暴也秦之面之曬音霜智反レ衣諸阮庭中爛然莫レ非ニ錦今案釋名曰錦金也作之用功重其價如金故制字帛與金也綈一今案漢書音義綈亭繒也重二斤者咸時總角乃竪ニ長竿一掛ニ大布犢鼻今案前漢書司馬相如自身犢鼻褌注云形似ニ犢鼻一因名也於庭中ニ曰未レ能レ免レ俗聊復共爾耳

世説曰郝隆七月七日見ニ鄰人一皆曝ニ曬衣物一隆乃仰臥出レ腹曰曬レ書

月令廣義云大液池西有ニ漢武曝衣樓一七夕宮女出ニ后衣一曝レ之

韋氏月錄云七夕曬ニ曝革裘一無レ虫

〇和歌

たてまつるとよめる歌

萬葉集卷第十秋雜秋

七夕

天漢瀬毎幣奉情者君平幸來座跡（アマノカハセコトニヌサヲタテマツルコヽロハキミヲサキクイマセト）

右作者未詳

夫木和歌集十一秋部

七夕　源仲正

家集乞巧奠

夜もすから星合の空にたてまつる
香のけふりや雲と成らん

手むけとよめる歌

寶治二年百首乞巧奠　常磐井入道太政大臣

しら露の玉のをことの手向して
庭にかゝくる秋のともしひ

天の河原をけふや渡らん

後拾遺和歌集卷第四秋上

七月六日によめる　小　辨

ひとゝせの過つるよりも七夕の

今宵をいかに明しかぬらん

七月八日七夕祭の事

同上

七月七日風なといたくふきて齋院にたなはたまつりなとゝまりて八日まてあるへき事にあらずとてまつり侍けるによめる

小　辨

たまさかに逢事よりも七夕は

けふ祭をやめつらしとみる

〇七月七日二星に物を手向る事

凡二星にこよひ物を手向る事ふるくよりみえたり寶治二年百首に乞巧奠を常磐井入道太政大臣よませ給ふ歌にしら露の玉のを琴の手向して庭にかゝくる秋のともし火とみえたるをはしめ手向るとよめる歌外に數首あり又たてまつるといふことはいとふるくより見えたり天のかは瀨ことにぬさをたてまつると萬葉集みえしをはしめとせりまた七夕に星に物をかすといふ事も舊くよりあり衣或は琴なとの類何物とかきらぬなり太郎百首にかへらぬ色の衣かさはやとみえ寶治二年百首に玉のをこともけふはかさましとみえたりかすとよめる歌はあまたありこれらは皇國のならはしなれと西土にも是に似たる事あり咸與レ籍居ニ道南ー諸阮居ニ道北ー北阮富而南阮貧七月七日北阮盛曬レ衣錦綺粲レ目咸以レ竿掛ニ大布犢鼻褌於庭ー曰未レ能レ免レ俗と晉書列傳いへるをはしめ竹竿頭上願絲多と白居易詩みえ七月七日云々暴ニ經書及衣裳ー習俗然也と崔寔四民月令いへるをおもへはこれらの事いにしへよりの事にて皇國にて今時竹竿に五色の短冊をつけ家々にたつるもこれらによりしならん又庭上にふみを置てさほのはしに五色のいとをかけて一事を祈るに三年の内に必叶と公事根源あるは全く暴ニ經書及衣裳ーといひ竹竿頭上願絲多といへるによりしなり

和漢朗詠集七夕詩云憶得少年長乞巧竹竿頭上願絲多

壒囊鈔云七月七日ニ庭上ニ机ヲ立テ供具ヲ備ヘ香花ヲ調ヘテ又筆ノ前ニ色色ノ絲ヲ懸テ織女ニ供シ奉ル

たかへと八日にたなはたまつり行なはれし例のひとつなり西土にはかゝる例更に見あたらすとにかくに六日を以て七夕となすといふはしかるへからさる故に詔ありてとゝめ給ひしなれは八日にまつるも又おなしかるへし

新撰朗詠集七夕詠云爭敎二七夕一縮爲レ六更課二秋風一計會新七月六日代二牛女一言レ志齋名

入蜀記云五日大風云々晩小雨右文林郎監大軍倉王烜來王言京口人用二七月六日一爲二七夕一而常南唐重二七夕一而常以二帝子一鎭二京口一六日輒先乞巧翌旦馳入二建康一赴二內燕一故至レ今爲レ俗云然太宗皇帝時嘗下レ詔禁下以二六日一爲中七夕上則是北俗亦如レ此

言鯖云古書皆以二七月七日之夕一爲二七夕一今北人卽以二七月六日之夕一爲二七夕一思レ之未レ得二其說一當詢二其所一自兼明書云明曰古書皆以二七月七日夕一謂二之七夕一今北人卽以二七月六日之夕一乞巧詢二其所レ自則有二異端一靜而思レ之抑有レ由也蓋昔拆崎之世或中分之時南北異文車書不レ一必北朝帝王必當二七日一而崩者故其俗間用二六日之夕一南人不レ爲二之忌一不レ移二七日之夕一由レ此而論照然可レ見

香祖筆記云七夕之說自二三代一以來相沿舊矣宋太平興國中詔以二七日一爲二七夕一著二之甲令一而其後多以二六日一爲二七夕一名七夕而用レ六不レ知起二于何時一右見二異聞錄一東京夢華錄云初六初七晩貴家多結二綵樓于庭一謂二之乞巧樓一則當時初六初七兩日皆可二乞巧一遂相沿而不レ察耳然今竝無下初六爲二七夕一之說上

容齋三筆云太平興國三年七月詔七夕嘉辰著二於令甲一今之習俗多用二六日一非二舊制一也宜復用二七日一且名爲二七夕一而用レ六不レ知レ始レ自二何時一然唐世無二此說一必出二於五代一耳

瑯邪代醉引二詒謀錄一云遇二月三七日一不レ食二酒肉一蓋重二道敎一之故而七夕改北俗用二六日一太平興國三年七月乙酉詔曰七夕改用二六日一宜下以二七日一爲中七夕上頒二行天下一蓋方其改用二六日一之時始二於朝廷一故釐二正之一自二朝廷一始

○和歌

古今和歌集卷第十九雜體誹諧歌

七月六日七夕の心をよみける

藤原かねすけ

いつしかとまたく心をはきに明けて

古今要覽稿卷第六十三

●時令部　七夕

●七月六日爲乞巧例

七夕は七月七日の夕をいへりしかるを六日を以て牽牛織女の二星をまつる事ありこれ皇國にては中古行なはれし例ありいはゆる爭敎ニ七夕一縮爲レ六更課ニ秋風一計會新と（新撰朗詠）みえたり西土に此例多し京口人七月六日爲ニ七夕一而常南唐重ニ七夕一而常以ニ帝子一鎭ニ京口一六日輙先乞巧と（入蜀記）いひ以ニ七月七日之夕一爲ニ七夕一今北人卽以ニ七月六日之夕一爲ニ七夕一と（言鯖）いひ古書皆以ニ七月七日之夕一謂ニ之七夕一今北人卽以ニ七月六日之夕一乞巧詢ニ其所レ自則有ニ異端一靜而思レ之抑有レ由也云々北朝帝王必當ニ七日一而崩者故其俗間用ニ六日之夕一南人不レ爲ニ之忌一と（兼明書）いへれは當時かゝる事のありしによりて六日を以て乞巧せられしと見えたり又初六初七晩貴家多結ニ綵樓子庭一謂ニ之乞巧樓一則當時初六初七兩日皆可ニ乞巧一と（香祖筆記引東京夢華錄）いへるは前の例とはいさゝか異也これは六七兩日ともに乞巧行はれし一例なりしかるに乞巧に六日を用ひられし始はたしかならされとも五代にはしまりしと見えたり唐世無ニ此說一必出ニ於五代一耳と（容齋三筆）いへるをもてもしられたり此風俗四五十年にしてとゝめられしとおもはる宋の太平興國三年七月の詔に今之習俗多用ニ六日一非ニ舊制一也宜ニ復用ニ七日一と（同上）禁し給ひたるにてしられたりまた七夕改北俗用ニ六日一太平興國三年七月乙酉詔曰七夕改用ニ六日一宜下以ニ七日一爲中七夕上頒ニ行天下一と（瑯邪代醉引詒謀錄）いへるは同時同年の詔なれとも異文なりしかれとも六日をとゝめられしは同義なれは此年より以後は六日を乞巧に用ひ給はさる事しるし又七夕祭を八日に行なはれし事あり七月七日風なといたく吹て齋院にたなはたまつりなとゝまりて八日まてもあるへきことにあらすとてまつり侍けるによめるたまさかにあふ事よりも七夕はけふまつるをやめつらしとみると（後拾遺和歌集）いへるはたまたまさはりあるによりての事にしてとし〳〵に例となせしにはあらさるなり上にいふところ六日を以て七夕となし或は初六初七兩日皆可ニ乞巧一といふ例とは

レ待二安崇之言一分明也爲二異邦浮説一漢人既記レ之可レ見焉天列宿何會合哉且論二二星一以二天地陰陽道體一則無稽之贅言也天地位四時行萬物育二其中一生々不レ息者由三天地自和合陰陽交升降不二相離一其天地阳阴何形以交乎天文家無二牛女會合之説一宜也何疎論之有不レ辨二異邦浪説一以二會合一爲二正實一加レ之隨聞牽二附天地阳阴理一此何心哉以二牛女相逢一爲二造化會合之徵一乎彼形不レ交氣交之語不レ合下織女親渡二鵲橋一嫁二牽牛一説上不レ砭二自亡疎論固陋賤拙一却以二天文家説一爲二疎論一其心尤堪レ怪焉又高砂住江相生松此言歌學家者流所二嘉尙一而好事士附會之言也今於レ是無レ益レ解焉人民星祭云々此文意至二天平勝寶朝一人民未レ知レ修二星祭一故欲レ使下二人民一知上之乃附下副自二上世一所二修來一祀三二尊一祭事上之意乎吁安崇所レ不レ傳二於人間一之祕書祕訣學レ之乎依二何書一吐二露此説一哉捧腹顚倒堪レ笑焉所レ引之光海翁七夕考我未レ見レ之光海翁者安崇之師跡部宮内良顯也其門人安崇所レ言如レ此則七夕考之爲レ書也亦不レ足レ見少陽七數等之語極牽附也神代云々之倭歌深可レ考云者欲レ使三人察二知二尊故事一乎大失二彼歌之本意一安崇以二妄説虚誕一眩二惑可レ東可レ西之諸生一者也

レ祭二伊弉諾尊伊弉冊尊一者其證本據何書何說哉祀二佗神一者必有二齋戒一唯二二尊祭事諒闇觸穢中猶不レ憚歟見二江家次第乞巧奠章一宜二合考一人麿赤人之歌詠二神代故事一者以二二星會合一擬三二尊學二交道於鶺鴒一耳非レ詠二二尊會合一以二其歌一爲二此徵證一者意齟齬不レ足レ論焉

又曰天に牽牛の星有は耕の表なり織女の星有はおりひめの象なり此表象男の農業女の織はたを祈る事と見え侍る

按列宿各有レ名有レ象皆天文曆數陰陽家知レ之非レ所レ關二係吾道一依二其家一祈二農業織紝一者乞二於牛女一乎將夫乞二於二靈一乎且二尊與二牛女一爲二同體異名一乎二神者人體男女而本邦開國之神也固非下掌二耕織一神上

又曰しかれとも公事根源に乞巧奠の事は天平勝寶年中より初たまふとありしかれは孝謙帝の頃にあたり侍る牽牛織女星の事は此時全異國道家の說を取用給ふと見えたり神代より二尊の陰陽逢たまふと云祭事に道家の星祭りを附合し侍るものならし

按本朝上世七月七日無二修事一然如二本文所レ言者何所見哉上世七夕祭二二尊一說我所レ未二嘗聞一也於二正史實錄一也秋毫不レ載吾既知レ之自餘典墳吾不レ知レ之若夫安崇之造言乎中世一條禪閤兼良公以二倭漢博識一鳴二於當世一然未二嘗曰一レ祭二二尊一只謂二二星一而巳又四時祭式亦不レ謂レ之唯織部式擧二織女祭一條一耳江家次第亦然如二鴨長明一不レ擧二二尊祭事一安崇之言實希代之怪誕也

又曰星合といふ事は天文家にては絕てなき事と申侍るとかや然とも疎論と申侍るへし吾國天人唯一の道にても西土聖賢道體の說にても地に男女あれは天に陰陽有て天は專ら氣をもつて立たるものなれは形は交らすして氣は交るのことはりなり又高砂住の江の松も相生のやうに覺えといふ事も皆深き事に侍る人民星祭の事いまたあらされは天平勝寶の頃此事を附合したまふと見え侍る光海翁の七夕考といふ書ありおさ〳〵此趣と覺侍る一年の中半夏と秋と行かひ少陽七の數をかさね侍ることわりなり神代よりいなおふせ鳥にならひてや七夕つめも契初けん此歌深く考へ侍るへし

按此文義難二會得一天文家典籍不レ載二二星會合一不

非ニ我朝之故事一讀者宜ニ看察一焉和書所レ記亦如レ左

延喜織部式

江家次第

雲圖抄曰七月七日乞巧奠事圖式署

公事根源

禁中年中行事略曰七夕手向御歌梶ノ葉七枚御硯七面御筆七對芋ノ葉ニ露ヲ包イネノコ草ニテ結レ之梶皮素麵七筋索餅二ツ添院中ヘモ被レ進但院中ヘ梶ノ葉皮ハ不レ被レ進由廣蓋ニ盛右京大夫持參草花種々今日近衞殿ヨリ被レ獻レ之事恒例也近衞殿御內ノ女カツキヲ着緋傘ヲサシ掛右草花持參御使ニマイル手向御樂

御樂始同事

四季物語

按有乙以下日本紀曰ニ天照大神稚日女尊自織一古語拾遺有中天棚機姫名上爲ニ七夕濫觴一者甲甚非也其自織ニ神衣一者皆親主ニ祭祀一尊ニ敬神明一至厚之謂也又棚機姫號凡設ニ機形一如レ架レ棚故曰ニ棚機一長ニ機杼一女卽號ニ棚機姫一又日本紀下照姫歌曰阿妹奈屢夜乙登(アメナルヤヲト)多奈婆多廼汙奈餓勢屢多磨廼彌素磨屢廼阿奈陀磨(タナバタノウナガセルタマノミスマルノアナタマ)波夜彌(ハヤミ)言見下天上能弄ニ機杼一乙女所レ懸ニ其頷一玉相映上詠歌也然曰レ詠ニ天照大神自織一者非也非レ指ニ言天照大神一凡善ニ機杼一女直稱ニ之棚機姫一是上古之風也七夕二字訓ニ多奈波多一者織女星善ニ機杼一其織女星以ニ七月七日一與ニ牽牛星一相會故七夕二字又訓ニ多奈婆多一耳又頃日有ニ印行書一題ニ野中清水一東武友部安崇所レ撰也爲ニ其書一也不レ依ニ正史實錄一不レ分ニ邪正一不レ辨ニ僞書一以ニ吾神道一如ニ密敎一揚ニ高上理說一吐ニ迂遠曲說一鑿空痴論傅會臆斷識者一目則堪レ捧レ腹矣吾聞安崇嘗學ニ吾道於跡部良顯一其師弟生涯安ニ鹵莽小說一其心以爲レ足レ究ニ國學一尤可レ憐小子妄撰不レ足レ論然因辨ニ七夕祭一條一如レ左

野中清水卷一曰七夕祭の說七月は一年の半と分る初にて春夏は伊弉諾尊秋冬は伊弉冊尊にて陰陽相交りて萬物を生育したまふのいちしるき時なれは伊弉諾尊伊弉冊尊を祭り奉るされは人麿赤人の歌にも神代よりの事をよめり

按此說吾所レ未ニ嘗聞一也可レ謂ニ牽附妄說一矣諸冊二尊者可レ曰ニ陰神陽神一未レ有レ配ニ春夏與ニ秋冬一因ニ陽神陰神名一配ニ造化生育殺罰之氣候一者極妄也奉

謂二其弟一曰七月七日織女當レ渡レ河暫詣二牽牛一今人織女嫁二牽牛一者似レ始二於此一張衡靈憲經云牽牛織女七月七日相見癸辛雜志渡河之說洪景盧辨說最爲二精當一蓋渡河乞巧之事多出二於詩人及世俗不根之論一何可二盡據一

五雜組（明謝肇淛著）曰晉郭翰少有二清標一乘レ月臥二庭中一織女降與レ諧伉儷後以二七寶枕一留贈訣別而去吾友孫子長少年美哲七夕之夜感二織女之事一爲レ文以祝レ之詞甚婉麗忽如二夢中一爲二女仙一召至二瓊樓玉闕一殊極二人間之樂一七日始甦時皆笑以爲レ妄余謂非レ妄也魅也人有二邪念一祟得レ干レ之就二其所レ想以相戲耳

又曰長恨歌載玄宗避二暑驪山一以二七月七日一與二貴妃一凭レ肩誓レ心願世爲二夫婦一天寶遺事又言帝與二貴妃一每レ至二七月七日夜一在二華清宮一遊宴宮女皆陳二瓜菓一乞レ巧皆誤也考二之史一玄宗幸二華清宮一以二十月一其返皆以二二月或四月一未レ有レ過レ夏者一野史之不レ足レ信往々如レ此

又曰歲事紀事云七夕俗以レ蠟作二嬰兒一浮二水中一以爲二婦人宜子之祥一謂二之化生一王建詩水拍二銀盤一弄二化生一是也今人以レ泥塑二嬰兒一或銀範者知レ爲二化生一而不レ知二七夕之戲一

圓機活法（明王世貞校正）曰祕閣閑話蔡州蔡民每二七夕一禱以二酒菓一忽有三星墜二瓜上一得二金梭一自レ是巧思益進開元遺事每二七夕一陳二瓜菓酒饌于庭一祈二恩於牛女一也又云以二蜘蛛一納二之小金盒中一至レ曉開視二蜘蛛稀密一以爲二得レ巧之多少一廣記戚夫人傳高祖七夕臨二百子池一以二五縷一相羈謂二之相憐愛一輿地志齊武帝起二層觀一七夕宮人多登レ之穿レ針世謂二之穿針樓一○郭翰少有二清標一乘レ月臥二庭中一視二空中一有レ人冉々而下乃一少女明艷絕代曰吾天之織女也上帝賜レ命遊二人間一願乞二神契一乃升レ堂共レ枕欲レ曉辭去後夜復來翰戲レ之曰牽牛郎何在那敢獨行對曰陰陽變化關二渠何事一至二于七夕一忽不レ來數夜方至翰問曰相見樂乎笑曰天上那比二人間一問曰卿來何遲曰人中五日彼一夕爾忽一夜悽惻流涕曰帝命有レ期便當二永訣一以二七寶枕一留贈而去○郭子儀至二銀州一夜見二左右一皆赤光仰見二空中一輧車繡幄中有二一美女一自レ天而下儀拜祝云今七月七日必是織女降臨願賜二長壽福一女笑曰大富貴亦壽考言訖冉々昇レ天子儀後立レ功貴盛年九十餘而薨（誠之曰此二圖出處未レ考）

按右所二抄出一之書後世之撰也然其事出二上古一則

按此書晉周處所レ著也當二本邦允恭朝一先二雄略帝廿
二年二六十餘年

史記

按七夕事爲二異邦上古之言一可レ知又漢土梁以降之
書吾雄略朝後也雖レ不レ足レ證抄レ左

博物志

荊楚歳時記

述異記

齊諧記

續齊諧記

四民月令崔寔著 曰七月初七其夜灑二掃於庭露一施二几筵一設二酒脯時菓一散二香粉於河鼓織女一二星神當レ會守レ夜者咸懷二私願一或云見二天漢中有二奕々正白氣一有二光耀五色一以レ此爲二徵應一

事物紀原卷八歳時風俗部明人錢唐故文煥德父校正 乞巧 吳均續齊諧記曰桂陽成武丁有二仙道一忽謂二其弟一曰七月七日織女當レ渡レ河暫詣二牽牛一至レ今云三織女嫁二牽牛一 周處風土記曰七夕灑二掃於庭一施二几筵一設二酒果於河鼓織女一言二二星神會乞二富壽及子一 歳時記曰七夕婦人以二綵縷一穿二七孔針一陳二瓜花一以乞レ巧則七夕之乞巧自二成武丁一始也

穿針 西京雜記曰漢采女以二七月七日夜一穿二七孔針於開襟樓一今七夕望レ月穿レ針以二綵縷一過者爲二得レ巧之候一其事蓋始二於漢一

五雜組

事文類聚前集明建安祝穆和父編 曰焦林大斗記天河之西有レ星煌煌與レ參俱出謂二之牽牛一天河之東有レ星微々在二氐之下一謂二之織女一

瑯琊代醉編明張鼎思著 曰古樂府迢々牽牛星皎々河漢女纖々擢二素手一札々弄二機杼一終日不レ成レ章涕泣霖如レ雨河漢淸且淺相去距幾許盈々一水間脉々不レ得レ語余按天孫織紝之星世人乃爲二此媟嫚之語一其爲二不經一甚矣海上浮槎之客謂見下一丈夫牽レ牛飲レ河見中織女上與以二支機之石一今其石安在君平之言亦謬言耳荊楚歳時記黃姑者河鼓也牽牛謂二之河鼓一後人訛二其聲一爲二黃姑一潘子直云亦猶是桑落之語轉呼爲二索郎一耳古樂府東飛百勞西飛燕黃姑織女時相見李白詩黃姑織女星相去不レ盈レ尺李後主詩迢々牽牛星杳在二河之陽一粲々黃姑女耿々遙相望則又誤以二黃姑一爲二織女一鼓音訛而爲レ姑姑字訛而爲二女人一可レ笑桂陽成武丁有二仙道一

祈私願犯禁且非禮也然親祭自家不潔地者豈唯犯式條哉汚神甚也視天皇及宗廟之神如臣子欲使之遂亡欲嗚呼可悲矣學彼說者實爲祭兩宮者神罰數日可俟焉列國庶人以上世遺風七月七日祭衣食神則延喜神祇四時祭式不可不載之又於伊勢神宮祭奠重敬倍三節祭然兩宮儀式年中行事二篇七夕無一祭事何哉乞巧奠者自異邦傳來牛女二星事也故不周齋戒禁中諒闇及觸穢中猶行仍其奠法非祭祀之儀熟檢察焉可知彼徒之附會臆說考其職由兩宮幽契之言起度會氏推究其根柢彼以爲自己所奉仕御饌津神豐受大神之號賤稱也則巧言變御饌津爲水氣津爲水中主卽又爲天御中主其天御中主卽爲國常立尊一體其心以爲此造化神起渾沌未分故水德也國狹槌尊亦爲水德神可笑也天照大神者女神也又爲日神則火德也陽德也內外宮之間是有水火陰陽日月幽契妙合之理求彼心腹與內宮並立起自欲置利之計用心於事々物々其意巧世計增長如乞巧奠亦至欲備己謀計之一術君子於言行雖微不可不愼矣彼徒爲一利心生衆人眩吾儕小子不可不察焉便以所嘗慈敎爲之根蔕證七夕之說固非兩宮之祭又起於漢土非倭朝之故抄以倭漢之書若干卷且附己意辨之其他關支離荒唐之辭弁屬于此書之後云

詩經小雅大東篇（此より以下書名のみ擧るは上に出たれは略之）

按周詩非謂牛女會合然以牛女名既久抄之耳

淮南子

按此文見圓機活法今閱淮南子無此事此書者漢淮南王劉安所編當吾朝孝元御宇先雄略朝廿二年六百餘歲

風俗通

按此書漢汝南應所撰也當吾朝垂仁御宇先雄略廿二年五百年計

西京雜記

按此書漢劉歆所編也當吾朝垂仁御宇先雄略帝廿二年五百年計

風土記曰七月七日其夜灑掃於庭露施几筵設酒脯時菓散香粉於河鼓織女（河鼓謂之牽牛）言此二星辰當會守夜者咸懷私願或云見天漢中有奕々正白氣有光耀五色以此爲徵應見者便拜而願乞富乞壽無子乞子唯得乞一不得兼求三年乃得言之頗有受其祚者

所修二星之浮說幷副之而爲牛女會合事吾邦祭衣食神大禮於此廢焉本朝七夕不嘗祭牛女矣之誠按此說大非也且甚害國學度會氏大社神官而何如此其胡亂耶先其所奉仕豐受神云者食神而臣也非與天御中主神及國常立尊一體其詳細者先生所撰見宗廟社稷答問五部書說辨等可知其妄說天照大神與豐受神無幽契之義明白也然若豐受神以七月七日鎭座於今度會宮則彼說猶有少據雄畧二十二年九月十六日鎭座也然則以七夕曰二神幽契妙合之說事實不合是以當見非兩宮幽契之故（御鎭座次第記寶基本紀曰七月七日以下大佐々命從丹波國余佐郡眞井原奉迎則如御鎭座日故先輩見謬者多矣倭姬世記曰崇神三十九年七月七日天降坐者妄之又妄也御鎭座本紀曰九月望從離宮遷幸山田原之新殿者可也日本紀曆考爲九月十六日者得其實矣後世九月十六日有例幣使者御鎭座日故也）彼徒又云自餘節物雖皆異邦事於七夕一事吾國之故實也日月合明二宮齊德之謂也尋其源始遷座而不可不祭之大義也然中世此祀絕矣依有蠻舶往來還傳異邦而今又再傳本邦焉漢人不識其本據妄託牛女又爲道家者流之事異邦無其本據者吾國之故也予謂是亦癡論也凡近代神學者流之僻如庚申待荒神祭起於我國傳於異域再傳我國今行世焉予甚惡其言似擔吾國却覓漢人笑囮之論也凡禁中宮殿之號官服之制禮典法令歲時節物其佗擬異域之制者不遑毛擧是亦再傳用之乎彼言七夕之事其本據於異邦書未嘗見者管見可笑也異邦古書往々載詳也先推曆年而當識彼妄說吾雄略朝二十二年者當漢土南朝宋順帝景明二年此年以後之書不及證順帝以前之書所謂牛女之說抄出左宜合考外宮鎭座以後漢土始言之則彼徒之說亦可也乎外宮鎭座數百年前漢土既有此言然曰幽契其妄說可笑之甚也彼言外宮鎭座以前雖漢土有牛女之說此異邦之事而已吾國七月七日修事祭兩宮衣食神大禮也是亦妄也朝家祭兩宮者王室之宗廟社稷也其祭祀有定年月日載國記官籍詳也夫祭祀有六色禁戒散齋致齋之法齋戒而後修神事若臨時觸穢則止其祭事然乞巧奠事江家次第及公事根源有諒闇觸穢之時猶行之文者何哉廼異邦乞巧也且庶人婦女實祭兩宮則非禮莫大焉延喜大神宮式曰凡王臣以下不得輙供大神幣帛其三后皇太子若有應供者臨時奏聞其三后皇太子尙無敕許則不得供於吾曹見奈之何況婦女觸穢之際乞巧穿針祈福壽子才乎今庶人詣拜神宮

よしいへるは誤なり唐の事を沙汰せは唐代の書によるへしさてまた玄宗の時宮中に錦をはり云々といへるは全く天寶遺事に見えたる文なるを事文類聚を引たるは誤也

隨園隨筆清袁子才作云、乞巧始于桂陽成武丁見于呉均續齊諧記

按に乞巧始于桂陽成武丁とは無稽なり袁氏博識を以てかゝる事をいひしはいかゝ乞巧は風土記に見えたり呉均は梁人なり風土記荊楚歲時記の作者は晋人なり此二書に乞巧の事委しくのせるをひかすして續齊諧記を引しは誤なり且其うへに此書には乞巧の沙汰更になしたゝ桂陽成武丁有仙道忽謂其弟曰七月七日織女當渡河暫詣牽牛とのせるのみなるを袁子才か見し本には乞巧の事も有しやいふかしきことなり

國學辨疑七夕祭兩宮辨

誠之鹽谷盈壽得命於先生欲辨七夕祭兩宮之妄說然淺見薄識安能得審之其命亦不可默焉蓋按吾邦朝野以七月七日曰七夕曰星夕爲牽牛織女二星會合之夜供種々瓜菓酒饌露香裁詩歌婦女望月以五色縷穿七孔針以呈牛女稱之乞巧奠公事根源曰始天平勝寶七年然不載續日本紀則訝矣又俗說始天長十年然不記續日本後紀則不可證江家次第曰延喜十五年之例用和琴然則其起原蓋在醍醐天皇以前乎國史官文未見其始矣倩惟牛女二星會合乞巧穿針之事漢土謂之尤久淮南子風俗通西京雜記史記風土記齊諧記續齊諧記述異記事文類聚瑯瑘代醉編藝苑雌黄事物起原五雜組等諸篇中所著全濫觴於異域浪說非吾邦典故又非祭事之遺風然近世度會氏其他神學者流說曰七夕二星會合之濫觴云者吾朝二十二代雄略天皇二十二年依天照大神告七月七日自丹波國比沼眞奈爲原奉迎豐受大神遷於勢州度會郡沼木郷山田原矣其豐受大神者則御食津神而御食津者水氣津也水德之義卽曰天御中主神天御中主者天水中主之義天一生水萬物之根元而與國常立尊爲一體天神七代第一大祖之大神也內宮者日神而火德也於兩宮神德有日月水火陰陽幽契之秘訣故迎豐受大神遷皇大神之近境者是妙契會合之理也故七夕守夜修祭事全濫觴於此便兩宮幽契之故事吾邦之祭祀也中古以異域道家

唐人の作と覺ゆれと歳時記としるせるは晋の宗懍作荊楚歳時記ならん唐の世にさき立事數百年前なり風土記も晋の周處なれは上に同し淮南子は漢世の作なれは唐に先たつ事千有餘年なり又異説まち〱になりしは梁にいたりて任昉か述異記沈約か齊諧記吳均か續齊諧記等なり亦二星を祭りて子孫をもうくる婦女の祈なりといふは無稽なり風土記に子をもうくる事を祈る事みえたり蠟にて小兒の像を作り水中にうかめて以てたはむるゝを化生といふ事は唐より起りし事歳時記事に詳にしるせり

年中行事畧式云星の宮の神事は筑前國大島の星の宮と云あり北は彦星の宮南は織女の宮兩社の間の川を天の川と稱す土人婚禮の望ありて女を得んと欲する人は川北の彦星の宮に祈る七月朔日より七日の夜半に至り近郷の男女群集して晝夜の神事嚴重なり川の中に二つの棚をかまへ名香を爐灯明をかゝけ瓜果物神酒等をそなへ竿のはしに五色の絲をかけ梶の葉に歌をかきてたむけ琴笛等を列らねたらひに水を湛へ星の影をうつし若男女の望ある者は其名前を短冊にしるし彦星の棚には男の短冊を置織女の棚には女の短冊をつらね七日の夜に必す風ありて彼短冊を川水に吹流す若婚緣の神慮にかなふものは男女の短冊たらひの水にならひ浮む是を緣定の神事と號する也古今の歌に秋風の吹にし日より久方の天の河原にたゝぬ日はなしとは此神事を讀るといへり

按に此神事は國の風俗なれはさる事も有へけれと古今集の歌を此神事を讀るといへるは更にいはれなき事にしてとるにたらぬ説なり

歳時故實云七夕を乞巧のまつりといへる事は事文類聚にこよひ香花をそなへ瓜菓酒炙を調て庭上に置竿のはしに五色の絲をかけて一事を祈るに三年の内に必す叶ふとあり唐の玄宗の時宮中に錦をはり瓜菓をそなへ牛女の二星をまつる嬪妃おの〱針に五色の絲を相そへ月にむかつて是をとほすとほるもの巧を得たりとて酒宴して朝にいたるとそ是を乞巧奠とそいふなる

按に乞巧奠の事いつの比より始りしにや慥ならされとも乞巧の事を始て物にしるせるは晋周處か風土記宗懍か荊楚歳時記等なりはるかにおくれたる事文類聚を引て唐の玄宗の時乞巧の事はしまれる

古今要覽稿卷第六十二

●時令部　七夕

●正誤

藻鹽草云ともしつま
灯是と云々是八雲御説

七夕つめ
○秋風の吹たゝよはすうき雲は七夕つめのあまつひれかも七夕つめとは或物に云彦星の妻なれはもし七夕つまかと云々又云七夕ひめと云々○按にともしつまとは二星一年に一度あひたまへはともしき義にとりての名なり灯の義にはあらす且其うへに是八雲御説とあれと八雲御抄には但非ㇾ燈歟とかゝせ給ふを月村齋宗碩はひか目もて見たるやかかる誤を仕出せしは罪さり所なきわさなるへし又七夕つめとは或物に云彦星の妻なれはもし七夕つまかといへるもいかゝ七夕とかきてたなはたとよめるも誤なり萬葉集に七夕と書る歌三首あれともいつれもなぬかのよとよめりたなはたつめとは織女星を萬葉集にはよめり或物云と引しは袖中抄によろつの髓腦にたなはたつ めといふ事不ㇾ釋もし是ひこほしのつまなれはたなはたつまと云歟と顯昭の説なり

年中行事古實書七月七日は七々の陽數を祝ふなりまた牽牛織女を祭る事は唐より事起り唐の歲時記風土記淮南子といふ書にも異説まち〳〵なりといへとも二星を祭て子孫をもうくる婦女の祈なり蠟にて小兒の像を作り銀盤に水を入水中に浮てもて遊ひたはむるゝ事あり是を化生と言なり我國にては孝謙天皇の御宇より始りて庭上を清め机を置香花供物して文を書すへ竿の先に五色の色（按に色字は絲字の誤寫）を懸盤に水を入牽牛織女の二星を移して一事を祈るに三年の內に必叶ふといへり此ゆへに乞巧奠の祭共いふなり

按に此書に牽牛織女を祭る事は唐より事起り唐の歲時記風土記淮南子といふ書にも異説まち〳〵也といふはいかにそや唐よりとは唐は世をさすか國をさすか國をさゝは唐山とか西土とか書すへく世をさゝは更にあたらすいかにとなれは歲時記事は

天のさよ橋

躬恒集○按に天の河に夜半にかゝるはしといふ義にて天のさよはしとはいふなり

行合のはし

新後撰和歌集○按に歌にひこ星の行合の橋をまちわたりつゝとあるを以てみれはこよひ二星橋の上に行あふ義をとりて行合の橋とはいふならん

同上爲尹集○按に機織の具にふみ木といふは機をおるに此木をふみはり或はたゆましなとして經緯をなすなり故にふみ木といふ此ふみ木をもて橋の代となして天の河にうち渡し侍る也ふみ木といふは此機躡かと略解にいへり

躡木橋

同上

たなはし

萬葉集詞花和歌集○按にたなはしはそき板もて渡すをいへり巧みに作りなしたる橋のけたうつはりなとを用ひて作りたるには非すたゝ棚をつりたることくに作りし也畧解にも橋をわたせるか棚のことくなれは棚橋と云といへり

棚橋

同上

かさゝきのはし

家持卿集古今六帖源順集淮南子風俗通○按にたゝかりにもふけていへるなり鵲といふ鳥の羽をならへ橋となし二星を渡し侍るとふるくよりいひ傳るのみ也

かさゝきのよりはの橋

新勅撰和歌集○按にかさゝきと鵲とより合てはしをなせはより羽の橋とはいふならん

かさゝきの雲井の橋

續古今和歌集○按に天の川を天にたとへたれは其天の川に渡す橋なれは鵲の雲井のはしとはいふなり

かさゝきの行合のはし

海人手子良集○按に是もより羽の橋といふにおなしく鵲とかさゝきと行合て羽と羽をならへ橋となれはなかいへり

もみちのはし

古今和歌集○按にかり設けていへるなり八雲御抄にももみちのはしはまことにあるにあらすたとへはあらましに云也と見えたり

うきはし

玉葉和歌集○按にうき橋は水にうきたる橋也なかるをもみちの葉の水にちりうかみたるをうきはしにみたてゝ云なり故にもみちをわたす波のうきはしと讀めり

壬二集
あまの河なを立かへれ七夕の
もみちの橋はうつろひぬとも
千五百番歌合　宮内卿
天の河もみちの橋やわたすらん
浮はしをよめる歌
いろ付にしの夕くれのそら
玉葉和歌集巻第四秋歌上
龜山院に奉ける七夕歌の中に　安嘉門院四條
またれつる天の河原に秋立て
もみちをわたす波のうきはし
夫木和歌集巻第十一秋部
七夕　後九條内大臣
たなはたもおなしかはらに立田姫
いそけ紅葉の秋のうき橋
家集七夕歌
天のさよはしをよめる歌　躬恒
雲はるゝ天のさよはしたえまかも
と渡りくらし七夕つめは

行あひのはしをよめる歌
新後撰和歌集巻第四秋歌上
題しらす　雅成親王
けふといへは暮るもおそく彦星の
行合の橋を待わたりつゝ
○釋名
たまはし
萬葉集夫木集○按にたまはしのたまは美賞の詞なりすへて物をほむるときは玉といふ字をかふらしむる也いはゆるくしけを玉くしけ琴を玉ことなといふたぐひなり
珠橋
同上
うちはし
萬葉集爲尹集○按にうちはしは柱なくして打わたすをいふ宣長云うちはしはうつし橋にてこゝかしこへ移しわたせはいふと略解にいへり
打橋
同上
ふみきのはし

もみちのはしをよめる歌

古今和歌集卷第四秋歌上

題しらす　よみ人しらす

天の川もみちを橋に渡せはや

たなはたつめの秋をしもまつ

新古今和歌集卷第四秋歌上

七夕の心を　權中納言公經

ほしあひの夕へすゝしき天の川

もみちの橋をわたるあき風

新勅撰和歌集卷第四秋歌上

法印猷圓

あまの河わたらぬさきの秋風に

もみちの橋の中やたえなん

續古今和歌集卷第四秋歌上

秋の歌中に　天台座主澄覺

天の川もみちのはしや秋をへて

わたれとたえぬ錦なるらん

續後拾遺和歌集卷第四秋歌上

題しらす　源兼氏朝臣

天の河もみちのはしの色よりや

こその渡りもうつろひぬらん

新千載和歌集卷第四秋歌上

七夕契をよめる　津守國道

銀河あきをちきりしことのはや

渡すもみちの橋となるらん

正治二年御百首

沙彌寂蓮

七夕のものおもふ袖やあまの川

もみちの橋をしくれ初けん

嘉元仙洞御百首

七夕　藤原俊定

七夕のあかぬ泪のしくれにや

もみちのはしの色まさるらん

五社百首

七夕　爲氏

七夕のちきりを秋のひとよとそ

もみちのはしにまち渡る哉

拾玉集

たなはたのけさの泪はまさる覽

もみちの橋に色やまかはん。

嘉元仙洞御百首　　　　　　　　　　　　法　印　定　爲
かさゝきのわたせる橋に七夕の
　　　契のみこそちかはさりけれ
延文御百首
　七夕　　　　　　　　　　　　　入道大納言實明女
かさゝきの渡せる橋の絶まおほみ
　　　七夕つめのまつや久しき
　　　　　　　　　　　　　　　左近中將源義詮
いつよりか渡し初けん天の河
　　　かはらぬ中のかさゝきの橋
永享百首
　七夕　　　　　　　　　　　　　　　　　兼　　良
まちわたる雲井はるかに思ふかな
　　　逢はほとなき鵲のはし
丹後守爲忠家百首
　七夕後朝　　　　　　　　　　　　　　　盛　　忠
七夕のわかるゝ時に心あらは
　　　人もちらなんかさゝきの橋
拾遺愚草

七夕
長き夜にはねをならふる契りとて
　　　秋まち渡るかさゝきのはし
あまの河わたせの波にかせたちて
　　　やゝほとちかき鵲のはし
かさゝきのよりはのはしをよめる歌
新勅撰和歌集卷第四上秋歌
　題しらす　　　　　　　　　　　　　殷富門院大輔
かゝさきのよりはの橋をよそなから
　　　待渡るよに成にけるかな
かさゝきの雲井のはしをよめる歌
續古今和歌集卷第四上秋歌
　光明峯寺入道前攝政家秋三十首に
　　　　　　　　　　　　　　　　　　正三位知家
かさゝきの雲ゐの橋の遠けれは
　　　渡らぬさきに行く月日かな
かさゝきの行合のはしをよめる歌
海人手子良集
かさゝきの行合の橋の月なれや
　　　猶わたすへき日こそ遠けれ

久といへることをよませ給うける
法　皇　御　製
秋をまつ年のわたりは遠けれと
ちきりそ絶ぬかさゝきの橋
題しらす
後伏見院御製
待わたるたえまはとをき月日にて
けふのみかよふ鵲のはし
元德二年七月七日内裏にて三首歌よませられける時七夕橋といふことをつかうまつりける
前中納言公脩
あふせをやたとらすわたるゆふ月夜
ひかりさしそふ鵲の橋
文永八年七月七日白川殿にて人々題をさくりて歌つかうまつりけるついてに七夕橋
後嵯峨院御製
かつらきの神ならねとも天の川
あくるわひしきかさゝきの橋
新拾遺和歌集卷第四秋歌上
題しらす
中務卿宗尊親王
あまの川おもふか中に船はあれと
かちよりゆくか鵲のはし
後二條院御製
幾秋か渡しきぬらん天の川
をのかよりはのかさゝきのはし
新後拾遺和歌集卷第四秋歌上
七夕
花園院御製
鵲の渡せる橋のひまをとをみ
あはぬ絶まのおほくもある哉
久安御時百首
七夕
花園院左大臣家小大進
たなはたの天のかは守こゝろあらは
かへさ渡すな鵲のはし
正治二年御百首
沙彌生蓮
天の河たえぬ契のわたりにや
羽をかはせるかさゝきのはし
龜山殿七百首
七夕橋
前藤大納言
秋ことにけふをさしてや天の河
わたし初けんかさゝきの橋

題志らす　加賀左衛門
いかなれはとたへ初けん天の河
あふせに渡すかさゝきの橋
新勅撰和歌集巻第四秋歌上
百首歌めしける時　崇徳院御製
天のかはやそ瀬の波もむせふらん
年まち渡るかさゝきの橋
續後撰和歌集巻第五秋歌上
七夕の心を　從三位行能
あまの河あさ瀬ふむまに更る夜を
うらみてわたる鵲のはし
續古今和歌集巻第四秋歌上
七月七日東三條院に奉らせ給ける　上東門院
くれをまつ雲ゐのほともおほつかな
ふみみまほしき鵲の橋
御返し　東三條院
かさゝきの橋のたえまを雲ゐにて
行合の空を猶そうらやむ
建保四年の百首に秋歌　光明峯寺入道前攝政左大臣
天の川くもゐを渡るあきかせに
行合を待つかさゝきのはし
新後撰和歌集巻第四秋歌上
正治二年百首歌奉りける時　宜秋門院丹後
天の川ふかきちきりはたのめとも
とたえそつらき鵲のはし
七夕の心をよませ給ける　院御製
秋ことにとたえもあらしかさゝきの
渡せる橋のなかき契りは
前大納言長雅
かさゝきのわたせる橋や七夕の
はねをならふる契り成らん
續後拾遺和歌集巻第四秋歌上
題志らす　祭主輔親
天のかはあきの契りのふかけれは
夜半にそわたす鵲のはし
新千載和歌集巻第四秋歌上
貞和二年七月七日三首歌講せられける時七夕契

七夕

御集
天のかは月のみふねののほりせに　中務卿のみこ
みかく光りや渡る玉はし

新葉集
七夕　冷泉入道前右大臣
くれ行はあふせにわたせ天の川
みつかけ草の露のたまはし

うち橋をよめる歌

萬葉集卷第十秋雜歌
七夕
天河打橋度妹之家道不止通時不待友（アマノガハウチハシワタスイモガイヘヂヤマズカヨハムトキマタズトモ）
右作者未詳按に此歌赤人の集に入たり

ふみきのはしをよめる歌
機躡木持往而天河打橋度公之來爲（ハタモノヽフミキモテイテアマノガハウチハシワタスキミガコムタメ）
作者未詳

爲尹集
をたまきをくりかへしなを契とや
ふみきの橋のほし合の空

棚はしをよめる歌

萬葉集卷第十秋雜歌
七夕
天漢棚橋渡織女之伊渡左牟爾棚橋渡（アマノガハタナハシワタスタナバタノイワタラサムニタナハシワタス）
作者未詳

詞花和歌集卷第三秋部
七夕をよめる　修理大夫顯季
天の河たな橋いそきわたさなん
淺せたとるもよの更ゆくに

鵲のはしをよめる歌

家持集
秋歌
かさゝきのはしつくるより天の川
水もひなゝんかち渡りせん

古今六帖
七日の夜　貫之
銀河みたえもせなんかさゝきの
橋もわたさてたゝ渡りせん

源順集
名にしおへは鵲のはし渡すなり
別るゝそては猶やぬるらん

詞花和歌集卷第三秋部

古今要覽稿卷第六十一

●時令部 七夕故事

●玉はし

牽牛織女の二星一年にひと度天漢を渡りて會合すといふも七月七日のよのみにかきりたる事萬葉集の歌によりてしられたりそのよあまの川を渡には舟にても渡り橋にても渡るよし同集にみえたり又此よあまの河に鵲來りて羽をならへ橋となして渡すよしは家持卿の集にみえ西土にては淮南子風俗通等にみえたり上にいふ舟或はしにて渡すといふ證は久堅乃天漢爾上瀨爾珠橋渡之下湍爾船浮居と萬葉集 みえたり たまはしのたまは潤飾の詞なりさてうちはしふみきのはし棚はしなといふ橋の名もふるくよりありいはゆる天河打橋度妹之家と同上みえふみきのはしは機躡木持往而天河打橋度と同上 いひ又ふみ木のはしの星合の空と爲伊卿集 みえたりたなはしは天漢棚橋渡と萬葉集 みえ天の河たな橋いそきわたさなんと詞花和歌集 みえたり

鵲のはしは和漢共にいふ事なり歌によめるはかさゝきのはしつくるより天の川水もひななんかち渡りせんと家持卿集 みえたるを初とせり西土の所見漢より既にあり烏鵲塡レ河成レ橋度ニ織女一と淮南子 みえ織女七夕當度レ河使レ鵲爲レ橋と風俗通 見えたり又かさゝきのよりはのはしとよめるは新勅撰集に見えかさゝきの雲ゐのはしは續古今集にいてかさゝきの行合のはしは海人手子良集にいてたりもみちのはしとよめるは古今集にいてたるを初として勅撰の集家集等にあまた見えたりうきはしは玉葉集に見え天のさよはしは夫木集に見え行合のはしは新後撰集に見えたり

○和歌

たまはしをよめる歌

萬葉集卷第九 雜歌

七夕歌一首

久堅乃天漢爾上瀨爾珠橋渡之下湍爾船浮居雨零而風不吹登毛風吹而雨不落等物裳不令濕不息來益常玉橋渡須

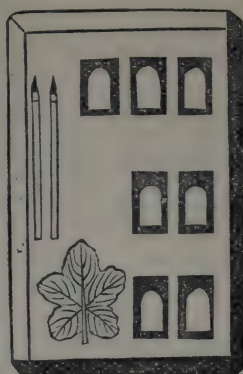
右件歌或云中衛大將藤原北卿宅作也

夫木和歌集卷第十一 秋部

乞巧奠

荆楚歳時記天寶遺事○按に是夕人家婦女結㆓綵縷㆒穿㆓七孔鍼㆒或以㆓金銀鍮石㆒爲㆑鍼陳㆓瓜果於庭中㆒以乞㆑巧有㆓蟢子㆒網㆓於瓜上㆒則以爲㆓符應㆒と荆楚歳時記にしるせるを以てみれは人々巧を得事を願ふて其願かなふは蟢子瓜上に網するを以て巧を得るしるしとせり又蛛網稀密以爲㆓得㆑巧之候㆒密者言㆓乞多㆒稀者言㆓巧少㆒と天寶遺事にしるせり此義を以て乞巧奠といへり

御歌被ニ書付ニテ後其カチノ葉ニ供物ヲ包其上ヲ紙ヒネリニテ十文字ニ緘ルナリ供物ハ秋ノ景物ナトヤウノモノ也委ハ不レ及レ見此外不レ知ニ爲レ指事一

後陽成院以來年中行事所載圖

廣蓋に硯七面御筆一對楮葉如レ圖盛レ之從ニ禁裏ニ院中へ被レ爲レ進レ之也

○和歌

夫木和歌集卷第十一秋部　七夕　前大納言兼宗卿

六百番歌合

くれ竹にすくる秋風さよふけて

まつるほとにやほし合の空　正三位經家卿

同

たれもまたけふ七夕をまつりつゝ

いのる心は空にしるらん

寶治二年百首乞巧奠

見るまゝに庭のともしひかすかにて

七夕祭り夜は更にけり　信實朝臣

○釋名

たなはたまつり

延喜式○按に牛女の二星をまつるをいへり此まつり神祇官年中行事にしるさゝれは神官此祭にはあつからさる也藏人此祭をあつかふ事江家次第年中行事秘抄公事根源等にくはしくしるされたり且其うへに諒闇をもさけす穢をもいますしてまつるをみれは神祭の沐浴齋戒して愼しみ祭るとはひとしからさるなり

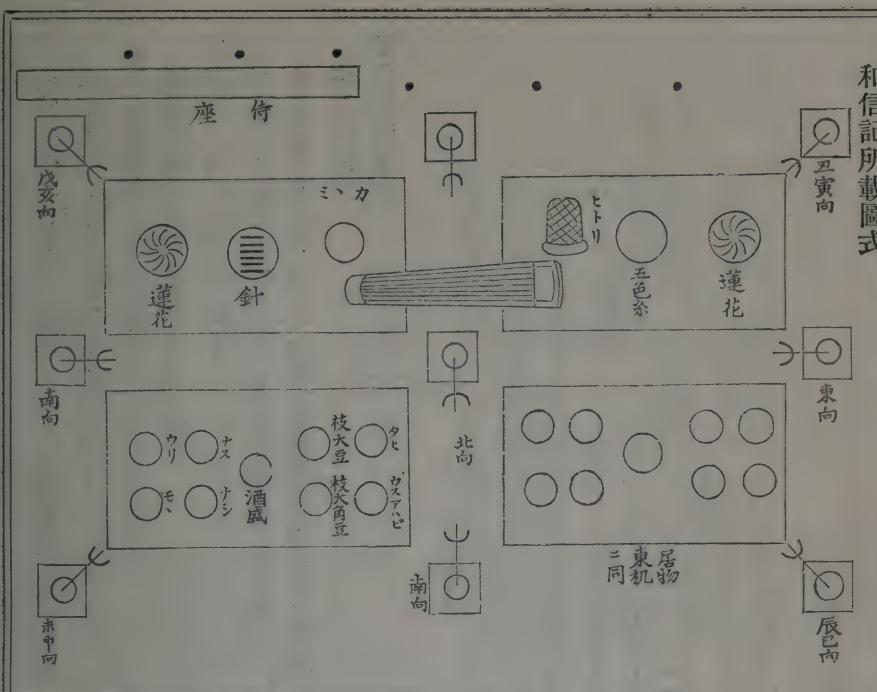
織女祭

同上○名義同上按に萬葉集には織女の二字たなはたつめと訓せり又棚機棚幡と書てたなはたとよませたり

七夕祭

寶治二年百首和歌公事根源○按に七月七日の夕に二星をまつる故にしかいへり後世七夕をたなはたとよめるは誤りなり

和信記所載圖式

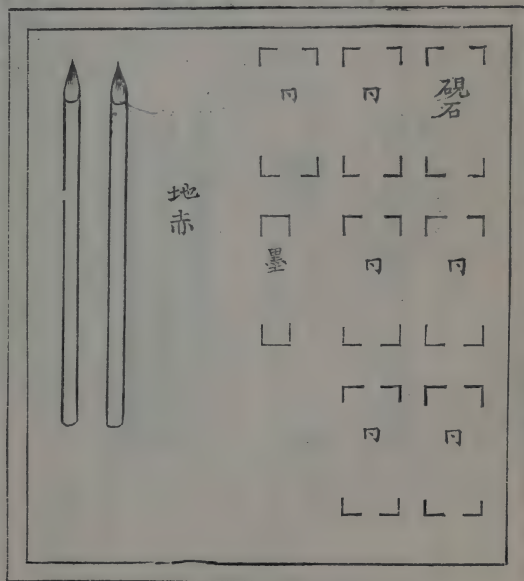
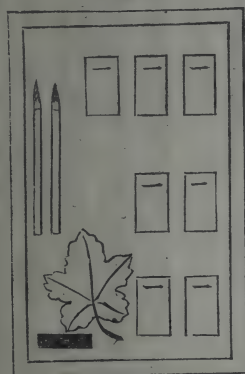
侍座
戌亥向
丑寅向
カヽミ
針
蓮花
ヒトリ
五色糸
蓮花
南向
東向
北向
ウリ
ナス
モヽ
ナシ
酒盛
枝大豆
タヒ
枝大角豆
ウスアハビ
居物東机ニ同
未申向
南向
辰巳向

女房私記所載七夕に備ふる御硯調様

硯石
墨
地赤

是を御殿の棟に上るなり

禁裡院中年中内々御儀式記所載圖

廣蓋

前ニカチノ葉アリ

御硯調様廣蓋ニ御硯石計七ツ御筆墨アリ

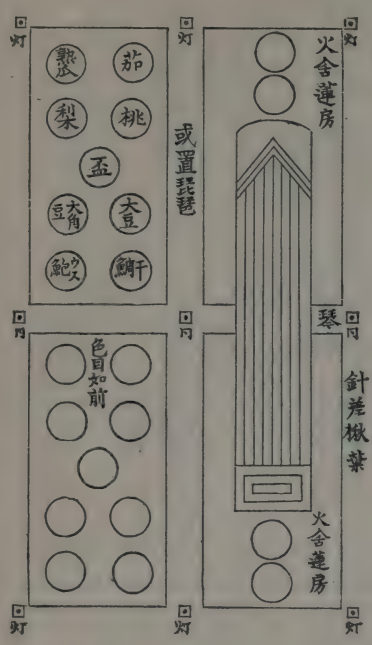
西宮抄穢時尙祭例延長應和二年雖レ穢尙祭見二一代御記一貞元四年內裏有レ穢時乞巧奠如レ常云々

諒闇時被レ行二乞巧奠一事

延久五年七月例也藏人着二吉服一

産後百日內乞巧奠有レ憚事

元永二年五月二十八日中宮於二三條殿一御産事皇子七月七日不レ被レ行二乞巧奠一是御産以後百日內有レ憚之故云々

穢中乞巧奠例

永祚二年七月宮中有二穢事一而依二舊例一有二乞巧奠大內雖レ有二穢氣一依二延喜十一例一不レ止之見二西宮裏書一相尹記正曆元年七月七日乞巧奠案レ之去二日大入道殿薨給

公事根源元云夜に入て乞巧奠あり云々觸穢のときも猶行はる云々

雲圖抄所載圖式

七月七日乞巧奠事清涼殿東庭供レ之南階間立レ之或立二御倚子於東庭一伺二見二星之佳會一臨レ曉召二侍臣一令レ奏二管絃一

火舍蓮房
或置琵琶
琴
針差楸葉
火舍蓮房
灯
茄　桃　熟瓜　梨　盃　大豆　大角豆　干鯛　蒸鮑
色目如前

立二朱染高机四脚一東西妻立レ之或說又南北妻立レ之以二掃部寮筵一爲二下敷一

雨濕之時仁壽殿西砌內奠レ之

東庭

東

雜色所衆等候二南廊壁下一終夜巡撿臨レ曉散二香粉一也

灯一向逐南或又相對各有二打敷一

女房私記云七夕禁中より御硯參らせらる是洞中の事右京大夫持參也內侍受取これを獻する則梶の葉也手向の歌書つけらる是を御硯蓋にのせて內侍持出て藏人へわたさるゝ藏人うけとりて七夕へ備へらる御殿の棟へ上る也御硯調樣廣蓋に硯石計七つ筆墨有梶の葉七枚御硯七面御筆七對いもの葉に露を包みいの子草にて結ひて梶の皮七筋素餅二つ廣蓋にのる院中へも右の通り被レ進二御歌一書付られて後其梶の夕に供物を紙捻にて十文字に結也供物は秋の景物なと也此硯進らるゝ時女院樣へ御所よりすゝし裏御附帶進らせらる

後陽成院以來年中行事云七夕手向の御歌有　梶葉七枚　御硯七面　御筆七對　芋葉に露を裹みゐの子草にて結て被レ進二院中一右の硯筆梶葉を廣蓋に盛り表使右京大夫持參して院御所へ參上內侍受取獻レ之則梶葉に歌を書せられ是を硯蓋に載て內侍持出て藏人に渡す藏人受取て是を七夕に備ふるなり御殿の棟へ上る也御歌書せらるゝの後其梶葉に供物を裹み其上を紙捻にて十文字に結ふなり供物は秋の景物也

恒例行事略云七月七日手向和歌是は梶の葉七枚御硯七面御筆二管墨一挺芋の葉に露を包みいの子草にて結ひ梶の木の皮七すちそへ御歌を書せられてたむけさせ給ふ院中にも進せらるこれは廣蓋にのせ御物師頭右京大夫持參なり堂上方和歌詠をはりたゝし披講の御規式はなし又御遊とて音樂ありむかしは乞巧奠とて御殿の庭に机を四脚たて燈臺九本燈あり机のうへに色々のものをすゑ箏のこと箏柱をたてゝおき終夜そら薰物ありてたらひに水をいれ星をうつし手向らるゝよし乞巧は唐土より起り星に願ことをいのるをいふ本朝にては　孝謙天皇天平勝寶年中にはしまるよし公事根源にみえたり　桃園院御代には七遊とて詩歌管絃をはしめ七種の御遊あり御當代は御沙汰なし

江家次第云七月七日乞巧奠事　諒闇時猶祭天曆八內裏穢時猶祭應和二　雨濕時設二於仁壽殿西庇下一行事藏人終夜束帶監臨候二小板敷一雜色以下亦終夜遞撿二知之一束帶

年中行事秘抄云觸穢時乞巧奠事

　江記云寬治八年七月六日乙巳自レ院判官代季安奉レ仰示送云觸穢時乞巧奠可レ被レ行否如何即令レ申云

ふら　しゆてんのかみ（主殿首）　今案つくゑはうちにも春宮にもふるくはつしよれう（圖書寮）のつくゑをもちゐられたりしかるをゑんき（延喜）十七年にうちに候し朱のつくゑをとゝのへまうけられてのちそのつくゑをもちゐらるとうくう（春宮）にはもくれう（杢寮）しらき（白木）にてたてまつるたゝしとはのゐん（鳥羽院）のとうくう（東宮）の御時しらかは（白川）のゐむよりこれをたてまつられたりと見えたりその日あめふる時にはひんの所にとゝのへまうくふるくはきよやうある時はくわんくゑん（管絃）にたへたるともからめして所のことをはり又別の仰にて詩歌の事もあり

康富記云享德三年七月丁巳抑今夕於二禁中一七ツ物七ツ（以上五十計也）其後御樂可レ有レ之由被レ定此事後小松院御代被二興行一之後絕仍洞院内府有二申沙汰一旣可レ有レ之由治定之處樂人等有下申二子細一事上各不二參候一仍俄被レ略云々

院中御內々御儀式云七夕從二禁中一御硯まゐらせらる右京大夫持參なり內侍うけとり候て獻レ之梶のはに歌を被二書付一御硯蓋にのせ內侍持いてゝ藏人にわたさるうけとりて是をたなはたにそなふる也廣蓋に御硯石七つ御筆墨あり

建武年中行事云七月七日藏人御てうとをはらふ夜に入て乞巧奠あり庭に机四をたてゝ燈臺九本おの〳〵燈火あり机に色々の物すゑたりしやうのこと柱たてて是を置き机のひとりによもすからそらたきあり陰陽寮ときをそうすことちに三の樣あり常ははんしき調半呂半律あきの調也是は秘事にて侍ゆゑしる人すくなし

體源抄云乞巧奠に箏をしらへて机におく事机四脚なり東西に是をたて又一脚も侍也二脚あらは東の机は双調にしらふへし西は本調にしらへて箏は二張なるへし但一張たて机も一脚あらは平調のことくにしらへておくへきなり

公事根源云乞巧といふ事もろこしより事おこれり七夕祭ともいふ也

禁中年中行事略云七月七日云々七夕手向和歌梶の葉七枚御硯七面御筆七對なり芋の葉に露を包みいの子草にてゆひ院中へ進せらる廣蓋にのせ右京大夫持參なり

和歌御會手向の御樂あり御樂始に同し

同上 みえたるは應和二年貞元四年の例を引てゑるせりゑかるをいかなる義にや產後百日內乞巧奠有レ憚事を 年中行事秘抄 ゑるせる是は元永二年五月中宮於二三條殿一御產あり其七月七日乞巧奠を行ひたまはさるよし 同上 ゑるせり是五月より七月七日にいたりて百日にみたさる故なり猶くはしくは後にゑるせり

知信記云天承二年七月七日夜有二乞巧奠事一下官依レ爲二行事一着二束帶一參レ宮供二奉奠物一其儀口畫御座庭中掃部寮敷二葉薦二枚一其上施二長莚一東西妻 其上立二赤漆高机四脚一皆東西妻件机木工寮進レ之而依二異樣美麗造調一爲二永年物一在レ廳今日用レ之 北二脚居二十六坏一色目見二差圖一 南二脚中央橫置二箏一張南西机一辰巳角居二火取一口一有レ籠焚二名香一 其西敷二楸葉一婉置二五色絲一開レ蓋 其西敷二同葉一盛レ蓮南東机未申角居二御鏡一面一穿二五色絲一 其東敷二楸葉一枚一差二金銀針各二一 其東敷二同葉一又盛二蓮花一立二燈臺ツヤ九本一三行立レ之有二打敷一 北廓北砌內掃部寮司敷レ帖爲二侍等通夜座一 諸司女口官侍等束帶供奉雜役長以下無官侍兼日口催當日參集刻限結番次第通夜祇候檢二知行事一宮司同前自二御所一申出物

琴　火取　御鏡

內侍女官持二參白粉一散口廳辨二備衝重一進二大盤所一又居二侍所饗一如レ例廳相口口云乞巧奠料米五石四斗油三升口口

東宮年中行事云七月七日云々おなしき日きつかうてん(乞巧奠)の事この日のゆふ懸にきやうし(行事)のくら人(藏人)ひのこさ(晝御座)のみす(簾)をたれて(垂)にはに(庭)ひろむしろ(廣莚)三枚をゑきてゑゆてん(主殿)のかみ(首)のゑも(下部)へこれをゑくそのうへにつくゑ(案)をたてゝまつり(祭)の物ともをそなふたいりやく(大略)さしつ(指圖)にみえたりくら人(藏人)ならひに所のさうしき(雜色)おなしき所のゑゆ(衆)たちはき(帶刀)をのをのそくたいをしてこれをやくす又同ともからよもすからかはる〱この所に候ちやうくわん(廳官)むもせう〱候へきなりあか月にのそみてつくゑ(案)ならひにむしろのうへにかう(香)をちらすあけほのかたにまつりのくとも(供)をてつす(撤)さう料むしろ かもれう(掃部寮) ゑろきのつくゑ(白木案)四きやく もくれう(杢寮) 御かゝみ(鏡) 御ひとり(火取) ゑやう(箏)のこと こかねゑろかねのはり(針) 香粉等已上自二御所一給レ之

奠物等 蓮花トウタイ(燈臺)已上チヤウ(廳)ニマウク(儲)あ

古今要覧稿巻第六十

●時令部

●たなはた祭

たなはたまつりの事ふるくは書に見えされと七月七日織女祭と(延喜式)見えたるを初とせり是より百四十有餘年前天平勝寶七年にはしまりしよし(公事根源)見えたれとも是を續日本紀にたゝすに此事なし七月七日乞巧奠云々天平勝寶七年勘文云々と(年中行事秘抄)見えたりこれらによりて此年織女祭のはしまれるよしを一條禪閤のしるされしにや又天平勝寶七年の勘文にはしめてたなはたをまつれる事を書つらねたるを兼良公は見給ひしによりて公事根源にしるされしにや此勘文いつれの書にいてたるやいまた見あたらすしかはあれと延喜前より此事年々に行はれけるによりてこそ式にはしるされたれさて此御時より年々歳々に祭器祭供等も追々設けられしと見えて延喜式よりも江家次第に種々の祭器を書載たりくはしくは上に出せは畧せりさて織女祭といふは七月七日の夕に祭る故にしかいへり又乞巧奠ともいへり是西土より事起れり乞巧といふことも唐土より事おこれり七夕まつりともいふ也香花をそなへ供くをとゝのへて庭上にふみを置てさほのはしに五色のいとをかけて一事を祈るに三年のうちに必叶といへり此故に乞巧と申なり(公事根源)といへり扨たなはたまつりといふ時は神祇にかゝはることく聞ゆれと乞巧奠といふときはさしたる祭祀とは思はれす且その上神祇官年中行事にたなはた祭の事見え侍らす又さしたる恒例にもあらさるにや諸家の年中行事に乞巧奠の事をかきのせすしかりといへとも此祭年々かくへきにもあらさるにや諒闇時猶祭と(江家次第年中行事秘抄)みえたり江次第にしるせるは村上天皇天暦八年の例也是は朱雀帝天暦六年に崩御し給へは八年は諒闇の中なり行事秘抄の方は延久五年の例也是は後三條天皇延久四年十二月天皇傳ニ位於太子ニ而明年五月崩し給ふしかるを其年七月祭りし例を擧たり又天暦八年より延久五年まては百二十年の間也後世いつれも此例によりて諒闇をさけすして乞巧奠行はれしと見えたり又内裏有ㇾ穢時猶祭と

殿中御對面記○按に上にいふ御遊を七色設けられてさま〳〵御輿をつくされし事をいふなり親長卿記には七種の事ありと記され御ゆとのゝ上の日記にはけふの御あそひ七色とあるも皆同事なり

七種法樂

宣胤卿記○按にこれは法樂といへは七夕二星に七種の物を以て手向祭る事をいへり御ゆとのゝ上日記にいはゆる七日七色の御たむけとて御歌鞠御碁花御貝おほひ御楊弓御かうありとゑるせるこれ等おなし事也

七色御手向

御ゆとのゝ上の日記○名義同上

長寂譽入道空濟法眼富就朝臣俊通三善清房永有景益良世法眼等也酒畢又有二楊弓碁鞠等一依レ乘レ興也

又引二宣胤卿記一云永正十五年七月七日(上略)又於二此亭一(大納言方)七種法樂左金吾(同中將基親朝臣)四條山科左少辨已下來和歌連歌一折楊弓鞠(七瓶花)酒素麪等也

又例年梶七葉書二六字名號一傍書レ歌

天の川み舟にのりの手向をは
　　と渡るけふの梶にこそかけ

園大暦云觀應二年七月七日(甲子)自二禁裏一被レ下二御箏一乞巧奠料可二調進一云々七日夜有二御遊樂奏事一

殿中御對面記云七月七日御對面已下同前梶の七葉に御詠あそはされ候也云々常德院殿御時は笠懸犬追物御歌御連歌御鞠楊弓御酒以下七種の御遊ひ御座候時も御入候

御ゆとの丶上の日記云天正十八年七月七日七色御たむけとて御歌鞠御碁花御貝おほひ御楊弓御かうあり外樣內々ゑかうあり

又云慶長六年七月七日けふのみあそひ七色詩歌くわけん御やうきうたてはな御まり御こせつけせいくわとさまないないいつれもやくしやたち御ゑかうあり

恒例行事略云七月七日手向和歌是は梶の葉七枚御硯七面云々桃園院御代には七遊とて詩歌管弦をはしめ七種の御遊あり御當代は御沙汰なし

四季法禮云七月七日には七度食し七度浴し七遊すると云も皆陽の數を賞祝事也云々

年浪草云七種の舟は色々の寶を七色舟に積て手向をいふ七夕には七の數を用ゐ七遊なと侍り

日次記事云七月初七日飛鳥井家(井)難波家蹴鞠會(有二上賀茂松下露拂并枝鞠上足等之儀一堂上及地下之門弟同聚〇年浪草云兩家正二位忠敎卿之孫忠敎卿京極攝政師實公五男號二四條一難波飛鳥井兩家之祖也)又云西東本願寺立花(昨晚東西本願寺末派并家禮以二花數種一作二船狀一又造二槽形一中建二草花數品一獻二門主一并置二於堂上一今日諸人窺二見之一)六角堂池坊立花(有二立花數瓶砂物等一人爭見レ之)

〇釋名

七遊

おもひのまゝの日記〇按に詩歌管弦連句連歌鞠御酒此七種を以て御あそひありいつれも七の數をもちゐ侍る故に七遊とはいふなり

七物

康富記〇按にこれも七遊とおなしく七いろの御あそひなり

七種の御遊

これらは其御代其時によりて異なるなり故に後普光園院の御記には七百首の詩七百首の歌七調子の管絃七十韻の連句七十韻の連歌七百の數のまり七獻の御酒とこと／＼く七數をそなへて遊を設けられしかは七遊とこそいふへけれ以下はたゝ七種の遊を設けられしのみなれは七つ物といひ七種の事といひけふの御遊七色なとゝありて七數を用ゐさるは時の興廢によりてかはれる也親長卿記には鞠楊弓樂郢曲和漢五十韻和歌七盃飮とみえたるを以ておもふに七の數を用ゐたるは七盃飮の名のみ也和漢五十韻とあるにても他は七數を用ゐさる事志られたり諸家の記に御遊の品異同まち／＼なり此等の事は其時代時宜によれは彼を是とし此を非とするにも及はし偖又いつの比よりか始りけん此日飛鳥井家難波家蹴鞠の會あり又六角堂池坊東西兩本願寺立花を設るよし(日次記事)志るせりこれ等も七遊より事起れる也鞠花は七物の數の中なれはさもあるへし扨凡の物多くは西土より事起りて皇國に傳りぬれと皇國のみにありて西土に志らぬ事まゝありこれ風俗の志からしむる所にして國異なれは物異なる理なりこれらのあそひ西土にて志らさることは彼土の書籍中に一もうはさなきによりてなり

おもひのまゝの日記云七月にもなりぬ吹たつ風のけしきやう／＼ものおもしろきころなり七日は七百首の詩七百首歌七調子の管絃七十韻の連句七十韻の連歌七百の數のまり七獻の御酒なりさま／＼れいの事なれは志るすにおよはす云々

康富記云享徳三年七月七日丁巳抑今夕於ニ禁中一七物七(以上五十計歟)御樂可レ有レ之由被レ定此事後小松院御代被ニ興行一之後中絶仍洞院前内府有ニ申沙汰一既可レ有レ之由治定處樂人等有下申ニ所存一事上各不ニ參候一仍俄被レ略了

實石類書引ニ親長卿記一云文明十二年七月七日晴今日有ニ七種事一

一鞠　一楊弓

一樂　一郢曲(依ニ人々故障一無レ之後改ニ圍碁一了)

一和漢五十韻　一和歌(兼日七首題賦レ之當日披講(講師、元長、讀師、飛黄門、)飛鳥井中納言披講之時來了(中略)了早歸了、)

一七盃飮

人數

予中御門中納言飛鳥井中納言侍從中納言新宰相(基綱)元

古今要覽稿卷第五十九

●時令部

●七遊 七物

七月七日七遊といふ事ふるくは物にみえされとも此事のはしまれるは南北兩朝の頃よりや初りけん其證は七月にもなりぬ云々七日は七百首の詩七百首の歌七調子の管絃七十韻の連句七十韻の連歌七百の數のまり七獻の御酒なりと おもひのまの日記 みえたり 此日記は後普光園院攝政良基公のしるさせ給ふ所なり 此說によりて此公の曆年をおしはかるに貞和二年に關白にならせ給ふ貞和二年は建武に後るる事十一二年なれは此以前より此遊ひありし事しられたりしかはあれと此日記に年月をしるし給はされは若年の時しるし給へるや晩年に及たまへる時なるやいなやはしるへからされと嘉慶二年に薨し給へり嘉慶二年は後小松天皇の在位の中なり後小松院御代七物といふもの興行ありし事あり享德三年七月七日丁巳抑今夕於二禁中一七物七 以上五十計歟 御樂可レ有之由被レ定此事後小松院御代被二興行一之後中絕と 康富記 いへり後小松院の至德元年より上にいふ所享德三年まては七十一年なり此年曆の間いつの頃よりか中絕したるをふたゝひ興行せられしとみえて洞院內府有二申沙汰一既可レ有レ之由治定と 同上 記したり又文明十二年七月七日晴今日有二七種事一と 親長卿記 見えたるは享德三年に後るゝ事二十六年なり又七種法樂七色御手向といふ事あり永正十五年七月七日 上略 又於二此亭一 大納言方 七種法樂と 宣胤卿記 みえたり天正十八年七月七日七色御たむけとて御歌鞠御碁花御貝おほい御楊弓御かうありと 御ゆとのゝうへの日記 みえたりこれらの二箇條は二星にたむけの爲に設けられし事とおほしき也桃園院御代には七遊とて詩歌管絃をはしめ七種の御遊ひあり御當代は御沙汰なしと 恆例行事略 いへるはもつとももちかきこと也さて諸家の日記によりて考ふるに七遊の事はおもひのまゝの日記にはしめてみえそれより後は御代御代或は廢し或は行はれしとみえて此事後小松院御代被二興行一之後中絕と 康富記 記せるにてもしらる扨また七つ物といひ七種の事といひ七色の御遊といひ七遊といふ名はかはりたれといつれもおなし意なるへし

七月七日內裏に七首歌奉りし時

前大納言爲世卿

幾秋も君そうつしてみかは水
くもゐにたえぬ星あひのかけ

夫木和歌集卷第十一秋部

七夕　參議爲相卿

海道名所菊川七夕
浪にいまうつしてみはや菊川の
名もたよりある星合のかけ

民部卿爲家卿

文應元年毎日一首中
君すめは千代もかきらしかめのをの
河瀨にうつす星合の影

星合の濱とよめる歌

雲葉集　土御門院

いせのうみ深きちきりの秋ならは
こよひ影みん星合のはま

天つ星合とよめる歌

新古今和歌集卷第四秋歌上

花山院御時七夕の歌つかうまつりけるに

藤原長能

袖ひちて我手にむすふ水の面に
あまつ星合のそらをみる哉

新後撰和歌集卷第四秋歌上

七夕　新院御製

秋風も空に涼しくかよふなり
天つほしあひのよや更ぬらん

玉葉和歌集卷第四秋歌上

弘長百首歌に七夕を　前大納言爲家卿

久かたの雲井はるかに待わひし
天つ星合のあきも來にけり

秋の七日の星合のそら

つゆの袖をかへすなこりの夢なれや
　　契りまさしき星合の空

壬二集

七夕

露ふかき庭のともしひかすかにて
　　よや更ぬらん星合のそら

天の河ちとせの秋をいのりても
　　あふこと絶ぬほしあひの空

千五百番歌合　　　　雅経

久かたのあまのは衣まれにきて
　　契りはつきぬほし合のそら

草庵和歌集

七夕雲

さそなうきけふより外は天雲の
　　よそなる中のほしあひの空

七夕橋

今日はよも雨にさはらし鵲の
　　はしよりかよふ星あひのそら

七夕月

あかすのみさそ契るらん月影も
　　天の戸わたるほしあひの空

七夕鳥

鳥の音も心あらなんほし合の
　　くもの關戸のあけまくもうし

入道二品親王家五十首歌に

たか中も吹よりかはる秋風を
　　ちきりと頼むほしあひのそら

星合のかけとよめる歌　　　　能因法師

後拾遺和歌集巻第四秋上

長能か家にて七夕をよめる

秋のよをなかき物とは星合の
　　かけみぬ人のいふにそ有ける

新古今和歌集巻第四秋歌上

宇治前關白太政大臣の家に七夕の心を讀侍ける
　　　　權大納言長家卿

年をへてすむへきやとの池水は
　　星合のかけもおも馴やせん

新後撰和歌集巻第四秋歌上

いつはりのなきためしをや契り置て
　待ならひけん星合の空　　よみ人しらす

題しらす
待えつるなみたのひまの秋風に
　こよひや袖をほしあひの空

五百番歌合に　　權中納言實興卿
まとをなる契りなからも秋をへて
　ぬるよ數さふ星合のそら

延文御百首
七夕　　沙門法守
九重のにはのともしひかけふけて
　星合の空に月そかたふく　　藤原實夏
くものうへにくもらぬかけや星合の
　空にかゝくる庭の灯火　　從二位源有光
雲の上にたえせぬ秋をかさねても
　つかへてみまく星合の空

永享百首　七夕　　性脩
いつよりか梶の七葉にことのはを
　かきて手向しほし合の空

丹後守爲忠家百首
乞巧奠　　爲經
おもふことかなひやするとみとせまて
　星合の空を祭りつる哉

五社百首
七夕　　俊成卿
天のかは星合の空をうつすより
　秋はことなる折とみえけり
ちきりけん秋のはしめよ天のかは
　心もふかしほし合のそら

弘長百首　　基家
あけかたのふしの煙りや星合の
　そらの別れのおもひ成らん

拾玉集
庚申七夕
今年こそ待えてかひもなかるらめ
　けふはねぬよの星合の空

七夕
なか〳〵にやみなるへしと思ひけり

弘安元年七夕
あけかたのふしのけふりや星合の
　空の別れのおもひ成らん
　　　　　　前中納言定家卿

一字百首
なか月のありあけの月のあなたまて
　心はふくる星合のそら

寶治二年御百首
　乞巧奠　　　　　　　　御　　製
もゝしきや庭のくれ竹よもすから
　待ちてそみつる星あひの空
　　　　　　　　　　　　後　成　女
ほし合の空たきものや匂ふらん
　七夕つめのよはのまくらに
　　　　　　　　　　　　但　　　馬
ほしあひの空に光やまさるらん
　影もくもらぬ庭のともしひ
　　　　　　　　　　　　有　教　卿
星合のそらに光りをまかへつゝ
　ほのかに殘る庭のともし火
　　　　　　　　　　　　成　實　卿

ほし合の空たのめせぬ秋ことに
　光りくまなき庭のともし火
　　　　　　　　　　　　信　　　覺
待わふる秋の七日のともしひの
　庭にかけみるほしあひの空
　　　　　　　　　　　　爲　繼　朝　臣
星合の空までにほへ庭の面に
　思ひをこかすよはのたきもの
　　　　　　　　　　　　爲　氏　朝　臣
ひかりそふ玉しく庭のともしひに
　面影みゆるはし合のそら
　　　　　　　　　　　　少　將　內　侍
ほし合のそらたきものゝ煙まて
　七夕つめのおもひにそかる
　　　　　　　　　　　　辨　　內　　侍
おくことのねには立ねとをたえせぬ
　なかきためしの星合の空

新撰和歌集
　正平十三年七夕七首歌講せられし時待七夕とい
ふことをよませ給うける　後村上院御製

六百番歌合
くれ竹にすくる秋風さ夜ふけて
まつる程にやほしあひの空
法橋顯昭

同
さためおく星合の空の志るしとて
秋の志らへにことち立なり
源仲正

家集乞巧奠
夜もすから星合の空にたてまつる
かうの煙や雲となるらん
民部卿爲家卿

嘉祿四年百首乞巧奠
玉志きや雲ゐの庭におくことの
をのつからなる星合のそら
陀阿上人

七夕の心を
星合の空たのめとや成ぬらん
けふしもそゝく秋のむらさめ
藤原義孝

家集和歌中
露くたす星合の空をなかめつゝ
いかてことしの秋をすくさん
家長朝臣

九條大納言家にて七夕歌七首當座にてよみける中
志ほれきてこよひはかりや久方の
あまのは袖もほし合の空
前大納言忠良卿

正治二年百首
七夕の雲のころもに風たちて
うらめつらしき星あひのそら
慈鎭和尚

同
たなはたの心やこよひはれぬらん
雲こそなけれ星合のそら
前大納言隆季卿

同
ほしあひの空はこよひそ天の川
もろてにいそけ妻むかへ舟
法橋顯昭

喜多院入道二品親王家五十首
待かぬるこゝろにさよや更ぬらん
月かたふきぬ星合のそら
順德院御製

百首御歌
さをしかのつれなき妻もある物を
まつをうらみの星合の空
後九條內大臣

袖ひちて我手にむすふ水の面に
あまつ星合の空をみる哉　藤原長能

七月七日たなはたまつりする所にてよめる　祭主輔親

くも間より星合のそらを見渡せは
しつこゝろなき天の川波

新勅撰和歌集卷第四秋歌上
法性寺入道前關白家にて七夕の心を讀侍ける　菅原在良朝臣

天の河ほしあひの空もみゆはかり
立なへたてそよはの秋霧

七夕後朝の心をよみ侍ける　前大納言隆房卿

たまさかに秋のひと夜を待えても
あくる程なき星合のそら

續後撰和歌集卷第四秋歌上
七夕の心を　土御門院御製

秋もなほ天の河原に立なみの
よるそみしかき星あひのそら

續古今和歌集卷第四秋歌上
秋の御歌の中に　今上御製

いくとせの秋のひとよをかさぬらん
思へは久しほし合の空

續千載和歌集卷第四秋歌上
家の六百番歌合に乞巧奠　後京極攝政前太政大臣

ほし合の空のひかりとなるものは
雲ゐの庭にてらすともしひ

風雅和歌集卷第十三戀歌四
寄二七夕一戀といふ事を　後伏見院御歌

さらにこそ忘れしことのおもほゆれ
けふ星合の空をなかめて

新千載和歌集卷第四秋歌上
正安三年七月七日七首歌めしけるついてによませ給うける　後二條院御製

別路にかたみもとめす夕月夜
あかつきやみの星あひのそら

夫木和歌集卷第十一秋部
七夕　前大納言兼宗卿

なぬかひとよめる歌

古今六帖

七日の夜　　　　　　　みつね

なぬか日のはや暮なゝん久かたの

天のかは霧たち渡るへく

なぬかとよめる歌

後拾遺和歌集卷第四秋上

七月七日によめる　　　　橘元任

七夕のあふ夜のかすのわひつゝも

くる月ことの七日なりせは

秋の七日とよめる歌

後撰和歌集卷第五秋歌上

七夕をよめる　　　　よみ人しらす

あまのかは岩こす浪の立ゐつゝ

秋の七日のけふをしそまつ

玉葉和歌集卷第四秋歌上

七夕に讀侍ける　　　小侍從

稀にあふ秋のなぬかのくれは鳥

あやなくやかて明ぬ此よは

新千載和歌集卷第四秋歌上

元亨元年九月廿六日龜山殿にてうへのをのことも題をさくりて歌つかうまつりけるついてにおなし心をよませ給うける　後宇多院御製

七夕はわれてまたあふかゝみかと

秋の七日の月やみつらん

壬二集

なゝそちや七とせの秋の七日まて

逢よもまれの星をみる哉

拾玉集

七夕

なかなかにやみなるへしと思ひけり

秋のはしめのなぬかのよとよめる歌

秋の七日の星合のそら

新千載和歌集卷第四秋歌上

題しらす　　　　和泉式部

年ことに待もすくすもわひしきは

秋のはしめの七日なりけり

星合の空とよめる歌

新古今和歌集卷第四秋歌上

花山院御時七夕の哥つかうまつりけるに

古今要覧稿巻第五十八

●時令部

●なぬかのよ 七夕 なぬかのよひ

七月七日のよを七夕といふはふるくよりみえたりいはゆる一年邇七夕耳相人之と萬葉集いひまた今之七夕續巨勢奴鴨と同上いへるによれはなぬかのよといふへきをいつの比よりか七夕をたなはたと訓るはより所なき事也されと延喜の比までは七夕をなぬかのよといふ事たしかなりいはゆる寛平御時なぬかのようへにさふらふをのこ共云々古今和歌集詞書又なぬかの日のよ讀るなぬかの夜のあかつきによめる同上なとありて一所も七日とかけるはなし玄かるを後撰集より以下下いつれも七月七日又は七日のひに或は七夕をよめると後撰和歌集みえたり以下代々の集おなし玄かれは萬葉古今の二集を正しとすへしさて今日をなぬかひと古今六帖よみ秋の七日と後撰和歌集よみ秋のはしめのなぬかと新千載和歌集よめり今夕を星合の空とよめるは中むかしよりなり是花山院御時七夕の歌つかうまつりけるに藤原長能袖ひちて我手に結ふ水の面にあまつ星合の空をみるかなと新古今和歌集よめるをはしめとして星合のかけとよめるもおなしき比よりとおもはる能因法師の星合のかけみぬ人のと後拾遺和歌集よめるをはしめ是より以前には撰集諸家の集等に所見なし此能因か歌も長能の家にてよめるとあれは此比星合といふ詞はいひ出しものとおもはるゝなり又天つ星合のよ星合の濱なとよめる歌もありあけてかそふへからす下に引ゆゑにこゝには略せり

○和歌

なぬかのよとよめる歌

萬葉集巻第十秋雑歌

七夕

一年邇七夕耳相人之戀毛不過者夜深往久毛

一云不盡者佐宵曾明爾來

月累吾思妹會夜者今之七夕續巨勢奴鴨

なぬかのよひとよめる歌

乾坤之初時從天漢射向居而云々七月七日之夕者吾毛悲烏

宮女といふへし又武家歳時故實に粽は屈原か妻夫の靈へ備へんために蛇形に作り江にいれしよりの例なりといふも非なり粽は屈原か姉女嬃かつくりて屈原を祭しよし日本歳時記異苑月令廣義等に見えたり又此國にては仁德天皇の御時より粽を獻すといへるも國史に所見なけれはとりかたし又年中諸節供考云稲荷社傳に云神功皇后三韓御退治より粽の事起れりといふも更に據ところなし

四條家舊法云唐のめいくわう天ほう年中に五月五日粽祝事宮中にて粽を的にかけ三千人の后小弓にて是をいるにあたるものはその粽を喰といへり惣て粽を用る事是を初とするなりそこくのくわい王の臣下にくつけんと云人あり此人大賢人にて道を以君をいさめ申上れともいさめを用ゐたまはすあまつさへ人のさんけんに依てくつけんを流し給ふくつけんりそうきやうと云書をつくり心中のうつふんを認かうなんと云所に流置かゝるにこれる世にすまんよりはとへきらこうに至りて終に身をなけて死此日五日也その國の人民是をなけき五月五日になれは筒の內に飯を入てへきらになけ入くつけんを祭其後けんむ元年にちやう玄やといふ所の人夢に見て我等は是くつけんなり皆人われを祭に五色の餅を搗是を八所結て我にくれ然らは此悪龍に取るゝ事なしと夢に見て此國の人々右のことくに五色の餅を搗此人を祭このいんえんを以て五月五日に如此拵らへ是を祝儀とすると云則今の粽なり

武家歳時故實云五月五日云々又粽は屈原か妻夫の靈へ備んために蛇形に作り江にいれしよりの例なり此國にては仁德天皇の御宇より宮中に菖蒲の輿を奉り粽を獻すと見えたり

年中諸節供考云粽風土記曰云々

藤森社傳云異國之凶賊責來時　早良親王大將軍之蒙二宣旨一給則當社に御祈誓有て　五月五日に　御出陣有故茅纒矛をかたと（本ノマヽ）り茅にて粽を調する也

稻荷社傳云神宮后宮三韓御退治よりこの事起れり

按に粽の形は蛇に似せて卷これを服して毒蟲を殺すことを表すと壒嚢抄にいへるは妄説とるにたらす四條家舊法に唐の天ほう年中に宮中にて粽を的にかけ三千人の后小弓にて是をいるにあたるものはその粽を喰といへり總て粽を用る事是を初とするなりと此說非なり粽を射てあたるものその粽を食ふ事は唐の天ほう年中の說是なれとも總て粽を用る事是を初とする也といふはとるにたらす粽の事は唐の代よりはるかにあかれる世より所見あり續齊諧記に屈原の故事を引たれは漢世よりある事なり且粽を的にかけ三千人の后小弓にて是をいる云々三千人の后といふ事あたらぬ文法なり后は天子の后宮にして一人より外になし三千人とかゝは

緋含香粽子
清異錄○按にこれは粽の色によりて名付るなりすへてちまきは黄色なるを赤き色につくれるものなるへし
粒粽
事物原始○按に粽は粉米を以てつくれるもあり麥麪を以てつくれるもあり粒米は以てするもあり粒粽は此粒米にて製せるならん
楊梅粽
同上○按に楊梅の葉を以てつゝめる故に名付たり續齊諧記に楝葉を以てし廣東新語に柊葉を以て卷とあるたくひなり
不落莢
戒菴漫筆○按に此粽いかなる形狀を云らす同上に卽今之粽子とあれはかたちは小なる物にや
糉
齊民要術康熙字典○按にこれ紀州に絹ちまきと稱する物是と相似たりいかにとなれは齊民要術に秫稻米の末を用て絹羅水蜜溲之と云々竹箬を用て裹み爛蒸とあるによれは絹ちまきと同物なる事あきらかなり
糰
通雅○按に糰は粽也と同上にみえたり字典にもいてたり
角子
同上○按に同上に小粽なりとみえたり
包黍
事物異名○按に角黍と同物にして異名なり
包金
名物法言○按にこれも包黍と同物なり黍の色黄色なるを以て金字を塡せしなり形容奇なり
瓷筒
劒南詩稿○按に續齊諧記に以二竹筒一貯レ米投レ水祭レ之といふによれは瓷筒は筒粽の別名なる事明なり
粡
康熙字典○名義いまた不詳
○正誤
壒囊抄云粽ノ形ハ蛇ニ似セテ卷コレヲ服シテ毒蟲ヲ殺スコトヲ表ス云々

按に是皇國にさゝまき粽と稱する物にあたるなり黍米を竹葉につゝみ菱實の形につくれる物にやあらん天寶遺事に宮中毎ニ端午ー造ニ粉團角黍ー小角弓を以て射て中者食ふよしみゆ是粉團は字義を以て考ふるに粉米を以てまろくつくれる物ならんか角黍は前にいふことく菱實のことくの形ならんかこれ角なると丸きと對につくりてこれを射しなり此事潛確類書にもいてたり唐の世には粽の種類多くあり

角糉

歲時雜記月令廣義事物原始○按に名義上に同し又角粽ともかけり糉粽同字なり

黄甘粽

南史○按に本朝食鑑に飴粽といふ物と同しきにや色黄白如ニ飴色ーといへは黄甘の字義によくあへは同物異名なるへし

九子粽

歲時雜記王曾端午閣帖子月令廣義○按に九子粽は數九つつらぬるを九子粽といふよし年齋拾唾にみえたりさもあるへし

百索糉

文昌雜錄月令廣義○按に形狀はしるへからされとも是も角糉の類ならんしかれは形は小なる物ならん是も數百を以てひとくゝりとなせる故百索の名あるなり九子粽の義とおなし

庾家粽子

酉陽雜俎○按に皇國の道喜粽の類なり庾家の粽名譽ありし故に名付しならん

錐糉

歲時雜記月令廣義事物原始○按に形ち錐のことくに作れるか故に名付たり本草綱目に作レ粽古人以ニ菰蘆葉ーとあれはすへて粽はこもあしの兩葉を以てまく事としらる後世は色々の草葉を用ゐたり

菱粽

歲時雜記月令廣義○按に菱は乾芻と說文いひ菱は午蘄と爾雅にみえ茭は芹菜に似て可レ食と邢昺いへれと韻會に草名とありて詳なる形狀なし

秤鎚糉

歲時雜記月令廣義事物原始○按に此糉は形を以て名付たり廣義と原始とは鎚或は錘に作れり

粽なりといふにても菱の形のことくにして小なるものなる事明らかなり又百索粽と名付る物も數百をひとくゝりとなせるなれはうたかふらくは此筰また粽ならんか

菅粽

和漢三才圖會○按にすけの葉にてまく故名付たり菰すけ葦ちかやの類潔白なれは用る也

稗粽

同上○按に稗葉を以てつゝむなり

藺粽

同上○按に是も藺の葉にて包める也又燈心草を用てつゝむ事もあり同人の說也又廣東新語に粽心草を以て擊〻黍とあるもうたかふらくは燈心草と同物にや

飴粽

本朝食鑑南史○按に粽一種飴粽あり糯米を用てむし熟しつきて餅となし稻草に包めり則黃白色如ニ飴色一故名と野必大の說なり

道喜粽

本朝食鑑日次紀事和漢三才圖會和訓栞○按に道喜は京師の市人にて粽を巧にこしらへて禁中にも奉りしよし日次紀事に見るせり故に世人道喜粽と號してもてはやす事とはなりぬ

朝比奈粽

和訓栞○按に駿州朝比奈の人造り始めし故に名付たり其製法は詳ならす

絹まき粽

同上○按に紀州の人の製作なるよし谷川士淸の說なれとも其形製法とも見れかたし

大麥麪粽

和漢三才圖會○按に味よけれともすへやすきよしいへり

筒糉

續齊諧記風土記荊楚歲時記歲時雜記○按に荊楚歲時記に以ニ新竹一爲ニ筒糉一といへり齊諧記の說によれは竹筒の中に米を入て投〻水屈原を祭るよし見るしたれは分明ならす風土記に以ニ菰葉一つゝみ灰を以て煮熟せしめて食よしなり此說是なるへし

角黍

風土記荊楚歲時記歲華紀麗天寶遺事珊瑚鈎詩話○

いへり是古稱を失なはす賞すへきことなり

糉

類聚名義抄新撰字鏡和名類聚鈔○按に名義上に同し糉或は粽ともかけり名義抄には粭粽粽俗とあり新撰字鏡には糭ともかけり拾芥抄には糉子と子字を添たり義上に同し

かさりちまき

伊勢物語拾遺和歌集大和物語續齊諧記珊瑚鈎詩話○按にちの葉にてまきたる上を五色の糸にてまとひてかさりなせるゆゑにかく名付たりこれ屈原を祭りしとき五綵の糸にて上をまき楝の葉をはさみしよりはしまれるなるへし

綠粽

熱田社祝詞○按に茅の若葉の色みとりなるをとりてまく故にかく名付たり

眞薦粽

本朝食鑑東雅日次紀事風土記本草綱目○按に眞薦といふはこもにて菰草の事なり此草かり取ほし置てもみとりの色あせぬ故に粽をつゝむ依てかく名付たりすへて神佛に備ふるものは潔白なる物をとりて用る事なるかゆゑ此草も潔白のものなれは用るなり

葦粽

續節序記和漢三才圖會和訓栞本草綱目○按に葦葉も潔よく昔より神事なとの事に用る草なれは茅の葉と同しく用るなり既に西土にも用る故時珍綱目に載たり

稻粽

本朝食鑑○按に稻草を以てまくなり道喜粽なとも稻草にてまくよし也飴粽も此草にてまくよし野必大いへり

さゝまき粽

和漢三才圖會類聚名物考荊楚歲時記○按にさゝの葉を以てまく故にかく名付たり粽をまくさゝはちまきさゝとて葉のはひろくくまさゝの葉に似て葉にしろきへりなし此さゝの葉にてつゝめり此粽のかたちはひしの實の形のことくにして糯米を此笹の葉につゝみてむしたる物也西土にいはゆる角黍の葉につゝみてむしたる物也西土にいはゆる角黍是なり菱角の形に作れるを以て角黍とは名付るなり又角糉ともいひ角子ともいへり通雅に角子は小

淸異錄云韋巨源上燒尾食有賜緋含香粽子
戒菴漫筆云鎭江醫官張天民在二湖廣一榮二王府一端午賜レ食不落莢云卽今之粽子
五雜俎云古人歲時之事行二於今一者獨端午爲レ多競渡也作粽也云々
通雅飮食云通鑑有二茗糰一三省曰糰色則反粽也
又云角子小粽也
事物原始云粽子其制不レ一有二角粽粒粽茭粽錐粽筒粽九子粽秤錘粽一宋時有二楊梅粽一
熙朝樂事云端午爲二天中節一人家包二黍秫一以爲レ粽束以二五色綵絲一云々
康熙字典云糭糉屬云々

〇和歌

古今和歌集卷第十物名
ちまき　大江千里
のちまきの後れて生るなへなれと
あたにはならぬ賴とそ聞く
拾遺和歌集卷第十八雜賀
五月五日ちひさきかさりちまきを山すけの籠にいれて爲正の朝臣の女にこゝろさすとて　春宮大夫道綱母
心さし深きみきはにかるこもは
千歲のさつきいつか忘れん
藤原元眞集
三宮にこちまきたてまつるとて
さつきまつ程に澤水まさりつゝ
淀のま菰もおいにけるかな
擧白集物名
延陀丸もとよりちまき五はまゐらするといふことをちかきやまゝかはぬすまゐきゝなからことゝひはせすはるそすくせるとありしにかへしちまき五はもてはやすといふことを
ちよふとも又なほあかてきくへきは
この音つれやはつ郭公

〇釋名

ちまき
類聚名義抄新撰字鏡和名類聚鈔拾芥抄尺素往來公事根源厨事類記殿中申次記〇按にちまきは茅卷なりちかやの葉もてまく義なり後世に至りてはこもあしすけ蘭なとの葉にてまけとも同名はちまきと

翰墨全書云以二菰葉一裹二稻米一爲レ粽以象三陰陽相包裹一未二分散一也

珊瑚鈎詩話云角黍之事肇二於風俗一昔日屈原懷沙忠死後人毎年以二五色絲一絡二粔籹一而弔レ之此其始也

月令廣義云九子粽卽角黍同類唐時歲節端午粽子名品甚多形制不レ一角粽錐粽菱粽筒粽秤錘粽（或作二秤槌粽一）或百索粽九子粽等有之

廣東新語云五月朔至二五日一以二粽心草一繫レ黍卷以二柊葉一以象二陰陽包裹一

按に粽は草名と康熙字典にみえたれと粽心草といふは和名いまた見あたらす燈心草を以てちまきをまく事和漢三才圖會に見えたれは此草にあつるもゑるへからす

本草綱目（造釀部）云糉角黍時珍曰糉俗作レ粽古人以二菰蘆葉一裹二黍米一煮成二尖角一如二糉櫚葉心之形一故曰レ糉曰二角黍一近世多用二糯米一矣今俗五月五日以爲二節物一相餽送或言爲祭二屈原一作レ此投レ江以飼二蛟龍一也云々五月五日取二粽尖一和二截瘧藥一良云々

事物紀原云糉一名角黍云々

異苑云糉屈原姉所レ作

和漢三才圖會所載粽

なの人民造る所也○紀州にいふは絹まきなり
安齋隨筆云粽チマキと云は茅卷也茅はチカヤ也今は
マコモにて卷なり
藝苑日涉歲時部云五月五日謂二之端午一云々食レ糉始服二
布葛一云々月令廣義曰一統賦注夏至俗食二麥糉一云々
又粽卽角黍同類唐時歲節端午粽子名品甚多形制不レ
一有二角粽錐粽菱粽筒粽秤錘粽一又有二百索粽九子粽一
事物紀原食粽一名角黍一曰因二屈原一也異苑屈原姊
所レ作
語林類葉云ちまき契冲曰ちまき千纏也○縣居曰ちま
きは茅もて初はまきしなるへし後にまこもさゝにて
もまく也又此頃はあやめしても卷しならんさなくは
此歌よしなし菖蒲は藥にて香もよけれはまくへき物
也それに色々の絲をくみて下けなとしたるをかさり
ちまきと云なり○茅纏なるへし
風土記云端午烹レ鶩進二筒糉一一名角黍以二菰葉一裹二黏
米粟棗一以レ灰煮令レ熟盖取二陰陽包裹未レ散之象一
荊楚歲時記云夏至節日食レ糉　周處謂爲二角黍一人竝
以二新竹一爲二筒糉一云々
續齊諧記云屈原五月五日投二汨羅江一楚人哀レ之每
レ至二此日一以二竹筒一貯レ米投レ水祭レ之漢建武中長沙歐
回白日見二一人一自稱二三閭大夫一謂レ回曰見レ祭甚善但
苦下爲二蛟龍一所上レ竊今若有レ惠可下以二楝葉一塞二其上一
以二五綵絲一縛上レ之此二物蛟龍所レ畏今人作二粽子一帶二
綵絲及楝葉一蓋其遺風也
南史云范雲使レ魏魏使三李彪宣命至二雲所一甚見稱二美
彪一爲設二黃甘粽一
歲華紀麗云端午日叶二正陽一時當二中夏一云二角黍之秋一
風土記曰云々
酉陽雜俎云庾家粽子白瑩如レ玉
天寶遺事云宮中每二端午一造二粉團角黍一貯二金盤中一
以二小角一造二弓子架一箭射二盤中粉團一中者得レ食蓋粉
團滑膩而難レ射也都中盛行二此戲一歲時雜記云端午糉
子名品甚多形制不レ一有二角糉錐糉茭糉筒糉秤鎚糉一
又有二九子糉一
齊民要術云糉用二秫稻米末一絹羅水蜜溲レ之長尺餘廣
二寸餘以二棗栗肉一上下著レ之油塗用二竹箬一裹爛蒸
文昌雜錄云唐歲時節物五月五日有二百索粽子一
潛確類書云唐宮造二粉團角黍一以二小角弓一射レ之中者
得レ之

答之用ニ京師道喜之粽得レ名多用ニ糯米ニ又有ニ大麥麪粽ニ亦佳然易レ饐

歲時語苑云五月五日粽事文曰漢武中長沙歐囘白日忽見ニ一人ニ自稱ニ三閭大夫ニ謂曰君常見レ祭甚喜但常所レ遺苦ニ蛟龍所レ竊今若有レ惠可下以ニ楝樹葉ニ塞ニ其上ニ仍以ニ五綵絲ニ縛上之此二物蛟龍所レ憚也囘依ニ其言ニ世人作レ粽幷帶ニ五色糸及楝葉ニ皆汨羅遺文也文昌雜錄曰唐歲時節物五月五日有ニ百索粽子ニ

類聚名物考云ちまき茅卷かさりちまきちかやにて卷て糸もてかされはすなはち飾茅卷ともいふなりそれより菅こもなとにて作りても同しくちまきとはいふなり

又云茅の葉を束ねて卷はかくはいへり今は笹の葉にても蘆葉にてもまこもにてもするなり今俗京にてはゑな〱の粽あり

草木行事云端午粽を祝ふ事はむかし高辛氏の惡子五月五日に船に乘て云々

此文公事根源と同しけれはこゝに畧す

伊勢物語云々拾遺集云々地下にてはまこもにつゝみ藺からにてまきて十つゝからける也それを一抱〔把カ〕と云り或は中のもちひ梔子にて染るも有レ之

公事根源云端午粽を祝ふ事楚の屈原五月五日汨羅にして死す楚國の人此日に至每に竹筒に米を入て水中に投て是を祭るとなり長沙の歐囘といふ者有或時一人の男をみる自三閭の大夫と名乘ていふやう君か祭る所の物おほくは蛟龍のために奪はる今よりは樹の葉をもて其上を包五色の糸にてくゝり水に入へし此二色蛟龍の嫌ふ所也といひて失ぬと齊諧記にみえたり世の人の粽を笹の葉に包むは其遺風也といへれと此說信しかたし風土記に菰の葉をもて稻米を包みて粽とするは陰陽未ニ分散ニ象也といへり

和訓栞云ちまき粽をよめり新撰字鏡倭名鈔に見ゆ糭も同し茅卷也今は篠の葉葦の葉菰の葉なとにても包めり伊勢物語にあやめかりとよみたれは菖蒲にても包つらんか○端午に必とするは風土記に端午以ニ菰葉ニ裹ニ黏米ニ以象ニ陰陽之相包裹ニといへり○かさりちまき拾遺集伊勢物語に見えたり五色綵もて纏たるなるへし屈原か故事也續齊諧記にくはし○熱田五月四日の祝詞に綵粽者八束穗の如高知と見えたり○道喜ちまきは京都市人の名也朝比奈ちまきは駿州朝ひ

月令廣義云唐代に端午の粽其品多し角粽菱粽角黍百索粽九子粽あり粽を角のことく作る又錐のことくにも造る又菱の如くにも又竹の筒の如くにも又秤の鎚の如くにもする五色の糸にて結又數珠のことく繫もあり

日次紀事五月端午眞薦粽今日製粽家渡邊道喜獻二眞薦粽於禁裏院中一年齋拾唾云五月五日を端午といひ又は解糉節といふ云々解糉節といふいはれは世人此日ちまきをして木の葉なとにて其上をつゝみて是を食する時まとひし糸をときてくふ故にかくいふなり云々今日粽をつくりて上を五色のいとにてまきて楝の葉にてつゝむはけに汨羅のまなひなりと續齊諧記にのせたり金谷園記には異說をあけていはぐまこもの葉にてつゝむへしと屈原かいひしよしかけり惠空案するに此二說をはいつれをよしと定めかたし漢土の人もふたつなからもちゆと見えたり本朝にも蘆の葉まこもの葉にてつゝむは是にもとつくならし成は樫の葉なとにてまくは楝の遺風なるへし又歲時記によるに菰の葉にて米をつゝみて粽をする事は陰陽ともに包合して分散せさるにかたとると見えたり云々唐の天寶年中五月五日にちまきをして是を粉團角黍といふ明皇の宮中にて小弓を射て矢のあたりたるを食すと天寶遺事に見えたり又同し世に百索粽といふちまきをつくりし事文昌雜錄に出たり抑端午のちまきその品多し角粽錐粽菱粽筒粽秤鎚粽九子粽なとゝて是あり粽を角のことくにし又錐のことくにし又ひしのことくにし又竹の筒のことくにし又はかりのおもりのことくにし或はたんこのことくにして九つつらぬるを九子粽といふなり王沂公といふ人の詩に爭傳九子粽皇祚續二千春一といへり月令廣義には屈原か姉の女嬃といふもの粽をつくりて屈原を弔けるとかや云々羅山子かいはく粽は惡鬼にかたとりたれは是をねぢきりて食は鬼を降伏する義なりと安倍淸明か說に有となん申傳へたりといへり

和漢三才圖會造釀部云糉按糉溲二粳粉一狀如二芋子一以二蘆葉一包レ之復以二菰葉一裹レ之以二菅或燈心草一縛卷而十箇爲二一連一淪レ之又肥州長崎之粽以レ篺包レ之如二菱形一三角以二五箇一爲二一連一五月五日家々爲二節物一相餽也蓋此爲二中華之風一乎

又云有二筆粽蘭粽稗粽等一皆非二端午節物一尋常爲二贈

なり是を角粽とも角黍ともいふなりむかし屈原か姉これを作りて屈原を弔ひける也月令廣義にみえたり屈原か姉の名を女嬃と申也

年中下行帳云五月四日御殿菖蒲葺丹波小野鄕七箇村土民下行壹石五斗於二御臺所一粽御酒被レ下

本朝食鑑云粽一種有二飴粽者一用二糯米一蒸熟擣作レ餠包二稻草一外以二稻草一縛定而甑中蒸熟取出剝二去稻草一則黃白色如二飴色一故名味美有二微香一旣粽類市人謂二道喜一者巧造レ之故稱二道喜粽一今京師市上專用二此粽一爲二贈送之物一凡當月初街市賣二眞薦葉幷蘭殼一端午粽之所用也

日本歲時記云五月五日云々國俗今日粽をくらひ菖蒲酒をすゝむ云々粽をくらふ事續齊諧記にいへるは屈原五月五日みつから汨羅に投して死す楚人これをあはれみて此日に至る每に竹の筒の中に米を貯へ水に投してこれを祭る漢の武帝の時長沙の歐囘といふもの海濱をとほりしに一人來りて三閭大夫と名乘囘に謂ていはく我每年まつらるゝ事はなはたよろこふに堪たりゑかれとも常に蛟龍のためにその食物をぬすまる今より後は楝樹の葉を以てその上をつゝみ五綵の絲を以て縛へしこの二物は蛟龍のおそるゝ所なりといへり今日粽を食ふは此遺意なりとそ月令廣義には屈原か姉名は女嬃これをつくりて屈原を弔ひけると見えたり又粽は惡鬼にかたとりたれはねち切てこれを食ふは鬼を降伏する義なりと安倍晴明か說に見えたりかうやうの諸說まことに妄誕なり何そ信用するにたらんや用處か風土記にいへるは菰葉を以て稻米をつゝみ灰汁にて煮て粽とすこれ陰陽相包裹していまた分散せさるにかたとると侍りこれなん正說とすへし云々

東雅飮食部云糉チマキ倭名鈔に風土記を引て糉讀てチマキといふと注せり風土記に據るに糉は以二菰葉一裹二粘米一以二灰汁一煮成尖角如二糉櫚葉心形一と見えたり我國の俗には茅葉をもて飯をつゝみしかはチマキとはいひし也今俗には飯のみにもあらす糕餠の類をも菰葉をもてつゝみ煮熟せしをチマキといふ也

續節序記云五月五日粽今日粽を製すへし粽を製には餠或は餌を菰葉にて包上を五色の絲を繩になひて結也伊勢物語に人のもとよりかさり粽おこせりとかけり又拾遺集十八の詞書にちひさきかさり粽とかけり

大和物語云在中將のもとに人のかさりちまきをこせたりけるかへしに云々
按に伊勢物語と同しはなしなれと文いさゝか異同あれは擧たり
拾芥抄歳時部云五月五日是日糭子等勿ニ多食一食訖取ニ昌蒲根七莖一云々
尺素往來云菖蒲際之角黍者端午之祭粢云々
公事根源云端午節けふちまきを食事あり昔高辛氏の惡子五月五日に舟に乘て海をわたりし時暴風俄に吹て浪にしつみけるか水神と成て常に人をなやますある人五色のいとをもてちまきをして海中になけ入しかは五色の蛟龍となるそれよりして海神人をなやますこと行舟も災難にあはすと申つたへたりまたは屈原か汨灑にしつみ魚腹に葬せしを祭し時の備物なりとも申にや
按に世諺問答も文意同しけれはこゝに擧す
厨事類記云五月五日　赤飯　御菜　御菓子八種粽一種
殿中申次記云五月四日
一根菖蒲　恒例　細川小四郎
一粽百　恒例　眞木島次郎

五日
一藥玉　禁裏樣より參
一藥玉　伏見殿より參　但四日にも參也
一粽百　例年進上之　伊勢守
女房私記云あやめの御祝
初獻ちまき　二獻御ひら　三番御菓物　御盃出る御銚子出る云々
公家年事云五月五日節供御祝御獻次第
初獻粽　二獻御鰭物　三獻御菓物　御小盃出御銚子出御三獻めに御銚子の內へ菖蒲の根を入る云々
庖丁書錄云粽五月五日粽を食事也むかし高辛氏の惡子五月五日舟にのりて云々
按に高辛氏の事公事根源に引たれはこゝに擧す
唐のよに端午の粽其品おほし角粽錐粽菱粽角黍百索粽九子粽有粽を角のことくにし又錐のことくにし又ひしのことくにし又竹の筒のことくにし又はかりのおもりのことくにし或は五色の絲を繩になふてしゆすのことくにつなくもあり或はたんこのことくして九つつらぬるも有いつれもまこもの葉をもてつゝむ

粽なりしかはあれと西土の製によりし物もあり筒粽は漢名にして粽をつくり初めし時の名なり一名角黍といふよし風土記に見えたり是楚の屈原か汨羅に沈みし靈を祭らんかために長沙の歐囘といふもの丶屈氏か靈にあへる時彼靈の詫言によりて筒糉を製せしといふ事續齊諧記に載たれとも異苑には屈原か姉のつくりて原を弔せしともいへり九子糉は歲時雜記月令廣義等に見ゆ是は數九つ連ぬるをもて稱するよし年齋拾唾の說なり百索粽はかす百をひとく丶りとなせし故に此名ありとしらる月令廣義文昌雜錄等にいつ錐粽茭粽秤鎚粽は歲時雜記月令廣義事物原始等に見ゆこれら皆其物の形ちにかたとりて作りし物なるか故にしか名付しなり庾家粽子は酉陽雜俎に見ゆこれ上にいふ道喜粽の類にして庾家の粽當時名を得し故後世まても稱せる事とはなりぬ粒粽楊梅粽は事物原始に見え緋含香粽子は清異錄に不落莢は戒庵漫筆に粣と角子とは通雅包金は名物法言包黍は事物異名にあり次食筒は劍南詩稿にいて粡と糉とは康熙字典にのせたり以上二十名これみな製作によりて名も異なる也又和品十五種合せて三十五品あれとも此中製し方和漢同しきもあらんかさはあれと和製はおのつから和製の法あり糉はちまきの惣名なるをちまきと云も茅の葉をもてむかしはまき初し故にこもすけ或は稻の葉藺葦葉なとをもつてまくをも皆ちまきといひてこもまきすけまき稻まきとはいはさるなりこれ皇國にてはおのつから古名をうしなはさるを西土にては包黍或は次食筒とも粡又は粣なといふをもてみれは自然に其物としらぬ事となる故に粣は粽也と注をくたし不落莢は卽今之粽子なといふ事となりぬるも文餝の弊なり

伊勢物語云むかしをとこありけり人のもとよりかさりちまきをこせたる云々

按に天福の寫本にはかさなりちまきとあり

新撰字鏡云糉總粽（三形作二王反　去並知萬支）

和名類聚鈔（飲食部）云糉（作弄反亦作粽　和名知萬木）以二菰葉一裹レ米以二灰汁一煮レ之令二爛熟一也五月五日啖レ之

拾遺和歌集（賀歌詞書）云五月五日ちひさきかさりちまきを山すけのこにいれてためまさの朝臣のむすめに心さすとて云々

古今要覽稿卷第五十七

●時令部

●ちまき 糭

ちまきは和名にして漢名を糉或は角黍ともいひて類聚名義抄新撰字鏡和名類聚鈔等に見えたれは此以前よりつくりてもてはやせし事しられたりしかれは千有餘年の昔より五月五日粽を用る事なから國史式等には所見なけれは當時供御には備へさるものとしられぬさて粽の説さま〳〵あり續齊諧記には楚の屈原か故事を擧風土記には陰陽包裹未レ散形に象るといひ唐の世にいたりては宮中の戯れ事となれり此事天寶遺事に見えたり抑ちまきと名付るは茅の葉を以てむかしはまきたるゆゑ茅巻といふ由契沖阿闍梨加茂眞淵山岡明阿の説なりさもあるへし又かさり粽の事は伊勢物語拾遺和歌集等に見えたり是續齊諧記にいはゆる楝の葉をもてまとひ五綵のいとをもて縛レ之と見えしものなるへし緣粽は熱田社祝詞に見えたり眞菰粽は本朝食鑑東雅日次紀事等に見えたり是風土記翰墨全書本草綱目等の説によれる也葦の葉にてまく事は續節序記和漢三才圖會和訓栞にいてたりこれも本草の説によれり稻草をもてまく事は本朝食鑑に見えさゝまき粽は和漢三才圖會類聚名物考にいてたりこれ荊楚歲時記に以二新竹一爲二筒糉一と見えしによりて製せしものなるへし菅或は燈心草をもつてまく事は和漢三才圖會に見ゆこれ廣東新語に粽心草を以て繫レ黍とあるに粗似たる説なり字典に粽は草名とのみしるしたりこれ燈心草粽心草二名一物歟未た考す稗粽蘭粽も寺島良庵の説に見え飴粽は食鑑に見えたり南史にいはゆる黄甘粽是ならんいかにとなれは黄白色如二飴色一故名と野必大いえり此粽古來よりありしを渡邊道喜といふ者巧にこの粽を製せし故世擧て道喜粽といふよし食鑑にみえたり道喜は寛文延寶の頃の人にして京師に住りし故粽を作りて禁中へも獻せしなり此事日次紀事にしるせり又朝比奈粽は駿州朝比奈の人造り始るよし谷川士清いひ絹まき粽は紀州の稱呼なるよし同人の説なりその製法はいかなる物かしらす（追て國人によりてたゝすへし）以上十五種は皇國製法の

年中諸節供考云藥玉延喜式云藥玉は五色の絲を以菖蒲艾なとを玉にさしつらぬきけるもの也是を以臂にかくる也云々
按に藥玉の事は延喜式(中務省)又(左近衞府式)等にそのよしみえたれと只その料の絲菖蒲艾なとを奉るよしはあれとゝ五色の絲なるよしもなくかつ臂にかくる事もみえすこは只あらましにいへるのみにて委しく式をもみぬ說也誤とすへし

くれ給ひて後陽明門院一品親王と申ける枇杷とのに歸り給へりけるにふるき御帳のうちに菖蒲くす玉なとのかれたるか侍りけるを見て讀侍ける

辨乳母

あやめ草淚の玉にぬきかへてをりならぬねを猶そかけつる

返し

江侍從

玉ぬきしあやめの草は有なから淀野は荒むものとやはみし

小大君集

くす玉を女のかりやるとてをとこにかはりて

沼ことに袖そぬれけるあやめ草心に似たる根をもとむとて

返し

くるしきに何もとむらん菖蒲草淺かの沼におふとこそきけ

新古今和歌集卷第三夏歌

五月五日くす玉つかはし侍ける人に

大納言經信

あかなくに散にし花のいろ〳〵はのこりにけりな君の袂に

夫木和歌集夏歌

五月雨

正三位季經

みわたせはあやめにすかる五月雨の軒の雫やけふのくす玉

〇釋名

くすたま

續日本後紀三代實錄延喜式〇仲田顯忠曰くす玉は藥玉とかけるによれは藥玉の意かともおもはるれとなほ玄かはあらて奇玉のこゝろならん歟さるはくし（クス）は奇しく靈なる意にてくしなた姬くしみたまなといへる類ひのくしの轉用にて漢土にて靈絲なといへるにややかてかなふへからんさらは藥玉の邪氣をはらひ疫を除く靈あるもの故そを稱へて名付たるなるへしかくはいへとも續後紀なとにすら既に藥玉とかゝれたれは醫師をくすしといふ類にてもとより邪氣をのそくの藥となれは藥玉の意としても一わたりは聞えなんかし

〇正誤

其五絲也蕙綠輕重蘭紅淺深皎皎而有二鶯其頷一釆釆而亦翠二其衿一既比方而一色又條暢乎數尋觀下其髮齊二萬計一花柔中四艶上宛委虬盤張皇虹直植二其鶯羽一雜レ之而奪二其鮮一對二波鳳毛一久レ之而賽二其色一別有二金華別殿鈎弋靚妝一褰二開筐筒一貢二奉君王一懿壽絲禮大續二寶命之天長一袞冕紱斑縈二壽絲一以成レ錦游纓賜レ美比二壽絲一以無レ彊錯以二五釆一準レ日以符レ節也綜以二萬緒一盈レ數以尊レ壽也龍爛蛇伸光氣騰騰以禦レ邪也瑞等二乾坤一啓獻也汪濊需止其辟レ兵也不レ待二萬歲蟾蜍一其理レ疾也豈藉二單衣竜子一四海銷二夭札之癘一百姓登二仁壽之祉一微臣敢問二天寶之建元一則曰二甘露黃龍之年紀一

五日觀レ妓（以下節序詩集）　萬　楚

西施謾道浣二春紗一、碧玉今時鬪二麗華一、眉黛奪將萱草色、紅裙妬殺石榴花、新歌一曲令人豔、醉舞雙眸斂レ鬢斜、誰道五絲能續レ命、却令三今日死二君家一、

五日與二殿卿一遊二北渚一　李　于　鱗

五月五日榴花開、故園故人北渚來、君今不レ飲紅顏去、那有二長絲繫得回一、

五日和二可山戶部韻一　王　維　楨

榴院呼レ朋記二昔遊一、佳辰今到興全不、愁多無レ那霜侵レ髩、臥獨空憐酒送レ籌、車馬十年人北滯、少狂幾日水東流、欲下憑二綵縷一添中長壽上只向二滄浪一老二釣舟一、

萬葉集卷第三

石田王卒之時山前王哀傷作歌一首

角障經石村之道乎朝不離將歸人乃念乍通計萬四波霍公鳥鳴五月者菖蒲花橘乎玉爾貫縵爾將爲登云々（ツヌサハフイハレノミチヲアササラズユキケンヒトノオモヒツヽカヨヒケマシハホトトギスナクサツキニハアヤメグサハナタチバナヲタマニヌキカヅラニセント）

又卷第八

藤原夫人歌

霍公鳥痛莫鳴汝音乎五月玉爾相貫左右二（ホトヽギスイタクナヽキソナガコヱヲサツキノタマニアヘヌクマデニ）

大伴家持霍公鳥歌一首

霍公鳥雖待不來喧蒲草玉爾貫日乎未遠美香（ホトヽギスマテドキナカズアヤメグサタマニヌクヒヲイマダトホミカ）

拾遺和歌集卷第十六（雜春）

女のもとにしろき絲をさうふのねにしてくすたまをおこせ侍てあはれなる事ともをあるをとこのいひおこせて侍けれは　よみ人しらす

聲たてゝ鳴といふともほとゝきす袂はぬれし空ねなりけり

千載和歌集卷第九（哀傷歌）

枇杷とのゝ皇太后宮わつらひたまひけるとき所をかへて心みむとてほかに渡り給へりけるをか

靈元院法皇御好續命縷

續命縷一名辟兵繒一名五色絲一名朱索名擬甚多青赤白黑以爲二四方一黃爲二中央一襞方綴二於胸前一以示二婦人計功一也此月鶬鴰子毛羽新成俗好登レ巢取養レ之以教二其語一也

夏至節日食糉　周處謂爲二角黍一人竝以二新竹一爲レ筒糉二練葉一插二五綵一繫レ臂謂爲二長命縷一

事文類聚前集云五月五日以二五綵絲一繫レ臂者辟二鬼及兵一二一名長命縷一名續命縷云々

○詩歌

節序詩集

端午三殿宴二群臣一　玄宗皇帝

五月符二天數一、五音調二夏鈞一、舊來傳二五日一、無二事不レ稱レ神、穴枕通二靈氣一、長絲續命人、四時花競レ巧、九子糉爭レ新、方殿臨二華節一、圓宮宴二雅臣一、進對一言重、遒文六藝陳、股肱良足レ詠、風化可レ還レ淳、（續命元命續に作る四時花元五花時に作る圓宮元圓公に作る今全唐詩によつて校正す）

歷代賦彙

五絲續寶命賦　唐　闕名

半夏生木槿榮時五月鴟始鳴楝葉結綵絲纈祭二彼三閭一蛟龍不レ竊祭之水曰二汨羅一祭之日曰二端午一情既本二乎楚俗一奉又告二乎壽縷一壽縷其娜色絲五紀色絲何始金閨之子晝二嘉嚬於青蛾一發二宜笑之皓齒一國風既哀二其窈窕一家事詎忘二乎絲枲一別有下恩從二天上一飛入中宮中上二八春日十五玉童誰其尸レ之奉二蘋藻於清廟一何彼穠矣司二衣裳於聖躬一洎二天子御レ絺之日后妃獻レ繭之時一顏是渥丹對二囘鸞之十字一手如二振素一盤二續命之五絲一

ゆゑ藥をいれらるゝにや當時御所へたてまつるは藥をいれられす西宮記に五月五日糸所獻二藥玉一流一藏人取レ之晝御座母屋南北柱ニ結ヒ付又五日節會賜二續命縷一とあれはむかしは糸所より調進して御所にも掛られ人にも賜はりたると見ゆ今は御出入の職人上る也

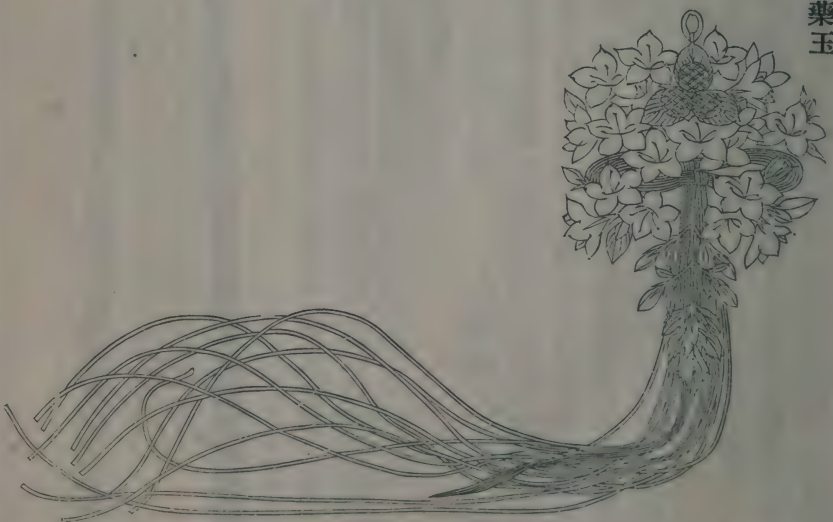
拾芥抄に風俗記を引て云五月五日以二五色糸一繫レ臂禳二惡氣一令二人不一レ病レ溫一名ハ長命縷一名ハ續命縷一名ハ辟兵縷

女房私記云五月端午のくす玉扇を別當より女藏人まてに被レ下扇は中廣なり片ほねに付て源氏繪を書也裏は銀の砂子也是をうすやうと云

又云宮々は藥玉を五色の絲にてふくろつくりて花なとをして左の御かたに付らるゝ也

風俗通云五月五日以二五綵絲一繫レ臂避二兵及鬼一令二人不一レ病二瘟疫一一名長命縷一名五色縷一名縷索

荆楚歲時記云五月五日以二五綵絲一繫レ臂名曰二辟兵一令二人不一レ病レ瘟又有二條達等一織組雜物以相贈遺取二鴝鵒一敎二之語一　按仲夏繭始出婦人染レ練咸有二作務一日月星辰鳥獸之狀文繡金縷貢二獻所尊一一名長命縷一名

藥玉

する也
今昔物語（東三條内神報ニ僧恩ニ語）云今昔何レノ程ノ事トハ不ニ知ラ一二條ヨリ北西ノ洞院ヨリハ西洞院面ニ住ム僧有ケリ云々五月五日ニ菖蒲共葺渡シ藥玉ノ世ノ不レ常シテ云々
師元年中行事云五月五日糸所供ニ藥玉一事
年中行事秘抄云五月五日糸所供ニ藥玉一事
東宮年中行事云五月五日いと所くすたま（糸所藥玉）をたてまつる事　くら（藏）人これ（是）をとり（取）てひのこさ（晝御座）の御ちやう（帳）のまへひたり（左）みき（右）にむすひつくあるひはみやうふ（命婦）まゐりてこれをむすひつく
建武年中行事云五月五日いと所くす玉を御帳左右の柱にむすひつく五日の節絶て久し
太平記（朝儀年中行事條）云五月ニハ三日六衛府菖蒲幷花ヲ献ル四日ハ走馬ノ結番幷毛色ヲ奏五日端午ノ祭藥玉御節供競馬云々
徒然草（百卅八段）云御帳にかゝれるくす玉も九月九日菊にとりかへらるゝといへはさうふは菊のをりまてもあるへきにこそ枇杷皇太后宮隠れ給ひて後古き御帳の内にさうふくす玉なとのかれたるか侍りけるを見てをりならぬねをそかけつると弁のめのとのいへる返事にあやめの草はありなからとも江侍従かよみしそかし
公事根源云五月五日人々みなあやめのかつらをかく云々群臣に藥玉を給ふ五色の糸をもてひちにかくれは惡鬼をはらふと申本文侍るにや
後水尾院當時年中行事云五月五日けふは御所御所くす玉をかけてまゐらる一兩日以前此御所より給はる也いと所のくす玉を御帳の左右の柱に結ひつくなとかなの年中行事はあれと此頃は沙汰もなくなりぬ
禁裏院中年中內々御儀式云端午藥玉扇ヲ別當ヨリ女藏人マテニ被レ下云々
禁裏女房內々記云端午藥玉扇を別當より女藏人まて被レ下云々
恆例行事畧云五月五日糸にて赤白の杜鵑花幷艾菖蒲を作り五色のいとをかけたるものなり又いとにてあみたる橘の實あり內に藥を入らるゝといふ延喜式に凡五月五日藥玉料菖蒲艾雜花十棒とあれはむかしは菖蒲艾橘なとの藥物をはなにて錺り五色のいとにて調たるもの故藥玉といふ藥物雜花をもいとにて作る

斤年料槽四隻云々
又左近衛府式云凡五月五日藥玉料菖蒲艾（ヨモギ）惣盛二一輿一雜花十捧盛レ瓫居レ臺三日平旦申二内侍司一列二設南殿前一（要書）諸府准レ此
小野宮年中行事云 五月三日云々九條右相府記佩二續命縷一（縷緖體件有二四筋一）先留二左腋一以二一筋一從二右肩一超以二一筋一自二左腋一出而相合當レ前結以二二筋一當二革帶上一自レ後前廻而結二右袖下一但二種之緖四筋隨レ草垂也
源氏物語ほたる云（五月）五日にはむまはのおとゝに出給けるつひてにわたり給へり云々くすたまなとえならぬさまにてところ〳〵よりおほかり云々
清少納言枕草子云せちは五月にしくはなしさうふよもきなとのかをりあひたるもいみしうをかし九重の内をはしめていひしらぬたみのすみかまていかてわかもとにしけくふかんとふきわたしたる猶いとめつらしくいつかことをりはさはしたりしそらのけしきのくもりわたりたるにきさいのみやなとにはぬひとのより御くすたまとていろ〳〵の糸をくみさけてまゐらせたれは（御帳）みちやうたてまつるもやの柱の左右につけたり九月九日の菊をあやとすゝしのきぬにつゝみてまゐらせたるをおなしはしらにゆひつけて月頃あるくす玉にとりかへてすつめる又くすたまは菊のをりまてあるへきにやあらんされとそれはみないとを引とりて物ゆひなとしてしはしもなし
江家次第（卯杖之條）蘸頭云私云絲所在二采女町北一縫殿別所也五月五日獻二藥玉一是也
河海抄（螢卷）云くすたまなと　續命縷　靈絲　綵絲　彩索なとかけりいつれも藥玉の體なり
宋書云元嘉四年斷夏至日五絲縷之屬金曆歲鬢採二百草花一結二五綵一造二樓臺等形一今藥玉類也（曰端午札羮芻須以レ花絡二樓臺一挿レ賓）
御記辟兵已佩二靈府小續命一仍縈二綵縷長一（又秀端）
延喜十三年五月五日丙午糸所供二東宮藥玉一如レ常（抑去年九日茱萸以二藥玉一替懸二着御柱前一例也）
延長三年五月五日丙申書司立二菖蒲瓶一糸所奉二續命縷一如レ常　五月五日糸所藥玉を供す去年の茱萸を撤して御帳の東の柱に結付也
花鳥餘情（螢卷）云むかし武德殿にて五日節會行れて騎射の事あり其時宮内省典藥官人あやめを献す又内侍藥玉を太子以下に給ふ時くす玉を右のかたにうちかけて左のわきへたれて二の緒を分て腰にゆひて各拜舞

古今要覽稿卷第五十六

●時令部

●くすたま　藥玉

くす玉はそのはしめ漢土よりおこりて皇朝にも世事となれりさてその造なせるさまはふるくは五綵の糸にて菖蒲艾なとを貫たるもの也それを後にはなてしこあちさゐその外色々の時の花ともしてかされるよし新古今集の歌なとにて玄かおほえたりこれを後々は絲花にてつくれりすなはち今の世にも見所あるさまに造なしたるものあり此國にては嘉祥二年五月にはしめて群臣に藥玉を給へるよしみえたりもろこしにてもはやくよりのことゝ見えて風俗通なとにも玄るせりさて漢土にて續命縷といひ又長命縷五色縷あるひは縷索辟兵繒なともいひさて五月五日に是をひちにかくる時はあしきやまひをうけすかつ壽命をのふといへりされは續命縷の名もあるなるへしさて內裏には此藥玉を糸所より奉りて御帳にかけられ群臣にも給はる事あり司々にて是をまうくるよしは延喜式にみえさて帶るさまなとは小野宮年中行事等に出たるかことしさるは糸所より奉れる藥玉を去年の九月九日に御帳にかけられたる茱萸の嚢かつ御前におかれたる菊瓶なとゝともにとり拂ひて藥玉にかけかへて九月まて是をおく事とそさてかくる所は夜の御殿の御帳の東の柱にかくるよしなりそもゝ皇朝にも此日藥玉を用ふる事は邪鬼をはらひ疫をのそく術にて民家にも五月五日婦女子の翫ものに色々の造り花を糸につけ紙にて張なとしてもてあそふはもと禁中にせさせ給ふを習ひて下々にもなすことゝみえたり續日本後紀（嘉祥二年五月條）云戊午（中略）宣ㇾ詔曰天皇我詔旨良万止宣布勅命平使人等聞給止宣久五月五日爾藥（クス）玉平佩天飮ㇾ酒人波命長久福在止奈毛聞食須故是以藥玉賜比御酒賜波久止宣日暮乘輿還宮

三代實錄（元慶七年五月條）云五日庚午天皇御二武德殿一（中略）賜二親王公卿續命縷（クスタマ）一伊勢守從五位上安倍朝臣與行引ㇾ客就ㇾ座供ㇾ食別勅賜二大使已下錄事已上續命（クスタマ）縷品官已下菖蒲鬘一云々

延喜式（中務省）云藏司（クラツカサ）五月五日續命縷絲五十絇紅花大三

なり今五月五日漬ㇾ酒菖蒲は水なき地にも生せり中心脊ありこれをもてみれは紀事の說あやまれり年中諸節供考に中華にて菖蒲といふは石菖蒲也日本水菖蒲を用ゐる非也といふも誤れり藏器曰白昌卽今之溪蓀也一名昌陽生ニ水畔一人亦呼爲ニ菖蒲一與ニ石上昌蒲一都別と本草綱目に見えたれは中華菖蒲といふは石菖也といふも綱目を玄らさる說也石菖蒲は生ニ於水石之間一葉有ニ劍脊一瘦根密節高尺餘者石菖蒲也と時珍いへり今いふ石菖と呼ものは葉に劍脊なけれは本草に錢蒲といふものなり

を六日に出され釜殿役人御湯にいれてたてまつるなりと恒例行事略に見えたれは二百年以降は六日に用ゐらるゝ事となりぬ又五月初六日菖蒲御湯自二釜殿一献レ之云々良賤各浴二菖蒲湯一と日次紀事に見えたれは此時分より上さま下さまおしなへて六日に浴する事ゝゝられたり京師にては檐にふきしあやめをとりて六日の湯に入るよし年浪草に記せり今は五日六日兩日を用ゐたれとふるき書共には六日の事所見なし五日を用る方勝れり

菖湯

歳時語苑〇按に蒲字を省けるなり

蘭湯

拾芥抄歳時故實日本歳時記夏小正楚辞大戴禮〇按に此日蘭をとりて水をもて煮レ之爲二沐浴一は甲兵をさけ惡氣をはらふよし拾芥抄に見えたるは四民月令によりしなり全く四民月令の文拾芥抄に同しさて蘭といふは和名ふちはかまの事にして幽蘭にはあらす思ひまかふへからす

浴蘭

節序詩集月令輯要〇按に蘭湯に浴すといふへきを湯字を省けり詩なとには端午の事をも浴蘭節或は浴蘭令節なとゝつくれり

〇正誤

朗詠抄云用二菖蒲一者昔平舒王殺二臣下一其臣含レ恨成二毒蛇一滅レ國而求二降伏術一有二智臣一申彼蛇頭赤身青似二菖蒲一刻二其體一入レ酒呑或纏レ身者可二降伏一也菖蒲訓二安也女一依レ云二蛇於安也女一名矣

日次紀事云本朝以二水菖蒲一爲二菖蒲一端午用漬レ酒者非也

年中諸節供考云中華にては菖蒲といふは石菖也日本水菖蒲を用ゐるは非也

按に朗詠抄の説は怪妄にして取にたらす是は菖蒲を酒に浸して飲は蛇蟲の毒をさくにいふによりてかゝる妄説有しならん又日次紀事に本朝水菖蒲をもつて爲二菖蒲一端午用漬レ酒者非也といふは誤れり本草に一種根瘦而赤節稍密者溪蓀也俗謂二之水昌蒲一葉倶無二劍脊一溪蓀氣味勝似二白昌一といふをもてみれは今いふ菖蒲と異なり今菖蒲といふは有二劍脊一且又水昌蒲生二溪澗一水澤中甚多失レ水則枯葉似二石昌一但中心無レ脊と蘇頌いへるにて分明

又稱二六日菖蒲一農工商各(闕文)遊戻賤各浴二菖蒲湯一

和漢三才圖會云五月五日件日浴二菖蒲湯一云々是以二菖蒲一代二蘭葉一者乎

續節序記云菖湯五月五日艾菖を湯に入洗へは病を除くといひ習はせり六日にもする人もあり大戴禮に五月五日蓄レ蘭沐浴すとあり楚辭にも蘭湯に浴し芳華に沐すとありかゝる遺風なるへし云々

華實年浪草云五月六日菖蒲京師屋檐ニ所レ葺ノ菖蒲ヲ取テ六日ニ爲二菖蒲湯一是五日夜ノ露ヲ受タル物ヲ用フ彼金門記ニイヘル神水ノ説ニヨル云々

夏小正云蓄蘭傳蓄レ蘭爲二沐浴一也

楚辭云浴二蘭湯一兮沐二芳華一兮

大戴禮云五月五日畜レ蘭爲二沐浴一云々

歲華紀麗云五月端午日叶二正陽一云々時當レ採レ艾節及レ浴レ蘭云々

○詩

節序詩集

端午效二六朝體一　陳　樵

脩篁發二秀林一新荷疊二芳池一采絲擷二霧縷一紗穀含二風漪一綵賓應二樂律一端陽正歲時馥馥蘭湯浴灔灔蒲酒持漢宮鬭草戲楚船張水嬉江心鑄龍鏡好用照二湘纍一

端午詞六首　許　穀

午位昨宵移二火宿一千門今日試二蘭湯一紫薇閣畔薰風度青草池邊晝景長

月令廣義

宋章得象端午閤帖子

蒲酒朝觴滿蘭湯曉浴溫

月令輯要

康熙帝御製五日泛レ舟賜二內大臣侍衞宴一詩

錫レ宴公卿禮數隆浴蘭令節泛二翔鴻一波開舟楫迎二仙仗一岸轉旌旗驟二玉驄一積翠香蒲經二宿雨一輕烟寶幄散二薰風一臣民共樂昇平日暢飲何論灝瀣雄

○釋名

あやめの湯

世諺問答恒例行事略歲時故實日本歲時記○按に五月五日あやめの根葉共にきさみて湯に入浴すれは功能ある事本草に見えたり

菖蒲の御湯

殿中御對面記恒例行事略日次紀事○按に近來は六日に浴湯あり禁中にては五月五日の夜菖蒲の御枕

たり偖皇國にては二百年來都鄙の良賤おしなへて菖蒲湯に浴せり近代は又五日六日兩日ともにあやめの湯をたきて入湯せり京師にては端午屋檐にふく所の菖蒲をとりて六日に湯となすよし花實年浪草記せるは古くはなき事なから五日の夜の露を受たるを用るは金門記にいへる神水の說によるとなりさはあれと世諺問答に五月五日ゑやうふをもちゐるいはれは何のゆゑそ云々酒中に入或は帶にしあるひは沐浴に入侍る云々といへるによれはむかしは五日に限れる事と云られたり

殿中御對面記云五月五日御對面常の如し內々の御祝いつものことし一菖蒲の御湯御行水あり一勢州へ御成御風呂但菖蒲御湯參る

恒例行事略云五月六日菖蒲湯是は菖蒲の御枕を出され釜殿役人御湯にいれてたてまつるなり沐浴に入て功ある事本草にいつ世諺問答にも此說を用ゐられたり

當代年中行事略云五月六日菖蒲湯自二釜殿一供レ之

歲時故實云菖蒲湯むかしは蘭を湯に入もし蘭をもとめえぬものは五色の草を湯に入て此日ゆあみしつるに今の世には菖蒲をそ湯には入ける

武家歲時故實云今日蘭の煎湯にて沐浴すれは惡氣を拂刀難なしとせん樗葉を帶に挾は蚊を去といふ世話あり

拾芥抄歲時部云五月五日云々是日採レ蘭以レ水煮レ之爲二沐浴一令レ人辟二除甲兵一攘二却惡氣一

日本歲時記云五月五日世俗に今日菖蒲湯を用て沐浴する事あり按するに大戴禮に五月五日蓄レ蘭爲二沐浴一とあり楚辭にも浴二蘭湯一兮沐二芳華一と見えたり今の人の菖蒲湯を用て沐浴するもかゝる遺風なるへし

年中諸節供考云五月蓄レ蘭爲二沐浴一本朝菖蒲湯是に似たる事也浴蘭々湯なとつくれり

年中故事要言云端午ニ菖蒲ノ湯ヲ浴コトアリ中國ニハ今日蘭ノ湯ヲ浴ト見エタリ云々

節序紀原云浴二蘭湯一按今浴此日浴二菖蒲湯一蓋本二于玆一歟（大戴禮楚辭の二書を紀原に引とも前に出せはこゝに略せり）

歲時語苑云五月端午浴二菖蒲湯一云々愚按本朝民俗五月五日浴二菖湯一亦蘭湯意歟

日次紀事云五月初六日菖蒲御湯自二釜殿一獻レ之後宴（今日俗謂二節供後宴一）

世諺問答女房私記年中諸節供考○いにしへあやめともゑやうふともさうふともいへり

菖蒲酒

拾芥抄歳時語苑荊楚歳時記達生錄○名義同上

蒲酒

節序詩集月令輯要○按に昌の字を略けるのみ別に義なし

飲續

年齋拾唾閩書風俗志李彤四序總要○按に端午閩國福州にては菖蒲酒をのみて其名を飲續といふと閩書風俗志に見えたり

菖華酒

章得象端午帖子○按に同上に菖華汎レ酒堯樽綠とあるを以て考ふるに菖蒲と同しく酒中に汎て用る也年中行事秘抄に南史を引て云張皇后曰常聞見ニ菖蒲華一者當ニ富貴一自取呑レ之是月生ニ武帝一といへり又これより以往漢世にも所見あり風俗通に菖蒲於レ花人食レ之延年と見えたれとも酒に入て飲事は後の事なるへし

あやめの湯　蘭湯

あやめの湯は菖蒲の根葉をきさみて湯に入て五月五日に浴する事なりゑやうふの根沐浴に入る事本草又大戴禮月令なとゝいふ書に侍ると世諺問答見え五月五日菖蒲の御湯御行水ありと殿中御對面記見えたり是は菖蒲の功能多くあるのみならす可レ作ニ浴湯一と本草に出たるによれる也いはゆる開ニ心孔一補ニ五臟一通ニ九竅一明ニ耳目一出ニ音聲一云々久服輕レ身不レ忘不ニ迷惑一延レ年益ニ心智一高志不レ老云々四肢濕痺不レ得ニ屈伸一小兒溫瘧身積不レ解可レ作ニ浴湯一と本草綱目見えたるにても貴藥なる事ゑられたりゑかはあれと殿中御對面記世諺問答等によるに四百年以降の遺風なり又蘭湯に浴する事も此日なり五月五日採レ蘭以レ水煮レ之爲ニ沐浴一と拾芥抄見えしは蓄レ蘭爲ニ沐浴一と夏小正いへるによれるなりゑかれは蘭湯に沐浴する事は周世よりの遺事なり夏小正は周公旦の手に成しよしいひ傳へたり又楚辭大戴禮歳華紀麗等にも蘭湯の事見え其外騷客の詩賦に載たれは西土にては專ら端午には蘭湯に沐浴せし事とゑられたり菖湯の事は本草綱目に見えしのみにて外に所見なく且そのうへに端午のみにかきりたるには非す病症によりて可レ作ニ浴湯一よし記し

又以二雄黃一入レ酒飲レ之并噴二屋壁牀帳一嬰兒塗二其耳鼻一云以辟二蛇蟲諸毒一云々

全浙兵制日本風土記云端午名曰二少蒲一亦有二菖艾雄酒之設一

淵鑑類函蒲酒註引歲時記云端午以二菖蒲一或縷或屑泛レ酒

群芳譜卉譜云五月五日取二菖蒲一爲レ末酒服方寸七飲酒不レ醉久服聰明忌二鐵器一

○詩

節序詩集

端午效二六朝體一　陳　樵

脩篁發二秀林一新荷疊二芳池一采絲擷二霧縷一紗縠含二風漪一延賓應二樂律一端陽正二歲時一馥々蘭湯浴灎々蒲酒持漢宮鬪二草戲一楚船張水嬉江心鑄二龍鏡一好用照二湘纍一

午日吳申卿泛レ海歸莊君和自二三山一至途中風雨大作　謝　寓　中

度レ山兼泛レ海到値履相交酒帶二蒲根一薦門連二艾葉一敲路多言二混漲一雨盡見二傾巢一出レ戶卽如レ此吾今戀二草茆一

端午詞六首中　許　穀

畫鼓龍舟競二此辰一江南風俗自相親蒲根細切頻隨レ酒艾葉新裁巧趁レ人

午日送三郭主簿之二江都一二首中　王　維　楨

午日有二蒲觴一留レ君醉二帝鄉一酒醒天欲レ暮別去念何長臺駿元稱レ隗棘鸞却負レ香不レ能レ推二俊彥一羞レ說レ位二巖廊一直泛二長淮一盡開レ窓見二廣陵一千區朝市客萬點夜船客燈擁レ岸人騎レ竹當レ官子飲レ氷無二言不一レ得レ意茲地古來稱

月令輯要引章得象端午帖子

菖華汎レ酒堯樽綠菰葉縈絲楚粽香

○釋名

あやめさけ

拾芥抄世諺問答女房私記歲時語苑○按に菖蒲根七莖をとり各長一寸漬二酒中一服レ之と拾芥抄いへり又或いとのことくし或はすりくすのことくし酒にうかめてのむよし千金方歲時雜記等にえるしたり

えやうふさけ

御ひら　三獻　くたもの　御さかつき出る御てうし出る御三獻めに御てうしの中へゑやうふの根入御はいせんひとへ衣にて
公事根元云五月五日節會天皇武德殿に出御なりて宴會をおこなはれ群臣に酒を給ふ也
日次紀事云五月初五日菖蒲葉入酒中而飲レ之辟レ瘟云
凡中華謂ニ菖蒲一者石菖蒲也
年中諸節供考云菖蒲酒
歳時雜記云今日菖蒲を取て縷のことくしあるひは細末して酒にうかへて是を飲は陽氣をたすけとしを延ふ云々
歳時語苑云五月菖蒲酒云々　章簡公端午　帖子菖　華汎レ酒堯樽綠菰葉縈レ絲楚粽香
歳時故實云五月五日菖蒲七根を一寸宛にきり酒にひたして飲は病なし
草木行事云菖蒲酒の事昆明の百節の菖蒲の根萬病を愈す故に百節はなけれとも今日祝レ之云々
年齋拾唾云端午菖蒲を酒に入て飲事あり異國の福州といふ所には婦人のたくひ今日常に菖蒲酒をのみて其名を飲續といふと閩書風俗志および李彤四序總要に見えたり四民月令には此日に糭なと多く食せす只すこし用ひて後菖蒲の根七莖をとり長一寸にきりて酒にひたして是を飲てよろしといへり
和漢三才圖會云五月五日仵日浴ニ菖蒲湯一或以ニ石菖根一漬レ酒飲レ之則禳ニ邪氣一云々
藝苑日涉歳節部云五月五日謂ニ之端午一揷ニ艾及菖蒲于門一簷飲ニ蒲酒一云々
荊楚歳時記云端午以下菖蒲生ニ山澗中一一寸九節者上或縷或屑泛レ酒以辟ニ瘟氣一
千金方云端午以ニ菖蒲一或縷或屑以汎レ酒
遂生錄云五月飲ニ菖蒲酒一爲ニ節物一亦辟レ瘟
帝京景物畧云五月五日漬レ酒以ニ菖蒲一揷レ門以レ艾塗ニ耳鼻一以ニ雄黃一曰避ニ蟲毒一
歳時雜記云端午以ニ菖蒲一或縷或屑泛レ酒
遵生八牋云端午日以下菖蒲生ニ山澗中一一寸九節者上或屑或切以浸レ酒
本草綱目草部云附方除ニ一切惡一端午日切ニ菖蒲一漬レ酒飲レ之或加ニ雄黃少許一
五雜組云古人歳時之事行ニ於今一者獨端午爲レ多競レ渡也作レ粽也繫ニ五色絲一也飲ニ菖蒲一也云々

古今要覽稿卷第五十五

●時令部

●あやめさけ　菖蒲酒　菖華酒

菖蒲酒はあやめの根の一寸九節のものを取てこまかにきり縷のことくになしてさけに汎て五月五日に飲は瘟氣或は蛇蟲の毒をさくるよし和漢ともに所見ありいはゆる取二菖蒲根七莖一各長一寸漬二酒中一服レ之と拾芥抄記せり世俗は唯根節の數に拘らす用ゐ侍れとも一寸九節のもの尤驗あるよし荊楚歲時記千金方本草綱目いへり一說に一寸のうちに百ふしある菖蒲ありかのゑやうふ萬病をいやすと世諺問答いへるはいつれの書に據りしにやいまた其出所を詳にせす偖酒中に浸し用る菖蒲に功能多あり少あり池澤に生するものは泥菖也溪澗に生するものは水蒲也水石間に生し葉に有二劍脊一者石菖蒲也と本草綱目羣芳譜見えたるを以て考ふれは其生する所によりて各名あるなり此水石間に生するものを撰ひとりて酒に浸し用へきなりこれ眞の石菖蒲にして功能枚擧すへからすくはしくは本草に見えたりゑかるを近世は池澤溪澗をきらはすして用ゐ侍るは甚た無稽なり必す水石間に生し葉劍脊ありて一寸九節のものを撰ひとりて用ゐは功驗あらはるへし世俗は盆に水をたくはへ石上に植るものを石菖とすれとこれは本草にいはゆる錢菖なり葉にも劍脊なくして細小なるを以て錢菖の名あり眞の石菖蒲は長さ二尺の餘に及へり又菖花とて菖蒲の花をも酒に浸し端午に用る事あり菖華汎レ酒堯樽綠なりと章簡公端午帖子に見えたり

拾芥抄歲時部云五月五日云々是日糉子等勿二多食一食訖取二菖蒲根七莖一各長一寸漬二酒中一服レ之

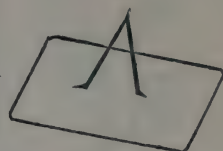
世諺問答云問て云五月五日ゑやうふをもちゐるいはれは何のゆゑにて侍るそや答云混明百節のゑやうふにて一寸かうちに百ふしあるゑやうふありかのゑやうふの根萬病をいやすといへりされは百節なけれともこれを祝ひ侍る也酒中に入或は帶にし或は沐浴に入侍る事は本草又太戴禮月令なとヽいふ書に侍るとなり

女房私記云五月あやめの御祝初獻　ちまき　二獻

なせる趣日次紀事に記せり

菖蒲御殿

故實拾要恒例行事畧年中下行帳○按に根は檜葉をもてふき柱は二本柱にて小殿のことくに作りたる故あやめの御殿とよへり薩戒記に如屋形之餝菖蒲是菖蒲輿也といふ文をもて考ふるに此比ほひより小殿のことくつくりしものと忝らるさはあれとあやめのこしととなへて御殿といひしははるかに後の事と忝られたり

同上第七

清涼殿ノ東西ノ南ノ階ヨリ第一ノ柱也
內侍所ハ下段ノ北ヨリ第一ノ柱イツレモ高ク突上ル也右二箇所也但平唐門高廊下ノ下々道等ヲ經テ小庭ニ到ルト云々

右圖式は皇都藤井氏よりうつしこしたるおもむきなり

○和歌

散木弃歌集
　左京大夫經忠の八條の家にあやめをよめる
岩のうへにおふるみぬまのあやめ草　つめるみこしや萬代のため

○釋名

あやめのこし

延喜式西宮記散木集建武年中行事年中行事歌合公事根源○按にあやめのこしは古今製作ことなりいにしへはたゝ禁裏の宮殿をふく料のあやめ又くす玉なとに用ゆる料のあやめよもきなとをつみ入る輿を名付たりこれ延喜式讃岐典侍日記俊賴朝臣の歌等を以て考ふれはあやめをつみいれてもてありく料に設けし故に立かいへり

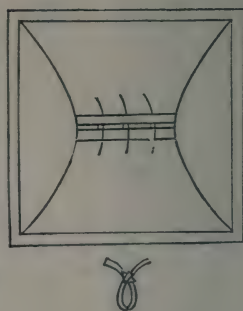
さやうふのこし
世繼物語○名義同上

さうふのこし
淸少納言枕双子讃岐典侍日記○按にさやうふともさうふとも昌蒲をいへはさかよへり薔薇をさやうひともさうひともいふかことし

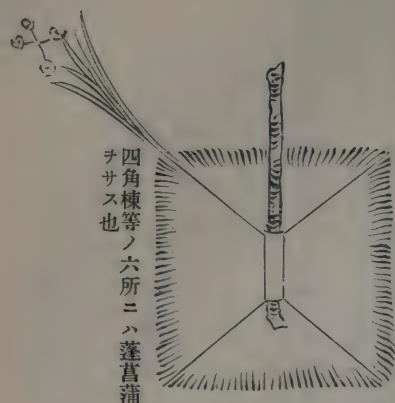
菖蒲輿
西宮記薩戒記和土記○名義同上

菖蒲御輿
日次紀事夏山雜話○按に古への製作とは大にことなり其つくり方あやめの根をつらねて棟梁となし細き木を以て柱となしてつくれりはしらは二本柱なりやねは檜のはあやめを以てつくり小殿の形を

同上第二

檜皮ヲ幅四分バカリニムク也

三所檜皮ニテ男ムスビニスル也

同上第三

菖蒲ノ根也

四角棟等ノ六所ニハ蓬菖蒲チサス也

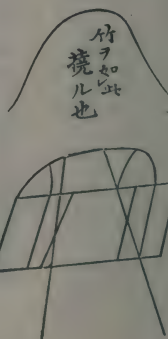
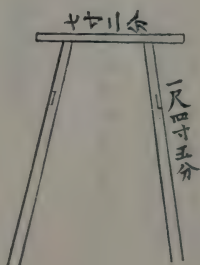
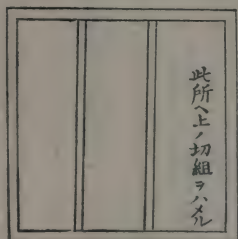
同上第四

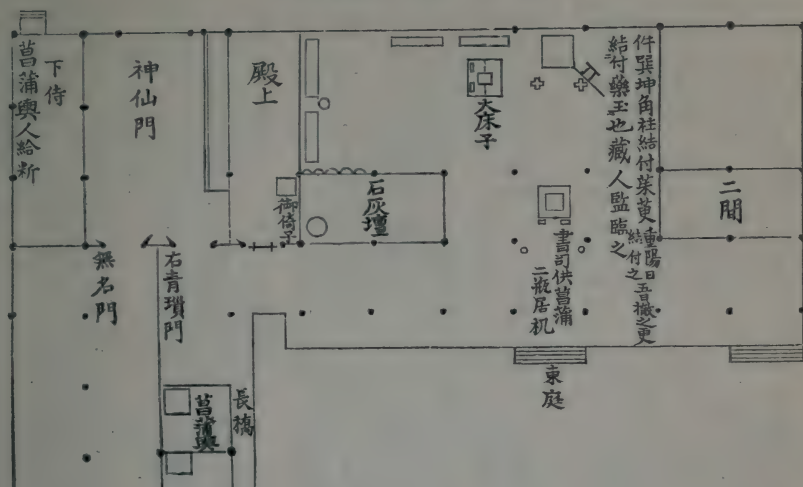
竹ヲ如此撓ル也

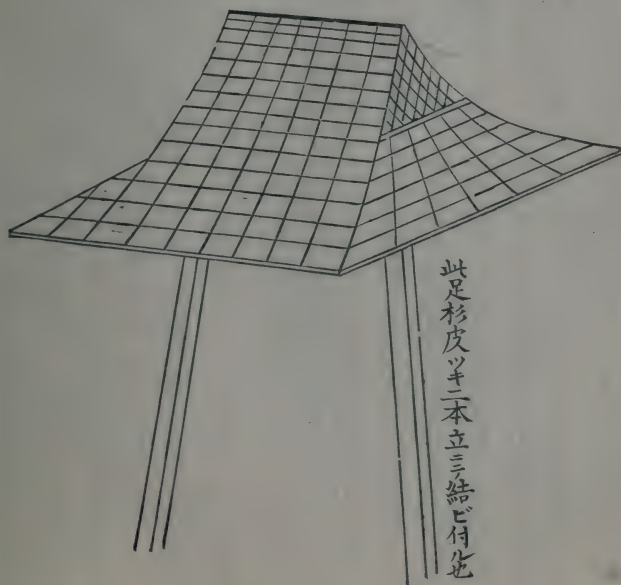
同上第五

一尺四寸五分

同上第六

檜木舞

此所ヘ上ノ切組ヲハメル

一尺六寸四分

の許より贈りぬ此ものをもて明らかにしられたりしかはあれとも往世の輿の造り様もかくの如きものにやさたかには究めかたし

藤井家調進圖第一

餝ニ菖蒲ヲ是菖蒲輿也
公事根源云五月三日六府あやめの輿を南殿の階の東西にたつ又時の花を折そへておなしく四日あさかれひの庭に是をたつ云々
年中行事歌合 十五番歌五日節會 云五日宴を群臣に給也今は絕てなきにや左右近衞左右衞門左右兵衞菖蒲を奉るあやめの輿とて南殿にかきたて侍也云々
和士記云文龜三年五月五日今日內侍所菖蒲輿如ニ例年ノ課ニ衞士府ニ衞士沙汰進レ之以ニ大原樹下ニ下ニ行之ニ八瀨分者爲ニ年預得分ニ也兩所之沙汰同前隨レ時下行其在所不レ同八瀨分柱二本 檜杉間也 杖八本 六七尺也 杉木二束 一束數株 檜葉二把右持來之日晝食代二疋沙汰定例也
故實拾要云菖蒲ノ御殿トハ菖蒲ヲ以テ小キ殿ヲ作リ物ニシテ獻レ之也
恒例行事略云菖蒲御殿これはいつの頃よりや東坊城家より材木等の品を出され衞士是を作りて奉る清涼殿の東庭鬼の間とほり高欄に添てたてらるまた梅か畑村より材木を出しこれも衞士作りて奉る內侍所の西の椽に立らる西宮記に五月六府立ニ菖蒲輿于南庭ニといへる遺風なるへし

日次紀事云五月初五日菖蒲御輿御輿料木自ニ梅畑供御人ニ納ニ今出川家ニ卽遣ニ衞士ニ衞士作レ之其法以ニ連根菖蒲ニ爲ニ棟梁ニ且以ニ細末ニ 按に末字疑らくは木字の誤寫歟 爲レ柱造ニ小殿形ニ以ニ檜葉井菖蒲ニ蓋ニ殿宇ニ衞士獻ニ禁裏ニ
夏山雜話云端午ニ菖蒲ノ御輿ヲ昔ハ六府 左右近衞左右衞門左右兵衞 ヨリ調進セシコト古記ニミエタリ近代ハ東坊城家ヨリ獻セラル故アルコトナランカシ
年中下行帳云一菖蒲輿 イ御殿 東坊城家人副衞士土佐調進下行壹石
溫故日錄云五月三日左右の近衞兵衞衞門の六府あやめの輿を南殿の階の東西にたつ又時の花を折そへておなしくおく四日はあさかれひの庭に是をたつ云々
塵泥云菖蒲輿の事或說に菖蒲御輿の料もと梅か畑より供御の人今出川家に納む卽衞士これを造る其法根あやめを連ねて棟梁となし且細き木を以て柱とし小殿の形を造り檜の葉幷に殿宇をおほふて衞士これを禁中に獻すと云々山岡俊明說に菖蒲輿は五月端午の時禁裏の宮殿へふき又藥玉なとの料にあやめを持まゐる時車に積て來るそれを輿とはいふなり云々憲このころ廷臣藤井總博の家より年ことに調進するところの菖蒲輿の圖式をうつしとゝめてかりに記してか

りこれをあやめの御殿ともいへりそのさまは二本柱にして屋根あり小殿の形ちを作りなせるものなりやねの四すみ棟等の六所には蓬あやめをさすよしなりさて和士記文龜三年五月五日の條にあやめの輿をつくれる木材を八瀨より調進する事見えたり其調の材をもてつくれるあやめのこしならは藤井家調進の二本柱につくれる輿の說にあへり文龜三年より今茲天保辛丑迄三百四十二年に及へりまたはるかに後れて延寶の頃はあやめの根を以て棟梁となすと(日次紀事)記したれは藤井家調進のものとは異なる樣に推はからるるなりさて小殿の形をなせるものは應永の頃よりありしとみえて其體如三屋形之餝二菖蒲一是菖蒲輿也と(薩戒記)みゆれと古代の輿の形詳にしれかたし猶考へし

延喜式(近衛府)云凡五月三日藥玉料菖蒲蓬(惣盛二一輿一)雜花十捧(盛レ瓮居レ臺)三日平旦中內侍司列二設南殿前一(諸衛准レ此)

西宮記云五月三日六府立二菖蒲輿瓮花一(各一荷花十捧)南庭一(見二近衛府式一)云々

世繼物語(かゝやく藤壺)云五月五日になりぬれは云々軒のあやめもひまなくふかれてこゝろことにめてたくをかしきに御藥玉しやうふのこしなともてまゐりたるもめつらしうて云々

清少納言枕双子(人の家につきゝきしき物の條)云三條の宮におはしますころ五日のさうふのこしなともちてまゐりくす玉まゐらせなとしき云々

讚岐典侍日記云五月四日夕つかたに成ぬれはさうふいとなみあひたるをみれはこそのけふ何事思ひけんさうふのこし朝かれひのつほにかきたて〳〵殿ことに人々のほりてひまなくふきしこそみつのゝあやめも今はつきぬらんとみえしか又の日も空はさみたれたるにのきのあやめしつくもひまなくみえけるに云云

建武年中行事云五月三日六府菖蒲の輿を南殿の階の東西にたつ四日あさかれひの庭にこれをたつ云々くすりのつかさのしやうふなかはしのかへのもと殿上のまへにおく云々

薩戒記云應永卅三年五月三日六衞府獻二菖蒲花一之事見二年中行事一是則當時衞士所二持來一之菖蒲也又同五日書司供二菖蒲一云々於二當時一如何又同日典藥寮供二菖蒲一云々是近來進二於南殿一之菖蒲也其體如三屋形之

古今要覽稿卷第五十四

●時令部

●あやめのこし　菖蒲輿

あやめのこしは五月三日平旦六衞府より禁中へ奉れり藥玉料菖蒲蓬惣盛一輿と（延喜近衛府式）みえたるを始とせりこれよりしてあやめのこしの名目おこれる也六府立二菖蒲輿瓮花（各一荷花十捧）南庭一と（西宮記）見えたり又しやうふのこしさうふのこしともいへりいはゆる五月五日になりぬれは御藥玉しやうふのこしなともてまゐりたるもと（世繼物語）見え又三條の宮におはしますころ五日のさうふのこしなともちてまゐりと（清少納言枕双子）見え五月四日夕つかたに成ぬれは云々さうふのこし朝かれひのつほにかきたてゝ殿ことに人々のほりてひまなくふきしこそみつのゝあやめも今はつきぬらんとみえしかと（讃岐典侍日記）かけるによれはくす玉の料あるは御殿ことにふくあやめを輿につみてかきもてありけはとりまはしよき故に設けられしものなりしかるを後世はさなくして別段あやめのこしをつくりなせり之を菖蒲の御輿とも又あやめの御殿ともいへり其製法は以連二根菖蒲一爲二棟梁一且以二細木一爲レ柱造二小殿形一以二檜葉并菖蒲一蓋二殿宇一と（日次紀事）見え菖蒲の御殿とは菖蒲を以て小き殿を作り物にして獻之と（故實拾要）見えたり昔は六衞府より奉りしかとも近世は東坊城家より獻せらるゝよしなり菖蒲の御輿を昔は六府（左右近衞左右衞門左右兵衞）より調達せし事古記にみえたり近代は東坊城家より獻せらると（夏山雜話）見え菖蒲輿東坊城家人副衞士土佐調進下行壹石と（年中下行帳）見えたり黑川道祐說に菖蒲御輿料木自二梅畑一供御人納二今出川家一卽遣二衞士一衞士作之と（日次紀事）見えたり古製は山岡俊明說に菖蒲のこしは五月端午禁裏の宮殿へふき又藥玉なとの料にあやめを持まゐる時車に積て來るそれを輿とはいふなりといへるそ穩に聞え侍りさすれは別段ことやうにつくりなしたるものにはあるへからさるにやしかはあれとふるき圖式なけれは其製作しるへからす雲圖抄にあやめのこしするしし場所の圖を載たれと輿の圖は見え侍らす近代のものは藤井家調進のよし傳ふる圖ありこれ和土記故實拾要なとにいふ所の說に粗あへ

身はならはしの苫の床かな
あやめ草　九條三位入道知家
有漏の身のかりのあやめの草枕
この世は旅の夢そかなしき
夫木和歌集夏部
菖蒲　後京極攝政
老若五十首歌合
なほさりに袖のあやめをかさしきて
枕も夢も結ふともなし
前中納言定家
家集院北面にて
手なれつゝすゝむいは井のあやめ草
けふは枕にまたや結はん

〇釋名

あやめのまくら
千載集新後撰集東鑑關東海道記〇按にいにしへはいかゝこしらへけん其つくり方えられされとも二百二三十年前の仕立かたは菖蒲をたけ五六寸はかりにきりて五寸まはり計にあとさきをかみひねりにて結ひて兩方の小口によもきをさしはさむなりと當時年中行事にえるさせ給ひ東鑑にみえし所は金銀をちりはむとあれはかさりつくせしものとえられたり

菖蒲御枕
東鑑殿中御對面記宮中行事略〇名義上に同し
あやめの草の枕
新後拾遺集〇名義同上

につきて先近所の寺にとゝまりけるに今宵は菖蒲の枕しく夜也とてしき侍りて云々

殿中御對面記云五月四日の夜菖蒲の御莚御枕參りてしかせられて御しつまり候

後水尾院當時年中行事云五月四日あやめの枕うずやうにつつむ一對こよひ御枕本にありうすやうは極薦調進す御枕は勾當内侍より出す也其樣菖蒲をたけ五六寸はかりにきりて五寸廻りはかりに跡さきをかみひねりにて結ひて兩方の小口によもきをさし挾む也

宮中行事略云菖蒲御枕是は菖蒲をふとさ四寸まはり長さ三四寸はかりあとさきを紙捻にて結ひたるものなり長橋御局より献せらる上包の薄樣は極薦より調進す

禁中年中行事略云菖蒲御枕新藏人より奉る

年中下行帳云五月四日菖蒲御枕　新藏人獻レ之

日次記事云五月端五云々今夜大人小兒用二菖蒲枕一云云

和訓栞云あやめの枕東鑑に見ゆ鏤二金銀一といへり新藏人より奉るよし年中行事に見えたり

○和歌

千載和歌集卷第三夏歌

久我内大臣の家にて旅宿菖蒲と云る心をよめる　前中納言雅賴

都人ひきなつくしそあやめ草
かりねの床のまくらはかりは

續拾遺和歌集卷第三夏歌

菖蒲を讀侍ける　前中納言雅具

あやめ草一夜はかりの枕たに
むすひもはてぬ夢のみしかさ

新後撰和歌集卷第三夏歌

千五百番歌合に　皇太后宮大夫俊成

立花にあやめの枕にほふ夜は
むかしを忍ふかきりなりけり

新後拾遺和歌集卷第三夏歌

百首歌奉し時菖蒲　前關白近衞

引むすふあやめの草の枕をは
旅とやいはんひと夜ねにけり

新撰六帖

五日　右大辨入道光俊

枕にはあやめもしらて明にけり

續日本紀延喜式西宮記小野宮年中行事本朝月令花鳥餘情〇按にあやめのかつらはひかけのかつらのことしと西宮記にみえ造二菖蒲蘰一之體用二細菖蒲草六筋一以二短四筋一當二巾子一前後各二筋以二長二筋一廻二巾子一充二前後一と小野宮年中行事裏書引二九條右相府記一ていへれと製作古今のたかひあるなり

菖蒲蘰

同上〇名義同上按にかつらといふ字續記には縵に作り延喜式に鬘或は蘰に作り萬葉集九條右相府記共に蘰に作りたれとも義はいつれも同し

あやめのまくら菖蒲枕

五月五日菖蒲をもて枕にしく事は中むかしよりはしまれる事也前中納言雅賴卿歌に都人引なつくしそあやめ草かりねの床の枕はかりは又俊成卿の立花にあやめの枕にほふ夜はとよまれたるによれは七百年はかりのいにしへよりして用ゐられしもの也嘉禎四年五月四日自二將軍家一被レ調二進菖蒲御枕幷御扇等於公家一と東鑑みえたるによれは嘉禎の比はあつまにても用ゐられし事しられたり又明應の比には世にあまねく用ゐられしものとみえて五月五日今宵は菖蒲の枕しく夜也とてしき侍りてと關東海道記みえたるにて明らか也凡五月五日あやめ草をもて屋の軒にふき或はかつらとなし或は續命縷につくり或は枕にしく事皆時の邪氣をさけはらはん爲に用ゐらるゝなり菖蒲は辟二瘟氣一と荊楚歲時記みえたり又同日あやめの莚を用らるゝ事三百年前よりあり五月四日の夜菖蒲の御莚御枕參りてしかせられて御しつまり候と殿中御對面記みえたり是も邪をさけあしき蟲なとをよくるましなひに用ひられしにやさて又禁中へは五月四日新藏人あやめの御枕献するよし禁中年中行事年中下行帳にみえたり枕のつくりかたは菖蒲をたけ五六寸はかりにきりて五寸廻りはかりに跡さきをかみひねりにて結ひて兩方の小口によもきをさし挾むよし後水尾院當時年中行事にしるさせ給へり

東鑑云嘉禎四年五月四日及レ晩自二將軍家一被レ調二進菖蒲御枕鏤二金銀一并御扇等於公家一云々件御枕者爲二六位定役一調進者也而依下被レ求二御進物一之次上如レ此云云

關東海道記云明應八、五月五日關民部大輔盛貞在所

公鳥鳴五月者菖蒲花橘乎玉爾貫一云貫交縵爾將爲登云々

右或云柿本朝臣人麻呂作

又卷第八夏雜歌

大伴家持霍公鳥歌一首

霍公鳥雖待不來喧蒲草玉爾貫日乎未遠美香

又卷第十夏雜歌

詠鳥

霍公鳥厭時無菖蒲蘰將爲日從此鳴度禮

又卷第十八

爲レ贈ニ京家ー願ニ眞珠ー歌

珠洲乃安麻能於伎都美可未爾云々保登等藝須伎奈久
五月能安夜女具佐波奈多知波奈爾奴吉麻自倍可頭良
爾世餘等都追美氐夜良牟

右五月十四日大伴宿禰家持依レ興作

國掾久米朝臣廣繩以ニ天平二十年ー附ニ朝集使ー入レ京其事畢而天平感寶元年閏五月二十七日還ニ到本任ー仍長官之舘設ニ詩酒宴ー樂飮於時主人守大伴宿禰家持作歌

於保伎見能末伎能末爾末爾等里毛知底云々保止々支須支奈久五月能安夜女具佐余母疑可豆良伎左加美都伎安蘇比奈具禮止射水河雪消溢而云々

又卷第十九

詠ニ霍公鳥ー歌

霍公鳥今來喧曾無菖蒲可都良久麻泥爾加流々日安良米也

毛能波三箇辭闕レ之不レ飽下感ニ霍公鳥ー之情上述懷作歌

春過而夏來向者足檜木乃山呼等余米左夜中爾鳴霍公鳥始音乎聞婆奈都可之昌蒲花橘乎貫交可頭良久麻而爾里響喧渡禮騰母尙之努波由

五十番歌合

右　騎射　　女　房

射手人のあやめのかつらなかき根に
けふのま弓を引やそへまし

左歌六衞府あやめをたてまつる心にや右あやめのかつらなかきねにとて今日のま弓を引やそへましといへる詞珍敷侍れは勝へき由判者申傳しかとも左も殊難なき由申侍て持と定られき

〇釋名

あやめのかつら

鬘ニ諸司各供ニ其職ー事見ニ儀式ー
又兵部式云凡五月五日節會文武群官著ニ菖蒲蘰ニ云々
西宮記云五月五日云々天皇出御著ニ菖蒲鬘ー如ニ日景鬘ー
小野宮年中行事云五月五日云々當日早旦天皇服ニ御菖蒲鬘ー御鬘絲所未明獻レ之幸ニ武德殿ニ承和故事御輿不レ昇レ階ニ級而駐レ之而自ニ貞觀ー以後猶昇進ニ御於階上ー
又裏書引ニ九條右相府記ニ云造ニ菖蒲蘰ー之體用ニ細菖蒲草六筋ー短草九寸許長草一尺九寸許長二筋短四筋以ニ短四筋ー當ニ巾子ー前後各二筋以ニ長二筋ー廻ニ巾子ー充ニ前後ー草結四所前二所後二所毎所用ニ心葉縒組等ー
本朝月令云五月云々國史云天平十九年五月天皇御ニ南苑ニ云々此月詔曰昔五日節常用ニ菖蒲ー爲レ縵比來已停ニ此事ー從レ今而後非ニ菖蒲縵ー者勿レ入ニ宮中云々
八雲御抄云菖蒲あやめくさ萬にあやめくさかつらにきむ日といへり
花鳥餘情云五月五日節天皇あやめのかつらをかけ給て武德殿に行幸あり內辨外辨等節會の如し云々
五十番歌合判詞云右是は古今なとに見すもあらすなと讀る右近馬場の騎射にはあらす五月五日豐樂院にて昔は騎射を御覽せられし也是を馬遊見と云天子群臣みなあやめのかつらを冠にかけて節會の儀ありし也くすりを給けるにや與有事にこそ侍れ
公事根源云五月四日天平十九年五月より詔ありて百官諸人悉菖蒲の蘰をかくへしかけさらんものは宮中にいるへからすとさためらる
又云五日節會天皇武德殿に出御なりて宴會をおこなはれ群臣に酒を給ふ內辨なとも四節におなし人々みなあやめの かつらを かく日蔭 のかつらのことし云云
四條家舊法云五月五日此日しやうふをふく事云々天平十九年五月にちよくちやうありて百官諸卿あやめのかつらをかくへし懸さるものはきう中に入へからすと定めらる云々
和訓栞云あやめのかつらは續日本紀に昔者五日之節常用ニ菖蒲ー爲レ縵と見えたり

○和歌

萬葉集卷第三 挽歌
石田王卒之時山前王哀傷作歌
角障經石村之道乎朝下離將歸人乃念乍通計萬四波霍

古今要覽稿卷第五十三

●時令部

●あやめのかつら　菖蒲鬘

あやめのかつらは五月五日未明禁中に絲所より獻するを天子かけ給ひて武德殿に行幸ましまし例の節會行はる內外の群官も皆かくる事なり是は時の疫邪惡氣なとをさけんためにせしめ給ふ也これ往古よりの仕來りなりしを聖武天皇の御時の比は既に此事廢せしとみえて天平十九年五月太上天皇詔にむかしは五日の節常にあやめをもつてかつらとなす頃來すてに停ニ此事ー今より後あやめのかつらにあらさるものは宮中に入ることなかれと（續日本紀）みえたるによれはいつれの御代よりか此事行はれさりしを此御時よりして年々の五月五日には文武群官必すあやめのかつらをつけて宮中に出入せしめしより定例となりし事この詔にて明也萬葉集に詔ありし年より四五十年前あやめのかつらを讀る歌みえたり則山前王の作歌にほときすなくさつきにはあやめ草花橘を玉にぬきかつらにせんとゝよまれたるは文武天皇の御宇にてやありけん山前王は養老七年十二月卒すとみえたれは天平十九年にさきたつ事二十五年なれはかにかく山前王の世にいませし比はあやめのかつらを用ひられしことかの歌にてしられたり又それより後家持卿の歌にあやめくさかつらにせんひとも菖蒲草よもきかつらきとも讀れたるによれはよもきをもあやめにそへてかつらとせられしなりしかはあれとあやめの鬘製作の事九條右相府記にくは敷しるされたれとよもきを用ひられし事みえねは時によりて其製作は異なりしにやあらん延喜式西宮記等には內外群官皆着ニ菖蒲鬘ーとも天皇出御著ニ菖蒲鬘ーとのみにて異なる事なし小野宮年中行事にはくは敷しるされたれとも萬葉集にみえし花橘を玉にぬきかつらにせんとよめる歌には合はすこれ皆時世によりてたかひあるのみ

續日本紀（聖武天皇紀）云天平十九年五月庚辰是日太上天皇詔曰昔者五日之節常用ニ菖蒲ー爲レ縵比來已停ニ此事ー從レ今而後非ニ菖蒲縵ー者勿レ入ニ宮中ー云々

延喜式（太政官）云凡五月五日云々是日內外群官皆着ニ菖蒲

こもふく
同上

なとさやうの事はなきそと云々此國になきよし申けれはあさかの沼の花かつみをふけと世繼物語の給へるよりしてかつみをとりてふきしは時にとりての頓知且かの中將のみやひも忘られたり抑あやめをふく事は前條にものへしことく火災を除かん爲のよし後成恩寺殿の御說もあなれはもとも何草にても水草にさへあれはよかるへきをかつみふきしはいとよしかつみはこもといふ草なり故にかつみふけと中將の給へはこもといふものをふきけると同上みえたり其後國のならひとなりしよし東齋隨筆いへり

世繼物語云みちの國のかみ橘の爲仲といふ人國に下りて五月四日たちに廳官とかやいふもの年老て例のあやめにはあらぬ草を引けるを見てけふはあやめをこそ引日なるにといへは此國には昔よりあやめ引事忘らさるに實方の中將みたちの時今日はあやめを葺日なるになとさやうの事はなきそととひ給へは國のならひにさる事なしと申せは五月雨なとの比軒の雫もあやめによりてこそ見るに急きふけとあれは此國には生侍らすといふさらはあさかの沼の花かつみといふものありそれをふけとの給へはこもといふものをなむふきける云々

東齋隨筆云實方中將奥州ニ下向シテ云々又奥州ニアヤメナキニヨッテ水草ハ同事トテ五月五日ニカツミヲフカレタリ其後國ノナライトナリカツミヲフクト云ヘリ

○和歌

拾玉集宇治山百首

夏

菖蒲

東路や野澤のかつみけふはかり
菖蒲の名をもかりてける哉

○釋名

かつみふく

世繼物語東齋隨筆○按にかつみはまこもの實なり其實諸國にて食料となし尾張美濃邊にてはかつみきりといひてそはきりのことく製すといへりされは粮實(カテミ)の轉したるなるへしあさかの沼の花かつみふけと實方中將のたまへはこもといふものをなんふきけると世繼物語にみえたるにてかつみはまこもなること明なり

葺菖蒲
西宮記山槐記玉藥玉海東鑑百練抄○名義同上
あやめの草の庵
拾遺和歌集○名義同上
あやめふく軒
玉葉和歌集○名義同上
あやめかりふく宿
新拾遺和歌集○あやめはかりとりてふけはいへるなり
かりにふくよもきあやめ
續千載和歌集○かり初にふくよもきあやめといふ義なりよもきをあやめにそへてふく事は枕草子に見えたり
ひさしにふけるあやめ
堀河院御時百首○按に軒のひさしともいへは軒のあやめといふにおなし
やとをかされるあやめ
山家集○屋の軒にあやめふけは一入時めきて見はへする物なれは宿をかされるといへり
○正誤
藻鹽草節時云五月端午これ五日の事也菖蒲をふくは此日也又奥州に菖蒲をはふかすこもをふくと也是をふきといふ也むかしはみちの國に菖蒲のなかりし故也みちの國に淺香のぬまにあり又云彼國信夫郡には今年のこもをかりてかりやを作りてふきはしめ其後こもをかるとかや但是は五日の義にあらす
按に菖蒲をふくは此日也といふはさらに聞えぬ說也菖蒲をふく事は五月四日にふく事通例なりむかしふきはしめられし比は五月四日の夜の中にふかれし也西宮記蜻蛉日記師元年中行事等皆四日夜にふかるヽよし志るされたるによれは五日にふくといふは誤也
かつみふく
五月四日軒にかつみふく事はみちの國のふるきならはしなりこれはむかし實方の中將奥州にくたられたりしより事おこりし也其後橘の爲仲といふ人みちの國の守となりて國に下りて五月四日あやめにはあらぬ草を引けるをみてけふはあやめをこそ引日なるにといへは此國にはむかしよりあやめ引事志らさるに實方の中將みたちの時今日はあやめをふく日なるに

さ月もなのるあけくれの空

皇太后大夫俊成卿

五社百首
なには人蘆まの菖蒲あしのやに

やかて添てやけふはふく覽

同

同
瑞垣やさ月のけふのみとひらき

飾る菖蒲のかさへなつかし

慈鎮和尙

百首御歌
すみの江の汀のあやめからてみむ

ほかの軒はの物と成とも

同

同
野澤潟あやめとはれて露おもみ

軒によそなる花ゑやう哉

西行上人

同
櫻ちる宿をかされる菖蒲をは

花ゑやうとやいふへかる覽

此歌家集云かやう院に中の院と申所に菖蒲ふきたるはうの侍りけるにさくらの花の散けるかめつらしくおほえてよめると云々

こゝろさし淺さは沼のあやめ草

いかゝは閨の妻とみるへき

正三位季經卿

○釋名

軒のあやめ

榮花物語後拾遺和歌集新千載和歌集○按に軒にあやめふく事は火災をよけむ爲のよし後成恩寺殿の御說なり故に諸書の說も新造の家喪家ともにはゝからさるよしなり抑屋の軒にあやめふき初しはいつのとしといふ事はたしかならされとも西宮記かけろふ日記等にみゆれはその比よりや始りけん國史式等にみえされと醍醐天皇延喜の御時よりや始まりけん又は其比は定例とならさる故に式にはゑるされさりしにや

さうふふく

西宮記かけろふ日記枕草子○同上にさうふふくといひなから軒のあやめのかをりとも同文中にいへれはあやめふくともさうふふくともむかしはいひしなりあやめは和名にてさうふは字音なり延喜式にはあやめの假字を漢女草とかけり

さみたれは宿につくまの菖蒲くさ
　軒の雫にかれしとそ思ふ
堀河院御時百首
　菖蒲　　　　　　　　　　修理大夫顯季
夜とともにかよふ淀野のあやめ草
　けふ誰宿のつまと成らん
　　　　　　　　　　　　　木工頭俊頼
我宿は軒の忍ふのえけゝれは
　ふける菖蒲も見えぬなりけり（けふかなイ）
　　　　　　　　　　　　左近權少將師時
さらぬたに草の庵となる宿に
　けふはあやめを引そふるかな
　　　　　　　　　　　　　肥　　後
蓬生のふせやかつまのあやめ草
　けふ引わかすかけてみる哉
　　　　　　　　　　　　　紀　　伊
あやめ草けふは懸らぬ軒そなき
　數えらぬまに曳るなるへし（はイ）
　　　　　　　　　　　　　河　　內
けふことの廂にふけるあやめ草
　たゝかりそめの妻とこそみれ
夫木和歌集夏部
　菖蒲　家集菖蒲を　　　　大納言經信卿
さは水にゑしのおりひくあやめ草
　君かうてなに祝ひ葺らし
　　　　　　　　　　　　　兵　　衞
祺子內親王家歌合五月五日菖蒲
玉にぬくけふの菖蒲は宿ことの
　軒端にかけて誰かみさらん
　　　　　　　　　　　　法性寺入道關白
御集菖蒲
えつのやはもとは蓬のかた廂
　あやめはかりをけふは葺なん
　　　　　　　　　　　　　季　通　朝　臣
久安百首
わかすめる元のよもきか宿なれや
　あやめ計をけふは葺なん
　　　　　　　　　　　　上　西　院　兵　衞
同
こもり江のみきはの菖蒲ひきかへて
　玉の臺にかゝるけふ哉
　　　　　　　　　　　　前中納言定家卿
承久二年四季百首曉
色はまたわかれぬ軒のあやめ草

長き例にけふやひかれん
玉葉和歌集巻第三夏歌
五月四日家に菖蒲ふくをみてよめる
平經正朝臣
あつまやの軒端にねさす菖蒲草
うゑぬ忍ふもおひすやはあらぬ
菖蒲を讀侍りける　權中納言公雄
けふといへはあやめ計そふきそふる
軒はふりぬる蓬生の宿
百首御歌の中に　後鳥羽院御製
あやめふくかやか軒はに風すきて
しとろに落る村雨のつゆ
後鳥羽院に五十首歌奉けるに　宮内卿
しつかふく菖蒲の末を便りにて
すみか並ふる軒のさゝかに
正治百首歌奉りける時　二條院讃岐
菖蒲ふく軒は涼しき夕風に
やまほとゝきすちかくなくなり
續千載和歌集巻第三夏歌
題しらす　源邦長朝臣
難波潟あしふくこやの軒はにも
けふや菖蒲の隙なかるらん
五月雨　法眼慶融
かりにふく蓬あやめの一本も
のきはにかれぬ五月雨のそら
新千載和歌集巻第三夏歌
題しらす　順德院御製
忘るなよ又こんとしもほとゝきす
軒のあやめの五月雨の空
新拾遺和歌集巻第三夏歌
題しらす　前關白左大臣
時鳥おのか五月のときしらは
あやめかりふく宿になかなん
新後拾遺和歌集巻第三夏歌
百首歌めされしついてに五月雨　後光嚴院御製
五月雨はあやめの草のしつくより
猶おちまさる軒の玉みつ
夏の歌とて　前中納言匡房

あやめの草の庵のみして

後拾遺和歌集卷第三夏

宮内卿經長か桂の山庄にて五月雨を讀侍りける

橘俊綱朝臣

つれ〳〵と音たえせぬは五月雨の

軒のあやめの雫なりけり

とし比すみ侍けるところをはなれてほかにわた

りてまたのとしのさ月五日によめる

伊勢大輔

けふもけふあやめもあやめ替らぬに

宿こそ有りし宿と覺えね

金葉和歌集卷第二夏歌

永承四年殿上にて根合にあやめを

大納言經信

萬よにかはらぬ物は五月雨の

しつくにかをる菖蒲なりけり

承暦二年内裏歌合にあやめを

春宮大夫公實

玉江にやけふの菖蒲を引つらん

みかける宿の妻にみゆるは

五月四日家にあやめをふくを見てよめる

右近衞府生秦兼久

同しくは齊のへてふけあやめ草

五月雨たらはもりも社すれ

千載和歌集卷第三夏歌

菖蒲の歌とてよみ侍りける

内大臣良通

軒近くけふしもきなく時鳥

ねをやあやめにそへてふくらん

新古今和歌集卷第三夏歌

五首歌人々によませ侍りける時夏歌とてよみ侍

りける

攝政太政大臣

打しめりあやめそかをるほとゝきす

鳴くやさ月の雨の夕くれ

新勅撰和歌集卷第三夏歌

菖蒲葺ところ

前關白

深き江にけふあらはるゝあやめ草

年の緒なかきためしにそ引

入道前太政大臣

幾千世といはかき沼のあやめ草

りいつものさうふの御てんまゐるけふの御てんにはりやうあんにてしやうふふかれ候はす候ないし所はかりふかれ候

當時年中行事云五月四日さうふは主殿寮ふくとあれと此頃は丹波國小野といふ所より獻す同所の者あまたまゐりて御殿ことにふき渡す云々

恆例行事略云五月四日菖蒲葺是は小野鄕より調進す百姓參りて御殿の宇にふくなりむかしは四日の夜主殿寮の官人內裡殿舍の菖蒲を葺こと西宮記にみゆ凡葺二菖蒲一爲レ除二火災一也桃花禪閤の記にみえたり

日次紀事云五月初四日古者禁裏院中殿舍菖蒲主殿寮葺レ之當時山城國小野庄六鄕之民著二烏帽子素襖袴一葺レ之到二于中古一小野悉主殿寮領二知之一依レ之于レ今自二小野一勤レ之

和漢三才圖會云五月五日菖蒲葺二屋檐一者也或件日浴二菖蒲湯一云々

國朝佳節錄云水菖蒲葺レ屋本朝流例也無題詩集藤原明衡詩云鸞殿蝸廬無レ擇レ處、樗花菖葉自回辰、

年中下行帳云五月四日御殿菖蒲葺丹波小野鄕七箇村土民下行壹石五斗於二御臺所一粽御酒被レ下

續節序記云五月四日艾菖蒲蓋レ屋今日より艾菖蒲を屋の軒に挾む事我國の風俗なり弘仁式に五月三日平旦に菖蒲蓬花なと南殿の前に置とあり然れは此節にも有しやいつの比初るといふ事未レ聞又拾芥抄に五月四日主殿寮葺二內裏殿舍菖蒲一と侍り然れは往昔より葺來れり

今按に弘仁式に見えたる所はあやめふく料にはあらす委しくは別冊に注すへし

日本歲時記云五月四日國俗今日艾菖蒲を屋の軒に挾む按するに歲時記に五月五日艾をむすひて人の形のことくして戶上にかくれは毒氣をはらふと見えたり國俗艾菖蒲をのきに挾むもかゝる遺意なるへし云云

○和歌

拾遺和歌集卷第二夏

屛風に　　大中臣能宣

昨日まてよそに思ひしあやめ草
けふわか宿のつまとみる哉

題しらす　　よみ人しらす

けふ見れはたまの臺もなかりけり

一條院御時四十九日以後所レ葺也者然者今日所レ葺ニ菖蒲ノ也
百練鈔云文暦元年五月四日故女院舊院不レ被レ葺ニ菖蒲ノ世俗之説終焉御所不レ葺云々但建久六條殿葺レ之嘉承堀川院葺レ之治承高倉舊院不レ葺云々
後成恩寺殿諒闇記云五月五日葺ニ菖蒲ノ事諒闇中不レ憚之喪家並新宅不レ葺也重服並觸中不レ憚之文永度御喪家猶被レ葺之由有ニ所見ノ又延元後伏見院四月五日御事御中陰喪家（持明院殿）被レ葺云々凡葺ニ菖蒲ノ事者爲レ除ニ火災ノ也非ニ家飾ノ仍不レ憚レ之也
拾芥抄云五月四日主殿寮葺ニ内裏殿舍菖蒲ノ
年中行事秘抄云五月三日六衞府獻ニ菖蒲花ノ事（南殿供レ之）云々四日主殿葺ニ内裏殿舍菖蒲ノ事
葺ニ菖蒲ノ事
新造家必葺レ之（代々例也）　不吉家　或葺或不レ葺　天喜二年五月四日左中辨定親尋云故院登霞年内裏葺ニ菖蒲ノ哉尋勘彼年無ニ所見ノ但私記云寛徳二五葺ニ南殿菖蒲ノ又典藥寮獻ニ御藥ノ　又説云不レ可レ葺又云遭レ喪所々葺ニ菖蒲ノ七々忌外不ニ禁忌ノ又今日皇后主御所（東三條院皇后）母祇子去月廿六日行ニ贈位ノ了葺ニ菖蒲ノ

永久二年五月五日東三條高陽院三條殿雖レ觸ニ京極殿北所御事穢ノ葺ニ菖蒲ノ了於ニ京極殿ニ不レ葺
高倉院御所可レ被レ葺ニ菖蒲ノ否事（治承五年師尚申狀）舊院可レ被レ葺ニ菖蒲ノ否事世俗之説終焉之所不レ葺重服人家葺レ之一條殿御事知足院殿重服之時小松殿（知足院御座）葺レ之小川殿（一條殿終焉所）不レ葺之但嘉承三年五月四日內裏被レ葺ニ菖蒲ノ雖ニ諒闇間ノ不ニ相憚ノ又堀川院（先帝登霞所中宮御持）同葺ニ菖蒲ノ此外其例候云々今度不レ葺レ之依ニ師大納言命ノ也建久三年舊院葺レ之
建武年中行事云五月四日主殿寮所々にしやうぶふく云々
東宮年中行事云五月四日しむでん（寢殿）よ〳〵しやうぶ（菖蒲）をふく（葺）事この日しゆでん（主殿）しよ（所）くわん（官）人こてむ（御殿）およひ所々にしやうぶをふく
公事根源云五月四日はあさかれゐの庭に是をたつ主殿寮所々に菖蒲ふく云々
今按に上文にあやめのこしといふ事みえたり
殿中御對面記云五月三日曉御殿の軒に菖蒲に蓬をそへてふき申也檜皮師の役也
御湯殿うへの日記云弘治四年五月四日はうしやうよ

西宮記云五月四日夜主殿寮內裏殿舍葺二菖蒲一〈不見式〉云々

かけろふ日記云五月にもなりぬ我いへにとまれる人の本よりおはしまさすとも云やうふふかてはゆゝしからむをいかゝせむするといひたり云々

又云明れは五日のあか月にせうとたる人ほかよりきていつらけふのさうふはなとかおそうつかう奉るよるしつるこそよけれなといふに驚きて云やうふふくなれはみな人もおきてかうしはなちなとすれは云々

清少納言枕草子云せちは五月に云くはなしさうふよもきなとのかほりあひたるもいみしうをかしこゝのへの內をはしめていひ云らぬ民のすみかまていかてわかもとに云けくふかむとふきわたしたる猶いとめつらしく云々

榮花物語〈かいやく藤壷〉云長保二年五月五日になりぬれは人人さうふあふちなとのからきぬうはきなともをかしうをり云りたるやうに云々軒のあやめひまなくふかれて心ことにめてたくをかしきに云々

山槐記云仁安二年五月四日藏人右衞門權佐經房示送曰執レ聟所三箇年不レ葺二菖蒲一之由有二巷說一如何者答不レ知之由雖レ不レ憚事歟是越後守時實爲レ聟仍相尋歟

又云法住寺殿葺二菖蒲一去年十二月御移徙也新屋三箇年不レ葺之由有二閭巷訛言一仍所レ記也不レ憚事也

又云治承三年五月四日予亭〈三條去年十一月移徙〉葺二菖蒲一如レ恒

玉蘂云建曆二年五月四日人家棟葺二菖蒲一如レ恒

玉海云文治四年五月四日云々今日葺二菖蒲一如レ恒但堂不レ葺レ之依二喪家所一也先例也

師元年中行事云五月四日晚主殿寮葺二內裏殿舍廻廊諸門菖蒲一事

東鏡云文治六年五月五日戊午今日營中不レ被レ葺二菖蒲一是御輕服之間御悲歎之餘也云々

又云建久五年五月五日乙丑御所中屋倉葺二菖蒲一事可レ爲二檜皮葺所役一之由被二仰分一年々政所下部等沙二汰之一云々

又云承元五年五月四日云々新御所可レ被レ葺二菖蒲一否被レ尋二陰陽道等一之處雖二新所一爲二御移徙一後者尤可レ被レ葺以前有二其憚一云々

水左記云承保四年五月四日今日葺二菖蒲一之日也而遭レ喪之家葺二菖蒲一否之條暗以不レ覺此由問二申前大納言御許一之處返答云喪家四十九日中不レ可レ葺云々後

古今要覽稿卷第五十二

●時令部

●軒のあやめ　葺菖蒲

五月四日の夜軒にあやめふく事は中むかしよりはしまれり國史式等にしるさゝれはさたまりたる恒例にはあらさるなりしかはあれと五月四日夜主殿寮内裏殿舍葺二菖蒲一と（西宮記）みえたれは此頃よりはしまりて定例となりしにや又よもきをさうふにそへてふくことはいはゆるさうふよもきなとのかほりあひたるもいみしうをかしこゝのへの内をはしめていひしらぬ民のすみかまていかてわかもとにしけくふかむとふきわたしたると（枕草子）みえたるによれは此ころほひには菖蒲よもきともに軒にふきし事しられたりこゝのへの内をはしめていひしらぬ民のすみかまてといふをもてみれは世にあまねく定例となりしことおしはからる既にかけろふ日記にも我いへにとまれる人のもとよりおはしまさすともしやうふふかてはゆゝしからむをとみえたると西宮記との二記をおもへは九百年前千年ちかきむかしよりのならはしにしてたかきいやしきなへて家の軒にふきしなりさて聟とりたる家三箇年ふかすといふ説あれとはゝからさるよし山槐記に見え新造の家三箇年不レ葺よしの説あれとこれも不レ憚よし同書にみえたり又新宅不レ葺よし後成恩寺殿の説（諒闇記）なりされとも新造家必葺レ之代々例也と（年中行事秘抄）みえたれはふく説にしたかふへきなりさうふふく事諒闇中不レ憚と（後成恩寺殿諒闇記）みえ喪家にはあるひはふき或はふかさる説あれとも多くは憚らさる説なり文暦元年五月四日故女院舊院不レ被レ葺二菖蒲一世俗之説終焉御所不レ葺と（百練抄）みえ但建久六條殿葺レ之嘉承堀河院葺レ之治承高倉舊院不レ葺と（同上）みえ不吉家或葺或不レ葺と（年中行事秘抄）みえたるによれは二書ともにたしかならされとも多くは葺說なれはふく方に随ふへきなり殊に山槐記後成恩寺殿諒闇記等の説によれは新造の家諒闇喪家にいたるまて不レ憚よしなれはこれにしたかふ且そのうへ凡葺二菖蒲一事者爲レ除二火災一也非二家飾一仍不レ憚レ之也と（後成恩寺殿諒闇記恒例行事略）いへりけにさあるへき事なり

この圖は飛驒國高山より北の方八里計に舟津といふ
所にて今世も用る所なり

〇釋名

かゆ杖

さころも

かゆの木

枕冊子〇二種とも同しものにて正月十五日かゆを
燒たる木にてけつりうつ其日の歲事となせれはㄠ
か名つけたるなるへし

〇正誤

枕草子春曙抄云かゆの木ひきかくし正月に此木にて
腰をうては子をうむましなひとて今も童のする事也
狹衣にかゆつえとあるも同物也
狹衣物語下紐云十五日粥の杖にて打古事勘へし禁中
今も粥杖にて女房をうては男子を生すとてうつ也越
前なとにはこと〳〵しきと也本文は知らさるなり
按に本文は既に上に擧るか如く枕冊子辨內侍日記
等に顯然たるをいかてもらしけん春曙抄も委考へ
さるなり

形或は柳櫻の花の如き物を紙にて切粘して松煙を以て是を燻へ其形を取除は其模樣白殘る是を號けて御祝ひ棒と云ひ新婦ある家毎に入て新婦の腰をうつ兒童の戲也云々

婦人養草 粥杖之條 云今も北國のかたには枚の木とて雷盆槌の如くなる丸木に鶴龜松竹寶つくしの繪を彩色幼男ともいまた產せぬ新婦を打祝ふ事あり

書言字考云粥杖北越人謂二之枚ノ木一云々

年中風俗考 正月十五日條 云たいのこの事大の子と云義也陰相を作りて童のもてあそひとして女を祝して大のをのこ子を持たまへと云義也云々

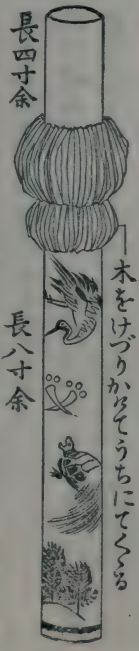
年中故事要言云美濃國泳宮ノ村ニハ正月十五日ニ新ニ杖ヲ削テ其削屑ノ縷ノ如クナルヲ杖ノ頭ニ殘テ名テ削掛トイフ是ニテ女ヲ笞テ大ノ男十三人トイヘリ然レトモ其義ヲ知ル者ナシ是モ男子ヲ生コトヲ求ル祝コトハナラン

和訓栞云正月十五日粥を燒たる木を削りて杖とし子もたぬ女房の後を打は男子をうむといへり云々むかしは諸國にても新婦をむかへし正月にはよめたゝきと稱今いせの神宮あたりにも有云々

日本風土記 時令條 云元宵云々 但街道鄕村兒童年及二十五十八九已上一者各取二柳枝一去レ皮彫二成木刀一 杖を木刀と云は傳の誤なるへし 以レ皮復外纒二千刀上一用レ火燒黑去レ皮以分二黑白之花一 此說日次紀事の追加に合へり 名曰二荷花蘭密一 子孕の義歟 再取二荊棘之條一揷供二香火神前一次集各童手執二木刀一遍身打レ之口念二荷花蘭密一必使二此婦當年有レ孕生レ男云々

祝木の圖

惣長さ曲尺一尺六寸はかりぬりての木くるみの木なとにてつくるすみたんくさのしるなとにて鶴龜松竹たからつくしの繪あり

木をけづりかけてうちにてくゝる

長八寸余

長四寸余

此祝木は北越にていにしへよりつたへて今に造るものなりあるひは祝棒また削掛ともいふとそ

同上

惣長さ曲尺一尺計木は楊木を用

のかへにうしろよういしてゐ給へりかくしてゑけむもねたしなにとまれつえにかきつけてくしかたよりさしいたさばやなとさま〳〵あらますほとに夜も明かたに成ぬいかにもかなはすつひにあふらの小路の門のかたよりいて給ぬときくも限なくねたみてゑろきうすやうに書て杖さきにはさみておひつきてつかはしける

少將內侍

うちわひぬ心くらへの杖なれは

月みて明す名こそをしけれ

建長三年正月十五日頭中將爲氏まいりたりしをかまへてたはかりてうつへきよし仰事ありしかは殿上に候を少將內侍けさんせむといはすれと心えて大かたひ〳〵になりてこなたさまへまいるをとす人々つえもちてよういするほとなにとかしつらむみすをちとはたらかすやうにそ見えしかへりて少將內侍うたれぬねたき事限りなし

建武年中行事云正月十五日御かゆなとまゐる外ことなる事なしわかき人々杖にてうちあふことあり

簾中舊記云正月御つえの事云々十五日のあしたとくさきつてうおもてにて御覽し候てのちいつもの御所にて上樣はしめまいらせ候て御女房衆の右のおかたのうへを三つゝそと御うち候その御杖にあたり候か御めんほくにて候ちとはくをおかれ候て春の野のいぬなとろくゑやうゑにかゝれ候にて候

左義長

滑稽雜談云正月十五日粥杖とて杉枝柴なとにて女の腰をうつなり北國には松の枝木を五色の彩ありて道行女をうつ西國には棒にて女をうつ所侍り故にけふ婦人女子を外へ出さゝる所あり

四季草木行事云正月十五日ちいさきゑもとにて女の腰を打うたれし女は男子を持といへり關東にては大のここと云り是は松の木を男根のことくに削り色とりて打なりと云々

日本歲時記正月十五日條云今日粥杖とて松枝柴なとにて女の腰をうては子をうむましなひとて今もする事なり但今は小兒の戲事となりて云々

北國には松の枝を五色にいろとりそれにて女を打所あり西國には棒にて女をうつ所あり云々

日次紀事追加云信飛三等の國に於ては漆樫(ヌルデノ)木を以て其長さ一尺二寸計に切上下より削掛て先の方に左巻

事なるへしこれも則かゆつえの遺風なることゝ〻らる

淸少納言枕册子云正月云々十五日はもちかゆのせくまゐるかゆの木ひきかくして家のこたち女房なとのうかゝふをうたれしとよういしてつねにうしろを心つかひしたるけしきもをかしきにいかにしてけるにかあらんうちあてたるはいみしうけうありと打わらひたるもいとはえ〳〵しねたしと思ひたることわり也あたらしうかよふむこのきみなとのうちへまゐるほとをも心もとなく所につけて我はと思ひたる女房ののそきけしきはみおくの方にたゝすまふを前に居たる人は心得てわらふをあなかまとまねきせいすれときみ〻らすかほにておほとかにて居給へりこゝなる物とり侍らんなといひよりてはしりうちてにくれはあるかきりわらふをとこきみもにくからすうち〻みたるにことにおとろかすかほすこしあかみてゐたるこそをかしけれ又かたみにうちて男をさへそうつめるいかなる心にかあらんなきはらたちうちつる人をのろひまか〳〵しくいふも有こそをかしけれうちわたりなとやむことなきもけふはみなみたれてかしこまりなし

狹衣物語云十五日にはわかき人々爰かしこにむれゐつゝをかしけなるかゆつえひきかくしつゝかたみにうかゝひ又うたれしと用意したるすまひおもはくともゝとり〳〵をかしうみゆるを大將とのはみ給ひてまろをまゐりてうてさらはそ誰も子はまうけむ誠に〻るしあることならはいたうともねんしてあらんなとの給へは皆うちわらひたるにいとゝいまはさやうなるあふれものいてくましけなる世にこそとうちささめくも有けりわか宮はちひさきかゆつえをいとうつくしき御ふところより引出てうち奉り給へはうち〻み給ひてあなうれしや宮のあまりかたしけなくおほえ給ふにわたくしのこまうけつへかりけりとかかひしくよろこひ申給ふもをかし

辨内侍日記云正月十五日云々まことやけふは人うつ日そかしいかゝしてたはかるへきなといひて出給はむ道にていかにもうつへしいつかたよりか出給はんを〻らねはあしこゝに人をたゝせんとて云々年中行事の〻やうしのかくれに少將辨なとうかゝひしかとも曉まて出給はす云々くしかたよりのそけは殿上

古今要覽稿卷第五十一

●時令部

●かゆ杖　かゆの木

かゆ杖もとはかゆの木といへり正月十五日粥をたきたる木を削りて杖としいまた子持ぬ女の腰をうては必す懷妊し男子を產むましなひなりとそこれいと古き代よりのならはしにてそのはしめいつよりといふこと詳ならされとも村上朱雀なとの御時よりやはしまりけむものにみえたるは淸少納言の枕艸子なとそはしめなるへきそれよりのち寶治の比はなをこのならはし有て（辨內侍日記）內裏あたりにも此たはむれ有けるよしえられたりさて後々は天正のころまても有けることゝみえて紹巴法橋の狹衣物語の注に（下紐）その頃も有けるさまにかけり今は都には絕たりとみえてさる沙汰も聞えすされと諸國には行はるゝ所あり北國にては松杉の小枝を用ひ或は色とりて用ふといへり名つけていはひ木又御祝棒（日次記事追加）あるは枚（バイ）の木（書言字考）とも

按に枚は假字にていはひの木と云へきを上略せる歟

いふとそさて次下に擧たる圖は北越にて祝木となつけいにしへより傳へて今も造る杖なり勝軍木（一名勝の木ともいふ白膠木（ヌルテノキ）の事なり）或は胡桃の木にても造り春のはしめ男兒ある方へおくりつかはすを餅花とともに一所に掛置小正月（正月十四十五十六日をさして北國にはしかいふよし）にいたりて男兒これをたつさへて新婦ある家にゆき新婦の腰を打まねひをして子を孕むましなひとし又祝となすとそ所によりて祝棒とも削掛ともいふとなんこれ則いにしへのかゆ杖の遺俗なり西國にては棒にてうつといひ東國にては男根のかたちに削りてうつともいへり小枝を用ふるは本儀にてあらぬ形なと造れるは俚人の意巧にいつる所なるへし上野國人の話に云かこみ二尺四五寸長さ三尺はかりの男根を紙もてはりぬきに造りて正月十五日に去年めとりし新婦の夫婦をうつ打人は近隣よりあつまるといへりこれを大のこゝ祝といひ又その日赤の水といひて柿澁に墨をましへ瓢簞に入て携へきたり夫婦のものにかくることありといへり（畧）

大のこゝ祝こは年中風俗考にみえたるたいのこの

右剛卯八角長短闊狹大小玉色悉同レ前卯惟玉色滿斑靑翠蝕滿耳瑑ニ刻銘文八句ヿ共三十二字隷書

○釋名

うつち

枕草紙源氏物語江家次第○按に卯槌は正月上卯日絲所より奉るよし江家次第に見えて詳なり但名義は精鬼をおひうつといふよりしかいふか又形狀によりとなふるかいまた詳ならす

剛卯杖

三代實錄

毅杖

和學講談所藏文德實錄○按に剛といひ毅といふも同義にて變りたることなし毅は說文に大剛卯也以逐ニ精鬼一と見え剛は說文に彊斷也从力云々又增韻に堅也勁也と見えてともに精鬼をおふといふによしあるなり但剛卯杖と有はたゝ卯杖のみをいふやうに聞なさるれとさにあらすして卯槌をもこめていへることと上にのするかことし

○正誤

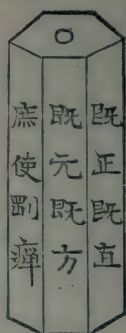
湖月抄云卯つち卯杖同しことなり又云卯杖卯槌大かたは同やうにて聊其姿もかはれるなるへし

按に卯槌は剛卯の遺風にて玉又は金又は犀角象牙又は桃木を四角に作り長き組をさけたる物也卯杖は種々の木を用ひて長さ五尺三寸に伐たるを二本或は四本を一束としてあまた進る物なれは其製大に異なるもの也大かたはおなしやうにて聊其姿のかはれるといふはあやまりなり卯槌はちひさき木に長きいとをさけてうつくしきものなれはわか君のもてあそひかてらまいらせしなり卯杖は五尺あまりの杖の頭を紙もてつゝみしのみなれはいかておさなき人のもてあそひには成へき

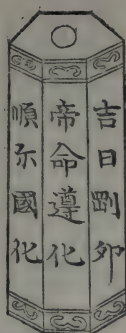
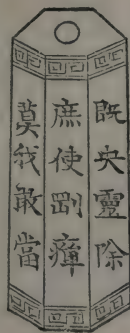
石野遠江守廣道隨筆に京人の說を引て云

東ヘサシタル桃ノ枝ヲ方一寸長三寸ニ削リ正月剛卯ト書シ萌黄色ノ組紐ニ貫テ正月初卯日ニ掛ル

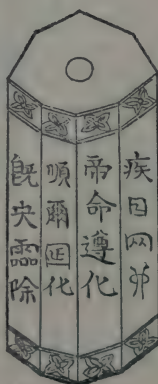
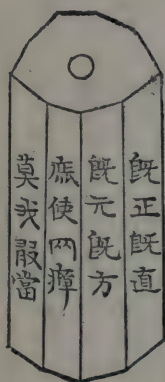
按に是は江次第後漢書なともしらぬ人の說なり正月剛卯と書ことと皇朝の書に所見なし萌黄色の組といふも據なきにや

同上　八計十二字

右剛卯六角式長二寸四分每方濶二分一厘玉色瑩白璊斑匀點琢二刻銘文六句一計二十四字直楷書非二漢器一乃晉唐物也

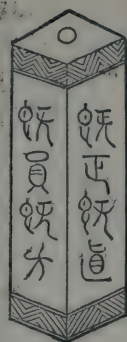
右剛卯六角式長短濶狹俱同レ前玉色瑩白璊斑匀布琢二刻銘文六句一共二十四字楷書亦晉唐物也

同上　九計十二字

同上　十計十二字

右剛卯六角式每方濶三分長二寸五分玉色甘黃璊斑共苔花疊翠琢刻上下圍繞臥蠶之文中刻二銘文六句一共二十四字楷書

右剛卯六角式長方大小同レ前玉色甘黃璊斑丹紫琢刻上下圍繞雷文中刻二銘文六句一共二十四字楷書

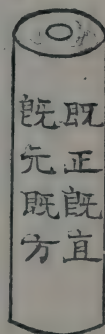
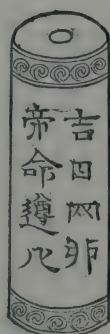
同上　十一計十六字　卯つち

同上　十二計十六字

右剛卯長二寸五分八角式每角闊六分玉色瑩白璊斑丹元琢刻上下圍繞蟠虁中刻二銘文八句一共三十二字隸書

除既正既直既員既方庶使㆓剛瘴㆒莫㆓我敢當㆒共三十二字其字或篆或隸銘文或四句八句不㆑等取㆓其壓勝辟邪之意㆒以下諸種篆隸者出㆓之漢魏㆒楷字者出㆓之晉唐㆒云

同上　三計八字

同上　四銘八字

右剛卯長二寸四分每㆑方濶三分六厘　玉色甘黃璘斑勻點瑑刻上下圍繞山文中瑑㆓刻銘文四句㆒共十六字小篆文

右剛卯長二寸二分四方每㆑方濶四分㆒玉色翠碧無㆑瑕瑑刻上下圍繞臥蠶文中刻㆓銘文四句㆒計十六字小篆文

同上　五計八字

同上　六計八字

右剛卯長二寸四分圓徑二寸四分　玉色甘青璘斑丹赤瑑㆓刻銘文四句㆒共十六字漢隸書

右剛卯長二寸五分圓徑三寸　玉色瑩白微紅無㆑瑕瑑刻上下圍繞聯珠之文中刻㆓銘文四句㆒共十六字漢隸

同上　七計十二字

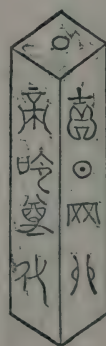
疾日嚴卯帝令二夔化一愼爾周伏二化茲靈殳一既正既直既觚既方庶疫剛癉莫二我敢當一凡六十六字

輟耕錄九巻云剛卯者按二許愼說文一毅音開改二大剛昂一以逐レ鬼也玉篇開二改剛卯大印一以辟レ鬼也廣韻毅改レ大開レ堅也王莽傳正月剛卯注云剛卯以二正月卯日一作佩之長三寸廣一寸四方或用レ玉或用レ桃著二革帶一佩之又注當二中央一從穿作レ孔以二綵絲一葺二其底一刻二其上文一曰二正月剛卯一既央靈殳二四方赤青白黃四色是當帝令下祝融以敎中夔龍上庶疫剛癉莫二我敢當一又曰疾日嚴卯帝令シ夔化二順爾固一化二伏茲靈殳一既正既直既觚既方庶疫剛癉莫二我敢當一凡六十六字毅改者佩印也以二正月卯日一作故謂二剛卯一又謂二之大堅一以辟レ邪也

卯槌圖

今按を以うつす所なり槌は桃材を以長さ三寸ひろさ一寸にけつるへしこれ服虔か說によりて時行尺を用るなり組は五色を用長さ五尺はかりにて十筋か十五筋垂へし後漢書に以二五綵絲一爲レ繩貫レ之とみえたれとも今は近代の掛ものに習て繩になはすして垂たり

宋淳熙敕編古玉圖譜所載漢玉剛卯　一銘八字

同上　二計八字

右剛卯長二寸四分每レ方濶三分三厘玉色瑩白璘斑勻布卯分二四方一每レ面瑑刻二四字大篆一曰吉日剛卯帝命遵レ化順二爾國化一既央靈除共十六字臣謹按後漢書云王莽纂以三劉字有二卯金刀之文一忌レ之每三於正月遇二丁卯之日一以二玉及金一作二剛卯一佩レ之或四方六角八角圓者長二寸四分中穿以レ孔以二五綵絲一爲レ繩貫レ之而葺二其底一其銘文云吉日剛卯帝命遵レ化須二爾國化一既央靈

をかしけれ
源氏物語（浮舟巻）云正月一日すきたる頃わたり給ひてわか君のとしまさり給へるをもて遊ひうつくしみ給ふ云々此たて文を見給へはけに女の手にて年あらたまりては何事かさむらふ云々わか君の御前にとて卯槌まいらせ給ふ云々うつちいとをかしういとつれ〳〵なりける人のしわさとみえたり
江家次第（上卯條）云次絲所進卯槌（如絲所式者可居机歟）其料絲卯槌御机組並縫覆敷料十兩二分（白三年一請參河絲）結組料七兩二分（丹波絲）已上申請納殿藏人取之結付晝御帳懸角柱（四角柱也）副立細木爲柱槌末出五尺許可用桃木又四方可削近代丸失歟
按に桃木を用ひて四方に刋るへしとみえたるによれは漢の剛卯を模せし物なる事明らけし剛卯は漢書の注に服虔曰長三寸廣一寸四方或用玉或用金或用桃とみえ後漢書に中穿以孔以五綵絲爲縄貫之云々と見えたり是によれは江次第の槌末出五尺計といへる出の字の上に組の字落たるなるへし槌とさすものは剛卯にて長さ三寸はかりの物なるへけれはその末に五色の組の長さ五尺はかりなるを垂下すなるへし又後漢書を按に四方六角八角圓者と見えたれは丸く刋れるも據なきにはあらさるなり
漢書（王莽傳）云正月剛卯金刀之利云々服虔云剛卯以正月卯日作佩之長三寸廣一寸四方或用玉或用金或用桃著革帶佩之今有玉在者銘其一面曰正月剛卯金刀莽所鑄之錢也晉灼云剛卯長一寸廣五分四方當中央從穿作孔以綵絲葺其底如冠纓蕤刋其上面作兩行書文云正月剛卯既決靈殳四方赤青白黃四色是當帝（殳兵器）令祝融以教夔龍庶疫剛癉莫我敢當其一銘云疾曰嚴卯帝令夔化順尒周伏化茲靈殳既正既直既觚既方庶疫剛癉莫我敢當師古云今往々有於土中得玉剛卯者按大小及文服說是也
後漢書（輿服志）云佩雙印長一寸二分方六分乘輿諸侯王公列侯以白玉中二千石以下至四百石皆以黑犀二百石以下至私學弟子皆以象牙上合絲乘輿以縢貫白珠赤罽蕤諸侯王以下以綬赤絲蕤縢綵各如其印質刻書文曰正月剛卯既決靈殳赤青白黃四色是當帝令祝融以教夔龍庶疫剛癉莫我敢當

卯杖ニ
清少納言枕草紙物の哀れしらせかほなる物の段云としもかへりぬついたちのひまた雪多く降たるを云々ひしめくに驚ろかせ給ひてなとさはするとのたまはすれは齋院より御ふみの候はんにはいかてかいそきあけ侍らさらむと申にいと丶かりけりとておきさせ給へり御ふみあけさせ給へれは五寸はかりなる卯槌二つを卯杖のさまにかしらつ丶みなとして山たちはなひかけ山すけなとうつくしけにかさりて御ふみはなしたゝなるやうあらむやはとて御らむすれは卯槌のかしらつ丶みたるちひさき紙に
山とよむ斧のひ丶きを尋ぬれはいはひの杖の音にそ有ける
按に后宮の御方へ齋院よりをくらせ給ひたるなりこゝに五寸はかりなるとかけるはなみ／＼よりいと長きやうなれとこれはかしらをつ丶まん料にわさと長く作られしなるへし元より漢の剛卯寸法まち／＼なること淳熙勅編古玉圖譜に見えたれは卯槌も好に任て長短有へきなり
又すさましき物の段云うふやしなひ馬のはなむけなとのつかひにろくなととらせぬはかなき藥玉卯槌なともてありく物なとにも猶かならすとらすへし
按にこ丶の文によれは一條院の長德の頃に至ては諸衛府より大内に奉るのみにはあらて初春をいはひかはさん料に人々の家毎にもかたみにをくりあふこと丶はなれるなるへし
又世にめてたきもの丶段云正月十日空いとくらう雲もあつくみえなからさすかに日はいとけさやかにてりたるにゑせもの丶家のうしろあらはたけなといふもの丶つちもうるはしうなほからぬにも丶の木わか立ていとしもとかちにさし出たるかたつかたはあをくいまかた枝はこくつや丶かにてすはうのやうに見えたるにほそやかなるわらはのかりきぬはかけやりなとして髮はうるはしきかのほりたれはまた紅梅の衣白きなとひきはこえたるをのこ丶はうく（半靴）はきたる木の本に立て我によき木きりていてなとこふにまた髮をかしけなるわらはへのあこめともほころひかちにてはかまはなえたれと色なとよき打きたる三四人卯槌の木のよからむきりておろせこ丶にめすそなといひておろしたれははしりかひとりわき我に多くなといふこそ

古今要覽稿卷第五十

●時令部

●うつち　卯槌

卯槌は正月上の卯の日卯杖とおなしく糸所また諸衞府よりも奉れるものなり但それは晝の御座の西南の角の懸角の柱にかけらるゝなりこれはみな初春をいはひまいらせん爲にかくは奉れるなりいつの頃より奉りそめたるにかつまひらかならねと和學講談所藏文德實錄古抄本に仁壽二年正月己卯諸衞府獻二㱾杖一と見え日本紀略文德天皇仁壽二年云々獻二剛卯杖一とみえたるなと合せ考ふるにこの頃よりはしまれるものにや有へき但㱾は說文に大剛卯也以逐二精鬼一とみえて剛卯といふも同義なれは卯杖卯槌を兼て㱾杖又剛卯杖とはいへるなるへしさかれは持統天皇仁明天皇に奉れるは卯杖のみにて文德天皇以下三代實錄等には剛卯杖と有て卯杖また御杖とはかり載たる所なけれは文德天皇以來は必卯槌を添て奉れる事とは成たるなるへし

文德實錄（和學講談所藏本）云仁壽二年正月己卯諸衞府獻二㱾杖一

三代實錄（淸和天皇貞觀二年）云正月四日乙卯所司獻二剛卯杖一天皇不レ御二前殿一付二內侍一奏

按に此下貞觀三年同四年正月上卯日ともにかくの如くあり

又（同上五年）云正月四日丁卯所司獻二剛卯杖一內侍奏

又（同上八年）云正月二日己卯所司獻二剛卯杖一天皇不レ御二紫宸殿一付二內侍一奏

又（同上九年）云正月二日癸卯所司獻二剛卯杖一如レ常天皇不レ御二紫宸殿一付二內侍一奏

又（同上十三年）云正月八日乙卯云々天皇不レ御二紫宸殿一春宮坊及所司獻二剛卯杖一付二內侍一奏

按にこの下貞觀十四年同十六年同十七年同十八年ともにかくの如くあり

又（陽成天皇元慶二年）云正月七日癸卯所司付二內侍一獻二剛卯杖一

又（光孝天皇仁和元年）云正月十一日所司獻二剛卯杖一天皇不レ御二紫宸殿一付二內侍一奏

日本紀略云文德天皇仁壽二年正月己卯諸衞府獻二剛

祝の杖

公事根源世諺問答等に文德實錄の文を引て祝杖と見えるされたり

御方違よりまた曉にかへらせ給とて卯杖ほかいをきこしめしてと云々
あさまたきいのる卯杖のしるしあらは
千とせの坂もゆかさらめやは
法性寺入道關白

うつえを萬代
神代より年のはしめにきる杖は
いはひそめけり春の宮人
民部卿爲家

寛平二年六帖題新六四
宮の內むつきはかみの卯の日とて
とるてふ杖は萬代の爲
同

文永九年毎日一首中
みかま木に卯杖とりそへけふこそは
君かためにと春いそくらめ
同

同八年毎日一首中
けふ宮の內には年のはしめとて
雲井の庭に卯杖たつ也
參議爲相卿

わかなをよめる
けふことにとたえの卯杖つきすして
君か若菜の萬代のはな

○釋名

うつえ
後拾遺和歌集元輔集枕草子

卯杖
日本書紀文德實錄中原師光勘文江家次第○按に和學講談所の文德實錄には卯杖を卯㲉に作りたり說文に㲉𢻫大剛卯也以逐精鬼漢書注服虔曰剛卯に以正月卯日作と見えたり皇朝の卯杖も正月卯日進る物ゆゑその名をかりて剛卯杖と名つけられしを剛の字を略して卯杖と稱せし物にやあらんさて剛卯をそのまゝにうつせしものは卯槌なり卯杖は名こそ似たれ形狀はをのつから別なるものなり

剛卯杖
三代實錄中原師光勘文日本紀略に文德實錄仁壽二年の文を引て剛卯杖に作りたり

御杖
大神宮儀式帳止由氣宮儀式帳中原師光勘文內裏式延喜式江家次第夕拜備急至要抄

初卯のつえ
散木弃歌集

たゝゆくすゑのさかのためには
赤染衛門集
正月に業遠かうつえしてたいはんところへ入たりしに
いかなりしつえのさかりの日かけとも
たかことたまとみえもわかれす　業遠
かへし
わきてこそ思ひかけさす山端に
我ことたまの杖もさりしか
散木弃歌集〈弃字據契沖校正本〉
七日卯杖にあたりたりける日常陸守經兼かもとよりわかなにそへてをくりける歌
老らくのこしふたへなる身なれとも
卯杖をつきて若菜をそつむ
返し
はとのゐる杖にすかりてつみければ
その末るしさへたのもしきかな
伊勢に侍けるとしむつきの一日卯日にあたりければみそちに卯杖なとたてまつるを見てよめる

けふそ末るこえくる山のけはしさに
年も卯杖をつくにや有らん
はつ卯の日よめる
あさましや初卯の杖のつく〳〵と
思へは年のつもりぬる哉
おなし心をよみて人のかりつかはしける
とへかしなけふのうつえにすかられて
世によろほへる老のすかたを
夫木和歌集春部　祭主輔親
攝政家御屛風歌うづえ
君かためときはの山の玉椿
いはひてとれるけふの卯枝そ　よみ人しらす
承徳二年正月庚申夜歌合　橘盛永
色かえぬときはのみねの玉椿
君か八千代の卯枝にそきる
同
萬代にありきの山の白つはき
君かさかゆく卯杖にそきる　花山院御製

て其上に岩ほの中に御生氣の方の獸をつくりて卯杖にあはしむたとへは生氣東にあらは兎南にあらは馬なるへし臺盤所にをかる延喜式に正月卯日兵衞督以下參て御杖を奏する儀有色々の木ともを五尺三寸つゝにきりて二束三束にゆひて奉るを御杖といふ由見えたり

世諺問答云問て云正月に卯杖と申事の侍るにや答をのつからもろこしに桃杖をもて惡鬼をはらふ事の侍るなり本朝のをこりをたつぬれは持統天皇三年正月の卯の日大學寮よりたてまつるよし日本紀にみえたり其後仁壽二年正月に諸衞祝の杖獻して精魅をおふとみえたりたゝこれ惡氣をはらふこゝろなりうつえといふ物はつくも所よりすはまの作物のうへにいはほをつくりいはほの中に御生氣の方の獸をつくりてたてまつりて卯杖にあはしむるなりたとへは生氣東にあるとしはうさきをつくり南にあるとしは馬をつくるなり延喜式をかんかふれは兵衞督已下まいりて御杖をさうするとありいろ〳〵の木ともを五尺三寸つゝにきりて二束三束にゆひて奉るなりこれを正月かみの卯の日たてまつれは卯杖と云なり

四季草木行事春部云三光院の御說には今の世に賀茂より卯杖とて在家なとへ送れるは一尺あまりの白くけつりたる木ひかけの葛なといひて俱利伽羅龍のかたちに作れる物なり

類聚名物考云或說に卯杖は漢剛卯にならふといふはあやまりなりされは正月卯の日にはつくれとも杖のこときの物にはあらす錢の類ひにて寶貨也

和訓栞云熱田の祭に卯杖舞あり

〇詩歌

年中行事秘抄引二廣業卿卯杖詩一云請見漢家靈壽物女羅色舊大椿枝

後拾遺集和歌集卷第一春上

正月七日卯日にあたりて侍けるにけふはうつえつきてやなと道宗朝臣のもとよりいひをこせて侍けれはよめる　伊勢大輔

卯杖つきつまゝほしきはたまさかに君かとふひのわかななりけり

清原元輔集

うつえ

位山峰につきぬる杖みれは

殿南戸内面東西壁下一立レ之（近代令二女官立レ之失也）件案掃部置レ之次左右兵衛府進二御杖一其儀同レ上但其木椇掮三束（一株為レ束）木瓜三束比々良木三束牟保己三束黒木三束桃木三束梅木二束（已上二株為レ束）椿六束（四株為レ束）掃部女官取レ之立二晝御座御帳四角一次絲所進二卯槌一云々次作物所進二卯杖一自二去年十二月十八日一彼所別當藏人始行事所レ作レ之其料物成二内藏請奏一奏下羅蠣紙墨雜丹金銀絲一絇等自二納殿一請レ之案二脚之上置二小臺一其上置二洲濱一其上作二奇岩恠石嘉樹芳草白砂綠水一其中作二御生氣方獸形一令レ合二卯杖一生氣在レ離作レ馬生氣在レ坤作レ羊不レ作レ猿生氣在レ兌作レ鷄生氣在レ乾作レ猪不レ作レ犬生氣在レ坎不レ作レ鼠尋二養者方一作レ馬生氣在レ艮作レ牛不レ作レ虎生氣在レ震作レ兎生氣在レ巽作レ龍不レ作レ蛇行事藏人以下舁レ之自二仙華門一舁上立二晝御座廣庇一案等返二給所一（他案返二内侍所一本所各請レ之）造物等或有二御前召一若當二節會日一大舍人寮兵衛等卯杖立二外辨一内辨奏二事由一御出以前付二内侍所一東宮卯杖又當二節會一者節會以前進レ之近代必不レ然又案二弘仁式一立二南殿簀子敷一云々若准レ之雖二清涼殿一可レ立二簀子敷一歟但清涼殿者有二廣庇一仍可レ異二南殿一歟可レ尋

夕拜備急至要抄云上卯日獻二御杖一（近代無二御出之儀一）六位藏人存レ例致二沙汰一非二御物忌之時一不レ垂レ庇御簾之外別無二御裝束儀一但作物所獻二洲濱臺一（作二御生氣鳥獸形一）當二御座間孫庇一立レ之（南北妻）

師元年中行事云上卯日獻二御杖一事（持統天皇三年正月乙卯大學寮獻二杖八十枚一云）云

清少納言枕草子云こゝちよけなる物うつえのことふき云々

又云ゑせものゝ所うるをりの事云々うつえのほうし（春曙抄云卯杖を奉る法師にや）

建武年中行事云正月七日云々卯日にあたれは卯杖の奏あり六府杖をたてまつるつくも所生氣の方の獸のすかたを作て卯杖をおはす樣さまの物つくり物あり臺盤所に奉る中宮春宮おなし春宮より宮司を使にてたてまつらる藏人祿を給六府たてまつらる卯杖をとりてひの御帳夜おとゝの御帳四のすみにたつるなり

公事根元（正月條）云御杖上卯日持統天皇三年正月の卯日大學寮より是を奉る由日本紀にあり又仁壽二年正月に諸衛府祝杖を獻して精魅をおふと見えたり是を以て惡鬼を拂ふ心ちなり作物所よりすはまを造物にし

衛府捧杖候於建禮門外近伏服中儀一列陣階下（儀同雷鳴）兩近衛將曹各一人率近衛（左近衛五人右近衛五人）開承明門（相對開之）先共北面立門內壇下共置弓登階開之（將曹倚立）兵衛亦開建禮門訖引還闈司二人出自紫宸殿西分居門內左右（掃部預鋪座）大舍人叫門闈司就版奏云御杖進（牟止）大舍人寮官姓名等（謂五位助以上若無五位權任）叫門故爾申敕曰令奏闈司傳宣云姓名等（乎）令申掃部寮入立案於殿庭版位東西（相去各一丈許）大舍人寮先入（與諸衛）奏進其詞曰大舍人寮奏久正月乃上卯日乃御杖供奉（且）進（樂久）申給（波久止）奏（若親王奏以進禮樂乎替進樂久乎他皆效之）勅曰置之屬已上俱稱唯相轉安案上退出次左右兵衛府入奏進勅曰置之醫師已上俱稱唯訖衛伏坐其杖者口內藏寮允已下史生以上（若寮官人數少用內竪大舍人等）入自日華門舉安御杖之案上退出（案大舍人寮記文諸王若任寮頭者奏辭進字下加恐美恐美毛之詞又中衛記文奏辭有御杖止供奉文詞而延曆年中直稱御杖供奉以省稱御杖止之詞也）

延喜式（大舍人寮）云凡正月上卯日供進御杖其日質明頭將舍人候承明門外舍人叫門門曰御杖進（牟止）大舍人寮官姓名門候（止）申訖掃部寮設案於中庭頭以下舍人以上各執杖分爲兩行入至案下立（去案三尺）頭進奏曰大舍人寮申正月（能）上卯日（能）御杖仕奉（氐）進（良牟止）申給（波久登）申勅曰置之屬以上共稱唯隨次相轉置案上畢卽退出其杖曾波木二束比々良木棗牟保許桃梅各六束（已上二株爲束）燒椿十六束皮椿四束黑木八束（已上四株爲束）中宮比々良木棗牟保許桃梅各二束燒椿皮椿各五束（但奉儀見東宮式）拭細布四丈五尺裹紙五百卌張木綿六斤木賊十五兩十二月五日申省又（左兵衛府）云凡正月上卯督以下兵衛已上各執御杖一束次第參入立定佐一人進奏其詞曰左右兵衛府申正月（能）上卯日（能）御杖仕奉（氐）進（良久）申給（波久登）申勅曰置之醫師已上共稱唯獻畢以次退其御杖榠櫨三束（一株爲束）木瓜三束比々良木三束牟保己三束黑木三束桃木三束梅木二束（已上二株爲束）椿木六束（四株爲束）中宮東宮々別榠櫨一束（二株爲束）木瓜二束比々良木二束牟保己一束黑木二束桃木三束梅木二束椿木二束並各長五尺三寸

江家次第（正月上卯）云卯杖事上古有出御南殿皇太子參上儀近代不行春宮被獻卯杖（件案天慶九年以蘇芳作之）大進著腋陣付藏人進之藏人昇之經神仙無名明義仙華等門自長橋上進之南廓小板敷（不給祿近例立晝御座孫廂）次大舍人進御杖六十束（式云曾波木二束比々良木牟保許棗桃栢各六束已上二株爲束燒椿十六束皮椿四束黑木八束已上四株爲束此中有五大杖以紙裹其頭又半分以下同以紙裹之）付內侍所女官傳取入自仙華門經長橋南廓小板敷內侍取之立夜御

古今要覽稿卷第四十九

●時令部

●うつえ　御杖　初卯のつゑ

卯杖は正月の上の卯日色々の木を五尺三寸にきりてあるは一株或は二株あるは三株つゝゆひて奉るものなり延喜式　このこと持統天皇の三年にはしまれり但このときは大學寮より進れり日本書紀　文德天皇仁壽二年より諸衞府の獻することになりたり是をもつて精魅を逐よしなり文德實錄　作物所洲濱をつくりその上にいはほの中に御生氣の方の獸をつくりて卯杖にあはしむ江家次第　なほくはしきことは內裏式延喜式江家次第等に見えたりこの儀建武の御宇まではたしかに行はれたれともいつよりやたえにけん近代はきこえす卯杖を漢の剛卯にならひてつくりたりといふ說はあやまりなりくはしくは釋名に玄るせりされとはやくよりあやまりきたれることと見えて江家次第の卯杖の條にも漢書をひかれたり禁中のみにあらて伊勢にても內宮外宮へ奉り太神宮儀式帳止由氣宮儀式帳　賀茂社にても在家なとへおくり四季草木行事三光院殿御說　又熱田祭に卯杖舞あり和訓栞　といへり

日本書紀持統天皇紀　云三年正月乙卯大學寮獻二卯杖一

文德實錄云仁壽二年正月己卯諸衞府獻二卯杖一逐二精魅一也

三代實錄云貞觀八年正月二日己卯所司獻二剛卯杖一

皇太神宮儀式帳年中行事幷月記事　云正月例以二先卯日一禰宜內人物忌等率造二御杖一供二奉太神宮幷荒祭宮一

止由氣宮儀式帳三節祭等幷年中行事月記事　云正月例以二先卯日一造二御杖一神宮幷高宮奉レ進太神宮八枚高宮四枚　中原師光勘文云仁明天皇承和三年正月癸卯天皇御二紫宸殿一皇太子獻二御杖一光孝天皇元慶九年正月十一日丁卯諸司獻二剛卯杖一天皇不レ御二紫宸殿一付二內侍一傳奏淸和天皇天安三年正月丁卯所司獻二剛卯杖一村上天皇康保四年正月二日辛卯東宮獻二卯杖一作物所又獻レ之大舍人寮左右近衞府付二內侍所一令レ奏レ之

內裏式上卯日獻二御杖一式　云天皇御二紫宸殿一卽春宮坊大夫以下擧二御杖机一皇太子相扶入レ自二日華門一升レ自二南階一樹二簀子敷上一退出若皇太子不二參入一之時令二坊官獻一レ之坊官不レ足加二近衞次將一雨濕付二內侍一獻レ之　內侍轉取奏覽訖坊官就二內侍司一賜レ机大舍人寮左右兵

嘉元四年當座百首
野邊に出てわかなつめとやかすむらん
春めきわたる片岡のさと
後九條内大臣

弘安元年百首
春日野に我こそつまめ神かきの
内にも外にもおふる若菜を
民部卿爲家

六帖題新六帖
かすか野はおはきつみけりなら山の
このめ春風ゆるく吹くらし
信實朝臣

同おはき新六
けふはまた雪まのおはきつみませて
のへのわかなのかすやまさらん
光俊朝臣

同新六
おはきつむ春野をみれはあをによし
ならの都もにきはひにけり
信實朝臣

六帖題新六
山かつの圃の雪まのかき内に
心せはくやわかなつむらん
同

同
つむとてもおもふ心の澤芹は
おつる涙やねをあらふらむ
光俊朝臣

同
むは玉のよるのいとまにたち出て
せりつむ澤の月をみるかな

編修兼校正　岡村尙謙平遜
校正兼圖畫　葦名隆吉平盛榮
校正兼淨寫　兒玉諦之助平紀言
　　　　　　伊庭熊作源秀正
校正兼鈔錄　橋本太刀允藤原好春
校正兼淨寫　小林好太郎源直溫
校正兼圖畫　屋代次郎源道賢
編修兼校正　池野貞一郎源好謙
編修兼圖畫　志村愛助平知孝
編修兼淨寫　大河戸晉平藤原儀成
編修兼圖畫　岩崎源三源常正
總　　判　屋代太郎源弘賢

同
冬かれのたの丶を薄うちなひき
わかなつむ野に春風そふく　同

文應元年七社百首若菜
今朝は又雪まもとめて山城の
みつのうへのにわかなつむなり　同

毎日一首中
さと人もわかなつみつ丶山城の
みつのうへ野は春めきにけり　同

文永元年毎日一首中
神かきやみたらし河におふる芹の
つますもあらて袖やぬれなん　同

正嘉二年毎日一首中
人毎にけふのわかなはいそけとも
法のためとはおもひやはせん　同

文永七年毎日一首歌
里人も千代のふる道いくかへり
春のさか野に若菜つむらん　同

同二年毎日一首中
里人やわかなつむらしいそのかみ
はつ春雨のふるの中道　同

建長五年毎日一首中
里人や野田のわかなをすゝくらん
汀そにこる玉川の水　同

同二年毎日一首中
片岡のをの丶草葉の淺緑
あらたまれとやわかなつむらん　同

同八年毎日一首中
裾野にはわかなつむらしさゝ波や
ひらの高嶺の雪の村消　同

同
春雨のふるにつけてやかすかなる
みかさの野へのわかなつむらん　藤原爲實朝臣

同
袖ぬらす澤邊の若菜さりとては
たまたすきにやいれてつまゝし
安嘉門院四條

弘安三年新熊野社百首
春來てはみな若菜にそ成にける
ゆきいたゝきしおきな草まて
民部卿爲家

家集粟津野若菜
いさけふは衣手ぬれてふる雪の
あはつの小野に若菜つみてん
同

文應元年毎日百首中
春霞小倉の山をたちこめて
ふもとの野へはわかなをそつむ
同

百首歌
をくら山おなしふもとの野へにこそ
萬代かけてわかなをもつめ
同

同
こ草つむふる田のあせの澤水に
わかなすゝくと袖ぬらしつゝ

同古來歌
ふる雪のはるのに出てゑつのめも
本ノマ、
あまてのわかないまやつむらむ
土御門院小宰相

貞永二年舊院攝政家百首
見渡せはいはたのをのゝ朝霞
たち出てたれかわかなつむらん
藻壁門院但馬

五十首歌
さゝ波やゑかのあま人春きぬと
みるめなきさに若菜つむなり
從二位家隆卿

承久二年四季百首歌
朝日山麓の野へに雪消て
やそうち人もわかなつむなり
同

千首歌
朝日山のとけき春のけしきより
八十うち人も若菜つむらん
民部卿爲家

同
若菜をやつみてかへらん春ののに
道ふみまよふ花もこそちれ
同

同
春たちて都の若菜つむまでに
　鶯のねや松のしら雪
　　　　　　　　　　　　從二位家隆卿

同
春日野のあさゝはをのゝ薄氷
　たれふみ分てわかなつむらん
　　　　　　　　　　　　皇太后宮大夫俊成

文治六年五社百首
いさやこらわかなつみてん根芹おふる
　あさゝはをのは里とをくとも
　　　　　　　　　　　　同

同
しつのめかかはたの原につむ芹も
　誰ためにとて袖ぬらすらん
　　　　　　　　　　　　同

祇園社百首若菜
いはひつゝけふの若菜をつむしつは
　まつはみそのゝつとめにそする
　　　　　　　　　　　　光明峯寺入道攝政

百首御歌
けふとてやあさなつむらん雪殘る
　澤の玉水袖にかけつゝ
　　　　　　　　　　　　同

同
岩そゝく氷とくらし瀧の上の
　あさのゝ若なけさやつむらむ
　　　　　　　　　　　　前中納言定家卿

建保三年内大臣家百首朝若菜
たかためとまたあさ霜のけぬか上に
　袖ふりはへて若菜つむらん
　　　　　　　　　　　　從二位家隆卿

同
朝氷誰ためわけてこの河の
　むかひの野へにわかなつむらん
　　　　　　　　　　　　同

同四年百首
春くれは千代のふる道ふみ分て
　たれ芹河にわかなつむらん
　　　　　　　　　　　　藤原爲顯

百首歌芹河
身をつめは袖こそぬるれ芹河の
　ねにあらはるゝけふの若なも
　　　　　　　　　　　　後九條内大臣

建長八年百首歌合
あたのなは春やたちなん女郎花
　わかなとなりて人につまれは
　　　　　　　　　　　　信實朝臣

ねにあらはれて袖ぬらしけり

同

文應元年七社百首
けふは又神のためとやさと人の
山田の原にわかなつむらん

後九條内大臣

弘長元年百首
誰か又山田の原の雪分て
神代のあとにわかなつむらむ

同

春御歌中に萬代
荒小田のこそのふる跡ふみ分て
雪けのわかないまやつむらん

後京極攝政

御集朝若菜
都人けふのためにとしめし野に
朝露分てわかなをそつむ

信實朝臣

弘長元年百首
つみたむる若菜をみれは春日野に
袖こそ春の雪まなりけれ

同

建長七年前大納言顯朝卿家
千首歌若菜
年經たる老その森の下草に
つむともわかなましりやはせむ

同
燒原とおもへはいと丶墨染の
袖もすくろにつむわかなかな

法印定圓

弘長元年百首
深草の野と成里にかへりきて
住こし人やわかなつむらむ

光俊朝臣

春歌中古來歌に
おのかすむ澤への氷下とけて
かものは色のわかなをそつむ

西行上人

家集雉子を
もえ出る若菜あさるときこゆ也
き丶す啼くなる春の曙

慈鎭和尙

千五百番歌合
春雨のふるからをの丶あつさ弓
をしていさ丶はわかなつみてん

參議雅經卿

同
若菜つむゆかりにみれは武藏野の
草はみなから春雨の空

隆信朝臣

寛喜元年女御入内御屛風
君かため野への志ら雪うちはらひ
いやとしのはにつむわかな哉
正三位知家卿

百首獨摘若菜
きゝすなく春のやけのゝわかなゆへ
ねたくも人をさそはさりけり
寂蓮法師

六帖題若菜
君かためなゝのあしたの七種に
なをつみそへんよろつ代の春
權僧正公朝

文應元年基政家會澤若菜
けふもつむ雪けの澤の初若菜
あすよりとこそ人は志むらめ
同

弘長元年中務卿親王家百首
みかきもりやそのつゝきはいまもかも
とものうめきにわかなつむらし
同

家集文永元年春歌中
今日もまた雪ふみ分ておほうちの
まかきかはらに若菜つむ也
讀人知らす

題志らす六帖
春雨のふりはへ行て人よりは
われまつつまんかも河のせり
民部卿爲家

寛元三年結緣經百首
片岡のかれのゝ志たのわかなつな
雪さへつみてみらくすくなし
信實朝臣

六帖通ゑく新六
七種のかすならねとも春ののに
ゑくのわか菜もつみはのこさし
源師光

正治二年百首
志つのめかかたみのそこはむなしくて
おひぬ若なに日數をそつむ
同

同
人なみに水田の小芹つむほとは
おもはぬ袖のぬれにけるかな
民部卿爲家

六帖題芹新六二
こひぬまも水田のあせに曳芹の

百首御歌明玉
いもはけふ𛀁めの丶淺茅ふみ分て
　ひれふる袖にわかなをそつむ
　　　　　　　　順徳院御製

同
さほ姫のそめゆく野へをみとりこの
　袖もあらはにわかなつむらん
　　　　　　　　後徳大寺左大臣

御集若菜
うらわかみつめとたまらぬ𛀁くの葉を
　かたみにのみもおほせつる哉
　　　　　　　　殷富門院大輔

百首歌
𛀁つのめかゑくのわかなはおいぬとや
　鳥羽田の面に畔つたひ行
　　　　　　　　民部卿爲家

毎日一首中
昨日けふ春雨はれぬ舟岡の
　わかなはをしてあすやつま丶し
　　　　　　　　平　兼盛

家集屛風歌二月
山家わかなつむ所
足曳の山かたつける家井には
[illegible]まつ人さきにわかなをそつむ
　　　　　　　　能宣能臣

ある所の月次屛風
二月松ひきわかなつむ所
ひく松のちとせの春はかすかの丶
　若菜もつまぬ物にやはある
　　　　　　　　惠慶法師

家集春歌中
東路に春やきぬらんあふみなる
　をかたのはらに若なむれつむ
　　　　　　　　藤原實樹

承德二年正月
庚申夜歌合
君か代はにまのさと人うちむれて
　なかきかたみにわかなをそつむ
　　　　　　　　正三位知家卿

寶治二年百首
澤若菜
國栖らはわかなつむへき時はきぬ
　野さはの草も下ねさしつ丶
　　　　　　　　衣笠内大臣

同
あたちの丶野澤の氷とけにけり
　ますけにましる小芹つむ也
　　　　　　　　舜念法師

百首歌
小芹つむ春の山田のくろつかに
　あた丶らまゆみかすみたなひく

百首歌
古来歌
とはれねはたかためとての津の國の
　生田のをのに若菜つむらん
　　　　宜秋門院丹後

正治二年百首
み吉野の花の盛をまつほとは
　麓ののへに若菜をそつむ
　　　　藤原元眞

天德三年二月三日
内裏歌合哥
芳野山霞たな引けふよりの
　あしたの原はわかなつむらん
　　　　惠慶法師

家集題不知
春日野のわかなも志るし春きては
　霞わたれるかた岡の原
　　　　曾禰好忠

家集
さき草のもえぬらんやそ春きては
す家　も一本
　わかなつむへきをちかたの山
　　　　俊頼朝臣

家集戀歌中
君をこそあさはののらにをはきつむ
　志つのをふさの志みふかくおもへ
　　　　同

正月七日仲實朝臣のもとへ七種菜つかはすとて
をかみかはうきえにはゆるゑくうれを
むつき家集
　つみしなへてもそこのかたみそ
　　　　こ同　みため同
　　　　仲實朝臣

返事
心さしふかきみたにゝつみためて
　いしみゆすりてあらふ根芹か
　　　　そ集
　　　　源仲正

家集雪中若菜
はつ〳〵の若菜をつむとあさるまに
　野原の雪は村消にけり
　　　　同

同後園若菜
かたくなや志りへのそのにわかなつみ
　かゝまりありくおきなすかたよ
　　　　皇太后宮大夫俊成卿

元暦元年
御屏風近江國亀岡
をとめらも君かためとやかめをかに
　萬代かねてわかなつむらん
　　　　正三位季位卿

同明玉
かめ岡にまた二葉なるわかなこそ
　年をつむへき志るしなりけれ
　　　　後鳥羽院御製

雪中若菜
けふはたゝおもひもよらてかへりなん
　雪つむのへの若な也けり
雨中若菜
春雨のふるのゝわかな生ぬらし
　ぬれ〳〵つまんかたみ手ぬきれ
老人若菜
卯杖つき七くさにこそ出にけれ
　年をかさねてつめるわかなに
寄若菜述懷
わかな生る春のゝ守に我なりて
　うき世を人につみ玄らせはや
寄若菜懷舊
わかなつむのへの霞そあはれなる
　昔をとをくへたつと思へは
新撰六帖
　わかな　衣笠内大臣
おさまれる御代のわかなのけふことに
　千世をつむともつきしとそ思ふ
前藤大納言爲家

末遠き春日の野邊の若菜には
　千年の春を玄めて祉つめ
九條三位入道知家
ふるさとのかすかの原に生ぬれと
　わがなといひて年を摘らん
左京大夫行家
今はとて春のめくみのたのしきを
　つむや野原のわかな成らん
右大辨入道光俊
けふはまた野邊のわかなのなゝ草に
　君かやちよをつみやそふらん
夫木和歌集卷第一春部一
若菜　從二位家隆卿
建保三年三所百首
大よとのあまのをとめこ春されは
　かみのはつ物みるめかる也
小辨
家集題不知
古來歌
春はまた浦にいてゝや見くまのゝ
　神のはつものいそなつむらん
權中納言經平卿

里遠に野への若なはつみやらて
心につもる鶯のこゑ
はる〳〵と出ぬはかりに山さとの
垣ねにつむものへのわかなを
若なつむあら田の面の夕霞
分るたもとにひはりおつなり
春は先とふひの野へに雪消て
いくかもまたぬわかなつむ也
棹姫の霞の袖もゑら雪の
ふりはへのへのわかなつめとや
春立て雪は花とそちりまかふ
わかなつむのも道まかふかに
けふも猶雪もふりつゝ春かすみ
たゝはやいつく若なつみてん
春くれは千代のふる道ふみ分て
たれ芹河に若なつむらむ
わかなつむのへのよそめに成にけり
出つるさとは霞へたてゝ
若な摘人やきつるとことゝへは
風もこたへぬ荻のやけはら

打むれて若なつむのゝ花かたみ
木のめも春の雪そたまらぬ
さゝ波やゑかのあま人春きぬと
みるめなきさに若菜つむ也
春のひの淺さはをのゝあさ氷
たれふみ分て根芹つむらむ
はるきぬと鳥羽田の面のあせつたひ
みやこの人もわかな摘也
淺みとり誰ため分て此川の
むかひののへにわかなつむらん
朝若菜
きさらきのまた朝霜は置なから
おいもなつまぬ庭のわか草
山家集
若菜
春日野は年の内には雪つみて
春はわかなのこゝろくらへん
子日若菜
わかなつむけふにはつねのあひぬれば
松にや人の心ひくらむ

またかすならぬともとみる哉

長秋詠藻

若菜

澤におふる若なならねといたつらに
　としをつむにも袖はぬれけり

かすみたち雪もきえぬやみよしのゝ
　みかきの原に若なつみてん

拾遺愚草

若菜

とふひのはまたふる年の雪まより
　めくむわかなそ春いそきける

いさけふはあすの春雨またすとも
　の澤のわかなみてもかへらん

諸ともにいてこし人のかたみかな
　いろもかはらぬのへの若なは

雪消てわかなつむ野をこめてしも
　かすみのいかて春を忘るらん

朝日さすかすかのをのゝおのつから
　先あらはるゝ雪のしたくさ

はるの色をとふひのゝ守尋ぬれと
　二はの若な雪も消あへす

春をあさみ消あへぬ雪をつみそへて
　若なそ冬のかたみ成ける

幾年をつめとも更にかはらぬは
　みかきか原の若ななりけり

春日山てらす光にゆき消て
　わかなそ春をまつは忘りける

雪間若菜

いつしかととふひのわかな打むれて
　つむともいまた雪も消なくに

朝若菜

たか爲とまた朝霜のけぬかうへに
　袖ふりはへて若な摘らん

かすみたちこのめはる雨きのふまて
　ふるのゝわかなけさは摘らむ

田邊若菜

小山田の氷に殘るあせつたひ
　みとりの若な色そすくなき

壬二集

若菜

白妙の衣はるさめかきくもり
　ふる野の若な今や摘らむ
いもはけふ乞め野の淺ちふみ分て
　ひれふる袖に若なをそむ
乞ろたへの袖にそまかふみやこ人
　若なつむの丶はるの淡雪

月清集

若菜

みやこ人の原にいて丶白妙の
　そてもみとりにわかなをそつむ
春日野のわかなは袖にたまれとも
　猶ふる雪を打拂ひつ丶

朝若菜

みやこ人けふの爲にと乞めしのに
　朝露はらひ若なをそつむ

拾玉集

若菜

あらたまる菜にしなれは人ことに
　年もわかなもつむにそ有ける
谷ふかみ岩もとこせりつみにいて丶
　そをたに春の乞るしと思はん
賤のめの年と共にもつむものは
　春の七日のわかな成けり
乞とともにつみてこそ乞れ春日のの
　わかなは神のめくみなりとも
かつ／＼もわかなつめとやかたをかの
　あしたの原の雪のむらきえ
さもあらはあれ春の野澤の若なゆへ
　心を人につまれぬる哉
けふそかしなつなはこへらせりつみて
　はや七草のおものまいらむ
野邊にいて丶乞くつむ澤のあさみとり
　春めきにけり乞つかけしきは
かすかの丶わかなに年をつみしより
　松もかひある藤のはつはな

岡上若菜

此春はきぬかさ岡にせりつみて
　神にたむくるわかなともせん

獨摘若菜

わかなつむ野澤にやとるかけをのみ

みそれふるをの丶あれ田にしくつめは
誰かはきせん菅のをかさを
中宮權大進仲實

春日野の雪けの澤に袖たれて
君か爲にと小芹をそ摘む
木工頭俊頼

春日野の雪を若なにつみそへて
けふさへ袖のしほれぬる哉
左近權少將師時

老せすときゝし若なのなにめて丶
誰かはつまぬ春の野ことに
藤原顯仲朝臣

鷺のゐるあれ田のくろにつむ芹も
春はわかなの數にやはあらぬ
藤原基俊

春山のすくろをさゝをかき分て
つめる若菜に沫雪そふる
權少僧都永緣

消殘る雪まを分て春日野に
つめとたまらぬ若なをそつむ
阿闍梨隆源

春くれはかたみぬきれて賤の女か
垣ねのこなを摘ぬ日そなき
肥後

はる立てけふは七日に春日野の
若なはまたき二葉也けり
紀伊

さそはねとかたみにそみる若なつむ
心は野へにかよひけりとも
河内

つきせもす摘へき程そはるかなる
千代をしめてし野への若なは

後鳥羽院御集

若菜

きみか爲をの丶荒田をふみ分て
しくつむ袖やかつ氷りけん

春はまた淺澤水の袖ぬらし
つむや根芹のなを氷りつゝ

朝またき誰爲としも若菜つむ
野澤の草はむすほゝれつゝ

としつめとおなしさまなる若なにも
けふたゝこすやあらんとすらん

古今和歌六帖
わかな

朝露にぬれつゝ袖をぬらしつゝ
君か爲とそわかな摘つる　　貫　之

春日野に若菜つみつゝ萬代を
祈る心は神そしるらん　　そ　せ　い

千早振神たちよけは君か爲
摘かすか野のわかな也けり　　貫　之

春の野に衣かたしきたかための
ならはぬ袖にわかなつむらん　　み　つ　ね

春日野のわかなも我をいのらなん
誰爲につむ物ならなくに　　い　せ

白妙の衣かたしき春日野の
わかなつみしも誰ためにそは

春たゝんすなはちことに君か爲
千年摘へき若ななりけり　　貫　之

堀川院御時百首春二十首

若菜

野へにいてゝ春日つめともたまらぬは
またうら若き若な也けり　　春宮大夫公實

たはりてふわかなはたちぬ同しくは
春ひつみても野へにこそへめ　　權中納言匡房

いくはくのいへつともなき若なゆへ
野へに立出て日をくらす哉　　權中納言國信

旅人の道さまたけに摘ものは
いくたの野への若な也けり　　左兵衛督師頼

若な生る野をやしめまし今年より
千年の春をつまんと思へは　　修理大夫顯季

源　顯　仲　朝　臣

正月
春のはしめに
雪消はゑくの若なも摘へきを
春さへはれぬ深山邊の里
二月中
あふことのかたみをせはみ春の野の
若なにつけて年をつみつる
百首和歌
春十首中
古道の雪ふりしきて此春は
いさや若なもまたそ摘見ぬ
忠見集
本ノマヽ
おなし御時御屛風に正月子日わかなつむ
わかなとておほくの年をわかつめは
君そ子日の松ににるへき
春日野のわかな
春日野の艸はみとりに成にけり
若なつまんと誰か玄めけん
若菜
ふりはへて君か爲にと春の野に
つめるかたみのわかな成けり
同
春くれはわかなつむ野そおもほゆる
かたみにもらぬ人のなけれは
わかなつむ野にはからきもなかりけり
まつに玄るへき君にまかせて
春をあさみかたみの底にみたねとも
君か爲にとつめる若菜そ
中務集
前齋宮の五十の賀せさせ給御屛風わかな
わかなつむ野を玄め置ん君か爲
千年の春は我そつかへむ
すさく院の御時にわかなめす
今さらに老の袂を春日野の
人わらへなるわかなつむ哉
御らんしてひけこにわかないれて正月七日少將
を御つかひにて
春日野におほくの年はつみつれと
老せぬ物はわかな成けり
御返し

元輔集
安和二年二月十五日一條の大まうちきみ白河の院にてねのひし侍しに
若菜つむ子日の松の千世の陰すみつゝみえよ白河の水
ありひらの左大臣八十賀あせちのかうゐのし侍りしに若菜の歌
春ことにわかなつみてそ祈るへきをしほのかひに年ふへき松
つかさめしの子日にあたりて侍しにあせちのかうゐのつほねよりまつをはしにてものをいたして侍る
ふな岡にわかなつみつゝ君か爲子日の松の千代をゝくらむ
子日する君か千年の春ことにわかなはつまむ千代のまに〳〵
もとすけかこに侍しものゝわかなのやうなる物して侍しによみて侍し
二葉にてみし面影もかはらぬに若なつみけるけふにあふ哉
またおとに侍しものゝして侍しにおりたちてわかなをいかてつませけんひさをはなれし程もへなくに
大貳國章たいにくにのりはらかといふものをこせて侍しにつかはしゝ
みよし野もわかなつむらんわきもこのひはら霞みて日數へぬれは
もろ友におひける松やいかゝ見むおなしころ子日にまかりて身を捨かたみわかなつむとて
賴基集
天暦御時屏風にかすか野にわかなつむ所
そこはかと年つみくれと春日野におふるわかなはおひせさりけり
重之集
重之帶刀にて侍しとき春宮うためしけれは春廿首の中
春日野にあさたつきしのはね音は雪の消間にわかなつめとや
好忠集

先人さきに若なをそつむ
わかなさへにも老りにける哉

貫之集第一
延喜六年月なみの屛風八帖かれうのうた四十五首せしにてこれをたてまつる廿首ねのひあそふいへ
行て見ぬ人も忘のへと春のゝにかたみにつめるわかな也けり

同集第四
天慶五年亭子院御屛風のれうの歌
むかしより思ひそめてし野へなれは若なつみにそ我はきにける
おなし八年二月うちの御屛風のれう廿首家にて子のひしたるところ
我ゆかてたゝにしあれは春の野のわかなもなにもかへりきにけり

同集第六
延喜五年十二月春たつあしたにさたかたの右衛門のかみのないしのかみの賀たてまつれるときのうた
年の内に春たつことを春日野の

伊勢集
此内侍のかみの御四十の賀を淸貫の民部卿つかふまつり給ける御屛風の若菜摘たるところに
春日野の若なならねと君か爲年の數をもつまんとそ思ふ
春宮のみやす所の八十御賀中務のみやの忘給ける御屛風に若菜つみたる所
春日野のわかなのたねは殘してん千とせの春も君そ摘へき

赤人集
卷向のひはらにたてる春霞はれぬ思ひにわかなつまめや
草によす
くにすらかはるなつむらむ忘まのぬの忘は〳〵君を思ふこのころ

源順集
春
めもはるに雪まもあをく成にけり今日社のへの若な摘てめ

古今要覽稿卷第四十八

●時令部若菜

●和歌下

柿本集下物名

西海道

ちくせ

かたみちゝくせにつくれといひやらん
　まきしわかなもおひはつむへく

躬恒集上

女ともむめの花見つゝわかなつむ

春のきるころもかたしき誰爲か
　ならはぬくさに若な摘らん

同集下

春霞たちいてゝ野へにこしかとも
　おひてわかなはつみ心ちなり

素性集

泉右大將四十賀の屏風に

春日野にわかなつみつゝ萬代を
　いのる心は神そしるらむ

清正集

天暦の御時の御屏風に

春かすみけふそ立けるかすか野に
　わかなつまんといそくへらなる

能宣集

屏風の歌よめと侍るに正月子日松ひきわかなつむところ

ひく松のちとおの春はかすかのゝ
　若なもつまん物にやはあらぬ

春日野にわかなつみ侍るところ

新しき春くることも故鄕の
　春日の野へに若菜をそつむ

若菜

しら雪のまたふる里のかすか野に
　いさ打はらひ若菜摘てん

兼盛集

正月わかなつむところ

足引の山かたつける家ゐには

若菜をよみ侍りける　成恩寺關白前左大臣
打渡す遠方人も春とてや
　淀野の澤に若な摘らむ
百首歌奉りし時　權中納言雅世
はるかなるのへの緑にみえてけり
　春の日數を摘ぬ若なは
嘉元百首うたに　中納言爲藤
小山田の苗代水もせかぬまに
　先おり立て若なをそ摘む
又巻第十七雜歌上
延文二年百首歌に若菜をよめる
　前大納言實名
春日野や同しおとろの道にのみ
　若なも我も年をつみつゝ

おなし心をよませ給うける
今朝はまつ野守を友と誘ひてや
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　御　　　製
　　　　　しらぬ雪まの若なつまゝし
弘長百首歌奉ける時　　　前大納言爲氏
誰か又雪間を分て春日野の
　　　　　草のはつかに若なつむらん
文保三年百首歌奉ける時　前大納言爲定
かつ消る遠方野への雪まより
　　　　　袖見え初て若な摘むなり
題しらす　　　　　　　中務卿宗尊親王
霜雪に埋れてのみ見し野への
　　　　　若な摘むまて成にける哉
弘長百首歌奉ける時
　　　　　　　　　　　常磐井入道前太政大臣
都人けふや野原に打むれて
　　　　　しるもしらぬも若な摘む覽
新續古今和歌集卷第一 春歌上
文保三年百首歌奉りける時
　　　　　　　　　　　　三條入道前太政大臣

埋もるゝ若菜は夫とみえすとも
　　　　　のへに出てや雪まゝたまし
若菜をよめる　　　　　按察使顯朝
いつ迄か降にし雪の消やらて
　　　　　野邊の若なも下萠にせん
建保四年後鳥羽院に百首歌奉りける時
　　　　　　　　　　　　従二位家隆
春くれて千世の古道踏分て
　　　　　誰芹河に若なつむらん
弘長元年後嵯峨院に百首奉りけるに
　　　　　　　　　　　　後九條前内大臣
たれか又山田の原の雪分て
　　　　　神代の跡にわかな摘らむ
延久二年百首歌奉りける時
　　　　　　　　　　　中園入道前太政大臣
霞しく野邊の綠に白妙の
　　　　　袖をかさねて若菜摘むなり
　　　　　　　　　　　　權中納言爲重
雲も消氷も解る河上の
　　　　　こせの春野は若な摘むなり

又卷第十六雜歌上
題しらす　　法印實性
春雨のふるの〻雪は消ぬらん
ぬるともけふや若なつま〻し
新拾遺和歌集卷第一春歌上
題しらす　　曾禰好忠
山のかひ霞渡れる朝より
若な摘へき野へを待らし
百首歌奉りし時若菜　　等持院贈左大臣
霞たつ朝の原の雪消て
若な摘らし春の里人
嘉元百首歌奉りける時おなし心を　　法印定爲
白妙の袖もまかはす雪消て
若な摘む野は春めきにけり　　前大納言經繼
春日野ははるめ來にけり白雪の
消すは有とも若な摘てん
久安六年崇德院に百首歌奉りける時　　大炊御門右大臣

夜をこめて若なつみにといそくまに
はるかに過きぬ荻の燒原
寶治二年後嵯峨院に百首歌奉ける時澤若菜　　山階入道前左大臣
いつ方に若菜つむらん足引の
山澤水は猶こほりつ〻
新後拾遺和歌集卷第一春歌上
若菜をよみ侍ける　　前大納言爲家
いさけふは衣手ぬれて降雪の
あはつのをのに若な摘てん　　大中臣能宣朝臣
春日野の若なも今は萠らめと
人には見せす雪そ降積む
文保三年後宇多院に百首歌奉りける時　　民部卿爲藤
里人は今や野原にふる雪の
跡も惜ます若な摘らむ
百首歌奉りし時若菜　　前關白
消かての雪も友待つ春の野に
獨そけさは若な摘ける

またうらわかき若なをそつむ　前大納言爲家

朝日山のとけき春の氣色より
八十氏人もわかなつむらし

百首歌奉りし中に春の歌　民部卿爲定

若菜つむいく里人の跡ならむ
雪まあまたにのは成にけり

新千載和歌集巻第一春歌上

若菜の歌とてよめる　鎌倉右大臣

春はまつ若なつまむと志めをきし
野へともみえす雪のふれゝは

障子の繪に雪ふかき野邊に若菜摘ひと立やすら
ふところを　郁芳門院安藝

踏はおしかた野の若な雪ふかみ
きゝすの跡を尋ねてそつむ

百首の歌めされしついてに若菜　御製

踏分て野澤の若なけふつまむ
雪まをまたは日數へぬへし

百首の歌よませ給うける中に澤若菜　伏見院御製

春淺き雪けの水に袖ぬれて
澤田の若なけふそ摘つる

百首歌奉りし時若菜　藤原爲遠朝臣

いつしかと野へに心のあくかるゝ
春の習とわかなつむ也

題志らす　よみ人志らす

昨日こそやくとは見しか春日野に
いつしかけふは若なつみつゝ

人の許にわかなつかはすとて　井手左大臣

あかねさす晝はたゆたひうは玉の
よるのいとまに摘るね芹そ

元享四年後宇多院にて十首うた講せられける時
若菜　後山本前左大臣

雨露のめくみかはらて春日野に
おほくの春の若な摘つる

おなし心を　前大納言爲家

冬枯の志のゝをすゝき打なひき
若菜摘野に春風そ吹く

内大臣に侍ける時家に百首うたよみけるに朝若菜を
光明峯寺入道前攝政左大臣

岩そゝく氷とくらし瀧の上の
淺野のわかなけさやつまゝし

僧正遍照に若菜をつかはすとて
よみ人しらす

君か爲衣のすそをぬらしつゝ
野澤にいてゝつめる若なそ

建仁元年後鳥羽院に五十首歌奉ける時
前中納言定家

白妙の袖かとそおもふ若なつむ
みかきか原の梅の初花

又卷第十五雜歌上

野邊にいてゝかしらしろき女の雪のふるにわかなつむかたを繪にかけるをみて
中務卿具平親王

年をへて若菜をつむとせしほとに
頭の雪もふりにける哉

春の歌のなかに
前大納言良教

する遠き子日の松に引そへて
わかなもちよの春やつむへき

風雅和歌集卷第一春歌上

若菜をよめる
小辨

けふも猶春とも見えすわかしめし
野邊のわかなは雪やつむらん

題しらす
源順

めもはるに雪まも青く成にけり
けふ社のへにわかな摘てめ

春山のさきのゝすくろかき分て
つめる若なに淡雪そ降る
源俊頼朝臣

春日野の雪の村消かき分て
誰爲つめる若な成らむ

住吉社に奉ける百首歌の中に若菜を
皇太后宮大夫俊成

いさやこら若菜摘てんね芹生る
淺澤をのは里遠くとも

おなし心を
崇德院御歌

春來れは雪けの澤に袖たれて

續千載和歌集卷第一春歌上

住吉社によみて奉りける百首歌中に若菜を

前大納言爲家

下萌やまついそく覽白雪の

あさゝはをのに若菜つむ也

寛喜元年女御入内屛風に

常磐井入道前太政大臣

白妙の袖にわかなを摘ためて

雪まの草の色をみる哉

雪中若菜といふ事をよませ給うける

法皇御製

袖のうへにかつ降雪を拂ひつゝ

積らぬ先に若菜摘なり

弘安百首歌奉りける時

入道前太政大臣

若菜つむ袖こそぬるれきぬかうへに

ふる野の原の雪ま尋ねて

嘉元百首歌奉りし時若菜

太政大臣

いつくとも野へをはわかす白雪の

消るかたより若なをそ摘む

謙德公家の屛風に春日野に若菜つめるところを

讀ける

大中臣能宣朝臣

あたらしき春くることに古鄕の

春日ののへに若なをそつむ

わかなをよめる

淸原深養父

をしなへていさ春の野にましりなん

若な摘くる人も逢やと

續後拾遺和歌集卷第一春歌

若菜

前中納言定家

誰爲とまた朝霜のけぬかうへに

袖ふりはへて若な摘む覽

題しらす

よみ人しらす

よし野山霞たちぬるけふよりや

朝の原はわかな摘らむ

小野宮右大臣

春たてはかすみを分てのへことに

若な摘にと出ぬ日そなき

春の歌の中に

惠慶法師

東路に春や來ぬらむ近江なる

岡田の原に若菜つむ也

百首歌奉りし若菜　入道前太政大臣
今よりはわかな摘へきふる里の
　みかきの原に雪そ降つゝ
雪中若菜といへる心を　前大納言爲世
消すとも野原の雪を踏分て
　我跡よりや若なつまゝし
岡若菜を　光明峯寺入道前攝政左大臣
わかな摘衣手ぬれてかたをかの
　あしたの原にあは雪そふる
寶治二年後嵯峨院に百首歌奉りける時澤若菜
　前大納言爲氏
里人は山澤水のうす氷
　とけにし日よりわかなつみつゝ
　辨内侍
袖ぬらす野澤の水に影みれは
　ひとりはつまぬ若な成けり
百首歌奉りし時若菜　二品法親王覺助
今ははや若な摘らしかけろふの
　もゆる春日の野への里人
朝若菜を　前中納言定家

霞たちこのめ春雨きのふまて
　ふる野のわかな今朝は摘てん
玉葉和歌集卷第一春歌上
春夜雨の降侍りけるに　中務卿具平親王
夜もすからおもひやる哉春雨に
　野へのわかなのいかにみゆ覽
六帖の題にてよみ侍ける歌の中に若菜を
　前大納言爲家
里人やわかな摘らし朝日さす
　みかさの野へは春めきにけり
又卷第七賀歌
前太政大臣のもとへつかはされける
　月花門院
春日野の子日の松に引れきて
　年は摘ともわかなならなん
又卷第十四雜歌一
寶治二年百首歌奉りける時若菜をよみ侍りける
　皇太后宮大夫俊成女
誰となく忍ふ昔のかたみにも
　ふる野の澤に若なをそつむ

麗景殿の女御の歌合に　平　兼盛
見渡せは比良の高根に雪消て
若な摘へく野は成にけり
續古今和歌集卷第一春歌上
正治二年百首歌奉りける時春歌
前大納言忠良
若菜つむ荻の燒原猶きえて
袖にたまるは春の淡雪
文永二年七月白川にて人々に七百首歌よませ侍りしに
前左大臣
消そむる雪間もあらはとふひ野に
はや下もえの若な摘てん
若菜をよみ侍りける　前大納言爲家
若菜つむわか衣手も白妙に
とふひの野へは淡雪そふる
衣笠前內大臣
淺みとり霞の衣はるはきぬ
裾野のわかな今やつまゝし
從二位家隆
打むれてわかな摘野の花かたみ
このめも春の雪はたまらす
土御門院御歌
誰爲の若菜ならねと我ためし
野澤の水に袖はぬれつゝ
續拾遺和歌集卷第一春歌上
題しらす　西行法師
けふはたゝ思ひもよらて歸なん
雪の降つむ野への若なを
千五百番歌合に　前中納言定家
消なくに又やみ山を埋むらむ
若なつむのも淡雪そふる
若菜をよませ給ひける　後鳥羽院御製
白妙の袖にそまかふ都人
わかな摘野の春の淡ゆき
寶治二年後嵯峨院に百首歌奉りけるとき澤若菜を
前內大臣基
石上ふる野の澤の跡しめて
春やむかしとわかな摘つゝ
新後撰和歌集卷第一春歌上

聲する方の若なともかな

詞花和歌集卷第一春部

題しらす　曾禰好忠

雪消はしくの若なも摘へきに
春さへ晴ぬみ山への さと

冷泉院春宮と申ける時百首歌奉けるによめる　源重之

春日野に朝鳴きしのはね音は
雪の消まに若な摘とや

又卷第十雜下

女ともの澤にわかな摘を見てよめる　源俊賴朝臣

しつのめかしく摘む澤の薄氷
いつまてふへき我みなるらん

千載和歌集卷第一春歌上

家に侍ける女房のもとに正月七日前中宮の女房わかなをつかはしたりけるをきゝてつかはしける　治部卿通俊

うらやまし雪の下草かき分て
誰をとふひのわかななるらん

堀河院の御時百首の歌奉りけるうち若菜の歌とてよめる　源としよりの朝臣

春日野の雪をわかなにつみそへて
けふさへ袖のしほれぬる哉

新古今和歌集卷第七賀歌

亭子院の六十御賀屛風にわかなつめる所をよみ侍りける　紀貫之

若菜おふる野邊といふのへを君か爲
萬代しめてつまむとそ思ふ

續後撰和歌集卷第一春歌上

久安六年崇德院に百首歌奉りけるときわかなをよみ侍りける　皇太后宮大夫俊成

霞たち雪も消ぬやみ吉野の
みかきの原にわかな摘てん

白妙の袖にまかひて降雪の
消ぬ野原に若なをそつむ

おなし心を　土御門院御製

かすみしく荻の燒原ふみ分て
誰ため春のわかな摘らん

建保四年百首歌の中に　入道前攝政左大臣

かりのほりにけり明る春おやのもとにつかはしける　　みつね

春日野に生る若菜を見てしより
　心をつねに思ひやる哉

拾遺和歌集卷第一春

　題しらす　　人丸

あすからは若なつまむとかた岡の
　あしたの原はけふそやくめる

　恒佐右大臣の家の屛風に　　貫之

野邊みれはわかな摘けりむへしこそ
　垣ねの草も春めきにけり

　わかなを御覽して　　圓融院御製

春日野におほくの年は摘つれと
　老せぬ物は若な也けり

　たいしらす　　よみ人しらす

摘たむることのかたきは鶯の
　聲する野への若菜なりけり

後拾遺和歌集卷第一春歌上

　正月七日子日にあたりて雪の降侍けるによめる　　伊勢大輔

人はみな野邊の小松を引に行
　けふのわかなは雪やつむらん

　正月七日卯日にあたりて侍けるにけふはうつえつきてやなと道宗朝臣のもとよりいひをこせて侍けれはよめる　　大中臣能宣朝臣

卯杖つきつまゝほしきはたまさかに
　君かとふひのわかななりけり

　たいしらす　　和泉式部

白雪のまたふるさとのかすか野に
　いさ打はらひ若な摘てむ

春日野は雪のみつむとみしかとも
　生出る物は若菜なりけり

　後冷泉院御時皇后宮歌合に讀侍ける　　中原賴成妻

摘にくる人は誰ともなかりけり
　我しめしのゝ若なれとも

　正日七日すはうの內侍のもとにつかはしける　　藤三位

かすしらすかさなる年を鶯の

かな賜ひける御うた
君か爲春の野にいてゝ若菜つむ
我衣手に雪は降つゝ
歌奉れとおほせられしときよみて奉れる
つらゆき
春日野の若菜つみにや白妙の
袖ふりはへて人の行らん
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
春の野に若な摘んとこしものを
散かふ花に道はまとひぬ
後撰和歌集卷第一春歌上
春立日よめる
兼盛王
けふよりは荻の燒原かき分て
若なつみにと誰をさそはん
朱雀院の子日におはしましけるにさはる事侍りてえつかうまつらすして延光朝臣につかはしける
左大臣
松もひき若なも摘す成ぬるを
いつしか櫻はやもさかなん
院御返し
まつにくる人しなければ春の野の
若なもなにもかひなかりけり
子日に男のもとよりけふは小松ひきになむまかり出るといへりければ
よみ人しらす
君のみや野へに小松を引にゆく
我もかたみにつまむ若菜を
たいしらす
霞たつかすかの野邊の若菜にも
なりみてし哉人も摘やと
子日しにまかりける人のもとにをくれ侍りてつかはしける
みつね
春の野に心をたにもやらぬみは
わかなはつまて年をこそつめ
宇多院に子日せんとありければ式部卿のみこをさそふとて
行明親王
古鄕の野へみに行といふめるを
いさ諸共に若な摘てむ
しはすはかりにやまとへことにつきてまかりけるほとにやとり侍ける人の家のむすめをおもひかけて侍けれともやむことなきことによりてま

古今要覧稿巻第四十七

●時令部 若菜

●和歌上

萬葉集巻第六 雑歌

冬十一月太宰官人等奉レ拝二香椎廟一訖退歸之時馬駐二于香椎浦一各述レ懐作歌

帥大伴卿歌一首

去來兒等香椎乃潟爾白妙之袖左倍所沾而朝菜採手六

又巻第八 春雑歌

尾張連歌

春山之開乃乎爲黒爾春菜採妹之白紐見九四與四門

山部宿禰赤人歌

從明日者春菜將採跡標之野爾昨日毛今日毛雪波布利管

大藏少輔丹比屋主眞人歌一首

難波邊爾人之行禮波後居而春菜採兒乎見之悲也

又巻第十 春相聞

寄草

國栖等之春菜將採司馬乃野之數君麻思比日

又巻第十一 古今相聞往來歌

譬喩

河上爾洗若菜之流來而妹之當乃瀬社因目

右寄レ草喩レ思

又巻第十四 東歌

未勘國雑歌

許乃河泊爾安佐奈安良布兒奈禮毛安禮毛知余乎曾母氐流伊低兒多波里爾

一云麻之毛安禮母

古今和歌集巻第一 春歌上

たいしらす　　よみ人しらす

深山には松の雪たに消なくに
都は野への若菜摘けり

春日野のとふひの野守出てみよ
今いくかありて若な摘てん

梓弓をして春雨けふ降ぬ
あすさへふらはわかなつみてむ

仁和のみかとみこにおはしましける時に人にわ

祇園執行日記云文和元年正月小六日堀河神人役七種菜沙汰人行心法師持參ナツナク、タチ午房ヒシキ芹大根アラメ各方五寸折敷ニ次々各入ル也此外鹽味噌各一土器在レ之

は證となしかたしおもふに當時の流傳なるへし按に長明の四季物語はまさしく長明の作りしものにあらされはひか事多きはもとよりのことなるに世の人或は此物語を引て七種の事を論するものはこれまた證とはなしかたし

春の七種考に公事根源を引て云天暦四年二月二十九日女御安子の朝臣若菜を奉るよし李部王の記に見えたり若菜を十二種供する事ありその種々は若菜はこへら云々これ天暦の御時に十二種の名物は備はれと七種の名物はいまた詳ならす

按に女御安子の朝臣の若菜を奉りしは天暦四年二月の事なりといへ共十二種の若菜は河海抄にみえたるを始とすへしされは根源にいはゆる若菜を十二種供する事ありといへるはあやまりにて李部王記の文にあらす蓋しこれは河海抄によりて引かれしものなるへし然れは天暦の時十二種の名物は備たりといへるは大なる誤なり天暦の頃には七種の若菜さへその定めなきにいかにそ十二種の若菜のあるへきまた同書に枕草子にいはゆる七日の若菜を人の六日にもてさわきといふ文を引て清少納言は深養父の孫元輔の女にして六十四代圓融院の御時の人なりこれ永觀のころ七種の名のみ有てその品物の定なきこの文によりて知へしといへ共此文にては七種の名のみありといふ事はしるへからすその跡の文に耳なくさの事あるによりて耳なくさははやくより七種のうちのものとおもひあやまりてしかいへるなるへし

年中故事要言引或記云神武天皇御宇正月七日始被レ行二七種節會一寛平二年正月十五日奉二七種粥一

春の七種考云此說いといふかし

事文類聚引二歲時記一云正月七日多二鬼車鳥一渡家々搥レ門打レ戶滅二燈燭一禳レ之

按に今歲時記をみるに七日の二字を夜の一字に作り且此條は正月七日條とははるかにへたゝりて別條なれは必す七日の夜にかきりしにはあるへからす然るを七日の夜の事とせしは事文類聚の牽强していへるなりまた鬼鳥を鬼車鳥に作り搥杖を搥門に作るも誤にて又戶の下に捩二狗耳一三字ありよろしくこれを補ふへし

一種七種菜

なゝくさ
河海抄拾芥抄公事根源〇此卽七種菜の義也壒嚢鈔には七草の字を用ひたり

七種菜
荊楚歳時記

〇正誤

壒嚢鈔云正月七日七草ヲ獻スト云事更ニナシ年中行事ニハ七日白馬節會及叙位事兵部省御弓奏事ト許リ記シテ七草ト云事ナシ十五日ニコソ獻ニ七種御粥ニ事ト註シ侍レ又資隆卿ノ八條院ヘ書進スル簾中鈔ニモ此定也彼鈔ハ名物也豈浮ケル事アランヤ又禁中ノ事年中行事ニシカンヤ既ニ廢務マテ註セリ爭(イカデカ)當時事漏哉旁不審ナル事也乍レ去諸人皆七日ト思ヘリ何ナル事歟人ニ可レ尋也

按に古に若菜を奉りしは正月初子日の事にて必す七日にかきりしにはあらすその故に年中行事七日條にはたゝ白馬節會叙位等の事のみをゑるせしなり此書は專らおほやけの政事に預る事を旨とせしものなれは内宴ゑ給ひし事なとゑるさるゝはもとよりの事也或は子日といへともその事を行ひ給はさる事も舊より有し故に延喜御記にも近間寂然といへり若くは年中行事作りし頃はまた此事を行ひ給はさりしによりてその沙汰なきにてもありつらん又正月子日に奉りし若菜を七日の事にせしは犢に枕草子にみえたり後世に至りて七種菜を奉りしもこれにもとつきしものなれはあなかちに正月七日七草を獻する事なしといひしは誤れりまた枕草子に若菜の名ありといへ共いまた七種の名目はみえす然るをこゝに若菜と七種菜とを混同して其説をなせしはこれまた誤れり

四季物語云なゝくさのみくさあつむること人日さいかうを和すれは一とせの病患をのかるゝと申ためしふるきふみに侍るとかや此事三十あまり四はしらにあたらせたまふとよみけかしきやひめの五とせに事おこりてみやこの外の七つ野とて七所の野にて一くさつゝをわかちとらせ給ふけりなつなおきやうすゝしろ佛のさかはなくゝたちとかや申なるへし

春の七くさ考云豐御食炊屋姫(トヨミケカシキヤヒメ)は推古天皇の御諱なり七の野は内野北野柏野蓮臺野上野平野紫野等なるへし今推古紀をけみするに人日菜羹の事なけれ

の略にや萬葉の七相菅と同し
世說故事苑云打二七種菜一事諸子ノ考未レ見按ニ事文類聚ニ歲時記ヲ引テ云正月七日多二鬼車鳥一渡家々槌レ門打レ戶滅二燈燭一禳レ之倭俗七種ヲ打唱ヘニ唐土ノ鳥日本ノ鳥渡ラヌ先ニト云ハ此鬼車鳥ヲ忌意ナリ板ヲ鳴スハ鬼車鳥不レ止ヤウニ禳フ也
事文類聚誤字衍字脫文有正誤に辨す
荊楚歲時記云正月七日爲二人日一以二七種菜一爲レ羹云云
閭書風俗志云 衆人採ニ聚七樣之菜果一爲レ羹號ニ七寶羹一

○和歌

拾玉集
けふそかしなつなはこへら芹つみて
はや七種のをものまいらん

山家集
老人若菜
卯杖つき七くさにこそ出にけれ
年をかさねてつめる若菜に

新撰六帖
わかな　右大辨入道光俊
けふはまた野邊の若なの七草に
君かやちよを摘やそふ覽

同
ゑく　信實朝臣
七種のかすならねとも春の野に
ゑくの若葉もつみは殘さし

夫木和歌集春部一
若菜　權僧正公朝
君かため七のあしたの七草に
猶つみそへんよろつ代のはる

壒囊鈔
芹なつな五行たひらこ佛の座
あしなみ丶なしこれや七くさ
芹五行なつなはこへら佛の座
す丶なみ丶なしこれや七くさ

增補題林集
せりなつな御形はこへら佛の座
す丶なす丶しろこれや七種

○釋名

延喜の頃には七種の若菜を奉りしものにてはあるへからすといへりこれまた一說なり

公事根源云延喜十一年正月七日に後院より七種の若菜を供す

枕草子云七日の若菜を人の六日にもてさわきとりちらしなとするに見もしらぬ草を子供のもて來るを云云

康富記云文安五年自二山城國綴喜郡大住一獻二七種菜一

世諺問答云正月は是小陽の月なり又七日は小陽の數なりよつて朝廷をはしめ私の家に至るまて宴會を催ふしあつものを食すれは萬病又邪氣を除く術なりと云々

簠簋內傳云七草粥不動明王七把髮降二伏惡鬼一

壒囊鈔云大宗家訓ノ文ニ七種若菜ヲ採テ調テ氏神幷所ノ三寶次ニ父母ニ獻シテ後ニ是ヲ食スレハ春氣病夏疫病秋痢病冬黃病モ不レ病人三魂七魄ト云神アリ天ニハ七曜ト現シ地ニハ七草ト成也是ヲ取テ服スレハ我魂魄氣力ヲ增シ命ヲ延ル也大宗文王ノ時ヨリ始ル事也ト云々

年中故事要言云愚按ニ家訓ノ說如何アラン

日次紀事云七草云々今日謂二人日一良賤互相賀自二昨日一至二今朝一家々截二湯燖蕪菁薺等於砧几一而以レ杖敲レ之代二七種菜一而用レ之今日敲レ之謂レ拍(ハヤス)二七種一今朝以レ是爲二菜粥一各食レ之俗間以下燖二七草一之湯上漬レ爪剪レ之云々

鈴木宗春編輯歲時語苑云人日七種

本朝之俗正月七日以二野草一二種一扣(タヽイテ)而拍(ハヤス)レ之蓋(ナヅナ)七種之遺風也七種者御形繁縷佛座菁蔙芹鷄毛菜也荊楚歲時記曰正月七日爲二人日一以二七種菜一爲レ羹○愚按於二本朝一宇多天皇御宇正月上子日奉二若菜七種一起今世用レ之祝去二疫氣一也傳曰人日以二七種之菜一作レ羹食レ之則諸人無二病患一也

和訓栞云荆楚歲時記に人日以二七種菜一爲レ羹といへとも七種の名目を著さすよて古來其說區々になりし台德大相國の時に諸家に命し其故實を訂させたまへとも一決しかたきをもて世俗用來れるを採用へきよし仰也と云々

又云伊勢神宮に供するわかなの七草は七見村より奉る齋宮舊蹟の北也式に多氣郡奈々美神社みゆ七眞草

らぬ草を子供のもてきたるといへる文によれは此頃まては耳なくさは七種の數には入らぬ草にて清少納言も初めて此草をはみし也されと壒囊鈔に載る所の兩說の七種菜は永觀の頃よりは遙かに後の人の作りしものなる事しるし或はじふ今松尾の社家より奉る七種は芹なつな御形(はゝこくさ)はこへら佛の座(これは救荒本草の風輪草に充し草なり)すゝな(かぶらな)すゝしろ(大根)なりまた別本公事年事に圖を出したるは芹なつな御形(はゝこくさ)佛の座(おほはこ)はこへらすゝしろ(大根)すゝな(かぶらな)なり今關東にて七種の粥といふは青菜(アヲナ)と薺(ナヅナ)をましへて祝ふなりといへり凡七種の粥を禁中に奉りしは梁の宗懔か荊楚歲時記に正月七日俗以二七種菜一爲レ羹といへる文にもとつかれしものなれとも其七種は西土の人といへとも後世に至りてはしるものなきによりて本邦にては季冬より初春をかけて生出る種々を以て強てその數に合せしものなるへけれは家々にてその說まちまちなりといへ共四辻左大臣の說最ふるし故に今その說に從ひて品物をわかちしなり扨關東にては青菜と薺をましへて祝ふといふといへともそれを打はやす俎板(マナイタ)の上には火箸(ヒバシ)擂槌(スリコギ)庖丁杓子わり薪等の五種をならへて七種の數に合せそのうちの杓子或は擂槌なとにて打はやすなりその打はやす時の祝詞關東にてはなゝくさなつな唐土の鳥と日本の鳥と渡らぬ先にといへるを備後の福山にては唐土の鳥の日本の土地へ渡らぬ先にといへりこれは歲時記に正月夜多ニ鬼鳥一度レ家槌レ牀打レ戸振ニ狗耳一滅ニ燈燭一禳レ之といへるにやゝ似たり岡村尙謙曰公事根源に延喜の時後院より七種の若菜を奉りしといひしは恐らくは一條禪閤の傳說をかきしるされしにて其實は延喜御記にいへるか如くたゝ若なのみを奉りしものなるへしされは今櫃司(クシケツカサ)の供御所より奉る七種の御粥(オモノ)は薺を少しましへて奉るといへり(春の七種考)これは却て延喜の頃の遺風にてもあるへきにやまた御形田平子佛座なといへる名はまさしく後の世の俗稱にて延喜式新撰字鏡和名鈔等にはその名なきにても七種のわかなは延喜の頃のものにはあらさることしられたりもしその頃のものにていつれの野にも冬より春かけてよく生出るものは芹薺をはき(俗にいふ嫁菜(ヨメナ)也)おほはこうつほくさ(夏枯草)はゝこはこへらこれや七種にてもありぬへしされと文德實錄日本後紀等の諸書に絕てその事のなきをみれはいつれにも

○正誤

年中行事秘抄云上子日内藏寮供二若菜一事其儀若菜十二種各入二折櫃一居二土高抔一相二副解文一御厨子所供レ之

按に十二種の若なは河海抄公事根源等にみえたれともこれは後世の事にて延喜の頃に奉りしものにはあらす然るを正月上の子日内藏寮より奉る若菜と一つにせしは秘抄の誤りなり既に公事根源にはまつ内藏寮より若菜を奉りしよしをいひその次に天暦四年安子の朝臣の若菜を奉るよしをいひまたその次に若菜を十二種供する事ありとみえたりその十二種の若菜の内藏寮より奉りしと異なるは此文にて明らけしいはゆる十二種の若菜はわかなはこへら苣せり蕨なつなあふひ芝蓬水蓼水雲菘なりといへり拾芥抄には十二種若菜を若菜菌（覩助大僧正の本に菌に作山科言繼卿の本に蘭に作）苣蕨薺葵芝蓬水蓼水雲松（弘賢曰菘の誤なり）と注されたりされとも冬より春をかけて生出るものはそのうちには僅にてこへら薺芹蓬等の五六種に過す苣蕨葵水蓼等は共に春の末より夏の物なれは此十二種の若菜は必す三四月頃に奉りしものにて正月子日に奉りしにはあらさる事明らけし

○七種菜　なゝくさ

七種の若菜を以てこれを正月七日禁中に奉りしは醍醐天皇の延喜十一年を始とす公事根源それより以前宇多天皇の寛平二年正月上の子日内藏寮より若菜を奉りし事ありと同上いへとも七種を薺蘩蔞芹菁御形酒々代佛座に定められしは四辻左大臣を始とす

河海抄には縷を蔞に作り酒々代を須々之呂に作られたり

一説に七種は芹なつな御形田平子佛の座あしな耳なし也と壒嚢鈔いひ或は芹五行薺はこへら佛の座すゝな耳なし也といひ又或日記には芹薺蘩蔞五行すゝしろ佛の座田平子也とも同上いへとも枕草子に七日の若草を人の六日にもてさはきとりちらしなとするにみもしらぬ草を子供のもてきたるを何とか之をはいふといへととみにもいはすいさなと是彼見あはせてみゝな草となんいふといふものゝあれはうへなりけりきかぬ顔なるはなと笑ふにとみえたり此みみな草は卽壒嚢鈔にいはゆる耳なしと一物にして今も俗にみゝなくさといふもの也清少納言の見もし

跪唱平天皇即執レ盞御飲畢稱レ精卽親王下レ自ニ南階一便自ニ座西頭一南行西向拜舞訖復レ座（昇レ自ニ東階一）卽行酒者賜ニ親王等酒一依ニ酒式一行レ酒人（酒式未ニ奉行一云々）賜ニ獻者一而後可ニ舞踏一依レ仰親王飮レ罰又大臣依レ仰飮レ罰以ニ不擧罰一之故也天皇被レ仰云嘗故左大臣在時語云々寛平中（訖カ）有ニ此事一本康親王爲ニ獻者一唱平御精託親王下レ殿拜舞復座給レ酒其時以建ニ酒式一告ニ親王一而後事已行又無レ所レ言今日之事與ニ彼所一言相同恐後人以レ此爲レ例仍行ニ罰酌一新定ニ酒式一云擬レ獻人避レ座前立喚ニ釆女一釆女稱唯擎ニ御盃一來授ニ陪膳釆女一献者差進跪唱平（唱平訖還ニ前所一）御精訖（壹肴唯常例但御盃者外侍釆女進受如ニ初授時一）行酒人進賜ニ献者酒一卽跪受訖下レ殿（自ニ南階一可レ下但皇太子不レ下）舞踏還座（於ニ東宮宴一獻酒准レ之）

○按に若菜小松等の事所見なしといへとも寛平の例を引れたれは菜羮等の事有しなるへし

花鳥餘情云延長二年正月廿五日甲子天子四十御賀父上皇被レ献レ之於ニ紫宸殿一有ニ其儀一釆女調ニ和菜羮一供進云々

按に此文は盖し李部王記の文なるへし

今按に延長二年の御賀は醍醐の御門の御賀也宇多の御門これを獻せらる此物語は鬚黑の大將の室六條院の御賀たてまつらる父子の例相かはれりといへともともに正月の子日也四十の御賀也わかなを調和せる事一としてかはる事なし

公事根源云內藏寮ならひに內膳司より正月上の子日若菜を奉る也寛平年中より始れる事にや又天曆四年二月廿九日女御安子の朝臣若菜を奉るよし李部王記にみえたり

荊楚歲時記注引ニ董勛問禮俗一云正月一日爲レ雞二日爲レ狗云々今北人又有下至ニ人日一諱レ食ニ故歲菜一惟食ニ新菜一者上與ニ楚諱レ食レ雞正相反

四民月令云立春日食ニ生菜一不レ可レ過取ニ迎レ新之意一

○釋名

わかな

延喜御記源氏物語公事根源○わかなは皆人食ふへき菜の初春に生出る嫩苗をいひ若草は人の食ふにも食はさるにも拘はらすすへて初春に生出る草の總名なれはわかなとはその義少しく異なり

新菜

荊楚歲時記注引ニ董勛問禮俗一○此卽新しき菜の義なり

者不レ過二公卿近侍數十人一昔者上旬之中必有二此事一時謂二之子日遊一也今日之宴修二舊迹一也

扶桑畧記云宇多天皇寛平八年丙辰閏正月六日有二子日宴一行二幸北野雲林院一其扈從者皇太子及一品式部卿本康親王上野大守四品貞純親王四品貞數親王大納言正三位源朝臣能有中納言從三位藤原時平中納言從三位源光中納言從三位菅原道眞參議從三位藤原高藤參議從三位藤原有實參議正四位上源直參議從四位上源貞恒參議從四位下源希殿上六位以上皆着二麴塵衣一雲林院之院主由性法印任二權律師一遍昭僧正在俗時子弘延素性兩法師施二度者各二人一云々

三十六人歌仙傳云素性法師寛平八年閏正月行二幸雲林院一日大納言源朝臣奉レ勅宣二命由性大法師一爲二權律師一弘延素性兩法師給二度者各一人一共起稽首擧レ聲歡喜

菅家文草云扈二從雲林院一不レ勝二感歎一聊叙レ所レ觀（并序）雲林院者昔之離宮今爲二佛地一聖主玄覽之次不レ忍レ過レ門成二功德一也侍臣五六輩翫二風流一而隨喜院主一兩僧掃二苔蘚一以恭敬供奉無レ物唯花色與二鳥聲一拜謝有レ誠唯至心與二稽首一而已予亦嘗聞二于故老一曰上陽子日野遊厭レ老其事如何其義如何倚二松樹一以摩レ腰習二風霜之難レ犯也和二菜羹一而啜レ口期二氣味之克調一也況年之閏月一歲餘分之春月之六日百官休暇之景今日之事今日之爲豈非二爲無レ爲事無一レ事乎予雖二愚拙一久習二家風一廻レ輿有レ時走レ筆無レ地聊擧二一端一文不レ加レ點云レ爾謹序、明王暗與レ佛相知、垂跡仙遊且布施松樹老來成二繖蓋一、苺苔晴後變二瑠璃一、暖光如レ淺慈雲影、春意甚深定水涯、郊野行々皆斗藪、和風好向二容塵一吹、

源氏物語（若菜）云正月廿三日子日なるに右大將殿の北のかたわかなまゐり給ふ

河海抄引二延喜御記一云延長二年正月二十一日右大將藤原朝臣來レ自レ院有レ仰云々近間寂然甲子朝摘二若菜一奉レ入レ之二十五日甲子此日自レ院賜二子日宴一云々

又引二內宴記一云弘仁四年始有二內宴一唐之大宗之舊風也正月十二三日間有二子日一着二件日一行レ之藏人式清涼記等此日注云二十一二三日之間若有二子日一便用レ之

醍醐天皇延長二年西宮記云正廿五（甲子）自レ院被レ奉二子日宴於內裏一天皇御二南殿一中務卿親王避レ座立喚二釆女一釆女稱唯進二御酒一陪膳釆女擎レ盞欲レ獻爰親王進

古今要覽稿卷第四十六

●時令部

●若菜　わかな

正月子日に若菜のおもの調して奉りし事は嵯峨天皇の弘仁四年を始とす（河海抄引内宴記）これは唐の大宗の舊風にならひ給ひしと（同上）いへりそれより代々の天皇もつき〳〵に此事を行ひ給ひしなりおほよそ若菜とは皆人食ふへき春草の若苗をさしていひし名なれともその食ふへき春草の中にて初春の頃に生出る者は薺（ナヅナ）をはき芹なとのたくひにて今いふつまみな或はうくひすなの類にてはあるへからすその若菜をつむには人々野邊に出て子日するとて小松を引けるよすかに此菜をもつめは也その故に寛平八年宇多天皇の雲林院に行幸し給ひし時の序文に倚二松樹一以摩レ腰習二風霜之難レ犯也和二菜羹一而啜レ口期二氣味之克調一也と（菅家文草）いひ藤原元眞か歌にも霞たつ野邊の若菜をけふよりそ松のたよりにと（家集）いひまた院のみやの御息所わかなを給ふに小松ありて片岡の野邊のこまつを雪間よりなとみえたり（同上）扨子日の遊を或は朱雀院圓融院なとの御時より有けるにやと（公事根源）いへとも大伴家持の歌に初春の初子のけふの玉はゝきと（萬葉集）よめるによれはいと舊より此遊はありしなりされ共その歌に小松引よしはみえねとも柿本人丸の子日の歌に二葉より引こそうゑめと（家集）よめるにて子日に小松引ける事は承平の頃より始りしにはあらさる也然るを後の世に至りて子日の若菜といへはひたすらに七種の菜をそろへて奉るとのみおもへるは古をえらさる誤り也又子日に醍醐天皇の四十の御賀に小松に千年をちきりて若菜の如くわかやきていませなといふ意にて此日をはえらはれしものなるへし右大將藤原朝臣（大納言定國）の四十賀しける時素性法師の春日野のわかなつみつゝ萬代をと（古今和歌集）よみて屛風に書付けるもめてたけれとまた仁和のみかとみこにおはしましける時人にわかな給ひけるに君かため春の野に出てわかなつむと（同上）よみて送り給ひしは子日にはあらねとも惻隱のみこゝろみ言葉の外にあらはれていとめてたし

文德實錄云天安元年正月庚子朔甲子有二内宴一預レ之

なるものといへともこれには絶て屠蘇なきものなるに後人庵菴混同して屠蘇を以て草菴の名となせる大なる誤りなり

通雅云詩話補遺云周王褒詩繡ㇾ桷畫二屠蘇一屠蘇草也畫二于屋上一因以名ㇾ屋智謂解定畫二於屋上一以取ㇾ名亦非蓋闊葉草也今廣西猺人中呼二大葉似ㇾ蒿者一爲二頭蘇一頭屠音近正因二其有ㇾ蔭而名ㇾ屋也紫者曰二紫蘇一荏曰二白蘇一水蘇曰二鷄蘇一荊曰二假蘇一積雪草曰二海蘇一石香薷曰二石蘇一蘇亦辛草之總名淤宦紀聞云三山亦呼二茨葉一爲二大蘇一

正字通云濶葉草曰二屠蘇一後因爲二屋名庵名飲名一

按に濶葉草を屠蘇といひしは近世廣西猺人の方言にして唐以上みる所なしこれを以て古の屠蘇を論するは牽强甚しいはゆる濶葉草は今何物たる事をゑらすといへ共これを屠蘇と名付しはその葉濶大にしてよく物を覆奄する事庵の如く屋の如くなるによりてゑか名付しものなるへしその庵や屋や必すその草の蔭あるにかたとりて造りしにはあらさる也且紫蘇以下の七種は蘇といへるは草の事なる證とはなすへけれともすへて小葉のものなれはこれを以て濶葉草の證とはなしかたし智か意此數種の蘇と名付しものを引て屠蘇の蘇もまた草なるへき證とせしはまた牽强の至り也又千家詩に王介甫か元日詩を載て春風送ㇾ暖入二屠蘇一いへる注に屠蘇は香草名とみえたれとも王介甫かいはゆる屠蘇もこゝに引し周王褒かいはゆる畫二屠蘇一しも卽庵の名なるを注文あやまりて草の名とせしなり

編修兼校正　岡村尙謙平遜
校正兼鈔錄　山下官介源正房
校正兼淨寫　忠内鉊太郎紀弘光
校正兼圖畫　葦名隆吉平盛榮
校正兼淨寫　兒山諦之助平紀言
　　　　　　伊庭熊作源秀正
校正兼鈔錄　橋本太刀允藤原好春
校正兼淨寫　小林好太郎源直溫
編修兼校正　池野貞一郎源好謙
編修兼圖畫　志村愛助平知孝
編修兼校正　大河内晋平藤原儀成
總　　判　屋代太郎源弘賢

前の古法なるへし然るに後世に至りてその傳を失ひて諸家本草にその事を載さるに我古にその法の殘れるはいとめてたし今より後附子を製せんには必す此法を用ゆへし古の天皇の屠蘇白散をきこしめし給ひしもそのことく烏頭附子を製させ給ひしによりていさゝかも瞑眩はし給はさるものなるへし然るを草澤の醫の附子烏頭の製法をわきまへす漫に人をして悶絶せしめしを以て葛洪孫思邈等をそしれるはいまた深く烏附の製法をしらさるか故なり抑延喜式に屠蘇以下の四種の藥を製するには藥生十七人にて十一月下旬より十二月下旬に至るとあれはその製法の精密なる事押してしられたり

古今韻會云博雅屠麻菴也（按今本廣雅菴作レ庵）四時纂要作ニ屠蘇一云思邈菴名

按に庵菴の字ともに篆文みる所なし蓋し漢魏の俗字なりこれは說文に奄覆也大有レ餘也といへるによりて再ひ茅葦の類を以て屋ねをおほふ者は艸に从ひまた堂下に附屬する類广は高屋の義なれは广に从ひし假借字なるを以て艸に从ひ广に从ふその義もと異なりまつ庵字は龐安常か傷寒總病論に風俗文を引て屋平曰ニ屠蘇一今人廳事下作ニ板閣一是也といへるにて古より庵の名はなかりしにその屠蘇を屠麻につくりて庵の名を命せしは廣雅にみえたるを始とす然れは屠蘇の事を庵といひしは蓋し魏時の俗名にして菴とはその義大に異なるもの也龐安常かいはゆる廳事下作ニ板閣一といひしは魏畧に李勝爲ニ河南大守一郡廳事前屠蘇壞といへるに其義よく叶ひぬれは宋時に作りし板閣は即魏時の遺風なる事明らけし扨菴字は釋名に草圓屋曰レ蒲蒲敷也總ニ其上一而敷レ下也又謂ニ之菴一菴奄也所ニ以自覆ニ奄一也とみえたりこれによれは菴といひ蒲といへるは茅葦の類を以て屋ねとなしその上の方にてその草を一つにすへくゝりて四方に下垂せしめしものなれはその形をのつから圓なるもの也また同し草を以て屋ねをつくるといへ共その草を上よりふきおろして次第に下に至るを茨といふ此卽俗にいふかやふき也是も釋名に屋以レ草蓋曰レ茨茨次也次レ草爲レ之也とみえたり然れは草を以て屋ねをふくに二樣ありといへ共菴は小にして茨は大なり其大

尾酒一楪膠牙餳又云老過占他藍尾酒病餘收得到頭身歲盞後推藍尾酒春盤先勸膠牙餳荊楚歲時記云膠牙者取其堅固如膠也而藍尾之義殊不可曉河東記載申屠澄與路旁茅舍老父嫗及處女環火而坐嫗自外挈酒壺至曰此君冒寒且進一盃澄因揖遜曰始自主人翁即巡澄當藍尾蓋以藍爲婪當藍尾者謂最在後飲也また清異錄云桑維翰曰唐宋文人謂芍藥爲婪尾春婪尾酒乃最後之杯芍藥殿春故有是名これにて藍尾の義明らけし

○正誤

歲華紀麗云俗說屠蘇乃草菴之名昔有人居草菴之中每歲除夜遺閭里一藥貼令囊浸井中至元日取水置於酒樽合家飲之不病瘟疫今人得其方而不知其姓名但曰屠蘇而已

按に屠蘇の方は肘後方に小品方を引て華佗か方なるよしは醫家たるものは皆よくこれを忘れり韓鄂絕て醫經をよみし事なきによりてたゝその土の俗說のみを載しは疎漏なり且今人得其方不知其姓名但曰屠蘇而已といへるによれは屠蘇の名韓鄂か時よりはしまりしに似たり又屠蘇は井中に漬し置しをとりこして再ひ酒中に漬し合家これを飲事古よりの法なるに今その屠蘇をひたせし井の水を扱て酒樽に移しその水はかりを飲といふは古今未曾有の俗說にて醫經中絕てみる所なし近頃韓鄂か說を主張して葛洪孫思邈等の藥囊を酒に漬せし事を非とするものあり屠蘇は藥味中に烏頭の毒物あり酒にひたせは凶毒愈甚し常の人飲へきものにあらす我邦草澤の醫既に此屠蘇を製し本方と稱して鄉閭に贈る用る人忽ちに悶絕に至るといへり然りといへとも本朝にて屠蘇白散度嶂散の烏頭附子の入し三方をきこしめしゝは五十二代嵯峨天皇の弘仁年中を始としそれより代々の天皇もつきつきにこれをきこしめし給ひぬるに終に悶絕し給ひし事のなきよしをつらつら考るに延喜式典藥寮に附子を製する法ありその法漬附子料酢八斗二升六合以一合漬一兩炮附子炭八斗二升六合以一合炮一兩とみえたりまた證類本草に崔氏方及ひ藏器本草を引て耳聾を治するに附子を酢に漬し置て用ゆるよしみえたり凡附子を製するに酢を用るは唐以

月海雜錄所載屠蘇白散等調進之圖

一　趙州黄膏　膏藥

二　白散

三　度嶂散

前

匙カイ　切立　赤袋　屠蘇　盃

ものなれは廜蘇庵也といへる事は既に廣雅にも玉篇にもみえたれはそれにもとつきてこゝには廜蘇に作りしものなるへしまた雍州府志に屠蘇の事を載て屠字の尸に一點を添て屠蘇に作るは古實なるよしみえたれとも月海のいはゆる广に从ひて廜蘇に作るかた却て古實なるへし

〇釋名

屠蘇

通俗文魏畧丹鉛總錄名義錄〇麗安常曰通俗文云屋平曰ニ屠蘇一廣雅云屠蘇菴也然屠蘇平而菴圓所ニ以不ニ相同一今人寒日廳事下作ニ板閣一是也尊貴之家閣中施ニ羽帳錦幃一聚會以禦レ寒故正旦會ニ飲辟瘟酒一而以ニ屠蘇一爲レ名也とこれにて屠蘇の名義は明らけし然といへとも廣雅を引て廜蘇を屠蘇に作り庵を菴に作るものは廣雅の異本によりて漫にその字をあらためしものなるへし故に菴圓也の說ありこれ庵菴別字異義なることをえらさるあやまりなり

藍尾酒

白氏文集〇容齋隨筆云白樂天元日對レ酒詩三盃藍

レ恙飮二藥酒一三朝還置二井中一若能歲々飮可二代々無一レ病當家內外井皆悉著藥辟二溫氣一也忌二猪肉生葱桃李鵲肉等一

本草綱目引二小品方一云此華佗方也元旦飮レ之辟二疫癘一切不正之氣一

赤朮　桂心七錢五分　防風一兩　菝葜五錢　蜀椒　桔梗　大黃五錢七分　烏頭二錢五分　赤小豆十四枚

右九味以二三角絳囊一盛レ之云々〔按に華佗の作りし屠蘇は既に小品方にみえたり其方赤小豆なしこれによれはこゝにいふ華佗の方といへるは全く後人の漫に赤小豆を加へしものなれは時珍の憶に小品方を引しは誤りなり〕

古今醫統所レ載屠蘇方

麻黃　川椒　細辛　防風　蒼朮　乾姜　桔梗　肉桂各等分

右八味

格古要論所レ載屠蘇方

大黃一錢　桔梗　桂心各一錢八分　川椒一錢八分　烏頭六分　白朮一錢八分　茱萸一錢二分　防風一錢

右八味

中古元日供二御藥一方

曲直瀨道三所二調進一屠蘇方

白朮　山椒　桂枝　防風　桔梗各等分

右五味

周監方所レ載白散方

防風十五匁　白朮　桔梗各三分

右三味

同度嶂散方

防風十五匁　桂心　乾姜各三匁　山椒二匁

右四味

一說白散

白朮　桔梗　細辛各一匁

右三味

又度嶂散

麻黃一匁　山椒　細辛　防風　桔梗　乾薑　白朮　肉桂各一匁

右八味

或人曰本邦にて屠蘇を廜蘇に作れるはいとめつらし恐らくは後人のかき改めしにてもあるへきにやと然りといへ共此說は大永の時に古實を傳ん爲に作りし

烏頭四兩去黑皮

右五味擣篩絳囊盛帶レ之所レ居閭里皆無レ病若有下得二疫癘一者上溫レ酒服二一方寸匕一覆取レ汗得レ吐則差若經二三四日一者以二三方寸匕一內二五升水中一煮令二大沸一分溫三服

又云度瘴散方

麻黃去節　升麻　附子炮　白朮各一兩　細辛　防風
乾薑　桂心　防己　烏頭炮　蜀椒去目出汗　桔梗
各二分

右十二味擣篩爲レ末密封貯レ之山中所在有二瘴氣一之處旦〔按に旦の上疑らくは平字を脫す〕空腹服二一錢匕一覆取レ汗病重稍加レ之

又引二崔氏方一云蛇銜膏治二癰腫瘀血產後血積耳目暗等牛領馬鞍瘡一方

蛇銜一兩　大黃　附子去黑皮　芍藥　當歸　細辛
黃芩　大戟　椒去目　莽草　獨活各一兩　薤白十四莖

右十二味並切レ之以二苦酒一淹レ之一宿以二不レ中レ水成鍊猪膏二斤龍銜藤一合一〔按に此條缺文多し〕膏煎名二龍銜膏一今又有二龍草一似二蛇銜一而葉大耳亦有下取二其根一合煎者上名二龍銜膏一二出第二卷一

鬼遺方云治二癰疽膿爛幷小兒頭瘡牛領馬鞍革一按に革字蓋し瘡字の誤にてもあるへきにや及膓中諸惡耳聾痛風腫脚疼金木水火毒螫所レ中衆瘡百疹無レ所レ不レ治蛇啣膏方

蛇啣　大戟　大黃　芍藥　附子炮　當歸　獨活
芮草　黃芩　細辛　芎藭　蜀椒去目閉口出汗　薤白
各一兩

右十三味㕮咀以二苦酒一漬レ之淹一夜以二猪脂二升半一微火煎三上下膏成綿布絞去レ滓病在レ內酒下二彈丸大一

療疫氣令三人不二相染一及辟二溫病傷寒一屠蘇酒

通俗曰屋平曰屠蘇廣雅云屠蘇庵也然屠蘇平而庵圓所三以不二相同一今人寒日廳事下作二板閣一是也尊貴之家閣中施二羽帳錦幃一聚會以禦レ寒故正旦會二飮辟溫酒一而以二屠蘇一爲レ名也

大黃　桂枝　桔梗　川椒各十五銖　白朮十銖　烏頭
菝葜　防風各六銖

㕮咀絳囊盛以二十二月晦日一早懸二沉井中一至レ泥正旦平曉出レ藥置二酒中一屠蘇之東向戶飮レ之屠蘇之飮先從レ小起多少自在一人飮一家無レ病一家飮一里無

また一の日字を缺くよろしくこれを補へし〕懸二沉井中一令〔按に令の上不の字補へし〕レ至レ泥正月朔旦平曉出レ藥置二酒中一煎數沸於二東向戸中一飮レ之屠蘇之飮先從レ小起多少自在一人飮一家無レ疫一家飮一里無レ疫飮二藥酒一得二三朝一還滓置二井中一能仍レ歲飮可二世無一レ病當二家內外一有レ井皆悉着レ藥辟二溫氣一也又一方有二防風一兩一

又云度瘴發汗青散治二傷寒赤色惡寒發熱頭痛項强體疼一方

麻黃三兩半　桔梗　細辛　吳茱萸　防風　白木各一兩　烏頭　乾薑　蜀椒　桂心各一兩六銖

右十味治下篩溫酒服二方寸匕一溫覆取レ汗々出止若不レ得レ汗々少不レ解復服如レ法若得二汗足一如レ故頭疼發熱此爲二內實一當レ服二駃鼓圓若蓺氏圓一如得便頭重者可下以二二大豆許一內中鼻孔中上覺二燥涕出一　一日可二三四度一必愈兼辟二時行病一〔按に千金方に神明白散なくして崔文行か解散及ひ六物青散あり共に白散の變方なり〕

又云蛇嘀生肉膏治二癰疽金瘡敗壞者一方

蛇嘀　當歸各六分　乾地黃三兩　黃連　黃耆　黃芩

大黃　續斷　蜀椒　芍藥　白芨　芎藭　莽草
白芷　附子　甘草　細辛各一兩　薤白一把

右十八味㕮咀酢漬再宿臘猪脂七升煎三上三下酢盡下レ之去レ滓取傅日二夜一崔氏有二大戟獨活各一兩一無二地黃黃連黃耆續斷白芨芎藭白芷甘草一

又云黃膏治二傷寒赤色頭痛項强賊風走風一方

大黃　附子　細辛　乾薑　蜀椒　桂心各半兩　巴豆五十枚

右七味㕮咀以二醇苦酒一漬一宿以二臘猪脂一斤一煎レ之調二適其火一三上三下藥成傷寒赤色發熱酒服二梧子大一枚一又以レ火摩レ身數百過兼治二賊風一絕良風走二肌膚一遊風所レ在摩レ之神效千金不傳此趙泉方也

外臺秘要引二肘後方一云屠蘇酒辟二疫氣一令二人不一レ染二溫病及傷寒一歲旦飮之方

大黃　桂心各十五銖　白朮十銖　桔梗十銖　菝葜　蜀椒十銖計　防風　烏頭各陸銖

右八味切絳袋盛以二十二月晦日一懸二沉井中一令〔按に令の上不の字補へし〕レ至レ泥云々〔按此以下の文千金方になし〕

又引二千金翼方一云老君神明白散方

白朮二兩　桔梗一兩　細辛一兩　附子二兩炮

向一藥置二井中一能迎レ歲可三世無二此病一此華陀法武帝有二方驗中一從レ小至レ大少隨レ所レ堪一人飲一家無レ患飲レ藥三朝○○○○〔按に三朝以下の缺文はまさに千金方外臺秘要によりて補ふへし〕一方有二防風一兩一

又云老君神明白散

朮一兩附子三兩烏頭四兩桔梗二兩半細辛一兩搗篩正旦服二一錢匕一一家合レ藥則一里無レ病此帶行所レ遇病氣皆消若三他人有二得レ病者一便溫レ酒服レ之方寸匕亦得レ病已四五日以二水三升一煮レ散服二一升一覆取二汗出一也

又云度瘴散辟二山瘴惡氣一

按此以下の文全く醫心方に同し故にこれをはふく

麻黃椒各五分烏頭三分細辛朮防風桔梗桂乾薑各一分〔按此分量すへて醫心方に同した丶烏頭二分を三分につくるを異りとす〕搗篩平旦酒服二一錢匕一辟二毒諸惡氣一冒レ霧行尤宜レ服レ之〔按に延喜式朱本に毒字なくして冒の上に夜字ありまた尤を彌に作る〕

又云蛇銜膏療二癰腫金瘡瘀血產後血積耳目諸病牛領馬鞍瘡一

蛇銜大黃附子當歸芎藥細辛黃芩椒莽草獨活各一兩薤白十四莖十一物苦酒淹漬一宿猪脂三斤合二煎於七星火上一各沸絞去レ滓溫酒服如二彈丸一一枚日再〔此下疑らくは服字をかく〕以レ綿裹塞レ之目病如二黍米一注二眥中一其色緗黃一名緗膏有レ人又用二龍銜一兩一合煎名爲二龍銜膏一

又云趙泉黃膏方

大黃附子細辛乾薑椒桂各一兩巴豆八十枚去心皮搗細苦酒漬レ之一宿臘月猪膏二斤煎三上三下絞去レ滓密器貯レ之初覺二勃色便熱一如二梧子大一一丸不レ差又服亦可三火炙以摩二身體一數百遍佳幷治三賊風走二遊皮膚一並良可二預合一レ之便服卽愈也

千金方云屠蘇酒辟二疫氣一令二人不一レ染二溫病及傷寒一歲旦之方

按に外臺秘要之の上飲字あり

大黃十五銖　白朮十八銖　桔梗　蜀椒各五十銖　桂心十八銖

烏頭六兩　菝葜十四銖

右七味㕮咀絳袋盛以二十二月晦日中一〔按に日の下

爲レ藥故此日采二椒華一以貢二尊者一飮レ之亦一時之禮也
又晋海四令闘レ勛云俗人正日飮レ酒先飮二小者一何也勛
曰俗云小者以得レ歳故先飮レ酒賀レ之老者失レ歳故後飮
レ酒云々
容齋隨筆云今人元日飮二屠蘇酒一自二小者一起相傳已久
然固有二來處一後漢李膺杜密以レ黨レ人同繫レ獄値二元
日一於二獄中一飮レ酒曰正旦從レ小起云々
格致鏡原引二周祈名義考一云博雅廜𪏮庵也通俗文屋平
曰二廜𪏮一（按傷寒總病論引二廜𪏮一作二屠蘇一）四時纂要作二屠蘇一又廣韻酴酥
酒名玉篇麥酒不レ去レ滓飮是屠蘇爲レ屋酴酥爲レ酒本
不二相混一也唐人詩手把二屠蘇一讓二少年一先把二屠蘇一不
レ讓レ春誤以二屠蘇一爲二酴酥一後人遂謂二屠蘇一又爲レ酒
古人正旦飮レ酒以二少者得一レ歳故先飮老者失レ歳時故後飮
是日酒皆然亦無二屠蘇先飮之說一或云屠絕二鬼氣一蘇
醒二人魂一妄說也

屠蘇方（白散度嶂散附）

醫心方引二玉箱方一云屠蘇酒治二惡氣溫疫一方
白朮　桔梗　蜀椒　桂心　大黃　烏頭　拔楔　防
風各二分
凡八物細切緋袋盛以二十二月晦日日中一懸二沉井
中一不レ令レ至レ泥正月朔旦出レ藥置二三升溫酒中一
屠蘇之東向戶飮レ之各三合先從二小兒一起一人服
レ之一家無レ病一家飮レ之一里無レ恙飮レ藥三朝還
置二井中一仍レ歳飮レ之累代無レ患
又引二葛氏方一云老君神明白散辟二溫疫一方
白朮二兩　桔梗二兩半　烏頭一兩　附子一兩　細
辛一兩
凡五物擣篩歳旦以二溫酒一服二五分匕一一家有レ藥
則一里無レ病帶二是藥散一以行所二逕過一病氣皆消
若他人有二得レ病者一便酒服二一方寸匕一
又云度嶂散辟下嶂山惡氣若有二黑霧鬱勃及西南溫風一
皆爲中疫癘之候上方
麻黃五分　蜀椒五分　烏頭二分　細辛一分　防風
一分　桔梗一分　干薑一分　桂心一分　白朮一分
凡九物擣篩平旦以二溫酒一服二一錢匕一
肘後方引二小品方一云正朝屠蘇酒法令二人不一レ病二溫疫一
大黃五分川椒五分朮桂各三分桔梗四分烏頭一分菝
葜二分七物細切以二絹囊一貯レ之十二月晦日正中時
懸二置井中一至レ泥〔按に至の上不令二字補へし〕正
曉拜慶前出レ之正旦取レ藥置二酒中一屠蘇飮レ之於二東

た玉篇に庢七賜切屋也とみゆ

幕

按に幕は卽厲の轉聲なり

昜瘌來達

○按に瘌まさに廁に作るへし卽廣雅に㡯舍也といふ意なり然るを曹憲の來達切とせしは刺剌混同して其聲を誤りしなり

庵也

按に庵字魏以上みる所なし

玉篇云廜大胡切廜蘇庵也

又云蘇息胡切廜蘇

又云庵烏含切舍也廁也

又云瘌力曷切庵也

按廁まさに廁に作るへしこゝにいふ力曷切また刺剌混同の誤り也

又云菴倚廉切蘆舍又音諳有二重文葊一云古文

按に說文弇ありて葊なしこれによれは古文の字蓋し同上字の誤寫なるへし因て葊の艸に从ふは奄の艸に从ひしにならひて何人か再ひ作り出せし俗字なり然りといへ共其字既に梁以前より行はれて菴葊通用せしを以て顧野王の玉篇を輯する時にそれをとりて菴の重文に載しなるへしまた玉篇弇の重文に葊ありて古文といへるは說文と一樣なりといへ共菴は漢時の俗字なれは其俗字を主としてその下に古文を附する事は決してあるへからすもし葊字既に古文なる時は別に篆文の菴字あるは必定の事なれは葊字の俗字なるはこれにてもあきらけし

荊楚歲時記云正月一日是三元之日也云々於ㇾ是長幼悉正二衣冠一以ㇾ次拜賀進二椒柏酒一飮二桃湯一進二屠蘇酒膠牙餳一下二五辛盤一進二敷千散一服二却鬼丸一各進二一鷄子一凡飮ㇾ酒次第從ㇾ小起梁有二天下一不ㇾ食ㇾ葷荊自ㇾ此不三復食二雞子一以從二常則一

杜公瞻注二歲時記一云按四民月令云過臘一日謂二之小歲一拜二賀君親一進二椒酒一從ㇾ小起椒是玉衡星精服ㇾ之令二人身輕能一（讀作ㇾ耐）老柏是仙藥成公子安椒華銘云肇惟歲首月正元日厥味惟珍蠲二除百疾一是知小歲則用二之漢朝一元正則行ㇾ之

按趙彥衞雲麓漫抄に此文を引て行之の下晉世の二字有よろしくこれを補ふへし

董勛云俗有下歲首酌二椒酒一而飮上ㇾ之以二椒性芬香又堪ㇾ

かや一日は四位二日は五位三日は六位の藏人也つこもりの日奉行の藏人交名をきり紙にしるして殿上のすみの柱にをす也さて二獻には神明白散を供すむかしはさかなを後取の人に給事あり大根をたふ女藏人給はりて扇にすへて是を出す元日は人々精進の故なりと江次第にみえたり三獻に度嶂散を供す如レ此御藥の儀式は三箇日あり第三日には御たうやくを奉る銀器に入たり無名指に付て御額幷に御耳のうちにつけらる右の第四の指をかゝめてつくる也是は藥師の印相にて侍とかや此御藥の儀式は五十二代嵯峨天皇弘仁年中にはしめらる一人これをのみぬれは一家に病なし一家に是を飲ぬれは一里に病なしといふめてたき功能侍れは年のはしめに是を奉るにや

屠蘇考

此考は豐前中津藩の醫宮澤通魏の作りし也卷末に明和五年とみえたり

云屠蘇白散等の供二御藥一は延喜弘仁（按に弘仁延喜と書すへし）の頃より朝廷の禮となり王侯より士民に至るまで元旦これを飲む然れ共此藥禮の爲に貴ひ用られて治療の爲に用ひらるゝ事稀也その條下に一人ふくすれは一家疫なく一家服すれは一里疫なしとは甚た虛誕の說なり尤くすりの功を稱すへき爲なるへけれとも却て治方に用ひさる事となれり右の諸方は周痺傷寒虛冷霍亂等の證にしたかひ用ひは甚たしるしをとるへし風霜を凌き山川瘴癘霧露の地を過る旅客は常に懷にして可也茲年連雨四月の末より五月のすへに至てやます疫氣大に行はれ病る人多し吾侯武を講するいとま國史を閱し給ふ中に延喜式に屠蘇の方侍るを熟覽し給ふ此方よく疫氣を辟へし古より元旦にのみ用ひ來れとも古人の方を處する何そしからん時により症に隨て用ゆへしことさら天疫流行山嵐瘴氣を辟といへり春のみ用ひて他時用ひさるの謂なしとて醇酒數斛に屠蘇數劑を浸して諸臣に給ふ云々

廣雅云廜（徒）⿸广蘇（蘇）

○按に廜⿸广蘇正文屠蘇に作るへし广に从へるはともに俗字にて漢時所見なし

⿸广馬（罵）

○按に⿸广馬また俗字也漢時所見なし

粗（才祖）

○按に粗正文疽に作るへし說文云疽人相依疽也ま

官一女官付レ頭頭傳ニ陪膳一陪膳供レ之主上取レ之以ニ
右手無名指一令レ塗ニ後醍醐抄傳御額並耳裏左掌一給曲ニ右第四指一是藥師印相也乃用レ之
次返ニ給御銚子御酒盞小器匙等一其後典藥官人返ニ上
銚子酒盞於御厨子所一
陪膳女房調ニ垸飯一居ニ臺盤一大盛二十坏飯二十坏大折櫃交菓子二合三十荷小折櫃交菓子三十合給ニ諸司
女官並六衞府大破子一
此外稱ニ腋御膳一自ニ御厨子所一供ニ御歯固具一又供ニ
御藥酒等一以ニ高坏六本一獻レ之有ニ餅鏡一用ニ近江火切一
三日畢給レ祿陪膳女房又給ニ祿於女官ニ又給ニ理髪別祿一〔絹五十疋〕
典藥頭　宮内輔以上各三疋　侍醫二疋若五位者可レ給ニ三疋一
藥生一疋　刀自一疋　釆女二人各二疋
毎日弓場殿宮内輔以下衝重内膳設レ飯大膳設ニ菓料一
藥女官等料飯五升炭五籠書下催與レ之
御生氣御衣近例只御直衣一種也具ニ御引帶一着ニ於例御直衣上一給
女房以下不ニ必着ニ淨衣一也訛陪膳女房必着レ之舊例未ニ
節分一之時藥子衣用ニ舊年御生氣方色一
二三日間節分時例
長久二年正月二日有ニ節分一依ニ陰陽寮勘文一藥子衣
有ニ二色一元日者用ニ舊年御生氣方色一二日以後用ニ
今年方色一
長經抄二三日間雖レ有ニ節分一被レ引ニ元日所レ用之舊
年御生氣上更不レ可レ用ニ新年御生氣一云々此事不レ可
レ然
公事根源云供ニ御藥一是は元三の儀也御殿にてをこな
はる主上晝御座に出御なりて生氣の方の御衣をよの
つねの御なをしの上にかさねめさる陪膳の典侍典藥
頭も生氣の方の色を着す此時先御厨子所の御歯固を
供す命婦藏人役送して典侍次第に御前にすふ藥子と
て少女のいまた嫁せさるをもとめて是を用ることあ
り屠蘇は小兒よりのむといふ本文あれはその爲に少
女を撰てまつのましむるなるへし此藥子鬼の間より
すゝみてはしの几帳のもとにさふらふ女官典藥をめ
して御藥をもよほす一獻に先屠蘇を酒に入て藥子に
のましむ次に銀器に入て典藥頭とりてはいせんにつ
たふ主上御座をたゝせ給て夜御殿の南の戸より入給
て御ぬりこめの東のかたの戸にむかひてたゝせ給へ
は陪膳御盞を持てまいらす是も屠蘇は東の戸に向て
のむ由本文有故にや次に女官にかへし給へは是を後
取の人にのましむ昔は上戸を撰て後取にめしけると

次盛御酒盞自御几帳綻付於藥頭藥頭傳陪膳主上起座入自夜御殿南戶當塗籠東方戶立給陪膳女房取御酒盞（入御酒）通自東廂御障子參御前供之（私云入自二間南御障子供之）主上歸自本道（本方云入三升溫酒向東戶飮之各三合）

次供二獻（神明白散也五物搗篩云々）

其儀准一獻可知之但御藥者不於弓場殿和合之相副進之所司只嘗酒也先供御酒盞次御銚子入酒其儀如一獻

次供御銀匙（本方五分匕云々）居馬頭盤（又居中盤）入神明白散於金銅小器居中盤尙藥鋤藥入御盞

次供御（於晝御座飮御三獻亦同）畢後女官以匙三度入白散於大土器

次入御銚子餘分次移入御酒盞餘分給之於後取人

或此間給肴於後取（多給大根正月人多精進之故歟或給串蚫）女房置扇上出之後取乃給之

次供三獻（度嶂散　九物搗篩云々）

其儀與二獻同

西宮記今度當東戶飮御云々此事無其謂檢本方屠蘇散方文（散字の說既に上文にみえたり）有當東戶飮之文度嶂散文無其事之故也（四條記曰第二度御東戶內預設候菅圓座亦無所據）後取飮畢以坏出於殿上置於小臺盤下或置於侍臣臺盤上或王卿在座時巡行云々近代無此事

或於御前給女官云々

三獻畢返給御銚子御酒盞等御藥籠於本所第二日儀如朔第三日三獻供畢屠蘇本方曰三朝飮之

按に上文によるに屠蘇以下の九字は卽注文の訛りて本文に混したるなり

次典藥寮供御膏藥（忌名稱膏藥）

○岡村尙謙曰此膏字盖し當字の誤なるへし說文云饕从食號聲有重文叨云饕或从口刀聲按に號讀若膏叨讀若當こゝに膏藥を忌て當藥とよめるは卽此意也

撤御臺畢留一本〔或曰此說にては三朝に三藥を用ひ給ひて後に膏藥を掌中に塗給ふやうに云るされたれと延喜式に元日供御藥と題して屠蘇白散度嶂散千瘡萬病膏を載たれは延喜の時は膏藥も元朝に用ひ給ひしものなるへしといへり〕

次供御匙如前

盛千瘡膏於金銅小器居中盤供之付於藥女

元日早旦御裝束垂東廂南第一二間幷第五間御簾
以晝御帳南北面御几帳立於第三四間晝御座前
敷菅圓座一枚爲陪膳女房座其南又敷一枚爲尚
藥座以兩面端帖二枚當第二間北柱南邊東西行敷
之爲命婦藏人座返晝御座孫廂灯樓綱鋪菅圓座
於孫廂南第三間南柱之北(去長押三尺許)爲後取座弓場殿
東南北三面主殿寮引慢(其東南二方者便用節會幔)
入自月華門着之(近代列立弓場無着座儀歟)時簡前掃部寮敷膝
突一枚爲嘗御酒所司座宮內典藥寮官人侍醫等
請申御藥(舁辛櫃)立於弓場殿(有下敷筵掃部供之)主殿寮設大
爐(暖御酒料)造酒司渡御酒(或用銀鎗子煖酒云々)
平旦天皇御東廂(著御生氣方御直衣具引帶)
御生氣在北之時著御綠色(御生氣在北之時其色黑故用異色遊年方色也)
陪膳女房以下着座(陪膳着尋常唐衣裳稱之直衣女房花釵袾纐裳泥繪唐衣)
藥子入自鬼間候尚藥座南(無圓座)
采女二人御藥女官(頭一人女官六人)候於右青璅門內(年中行事障子下)
御厨子所供御臺二本(一御臺有御箸臺土器木箸一雙)得選於鬼間御
障子付女藏人女藏人執之來授陪膳
內膳自右青璅門供御齒固具盛青瓷件瓷自所
度於內膳(尾張百五物內)毎物有蓋擎子(內膳所設)

采女傳取之自第三間御几帳上付女藏人女藏人
傳陪膳
大根一坏　苽串刺二坏(或說三坏然而惣七坏由有所見)　押鮎一坏(切頭盛置)
煮鹽鮎一坏(同切置頭二串)　猪宍一坏(以雉代之)　鹿宍一坏(以田鳥代之)
○按に延喜式に近江國元日副進猪鹿とみえたり
これによれは延喜の頃には猪鹿を以て元日の料に
供せし事しるし
以上七坏之內精進物供於第一御臺魚類供二御
臺(或說無鹿宍有腹赤)
次供一獻(屠蘇散也八物細切云々)
○按に玉箱方云屠蘇八物細切肘後方云七物細切又
千金方云七味㕮咀とこれによるときは散字衍文也
或はいふ散まさに酒に作るへし
先煖御酒以御藥入於酒名之屠蘇盛別器
宮內輔典藥頭侍醫等三人一々進膝突嘗之依位
階皆用別坏
次供御酒盞(於青璅門下付女官女官取到第三門御几帳下女官和合於御酒)
次供御料酒(御銚子有蓋擎子御盤上居金銅金輪其上居銚子)
此間內膳官人以大土坏三枚小土器三枚與藥女
官女官分御酒前分令嘗藥子(本方自小兒起)

嶂山二三人一人服レ酒一人服レ粥一人空腹也服レ酒者兗又往至二長安一中二時氣一兗者比門華佗以二此方一與二曹武帝一作二此酒一他分布者民家悉並有レ驗及江東蔡司徒家用至レ有二良驗一名二屠蘇酒一也朱本云々

按に延喜式にいはゆる白散及ひ度嶂散の注文は肘後方千金方等にみえたれとも此注文に至てはその原つく所をしらす故に缺文あるも今補ふへからさるは遺憾なり

江家次第云供二御藥一（正月元二三〇弘仁年中始レ之）舊年十一月二十日以前陰陽寮進二勘文二通一（付二藏人所一延喜陰陽式十日以前）一通御忌勘文（御八卦也）一通（藥童子勘文年幷色見二此勘文一）被レ定二仰陪膳女房一（如二御乳母若典侍上﨟一之人也）（往年更衣奉仕云々）

奉レ仰之人求二童女未レ嫁之者年齡符合一

藏人仰內藏寮令レ給二其裝束料一云々

又被レ仰二尚藥(クスリノカミノ)女房一（女房中用二命婦一諸宮用二女史一近代定二一人一卽是尚藥也）

又被レ定二命婦藏人各二人一

藥殿(クストノ)請二御藥幷雜器請奏(ウケソウ)一

十二月十九日藏人率二諸司一向二大藏省野倉(ノヽクラニ)一出レ藥（近代無二此事一）

晦日藏人定二後取(シントリ)一押二於殿上北壁角柱一（西第三間柱也）

後取
元日　某　朝臣
二日　某
三日　某

廣一寸八分高一寸六分元日四位二日五位三日六位並用二亭戶者(シヤウコノモノヲ)一近代不二必然一但元日不レ差二近衞次將一

同日典藥寮進二御藥一（置二朱高机四脚一藥女官預レ之）

近例納二於辛櫃(カラヒツ)一合一卽籠(ムキ)二於御生氣方一東爲二生氣一者仁壽殿西南渡殿西面南爲二生氣一下侍(サフラヒ)北爲二生氣一黑戶上西爲二生氣一後涼殿西南戶前（額間東廂）以二掃部寮御屛風一立廻若御生氣方無レ便者籠二於養者方一

同日以二屠蘇一漬二御井一（以二緋絹一袋一盛）件御井在二豐樂院西典藥寮巽(タツミニ)一以二日中一可レ懸二沉井中一勿レ令レ至レ泥

先レ是（中旬）十二月行事藏人(クラフト)給二供奉女房女官當色料(タウシキノレウヲ)一（稱二之餝物一）陪膳（五疋四疋）藥頭（四疋三疋）女房（各三疋）藥女官(コトテハツテ)（各一疋）

近例采女不レ給二餝物一事終給レ祿此事不レ可レ然舊例采女以上皆着二當色一由見二西宮記一之故也

御廚子所(ミツシ)尋常(ヨツネノ)御銚子御酒盞渡二於藥殿一

とゑるして奉れはこれは肘後方及ひ千金方等に載る所の趙泉か黃膏なるへしといへり此說によれは古典藥寮より奉りし千瘡萬病膏は蓋し一切の腫物の生し給はさる爲にとて其膏を右の無名指に付て左の掌にぬり給ひたるにてその千瘡萬病膏は卽蛇銜膏の變方にして蛇銜膏はいつれの書にも癰疽門にありて癰腫金瘡瘀血產後血積耳聾目病牛領馬鞍瘡等の萬病を治するといへる本文あるによりて也いま典藥頭より奉る黃膏は肘後方辟二時氣疫癘溫毒一方中にありて專ら時行溫疫をさくる主治なるを以てそれを千瘡萬病膏に代て奉りしものなるへし此ころ竹田月海の記をみしかは屠蘇等の三藥を調進する圖ありその圖に趙州黃膏と題せしは卽趙泉か黃膏なるへし此圖は大永の時に古實を傳へん爲に作りしものなれは黃膏を以て千瘡萬病膏に代て奉りしも中古よりの事なれははしめて或人の說の妄ならさる事ゑられたり

藥篩絹四尺大筥二合折櫃二合炭一石
右起二十一月下旬一盡二十二月下旬一依レ例造備所レ須雜物十月十五日申レ省省申レ官下二符所司一十一月上旬請備其雜物數隨レ時增減造レ藥官人已下使部已上各賜二潔衣一（官人已下藥生已上人別絁一疋三丈綿三屯未選生使部調布一端綿二屯）限二廿八日一給二酒食一其元日供二奉御藥一尙藥一人（中宮東宮各典藥一人）女孺五人采女二人賜二潔衣一各絁一疋綿二屯（其色隨二御生氣一預移二陰陽寮一待レ報知レ之然後請受中宮東宮亦同）十二月晦日卯一刻宮內省幷寮共候二延政門之外一闈司奏訖寮官人率二藥生等一舁二御藥案一相共入置二庭中版南一共以レ次退出省奏訖更入舁レ案退却付二尙藥一但屠蘇者官人將二藥生一同日午時封漬二御井一令下二主水司一守上元日寅一刻官人率二藥生一就レ井出レ藥卽省輔一人幷寮官人等持レ藥共入進置卽用二銀鎗子一煖二屠蘇一（造酒供レ酒主殿設二火爐一）尙藥執二御盞一率二女孺一昇レ殿令二藥司童女（殿上平定）先嘗一然後供レ御次白散度嶂散三朝而畢（中宮東宮准レ此）卽賜レ祿五位襖子允屬侍醫女醫博士各綿一屯史生幷藥生十七人各綿三屯尙藥及女孺六人各綿五屯
東宮白散一劑度嶂散一劑屠蘇一劑（並盛同レ上）供レ藥漆案二脚（一脚安二屠蘇一一脚安二白散一）白銅鋺三口蠻繪下食盤四口緋囊一口（長二尺）囊緒絲一兩紙十張木綿二分所レ須人參云々
延喜式朱本云屠蘇酒治二惡氣溫疫一辟二邪風毒氣一度二

○按にこゝに屠蘇に入る烏頭二分の分量を缺その義疑ふへし因て憶に弘仁年中に典藥寮より奉りし屠蘇は本方の八味のもの也といへ共延喜の頃に奉りしは蓋し烏頭をのそきて入さるものにてもあるへきにや今典藥頭より奉る屠蘇にも烏頭なきを思あはせて考られたりもしくは一兩二分の二の字四字の誤りにても有へきかとおもへとも凡藥一兩四分ある者なれは必す二兩と書しるしぬる延喜式の例なれはそれは改めて二分の字衍文なりといはんもまたいかゝあるへきされは此分量によりて考れは延喜の頃に奉りし屠蘇は烏頭をのそきしといはんかたなほ穩なるへし抑こゝに載し屠蘇白散及ひ度嶂散の分量は悉く醫心方に引所の玉箱方葛氏方の分量に符節を合せたるか如くなれは烏頭のみその分量を書しるさゝる事はあるましき也然れは江家次第に屠蘇八物とあるはたゝ本方によりていひしものなるへし

細辛三兩（内一兩は白散一分は度嶂散一兩三分は千瘡萬病膏）拔葜二分（屠蘇）干薑一分（度嶂散）麻黄一兩一分（按に一兩の一字は蓋し二字の磨滅せしなり内一兩は千瘡萬病膏一分は度嶂散の方中にいはゆる五分なり一兩は千瘡萬病膏）桔梗三兩一分（内二分は屠蘇一分は度嶂散二兩二分は白散の方中にいはゆる二兩半なり）當歸一兩大戟二兩升麻一兩白芷一兩芍藥一兩莾草一兩黄芩一兩獨活一兩蛇銜一兩生地黄五兩薤白廿莖苦酒四升猪膏十斤

以上十三種は共に千瘡萬病膏に用ゆる所なり然りといへ共今傳ふる所の西土の古方書中絕て千瘡萬病膏の名なし因てその藥物を照してこれを肘後方千金方及ひ外臺秘要等を閲するに此卽蛇銜膏一名細膏なり扨本にいはゆる白朮桔梗蜀椒桂心大黄秡葜防風は屠蘇の料また白朮桔梗烏頭附子細辛は白散の料及ひ麻黄蜀椒烏頭細辛防風桔梗干薑桂心白朮は度嶂散の料にて上文にいはゆる十三味にまた人參甘草等を加てすへて十八味は全く千瘡萬病膏の料なり其分量も以上三藥所須の餘りを以て約略して之を考へ定むへく其方は卽肘後方に載する所の癰疽等を療する蛇銜膏に人參白芷甘草麻黄升麻地黄の六味を加へたるものにて主療もまた蛇銜膏の如くなるへし小品方及醫心方の全本には必す千瘡萬病膏の全方を載たるへきに是等の古書失して徵すへきものなきは遺憾なる事なり或曰今典藥頭より奉るは此千瘡萬病膏にはあらすその名を黄膏

酒に漬せしものにて（荊楚歲時記引四民月令）此酒を飲にはまつ潔ニ祀祖禰ニ進レ酒降レ神畢乃室家尊卑大小以レ次列ニ先祖之前ニ子婦曾孫各上ニ椒柏酒于家長ニまた元日進レ酒次第從レ小起と事文類聚に崔寔か月令を引てみえたれは屠蘇を東向戸中にて飲とは其義大に異なりといへ共その酒を飲に從ニ小兒ニ起といへるもまた飲ニ椒柏酒ニ法にもとつきしもの也我常に古方を好みかつ單方を好むよつて今よりして我家の屠蘇には此椒柏酒を用ゆへしといへるもあまりに古方を好むの癖なるへし嗚呼

延喜式典藥寮云元日御藥中宮准レ此白散一劑度嶂散一劑屠蘇一劑千瘡萬病膏一劑供レ藥漆案三脚一脚安ニ散膏ニ一脚安ニ屠蘇ニ鎗子花足一脚安ニ酒盞ニ〇新撰字鏡云鎗楚康反由加奈戸銀盞一合銀盤一口白銅鋺一合盞子四合朱漆下食盤八合徑八寸並收レ寮囊一口長二尺三寸

○按に下の東宮白散條によるに囊字の上に緋字を缺よろしくこれを補ふへし扨古の屠蘇囊は四角にしてなかきものにて世に用ゆる所の三角囊にあらす今も典藥頭より奉る所の屠蘇囊は四角にして長し此卽古の遺風なり柳村隨筆云文政己卯春正月四日贈法印忌日なれは典藥頭の亭に參る屠蘇を出されし時袋の色黑みたるやうにみえしまゝその事を申せしかは足下には紅の袋を用給ふやと申さるさん候と申頭のいはく茜染を用ゆるか古實なり世上古實を失ひて紅染を用ゆる也足下も改られよと申さる因て案に千金方にも絳袋盛とあり絳はあかね染なり紅そめにはあらす頭の申されし事誠に古實なり頭また申さるは世上にて三角の袋を用れ共調進の供供御三角にはあらすと申されき是も千金方をみれは屠蘇の方下に三角の事みえす三角の絳袋は太乙流金散の方下にみえたり然れは三角を用るも古實を失へるなり頭また申さる飾付のひもたいはくの絲供御は十二筋將軍家は十筋凡家は六筋にてよりかくへしと敎られしと云々

囊緒絲一兩紙廿張木綿三分所須人參七兩三分甘草六兩二分此二種は千瘡萬病膏に用ゆる所なり桂心三分内二分は屠蘇一分は度嶂散大黃一兩二分内二分は屠蘇一兩は千瘡萬病膏附子三兩二分内一兩は神明白散二兩二分は千瘡萬病膏蜀椒二兩二分按に二分まさに三分に作るへし内一兩一分は度嶂散の方中にいはゆる五分なり二分は屠蘇一兩は千瘡萬病膏防風三分内二分は屠蘇一分は度嶂散烏頭一兩二分内二分は度嶂散一兩は白散

古今要覽稿卷第四十五

●時令部

●屠蘇

屠蘇は和漢通名にてその一名を藍尾酒といふこれを正月元旦に用ひ給ひしは五十二代嵯峨天皇の弘仁年中を始とし（江家次第）其方は晋の陳延之か小品方にみえたるを始とす（肘後方引）それに七味八味九味或は分量等の異同ありといへとも本朝にて用ひ給ひしは醫心方に引し玉箱方にいはゆる八味のものにてその分量もまたこと〳〵く玉箱方によられしもの也もとこれ華佗の方なりと（小品方）いへり此屠蘇を以て緋の絹の囊に入れ十二月晦日の午の時に豐樂院の西典藥寮の巽の方の御井に漬しそれを元日の寅の刻にとり出して御酒をあたゝめて御銚子に入屠蘇をひたしてまつ藥子のわらは御試して後に天皇に奉れるは從小兒起と（醫心方引玉箱方○荊楚歲時記千金方並に兒字なし江家次第は醫心方に同し）いへる本文あるによりてなり扨天皇は平旦に東の廂に出御ありて御生氣の方の色の直衣を着し給ひ塗籠の東の方にあたりてたゝせ給へは陪膳の女房御盞をとりてまつ一獻を奉る（江家次第）といへりこれを屠蘇と名付しは屠蘇之東向戸飲之と（醫心方引玉箱方○福山藩伊澤辭安の說）いへる本文あるによりて代々の天皇もかならす東の廂の塗籠の方にあたりてたゝせ給ふ事なるに或はその字を醍酥に混して酒の名とし或は蘇はもと鬼の名にて此藥よく其鬼を屠絕するなといへるはいたくたかへり扨二獻には五味の白散を奉り三獻には九味の度嶂散そのよすかにまた千瘡萬病膏を奉ると（延喜式江家次第）いへりこれ皆一切の時行溫疫をさけ及ひ腫物等をのそく術なるを以て今にいたりても萬民おの〳〵年のはしめにこの酒を調して家ことに祝しぬるはけに嵯峨天皇の大なる御たまものにてあふくへくたふとむへし

岡村尙謙曰按に屠蘇は古の椒柏酒にもとつきて三國の時華佗か作りし方にてこれを曹武帝に傳授せしより專ら世には行れし也（肘後方引小品方延喜式朱本）その椒柏酒は漢時の古方にして何人のつくりし方なる事をしらすといへともたゝ山椒と柏子仁（或は葉を用ゆるともいへり）との二味を以て

則吉ヲ失フトナリ皆コレ神意ヨリ出ツト云々

錦繡萬花谷云董一勛答問歳首祝折ニ松枝ニ男七女二以為ニ藥飲ニ云々

按に歳華紀麗によるに董勛問禮とあれは董一勛答問と引しはいかゝあらんとにかく溫故日錄歳時故實錦繡萬華谷年時畧儀等の諸書は荒唐附會の説にして取用ゆるにたらす

松の枝を七つをり女は二つをれるとそ侍る

年事略儀云松竹梅正嚴（オヽカサリハ）託ニ龍虎龜ニ而表ニ神祝ニ龍並ニ徳威ニ龜主レ徳虎主レ威而賀ニ萬歳ニ云々松常盤堅葉ナルモノニシテ四時ヲ貫テ柯ヲ改メス葉ヲ易ヘス鐵衣生澁ニシテ紫鱗乾ルハ徳ヲ高スルナリ影搖テ千尺龍蛇ノ動カ如クナルハ威ヲ逞フスルナリ是故ニ松ヲ龍ノ徳ト威ト具タルニ比ス歳寒然後知ニ松柏之後凋ニ云モ君子ノ守ル所節義確乎堅ク徳ニ周ヲ云竹（タケ）ハ靈草ナリ長高シテ諸草ニ秀テ表常ニ緑ニシテ性强内虚ニシテ天袋（アマツ）アリ又上節下節アリテ上下ノ節文ヲ表是皇天ノ心草（サナコクサ）ニシテ天下ノ法草ナリ是故ニ威群草ニ勝レ蓁忩剛態萬木ヲ壓ス是ヲ以コレヲ虎ノ威アルニ準フ梅ハ百花ノ魁ニシテ徳ハ寒ヲ凌テ美ク香ハ雪ヲ襲テ芬シ故ニコレヲ龜ノ徳ヲ主ルニ準フナリ正嚴ハ大カサリト訓ス松竹梅ヲ以テ體トシテ大ニ家門ヲ嚴ナリ松ヲ龍ニ託（ヨセ）竹ヲ虎ニ託（ヨセ）梅ヲ龜ニ託（ヨセ）テ神祝ヲ表スルナリ龍ハ並ニ威徳ニ龍ハ鱗蟲ノ長ナリ能日ニ能大ニ能長ク能短ク能幽ニ能明ナリ春分ニシテ天ニ登リ秋分ニシテ川ニ入靈變不測ノ物ニシテ威ト徳ト並具ナリ是故ニ易ニハ乾道ノ變化陽氣ノ消息聖人ノ進退ニ象ルナリコレ取テ威徳ヲ祝所以ナリ龜ハ主レ徳トハ龜ハ甲蟲ノ長タリ神龜ノ象タルヤ上ノ圓ハ天ニ法リ下ノ方ハ地ニ法リ背ノ上ノ盤アルハ山ヲ形玄文交錯スルハ列宿ニ法ル百歳ニシテ一尾生シ千歳ニシテ十尾成吉凶存亡ノ變ヲ知ト云リ蟲類ニシテ天地ニ法リ壽ウシテ能人ト云其徳是ノ如シ故ニ徳ヲ主ルト云虎ハ主レ威トハ虎ハ山獸ノ君也狀猫ノ如ニシテ太サ黄牛ノ如シ黑章鈎ノ爪鋸牙ナリ舌ノ大サ掌ノ如ク倒刺（サカサマニサス）ノ鬚ヲ生ス硬尖（カタクスルト）ニシテ光リ夜能視一ツノ目ニテ物ヲ看百獸コレカ爲ニ震恐風從テ生ス其威猛是ノ如ナルコトアリ故ニ是ヲ取テ威ヲ祝ナホ萬歳ヲ祝賀スルナリ其餘ノ從嚴（カザリ）依レ時用ニ吉凶菜肉ニトハ從嚴ハコカサリト訓ス既ニ松竹梅ヲ以テ大嚴（オホカザリ）ヲナスカ故ニ斯ニ從テ諸ノ吉名ノ菜肉ヲ以テコカサリヲナシ是ヲ祝賀（イハフ）ナリ年事篇ニ云先皇大殿ニ在ス大神（ミハ）ノ御神釆女ニ託テ告云吉名ノ菜肉ヲ以テ節供ヲ祝ハ朝廷幸（サチ）アラン智臣噱（アザワラツテ）曰吉名ト云ヘトモ契義サラニ異リ是正事ニアラス大神喟然トシテ嘆曰汝カ知トコロニ非ス昔若櫻宮天皇三柄ヲ夢ミ玉ヒテ遂ニ三韓ヲ伏（シタガヘ）玉フ神明ノ境界ハ人間ノ知ル處ニ非ス從ヒ行トキハ則幸ヲ得背キ弃ルトキハ

等かみは淺ましかりぬへしなといひの丶しる事よ松はいつも御生山より奉れり松竹を立らる丶は欽明の御代より始めさせ給へり松は千歳のよはひをたもち竹はみとりの操をあらはし節文を備て禮にかなへれは年のはしめに立仕らせ給へりとそそれはさることにてはかなき草といへと其か中にも松葉齒朶穗俵芹などいふ草は御息ふれさせ給ふ御齒固の餅にもかすまひられぬ中にも芹は御かい餅の中まて仕りぬ齒朶松葉といへともさらなり豆かとの魚心太御廻りの下に敷れて上は更にて下つかたあやしき民の戸も此壽種を添る事神々しき春なるへし他の邦にはか丶る例はなきにや

按にこの物語は長明の作にはあらす後人依託の書なり門松を欽明天皇の御代よりといふ事はさらに據なきことなり

藏玉集に年具の歌を載て「大内やも丶しき山の初代草いくとせ人に馴てたつらん

按に正月二日大内に門松たてしよししるし侍れと後人妄作の疑ひあれはこれをとらす

溫故日錄云門松は素盞烏尊の南海へかよひ給ひし時宿を巨旦將來にかり給ひけれともかし奉らす蘇民將來宿をかし奉る其後尊いかりて巨旦をころし其家をほろほさる是を後の世までのしるしとせんとて巨旦が墓の上に生たる松を年の始に門に立る也此事晴明か簠簋內傳にあり委祇園會の所に可㆑記是門松の緣也しかはあれとも一條冬良公の御說には松は千年をちきり竹は萬代をちきる物なれは年始の祝事にこれをたて侍るなるへし

按に巨旦の說取用ゆへからす

歲時故實云人の門戶に松をかされる事は北天竺吉祥天の王舍城の王を商貴帝といひて三界に遊戲し諸星に探題たり是を天刑星と名つく娑婆界にくたりて名をあらためて牛頭天王と號す南天竺の側に廣遠國あり國主を巨丹といふ巨丹不仁なり大王つゐに巨丹を亡し國を蘇民將來に給ふ今の肇年の松は巨丹墓驗しの木上にむすふ炭は葬送の火爐なり元日の赤白の鏡の餅は巨丹か骨肉に表したるものなり後の人是をみて其不道をこらしめんためなれはなり竹をそへけるは松竹千年の心にとりていつその頃よりかそへ侍るならしもろこしにては此日松の枝を折けるなり男は

○釋名

かとまつ

堀川百首久安百首林葉集○按に門松は松を門に立祝をいふ也無題詩堀河百首等に出たれは七百五六十年前より下つかたの家々には立し也殊に松は百木の長といひ常盤にして葉かへせぬ物なれは門を祝し祭りて春をむかふる爲に立し物なるへし禮記月令云孟春之月日在₂營室₁云々其祀戸云々鄭玄注曰春陽氣出祀₂之於戸₁內レ陽也といへり且歳華紀麗に松標₂高戸₁といへるは西土にて松を門に立る證にして和漢同意也

しめの門松

夫木和歌集○按に古へは上つかたの門には立すして賤の門にはあまねく立たる故に賤の門松と歌によめり

しつか門松

新撰六帖千五百番歌合○名義同上

しりくめ繩

古事記○按に宣長曰尻久米繩は今いふ志米繩なり（約むれはおのつから理久は畧て志米といはるゝ也）又思ふに志米は標結なとの標の意か然らは尻久米と物は一つにて名は別なるか但し標も本はこの尻久米より出たる言にやと古事記傳にみえたり

端出之繩

日本書紀○按に端出之繩とかきてしりくめなはと書紀によませたり端出とは斷さる藁の尻の出たる由にて即後世の志米繩の狀なりと宣長いへり

日御綱

古語拾遺○按に同書自注に今斯利久米繩是日影之像也といふによれはなはをもて丸くつくりて日の御形をなしたる繩をいふなり

しめかけ

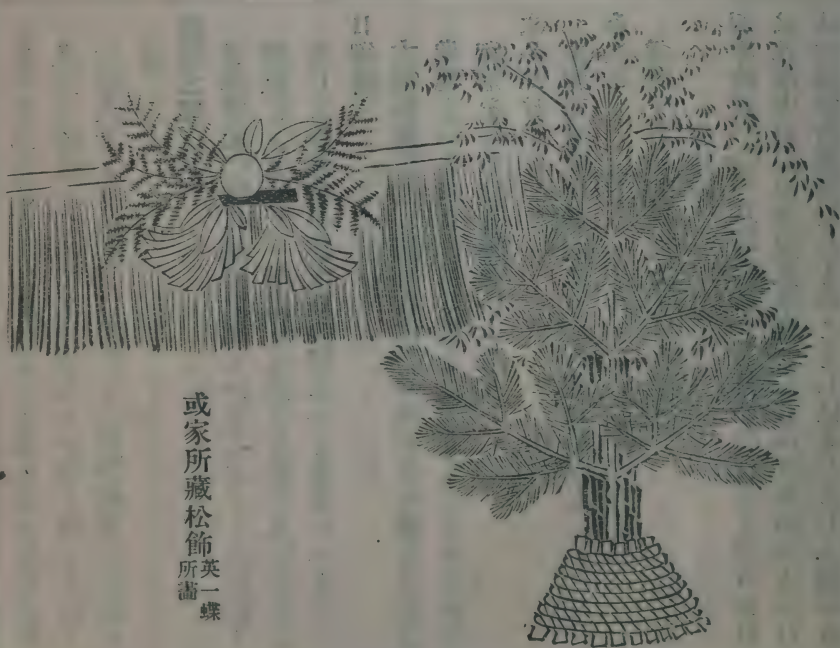
夫木和歌集○名義しりくめ繩におなし

みしめ

爲尹千首○名義同上

○正誤

四季物語十二月條云八幡松尾より飾の竹たてまつりぬれは八瀬大原の民草尻久米繩こしらへてつかふまつれは主殿寮內藏寮なんとのことしはあたらしう勤ぬ汝

松賣の圖　織田右府公掛畫のよし

或家所藏松飾　英一蝶所畫

けさはみな賤か門松たてなへて
　　祝ふことくさいやめつらなる

千五百番歌合　　　　　　　　　　　從三位保季

あすをまつしつか門松さきたてゝ
　　けふより春の色をみる哉

爲尹千首

けふはまた都の手ふりひきかへて
　　千ひろのみしめ賤か門松

夫木和歌集　　　　　　　　　　　　西行法師

家集元日聞鶯

しめかけて立たる門の松にきて
　　春の戸あくるうくひすの聲

文治六年女御入内御屏風歳暮　　　　　　後徳大寺左大臣

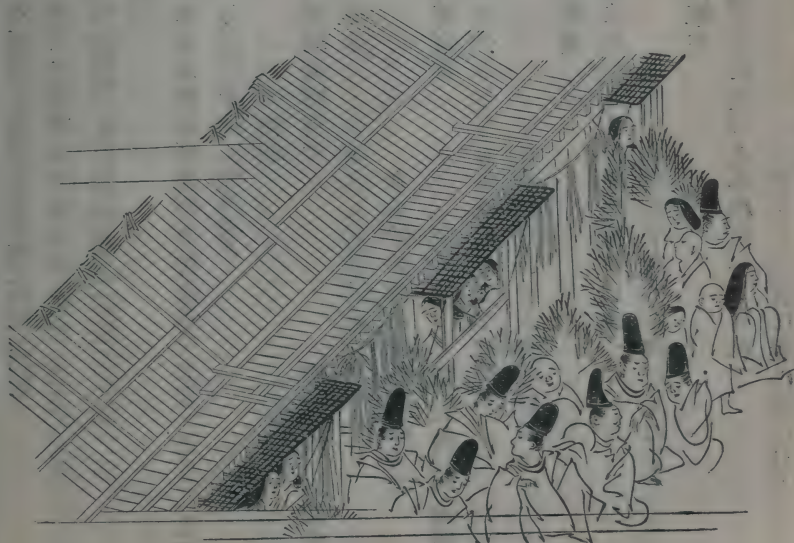
年くれて今そ深山をいたすなる
　　かねていはひの賤のかと松

寛喜元年女御入内御屏風花景人家元日　　　　光明峰寺入道攝政

初春のはなの都に松をうゑて
　　民の戸とめる千代そしらるゝ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　正三位知家

大かたのとしまた明ぬ民の戸は
　　松やはたつる春きたりとて

門松之圖　土佐光長所畫年中行事圖朝覲行幸

さといふ物を轉して食器とせしかと云々

嘉良喜隨筆云江戸御城のかさり竹は竹の葉をとりて用ゆこれは三河にて竹たは竹にて直に被レ成し例也

世說故事苑云松竹の齡ひひさしきを祝して門戸をかさるなるへし云々

唐韓鄂撰歲華紀麗云正月元日松標ニ高戸ー董勛問禮俗有下歲首酌ニ椒酒一而飮レ之者上何也以ニ椒性芬香一又堪レ作レ藥又折ニ松枝于戸一以同ニ此義一

古事記神代卷云卽布刀玉命以ニ尻久米繩ー控ニ度其御後方ニ云々

日本書紀神代卷云掘ニ天香山之五百箇眞坂樹ー而云々界ニ以端出之繩ー左繩端出此云ニ斯利倶梅儺波ー

古語拾遺天照太神入ニ于天石窟ー段云天兒屋命太玉命以ニ日御綱ー今斯利久米繩是日影之像也廻ニ懸其殿ー云々

土佐日記云小家の門のしりくめ繩と云々

和名類聚鈔調度部云注連顏氏家訓云注連章斷師說注連之利久倍奈波章斷之度太智日本紀私記云端出之繩讀與ニ注連ー同

日次紀事云凡新年之賀儀各方土之異或有ニ一家之例ー其式樣不レ一惟家內之葦索幷門前之松竹者夏夷共同レ之國俗正月門前左右建ニ松一株竹一竿ー上横ニ兩竿ー其外面挿ニ昆布果實等物ー名稱ニ門松ー

和漢三才圖會云按歲始每レ家食ニ煮餅ー也門樹ニ松竹ー也飾ニ藁繩ー也皆我神國之舊風焉異國之所ニ曾不ロ有也

攝津志云豐島郡熊野田村松爲ニ土宜ー正月人家挿ニ門戸ー者採ニ于此ー出貨云々

○和歌

堀川院御時百首　修理大夫顯季

門松をいとなみ立るそのほとに
春あけかたに夜や成ぬらん

久安百首　待賢門院堀川

山かつのそとものの松も立てゝけり
千年といはふ春のむかへに

林葉集

春にあへるこの門松をわけ來つゝ
我も千世へん內に入ぬる

山家集

門ことに立つる小松にかさられて
やとてふ宿に春は來にけり

新撰六帖　行家

そも〳〵門松をたつることふるくよりさま〳〵にいひきたれといつれも後人のおしはかりにていふにもたらすくはしくは正誤にいへり武家に行はるゝ事は鎌倉室町兩將軍家には所見なし天正の前後羽尾記嘉良喜隨筆等にみえたり西土にても正月元日松標ニ高戶一といふ事は李唐の代にみえたり（歲華紀麗）

本朝無題詩

長齋之間以レ詩代レ書呈ニ江才子一　惟宗孝言

占レ期百日潔齋處、正月春中閉ニ四墉一、持レ案法華應ニ聖藻一、鎖レ門賢木換ニ貞松一、（近來世俗皆以レ松挿ニ門戶一而余以ニ賢木一換レ之故云）

徒然草（十九段四季段）云かくて明行空のけしき昨日にかはりたりとは見えねとひきかへてめつらしきこゝちそする大路のさま松たてわたしてはなやかにうれしけなるこそまたなくあはれなれと云々

世諺問答云問朔日しつか家ゐに門の松とてたて侍るはいつころよりはしまれる事そや答いつころとはたしかに申かたし門の松たつる事はむかしよりありきたれる事なるへししつか家居は大かた方戶（ハウコ）なるによつて民戶（ミン）と申侍れとむかしは一町のうちを五丈つゝにわりて門を立しかは八の門ありしなりその中に賤か家ゐをつくり侍れは門なかるへきにあらすその門の前に松竹を立侍り松は千とせをちきり竹はよろつ代を限る草木なれはとしのはしめのいはひ事にたて侍るへしまた齒朶ゆつり葉は深山にありて露霜にもしをれぬ物なれはしめ繩にかさりて同しくひき侍るにやしめ繩といふ物は左繩によりて繩のはしをそろへぬものなり左は清淨なるいはれなりはしをそろへぬはすなをなるこゝろ也されは天照大神の天の磐戶をいて給ひし時尻久米繩とて引れたるは今の注連繩なり淨不淨を分つに依て神事の時は必らすひくことに侍りしつか家ゐにひく事も正月の神をいはひまつる心たてなるへし

羽尾記云其頃吾妻郡岩櫃城に上杉景勝より齋藤攝津守と云者城代にさし置り云々攝津守大手の門に門松たて歲末の祝の折からなれは云々

兩朝時令云大路ノサマ松立ワタシ云々今按兼好云爾則年初每レ門立レ松之儀既久矣

鹽尻云今門松に藁合子をつくり飯餅なと入て門神に供するは太神宮及攝社等の鳥居榊につけてあるみか

古今要覽稿卷第四十四

●時令部

●かとまつ 門松　しめなは 注連繩

正月の門松はふるき世よりその説さま〳〵あれといつれもたしかならすものにみえたるは本朝無題詩惟宗孝言の詩の自注に近來世俗皆以レ松揷ニ門戶一而余以ニ賢木一換レ之故云とみえたるを始とすへし此ほかには年中行事繪に土佐光長か筆にあらはせるかことし歌には堀河院百首顯季卿除夜の歌に門松をいとなみたつる云々とみゆるそはしめなるへきさて是はすゑ〳〵の賤かいとなみにしならはせるわさにて固よりうるはしきおほやけ事にはあらすされは正しき書ともにはみえぬなるへし今も榊をたつること邊鄙なとには稀々ありいにしとし詮丈か旅行せし時東海道金谷島田の驛又藤枝のあたりにしきみをさせる家ともみえたりき上に引ける無詩題の自注に近世云々とあるを思へは延久承保の頃より民の家々には專ら正月の祝事として立はしめけるにやあらんさて下樣のみもてあつかへることのよしは世諺問答の說かつ左に擧たる古歌ともに賤か門松云々とおほくよめるにてそのおもむきたしかにしられたりたゝし古くは松のみにて竹をたてそふるはいつれの世よりといふことをしらす世諺問答に竹をもたつるよし見えたれは應永の頃には竹をもたてたる事勿論なりされはいたく下りての世の事とおほゆさてこの月家毎の門に注連繩を引かくる事は神代に天照大神をとゝめ奉るとて天の岩屋戶に布刀玉の命尼久米繩をもて引わたしたるを始にて是より押うつりては只神の前に引わたして祭りあかむることゝなれり今は春陽の氣をむかへて門戶を祭るか爲なるへし又西土にも禮記月令集說曰戶者人所ニ出入一司レ之有レ神此神是陽氣在ニ戶之內ニ春陽氣出故祭レ之なとみえ荊楚歲時記にも元旦索に松柏をむすひ畫鷄を門戶に付て疫鬼をさくるよしみゆされは只門戶を祭るのみにはあらて是らをも思ひよせたるにやさて皇國にてしめなはを門戶にかくる事は延喜承平なとの頃よりすてにあることゝ見えたり下にひける土佐日記元日の條をみてしられたり

醴泉

同上○按に上にいふ所とおなし荆昺か疏に曰尸子皆以爲㆓大平祥風㆒者案尸子仁意篇述㆓太平之事㆒云燭㆓於玉燭㆒飮㆓於醴泉㆒暢㆓於永風㆒春爲㆓靑陽㆒夏爲㆓朱明㆒秋爲㆓白藏㆒冬爲㆓玄英㆒四時和正光照此之謂㆓玉燭㆒甘雨時降萬物以嘉高者不㆑少下者不㆑多此之謂㆓醴泉㆒其風春爲㆓發生㆒夏爲㆓長嬴㆒秋爲㆓方盛㆒冬爲㆓安靜㆒四氣和爲㆓通正㆒此之謂㆓永風㆒是也○亦按に玉燭通正景風醴泉此四名は皆德を以て稱せしなり强ち四時に配當せしむる稱にもあらす共に四時の別號なり皆和德を天地間に施し潤して四氣の運動する義をとりし義名なるへし

○正誤

東雅云素戔烏神の御孫羽山戸神の子に若年神夏高津日神（また夏の女神といふ）秋比女神冬年神等ありきと舊事記に見えし夏秋の名の見えし始なりされと古事記には冬年神久久年の神と云るして久々の二字を讀に音をもてすへしと注したれは舊事記にみえし冬の字は誤寫せし所也と見えたり又舊事記に思兼神兒表春（ウハルノミコト）命下春（シモハルノミコト）命見えたりこれも春秋の春の義也しにやたゝ其字借用ゐられしにや不㆑詳此等の名義既に闕ぬれは今はたいかにとも辨ふへからす

按に此以前既に春秋の名義出たり日本書紀に素戔嗚尊の春則云きまきしといひ秋は則天のふち駒をみたの中にふすと見えたるそはるかに以前の事也また冬年神は古事記には久々年の神とあるうへに舊事記はもとより僞撰なれはとりかたしさて古事記にて春秋冬といふ義を求んには秋山の下冰壯夫といひ春山の霞壯夫といひ冬衣の神の稱ともみえたるそまさしく春秋の春なる事下に霞とあるにて明らかなり

の事と見えしは舊事古事等の記に曰神天熊大人命葦原中國の稲種を取らしめたまひはしめて天狹田長田に殖給ひしに其秋垂穎八握莫然へしと舊事記にしるされしそまかふへくもあらぬ秋の事なりけるといひつれと按に舊事記の義とられす謁撰といふ説もあれはなりまさしく春秋冬夏の義となすへきは古事記にいはゆる春山の霞壯夫といひ夏高津日神速秋津日子神天之冬衣神とみえたるもあれと日本書紀には春は則しきまきしまたその畔をはなつといひ秋は則天のふち駒をみたの中にふすとみえたりしきまきといひみ田の中にふすといふ是みな田家農事にかゝれる義なれはまさしく四時の春秋なる事明らけし春秋といへは冬夏の事はこもれるなり

四季

壒嚢抄藻鹽草白虎通○按に季月を擧て四時の總名とせるは白虎通五行の條に物土にあらされは不レ生木火金水皆以レ土生する也故に四季土用あり土王二四季一居二中央一不レ名レ時といひて一年の土王季月に在て木火金水ともに土によつて生するゆゑに四季といひて四時の通名となりしとそおほゆ

四選

春秋繁露○按に四時は天之四選也といへれは四時の義明らけし又四選の中各有二孟中季一といふは春三月を孟春中春季春といへは夏秋冬ともに孟中季を以て次第をなせり

玉燭

爾雅○按に四時の和謂二之玉燭一と（同上）いへり是四時の和德をいへるなり

通正

同上王氏彙苑○按に是亦四時の和德をいへるなり上にいふ玉燭も通正もともに春夏秋冬の時をたかへすして五穀みのり草木しけり萬物を變化せしめ吹風は條をならさす雨つちくれを動さす五風十雨の類是を四時の和といふ是みな太平の祥風なり皆四時の別號なり晉郭璞か注にも四時の別號なりとみえたり

景風

同上○荊昺か疏に此また四時の別號者とみえたり

成二其道一故五行更王亦須レ土也王二四季一居二中央一不レ名レ時
祿令云凡祿春夏二季二月上旬給云々秋冬二季八月上旬給云々凡嬪以上並依二品位一給二封祿一其春夏給二季祿一云々
職員令云式部省云々祿賜義解云謂位祿季祿及臨時給賜也
公式令云位祿季祿等云々
賦役令云凡春季附者課役並徵夏季附者免課徵レ役秋季以後附者課役倶免義解擧レ春爲レ言餘季准レ此
山堂考索云唐俸祿職田變而爲レ地又未レ幾而罷罷而又置二織田一公廨本錢有レ俸有レ料有レ賜或年給季給月給日給春秋給云々
證類本草引二宋掌禹錫圖經一云香麻生二福州一四季常有二苗葉一而無レ花不レ拘二時月一採レ之

四選

春秋繁露云四時天之四選也春者少陽之選夏者太陽之選秋者少陰之選冬者太陰之選四選之中各有二孟中季一故一歲之中有二四時一一時之中有二三長一天之節也
弘賢曰玉燭　通正　景風　醴泉　此四名こゝに引へきなれとも前條四時の處に出せは略せるなり

○詩歌

淵鑑類函四時總載五　詩云　晉顧愷之
春水滿二四澤一夏雲多二奇峰一秋月揚二明輝一冬嶺秀二孤松一

詠山　作者不詳
春者毛要夏者綠丹紅之綵色爾所見秋山可聞（ハルハモエナツハミドリニクレナキノニシキノイロニミユルアキノヤマカモ）

○釋名

四時

古事記日本書紀萬葉集延喜式周易尙書春秋爾雅○按に四時はよつの時にして則四季なり四季是を春夏秋冬といふ和訓はるなつあきふゆと訓す藻鹽草にはよつのとき四季なりといひこゝは四時とかける四季也と云々東雅には四時の名太古の時にみえし事は舊事古事日本紀等に陰陽の二神大倭豐秋津洲を生み給ふ又の名は大御虛空豐秋津根別といふとみえしこれ秋といふ名の始て見えし所かされとこれは後世に名つけられし所也ともいへは太古の事の徵とすへきにもあらすといひ正しく春秋の秋

四日九百四十分日之三百七十五十有九歲七閏則氣朔分齊是爲二一章一也

又類四云、四時左傳昭公君子有二四時一朝以聽レ政晝以訪問夕以修令夜以安レ身大象ニ賦春夏秋冬一

又四之三云、四始漢雋天文志正月旦王者歲首立春四時之始

通雅陰陽論云火土終ニ始化氣一而相生次序也是河圖之寅申丑未開幾也坤土補ニ夏季一而四時環生云々

又同上云、今曆書三白圖法一六八爲レ白二黑三綠四碧五黃七赤九紫亦以ニ四時一周一論

又月令云、伶倫制ニ十二律一以節ニ四時之度一堯命ニ羲和一敬授ニ人時一分ニ四仲一以定ニ中星一驗ニ之于人一占ニ之于鳥獸一應ニ之于事一云々

又同上云、四時周爲ニ一季一也歲以紀ニ天步一故始ニ于仲冬ニ季以序ニ人事一故始ニ于孟春一云々

西域記云、如來聖敎歲爲ニ三時一或爲ニ四時一四時春夏秋冬也云々

四季

四時を四季ともいふは曆法に土旺を尊ふ故なり五行の木火金水共に土に非されは生せすといふと白虎通にみえたりされは令にも春夏の二季と云季祿と云春季夏季秋季と云名目あり西土にて唐の時年給季給月給日給春秋給といふことみえたり山堂考索この季給すなはち四時に給はるをいへは皇朝にも唐制によらせ給ひしなるへしそれよりして趙宋の掌禹錫か圖經本草に香麻四季常有ニ苗葉一といひ近世の書なれとも竹譜詳銘には四季竹又名ニ四時竹一なと其餘本草に四季を以名つけし物數多あり

壒囊抄云四季異名何四季共ニ各三月ノ中ニ別シテ主月アレ共スヘテ一季ノ下ニ書ク准レ上可レ知レ之

又云正月は是寅月也四方ニ各有ニ三支一則四季ノ孟中季トス

藻鹽草云四の時四季なり云々

和漢三才圖會時候部云按所謂辰戌丑未者三六九臘月四季也凡從ニ其月節一至ニ十三日一爲ニ土用一十八日終翌日爲ニ四時立始日一有ニ間日一　春巳午酉　夏卯辰申　秋未酉亥　冬寅卯巳

白虎通德論五行云何土王ニ四季一各十八日合九十日爲ニ一時一王九十日土所ニ以王ニ四季一何木非レ土不レ生火非レ土不レ榮金非レ土不レ成水非レ土不レ高土扶レ微助レ衰歷

釋名曰四時四方各一時時期也不レ失レ期也物之生死各應二節期一而止也

史記天官書云、立春日四時之卒始也索隱曰謂立春日是去年四時之終卒今年之始也

漢書云、魏相奏曰明王謹二于尊大一愼二于養一レ人故立二羲和之官一以乘二四時節一授二民事一高帝時謁者趙堯擧レ春李舜擧レ夏兒湯擧レ秋貢禹擧レ冬四人各職二一時一

又云、立春四時之始又曰曆者序二四時之端一正二分至之節一故聖人考二曆數一以正二三元一此聖人知命之術歲之元時之元月之元

司馬遷傳云、夫春生夏長秋收冬藏此天地之大經也弗レ順則無三以爲二天下紀綱一故曰四時之大順不レ可レ失也

漢曆志云、四時寒暑無レ形而運二于下一云々

黃帝素問云、四時陰陽者萬物之根本所下以聖人春夏養レ陽秋冬養レ陰以從中其根上

廣州先賢傳云、和帝時鬱林養奮對策曰天有二陰陽一陰陽有二四時一四時有二政令一春夏則子惠布施寬仁秋冬則剛猛盛威行二刑賞一罰殺生各應二其時一則陰陽和二四時一調二五穀升一

文選阮嗣宗詠懷詩云、四時更代謝日月遞差馳云々

歲華紀麗云、六律調レ元太簇克二宣於和煦一四時成レ歲靑陽潛二運於發生一

玉燭寶典云、蔡雍孟春章句曰孟長也庶長稱蓋言二天於四時一無レ所二常適一先至者長之月終則已故以二庶長之稱一爲レ名春蠢動也時別名也

又序云、束晳云案月令四時之月皆夏數也云々又四時皆夏數者孔子曰行二夏之時一以二夏數一云々

周書云、萬物春生夏長秋收冬藏天地之正四時之行不易之道也　又云凡四時成レ歲者春夏秋冬有二孟仲季一以名二十二月一也

事物紀原云、黃帝定二星曆一正二閏餘一以釐二歲事一至レ堯定二四時一成レ歲書曰朞三百六旬有六日以二閏月一定二四時一成レ歲

五雜俎云、月望而蚌(ハマクリ)蛤盈晦而魚腦減此物之知二晦朔一者也社日玄鳥來春雁北鄉是物之知二四時一者也藕桐應レ閏而置レ葉黃楊遇レ閏而入レ土此物之知二閏餘一者也

儒函數類云、一章書堯典以二閏月一定二四時一成レ歲註一歲閏率則十日九百四十分日之八百二十七三歲一閏則三十二日九百四十分日之六百單一五歲再閏則五十

爲二太平祥風一四時和爲二通正一（同上曰通平暢也）謂二之景風一（同上曰所三以致二景風一）甘雨時降萬物以嘉（同上曰莫レ不レ善レ之）謂二之醴泉一（同上所三以致二醴泉一）
管子曰陰陽者天地之大理也四時者陰陽之大經也刑德者四時之合也刑德合二於時一則生レ福詭則生レ禍云々又曰春夏生長秋冬收藏四時之節也
列子（湯問篇）云、大禹曰六合之間四海之內照レ之以二日月一經レ之以二星辰一紀レ之以二四時一要レ之以二大歲一
荀子（天論）云、日月遞照四時代御繁二啓蕃長於春夏一畜二積收藏於秋冬一是禹桀之所レ同也云々
楚辭云、皇天平二分四時一兮云々
尸子云、神農氏治二天下一立二四時之序一云々
淮南子（天文訓）云、陰陽之專精爲二四時一又三月而爲二一時一云々
又云四時者天之吏也云々
說文云、時四時也云々
六韜云、天生二四時一地生二萬物一春道生二萬物一榮夏道長二萬物一成秋道歛二萬物一盈冬道藏二萬物一靜盈則藏靜復起云々
蔡邕月令章句云、立二天之道一曰二陰與レ陽各有二少太一是生二四時一少陽爲レ春太陽爲レ夏少陰爲レ秋太陰爲レ冬也
越絕書云、范子曰天生二萬物一之時聖人命レ之曰レ春春不二生遂一者故天不レ重爲レ春春者夏之父也故春生レ之夏長レ之秋成而殺レ之冬受而藏レ之春肅而不レ生者王德不レ究也夏寒而不レ長者臣下不レ奉二主命一也秋順而復榮者百官刑不レ斷也冬溫而泄者發二庫賞一無レ功也此所謂四時者邦之禁也
又云、天下之君發レ號施レ令必順二于四時一四時不レ正則陰陽不レ調寒暑失レ常如レ此則歲惡五穀不レ登聖主發レ令必審二于四時一此至禁也
白虎通德論（四時）云、所二以名爲一レ歲何歲者遂也三百六十六日一周天萬物畢死故爲二一歲一也尙書曰朞三百有六旬有六日以二閏月一定二四時一成レ歲春夏秋冬時者期也陰陽消息之期也四時之天異レ名何天尊各據二其盛者一爲レ名也春秋物變盛冬夏氣變盛春曰二蒼天一夏曰二昊天一秋曰二旻天一冬爲二上天一爾雅曰一說春爲二蒼天等一是也四時不レ隨正朔變何以爲二四時一據レ物爲レ名春當レ生冬當レ終皆以レ正爲レ時也
又（五行）云、行有レ五時有レ四何四時爲レ時五行爲レ節故木王卽謂二之春一金王卽謂二之秋一土尊不レ治レ職君不レ居レ部故時有レ四也

幸二于吉野宮一之時柿本朝臣人麿作歌
安見知之吾大王云々秋立者黃葉頭刺理云々
近江國大津宮御宇天皇代
天皇詔二內大臣藤原朝臣一競二憐春山萬花之艶秋
山千葉之彩一時額田王以レ歌判之歌
冬木成春去來者不喧有之鳥毛來鳴奴不開有之花毛佐
家禮杼山乎茂入而毛不取草深執手母不見秋山乃木葉
乎見而者黃葉乎婆取而曾思奴布靑乎者置而曾歎久曾
許之恨之秋山吾者
又卷第三
長皇子遊二獵路池一之時柿本朝臣人麿作歌
八隅知之吾大王路高云々伊波比囘禮四時自物云々
延喜式神祇云四時祭
拾芥抄歲時部云、春爲二靑陽一蒼天夏爲二朱明一昊天秋爲二白
藏一旻天冬爲二玄英一上天
藻鹽草云四の時四季なりと、四時とかける四季也と云々
東雅云春ハル夏ナツ秋アキ冬フユ幷に義不詳四時の
名太古の時に見えし事は舊事古事日本紀等に陰陽の
二神大倭豐秋津洲を生み給ふ又の名は大御虛空豐秋
津根別といふとみえしこれ秋といふ名の始て見えし
所かされとこれは後世に名つけられし所也ともいへ
は私記之說太古の事の徵とすへきにもあらす云々
續節序記云春は四時の始にして小陽也一年の始なれ
は賀する事四時の中に勝れり云々
周易上象傳云、天地以レ順動故日月不レ過四時不レ忒云々
又同上云、勸二天之神道一而四時不レ忒云々
又下象傳云、日月得レ天而能久照四時變化而能久成聖人
久二於其道一而天下化成云々
又同上云、天地節而四時成節以二制度一不レ傷レ財不レ害
レ民云々
又文言云、夫大人者與二天地一合二其德一與二日月一合二其
明一與二四時一合二其序一云々
又繫辭云變通莫レ大二乎四時一
尙書堯典云、朞三百有六旬有六日以二閏月一定二四時一成
レ歲云々
禮記孔子閒居云、天有二四時一春秋冬夏云々
又鄕飮酒義云四面之坐象二四時一也云々
論語陽貨篇云、子曰天何言哉四時行焉百物生焉天何言哉
爾雅釋天云、四時和謂二之玉燭一郭璞注曰道光照春爲二發生一夏
爲二長贏一秋爲二收成一冬爲二安寧一同上曰此亦四時之別號尸子皆以

し人民死亡あまたに至るもみな此大變にあへはなり小なるは水損火災是等は時義によれとも人命にはかからさるへしみな人欲より求て難に落入るとゑるへし大雨大風も日を渡てやまされは是も難をなすなりみな是等は天地陰陽の不和にして四時の大和運動の順をえさる也故に聖人古昔に出て此變を救はんか爲に以二閏月一定二四時一といへり閏は歳の餘なり三年に一閏王氣小備五年再閏天氣大備といへり閏は餘分の月なり月の餘り日に付て積分して月をなすなり此閏月ありて四時の和行れ民事成鳥獸孳尾し草木枯榮す故に四時の大順不レ可レ失也といへりまことに四時の和德至大なる哉夫四時の和行はれされは上天子より下庶人に至るまで何以てか天地間に呼吸せんやいかんとなれは五穀不レ實菜蔬の類總て生せされは則不レ能レ潤二於人之咽喉一故に四時陰陽は萬物の根本なりまた四時其時を得て春は花さき秋は紅葉し鳥は林間にさえつり蟲は叢中に吟するもみな四時の和德なり衆人の耳目をなくさめ人意をよろこはすと皆四時の和德ならすといふ事なし嗚呼四時の和德なるや四時の和德嗚呼至大なる哉四時の和人意人功を以て變動變化すへからさるなり天地陰陽の運動四時の和德なり

古事記云、於是有二二神一號二秋山之下氷壯夫弟名春山之霞壯夫一云々

又云、略上次生二夏高津日神亦名夏之賣神一次秋毘賣神次久々年神一云々

又云、同上次生二水戸神名速秋津日子神次妹速秋津比賣神一云々

又云、同上此神娶二布怒豆怒神之女布帝耳神一生子天之冬衣神云々

日本書紀神代巻云、是後素盞嗚尊之爲行也甚無狀何則天照大神以二天狹田長田一爲二御田一時素盞嗚尊春則重播種子重播種子此云二璽枳磨枳一且毀二其畔一毀此云二波那豆一云々、又一書曰日神尊以二天垣田一爲二御田一時素盞嗚尊春則塡レ渠毀レ畔云々

又云、是後素盞嗚尊之爲行也甚無狀云々 秋則於天班駒使レ伏二田中一云々

萬葉集巻第一 雜歌

藤原宮御宇天皇代

天皇御製歌

春過而夏來良之白妙能衣乾有天之香來山

秋の初を初秋といふ七月なり次を仲秋といふ八月なり次を季秋といふ九月なり同上冬の孟めを孟冬といふ十月なり次を仲冬といふ十一月なり次を季冬といふ十二月なり同上皆孟仲季をもて次第し各三月にして一季なる則一時終るなり十二月にして四季盡ぬ則四時終るなり此四時一周して成レ歳といへり

四時順不順論

蓋聞四時之大順不レ可レ失也とむへたる哉尙書五子之歌には民惟邦本々固邦寧と見えたれとも四時不順なれは五穀不レ實民困す故に邦寧を得す孟子にいはゆる不レ違二農時一穀不レ可二勝食一也と農時謂春耕夏耘秋收之時不レ違二此時一至レ冬乃役レ之也と朱子乃注にもみえたり然れはかくのことく民役この時にたかはすといへとも四時不順なれは何を以か民寧を得んや故に四時は萬物の根本也故に四時の順與二不順一者國の安危なり予不辨の辨を以て不用の辨をなすに似たりといへとも四時の順不順の一端を論せん先順は和道にして萬物皆變化而無レ不レ嘉不順は逆道にして萬物みな不レ育故に中庸にいはゆる致二中和一天地位焉萬物育焉と見たるも皆順道をいへる也逆道は天に有ては成二天變一地にありては成二地變一人にありては成二人變一天道は日月蝕大風旱霖をなし地道は大地震洪水凶年をなし人道は大火災國亂をなす是下より上ををかすより起る所にして不順の道也此順不順の道は小事に似て大事をなす也故に禮記月令の四季行令に詳しくみえたり故にこゝにいふに及はすされともいさゝか鄙言を以て述んには先四時の中春は溫に夏は熱秋は冷に冬は寒是を時候時にかなふといふなりさかるを時候時をたかへ春寒く夏冷氣にして秋熱し冬暖なる是を不順といふ四時不順なれは五穀不レ熟蔬菜すへて不二繁生一是四時の和行はれさるなりかゝる年は民事不レ調國民飢或は民間有二疾疫一或は不名の瘡を生し或は不名の疾病世上に行はるゝ是みな四時不順のなす所にして天下の人民艱難至極に及ふ是を時の變といふ此變は或は不時に雪霜降りて青草を枯し或は雨雹くたり或は旱魃月を渡り或は霖雨數月に及ふ也又變に大小あり山陵崩れ山上より石砂をくたし近里の人民死亡に及ふ或山燒る是ちかき世にていへはあさま山の類ひ是なり或は洪水高浪の類ひ或は地震なと大あり小あり大なるはみな大地裂家屋を倒

レ歳と堯典いひ一歳之中有二四時一一時之中有二三長一天之節也と春秋繁露いひ禮記には天有二四時一春秋冬夏と孔子間居いへるなともつとも證とすへしまた春夏秋冬の中春は物のはしめなり春者天地開辟之端と公羊傳いへるをもて考へあはすれは春は四時の始にして四時は春を始とす凡四時を四季四選といふはまつ四時者陰陽の大經也と管子いひ天何言哉四時行焉百物生焉と論語いひ四時和爲二玉燭一と爾雅いひ皇天平二分四時一兮と楚辭いひ日月照四時代御と荀子天論いひ紀レ之以二四時一要レ之以二大歳一と列子陽問篇いひ神農治二天下一立二四時之節一と尸子いひ夫四時陰陽者萬物之根本也と黄帝素問いひ四時者天之吏也と淮南子いひ天生二四時一地生二萬物一と六韜いひ四時者邦之禁也と越絶書いひ四時天異レ名何天尊各據二其盛一者爲レ名也春秋物變盛冬夏氣變盛と白虎通いひ四時四方各一時時期也不レ失レ期也と釋名いひ立春日四時之卒始也と史記天官書いひ又謂立春日是去年四時之終卒今年之始也と索隱いひ以乘二四時節一授二民事一と漢書いひ四時之大順不レ失也と司馬遷傳いふをもてみれは勸レ業者時を失はすし春はたかへし夏はくさきり秋はかりとり冬はをさむる是以レ人爲レ功といへとも誠に四時の德なるかなまた四時を四季といふ稱あり下に出す また四選ともいふ下に見えたり 抑四時は春夏秋冬なり四時の始を春といひ二を夏といひ三を秋といひ四を冬といふ春は天地開辟之端なり春は生し夏は長し秋は收り冬は藏す此天地之大經也春道生二萬物一榮夏道長二萬物一成秋道斂二萬物一盈冬道藏二萬物一靜夫春之爲レ言蠢也萬物蠢然而生也夏假也寛二假萬物一使二生長一也秋緧也緧二迫萬物一使二時成一也冬終也物終成也まことに四時の德大なる哉至れる哉夫生レ物者春なり吐レ華者は夏なり布レ葉者は秋なり收成者は冬なり春夏秋冬之序皆以二斗柄所レ指定レ之五雜俎斗柄指レ東曰レ春指レ南曰レ夏指レ西曰レ秋指レ北曰レ冬鶡冠子春夏秋冬各三月而爲二一時一一時各三月あり三月各孟仲季あり春夏秋冬合せて一年をなせり一年の月數十二月あり十二月の日數三百六十餘日あり三月の日數九十日餘あり是九十餘日は三月にして三月は則一季一時にして春三月あり夏三月あり秋三月あり冬三月あり偖春三月の始を初春と和名類聚鈔いふ正月なり次を仲春といふ二月なり次を暮春といふ三月なり同上夏の首めを首夏といふ四月なり次を仲夏といふ五月なり次を季夏といふ六月なり同上

古今要覽稿卷第四十三

●時令部

●四時

夫よつのときは四時なり四時之爲レ言四季なり四季は四選なり四選は春夏秋冬なり春夏秋冬是をよつのときといふこのよつのときの名目のかけまくもかしこき皇ら御國にて物にみえ初しは神代にはしまれりいかにとなれは古事記日本書紀等に春夏秋冬の文字既に出たれはこれらをや證とはすへきこゝに有二二神一弟名春山之霞壯夫と古事記いひ又夏高津日神秋毘賣神冬衣神同上の御名みえたれはいとふるき事なりされは春夏秋冬の名をもて既に其頃神々の御名に冠らしめ給ふなりこゝをもてみれははるかにその以前より春夏秋冬時をたかへすして四時の和行なはれ春立夏過秋至冬往し事しられたりまた素盞鳴尊春則重播種子と日本書紀いひ又日神尊以二天垣田一爲二御田一時素盞鳴尊春則塡レ渠毀レ畔と同上いひまた秋則於天班駒使レ伏二田中一と同上見えたるそ春といひ秋といふ事の始にてたしかなる證とすへしこの以前既に伊弉諾尊伊弉冊尊の豐秋津洲を生み給ふことみえたれとも秋津洲の秋は春秋の秋とたしかにはいひかたし春則みそをうめ秋則あまのふちこまを御田の中にふすとみえたるそ共に豐作の事にかゝれは四時の春秋なる事義明らけしまた春過而夏來良之と萬葉集いひ秋立者黃葉頭刺理と同上いひ冬木成春去來者と同上いふも共に四時の移りかはれるさまを詠せしなりまた伊波比回禮四時自物と同上いふは志ゝといふけたものゝ名に四時の文字を假用ひまた春夏秋冬の祭を四時祭と延喜式いひまた四時を春夏秋冬と和名類聚鈔いひまた春爲二青陽一夏爲二朱明一秋爲二白藏一冬爲二玄英一と拾芥抄いふも則四時の事也又四時を四季といひしこともあり四季異名何と壒嚢鈔いふその下に各四時の異名を擧たりまたよつのとき四季なりと藻鹽草いひ春は四時の始にして小陽なり一年の始なれは賀する事四時の中に勝れたりと續節序記いへり又西土にては四時といふ事のふるく物にみえしは周易をや始とすへき曰日月不レ過而四時不レ忒と周易みえ朞三百有六旬有六日以二閏月一定二四時一成

あまる七日のあらはあれかし

古今六帖

うるふ月　つらゆき

時鳥のちのさ月もありとてや
なかてうつきを過しはてつる

此歌三十六人集兼輔集に入　いせ

神無月ふたつある年の時雨には
ひともと菊そ色こかりける

この月の冬のあまりにあらされは
鶯ははやなきそゑなまし

新撰六帖

うるふ月　衣笠内大臣家良公

かきりある三冬しそへは年の内に
ほすゑは咲ぬ軒の梅かえ　前藤原大納言爲家

七夕の行あひの月もかさならは
二度わたせかさゝきのはし　九條三位入道知家

あまりある秋はさはかり長月に
うら枯殘るをのゝあさちふ　左京大夫行家

十月あまりまた二月の外になほ
數くはゝれる年もめつらし　右大辨入道俊光

一とせにきはまる月のかさなりて
春待かほに誰おもふらん

ひとりや苔のうへにちらまし

又巻第十二戀歌四

閏七月七日民部卿成範につかはしける

小侍従

天津星そらにはいかゝ定むらん

思ひたゆへきけふの暮かは

續千載和歌集巻第四秋歌上

閏月七夕といふ事を　前中納言定房

契ありておなし文月の數そはゝ

今夜もわたせ天のかはふね

伊勢集

五月ふたつあるとし思ふ事ありて

さみたれのつゝけるとしの詠には

物思ひそめる我そ悲しき

兼輔集

神な月ふたつあるとし御前のきくの賀に（此歌古今六帖いせとて入たり）

神な月ふたつある年の時雨には

ひともと菊そ色こかりける

清正集

うちのもみちあはせ九月ふたつあるとし

紅のやしほの色は紅葉の

あきくはゝれるとしにそありける

うるふ九月うちにて別をしむころ

秋の日の日數あまれる年なれと

けふの暮るは惜くそ有ける

元輔集

五月ふたつあるとしかうしに人にかはりて

五月雨のかすくはゝれる年たにも

やま郭公こゑにあかはや

また

五月雨のあまりもまたし郭公

たゝ一こゑに明もこそすれ

赤染右衛門集

六月二有としの後の六月七日たゝの源賢法眼の

いひたりし

常ならはけふいそかましたなはたの

天の羽衣うるふへきかな

返し

織女のまつに月日の添ふよりは

あまり長ひく五月なる覽
詞花和歌集卷第二夏
閏六月七日よめる　太皇大后宮大貳
常よりも歎きやすらん七夕の
あはまし暮をよそになかめて
千載和歌集卷第二春歌下
閏三月盡によみ侍ける　權大僧都範玄
花の春かさなるかひそなかりける
散ぬ日數の添はこそあらめ
新古今和歌集卷第五秋歌下
閏九月盡のこゝろを　前太政大臣
なへてよのをしさにそへて惜むかな
秋より後の秋の限りを
新勅撰和歌集卷第七賀歌
天喜四年閏三月中殿に翫新成櫻花歌　堀河右大臣
けふそみる玉のうてなの櫻はな
のとけき春にあまる匂ひを
權大納言信家
常よりも春ものとけき君か代に

散ぬためしの花をみるかな
又卷第九神祇歌
閏三月侍ける年齋院にまゐりて長官めし出て女房の中につかはしける
京極前關白太政大臣
春はなほのこれるものを櫻花
しめのうちには散はてにけり
續後撰和歌集卷第七秋歌下
閏九月菊といへる心を　從二位顯氏
大かたの秋よりもなほ長月の
あまる日かずに匂ふしらきく
續拾遺和歌集卷三夏歌
閏五月朔日ころに讀侍ける　權大納言公實
またさらに初音とぞ思ふ郭公
おなし七月もつきしかはれは
玉葉和歌集卷第二春歌上
長治二年閏二月中宮花合のついてに申侍ける
中御門右大臣
九重にうつさゝりせはやま櫻

百王之理是倚庶績之廣焉依不赫哉我后之正レ時定レ暦
堯典而同レ歸

○和歌

古今和歌集卷第一春歌上
やよひにうるふ月の有ける年よめる
伊　勢
櫻花はるくはゝれる年たにも
人のこゝろにあかれやはせぬ

彌生にうるふ月のある年つかさめしのころ申文
にそへて左大臣家につかはしける
貫　之
あまりさへ有てゆくへき年たにも
春に必すあふよしもかな

又卷第四夏四
五月ふたつ侍けるに思ふ事侍て
よみ人しらす
五月雨のつゝける年の詠には
もの思ひあへる我そこひしき

みな月ふたつありけるとし
よみ人しらす
七夕は天の河原をなゝかへり
後のみそかをみそきにはせよ

拾遺和歌集卷第一春
閏三月侍けるつこもりに　みつね
常よりも長閑かりつる春なれと
けふの暮るはあかすそ有ける

又卷第十六雜春
三月うるふ有けるとしやへ山ふきをよみ侍ける
菅原輔昭
春風はのとけかるへしやへよりも
かさねて匂へ山吹のはな

金葉和歌集卷第三秋歌
閏九月あるとし八月十五夜によめる
春宮大夫公實
秋は猶のこりおほかる年なれと
今夜の月の名こそをしけれ

又卷第七戀歌
潤五月侍けるとし人をかたらひけるに後の五月
過てなと申けれはよめる　橘季通
なそもかくこひちに立てあやめ草

積數歸成レ閏義和職舊司分銖標二斗建一盈縮正二人時一節候潛相應星辰自合レ期寸陰寧越度長曆信無レ欺定向二銅壺一辨還從二玉律一推高明終不レ謬委鑑本無レ私

閏年　李商隱

八桂林邊九芝草短襟小鬟相逢道入レ門暗數一千春願去二閏年一留二月小一

唐明皇首夏花蕚樓觀二群臣宴寧王山亭回樓下一又申レ之以二賞樂賦詩一幷序

前月之晦細雨飅風繁絃中止列席半醉佳辰易レ失絕興難レ追良可レ惋也今年滯レ閏節候全晚暑氣猶精芳草未レ歇申布二雅意一復叙二初筵一披二樂善之邸一坐二忘憂之觀一東郊跬步南山在レ目足下以締二夏首之新賞一補中春餘之墜歡上今年通二閏月一入レ夏展二春輝一樓下風光晚城隅燕賞レ歸九歌揚二政要一六舞散二朝衣一天喜時相合人和事不レ違禮中推レ意厚樂處感レ心微別賞陽臺樂前旬暮雨飛

早秋書事詩　白居易

夏閏秋候早七月風騷々渭川烟景晚驪山宮殿高

閏春詩　方干

羃々復蒼々微和傍二早陽一前春寒已盡待レ閏日猶長柳變雖レ因レ雨花遲豈爲レ霜自玆延二聖曆一誰不レ駐二年光一

賦

閏賦　張季友

閏之所レ起自レ曆而推得二餘日於終歲一爰稽レ候以正レ時其始也日之行而疾月之行而遲躔次周流運將レ窮矣毫釐舛度是遠而不レ歸レ餘何以定二一歲之曆一不二小正一何以序二四時之紀一於レ是太史授レ事義和敬レ理以レ日繫レ月積二三年一而成原レ始要レ終豈周月而已天時由レ之而式叙國令於レ焉而合レ軌春生長不レ失二其常一東作西成孰知二所以一雪應レ冬而絮落雲識レ夏而峯起秋之夕湛露爲レ霜春之朝堅冰爲レ氷豈不レ以二律之克中一閏之匪レ虛以風以雨兮各得二其序一曰寒曰燠兮無レ悖二於初一國家握二乾符一正二律書一契二洛下之言一算二定乎一日之設一考二容成之律一閏生二乎卒歲之餘一故得氣正二於今一律移二於昔一履二端於始一節乃差而匪レ差歸二餘於終一日雖レ積而不レ積昊天之曆象咸若重黎之職司有レ辟候二月盈缺一豈資二蓂莢一而知推二日短長一不下假二土圭一而測上且夫夏有レ伏冬有レ伏冬有レ臘匪レ閏則其氣不レ成故有二慢レ時廢レ朔則曰二不常無藝一闔レ扉聽レ政則曰二假時來歲一歷二前古之所レ重綿二後王之取レ制矧可二昭翼々扇巍々一

應レ笑黄楊厄レ閏時後三仍復負二芳期一老無二劉凡簪花分一閑有二陶潛止レ酒詩一穀雨林中先二紫筍一欝岡山口足二黄鸝一韓湘自倩二奴星一去袖二得瑤臺第一枝一

元宵驚蟄　　李　夢　陽

春色閏冬後元宵驚蟄邊輭塵欺二月散一繁火奪二星懸一

閏正月十一日呂殿丞寄新茶詩　　曾　鞏

偏得二朝陽借レ力催一千金一銙過レ溪來曾坑貢後春猶早海上先嘗第一桮

閏二月二十日遊二西湖一詩　　陸　游

西湖二月遊人稠鮮車快馬巷無レ留梨園樂工敎坊優絲竹悲激雜二清謳一追逐下上暮始休外雖二狂醒一樂則不豈如二吾曹淡相求一酒肴取レ具非二預謀一青梅苦筍助二獻酬一意象簡撲足二鎭浮一尙慚一官自拘囚未レ免匹馬從二兩騶一南山老翁亦出遊百錢自掛二竹杖頭一

閏三月詩　　劉　威

三年昔一閏此閏勝二常時一莫レ怪花開晩都緣二春盡遲一節分炎氣近律應惠風移夢得レ成二蝴蝶一芳菲幸不レ遺

送三友人遊二東川一詩　　喩　垣　之

食盡須二分散一將レ行幾願レ留春兼二三月閏一人擬二半年遊一風俗同二吳地一山川擁二梓州一思レ君登二棧道一猨嘯始應レ愁

閏六月立秋後暮熱追二涼郡圃一詩　　楊　萬　里

夏欲レ盡頭秋欲レ初小涼未レ苦爽二肌膚一夕陽幸自二西山外一一抹斜紅不二肯無一

丙戌閏七月九日登二姑蘇臺一避レ暑詩　　范　成　大

始賀火流レ西還嗟斗斜レ閏餘暑猶强顏新涼頗難レ進燥剛渴欲レ圻焦卷禿如レ爐炎官扶二日轂一輝赫不レ停レ運登臨有二高臺一勇往得二三俊一仍將二王郞子一飛步凌二切仭一風從二噫氣一來雲作二壞山陣一鄕如二垂頭魚一忽已蟄蟲振空明晚逾淸更要二孤月印一書生乃易レ與俛仰更喜慍憑レ欄天爲高擧レ酒山欲レ近奇書鐵鉤鎖麗句錦窠暈茲遊我輩獨難レ挽二輭紅靭一君看籠中鳥寧識二咸池韻一

閏月定二四時一詩

月閏歲寒暑疇人定二職司一餘レ分將レ老レ日積レ算自成レ時律候行移レ表陰陽運不レ期氣薰灰琯驗數扐卦詞推六律文明序三年理暗移當レ知歲功立惟是奉無レ私

閏月定二四時一詩　　徐　至

河南府試二十二月樂詞幷閏月一

閏月　　李長吉

帝重レ光年重時七十二候迴環推天宮街琯灰剩飛今歲何長來歲遲王母移レ桃獻二天子一羲氏和氏遷二龍轡一

擬二李長吉樂辭一閏月　　吳文可

若華煌々縈二日馭一氣朔盈虛積二餘數一低（本ノマヽ）レ鬟歛レ黛拜二孀娥一孤負團圓十三度生物超レ功得歲山中獨厄黃楊樹

月令輯要

景龍二年閏九月九日幸二總持一登二浮圖一李嶠等獻

李嶠

閏月開二重九一眞遊下二大千一花寒仍薦レ菊座晚更披レ蓮刹鳳回二雕輦一幡虹間二彩旃一還將二西梵曲一助入二南薰絃一

李又

清蹕幸二禪樓一前驅歷二御溝一還疑二九日豫一更想二六年遊一聖藻輝二纓絡一仙花綴二冕旒一所レ欣延二億載一寧止慶二重秋一

劉憲

重陽登二閏序一上界叶レ時巡駐レ輦天花落開レ筵妓樂陳城端刹柱見雲表露盤新臨睨光輝滿飛文動二叡神一

奉レ和三聖製閏九月九日登二莊嚴總持二寺閣一

宋之問

閏月再重陽仙輿歷二寶坊一帝歌雲稍白御酒菊猶馨喧二行漏一天花拂二舞行一豫遊多二景福一梵宇日生レ光

閏九月九日獨飲詩　白居易

黃花叢畔綠樽前猶有二些々舊管絃一偶遇二閏秋重九日一東籬獨酌一陶然自三從九月持二齋戒一不レ醉二重陽一十五年

閏九月九日登二越王臺一詩　林光朝

閑陪二小隊一出二山椒一爲レ有三吳歌雜二楚謠一縱道菊花如二昨日一要レ看湯餠作二三朝一千重嶺海供二橫槊一一帶風烟聽二採樵一憑二伎折衝如レ此好一不レ應二東去更乘一レ軺

閏月七日織女詩　王灣

耿々曙河微神仙此會稀今年七月閏應レ得二兩回歸一

壬申閏秋題贈二烏鵲一詩　李商隱

繞レ樹無レ依月正高鄴城新淚濺二雲袍一幾年始得レ逢二秋閏一兩度塡レ河莫レ告レ勞

閏三月三日北山看花　張雨

時烟霞興味今宵斷鬢頂霜猶以遺

田氏家集

閏九月作

井上桐圭數片留秋中桂景四囘投淒風未レ殺林池色更惱潘生一月愁

後九日到二菊花一

種レ菊不レ同二凡草木一重陽再翫一年秋渾天星隕應レ敷レ地祭水琮沈欲レ奠レ流（皆庭池之郎事也）桓府追思烏帽落陶家景慕白衣投先朝後日猶九就口裏留レ心此脫レ頭

閏十二月作簡二同輩一

曆倍尋常歲晚遲却知三百六旬非春前少日除二寒氣一臘後冬多驗二暖輝一穗欠二簷氷一看二雪滴一牙撻二地角一覺二陰稀一若敎三今日無二名閏一應是黃鶯解レ舌時

節序詩集

辛未閏四月卽事五首　張子韶

閒居喜レ無レ事冠櫛每晨興今朝鳩喚レ夢疑是天雨徵萬事雖二顚沛一此兆常可レ憑須臾倒二江湖一一掃鬱瘴腥雨罷有二何好一環レ江數峰青蛟龍得レ時橫長堤谿然崩衰老甘二寢寐一半夜聞二雷聲一連岡萬株松漂零一一毛輕雨意疑レ未レ已浮々晚雲蒸咄哉造化兒徒勞竟何成

其二

窮居不レ擇レ交賢否那復辨似人輙己喜況復曾半面相見且寒溫不レ問風雨變晚來無二與遊一澄江喜如レ練攜レ筇信步行屈曲隨レ山轉數日雨不レ止衝波頹激箭舊雨己不レ來今雨誰復見甕頭香滿レ居吾計今己辨豈復思二故鄉一無事且疆飯

其三

種レ槿己五載入レ門幽徑深拒霜偶然植亦解成二清陰一晚涼新浴罷松風披二我襟一終日岸レ巾坐闃無二人見レ尋浩然媚二幽獨一發レ興付二瑤琴一

其四

寓居城中寺蕭然如二深山一終年客不レ到終日門亦關晨朝香火罷去レ履脫二危冠一飽讀二古人書一會意有二餘歡一客有レ饋二荔枝一薦以二碧玉盤一吟哦更咀嚼未レ羨朱兩轓綾綃作二紅皺一護二此氷肌寒一

其五

橫浦亦何好人煙眇二荒墟一所以常閉レ門九年惟讀書余幼好二奇服一玉佩而瓊琚念レ往復推レ來薰然樂有レ餘客有二不レ知者一笑二我長勤渠一日昏心則瑩道腴形自枯千載陶淵明簞瓢常晏如譬彼鷄群中有二此海鶴孤一

古今要覽稿卷第四十二

●時令部　閏月

●詩賦幷和歌

本朝文粹時節

詩序　後三月陪ニ都督大王華亭ー同賦ニ今年又有ーレ春各分ニ一字ー應敎　源　順

洛城以東有ニ一勝地ー都督大王之深宮也大王才華清英德字凝邃漢景帝之十有三子最弟謝ニ其忝レ名梁孝王之曲觀平臺誰人聞ニ其好レ學感レ今思レ古總蔑如也于時聖曆改元老春得レ潤案頭則添ニ三十行之曆日ー窓外亦望ニ千萬里之春風ー遂便歸レ谿歌鶯更逗ニ留於孤雲之路ー辭レ林舞蝶還翩ニ翻於一月之華ー爰命ニ座客ー賦ニ今年又有レ春詩ー誠有レ以哉既而西崦景落東平樂闌或停ニ蓬子ー兮清淡或撫ニ桐孫ー兮朗詠何唯天之喜氣煙霞暗加歲口芳辰居諸益展而已哉人皆分ニ一字ー裁ニ四韻ー獨慙探ニ珠字ー獻ニ瓦詞ー云爾

本朝無題詩

閏三月盡日慈恩寺卽事

三月今茲加ニ閏月ー芳辰云盡思相仍慈恩地靜堪ニ臨眺ー和暖天晴引ニ友朋ー宴集華城文墨客安禪松院薜蘿僧丹心初會傳ニ青竹ー此寺初會序垂ニ竹帛ー長存白氏古詞詠ニ紫藤ー白氏文集慈恩寺三月三十日詩云紫藤花下漸黃昏西羽隨レ春藏ニ細柳ー曉鷄告レ夏聽ニ蒼蠅ー手栽花樹餘香絕同序云手栽祇樹之花目閱ニ水泉ー一眼澄同序云不レ變ニ閱レ水之橋ー以爲ニ到レ岸之途ー學業聚螢難レ夢レ鳳逍遙低鷃慕ニ風鵬ー不ニ唯佳節ー催ニ遊放王澤惟昌詩ー也與

菅原在良

何因閏月與相幷終日遊優悵望程人恨三春仙洞盡僧誇一夏道塲迎禪園應レ惜落花色詩境難レ留歸鳥聲寄語慈恩香火席接初歡宴耻ニ風情ー

惟宗孝言

慈恩蘭若不レ期會ニ三月閏餘己盡辰白氏昔詞尋レ寺識紫藤晚艷與レ池巡莫レ嘲有レ限空添レ老不レ恨無成只送レ春爲レ受ニ池形ー雖ニ佇立ー松間幽寂晚鐘頻

按に池字の上受は愛の誤字也

大江佐國

三月已闌未レ得レ追慈恩寺下暫棲遲昔是江相公別業也境經異日笙歌曲思入樂天悵望詩空假自知花盡暮聲聞同惜鳥歸

續後撰和歌集〇名義同上

日數あまれる年

清正集〇按に一年は日數三百六十六日を以て一歲とす閏月ある年は三十日をます故にしかいへり

數くはゝる年

新撰六帖〇按に日數くはゝる年といふ義なり

閏餘

史記歷書漢書律歷志白虎通〇按に餘日積て閏月をなす故に名付

閏年

天中記引蘇軾詩本草綱目

閏歲

月令輯要引羽毛考異

蔀首

漢書律歷志〇按に同上曰魯歷不レ正以二閏餘一一レ之歲爲二蔀首一といへり

〇正誤

類聚名物考云閏字は周禮の注疏によれは門の中に王の立給へることなれともこなたにては潤の字の意によりてよめること多し中比の誤りなれはともいひ習はせしことなれはしはらくしたかひぬ閏は門の中壬字してみつのえといふ文字也

按にこなたにては潤の字の意によりてよめること多し中比の誤りなれはともいひ習はせしことなれはしはらくしたかひぬといふはよけれとも閏は門中に壬字してみつのえともいふ字なりとゝかれしはいかゝ且そのうへに周禮の注疏によれは門の中に王の立給へることなれともといはるゝによれは閏字を門中に王字とも壬字ともさためすしてとかれたるはうきたる說なり門中に壬字は俗字にて誤なり

漢書高帝紀注云文潁曰即閏九月也時律歷廢不レ知レ閏謂二之後九月一

按に師曰文說非也若以律歷廢不レ知レ閏者則當三徑謂二之十月一不レ應レ有二後九月一蓋秦之歷法應レ置レ閏者總致二之於歲一末觀二其此意一當レ取三左傳所レ謂歸二餘於終一耳といへるをもてみれは律歷廢閏をしらさるにはあらす漢は秦の歷によれは以二九月一爲二歲終一故に左傳の例によりて歲終に閏を置て後九月としるせる也文潁の說あやまれり

後三月花鳥有ニ餘香一
殘陽得レ閏廿ニ重聽一曆日添レ行許ニ齋攀一

躬恒

常よりも長閑かりつる春なれと
けふの暮るは飽すもある哉

月令輯要

元稹數萓詩　辨レ時長有レ素、數レ閏或餘レ靑、

蘇軾詩　園中草木春無數、只有ニ黃楊一厄ニ閏年一、

戎昱詩　山帶新晴雨、溪流閏月花、

○釋名

のちのつき

日本書紀古今六帖金葉和歌集史記漢書○按に正月に閏あれはのちのつきといふ西土にては閏を歲終に置て後月といふ

後月

同上○名義同上

うるふつき

古今和歌集後撰和歌集蜻蛉日記○按に日本書紀敏達天皇紀持統天皇紀この二紀にのみ閏字を潤に通し用ひたれは潤にうるふの訓あれは閏をうるふと訓せならひしもしるへからすしかれは持統天皇の頃より後延喜の頃より以前うるふと閏月をいひし事しられたり

閏月

日本書紀古今和歌集蜻蛉日記尙書堯典周禮春官左傳文公傳○按に閏月には詔王居レ門終レ月と(周禮)にみえたりこれによりて門中に王字あるを閏といふ也西土にても閏をうるふと訓義にとれる事ありいはゆる閏月者附月之餘日也積分而成ニ於月一者也と(穀梁傳)いひ閏は餘分の月と(說文)いへる類あまりうるふの義にとれる也日あまりあれは草木鳥獸繁育してあまりうるほふ義もてうるふとはいへり

潤月

日本書紀敏達天皇紀金葉和歌集○名義上におなし

うるひ

古今六帖○名義同上

あまり

後撰和歌集左傳文公傳○按に餘日積りて閏をなせり故にあまりといふ

あまる日數

又引ニ羽毛考異ニ云鳳尾十二翎遇ニ閏歲一生ニ十三翎一今樂府小調尾聲一十二枚以象ニ鳳尾一故曰ニ尾聲一或增ニ四字一亦加ニ一枚一以象レ閏

春秋哀公云十有二年冬十有二月螽註曰周十二月今十月是歲應レ置レ閏而失不レ置雖レ書ニ十二月一實今之九月司歷誤ニ一月一九月之初尙溫故得レ有レ螽

家語云季康子問ニ於孔子一曰今周十二月夏之十月而猶有レ螽何也孔子對曰丘聞レ之火伏而後蟄者畢今火猶西流司歷過也庚子曰所レ失者幾月孔子曰於レ夏十月火既沒矣今火見再失レ閏也

五雜俎云朞三百六旬有六日今一年止三百六十日耳而小盡居ニ十六一是每歲尙餘ニ十二日一也計五歲之中當レ餘ニ六十日一故三年一閏而五年再閏也然則不下以ニ三百六旬六日一爲上歲而必置レ閏何也日月之行晦朔弦望度數不レ能ニ盡合一也指ニ日月一以定ニ晦朔一觀ニ斗柄一以定ニ四時一而以ニ參差不レ合之數一歸ニ餘於閏一聖人之苦心至矣然亦非ニ聖人之私意爲レ之蓋天地之定數也望而蚌蛤盈晦而魚腦減此物之知ニ晦朔一者也社而玄鳥來春而鴈北鄕是物之知ニ四時一者也藕桐應レ閏而置レ葉黃楊遇レ閏而入レ土此物之知ニ閏餘一者也至ニ於晦朔之畸數閏月之餘分一聖人不レ能レ齊也而況巧曆乎惟積レ漸而差考レ差而改斯無レ弊之術也

○詩歌

和漢朗詠集

閏三月　陵侍郎

今年閏在ニ春三月一剩看ニ金陵一月花一　順

歸レ谿謌鶯更逗ニ留於孤雲之路一辭レ林舞蝶還翩ニ翻於一月之花一　滋藤

花悔レ歸レ根無レ益レ悔鳥期レ入レ谷

さくら花はるくはゝれる年たにも
人の心にあかれやはする　伊勢

新撰朗詠集

閏三月　今春又有レ春

案頭則添ニ三十行之曆日一窓前亦望ニ千萬里之春風一　順

風暖嵩煙重卷レ翠、月明洛水再沈レ珠、　同　齋名

周天實計三百六十五日零三時辰而一歲止有二三百六十日一更有二五日零一三時無レ所二歸着一是爲二日行之餘分一所謂氣盈也月行日十一度十九分度之七常以二二十九日中强一而與合二於朔一是每月又有二半日弱一無レ所二歸着一是爲二月行之餘分一所レ謂朔虛也積二日月之餘分一每歲常餘二十一日弱一故十九年而置二七閏一是爲二一章之數一故曰歸二餘於終一三閏而無レ氣七閏而無二餘分一正字通引二皇極經世一云一歲之間六陰六陽三年三十六日故三年一閏五年六十日故五年再閏天時地理人事三者知レ之不レ易註一歲中常數退二六日一爲レ陰進二六日一爲レ陽所二以置レ閏又陳氏曰古曆十九歲爲二一章一章有二七閏一三年閏九月六年閏六月九年閏三月十一年閏十一月十四年閏八月十七年閏四月十九年閏十二月若干後漸積二餘分一大率三十二月則置レ閏每月三十日餘以二日月會一爲二一月一則每月惟二十九日餘每月參差氣漸不レ正但觀二中氣所レ在以爲二此月之正一取二中氣一以爲二正月一閏前之月中氣在レ晦閏後之月中氣在レ朔無二中氣一則謂二之閏月一也閏法詳二黃瑞節說及章歲積日圖一此不レ載又博雅牧閏謂二命使一也

埤雅云黃楊木性堅緻難レ長俗云歲長二一寸一閏年倒長二一寸一

本草綱目云黃楊不レ花不レ實四時不レ凋其性難レ長俗說歲長二一寸一遇レ閏則退今試レ之但閏年不レ長耳

天中記云藕生應レ月至二閏月一益二一節一東坡詩惟有二黃楊厄二閏年一

埤雅云藕生應レ月月生二一節一閏輒益レ一

月令輯要引二遁甲書一云梧桐可レ知二閏月一無レ閏生二十二葉一一邊有二六葉一從レ下數一葉爲二一月一有レ閏則生二十三葉一視二葉小者一則知二閏何月一也

爾雅翼云茈菰種二水中一一莖收二十二實一歲有レ閏則十三實

又云牡丹遇二閏歲一花輒小云々月令輯要引二石室奇方一云椶櫚俗名棕披其木最堪レ爲レ屜其木應レ月生二片棕一遇レ閏則生二半片一歲長二十二節一閏年增二半節一

又引二雲南志一云和山花樹高六七丈其質似レ桂其花白每朵十二瓣應二十二月一遇レ閏輒多二一瓣一俗以爲二仙人遺種一

又云優曇花在二安寧州西北十里曹溪寺右一狀如レ蓮有二十二瓣一閏月則多二一瓣一色白氣香種來二西域一亦婆羅花類也

玉燭寶典引二終篇說一云案尙書朞三百又六旬又六日以二閏月一定二四時一成レ歲孔安國注云匝四時日朞一歲十二月月卅日正三百六十日也除二小月六一爲二六日一是爲レ歲有餘十二日未レ盈三歲足得二一月一則置レ閏焉以定二四時之氣節一成二一歲之曆象一此言三百六旬外有二六日一與二小月之六日一幷爲二十二日一也三年合卅六日故置レ閏或後云々尙書考靈曜云閏者陽之餘注云陽日也日以二一歲一周天爲二十二次月一一歲十二及日而不レ盡周天十九今次レ之七故言レ閏者日之餘

素問云岐伯曰天以二六六一爲レ節地以二九九一制レ會者所三以正二天之度一氣之數也天度者所三以制二日月之行一也氣數者所三以紀二化正之用一也天爲レ陽地爲レ陰日爲レ陽月爲レ陰行有二分紀一周有二道理一日行一度月行十三度而有レ奇焉故大小月三百六十五日而成レ歲積氣餘而盈閏矣立二端於始一表二正於中一推二餘於終一而天度畢矣注云端首也始初也表彰示也正斗建也中月半也推退位也言立二首氣於初節之月一示二年建於月半之辰一退二餘閏於相望之後一是以閏之前則氣不レ及レ月閏之後則月不レ及レ氣故常月之制建初立中閏月之紀無レ初無レ中縱曆有レ之皆他節氣也故曆無云其候閏某月節閏某月中也推レ終之義斷可レ知乎故曰立二端於始一表二正於中一推二餘於終一也由レ斯推レ日成レ閏故能令二天度畢一焉

唐書本傳云武后詔二群臣一議二告朔于明堂一張齊賢曰穀梁氏稱三閏月天子不二告朔一它月故告朔矣左氏言魯不レ告二閏朔一爲レ棄二時政一則諸侯雖レ閏告朔矣

又曆志云玄始曆以爲二十九年七閏一皆有二餘分一是以中氣漸差據二渾天一二分爲二東西之中一而晷景不レ等二至爲二南北之極一而進退不レ齊此古人所レ未レ達也

群芳譜歲譜云閏附月之餘日積分而成二於月一者也

虞書曰咨汝羲曁和朞三百六旬有六日以爲二一歲之樞紐一所三以歸二奇也左傳云先王之正レ時也履二端於始一擧二正於中一歸二餘於終一履二端於始一序則不レ愆擧二正於中一民則不レ惑歸二餘於終一事則不レ悖曆法以二十一月甲子朔夜半冬至一爲二曆元一其時日月五星皆起二于牽牛一初度更無二餘分一以レ此爲二步占之端一故履二端于始一每月有二中氣一惟閏月獨無二中氣一斗柄指二兩辰之間一閏前之月則中氣在二晦日一閏後之月則中氣在二朔日一擧二中氣一而正レ月則置レ閏不レ差故曰擧二正於中一置レ閏之法以二氣盈朔虛一而歸二日月之餘分一周天三百六十五度四分度之一日之行也日一度自二今年冬至一至二明年冬至一

易繫辭云歸二奇於扐一以象レ閏五歲再閏註凡閏十九年七閏爲一章五歲再閏者二故略擧二其凡一也疏歸二奇於扐一以象レ閏者奇爲二四揲之餘一歸二此殘奇於所レ扐之策一而成レ數以法二象天道一歸レ殘聚二餘分一而成レ閏也五歲再閏者凡前閏後閏相去大略三十二月在二五歲之中一故五歲再閏

尙書堯典云朞三百有六旬有六日以二閏月一定二四時一成レ歲疏斗之所レ建是爲二中氣一日月所レ在斗指二兩辰之間一無二中氣一故以爲レ閏也

周禮春官云閏月詔王居レ門終レ月又王在レ門謂二之閏一

左傳文公云元年閏二三月一非レ禮也先王之正レ時也履二端於始一擧二正於中一歸二餘於終一履二端於始一序則不レ愆擧二正於中一民則不レ惑歸二餘於終一事不レ悖

又云六年閏月不二告朔一非レ禮也閏以正レ時時以作レ事事以厚レ生生民之道於レ是乎在矣

公羊傳文公六年云閏月不二告朔一曷爲不二告朔一天無二是月一也閏月矣何以謂レ之天無二是月一非二常月一也

穀梁傳云閏月者附月之餘日也積レ分而成二於月一者也

史記歷書云黃帝考二定星歷一建二立五行一起二消息一正二閏餘一民是以能有レ信レ神云々

又云三苗服二九黎之德一故重黎二官咸廢レ所レ職而閏餘乖次孟陬殄滅攝提無レ紀厤數失レ序

又孝景本紀云四年夏立二太子一立二皇子徹一爲二膠東王一六月甲戌赦二天下後九月更以二弋陽一爲二陽陵一云々

又云六月後九月伐二馳道樹一殖二蘭池一云々

又秦楚之際月表云二世二年後九月云々

漢書高帝紀云沛公軍レ碭魏咎弟豹自立爲二魏王一後九月懷王幷二呂臣項羽軍一自將レ之

又律歷志云魯歷不レ正以二閏餘一一レ之歲爲二蔀首一注當以閏盡歲爲二蔀首一今失レ正未レ盡二一歲一便以爲二蔀首一也

後漢書本傳云光武詔二張純一曰禘祫之祭不レ行久矣純奏曰三年一閏天氣小備五年再閏天氣大備三年以祫五年以禘云々

獨斷云陽月者所三以補二小月之減一日以正二歲數一故三年一閏五年再閏

說文云閏餘分之月五歲再閏也告朔之禮天子居二宗廟一閏月居二門中一

白虎通日月云月有二閏餘一何周天三百六十五日度四分度一歲十二月日過十二度故三年一閏五年再閏明二陰不レ足陽有レ餘也故讖曰閏者陽之餘

なしことなるへし
おなしふ月のかすそふ
後のふ月ともよめり閏七月をよめるいつれの月に
もいふへし
日かすをそふ
これも閏月の心なり但日數をそふとはかりにては
いかゝ閏月のあつかいあるへし
東雅云閏月のことき古人はのちのその月といひけり書紀に潤讀てノチといふ卽これなりいまも俗間には猶其義ありふるきものともには潤の字を用ひて閏となせしと見えたりされは閏をウルフといひしは潤の字の訓にしたかひし成へし
時節纂諺云凡正月朔日より十二月晦日までの一年は三百五十四日三十七刻なり是は月の一年なり日の一年は三百六十日也天の一年は三百六十五日二十五刻なり然は暦の正月朔日より十二月晦日まで三百五十四日三十七刻に四季の三百六十五日二十五刻を合て見るに大に不足の日を足て行是故に四季も相違なく調也もし三度も閏を置されは春一月夏に入十一月か十二月に入閏を三度置されは春の季みな夏となる十二度閏を置されは子の年か丑の年となるさて三百六十五日二十五刻の一年を四時に分て見れは九十一日三十一刻十五分宛なり
日本紀通證仲哀天皇紀云元年閏十一月
閏訓乃知漢書作㆓後某月㆒穀梁傳曰閏月者附㆓月之餘日㆒也積分而成㆓于月㆒者也說文曰餘分之月五歲再閏告朔之禮天子居㆓宗廟㆒閏月居㆓門中㆒从㆑王在㆓門中㆒
又敏達天皇紀云十年潤二月
潤音閏此紀閏作㆑潤者事物紀原史記曰黃帝起㆓消息㆒正㆓潤餘㆒則閏蓋餘分之月也黃帝造㆑暦始正㆑之今訓㆑閏爲㆓宇流布㆒卽此義也
和訓栞云うるふつき閏月をいふ閏は潤餘の義なれは日本紀に潤月ともかけり○うるふとしといふも西土に潤年とみえたり○天の運行三百六十五度四分度の一にて一年三百六十日と立て月に大小あり過る六日を氣盈とし不足の六日を朔虚とす此過不及を合せ十二日三年積て三十六日の餘日あるをもて三年に一閏を立る五歲再閏十九年にして七閏に及へは餘分なし是を一章とす

二節ニ閏年增ニ半節一と（石室奇方）雲南和山花樹高六七丈其質似レ桂其花白每朶十二瓣應ニ十二月一遇レ閏多ニ一瓣一と（雲南志）優曇花在ニ安寧州西北十里曹溪寺右一狀如レ蓮有ニ十二瓣一閏月則多ニ一瓣一と（同上）鳳尾十二翎遇ニ閏歲一生ニ十三翎一と（羽毛考異）いへり草木禽鳥よく閏を志れり

日本書紀（仲哀天皇紀）云元年冬十一月云々潤十一月乙卯朔戊午越國貢ニ白鳥四隻一云々

又（安閑天皇紀）云元年閏十二月己卯朔壬午行ニ幸於三島一云云

又（欽明天皇紀）云九年閏七月庚申朔辛未云々

又（敏達天皇紀）云十年春閏二月蝦夷數千寇ニ於邊境一云々

又（推古天皇紀）云十年閏十月乙亥朔己丑高麗僧僧隆雲聰共來歸云々

又（同上）云十三年閏七月己未朔皇太子命ニ諸王諸臣一俾レ着レ褶云々

又（天武天皇紀）云二年閏六月乙酉朔云々

又云十年閏七月戊戌朔壬子皇后誓願之大齋云々

又云十三年閏四月壬午朔丙戌詔曰云々

又云朱鳥元年潤十二月筑紫大宰獻ニ三國高麗百濟新羅百姓男女幷僧尼六十二人一云々

又（持統天皇紀）云三年潤八月辛亥朔庚申詔云々

又云六年潤五月乙未朔云々

又云九年潤二月己卯朔丙戌幸ニ吉野宮一云々

古今和歌集卷第二（春詞書）云やよひの ふたつあるとし云云

後撰和歌集卷第三（春下詞書）云彌生にうるふ月あるとしつかさめしのころ申文にそへて云々

蜻蛉日記云ことしは五月二つあれはなるへし 年ことにあまれは戀る君かためうるふ月をは置にや有らん 同長歌 あはれ今はかくいふかひもなけれとも云々うきよの中にふるかきり誰かたもとかたゝならんたえすそうるふ五月さへかさねたりつる衣手は植し田わかすくたしてき

藻鹽草云潤月 月の數そふ 月のかさなる春くはゝれる

夏秋冬も同かるへし但歌には未レ見○春過て衣ははやくかへてしをまたその日にもなるそあやしき

閏四月一日によめる

秋より後の秋とも

これ閏九月盡をよめる春夏冬も是をもつて心得お

のかさなる或は數くはゝれるとしと新撰六帖みえたり又春の閏月を春くはゝれる年と古今和歌集よみ秋にはあまりある秋と新撰六帖よみ冬は冬のあまりにと六帖古今よみ三冬しそへはとも新撰六帖よめり詳にあくるにいとまあらず扨西土の書に初て閏の事を記せるは歸二奇於扐一以象レ閏と易繫辭みえたるを始とせり年に閏を置事は四時の氣候をさため水旱風雨の憂を推量し寒熱溫凉其時に應せしめて正レ時を以て元とせり且民時農業にかゝはりて肝要の事也故に朞三百有六旬有六日以二閏月一定二四時一成レ歲以授二民時一と尚書堯典みえたるにても三代の時より閏を置て以て時を正し順不順の時氣を補ふ事聖人以定置給ひし事也故に閏は失ふへからすもし閏を失ふ時は則百姓何以てか其生を安んせんや左氏曰閏以正レ時時以作レ事事以厚レ生生民之道於レ是乎在矣と文公傳みえたるにても閏を置すしてかなはさる事しられたり又置レ閏定め大數極まりあり いはゆる十一歲四閏十九歲七閏是也と漢書律曆志純奏曰三年一閏天氣小備五年再閏天氣大備と後漢書みえ三年一閏五歲再閏也明二陰不一レ足陽有レ餘也閏也者陽之餘也と白虎通みえ凡閏六歲再閏又五歲再閏又三歲一閏凡十九歲七閏爲二一章一と玉燭寶典引王輔嗣注みえたるを以て置レ閏の定め次第ある事しられたり又閏と閏との間月を隔事三十二月にして一閏をうるなりいはゆる大率三十二月則置レ閏と正字通引陳氏說みえ古曆十九歲爲二一章一章有二七閏一三年閏九月六年閏六月九年閏三月十一年閏十一月十四年閏八月十七年閏四月十九年閏十二月と同上いへるは其大率を月に配當せるなりもし一度失レ閏は十二月蠡出るに至れり是時猶溫なれはなり故に十有二年冬十有二月蠡と春秋記せり又季康子問二於孔子一曰今周十二月夏之十月而猶有レ蠡何也孔子對曰丘聞レ之火伏而後蟄者畢今火猶西流司歷過也と家語いへり此閏を失へる事をいはれし也草木鳥獸無心にして自から時をしれりいはゆる惟有二黃楊一厄二閏年一と東坡詩いひ黃楊木歲長二一寸一閏年倒長二一寸一と埤雅いひ俗說歲長二一寸一過レ閏則退今試レ之但閏年不レ長耳と本草綱目いへり梧桐可レ知二閏月一無レ閏生二十二葉一云々有レ閏則生二十三葉一視二葉小者一則知二閏何月一也と遁甲書いへるは尤よく閏をしるものなり藕生應レ月月生二一節一閏輙益レ一と埤雅いひ蓏菰歲有レ閏則十三實と爾雅翼いひ牡丹遇二閏歲一花輙小と同上みえたり又椶櫚遇レ閏則生二半片一歲長二十

古今要覽稿卷第四十一

●時令部

●のちのつき　閏月

閏月を以てうるふつきとよめるは皇國にては後世の事なりふるくはのちの幾月とよめり日本書紀仲哀天皇紀に元年冬閏十一月（ノチノシモツキ）とみえたるを初めとせり此天皇の御時より以下皆閏月を以てのちの幾月とよみ來りしを三百九十年を經て敏達天皇の十年にあたり二月に閏あり潤字を用ひてのちとよみたり西土にては秦漢よりして閏を以て後のそれの月といへりいはゆる秦二世二年後九月と（史記秦楚之際月表）みえ後九月懷王幷二呂臣項羽軍一と（漢書高帝紀）みえたり且閏を以て歲終に置事古例なり左傳によるよし師古か漢書注に辨せり　秦用二顓帝曆一十月爲二歲首一と（天中記引左傳註釋）いへり漢は秦の制を用て以二十月一爲二歲首一故に秦漢以二九月一爲二歲終一是によりて史記秦楚之際月表漢書高帝紀等閏月をはみな歲終に置ゆゑに後九月と記せり書紀に閏月を記せる所あまたあれとも潤字を以て塡しは敏達紀持統紀のみなり持統紀には閏月ある每に皆潤字を書たり此頃より潤字にうるふの訓あれは閏字をうるふとよみならひしなるへし古今和歌集にうるふ月とみえたれはその前よりいひし事しられたり此をもつて考ふるに持統天皇の紀に閏をしるすに潤字のみを用ひたりしよりいつとなくのちの月といはすしてうるふとのみとなへし事なるへし萬葉集に閏をよめる歌見えすして延喜の頃より閏月をよめる歌多くみえたり又五月二つある年みな月二つある年なと撰集家集等にあまた出たり閏をうるひとよみしも歌あり又同し歌を初句はかりあまりさへとかへて以下は句上におなしきを後撰集に入てよみぬしも貫之なれは同歌也あまりとよめるもいと面白きことなりいはゆる先王之正レ時也履二端於始一擧二正於中一歸二餘於終一と（左傳文公）みえ閏月者附月之餘日也と（穀梁傳）みえ黃帝起二消息一正二潤餘一則閏蓋餘分之月也と（史記）みえ閏餘分之月と（說文）みえたるを以て見れは是等の說に貫之もよられしなりまた月日のそふとよめるは歌に織女のまつに月日のそふよりはあまる七日の　あらはあれか　しと（赤染衛門集）見え月

の祈禱の卷數をさゝけまた家々へも行て經をよみなとする故に師走といふと奥義抄にみえたり
跡部光海翁倭訓十二月云師走（シハス）師走ハ鹽走（シホハシル）也シハツルヲ云俗ニ此月諸事ヲシハツルヲ仕舞ト云フ鹽走仕舞ト同シ
毫品通考云師走トハ此月諸寺諸山ノ師僧檀主ノ元ヘ年中ノ祈禱卷數ヲ捧テ來ル故也月迫ノ業ナレハイソカワシク走メクル心也師走月トモ言也極月トハ十二月ノ極ナレハ極ハ至極ノ義ナリ云々
按にこれらの諸説いつれも奥義抄によりていへり皆とりかたし殊に師走は鹽走也シハツルヲ云此月諸事ヲシハツルヲ仕舞ト云フ鹽走仕舞ト同シといへるなとは論するにたらす
日本歳時記云十二月しはすといふは四時のはつる月なれはしはつといふこゝろならんつとすと通音なり四極月なるへし豊後の國に四極山あり此意とかなへり世俗に此月を極月といへるも此意也師趨と稱するは附會の説なるへし
和爾雅云此月四時極盡故曰ニ四極月一俗曰ニ極月一亦此意云々

歳時語苑云十二月四極同和名也此月四時極盡故曰ニ四極月一俗曰ニ極月一亦此意
藝苑日渉云十二月謂ニ之四極一又曰ニ極月一貝原損軒曰是月也四時極盡故曰ニ四極一此讀云ニ四波須一俗名ニ極月一亦此意豊後有ニ四極山一亦讀云ニ四波都山一都須皆音之轉可ニ以徵一矣熙按元日曰ニ四始一言ニ歳之始時之始日之始月之始一也四極即四者之極也極月猶レ言ニ窮稔窮月一也
四始見ニ潜確類書一窮稔窮月見ニ月令廣義一〇按に古語に音訓をましへてなつくる事はなし此等の説用ひかたし

史記天官書○按にもと星の名なるか此月の名となれりいはゆる以二十二月一與二尾箕一晨出曰二天皓一黫然黒色甚明と天官書にいへるによれり

暮冬

元帝纂要○按に此月冬暮はつれはいへり

杪冬

同上○按に是も冬の末の義なり杪はこすゑと訓するにても義明かなり

暮節

同上○きこえたるまゝなり

暮歳

同上○義上におなし

窮稔

同上○按に義上におなし窮はきはまる意稔は年とおなしされは年の暮るをいへり

窮紀

同上○按に是も義上におなし紀は年といふ義なり

窮月

禮記月令○按に同上に是月也日窮二于次一月窮二于紀一といふによりて此月の名目となれり上にいふ窮紀も月令より出たり

凋年

文選舞鶴賦事物別名○按に此月に至て年のくれはつるをいへり

小歳

事物別名○按に臘之次日爲二小歳一今俗以二冬至夜一爲二小歳一と五雜俎にいへり

冬索

同上○按に名義未詳

末垂

同上○名義上に同し

○正誤

奥義抄云十二月僧をむかへて經をよませ東西にはせはしるが故に師走月といふをあやまれり

下學集云師趨

十二月一年之終諸人事繁而不二暫居一レ家雖二師匠一亦趨走故云二師趨一也

兩朝時令云十二月師趨下學集云十二月一年之終諸人事繁而不二暫居一レ家雖二師匠一亦趨走故云二師趨一也

續節序記云此月を玄はすと云事諸山諸寺の師僧年中

和名類聚鈔禮記月令○按に孟仲季の次第を以て名付たり

大呂

年中行事秘抄拾芥抄禮記月令○按に律名なり律謂二之大呂一何大大也呂者拒也言陽氣欲レ出陰不レ許也呂之爲レ言拒拒者旅抑拒二難之一と白虎通にみえたるにて大呂の義をしはかるへし

臘月

下學集風俗通○按に此月に臘の祭を行はるゝによりていふ

嘉平

史記○按に夏の世にての祭名なるかいつの世よりか終に月の名となれるも此月にかきりて行はるゝ祭なるか故によりてなり

清祀

風俗通○殷の世の臘の祭なり是もいつの頃よりか此月の名となれり

蜡月

同上○按に周世の臘祭を蜡といへり故に此月を以て蜡月と名付しなり嘉平清祀蜡月の三名みな取レ獸以祭二先祖一よし風俗通にみえたり上にいふ臘月の臘は獵をなして取獸ゆえんを以て臘といふ又嘉平清祀蜡月の三名をすへて臘といふよし五經要義にみえたり

涂

爾雅○按に同上に十二月爲レ涂とみえて郭璞注に此月の別名なるよし辨せり

橘涂

同上注○按に十二月得レ乙則曰二橘涂一と郭璞いへりしかれは橘は乙の別名なり

除月

元帝纂要事物別名○按に爾雅には涂字に作れるを除に作れるは疑かはし爾雅注に涂音徒とありしかれは爾雅によるへきなり通雅に愚謂當二音除一蓋謂二歲將一レ除也と知密之いへれとよる所の書涂なれは荷擔しかたし

玄枵

周禮○同上に大呂丑之氣也十二月建而辰在玄枵とみえたり

天皓

萬葉集春秋○名義きこえたるまゝなり

師趨（シハス）

奥義抄下學集○名義上に出たり

四極

日本歳時記類聚名物考歳時語苑○按に此月にいたり春夏秋冬の四時はてつくる義なり

四極月

日本歳時記歳時語苑○名義上におなし

極月

同上○按に四極月といふを省呼して極月といへり

年のはて

貫之集○按に此月一年のはつるを以ていへるなり

年のくれ

同上古今六帖

年よつむ月

秘藏抄○按に此月の異名なり年よのよは助字なり年つむ月といふ義なりされはこそ歌に身の上に年よつむ月いく重ねとみえたれ

暮古月（クレコツキ）

莫傳抄○按に名義未詳

親子月（オヤコ）

同上○名義同上

春待月

藏玉集○按に此月になりて人々の心にはやくも春になれかしといそかれまたるゝものなれはしかいふなり

梅初月

同上○按に此月梅花初てひらきそむれは名付たり

三冬月

同上○按に冬三月あれとも冬は此月に至て終れは十二月を三冬月と名付たり

弟月（オトコ）

年浪艸○同書に此月一年中月之終也故俗謂二乙子月一和諺季子稱二乙子一也といへり

二之日

詩豳風○按に玉燭寶典引二韓詩章句一云二之日栗烈夏之十二月也と見えたり

季冬

雪も我身もふり增りつゝ

家持

あら玉の年行かへり春たゝは
まつわか宿にうくひすはなけ

年のくれ

つらゆき

行年のをしくもあるかなます鏡
みる影さへに暮ぬと思へは

みつね

雪ふりてとしの暮ぬる時にこそ
つひに紅葉ぬ松もみえけれ

としくれて春明方に成ゆけは
花のためしにふれるしらゆき

新撰六帖

しはす

衣笠内大臣家良公

山人の爪木にそふるゆつり葉に
春をかけたる色はみえけり

前藤大納言爲家

春ちかき枝にや花のこもるらん
木ことに梅とみゆるしら雪

九條三位入道知家

一とせのこよみをおくに卷よせて
殘る日數の程そすくなき

左京大夫行家

かそふるも三冬の後の冬なれは
いとゝさむさのきはめ行哉

左大辨入道光俊

思ひをくことのみさすかありしかと
古郷いてし月はこの月

○釋名

しはす

日本書紀萬葉集古今和歌集○按にしはすはとしはつる義をもて名付たりシハスといふか如きシとはトシの上略ハスはハツなりスとツとは同韻相通なり

十有二月（シハス）

日本書紀訓書伊訓○按に皇朝にてはしはすと訓すれは名義上にいふ所とおなしけれと西土にては文字をもて義理をなせは意たかへり數十にあまれは十有一月とも十有二月ともいへるなり

十二月

家綵、

題二耕織圖一十二月　耕　趙　子　昂

一日不二力作一、一日食不レ足、慘淡歳云暮、風雪入二破屋一、老農力衰、傴僂腰背曲、索綯民事急、晝夜互相續、飯レ牛欲二牛肥一、茭藁亦預蓄、蹇驢雖二劣弱一、挽車致二百斛一、農家極二勞苦一、歳豈恒稔熟、能知二稼穡難一、天下自蒙レ福、

十二月　織　同

忽々歳將レ盡、人事可二稍休一、寒風吹二桑林一、日夕聲飂飂、墻南地不レ凍、墾堀爲二坑溝一、斫レ桑埋二其中一、明年芽早抽、是月浴二蠶種一、自レ古相傳流、蠶出易二脫殼一、絲纊亦倍收、及レ時不二努力一、知レ有二來歳一否、手凍不レ足レ惜、冀免二號レ寒憂一、

佩文齋詠物詩選　五言絶句

季冬　唐　丘　丹

江南季冬天、紅蟹大如レ觚、湖水龍爲レ鏡、爐峯氣作レ煙、

貫之集第一

十二月佛名

としのうちにつもれる罪はかきくらし
ふる白雪と共に消なむ

又卷二

延喜十八年二月女四のみこの御かみあけの屏風のうたうちのめしゝにたてまつる

十二月

このまより風にまかせて降る雪を
春くるまては花かとそみる

としのはて　ゆき

我宿にふる白雪をはるにまた
としこえぬまの花かとそみる

古今六帖　しはす

萬葉集八

しはすにはあは雪ふるとしらぬかも
梅の花咲ふゝめらすして

これのり

みよしのゝ山のしら雪つもるらし
古郷さむくなり増るなり

關こゆる道ならなくにちかなから
としにさはりて春を待哉

あら玉のとしのをはりになる時は

拒難之也、
爾雅云、十二月爲レ涂
又注云、十二月得レ乙、則曰二橘涂一、周而復始、亦可レ知也、
通雅云、十二月爲レ涂、注涂音徒、愚謂當二音除一、蓋謂二歳將レ除也、
事物別名云、十二月除月云々
按に爾雅涂なるを除に作るは傳寫の誤ならん歟
元帝纂要云、十二月、季冬亦曰二暮冬杪冬除月暮節暮歳窮稔窮紀一
歳華紀麗云、十二月南斗臨レ鳥、大呂中レ律、昏奎曉亢、鷄乳鵲巢云々、
事物別名云、十二月季冬　小歳　蜡月　除月　冬索　凋年　窮陰　月窮　末垂　日躔　婺女　辰次　元枵　支枵　丑律　大呂
禮記月令云、是月也日窮二于次一、月窮二于紀一、星回二于天一、數將二幾終一、歳且二更始一云々、
二如亭群芳譜歳譜云、十二月、招搖指レ丑、日在二婺女一、昏婁中旦氐中、是月也、日窮二于次一、月窮二于紀一、星回二于天一、數將二幾終一、歳且二更始一、
儒函數類十二類云、十二氣、周禮、地官司徒太師、掌二六律六同一、按同疑呂以合二陰陽之氣一、註聲之陰陽各有レ合、黃鍾子之氣也、十一月建焉、而辰在二星紀一、大呂丑之氣也、十二月建焉、而辰在二玄枵一、
又同上云、十二會考索一歳之周、凡十有二會焉、十有一月會二於星紀一之次、十有二月元枵云々、
文選舞鶴賦云、歳崢嶸而愁レ暮、心惆悵而哀レ離、於レ是窮陰殺節、急景凋年、涼沙振レ野、箕風動レ天云々、
五雜俎云、臘之次日、爲二小歳一、今俗以二冬至夜一爲二小歳一、盧照鄰元旦詩云、人歌小歳酒、花舞大唐春、則元日亦可レ謂二之小歳一矣、

○詩歌

節序詩集

河南府試二十二月樂詞一、　十二月　　李長吉

日脚淡光紅灑々、薄霜不レ銷桂枝下、依稀和氣排二冬嚴一、已就二長日一辭二長夜一、

擬二李長吉十二月樂辭一　十二月　　吳文可

瓊芳銷歇年華改、青鳥無レ音隔二瑤海一、綠綃窓戶弄二晴曦一、柳條迎レ臘含二烟彩一、上苑花須二連夜開一、枝頭休剪楊

大呂漢　冷月同　蜡月同　元枵同

下學集云、太呂十二月臘云支那十二月之祭名臘故云臘月也臘與ㇾ臈同字也

壒囊抄云、十二月大呂　季冬　暮冬　晩冬　杪冬

窮冬　黄冬　極月　臘月

日本歳時記云十二月の異名を季冬　凃月　嚴月　律を大呂と云

歳時語苑云、十二月季冬

十二月者冬時之季月故云爾

臘月

風俗通云臘者獵也因ㇾ臘取ㇾ獸以祭二先祖一獨斷云臘者歳終大祭云々　○當月之祭祀曰ㇾ臘故此月曰二臘月一

大呂

十二月律也律暦志云呂旅也言陰大旅二助黄鐘一宜ㇾ氣而牙ㇾ物也位二於丑一在二十二月一

華實年浪草三餘抄云、弟月（オトゴツキ）

此月一年中月之終也故俗謂二乙子月一和諺季子稱二乙子也

尚書伊訓云、惟元祀十有二月乙丑、伊尹祠二于先王一、奉二嗣王一見二祇厥祖一云々、

詩豳風云、一之日栗烈、無ㇾ衣無ㇾ褐、何以卒ㇾ歳、

玉燭寳典引二韓詩章句一云、一之日栗烈、夏之十二月也、

禮記月令云、季冬之月日在二婺女一、昏婁中、旦氐中、云々、律中二大呂一云々、

又同上云、季冬行二秋令一、則白露蚤降、介蟲爲ㇾ妖、

玉燭寳典引二樂稽曜嘉一云、殷以二十二月一爲ㇾ正云々、

又引二春秋元命苞一云、黒帝之子、以二十二月一爲ㇾ正、物牙色白云々、

又引二尚書大傳一云、殷以二季冬一爲ㇾ正者、其貴ㇾ萌也、

史記律書云、十二月律中二大呂一、大呂者、其於二十二子一爲ㇾ丑、丑者紐也、言二陽氣在ㇾ上未ㇾ降云々、

又天官書云、以二十二月一與二尾箕一晨出、曰二天晧一、黫然黒色甚明云々、

天中記云、史十二月其名天晧、志作ㇾ昊、

淮南子時則訓云、季冬之月其音羽、律中二大呂一、其數六、注呂旅也、萬物萌二動於黄泉一、未ㇾ能二達見一、所二以旅一、旅去ㇾ陰卽ㇾ陽助二其成功一、故曰二大呂一、

白虎通云、十二月律、謂二之大呂一何、大大也、呂者拒也、言陽氣欲ㇾ出、陰不ㇾ許也、呂之爲ㇾ言拒、拒者旅抑

語意云十二月を志波須といふは登志波都留月の上下を略き波は本の如し都と須を通はしいへり

和訓栞云しはす十二月をいふ歳極るの義なるへし萬葉集に昨日社年者極之賀と見ゑたり俗に此月を極月といふもはつる月の義也漢にも歳終といふなり

古言梯云しはす年極の略轉也後に師走と書て義を云は誤云々

十二月名の解云止志波都都伎也止を畧き都を通はせたる也此月にして一年はつる也

十二月和名考云此月の名義は白石眞淵士清等のとしはつる月といはれたるそ實にことわりなるへしそは正月は年の初めなれは初月といひ此月は年の終りなれはむかへて年極月といひし名也

和名類聚鈔云十二月季冬云々

年中行事秘抄云、十二月月令曰季冬之月、日在婺女、斗建丑、律中大呂、

拾芥抄云大呂十二月

秘藏抄云十二月年よつむ月歌に身の上に年よつむ月いくかさね重ねてもまた猶まいりきぬ

今按に板本皆まいりきぬとあれとまはりきぬの寫誤ならん

莫傳抄云暮古月十二月歌に「このはなの今や咲らん難波かたくれこの月のころになりつゝ

又云親子月歌に我人のみたまをまつるおやこ月松やいのちのためしなるらん

藏玉集云十二月春待月歌に「暮て行年は身にそふ老なれと春待月のいそかしき哉

又云梅初月歌に「花はまたつほむ枝かとほのみえて梅はつ月の心いろめく

又云三冬月歌に豊かなる時そとみえて三冬月いそにつもれる雪ののとけさ

藻鹽艸云三冬　春待月

○暮て行年は身にそふ老なれと春待月のいそかしきかな長明藏玉にあり

梅初月

○花はまたつほむ枝かとほの見えて梅はつ月の心色めく顯昭藏玉にあり

三冬月

○豊なるときそと見えて三冬月いそにはつもる雪ののとけさ定家藏玉にあり

はゆる大呂丑之氣也十二月建焉而辰在ニ玄枵一と（周禮地官）いふを始とす天皓は以ニ十二月一與ニ尾箕一晨出曰ニ天皓一と（史記天官書）いへるより此月の名となれり暮冬抄冬暮節暮歲窮稔窮紀（元帝纂要）等の名目あり窮月は季冬之月日窮ニ于次一月窮ニ干紀一と（禮記月令）いへるに起れり月窮もおなし凋年は文選舞鶴賦にみゑたり小歲冬索末垂と（事物別名）みえたり猶月名多かれと十か二三を擧るのみ

日本書紀（神武天皇紀）云、十有二月丙辰朔壬午至ニ安藝國一居ニ于埃宮一云々、

萬葉集卷第八（冬雜歌）紀少鹿女郎梅歌云十二月爾者沫雪零跡不知可毛梅花開含不有而

古今和歌集卷第六（冬歌詞書）云物へまかりける人を待てしはすのつこもりに云々

人丸集云しはす歌に「木のまより風にまかひて降雪も春くといへは花かとそみゆ

躬恒集云しはすのつこもりのよ云々

秘藏抄云しはす歌に「なにとなくしはすの空になりにけりあはれかさなる年の數かな」

八雲御抄云十二月しはす云々

藻鹽艸云しはす

しはすにはあは雪ふるとよめり

東雅云シハスとはこれも漢に十二月を歲終といひしかことく歲の終りをいふ也古語に年をトシともいひトセともいひ又チともいひし事前に注せし事のことくそのチといひしはトシといふことは一たひ轉してシとなりシといふことはふたゝひ轉してチとなりし也シハスといふかことき シとはトシといふ詞の一度轉せし所也ハストといふはハツなりストといひツトいふもその語の轉せし也我國の語に凡事の終をはハツともハテともいふなりされは萬葉集に極の字讀てハツともいへは俗に極月の字を用ひてシハスともいふなるへし

弘賢曰ちといふはとしのかへしなり轉したるにはあらす

類聚名物考云十二月しはつ舊說に佛名の月なれは法師の馳步行故といふは殊に甚しき僻事なり佛法の來りしは欽明天皇の御宇に始れる事なれはその前にはなにとか云けんおほつかなし是は今案に果るの略語也すでに地名に四極山といふをもしはつ山と訓り極と果とその意同しくはてをはる意也是にて知へし

古今要覽稿卷第四十

●時令部

●しはす　十二月

しはすは十二月の和名なり師走又四極ともかけりさて此月の名の始てみゑしは十有二月(シハス)丙辰朔壬午至ニ安藝國一と(日本書紀神武天皇紀)書記されたれと是より前に月々の名目ありし事は既に上にしるす如し和歌に此月の名をよめるは十二月(シハスニハ)爾者沫雪零跡(アハユキフルト)不知可毛(シラヌカモ)と(萬葉集)みゑなにとなくしはすの空になりにけりと(秘藏抄)よめり又物へまかりける人を待てしはすのつこもりにと(古今集)詞書にしるせるをおもへはあかれる世には今の世の十一月十二月と音をもてよはすしてしはすとなへし事明かなりさて此月の名義を解はしめたるは十二月僧をむかへて經をよませ東西にはせはしるか故に師走月といふをあやまれりと(奥義抄)いへれといと覺束なし下れる世の說なれともシハスといふか如きシとはトシといふ詞のひと度轉せし所也ハスといふはハツなりスといひツといふもその語の轉せし也我國の語に凡事の終りをはハツともハテともいふなりされは萬葉集に極の字讀てハツともいへは俗に極月の字を用ひてシハスともいふなるへしと(東雅)辨したるこそ的當の說にしてはるかに勝れたれ加茂眞淵谷川士清楫取魚彥藤原宇萬伎等の四人の說自己の考の如く此月の名義を辨したれとも皆前に辨したる所の東雅の說なれは是によりしならんさて此月の異名を年はつむ月と(秘藏抄)いひ暮古月(クレコ)親子月と(莫傳抄)いひ春待月梅初月三冬月と(藏玉集)いひをとこ月と(年浪草)いへり漢名を季冬と(和名類聚鈔年中行事秘抄禮記月令尙書大傳)いひ律名を大呂と(拾芥抄禮記月令史記律書)いひ臘月嘉平清祀蜡月といふも此月の名なりもとは祭の名なるか此月に限れる祭なるか故に月の字にもなれりいはゆる夏曰ニ嘉平一殷曰ニ清祀一周曰ニ大蜡一漢改曰レ臈々者獵取レ獸祭ニ先祖一といふなりといはゆる三代名レ臘夏曰ニ嘉平一殷曰ニ清祀一周曰ニ大蜡一總謂ニ之臘一と(五經要義)みゑたり異名を涂と(爾雅)いひ橘涂といふは十二月得レ乙則曰ニ橘涂一と(同上注)いひ除月と(元帝纂要)いへり玄枵はい

の文字の國と詞の國との差をしらさるおしあてことなれはとらす宇萬伎の志保美月といはれたるそ實によき考へなりそは二月に芽を張出したる木草三月にいよ〳〵生ひしけり此月にこと〳〵くしほむといふ意なりなほ三月に對へて思ひしるへし
按にしほむといふことをしもとはいはれましきにや霜の降る月といへは穩にきこゆれと云々此いへはの詞はいへるはといふの字の落たるにや

見えたり

辜月

日本歳時記事物別名○按に月字を添しのみなり

天泉

史記天官書○按に同上に以二十一月一與二氐房心一晨出曰二天泉一と見えたるを以て此月の名とせり

天泉月

採奇○按に名義上に同した丶月字を添しのみなり

達月

玉燭寶典○按に同書に是月也陰閉不レ可二以達一而陽泄傷昏故名二之達月一言未レ可二以達一而達以爲レ災といへり

一月

周書月解○按に此月周の世にては一月といひ正月とす

短至

事物別名○按に此月日短き至り也故に名付たり

周正

月令廣義○按に此月を周の世にては正月と定めたり故に名付く

廣寒月

六帖○按に此月にいたりて寒氣ましくは丶れは名付たり

葭月

留青新集○按に此月あしの萌芽つの丶如くに出るを以て名付たり和歌にも角くむあしとよめり

三至

三體義宗○按に同書に一者陰之至二者陽氣始至三者日行南至と此義をとりて月の名となせし也

六呂

下學集○按に漢名なれと出所いまた見あたらす

陽復

同上○按に此月一陽來復するを以て名付たり是も出所いまた見あたらす

復月

日本歳時記○按に名義上におなし出所未レ考

○正誤

十二月和名考云十一月志毋都伎按するに此月の名は諸説ともに霜の降る月といへは穩にきこゆれと猶考ふるにいか丶あらん又白石士淸の漢籍をひかれたるも彼

十一月
日本書紀萬葉集史記律書○名義同上
なかの冬
曾丹集○名義聞えたるまゝなり
つゆこもりのは月
雪秘藏抄○名義未詳
雪待月
莫傳抄○按に此月多くは雪降初る故にえか名付けたり
神歸月
同上○按に十月を神去月といひ此月に神の歸り玉ふ義にてえか名付たり
雪見月
藏玉集○按に名義字の如し
神樂月
同上○按に神樂は此月諸社におきて行はるゝ故えか名付たり
子月
壒囊抄○按に此月子の月なれはなり
仲冬
和名類聚抄尙書堯典禮記月令○按に此月三冬の中に居すれは仲冬の名をくたせる也
黃鍾
年中行事秘抄拾芥抄禮記月令史記律書○按に律名なり黃鍾者陽氣踵二黃泉一而出也と律書に云り又陽氣聚二於下一陰氣盛二於上一萬物黃萌二於地中一故曰二黃鍾一と淮南子注にみえたり又黃者中央之色也鍾者動也言陽氣動二於黃泉之下一動二養萬物一也と班固いへり此をもて考ふるにいつれも地下に發陽のきさし初るをもつて名付しなり
暢月
下學集禮記月令呂氏春秋玉燭寶典○按に呂氏春秋に仲冬命レ之曰二暢月一とみえ玉燭寶典に暢達也陽泄則爲二暢月一不レ泄不レ爲二暢月一と云り
辜
爾雅○按に十一月爲レ辜と同上見えたるのみにて外に注釋なけれは名義不詳いまた他書にも見あたらす
畢辜
同上注○按に十一月得レ甲則曰二畢辜一と同上注に

仲冬　　唐呂　　滑

江南仲冬天、紫蔗節如ㇾ鞭、海將ㇾ鹽作ㇾ雪、山用ㇾ火耕ㇾ田、

○和歌

古今六帖　霜月

さかしらになつは人まねさゝのはのさやく霜夜は我獨ぬる

冬の夜をねさめて聞はをしそ啼はらひもあへす霜や置くらん

吹風はいろも見えねと冬くれは獨ぬる夜の身にそ志みける

新撰六帖　霜月　　衣笠内大臣

久かたの天津乙女か立まひしとよのあかりはなほそ戀しき

前藤大納言爲家

夜寒なるとよのあかりの霜の上に月寒わたる雲のかけはし

九條三位入道知家

霜寒るかものかはらに駒なへてみち行すりの山あひのそて

左京大夫行家

おく霜も時志りかほの冬のよにねさめをさむみ袖は氷りぬ

右大辨入道光俊

かゝる身に豊のあかりの日かけ草なにとて結ふ契り有けん

夫木和歌集卷第十六冬部一

霜文永六年毎日一首中十一月一日　　爲家

けさは又あさおく霜の深さにて名におふ月もまつ知れける

○釋名

志もつき

日本書紀萬葉集秘藏抄○按に志も月は霜盛に降月故に名付たり又下月の義にもとれり是は十月を上の月にとり十一月を下の月の義とするは十は盈數にて下の一にかへれは此月を下月とは稱するならん

十有一月（シモツキ）

日本書紀倘書堯典○名義上におなし

事物別名云、十一月仲冬　短至　暢月　日躔斗　辰次星紀
子律黃鍾
三禮義宗云、十一月大雪爲レ節者、形二於小雪一、爲二大雪一、時雪轉甚、故以二大雪一名レ節、冬至爲レ中者、亦有二三義一、一者陰極之至、二者陽氣始至、三者日行南至、故謂二之冬至一也、
月令廣義云、通鑑云、武王既勝レ殷、乃改二正朔一、以二建レ子月一爲二正月一、色尙レ青、服以レ冕、

○詩歌

節序詩集　十一月

十一月忽見二雪片一居レ此七年未二嘗有一也

張　子　韶

寒色遽如レ許、神清瘦不レ禁、瓦溝聲皪索、珠琲亂二衣襟一、斯須忽復變、玉屑墮二前林一、風勁勢回旋、飃飃蔽二遙岑一、落レ此炎瘴地、七年到二于今一、不レ見二六花飛一、況聞寒玉音、今年盈尺瑞、天以慰二吾心一、呼レ兒具二盃盤一、開レ樽須レ滿レ斟、更製白雪辭、入我綠綺琴、

河南府試二十二月樂詞一　十一月

李　長　吉

宮城團廻凜嚴光、白天碎碎墮二瓊芳一、撾鍾高飮千日酒、戰二却凝寒一作二君壽一、御溝泉合如二環素一、火井溫泉在二何處一、

擬二李長吉十二月樂辭一　十一月

吳　文　可

八姨手折搏二樹枝一、海天凍合靑玻瓈、瓊樓仙人喚二滕六一、夜入二銀潢一剪二瑛球一、沈香火煖錦承塵、回羅羔酒生春[illegible]、宮溝不レ寄レ題二紅怨一、日暎二五紋一添二弱線一、

題二耕織圖一　十一月耕　趙　子　昂

農家値二豐年一、樂事日瀰々、黑黍可レ釀レ酒、在レ牢羊豕肥、東降有二一女一、西隣有二一兒一、兒年十五六、女大亦可レ笄、財禮不レ求レ備、多少取隨レ宜、冬前與二冬後一、婚嫁利二此時一、但願子孫多、門戶可二扶持一、女當レ力二蠶桑一、男當レ力二耘耔一、

十一月織　同

冬至陽來復、草木潛滋萌、君子重其然、吾道自レ此亨、父母坐二堂上一、子孫列二前榮一、再拜稱二上壽一、所レ願百福幷、人生屬二明時一、四海方大平、民無二札瘥者一、厚澤敷二群情一、衣食苟給足、禮義自レ此生、願言與二學校一、庶幾敎化成、

佩文齋詠物詩選　五言絕句

故曰二黄鍾一、
史記律書云、十一月、律中二黄鍾一、黄鍾者、陽氣踵二黄泉一而出也、其於二十二支一爲レ子、子者滋也、滋者言萬物滋二於下一也云々、
白虎通云、十一月律謂二之黄鍾一何、黄者中央之色也、鍾者動也、言陽氣動二於黄泉之下一、動二養萬物一也、
漢書律暦志云、黄鍾者、黄中之色、君之服也、鍾者種也、色上レ黄、五色黄盛焉、故陽氣施二種於黄泉一、孳二萌萬物一爲二六氣一云々、
玉燭寶典注、鄭玄曰、仲冬者、日月會二於星紀一、而斗建レ子之辰、
又同上云、黄鍾者律中之如也、仲冬氣至、則黄鍾之律應、
又注、高誘曰、陽氣聚二於下一、陰氣盛二於上一、黄萌二蘩於黄泉下一、故曰二黄鍾一也、
又引二尙書大傳一云、天子將レ出則種二黄鍾一、右五鍾皆應、注鄭玄曰、黄鍾在レ陽、陽氣動西、五鍾在レ陰、陰五靜君將二行出一、故以レ動告レ靜、靜者則皆和、此之謂也、
爾雅云、十一月爲レ辜、
又注云、十一月得レ甲、則曰二畢辜一、
事物別名云、十一月辜月

史記天官書云、以二十一月一與二氐房心一、晨出曰二天泉一、玄色甚明、江池其昌、不レ利レ起レ兵、有レ應在レ昴云々、
天中記云、十一月其名天泉、
歲華紀麗云、十一月、日在二箕宿一、律中二黄鍾一云々、昴星仲冬、
玉燭寶典引二尙書考靈曜一云、仲冬一日、日出二於辰一、入二於申一、奎星一度中而昏、五星七度中而明云々、
又引二春秋元命苞一云、律中二黄鍾一、黄鍾者始黄也、始萌二於黄泉中一
禮記月令云、地氣沮泄、是謂レ發二天地之房一、諸蟄則死、民心疾疫、又隨以喪、命レ之曰二暢月一云々、
呂氏春秋云、仲冬、命レ之曰二暢月一、注云、陰氣在レ上、民人空閑無レ所二事作一、故命レ之曰二暢月一也、
淮南子云、仲冬之月、命曰二暢月一、注云、以二民人無事間暢一、故曰二暢月一、
玉燭寶典云、暢月、暢達也、陽泄則爲二暢月一、不レ泄不爲二暢月一是月也、陰閉不レ可二以達一、而陽泄傷昏、故名二之達月一、言未レ可二以達一而達、以爲災云々、
又引二周書月解一曰、惟一月既南至、昏昴畢見、日短極基踐長、微陽動二于黄泉一隆、

拾芥抄云、黄鍾十一月云々

下學集云、黄鍾十一月云々、暢月月令仲冬命之曰暢月也六呂十一月陽復十一月

壒嚢抄云十一月黄鍾　仲冬　子月

藻鹽艸云冬も月霜降月

　風さむみ霜ふり月の空よりや雪けと見ゑてくもりそむらん御製藏玉に有

仲冬漢　黄鍾同　朔同　昰同　短同　陽祭同

日本歳時記云十一月の異名　仲冬　辜月　復月　律を黄鍾と云

續節序記云、十一月異名　仲冬　辜月　復月　律名黄鍾　和名　霜月　霜降月

歳時語苑云、十一月仲冬

冬者總三月也十月十一月十二月也此月三月居中月故云也

復月

　此月者一陽來復地下也

暢月

　暢充也此時一陽生地下故萬物充實于內也朱熹曰陽久屈而后申故名

黄鍾

　十一月律也律歷志云黄者中之色君之服也鍾者種也天之中數五五爲聲聲上宮五聲莫大焉地之中數六六爲律律有形有色色上黄五色莫盛焉故陽氣施種黄泉孳萌萬物爲六氣元也以黄色名元氣律者著宮聲也宮以九唱六變動不居周流六虛始於子在十一月

三至

　陰極之至陽始至日行南至故云

尙書堯典云、由命和叔宅朔方曰幽都平在朔易日短星昴、以正仲冬云々、

又同上云、十有一月朔、巡守至于北岳云々、

禮記月令云、仲冬之月、日在斗、昏東壁中、旦軫中、云云、律中黄鍾云々、

又云、仲冬行夏令則其國乃旱云々、

又夏小正云、十有一月王狩者、言王之時田、冬獵爲狩、

淮南子時則訓云、仲冬之月招搖指子、十一月官都尉其樹棗云々、

又云、仲冬之月、其音羽、律中黄鍾、其數六、注云、黄鍾者、陽氣聚於下、陰氣盛於上、萬物黄萌於地中、

集いひ復月と日本歳時記いひたれともいつれの書にいつるやいまた見あたらす

日本書紀神武天皇紀云、是年也、大歳甲寅年、冬十有一月(シモツキ)、丙戌朔甲午年、天皇至二筑紫國岡水門一、萬葉集巻第三云、以二天平五年冬十一月(シモツキ)一供二祭大伴氏神一之時聊作二此謌一云々、

秘藏抄云十一月しもつき歌に「見るまゝに雪けの空と成にけりさらぬにさゆるしもつきの空

古今六帖云霜月

奥義抄云十一月霜しきりにふるゆゑに霜降月といふを誤れり

八雲御抄云十一月　しもつき

藏玉集云十一月霜降月歌に「風さむみ霜ふり月のそらよりや雪けとみえてくもりそむらん

下學集云霜月此月霜始降也

東稚云霜月といふ事漢にもふるくいひし事なれとそれは九月をこそいひけれ我國にては十一月をいひし也その月は異なれとも其義を取る事は相同し云々、

類聚名物考云十一月しもつきこの月には霜のいたくふれはといふ舊説さもあるへし

日本歳時記云十一月の和名を霜月といふ霜しきりにふるゆゑ霜降月といふを略せるとそ

歳時語苑云霜月十一月和名也此月霜盛降故曰二霜降月一今畧呼二霜月一

亳品通考云霜月トハ此月霜フル故ナリ

和訓栞云しもつき十一月をいふ霜月の義也霜の盛にふるときなれは名つくる成へし漢には九月を霜降とするはその初をいふ也

秘藏抄云十一月露こもりのは月歌につゆこもりのは月の空を詠れはなを雪けにそなり渡りける

莫傳抄云雪待月十一月歌に「やま風を雪待月といひなまし音はしくれてふらぬくもりを

又云神歸月同歌に四方にけふかへる神路のかみき月天の岩戸の今やあくらむ

藏玉集云十一月雪見月歌に「くもりつる空のしるしに雪見月けさこそ冬のしるし有けれ

又云神樂月歌に「しらすきてよもの宮居の神樂月立榊葉の音のさやけさ

和名類聚鈔云仲冬十一月

年中行事秘抄云、十一月、月令仲冬之月日在レ斗、斗建レ子、律中二黄鍾一云々、

古今要覽稿卷第三十九

●時令部

●しもつき　十一月

しもつきは十一月の和名なり皇國にて此月の名のふるくより見えしは冬十有一月（シモツキ）丙戌朔甲午と（日本書紀神武天皇紀）あるを始とす夫より以下は以ニ天平五年冬十一月（シモツキ）一供ニ祭大伴氏神一と（萬葉集）みえたり歌に舊く此月の名をよめるは見るまゝに雪けの空と成にけりさらぬにさゆるしもつきの空と（秘藏抄）みえたるを初とす霜しきりにふるゆゑ霜降月といふを誤れりと（奥義抄）いひ風寒み霜降月の空よりや雪けとみえてくもり初らんと（藏玉集）みえたり又霜月といふ事漢にもふるくいひし事なれとそれは九月をこそいひけれ我國にては十一月をいひし也その月は異なれと其義をとる事は相同しと（東雅）いへり又しもつきこの月には霜のいたくふれはいふ舊說さもあるへしと（類聚名物考）いひ十一月の和名を霜月といふ霜しきりにふる故霜降月といふと（日本歲時記）いひ霜盛降故曰ニ霜降月一と（歲時語苑）いひしもつき十一月をいふ霜月の義なりと（和訓栞）いへるかことくもはら此月霜降故月の名とせるは四月を卯月といふも卯の花盛にひらくる故卯月といふかことし源君美かいへることく西土にては霜初てふれる義をとりて月の名となし皇國にては霜盛にふれる月を名付て霜月といへり藤原宇萬伎曰志保美都伎也保を母に通はせ美を略ける也此月にして本草皆凋（シボメ）は也と（十二月名の解）いへり按に此月をしも月といふは下の義にもとれりいかにとなれは十よりして一にかへりて十一十二と數をとれは十一は下にかへる義にてしも月といふなり左傳に十は盈數也とみえたるにても義明かなり此名の異名のこときはなかの冬と（曾丹集）いひつゆこもりのは月と（秘藏抄）いひ雪待月神歸月と（莫傳抄）いひ雪見月神樂月と（藏玉集）いひ子月と（壒嚢抄）いへり漢名を仲冬と（和名類聚鈔尙書堯典禮記月令）いひ律名を黃鍾と（年中行事秘抄拾芥抄禮記月令史記律書）いひ異名を暢月と（下學集歲時語苑禮記月令呂氏春秋玉燭寶典）いひ辜と（爾雅）いひ畢辜と（同上注）いひ辜月と（日本歲時記事物別名）いひ天泉と（史記天官書天中記）いひ天泉月と（採奇）いひ達月と（玉燭寶典）いひ一月と（周書月解）いひ短至と（事物別名）いひ周正と（月令廣義）いひ廣寒月と（六帖）いひ葭月と（留青新集）いひ三至と（三禮義宗）いひ六呂陽復と（下學

月一爲二良月一
按に良月の出所は左傳也いはゆる鄭公父定叔出奔レ衞三年而復レ之使下以二十月一入上曰二良月一也就二盈數一焉とみえたるを始とせり梁元帝纂要にも傳を引たり韓鄂撰歲華紀麗にも傳を引て良月の名みえたるをいかにして通雅の作者韓鄂以二十月一爲二良月一といへるにや但し通雅の作者智密之歲華紀麗を熟覽せさるにやゝかのみならす左傳を脫して引用せさるは考を失せしなり

按に小春同和名なりと鈴木學春のいひしは誤なりその上歳時記曰十月天時和暖似レ春故名二小春一と引し全文荊楚歳時記の文なるをしらさる故の誤ならんたゝし荊楚歳時記をしらさりしや或は末書に歳時記とのみしるせるをそのまゝに引しのみならす此書を皇國の書とおもひあやまりて小春は和名なりとしるせるなり

毫品通考云神無月ト言コト説々多シ一説ニハ伊弉冊尊崩御シ玉フ月ナレハ言トイヘリ或説ニ素盞嗚尊常ニ軍ヲ發シテ天照太神ヲウチ奉ントシ玉フ故太神素盞嗚尊ヲナダメン爲ニ汝我子トナリタラハ一年ニ十月ヲ讓リ出雲石見ノ兩國ヲアタヘント宣ヒシニヨリ十月ニハ諸神出雲ニ行テツカヘ奉リ玉フ故ニ神無月ト言フ也サレハ今ニ至リテ出雲ニハ神有月ト言由ウケタマハリキ

按に古事記日本書紀等に天照太神素盞嗚尊の爲行をきらひ給ひて度々誓約をなしてたしなめ給ふ事はみえたれとも素盞嗚尊をなためんか爲に汝我子となりたらは一年に十月を讓り出雲石見の兩國をあたへんとのたまひしによりて十月には諸神出雲に行てつかへ奉り給ふ故に神無月といふといへれと此説更に國史をはしめ古傳記たしかにしるせる物なしされは附會の説を請て實の事とおもひあやまれるにや

跡部光海翁曰神無月神嘗月（カミナメツキ）也此月新稻ヲ諸社へ進セラル此月新穀ヲ下ヘホトコス月也

按にひと渡りはきこゆるやうなれとも此説とりかたし令義解延喜式等神嘗祭の事みえたれとも共に皆九月なれは十月をもて神嘗月とはいひかたし

和訓栞云我邦の古へも西土にも神嘗祭は十月なりし事其證多し云々

按に荊楚歳時記十月朔日黍臛俗謂二之秦歳首一未レ詳黍臛之義今北人此日設二麻羹豆飯一當爲二其始熟一嘗新耳とみえたり是よりはやく國語に國於レ是乎蒸嘗家於是乎嘗祀と見えたり谷川士清は是等の義にもとつきて西土にも神嘗祭は十月なりとは云へけれと皇國にて十月神嘗祭の事を記せる物なし令式共に神嘗祭は九月に行はれしを十月に其證多しとはよりところなき事也

通雅云、秦以二十月一爲二歳首一、故曰二大月一、韓鄂以二十

年中行事秘抄拾芥抄禮記月令淮南子時則訓○按に律名なり孟冬之月律中二應鐘一と月令にみえしによりし名なり

良月

左傳○按に莊公十六年曰公父公叔使下以二十月一入上曰良月也就二盈數一也とみえたるを以て考ふるに此月を祝して良月とはいひはしめしなり

大章

史記天官書天中記○按に以二十月一與二角亢一晨出曰二大章一と天官書にみえしは星の名なるを天中記には史に十月其名大章といへれはふるくより大章を十月の名目となせし事とおもはれぬ

大月

通雅○按に同書に大月良月皆十月也云々秦以二十月一爲二歳首一故曰二大月一とみえたれは秦より以降大月の名目ありしとおもはるれといまたたしかなる書籍に見あたらす通雅はおもひの外精撰の書にあらされは一々信をとりかたし

始冰

藻鹽草歳時語苑○按に禮記月令に立冬之月水始冰とみえたるによれる名なり

小春

藻鹽草荊楚歳時記宋裴萬頃詩○按に此月和暖にして春に似たる故に名付たり荊楚歳時記にも天氣和暖似レ春故名二小春一とみえたり萬頃の詩に誰與二谿梅一作二小春一と作れるも此月梅花なとひらきてあたかも春にことならねはなり

小陽春

初學記五雜俎○名義同上

大素

博雅○名義未詳

吉月

後漢書○按に此月を良月といふにおなしく祝して吉月の名出來しなり

正陰月

西京雜記○按に此月純陰の月なれはこゝか名付けたり

○正誤

歳時語苑云、小春同和名也歳時記曰十月天時和暖似レ春故名二小春一

たり別義なし

初冬

古今六帖○名義同上

冬のはしめ

同上○名義是も上におなし貫之の歌に時雨そ冬のはしめなりけるとあり

鎮祭月

八雲御抄○出雲國には鎮祭月といふと御抄にみえたりしかれは方言にて他國には鎮祭月と稱せさるなり又出雲國にて此月神在月といへるよし詞林采要抄にみえたれとしかとしたる說なきのみならす貝原篤信は出雲の國人に親しく神在月の事とひ侍りしにかの國にても神無月と唱ふるよしいへれは神在月の名除レ之

時雨月

藏玉集○按に此月いたく時雨かちなる月なれは名付しなり萬葉集にもかみな月時雨の雨時雨にあへるなとよめり神無月時雨るゝと冠辭のことくつゝけよめり貫之の歌に「神無月ふりみふらすみさためなき時雨そ冬の初なりける」とよめるなとによりてや時雨月の名は起りしならむ

拾月

同上○按に名義未詳歌の意たしかならすいとむつかし

初霜月

同上○按に初霜は九月降るなり霜降節は九月なりしかるを初霜月と此月をいふは十一月を霜月といへは霜月より前の義をとりて初霜月とは名付しなり西土にては九月を霜月といへり

孟冬

和名類聚鈔年中行事秘抄禮記月令淮南子時則訓○按に此月三冬の初めなれは孟仲季の次第をもて孟冬とはいへるなり

上冬

元帝纂要○名義上に同したゝ孟字を上字にかへしのみなり

開冬

同上○按に開は初の義なれは初冬といふにおなし開冬の字いとめつらし

應鐘

いへり神在の浦に神在の社あり諸神これにあつまり給ふよし見えたり貝原篤信曰今出雲國の人に尋ぬれはかの國にても神無月と稱するよしいへりことにこの月天下の諸神出雲にあつまり給ふ事神書の中においても我いまた其説を見すと實にさもあるへき事なりしかるを後世の人々皆奥義抄にいへるかことく諸神出雲の國に神つとひし給ふといふに雷同せり

陽

詩小雅爾雅○按に此月純陰の月なれは却て陽といふ陽字をふるくかみなつきと訓り林道春十月を陽月といふ十月は坤の卦に當て純陰の月なり陽なきを嫌ふ故に無陽の月なれとも却て陽月といへり源君美も陽月のことさは漢にもふるくいひ傳へし所なり陽月を讀てカミナツキといひしはカミノツキといひしことは也と東雅にみえたり

陽月

壒嚢抄日本歲時記歲華紀麗事物別名○名義上に同したゝ月字を後に添し也

極陽

爾雅注○郭璞曰十月得㆑癸則曰㆓極陽㆒とみえたり按に癸は十幹の極十は數の極なり故に十月得㆑癸則極陽といふとおもはれぬ陽は十月の別號なり

かみなかり月

秘藏抄○按に禮記月令に雷收聲とあるを以て考合するに雷はかみなり和歌にも雷鳴をなるかみとよみ雷岳をかみをかとよませたりなかり月はなき月といふ義にてかみなき月といふへきをのへいひしなり雷鳴せぬ月の義明かなり

雷無月

義公(水府君)御說類聚名物考語意○名義上にいへるかことし

神去月

莫傳抄○按に是そ伊奘冊尊崩し給ふ月といふ說とよくあへれと莫傳抄の歌の意にては少したかへり出雲なる松の葉守の宮ゐには神去月となにをいはましとあるによれは普通にいへるか如く出雲國に日本國中の諸神あつまりたもふ義にちかし

はしめの冬

躬恒集○按に此月は三冬のはしめなれはしか名付

いと丶また秋の別そゑのはる丶
はけしき冬の空の氣色に
左京大夫行家
けふしこそ時雨もことに降まされ
思ひしことそ冬のはしめは
右大辨入道光俊
我袖の苔のみたれをいか丶せん
木枯ふきて冬は來にけり
神無月
衣笠內大臣
神無月染にし山の木の葉さへ
今は時雨とふりそそひぬる
前藤大納言爲家
神無つき時雨の染る木の葉とて
散るにも袖を又ぬらしつる
九條三位入道
神無月ゑくる丶頃といふことは
まなく木葉のふれは成けり
左京大夫行家
大あらきの木のはも仇に千早振
神無月こそ神さひにけれ

山たかみはれぬ雲ゐをたよりにて
さも時雨たる神無月哉
右大辨入道

かみなつき　〔釋名〕
日本書紀萬葉集古今和歌集○按に十月をかみな月といふは十は數の極なれは上なし月てふ義をとりてゑか名付たり西土にも服虔曰數滿曰ㇾ十といひ極陽と此月をいへるにをのつから義かなへり
十月
日本書紀萬葉集詩豳風○按に名義上に同し
神無月
秘藏抄奧義抄下學集世諺問答○按に此月純陰無陽の月なれはゑか名付たり陽靈を神といへるにより陽なき月といふ義にて神無月とはいふなりゑかるに又此月伊奘冊尊崩し給ふといふによりて神無てふ義にも解り世諺問答の説なり又出雲國に此月諸神集り給へは神無月といふよし奧義抄の説なれとも次說なり下學集も此義にゑたかへり詞林采要抄も同意なり且出雲にては神在月といふ又神月とも

孟冬　唐杜　甫

殊俗還多事、方冬變所ㇾ爲、破ㇾ柑霜落ㇾ爪、嘗ㇾ稻雪翻ㇾ匙、巫岫寒都薄、烏蠻瘴遠隨、終然減灘瀨、暫喜息蛟螭、

初冬作　元方　瀾

沆寥蕭瑟後、霽色却怡ㇾ人、霜已千林曙、天猶十月春、黃花蝶過ㇾ晩、白葦鴈銜新、野性自夸曠、非三闕絕二世塵一、

初冬　宋陸　游

平生詩句領二流光一、絕ㇾ愛初冬萬瓦霜、楓葉欲ㇾ殘看愈好、梅花未ㇾ動意先香、暮年自適何妨ㇾ退、短景無ㇾ營亦自長、况有三小兒同二此趣一、一窓相對弄二朱黃一、

孟冬　唐謝　良　輔

江南孟冬天、荻穗軟如ㇾ綿、綠絹芭蕉裂、黃金橘柚懸、

次仲庸初冬卽事　宋裘　萬　頃

常歲霜天分外晴、一谿如ㇾ練浸二氷輪一、今年風雨無二寧夜一、誰與二谿梅一作二小春一、

○和歌

躬恒集　はしめの冬

神無月紅葉のいろは吹風と

たきの水とそおとしはてつる

古今六帖　初冬

木枯の音にて秋はすきにしを

いまもこすゑに絕すふく風

かみな月ふりみふらすみ定なき

時雨そ冬のはしめ成ける

かみな月　つ　ら　ゆ　き

神無月かきりとや思ふ紅葉はの

やむ時もなく夜さへそちる

ちはやふる神無月こそ悲しけれ

誰を戀とかつねにえくるゝ

立田山にしきおりかく神無月

時雨の雨をたてぬきにして

新撰六帖　はつ冬　衣笠内大臣家良公

難波江の枯たる蘆のうちそよき

浦風さるく冬はきにけり

前藤大納言爲家

明るまて秋の別をおしむまに

またぬ冬さへ時雨きにけり

九條三位入道知家

歳華紀麗云、十月、日居二房星一、律中二應鐘一云々、

通雅云、大月良月、皆十月也云々、

事物別名云、十月孟冬　上冬　陽月　良月　小春　日躔尾辰次析木　亥律應鐘

月令廣義云、秦正、秦以二十月一爲二歳首一、爲二改歳一、

五雜俎云、十月謂二之陽月一、先儒以爲純陰之月嫌二於無一レ陽、故曰二陽月一、此臆說也、天地之氣有二純無一、必有二純陰一、豈能諱レ之、云々、大凡天地之氣、陽極生レ陰、陰極生レ陽、當二純陰純無用レ事之日一、而陰陽之潜伏者、已駸々萌蘖矣、故四月有二亢龍之戒一、而十月有二無月之稱一、即天地之氣、四月多寒、而十月多暖、有二桃李生レ華者一、俗謂二之小陽春一、則陽月之義、斷可レ見矣、

○詩歌

節序詩集

河南府試十二月樂詞　十月　　李長吉

玉壺銀箭稍難レ傾、釭花夜笑凝二幽明一、碎レ霜斜舞上二羅幕一、燭龍兩行照二飛閣一、珠帷怨臥不レ成レ眠、金鳳刺衣著レ體寒、長眉對レ月鬪二彎環一、

擬二李長吉十二月樂辭一　十月　　吳文可

小春一花西月黄、縞衣美人吹二暗香一、錦衾羅薦曉寒薄、夢中持贈雙明璫、霜花莫レ灑相思樹、愁殺孤棲金鳳凰、

題二耕織圖一　十月耕　　趙子昂

孟冬農事畢、穀粟既已藏、彌望二四野一空、藁秸亦在レ塲、朝廷政方レ理、庶事和二陰陽一、所以頻歳登、不レ憂二旱與一レ蝗、置レ酒燕二鄉里一、尊老列二上行一、殽羞不レ厭レ多、魚羔復烹レ羊、縱飲窮二日夕一、爲レ樂殊未レ央、禱レ天祝二聖人一、萬乘長壽昌、

十月織　　同

豐年禾黍登、農心稍逸樂、小兒漸長大、終歳荷二鋤钁一、目不レ識二一字一、每念レ心作レ惡、東隣方迎レ師、收拾令二人學一、後月日南至、相賀因二舊俗一、爲レ女裁二新衣一、脩短巧二量度一、龜手事二塞向一、庶禦二北風虐一、人生眞可レ嘆、至レ老長力作、

佩文齋詠物詩選

孟冬蒲津關河亭作　　唐呂溫

息レ駕非レ窮レ途、未レ濟豈迷レ津、獨立大河上、北風來吹レ人、雪霜自レ茲始、草木當更新、嚴冬不二肅殺一、何以見二陽春一、

良月

佐傳莊公十年曰公父叔以二十月一入曰良月也就二盈數一也

應鐘

十月律也律歷志曰言陰氣應二亡射一該二藏萬物一而雜レ陰閡レ種也位二於亥一在二十月一

始冰

此月純陰用事故地水始冰也

北窓瑣談云本邦の俗十月を神無月といふ和書を說く人種々の異說あれとも皆牽强附會の說にして信するに足らす余考ふるに本邦伶倫家用る律呂の配當壹越律を黃鐘律に當て丶十一月の律とす故に十月の律は上無律に當る是に依て十月を上無月と云なり

詩(豳風)云十月隕籜云々

又云十月蟋蟀入二我牀下一云々

又云十月穫レ稻云々

又云十月納二禾稼黍稷重穋禾菽麥一云々

又云十月滌レ場云々

又(小雅)云采薇采薇薇亦剛止曰レ歸曰レ歸歲亦陽(カミナツキ)止云々

禮記(月令)云、孟冬、月日在レ尾、昏危中、旦七星中、云々、

律中二應鐘一云々、

左傳(莊公十六年)云、公父定叔、出二奔衞一、三年而復之、曰不レ可レ使下共叔無二後於鄭一、使下以二十月一入上、曰良月也、就二盈數一焉、

爾雅云、十月爲レ陽、

又注云、十月得癸、則曰二極陽一、

史記(律書)云、十月也、律中二應鐘一、應鐘者陽氣之應、不レ用レ事也、其於二十二子一爲レ亥、亥者該也、言陽氣藏二於下一故該也

又(天官書)云以二十月一與二角亢一晨出曰二大章一云々、

天中記云、史、十月、其名大章、

史記(封禪書)云、秦以二冬十月一爲二歲首一、

玉燭寶典引二附說一云、十月周之蜡節、秦之歲首、

荆楚歲時記云、十月朔日、黍臛、俗謂二之秦歲首一、

淮南子(時則訓)云、孟冬之月、其音羽、律中二應鐘一其數六云云、

白虎通云、十月謂二之應鐘一何、鐘動也、言萬物應レ陽而動下藏也、

荆楚歲時記云、十月天氣和暖似レ春、故名曰二小春一、

元帝纂要云、十月孟冬、亦曰上冬開冬云々、

に雷聲ををさむる時なれは雷無月なる事みな月の所にいふか如くなるへし

語意云十月は除月にて雷のならねはかみ無月といふ六月は專ら雷の鳴故にむかひて此名あり雷をかみとのみいへる事古への常なり

和訓栞云かみなつき十月をいふ十は數の極なれは數皆月の義といへと神嘗月の義なるへし我邦の古へも西土にも神嘗祭は十月なりし事其證多し古說に神無月の義とし出雲の故事をいひ傳へり大物主の神の八百萬神を帥て天にのほりたまふは此月也と出雲國造家の說也或は雷無月の義なりといへり

速水見聞私記云神無月俗語ニ神事無之月故如此稱ト云又十月ハ十ノ字數ノ極也此次者十一十二ト云仍テカミナ月ト云

歲時語苑云神無月十月之和名也

藝苑日涉云十月謂二之上無月一

按上無本邦律名「上無此讀云二加彌摸一」本名二鳳音一樂家相傳爲二應鐘一應鐘十月律也故呼二是月一爲二上無一月名呼爲二加彌那詩一義相通俗或作二神無一以二國讀近一誤耳

毫品通考云十月ハ純陰ノ時ナル故ニ速ニ一陽來復ノキサシアリテ還温ナルモノ也故ニ小春トモ陽月トモ言ナリ

和名類聚鈔云十月孟冬云々

年中行事秘抄云、十月、月令曰、孟冬之月、日在尾、斗建レ亥、律中二應鐘一、

拾芥抄云應鐘十月

壒囊抄云　十月　應鐘　孟冬　初冬　陽月　玄英上冬

下學集云應鐘十月云々

藻鹽草云、應鐘漢　良月同　小春同　始氷同

日本歲時記云十月の異名　孟冬　陽月　良月　律を應鐘といふ

歲時語苑云十月神無月（カミナツキ）

愚按神無月之說紛亂未レ見二其正理一私考十月也於レ卦爲レ坤純陰用レ事一陽未レ復而無レ陽月也神者陽之靈無レ陽謂二之無レ神不二亦宜一乎古辈却謂二之陽月一者雖レ爲二純陰月一所四以見三陽未二嘗絕一也

又云孟冬

字彙曰孟始也乃初冬意十月冬之始也

や答此月を神無月と申は伊弉册尊崩し給ふ月なれは申なりまた四方の木末ちりすさむ頃なりとて葉みな月と申人ありいとおほつかなしまた諸神いつもの大やしろへ下給へは申ともいへり

兩朝時令云十月ヲ陽月ト云十月ハ坤ノ卦ニ當テ純陰ノ月也陽ナキヲ嫌フ故ニ無陽ノ月ナレトモ却テ陽月ト云リ詩小雅采薇篇ニ歲又陽止ト云ルヲ古點ニ陽ノ字ヲカミナツキト訓セル是故也又十二律ノ調子十月應鐘ノシラヘヲ日本ニテ上無調ト稱ス年齋拾唾云十月を小春と云ことは天のときあたゝかにして春に似たるか故也云々年中行事略式云十月は一陽一つとゝまつてはつする六月十万(本ノマヽ)して十月十に終り又元の一へかへるゆゑ是を神無月といふなり

日本歲時記云十月の和名を神無月といふ天下のもろもろの神出雲の國にゆきてこと國に神なきかゆゑにかみなし月といへるを略せるよし奧義抄にゑるせり

詞林采要抄に出雲にては神無月を神在月と云又神月ともいへり神在の浦神在の社あり諸神これにあつまり給ふよし見えたりゑかれとも今出雲國の人に尋ぬれはかの國にても神無月と稱するよしいへりことにこの月天下の諸神出雲にあつまり給ふ事神書の中においても我いまた其說を見すけにその理なき事なるへしこれ人意を以て神明をおしはかるといふへきにや又卜部家の說に此月は陰神崩御の月なれは神無月といふ陰神とは伊弉册尊をいふとありされとも是又鑿說なるへしなんそ陰神崩御の月のみをとりて月の名に用ゆへけんや篤信曰此月を神無月といへるは純陰の月なれは陽無月といへる意なり陽をかみと訓するは鬼は陰の靈なり神は陽の靈なり鬼神を和語におにかみと訓す陰は音おん和語におにと訓す鬼なり錢をせにと訓し紫苑をしおにと訓するか如し陽はかみなり神なり此故にかみとは陽をさしていへり神無月とは陽なき月なれはなり聖人却てこれを陽月とのたまひしは純陰の月といへとも陽いまたかつて絕さる事をゑめさんかためなり或人のいはく十月の律本朝にてこれを上無と云故に十月を上無月と稱す古來神無月とかけるは傳稱のあやまり也

類聚名物考云十月かみな月このつきの名古來さまさま說々ありてさたかならす俗說も甚た多し神無月とも上無調いふに依て無陽なといふもあまりに事むつかし月令

は陽と詩小雅いひ十月を爲陽と爾雅いひ十月得レ癸則曰二極陽一と同上注いひ陽月と月字を添しは後世の事にて事物別名にみえたり孟冬は月令に「孟冬之月日在レ尾とみえ律中二應鐘一と同上みえたり大章の名目は以二十月一與二角亢一晨出曰二大章一と史記天官書謂るを始とせり良月の名いとふるし左傳に見えたり上冬開冬は元帝纂要に出たり大月は通雅に十月也と記せれと出所未た見あたらす始冰は月令に立冬之月水始冰といへるによる小春は和名にあらす漢名なりいはゆる和暖似レ春故名曰二小春一と荊楚歲時記みえたり小陽春は初學記にいて大素は博雅にいて吉月は後漢書にいて正陰月は西京雜記にいてたり

日本書紀神武天皇紀云、甲寅、其年冬十月丁巳朔辛酉、天皇親帥二諸皇子一、舟師東征云々、

萬葉集卷第八云十月鐘禮爾相有黃葉乃吹者將落風之隨

右一首大伴宿禰池主

又卷第十二問答歌云十月鐘禮乃雨丹沾乍哉君之行疑宿可借疑

又同上云十月雨之間毛不置零爾西者誰里之間宿可借益

右作者未詳

古今和歌集卷第五秋歌下云「神無月時雨もいまたふらなくにかねてうつろふかみなひのもりよみ人しらす

秘藏抄云十月かみなつき歌に「神無月しくれて後の梢こそからくれなゐの錦なりけれ素性

奧義抄云十月天下の諸神出雲の國に行てて國には神なきか故に神無月といふを誤れり

八雲御抄云十月かみなつき出雲國には鎭祭月と云

秘藏抄云十月かみなかり月歌に「四方山はからくれなゐに成にけりしくれひまなき神なかり月

莫傳抄云神去月十月歌に「出雲なる松の葉守の宮居にはかみさり月と何をいはまし

藏玉集云十月時雨月歌に「落葉して木のはの後の時雨月冬の初に何をそめまし

又云拾月歌に「秋の色のかはりはてぬる拾月や松より外は殘る木もなし

又云初霜月歌に「草も木もはつ霜月の朝ほらけなかめもしろき人のをちかた

下學集云神無月十月諸神皆集二出雲大社一故云二神無月一也出雲國神有月云也

世諺問答云十月を神無月と申は何のゆゑにて侍るに

古今要覽稿卷第三十八

時令部

かみなつき　十月

かみなつきは十月の和名なり皇國にてかみな月の名目の始てみえしは甲寅年冬十月丁巳朔辛酉と（日本書紀神武天皇紀）よまれたり夫より以下は十月鐘禮爾相有黃葉乃と（萬葉集）いひ十月鐘禮乃雨丹とも十月雨之間毛不置とも（同上）みえたり古今和歌集以下は擧るにいとまあらす扨十月を神無月といふは雷のなき月ゆゑかみな月と（義公御隨筆）仰られし又神無月といふによりて無陽なといふもあまりに事むつかし月令に雷聲ををさむる時なれは雷無月なるへしと（類聚名物考）いへり又說に應鐘のゑらへ日本にては上無調といへり應鐘は十月の律なれは上無月といふ義也と（兩朝時令速水見聞私記秘苑日渉）いへり十月の律上無調といふ事ははやく拾芥抄にみえたりされは此月を上無月と書てもゑかるへしと思ひしにかみな月と云は上無月なるへきか元は上を書して後に神の字にかへたるは上無と書ては名目あたる所ありてよろしからすよりて神の字を書歟と（速水見聞私記）いへり又十は數の極也と（同上）いひ左傳に以二十月一入曰良月也就二盈數一焉といへるによれは十は盈數にて上なきの稱故に上無月といひしにやされは此三說のうちをとるへきなり西土に陽月といふ十月は坤の卦に當りて純陰の月也陽なきを嫌ふ故に無陽の月なれとも却て陽月といへり（兩朝時令日本歲時記）天下の諸神出雲の國に行給ひてこと國には神なきか故に神無月といふ（奧義抄）伊弉冊尊崩し給ふ月なれは神無月と申なり（世諺問答）四方の木すゑちりすさむ頃なりとて葉みな月と申人ありと（同上）みえたり陽月のことときは漢にもふるくいひ傳へし所なり其中陽月を讀て神無月カミナツキといひしはカミノツキといひしことは也と（東雅）いひ又神嘗月といふ說もあれといつれも信しかたし西土にて國於レ是乎蒸嘗家於レ是乎嘗祀と（國語）いへるなとにもとつきて神嘗月といふ義にとりしとみえて我邦の古へも西土にも神嘗祭は十月なりし事其證多しと（和訓栞）いひしなりさて異名のことはかみなかり月と（秘藏抄）いひ神去月と（莫傳抄）いひ鎮祭月と（八雲御抄）いひ時雨月拾月初霜月と（藏玉集）いへり西土にて

同上○同上

霜月

月令廣義引下集古錄韓明府修二孔子廟一碑上通雅○按に詩豳風に九月肅霜と云て此月より霜降はしむる故に名とせり

霜辰

月令廣義○按に此月霜降始る時なる故にいふ辰は時と云義なり

朽月

通雅○按に通雅に朽月九日也といひて謂二多霜一也と釋せり兎かれは此月露霜多く降りて萬物朽やすき月なれは名付し也

竹酔月

同上○名義未詳

玄
爾雅○按に九月の別名なるよし郭璞注に見えたり
終玄
同上注○按に此月得レ壬時の名なり郭璞曰九月得レ壬則曰二終玄一と見えたり
玄月
瑤囊鈔藻鹽艸國語元帝纂要事物別名○按に玄月の名目いとふるし越語に至二於玄名一王召二范蠡一と國語に見えたるを始とせり
天睢
史記天官書天中記○按に以二九月一與二翼軫一晨出曰二天睢一白色大明と天官書いへるによれは星の名をもて此月の名とせり
暮秋
元帝纂要○名義字のことし
末秋
同上○名義上におなし
暮商
同上○按に秋を素秋とも素商ともいへは暮商は暮秋といふかことし
季商
同上○名義上におなし
杪秋
同上○按に杪こすゑと訓りしかれは末秋といふにおなし
授衣
同上○按に詩豳風に七月流火九月授衣とあるによりて後世此月の名目となれるなり
菊月
同上○按に此月菊花開ぬれは月の名とせり七月を蘭月八月を桂月といふ類におなし
高秋
梁簡文帝之詩歲華紀麗○按に歲華紀麗に九月をさしていへり秋は天高朗なるかゆゑなり
勁秋
事物別名○名義未詳
末垂
同上○名義同上
歲晏

あらし吹そふ長月の頃

右大辨入道光俊

いたくも袖をぬらしつる哉

長月のありあけの空のむら時雨

○釋名

なかつき

日本書紀萬葉集拾遺和歌集○按になか月の名義古くは夜長月上略といへり眞淵宣長等は伊奈我利月の上下を略きたりと云り

九月

日本書紀詩豳風○正月より九月に當る月なれはなり

いろとり月

秘藏抄○按に此月千艸萬木をのかさま〳〵色にいつるをもて名付しなり

菊開月

莫傳抄○按に此月もはら菊花開きぬれはえかいへり七月を蘭月といふかことし

紅葉月

同上○按に此月衆木紅葉するゆゑなり

小田刈月

藏玉集藻鹽艸○按に此月すへて稻をかりとれはえか名付しなり詩豳風には十月穫レ稻とあれと是は風土異なれはなるへし

寢覺月

同上○按に此月至て夜長けれは夜中寢覺かちなるを以て名付しなり

こするの秋

八雲御抄○按に末の秋といふ義なり元帝纂要に杪秋の名目みえたり義是におなし

祝月

日次記事○按に此月を世俗きらへる故に祝ひて祝月と名付し也一年の中正五九月を俗忌レ之此三月は何れも祝しことふく也

季秋

和名類聚鈔尚書禮記○按に此月三秋の末月なれは孟仲季の次第をもてかそふるなり

無射

年中行事秘抄禮記月令史記律書○按に律名なり史記律書白虎通等に委く解けり

不レ顧、鞭二吾駒之不戒一兮、眇一世而獨鶩、儼章甫以自好兮、安知越人之異レ容、恃所持之不レ欺兮、謂彼此之情同、夫何事物之故兮、固少愚而老知、彼善惡豈有レ違兮、固繫夫一世之賤貴、指レ礫以爲レ玉兮、人皆知其不レ然、衆既訛而莫レ返兮、事隨レ信而名遷、僞言實二於衆舌一兮、至寶賤二於獨知一、正無レ助者必危兮、惡乘レ朋而或濟、決二大河一而東奔兮、挽二余舟一而上泝、嗟爾櫼之幾何兮、蛟龍鬱其方怒、外既揆而度レ內兮、考二舊好之同異一、韜二九襲一以深藏兮、固可レ死而不可試、卷杜蘅之幽佩兮、苞二芳蘭之翠衣一、畏二久畜之不レ揚兮、時竊陳以自戲、怨二所賫之不售一兮、非二達人之宏規一、彼廢興之命兮、何憂樂之足レ繫、奏二吾曲之憤怨一兮、酌二吾酒之冽淸一、攬二芳桂與二秋菊一兮、聊以駐二吾之頹齡一、吾又將レ之二夫深山一兮、遂絕レ世而遠去、身九浴而後衣兮、口三滌而後咀、納二氷霜於胸中一兮、蕩二焦高之宿汚一、求二仙人之奇術一兮、與二彭咸一乎爲レ侶、彼君子之高蹈兮、曷急世之有レ知、聊逍遙以卒レ歲兮、考二天命一而不レ疑、

古今六帖

なか月　　これのり

さほ山のはゝその色はうすけれと
　秋はふかくも成にける哉

月をみぬ月はなけれと長月の
　みしかくも有こよひはかりは

長月のしくれの雨にぬれとほり
　春日の山はいろつきにけり

長月の時雨の雨にやまきりの
　けふき我むね誰を見はやまん

新撰六帖

なかつき　　衣笠內大臣家良公

五十あまり老ぬる人のね覺には
　夜を長月のほともしらるゝ　　前大納言爲家

野へみれはをかやか下はうら枯て
　秋くれかたに成にける哉　　九條三位入道知家

秋の夜のこれや長月里人の
　千たひ八千たひころもうつなり

秋のうちのおなし寒さもいやましに　　左京大夫行家

季秋　唐劉　蕃

江南季秋天、栗實大如ㇾ拳、楓葉紅霞擧、蘆花白浪穿、黄金花開香滿ㇾ把、煙草荒臺誰戲ㇾ馬、楚雲楠楠雁西流、秋色淒人正蕭灑、淚花蔌蔌啼二新愁一、纏絃五色彈二箜篌一、寶香不ㇾ煖茱萸帳、明月空過翡翠樓、

晩秋閒居　唐白　居　易

地僻門深少二送迎一、披ㇾ衣閑坐養二幽情一、秋庭不ㇾ掃携二藤杖一閑踏二梧桐黄葉一行、

秋夜　唐耿　湋

高秋夜分後、遠客雁來時、寂寂重門掩、無三人問二所思一、

節序詩集云

九月一日遊二昭亭一在二宣州一　丁　復　古

山色江光帶二近郊一、道傍楊柳舞二寒條一、生生九日黄花酒、多在二西風白下橋一、千里客遊仍暮景、萬鄕人事又今朝、老來未ㇾ遣二登臣懶一、盡醉二東家一緣二王瓢一、

河南府試十二月樂詞　九月

李　長　吉

離宮散ㇾ螢天似ㇾ水、竹黄池冷芙蓉死、月綴二金鋪一光脉脉、涼苑虛庭空澹白、露花飛飛風草草、翠錦爛斑滿二層道一、鷄人罷ㇾ唱曉瓏璁、鴉啼二金井一下二疎桐一、

擬二李長吉十二月樂辭一　九月　吳　文　可

(see above)

題二耕織圖一二十四首　九月　耕　趙　子　昂

大家饒二米麪一、何嘗百室盈、縱復人力多、舂磨常不ㇾ停、激水轉二大輪一、礧礲亦易ㇾ成、古人有二機智一、用ㇾ之可ㇾ厚ㇾ生、朝出連二百車一、暮入還滿ㇾ庭、勾稽數多少、必假二布算精一、小人好ㇾ爭ㇾ利、晝夜心營營、君子貴ㇾ知ㇾ足、知足萬慮輕、

同　織　同

季秋霜露降、凜凜寒氣生、是日當ㇾ授ㇾ衣、有二布織未ㇾ成、天寒催二刀尺一、機杼可ㇾ無ㇾ營、敎ㇾ女學二紡纑一、擧ㇾ足疾且輕、舍南與二舍北一、嘒嘒聞二車聲一、通都富豪家、華屋貯二娉婷一、被ㇾ服雜二羅綺一、五色相間明、聽說貧家女、惻然當ㇾ動ㇾ情、

御定歷代賦彙卷第十二　歲時

暮秋賦　宋張　耒

嗟余志之莫ㇾ就兮哀二天時之不予一謀、歲冉冉以將ㇾ暮兮、無三以蕩二吾之幽憂一、昔吾之既有ㇾ知兮、獨信ㇾ道而

史記（律書）云、九月也、律中無射、無射者、陰氣盛用事、陽氣無餘也、故曰無射、其於十二子爲戌、戌者言萬物盡滅、故曰戌云々、

又（天官書）云、閼茂歲歲陰在戌、星居巳、以九月與翼軫晨出、曰天睢、白色大明、其失次、有應見東壁云々、

淮南子（時則訓）云、季秋之月、其音商、律中無射、其數九、

白虎通云、九月謂之無射、何、射者終也、言萬物隨陽而終也、當復隨陰起、無有終巳、

元帝纂要云、九月季秋、亦曰暮秋末秋暮商季商杪秋、亦曰授衣、亦曰玄月菊月、

歲華紀麗云、九月日在角星、律中無射、授衣之月（詩九月授衣）

又云、高秋（亦曰暮秋末秋殘秋杪秋、亦曰授衣）

事物別名云、九月　季秋　杪秋　暮商　菊月　淒辰　勁秋　玄月　末垂　授衣　歲晏　日躔房　辰次大火　戌律無射

月令廣義云、集古錄、韓明府修孔子廟碑曰、永壽二年歲在涒灘、霜月之靈、皇極之日、蓋九月五日也、又曰霜辰皇極日、九月五日也、

通雅云、霜月朽月、九月也、博南引宋詩、九月不虛爲朽月、謂多霑也、云々、或曰、稱菊月竹醉月、與韓鄂浴蘭月、不尤可咲乎、

○詩賦幷和歌

佩文齋詠物詩選

秋夜　　梁　簡文帝

高秋度函谷、墜露下芳枝、綠潭倒雲氣、青山銜月規、花心風上轉、葉影樹中移、外遊獨千里、夕歎誰共知、

晚秋　　北周　庾信

淒淸臨晚景、疎索望寒階、濕庭凝墜露、摶風卷落槐、日氣斜還冷、雲峯晚更霾、可憐數行雁、點點遠空排、

山閣晚秋　　唐　太宗

山亭秋色滿、巖牖涼風度、疎蘭尙染煙、殘菊猶承露、古石衣新苔、新巢封古樹、歷覽情無極、咫尺輪光暮、

晚秋　　唐　元稹

竹露滴寒聲、離人曉思驚、酒醒秋簟冷、風急夏衣輕、寢倦解幽夢、慮閒添遠情、誰憐獨欹枕、斜月透窗明、

秘藏抄云九月いろとり月歌に「常盤山いろとり月になりぬれは錦をさらす心地こそすれ菅原忠享

莫傳抄云、菊開キクサキ月九月歌に「こと草はうらかれはてて花もなし菊咲月ははなをこそみれ

又云紅葉月同歌に「芳野山青根か峯のもみち月時雨降來てしられけるかな

藏玉集云、九月紅葉月歌に「たつた山まなくしくる比とてや紅葉の月の色をそふらん

又云、小田刈月歌に「さひしさは鳴立くれの露しけみ袖打はらふ小田刈の月

又云、寢覺月歌に「いく度かおなし枕のぬ覺月秋にはたえぬ長き夜すから

藻鹽艸云、なか月季秋漢　菊月同　玄月同　無射同　肅霜同

日次記事云、九月祝月、自ニ今日一至ニ九日一、武家幷地下良賤、各着レ袷、今日互相賀、俗曰ニ祝月一、凡一年中、正五九月凶月也、故忌レ之、却謂ニ祝月一、

日本歲時紀云、九月の異名　季秋　玄月菊月律を無射と云云々もろこしにも九月の異名を長月と稱し正五九月をすへて三長月と號す

歳時語苑云九月季秋九月者秋時之季月故云霜月九月之中霜降霜始降故云亡射九月律也亡亦作レ無律歷志云射猒也言陽氣究レ物而使下陰氣畢剝ニ落之一終而復始亡中猒已上位ニ於戌一在ニ九月一菊月此月菊花得時盛開故云爾長月夜漸長故曰ニ夜長月一今畧云爾乃九月和名也

毫品通考云、九月無射　菊月　長月　晩秋　暮秋

季秋　杪秋　殘秋　無射トハ律名也射ハ終也言心ハ萬物陽ニ隨テヲハリ亦陰ニ隨テ起ルヘシヲハリヤムト言事無シ故ニシカ言フ菊月ハ此月サカンニ開ク故也

尙書胤征云、季秋月朔、辰弗レ集ニ于房一、瞽奏レ鼓、嗇夫馳、庶人走云々、

詩豳風云、七月流火、九月授衣云々、

又同上云、九月叔苴云々、

又同上云、九月築ニ場圃一云々、

又同上云、二之日鑿レ冰沖沖、云々、九月肅霜云々、

春秋隱公云、元年九月、及ニ宋人一盟ニ于宿一、

禮記月令云、季秋之月、日在レ房、昏虛中、且柳中、云々、

其音商、律中ニ無射一云々、

國語越語云、至ニ於玄月一、王召ニ范蠡一云々、

爾雅云、九月爲レ玄云々、

又注云、九月得レ壬、則曰ニ終玄一、

曰二天唯一と史記天官書みえたり暮秋末秋暮商季商抄秋授衣菊月と元帝纂要見えたり授衣は詩豳風七月流火九月授衣とみえたるによれり高秋の名は梁簡文帝之詩歲華紀麗等にいでたり勁秋末垂歲晏は事物別名にいて霜月朽月竹醉月の名は通雅にいてたり

日本書紀神武天皇紀云、東征年、戊午九月甲子朔戊辰、天皇、陟二彼菟田高倉山之巓一云々、

萬葉集卷第八云、九月之其始雁乃使爾毛念心者可聞來奴鴨

右遠江守櫻井三奉二天皇一歌

又卷第十詠二黃葉一歌云、九月乃鐘禮乃雨爾沾通春日之山者色付丹來

又同上云、九月白露負而足日木乃山之將黃變見幕下吉

又詠月歌云、白露乎玉作有九月在明之月夜雖見不飽可聞

古今和歌集卷第五秋歌下詞書云なか月のつこもりの日大井にて云々

秘藏抄云九月なかつき歌に「わかやとのまかきのうちのしら菊もなか月にこそ盛りなりけれ貞文

奥義抄云、九月夜漸くなかき故に夜長月といふを誤れり

八雲御抄云、九月なかつきこすゑの月

下學集云、長月夜長時分也

類聚名物考云、九月なか月古說に夜の長きをいふとありさも有へき云々

跡部光海翁十二月倭訓云、長月穗長月也

語意云、九月を奈我月と云は伊奈我利月の上下を略きいへり稻は九月に苅をさむる也

和訓栞云なかつき九月をいふ長月の義夜長月ともいへり拾遺集に夜を長月とよめり漢にもふるくいひ傳へたり

毫品通考云長月とは夜長月と言略語なり

和名類聚鈔云、九月季秋云々

年中行事秘抄云、九月月令云、季秋之月日在レ房、斗建レ戌、律中二無射一、

拾芥抄云無射九月

下學集云無射九月

壒囊鈔云、九月無射　季秋　暮秋　窮秋　杪秋　杪商　季商　季白　玄月

古今要覧稿巻第三十七

●時令部

●なかつき　九月

なかつきは九月の和名なりさて皇國にてこの月の名始めてみえしは戊午九月(ナカツキ)甲子朔戊辰と（日本書紀神武紀）ゑるせるそはしめなるゑかれとも此前より此月の名目のみにあらす月々の和名は有しなるへし歌にふるくよめるは石田王卒之時山前王哀傷作歌に角障石村之道(ツノサハフイハムラノミチ)乎云々九月能四具禮能時者黄葉乎折挿頭跡(ナガツキノシグレノトキハモミヂバヲヲリテカザスト)云々と（萬葉集巻第三雜歌）みえたり猶同集になかつきとよめる歌數多あり擧にいとまあらす扨なか月の解をなせるはみつね忠岑にとひ侍ける歌によるひるの數はみそちにあまらぬをなと長月といひ初けんとよめる答に秋ふかみ戀する人のあかしかね夜をなか月といふにやあるらむ（拾遺和歌集巻第九雜下）見たるを初にて九月夜漸くなかき故に夜長月といふを誤れりと（奥義抄）いひ長月夜の長き時分也と（下學集）いひ九月なか月古説に夜の長きをいふとありさも有へきと（類聚名物考）いひなかつき九月をいふ長月の義夜長月ともいへりと（和訓栞）解るも皆拾遺和歌集の歌の意とおなしく此月分て夜の長けれは稱せるなり然るを加茂眞淵は九月をな我月と云は伊奈我利月の上下を略きいへり稻は九月に苅をさむる也と（語意）いへるを本居宣長は是によりて師の考に九月は稻苅月なりといひ又九月は稻熟月(イネアカリ)にてもあらんか但シ賀を濁るは刈(カリ)にても熟(アカリ)にてもいかゝなるは音便にて濁るかはた異意か決めかたしと（古事記傳訶志比宮巻）いへり凡秋三月みなから稻の事もて月の名を成事既に七月八月の考にいひ置り又此月の異名をいろとり月と（秘藏抄）いへるを始として菊開月紅葉月と（莫傳抄）いひ小田刈月寢覺月と（藏玉集）いへり漢名を季秋と（和名類聚鈔）見えしは尙書（胤征）に季秋月朔辰弗レ集二于房一といへるによりしなり無射は律名なり季秋之月日在レ房斗建レ戌律中二無射一と（年中行事秘抄）いふは禮記月令によれり肅霜と（藻鹽草）みえたるは詩之豳風に九月肅霜といへるによれり異名を玄といへるは九爲レ玄と（爾雅）みえしを始とせり又九月得レ壬則曰二終玄一と（同上注）いへるによりて終玄の名あり玄月の出所は國語なり天睢の名目は以二九月一與二翼軫一晨出

○正誤

歲時語苑云仲秋云〻端正月
韓昌黎詩曰三秋端正月云々端正言月之圓滿也故云也○按に韓昌黎の詩の趣向にては八月の名目にあらさる事明かなるを此月の名とおもひて鈴木學春は書載しなるへし三秋端正月といへるは七八九月の三秋わきて月形端正にして光をまし圓滿なるゆへに三秋端正月と作れるを解しあやまりて仲秋の名とせしはいかゝ

毫品通考○按に此月鴈來るよし禮記月令にみえたりよりていふなるへしされと西土の書に未二見當一且和名めきたれは皇國にて稱呼せる名成へけれと古書に不ㇾ出

燕去月

同上○按に是も禮記月令に鴻鴈來賓し玄鳥歸とあるによれるなるへし

秋半

同上○此月三秋の半にあれはいふなり

南呂

拾芥抄禮記月令○按に律名也南呂者言陽氣之旅入藏也と史記律書にいひ八月云三之南呂一何南者任也言陽氣尙有ㇾ任生二薺麥一也故陰拒ㇾ之也と白虎通いへるによれは陰陽之氣任用あるをいへり

壯

爾雅○按に此月の別名なるよし郭璞注にみえたり

塞且

同上○按に八月得ㇾ辛則曰二塞且一と注にいへり

壯月

事物別名○按に月字を添しは古書にみえされは後世の事なり爾雅には皆一字を以て月々の名をなせり

長王

史記天官書○按にもと星の名なれと此月に至て光照明なるを以ていふなり

大章

同上○按に名義上に同し星光大に章らかなるをいふなり

仲商

元帝纂要事物別名○按に秋の音商に當れは玄かいふなり仲商は仲秋といふかことし

桂月

同上○按に此月桂花開ぬれは名付しなり七月を蘭月といふかことく專ら其月に當りて衆美をなすを以て名とせり

素月

歲華紀麗○按に五色に配すれは秋は白色なり故に秋を白藏ともいへり素字白字と同義なれはいひ初しなり

八月

日本書紀萬葉集尙書舜典○按に月々の次第を以て呼也

葉月

奥義抄下學集日本歳時記歳時語苑○按に葉月とかけるは葉落月の義なるよし奥義抄にいへり是は漢武帝秋風辭に艸木黃落とあるによれり又禮記月令に仲秋之月盲風至といふ注に盲風至は疾風也と鄭玄いへり然れは此月の疾風にあひて木葉零落する義をとりて葉落月の名目をなせるにやあらん

なかの秋

躬恒集○按に此月三秋の中にあたるなり

仲秋

和名類聚抄尙書堯典禮記月令○名義上に同し

さゝはなさ月

秘藏抄○按に名義未詳

木染月

莫傳抄○按に此月諸木紅葉する月なるをもつて名付しなり

草津月

同上○按に此月專ら草花盛をなして美麗なるも只此一月のみなれはいふなりつはやすめ字なり

秋風月

藏玉集○按に禮記月令に仲秋之月盲風至とあるによりて秋風の名おこれり又四民月令に淸風戒ㇾ寒趣ㇾ織二縑帛一といへるも秋風月のこゝろにかよへり

月見月

同上○按に此月わきて月光明なるを以ていへり八月十五夜月を賞する事は時代さたかならすといへとも貞觀寬平の間にはしまりしならむたしかに八月十五夜の月を賞し玉ひし事は宇多天皇の寬平九年のよし本朝文粹に紀納言詩の序にみえたり故に世人八月見月といへり

紅染月

同上○按に此月衆木紅葉をなしぬれは紅染月と名付しなり

橘春

日本歳時記○名義不詳

鴈來月

江南仲秋天、鱓鼻大如レ船、雷是樟亭浪、苔爲累石錢

節序詩集

河南府試二十二月樂辭一 八月

李 長 吉

孀妾怨二長夜一、獨客夢歸レ家、傍レ簷蟲緝レ絲、向レ壁灯垂レ花、簷外月光吐、簾內樹影斜、悠々飛露恣、點綴池中荷、

擬二李長吉十二月樂辭一 八月

吳 文 可

蘋風夕起涼思多、新愁舊恨生二濃蛾一、雲兒鶺鴒返二故國一、瑤階落緯鳴二寒莎一、銅仙泓々泣二零露一、銀灣漾漾吹二涼波一、素娥徘徊白鸞舞、廣庭老樹今如何、

題二耕織圖一 八月 耕 趙 子 昂

白露下二百草一、莖葉日紛委、是時禾黍登、充積徧二都鄙一、在レ郊既千庾、入レ邑復萬軌、人言田家樂、此樂誰可レ比、租賦以輸レ官、所レ餘足二儲峙一、不レ然風雨至、凍餒及二妻子一、優游茅簷下、庶可二以足レ歲、太平元有レ象、治世乃如レ此、

八月 織 同

池水何洋々、漚麻水中央、數日麻可レ取、引過兩手長、織絹能幾時、織レ布己復忙、依々小兒女、歲晚嘆レ無レ裳、布襦不レ掩レ脛、念レ之熱二中腸一、朝緝滿二一籃一、暮緝滿二一筐一、行看機中布、計レ日漸可レ量、我衣苟已成、不レ憂天早霜、

新撰六帖はつき

衣笠內大臣家良公

秋もはや半になれや我せこか

かさしの萩もうつろひにけり

大 納 言 爲 家

久かたの雲井のかりのこしちより

初てくるや八月なるらん

左京大夫行家

紅葉つゝ後や散なんこのころは

いまたは月の神なひのもり

〇釋名

はつき

日本書紀秘藏抄八雲御抄新撰六帖〇按に稲の穂はり實のる月といふ義にてはつきと云なり又秘藏抄新撰六帖等の歌の意にては此月鴈初て來れは初來(ハツキ)の意にいへるなり是は禮記月令に仲秋之月云々鴻鴈來賓といへるによれるなり

ストト云リ燕去月トハ燕ハ社日ヲ知リテ歸來スル也社日トハ春ハ春分ニ近キ戊ノ日秋ハ秋分ニ近キ戊ノ日五穀ノ神ヲマツル是ヲ社日ト云也燕ハ春社ノ頃キタリテ秋社ノコロ去ル也故ニシカ云

尙書堯典云、分命二和仲一宅レ西、曰二昧谷一、寅餞二納日一、平二秩西成一、宵中星虛以殷二仲秋一云々、

又舜典云、八月西巡守至二于西岳一如レ初云々、

毛詩豳風云、八月萑葦蠶月條レ桑云々、七月鳴鵙、八月載績載玄載黃云々、

春秋隱公云、二年秋八月庚辰公及レ戎盟二于唐一、

禮記月令云、仲秋之月、日在レ角、昏牽牛中、旦觜觿中云云、其音商、律中二南呂一、

同上王制云、八月西巡守至二于西岳一如二南巡之禮一云々、

爾雅云、八月爲レ壯云々、

又注云、八月、得レ辛、則曰二塞旦一、

史記律書云、八月也、律中二南呂一南呂者、言二陽氣之旅入藏一也、其於二十二子一爲レ酉、酉者萬物之老也云々、

又天官書云、歲陰在レ酉、星居レ牛、以二八月一與レ柳七星張晨出曰爲二長王一作々在レ芒國其昌熟穀其失レ次有レ應見レ危曰二大章一云々、

淮南子時則訓云、仲秋之月、其音商、律中二南呂一、其數九云々、

白虎通云、八月謂二之南呂一何、南者任也、言陽氣尙有レ任、生二薺麥一也、故陰拒レ之也、

元帝纂要云、八月仲秋亦曰二仲商一、亦曰二桂月一、

玉燭寶典引二蔡邕中秋章句一云、今歷二中秋白露節一日在レ軫、六度昏明中云々、

荆楚歲時記引二述征記一云、八月一日作二五明囊一、盛二取百草頭露一洗レ眼、令二眼明一也、

歲華紀麗云、八月日在二翼星一、律中二南呂一云々、雷收レ聲、而分二彼素秋一、秋分之日雷乃收レ聲後五日蟄蟲坏レ戶水始涸

事物別名云、八月仲秋仲商壯月日躔角辰次壽星西律南呂

○詩歌

佩文齋詠物詩選

秋日　晉孫綽

蕭瑟仲秋日、飂戾風雲高、山居感二時變一、遠客興長謠、疎林積二涼風一、虛岫結二凝霄一、湛露灑二庭林一、密葉辭二榮條一、撫レ菌悲二先落一、攀松羨二後凋一、垂綸在二林野一、交情遠市朝、澹然古懷心、濠上豈伊遙、

仲秋　唐沈仲昌

古說に見ゆいふかし散初るとは柳桐の類は七月初秋に初めて九月十月に散はつれは此月その事見えす今按に是は月令に八月白露節の後五日に候鴈來とあり此月初めて鴈のきたれは初來月(ハツキ)なるをつきといふ詞の二つ重なれは一を略てはつきとはいふ成へし此例卯木月を卯月といふに相同し

日本歲時記云八月の和名を葉月といふ木の葉もみちておつる故葉をち月といふを略せるよし奥儀抄に見えたり

歲時語苑云八月葉月(ハツキ)八月之和名也此月也肅殺之陰氣行草木悉落葉故曰二葉落月一今略稱二葉月一

跡部光海翁倭訓十二月云葉月(ハツキ)稻葉月也稻葉茂ルヲ云フ

語意云八月を波月(ハ)といふは保波利(ホハリ)月の上下を略きいへり稻は皆八月に穗を張也

祕藏抄云八月さゝはなさ月歌に「きり〳〵すさゝはなさ月打わひて淺茅か原に聲よはるなり兼藝法師

莫傳抄云木染(コソメ)月八月歌に「松を見て名をそ忘るゝ木染月露やむなしき色やつれなき

又云草津(クサツ)月同歌に「色々に花咲てこそ忘られけれ草津月とはけふあすの露

藏玉集云八月秋風月歌に「荻の葉も露吹みたす音よりや身に忘みそめし秋風の月

又云月見月歌に「名にしおはゝ秋の半の空はれて光ことなる月そ見る月

又云紅染月歌に「時雨つゝはしの立枝も紅葉して紅染の月ふかきくれ

和名類聚抄云八月仲秋

拾芥抄云、南呂八月云々

下學集云、南呂八月

壒囊抄云八月　南呂　仲秋　仲商

藻鹽艸云、秋風月　月見月　紅染月 以上三名和歌あれとも藏玉集に引たれは略レ之

仲秋漢　南呂同　桂月同　剝事同 按に詩に剝棗と見えたれは事は棗の誤り歟

迎寒同

日本歲時記云八月の異名　仲秋　壯月　橘春　律を南呂といふ

歲時語苑云仲秋 秋者惣三月也七月八月九月也此八月三月之居レ中月故云爾　南呂八月律也

清秋 秋者天高寂寥氣清故云爾　四陰 此月四陰生二地上一　云々

毫品通考云八月南呂　鴈來月　燕去月　仲秋　秋半

仲商　深秋　南呂ハ律名也南ハ妊也言心ハ時物皆秀テ懷妊ノ象アリ呂ハ助也陰陽功ニ任テ陽ヲ助ケテ成功スル也鴈來月トハ禮記月令ニ仲秋ノ月鴻鴈來賓

和歌よりいてし名目也橘春といふ名目は漢名なるへけれと出所詳ならず只日本歲時記に見たれと確なる書に未二見當一鴈來月燕去月なといふは世俗の稱する名目にして古書に載されとも仲秋之月鴻鴈來賓と禮記月令いへるによりて名付し也燕去月と云ふは玄鳥歸と同上いへり玄鳥は燕を云鴈來月に對して名付しなり秋半と丶なふるも八月は秋三月の半なれはなりあけは又秋の中も過ぬへしとよまれたる定家卿の詠なとにもとつきて名付しならん新撰六帖はつきの歌に秋もはや半になれやと衣笠內大臣家良公もよまれたる漢名を仲秋と和名類聚抄みえしは尙書堯典に宵中星虛以殷二仲秋一といへるにより律名を南呂と拾芥抄いふは禮記月令に其音商律中二南呂一といへるにより異名を壯といへるは八月爲ㇾ壯爾雅みえしそ初なる又八月得ㇾ辛則曰二塞且一と同上注いへるによりて、塞且の名あり壯月といへるは八月壯月と事物別名みえたりされと壯月と月字を添しは後世の事なり長王の月は以二八月一與ㇾ柳七屋張晨出曰爲二長王一と史記天官書みえ天中記には八月其名長王とみえたり仲商は八月曰二仲商一又曰二桂月一と元帝纂要いへるによりて騷人なとの詩文の句中に八月といふへき所に仲商桂月なと丶塡ぬれは雅趣をなすによりてこれを用ひ素秋の名は歲華記麗に出たり

日本書記神武天皇紀云、戊午年秋八月甲午朔乙未、天皇使ㇾ徵二兄猾及弟猾一者、是兩人菟田縣之魁帥者也云々、

萬葉集卷第一引日本紀云、持統天皇三年己丑正月、天皇幸二吉野宮一八月幸二吉野宮一云々、

又同上云、朱鳥七年癸巳秋八月、幸二藤原宮地一云々、

後撰和歌集卷第六秋歌中詞書云あひしりて侍ける女のあたなたちて侍けれは久しくとふらはさりけり八月はかりに女のもとより云々

又云八月なかの十日はかりに雨のそほ降けるに云云

秘藏抄云八月はつき歌に「初かりの聲きこゆなりはつきたつ朝の原のうす霧のまに深養父

奧義抄云八月木のはもみちて落る故に葉落月といふをよこなまれり

八雲御抄時節部云八月はつき

下學集云葉月落葉時節也

藻鹽草云は月云々

類聚名物考云八月はつき草木の葉の散初る故に云と

古今要覽稿卷第三十六

●時令部

●はつき　八月

はつきは八月の和名なり葉月なともかけりさて此月の名は始てみえしは戊午年秋八月甲午朔乙未天皇使ﾚ徵ニ兄猾（エウカシ）及弟猾（オトウカシ）一と（日本書記）書しるされたれと五月蠅の文字既に神代の卷に出たれは其時代に月々の名目ありしも左るへからす朱鳥七年癸巳秋八月幸ニ藤原宮地一と（萬葉集卷一）記せるは朱鳥の年號天武天皇の御宇なれは神武天皇の御代より遙に年歷へたゝれり又萬葉集の歌にみなふつふ月長月なとの名目はよめれとは月とよめる歌みえす後撰和歌集には月はかりに又は月なかの十日計になとみえ八月はつきと（秘藏抄）いへれと此月の名義を沙汰せるは奥義抄に八月木の葉もみちておつる故に葉落月といふをよこなまれりといへるそ初なる漢武帝の秋風辭に秋風起兮白雲飛草木黃落兮鴈南歸とあるによれるか黃落の字葉落月の義に合り鴈南歸の字久方の雲井のかりのこしちより初てくるやはつき成らんとよめるに合り下學集日本歲時記歲時語苑等皆此說によれり秘藏抄歌に初鴈の聲聞ゆ也はつき立朝の原のうす霧のまに又新撰六帖爲家卿の歌に久方の雲井のかりのこしちよりはしめてくるやはつき成らんとあるに類聚名物考月令を引て此月初めて鴈の來れは初來月（ハツキ）なるを辭をはふきてはつきとはいふなるへしといへるは秘藏抄の歌とあへり亦一說は葉月稻葉月也稻葉茂ルヲ云フト（跡部光海翁說）いひ八月を波月といふは保波利月の上下をはふきいへり稻は皆八月穗を張也と（語意）いへり本居宣長も語意の說に左たかへり（委細に古事記傳訶志比宮の卷に辨し置けり）さて以上三說を合せ考ふるに古說新說ともに何れも理りなきにしもあらねと秋三月は稻の成熟する次第もて解かたしかるへし所謂七月をふくみ月といふは穗含むをいひ八月は穗張りみのる義もて名付る也いかにとなれは秋といふ名は百穀成熟の時をいふ穀物あき滿る義にとれるなれはかた〳〵秋三月は稻の事もてとくかたしかるへしさて此月の異名をさゝはなさ月と（秘藏抄）いひ木染月草津月と（莫傳抄）いひ秋風月月見月紅染（クレナヰソメ）月と（藏玉集）いへるも

いへるを皐月と書てさつきとよませたると同し

首秋

元帝纂要群芳譜○按に名義文字のことくはしめの秋といふ義也

上秋

同上○名義上におなし

肇秋

元帝纂要○按に肇ははしめの義也年始をは肇歳ともいへは是もはしめの秋と云義也

蘭秋

同上○按に此月蘭花盛をなし香をはなちて芬々然たる月なれは名付しなり皇國にて此月を女郎花月といふに似たり

蘭月

提要錄○按に名義上に同し

涼月

藻鹽艸日本歲時記群芳譜○按に名義異なる意あるへからす此月より涼氣催すゆへしか名付しなり

流火

事物別名○按に詩豳風に七月流火とあるによりて後世此月の名となれるなり

享菽

同上○按に是も詩同篇に七月烹ニ葵及菽一とあるによりて此月の名となれり

○正誤

淵鑑類函歲時部四云釋名曰七月謂ニ之夷則一何夷者傷也則者法也言萬物始傷被ニ刑法一也

按にこゝに釋名曰と引しはうけかはれす七月謂ニ之夷則一何といふよりして言萬物始傷被ニ刑法一也といふまて全く班固か白虎通の文なるをいかにして釋名と引たかへしやいふかし淵鑑類函は勅撰の書にて殊に精密の書なるへきにかくの如き事を校正の時見落せしはいかゝ

莫傳抄○按に是も七月七日夜二星を祭る故にしか名付しなり

秋初月（アキハツキ）

同上○按に此月秋の初なれは名付し也

女郎花月

藏玉集○按に此月專ら此花盛をなせは名付し也四月を卯花月といふかことし

七夕月

同上○按に此月七日の夕星を祭るを世人七夕といへるをもて七夕月と呼なり外に異なる義はあらす

親月（フツキ）

下學集壒囊鈔歲時語苑○按に親月ト云此月諸人親ノ墳墓ニ詣ツルカ故ニ爾曰と壒囊鈔にみえたり歲時語苑にとく所同意也

孟秋

年中行事秘抄禮記月令○按に孟は始也此月秋のはしめなれはしかいへるなり

初秋

和名類聚鈔唐人詩○名義上に同し

新秋

韓文○名義文字のことし

夷則

拾芥抄禮記月令○按に律名也史記律書に夷則言ニ陰氣之賊ニ萬物ー也といひ淮南子注にも夷傷也則法也ともいひ七月律謂ニ之夷則ー何夷傷則法也と白虎通にもときたるにて義いと明かなり萬物肅殺の時をいふなり

大晉

史記天官書天中記○按にもと星の名なりさるを此月にかきりて光いと明なるをもて終に月の名とせり

相

爾雅○按に名義不詳されとも郭璞注に月の別名也といへり

窒相

同上○按に七月得レ庚則云ニ窒相ー と爾雅注に郭璞見えたり

相月

事物別名○按に後世月の字を添しなり五月を皐と

風のたよりに秋はきにけり
左京大夫行家
身にしむはたえまもあらし荻原や
をひ〳〵に吹秋のはつ風
右大辨入道光俊
おもひやれなへて世にある人たにも
涙おつといふ秋の初風

ふつき　〇釋名

日本書紀秘藏抄八雲御抄〇按にふつきと此月の事を名付しは稻のほふくむ月なれはふゝみ月といふを畧せるなりすへて秋三月は稻の成熟の事もていひ夏三月は稻の生育の事もて月々の名とする事皆しかなり又稻の穗みゆるをもて穗見月と云義に取ても聞ゆ

七月

日本書紀萬葉集詩凾風〇按に正月より次第して七の數に當る月なれはなり

ふみつき

古今和歌集詞書秘藏抄奥義抄〇按に延喜の頃よりはやふみつきと此月をいひたるはふみともを二星に備へて祭る故にふみつきといふと見えたり時代はくたれとも奥義抄の説にていとたしかなり

文月

後撰集奥義抄下學集𡑮囊鈔〇按に名義上におなし

ふみひろけ月

藏玉集〇按に七月七日曝二經書及衣裳一不レ蠧と四民月令にみえたれは其義とおなしく文書をひろけさらす義をもて名つけしなり

文披月

藏玉集藻鹽艸〇名義上におなし

はつ秋

古今六帖新撰六帖〇此月秋の初なれは𠫇か呼なりめてあひ月

秘藏抄〇按に和漢共にふるくいひならはせるかことく此月牽牛織女の二星天漢に出て一年に一度つつ逢たまふも邂逅の事なれは二星共にめてゝ逢たまふ義にて𠫇か名付けし也

七夜月（ナヽヨ）

七月　李長吉

星依ニ雲渚ニ冷、露滴ニ盤中ニ圓、好花生ニ木末ニ、衰蕙愁ニ空園ニ、夜天如ニ玉砌ニ、池葉極ニ青錢ニ、僅厭舞衫薄、稍知花簟寒、曉水何拂々、北斗光闌干、

擬ニ李長吉十二月樂辭ニ

七月　呉文可

鳳凰枝頭一葉飛、碧流朱紱生ニ涼颸ニ、素紈團々恩愛衰、含レ宮嚼レ羽吹參差、瑤階露華霑ニ履綦ニ、星橋月帳愁ニ別離ニ、粉筵歡笑占ニ蛛絲ニ、

題ニ耕織圖ニ

七月耕　趙子昂

大火既西流、涼風日凄厲、古人重ニ稼穡ニ、力レ田在レ匪レ懈、郊行省ニ農事ニ、禾黍何旆々、礪以ニ他山石ニ、玉粒使ニ人愛ニ、大祀須ニ粢盛ニ、一々稽ニ古制ニ、是爲ニ五穀長ニ、異レ彼稊與レ稗、炊レ之香且美、可ニ用享ニ上帝ニ、豈惟足レ食人、一飽有レ所レ待、

七月織　同

七月暑尚熾、長日弄ニ機杼ニ、頭髻不レ暇レ梳、揮レ手汗如レ雨、嚶々時鳥鳴、灼々紅榴吐、何心娛ニ耳目ニ、往來亡ニ傴僂ニ、織爲機中素、老幼要ニ紐補ニ、青燈照ニ夜梭ニ、蟋蟀窗外語、辛勤亦何有、身體衣幾縷、嫁爲ニ田家婦ニ、歲々服ニ勞苦ニ、

古今六帖

初秋

はつ秋の空に霧たつからころも
袖の露けき朝ほらけかな　みつね

あつまちのいさめの里は初秋の
なかきよを獨あかす我なそ

こからしの秋のはつ風吹ぬるを
なとか雲ゐに雁のこゑせぬ

新撰六帖

はつ秋　衣笠内大臣家良公

白妙のころもて涼しうちま山
あさかせ吹て秋はきにけり　大納言爲家

ならひそと思ひなからもかなしきは
秋の始の夕くれの空　九條三位入道知家

かり初の柴のあみ戸を吹あけて

次和可翁新秋卽事　元許有孚

池亭殘暑去、樂事日相關、徑列霜前菊、窗招雨後山、好詩來二枕上一、爽氣滿二人間一、極目重臺晚、遙天一鶴還、

新秋卽事　唐皮日休

癡號多二于顧愷之一、更無二餘事可一レ從知一、酒坊吏到常先見、鶴料符來每探支、涼後定謀淸月社、晚來專赴白蓮期、共レ君無事堪二相賀一、人到金鼇玉鱠時、

和新秋卽事　唐陸龜蒙

聲利從來解破除、秋灘惟憶下二桐廬一、鸊鵜陣合殘陽少、蜻蛚吟高冷雨疎、辨伏南華論二指々一、才非元宴借書々、當時任使眞堪レ笑、波上三年學二炙魚一、

新秋早朝　王璘

宮井梧桐一葉飛、新涼先到侍臣衣、蒼龍闕上銀河轉、丹鳳樓頭玉漏稀、曉仗分行環二御輦一、夕郎鳴佩出二仙闈一、自憐虎觀叨陪從、簪筆慚レ無レ補二萬幾一、

孟秋　唐鄭槩

江南孟秋天、稻花白如レ氈、素腕慚二新藕一、殘粧妬二晚蓮一、

節序詩集　七月一日曉入二太行山一　李長吉

一夕遶レ山秋、香露溘二蒙菉一、新橋倚二雲阪一、候蟲新二露撲一、洛南今已遠、越衾誰爲熟、石氣何凄々、老莎如二短鏃一、

七月四首　韓仲正

水石雲山裏、歸來已九秋、隔レ城如二淺近一、隣寺始深幽、慧遠逢二脩靜一、文淵說二少游一、徑荒殊不レ掃、風葉上二牽牛一、

其二

地僻稀二人迹一、重林日自虛、鳥飛晨氣外、蟬噪晚涼初、餘潤從侵レ履、浮埃倦レ整レ書、撨漁時上下、閉レ戶又何居、

其三

水末芙蓉起、亭々綠且靑、墻猶承二片瓦一、窗不レ礙二疎星一、次第花擎レ蓋、縱橫葉展レ屏、石丁誰主者、仙豈待二沈冥一、

其四

擁レ砌叢生菊、何關老意多、澆レ花驚レ易レ燥、耘レ草喜成レ科、枕レ腊猶宜レ睡、餐レ香豈待レ哦、淵明藏不レ盡、滿把倚婆娑、

河南府試二十二樂詞一

歳華紀麗云、日在二張星一、律中二夷則一、河漢方秋、天地始肅云々、

天中記云、史七月其名大晋云々、

又引二提要錄一云、七月爲二蘭月一、

事物別名云、七月孟秋流火大慶烹萩相月日躔翼辰次鶉尾申律夷則

西域記云、秋三月、謂二頞濕縛庾闍月一、迦剌底迦月一、末伽始羅月一、當下此從二七月十六日一至中十月十五日上云云、

○詩歌

佩文齋詠物詩選

奉和初秋　北周 庾　信

落星初伏レ火、秋霜正動レ鐘、北閣連横レ漢、南宮應鑿レ龍、祥鸞棲二竹實一、靈蔡上二芙蓉一、自有南風曲、還來吹二九重一、

初秋夜坐應詔　唐 楊　師　道

玉琯涼初應、金壺夜漸闌、蒼池流稍潔、仙掌露方溥、鴈聲風處斷、樹影月中寒、爽氣長空淨、高吟覺二思寛一

早秋山居　唐 溫　庭　筠

山近覺二寒早一、草堂霜氣晴、樹凋窗有レ日、池滿水無レ聲、果落見二猿過一、葉乾聞二鹿行一、素琴機慮靜、空伴夜泉清、

旅中早秋　唐 劉　威

金威生止レ水、爽氣徧徧遙空、草色蕭條路、槐花零落風、夜來萬里月、覺後一聲鴻、莫レ問前程事、飃然沙上蓬、

早秋　唐 許　渾

遙夜泛清瑟、西風生二翠蘿一、殘螢委玉露、早鴈拂二金河一、高樹曉還密、遠山晴更多、淮南一葉下、自覺老煙波、

早秋山中　唐 李　山　甫

誰到山中語、雨餘風氣秋、煙嵐出二澗底一、瀑布落二牀頭一、至道亦非レ遠、僻詩須苦求、千峰有二佳景一、拄杖獨巡遊、

新秋夜雨　唐 僧　貫　休

夜雨洗二河漢一、詩懷覺レ有レ靈、籬聲新蟋蟀、草影老蜻蜓、靜引閑機發、凉吹遠思醒、逍遙向レ誰說、時泥漆園經、

新秋卽事　元 許　有　壬

莫レ踢蒼苔破、茨門晝亦關、林風秋入レ樹、波日晩搖レ山、原野蒼茫外、煙霏指顧間、更須レ安二一榻一、月夜不二須還一、

へてや名つけし事も女郎花月
又云七夕月歌に鵲のより羽の橋も心せよ七夕月の比
まちえたり
壒囊鈔云、七月夷則　孟秋　上秋　初秋　初南　新
秋　肇秋
藻鹽艸云、孟秋漢　夷則同　涼月同　相月同　金神同
日本歲時記云七月の異名　相月　孟秋　涼月　律を
夷則といふ
歲時語苑云、七月孟秋字彙曰孟始也乃初秋意七月秋之始也涼月此時也夏氣去而秋氣至故來ニ涼風一因呼ニ涼月一夷則七月律也律歷志曰則法也言陽氣正ニ法度一而使ニ陰氣夷ニ當レ傷之物一也位ニ於申一在ニ七月一三陰月此也三陰生ニ地上一之月也五月夏至一陰生六月二陰生七月三陰生故曰爾
又云、新月同七月之和名也此月諸人詣ニ親墳墓一故和朝呼而曰ニ親月一
毫品通考云七月立秋七月ノ節處暑七月ノ中肇秋　孟秋　初秋
新秋　夷則夷則者律名也夷ハ傷也則ハ法也言心ハ此
月萬物初テ傷ラレテ刑法ヲカウムルナリ
毛詩豳風云、七月流火、九月授衣、
又同上云、七月鳴鵙云々、
又同上云、七月烹ニ葵及菽一云々、七月食レ瓜云々、
春秋隱公云、元年秋七月云々、
禮記月令云、孟秋之月、日在レ翼、昏建星中、旦畢中、其日
庚辛、云々、其音商、律中ニ夷則一云々、
爾雅云、七月爲レ相云々、
又注云、七月得レ庚、則曰ニ窒相一云々、
史記律書云、七月也、律中ニ夷則一夷則、言ニ陰氣之賊ニ萬
物一也、其於ニ十二子一爲レ申、申者、言ニ陰用レ事、申ニ賊
萬物一故曰レ申云々、
又天官書云、歲陰在レ申、星居レ未、以ニ七月一與ニ東井一與
鬼、晨出、曰ニ大晋一昭々白、其失レ次有レ應、見ニ牽牛一云
云、
淮南子時則訓云、孟秋之月、其音商、律中ニ夷則一其數九、
注云、夷傷也、則法也、陽衰陰盛萬物周傷應レ法成レ性、
故曰ニ夷則一
白虎通云、七月律、謂ニ之夷則一何、夷傷則法也、言萬物
始傷被ニ刑法一也、
晉樂志云、七月之辰、謂爲レ申ニ者申也、言時萬物身體
皆成就也、
玉燭寶典引ニ夏小正一云、七月秀雈葦、未レ秀則不レ爲ニ
雈葦一秀然後爲ニ雈葦一云々、
元帝纂要云、七月、孟秋、首秋、上秋、肇秋、蘭秋云々、
韓文云、是時新秋七月初、金神按レ節、炎氣除、

壒嚢鈔云七月ヲ文月ト曰七夕ニ諸人作レ詩或ハ晒ニ文
書ヲ供ニ二星ニ故ニ曰也又和語ニハ親月(フツキ)ト云此月諸人
親ノ墳墓ニ詣ツルカ故ニ爾曰ト云々
藻鹽艸云ふ月本ふん月也文披月
類聚名物考云七月ふみつき舊説に文書をかよはし消
息を贈るといふも時に限るへからさるに似たり今案
此時に稻の穂の出んとして妊む時なれはいふかはら
むはふくむふくみともいふて含を訓り萬葉集に花の
ふゝむともいへり其意なるへし
日本歳時記云七月の和名を文月といふ七日たなはた
にかすとてふみともをひらくゆへにふみつきといふ
を畧せり
歳時語苑云文月(フミツキ)七月之和名也當月七日曬レ書故曰ニ文月一說曰此月七夕諸人以ニ詩歌之文一獻ニ二星一故曰ニ文月ニ蓋二說同意
跡部光海翁倭訓十二月云文月(フミツキ)穂見(ホミ)月也稻穂能ク見ルヲ云
フ
語意云七月を布美月といふは保布々美(ホフヽミ)月の上下を畧
きいふ也稻は七月に穂を含めり萬葉に布久むをは布
布萬里と云を布々と畧き又ほとのみもいへりかの春
の二月三月は草木の萌茂るもていひ秋三月は稻もて
いふなり
古筆記傳詞志比宮巻注云師の考に七月は穂含月也といは
れたるなとはさもあるへし云々
和訓栞云ふみ月七月をいふ穂見月の義なるへし小苗
月水月穂見月と次第し稻穂の出そむるをいふなり物
にふつきともいふは略語なり
毫品通考云文トハ七月七日ニハ諸人詩ヲ作リ或ハ文
書ヲサラシテ二星ニ供フル故ニ文月ト言也親月トハ
此月諸人親ノ墳墓ヘ詣ツル故ニシカ言
和名類聚鈔云、七月初秋云々、
年中行事秘抄云、七月、月令曰、孟秋之月、日在レ翼、斗
建レ申、律中ニ夷則ニ、
拾芥抄云夷則七月云々
秘藏抄云七月めてあひ月歌に「七月のめてゝあひ月
まちえつゝいかに心のうれしかるらん酒井人眞
莫傳抄云七夜(ナヽヨ)月七月歌に「彥星のけふや逢らんなゝ
よ月なゝよの空の宵のまきれに
又云秋初月同歌に「風なくは何をかいはん松風の秋
のは月を音にこそえれ
藏玉集云七月女郎花月歌に「七夕の契のいろにたく

もゑかいへり跡部光海翁は穂見月ホミツキなりといひ谷川士清もゑかいへり此等の説えたりといふへし扨また奥義抄の説は文月といふかたにつきて用ゆへし又此月の異名をめてあひ月と秘藏抄いひ七夜ナヽヨ月秋初アキハ月と莫傳抄いひふみひろけ月女郎花月七夕月と藏玉集いへり漢名のごときは七月初秋と和名類聚鈔いひ孟秋之月日在レ翼と拾芥抄年中行事秘抄いへるは禮記月令によりしなり夷則七月といへるは是も月令に律中二夷則一とみえたるによれるなり此月の異名を考ふるに七月爲レ相と爾雅いへるそ西土にて始めてみえし所也窒相は郭璞爾雅を注して曰七月得レ庚則曰二窒相一とみえ相月ともいへり事物別名にみえたり大晉の名目は史記天官書にいてたり七月其名大晉と天中記いへり七月孟秋首秋上秋肇秋蘭秋と元帝纂要みえたり蘭月の名目は天中記引二提要錄一り七月流火大慶烹菽と事物別名いへるは詩豳風に七月流火九月授衣といへるによりしなり烹菽といふも同篇に七月烹二葵及菽一とみえたるによれり涼月といふは是月曰二孟秋首秋初秋上秋一又曰二涼月一と群芳譜みえたり早秋新秋の名目は唐詩にあまたみえたり此月は三秋の初なるか故にゑかとなふるなり韓文云是時新秋七月初金神按レ節炎氣除とみえたり窣アシ濕シン縛ハ庾ヌ闍シヤ月といふも此月を西域にてゑかとなへり此土にて七月十六日より八月十五日までを彼土にて七月とするよし西域記にみえたり

日本書紀孝昭天皇紀云元年七月フツキ遷二都於掖上一是謂二池心宮一

萬葉集卷第十秋雜歌云乾坤之初時從天漢射向居而云々七月七日之夕者吾毛悲烏（アメツチノハジメノトキユアマノカハイムカヒヲリテ フミツキノナヌカノヨヒハワレモカナシテ）

古今和歌集卷第十九俳諧歌詞書云七月六日たなはたの心をよみける云々

後撰和歌集卷第五秋歌上詞書云女のもとより文月はかりにいひをこせて侍ける

秘藏抄云七月ふみつき歌に「たなはたの心もいかにさはくらん稀にあふへきふつきたつらん本ノマヽ貞文

奥義抄云七月七夕にかすとて書ともをひらく故に文月といふを誤れり

八雲御抄時節部云七月ふつき本はふむ月なり

藏玉集云七月歌に「七夕のあふよの空のかけみえてかきならへたるふみひろけ月

下學集云文月此月七夕諸人以二詩歌之文一獻二於二星一或晒二書篇一以供レ星故云二文月一也

古今要覽稿卷第三十五

●時令部

●ふつき　七月

ふつきは七月の和名なりふみつきともいへりさて此名目のはしめて書にみえしは孝昭天皇元年七月(フツキ)遷ニ都於掖上一と（日本書紀）しるされしそ始なるされと此御時よりはるかに上つよにふつきの名ありし事明なり神代に五月蠅(サバヘ)と（同上）いふ事みえたるもいまいふ五月の事にて神武天皇紀にむ月よりしはすまての御名みえたりしかとふつきのみしるされすされと月々の名此御時にみえたれは孝昭天皇の御代よりはるかに上つ代の和名なる事著るし萬葉集には秋雜歌に七月七日之夕(フミツキナヌカノヨヒ)者吾毛悲鳥(ハワレモカナシヲ)なとみえたり既にこの集にふみ月とふつきを讀りしより古今集後撰集の時代には七月を文月なといふ文字に書しるしたれはふみつきとよめる事とはなれり扨七月織女にかすとて書ともをひらく故に文月といふを誤れりと（奧義抄）いへるは其時代よりふるくいひ傳たる所なるへしされとこの説にては文月はふみひらく月と云義にとりしも西土にて七月七日曝書する事あるによりてふみひらく月といふ義にとりなせしならんとおもはる曝書の事は早くは四民月令に七月七日曝ニ經書及衣裳一不レ蠹とみえたり崔國輔か詩韓諤か歲華紀麗等にもいてたりさて八雲御抄にはふつき本はふむ月なりとしるさせ給ひ藏玉集なとにもふみひろけ月としるせる曝書の意とおなしくおもはるれと下學集壒嚢鈔なとにしるせるは七月七日二星に文書を手向祭る義にいへり藻鹽草もこれにしたかひ日本歲時記歲時語苑毫品通考等もみな七月七日二星に文書を備へてまつるよしみえて此月を文月といふ七日たなはたにかすとてふみともをひらく故にふみつきといふを略せりと（日本歲時記）いへりこれらの説ともは皆曝書よりこと起りて後世終に二星に文書衣裳其外種々の物共を備へて二星を祭る事とはなれりさてふみつきの名はふくみ月の義にとるかたしかるへし此月稻穗を含めり八月穗を張九月かりとるなり類聚名物考にも此時に稻の穗の出んとして姙む時なれはいふか加茂眞淵

かといふもあまりまはりとをなる說ならすや萬葉集にも六月をみな月とのみ旁訓ありて水無月なといふ字みえす奧義抄に此月まことにあつくしてことに水泉かれつきたる故に水なし月といふよりして水無月とは書始めしなり淸輔朝臣の農皆𤼵つくるといふ義にてあれは五月早苗植終りて六月は一番草二番草とて稻苗植付し田の草をとり終りぬれは農事みな𤼵つきたる義にてみなし月てふ意なれは奧義抄の此說と水無月との說によるへき事なり

うつれる詞也一に神鳴月の上下略也といへり神は雷也

按に水月の義なるへし此月田ことに水をたゝへたるもて名とせりといふはとりかたしいかにとなれは田に十代田千代田とて大なるもあり小なるもあるへけれは水ともしき此月に數々の田ことに水をたゝへおほすへきやされは水月といふは玄かるへき說とはおもはれす

荒良々言時節云美那月六月也此言既に眞淵の考ありて雷鳴月の上下略なるよしいへるよしいへりしもさる事なから極陽極陰にてむかへたる言は吾國風ならす殊に加をいひて美を略きもすへけれと加美を美とのみいはんよしもおほつかなけれはさらにひか考をたにいふすへて夏三月と秋三月は稻の事もて名つけしなれは此月も稻の事にて名つけし加美は實子の言なは乃良牟の約にて將二實生一する月を約めいひしか此月子をむすふならす其子の穗をふくむもあり實のらむとするまてに稻のさかえしもて名つけしならんか乃良の約は奈なる故に子生んとする月を約ていふかとおほゆ大人の考をあしといふにはあらてかくもやとひか考をいふなり

按に類聚名物考には西土の書にも水は十月の頃涸ることにてその頃に津梁を造り川の堤等をも築事にて六月さる事をいはす旱魃の年こそあれ常の年に水の無といふ事もいふかしといはるゝはいかゝまた歲時語苑に農事皆仕盡之義也此說難二信用一といへるは全く奥義抄の說をうつなり且其上水無月の義によるは奥義抄によれりこれ清輔朝臣は一說となせるを却てとりて本說をとらさるはいまたしき也地下年中行事みなつきの名義此月陽氣終る月なれは陽みなつきると云義もあるゆゑみなつきと云といへるも荷擔しかたし凡て何事によらす辨言する時はいかなる事も道理めきて聞ゆるものなれは私意を以てせすいにしへに隨ふへき事なり荒良良言には此月の名をとく事稻の事にていへりいはゆる夏三月と秋三月は稻のこともて名つけしなれは此月も稻の事にて名付し加美は實子の言奈は乃良牟の約にて將二實生一する月とつゝめ云しか此月子をむすふならす其子の穗をふくむもあり實のらむとするまてに稻のさかえしもて名つけしならん

史記天官書○按に天中記には長烈と列字に連畫をそへたり名義もと星の名によりて月の名とせしなり

長夏

素問○按に王氷注に長夏者六月也といへり

炎陽

歳華紀麗○按に字義のことく此月は炎々たる陽氣の月故に名付く

三伏之秋

同上○按に此月初伏中伏末伏とて金火伏藏之日あるも此月の中なれは三伏之秋と云り秋字は時といふ義なり

積陽

事物別名○按に此月にいたりて陽氣つもり極れる義にて名付たり

末垂

同上○按に名義未詳

婆達羅盋陀月（ハタラハタ）

西域記○按に名義未詳西域の六月の名なり六月十五日より七月十五日までを西域にては此地の六月となせり

追加

夏なか

貫之集○其義解難鈔に見えたり

としなか

伊勢集○其義上におなし

○正誤

類聚名物考云六月みなつき舊説に水無月といふされとも西土の書にも水は十月の頃涸る事にてその頃に津梁を造り川の堤等をも築事にて六月さる事をいはす旱魃の年こそあれ常の年に水の無といふ事もいふかし（今按下に辨す）

歳時語苑云、一説云、農事皆仕盡之義也、此説難ニ信用一、（今按下に辨す）

地下年中行事云年中を二季に分ちて正月より六月まてを大陽といひ七月より十二月までを大陰とするゆゑかれは六月は陽の終る月なれは陽みなつきると云義もあるゆゑみなつきと云

和訓栞云みな月六月をいふ水月の義なるへし此月田ことに水をたゝへたるをもて名とせりさなへ月より

和名類聚鈔年中行事秘抄禮記月令淮南子時則訓○按に此月夏の末月なれは云なり孟仲季の次第もて名付しところなり

林鐘

年中行事秘抄拾芥抄禮記月令史記律書○按に律名なり林鐘者言二萬物就一レ死氣林々然一と律書に見え白虎通には謂二之林鐘一何林者衆也萬物盛熟種類衆多とみえたり是草木百穀みな長茂する義にて名付しなり

いすゝくれ月

秘藏抄○按にいは發語すゝくれはすゝしく暮る略言なりされは彌涼暮月の義なり此月夕暮かたならては涼しからねはかく名付しなり

涼暮月

莫傳抄○按に是も名義上にをなしたゝいをはふくのみ

松風月

同上○按に松風月といふ待風てふ義なるを松にかけしなり此月ことにあつけれは風待意もてかく名付しなり

風待月

藏玉集○按に是も名義上におなし文字の如く義外にこもらす

鳴雷月

同上○按に此月殊に雷鳴すること多けれはかく名付しなり歌にも夕たちは猶はれやらてなる神の月にもなりぬ夏やくるらむと定家卿の作歌あり

常夏月

同上○按に此月とこなつの花盛の月なれは名付しなり

晩夏

瑞囊抄駱賓王詩○按に此月夏の暮はつれは名付しなり

旦

爾雅○按に此月の別名なるよし注にあり

則旦

同上郭璞曰此月從レ巳則曰二則旦一とみえたり

旦月

事物別名○名義同上たゝ月字を加へし也

長列

右大辨入道光俊
みな月は吹くる風もまれなれと
　　ゑつけきまとゐ心ずゝしも
大納言為家
なこしのはらへ
いたつらにおふの麻のは取してゝ
　　今年もたけぬみな月の空
三十六人集解難鈔　夏なか　貫之
夏なかに秋をゑらするもみちはは
　　色はかりこそかはらさりけれ
是は六月に木の葉の紅葉したるをまさたゝのあそんの送られける時のかへしのうた也
伊勢
六月にはらへする所におとこきゐひけり
　　世にみそくともうけしとそ思ふ
とし中にわれかなけきは成ぬれは
六月は一とせのなかはといふ事なり然れは半年といふにおなし
○釋名
みなつき
日本書紀萬葉集古今和歌集○按に此月にいたりて春よりはしめし農事盡るなり二月は田かへし三月は種かし四月は苗代こしらへ五月はさなへ植付るなり六月にいたりくさきり又こへなとしてより稻苅まては農の事にかゝはらねは農みなゑつきたる月なれは此月をみな月といふよし奥義抄の説なり又一説は水無月といふ説にもとれり是も奥義抄に此月まことにあつくしてことに水泉かれつきたる故に水なし月といふをあやまれりとみえたり亦かみなり月とみな月の義をとる説もありされと前説の農皆つきたるといふ説にゑかす和名鈔にも月々の名義みえされは奥義抄に隨へり
水無月
奥義抄東雅日本歳事記○按に此月熱暑つよきか故に池泉沼溝なと水ともしくしてやゝもすれは涸つきぬれは水みなつきるといふ義にて名付しなり水無月とかきしは奥義抄に始まれり
六月
日本書紀萬葉集尙書畢命毛詩豳風○按に等階をもて名付しなり
季夏

生二于東一清光入二疎林一照二我鬢髪鬆一壯年幾何時、倏忽成二衰翁一願餐二日月華一爲駐二氷雪容一二子皆靜者、翛然此相從、靈丹論二秘訣一妙理談二眞空一猶恨邇二城市一時來車馬蹤、逝將レ選二幽僻一誅レ茅寄二蒙籠一灌漑蒔枝園、可レ敵萬戸封、屋前脩竹合、屋後溪流通、風月應二更好一清歡永相同、稚川晩聞レ道、尙冀刀圭功、

夏日卽事　　陳無己

柳絮隨レ風盡、歡娛過レ眼空、窮多詩有レ債、愁極酒無レ功、家在二斜陽外一人歸二滿月中一肝膓渾欲レ破、魂夢更無レ窮、

次韻夏日江村　　同

漏屋詹生レ菌、臨江樹作レ門、卷レ簾迎二燕子一織レ竹護二龍孫一向レ夕微涼發、相逢故意存、何當加レ我歲、從レ子問二乾坤一

古今六帖　みな月　　みつね

おほあらきの杜の下草しけり合て
深くも夏のなりにけるかな

なつはみないつこともなく足引の
山へも野へもしけりあひつゝ　　人まろ

水無月のつちさへさけて照日にも
わか袖ひめや妹にあはすて　　つらゆき

夏衣うすきかひなしあきまては
このした風のやますふかなん

なこしのはらへ

みな月のなこしの祓する人は
ちとせのいのちのふといふなり

新撰六帖　みなつき　　衣笠内大臣家良公

茂りゆくしはせの山のくまつゝら
くるゝも長き水無月のそら　　大納言爲家

えそゆかぬ風もをよはぬ玉ほこの
道のなかての夏の日くらし　　九條三位入道知家

夏かりのおふの下草あらはれて
我ひとりとも茂るころかな　　左京大夫行家

水無月の照日のつちの我のみと
ありの通ひちゆきちかふ也

晦明薭相代、天地本長閑、四顧何寥落、微風時動ㇾ關、

六月五日偶成　倪元鎭

坐看靑苔欲ㇾ上ㇾ衣、一池春水靄ニ餘暉一、荒村盡日無ニ車馬一、時有ニ殘雪一伴ㇾ鶴歸、

河南府試ニ十二月樂詞一　六月　李長吉

裁ニ生羅一代ニ湘竹帔一、拂踈霜簟秋玉炎々（本ノマヽ）紅鏡東方開暈如ニ車輪一上徘徊啾々赤帝騎ㇾ龍來

擬ニ李長吉十二月樂辭一　六月　吳文可

氷山璀璁間ニ瑤席一、水拍ニ銀盤一瀲ニ寒碧一、象牀湘簟含ニ風漪一、膩香粉汗霑ニ凝脂一、赤帝啾々火龍老、琪樹西風轉ニ昏曉一、

題耕織圖　六月耕　趙子昂

當ㇾ晝耘ニ水田一、農夫亦良苦、赤日背欲ㇾ裂、白汗灑如ㇾ雨、匍匐行ニ水中一、泥淖及ニ腰膂一、新苗抽ニ利劍一、割ㇾ膚何痛楚、夫耘婦當ㇾ饁、奔走及ニ亭午一、無ニ時暫休息一、不ㇾ得ㇾ避ニ炎暑一、誰憐萬民食、粒々非ㇾ易ㇾ取、願陳知ニ稼穡一、無逸傳自ㇾ古、

又　六月織　同

釜下燒ニ桑柴一、取ㇾ繭投ニ釜中一、纖々女兒手、抽ㇾ絲疾如ㇾ風、田家五六月、綠樹陰相蒙、但聞繅車響、還接村西東、旬日可ニ經絹一、弗ㇾ憂杼軸空、婦人能蠶桑、家道當ニ不窮一、更望時雨足、足麥亦稍豐、沽ㇾ酒及ニ時飮一、醉倒姑與ㇾ翁、

夏晚南野　蔡忠惠

夏竹圍ニ前檻一、涼襟折ニ舊醒一、疊雲封ㇾ日茜、斜雨著ㇾ虹明、魚動ㇾ池開ㇾ暈、蟬移ㇾ樹減淸、葭洲煙向ㇾ暝、鳬鷺自相迎、

季夏之初、自ニ安國一遷ニ南臺天寧寺一、依ニ南山一而面ㇾ北、暑氣尤盛、暇日望ニ山頂一、松林鬱然、意必有ㇾ異、因ニ穴垣鑿磴一以造ニ其上一、形勢坦平、風日淸美、四顧山巒環合、江湖往來、景物不ㇾ可ニ摸狀一、月出ニ林表一、淸光更多、夜久闃寥、殆非ニ塵世一、作ニ古詩二十韻一、以紀ニ其事一、奉ㇾ呈ニ巽達元仲一、

李忠定

旅泊不ㇾ求ㇾ安、小憩ニ南臺宮一、軒楹盡北鄉、盛暑墮ニ甑中一、開ㇾ垣追ニ微涼一、山頂羅ニ千松一、煩襟忽破散、濯ニ此萬里風一、群山遞環遶、雲物增ニ奇峰一、江湖信有ㇾ期、來去初不ㇾ窮、嘯咏得ㇾ所ㇾ托、幽禽亦玲瓏、靑霞斂ニ落日一、皎月

林鐘、

爾雅云、六月爲レ且、郭璞曰六月得レ則曰二已則且一

事物別名云、六月且月

史記律書云、六月也、律中二林鐘一、林鐘者言二萬物就一レ死氣林々然一、其於二十二子一、爲レ未、未者、言三萬物皆成有二滋味一也、

又天官書云、以二六月一與二觜觽一參、晨出曰二長列一、昭々有レ光、利レ行レ兵云々、

淮南子時則訓云、季夏之月、其音宮、律中二林鐘一、其數五、

春秋元命苞云、衰二於未一、未者昧也律中二林鐘一、林鐘者引二入陰一、

白虎通云、六月律謂二之林鐘一何、林者衆也、萬物成熟、種類衆多、

素問云、岐伯曰、春勝二長夏一、長夏勝レ冬、注長夏者六月也、土生二於火一、長在二夏中一、既長而王、故云二長夏一也、

歲華紀麗云、六月日在二東井一、律中二林鐘一、夏窮暑退、

又云、新律將レ加二於煩暑一、下伏式啓二於炎陽一、

又云、秋夏交會之辰、金火伏藏之日、三伏之秋、云々、

事物別名云、六月季夏 積陽 且月 末垂 日躔柳 辰次鶉火 末律林鐘

通雅月令云、且月猶二焦月一云々、

又同上六月盛熱、故曰レ焦

西域記云、夏三月謂二頞沙茶月、室羅伐拏月、婆達羅盋陀月一、當下此從二四月十六日一至中七月十五日上、

按に夏三月といふは四月五月六月なれは婆達羅盋陀月といふは此文の次第をもて云は六月也此月を西域にてはたらはた月と呼と云られたり

○詩歌

佩文齋詠物詩選

季夏　唐　范鐙

江南季夏天、身熱汗如レ泉、蚊蚋成二雷澤一、袈裟作二水田一、

節序詩集　六月

六月六日早朝寄二山中諸友一　吳全節

五年四覲六龍飛、又領二群仙一覲二紫薇一、金殿煙霞浮二黼黻一、瑤階日月麗二旌旃一、群臣奉レ輦勤二三護一、國母臨レ朝重二萬機一、遙食蟠桃知幾次、客星還照釣魚磯、

六月六日夜　陳簡齋

蘊隆豈不レ壞、涼氣亦徐還、獨立青夜半、疏星蒼檜間、

くしてことに水泉かれつきたるゆへにみつなし月といふを畧せるとそ

歳時語苑云、水無月、六月之和名也、此月炎暑甚、水泉涸盡、故曰二水無月一、

跡部光海翁曰水無月、水氣干發スルヲ云フ

地下年中行事恵美須草云六月をみなつきと稱る事大陽の月おのつから水かはきたるゆへに水なし月と云を畧して水無月と云ふ

語意云六月をみな月といふは加美那月の上下を畧けり十月は除月にて雷のならねはかみ無月といひ六月は専ら雷の鳴故にむかひて此名あり雷をかみとのみいへる事古への常なり

後世水無月と書はひか事そ

和名類聚鈔云六月　季夏

年中行事秘抄云、六月、月令、季夏、日在レ柳斗建レ未律中二林鐘一、

拾芥抄云林鐘六月

秘藏抄云六月いすゝくれ月歌に「ほとゝきす古郷こひて歸るなりいすゝくれ月になかぬ空とて

莫傳抄云涼暮月六月歌に「風吹は池に波よるいつみなるすゝくれ月の頃にこそなれ

又云松風月歌に「雲たかみあめふり山のけふよりはまつかせ月の夕暮そふる

藏玉集云六月風待月歌に松かけに床居をしつゝけふははや風待月の夏のうとさよ

又云鳴雷月歌に「夕立は猶はれやらてなる神の月にもなりぬ夏や暮るらむ

又云常夏月歌に「ちりはらひいもにか見せんとこなつの月待えたる花の盛を

壒嚢鈔云六月林鐘　季夏　晩夏　極暑

藻鹽草云みな月　風待月　鳴雷　常夏

按に風待月より以下鳴雷月常夏月の名目は藏玉集を引たれは和歌は畧之

季夏漢　林鐘同　季月同　旦月同　鶉火同

尚書畢命云、惟十有二年、六月庚午、朏、越三日壬申云云、

毛詩豳風云、六月沙鷄振レ羽云々、

又同上云、六月食二鬱及薁一、

又小雅云、四月日、六月徂暑、

禮記月令云、季夏之月、日在レ柳、昏火中、旦奎中、律中二

鐘とみえしを始とせり異名のこときは六月爲旦と（爾雅）いひ六月得巳則曰則旦と（同上注）いひ六月旦月と（事物別名）いへるは爾雅によりしにて後世月字をそへしなり通雅に旦月猶焦月とみえたり長列といふはもと星の名より此月の名目となれり史記（天官書）にいはゆる以六月與觜觿參星出曰長列とみえたり天中記には史六月其名長烈といたせり長夏といふは岐伯曰春勝長夏長夏勝冬と（素問）みえ注に長夏者六月也といへり炎陽の名目は新律將加於煩暑下伏式啓於炎陽と（歲華紀麗）載たり又此月の中初伏中伏末伏といふ事あり是を三伏といふ故に歲華紀麗にも三伏之秋とみえたり秋字こゝは時といふ義にとれるなりされは此月をさしていふなり積陽末垂は事物別名にいてたりともに此月の名なり又西域記に夏三月謂頞沙荼月室邏伐拏月婆達羅鉢陀月とあるをもてみれは此月の事をは波達羅鉢陀月と西域にては呼とみえたり

日本書紀（神武紀）云戊午年六月乙未朔丁巳、軍至名草邑、

萬葉集卷第三（雜歌）云不盡嶺爾零置雪者六月十五日消者其夜布里家利

右詠不盡山歌作者山邊赤人

又卷第十（夏雜歌）云、六月之地副割而照日爾毛吾袖將乾哉於君不相四手

右寄日

古今和歌集卷第三（夏歌詞書）云みな月つこもりの日よめる

秘藏抄云六月みなつき歌に「みなつきの河邊のはらへ小夜更てたもとに秋の風かよふなり

曾丹集云みなつきはしめ云々

八雲御抄（時節部）云六月みなつき

奧義抄云農の事もみなしつきたる故にみなし月といふを誤れり一說に此月まことにあつくしてことに水泉かれつきたる故に水なし月といふをあやまれり

類聚名物考云六月みな月或人の雷月なるへしといへる理にこそ十月を神無月といふも陽氣なとの事にはあらて雷の無といふ事なるへけれは是に對てさる事と玄らるすへて古世にかみとのみいふは打まかせては雷の事也雷岳をかみをかといふか如し月令にも八月の末に水始涸とはみえたれ

東雅云水無月といふは水涸て盡るの義也といふなり水無瀨なといふ地名もあれはさもあるへし

日本歲事記云六月和名を水無月といふまことにあつ

古今要覽稿卷第三十四

●時令部

●みなつき　六月

みなつきは六月の和名にしてふるくより物にみえたりいはゆる戊午年六月(ミナツキ)と日本書紀(神武紀)にしるせるそはしめなる夫より以下は萬葉集に不盡嶺爾(フジノネニ)零置雪者(フリオクユキハ)六月(ミナツキノ)十五日(モチニ)消者(キユレハ)其夜(ソノヨ)布里家利(フリケリ)とよみ古今和歌集夏歌詞書にみなつきつこもりの日ともいひみなつきの河邊のはらへ小夜更てと(秘藏抄)いひ和名類聚鈔には此月の名季夏とのみしるしてみな月の和名を出さす八雲御抄にも六月みなつきとのみしるさせ給ひたるをひとり此月の名義を解るはいはゆる農の事もみなしつきたる故にみなし月といふをあやまれり一說に此月まことにあつくしてことに水泉かれつきたる故に水なし月といふをあやまれりと(奧義抄)いへるそはしめなるしかれは清輔朝臣の比ほひ既に二說なるを後世おほく前說をとらす後說にのみよれり水無月といふは水かれて盡るの義也と(東雅)いひ六月和名水無月といふまことにあつくしてことに水泉かれつきたるゆへにみつなし月といふと(日本歲時記)いひ水無月六月之和名也此月炎暑甚水泉涸盡故曰二水無月一と(歲時語苑)いひ水無月水氣干發スルヲ云フと(跡部光海翁說)いひ水なし月といふを略して水無月といふと(惠美須草)いふたくひ奧義抄の後說によりしなり又此月の名をかみなし月と解く說あり類聚名物考に六月みな月或人の雷月なるへしといへる理にこそといひ加茂眞淵も六月を美奈月といふ加美那利月の上下を畧けり十月は除月にて雷のならねはかみ無月といひ六月は專ら雷の鳴故にむかひて此名ありと(語意)いへるは藏玉集に此月を鳴雷月といへるにかなへは亦此說もすてかたしといへとも農事によりてとく方然るへし扨異名のことときは六月すゝくれ月と(秘藏抄)いひすゝくれ月松風月と(莫傳抄)いひ風待月鳴雷月常夏月と(藏玉集)いへり林鐘と(年中行事秘抄)みえたるは律名にして禮記月令史記律書淮南子時則訓春秋元命苞白虎通等に見えたり猶西土にても六月といふ語のはやくよりみえしは尙書(畢命)に惟十有二年六月とあるそ始なる季夏は禮記(月令)季夏之月日在レ柳昏火中旦奎中律中二林

按にサツキといふことは早苗月といひしをサツキとはいふ也といふ説もいかゝあるへきと辨せしは荷擔しかたしふるくは奥義抄なとをはしめとしてみなさなへてふ義にとれり又サナへといふもサハへといふかことくと辨せるもとり難しサハへとは古事記日本書紀等に狹蠅の字又日本書紀五月蠅の字をも塡たりしかれは狹は小なる義なり又蠅はもとより小なるものなれはさはへといふ也且此月蠅多くして飛鳴すれはさはへなすさわくとねりとも萬葉集にみえたりさるをサナへといふもサハへといふかことしとはいかゝ

類聚名物考云五月さつきさみたれ月なるよし古語にみゆされともさみたれをさとのみ一言にいふことあまりの略言にや今按に千五百番歌合五月雨をよめる俊成卿の歌にさなへ月さみたれ初るはしめとやよもの雨雲くもり行らんとあれは此月を早苗の頃とすれはさなへの略言かとも　みゆ既に或説にしかもいへり

又按に古事記上神之音如狹蠅(サバヘ)とあるを日本書紀には五月蠅と書れたるを思へは此月は夏至の時にて夜の極めて短き程なれは短夜月の意にて狹夜をいふにやあらん小夜と書も小狹とかよひてちさきにもみしかき事にも狹衣小逕の類也

按に此月を早苗の頃とすれはさなへの略言かとも見ゆ既に或説にしかもいへりといひなから古事記日本書紀等にみえたる五月蠅狹蠅の字を引付て此月夏至の時にて夜の極めて短き程なれは短夜月の意にて狹夜をいふにやあらんといひしはいかゝ

編修兼校正　岡村尙謙平遜
校正兼鈔錄　山下官介源正房
校正兼淨寫　忠内鉊太郎紀弘光
校正兼圖畫　葦名隆吉平盛榮
校正兼淨寫　兒山諦之助平紀言
編修兼校正　伊庭熊作源秀正
校正兼鈔錄　橋本太刀允藤原好春
校正兼淨寫　小林好太郎源直溫
編修兼校正　池野貞一郎源好謙
編修兼圖畫　志村愛助平知孝
編修兼校正　大河戸晋平藤原儀成
總　　判　屋代太郎源弘賢

歲華紀麗○按に名義梅月といふにおなし

角黍之秋

同上○按に禮記月令に農乃登ㇾ黍とあるによりて月の名とせり

浴蘭月

同上○按に歲華紀麗注大戴禮云午日以ニ蘭湯ㇾ沐浴とみえたれはこれによりていへる名目なり夏小正にも五月蓄ㇾ蘭爲ニ沐浴ㇾ又楚辭にも浴ニ蘭湯ㇾとみえたれは浴蘭といふ名目はいとふるし

長至

事物別名○按に此月日至て長けれは名付しなり

鳴蜩

同上○按に此月より蜩蟬なとなきはしめぬれは月の名とせるなり

鳴鵙

同上○按に禮記月令に小暑至堂螗生鵙始鳴といへるによりて名付しなり

薰風

風土記歲華紀麗○按にもと此月の風名なり仲夏大雨名ニ濯枝雨ㇾ六日方止東南常有ㇾ風至曰ニ黃雀長風ㇾ亦曰ニ薰風ㇾと風土記にしるせしか終に此月の名目となりしなり

○正誤

東雅云舊事記邪神之音サハヘなせしといふ事三たひみえたりそれか中二つは狹蠅の字を用ひ讀てサハヘとし一つは五月蠅の字を用ひ讀事狹蠅のことしさらは上宮太子の頃ほひ五月をよひてサツキといひし事既にありしにや其餘のことき またいかにやありけん

按に日本書紀神代卷に五月蠅の字をサハヘとよめり古事記には狹蠅の字のみにて五月蠅の字はみえ侍らす神武紀にも其證ありさるを上宮太子の頃ほひ五月をよひてサツキといひし事既にありしにやといはれしはいかゝ五月(サツキ)丙寅朔癸酉軍至ニ茅渟山城水門ㇾとあるそたしかにて此月をさつきといふ證となすへきなり

又云サツキといふ事は早苗とる月なれは早苗月といひしをサツキとはいふ也といふ說もまたいかゝあるへき舊事記にみえし所は前にしるせし事の如くサナへといふもサハヘといふかことく是此月の名によりてこそいひしことはなるへけれ

いふ也

月不見月

同上○按に此月は雨降かちにてよるとても月みる事稀なり故に歌にも此月のやみかちなるをさつき闇とよめり藏玉集にも五月雨のはれまもみえぬ空よりや月みす月といひはしめけんといふをひけり

橘月

同上○按に此月もはら橘類花咲てかくはしき月なれは人々是を賞して橘月といふなり猶名義卯月といふかことし

吹喜月

同上○按に此名目未レ詳歌の意に依ても慥ならす

梅月

下學集○按にこの月梅子熟すれはいふなり麥の熟する月を麥秋といふかことし

仲夏

和名類聚鈔尙書堯典禮記月令○按に夏月三月あり此月三月の中なれは云かいへるなり

蕤賓

拾芥抄禮記月令史記律書○按に律名なり史記律書には蕤賓者言二陰氣幼少一故曰レ蕤痿陽不レ用レ事故曰レ賓とあるをもてみれは四月は純陽にして五月陰氣微生を云

皐

爾雅○按に五月の異名なり後世皐月と月と云字を添て書り事物別名にみえたり皐の字をさつきと訓せり

厲皐

爾雅注○按に郭璞曰五月得レ戊則曰二厲皐一とあるによれは此月十干の中戊をうるときの名目なり

皐月

事物別名○按に爾雅によりて月の字を添し也

開明

史記天官書○按に天官書に以二五月一與二胃昴畢一晨出曰二開明一炎々有レ光とあるによれは此月胃昴畢の三星晨に出て光あるを以て名とす

啓明

天文志○按に是も名義開明といふにおなし開字を啓字にかふるのみ共にひらく義なり

梅夏

節序詩集　河南府試二十二月樂詞一　五月

李長吉

雕レ玉挿ニ簾額一、輕縠籠ニ虚門一、井汲鉛華水、扇織鴛鴦紅、廻レ雪舞ニ涼殿一、甘露洗レ空綠、羅袖從ニ徊翔一、香汗霑ニ寶粟一、

擬ニ李長吉十二月樂辭一　五月

吳文何

綱軒綠艾懸ニ飛虎一、菖蒲花靑海榴吐、江娥倚レ竹弄ニ管絃一、調笑懷レ沙怨ニ蘭杜一、南薰生レ涼颯扇薄、雕俎瑤觴勸レ郎酌、綵索光浮繫ニ臂紗一、守宮紅映黃金約、

題ニ耕織圖一　五月耕　趙子昂

仲夏苦雨乾、二麥先後熟、南風吹ニ隴畝一、惠氣散ニ淸淑一、是爲ニ農夫慶一、所レ望實ニ其腹一、沽レ酒醉ニ比隣一、語笑聲滿レ屋、紛然收穫罷、高廩起相屬、有ニ周成王業一、后稷播ニ百穀一、皇天貽ニ耒耜一、長世自レ茲卜、願言仍ニ歲稔一、四海盡蒙レ福、

五月織　同

五月夏以半、谷鶯先弄レ晨、老蠶成ニ雪繭一、吐レ絲亂紛紜伐レ葦作ニ簿(滿カ)曲一、束縛齊榛々、黃者黃如レ金、白者白如レ銀、爛然蒲ニ筐筥一、愛レ此顏色新、欣々擧家喜、稍慰經時勤、有レ客過相問、笑聲聞ニ四隣一、論レ功何所レ歸、再拜謝ニ蠶神一、

○釋名

さつき

日本書紀神武紀萬葉集古今和歌集○按にさつきと云はさゝなへ月てふ義にて小苗月也早苗と書はあたらす

五月

日本書紀神武紀萬葉集尙書舜典春秋毛詩○是數名なり

さくも月

秘藏抄莫傳抄○按に此月さみたれ月にてさみたれにくもるといふ語の畧成へし

授雲月

莫傳抄○名義同上

多草月

莫傳抄○按に此月田地に草多く生すれはたくさ月と名付しなり

賤男(シツマ)染月

藏玉集○按に此月賤男の心農事に染て暇なけれは

又引二周官地下一云、山虞常、仲夏斬二陰木一、鄭司農云陰木秋冬生者松柏之屬鄭玄曰陰木生二山北一
禮記月令云、仲夏之月、云々、其日丙丁、其帝炎帝、其神祝融、其蟲羽、其音徵、律中二蕤賓一、
史記律書云、五月也、律中二蕤賓一、蕤賓者、言二陰氣幼少一、故曰レ蕤、痿陽不レ用レ事、故曰レ賓、云々、
淮南子時則訓云、仲夏之月、其音徵、律中二蕤賓一、是月陰氣萎蕤、在レ下、像二主人一也、陽氣在レ上、像二賓客一也、故曰、蕤賓云々、
白虎通五行云、五月律、謂二之蕤賓一、蕤者下也、賓者敬也、言陽氣上極、陰氣始賓敬之也、
歲華紀麗云、日居二參宿一、律中二蕤賓一、
爾雅云、五月爲レ皐、
又注云、五月得戊、則曰二厲皐一、
事物別名云、皐月、
史記天官書云、以二五月與二胃昴畢一、晨出曰二開明一、
索隱云、天文志、作二啓明一、
天中記云、史五月、名二啓明一、
楚辭云、浴二蘭湯一兮、沐二芳華一云々、
荊楚歲時記云、今謂二之浴蘭節一、

歲華紀麗云、浴蘭之月大戴禮云午日以二蘭湯一沐浴
又云、五月梅夏云々、
又云、角黍之秋、風土記午日烹二鶩角黍一、又以二菰葉一裹二粽黍一以象二陰陽相包裹未レ分也
風土記云、仲夏大雨、名二濯枝雨一、六日方止、東南常有レ風至、曰二黃雀長風一、亦曰二薰風一、
歲華紀麗云、長日助二威稜之勢一、薰風同二長育之恩一、
事物別名云仲夏　長至　鳴蜩　鳴鶗日躔二東井一
風俗通云、俗說五月蓋レ屋、令二人頭禿一、
禮俗云、五月望、禮有レ乘レ高、爲二良日一即其義也、世稱二惡月一者、月令、仲夏、陰陽爭死生分、君子齋、或止二聲色一、節二嗜欲一云々、
荊楚歲時記云、五月、俗稱二惡月一、多二禁忌一曝レ牀薦レ席及忌レ蓋レ屋、

○詩

佩文齋詠物詩選　仲夏　唐　樊珣

江南仲夏天、時雨下如レ川、盧橘垂二金彈一、甘蕉吐二白蓮一、

夏日宴二九華池一　唐　陳羽

池上高臺五月凉、百花開盡水芝香、黃金買レ酒邀二詩客一、醉倒檐前青玉牀、

拾芥抄云蕤賓五月
下學集云五月梅月又云二送梅月一此月送二盡梅子一故云爾
壒囊抄云五月蕤賓　仲夏　超夏
藻鹽草云さ月　賤男染月　橘月　吹喜月以上三名藏玉集の名なり所引和歌署レ之　仲夏漢　暑月同　大火同　薰風同　皐月同
類聚名物考云五月此月を早苗の頃とすれはさなへの畧言かとも見ゆ既に或説に云かもいへり
又云五月の異名仲夏　皐月　鶉月　律を蕤賓といふ
跡部光海翁曰五月稻苗月サナヘツキ也
萬葉考別記云五月を佐都岐といふは淺苗月てふ事也言は佐奈倍の佐奈の約は佐なり倍は畧く且その佐奈倍の佐はあさの畧きにて佐蕨佐百合なとの佐に同し淺は短く小きをいふ事淺つ葱淺芽なとの如しかくて稻苗を植るは天下專らなる事故に言を畧きて此月の名とせり
和訓栞云さつき五月をいふ早苗月也といへれと幸月なるへし狩は五月を主とす神代紀に五月蠅をさはへとよめれは古き詞也源氏にさつきのせちといふは五日をさせり
彙品通考時令門云五月芒種　夏至　蕤賓　梅月　皐月

仲夏　盛夏　蕤賓蕤ハ說文ニ艸木花垂貌ト云リ言心ハ此月一陰生ス陰氣幼小ナル故ニ下ニ萎蕤スル也賓ハ客ノ心也一陰ノ氣來テ賓トナル也梅月一名梅送ノ月共言也此月梅子ヲ送リックス故也皐月サツキトヨム也サナヘ月ト言二字中畧也五月ハ田ヲ植ル事サカリナル月ナレハ也
尙書堯典曰、申命二義叔一、宅二南交一、平二秩南訛一、敬致日永星火、以正二仲夏一云々、
又舜典曰、五月、南巡守至二于南岳一、如二岱禮一云々、
又多方曰、惟五月丁亥、王來レ自レ奄、至二于宗周一云々、
春秋隱公云、元年夏五月、鄭伯克二段于鄢一、
禮記月令云、仲夏之月、日在二東井一、昏亢中、且危中、
又同上云、仲夏之行冬令、則雹凍傷レ穀云々、
毛詩豳風云、五月鳴蜩
又同上云、五月斯螽動股、
孝經援神契云、仲夏火星中、布穀降レ野、穫レ麥、
淮南子時則訓云、仲夏之月招搖指レ午、五月官相其樹揄、高誘曰是月陽氣長養故官相佐也揄說未レ聞之也
玉燭寶典引二禮夏小正一云、五月參則見三浮游有二殷々一、殷衆也浮游者渠畧也、朝生而暮死云々、

り
日本書紀(神代巻)一書云、高皇産靈尊勅八十諸神曰、葦原中國者、盤根木株草葉猶能言語、夜者若熛火而喧響、晝者如五月蠅而沸騰之、云々、
又(同上)云、五月蠅此云左魔倍云々、
又(神代紀)云、戊午年五月丙寅朔癸酉、軍至茅渟山城水門云々、
萬葉集卷第三(挽歌)云、角障經石村之道乎云々霍公鳥鳴五月者云々
右石田王卒之時山前王哀傷作歌或云柿本朝臣人麻呂作
又(同上)云、掛卷毛文爾恐之云々五月蠅成騷騷舍人者白栲爾云々
右天平十六年甲申春二月安積皇子薨之時内舍人大伴宿禰家持作
又卷第五(雜歌)云靈剋内限者云々五月蠅奈周佐和久兒等遠云々
右山上臣憶良重病思兒等歌
又卷第八(夏相聞)云五月之花　橘　乎爲君珠爾貫零卷惜美
右大伴坂上郎女歌

古今和歌集卷第三(夏歌)云「五月まつ山郭公打はふき今もなかなんこそのふる聲
和名類聚鈔云　仲夏
秘藏抄云五月さつき歌に「郭公さつきの空にうつもれて花立花の枝うつりなく
奥義抄云五月田うふることさかりなる故に早苗月といふを誤れり
八雲御抄(時節部)云五月さつき
秘藏抄(異名)云五月さくも月歌に「池へなるまこもまじりのあやめ刈し宿にかさしつさくも月とて
莫傳抄(異名)云授雲月多草月歌に「五月雨に空もすくなきさくも月たくさ月とは是をいはまし
藏玉集云五月賤男染月歌にいかゝして菅のを笠をさしてゆかんしつまの空の五月雨の頃
又云月不見月歌に「五月雨のはれまもみえぬ空よりや月みす月といひはしめけむ
又云橘月歌にたか代より橘月の名をとめてしのふ昔のおもひ出らん
又云吹喜月歌に「時鳥初音の後も吹喜月猶あかなくにをちかへりなけ

みゆ既に或說にをかいへりと類聚名物考いひ五月をサツキといひ又世の人今もなほつゝしむへき月也なともいふ也此月の事は舊事記にみえし所なれは古の時の名也けむともゑらるゝ也サツキといふ事は早苗とる月なれは早苗月と云しをサツキとはいふ也といふ說もいかゝあるへきと東雅いへるはいふかし五月稻苗月（サツキ サナヘ ツキ）也と跡部光海翁說いひ五月の和名をさつきといふ田うふる事さかりなるゆゑさなへ月といふと日本歲時記いひたり此月の異名も授雲月又たくさ月と秘藏抄いひ賤男染月又月不見月又橘月吹喜月と藏玉集いへりさて又仲夏と和名類聚鈔いひしは星火以正㆓仲夏㆒と尙書堯典いへるにより蕤賓と拾芥抄みえしはともに禮記月令によりし名目なり西土に此月の名目あまたみえたり五月のはしめてみえしは五月南巡守と尙書舜典いひ惟五月丁亥王來㆑自㆑奄と尙書多方みえ五月爲㆑皐と爾雅いひ五月得戊則曰㆓厲皐㆒と同上みえ皐月とも事物別名みえたり又此月を梅夏と歲華紀麗みえ梅月とも下學集みえたり又角黍之秋又浴蘭之月と歲華紀麗みえしは大戴禮楚辭等に浴蘭の字出たれは其以前よりいひし事なるへし長至或は鳴蜩鳴鶪と事物別名みえたるもいつれも此月の異名なり藻鹽草に載し薰風といふ名目は長日助㆓成稜之勢㆒薰風同㆓長育之恩㆒と歲華紀麗みえしなとにやよりしならん又風名㆓黃雀㆒雨曰㆓濯枝㆒と同上いひ風土記曰仲夏大雨名㆓濯枝雨㆒六日方止東南常有㆑風至曰㆓黃雀長風㆒亦曰㆓薰風㆒と同上みえたり猶此月の名あまたあるへけれと出所正しからさるは省きぬ暑月大火藻鹽草超夏壒嚢抄一陰月と歲時語苑みえたるは出典いまた考す世俗今月をよからぬ月と言傳へしは禮俗及ひ荊楚歲時記に五月俗稱㆓惡月㆒多㆓禁忌㆒とみえ又曝㆑牀薦㆑席及忌㆑蓋㆑屋と荊楚歲時記見えたるは風俗通によりしなり新野庾寔嘗于㆓五月五日㆒曝㆑席忽見㆓一小兒死㆓于席上㆒俄失㆓所在㆒其后寔子亡因相傳以爲㆑忌と異苑出たり此外此月は種々凶事多かり楚の屈原か故事晉の介子椎か火にやかれ死せし事又曾娥か父の溺死するにより江によりそひて嘆きかなしみ晝夜聲をたゝす七日に及ひ遂に江に投して死したり世俗此月を以て惡月とするもむへなり今猶皇國にても此月をいみはゝかる事西土の風俗とおなし且其上此月河水に溺死するもの至て多し年々一邑一郡にて溺死する人十數をもて數ふゑかれは數郡數國においては其數あけてはかるへからす尤愼しむへき月な

古今要覽稿卷第三十三

●時令部

●さつき　五月

さつきは五月の和名なり日本書紀神武紀萬葉集夏雜歌等にみえたりこれよりいとふるく神代に五月の文字みえたるはいはゆる晝(ヒル)如(ハ)五月蠅(サバヘ)而(ナス)沸騰(ワキアガル)之云々と日本書紀神代卷みえしそ始なるさてさはへなすわきあかるとみえしは此月にかきりて蠅多く群かれる事をいへるならんさて五月蠅此云二左魔陪(サバヘ)一と同上みえたるをもて考ふるに五月の二字を以てサと訓するは五十鈴姬命(イスヽヒメノミコト)と同上見えたる五十の二字イといふにおなしく二字一言なりしかれは五月をサとのみもいふへけれと月の名にとなふる故にさつきと訓たりさは小なる義なりすへて物小なるをさゝやかといひ小石をさゝれといへれはさ(小苗)なへ月といふへきを中略してさ月とはいふなるへし猶卯花月をうつきといふか如しさなへといふは文字早苗とのみふるくより書たれとも小苗の義しかるへしいかにとなれは早苗ははや苗の義也はや苗といふは今いふ早稲(ワセ)の事なり歌にかつしかわせなとよめるわせと云へきを早稲晩稲をしなへて苗を植るをさなへとると云はわせおくての差別なきに似たり早稲の苗を植るを早苗とるとはいはゝあたれり晩稲の苗を植るを早苗とるとは云へからすさなへとはさゝなへと云語の下略と思はる小苗と書せは早稲晩稲をしなへてさなへとるといひてもしかるへし凡さなへ植る事は土地により早晩の差別はあれと大かたは五月にもはら植るなり古人さ月の訓義をとくとまち〳〵なれとも多くさなへ植月といふ義に説をたてゝさなへの訓義に心つかさりしなりさて萬葉集より後の書にさつきといふ名目のみえしは古今集さ月まつ山ほとゝきすとよめる歌をはしめとして後撰集拾遺集以下代代の勅撰に出たり五(サ)月といふ義を解るは田うふる事さかりなる故に早苗月といふを誤れりと奥義抄みえしそはしめなる八雲御抄には五月さつきとのみしるし給ひ又五月さつきさみたれ月なるよし古説にみゆされともさみたれをさとのみ一言にいふ事あまりの略言にや此月を早苗の頃とすれはさなへの畧言かとも

ふはもとこれ三月上旬の巳の日をいふ事なれと魏晋より後には巳日にはあらねと三日をもて上巳といふ事のことしウノハナの咲きぬる月なれは卯月といふなりといふ說のことくしかるへしとも思はれすウツキといふ木はその中のウツホなれはウツキとなつけしに其花のたま〳〵卯月に咲ぬれは卯花月なともしるせしなり

按に萬葉集にうの花の咲月たちぬとみえ又俊頼朝臣の歌に夏雁のかへるこしちのとなみ山卯の花月となにをいはましとよみうの花さかりにひらくる故にうの花月といふと淸輔朝臣もいひたるをひとりしかるへしともおもはれすといひしはいかゝ

跡部光海翁十二月倭訓云卯月產月(ウマレツキ)也彌生ヲ受テ云

按に是異說なり卯月を產月と云ことさらにうけかはれぬ說也

古事記傳(訶志比宮卷)云四月は宇豆紀と云然名けたる意は未考得す

按に是も前文にいへることく萬葉集の歌によらはしかるへきを宣長のしかなつけたる未考得すといひしは荷擔しかたし訶志比宮の御世は家持卿の時世よりはるかに年代へたゝりて上世の事なれは萬葉集の歌の義とはことならんとおもへるにやいかて眞淵の說にしたかはさりしにや

圉余

同上注○按に郭璞曰四月得レ丁則曰二圉余一とみえたるは爾雅月陽に月在レ丁曰レ圉とみえたるによりて郭璞はしかいふなり陸德明圉音語とみえたり

余月

藻鹽草日本歲時記事物異名○按に後世月字を添しなり爾雅に正月を陬といふを後世陬月といふかことし

跰踵

史記天官書○按に通俗志月令廣義等には跰蹟に作れり

正陽

藻鹽草西京雜記事物異名○按に此月純陽にして無二陰氣一月なれは正陽といふなり故に此月を純陽ともいひまた六陽とも云へり

純陽

西京雜記○按に純はもつはらと訓り陽氣もつはらなる故なり純一純白なとゝいふはましりなき義なれは是も名義正陽といへるにおなし

陰月

同上○按に董仲舒曰此月純陽疑二於無陰一故亦謂二之陰月一とあるをもてみれは陰氣をまねくの義にてしかいふなり又按に十月を陽月といふと相對せる名目なり

清和

藻鹽草謝靈運詩歲華紀麗○按に此月純陽にして空色淸くすみ時氣和するを以て名付しなり

乏月

元帝纂要○按に纂要に冬穀既盡夏麥未レ登とあるをもてみれは百穀乏しき義にとりし名目なり

純乾

事物別名○按に此月正陽とも純陽ともいひて陰氣なき月なり故に時氣かはくかゆゑをもてしか名付たり

○正誤

東雅云卯月といふ事は詩の豳風に四之日といふ事を周正の四月は卯月也とみえしものともあるなり周正こときはさもこそあらめ夏時を行はれんに至ては四月を卯月と云へき事にあらすなといふ事もあるへけれと今も猶四月を卯月といふ事はたとへは上巳とい

秘藏抄○按に此月蠶稍長大にして桑葉を食ふ事盛なる故に桑の葉とり月といへるなるへし

夏初月

莫傳抄○按に名義如二文字一

ゑとり初の月

藏玉集○名義未レ詳

花殘月

同上○按にやよひの花うつきまて殘れはいふ也

初の夏

古今六帖新撰六帖○按に夏の初といふへきを打かへせしなり

首夏

和名類聚鈔謝靈運詩元帝纂要○按に首ははしめの義此月は夏のはしめなれはかくいふなり

孟夏

年中行事秘藏抄禮記楚辭淮南子○按に孟は孟仲季と次第する名義なり首字とおなし意なり

始夏

後漢書○名義上におなし

仲呂

拾芥抄禮記春秋元命苞淮南子白虎通歲華紀麗○按に律名なり宋均曰中（本ノマヽ）猶也相應而呂出故呂者大踊也といひ白虎通には中何言陽氣將レ極故復中難レ之とあるをもてみれは此月陽氣發達し陰氣中藏する義なり陽氣將レ極といふは陽氣盡んとするを中藏せしめんとするをもて復中難レ之といふなり難ははしむるの義也拒難の二字をもてはしむの意にとれはこゝの義もそれにおなし

維夏

毛詩歲華紀麗○小雅に四月維夏とみえしによれり

麥秋

禮記玉燭寶典歲華紀麗○按に此月麥熟すれは麥秋と云なり秋とは穀熟を秋と云禮記辨名に百穀各以二其初生一爲レ春熟爲レ秋故麥以二孟夏一爲レ秋也とみえたり管子に四時秋ありと云麥秋は其一なり

余

爾雅○按に陸德明音義云余餘舒二音孫作レ舒李云舒也萬物生二枝葉一故曰舒也とあるをもてみれは余は此月純陽の月なれは草木の枝葉舒發し達生する義もて此月を余といへるなるへし

甲戌四月十七日至臨川冲雲寺

虞伯生

郭西寺門雙石頭、水鑑相對林塘幽、白花過雨落松瞑、黃鳥隔溪鳴麥秋、衰朽虛蒙官室問、淹遲實愛小山留、爲貪佛日同僧話、滿袖香煙念舊遊、

河南府試十二月樂詞 四月

李長吉

曉涼暮涼樹如蓋、千山濃綠生雲外、依微香雨青氛氳、三葉蟠花照曲門、金塘閑水搖碧何、老景沉重無驚飛、墮紅殘萼暗參差、

擬李長吉十二月樂辭 四月

吳文可

輕紅流煙香雨足、新槐影轉勾欄曲、水晶簾箔度薫風、黃吻烏衣語華屋、涼簪墮髮初破睡、粉痕淺護脩蛾綠、竝禽不受雕籠宿、背人飛向荷陰浴、

題耕織圖 四月

趙子昂

孟夏土加潤、苗生無近遠、浸々冒淺陂、芃々被長阪、喜穀雖已値、惡草亦滋蔓、君子與小人、竝處必爲患、朝々荷鋤往、耕忘疲倦、早隨鳥雀起、歸與牛羊晩、有婦念將饑、過午可無飯、一飽不易得、念此獨長嘆、

四月

趙子昂

四月夏氣淸、蠶大已屬眠、高首何昂々、蛾眉復娟々、不憂桑葉少徧、野如綠烟、相呼攜筐去、迢遞立遠阡、梯空代條枚、葉上露未乾、蠶饑當早歸、秉心靜以專、飭躬脩婦事、僶俛當盛年、救忙多女伴、笑語方喧然、

○釋名

うつき

古事記日本書紀萬葉集○按に此月さかんに卯の花咲ぬれは卯花月てふ義にて略して卯月といふ也奥義抄にもうのはなさかりにひらくる故にうの花月といふと書れしは萬葉集の歌によりて名義をとかれしなるへし

うの花月

莫傳抄藏玉集○名義上におなし

四月

古事記日本書紀萬葉集和名類聚鈔尙書毛詩春秋○按に正二三四と次第したる義也

このはとり月

曰、農扈方還ㇾ夏、官田首告ㇾ秋、註曰臣謹按、物熟謂二之秋一、取二秋斂之義一、謂二四月一爲二麥秋一、云々、月令曰、孟夏、麥秋至、蔡邕曰、百穀各以ㇾ生爲ㇾ春、熟爲ㇾ秋、故麥以ㇾ爲夏ㇾ秋、

歲華紀麗云、四月、律中二仲呂一、杓指二東南一云々、

又云、麥秋（百穀初生爲ㇾ春、熟爲ㇾ秋、故麥以二孟夏一爲ㇾ秋）

又云、正陽之月、（正陽月慝未ㇾ作、慝謂二陰氣一也）

又云維夏（四月維夏）

又云淸和（首夏猶淸和）

天中記引西京雜記云、董仲舒曰、陽德用ㇾ事、則和氣皆陽、建ㇾ巳之月是也、故謂二之正陽之月一、四月、陽雖ㇾ用ㇾ事、而陽不二獨存一、此月純陽、疑二於無陰一、故亦謂二之陰月一、又引元帝纂要云、四月、曰二首夏一、謝靈運詩、首夏猶淸和、

又同上云、四月是謂二之乏月一、冬穀既盡、夏麥未ㇾ登、宜下賑二乏絕一、救中飢窮上、九族不ㇾ能二自活一者救ㇾ之、無二固蘊蓄一、而忍二人之貧貪一、貨二殖之一、宜ㇾ忘二種福之利一、君子弗ㇾ取、

事物別名云、四月（孟夏　麥秋　正陽　淸和　純乾　余月）

○詩

節序詩集　四月一日過ㇾ江赴二荊州一　張　說　元

春色沅湘盡、三年客始回、夏雲隨二北帆一、同日過ㇾ江來、水漫荊門出、山平郢路開、比肩羊叔子、千載豈無ㇾ才、

和二微之四月一日作一　白　居　易

四月一日天、花稀葉陰薄、泥新鷰影忙、蜜熟蜂聲樂、麥風低冉々、稻水平漠々、芳節忽蹉跎、遊心稍牢落、春華信爲ㇾ美、夏景亦未ㇾ惡、颭浪嫩二靑荷一、重欄晚二紅藥一、吳宮妨二風月一、越郡多二樓閣一、兩地誠可ㇾ憐、其奈二人離索一、

四月八日題二七級一　周　賀

化城分二鳥堞一、香閣俯二龍川一、複棟侵二黃道一、重簷架二紫烟一、銘書非二晉代一、壁畫是梁年、覇略今何在、王宮尙歸然、二帝曾遊聖、三卿是偶賢、昔玆遊勝侶、超三彼託二良緣一、我出有爲界、君登悲想天、悠々靑曠裏、蕩々白雲前、今日經行處、曲音號二蓋煙一、

四月十三日詔宴二寧王亭子一賦二得好字一　張　說　元

何許承恩宴、山亭風日好、綠嫩鳴鶴洲、陰穠鬪鷄道、果思夏來茂、花嫌春去早、行樂無ㇾ限時、皇情及二芳草一、

辰律中呂

拾芥抄云仲呂四月

壒囊鈔云、四月　仲呂　孟夏　初夏　首夏　維夏

壱品通考云、仲呂　麥秋　首夏　初夏　新夏　純陽

六陽　仲呂ハ律名也呂ハ助也言心ハ此月陽氣サカンニ長シテ陰亦成功ヲ助ク故ニシカイフ麥秋トハ此月麥ヲ刈ヲサムル故ニ麥秋ト言也純陽トハ純ハモツハラトヨム四月ニハ六陽コトコトク生スル故ニ純陽ノ時トモ言コト也

日本歳時記云四月の異名孟夏　余月　乾月　律を仲呂といふ

歳時語苑云、新夏此月者春三月過去而今新夏氣至故云

又云中呂四月之律也歷志曰言微陰始起未レ成著二於其中一中旅助二姑洗一宣レ氣齊レ物也位レ已在二四月一

新撰續法禮錄云四月の律は仲呂にあたる云心は陽氣さかんにきはまりて天地の中に大にみてり故に中にかくるとそ

尚書顧命云、惟四月哉生魄、王不レ懌云々、

詩豳風云、四月秀葽云々、

又小雅云、四月維夏云々、

春秋隱公云、三年夏四月辛卯、君氏卒云々、

禮記月令云、孟夏之月、日在レ畢、昏翼中、旦婺女中

又同上云、其音徵、律中二中呂一

又同上云、是月也、云々、天子乃以レ彘嘗レ麥、先薦二寢廟一、聚二蓄百藥一、靡草死、麥秋至、

爾雅云、四月爲レ余郭璞曰四月得丁則曰二圉余一

離騷九章云、滔々孟夏、草木莽々、

又九辨云、收二恢台之孟夏一、

淮南子時則訓云、孟夏之月、其音徵、律中二仲呂一、其數七、注陽散在レ外、陰實在レ中、所二以旅陽成一レ功、故曰二仲呂一、其數七、

史記律書云、中呂、言萬物盡旅而西行也、

白虎通五行云、四月律、謂二之仲呂一何、言陽氣極將レ微故復中、難レ之也、

又天官書云、大荒落歲々陰在レ巳、星居レ戌、以二四月一與二奎婁胃昴一晨出、曰二跰踵一云々、

後漢書云、魯恭曰、今始夏百穀權輿、陽氣胎養之時云云、

玉燭寶典引禮記辨名云、百穀名以二其初生一爲レ春、熟爲レ秋、故麥以二孟夏一爲レ秋也、

野客叢書云、宋子京、有下皇帝幸二南園一觀レ刈レ麥詩上、

類聚名物考云四月うつき卯花月のよし古説にいへり今案に卯つ木つきなるをつきといふ詞の重なれは一を略てかくいふか

日本歳時記云四月の和名を卯月と云卯のはな盛にひらくるゆゑにうの花月といふを略せりと奥義抄にみえたり

歳時語苑云、卯月(ウヅキ)四月之和名也、此月空疏(ウノ)花盛開發、故曰二卯花月一、今略レ之言二卯月一也、

續節序記云、四月異名、孟夏、余月、乾月、六氣、純陽、新夏、麥秋、首夏、仲呂、和名卯月

時節纂諺云、四月孟夏　仲呂　首夏　麥秋　青和　六陽　余月　純陽　乾梅　和名　卯月

萬葉考別記云四月を宇月と云は空木花月(ウノハナ)てふ事也集中に宇の花の咲月立はと四月をいひてこはこの月專らなる物故に名とすることと早苗月霜月なとのことしかくて此木は中虚なれは宇都木といへは其花をはうつ木の花といふへきを略きてうの花といふそを月の名に呼時はいよ／＼略きて宇月といふなり或人はうゑ月そといへと植をはふきて惠とこそいへ早苗は專ら五月植るなり

惠美須草(森宮龍翁撰)云四月を卯月といふことは卯の花の咲ころなれは卯の花月といふを略して卯月といふ

和訓栞云うつき卯花月ともいふの義といへり四月には此花盛り也又周正の四月は卯月也と詩の注にみえたりともいへり

毫品通考云　卯月此月卯ノ花サカンニヒラク故也

秘藏抄(異名)云このはとり月歌に「たつねてはなにかもすへき郭公このはとり月きなはなかなむ

莫傳抄(異名)云夏初月(ナツハツキ)四月歌に「郭公聲はけふまて夏は月音羽の山のかきのゐほりに

藏玉集云四月得鳥羽月(エトリハツキ)歌に「藤の花夏にかへれるおく山の下にやまたんゑとりはの月

又云花殘月歌に「暮はてん春の名殘や山ふかみゑけみかくれの花殘し月

藻鹽草(時節部)云得鳥羽月　花殘月(こゝに藏玉集の歌を載たり)　孟夏(漢)　中呂(同)　余月(同)　正陽(同)　清和(同)

年中行事秘抄云四月月令云孟夏之月日在レ畢斗建巳

又此月首夏ともいへり四月は夏の初月なれは始夏とも首夏ともいふなり孟始首の三字何れもはしめの義なり首夏猶清和と謝靈運詩みえたり清和も此月の名なり四月は純陽の月にして空色清くすみ時氣和するを以て名付しなるへし清和の注首夏猶ニ清夏一と歲華紀麗みえたり又此月乏月の名目あり四月也是謂ニ之乏月一冬穀既盡夏麥未レ登と元帝纂要みえたるによれは此月穀物つきてともしけれは穀乏き義をとりて乏月といへるなり維夏は四月維夏と毛詩みえたり純乾の名目は事物別名にいてたり右にいつるところいつれも四月の名目なり維夏の名唐の韓鄂之撰歲華紀麗にも載たり猶異名あまたあるへけれとふるくよりみえし名目計をあくるのみ

古事記詞志比宮記云、亦到ニ坐筑紫末羅縣之玉島里一而、御ニ食其河邊一之時當四月之上旬一云々

日本書紀神武紀云、戊午年夏四月丙申朔甲辰、皇師勒レ兵歩趣ニ龍田一云々

萬葉集卷第十六有由緣雜歌云、伊刀古名兄乃君云々八重疊平群乃山爾四月與

右乞食者詠

又卷第十八云宇能花能佐久都寄多知奴保等登藝須伎奈吉等與米余敷布里多里登母

右四月一日極久米朝臣廣繩之舘宴歌守大伴宿禰家持作レ之

古今和歌集卷第三夏歌詞書うつきにさける櫻をみてよめる

和名類聚鈔云四月首夏云々

秘藏抄云「うつきとて咲うのはなにこつたひていつしかきなく山ほとゝきす　源宗干

古今六帖云卯月歌に「春すきて卯月になれはさかき葉のときはのみこそ色增りけれ

莫傳抄云「夏雁のかへるこしちのとなみやまうの花月と何をいはまし

奥義抄云うのはなさかりにひらくる故にうの花月といふをあやまれり

八雲御抄時節部云四月うつき

藏玉集云卯花月「うちはふきいまもなかなん郭公卯の花月夜さかりすきゆく

下學集云、卯月此月卯花盛開故云ニ卯月一也

藻鹽草時節部云、四月卯月卯花月

古今要覽稿卷第三十二

●時令部

●うつき　四月

うつきは四月の和名なり古くより所見あり時當四月（ナリシモウツキ）之上旬（ハジメツカタ）と（古事記志比宮記）いひ戊午年夏四月（ウツキ）と（日本書紀神武紀）いひ八重疊平群乃山爾四月與（ヘタヽミヘグリノヤマニウツキトヤ）と（萬葉集）いひ宇能花能佐久都奇（ウノハナノサクツキ）多知奴（タチヌ）とも（同上）みえたり今少し世くたりてはうつきにさける櫻をみてと（古今和歌集詞書）いひうつきとて咲うの花にこつたひてと（秘藏抄）いひうの花月をなにといはましと（莫傳抄）いひ侍るは萬葉集のうの花の咲月立ぬと云によりし也又卯の花月夜さかりすき行と（藏玉集）いひ四月うつきと（八雲御抄）みえたりさて四月を卯月と名付たる義を解きしは奥義抄にうのはなさかりにひらくる故にうの花月といふをあやまれりとみえたり（下學集萬葉考別記類聚名物考歳時語苑日本歳時記和訓栞等書この説によれり）扨また四月の異名のことときにいたりては秘藏抄なとに出たるをはしめとやいはんいはゆる此月をこのはとり月と（秘藏抄）いひ又夏初月（ナツハツキ）と（莫傳抄）いひゑとりはの月と（藏玉集）いひ花殘月と（同上）いひ又首夏と（和名類聚鈔）いひ孟夏と（年中行事秘抄）いひつるも漢名なり仲呂と（拾芥抄）いふは律名なり是則禮記月令に其音徵律中二中呂一といふによりしなりさて西土にて書にみえしは惟四月哉生魄と（尙書）みえ四月秀葽と（毛詩）みえたり異名のことときに至ては孟夏之月と（禮記）みえ滔々孟夏と（離騷）みえ孟夏之月其音徵と（淮南子）見えたり其音徵律中二中呂一と（禮記）みえしをはしめとして孟夏之月其音徵律中二仲呂一と（淮南子）みえ四月律謂二之仲呂一と（白虎通）見えたり麥秋は禮記月令に靡草死麥秋至といふにはしまれり管子にもみえたり余月と四月をさしていふは四月爲レ余と（爾雅）みえしによりて後世月字をそへしなり四月得レ丁則曰二圉余一と（同上注）みえたり又跰踵と（史記天官書）みえたるを通俗志月令廣義等には蹟に作れりいつれも四月の名なり正陽は陽德用レ事則和氣皆陽建巳之月是也故謂二之正陽之月一と（西京雜記）みえ又正陽月慝未レ作慝謂二陰氣一也と（歲華紀麗）見えたり此月純陽の月にして無陰氣の月なり故に陰月ともいへりいはゆる此月純陽疑二於無陰一故亦謂二之陰月一と（西京雜記）みえたり始夏と云は魯恭曰今始夏百穀權輿陽氣胎養之時と（後漢書）みえしによれ

同上○按に名義詳ならす

蠶月 毛詩

○正誤

東雅云ヤヨヒなといふかこときもふるく釋せし所のこときは其釋なからむには草木の生ひそふる月也といへと𛀁かるへしともおほえす

按に三月を彌生といひ侍るは草木のいやおひそふ義なる事明なりいにしへ今の人々の說おなしきにひとり源君美のみ𛀁かるへしともおほえすといはれしは誤れりといふへし

編修兼校正　岡村尙謙平遜
校正兼鈔錄　山下官介源正房
校正兼淨寫　忠內鉊太郎紀弘光
校正兼圖畫　葦名隆吉平盛榮
校正兼淨寫　兒山諦之助平紀言
編修兼校正　伊庭熊作源秀正
校正兼鈔錄　橋本太刀允藤原好春
校正兼淨寫　小林好太郎源直温
編修兼校正　池野貞一郎源好謙
編修兼圖畫　志村愛助平知孝

編修兼校正　大河戶晉平藤原儀成
總　　　判　屋代太郎源弘賢

といへるを略していひはへるにや

花津月

莫傳抄○按に此月を花津月といふは花さかんにひらくる月なれはいふなり花津の津字は助字也

夢見月

同上○名義詳ならす

花見月

藏玉集○按に此月三十日の間花みてのみくらせはいふなり

櫻月

同上○按にこの月外花少なく櫻花のみ多き月なれは櫻月といふなり

春惜月

同上○按に此月のみにして春もくれはつれは名殘ををしみていふなり

寎

爾雅○按に郭璞注に三月の別名也と云り

修寎

同上○按に三月得レ丙則曰二修寎一とみえたり

寎月

事物別名通雅○按に爾雅には三月爲レ寎といへるを後世寎月と月字をそへたり正月を陬月二月を如月といふにおなしきなり

青章

史記○按に三月を彌生と此御國にていふに似たる名義なり青は青色になへての草木の生する義章はあきらかともあやとも訓すれは草木の枝葉出そろひてあやもあきらかに分れて何のくさ何の木と玄らるる故にかく名つけたる義明らかなり

末春

元帝纂要○按に名義字のことし

晩春

同上

載陽

事物別名○按に春三月の中にも此月陽氣もつともさかんなれはいふなるへし

華飾

同上○按に此月草木の花開事他月よりいとおほけれは華節といひはへるなり

末垂

ひらけぬらしなわか宿の桃
月清集　千五百番歌合
うち詠春の彌生のみしか夜を
ねもせてひとりあかすころかな
新撰六帖　やよひ　衣笠内大臣
あつさ弓末のゝ草のいやおひに
春さへふかくなりそしにける
九條三位入道知家
淺みとり野邊の草木のめもはるに
比は彌生の名こそ玄るけれ
左京大夫行家
今ははや春の日數やたけぬらん
やよひの月ははしめなれとも
右大辨入道光俊
山櫻なきかおくもちるはなに
春のやよひの日かすをそ玄る
○釋名
やよひ
日本書紀古今和歌集詞書○按に此月草木のいよいよ生そふる月なれは名付しなり奥義抄にも草木いよ／＼おふる故にいやおひ月といふとみえ新撰六帖に梓弓末のの草のいやおひにとあり
いやおひ
新撰六帖○名義同上
彌生
下學集○上におなし
三月
日本書紀尙書康誥○按に二月三月と數を以て次第したる名なり以下皆同し
季春
令義解禮記月令○按に正月を孟春といひ二月を仲春といひ三月を季春といふ孟仲季と次第したる名義なり
暮春
和名類聚鈔論語○按に此月春くれはへれは云也
姑洗
拾芥抄禮記月令○按に律名なり姑洗の字義故をさり新に就なりと白虎通にみえたり
さはなさ月
躬恒秘藏抄○按にさはなさ月はさくらはなさく月

木をいはぬは上の二月にいひしかはゆつりて畧けり
月の名多くは他の月と對へていふなり
和訓栞云やよひ三月をいふ彌生の義よとおと通す春
三月を生月氣更來彌生と次第したる名なるへし
本居宣長古事記傳訶志比宮卷曰凡て月々の名とも昔より說とも
あれと皆わろし其中にたゝ三月を彌生なりと云類の
みはよし云々
毫品通考時候門云三月清明三月ノ節也　穀雨三月ノ中也　晩春　暮春
五陽此月五陽生ス姑洗　彌生　季春　抄春　姑洗ハ律名
也姑ハ故也洗ハ鮮也此月萬物故ヲ去リテ新ニック枝
葉ヲカヘ改テ鮮明ナラスト言事無故ニシカ言フ彌生
トハ一切ノ艸木此月ニ至リテ漸ク生スル故ニ彌生ト
イフ也彌生トハヤヽオヽルトイフ略語也
尙書康誥云、惟三月哉生魄、周公初基、作ニ新大邑于東國
洛ニ云々、
禮記月令云、季春之月、日在レ胃、昏七星中、旦牽牛中、
又同上云、律中ニ姑洗一季春氣至則姑洗之律應高誘曰姑故也洗新是月陽氣養生去レ故就レ新
論語先進云、暮春者春服既成、冠者五六人、童子六七人
浴ニ于沂一風舞雩、詠而饋云々、玉燭寶典引論語今本饋作レ歸
爾雅云、三月爲レ寎云々

又云三月得レ丙、則曰ニ修寎一云々、
淮南子時則訓云、季春之月其音角、律中ニ姑洗一、注云姑故
也、洗新也、是月陽氣養生、去レ故就レ新、故曰、
又天文訓云、季春三月、豐隆乃出、以將ニ其雨一、
史記云、三月、其名青章、
又律書云、姑洗者、言萬物洗生也、
釋名云、三月氣至、姑洗之律應、姑洗者、南呂之生也三
分益一、管長七寸一分、其日其音其數、幷同ニ孟春一云
云、
白虎通云、三月謂ニ之姑洗一何、姑者故也、洗者鮮也、言
萬物、皆去レ故就ニ其新一莫レ不ニ鮮明一也、
蔡雍季春章句云、季末也、時有三月至レ此而盡、故謂ニ
之末一也、今歷季春清明節云々、
元帝纂要云、三月、曰ニ暮春、末春、晩春一
歲華紀麗云、三月日在ニ婁星一中氣日在レ胃也律中ニ姑洗一三月律也　暄
景　暮春云々、
事物別名云、三月季春華節　暮春寎月　載陽末垂　又云辰律姑洗云々

○和歌

曾丹集　暮の春三月はしめ
はゝこつむ彌生の月になりぬれは

又云さはなさ月歌に古郷へかりも鳴つゝかへるなり
さはなさ月に春やなりぬる友則
奠傳抄云花つ月三月歌に花つ月花より後の名のあら
はむなしく我は袖ぬれぬへし
又云夢見月同櫻ちるはつせの山の夢見月あらしのは
なのゆきのなかやと
古今六帖云やよひ云々
奥義抄云三月風雨あらたまりて草木いよ〳〵おふる
故にいやおひ月といふをあやまれり
藏玉集云三月花見月歌に薄みとり空もひとつの花見
月なへて心もあくかれぬらん
又云同櫻月なへていま盛とみえて櫻月うすくもりな
るよもの山のは
又云同春惜月かすならぬ身をもおもはす日をかさね
くれ行ほとの春惜月
八雲御抄時節部云三月やよひ云々
新撰六帖云やよひ云々
下學集云、三月彌生、一切草芽、至ニ此月一彌生、故云ニ
彌生一也
壒囊鈔云、三月沽洗　季春　暮春　暮陽　花月

藻鹽草云やよひ（やよやよひなとよめり）花見月　櫻月　春惜月　季
春漢　嘉月同　稱月同　禊月同　桃緑同
類聚名物考云やよひ草木の彌生てふよし古説のこと
く成へし
日本歳時記云、三月節を清明と云中を穀雨と云三月
の異名季春竊月蠶月律を姑洗といふ和名を彌生とい
ふ
按に蠶月は毛詩に見えたり
時節纂諺云、三月　季春　姑洗　暮春　竊月　春陽
修禊　暮律　嘉月　花飛　花老　五陽　彌生和名
歳時語苑云、三月季春（三月者春時之季月故云）　花月（此月百花寺院社庭開ニ酒宴一遊興多月也）
姑洗（三月律也律曆志云洗絜也言陽氣洗レ物辜絜レ之也位ニ於辰一在ニ三月一）　禊月（此月行ニ水邊一而祓ニ禊疾疫一故曰ニ禊月一）　五
陽（十一月冬至一陽生十二月二陽生正月三陽生二月四陽生三月五陽生ニ地上一也）　彌生（三月之和名也春者爲ニ生レ物之時一而至ニ此月一萬物彌生故曰ニ彌生一也）
跡部光海翁倭訓十二月曰彌生萬物彌生スルナリ
惠比須草云三月をやよひと稱るは彌生と云ふ意にて
春風の氣を以て山木里草ともにいや生る時なれはい
やおひ月と云を畧してやよひといふ云々
語意云三月をやよひ月と云は草木伊也於比（イヤオヒ）月也二月
に芽を張三月に玄ける故に彌生といひ（いやのいを略くは常多し）草

やよひとは三月をいふ日本書紀神武紀の訓にはしめてみえたり中むかしよりしてやよひの文字彌生と奧義抄かけり草木のいやおひしけれる比なれはいふなるへしやよひにうるふ月の有ける年と古今和歌集詞書いひ草木いよ〳〵おふる故にいやおひ月といふをあやまれりと奧義抄いひ一切草木芽至二此月一彌生故云二彌生一也と下學集いひ草木の彌生てふよし古説のことく成へしと類聚名物考いひ萬物彌生するなりと跡部光海翁説みえたり三月をやよひ月といふは草木いやおひ月也二月に芽をはり三月にしける故に彌生といふと語意いひやよひ三月をいふ彌生の義よとおと通す春三月を生月氣更來彌生と次第したる名成へしと和訓栞いへるそけにもとおもはるゝ說なり本居宣長いひけらく凡て月々の名とも昔より說共あれと皆わろし其中にたゝ三月を彌生なりと云類のみはよしと古事記傳訶志比宮卷みえたり彌生は古今人々の說々同一致なれは義論はいさゝかもなき也扨異名は暮春と和名類聚抄いひ律名を沽洗と拾芥抄みえしは律中二沽洗一と禮記月令にみえしによられしなりさはなつきと秘藏抄いひ侍るも此月の異名なり又花津月と莫傳抄いひ夢見月とも同上いひ花見月櫻月春惜月とも藏玉集いへり西土にては季春と禮記月令いふも此月なり又寎と爾雅書るも別名にして三月得レ丙則曰二修寎一と同上みえたり季春之月其音角律中二姑洗一と淮南子いひ三月其名靑章と史記いひ三月を暮春末春晚春と元帝纂要いひ三月季春暮春載陽華節寎月末垂と事物別名みえたりいつれも此月の別名なり

日本書紀神武紀云、二年乙卯三月（ヤヨヒ）甲寅朔己未徙二入吉備國一起二行宮一以居レ之云々、

萬葉集卷第一云、明日香川原宮御宇天皇代、五年三月（ヤヨヒ）戊寅朔、天皇幸二吉野宮一而肆宴焉、

古今和歌集卷第一春歌上詞書云やよひにうるふ月の有ける年よめる云々

又同上云やよひに鶯のこゑ久しうきこえさりけるをよめる

又同上云やよひのつこもりかたに山をこえけるに山河より花のなかれけるをよめる

和名類聚鈔歲時部云、三月暮春云々、

拾芥抄云、沽洗、三月

秘藏抄云三月やよひ歌に暮て行彌生のそらをなかむれは八重の霞をかへるかりかね敏行朝臣

降入
史記○名義詳ならす
仲陽
元帝纂要事物別名○按に義仲春とおなし春を陽月ともいへはかく名付しなり
令月
張平子歸田賦元帝纂要○按に二月の時節和暖にしてよろしき月といへるかことし故に歸田賦にも仲春令月時和氣淸とみえたり
令節
歲華紀麗○按に義令月といふにおなし
仲序
同上○歲華紀麗注云謂二仲春一とみえたり
○正誤
東雅云キサラキなといふかこときもふるく釋せし所のこときは其釋なからむには空さへかへりぬる月也ともいへと玄かるへしとも覺えす古語にキサともキサケともキサキともキサイともいひし事ともあれと其釋せし所の義とはおなしからす云々
按にきさらきの和訓いとむつかしされと空さえかへりぬる月也ともいへと玄かるへしとも覺えすといひキサともキサケともキサキともキサイとも云し事ともあれと其釋せし所の義とはおなしからすといふはいはすとも義たかへる事もとよりなり奧義抄をはしめとして下學集なともみなきぬさらきの義にいひ又きさらきは氣更來の義にとる說もあり二月はさえかへり餘寒をもよほしつれは衣を更に着ると云義也
惠美須草云二月をきさらきと稱する事は衣更着と云意重着を止て肌に更に衣をきるといふ義なり奧義抄の意とは別也
按に古人みな衣更着の意といへり奧義抄もおなしきを奧義抄の意とは別也といふはいかゝ且きさらきを稱する事は衣更着と云意といひなから其下に重着をやめて肌に更に衣をきるといふ義なりとはいかゝおなし事を重ねいふに似たりいとおほつかなき辨なり肌に更に衣をきるといふ義ならは奧義抄と意別なりとはいふへからす同意なる事明けし
やよひ三月

古事記日本書紀萬葉集○按に奥義抄をはしめとして古説みな二月餘寒にて更に衣をきれはきぬさらきといふ義にとけとも正月を草木の芽のもえ月と云義にとりてむ月といひ二月をくさきはり月と眞淵はとけれとも篤胤かくみさら月といへるかたまされるにや

二月
日本書紀尙書舜典

なかのはる
古今六帖

夾鐘
古事記序禮記月令○按に律名なり玉燭寶典に仲春氣至則夾鐘の律應すとみえたり淮南子注云萬物去レ陰夾レ陽聚レ地而生曰二夾鐘一とみえたり白虎通に夾者孚甲也言萬物孚レ甲種類分也とみえたれは和訓にくさきはり月といふ義と似たり甲をひらき種類分るゝといふは草木の萠芽出て何の草木と知るゝ義也

梅つさ月
躬恒秘藏抄○按に此月梅花咲月なれは云也つさは助字也

雪消月
俊頼朝臣莫傳抄○按に義文字のことし

梅つ月
同上○按に義梅つさ月とおなしつは助字也

梅見月
藏玉集○按に義文字のことし

小草生月
同上○按に此月をくさ山野に生すれは名付しなり

如
爾雅○按に二月を如と爲と爾雅いへりさすれは別名なり和に如字をきさらきと訓せり

橘如
同上○按に郭璞注に二月得レ乙曰二橘如一とみえたり

如月
新撰六帖事物別名○按に正月を陬といふを後世陬月といふかことし

仲春
和名類聚鈔禮記月令○按に此月春三月の中にあれは仲春といふなり

禮記月令云、仲春之月、日在レ奎、昏弧中、旦建星中、律中ニ夾鐘一、
爾雅云、二月爲レ如云々、
又云、二月得レ乙、曰ニ橘如一云々、
淮南子時則訓云、仲春之月、其音角、律中ニ夾鐘一、注曰萬物去レ陰、夾レ陽聚レ地而生曰ニ夾鐘一、
史記云、二月其名降入云々、
釋名云、二月之夾鐘者何、夾者孚也、言萬物孚甲、乘類分也云々、
白虎通云、二月律、謂ニ之夾鐘一何、夾者孚甲也、言萬物孚甲、種類分也、
玉燭寶典云律中ニ夾鐘一、仲春氣至則夾鐘之律應高誘曰是月萬物去レ陰而生故竹管音中ニ夾鐘一也
元帝纂要云、二月曰ニ仲陽一、又曰ニ令月一、
歳華紀麗云、二月、日在ニ營室一、律中ニ夾鐘一、二月律也
又云、仲春、梁元帝纂要云二月仲春仲陽中春
又云、中和節時、維太平日乃初吉、作ニ爲令節一以殷ニ仲春一、發ニ揮陽和一、幽ニ贊生植一、仲序謂ニ仲春一也其中和節助ニ發生之德一、覃ニ生育之恩一、助ニ陰陽之交泰一、來ニ天地之和同一、
事物別名云、二月仲春　仲陽　如月

又云卯律夾鐘

○和歌

壬二集　建保三年名所百首
きさらきや由良のみさきに風立ぬ
とわたる舟のぬさもとらなん

新撰六帖　なかのはる　衣笠内大臣
風さむみまたききさらきの山の端に
かすむとみえて雪のふりつゝ

前藤大納言爲家
なかき日にまたるゝ花は咲やらて
くらしかねたる衣更着のそら

左京大夫行家
なからふる身とやたのまん如月の
春の日をくるこゝろならひに

右大弁入道光俊
二月やけふはつ午のまゐるしとて
いなりの杉はもとつ葉もなし

○釋名

きさらき

天位ニ云々、

年中行事秘抄云、律中ニ夾鐘一

拾芥抄云夾鐘、二月

歲時語苑云、夾鐘二月律也、

凡河內躬恒秘藏抄云二月むめつさ月歌に鶯のかよはぬさとのやとはあらし花さかりなるむめつさ月に　友則

俊賴朝臣莫傳抄云雪消月二月歌に年越て春こそみえす富士のねの雪きえ月のころもふれゝは

又云梅津月おなしく歌に大空のおとやゑるらん梅津月いつくにきくも風にほころふ

藏玉集云二月梅見月歌にとふ人もなき故鄉の梅み月風のなさけを袖にゑる哉

又云二月小草生(サクサオヒ)月歌に綠なるけに色あさし小草生月まちえたるむさしの丶原

壒囊抄云二月ハ卯ノ月也是天竺ノ孟春也春ノ正方ナル故ニ二月ヲ初月トス又北斗建レ卯故ト云々楚王取ニ正方ニ東ノ中央卯建ニ年首ニ宿曜經ニ見タリ

藻鹽草(時節)云きさらき

きぬさらきとも但當時は不詠なり

歲時語苑云、中春々者總三月也、正月二月三月也、此月居ニ三月中一月、故云レ爾、

時節纂諺(十二月異名)云、二月　仲春　夾鐘　如月　令月　陽中

毫品通考(時候門)云、二月　仲春　春半　四陽(二月ハ四陽生スル故ナリ)　夾鐘　衣更着(キサラキ)　如月　仲春　トハ三月ノ中分ナレハ也春半モ同義也夾鐘トハ律名也夾ハ孚甲也鐘ハ種也ト注セリ言心ハ此月萬物孚甲シ種類分チ出レハ也孚甲トハ草木ノ皮カツキニテ出ルヲ言也草木ノ皮カツキニテ出ルハ甲ヲキタルニ似タレハ也衣更着トハ此月猶餘寒ツヨキ故ニ衣更ニキルト言義也亦如月トモ書也

新撰續法禮錄云二月きさらきと續いふ心は此月にいたりて餘寒別して甚しけれは衣をかさねきるとて衣更着ともかけり

又云二月律は夾鐘にあたる夾は孚甲とて萬物の萌出るかたちおの／＼その種子の甲をいたゝさゝけ出てそれ／＼のすかた分明なれは異名とせり

尙書(堯典)云、日中星鳥、以殷ニ仲春一厥民析、鳥獸孳尾、

又(舜典)云、歲二月、東巡守至ニ于岱宗一柴、望ニ秩于山川一、

るを青皇ともいひ又春の時氣を青陽といへるを後には孟陽仲陽載陽ともいへるかことし孟陽は正月仲陽は二月也陽字の上に孟仲の文字を加へて月々に配當せる名なり陽春なといへるはたゝ春をいへるなり月月にあてたる名目にはあらす陽字の義春といふ意と同し初春仲春といふへきを孟陽仲陽といひ又春風を陽風といひ春の木を陽樹と元帝纂要みえたり

日本書紀神武紀云、東征、五年戊午、春二月丁酉、朔丁未、皇師遂東、舳艫相接云々、

萬葉集巻第一、天皇、四年乙亥、春二月乙亥、朔丁亥、十市皇女、阿閉皇女、參ニ赴於伊勢神宮一、

和名類聚鈔歳時部云、二月仲春、

奥義抄云二月さむくて更に衣をきれはきぬさらきと云をあやまれるなり

曾丹集云わきもこか衣きさらきかせさえてありしにまさる心地かもする

八雲御抄時節部云、二月きさらき

下學集云、二月衣更着此月餘寒猶嚴、故衣更着也、

壒嚢抄云、二月夾鐘、仲春、仲陽

類聚名物考云二月きさらき衣更着寒さの冴かへり堪かたけれは衣を更に重ね着るのよし舊説あり今思ふに正月に春の來たるか又いよ／＼春色の増れは來更來の意にやこの次を彌生といふ語勢に似たるへし又按に此月玄鳥到と月令にみゆれは去年の八月に雁來りしか又更に來るの意歟

日本歳時記云二月の和名を衣更着といふ此月餘寒はけしくて更に衣をきれはきぬさらきといふを略せり

時節纂諺云、二月和名、衣更着、

跡部光海翁十二月倭訓云、衣更衣陽氣ヲ更ニムカフルヲ云

歳時語苑云、衣更着二月之和名也、此月餘寒猶甚、故更又着レ衣、故名也、

語意云二月を伎佐良藝月と云は久佐伎波里月也草木の芽を張出すは二月也其久佐伎の三言約めは伎なれは伎とのみもいふへく又は略くともすへし佐良と波里は韻通なり

和訓栞云きさらき二月をいふ氣更に來るの義陽氣の發達する時なり

古事記序云、歳次ニ大梁一月踵ニ夾鐘一清原大宮、昇卽ニ

古今要覽稿卷第三十一

●時令部

●きさらき　二月

きさらきとは二月をいふいとふるき和訓なり日本書紀に神武紀出たりまた夾鐘の文字をもきさらきと古事記序訓す是律名にしていはゆる律中二夾鐘一と禮記月令みえたるによりしなるへしさてきさらきといふ義は二月はいまたさむさもさりかねて衣をさらにきるといふ意と時氣更にきたるといふ意と兩義なり時氣更に來とはいはゆる餘寒のこと也朗詠に二月の雪落衣なとゝいふことく餘寒甚しき月なれはなり衣更きとは是も餘寒をむかへて更に衣をきるといふなれは時氣更に來ると云義にとるかたゝかるへしとおもはる清輔奥義抄に二月さむくて更に衣をきれはきぬさらきと云をあやまれるなりとみえたり又此月餘寒嚴故衣更着也と下學集いひ二月を伎佐良藝キサラギ月言は久佐伎波里月クサキハリツキ也草木の芽を張出すは二月也其久佐伎の三言の約めは伎なれは伎とのみも云へくも又は草は略くともすへし佐良と波里ハリは韻通へりと語意云は古人未發の考なれとも平田篤胤かくみさら月にて夫よりいや生とつゝくといへるかた然るへし跡部光海翁は衣更衣陽氣を更にむかふるを云といひきさらき二月をいふ氣更に來るの義陽氣の發達するときなりと和訓栞いひ又此月玄鳥到と月令にみゆれは去年の八月に雁來りしかまた更に來るの意歟と類聚名物考いへりまた二月の異名あまたあるか中にむめつさ月と躬恒秘藏抄いひ雪消月ユキキエツキ俊頼朝臣莫傳抄。梅津月と同上みえたり後世にいたりて月々の名目もいとおほくなりたりいはゆる梅見月藏玉集小草生月と同上いふたくひなり西土にても異名さまゝゝある中に二月爲レ如と爾疋いひたるによりて如月と事物別名月の字を入て書る樣になれり又二月得レ乙曰二橘如一と同上みえたり此月を仲春と云ふは仲春之月日在レ釜と禮記月令いへるにはしまれり又降入と史記いへり又二月曰二仲陽一と元帝纂要いひ又令月と張子歸田賦みえたり異名を和漢ともにいつれも詩に詠し歌によめる句の後世にいたりてをのつから異名となれるなるへしゝかれはますゝゝ月々の名目も多くなれるならんたとへは春を青帝といへ

いふへけれとそれも又えかるへしともおもはれす云

云

按に正月をむ月といふことは日本書紀神武天皇の巻にかな付あり萬葉集にはむ月たちとかな書あり十二月の異名はいとふるくよりいひつきし所とおもはる然るに舊事記は僞書なれは取かたきうへに印本に正月をむつきとよみしこと所見なし諳記のあやまりにや

語意云十二月の名に此略言多し一月を牟月といふは毛登都月てふ事也其毛都の約は牟なれはえかいふ親月といふは言にたらす古言えらぬ人のかり字の意もていへるはみな此國の言にそむけり

按に牟月を一月とかけるは借始に詞をまふけていへるなるへけれ共一月といへは一月二月と月數をかそふるにまかへはこゝは正月とかくへきなりさてもとつといふ語はもとの二言か體にてつの一言は助詞なれは其體言のとを略して助詞のつを採て約むる例ありやおほつかなし

正義云、不レ言二正月一而言二一月一者、易革卦彖、曰湯武革レ命順二乎天一而應二乎人一象曰君子以治レ暦明レ時、然則改レ正治レ暦、必自二武王一始矣、既入二商郊一始改二正朔一其初發猶二是殷之十二月一故史以二一月一名レ之

按にふるくより正月と此月をいふを正月といはす一月といふはとかきしは誤なり杜預は不レ言二一年一月一といへるをはるかにをくれし正義に不レ言二正月一而言二一月一といへるはいかにもとりかたきなり

はしむるなり是天をあふきとふとみ後地上の萬物をふしてみるこれ天地自然の道理といひつへき事なり

霞初月

同上○按に義文字のことし

初春月

同上○按に義上に同し

端月

玉燭寶典○按に正月と義同したゝしきと端字を訓す故に文字をかへて端月と書す

孟春

禮記月令○按に孟字ははしめの意なり故に初春を孟春といひ侍るなり

履端

壒嚢抄左傳○按に正月は萬事をはしむる端なれは端を履と云義にとれり

陬

爾雅○按に正月の別名なりと郭璞いへり

孟陬

離騷經○按に孟春孟陽といへる義とおなしく陬字の上に孟字をかうふらせたるなり

監徳

史記

孟陽

元帝纂要○按に春を陽春といへは下の春字をはふき上に孟字をかうふらせたるなり

上春(同上)開春(同上)發春(同上)獻春(同上)首歲(同上)獻歲(同上)發歲(同上)初歲(同上)肇歲(同上)方歲(同上)華歲(同上)大蔟

拾芥抄禮記月令釋名白虎通○按に律名十二ありいはゆる十二律なり故に十二月に配して正月を大蔟といふなり大蔟の意物地上にあつまり出る義也

元正(事物別名)上月(同上)嘉月(同上)

○正誤

東雅云疑を闕くとも疑はうたかひを傳ふるともみえたれは我疑ひ思ふ所の中其一二をうらに注しぬ舊事記にはムツキといふ事はムツヒツキといふなり上古の語にスヘムツ神なといふ事はあれとムツをムとのみいひて睦の義ありとも見えす又ムツといひツキといふツといふことはのかさなれる故にひとつのツといふこと葉にふたつのツといふことはこもれりなと

周處風土記云、正月元日百禮兼崇
元帝纂要云、正月曰孟陬、孟陽、上春、開春、發春、獻春、首春、首歲、獻歲、發歲、初歲、肇歲、華歲、
玉燭寶典云、正月爲端月、其一日爲元日、
荊楚歲時記云、正月一日是三元之日也、春秋謂之端月、鷄鳴而起云々、

〇釋名

むつき
日本書紀萬葉集古今和歌集〇按にむ月はむつひ月の義といふは古說なれとも平田篤胤說にムツキはもゆ月なりモユの約ムなりこれ草木の萌きさすをいふといへるかたまされるにや

武都紀
萬葉集

牟都奇
同上

睦月
下學集日本歲時記續節序記

朊月
下學集

正月（ムツキ）
日本書紀萬葉集和名類聚鈔尙書春秋〇按に文字はさま〴〵に書なせともみな上の意とおなし

月正
尙書舜典周處風土記〇按に正月を反して月正とかけるなり蔡沈か注に正月なりとあり

初春
和名類聚鈔〇む月は春の初なれはかく云

さみとり月
躬恒秘藏抄〇按にさは小字の義にて此月よりすこしくみとりをそふる意をとりていへるなり

暮新月
俊賴朝臣莫傳抄〇按にとしくれてあらたにむかへし月といへる意なるへし

年初月
同上〇按に義文字のことし

初空月
藏玉集〇按に正月を三元といひて年のはしめ月の初め日の初めなれはあけ渡る空をもはしめてみる義也すへての物を見初るにまつ空をみて萬物をみ

といふもたゝしき月と祝ていふ事なり禮儀を改て正しき月なれはさも有へし

跡部光海云十二月倭訓正月此月陽氣ヲ迎ルヲ云神武紀正妃ヲムカイミメト訓ス

和訓栞云むつき正月をいふ親ましてふ月なれはいふ又生月の義春陽發生の初なれはかく名つくる成へし

類聚名物考云正月むつき睦の意にてむつましく親族朋友も相したしめはいふ事舊説のことくなるへし

和名類聚鈔歳時之部云正月初春云々

凡河内躬恒秘藏抄云正月さみとり月　年暮てさみとり月と成ぬれは所さへなし小松ひくまの貫之

後頼朝臣莫傳抄云暮新月　正月　くれし月千世かくるらんはつ草のまたみるはかりとしはこえつゝ

又云　年初月おなしく　梅もはやさかりになりぬとしは月名もめつらしく成にけらしな

藏玉集云初空月　雪は猶ふるとしなから立春はさえにしまゝの初空の月後鳥羽院御製

又云霞初月　けにもはや山風さむみふる雪のその名はかりや霞初月定家

又云初春月　かすみたつ初春月の朝日影のとけき色や空にみゆらん家隆

尙書舜典云、正月上日受二終于文祖一云々、　又同上云、月正元日云々、　又大禹謨云、正月朔旦受二命于神宗一云々、

春秋隱公云、元年春王正月云々、　又傳文公云、先王之正レ時也履二端於始一擧二正於中一云々、

　按に後世正月をさして以履端といふは此によりしなるへし

禮記月令云、其音角律中二大蔟一云々、　爾疋云、正月爲レ陬音騶李巡曰正月萬物萌陬陬隅歆出曰レ陬々出レ之也

離騷經云、攝提貞二于孟陬一、

史記樂書云、漢家常以二正月上辛一祠二太一一、　又天官書云、正月上甲　風從二東方一宜レ蠶　又云、作二正月　其名監德一、

又律書云、大蔟者、言萬物蔟生也

釋名云、正月少陽建レ寅、寅者演也、律中二大蔟一律之爲レ言、率也、所二以率一レ氣也、太者大也、蔟者湊也、言萬物始大湊レ地而出也

白虎通云、正月律、謂二之太蔟一何、太亦大也、蔟者湊也言萬物始大湊レ地而出也

事あるあひた云々
○凡河内躬恒秘藏抄云正月むつき　むつきたつゑるしとてやはいつしかとよもの山邊に霞たつちん紀友則
○古今六帖云む月藤原言直　鶯の冬籠してうめる子ははるのむ月のなかにこそなけ
○清輔奥義抄云む月高き賤しきゆきゝたるか故にむつみ月といふをあやまれり
○八雲御抄時節部云正月むつき
○新撰六帖云むつき九條三位入道知家　あら玉の空めつらしき春といひてうゐにかそふる月もきにけり
○世諺問答云正月問て云まつむ月と申侍るはいかなるいはれそや答正月はとしの始の祝事をしてゑる人なるはたかひに行かよひいよ／＼ゑたしみむつふるわさをゑけるによりてこの月をむつひ月となつけ侍りそのこと葉を略してむ月といふとそきゝおよひし
○拾芥抄云、大蔟正月
壒囊抄云、十二月ノ異名何々正月　大蔟　孟春　初春　新春　上春　端月　初陽　端春　建寅　肇年
又云正月ヲ履端ト云一年ノ始ナレハ一切ノ事ノ端ヲ履ト云義也
○下學集云、正月睦月或作レ昵、新春親類相依娛樂遊宴、故云二睦月一也、
○藻鹽草云正月むつき　はつみ月　子日月　初空月　霞初月　初春月　子春　端月　大蔟
○東雅云正月ムツキ義不レ詳我國の月の名太古よりいひつきしことはとも聞えす云々
○日本歲時記云正月の和名を睦月といふ清輔か奥義抄にいはくたかきいやしきゆききたるかゆへにむつひ月といへるを畧せり
○續節序記云正月和名睦月さみとり月云々一月と云へからす正月といふこと論語大全新安陳氏說有レ之
按に論語大全云新安陳氏曰不レ曰二一月一而曰二正月一取二王者居レ正之義一云々、
○歲時語苑云、睦月正月之和名也、睦或作レ昵、音木、音匿、和也、此時新春節天氣和暖、親類相依和睦娛樂遊宴、故曰二睦月一也、
地下年中行事云正月をむつきといふは年の始めなれは親子夫婦あつまりてむつましみいやをつくす月なれはむつまし月といふを畧してむ月と云唐にて正月

なとゝり〳〵に讀こまれたれはあたらしく月々の異名をよみいたされし事と亡られたり又西土にてものにみえしは正月上日と（尚書舜典）いふ是正月をいふ名目の物に見えし始なり正月は月の初なり又月正元日と（同上）書る也元日も同しく日のはしめなれはもとつ日といへる義にて元日と書る也元年春王正月と（春秋）いふも物正しきの義にとりていふなり正月謂之端月と（史記）いひ侍るも正月と云と義おなし端正の二字いつれもたゝしき義なれは文字をかへて端月とかけるなり玉燭寶典も正月爲端月といへり又孟春之月日在營室（禮記月令）といひまた正月を爲陬と（爾雅）いふは正月の別名といふへし郭璞曰以日配月之名也といへり又攝提貞於孟陬と（離騷經）いふも正月の事也正月を曰孟陬と（元帝纂要）いひ侍るも離騷によりしなるへし又曰孟陽、上春、開春、發春、獻春、首歳、獻歳、發歳、初歳、肇歳、方歳、華歳と（同上）いひまた正月律名ありこれを太蔟と（拾芥抄）いひ侍るも其音角律中太蔟と（禮記月令）いへるによられしなり太蔟の義解は劉熙釋名班固白虎通にくはしく辨ありゆへにこゝに略せり又芳春、青春、陽春、三春、九春と（元帝纂要）みえたれともあなかち正月の月にあつるにもあらすして春の三月をすへていへる名目とおしはからるさてまた正月を一月と書る物ふるくよりみえたり附說曰 正月者古文尚書云一月也と（玉燭寶典）見えまた漢書表亦云一月鷄鳴而起と（同上）みえたれとも是正月を一月といふへからさる證あり杜預春秋傳注云人君卽位欲其體元以居正故不言一年一月とみえたるそ正しき據とすへし故に和漢ともに人君卽位の年をさして元年とさため年々月のはしめをさして正月といふ

日本書紀（神武天皇紀）云、四十有二年壬寅、春正月壬子朔甲寅、立皇子神渟名川耳尊、爲皇太子云々

萬葉集卷第五（雜歌）

太宰帥大伴卿宅宴梅花歌

武都紀多知波流能吉多良婆可久斯許曾烏梅乎乎利都都多努之岐乎倍米（大貳紀卿）

判官久米朝臣廣繩之舘宴歌一首

牟都奇多都波流能波自米爾可久之都追安比之惠美天婆等枳自家米也母

正月五日守大伴宿禰家持

古今和歌集卷第一（春歌上）云、二條の后のとう宮のみやすむ所ときこえける時む月三日おまへにめしておほせ

古今要覽稿卷第三十

●時令部

●むつき 正月

むつきは正月の和名なり日本書紀神武紀四十有二年壬寅春(ハルムツキ)正月とみえたるそ正月をムツキとよみし初なる武(ム)都(ツ)紀(キ)多(タ)知(チ)波(ハ)流(ル)能(ノ)吉(キ)多(タ)良(ラ)婆(バ)と萬葉集みえ二條の后のとう宮のみやすむ所ときこえける時むつき三日おまへにめしてと古今和歌集春歌上見えむつきたつゑるしとてやはいつしかとよもの山邊にかすみ立らんと躬恒秘藏抄見え正月むつき高き賤きゆきゝたる故にむつみ月といふと清輔奥義抄いひしははしめてむつきの義を解に似たり正月むつきと八雲御抄みえ正月睦月睦或作レ昵新春親類相依娯樂遊宴故云二睦月一也と下學集云へるも奥義抄によりしなるへし正月はとしの始の祝事をしてゑる人なるはたかひに行かよひいよ／＼ゑたしみむつふるわさをゑけるによりて此月をむつひ月となつけ侍りその言葉を略してむ月といふとそきゝ及ひしと世諺問答みえ正月むつき睦の意にてむつましく親族朋友も相ゑたしめはいふ事舊説のことく成へしと類聚名物考辨せり然るに平田篤胤曰ムツキはもゆ月なりモユ(萌)の約ム(芽)なりこれ草木の萌きさすをいふきさらきはクミサラ月にてそれよりイヤ生といふ順なりといへりこの説古人未發なり賀茂眞淵か一月(ヒトツキ)を牟月(ムツキ)といふは毛登都(モトツ)月てふ事なり毛都の約は牟なれはゑかいふといへるはおほつかなし正誤に辨す正月を初春と和名類聚鈔いひ又異名をさみとり月と躬恒秘藏抄いひ暮新月と俊頼朝臣莫傳抄いひ年初月と同上いひ初空月と藏玉集いひ霞初月と同上いひ初春月と同上いふもみな異名にして後世にいてきしところなりもとの起りは躬恒秘藏抄よりはしまれることならんを俊頼朝臣みつから歌をよみたまひて月々の異名をいひ初しなりそれより中昔にいたりては藏玉集なとにのせたる異名もおなしく歌によませ給ふかそのまま異名となれるなからまたく藏玉集の月々の異名は異名を求めたまひて歌によみ賜ふと思はれぬる故は定家卿家隆卿なとも月々の異名の歌をよまれ後鳥羽院御製も藏玉集に載られたれは仰をかゝむり奉りてよまれしとみえたり歌からも其月々の時候又は景物

月指レ巳、五月指レ午、六月指レ未、七月指レ申、八月指レ酉、九月指レ戌、十月指レ亥、十一月指レ子、十二月指レ丑、終而復始、

白虎通云、正朔有二三本一、天有二三統一、謂二三微之月一也、明王者、當二敬レ始重一レ本也、禮三正記云、三微者何謂也、陽氣始施二黃泉一、萬物動レ微而未レ著也、十一月之時、陽氣始養二根於黃泉之下一、萬物皆赤、赤者盛陽之氣也、故周爲二天正一、色尙レ赤也、十二月之時、萬物始牙而白、白者陰氣、故殷爲二地正一、色尙レ白也、十三月之時、萬物始達、孚レ甲而出、皆黑、人得加レ功、故夏爲二人正一、色尙レ黑、尙書大傳云、夏以二孟春月一爲レ正、殷二以季冬一爲レ正、周以二仲冬一爲レ正、夏以二十三月一爲レ正、色尙レ黑以二平旦一爲レ朔、殷以二十二月一爲レ正、色尙レ白、以二雞鳴一爲レ朔、周以二十一月一爲レ正、色尙レ赤、以二夜半一爲レ朔、不下以二二月後一爲上レ正者、萬物不レ齊、莫レ適レ所レ統、故必以二三微之月一也、

後律曆志云、漢祖受レ命、因二秦之紀一、十月爲二年首一、

隋志云、周德既衰、史官廢レ職、疇人分散、禨祥莫レ理、秦兼二天下一、頗推二五勝一、自以獲二水德瑞一、以二十月一爲レ正、漢氏初興、多所二未暇一、百有餘載、猶行二秦曆一、至二于孝武一、改用二夏正一、

歲華紀麗云、斗建二寅位一、時祠二岳鎭一、

索隱引天官書云、攝提三星、若二鼎足一、句直、斗杓所レ指、以二建時節一、故爲二攝提格一、格至也、言攝隨二月建一至也、

索隱云、二世三年正月也、秦避二正字諱一、故曰二端月一、

○釋名

をさす

禮記○按に建字を訓り淮南子には指レ寅と指といふ字を書索隱には斗柄所レ指とも書り和訓栞云北斗の斗柄のさしむかふをもていへは尾指の義なるへし斗柄を俗に劒先といへり

といはすして端月といへり一說に始皇は寅の月に誕生あり我か降誕の月なりとて專ら寅の月に萬機の政を始といへり故に政月と書後に文質を分れは文はかさると讀はとて作の文を除て篇計を用ひて正月と書とも云へり三正記曰質は法レ天文は法レ地なり帝王始起先質後文者順ニ天下之道本末之義先後之序ニ云々又正政是にて除レ諱音にて平字になる故ともいへり年の事一に止ると云心もあり依て正月といへり

武家歲時故實記云正月を元月一月と不レ謂正と書事は天下の萬物此月に正するの心なり故に一に止と書也しかるに秦の世にいたり正を止て端月といへり是始皇の諱政といふゆゑ同音を以て是を避るとなん

歲時語苑云、愚按、秦始皇名政、正之字同音、故避レ正、稱ニ端月一、今世不レ諱レ正而言ニ正月一、秦世遙隔、且和朝土地異也、

時節纂諺云史記索隱云古曆は黃帝調曆以前を云上元大初曆等有みな寅に建の月を正月とす是を孟春とす顓頊夏禹も寅に建月を正月とすたゝ黃帝及周魯子に建月を正月とすまた殷世丑に建月を正月とす建とは北斗建先の刻子の正月なれは子に建し丑正月なれは丑に建寅の正月なれは寅に建今の正月寅の月なれは夜五時寅の方に七星の杓をさすをみて知へし秦の始皇帝の時は寅の月を正月とす漢の武帝の時元封七年より改て大初曆を用ゆと云々

年中行事略式云夏の代には寅の月を年始とす今我國の正月なり殷の代は丑の月を年始とす是我國の十二月也周の代は子の月をはしめとす今の十一月なり右三說の內夏の月建を今日本神國にもちゆると世俗申きたる神國年月日時はかたしけなくも神武天皇之御宇大和國橿原において天地を以て書籍とし日月を以て證明とし年月日時十干十二支をさため其時々のせつにあはせかさりいはふ事和語にして儒佛にかゝはらす先正月ははしめの月なるに依て初月と申へきを正月と申云々

禮記（月令）云、正月之節斗建レ寅之初云々、

家語云、季康子問ニ於孔子一曰、今周十二月、夏之十月、而猶有レ螽、何也、對曰、火伏而後蟄者畢、今火猶西流、司曆過也、康子曰、所レ失者幾月也、曰、於レ夏十月火既沒矣、今火見、再失レ閏也、

淮南子（天文訓）云、斗正月指レ寅、二月指レ卯、三月指レ辰、四

首ト定玉フヨリ人皆春ト稱ス寅ヲ以テ十二月ノ始トス邵康節ハ理數ヲ立テ一元トモ云事ヲ發明セリ一元ト云ハ天地ノ始リテ終ル一終始ノ事ヲ云也十二萬九千六百年ヲ以テ一元トス一元ニ十二會アリ是ヲ十二支ニ配當ス一會トハ一萬八百年ノ事也子ノ會ノ始ハ清濁ノ氣混合シテ未其氣混沌タリ是ヲ大始ト云ハ一先ノ始ナリ是ヨリ漸々ニ開明シ五千四百年ニシテ子ノ會ノ中ニ當テ輕ク清氣騰上テ日月星辰ノ四物象ヲナシテ共ニ天トナリ故ニ天ハ子ノ開ケ而未凝清堅實セス故ニ天ハ成地ニ未レ地（成カ）又五千四百年ニシテ丑ノ會終リテ又丑ノ會始リ、五千四百年ニシテ丑ノ會ノ中ニ當リテ重ク濁ルノ氣凝結スル者始テ堅實シテ土石トナリ濕潤ノ氣ハ水トナリ流レテ不レ凝燥烈ノ氣ハ火也顯レテ不レ隱水火土石ノ四物形ヲナシテ共ニ地トナル故ニ地ハ丑ニ闢ク又五千四百年ニシテ丑ノ會終リ寅ノ會始五千四百年ニシテ寅ノ會ノ中ニ當テ人物始テ生シ五千四百年ニシテ寅ノ會終リ故ニ人ハ寅ニ生スト云也又天竺ニハ卯ノ月ヲ孟春トモ云春ハ卯ヨリ來リケル故ナリ宿曜經ニ云楚王ハ取ニ正方ニ東（方カ）宋ノ卯ヲ建テ年首トス通典云漢ノ高祖十月ニ秦ヲ定ム遂ニ改メテ年首トス武帝又改テ夏正ヲ用寅ノ月ヲ以テ歲首トスル元日ノ賀ハ始テ爰ニ起ルトモイヘリ

又云子丑寅ノ三統ハ天地人ノ三ニ配スレトモ先ハ三微月ノ事三微トハ何ノ謂ソ陽氣始テ施シ黃泉ノ萬物始テ動コト微ニシテイマタアラハレサルユヱニ微ト云

武家歲時故實記云夏正は寅の月を年始とす日域の正月夏正に亥たかふ殷は丑を正月とす周正は子の月を以て月を建是天地人の三統三代の例かくのことくなり又唐の世には冬至を正月に建となん

四季禮法云正月を一月とも元月ともいはす正月といふこと新安の陳子か曰王者居正の義をとる尙書に曰正月長と訓す天下の萬物此月より正しく生長するの義なり正月の名と元日の名は唐虞の代より起るといへり董仲舒か曰爲ニ人君ニは心を正しくして以て朝廷を正す百官を正して以て萬民を正す四方遠近正の一にして外なし故に正と書て月を正すの意也亥かるに秦の始皇の代に至て正月の名を止て端月と呼如何となれは始皇の諱を政と云天下の諱と同意なれは正月

氣二つ氣さし十一月に地の底にてめくむ草木も十二月にてめくむ草木も十二月には實をわり地の上に生出へきしたくをする然れは年の初めにするによろしとて十二月を正月に用ひ給ふ扨夏に十三月を用ひ給ふ此月は陽氣か三つ地の上に出また地中にめくむ草木も地の上にあらはれ出かれたる枝もめを出す三陽交泰の月と言て萬物のそたち初る月なれは尤年の初にすへきとて正月に定めらるゝ此王と申奉るは帝舜の御ゆつりを請給ひ子孫十七代年曆四百五十八年天下をたもち給ふ十七代目のけつ王と申帝惡逆にして天下をたもち給ふことならすかるかゆゑに殷のたう王夏の代にかはりて天下ををさめ子孫天下をしろしめすこと二十八代六百五十四年の間にして天下周王に歸す周王の天下をたもち給ふこと三十七代にしてせいそうは八百七十三年なりいつれも目出たかりしためしなりしかれは夏の代は周の代よりも千歲の始周は千年の後なるに今後め周の正月をは用ひすして千年先の夏の正月を用る事は秦の莊襄王周のすゑとう周の君をほろほし天下をたもたんとすしん王の御子しくわう帝に至りて天下をたもち給ふ其時周の正月を改かへて十月を以て正月と定め給ふ其後に漢の高祖くわうていしんの代をほろほし天下をたもちて七年かのと丑の年宮殿を作り給ふ十月に成就す其名を長樂宮と名付給ふくわうてい十二月に長樂宮に移り給て爰にてしんの正月をあらため夏の正月十三月を用ひ給ふ其時諸々のしんか正月元日に長樂宮に參內して天下太平天子萬歲の悅ひのことふきをつくす總して臣下の正月元日に出仕禮をなす事是より初るとなりしかれは十三月を正月に用る事は高祖の代正月用ひ來りて今に至るまで是を不レ改用るなりこれ則夏の正月なり

歲時故實杜氏通典引云、漢高祖、十月定レ秦、遂爲二歲首一、七年、長樂宮成、制二群臣朝賀儀一、武帝改用二夏正建レ寅之朔一、則元日之慶、始レ自二高祖一云々、

四季禮法云夏商周三代ニテ月建各建也周ハ天統ト云テ子ノ月ヲ正月トス殷ハ地統ト云テ丑ノ月ヲ正月トス夏ノ代ノ月建ハ人統ト云テ寅ノ月ヲ正月トス今ノ正月也子ノ月ハ水旺シ寒シ丑ノ月ハ土旺シテ陰氣慘烈シテ萬人春ト不レ言此ニヨリテ本朝人皇ノ最初神武帝ノ御宇夏ノ代ノ月建ニ隨テ寅ノ月ヲ以テ一年ノ

月とし今の正月寅の月を一月とす肅宗の時に至て又十一月子の月を歳首とし斗建を以て月を紀す僅に一年にして止む元朝の張以寧と云者春秋正月考を著す三統詳かなりと同上いひまた正月年の初月を正月と云事秦始皇寅の月に誕生すされは降誕の月なれは專ら政を行はるゝ故政月といひしを始皇の諱政なる故に後に改て旁をはふきて偏計を用ひ是ひとへに天下正しくすへきとて正月とせるなりと毫品通考いへり皇國は神武天皇の以前よりして幾千有餘年の間天保の今に至まて連綿として暦正しく時月干支のかはらさるはおのつから其節にかなふものなりさて又冬至を以て唐の正月といふは周の制をいふ乎と壒嚢抄いへり抑皇ら御國は月建おのつからに夏正と合して寅月を以て正月と定めらるゝ事御國最初よりの事なるへし且一度も他正を用ひさるは此御國皇統正しくしてかけまくもかしこき天照皇大神宮より貴種一胤のみを以て皇統連綿したまふゆへんなるへし是此御國萬國にすくれたる所なり

壒嚢抄云先年ノ初月ヲ正月トスル事ハ震旦ノ法也正月ハ是寅月也四方各有二三支一則四季ノ孟中季トス東方ハ春方也寅卯辰東ニ有故ニ寅月ヲ年始トス又震旦日域同北斗建寅故共云也凡於二震旦一月建不同也夏世月建寅月般世月建丑月今十二月當周世月建子月今十一月也冬至ヲ唐正月ト云ハ是ヲ云乎爾ルニ今本朝夏世暦ニ隨カ故ニ寅月ヲ以年始トスル也仍夏暦共云也サテ正月ト云事ハ秦始皇寅月ニ誕生ス我降誕ノ月ナルヲ以專政道ヲ行フ故ニ政月ト云後ニ改テ正月ト書ク其故ハ文質ト別ル時ハ文ヲバカサルトヨムカサリハ是正ニ非ス此故ニ作ノ文ヲ除テ正月ト書ケリ是偏ニ天下ヲ正クスヘキ爲也金谷云正月ハ立春之氣節也本ハ爲二政月一遂改爲二正月一ト云々

四條家舊法年中行事云もろこし夏般周の三代正月に用る月の替りあり夏の代には今の正月十三月めを正月般の時は十二月を正月とすることは十月は極陰々氣はかりにして陽氣こと〳〵く地の底にかくれ籠れりしかるを十一月になりては一陽來復の月といひて陽氣一つうこき氣さして草木も地の底にてめくむされは萬物をやしなひそたつる陽氣の氣さすはしめなれは年のはしめにすへきとて十一月を正月と定め給ふ又般に十二月を正月とすることは二陽來復とて陽

古今要覽稿卷第二十九

●時令部

●月建

正月寅に建事三統あり夏の代殷の代周の代此の三代は正月同しからす夏の代には寅の月を用ゆ今の世の正月これなり殷の代には丑の月を年始とす今の世の十二月に當るなり周の代には子の月を年始とす今の世の十一月に當るなり故に孔子曰時は夏の時を用ひよと論語のたまふ是よく四時節序にあたるを以てなり西土にては漢の武帝よりして夏の正月を用ひ來るなりさて正月は一月とも元月とも書へきを正月と書事は帝王正殿に居まして一年の政は此一月に止り始ると云心にて一に止ると書て正月といふ也故に正者董仲舒か謂爲二人君一者正レ心以正二朝廷一以正二朝廷一以正二百官一正二百官一以正二萬民一正二萬民一以正二四方一四方正遠近莫レ不レ壹二於正一と書しは物皆正に始まる義に取れり正月は伏羲より始る也三代の正月異なる所謂は周の正月子の月は子は十二支の始にして陽支也天にとりて天の正月とす殷の丑は陰支にて地にとりて地の正月とす夏の寅は人にとる天地陰陽の德によりて萬物を生す人は萬物の長也是によつて夏の正月は萬代不易にして用ひ來る也と年中行事故實書いへり史記索隱云古曆は黃帝調曆以前を云上元大初曆等ありみな寅に建月を正月とす是を孟春とす顓頊夏禹も寅に建月を正月とすたゝ黃帝及ひ周魯子に建月を正月とすまた殷世丑に建月を正月とす建とは北斗建先の刻子の正月なれは子に建し丑の正月なれは丑に建し寅の正月なれは寅に建す今の正月寅の月なれは夜五時寅の方に七星の杓をさすなり秦の始皇の時は亥の月を正月とす漢の武帝の時元封七年より改て大初曆を用と時節纂諺いひ今和漢寅の月を正月とせるはこの帝以來なり四時の月刻周の時は子丑寅を春と〔し〕卯辰巳を夏とし午未申を秋とし酉戌亥を冬とす殷の時は丑寅卯を春とし辰巳午を夏とし未申酉を秋とし戌亥子を冬とす夏の時は今の如し始皇亥の月を正月と立れとも終に用る者なし唐の武后天授元年十一月朔日南至周の代の正月を以て改めて正月とし今の十二月を臘

又古事記には冬年神久々年神としるして久々の二字を讀に音をもてすへしと注したれは舊事記に見えし冬の字は誤寫せし所なりと白石はいひつれとも既に古事記に久々年神の御名のいてし以前に天の冬衣の神の御名みえたれは冬といふことの證には是をそ引へきを後に見えし神の御名を出して冬の名の見えし始とせしは全く引おくれしなりことに舊事記を證據とする事はいかゝそや

今は春へとさくやこの花

又卷第六冬歌

冬歌とてよめる　紀貫之

雪ふれは冬こもりせる草も木も
春にしられぬ花そ咲ける

雪の木に降りかゝれりけるをよめる　同

冬こもり思かけぬをこのまより
花とみるまて雪そ降ける

○釋名

冬

古事記禮記爾雅○按にふゆはひゆなり時氣寒冷なをいふなり管子曰其時を冬といひ其氣を寒といふと見えたれは冬をひゆといふ意義和漢ともにもとつくところ同じきといふへき歟

玄英

拾芥抄爾雅元帝纂要歳華紀麗○按に冬空は玄黑陰黃なれは此名目出來しなるへし郭璞か注に氣黑而清英といふも冬天の色英をいふなり

安寧

爾雅○郭璞注云此亦別號なりと云々邢昺尸子を引て曰冬爲二安靜一といふを以て考ふるに民役閑暇の義よりいふ名と思はれぬ六韜曰冬道藏物靜とあるをもて按に尸子か安靜といふと同意なり民人安靜の時なりたゝ冬の異名なり郭璞も別號なりとのみ注して他の意義をいはす

閉藏

素問○按に王氷か注に草木凋蟄蟲俯地戸閉塞陽氣伏藏とあるをもて按に王氷か注よくかなへりといふへし

○正誤

東雅云素盞嗚神の御孫羽山戸神の子に若年神夏高津日神

また夏の女神といふ

秋比女神冬年神等ありきと舊事記に見えし夏冬の名の見えし始なりされと古事記には冬年神久々年神としるして久々の二字を讀に音をもてすへしと注したれは舊事記に見えし冬の字は誤寫せし所也と見えたり云々

○按に舊事記はもとより僞撰にしてとるにたらす

上騰與レ地絶也、天中記

爾雅云、冬爲ニ玄英一、亦曰ニ安寧一、

管子云、北方曰レ月、其時曰レ冬、其氣曰レ寒、其德淳起溫怒周密、斷刑致レ罰、以符ニ陰氣一、大寒乃至、五穀乃熟、此謂ニ月德一、月掌レ罰、罰爲レ寒、天中記

鶡冠子云、斗柄指レ北、天下皆冬、同上

呂覽云、冬之德寒、寒不レ信、其地不ニ成剛一、地不ニ成剛一、則凍閉不レ開、天地之大四時之化、而猶ニ不能一以不ニ信成一、又況人乎、玉燭寶典

漢律曆志云、大陰者、北方也、北伏也、陽氣伏ニ于下一、於レ時爲レ冬、冬終也、藏乃可レ釋云、天中記

尙書大傳云、北方者、何也、伏方也、伏方者、萬物之方伏也、伏方何以謂ニ之冬一、冬者中也、中也者、物方藏ニ於中一也、故曰、北方冬也、陽盛則吁ニ荼萬物一、而養ニ之外一也、陰盛則呼ニ吸萬物一、而藏ニ之內一也、故曰、呼吸者、陰陽之交接、萬物之始終云々、玉燭寶典

白虎通云、壬癸、壬者、陰始任レ癸者、揆度也、時爲レ冬、冬之爲レ言、終也、其位在ニ北方一云々、

說文云、冬、四時盡也、

皇覽逸禮云、冬則衣ニ黑衣一、佩ニ玄玉一、乘ニ玄輅一、駕ニ鐵驪一、載ニ玄旗一、以迎ニ冬于北郊一、天中記

淮南子云、冬爲レ權、權者所ニ以權ニ萬物一也、權正不レ失、萬物乃藏云々、同上

易通統圖云、日、東ニ行北方一、黑道曰ニ北陸一、同上

後漢律歷志云、日行ニ北陸一、謂ニ之冬一、同上

素問云、冬三月、此謂ニ閉藏一、水氷地拆、無レ擾ニ乎陽一云云、

○詩歌

冬　江匡衡

本朝文粹云、己亥之歲、十月之初、落葉未レ盡、散ニ春錦於林風一、寒菊猶殘、映ニ冬螢於池水一云々、

源順

又云、昔侍ニ重陽宴一者、皆賜ニ大府之錦一、去冬以來、有ニ殘菊宴一云々、

源英明

又云、鳳城之左有ニ一道場一、天借ニ烟霞一、地與ニ水石一云云、請引ニ十分之滿盞一、將レ惜ニ三冬之落暉一、云爾、

古今和歌集序

おほさゝきの御門をそへ奉るうた

なには津に咲やこの花冬こもり

いふもたゝ冬の異名のやうにいひならはせるなり塩囊抄なとにもあまた異名みえたり一々擧るにいとまあらされはこゝに畧せり又初冬仲冬季冬の三月にあてゝ其主月の名となすもあり或は三冬九冬なとゝ其主月をさゝさるもあり或は冬三月をすへくゝりし名目もありいはゆる冬三月此謂ニ閉藏一と（素問）みえたるは冬の一時はいふ事文面明白なり

古事記云、此神娶ニ布怒豆怒神之女布帝耳神生子天之冬衣神ニ云々、

萬葉集卷一云、冬木成春去來者不喧有之鳥毛來鳴奴云々、

和名類聚鈔云、冬、孟冬、仲冬、季冬云々、

拾芥抄云、冬爲ニ玄英ニ云々、

東雅云、冬とは冷也ヒユをいひてフユといひしも又語の轉せしにてその寒冷のときなるをいひしなり

時節纂諺云、冬は終といふ意なり艸木花實産乳かはりをまふといふ義を以て名とせり易に貞と云

續節序紀云、冬は終也萬物終藏すれはなり爾雅に冬を玄英と云和語に冬をふゆと訓せしはひゆといふ意なり素問に冬三月を閉藏といふ水氷り地さく陽をうこかす事なかれ早く臥起ること日光を待へし志をして伏るか如く匿るゝか如く私意有か如く既に得る事あるか如くならしめ寒を去り溫につき皮膚を泄すことなく氣をしてすみやかに奪しむる事なかれ月令廣義云冬月早天に門を出る時は必盃酒を飲て寒邪をふせくへし或は生薑をふくむも又佳也空腹をいむ博物志に云冬月山氣毒多し晨は空腹にして是を犯す事なかれ昔王肅張衡馬均と云者三人霧をおかして晨に行けるか一人は死し一人は病み一人は恙なしその故を尋ぬれは死せし者は空腹なり病せし者は食腹したる者なり恙なき者は酒を飲しとそ

和漢三才圖會云、冬音東、

和訓栞云ふゆ冬をいふ冷の轉せるなり

禮（月令）云、天地不レ通、閉塞而成レ冬云々、

又（鄕飮酒義）云、北方者冬、冬之爲レ言、中也、中者、藏也、

尸子曰、冬爲レ信、北方爲レ冬、冬終也、北方也、是萬物冬者皆伏、貴賤若レ一、美惡不レ代、方之至也、（天中記）

字林云、冬四時盡也云々、（同上）

釋名云、冬終也物終成也、

什名云、冬終也、萬物所ニ以終成一也、冬曰ニ上天一、其氣

なり況や一とせの中月の尤あきらかなる時なるをや按にこの説は秋字にかゝはらす時氣の上にてときしなり白藏白帝素商素節なとゝいふ上にて解さはさもあるへし秋字の訓にときなすは心得ぬことなり

●冬

冬はふゆなり冬の訓義冷也ひゆを轉してふゆと云なり是等は時氣によりて起りし訓なり夏冬は時氣によりて名義をあらはし春秋は時物によりて時名をなせし事明かなりさてふるくより冬といふ語のみえしは天の冬衣の神と古事記見えたれはいとふるき語なり此神の御名を以て考ふれは冬衣といふ文字は時節のうつり行秋さり冬來りて次第にひゆる故衣をかさぬるも冬にもはらかさぬれはかくいへるなり西土にて此事によく似かよへるは冬之德寒と春秋繁露いひ又其時を冬といひ其氣を寒といふと管子みえたり是ひゆといふ訓義と一致せり白石曰ヒユをフユといふかことき是もまたもと轉語にしてまたフユといふことはにはヒユといふ語をこめたりと東雅いふも普通の說なり和語に冬をふゆと訓せしはひゆをいふ意なりと續節序記いふも同意なりこゝをもてひゆるを冬といふ訓義は古今みな一理なり和訓栞もふゆは冬をいふ冷の轉せるなりといへり又冬之爲レ言中也中者藏也と禮記みえたるは難波津に咲や兄花冬こもりと古今和歌集序引し歌の詞意と同きにやまた冬木成春去來者と萬葉集いふは冬終也物終成也と釋名いふ意と同し冬木成は終成也冬極れるなり故に春さり來れはとつゝけいふなり又冬爲二玄英一と爾雅いふは冬の別號なりこれ五行配當の色にとるなり玄は黑也郭璞か注に氣黑而清英といへり拾芥抄にも玄英の文字いてたり爾雅を引しなり夫よりして玄冬と元帝纂要いひ玄陰陰律陰英陰天陰冥と壒囊抄いひ玄冥玄律と事物別名みえたり是みな冬の空はうすくろく陰れるか故にかゝる別名の出來る事にはなりにしなり又方角にとりても冬者北也北は五色の色樣にとりては黑色なり故に玄陰冥の三字をもて冬の異名の中に此文字を熟字とする事にはなりしなりされとも物名一樣ならす爾雅には安寧といふ名目も見えたり元帝纂要には冬を玄冬といひ風を寒風勁風といひ景を冬景寒景といひ時を寒辰といひ節を麗節なとゝわけて見えたれとも今の世には冬景寒景寒辰麗節なとゝ

爾雅○郭璞か注に此亦別號といふをおもへはたゝ秋の異名になしておくへき也たゝ萬物收り成るを以ての故なり

容平

素問○王氷か註に萬物夏長華實已成ニ容狀ニ至レ秋平而定也といふを以て考ふるに萬物みな成熟して定れる也春は生し夏は長し秋にいたりて形狀さたまり秀穗既にかたまりて形平かなるを以ていふなり

秌禾穀孰也

清壇玉裁注云其時萬物皆老而莫レ貴ニ於禾穀一故从レ禾言禾復言穀者映百穀也禮記曰西方者秋々之爲レ言揫也

从禾龜省聲七由切三部　龝籒文不省説文解字

○正誤

東雅云溟渤讀てオキウミといふをオホキウミともいふに滄海原讀てオキウミといふをオホウナハラといふによらはアキとはオキの轉語にて大オホキの義にもや有へきさらは百穀既に成るをもて其時の大也とする也日神葦原中國を豐葦原之千秋長五百秋長之瑞穗國とのたまひしも此義なるへし云々

按に前には百穀既に成て飽滿るの義にもやあるらんといひし説は義とりつへけれとアキとはオキの轉語にて大の義とときしはいまたしきなり且日神葦原中國を豐葦原之千秋長五百秋長之瑞穗國とのたまひしも此義なるへしといひしは秋といふ文字を大の字とおなしき意とみしなりされは千秋長五百秋長之瑞穗國とのたまひしも此義なるへしといへるは日神皇國を大なる國とのたまふとてかくのたまひしと見たるなりさにはあるましきなり瑞穗國といふ文字の見えけれは秋はあきたるの義にて大なるの義にあらす千秋長五百秋長の文字は褒美の辭にして此御國かきりなき榮をのたまひしなり後世にいふ所の千秋なとゝ祝して人のいふも此御言葉より起りしなり瑞穗國とのたまひしは此御國あらんかきり百穀豐饒にして人民の飽食する義もおのつからこもれるなり

日本歲時記云和語に秋をあきと訓せしはあきらかなりといへる意なり夏は陽さかんにして炎蒸の氣そらにみつる故天氣にこれり秋は陽氣くたりて天色清明

成熟、始嘗レ新也（同上）

鄭氏曰、庚之言、更也、辛之言、新也、日之行、秋西從二白道一、成二熟萬物一、月爲二之佐一、萬物皆肅然、改更、秀實新成、人因以爲二日名一焉、（天中記）

文選（九辨）云、宋玉曰、悲哉、秋之爲レ氣也、蕭瑟兮草木搖落、而變衰憭慄兮、

元帝纂要云、素秋、素商、高商、天曰二旻天一（天中記）

神農氏本草云、秋冬爲レ陰、

素問云、秋三月、此謂二容平一、天氣以急、地氣以明、王氷註云、萬物夏長、華實以成、容狀至レ秋、平而定也

歲華紀麗云、秋爲二白藏一云々、

○詩賦幷和歌

文選（潘岳秋興賦）云、四運忽其代序兮、萬物紛以迴薄、覽二華蒔之時育一兮、察二盛衰之所一レ託、感冬索以春敷兮、嗟夏茂而秋落云々、

古文眞寶（歐陽永叔秋聲賦）云、蓋夫秋之爲レ狀也、其色慘淡、烟霏雲歛、其容清明、天高日晶云々、天之於レ物、春生秋實云々、

○和歌

古今和歌集卷第五（秋歌下）

貞觀の御時綾綺殿の前に梅の木有けりにしの方にさせりける枝のもみち初たりけるをうへにさふらふをのこともの よみけるついてによめる

藤原のかちをむ

おなしえをわきて木のはのうつろふは
西こそ秋のはしめなりけれ

○釋名

秋

古事記日本書紀禮記爾雅○按にあきはあく也飽滿也皇國を豐秋津洲又千五百秋瑞穗の國といふも百穀豐饒の意を以て名付しなるへし秋は百穀成熟の時なり故に夏といへとも麥熟する時を麥秋といふは穀熟を秋といふにとれるなり

白藏

拾芥抄爾雅歲華紀麗○按に邢昺か疏に曰秋之氣和則色白而收藏也といへり素秋素商なと秋の異名にいふをもて考ふれは秋氣はすみて清涼なり秋陽明かなるか故に素問には地氣以明なりとみえたりされは秋月明かなるも秋空明なるか故なり

收成

はへする時なるを以て名とせり易に利と云
續節序記云秋は揫也物の揫斂して則ち成熟すれはなり爾雅に秋を白藏といふ和語に秋をあきと訓するはあきらかなりと云意夏は陽盛にして炎蒸の空に盈る故に天氣濁り陽氣下りて天の色淸明也況一年の中尤明らかなるをや素問に云秋三月是を容平といふ天氣以て急に地氣以て明かなり早く臥て起る事を雞と倶にす意を安寧にして秋刑を緩うして神氣を收斂せしめ秋氣をして平に其志を外にする事なからしむ
和漢三才圖會云、秋音、鰌云々、
和訓栞云あき秋をいふ飽の義なり百穀已に成て萬民飽足の時なれはゑかいふめり此國を千秋長五百秋長之瑞穗國と名つけたまひしもその義なるへし
　按に千秋長五百秋長之瑞穗國此文舊事本紀天神條に見えたり
禮(鄉飮酒義)云、西方者秋、秋之爲ㇾ言愁、愁之以㆓時察㆒、守ㇾ義者也
尙書大傳云、西方者、何也、鮮方也、鮮訊也、訊者、始入之貌、始入者、何以謂㆓之秋㆒、秋者愁也、愁者、物方愁而入也、故曰、西方者秋也(玉燭寶典)
春秋元命苞云、秋、愁也、物愁云々、
春秋繁露云、秋之爲ㇾ言、猶ㇾ湫也、湫者憂悲之狀也、(同上)
爾雅云、秋爲㆓白藏㆒、亦曰㆓收成㆒
管子云、歲有㆓四秋㆒、而分爲㆓四時㆒、故曰、農事且作、請以㆓什伍㆒、農夫賦㆓耜鐵㆒、此謂㆓春之秋㆒、大夏且至、絲纊之所ㇾ作、此謂㆓夏之秋㆒、大秋成、五穀之所ㇾ會、此謂㆓秋之秋㆒、大冬、營室中、女事、紡績緝縷之所ㇾ作、此謂㆓冬之秋㆒(天中記)
漢書云、秋雛也、物雛斂西成熟也、
又魏相奏曰、西方之神、少昊、乘ㇾ兌、執ㇾ矩、司ㇾ秋、
漢律歷志云、秋、雛也、物雛斂乃成熟云々、
說文云、地反ㇾ物爲ㇾ秋、從ㇾ禾大聲也(玉燭寶典、引、疑可㆓有㆓誤寫㆒、委㆓釋名㆒)
釋名云、杜、猶也、緧㆓迫品物㆒、使㆓時成㆒也
淮南子云、一葉落、天下知ㇾ秋、
白虎通云、庚辛、庚物更也、辛者陰始成時爲ㇾ秋、秋之爲ㇾ言、愁、亡也、其位西方、其色白、
尙書考靈曜云、虛星爲㆓秋候㆒(玉燭寶典)
皇覽逸禮云、秋則、衣㆓白衣㆒、佩㆓白玉㆒、乘㆓白駱㆒、載㆓白旗㆒以迎㆓秋于西郊㆒(同上)
詩紀歷樞云、庚者、更也、陰代ㇾ陽也、辛者、新也、萬物

に秋をあきらと訓せしはあきらかなりといへる意なりと日本歳時記いふに續節序記の説も同意なり西土にてもこれらの義と同しき事ともあり雲既淨而天高と虞世南賦いふ雲淨天高はこれ開明の義也又潦將㆑收而水潔と同上いふも上句と同意にして天時共に時氣すみて清明なる意なりこゝをもて按に天地の時氣あきらかなる義にてあけといふも一説とやすへきあけはあかき也赤色をあけ色といふ草木すへて紅葉する是色にあらはるゝなり夜明といふ明もよあきの義あけあき同きなり明字日に從ひ月に從ふの文字にて日月の照す所あきらかならすといふことなし天氣以急地氣以明と尚書大傳いふ前文に辨するに同しきなり又秋爲㆓白藏㆒と爾雅いふを郭璞注曰氣白而收藏とみえ又素秋素商素節と元帝纂要いふも秋の別號なり素字は白字とおなしくしろしと訓すれはもとつくところは白藏といふによりしなるへし此名目もあきらかなる義にして明白なとと熟字するもこの意にてこれら又一説なり

古事記云、於是伊邪那岐命、先言、阿那邇夜志愛袁登賣袁、後妹伊邪那美命言、阿那邇夜志愛袁登古袁、如此言竟而御合、生子淡道之穗之別島、云々、次生㆓大倭豐秋津島㆒云々、

又云、於㆑是、有㆓一神㆒、兄號秋山之下冰壯夫云々、

日本書紀神代巻云伊弉諾尊伊弉冊尊立㆓於天浮橋之上㆒因欲㆘共爲㆓夫婦㆒產㆗生洲國㆖云々、廼生㆓大日本豐秋津洲㆒云々、

又云、天神、謂㆓伊弉諾尊伊弉冊尊㆒曰、有㆓豐葦原千五百秋瑞穗之地㆒云々、

又云、素戔嗚尊之爲㆑行也、甚無狀、云々、秋則於㆓天班駒㆒使㆑伏㆓田中㆒云々、

萬葉集巻第一云、近江國大津宮御宇天皇代、天皇詔㆓內大臣藤原朝臣㆒、競㆓憐春山萬花之艷、秋山千葉之彩㆒時、額田王以㆑歌判㆑之、歌云、秋山乃木葉乎見而者、黃葉乎婆、取而曾思奴布、青乎者、置而曾歎久、曾許之恨之秋山吾者

和名類聚鈔云、秋、初秋、仲秋、季秋云々、

拾芥抄云、秋爲㆓白藏㆒云々、

東雅云アキ百穀既に成て飽滿るの義にもやあるらん云々

時節纂諺云秋は犂といふ意なり草木かたまり實するまた揫斂とおさめ穀熟とうみたるを以ておさめたく

古今要覽稿卷第二十八

時令部

●秋

秋は飽なり秋をあきと訓するは穀食あきみてる義にとれり和語の訓例みなしかり此國もとより萬國にすくれて豐饒の國なれは秋は百穀成熟し國人の食物飽滿る意を以て時名となせしなり抑伊弉諾尊伊弉冊尊二神國をうみたまふ時大日本豐秋津洲をうみたまふと古事記日本書紀しるされ千五百秋瑞穗之地(チイホアキミツホノクニ)と日本書紀一書みえたり是みな皇御國の名なり此御國をかく名付しも神代よりの事なれは神意を以て名をなせしなるへしさすれは其國名の意趣はかりかたしといへともつゝしんて按に神祖百穀豐饒の國を生たまひその名に豐といふ文字を上にかふらせ豐秋津洲又豐葦原千五百秋瑞穗之地なといふ類ひみな豐字はゆたかなる意なり又瑞穗之地といふも穀物豐饒の意にとりての國名とおもはれぬ秋は其時節の穀春夏冬の三時より多くあきたる義なるへし故に西土にても陳澔か曰秋者百穀成熟之期、此於レ時雖レ夏、於レ麥則秋、故云麥秋といへるなとを合せ考れは秋とは穀物によりて訓義をとくかたしかるへきなりことに秋字禾に從へるをもてかたかた穀物成熟の義にかゝるへしまた管子に歳有二四秋一といふ事みえたり所レ謂春之秋、夏之秋、秋之秋、冬之秋、是四時に配當し萬物の成收を以て秋といふなり其語曰農夫賦二耜鐵一、此謂二春之秋一、大夏且至、絲纊之所レ作、此謂二夏之秋一云々、五穀之所レ會、此謂二秋之秋一云々、紡績緝縷之所レ作、此謂二冬之秋一と管子見えたりこれみな穀物成熟の義よりおこりて庶物成收の上まても秋と云義をなす事にはなりしなりされは五穀之所レ會此謂二秋之秋一とみえたる文辭にて秋の秋たる義穀熟より秋といふ義起れる事いと明かなり又竹秋蘭秋といふ文字廣韻にみえたり是等もみな前文の意と秋字の義おなしきなるへし故に百谷各熟爲レ秋故麥以二孟夏一爲レ秋と蔡邕月令章句見えたり又秋を開明の義にとるも一考なり白石曰古語にアキといひしこときは速秋津(ハヤアキツ)姫また速開都咩(ハヤアキツメ)としるされし例によらはこれも開の義にやとりぬらん義未詳と東雅いひ和語

夏と秋と行かふ空の通路は
　かたへ涼しき風や吹らん

○釋名

夏

古事記禮記○按になつはあつなり熱也冬夏の二時は時氣によりて名をなすこと和漢同一致也

朱明

拾芥抄爾雅歳華紀麗○按に郭璞注爾雅に朱明者言夏の氣和則赤而光明也とあるを以てみれは時氣によりて名付しなり夏天色赤し火氣盛んなるかゆゑにかくいふなるへし

長嬴

爾雅○按に元帝纂要に長嬴卽恢台也とあるを以てみれは恢は大なり台は胎也萬物を長育するの意長嬴の長は物を長生するの意嬴はオキと訓す大なる意夏氣は物を養育する時節なれはかくいふなり

蕃秀

素問○按に是も草木茂盛の義にとるなり王氷注素問に陽自レ春至レ夏洪盛物生以長故蕃秀也蕃茂也盛也秀華也美也とあるをもてみれは全く草木枝葉茂盛の義をとるなり

首夏　仲夏　季夏和名類聚抄　三夏　昊天　炎節元帝纂要　融

火　炎帝　赤帝　赤熛　怒事物別名

爾雅云、夏曰二朱明一、亦云長嬴云々、
鄒子曰、夏爲レ樂、南方爲レ夏、夏興也、南任也、是故、萬物莫レ不レ任、興、蕃殖充盈、樂之至也、天中記
鶡冠子曰、斗柄南指、天下皆夏云々、同上
漢書魏相傳云、南方之神、炎帝、乘レ離、執レ衡、司レ夏、
又董仲舒策云、陽常居二大夏一、以二生育長養一爲レ事云云、
續漢志云、日行二南陸一、謂二之夏一
後漢書張純傳云、夏者、陽氣在レ上、陰氣在レ下、故正尊卑之義也
同荀爽傳云、夏則火王、其精在レ天、溫煖之氣、養二生百木一、是其孝也、
素問云、夏三月、此謂二蕃秀一、天地氣交、萬物華實、
皇覽逸禮云、夏、則衣二赤衣一、佩二赤玉一、乘二赤輅一、駕二赤騮一、載二赤旗一、以迎二夏於南郊一云々、玉燭寶典
尙書考靈耀云、氣在二於夏一、其紀熒惑、是謂二發氣之陽一、云々、天中記
釋名云、夏、假也、寛二假萬物一、使二生長一也、
蔡邕月令曰、夏、假也、假、大也、其蟲羽、南方朱鳥、羽蟲之長、故凡羽、屬レ夏也玉燭寶典
白虎通云、丙丁者、其物炳明、丁者、强也、時爲レ夏、夏之言、大也、位在二南方一、其色赤、
前漢律歷志云、夏、假也、物假大也、乃宣平云々、
天文志云、日行二南陸一、謂二之夏一、
楚辭注云、夏氣、大而育レ物也云々、
歲華紀麗云、夏爲二朱明一、時移二新節一、
韻會云、夏、音暇、四時、二曰レ夏云々、

○詩歌

本朝文粹卷第八時節詩序

夏日於二左親衞源相公河陽別座一、同賦二何處堪レ避レ暑按座疑庄誤　慶保胤

何處堪レ避レ暑、河陽館勝境矣、誰家好レ逐レ涼、源相公別第焉、古松老檜蔽二其天一、青苔白石鋪二其地一、從二平旦一及二黃昏一、有二淸風一無二赤日一、移レ床連レ榻、優二息其陰一、蓋颯然冷然、如二八月一如二九月一矣、夏天炎居、去レ此何求、袁氏昔有二河朔之飮一、相公今有二河陽之期一、食客保胤、聊記二勝遊一云爾、

古今和歌集卷第三夏歌

みな月のつごもりの日よめる

みつね

萬葉集云、春過而夏來良之白妙能衣乾有天之香來山

和名類聚鈔歳時之部云、首夏、仲夏、季夏云々、

拾芥抄云、夏爲二朱明一、

壒嚢鈔云、夏　初夏　孟夏　首夏　炎夏　朱夏　九夏　朱明　朱律　丹律　炎暑　炎景　炎節　炎天　景天　長贏

東雅云、夏とは熱也アツをナツといひしは轉語にて其熱の時をいふなるへし

日本歳時記云夏和語に夏をなつと訓せしはあつといふ意なりなとあと相通す暑熱の義をとれり

和漢三才圖會云、夏音假、

時節纂諺云夏は假といふ意なり萬物生長せしむる時なる故を以て名とせり易に亨と云

續節序記云夏は假也假は大也萬物假大なるをいへる意也また夏を朱明と云秘語に夏をなつと訓はあつといふこゝろ也なとあと相通す暑熱の義なり夏三月是を蕃秀といふ天地の氣交萬物華茂す故に夜は早く臥朝は早く起て日を厭ふ事なく志をして怒ることなからしめよ

惠美須草云夏といふは大陽の時節と成て陽氣盛になりてあつき時なれはあつといふを通してなつといふなとあと通音なり

和訓栞云なつ夏をいふ熱の義なりとも成の義なりともいへり一説に成立の義稻によりての名なり

禮記鄕飮酒義云、南方者夏、夏之爲レ言、假、養レ之、長レ之、假レ之、仁云々、

尙書大傳云、南方者、何也、任方也、任方也者、物之方任、何以謂二之夏一、夏者假假也、假者、吁二茶萬物一而養レ之、故曰、南方夏也（玉燭寶典）〇吁茶鄭玄曰讀曰二嘘舒一也

三禮義宗云、夏、大也、爲二萬物長大一也、夏、謂南者、南任也、天中記

易通統圖云、夏日、月、行二東南赤道一、曰二南陸一同上

月令注云、日之行二夏南一、從二赤道一、長二育萬物一、月爲二之佐一同上

管子曰、南方曰レ日、其時曰レ夏、其氣曰レ陽、陽生二火與一レ氣、九暑乃至時、雨廼降、五穀百果乃登、此謂二日德一、

又云、夏者、陽氣畢上、故萬物長同上

又云、大夏且レ至、絲纊之所レ作、此謂二夏之秋一云々、

はるゝとまれなり春になり陽和いたりてそらうらゝかに日のいろもかゝやきてはるゝなり又木の芽はるといふ意もあれと前の說にしかす

按に木の芽はるといふ意もあれとゝいひなから其說をすてゝ前說にしかすとはいかゝそや前說は冬の陰氣あつくして雪雨しげくふりそらはれかたきも春になり陽をむかへて空はるゝといふ意にてはるといふ訓義をとるは却ていまたしきとおもはるるなりとにかくに空はるゝといふをはるの義となすはとりかたし

●夏

夏は熱也なつといふはあつといふ語の轉せしなり春のゝち炎熱の時をいふなるへしと東雅いへり皇國にてふるく夏といふ事義のみえしは夏高津日神と古事記みえたり此夏字則あつき義にとれるなるへし高津日は高き日也津は助字なり

邢昺か爾雅の疏には夏氣高明故以二遠大一言レ之といふも夏高津日といふにあへり

されは夏の日なかくして空にいつまでも日影とゝまりてかたふきかたけれは空に日高きといふ義にとりて神の御名にかうふらせ奉りしなり夏冬の二時は氣によりて名をなしたるなり夏は炎暑にあひてはあゝあつと衆人をしなへていひ侍るもいとたえかたけれは言に發していふなり故になつといふはあつといふ義明かなり又夏爲二朱明一と爾雅いひ郭璞注に氣赤而光明也といふ是は炎熱の時を色にとりていひしなり五行に配當せる名目なり五行の中夏は火なり五色にとれは赤色にあたるなり方角にとりては南方なり十幹にあつれは丙丁なりされは丙丁者、其物炳明、丁者强也、時爲レ夏、と白虎通いへりまた南方者夏夏之爲レ言、假也、と禮記いひしをはしめとして夏者假といふことを尙書大傳劉熙釋名等いへり玉燭寶典も同意也又夏者假といふ假字を鄭玄注して曰假大也とあれは生長養育之義にとれるなるへしされは夏之言假、養レ之、長レ之、假レ之仁、と禮記いへり物みな暢茂蕃秀するをいふなり故に夏三月此謂二蕃秀一と素問いへり又啓玄子王氷か素問注曰、陽自レ春生、至レ夏洪盛、物生以長、故蕃秀也、蕃、茂也、盛也、華也、美也、とある是みな草木生育暢茂之謂なり

古事記云、夏高津日神亦名夏之賣神云々

芽はりいつるをいふなり禮記に春之爲レ言蠢といへるは虫のうこめくをいふなり

青陽

拾芥抄爾雅歲華紀麗○按に時氣發陽の色にとれり春陽にあひて草木の萌芽出るをいふなりさるを其まゝ春の名目とせしなり孫炎曰青陽は春氣青而陽暖日とあれは青は春氣をいひ陽はのとかなるをいふ

發生

爾雅○按に萬物各發達長育するの意をもていふなり春三月を皆すへくゝりての名目なり和訓にはるといふに同

發陳

素問○按にこれも春三月をすへて發陳といふなり王氷か素問注に春陽上升氣潰發散生二育庶物一陳二其姿容一故曰二發陳一といへる發陳の文字發は出なり陳は和訓ゑくといふ訓也さすれは文字の意いてゑく義あれは草木の事にかゝる名なり草木の地上にいてしきつらなる意春夏秋冬ともに時物によりて名をくたしたる事あまたあり春といふは春三月をすへていふ夏秋冬皆かゑなり春夏秋冬異名數多にしてあくるにいとまあらすたゝ古名をのみ二三擧るのみ

蒼靈顏延年曲水詩序　芳春　青春　陽春　三春　九春元帝纂要　上春　開春　發春　獻春　首春同上　青皇　東皇　東君　芳時　媚景　淑節　春帝　太皥　青帝　春神事物別名

○正誤

東雅云舊事記に思兼神兒表春命下春命見えけりこれも春秋の春の義なりしにやたゝ其字借用ひられしにや不詳此等の名既に闕ぬれは今はたいかにとも辨ふへからす

按に舊事記は引れざる書なり又日本書紀を見るに書紀には素盞嗚尊春則重播種子とみえたるは春秋の春の義なること明かなりゑかるを後れてみえし表春命下春命の御名を以て春秋の春の義なりしにや其字借用ひられしにや不詳といはれしはもと東雅は一卷の書を携してかゝれしかはたま〳〵考を失せしなり

日本歲時記云春和語に春をはると訓せしははるゝといふ義なり冬は陰氣あつくして雪ふり雨しけくそら

皆覺藻、君王遊豫、其不㆑悅乎云々、天以㆑春爲㆑化、帝以㆑惠爲㆑和、惠化㆒時、煦嘔何甚云々、兼賦㆓萬物之逢㆑春云爾、謹序、

早春同賦㆓和生遂㆓地形㆒　慶保胤

夫春之爲㆑氣也、地之爲㆑形也、草木是毛髮、春雨沐而綠深、水泉又血脈、曉冰消而波暖、至㆓于彼東岸西岸之柳㆒遲速不㆑同、南枝北枝之梅、開落已異、不㆓是春王之有㆑私、誠任㆓陰土之自然㆒也、方今梁園樂㆑春、郢客歌㆑雪、中有㆓巴人㆒猥作㆓唱首㆒云爾、

早春於㆓奬學院㆒同賦㆔春生㆓霽色中㆒各分㆓一字㆒

源順

夫時、屬㆓青帝之上月㆒候迎㆓紫姑之後朝㆒、風烟維新云云、夫寒光早謝、霽色高褰、春生㆓于其中㆒云々、是春發之權輿也、遲々麗日之前、是春來之要路也、

萬葉集卷第六雜歌

天平五年癸酉大伴坂上郎女宴㆓親族㆒歌

如是爲㆑作遊飮與草木尙春者生管秋者落去

又卷第九雜歌　鷺坂作歌一首

山代久世乃鷺坂自神代春者張乍秋者散來

右柿本朝臣人麿之歌集所㆑出

又卷第十雜歌　寄㆑雲

白檀弓今春山爾去雲之逝哉將別戀敷物乎

古今和歌卷集第一春歌上

雪のふりけるをよめる　きのつらゆき

霞たちこのめもはるの雪ふれば
花なき里も花ぞ散ける

題しらず　よみ人しらす

梓弓をしてはる雨けふ降ぬ
あすさへふらは若な摘てん

歌奉れとおほせられし時よみてたてまつれる

つらゆき

我せこか衣はる雨ふることに
野へのみどりぞ色まさりける

めのをとうとをもて侍ける人にうへのきぬをゝくるとてよみてやりける　なりひらの朝臣

紫の色こきときはめもはるに
のなる草木ぞ分れさりける

○釋名

春

日本書紀萬葉集禮記爾雅○按にはるは張也草木の

生遂一者、故天不レ重爲レ春、春者、夏之父也、故春生レ之夏長レ之、秋成而殺レ之、冬受而藏レ之、春肅而不レ生者、王德不レ究也、夏寒而不レ長者、臣下不レ奉二主命一也、秋順而復榮者、百官刑不レ斷也、冬溫而泄者、發二府庫一賞無レ功也、此所謂四時者、邦之禁也（天中記）

淮南子云、將軍之心、滔々如レ春

司馬遷傳云、夫春生、夏長、秋收、冬藏、此天地之大經也（同上）

釋名云、春之言、蠢也、萬物蠢然而生也云々、

前漢律歷志云、少陽者、東方、東動也、陽氣動二物於時一、爲レ春、春蠢也、物蠢生廼動運、故爲レ規

後漢律歷志云、日行二東陸一謂二之春一

六韜云、春道生、萬物榮云々、

周書云、黎景熙上書曰、招搖東指、天下識二其春一（天中記）

漢書云、魏相奏曰、明王謹二于尊大一愼二于養一レ人、故立二羲和之官一以乘二四時節一授二民事一

續漢志云、太守常、以レ春行レ縣、至レ縣、勸二人農桑一振二救乏絕一云々、（天中記）

漢王莽傳云、夫三皇象レ春、五帝象レ夏、三王象レ秋、五伯象レ冬、皇王德運也、（同上）

白虎通云、物蕃屈有レ節、欲レ出時、爲レ春、春之爲レ言偆、偆動也云々、

又云、嫁娶、以レ春者、天地交通、萬物始生、陰陽交接之時也、

素問云、春三月、此謂二發陳一、天地俱生、萬物以榮云々、

又云、故生因レ春、長因レ夏、收因レ秋、藏因レ冬云々、

京房占書云、春時、退二貪殘一進二柔良一恤二幼孤一振二不足一求二隱士一則萬物應レ節而生、隨レ氣而長、所レ謂春令云々、（天中記）

朝錯新書云、帝王之道、包レ之如レ海、養レ之如レ春、

蔡邕月令章句云、少陽爲レ春、太陽爲レ夏、少陰爲レ秋、太陰爲レ冬也（以上同上）

徐幹中論云、夫名之繫二於實一也、猶三物之繫二於時一也、生レ物者春也、吐レ華者夏也、布レ葉者秋也、收成者冬也、斯無爲而自成者、若强爲レ之、則傷二其性一矣（淵鑑類函）

詩歌

本朝文粹卷第八（時節詩序）

早春侍レ宴同賦レ無二物不一レ逢レ春應　製

菅贈大相國

臣聞、春者一年之警策、四時之光粉也、時足二鶯花一入

なかれ又春は陽の初にて發生の時なり天道に隨て物をそたつる事をこのみ殺す事を禁すへし

和漢三才圖會云春音蠢云々

時節纂諺云春は蠢と云意なり物みな動き生するの時なる故を以て名とせり易に元と云

續節序記春は蠢也物の動き生ずるの貌なり又春を青陽と云和語にはると訓す春は四時の始にして少陽也一年の始なれは賀する事勝れりされは春三月を發陳といふ天地に生し萬物を以て榮ふゆゑに夜は早臥朝には疾起て髮をけつり形を緩にして志を生せしめる事を本とす

惠美須草〔森宮龍翁著〕云春はるは張なり萬物みな陽氣さして垣根の草もはりてもえ出る時なれは春といふ

和訓栞云春は發の義萬葉集に春は張乍と見え後の歌にこのめはるさめなとよめり墾をよむも發開の義也治をよむも玉篇に墾は治也と見えたり張も發の義也發は開をはるきとよむの義也云々

類聚名物考〔時令〕云春草木の牙の萌出はれはいふなり張發の意をいふ

禮〔樂記〕云、春生夏長秋收冬藏云々、

又〔鄕飮酒義〕云、東方者蠢、春之言、蠢、産ニ萬物一者聖也云々、

說題辭云、春蠢、興也、〔玉燭寶典〕

尙書大傳云、東方何也、動方也、物之動也、何以謂ニ之春一、春出也、物之出也、故謂レ之東方春也〔同上〕

春秋元命苞云、春者、神明推移精華結紐、註、神明、猶ニ陰陽一也、相推使ニ物精華一、結成、紐結要也

公羊傳云、春者何、歲之始也、注春者、天地開辟之端、養生之首〔天中記〕

爾雅云、春爲ニ蒼天一

又云、春爲ニ青陽一、亦曰ニ發生一

管子曰、東方曰ニ歲星一、其時曰レ春云々、〔天中記〕

又云、春者、陽氣始上、故萬物生、

又云、明王有ニ四禁一、春無ニ殺伐一、無下割ニ大陵一、伐ニ大木一、斬ニ大山一、行ニ大火一、誅ニ大臣一、收レ穀賦上錢云々、故春政、不レ禁、則五穀不レ成

尸子曰、春爲レ忠也、東方而春、春動也、是故鳥獸孕、榮華生、萬物遂、忠之至也

鶡冠子曰、斗柄指レ東、天下皆春〔以上同上〕

史記〔天官書〕云、東方木、主レ春

范子曰、天生ニ萬物一之時、聖人命レ之、曰レ春、春者不ニ

方而春春動也と尸子いひ斗柄指レ東天下皆春と鶡冠子いふ是方角によりていふなり抑春は物皆新に移り舊もあらたまる時にて萬物の始なり故に春者天地開辟之端と公羊傳注いひて天地共に春にあひて萬物あらたまりはしまるをいふなり故に天生二萬物一之時聖人命レ之曰レ春と范子いひ侍るも物の先改り始るをいふなり春生レ之夏長レ之秋成レ之冬歛レ之と文中子いひ生レ物者春也吐レ華者夏也布レ葉者秋也收レ成者冬也と徐幹中論いふ類ひ春夏秋冬順次あり主役ありて四時順運し物を養育し成熟をなす其時々の功德をあらはしいふ白石曰春とは草木の芽はる時なれははるといふ古語にはハラクといひしはもえ出るを云しなりと東雅いひ春は發の義萬葉集に春は張乍と見えと和訓栞いふも春草木の芽の萌出はれははるといふなり張發の意也されは春物はりいつるを和訓にはるといふをもとゝせは自他疑惑の論いさゝかもあるへからさるなりとおしはかられぬるなり

日本書紀神代卷云、天照大神、以二天狹田長田一爲二御田一、時素盞嗚尊春則重播種子且毀二其畔一云々

令義解序云、臣夏野等聞、春生秋殺刑名與二天地一俱與云々

萬葉集卷第一云、霞立長春日乃晩家流和豆肝之良受村肝乃云々、

又云、冬木成春去來者不喧有之鳥毛來鳴奴不開有之花毛佐家禮杼云々、

和名類聚鈔歲時部云、春、初春、仲春、季春、云々、

本朝文粹菅贈大相國詩序云、春之爲レ氣也、霏々焉漠々焉、鴛瓦雪消知二天下之皆就一レ暖、鳳池冰冶知二天下之不一レ受レ寒時也、翠幌高開、珠簾競撥、留二於一日一、玩二三春於二句一云々、

拾芥抄云、春爲二青陽一蒼天

年中行事秘抄云、春者、蠢動也云々、

東雅云春の名ハルといひしは年開ぬるの義にてたとへは開歲なといふかことき

春とは草木の芽はる時なれはハルといふ古語にハラクといひしはもえいつるをいひし也

日本歲事記云春は四時の初にして少陽の時なり古人の語に一年の計は春に在といへれは春のはしめ年中なすへき事業をはかりいとなみ四民ともにおの〳〵その事を初め勤むへし悠々として空しく時を失ふ事

古今要覽稿卷第二十七

屋代弘賢著

●時令部

●春

春は張なり事々物々皆はりいつる義なり故に春則重(シキ)播種子(マキシ)と日本書紀いふもその苗の出る時節なれは種子をまきしなり是春といふ名目のみえし始なり又臣夏野等聞春生と令義解序にみえたるも草木生出の義春者蠢動也と年中行事秘抄いふは春之爲レ言蠢也と禮記鄕飲酒義いふによりしなるへし蠢は動也虫のうこめくを蠢といふ前漢律歴志劉熙釋名等みな春者蠢とのみしるせるもゝとは禮記によれり玉燭寶典もおなし故に萬物蠢然として生也と釋名いふも草木の事を文字にあらはさねとも草木の生出るを形容していふなり梓弓(アツサユミ)春と萬葉集いひ又春張乍(ハルハリツヽ)と同上いひ木のめもはるの雪ふれはと古今集いひ又このめはる雨衣はるさめなと歌によみつゝくるもみな張發する義にとれり天地人の三才を以ていへは天にありては春は日光發陽して日を追てのとかなる是陽氣ましくはゝるもはりみてる意なり春立初る日より天もかすみ渡りて舊冬のみしかき日も次第にのひはり地にありては草木根株をのつから地中より地上に萌芽はり出るなり人の上にていへは人意も草木の芽のはりいつるか如くに立春の朝より氣をのつからのひらかにして人氣をのつから發陽し心いさましくおもはるゝ皆はるといふ訓意にかなふなり春夏秋冬の訓義或は時節にとり或は寒暑の氣にとり或は方角にとり或は五行にあて或は五色の色に配當するあり或は十幹にあて或は天名ありいわゆる春爲二蒼天一と爾雅いふ是なり十幹にいふは甲乙者萬物孚レ甲也乙者物蕃屈有レ節欲レ出時爲レ春と白虎通いひ五行にあつれは東方木主レ春と史記天官書みえて春は木也夏は火土は中央に在秋は金冬は水也是四時に配當するなり色にとりては春爲二青陽一と爾雅いひ春之爲レ言偆偆動也位有二東方一其色青と白虎通いひ孫炎曰青陽春氣青而陽暖日といへり春はすへて草木青く萌出れはなり陽は暖日とは春日のとかなるをいふなり東方春也と尚書大傳いひ東

別ワケ〔建部公別公出ニ右京皇別下ニ〕

同上

書林遊佐氏携ニ一書ヲ來請ニ之訓點ヲ就而視之姓氏之書也蕃賓之枝葉本朝之派流一顧而廓如也予素淺陋薄識而何以塞ニ其責ヲ乎哉客强之不レ止終闕ニ其疑ヲ以點ニ其餘ニ〕

寛文戊申夏之孟　自省軒宗因謹跋

〔○松下見林本後序云古人有レ言曰人有ニ姓者ニ云々允恭天皇盟レ神探レ湯以定ニ姓氏ヲ後世帝王毎レ令レ獻ニ本系ヲ藏ニ圖書寮ニ云々至ニ於淨御原朝ニ改ニ天下萬姓ヲ分ニ八等ヲ加レ號別序ニ當年之勞ヲ爾來每レ姓有ニ朝臣眞人宿禰連王公道臣造直忌寸縣主村主神主人伊美吉史勝部氏阿祇奈君之號ヲ以知ニ其先功勞ヲ也凡本朝姓氏之出自有レ三神別也皇別也諸蕃也氏族之書詳之矣惜乎氏族書不ニ多傳ヲ幸新撰姓氏錄抄得レ存ニ于今ヲ惟憾其所レ存者抄書而非ニ完本ヲ也藤原朝臣定房藏之大內氏得之其所レ來尙矣雖レ未レ知ニ何人所ニ抄其意爲レ備ニ指掌ヲ亦用レ心之勤矣其偶存者後世之幸也云々己酉寛文九年春三月西峰散人序○信友云大坂人松下見林號ヲ西峯ト云醫ニテ國學ニ志アリテ當時ノ一人也サテ此白井宗因モ大坂人ニテ世ヲ同クシテ醫ニテ國學ニ志アリシ人ナリ白雲山人ト號此白井氏ノ跋ニ寛文戊申トアルハ八年ナリ其翌年ノ九月ニ見林ノ後序ヲ書テ再刊セルハ前年白井氏ノ刊本心ニ叶ハヌヿアリシカ又書肆ノ刊ヲ爭ヒテ又定本ヲ乞タルカ〕

姓氏錄下之末終

故俾下以二太占之卜事一而奉上仕」良〔一本云良貞之二氏誤爲二一氏一者非也」貞〔貞地名万葉集卷十二貞能浦爾依流白浪云々○天孫本紀物部目連公大貞連等祖○後紀承和四年大和國人大俣連福山賜二大貞連一○百木云伊勢國度會郡大杉谷二貞ノ社兩社アリ輿貞口貞卜云又貞御前トモ云コノ貞ニ由緣アルカ」都〔仁壽二年五月都宿禰貞繼云々○左京皇別下桑原臣者合べし」長谷〔異本小長谷に作」國覔〔異本覔に作」各務　帶王〔一本主に作○百木云拾芥抄ニ　帶壬ト　書テタチシロ古寫本ニハタチコト訓リ」言〔異本唁に作○一本此姓なし」品治〔古事記垂仁段本牟智和氣御子令レ拜二出雲大神宮一出行之時毎二到坐地一定二品遲部一○開化段曙立王者伊勢之品遲君之祖息長日子王者吉備品遲君之祖也」達〔一本遠に作」津〔一本澤に作○拾芥抄無戸姓ニ遠澤トアリテ或朝臣トアリ」風早　不知山　面西〔一本面西を分て二姓となす又一本田西ト西ト二姓トセリ」早〔異本甲に作」可〔拾芥抄ニ早可一本早河」五百井　靫連〔異本訓ユカミ」潘〔異本漆に作」島〔拾芥抄無戸姓ニ漆島（或朝臣）」夏身〔和名抄伊賀國名張郡夏身鄕近江國甲賀郡夏身（奈豆美）鄕」赤染〔續紀天平十九年八月赤染造賜二常世連一○天武紀元年見二赤染造德足一者是其始乎」榎本〔和名抄山城國乙訓郡榎本左京神別中見二榎本連一」若狹　播〔異本幡に作」磨〔印本麻ニ作ル國名ナルベケレハ磨トアルニ從フベシ又拾芥抄阿祇奈君條に播磨（又朝臣）トアリ」足羽〔和名抄越前國ノ郡マタ鄕ニ足羽（安須波）續紀足羽朝臣眞橋○兵部式足羽驛○神鳳抄足羽御厨○國圖ニ足羽村アリ」淸峰　瓺〔異本脹に作」取　鷹〔一本雁に作」取戸〔一本鷹戸に作又一本鷹取鷹戸を二姓となす又一本には鷹取を一姓となし戸を一姓となす」

已上〔是より末一本なし」三十一　〔異本九に作今其數三十七なれは何れも誤ならん○異本には三十一卷に作」氏不レ見之歟〔注云四百三十六姓云々現在四百三十二姓也」安部〔異本那に作」公〔是より下異本なし」

同上

讃岐公〔出二皇別右京下一同注○古事記景行段倭建命之御子建見兒王讃岐綾君之祖也萬葉卷一見二綾君一」

大足彥忍代別天皇々子

建部公〔此條印本なし一本に依て補」

に作〕朝臣國助
從六位上行治部省少錄臣伊豫〔元此三字を伴祿二字に作る異本に據て改〕部連年嗣
從七位下行治部省少錄臣越智直淨繼
從八位上行散位寮少屬臣高志連正嗣
大舍人正七位上臣大伴宿禰根守〔異本宗に作〕
散位正七位下臣大田祝山直男足
散位從七位上臣味部臣公〔異本臣公の字なし〕廣河
散位從七位下臣內藏忌寸御富〔異本當に作〕

平朝臣尊卑分脈云平氏桓武天皇葛原親王賜二輦車一仁壽三年六月四日薨
┌高棟王賜二平姓一大納言　惟範
└高見王無官無位　高望上總介從五位下始而賜二平姓一

〔○信友云平朝臣以下ハ後人ノ加筆ナリサレト諸本トモニアレハ既ニ此姓氏錄ノ抄ヲ作レル頃ヨリアリシナルヘシ〕
桓武天皇男一品式部卿葛原親王男〔異本一男に作〕大學頭從四位下高棟王天長二年閏〔異本閏字なし〕七月賜二平朝臣姓一貫二左京一貞觀九年五月至二大納言正三位一薨〔六十四歲（異本此注なし）○高棟王後紀天長二年七月從四位下大學頭高棟王賜二平朝臣姓一貫二左京一〕

不レ載二姓氏錄一姓〔異本姓氏錄姓の四字なし又一本姓下等字あり〕
平〔注レ前〕在原〔後紀天長三年十二月阿保親王上表曰云々詔二仲平行平業平等一賜二姓在原朝臣一〕大藏　惟宗　令宗〔拾芥抄令宗朝臣〕中原〔文德實錄仁壽元年九月從五位下弘宗王奏諸子男八人改二其王號一賜二中原眞人一許之○尊卑分脉云中原外記爲二本姓一十市宿禰天延二年十二月日改二宿禰一賜二朝臣一安寧天皇弟三皇子磯城津彥命之後也云々〕宗我部　阿蘇〔古事記開化段息長日子王者針間阿宗君之祖○播磨國揖保郡阿宗神社〕美麻耶〔一本郡に作〕宇〔一本宗に作〕禰湪〔異本佫一本備に作又一本此姓なし〕常〔一本當に作〕澄〔續後紀承和三年二月八戶史礒益云々賜二姓常澄宿禰一○三代實錄元慶三年十月常澄宿禰云々賜二高安宿禰一〕當世〔續後紀承和十二年七月右京人巫部宿禰公成大和國山邊郡人巫部宿禰諸成和泉國大鳥部人巫部連繼麻呂云々等賜二姓當世宿禰一公成者神饒速日命苗裔〕卜部〔神代紀下天兒屋根命主二神事一之宗源者也

日置部（ヒヲキ）〔垂仁紀見ニ日置部太刀佩部等並十箇品部賜ニ五十瓊敷皇子一其傳文闕ニ于茲一○泉州志大鳥郡云日置村在ニ河內國八上郡一按此村鄰ニ土師村一上古和泉國也後世併爲ニ河內國一トアリテ此文ヲ引ケリ〕

天櫛玉命〔天櫛玉命者出雲臣之祖神也〔有ニ所見一〕是亦氏姓闕ニ于茲一注解無レ所レ依〕男天櫛耳命之後後〔後也同上〕

凡〔異本丸又瓦に作〕人

神汗〔異本行に作〕久宿禰命之後也〔後也同上〕

茨木造（ムハラキ）〔常陸國茨城〔牟波良岐〕〕

天津彥命〔按に命上根字脫するか○神代紀上天津彥根命此茨木國造額田部等遠祖也國造本紀輕島豐明朝御世天津彥根命孫筑紫刀禰定ニ賜茨木國造一〕之後也〔後也同上〕

眞髮部（マカミベ）〔古事記雄畧段爲ニ白髮太子之御名代一定ニ白髮部一續紀延曆四年五月改ニ姓白髮部一爲ニ眞髮部一○註ニ右京皇別眞髮部及山城國神別眞髮部造○泉州志泉南郡ニ眞上村アリテ此姓ヲ引リ〕天穗日命〔天穗日命之後者眞髮部無レ所レ見〕之後也〔後也同上〕

小豆首〔前文有ニ尾津直一漢高祖五世孫云々〕

呉〔異本足に作〕國人現養臣之後也〔後也同上〕

神人（ミワ）〔神人訓美和○和泉國大島郡上神〔加無都美和〕○百木云々ハ人ト訓ヘシ某人トイヘル姓アマタアリ○信友云拾芥抄ナル姓戶錄ノ戶ノ人ト云部ニ神トアルコレナルヘシ〕

高麗國人許利都之後人〔後人同上〕

近義首（コギ）〔東鑑文治二年五月廿五日下作ニ小木鄉一○又古記ニ近木又故沐又古木モカケル由泉州志ニミエテコギトヨメリ○和泉國日根郡鄉名近義近木王子社在ニ于日根郡王子村一○雄略紀五年百濟國軍君入レ京既而有ニ五子一按混支王住ニ于茲一而有ニ近義鄉名一乎〕

新羅國主角折〔異本折に作〕王之後也〔後也同上〕

山田造〔續紀天平寶字三年十二月山田史廣名云々等四百三人賜ニ姓造一○山田河內國交野郡新羅國〔異本同國人に作〕天佐疑利（サキリ）命之後也〔後也同上〕

右第三十卷

新撰姓氏錄卷終〔異本此七字なし〕

正六位上行治部少〔異本省に作〕丞臣石河〔異本川

祠倶在ニ中村一トミユ」

豊城入彥命男倭日向健〔古事記傳建に作〕日向〔垂仁紀五年命ニ上毛野君遠祖八綱田一令レ擊ニ狹穗彥一云々美ニ將軍八綱田之功一號ニ其名一謂ニ倭日向武日向八綱田一也注ニ左京皇別下上毛野朝臣ニ〕八綱田命之〔之異本に依て補〕後也〔後也同上〕

椋椅部首〔大和國十市郡有ニ倉椅山注レ前〕

吉備津彥五十狹芹命〔孝靈紀妃倭國番媛生ニ彥五十狹芹彥命一亦名吉備津彥命〕之後也〔後也同上〕

鵜甘部首

武内宿禰男己西男柄〔按に柄の誤か〕宿禰之後也〔後也同上〕

猪〔印本狛に作一本に依て改〕甘〔一本部字あり〕首

〔仁德紀猪甘津古事記安康段見ニ山代之猪甘者一又有ニ攝津國住吉郡猪甘野一〕

天足彥國押人命〔孝照紀襲足媛皇后生ニ天足彥國押人命一〕之後也〔後也同上〕

古氏〔古氏音訓不レ詳前文用レ音按蓋古氏古志脫文景行紀云日本武尊逮ニ于碓日坂一於レ是分レ道遣ニ吉備武彥於越前國一應レ有下平ニ越國一給中越國上而諸紀脫漏例多○信友按古ハ布留ト訓テ大和ノ地名ニ由アルカ又稚多祁古命ト申ニヨレルカ尚考ヘシ未定雜姓右京ニ古氏アリ〕

大日本根子彥太瓊天皇〔謚孝靈○一本大日本云々なく孝靈天皇に作〕皇子稚多祁〔異本部に作〕古〔古の上比字有べきか〕命後也〔後也同上〕

大部首〔大地名垂仁段見ニ山代大國之淵一者和名抄云山城國宇治郡大國與ニ河内國大戸一不レ同膽〔元膽に作一本に依て改〕杵磯丹〔異本礒舟に作〕穗〔穗の上下一本杵字あり〕命〔天孫本紀饒速日命亦名膽杵礒丹杵穗命（九世孫弟）玉勝山代根古命（山代水主云祖按奉紀大部脫乎）〕之後也〔後也同上〕

工首〔工上有ニ脫文一左京神別神魂命子多久都玉命三世天仁木命爪工祖也〕

神魂命之後也〔後也同上〕

伯〔印本狛に作一本に依て改〕太〔異本因に作〕首神人

〔神人印本下天表日の上に書す一本に依て改○拾芥抄人部ニ伯太首神人ト書リ又按ニ式和泉國和泉郡博多神社泉州志和泉郡ニ宿田村見ユ〕

天表日〔異本目に作〕命之後也〔後也同上〕

次第明ラカナリ神ヲ部マタ祁トアヤマルハ古書共ニ例多キコトナリ〕王之後也〔後也同上〕

狛人〔大縣郡巨麻若江郡巨界相並催馬樂古本云伊之加波乃古末宇止諸郡高麗國人住居地〕

高麗國大武神之後也〔異本同に作〕

宇奴(ウノ)連〔欽明紀河内國更荒郡鸕鷀野邑○注ニ河内國宇努造ニ〕

新羅國〔國字元なし異本に依て補〕皇子金庭興〔異本典に作〕之後也〔後也同上〕

竹原(タケハラ)連〔續紀竹原頓宮又行ニ幸珍努及竹原離宮ニ〕

新羅國〔異本同國に作〕阿羅々國主弟伊賀都君之後也〔後也同上〕

小橋(ヲハシ)造〔異本連に作○小橋仁德紀爲ニ橋於猪甘津一郎號ニ其處一曰ニ小橋一也猪甘今有ニ住吉郡猪甘野ニ〕

新羅國人多弖使主之後也〔後也同上〕

坏作造

新羅國〔異本同國に作〕人曾生支〔古本里生支又魯生支一本曾呈支曾里支又曾王支曾呈友に作る本も有〕富主人〔一本富呈人に作〕之〔之字元なし異本に依て補ふ〕後者不レ見〔古本之後也に作異本新羅國云々富主友二人之後也に作又新羅云々曾支富支二人之後也又新羅云々魯呈友富二人之後也に作又曾生支富主人を曾里與富主作に本もあり〕

大賀良(オホカラ)

新羅國〔異本同國に作又國人に作本も有〕郎子王之後也〔後也同上〕

賀良(カラ)〔異本國字あり〕姓〔賀良所謂自ニ賀羅國一慕レ化來朝者賜ニ姓賀羅造一者是也○式河内國志紀郡在ニ志紀辛國神社○和泉志云在ニ岡村一今稱ニ春日一社北有ニ辛國池一今屬ニ丹南郡一○一本加筆云天平寶字二年十月美濃國席田郡大領外正七位上子人云々等言子人等六世祖父午留和斯知自ニ賀羅國一慕レ化來朝當時未レ練ニ風俗一不レ着ニ姓氏一望下隨ニ國號一蒙中賜姓字上賜ニ姓賀羅造ニ〕

新羅國郎子王〔異本此下子字あり〕之後也〔異本同王之後也に作○後也(同上)〕

和泉國

我孫(アヒコ)古〔今住吉郡吾孫村也注レ前○前文我孫同祖○泉州志云和泉郡下條鄉(又云吾孫子庄)云々トアリテ此姓ヲ引リ和泉志同郡我孫村富神祠我孫天光雷神

百濟〔異本同に作下同〕國人久爾君〔河内國諸蕃上曰佐ハ久爾能古使主之後也又下文長田使主ハ一本久爾新君之後也トアリコレラノ久爾ト同カ〕之後也〔後也同上〕

新木首（ニヒキ）〔按新木河内郡新居○百木云新宮新家共ニ爾比乃美ト訓ム字ナレハコヽノ新木ニハ引カタシ伊賀史ニ和銅辛亥伊賀國阿閉郡新家（訓ニ爾位能味ニ）立ニ新驛ニ云々和名抄伊賀國阿拜郡ニ新居郷アリコレナリ新家新居訓同シキ事ヲシルヘシ〕

百濟〔同上〕國人伊居留君之後也〔後也同上〕

豐村造（トヨムラ）〔異本連に作○豐村豐浦八俣交野郡山田〕

百濟〔同上〕國人德率〔上文右京吳氏百濟國人德率云々トアリ〕古魯父〔異本曾文に作〕佐之後也〔後也同上〕

八俣部（ヤマタヘ）

百濟〔同上〕國人多地多祁〔古本部に作〕郷之後也〔後也同上〕

長田使主

百濟〔同上〕國人〔元人字なし異本に依て補〕爲居〔一本久爾辛王に作又居を君に作る本もあり○按に久爾辛君の久爾は上文船子首にいへり左京上百濟の條に注本書紀入朝人名部久爾辛王とあり見合へし○信友按爲居ハ久爾辛王ヲ艸ニ爲庳ナトカケルヲ爲居トミアヤマレルナランカ〕王之後也〔後也同上〕

舍人〔舍人訓止禰利○職員令有ニ大舍人寮ニ○和名抄於保止禰利乃豆加佐○天武紀十年舍人造糠蟲書直智德賜レ姓曰レ連〕

百濟〔同上〕國人利加志貴〔異本志字あり〕王之後也〔後也同上〕

狛染部〔狛染部ハ狛漆部ヲ誤歟シカラハコマノヌリヘト訓ヘシ和名抄大和國宇陁郡漆部（奴利倍）郷アリ靈異記ニ大和國宇陁郡漆部里有ニ風流女ニ是即彼郡内漆部造麻呂之妾也云々〕

高麗國大武神〔印本須牟祁ニ作一本須を天に作る又沃牟部の部を祁に作る本も有東國通鑑に依て正す○信友倘按に天牟神トアル本ハ大ヲ天ニ誤リタル牟武部共ニムノ音ニ用ナレタリ大武神ト唱フヘシサテ舊ハ大ナルヲ天ニ誤又沃ニ誤又沃ト艸字ニ作ルヲ次トアヤマリテツヒニ須ト書ルナリ此誤リ

就ニ於此村ニ造レ宅居之因之名曰ニ靫負村ニ後人改曰ニ靫編卿ニ云々トアリ此錄ノ靫編ハ拾芥抄ニエカミトヨメルニ從フヘシユキアミノ誤語ナリ〕
神志波移命之後也〔後也同上○異本此條下文倭川原忌寸の後に入る〕
倭川原忌寸〔川原齊明紀飛鳥河原宮有ニ大和國高市郡ニ〕
武甕槌神十五世孫彥振根命之後也〔後也同上○武甕槌神古事記上天鳥船神副ニ建御雷神ニ云々降ニ到出雲國ニ式神賀詞云天穗日命云々已命兒天夷鳥命爾布都怒志命乎副天天降遣○按建御雷與ニ布都怒志ニ者劍名也持之者天夷鳥命之末振根者崇神紀見ニ出雲振根ニ○按神代紀下謂武甕槌神及經津主神降ニ到出雲ニ者見ニ三所ニ共以ニ劍名ニ相傳也依之記ニ武甕槌神孫彥振根ニ者重誤也〕
內原直〔異本首に作○續紀天平寶字八年七月紀寺奴益人等訴云紀袁祁臣之女粳賣嫁ニ本國氷高郡人內原直牟羅ニ生ニ兒身賣ニ云々益麻呂等十二人賜ニ姓紀朝臣ニ眞王女等五十九人內原直ニ卽以ニ益麻呂ニ爲ニ戶頭ニ編ニ附京戶ニ○和名抄紀伊國日高郡內原○百木云今本內ヲ厚ニ誤ル紀伊國村名帳ニ海邊郡內原村アリ日高ト海邊トハ鄰郡ナリ〕
狹山命之後也〔後也同上〕
安曇連〔注ニ攝津國神別阿曇犬養連ニ○信濃國安曇〔阿都三〕〕
于都斯奈賀命之後也〔後也同上○古事記上阿曇連等者其綿津見神之子宇都志日金折命之子也○本居宣長云古事記ニ阿曇連等綿津見神之子宇都志日金折命ノ子孫也トアルニヨレハ奈賀ハ賀奈ノ寫シ誤リナルカ〕
高安忌寸〔注ニ左京諸蕃上文宿禰ニ○河內國高安〔多加夜須〕〕
阿智王之後也〔後也同上○續紀卅八坂上大忌寸苅田麻呂等上表言臣等本是後漢靈帝之曾孫阿智王之後〕
大友史〔續紀天平十五年九月免ニ官奴斐太ニ從レ良賜ニ大友史姓ニ斐太始以ニ大坂沙ニ治ニ玉石ニ之人也〕
百濟國人白猪〔一本日駒に作〕奈世之後也〔後也同上〕
船子首

千人一修造云々百木按ニ池後今ノ池尻ニテ池ハ狹山池ナルヘシ式丹比郡ニ狹山堤神社モアリ狹山ノ池ノ堤ニ坐ス神ナリ〕

天彥麻須命之後也〔後也同上〕

大伴連〔注二左京神別中大伴宿禰一〕

天〔一本大に作〕彥命〔百木云天彥命ハ上ノ如ク天彥麻須命ヲ誤歟〕之後也〔後也同上〕

孔王部首〔首異本道に作○百木云此孔王部首ハ上ナル池後ノ臣ノ上ニアリシカマキレテコヽヘ載レルナルヘシ皇別ヲ神別ノ下ニ置ル例ナシ○孔王穴穗穴太同古事記安康段穴穗御子坐二石上之穴穗宮一雄略十九年紀詔置二穴穗部一續紀延曆九年下總國猨島郡主帳孔王部山麻呂授二外正六位上一又天平勝寶三年七月下總國穴太郡阿古賣一產二二男二女一賜二粮幷乳母一〕

穴穗天皇〔諡安康○異本穴穗二字なく安康天皇に作る〕之後也〔後也同上〕

新家首〔續紀寶龜八年新家連東麻呂賜二丹比宿禰一○和名抄河內國志紀郡新家○河內志若江郡ニ新家祠アリ又云志紀郡新家方廢村存今屬二丹比郡一傳ヘリ〕

汗麻斯魔尼足尼命〔印本汗麻惠足尼に作異本に依て改○魔尼一本麻知に作又魔に作又斯魔を斯鬼に作る本もあり○按諸本誤汗麻斯魔尼天孫本紀宇麻志麻治命（十一世孫弟）物部竺之後也〔後也同上〕

志連公〔新家連等祖〕

矢作連〔河內國若江郡矢作神社〕

布都努志乃命之後也〔後也同上〕

葦田臣〔伊勢國三重郡葦田（安之美多）備後國葦田（安之太○前文葦田首祖異○古事記履中段云葛城之曾都毗古之子葦田宿禰亦祖異也〕

都早〔異本皁古本奴に作〕古乃後也〔後也同上〕

三間名公

仲臣雷大臣命之後也

靫編印〔本偏に作偏一本作レ編と分注するに依て改〕首〔靫編式（六月大祓）曰靫負伴男是也○職員令衞門府（集解号曰二左右靫負府一）○河內國神別襷多治比宿禰可二考合一○靫編訓由岐閇○豐後風土記日田郡靫編鄉ハ昔ハ磯城島宮御宇天國排開廣庭天皇之世日下部君等祖邑阿自仕二奉靫部一其邑阿自二玖珠一

阿刀部

山都多祁〔異本初に作〕流比女命四世孫毛能志乃和氣命之後也〔後也同上〕

山首

火明命〔命字異本に依て補〕十一世孫尾張屋主都久代命之後也〔後也同上〕

川内漢人

火明〔異本同に作〕命九世孫否井命　之後也〔後也同上〕

住〔印本任に作一本に依て改〕道首〔仁賢紀六年住道人山寸上ニ奸玉作部鯽魚女一生ニ鹿寸一○和名抄攝津國住吉郡住道（須無知）○式神須牟地神社〕

伊弉諾命男素盞〔異本戔に作〕烏命之後也〔後也上同〕

牟佐呉公〔左京諸蕃下牟佐村主呉孫權男高之後也○雄略紀十四年身狹村主青等共ニ呉國使一將ニ呉所レ獻手末才伎漢織呉織一云々泊ニ於住吉津一〕

呉國王子青清王〔按青清王與ニ身狹村主青一同人乎〕之後也〔後也同上〕

河内國

佐自努公〔右京皇別上佐自努公同祖日本紀漏〕

豐城入彦命之後〔異本者字あり〕不レ見〔異本後也に作〕

伊氣〔百木云和名抄伊勢國度會郡伊氣（伊介）郷アリ○神鳳抄志摩國伊介○神領目六云伊介浮島御厨○倭姫世紀鹽淡滿〕

豐城入彦命〔異本同命に作○豐城命系注ニ左京皇別下毛野朝臣二〕四世孫荒田別命之後也〔異本後者不レ見に作〕

壬生部公〔注ニ河内國皇別壬生臣二〕

御間城入彦天皇之後也〔後也同上〕

鴨部〔鴨式河内國高安郡鴨神社石河郡鴨習太神社澁川郡鴨高田神社等云々〕

御間城入彦五十瓊殖天皇〔諡崇神〕〔○異本御間城云云九字なく崇神天皇に作〕之後也〔後也同上〕

池後臣〔大和國皇別池後臣建内宿禰之後也河内國稱レ池者依羅池茨田池也血沼池靈龜元年隸ニ和泉國一○和泉志丹南郡ニ池尻村アリ又同郡ニ狹山池狹山村云々周廻一里許崇神天皇六十二年七月詔曰云々今河内狹山埴田水少云々開ニ池溝一以寛ニ民業一天平寶字六年夏四月河内國狹山池堤決以ニ單功八萬三

攝津國
韓海部首〔仁賢紀六年難波玉造部鯽魚女嫁ニ於韓白水郎嘆ニ者氏族歟系不レ見〕
武內宿禰男平郡木菟宿禰之後也〔後也同上〕
下神
葛木襲津彥命男腰裙宿禰之後也〔後也同上○紀氏系圖云襲津彥玉田宿禰腰裳宿禰磐媛（履中反正母后）〕
我孫〔異本攝津國此所に入○我孫今住吉郡有ニ吾孫村ニ○下文和泉國我孫公同祖○古事記開化段建豐波豆羅和氣王者依羅之阿毗古等祖之也〕
豐城入彥命〔豐城命孫我孫氏無ニ所見ニ〕男八綱多命之後也〔後也同上〕
椋椅部連〔椋椅大和國十市郡○仁德紀見ニ倉椅山ニ〕
伊香我色乎〔異本雄に作〕命之後也〔後也同上〕
津島直〔津島國號有ニ上縣下縣ニ○式有ニ河內國津島部神社ニ○又攝津國神別　津島朝臣大中臣朝臣同祖津速魂命三世孫天兒屋根命之後也〕
天兒屋根十四世孫〔河內國神別中臣連モ十四世トアリ猶此事左京上中臣志斐連ノ下ニ云ヘシ雷大臣命〔式雷命神社在ニ之下縣ニ○右京神別上由伎直雪大臣今本作ニ壹岐雷ニ後也〔後也同上〕
日下〔日下異本早に作〕部首
天日和〔異本知に作〕伎〔異本之字あり〕命六世孫保都禰命之後也〔後也同上〕
爲奈部首〔首字元なし一本に依て補○爲奈和名抄攝津又伊勢國○應神紀卅一年新羅王貢ニ能匠者ニ是猪名部等之始祖也○雄略紀十三年木工猪名部眞振〕
伊香我色乎命〔左京神別上猪名部造伊香我色男命之後也〕六世孫〔異本六世孫三字なし〕金連〔天孫本紀物部金連公惜馬連野間連等祖〕之後也〔後也同上〕
島首
正哉吾勝勝速日天押穗耳尊之後也〔後也同上〕
葛城直〔河內國神別葛木直高魂命五世孫劍根命之後也○三代實錄貞觀五年九月攝津國豐島郡人葛木直貞岑改ニ本居ニ貫ニ附右京職ニ〕
天神立命之後也〔河內國役直ト同祖也其處ニイフ○後也同上〕

高御牟須比命(タカミムスビ)孫治方〔異本身に作〕之後也〔後也同上〕

相〔異本祖に作〕槻物部〔齊明紀二年八月復於二嶺上一兩槻樹邊起レ觀号爲二兩槻宮一○文武紀書二大和國二槻離宮一○兩槻共可レ訓二奈美都紀一○天神本紀二十五部中有二相槻物部一○後大和國風土記城上郡列槻鄕土地中肥民用不レ少是則用明天皇宮居地也〕

神饒速日天降之時從者相槻天（信友云右京原造坂戸物部二田物部ノ注ノ例ニヨリ如レ此天字補ヘシ）物部之後也〔印本速日命後者不レ見に作異本には速日命從者之後者不レ見に作又一本には速日命の命字なし今一本に依て本文のことく改〕

犬上縣主(イヌカミアカタヌシ)〔犬上和名抄近江國以奴加三〕

天津彥根命之後也〔後也同上〕

薦(コモ)〔異本蘆に作〕集造(ツメ)〔天武紀十二年九月薦集造賜レ姓曰レ連〕

天津彥根命〔命字元なし異本によりて補〕之後也

三歲祝(ミトシノハフリ)〔三歲式大和國高市郡御歲神社○歲謂レ稻式祈年祭御年神也○神別攝津國神人氏同祖〕大〔異本なし〕物主神五世孫〔五世孫古事記崇神段大物主大神娶二陶津耳命之女活玉依毘賣一生子名櫛御方命之子飯肩巢見命之子建甕槌命之子僕(オノレ)意富多多祢古白(トマヲシキ)於レ是天皇大歡以詔之云々卽以二意富多二泥古命一爲二神主一〕意富太多根子命之後也〔後也同上〕

尾津(ヲツ)直

漢高祖五世孫大水命之後也〔後也同上○異本漢以下の文なし〕

村主(スクリ)

漢高祖〔異本祖字なし○按に此下若干世孫の字脫するか〕受王之後也

長倉(ナカクラ)造

韓國天師命之後也〔後也同上〕

漢人(アヤ)〔前文加羅氏之例也續紀廿一自二賀羅國一慕レ化來朝者賜二加羅造一者准之○肥前國風土記三根郡漢部鄕昔者來目皇子爲レ征二新羅一勅二忍海漢人一將來居二此村一令レ造二兵器一因曰二漢部鄕一トアリ大和國忍海郡アレハコヽナル漢人ヲ云ナルヘシ〕

漢人黑〔異本累に作〕之後也〔後也同上〕

鋺師(マリシ)公〔鋺和名抄加奈万利金椀也〕

高麗國寶輪王〔異本王字なし〕之後也〔後也同上〕

位下私眞綱河内國人少初位上私吉備人等六人賜ニ姓會賀臣一」
天穗日命之後也〔後也同上〕
宍太〔印本犬に作異本大に作續紀の文によりて改む〕村主〔宍太注レ前○續紀延曆六年七月近江國坂田郡人大初位下宍太村主眞廣等改ニ本姓一賜ニ志賀忌寸一〔注レ前〕
曹氏寶德公〔曹氏寶德魂武帝之後平武帝姓曹諱操字孟德〕之後也〔後也同上〕
村主（スクリ）
漢師建王（セシヒト）之後也〔後也同上〕
國背宍人
秦始皇帝之後也〔後也同上〕
物集（モツメ）〔和名抄山城國乙訓郡毛都女○後紀弘仁六年六月山城國乙訓郡物集國背兩鄕雷風○續後紀承和元年二月山城國葛野郡人物集廣永云々等賜ニ姓秦忌寸一〕
始皇帝〔異本同帝に作〕九世孫〔異本なし〕竹〔異本竺に作〕支〔異本文又達に作〕王〔異本日に作〕之後也〔後也同上〕

木〔異本大に作〕勝
津留木之後也〔後也同上○百木云拾芥抄勝ノ條ニ木アリキノカツト訓ヘシ又按ニ山城國百濟ニ末使主及木曰佐共ニ津田牙使主之後也ト有此所ノ木勝ト木曰佐トノ木據アリ又津留木ト津留牙ト相通フ又津留木ノ木ハ牙ヲ誤リタル歟何レニマレ一ツ祖ト聞ユル也信友云此說ニヨリテ按フニ末使主木曰佐ト相ナラヒテ同祖ニ記セルヲオモヘハ末使主ノ末ハ木ノ誤ニテ木使主ナランカ〕
廣幡公（ヒロハタ）〔公字元なし一本を以て補ふ○續紀天平廿年十月廣幡牛養賜ニ秦姓一〕
百濟國津王之後也〔後也同上〕

大和國

葦田首（アシ）〔山城國神別菅田首同祖〔菅田大和國添下郡葦田應レ有ニ葛城一〕○葦田古事記履中段見ニ葦田宿禰一按葛城五處屯倉之中應レ有ニ葦田地名一○諸陵式ニ片岡ノ葦田墓在ニ大和國葛下郡一トアリ古今集ヨリ後ノ歌ニ片岡ノ朝原（アシタノ）トヨメル處ナリ
天麻比止津乃命（マヒトツノ）之後也〔後也同上〕
波多祝〔式大和國高市郡波多神社〕

門一有レ人名ニ伊都々比古(イツヽヒコト)一謂レ臣曰吾是國王也除レ吾
復無ニ二王一勿レ往ニ他處ニ〔一本地に作〕臣察ニ其爲一
レ人知レ非レ王也卽更還不レ知ニ道路一留ニ連島浦一以
〔異本以字なく海北字あり〕廻經ニ出雲國一至ニ此國一
也是時會ニ天皇崩一便〔異本使に作〕留仕ニ活目入彥
五十狹茅天皇一〔謚垂仁〕詔〔異本活目云々なく垂仁
天皇に作○詔一本謚に作誤なるへし〕曰汝速去〔異
本速來に作〕者得レ仕ニ先皇一是以改ニ汝本國名一追ニ
〔印本遂に作一本に依て改〕負御間城皇(ミマ)〔異本等に
作〕號一曰ニ彌麻奈一因給〔一本織字あり〕レ絹卽還ニ本
鄕一是改ニ國号一之緣也

山城國

物部首〔首印本門に作一本によりて改又一本間に作
百木云按ニ物部間ハ異本ニ首トアレハ物部首ナル
ヘシ又一本ニ間ヲ門トカケリ是ニヨリテ思フニ物
部聞ヲ誤タルカ雄畧紀十八年ニ筑紫聞物部傳フカ
見エタリ但聞ノ字ノ置サマハタカヘリ猶可考筑紫
ノ聞ハ和名抄ニ豐前國企救郡令義解ニハ規矩ノ郡
トアリ万葉集ニハ豐國ノ聞之長濱トミエタリ○拾
芥抄阿祇奈君ノ條ニ物部間トアリ○注ニ神別河內
國物部首一〕
神饒速日命之後也〔後也同上〕

春日部村主〔主印本寸に作一本に依て改○續紀天平
神護二年十二月因幡國博士少初位上春日戶村主人
足獻ニ錢百万因幡國稻一万束一授ニ其父從六位下大
田外從五位下人足從六位下一○續後紀承和十四年
八月越前國丹生郡人春日部雄繼等刊ニ部字一爲ニ春
日臣一兼除ニ邊籍一貫ニ左京一○春日大和國添上郡加
須加○左京皇別下大春日朝臣號ニ糟垣臣一後改ニ春
日臣一〕
津速魂命(ツハヤムスヒノ)三世孫大田〔異本日に作〕諸命〔三世以下
印本なし一本を以て補ふ〕之後也〔後也同上〕

大辟(オホサケ)〔神名式山城國葛野郡大酒神社注曰元名大辟神
云々〕
同命〔異本津速魂命に作〕之後也〔後也同上〕

山代直(ヤマシロノ)〔天孫本紀火明命九世命玉勝山代根古命〔山代
水主雀神速云々等祖〕
火明命之後也〔後也同上〕

惠〔異本慧に作〕我〔陵式河內國志紀郡惠我長野○和
名抄長野鄕同○續紀天平神護二年二月右京人從六

狹木之寺間陵ニ〇菅原之御立野狹城之盾列等相近廟陵紀曰狹城在ニ奈良西超昇寺戌亥ニ盾列藥師寺其跡也〇豆良用ニ寺字ニ〇續紀和銅七年六月寺人姓本物部族也庚午年（天智九年）籍因ニ居地名ニ號ニ寺人ニ〕

百濟國主意里都〔意里都未レ考〕解四世孫秦羅君之後也〔異本後者不レ見に作下同〕

堅祖氏〔堅祖氏用ニ字音ニ〕

百濟國人堅祖爲智之後也〔後也同上〇此一段異本なし〕

古氏〔古氏用ニ字音ニ〕

百濟國人杵牽〔杵牽右京下中野造杵牽云々之後也〕玖君〔異本古都助に作〕之後也〔後也同上〇此一段異本なし〕

加羅氏〔續紀天平寶字二年十月美濃國席田郡大領外正七位上子人中衛無位吾志等言子人等六位祖父午留和斯知自ニ賀羅國ニ慕レ化來朝當時未レ練ニ風俗ニ不著ニ姓字ニ望隨ニ國號ニ蒙ニ賜姓字ニ賜ニ姓賀羅造ニ〕

百濟國人〔異本同國人に作〕都玖君之後也〔後也同上〇此一段元なし一本を以補ふ〕

吳氏

百濟國人〔異本同國人に作〕德〔異本從に作〕縴〔異本牽に作〕吳伎側〔異本州又刾に作〕之後也〔後也同上〇下文河内國豐村造ハ百濟國人德牽云々トアリ〕

朝明史〔和名抄伊勢朝明（阿佐介）〕

高麗帶方國主氏韓法史之後也〔後也同上〕

後部高

高麗國人〔異本同國人に作〕後部乙牟之後也〔後也同上〕

三間名公〔改ニ國號ニ之傳文與ニ垂仁紀ニ允合也紀文別有ニ黄牛直授白石及比賣語曾社神之傳記ニ〇注ニ左京下任那道田連ニ〇任那在ニ雞林西南ニ按朝鮮國帳今度尙道東西海邊卽大加羅國也〕

彌麻奈國主牟留〔異本留字なし〕知〔異本智に作〕王之後也〔後也同上〕初御間城入彦五十瓊殖天皇〔謚崇神〕〇異本御間城云々なく崇神天皇に作〕御世額有レ角人乘〔一本埀に作〕レ船泊ニ于越國笥飯浦ニ遣レ人問ニ〔異本曰字あり〕何國人ニ也對曰意富加羅國王子名都努我阿羅斯等〔異本亦字あり〕阿利此〔異本比に作〕智干岐傳聞日本國有レ聖歸化到ニ于穴

二田物部(フツタ)〔泉州志三和泉國二田村按に田氏の居地か〕神饒速日命天降之時〔異本同神に作〕從者二田天物部之〔之字元なし異本によりて補〕後也〔同上〕

物部(モノヘ)〔天孫本紀伊香我色雄命子七世孫弟大新河命垂仁天皇御世給ニ物部連公姓ヲ弟十市根命同御世給ニ物部連公姓ヲ也後孫因ニ物部ニ注ニ左京神別ニ〕神饒速日命〔異本同神に作〕六世孫伊賀我色雄命之後也〔同上〕

大(オホ)〔異本天に作〕辛(カラ)〔大辛式河内國辛國神社同地乎〕天押立命〔河内國神別促直高御魂命孫也〕四世孫劔〔印本珀に作今一本に從ふ 異本には朝に作又玥又玥に作〕根命〔高魂命五世孫葛城直祖○天孫本紀曰葛城土神劔根命女加奈良知姫此姫爲ニ饒速日命孫天忍男命之妻ト生ニ二男一女ニ〕之後也〔同上〕

凡海連(オシアマ)〔天孫本紀火明命十世孫淡夜別命大海部直等祖○天武紀十三年十二月凡海連賜レ姓曰ニ宿禰ニ〕火明命之後也〔同上〕

高向村主(タカムコ)〔右京下 高向村主魏武帝太子文帝後也○高向繼體紀越前國邑名和名抄坂井郡高向〔多加無古〕○繼體天皇之御母振媛ノ御在所ナリ〕

呉國人小君王之後也〔異本後不見に作下同〕

志賀穴太(シカアナホ)〔印本大に作異本によりて改一本突に作は蓋二字を一字に誤れるなるへし〕村主〔志賀穴太古事記成務段近淡海之志賀高穴穗宮同地○續紀延暦六年七月近江國坂田郡人大初位下穴太村主眞廣改ニ本姓ヲ賜ニ志賀忌寸ヲ○下文穴太村主宜ニ考合ス〕

後漢孝獻帝〔按史陳留王名協九歳立是爲ニ孝獻帝ト曹操爲レ政帝二十五年而魏代レ漢以レ帝爲ニ山陽公ト○山陽公之後當宗忌寸是也〕男美波夜王之後也〔同上〕

筆氏(フデ)

燕相國衞滿〔印本滿に作異本に據て改〕公〔衞滿公注ニ朝鮮圖下ニ〕之後也

善作レ筆預ニ於士〔印本十一に作異本に依て改〕流ト因レ玆賜ニ筆姓ヲ〔燕衞滿漢惠帝之世入ニ朝鮮國ト衞滿三世石渠西漢五世孝獻帝元封三年朝鮮降ニ於漢ニ〕

亘〔異本なし〕良公〔按に亘佐省字と云說あれと亘氏同字にて省字にはあらす○亘良地名大和國添下郡佐紀鄕中○古事記垂仁段大后比婆須比賣命者葬ニ

中臣臣
觀松彥香殖稻天皇〔諡孝照〕〔○異本昭に作〕皇子〔異本觀より諡に至九字なく孝照天皇皇子に作〕天足彥國押人命七世孫〔異本銜又一本甕字あり〕着大使主之後〔異本者字あり〕不見〔一本後也に作〕

中臣栗原連〔續紀天應元年七月右京人正六位上紫原勝子公言子公等之先祖伊賀都臣是中臣遠祖天御中主命二十世之孫意美佐夜麻之子也伊賀都臣神功皇后御世使二於百濟一便娶二彼土女一生二二男一名二日本大臣一大臣遙尋二本系一歸二於聖朝一時賜二美濃國不破郡紫原地一以居焉其後因レ居名レ氏遂負二柴原勝姓一伏乞蒙二賜中臣栗原連一於レ是子公等男女十八人依レ請改賜○栗原和名抄美濃國不破郡也〕
天兒屋根〔異本根ニと書るは衍文〕命七〔異本十又十一に作〕世孫雷大臣之後也〔異本後者不見に作下同〕

大鹿首
津速魂命三世孫天兒屋根命之後也〔同上〕

尋來津首〔尋來津雄略紀倭國吾礪廣津〔廣津此云二比盧支頭一〕

神饒速日命三世孫伊香我色雄命之後也〔同上○左京神別上阿刀宿禰伊香色雄命之後也攝津國阿刀連神饒速日命之後也○天孫本紀速日命兒宇麻志麻治命子味饒田命〔阿刀連等祖〕〕

原造〔信友按峴度造カ原ハ峴カ現ヲ誤リ度ヲ造ト誤リタル本ニヨリテ今一ツ實ノ字ヲ衍字トシテ削リタルナルヘシ○按誤字難レ解天神本紀〔天押穗耳尊天降之時〕見二物部造等祖天津麻良峴〔作レ島誤〕度物部一○按原誤二麻良一現度造誤二峴度物部一乎〕
神饒速日命〔異本同神に作〕天降之時從〔異本滋に作〕者天物部現〔異本峴に作〕度造〔造は物部の誤なるへし○一本峴度天物部につくる〕之後也〔同上○信友按二次ナル坂田物部二田物部ノ注ノ例ニヨルニ舊ハ如レ此アリシカ下上ニ誤リ標タル姓ニ引レテ造ノ字ヲサカシラニ加ヘタルナルヘシ上標ニ云フト併セ考フヘシ〕

坂戸物部〔舊事記三〔天降五部造〕見二坂部造及二田物部一○下ノ三姓天孫本紀ニシタガフヘシ〕
神饒速日命天降之時〔異本同神に作〕從者坂戸天物部之〔之字元なし異本によりて補〕後也〔同上〕

物集連〔山城國乙訓郡物集（毛豆女）後紀弘仁六年六月見二乙訓郡物集一○續後紀承和元年二月山城國葛野郡人從八位上物集廣永同姓豐守等賜二秦忌寸一（秦忌寸注ニ左京上秦始皇後一也）始皇帝九世孫笠〔異本竺に作〕達王之後也〔也異本者不見に作下同〕

百濟氏

百濟國牟利加佐王之後也〔同上〕

朝戸

百濟〔異本同に作下同〕國人智〔印本智に作字典を攷るにみえす今一本に從ふ〕廣使主朝臣〔異本戸に作〕之後也〔同上〕

足奈

百濟〔同上〕國人從七位下足奈眞已之後也〔同上〕

後部高〔高一本樂に作○後部諸蕃後部有レ四各高麗人之後應レ訓二志利止利倍志牟杼利倍一○議採レ裾也裾和名伎沼乃之利○越前國丹生郡從省（之止無）○通鑒古注曰公服從省服也左傳云從二其省一（高多可也○續紀天平寶字二年高麗使主淨日等五人給二多可連〕

高麗國人正六位上〔元上字なし和學所本によりて補〕後部高千〔異本子に作〕金之後也〔同上○左京下見二高麗國人高助斤高金藏高道士高福裕等一高千金其族乎續紀六見三授刀舍人狛造千金賜二大狛連一たるは同人なるへし〕

右京

酒人小川眞人〔皇別酒人眞人同祖○繼體紀根王女廣媛生二二男一男曰二菟皇子一是酒人公之先也少曰二中皇子一是坂田公之先也（皇別見二坂田酒人眞人一）〕男太跡天皇諡〔異本以上六字なし〕繼體〔異本天皇字あり又一本繼體小字に書す〕皇子菟王之後也〔同上〕

成相眞人〔和名抄出羽國秋田郡成相鄕又讃岐國香川郡成相（奈良比）鄕アリ○成相陵式大和國廣瀨郡續紀文武四年八月記二成會山陵一〕

停中倉太珠敷天皇〔諡○以上九字一本なし〕敏達〔○異本天皇の字あり又敏達一本孝照に作は誤也〕皇子難波王之〔印本之字なし一本を以て補〕後也〔同上○敏達紀春日臣仲君女老女君夫人生三二男一女一其一曰二難波皇子一〕

泉國山田造ニ一百十九〔今本を算ふるに一百十七氏なれは九は誤なり〕氏

左京

茨田眞人〔古事記敏達段曰天皇娶ニ春日中若子之女老女子郎女一生ニ御子大俣王一〇敏達紀四年夫人春日臣仲君女曰ニ老女君夫人一（更名薬君娘也）生ニ大派皇子一〇河内國茨田（萬年多）〇仁德紀茨田堤渟〔元停一本に據改〕中倉太珠敷天皇〔謚〇上文九字一本なし〕敏達〔〇異本天皇字あり〕孫大俣王之後也〔也異本者未詳に作〕

御原眞人〔古事記應神段御子阿波知能三原郎女反正紀天皇始生ニ於淡路宮一（是同地ナリ）〇敏達紀息長眞手王女廣姫生ニ押坂彦人大兄皇子一（更名麻呂古古事記同）〇淡路國三原郡（美波良）〕渟〔同上〕中倉太珠敷〔謚敏達〇此文異本同天皇に作〕皇子彥〔異本人字あり〕大兄王之〔印本之字なし一本を以て補〕後也

葛野臣〔山城國葛野郡（加度乃）〇古事記應神段望ニ葛野一歌曰加豆怒〇又孝元段御子布都押之信命娶ニ葛城之高千那毗賣一生ニ子味內宿禰一（此者山代內臣之祖也）〕〇應神紀九年以歐ニ仆甘美內宿禰一遂欲レ殺矣天皇勅之令レ釋仍賜ニ紀伊直等之祖一也〇按雖レ無ニ子孫之傳說一而宇知葛野有ニ于山城國一可ニ准知一也〕大倭根子彥國牽天皇〔謚〇以上十字一本なし〕孝元〔〇元異本德に作又一本天皇字あり〕皇子彥布都〔印本部に作一本に據て改〕意斯〔布都意斯太押河內國丹比郡布忍鄕後爲レ氏〕麻己止命之後也

池上〔異本原に作〕掠人〔大和國十市郡池上用明記池邊雙槻宮者同地〇陵式池上陵添下郡也〇拾芥抄池上掠人アリ〕渟〔元停一本に據改〕中倉太珠敷天皇〔謚〇以上九字異本なし〕敏達孫〔一本敏達天皇ニ子に作〕百濟王〔百濟王未レ考〕之後也

忍坂連〔大和國城上郡忍坂（於佐加）〕火明命之後〔異本者不詳字あり〕也

野實〔異本寶に作〕連〔拾芥抄訓ノミ〇野實式攝津國野見神社三河國野見神社又訓ニ乃志呂一有レ例出雲國野白布自奈神社等大穴持神也〕大〔印本太に作異本に據て改〕穴牟遲命之後〔異本者不見字あり〕也

百濟國人百千〔異本千又手に作〕之後也
取石造〔取石續紀神龜元年十月聖武天皇幸ニ玉津島ニ之時至ニ和泉國取石頓宮ニ○按今信太郷取石池同地〕
出レ自ニ百濟〔異本同に作〕國人阿〔印本阿字なし一本を以て補〕麻意彌ニ〔異本之後二字あり〕也
葦屋村主〔葦屋攝津國驛家葢葦屋漢人移ニ居于和泉國ニ乎〕
出レ自〔印本自字なし一本に據て補〕百濟國〔印本國字なし古本に據て補○一本此下に人の字有又一本出百濟を同國人に作〕意〔傍注云一作レ阿○百木云此阿字は上文ノ人麻ノ間ニ補タル字ノコ、ニ譏入セルナリ〕寶荷羅支王ニ〔異本之後二字あり〕也
村主
葦屋村主同祖太〔異本大に作〕根使主之後也
衣縫〔應神紀十四年三月百濟王貢ニ縫衣二人ニ是亦來目衣縫之始祖也雄畧紀十四年呉國使獻ニ手末才伎漢織呉織及衣縫兄媛弟媛等ニ大三輪神以ニ弟媛ニ爲ニ伎衣縫部ニ漢織呉織衣縫是飛鳥衣縫部伊勢衣縫部之先也○和泉志日根郡岡田村稱ニ呉服神ニアリ〕

出レ自ニ〔異本なし〕百濟國神露〔異本靈に作〕命ニ〔異本之後二字あり〕也
新羅
日根造〔和名抄和泉國日根（比禰）○式日根神社○允恭紀八年天皇興ニ造宮室於河内國茅渟ニ而衣通郎女令レ居因之屢遊ニ獵于日根野ニ（日根有ニ茅渟縣ニ也）○雄畧紀十四年根使主至ニ於日根ニ造ニ稻城ニ（日根各同地）○凡因レ地賜レ氏其地名義注ニ國號考ニ○後和泉國風土記日根郡條云々古老傳云神倭磐余彦天皇東征之時皇師至ニ此處ニ止三日而後至ニ山城國ニ給其時彦五瀨命詔老ニ褰道路ニ故今云ニ日根ニ〕
出レ自〔異本なし〕新羅國人億斯〔異本勘に作〕富使主ニ〔異本之後の字あり〕也

右第二十九卷

未定雜姓〔此四字印本俟後賢の次にあり異本によりてこゝに書す〕
勘ニ尋氏姓職田本系ニ而此等姓祖違ニ古記ニ事漏ニ舊典ニ雅〔異本雖に作〕加ニ研究ニ自然〔究自然異本竅稽に作〕所レ不レ及故集爲ニ別卷ニ號ニ〔異本曰に作〕未定ニ附ニ之於末ニ以俟ニ後賢ニ起ニ左京茨田眞人ニ盡ニ和

田薬師又同姓安遊寺賜ニ姓深根宿禰ニ百濟國人也○續後紀仁安元年九月不レ發下奉ニ伊勢大神官幣ニ使上以下典藥大屬蜂田峯範死穢未占滿ニ三十日ニ也

出レ自〔異本なし〕呉主孫權〔元擁に作異本に據て改〕王〔異本之後字あり○呉主孫權按史父長沙太守富春孫堅子呉王孫權自稱ニ皇帝ニ呉王殂子亮立次亮庶兄瑯瑘王休立休殂諡曰ニ景皇帝ニ次兄孫和子烏程侯皓立晉伐レ呉降四世五十二年而亡〕也

蜂〔異本額又蟬に作〕田薬師〔一本額田部瑕王に作〕

出レ自ニ〔異本なし〕呉國〔一本國字連書す〕人都久爾理久爾ニ〔異本之後の二字あり〕也〔古記〔古記ニ一本又に作〕云怒〔一本努に作〕久利○古記以下印本本文に書す一本に據てかくのごとく改〕

凡(ヲシ)人中家〔泉州志云凡人中家ハ在ニ北庄東野ニ俗曰祖父上式云凡人中家氏之古跡也トアリテ此姓ヲ引リ〕

山城忌寸同祖百〔異本白に作〕龍王之後也

百濟

百濟公〔百濟和名抄攝津國百濟(久太良)○泉州志云大鳥郡百濟村ハ續紀承和六年八月改ニ加賀國人正六位上百濟公豐貞本居ニ貫ニ附左京四條三坊ニ豐貞之先百濟國人也庚午年被レ貫ニ河内國大鳥郡ニ以ニ乙未年ニ被レ貫加賀國江沼郡ニ余按庚午年者天智天皇九年也此時和泉國未レ分故曰河内國大鳥郡也トアリテ此姓ヲ引リナホ左京下百濟公考合ヘシ〕

出レ自ニ〔異本なし〕百濟國酒王〔異本主に作○酒王仁德紀四十一年見ニ百濟王之孫酒(キミ)君來ニ〕之後ニ〔異本なし〕也

六人部(ムトヘ)連〔上六人部注ニ右京神別下六人部ニ〕

百濟公同祖酒王之後也〔此文異本同上に作〕

錦部(ニシコリ)連〔和名抄若江郡錦部(爾之古利)○河内國錦部郡錦部連同〕

三善宿禰同祖〔右京下三善宿禰百濟國速古王之後也速古王欽明紀見ニ聖明王之祖ニ〕

信太(シタ)〔異本田に作〕首〔信太和名抄和泉國和泉郡信太(臣太)○万葉集ニ小竹(シヌ)田ト書リ和名抄ニ臣太トアルハ當時ノ音訛ノマヽニ注セルナリ信ヲシヌニ用ヒタルハ讃ヲサヌニ用タルコトクンテヌニ用タリシ格也サテ信太ヲ今ハシノタト呼テ篠田トモカケリ唱モ字モ叶ヘリ〕

漢

秦忌寸〔注ニ左京上一○式和泉國日根郡波太神社〕

太秦公宿禰同祖融通王之後也

秦勝〔續後紀承和四年九月攝津國人右衞門督師辟秦直身武散位同姓仲主等三烟改ニ本姓一賜ニ秦勝一○和泉志泉南郡半田（舊作レ秦）村云へり〕

同祖〔異本なし〕

古志連〔河內國高志連同〕

文宿禰同祖王仁〔王仁（和邇吉師）注ニ左京上文宿禰一〕之後也

池邊直〔池血沼池依羅池等乎〕

坂上大宿禰同祖阿智王〔阿智王注ニ右京上大宿禰一〕之後也

火撫直〔河內國火撫直同○火訓レ比○式近江國日撫神社〕

後漢靈帝三〔印本四に作左京上木津忌寸及尊卑分脉續紀又河內國火撫直みな三に作に據て改〕世孫阿智王之後也

栗〔印本賈に作一本に據て改〕栖直〔式河內國若江郡栗栖神社〕

火撫直同祖阿智王之後也〔此文異本同上に作〕

楊隻〔異本公に作〕直〔異本楊公史直に作○文武紀四年八月乙丑勅ニ僧通德惠俊一並還俗代度各一人賜ニ通德姓陽侯史名久爾曾一○左京上揚公忌寸陽胡史〔同注〕○按史隋高祖文帝（姓揚氏名堅在位二十年）大子立是爲ニ煬帝一（煬音陽名廣）大業七年帝自擊ニ高麗帝ニ至ニ遼東一攻レ城不レ克敗而還明年帝又伐ニ高麗一請レ降帝還ニ長安一大業十二年帝在ニ江都一煬帝之孫唐公李淵立是爲ニ恭皇帝一禪ニ于唐一隋王世凡三十七年而亡按公族奔ニ高麗乎楊公忌寸之祖一自ニ高麗一來朝〕

楊隻〔異本公又候に作〕忌寸同祖達率楊公阿了〔前文子に作〕王〔異本なし〕之後也

上村主

廣阿〔異本階に作〕連同祖阿王之後也〔阿以下五字一本なし又一本阿下祖字あり○左京上上村主陳思王之後也○陳思王者文選注曰曹植字子建魏武帝第三子也初封ニ東阿王一後改封ニ雍丘王一謚曰レ思〕

蜂田藥師〔蜂田和名抄和泉國大鳥郎蜂田（波知田）○式同郡蜂田神社○續後紀承和元年六月和泉國人蜂

百濟國末多〔異本多婁に作〕王之後也〔按雄略記比有王男蓋鹵王雄略廿年沒其弟混支王號ニ軍君ト仕ニ日本蓋鹵王ト母弟汶淵王雄略廿三年薨混支王五子中第二也末多王是爲ニ東城王ニ〕

古市村主

出レ自ニ百濟席〔一本虎に作〕王ニ也〔一本同國虎王之後也に作○按東國通鑑無ニ虎王ニ恐虎字傳寫之誤〕上曰〔元日に作一本に據て改〕佐〔上和名抄大縣郡加美濊川郡賀美同地○百濟國譯語人等住ニ于茲ニ乎〕

出レ自ニ百濟國〔異本同國に作又一本國字なし〕人久〔異本反に作〕尒能古使主ニ〔異本之後字あり〕也〔久爾能古使主ノ久尒ハ未定雜姓船子首ニ云ヘリ〕

高麗

大狛〔異本狗に作〕連〔天武紀十年四月大狛造百枝足禰賜レ姓曰レ連又十二年九月大狛造賜レ姓曰レ連○續紀靈龜元年七月狛造千金改賜ニ大狛連ニ○式大縣郡大狛神社和名抄同郡巨麻〕

出レ自ニ〔異本なし〕高麗國人伊利斯沙禮斯ニ〔異本之後字あり〕也〔仁賢紀六年日鷹吉士還レ自ニ高麗ニ獻ニ工匠須流枳奴流枳等ニ今倭國山邊郡額田邑熟皮高麗是其後也○伊利斯沙禮斯與ニ須流枳奴流枳ニ音相似〕

大狛連

出レ自ニ高麗〔此文異本同國に作〕溢士福貴王ニ〔異本之後字あり〕也

島木〔一本本に作○注ニ右京下島岐史ニ〕

高麗國〔異本同國人に作〕伊理和須使王之後也

新羅

伏丸〔伏丸未レ考○拾芥抄阿祇奈君條ニ伏丸〔又無尸〕トアリ○百木云伏丸ノ丸ハ凡ノ誤ニテフセノオフシト訓カフセ云フ地名ハ諸國ニ多シ又或人ハ伏丸ハフカフト訓カトイヘリ〕

出レ自ニ〔異本なし〕新羅國人燕怒〔一本努に作又一本なし〕利尺子ニ〔異本天子に作○異本之後字あり○尺子疑誤ニ使主ニ也○古事記仁德段見ニ韓人奴理能美ニ注ニ左京下調連及攝津國水海連ニ〕也

右第二十八卷

和泉國諸蕃

起ニ秦忌寸ニ〔印本寸字なし一本を以て補ふ〕盡ニ〔元干有前後の文なきに據て削〕日根造ニ二十氏

作又背古を背古に作本もあり〕王之〔印本之字なし一本を以て補〕後也

依羅（ヨサミ）〔異本四綱に作又一本連の字あり〕

出レ自二〔異本なし〕百濟國人〔國人異本なし〕素〔古本索に作〕禰〔異本彌に作〕志夜麻美乃君一〔異本之後字あり〕也

山河連（ヤマカハ）〔山河也末加和名抄河内國讃良郡山家郷是乎○續紀河内國志紀郡人山河造魚足等九人賜ニ姓山河連一○百木云山河ト山家ト一ツニ云ルハ如何山家ハ元ヤマノヘニテ山部山邊共ニ訓同シ然ルヲ桓武天皇ノ御名ヲ憚テ後ニヤマカヤマイヘヤマンヘナト訓リ〕

依羅連同祖素禰〔一本彌に作〕志夜麻乃君〔君字元なし一本に據て補ふ〕之〔一本に依て補〕後也〔此文異本同上に作〕

岡原連（タカハラ）

出レ自二百濟〔此文異本同に作又一本出自字なし〕國辰斯王子知宗一〔異本之後字あり〕也

林連（ハヤシ）

出レ自二百濟〔異本同に作〕國直〔異本臏に作〕支王一〔一本之後字あり〕也〔也字一本に依て補○註云又云周王○異本古記云に作又文云に作又周王文周王に作〕

呉服造（クレハトリ）〔呉織見ニ應神紀卅七年雄略紀十四年ニ注ニ和泉國衣縫ニ〕

出レ自二百濟〔異本同に作〕國人〔人異本なし〕阿漏〔異本河滿に作〕史一〔異本之後字あり〕也〔按に下文取石造阿滿意彌之後也トアリ同人歟〕

宇努造（ウヌ）〔宇努欽明紀河内國更荒郡鸕鷀野邑持統紀鸕野讃良皇女天皇少名（各同地名）〕

宇努首同祖百濟〔古本此文同國に作〕人你〔古本彌又禰に作〕郡〔一本那に作又一本なし〕子富意徐〔異本彌に作〕之後也〔大和國宇努首百濟國君（一本男）彌奈曾富意彌之後也〕

飛鳥戸造（アスカヘ）〔注ニ右京下飛鳥戸造ニ〕

出レ自二百濟〔異本同に作〕國主〔異本王に作〕比有王男琨伎〔異本混使に作〕王一〔異本之後字あり〕也

飛鳥戸造〔飛鳥戸雄略紀九年七月河內國飛鳥戸郡人田邊史伯孫女者古市郡書首加龍之妻也○和名抄河內國安宿（安須加倍）式安宿郡飛鳥戸神社〕

金トアル伯尼（ハクネ）ナリ〕
出レ自二〔異本なし〕西漢人伯尼姓光金一〔異本之後字あり〕也
百濟〔河内志交野郡條云百濟王廟在二中宮村一又云百濟王故居在二同村一延暦二年帝遊二獵交野一百濟王等供二奉行在所一者利善武鏡爾德玄鏡明眞善進レ階加レ爵西宮記曰以二百濟王一爲二交野撿校一其族多居二于此一云々又云百濟廢寺在二同村百濟王祠廟域内一礎石尙在延暦二年帝遊獵施二百濟寺五千束一卽此〕
水海連〔續紀天平神護二年七月外從五位下水海毗登淸成等五人賜二姓水海連一〕
出レ自二〔異本なし〕百濟國人努理使主〔使主異本王に作〇一本之後字あり〇奴理使主見二古事記仁德段一注二左京下調連一〕也
調曰佐（ツキノヲサ）
水海連同祖〔異本此文同上に作〕
河内連〔天武紀十年四月川内直縣賜レ姓曰レ連〇河内名義注二國號考一〇欽明紀見三百濟本紀曰二河内直移那斯痲都一〕
出レ自二百濟國都慕〔異本暮に作〕王〔都慕王注二右京下菅野朝臣一〕男陰太貴首王一也
佐良〔古本佐良々に作〕連〔和名抄河内國讃良〔佐良良〕〇河内國皇別早良臣〇天武紀十二年十月安羅羅馬飼造賜レ姓曰レ連〇欽明紀廿三年見二河内國更荒郡鸕鷀野邑新羅人之先也一〇法隆寺文書河内國更浦郡云々〕
出レ自二百濟〔此文異本同に作〕國人久末〔異本米に作〕都彦一〔異本之後字あり〕也
錦部（ニシキベ）連〔和泉國錦部連同〇錦部和名抄河内國爾之古利〇天武紀十年四月錦織造小分賜レ姓曰レ連〇續紀天平神護元年十二月河内國錦部郡人從八位上錦部毗登石次錦部毗登大島云々廿六人賜二姓錦部連一〇三代實錄貞觀九年四月改賜二惟良宿禰一〇信友按ニ標ニ記ス注ノ續紀ニ錦部毗登トアル毗登ハ尸ニテニシコリヒト、ツ、ケテ唱タルナルヘシ漢人掠人凡人狛人秦人ナトカ、ル類イト多シマヒトオヒトナト云尸ノ出來ルモ、ト姓ニ某人トツ、ケテ唱タルコトノアリシヨリ出タルナルヘシ〕
三善宿禰〔右京下三善宿禰百濟國速古大王之後也〕
同祖百濟國速古大〔異本近肖古に作又一本速古に

春井連

下村主同祖後漢光武帝七世孫愼近〔異本延に作〕王之後也

河内造〔一本連に作〕

春井連同祖愼近王之後也〔異本同上に作〕

武丘史

春井連同祖愼近王之後也〔同上〕

當宗忌寸〔式河内國志紀郡當宗神社〇左京上當宗忌寸同祖〕

出レ自二〔異本なし〕後漢獻〔異本孝獻に作〕帝四世孫山陽公之〔印本之字なし一本に據て補〕後一也〔後漢獻帝按史孝靈帝在位二十二年崩陳思王立是爲二孝獻皇帝一名協曹操爲レ政曹操以二子丕一爲レ王太子卒丕逐迫レ帝禪レ位以レ帝爲二山陽公一〕

交〔一本永に作〕野忌寸〔和名抄河内國交野（加多乃）〇式片野神社（同地）〕

出レ自二〔異本なし〕漢人庄員一〔一本庄貞に作〇異本之後一二字有後一本孫につくる〕也

廣原忌寸

出レ自二〔異本なし〕後漢孝獻帝男都〔異本孝に作〕德王一〔異本之後字あり〕也

刑部〔一本造字あり〇天武紀十二年九月刑部造賜レ姓曰レ連〇和名抄河内國若江郡刑部遠江國引佐郡刑部訓於佐加倍〇允恭紀爲二忍坂大中姫皇后一定二刑部一〕

出レ自二〔異本なし〕吳國人李牟意禰一〔異本彌に作一本之後字あり〕也

茨田勝〔和名抄河内國茨田（万牟多）〕

出レ自二〔異本なし〕吳國王孫皓〔吳國王孫皓按史其先長沙王孫堅子吳王孫權自稱二皇帝一子亮立次亮庶兄瑯琊王休立次兄孫和子鳥程侯皓立晋伐レ吳吳王皓降四世稱レ帝者凡五十二年而亡〕之後意富加牟〔牟異本なし〕三招〔一本枳に作〕君一〔異本之後字あり〕也大鷦鷯天皇御世〔百木云或本ニ天皇（諡仁德）御世トアリ此本ニ從ヒテ天皇ノ上ニ御名ヲ補フヘシ〕賜二居地於茨田邑一因爲二茨田勝一也〔也異本なし〕

伯禰〔伯禰誤二伯孫一乎雄略紀見二河内國飛鳥部郡人田邊伯孫一又按續紀見二和泉監伯姓者一〇拾芥抄阿祇奈君條二伯禰（又無姓）トアリコハ此注ニ伯尼姓光

濟君者同人乎〕

出レ自二〔異本なし〕後漢光武帝〔帝字元なし異本によりて補〕孫章帝之後一〔異本之後字なし〕也〔後漢光武帝按史名秀字文叔長沙定王發之後也生二於南頓一有二嘉禾一莖九穗之瑞一故名在位三十三年壽六十二次太子陽立是爲二孝明帝一在位十八年壽四十八次太子烜立是爲二孝章帝一光武帝之孫也〕

高安造（タカヤス）

八戸史〔史字元なし異本によりて補〕同祖盡達王〔異本王字なし〕之後也

坂〔一本板に作〕茂（モチ）連〔坂一本作レ板非○坂茂和名抄河内國高安郡坂本○百木云拾芥抄連條ニ板茂イタモチト訓アリ河内志石川郡東板持村アリ眞龍ノ坂本ヲ引タルハタカヘリ〕

伊吉連同祖楊雍〔異本羅に作〕之後也〔右京上伊吉連長安人劉家楊雍之後也〕

河内忌寸〔三代實錄元慶七年六月清内宿禰雄行河内國志紀郡人也本姓凡河内忌寸後賜二清内宿禰姓一昔者唐人金信表晉卿二人歸二化本朝一〕

山代（シロ）忌寸〔山代忌寸注二左京上一〕同祖魯國〔異本同に作〕白龍王之後也

火撫（ヒナツ）直〔式近江國坂田郡日撫神社○和泉國火撫直同○按史孝靈帝在位二十二年次陳留王立是爲二孝獻帝一魏曹操爲レ政以二子丕一爲二王太子一遂魏王丕嗣レ位也

後漢靈帝三〔印本四に作左京上木津忌寸及尊卑分脉續紀又和泉國火撫直みな三に作に依て改〕世孫阿知〔異本智に作〕使主之後也〔阿知王者無レ所レ見〕

下曰佐（シモツチサ）〔下和名抄河内郡安宿郡資母○右京上日前村主同祖○曰佐作レ日誤譯語〔訓二表佐一〕〕

出レ自二〔異本なし〕漢高祖〔漢高祖按史姓劉名邦字季沛豐邑中陽里之人也〕男齊悼〔異本悍に作〕惠王肥之後一也

高道（タカミチ）連

同上

常世（トコヨ）連〔注二左京上右京上常世連一式河内國大縣郡常世岐姫神社〕

出レ自二〔異本なし〕燕國〔國異本なし〕王〔同上〕公孫淵一〔異本之後字あり〕也

應神十四年來朝〕之後也

秦公〔異本人に作〕

秦始皇帝孫孝德王之後也

秦姓〔古本公に作 ○續紀天平廿年十月正七位下廣幡牛養賜ニ秦姓ニ〕

秦始皇〔異本同に作〕帝十三世孫然能解公之後也

古〔異本吉に作〕志連〔古志和名抄見ニ越後國古志郡ニ○百木云和泉國諸蕃古志連モ王仁之後也トアリサレハ吉志トアル本ハ誤ナリ

文(アヤ)宿禰同祖王仁〔王仁注ニ左京上文宿禰ニ〕之後也

河原(カハラ)連〔續紀神龜二年七月河內國丹比郡人川原椋人子虫等四十六人賜ニ河原史姓ニ又神護景雲三年九月河內國人河原藏人々成等五人並賜ニ姓河原造ニ○文德實錄齊衡二年八月 河原連 貞雄 等改ニ 姓廣階宿禰ニ〕

廣階〔異本連字あり〕同祖陳思王植之後也〔右京上廣階連魏武皇帝子陳思王植之後也植曹植字子建魏武帝第三子也初封ニ東阿王ニ〕

野上(ノカミ)連〔續紀延曆四年二月近衛將監外 從五位下筑紫史廣島賜ニ姓野上連ニ〕

河原連同祖陳思王植之後也

河原藏人(カハラノクラヒト)〔注ニ攝津國上村主及前文河原連ニ

上村主同祖陳思王植之後也〔異本同上に作〕

河內〔古本原に作〕畫師〔續紀天平 寶字三年 十一月河內畫師祖足等十七人賜ニ姓御杖連ニ○倭畫師同紀神護景雲三年賜ニ姓大岡忌寸ニ○注ニ左京上大岡忌寸ニ魏文帝之後也可ニ考合ニ○河內志八上郡ニ式外金岡神社ハ在ニ金田村ニマタ金岡淵ハ云ニ相傳古畫工所レ居因又有ニ巨勢波奈ニトイヘリ〕

同上〔印本上村主同祖陳思王植之後也に 作異本に據て改〕

八戸(ヤヘ)史〔續後紀承和三年二月八戸史礒益云々賜ニ姓常澄宿禰ニ 其先高麗人也○三代實錄元慶三年十月 河內國高安郡人常澄宿禰河內國撿非違使八戸史野守等云々賜ニ姓高安宿禰ニ先祖後漢光武皇帝孝章皇帝之後也裔孫高安公陽部天萬豐日(孝德)天皇御代立ニ高安郡ニ陽部ニ字與ニ八戸兩字ニ語相涉仍後賜ニ八戸史姓ニ云々承和三年改ニ八戸史ニ賜ニ常澄宿禰ニ望請改ニ八戸常澄兩姓ニ復ニ本姓高安ニ也又元慶五年五月賜ニ高安宿禰ニ○三代實錄高安公陽部孝德紀百

下大山忌寸左京下大石等高陵高穆之後也〕

山田宿禰

魏〔魏上古本出自二字あり〕司空〔古本王字あり〕昶之後〔古本之後字なし〕也〔異本出レ自ニ穆司空王旭ニ也に作〕

山田連〔續紀天平寶字三年十二月外從五位下山田史白金賜ニ姓連ニ〕

山田宿禰同祖〔此文異本同國人に作〕忠意之後也

山田造〔異本連に作○山田和名抄河内國交野郡○右京上山田宿禰宜ニ考合ニ○續紀天平寶字三年十二月山田史廣名賜ニ姓造ニ〕

同上〔異本山田宿禰同祖忠意之後也に作○此一段印本なし一本に據て補ふ〕

長野連〔和名抄河内國志紀郡長野○式同郡長野神社〕

同上〔同上〕

志我〔異本賀に作〕閉連〔註ニ右京上志我閉連ニ〕

山田宿禰同祖王安高男賀佐之後也

三宅史〔三宅推古紀十五年毎レ國置ニ屯倉ニ○和名抄高安交野丹比各有ニ三宅郷ニ○河内志丹比郡三宅廢寺三宅村今有ニ觀音堂一字ニ天平勝寶八年二月帝幸ニ三宅寺ニ即此〕

山田宿禰〔異本なし〕同祖忠意之後也

大里史〔大里和名抄河内國大縣郡大里〕

太秦公宿禰同祖〔此文異本同上又一本同祖に作る〕

秦宿禰〔註ニ左京上大秦公宿禰ニ〕

秦始皇五世孫融通王之後也〔印本此文前段宿禰同祖の下に連書して此には同祖とあり一本に據てかくのごとく改む○融通王〔一名弓月王〕應神十四年來朝○秦始皇〔名政〕二世〔名胡亥〕三世〔公子嬰爲ニ秦王ニ〕而亡按秦公族奔ニ百濟ニ平功滿王融通王等自ニ百濟ニ來朝○續後紀承和十四年三月河內國河内郡人大初位下秦宿禰世智雄賜ニ姓朝原宿禰ニ〕

秦忌寸

秦宿禰同祖融通王之後也

高尾忌寸〔續紀寶龜十一年五月河內國高安郡人大初位下寺淨麻呂賜ニ姓高尾忌寸ニ〕

同上〔印本秦宿禰同祖融通王之後也に作一本に據て改〕

秦人〔右京上秦人攝津國秦人同祖〕

秦忌寸〔異本なし〕同祖弓月王〔弓月王一名融通王

羅造ニ〔于レ時唐國有ニ安祿山之亂一故唐人來朝者數多〕」

豐津造

任那〔任上異本出自二字あり〕國人左李金之後〔亦名佐利已牟○以上六字印本ニ文今一本に據てかくのことく改○異本也牟佐利也又牟佐利也に作○異本之後字なし〕

韓人〔續紀寶龜十一年五月攝津國豐島郡人韓人稻村等一十八人賜ニ姓豐津造一諍訟難レ決又殺ニ吉備韓子ニ〔大日本人娶ニ蕃女一所生爲ニ韓子一〕○三代實錄貞觀九年四月伊賀權目正六位下韓人眞貞賜ニ姓豐瀧宿禰ニ〕

豐津〔古本造字あり〕同祖左李金〔注云亦名佐利〔異本州古本列に作〕已牟〔古本利に作〕○異本此文並に注なく同上に作〕

荒々公〔萬葉一長皇子詠ニ安良羅松原住吉之云々一者任那國安羅人來朝而所レ住故號ニ安良一乎○和名抄攝津國西成郡安良○雜姓〔河內國〕竹原連阿羅々國主云々之後也〕

任那國豐貴王之後也

右第二十七卷〔異本此件文なし〕

河內國諸蕃

起ニ高丘宿禰一盡ニ伏〔異本仗に作〕丸一五十四〔印本六に作今其數を計りて訂す〕氏

漢

高丘宿禰〔續紀神龜元年五月正六位下樂浪河內賜ニ姓高丘連一同紀神護景雲元年三月河內國古市郡高丘連比良麻呂賜ニ姓宿禰一同紀神護景雲二年六月遠江守從四位下高丘宿禰比良麻呂卒其祖沙門詠近江朝歲次癸亥〔天智二年〕自ニ百濟一歸化文學振ニ河內一正五位下大學頭神龜元年改謂ニ高丘連一云々景雲元年賜ニ姓宿禰一

出レ自ニ〔異本なし〕百濟國公族〔族異本なし又一本孫又族につくる〕大〔一本なし〕玄〔一本夫又丈又支に作〕高〔此下異本傍又僂又侯又俟又僕又侅の字あり○挨大玄高一本族大夫高僂に作〕之後陸〔陸異本廣陵に作〕高穆ニ〔異本之後字あり〕也〔異本なし○廣陵唐天寶年間改ニ揚州一爲ニ廣陵郡一今廣東也○一本出レ自ニ百濟國公族大夫高僕之後廣陵高穆一也又一本百濟國公孫大玄高之後陸高穆之後也に作○右京

キカ今決シカタシ又按ニコヽナル桑原史ハ元漢ヨリ出テ高麗ニ移リ居テ後皇國ニ渡來リタレハ高麗部ニ入タルナリ其例ハ右京下百濟部ニ大原史ハ漢人西姓令貴之後也トアリ又左京上及攝津國ノ漢部ニ大原史アリテ漢人西姓令貴ノ後也トアリ共ニ後漢靈帝ノ後ニテヒトツ氏ナリコレラト同シ〕

桑原村主〔一本高麗國人に作〕祖〔祖上異本同字あり又一本祖字なし〕萬德使主之後也〔山城國桑原史狛國人漢胸之後也〕

日置造

鳥井宿禰同祖伊利須王〔王異本使主に作○王トアリタルハ使主トアリタルヲ使ノ字ヲ書漏シタルニヨリテ主字一字ニナリタルヲ又王字ニ寫シアヤマリタルナリ〕之後也〔左京下日置造大和國日置造鳥井宿禰等同祖〕

高安漢人〔和名抄河內國多賀夜須〕

出レ自二〔異本なし〕狛國人小須々一〔異本之後字あり○百木云小須ニハヲス、ト訓ヘシ右京下高安下村主ハ高麗國人大鈴之後也トアリ小須ニハカノ大鈴ノ弟ナトニヤアラム〕也

新羅

三宅連〔右京下三宅連同祖○垂仁紀三年新羅王子天日槍來歸（天日槍之後但馬諸助但馬日猶杵淸彥田道間守也）〔又九十九年田道間守是三宅連之始祖也〕

新羅國王子天日杵命之後也〔印本云滋（一本菅に作）野宿禰同祖田遲麻守之後也注云或說曰以二活目入彥命一爲レ祖とあり○一本云滋野宿禰同祖田遲麻守之後也（或說曰以二活目入彥命一爲レ祖）一本云菅野宿禰祖同祖遲麻守之後也一本云新羅國王子天日杵命之後也（而或說曰以二伊久米入彥命一爲レ祖）按に末一本從ふへきか左京下橘守右京下三宅連大和國絲井連の文に依て本文の如く改○百木云滋野宿禰祖菅野宿禰共ニ此錄中天日杵命後ニハミエスサテ細注ニ或說曰云々爲祖ノ十一字ハ後人ノ加筆也ナホ大和國絲井造考ヘシ〕

任那〔任那垂仁紀意富和羅國人加羅比丘○續紀天平寶字二年十月美濃國席田郡大領言云々自二加羅國一慕レ化來レ朝望隨二國號一蒙二賜姓字一賜二賀羅造一○又云自今以後云々自二賀羅國一慕レ化來レ朝者賜二姓賀

林史
林連同祖〔左京下同之〕百濟國人木貴之後也
爲奈部首〔應神紀卅一年新羅王貢ニ能匠者ニ是猪名部等之始祖也○雄畧紀十三年九月木工猪名部眞根云云歌曰婀㩜羅斯枳偉儺謎能陀倶彌柯核志須彌儺皤旨我那稽摩拖例柯柯該武預婀㩜羅須彌儺皤○和名抄攝津國阿邊郡爲奈伊勢國員辨部爲奈倍〕
出レ自ニ百濟〔此文異本同に作〕國人中〔異本人中ニ字なし又一本中字なし〕津波手〔異本平又牛に作〕之後ニ〔異本之後字なし〕也
牟古首〔和名抄攝津國武庫郡武庫〔無古〕〕
出レ自ニ百濟〔此文異本同に作〕國人片〔異本汙に作〕禮〔異本記一本氾に作〕吉志ニ〔異本之後字あり〕也
原首〔續後紀右京人葛井宿禰石雄云々賜ニ姓蕃良朝臣ニ又承和四年十二月近江國人志賀史常雄錦村主藥麻呂錦部忌寸大坂村主云々賜ニ姓蕃良宿禰ニ○三代實錄貞觀六年八月右京人河内守從五位下蕃良朝臣豐村賜ニ姓菅野朝臣ニ本系出レ自ニ百濟貴須ニ也○原蕃良〕
眞神〔一本直人に作〕宿禰同祖福德〔異本德字なし一本に依て補〕王〔異本之字あり〕後也〔大和國眞神宿禰漢福德王之後也〕
三野造〔和名抄攝津國西成郡三野〕
出レ自ニ〔異本なし〕百濟國人布須〔異本希沃古本希澤に作〕麻乃古意彌ニ〔一本禰に作異本之後字あり〕也
村主〔和泉國葦屋村主同祖○村主雄略紀身狹村主傍訓スクリ○文德實錄齊衡二年八月散位從五位下村主宮雄云々等改ニ姓廣階宿禰ニ云々〕
葦屋〔異本原に作〕村主〔式攝津國驛葦屋○和名抄菟原郡葦屋〕同祖意寶荷羅支〔異本支又與に作〕王之後也
勝〔勝訓ニ加都ニ續紀文武三年正月見ニ桑原加都ニ〕
上勝同祖多利須ニ之後也〔右京下上勝山城國勝同祖〕
高麗
桑原史〔注ニ大和國桑原直ニ○百木云左京上桑原村主ハ漢高祖七世孫萬德使主ノ後也トアリコハ傳ヘアヤマリタルカ書誤レルカ又萬德使主ハ同名異人トシテ高麗國人萬德使主ノ後ナリトアル本ニ從フヘ

井郡從六位上錦曰佐周與蒲生郡人從八位上錦曰佐名吉坂田郡人大初位下穴太村主直廣等並改ニ本姓ー賜ニ志賀忌寸ー○本氏大友有ニ攝津國ー地名也改ニ氏志賀ー者近江國志賀郡也〕

出レ自ニ〔異本なし〕後漢孝〔印本都に作一本に據て改〕獻帝ー〔異本之後字あり〕○獻帝名脇按史孝靈帝崩陳留王立是爲ニ孝獻帝ー九歲魏曹操爲レ政〕也

大(オホ)〔異本志に作〕原(ハラ)史〔左京上大原史同祖〕

漢人〔異本なし〕出レ自ニ〔異本なし〕西姓令〔異本命に作〕貴ニ〔異本の後字あり〕也

上村主(カンノスクリ)〔和名抄攝津國莵原郡〕賀美○左京上ニ村主同祖○右京上廣階連魏武皇帝子陳志王植之後也〔逸史同〕○三代實錄貞觀八年三月左京人左少史正六位上村主八鈎前出雲大目正七位下〔一本上〕村主貞成等賜ニ姓廣階宿禰ー自言魏陳志曹植之後也〕

廣階連同祖陳思王植之後也〔陳思王〔文選注〕曹植字子建魏武帝第三子也初封ニ東阿王ー後改封ニ雍丘王ー謚曰レ思〕

竺志(ツクシ)史〔左京上筑紫史同祖續後紀賜ニ清江宿禰ー云々〕

上村主同祖陳思王植之後也〔此文異本同上に作〕

臺直

臺忌寸同祖〔此五字異本漢の一字に作るまた漢忌寸同祖に作る本もあり〕釋吉〔一本古に作〕王之後也〔右京上臺忌寸漢孝獻帝男白龍王之後也〕

史戶(フンヒトヘ)〔雄畧紀二年十月置ニ史部ー○續紀天平寶字二年六月桑原史戶六氏同賜ニ桑原直姓ー○注ニ大和國桑原直ニ〕

漢城人韓氏劉〔異本鄧に作〕德之後也

温義〔温義用ニ字音ニ〕

北齋國温公高緯之後也

百濟(クタラ)

船連(フネノ)〔右京下船連同祖○欽明紀以ニ王辰爾ー爲ニ船長ー因賜レ姓爲ニ船史ー今船連之先也○敏達紀船史王辰爾弟牛賜レ姓爲ニ建史ー○天武紀十二年十月船史賜レ姓曰レ連

菅野朝臣同祖大阿良〔異本郎に作〕王之後也

廣井連〔續紀延曆十年八月攝津國百濟郡人正六位上廣井造眞成賜ニ姓連ー〕

出レ自ニ〔異本なし〕百濟國避流王ー〔異本之後字あり〕也

古今要覽稿卷第二十六

●姓氏部 姓氏錄校正六

●新撰姓氏錄下之末

攝津國諸蕃

起二石占忌寸一盡二荒々公一二十九氏

漢

石占忌寸〔景行紀廿七年十月石占横立者從二日本武尊一○續紀天平十二年十一月見三伊勢國桑名郡至二石占頓宮一○按石占磯浦乎〕

坂上大宿禰〔坂上注二右京上一○續紀坂上刈田麻呂等上表言臣等本是後漢靈帝之曾孫阿智王之後也〕

同祖阿智王之後也〔阿智王ハ阿智使主ト同シ〕

檜前忌寸〔續紀寶龜三年四月坂上大忌寸苅田麻呂等言以二檜前忌寸一任二大和國高市郡司一元由者先祖阿智使主輕島豐明宮(應神)馭宇天皇御世率二十七縣人夫一歸化詔賜二高市郡檜前村一而居焉○和名抄大和國高市郡檜前(比乃久末)〕

石占忌寸同祖阿智王之後也〔此文異本同上に作下同〕

藏人〔續紀神護景雲三年六月攝津國菟原郡人正八位下倉人水守等十八人賜二姓大和連一○式攝津國菟原郡保久良神社〕

石占忌寸同祖阿智王之後也〔同上〕

葦屋漢人〔兵部式攝津國驛(葦屋十二匹)○和名抄菟原郡葦屋(今本誤葦原)〕

石占忌寸同祖阿智王之後也〔同上〕

秦忌寸〔和名抄攝津國豐島郡有二秦上秦下二郷一○秦注二左京上太秦公宿禰一○續紀神護景雲三年五月攝津國西成郡人外從八位下秦神島正六位上秦人廣立等九人賜二姓秦忌寸一〕

太秦公宿禰同祖功滿王之後也

秦人〔秦注レ上○續後紀承和四年九月攝津國人秦直身武散位同姓仲主等三烟改二本姓一賜二秦勝一〕

秦忌寸同祖弓月王〔弓月王應神十四年自二百濟一來歸〕之後也

志賀忌寸〔續紀延曆六年七月右京人正六位上大友村主廣道近江國野洲郡人正六位上大友民曰佐龍人淺

斯譽ニ五十跡手ト曰ニ伊蘇志ト五十跡手之本土可レ謂ニ怡勤國ト今謂ニ怡土郡ト訛也〕新羅〔一本國又一本人字あり又一本新羅國王子に作〕天日槍〔異本杵に作〕命之後也〔攝津國三宅連天日桙之後也○百木云注文伊蘇志臣天日杵命之後ニハ見エス誤ナリ一本ニヨルヘシ攝津國三宅連ニモ滋野宿禰同祖本ニ菅野宿禰同祖ナト誤レルト同シ〕

任那(ミマナ)

碎(ヒラ)〔一本辟に作〕田首(タノオフト)〔和名抄天和國城上郡辟田○辟與レ闢同訓ニ比羅ニ〕

出レ自〔異本なし〕任那國主都奴加阿羅志等ト〔和學所本之後二字あり〕也〔任那國都奴加注ニ左京下ト○垂仁記二年見ニ意富加羅國王之子名都怒我阿羅斯等ニ〕

大伴造(オホトモノ)

出レ自ニ〔異本なし〕任那國主龍主王孫佐利王ニ〔和學所本之後字あり〕也

右第二十六卷

姓氏錄下之本終

高麗

日置造〔左京下日置造攝津國日置造同祖〕出レ自ニ〔異本なし〕高麗國人利須〔異本酒に作〕使主一〔一本之後二字あり〕也

鳥井宿禰〔續紀寶龜八年四月賜ニ從五位上日置造雄三成等四人鳥井宿禰正八位下日置造飯麻呂等二人吉井宿禰一○和名抄大和國葛上郡日置同郡上鳥下鳥○鳥井氏依ニ此地名一乎〕日置造同祖伊利須使主之後也〔此文和學所本同上に作〕

榮井宿禰〔榮井式坐摩乃御巫乃祝詞曰生井榮井津長井○宮中三十六座之内坐摩巫祭ニ神生井福井綱長井一○續紀寶龜八年四月日置造賜ニ鳥井宿禰吉井宿禰一○榮井氏無レ所レ見蓋脫文○信友云朝野群載喜承二年ノ頃ノ文ニ酒井宿禰友宗マタ康和ノ頃ノ文ニ酒井爲季ト云フ人ミユ〕日置造同祖伊利須使主男麻弖臣〔和學所本臣又一本位に作〕之後也

吉井宿禰〔續紀天平神護二年五月在ニ上野國一新羅人子午足等百九十三人賜ニ姓吉井連一又寶龜八年四月日置造飯麻呂等二人賜ニ姓吉井宿禰一〕日置造同祖〔此文異本なし〕伊利須使主之〔異本此下男麻弖臣之五字あり〕後也

和(ヤマトノ)造

日置造同祖伊利須使主之後也〔此文和學所本同上に作〕

日置倉人(ヒオキノクラヒト)〔日置和名抄葛上郡比於木○倉人廣瀨郡有ニ上倉下倉一〕日置造同祖〔此文異本伊利須使主兄許召〔異本呂に作〕使主之後也に作〕

新羅

絲(イト)井造〔式大和國城下郡糸井神社〕伊〔異本なし〕蘇志〔異本連字あり〕臣同祖〔異本三宅連同祖に作又一本新羅人三宅連同祖に作○一本伊蘇志臣同祖筑前國風土記曰昔者穴戸豐浦宮御宇足仲彥天皇幸ニ筑紫一之時怡土縣主祖五十跡手聞ニ天皇幸一拔ニ取五百枝賢木一立ニ于船舳艫一上枝掛ニ八尺瓊一中枝掛ニ白洞鏡一下枝掛ニ十握劍一參ニ迎穴門引島一獻ニ之天皇一勅問阿誰人五十跡手奏曰高麗國意呂山自レ天降來日桙之苗裔五十跡手是也申天皇於

上地ニ居之○腋上陵式葛上郡也○朝妻應レ有ニ高市郡ニ」

出レ自ニ〔異本なし〕韓國人都〔異本孝に作〕圖夫〔和學所本留使に作圖古本爲に作〕主ニ〔和學所本之後二字あり〕也〔都圖一本ニ都留トアリ都ハ孝ニテ孝ノ草ノ誤留ハ圖ニテ圖ノ草ノ誤ナリ又夫ハ使ノ略草字ㇱ如レ此カキタルヨリアヤマレル也爲ハ留ヲマタアヤマリテ爲ト書ルヨリアヤマレルナリ〕

額田村主（ヌカタノ）〔額田和名抄平群郡奴加多○仁賢紀六年高麗獻ニ工匠須流枳奴流枳等ニ今大和國山邊郡額田邑熟皮高麗是其後也〕

出レ自ニ〔異本なし〕呉〔異本遠呉に作〕國人天〔一本呉に作〕國古ニ也〔一本遠呉國呉國古之後也に作〕

百濟

縵連（カツラノ）〔天武紀十二年五月縵造賜レ姓曰レ連〕

出レ自ニ〔異本なし〕百濟人狛ニ〔和學所本之後二字あり〕也

和連（ヤマトノ）〔天武紀十年四月倭直龍麻呂賜レ姓曰レ連○和名抄大和國城下郡大和〔於保夜未止〕○續紀神護景雲三年六月癸卯攝津國菟原郡人正八位下倉人水守等十八人賜ニ姓大和連ニ〕

出レ自ニ〔異本なし〕百濟國主雄蘇利紀王ニ〔和學所本之後二字あり〕也

宇奴首（ウヌノ）〔河内國宇努造同祖○欽明紀見ニ河内國更荒郡鸕鷀野邑ニ〕

出レ自ニ百濟〔此文和學所本同に作又一本百濟字同に作下同〕國〔和學所本君字あり〕男彌〔異本禰に作〕奈曾〔一奈魯に作〕富意彌ニ〔和學所本之後二字あり〕也

波多造（ハタノ）〔式大和國高市郡波多神社○和名抄同郡波多〕

出レ自ニ百濟〔同上〕國〔異本人字あり〕佐布〔異本希に作〕利智使主ニ〔和學所本之後二字あり〕也

薦口造（コモクチノ）〔薦口注ニ河内國皇別紺口縣主ニ〕

出レ自ニ百濟〔此文和學所本同に作〕國人拔田白〔異本自に作〕城君ニ〔和學所本之後二字あり〕也

園人首〔右京下苑部首百濟國人知豆神之後也○園人和名抄大和國忍海部鄕名〕

出レ自ニ〔異本なし〕百濟國〔印本百濟の字なし一本に據て補ふ〕人〔印本久に作一本に據て改〕知〔異本和に作〕豆神之後也

人等今桑原佐糜高宮忍海凡四邑漢人等之始祖也○續紀天平寶字二年六月大和國葛上郡人從八位上桑原史年足等男女九十六人近江國神崎郡人正八位下桑原史人勝等男女一千一百五十五人同言曰伏奉云云年足人勝等先祖後漢苗裔鄧言興並帝利等於ニ難波高津宮御宇天皇之世ニ轉レ自ニ高麗ニ歸ニ化聖境ニ本是同祖今分ニ數姓ニ望請依レ勅一改ニ史字ニ因蒙ニ同姓ニ於レ是桑原大友桑原史大友史大友部史桑原史戸史戸六氏同賜ニ桑原直姓ニ又神護景雲二年八月近江國淺井郡人從七位下桑原直新麻呂外大初位下桑原直訓志必登等賜ニ姓桑原公ニ〕

桑原村主同異〔異本此文なし〕〔漢皇〔一本高に作〕帝十世〔左京上桑原村主ノ注漢高祖七世トアリ又一本十四世に作〕孫萬得〔異本德に作〕使主之〔之字印本なし一本に依て補ふ〕後也

己智〔欽明紀元年二月百濟人己智部投化置ニ和泉國添上郡山村ニ〕今山村巳智部之先也〕出レ自ニ〔異本なし〕秦太〔印本大に作異本に依て改〕子胡亥ニ〔印本胡苑に作一本故亥に作皆誤なり○又一本之後二字あり〕也〔胡亥秦二世也按史秦始皇帝三十七年崩少子胡亥即レ位是爲ニ二世皇帝ニ二年ニ三世立ニ公子嬰ニ爲ニ秦王ニ也沛公破ニ秦軍ニ秦王子嬰降于レ時秦公族奔ニ百濟國ニ乎其孫自ニ百濟國ニ來朝〕

三林公〔續紀寶龜十一年四月伊勢國大目正六位上道祖首公麻呂白丁枝足等賜ニ姓三林公ニ〕

巳智同祖諸齒王之後也

長岡忌寸〔續紀寶龜七年十二月左京人少初位上蓋嚢賜ニ姓長岳連ニ又寶龜八年七月左京人從六位下猶曰佐河内等三人賜ニ姓長岡忌寸ニ〕○長岡山城國乙訓郡長岡宮同地乎〕

巳智同祖諸齒王之後也〔此文和學所本同上に作〕

山村忌寸〔山村欽明紀元年大和國添上郡（注レ前）〕○續紀寶龜八年七月正六位上山村許智大足等四人賜ニ姓山村忌寸ニ〕

巳智同祖古禮公之後也

櫻田連

己智同祖諸齒之王後也

朝妻造〔朝妻萬葉十朝妻之片山木之爾霞多奈引○仁德紀歌阿佐豆磨能避箇能烏瑳箇○山城國諸蕃秦忌寸祖弓月王應神十四年來朝賜ニ大和國朝津間腋

出レ自ニ狛〔和學所此文同に作〕國人〔同本久字あり〕之留川麻乃意利佐ニ〔同本之後字あり〕也

新羅

眞城史〔續紀寶龜六年七月山背國紀伊郡人從八位上金城史山守等十四人賜ニ姓眞城史ニ〕

出レ自ニ〔異本なし〕新羅國人金氏尊ニ〔和學所本之後字あり〕也

任那

多多良公〔多々良新羅國船津也神功紀五年襲津彥詣ニ新羅ニ次ニ于蹈鞴津ニ者同地〇式龍田風神祭金能麻笥金樻〇大神宮式金銅多多利〔高一尺一寸六分土居徑三寸六分〕〇令義解書ニ線柱ニ〕

出レ自ニ〔異本なし〕御間名國主爾利久牟王ニ〔和學所本之後字あり〕也〔按に廣庭の字脱せる歟〕天皇諡〔異本此三字なし〕欽明〔異本諡欽明三字細書す又和學所本天皇字あり〕御世授〔和學所本投に作〕化獻ニ金多多利金多々利和名抄絡𢇁〔多々理〕金牟〔異本乎又焉又為一本號に作〕居等ニ天皇譽之賜ニ多多良公ニ〔和學所本姓字あり〕也〔異本なし〕

右第二十五卷

大和國諸蕃

起ニ眞神宿禰ニ盡ニ大伴造ニ二十六氏

漢

眞神宿禰〔崇峻紀元年飛鳥眞神原亦名飛鳥苫田〇萬葉集二〔長歌〕明日香乃眞神之原〔同地〕〇大和國高市郡也眞髮異也〕

出レ自ニ〔異本なし〕漢福德王ニ〔和學所本之後二字あり〕也

豐岡連〔豐穪言岡大和國中岡地名有ニ數處ニ難レ定〇神樂歌詠ニ天亦坐豐平加姬乃宮乃美弖具良ニ者爲ニ神號ニ也〕

出レ自ニ〔異本なし〕漢〔印本なし和學所本に依て補〕高祖苗裔伊須久牟治使主ニ〔和學所本之後二字あり〕也

秦〔異本奉に作〕忌寸〔注ニ山城國秦忌寸及左京上太秦公宿禰ニ〕

太秦公宿禰同祖〔異本秦始皇四世孫功滿王之後也に作〕

桑原直〔桑原和名抄大和國葛上郡桑原此地新羅俘人住焉神功紀五年襲津彥詣ニ新羅ニ拔ニ草羅城ニ是時俘

勝〔右京上上勝攝津國勝同祖〕

上勝同祖百濟〔此六字和學所本同に作〕國人多利須須之後也

岡屋公〔和名抄山城國宇治郡岡屋（於加乃屋）○三代實錄貞觀六年八月右京人岡屋公祖代賜ニ姓八多朝臣ニ其先出レ自ニ八太（異說也）八代宿禰ニ也〕

百濟〔和學所本同に作〕國比流王之後也

高麗

黃文連〔信友曰奈良藥師寺佛足蹟趺石右面ニ刻タル天平勝寶四年ノ文ニ日本使人黃書本實向ニ大唐國於普光寺ニ云々○天智紀十年三月黃書本實獻ニ水泉ニ○天武紀十二年九月黃文造等三十八氏賜レ姓曰レ連○持統八年ニ黃書連本實續紀大寶二年十二月ノ文ニ黃文連本實トアリ初ハ黃書ナルヲ後ニ書ヲ文ニ書カヘタリト見ユ〕

出レ自ニ〔異本なし〕高麗國人久斯那〔異本祁又初に作〕王ニ〔和學所本之後二字あり〕也

桑原史〔攝津國桑原史高麗國萬德使主之後也○續紀天平寶字二年六月大和國葛上郡人從八位上桑原史年足云々言先祖後漢苗裔鄧言興並帝利等於ニ難波高津宮御宇天皇之御世ニ轉レ自ニ高麗ニ歸ニ化聖境ニ云云依レ勅改ニ史字ニ賜ニ桑原直姓ニ○注ニ大和國桑原直ニ○桑原和名抄葛上郡〕

出レ自ニ〔異本なし〕狛國人漢胃ニ〔胄字か○異本之後二字あり〕也

高井造

出レ自ニ〔異本なし〕高麗國主鄒牟〔和學所本王字あり○鄒牟王ハ右京下長背連ニミユ〕二十世〔一本六世に作〕孫汝安祁〔異本初に作〕王ニ〔和學所本之後二字あり〕也

狛造〔狛山城國相樂郡古末○天武紀十年四月庚戌山背狛烏賊麻呂賜レ姓曰レ連○續後紀陸奧白河郡百姓狛造知成云々改レ姓爲ニ陸奧白河連ニ（如レ此類者自ニ山城國ニ轉ニ任陸奧ニ也）○三代實錄貞觀三年八月金村大連公第三男狹手彥宣化天皇世奉ニ使任那ニ云々珠敷（敏達）天皇世還來獻ニ高麗之囚ニ今山城國狛人是也〕

出レ自ニ高麗〔此四字和學所本同に作〕國主夫連王ニ〔和學所本之後二字有〕也

八坂造〔山城國愛宕郡也佐加〕

錦織約言近江國志賀郡錦部鄕中有二錦織村一也○續紀承和四年十二月近江國人志賀史常繼錦村王藥麻呂越中少目錦部忌寸人勝云々賜二姓蕃良宿禰一常繼之先後漢獻帝苗裔也〕

錦織〔織異本なし〕村主同祖波能志之後也〔右京上錦織村主韓國人波努志之後也按に波努志波能志ト同人也努理使主ヲ乃里使主トアルト同例〕

工造〔右京上工造同職員令縫殿寮裁二縫衣服一○應神紀卅七年遣二阿知使主都加使主於吳一令レ求二縫工女一吳王與二工女兄媛弟媛一是女人等之後今吳衣縫是也○工應レ訓二衣縫一

出レ自二〔異本なし〕吳國人田利須須一〔和學所本之後二字あり〕也

祝部〔右京下祝部同○祝地名當二山城國相樂郡祝園一〕

工部〔或本造に作〕同祖吳國人田利須々之後也〔此一章和學所本上に作〕

谷直〔續紀延曆四年六月谷忌寸賜二姓宿禰一〕

●漢師建王之後也

百濟

民首〔右京下民首同祖○續紀神護景雲元年十二月伊勢國飯高郡人漢人部乙理等三人賜二姓忌民寸一○文德實錄齊衡三年十一月民忌寸國成賜二姓內藏朝臣一〕

水海連同百濟國人努〔異本怒に作○努理使主見二古事記仁德段一註二左京下調連一〕理使主之後也

伊部造〔蓋紀伊部伊福部等脫文乎越前國敦賀郡ニ伊部鄕アリ式同郡ニ伊部磐座神社アリ〕

出レ自二百濟〔此文和學所本同に作下同〕國人乃里使主一〔和學所本之後二字あり〕也

末〔元未に作異本に據て改〕使主〔末和泉國神別末同地○崇神紀茅渟縣陶邑○式陶荒田神社今有二陶器庄一又按國造本紀有二須惠國一〕

出レ自二百濟〔同上〕國人津留牙使主之後一〔異本之後字なし〕也〔百木云津留牙使主ハ未定雜姓ニ木勝津留木之後也トアルト同人歟ナホ其處ニ云ヘリサテ木勝ハ此次ノ木曰佐ノ木ト由アリテキコユ〕

木曰〔印本日に作一本に據て改和學所本は目に作〕佐

末〔元未ニ作異に據て改〕使主同祖津留牙使主之後也〔和學所本此章同上に作〕

此三字元大字異本に據て改〕御世賜レ姓曰二波陁一〔和學所本陁に作〕今秦字之訓也次雲師王次武良王普洞王男秦公酒〔仁德紀四十一年百濟王之孫酒君來〕大泊瀨稚武天皇〔諡雄畧〇此三字元大字一本に據て改〕御世秦穪〔和學所本儞に作〇按に秦儞は秦公儞ナルヘシ公字脫ルカ〕普洞王時秦氏〔一本民に作〕揔被二却〔和學所本劫に作〕略一今見在者十不レ存一請下遣二勅使一撿括招集上天皇遣レ使小子部雷〔小子部〔雄略紀七年見二小子部連螺贏一〕捉二三諸岳神一賜レ名爲レ雷靈異記第一條有二取レ雷栖輕之墓碑文一〇孝德紀見二葛野秦造河勝一〔始住二山城年月不レ見〕率二大隅阿多隼人等一搜括鳩集得二秦氏九十二部一萬八千六百七十人一遂賜二於酒一爰率二秦氏一養レ蠶織レ絹盛二〔異本篚字あり〕諸〔異本諸に作〕闕貢一進如レ丘〔異本兵に作〕如レ山積二畜朝廷一天皇嘉〔古本喜に作〕之特降二寵命一賜レ號曰二禹都萬佐一〔雄略紀十五年秦酒君領二率百八十種勝部一奉レ獻二庸調絹縑一充二積朝廷一因賜レ姓曰二禹豆麻佐一〕是盈積有二利益一之義役二〔異本役又使に作〕諸秦氏一構二〔異本搆に作〕八丈大〔大異本なし〕藏於宮側一納二其貢物一故名二其地一曰二長谷〔異本倉に作〕朝倉宮一是時始置二大藏宮一〔和學所本官に作〕員一以レ酒爲二長官一秦氏等一祖子孫或就二居住一或依二行事一別爲二數腹一天平二十年在二京畿一者咸改賜二伊義吉一〔和學所本美吉に作信友云思寸ハカハネ也〕姓一也〔也字元なし一本に依て補ふ〕

秦忌寸

秦〔此一字なし異本に據て補〕始皇〔和學所本同に作下同〕帝十五世孫川秦公之後也

秦忌寸〔左京諸蕃上太秦公秦始皇帝三世孫孝武王之後也男功滿王仲哀八年來朝男融通王〔一日弓月王〕應神天皇十四年來朝〇注二左京上一〕

秦始皇〔同上〕帝〔古本なし下同〕五世孫弓月王之後也

秦冠

秦始皇〔同上〕帝〔同上〕四世孫法成王之後也〔異本此一段前秦忌寸の上に入〕

民使首〔民訓二美多彌一注二右京下民首一〕

高向村主〔高向村主左京下魏武帝太子文帝後也〕寶德公〔寶德公右京下雲梯連祖〕之後也

錦部村主〔和名抄山城國愛宕郡錦部〔爾之古利〕訓義

十月三宅吉士賜レ姓曰レ連又十三年十二月賜レ姓曰二宿禰一〕

新羅國王子天日杵〔異本杵に作〕命〔天日杵之傳注二左京下一〇筑前國風土記曰高麗國意呂山自天レ降來日杵云々意呂山者朝鮮國圖蔚山也〕之後也〔垂仁紀五年新羅王子天日槍來歸焉〕

豐原連(トヨハラノ)〔續紀延曆元年四月右京人少初位下壹禮比福麻呂等一十五人賜二姓豐原連一〕

新羅〔和學所本同に作〕國人壹呂比麻呂之後也

海原造(アマハラ)〔此一字元なし和學所本に據て補〇續紀延曆二年七月左京人金肆須賜二姓海原連右京人金五百依海原造一〇持統紀七年二月流二來新羅人牟自毛禮等三十七人一付二賜憶德等一〕

新羅〔和學所本同に作〕國人進廣肆金加志毛禮之後也

右第二十四卷

山城國諸蕃

起二秦忌寸一盡二多々〔此一字元なし和學所本に據て補〕良公一二十二氏

漢

秦忌寸〔古事記應神段秦造祖漢直之祖及知レ釀レ酒人名仁番亦名須々許理等參渡來也〇續紀養老三年四月秦朝臣元賜二忌寸姓一又天平廿年五月正六位上秦老等一千二百餘烟賜二伊美吉姓一〇續後紀承和元年二月山城國葛野郡人從八位上物集廣永同姓豐守等賜二姓秦忌寸一又承和四年十月山城國人秦忌寸伊勢麻呂改二本居一貫二附右京九條四坊一〇三代實錄貞觀五年九月山城國葛野郡人秦忌寸春風秦忌寸諸長等賜二姓時原宿禰一其先秦始皇之後也〕

太秦公宿禰同祖秦始皇帝之後也〔秦始以下七字異本なし〕物智〔異本巧滿に作〕王弓月王〔弓月百濟國地名君融通王也應神紀十四年弓月君自二百濟一來歸十六年弓月之人部來〕譽田〔異本應神に作〕天皇〔謚應神〇此三字元大字一本に據て改〕十四年來朝上レ表更歸レ國率二百二十七縣狛〔異本伯に作〕姓一歸化並獻二金銀玉帛種々寶物等一天皇嘉〔古本喜に作〕之賜二大和朝津間腋上地一〔朝津間〔當レ有二高市郡一〕腋上〔陵式有二葛城上郡一〕居之焉男眞德王〔異本玉に作〕次普洞王古記曰〔異本云に作〕浦東君〔古記以下異本細書す〕大鷦鷯〔異本仁德に作〕天皇〔謚仁德〇

姓滋岳朝臣一〇百木云下ニ島ノ史アレハ島岐史ト訓カ神代紀ニ岐神トカケリ又河内國諸蕃ニ常世連アリ注ニ燕國王ノ後ナルヨシ注シ式ニ河内國大縣郡ニ常岐世姫神社アリサテ又右京諸蕃二道祉史アリテ百濟國王ノ後ナルヨシ注シタリ〇島ハ和名抄攝津國島上郡島下郡〇攝津志云島上島下豐島上古渾曰二三島一〇神名式島下郡三島鴨神社〇雄略紀三島〇皇極紀中臣鎌子連居二三島一〇諸陵式三島藍野陵〇御領目錄ニ三島庄有り今島上郡ニ三島江村アリ〕

出レ自二高麗一〔此四字和學所本同に作下同〕國人能祁〔異本劉に作る〕一王〔和學所本之後字あり〕也

島史（シマノフンヒト）

出レ自二高麗一〔同上〕國人和與一〔異本與に作和學所本之後二字あり〕也

狛首（コマノオフト）〔注ニ山城國狛造一〇三代實錄貞觀三年八月珠敷天皇御代献二高麗之四一今山城國狛人是也〇狛河内國巨麻郷〕

出レ自二高麗一〔同上〕國人安岳〔異本岡に作〕上〔古本止一本山に作〕王一〔和學所本之後二字あり〕也

高田首（タカタノ）〔續紀延暦四年二月但馬國氣多郡人從五位下川人部廣井改二本姓一賜二高田臣一〇和名抄但馬國氣多郡高田（多加多）郷〕

出レ自二高麗一〔同上〕國人多高子使主一〔和學所本之後二字あり〕也

日置造（ヒオキノ）〔右京下日置造同祖〕

出レ自二高麗一〔同上〕國人伊利須使主一〔注云一名伊和須〇和學所本之後二字あり〕也

高安下村主（タカヤスシモムツスクリ）〔雜姓高安漢人狛國人小須郷之後也〇高安和名抄河内國高安（多加夜須）郷〕

出レ自二高麗一〔同上〕國人大鈴一〔和學所本之後字あり〕也

後部王〔後部注レ前〕

同國〔異本高麗に作〕長王周之後也〔此一段印本なし和學所本を以て補ふ〕

新羅

三宅連（ミヤケノ）〔攝津國三宅連左京下橘守同祖〇訓二美也介一者依二和名抄一〇古事記垂仁段三宅連等之祖名多遲麻毛里〇一云系譜天日槍—子但馬諸助—其子但馬日楢木—其子淸彦—其子田道間守〇天武紀十二年

大石椅(イオシノハシ)〔異本椅に作〕立(タテ)出レ自二百濟〔此四字和學所本同に作〕國人庭姓蚊尒二〔和學所本之後二字あり〕也

林

林連同祖百濟國人木貴之後也

大石林〔續紀延曆二年四月右京人從八位上大石林男足等賜二姓大山忌寸一〕

林連同祖百濟國人木貴之後也〔此十三字和學所本同上に作○此一段印本なし一本を以補ふ〕

高麗〔續紀天平寶字二年六月散位大屬正六位上狛廣足散位正八位下狛淨成等四人長背連○高麗和名抄武藏國高麗山城國狛等地名高麗人住居之地號二古末一〕

長背連(ナガセノ)

出レ自二〔異本なし〕高麗國主鄒牟一〔異本爭に作○山城國高井造に王字あり〕一名朱背〔異本蒙に作和學所本一名朱背字なし又一本之後二字あり〕也天國排開廣庭天皇〔謚欽明○印本天皇謚欽明に作一本に據て改〕御世率レ衆授化〔授和學所本投に作○賦役令義解云謂投化猶二歸化一也〕貞美〔異本義に作〕體大其背間長仍賜二名長背〔元皆に作古本に據て改〕王一

難波連(ナニハ)〔天武紀十年大山上草香部吉志大形賜レ姓曰二難波連一○續紀神龜元年五月從六位下谷那庚受賜二難波連一又天平寶字三年四月正六位上難波藥師奈良等一十一人言奈良等遠祖德來本高麗國人歸二百濟國一昔泊瀨朝倉朝廷(雄略)詔二百濟國一訪二求才人一爰以二德來一貢二進聖朝一德來五世孫惠日小治田朝廷御世(推古)被レ遣二大唐一學二得醫術一因號二藥師一遂以爲レ姓今愚按子孫不レ論二男女一共蒙二藥師之姓一竊恐名實錯亂伏願改二藥師字一蒙二難波連一許之○三代實錄貞觀五年八月右京人難波連藾麻呂難波連實得難波連法宗等並賜二姓朝臣一其先高麗國人也〕

出レ自二高麗〔此四字和學所本同に作〕國好太〔異本大に作〕王一〔異本之後字有〕也〔按二東國通鑑一好當レ作レ次傳寫之誤也〕

島岐史〔河内國島木氏高麗國人也○島岐用二字音一○文德實錄齊衡元年九月陰陽權允兼陰陽博士正六位上部岐直川人上總少目從六位上部岐直雄貞等賜二

出レ自二百濟一〔此四字和學所本同に作〕國〔元人乃字有古本によりて削〕肖〔一本背に作〕古王ニ〔異本之後二字有〕也〔今按東國通鑑肖古王百濟第六之主〕

枌（スギ）〔異本杉に作○杉ノ字ヲ古書トモニ多ク杉枌ナト作ル例ナリ〕谷造

出レ自二百濟一〔此四字異本同に作〕國人堅祖州〔古本列又一本玥に作〕耳ニ〔和學所本之後二字あり〕也

坂田村主〔和名抄近江國坂田(佐加太)郡〕

出レ自二百濟一〔異本此四字なく同字有下同〕國人頭〔異本顯に作〕貴村主ニ〔和學所本之後二字あり〕也

上勝（カミノ）〔勝訓二加都一〕○山城國勝攝津國勝同祖上勝坂田郡上坂下坂之勝部乎○百木按和名抄上總國周淮郡ニ勝部部又勝川アリ又越前國今立郡ニ勝戸又勝部アリ因幡國氣多郡ニ勝部アリコハ今カチベトモ云フ右ノ鄉名今本皆訓注闕タリサテ勝ハカツ歟カチ歟ナホ可レ考又マサトモヨマル丶也廿四輩順拜圖會ニ上野山誠照寺ハ鯖江ニアリ云々當國上野領主ノ秦ノ右京景久ハ元久二年四月七日ノ夜靈夢ヲ感シ云々トアリ按ニ越前國今立郡鯖江ナレハ和名抄ナル勝部ハ秦ノ部ニテマサヘト訓歟〕

出レ自二百濟一〔同上〕國人多利須須ニ〔和學所本之後二字あり〕也

不破勝〔和名抄美濃國不破○前文不破連祖百濟國人也○勝續紀文武三年正月授二桑原加都直廣肆一〕

百濟〔和學所本同に作〕國人淳〔和學所本淳に作〕武止等之後也

刑部（オサカベ）〔刑部遠江國鄉名訓二於佐加倍一○允恭紀二年爲二皇后忍坂大中姫一定二刑部一○古事記同御名代也〕

出レ自二〔異本なし〕百濟國酒王ニ〔異本之後二字あり〕○酒王仁德紀四十一年三月見二百濟王之孫酒君來一〕也

漢人（アヤヒト）〔漢人古書訓安也比止○續紀神護景雲元年十二月伊勢國飯高郡人漢人乙理等三人賜二姓民忌寸一〕

百濟國人多夜加之後也

賈氏〔賈用二字音一〕

出レ自二百濟〔此四字和學所本同に作〕國人賈義持一〔持異本なし和學所本將に作又之後二字あり〕也

半毘氏〔半毘用二字音一〕

百濟〔和學所本同に作〕國沙半王之後也〔東國通鑑半作レ伴百濟第九會長也〕

於保波良〕
出レ自二〔異本なし〕漢人木〔異本百濟國に作〕姓阿留素西姓令貴一〔和學所本之後二字あり〕也

苑部首〔職員令有二園池司一又諸國有二曾能郷一〕
出レ自二〔異本なし〕百濟國人〔異本久字あり〕知豆神一〔和學所本之二字あり〕也

民首〔民訓二美多彌一式和泉國美多彌神社○續紀延暦四年六月民忌寸云々賜二姓宿禰一○三代實錄貞觀六年七月右京人無位民首方永賜二姓眞野臣一〔可二考合一〕〕
水海連同祖百濟〔此文異本同に作〕國人努利使主〔努利使主古事記仁徳段箇木韓人名奴理能美同人注二左京下調連一〕之後也

高野造〔高野陵式大和國添下郡〕
出レ自二百濟〔和學所本此四字同に作下同〕國人佐平〔和學所本千に作〕余自〔和學所本白に作〕信〔余自信齊明紀六年九月百濟人達率餘自進恩率鬼室福信等保二王城一又獻二唐俘一百餘人一今美濃國不破片縣二郡唐人等也○天智紀八年十二月以二佐平餘自信男女七百餘人一迁二居近江國蒲生郡一〕之後一也

飛鳥戸造〔河内國飛鳥戸造同祖○和名抄河内國安宿郡〔安須加倍〕○三代實祿貞觀五年十月右京人飛鳥戸造淸貞飛鳥戸造淸主飛鳥戸造河主河内國高安郡人飛鳥戸造有雄等並賜二姓百濟宿禰一其先百濟國人比有之後也〕
出レ自二百濟〔同上〕國比有王一〔和學所本之後二字有〕也

御池造〔續紀天平寶字五年三月百濟國人卓果智等二人賜二姓御池造一○職員令有三園池司掌二諸苑種殖蔬菜樹菓等事一〕
出レ自二〔異本同に作〕百濟國〔異本國字なし〕扶餘地卓斤國主〔卓斤神功紀卓淳國乎〕施比王一〔異本主に作又一本之後字あり〕也

中野造〔續紀天平寶字五年三月荅他伊奈麻呂等五人賜二中野造一〕
百濟〔和學所本同に作〕國人杵〔異本許又抒に作〕率〔抒率は未定雜姓左京古氏ハ杵率云々之後也〕荅他斯智之後也

眞野造〔和名抄近江國滋賀郡眞野（末乃）又美濃國不破郡眞野〕

也

麻田連〔麻田阿佐太平太訓未レ考和名抄攝津國武庫郡雄田（乎多）○續紀神龜元年五月正八位上答本（木ノ誤乎）陽春賜ニ麻田連ー（田作レ呂誤卷十三田連陽春田上麻字脱）〕

出レ自ニ百濟國（異本なし）朝鮮王淮ー〔古本雍に作一本維に作之後ニ字あり〕

廣田連〔和名抄攝津國武庫郡廣田（比呂多）○左京下廣田連同祖（作ニ辛臣君ー）○續紀天平寳字二年九月右京人正六位上辛男床等一十六人賜ニ姓廣田連ー○上段廣海連ノ條合考ヘシ〕

百濟國人〔異本なし〕辛臣君之後也

春野連〔續紀天平寳字五年三月百濟人面得敬等四人賜ニ姓春野連ー○萬葉集卷一詠ニ巨勢能春野ー者大和國高市郡巨勢郷春野而負レ氏乎〕

出レ自ニ百濟〔異本なし〕速〔異本宵に作〕古王孫比流王ー〔和學所本之後二字あり〕也

面氏〔面用ニ字音ー〕

春野連同祖比流王之後也〔和學所本此十一字なく同上字あり〕

巴汶氏〔巴汶氏用ニ字音ー○巴汶地名左京皇別下吉田連傳磯城瑞籬宮御代任那國奏曰臣國東北有ニ三巴汶地ー上巴汶中巴汶下巴汶地方三百里〕

春野連同祖速〔異本宵に作〕古〔異本同字あり〕王孫汶休爰〔異本奚に作又一本矣に作〕之後也

汶斯氏〔汶斯用ニ字音ー應レ有ニ巴汶地ー〕

春野連同祖速〔異本宵に作〕古王孫〔和學所本此文なく同王ニ字あり〕比流王之後也

大縣史〔和名抄河內國大縣（於保加多）○續紀神龜二年六月和德史龍麻呂等三十八人賜ニ姓大縣史ー〕百濟國人和〔異本知に作〕德之後也

道祖史〔孝德四年六月命ニ畵工鯽魚戶直等ー多造ニ佛菩薩像ー○神代紀及和名抄岐神（布奈止乃加美）○三代實錄貞觀四年七月右京人道祖史豐富賜ニ姓惟道宿禰ー阿知使主之黨類自ニ百濟國ー來歸也又同七年五月左京人道祖史永主道祖史高直等二人賜ニ惟道宿禰ー其先出レ自ニ百濟國人王孫許里ー也〕

出レ自ニ〔異本なし〕百濟國王〔異本主に作〕挨〔異本族に作〕許里公ー〔和學所本之後二字あり〕也

大原史〔近江國坂田郡大原山城國大原野等之地名訓ニ

岡連〔市往公ノ下ニ注ス〕
市往公同祖曰〔異本日に作和學所本目に作〕圖王男
安貴之後也
百濟公〔續紀天平寶字五年三月百濟人余民善女等四
人賜二姓百濟公一〕
鬼〔鬼上異本曰又因乃字あり〕神〔鬼神の二字一本
なし〕因レ鬼〔因鬼一本なし又一本鬼神と有〕感和之
義今〔異本命に作〕代〔今代異本命氏に作る〕謂二鬼
室一廢帝天平寶字三月改賜二百濟公姓一〔印本此一段
なく鬼神感和以下の文前段安貴之後也に連續して
書す一本を以て改む○齊明紀曰六年九月見三百濟
人思率鬼室福信等保二王城一○百濟佐平鬼室福信ノ
事天智元年紀正月及四年紀二月ノ條ニミユ○又下
文高野造ハ出レ自二百濟國人佐平余自信一〕
百濟伎〔伎雄略紀百濟獻二手末才伎（タナスヱノテヒト）一者是也〕
出レ自二百濟〔異本此四字なく同字有下同〕國都慕王
孫德佐王一〔異本之後二字あり〕也
廣津連〔雄畧紀七年倭國吾礪廣津邑（廣津此云二比盧
岐頭一）〕
出レ自二百濟〔同上〕國近貴〔東國通鑑仇に作〕首王一
〔異本之後二字あり〕也
清道（キヨミチノ）連〔續紀延曆十年十二月外從五位下清道造岡麻
呂等改レ造賜二連姓一〕
出レ自二百濟〔同上〕國人思䜌〔異本恩率に作〕納比且
止一〔古本止且に作止一本土に作之後二字あり〕也
廣海（ヒロミノ）連〔續紀寶龜十一年五月正八位上韓男成等二人
賜二姓廣海造一〕
出レ自二〔異本なし〕韓王信之後〔異本也字あり下文
なし〕須敬一〔異本王須敎に作和學所本之後二字あ
り〕也〔韓王信之傳有二史記漢書一○信友按續紀天平
寶字二年九月ノ條ニ辛男床等ニ廣田連ヲ玉フトア
リ此錄ノ末ノ廣田連ノ條見合ヘシ韓男成辛男同族
ノ人トキコエシカラハ韓王信モ辛臣君モ同人ナリ
韓ヲ辛ト借字ニカキ王ニ君ヲアテ信ト臣ト通用テ
書ナラヘルナルヘシ○清道連廣海連ノ二氏一本ニ
下文中野造ノ下眞野造ノ上ニアリ〕
不破（フハノ）連〔不破天武紀發二美濃師三千人一塞二不破道一○
軍防令（三關義解）美濃不破○和名抄美濃國不破郡
○按今不破郡驛家古關跡也〕
出レ自二百濟國都慕王之後毘有王一〔毘有王注レ前〕

人船連貞直賜ニ姓御船宿禰ニ彥主等之先出レ自ニ百濟國貴須王ニ也右京人山城權守船連副使麻呂賜ニ菅野朝臣ニ〕

菅野朝臣〔異本なし〕同祖大〔續紀太に作〕阿〔一本阿大に作〕郎王〔異本主に作〕三世孫智仁君之後也〔續紀（表文）難波高津朝御宇（仁德）天皇以ニ辰王長子太阿郎王ニ爲ニ近侍ニ太阿郎王（其子）午定若（其仲子）辰子〕

三善(ミヨシノ)〔異本吉に作〕宿禰

出レ自ニ百濟〔異本此四字なく同字有下同〕國造〔和學所本速に作一本連に作又肖に作〕古〔異本右に作〕大王ニ〔和學所本之後二字あり〇按に東國通鑑無ニ速右大王ニ速右大乃近肖古之誤也〇東國通鑑〔百濟弟六世〕〇神功紀四十九年見ニ百濟王肖古及王子貴須ニ〇欽明紀百濟國聖明王曰昔我先祖速古王貴首王トモ云リ〕也

鴈高宿禰〔續紀卷廿三須布呂比滿麻呂等十三人賜ニ鴈高造ニ者鴈高宿禰同族乎又延曆四年五月右京人從五位下昆解宿禰沙彌麻呂等改ニ本姓賜ニ鴈高宿禰ニ〕

出レ自ニ百濟〔同上〕國貴首王ニ〔東國通鑑貴作レ仇〇和學所本之後二字有〕也

安勅(アジキノ)連〔應神紀十五年八月百濟王遣ニ阿直岐ニ云々阿直岐者阿直岐史之始祖也〇古事記應神段百濟國主照古王（書紀作ニ肖古ニ）以ニ牡馬壹匹ニ付ニ阿知古師ニ以貢上〇此阿知古師者阿直史等之祖〇天武紀阿直史賜レ姓曰レ連〇百木云和名抄安藝國沼田郡安道（安知加）鄕アリサテコノ安勅ヲ古本ニアトキト訓リ〕

出レ自ニ百濟〔同上〕國魯王ニ〔今按魯當レ作ニ毗有ニ東國通鑑有ニ毗有王ニ〇異本之後二字あり〕也

城篠(キシヌノ)連〔續紀天平神護二年三月大初位上支母未吉足等五人賜ニ姓城篠連ニ〕

出レ自ニ百濟〔同上〕國人達率支〔異本與に作〕母未惠遠ニ〔異本之後二字あり〕也

市往(イチサキノ)公〔續紀神龜四年十二月勅曰僧正義淵法師〔俗姓市往氏也〕宜下改ニ市往氏ニ賜ニ岡連姓ニ傳中其兄弟上又天平九年十月正六位上市往泉麻呂賜ニ岡連姓ニ〇百木按ニ市往ハ拾芥抄ニイナサキト訓リ又イチユキ歟イチイキナルヲ約メテイチキト云ヘルカ〕

出レ自ニ百濟〔同上〕國明王ニ〔異本之後二字あり〕也

葛井宿禰石雄云々賜二姓蕃良朝臣一〇三代實錄貞觀六年八月右京人河内守蕃良朝臣豊村葛井連居都成等賜二姓菅野朝臣一本系出レ自二百濟國貴須一也又元慶元年十二月右京人大初位下葛井連直井等三人賜二姓菅野朝臣一其先百濟人也〕

菅野朝臣〔異本なし〕同祖鹽君男味散君之後也

宮原宿禰〔一本宮野朝臣に作〇續紀延暦十年正月主税大屬從六位下船連今道等八人因レ居賜二宮原宿禰一注レ上〕

菅野朝臣〔異本なし〕同祖鹽君男知〔異本智に作〕仁君之後也〔異本此文なし〇注云一本(異本なし)同國都慕王十世孫貴首王之後也〇同國以下の文一本本文に書す〕

津(ツノ)宿禰〔異本朝臣に作〇津對馬之船津也〇敏達紀詔二船史王辰爾弟午一賜レ姓爲二津史一〇續紀天平寶字二年八月津史秋主等言云々請レ改二史字一於レ是賜二姓津連一又延暦九年七月津連眞道等上表改二換連姓一蒙二賜朝臣一勅因レ居賜二姓菅野朝臣一〕

菅野朝臣〔異本なし〕同祖鹽君男番〔異本番字なし〕侶〔異本侶保に作〕君之後也〔鹽君午定若〇續紀延九年七月系圖注　辰孫主(長子)　大阿良王子　亥賜君(其子)　午定若(生二三男一)　(長子)味沙(賜二葛井宿禰一)　(仲子)辰爾(船史祖)　(季子)麻呂(賜二津史一)信友按辰孫カ族十二支ノ中ノ字ヲツキタルカコレカレトミユルハ其生年ノ支ヲツキタルニヤ辰孫王亥陽君辰爾午定若マタ辰爾カ弟ニ牛ト云カアルモ丑ノ字ヲカヘタルニヤ〕

中科(ナカシナノ)宿禰〔一本朝臣に作〇續紀延暦十年正月津連巨都雄等兄弟姉妹七人因レ居賜二中科宿禰一〇敏達紀船史王辰爾弟牛賜レ姓爲二津史一〇欽明紀卅年見下王辰爾之甥膽津賜レ姓爲中白猪史上〕

菅野朝臣〔異本なし〕同祖鹽君孫宇志之後也〔宇志牛〕

船(フネノ)連〔攝津國船連同祖〇欽明紀十四年七月以二王辰爾一爲二船長一因賜レ姓爲二船史一今船連之先也〇敏達紀天皇執二高麗表疏一授二大臣一云々爰有二船史祖王辰爾一能奉二讀釋一〇天武紀十二年十月船史賜レ姓曰レ連〇續紀天平寶字二年七月船史賜二船直姓一〇三代實錄貞觀五年八月右京人御船宿禰彦主云々御船宿禰氏柄船連助道等賜二姓菅野朝臣一河内國丹比郡

信友按天智紀ニ百濟王善光王トアル下ノ王ハ衍字ニテ此禪廣ナルヘシ持統七年五年ノ紀ニモ善光トアリ天智三年紀ニ居ニ難波ートアリ本多善光ト世ニ云傳ルモ若クハ此人ナランカ」　昌成〔從四位下攝津亮郎虞（郎虞古本大字に書す）〕　敬福〔從三位刑部卿○義慈王より刑部卿まで卌二字一本なし〕

百濟王（クタラオホキミ）〔王字音賜ニ王號ー也續紀文武三年四月高麗若光賜ニ王姓ー之例也○舒明紀三年三月百濟王義慈入ニ王子豐璋ー爲レ質○天智紀以ニ織冠ー授ニ於百濟王子豐璋ー以ニ多臣蔣敷之妹ー妻女之云々送ニ本鄕ニ〕

出レ自ニ〔異本なし〕百濟國義慈〔異本茲に作〕王ニ〔一本加筆云號百濟王○異本之後乃字あり〕也

菅野朝臣（スカノ）〔菅野朝臣神功紀見ニ百濟國王肖古王及王子貴須ー○續紀延曆元年七月百濟王仁貞百濟王元信百濟王忠信津連眞道等上表言眞道等本系出レ自ニ百濟國貴須王ー貴須王者百濟始興王第十六世王也夫百濟大祖都慕後王者日神降レ靈奄ニ扶餘ー而開レ國天帝授レ籙惣ニ諸韓ー而稱レ王降及ニ近肖古王ー遙慕ニ聖化ー始聘ニ貴國ー是則神功皇后攝政之年也其後輕島豐明朝御宇（應神）命ニ上毛野氏遠祖荒田別ー使ニ於百濟ー搜ニ聘有識者ー國主貴須王恭奉ニ使旨ー擇ニ採宗族ー遣ニ其孫辰孫王（一名智宗王）隨レ使入朝上云々難波高津朝（仁德）御宇以ニ辰孫王長子太阿郎（一本作レ良）王ー爲ニ近侍ー太阿郎王亥陽君亥陽君子午定君生ニ三男ー長子味沙仲子辰爾季子麻呂從レ此而別始爲ニ三姓ー名因レ所レ職以命レ氏焉葛井船津連等卽是也逮ニ于他田朝（敏達）御宇ー高麗國遣レ使上ニ烏羽之表ー群臣諸司莫ニ之能讀ー而辰爾進取ニ其表ー能讀巧寫詳奏ニ表文ー云々伏望改ニ換連姓ー蒙ニ賜朝臣ー於レ是勅因レ居賜ニ姓菅野朝臣ニ〕

出レ自ニ百濟〔異本此四字なく同の字あり〕國都〔異本孝に作〕慕王十世孫貴首王ニ〔異本之後字あり〕也

葛井宿禰（カツラキノ）〔注レ前續紀養老四年五月改ニ白猪史氏ー賜ニ葛井連姓ー延曆十年正月葛井連道依船井今道等言葛井船津連等本出ニ一祖ー別爲ニ三氏ー而今津連等幸遇ニ昌運ー先賜ニ朝臣ー而道依今道等猶滯ニ連姓ー云々共蒙ニ改姓ー詔許之道依等八人賜ニ姓宿禰ー今道等八人因レ居賜ニ宮原宿禰ー又對馬守正六位上津連吉道等十人賜ニ宿禰ー少外記津連臣都雄等兄弟姉妹七人因レ居賜ニ中科宿禰ー○續後紀承和元年十月右京人

內國(漢氏)高丘宿禰出レ自二百濟國公族廣陵高穆一○續紀神護景雲二年六月高丘宿禰比良麻呂卒其祖沙門詠近江朝歲次癸亥(天智二年)自二百濟一歸化云云神龜元年改爲二高丘連一景雲元年賜二姓宿禰一注二河內國高丘宿禰二〕

高向村主(タカムコノ)〔高向纖體紀振媛之御在所越前國邑名和名抄高向(多加無古)〕出レ自二〔異本なし〕魏武帝太〔印本大に作一本に據て改〕子文帝一〔異本之後字あり〕也〔○魏武帝姓操字孟德○文帝姓曹諱丕見二文選注一〕

雲梯連(ウナテノ)〔和名抄大和國高市郡(宇奈天)○續紀天平寶字五年三月漢人伯德廣足等六人賜二姓雲梯連一〕高向村主同祖寶〔異本宗に作〕德公之後也〔寶德公魏武帝之後雜姓中穴穗村主曹氏寶德公之後也〕

郡首(コホリノ)〔郡下脫文按郡家首〕高向村主〔高向村注ハ左京下魏武帝大子文帝之後也山城國民使首考ヘシ〕同祖政姓夫公之後也〔之後也の三字元なし和學所本に據て補○注云一名富等之後也○一本一名以下の注文なし○信友云一名富等の四字細書の紛れて之後也まて及へるなり〕

祝部(ハフリベ)〔祝地名乎○欽明紀難波祝津宮○和名抄上野國新田郡祝人(波布利)祝部訓二波布利倍一〕工造同祖吳國人田利須須之後也

百濟

義慈王〔續紀天平神護二年六月刑部卿從三位百濟王敬福薨其先者出レ自二百濟國義慈王一高市岡本宮御宇(舒明)天皇御世義慈王遣下其子豐璋王及禪廣王入侍上洎二于後岡本朝廷一(齊明)義慈王兵敗降レ唐其臣佐平福信尅復二社稷一遠迎二豐璋一紹二興絕統一豐璋纂基之後以レ譖橫殺二福信一唐兵聞之復攻二州柔一(按に天智紀百濟地名とあり)豐璋與二我救兵一拒レ之救軍不レ利豐障駕レ船遁二于高麗一禪廣因不レ歸レ國藤原朝廷賜レ號曰二百濟王一卒賜二正廣參一子百濟王昌成每年隨レ父歸朝先レ父而卒(按に天武紀三年正月見二百濟王昌成薨一)飛鳥淨御原御世贈二小紫一子良虞奈良朝廷從四位下攝津亮高敬福者郎其第三子也云云聖武皇帝甚以嘉尙授二從三位一遷二宮內卿一俄加二河內守一勝寶四年拜二常陸守一遷二右大辨一頻歷二出雲讚岐伊豫等國守一神護初任二刑部卿一薨時年六十九〕豐禪(一本璋に作)王　禪廣王〔號二百濟王一○

太「元大に作異本に據て改」秦公宿禰同祖〔異本此文なし〕酒秦公〔秦公酒ト改ヘシ前文秦忌寸左京諸蕃上太秦公宿禰又山城諸蕃秦忌寸等ノ注ニモ秦公酒トアリ〕之後也

淨山忌寸

出レ自ニ〔異本なし〕唐人賜綠〔元錄に作異本に據て改〕沉淸庭一〔庭異本朝に作又之後二字あり〕也〔信友云賜綠ハ小字ノ例也左京諸蕃嵩山忌寸ノ書入又其アタリノ本文見合ヘシ其例ニヨレハ本賜綠トアルヘキナリ沉惟岳沈庭朂ナド云唐人モ同部ニミユ又新長忌寸ハ唐人馬淸朝之後也トアルモ似タル名ナリ〕

栗栖首「注ニ左京上文宿禰一〇栗栖和名抄山城國愛宕郡久留須〇神功紀栗林三代實錄卷四愛宕郡栗栖野〇式河內國若江郡栗栖神社〕

文宿禰同祖王仁之後也

工造〔山城國工造同依ニ職員令一裁ニ縫衣服一之工也應レ訓ニ伎奴々比乃美夜都古一〇應神紀卅七年遣ニ阿知使主都加使主於吳一令レ求ニ縫工女一爰阿知使主等渡ニ高麗國一欲レ達ニ于吳一則至ニ高麗一更不レ知ニ道路一乞ニ知道者於高麗一高麗王乃副ニ久禮波志二人一爲ニ導者一由レ是得レ通レ吳吳王於レ是與ニ工女兄媛第媛吳服穴織四婦女一〇古事記應神段百濟國貢ニ上吳服西素二人一也又秦造之祖漢直之祖及知レ釀レ酒人名仁蕃亦名須々許理等參渡來也故是須々許理釀ニ大御酒一以獻〇按太理須々同人乎一」

出レ自ニ〔異本なし〕吳國人太利須〔傍注云異本無之〇異本之後二字あり〕也

田邊史「注ニ右京皇別上田邊史一皇極御世賜ニ河內山下田一以レ解ニ文書一爲ニ田邊史一者同地乎又按雄畧紀飛鳥戶郡人田邊史伯孫古市郡人書首加龍等同祖乎」

出レ自ニ「異本なし」漢王之後知摠一「異本之後二字あり」也

右第二十三卷

右京諸蕃下

起ニ大山忌寸一盡ニ海原造一六十三氏

漢

大山忌寸〔續紀延曆二年四月右京人從八位上大石林男足等賜ニ姓大山忌寸一〕

高岳〔異本丘に作〕宿禰同祖廣陵高穆之後也〔〇河

ヘキ事ハ決シ同姓戸録ニ人ト云フ戸ノ部ニ池上掠トアリ又日置倉河原ノ藏ナト云モ見エタリコレニヨレハコヽノ椋モ氏ニテ又ハ戸ナルヘシ姓名錄ニ藏人氏ミエタリ山城國愛宕郡ニ暗部山又鞍馬山葛野郡ニ小倉山ナト云カアルクラノ地名ヨシアリケナリコレラ今思ヒ出タルノミヲ云ナホ考フヘシ」

阿祖使主男武勢之後也

松野連

出レ自ニ〔異本なし〕呉王夫差ニ〔異本之後二字あり〕○按左傳及史周元王四年越伐レ呉夫差死呉滅○信友云通鑑前編曰呉亡其支庶入レ海爲レ倭トアリ」也

八清水連

出レ自ニ〔異本なし〕唐左衞郎將〔異本採に作〕王文度ニ〔異本之後二字有〕也

楊津連「和名抄攝津國河邊郡楊津〔也奈以豆〕鄉○續紀天平寶字五年三月百濟人王國嶋等五人賜ニ揚津連」

八清水連同祖王文度之後也〔異本此十二字なく同上の字有〕

若江造〔和名抄河内國若江〔和加江〕郡〕

出レ自ニ〔異本なし〕後漢靈帝苗裔奈癸張安力ニ〔異本之後二字有〕也

下村主〔左京上下村主同○續紀養老四年六月河内國若江郡人正八位上河内午人力子作廣麻呂改ニ賜下村主名一免ニ雜戸號一○同紀卷十一外從五位下烏安麻呂賜ニ下村主姓一○和名抄河内國安宿郡賀美資母有ニ二鄕一〕

出レ自ニ〔異本なし〕後漢光武帝七世孫愼〔古本頂に作〕近王ニ〔異本之後二字あり〕也

秦忌寸〔注ニ左京上太秦公宿禰山城國秦忌寸ニ〕

太〔異本大に作〕秦公禰宿同祖〔異本此文なし〕功滿王〔異本之後也三字あり〕三世孫秦公酒之後也

秦忌寸

太〔異本大に作〕秦公宿禰同祖功滿王之後也〔異本此文なく同上の二字あり〕

秦忌寸

大〔異本太に作〕秦公宿禰同祖〔異本此文なし○注云一本〔異本なし〕始皇帝十四世孫尊義王之後也○異本此注なし又一本本文に書す〕

秦人〔人一本忌寸に作○以上四氏注ニ左京上ニ〕

麻呂言因レ居命レ氏從來恒例是以河內忌寸因レ邑被レ氏其類不レ一請少麻呂牽ニ諸子第ー改ニ換臺氏ー蒙ニ賜岡本姓ー許之（岡本河內國交野郡）○續紀嘉祥二年八月右京人從七位上臺忌寸善氏賜ニ姓淸江宿禰ー〔淸江攝津國墨江萬葉集卷一幸ニ于難波宮ー時歌住吉之弟日娘）〕同祖〔注云一本（異本なし）漢孝獻帝男白龍王之後也○異本河內忌寸同祖の字なく漢孝以下の注本文に書す〕

錦織村主〔山城國錦部村主同祖○和名抄山城國愛宕郡錦部（爾之古利）河內國錦部同○村主注ニ左京上〕

出レ自ニ〔異本なし〕韓國人波努〔異本怒に作〕志ニ〔和學所本之後ニ字あり〕也

檜前村主〔檜前和名抄大和國高市郡比乃久末○陵式檜隈〕

出レ自ニ〔異本なし〕漢高祖男齊王〔王上一本掉惠の字あり○漢高祖姓劉諱邦字季沛人也見ニ文選注ー○河內國下曰佐及高道連ノ下ニカクアルニ從フヘシ〕肥ニ〔和學所本之後ニ字あり○齊王肥河內國諸蕃下曰佐高道連同祖漢高祖男齊掉惠王高祖以ニ長子肥ー爲ニ齊王ー〕也

廣階連〕文德實錄齊衡二年八月河原連貞雄等改ニ姓廣階宿禰ー〔注ニ河內國諸蕃河原連ー〕〕

出レ自ニ〔異本なし〕魏武皇帝〔魏武帝姓曹諱操字孟德注ニ左京上筑紫史ー〕子〔異本男に作〕陳思王植ー〔和學所本之後字あり○陳思王一名東阿王曹植字子建魏武帝第三子也〕也

平松連

廣階連同祖陳思王之後也〔元同上とのみあり異本に據て補ふ〕

上村主〔注ニ左京上上村主ー○和名抄大和國宇智郡吉野郡賀美郡珂賓母又河內國安宿郡賀美〕

廣階連同祖通剛王之後也〔左京上上村主陳思王植之後也〕

掠人〔掠地名式大和國宇陀郡掠下神社百木掖ニ椋ハムク掠ハクラ也クラムノ義也扨式ニ掠下神社トアルヲ舊訓ムクモト、訓秘訓ニハ掠本ト書テムクモト、訓タリ宣長主ハ掠下ハクラシト訓レタリ掠人掠下ノ掠ハ掠ニテクラナランカ○信友云拾芥抄人名錄ニ掠字ヲ倉ノ訓ノ條ニ収ラレタレハクラト訓

志我閉連〔河内國志我閇連同祖○續紀寶龜八年三月外從五位下志我閇造東人賜二姓連一○志我萬葉集卷一詠二志我能大和田一又卷二志我津子等者近江國志賀郡也○和名抄近江國滋賀(志賀)郡○同國同郡ニ滋賀鄕有志賀村モアリ〕

出レ自二〔異本なし〕山田宿禰同祖王安高之後一也

長野連〔長野和名抄河内國志紀郡式同郡長埜神社○續後紀承和四年二月近江國人散位永野忌寸石友散位同姓加古麻呂等改二本居一貫二附左京五條三坊一石友之先後漢献帝苗裔也〕

出レ自二山田宿禰〔異本なし〕同祖忠意之後一也

山田造〔河内國山田造同祖○續紀天平寶字二年十二月山田史廣名云々賜二姓造一又神護景雲元年九月左京人正七位下山田造吉繼賜二姓山田連一○續後記天長十年十二月左京人少外記山田 造吉嗣云々賜二宿禰姓一〕

出レ自二山田宿禰同祖忠意之後一也〔異本同上に作〕

高村宿禰〔續紀延曆四年三月正六位上春原連田使從七位下眞木山等改二春原連一爲二高村忌寸一(延曆三年七月賜二春原連一〕

出レ自二〔異本なし〕魯恭王〔見二史記宋世家及漢書列傳一〕之後靑州刺史列宗王一〔異本劉琮之後又一本劉琮に作○按文選阮瑀與二孫權一赤壁之役周瑜水軍之時荊州江陵之守也○一本作二列宗一省字〕也

伊吉〔異本古に作〕連〔伊吉國號○天武紀十二年十月壹岐史賜レ姓曰レ連○續後紀承和二年九月河内國人伊吉史豐宗云々賜二滋野宿禰一唐人揚雍之孫貴仁之苗裔也(注二左京上伊吉連一)〕

出レ自二〔異本なし〕長安人劉家揚雍一〔和學所本之後二字有〕也

常世連〔注二左京上常世連一○河内國常世連同祖○式河内國大縣郡常世岐姫神社〕

出レ自二〔異本なし〕燕國王公孫淵一〔異本鄧又關又劉に作左京上及河内國常世連に淵とあるに從ふへし和學所本淵下之後二字あり〕也

臺〔元壹和學所本に據て改〕忌寸〔臺舊用二字音一字彙云臺地名又姓和名抄古本臺(宇天奈)○百木云注本ニ臺連ヲ擧テ臺忌寸ヲ記サヽルハ書損ナルヘシ〕

河内忌寸〔河内忌寸河内國諸蕃山代忌寸同祖魯白龍王之後也○續紀養老元年九月從五位上臺忌寸少

忌寸弟麻呂等四人並改二忌寸一賜二宿禰姓一〕
坂上大宿禰同祖〔注云一本（異本なし）同五世孫色夫直之後也○異本坂上以下七字なく一本以下の注本文書す又古本一本以下の注なし〕
佐太宿禰〔和名抄河內國茨田郡佐太郷○續紀延暦四年六月佐太忌寸賜二姓宿禰一〕
坂上大宿禰同祖〔和學所本同三世孫兎（異本兎に作）子直之後也に作又一本同上につくる〕
谷宿禰〔續紀卷卅八谷忌寸賜二姓宿禰一（注ニ文忌寸一）〕
坂上大宿禰同祖〔注云一本（古本なし）同四（一本三に作）世孫宇志直之後也○異本坂上以下七字なく一本以下の注本文に書す又異本同上に作る下三條同し〕
畝火宿禰〔畝火式大和國高市郡畝火山口神社同地乎〕
坂上大宿禰同祖〔注云一本（異本なし）同三（一本四に作）世孫大父直之後也〕
櫻井宿禰〔和名抄河內國河內郡櫻井（佐久良井）○後大和國風土記ニ城上郡櫻井郷云々コレカ畝火モ大和也〕
坂上大宿禰同祖〔注云一本（異本なし）同四世孫東人直之後也〕
路宿禰〔續紀延暦六年六月路忌寸泉麻呂改二忌寸一賜二宿禰姓一（平田宿禰同時）〕
坂上大宿禰同祖〔注云一本（異本なし）谷宿禰同祖（異本也乃字あり）〕
文忌寸〔應神紀廿年九月倭漢直祖阿知使主其子都加使主並率二已之黨類十七縣一而來歸焉（注ニ左京上文宿禰）○天武紀書連賜レ姓曰二忌寸一〕
坂上大宿禰同祖都賀直〔都加直大和國山邊郡都介同地乎雄略記命二東漢直掬一以二新漢陶部鞍部畫部錦部譯語等一遷二居上桃原不桃原眞神原三所一○尊卑分脈丹波氏ニ後漢靈帝四世孫ニ高貴王アリ注ニ始而爲二本朝一來害住二當國阿多信一號二都賀使王一トアリナホ左京上丹波史ニ系圖ヲ引リ〕之後也
山田宿禰〔山田和名抄河內國交野郡也河內國諸蕃山田宿禰長野連等可二考合一○續紀寶龜元年十一月外從五位下山田連公足等卅人賜二姓宿禰一○按欽明紀十七年見三葛城山田直瑞子爲二田令一是亦同祖乎〕
出レ自二〔異本なし〕周靈王太子晋一〔異本之後字あり〕也

在ニ諸國ニ漢人亦是其後也云々望請改ニ忌寸ニ蒙ニ賜宿禰姓ニ云々詔許之坂上内藏平田大藏文調文部谷民佐太山口等忌寸十姓一十六人賜ニ姓宿禰ニ○三代實錄貞觀四年七月左京人坂上伊美吉能文坂上伊美吉斯文等九人賜ニ姓坂上宿禰ニ後漢孝靈皇帝四世孫阿智使主之裔與ニ坂上大宿禰ニ同祖也〕出レ自ニ〔異本なし〕後漢靈帝男〔男異本之後とあり〕延王ニ〔異本之後の字あり又一本男以下三字なし〕也〔按ニ尊卑分脈ニ正王ト有ハ此延王ヲ誤カ延王系圖ハ左京上木津忌寸ニ引ケリ〕

檜原宿禰〔續後紀承和六年七月右京人内藏宿禰高守井門忌寸諸足山口忌寸永嗣大藏宿禰雄繼大藏忌寸繼長檜原宿禰總道等男女十三人賜ニ姓内藏宿禰ニ雄繼高守之遠祖後漢靈帝之苗裔也○檜原大和國城上郡纏向之檜原村同地乎〕

坂上大宿禰同祖

都賀直〔下文都賀宿禰ノ處ニ云ヘリ〕

賀提有〔異本直に作〕之後也〔此二段印本なし一本を以て補ふ〕

内藏宿禰〔和名抄内藏寮〔宇知久乃良乃豆加佐〕○續紀延曆四年六月内藏忌寸賜ニ姓宿禰ニ○文德實錄天安元年正月民忌寸内藏忌寸平田忌寸文忌寸大藏忌寸檜前忌寸川原忌寸谷忌寸等云改々ニ忌寸ニ賜ニ伊美吉姓ニ〕

坂上大宿禰同祖〔注云一本〔異本なし〕都賀直四世孫東人直之後也○異本坂上以下七字なく一本の注文本文に書す文古本一本以下の注なし〕

山口宿禰〔前文河内國皇別山口朝臣負ニ河内國大坂山口ニ蓋同地乎○續紀延曆四年六月山口忌寸賜ニ姓宿禰ニ〔注ニ文宿禰ニ〕○續後紀卷八山口忌寸永嗣云々賜ニ姓内藏宿禰〔注レ前〕又卷十七右京人山口忌寸豐道山口忌寸興道山口忌寸貞道婦人山口忌寸周子等五人並改ニ忌寸ニ賜ニ朝臣ニ焉豐道等後漢靈帝曾孫阿智王苗裔也〕

同四世孫都黃直之後也〔異本坂上大宿禰同祖に作古本都以下の六字なし〕

平田宿禰〔平田和名抄大和國城上郡辟田乎又近江國愛智郡平田○齋明紀平浦〔平此云ニ比羅ニ〕○續紀延曆四年六月平田忌寸賜ニ姓宿禰〔注レ前〕又同六年六月平田忌寸杖萬呂路忌寸泉麻呂蚊屋忌寸淨足於保

令ニ朝貢一也任那者去ニ筑紫國一二千餘里北阻レ海以在ニ鷄林之西南一○垂仁紀二年御間城崇神天皇之世額有レ角人乘ニ一船一泊ニ于越國笥飯浦一故號ニ其處一曰ニ角我一也問之曰何國人也對曰意富加羅國王子名都怒我阿羅斯等云々天皇詔ニ阿羅斯等一曰改ニ汝本國之名一追負ニ御間城天皇御名一使下爲ニ汝國名一仍以ニ赤絹織一給ニ阿羅斯等一返中于本土上故號ニ其國一謂ニ彌摩那國一○欽明紀惣言ニ任那一別言加羅國安羅國斯二岐國多羅國卒麻國古嵯國古他國散半下國乞食國稔禮國合十國〕

道田連〔續紀寶龜元年五月三田毗登家麻呂四人賜ニ姓道田連一毗登卷卅天平寶字九歲改ニ首史一爲ニ毗登一〕

出レ自ニ〔異本なし〕任那國賀〔異本羅字あり〕室〔異本年字あり且室上賀字あり〕王一「異本王字なし且之後三字有〕也

大市首〔和名抄大和國城上郡大市（於保以知）○崇神紀大市箸墓同地〕

出レ自ニ任那〔異本此四字なく同字あり〕國人都怒〔異本怒なし又努に作も有〕賀阿〔賀阿異本加に作〕羅斯止ニ〔一本之後字あり○止誤ニ等字一下同〕也

清水首

出レ自ニ任那國人都怒賀〔異本何に作〕阿羅斯〔異本志に作〕止〔一本之後字あり〕也〔異本此文なくして同上二字に作〕

右第二十二卷

右京諸蕃上

起ニ坂上大宿禰一盡ニ田邊史一四十氏〔印本三十九に作其數を計るに合はす今一本に據ニ姓を補因てかくのことく改む〕

漢

坂上大宿禰〔坂上陵式春日邪河之坂上上同地乎○續紀天平寶字八年九月坂上忌寸苅田麻呂賜ニ坂上大忌寸一又延暦四年六月坂上大忌寸苅田麻呂等上表言臣等本是後漢靈帝之曾孫阿智王之後漢祚遷レ魏阿智王因ニ神牛敎一出行ニ帶方一云々携ニ女弟遷興德及七姓氏一歸化來朝是則譽田天皇治ニ天下一之御世也於レ是阿智王奏請曰臣舊居在ニ於帶方一人民男女皆有ニ才藝一近者寓ニ於百濟高麗之間一云々其人男女擧落隨レ使盡來爲ニ公民一積レ年累レ代以至ニ于今一今

高(カウ)〔高舊用二字音一○續紀天平寶字二年六月高麗使主賜二多可連一○式山城國綴喜郡高神社和名抄多河○百木云抄ナル河ハ柯カ珂ヲ誤レルナラム〕高麗〔異本同に作〕國人〔人字異本なし〕高助斤之後也

高

高麗〔異本同に作〕國人從五位下〔異本高字あり〕金藏〔法名信成○信成還俗復二本姓(注レ前)之後也〕

新羅〔新羅訓二志良岐一○神代紀上素盞嗚尊師二其子五十猛神一降二到於新羅國一居二曾尸茂梨之處一○仲哀紀栲衾新羅國○右京皇別下新良貴彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊男稻飯命之後也○出雲風土記書二志羅紀一○新羅按二朝鮮國圖一釜山浦南一島之舊名也今號二巨濟縣一〕

橘守〔續後紀承和七年十一月辛巳勅橘戸頓橘橘連伴橘連橘守橘等六姓與二橘朝臣一相涉宜レ賜二椿戸頓椿々連伴椿連椿守椿等一自餘以二橘字一爲レ姓之類亦以レ椿換レ之〕

三宅連〔三宅連右京下新羅國王子天日杵之後也〕同祖天日杵〔異本桙に作○杵充二保古辭一新撰字鏡杵(支禰)杵(保巳)○垂仁紀三年三月新羅王子天日槍來歸焉一云天日槍入二近江國吾名邑一暫往復更自二近江一經二若狹國一西到二但馬國一定二住處一也是以近江國鏡谷陶人則天日槍之從人也天日槍娶二但馬出島人太耳女麻多烏一生二但馬諸助一也諸助生二但馬日猶杵一日猶杵生二諸彥一諸彥生二田道間守一也○垂仁九十年天皇命二田道間守一遣二常世國一令レ求二非時香菓一今謂レ橘是也云々田道間守是三宅連之始祖也○古事記垂仁段三宅連等之祖名多遲麻毛理○古事記應神段新羅國主之子名謂二天之日矛一云々娶二多遲摩之俣尾之女名前津見一生二子多遲摩母呂須久一此之子多遲摩斐泥此之子多遲摩比那良岐此之子多遲摩毛理次多遲摩比多訶云々清日子娶二當摩之咩斐一生二子酢鹿之諸男一次管竈由良度美故上云多遲摩比多訶娶二其姪由良度美一生二子葛城高額比賣命一(此者息長帶比賣ノ御祖ナリ)○日矛之傳筑前風土記曰怡土郡怡土縣主等五十跡手曰高麗國意呂山自レ天降來日杵之苗裔五十跡手是也(謂意呂山自レ天降者風土記有レ例)〕命之後也

任那〔崇神紀六十五年秋七月任那國遣二蘇那曷叱知一

〔異本部に作〕志發ニ〔和學所之後字なり〕也

高史(ノフンヒト)〔續紀天平寶字二年六月越後目正七位上高麗使主馬養内侍典侍從五位下高麗使主淨日等五人賜ニ多可連一宜ニ考合一〕

出レ自ニ高麗〔四字異本なく同字有〕國〔和學所本人字あり〕元羅郡杵王九世孫延拏〔異本拏に作〕王一〔和學所本之後字あり〕也

日置造(ヒオキノ)〔右京下日置造高麗人伊利須使主之後也 ○續紀寶龜八年四月賜ニ從五位上日置造雄三成等四人鳥井宿禰一正八位下日置造飯麻呂等二人吉井宿禰一 ○續後紀承和十一年十月左京人日置宿禰眞淨造輪田使主典云々賜ニ三統宿禰一〕

出レ自ニ〔二字一本同に作〕高麗國人〔四字一本なし〕男馬王裔孫芸古君一〔孫以下の字一本なし和學所之後字あり〕也〔男以下の字異本伊利須意彌〔異本禰に作〕也に作按に異本從ふへし〕

河内民首(カフチノミタミノ)〔河内訓ニ加布知一 民式和泉國大鳥郡美多彌神社地名爲レ氏〕

出レ自ニ〔異本なし〕高麗國人〔人字異本なし〕安列〔異本劉又卿に作〕王一〔和學所本之後字あり〕也〔按ニ列ハ劉ノ省字刘ナルヲアヤマレルナリ右京上高村宿禰ノ條ニモ劉ヲ刘ト書キ又列ニモ誤タル本アリ○按東國通鑑有ニ安藏王安原王一〕

後部藥使主(シトリヘクスシノオミ)〔諸蕃中後部有レ四名高麗人後也應レ訓ニ志利止里倍志牟杼里倍一訓議採レ据也据和名抄伎奴乃之利○和名抄越前國丹生郡從省訓ニ之止無一通鑑古注云公服從省服也左傳從ニ其省一〕

出レ自ニ高麗〔四字異本なく同字あり〕國人大〔異本文に作〕兄憶德一〔和學所本之後字あり〕也

王(ワウ)〔異本此下木字有古本本字あり○王用ニ字音一○續紀大寶元年八月勅僧惠耀信成東樓並還俗復ニ本姓一云々惠耀姓錄名兄麻呂信成姓高名金藏東樓姓王名中文又同三年四月從五位下高麗若光賜ニ王姓一又養老二年正月王仲文授ニ從五位下一〕

出レ自ニ〔異本なし〕高麗國人從五位下王仲〔王字元なし和學所本に據て補〕文〔異本之後也乃字あり〕結〔一本俗に作又一本之後也乃字あり〕名東樓一也〔異本此四字なし又古本名東樓乃三字分注す○信友云王仲文〔俗名東樓〕之後也ト訂スヘシ續紀ノ文ニヨリ下條ノ高氏ノ文法見合テ知ヘシ〕

王虫麻呂ニ〔異本之後字あり〕也

福當連〔古本訓フタキ〇續紀天平寶字五年三月高麗人云々前部高久信賜ニ姓福當連ー〇百木按和名抄信濃國小縣郡福田アリフクタ歟サクタ歟又越前國坂井郡ニ福留（布久呂）鄕アリ福當福留字相似タリコレラニテモヤアランサテ福當ハフタトモフクタトモ訓ルナリナホ可レ考又和名抄ニ下野國都賀郡ニ布多鄕アリフタト訓ナルヘシ又二田（布多田）又二村（布多無良ナト云鄕名ミユ）〕

出レ自ニ高麗〔四字異本なく同字あり下同〕國人前郡〔異本部に作〕能〔異本虫字あり〕韋ニ〔異本安之後三字あり〕也

御笠連〔續紀神龜元年五月正八位上高正勝賜ニ三笠連ー〕

出レ自ニ高麗〔同上〕國人從五位下高庄子ニ〔異本之後字あり〇高庄子見ニ續紀ー和銅元年正月授ニ正六位上高庄子買文會並從五位下ー〕也

出水連〔出水崇神紀山背輪韓河時人改號ニ其河ー曰ニ桃河ー今謂ニ泉河ー〇續紀山背國相樂郡出水鄕和名抄同郡水泉（以豆美）鄕〇續紀寶龜七年五月正六位上後部石島等六人賜ニ姓出水連ー〕

出レ自ニ高麗〔同上〕國人那〔異本後又俊又郡に作〕能一本邪又部に作〕致〔異本能又鼓に作〕元〔異本鼓兄に作〕之後ー〔異本兄也に作又異本なし〕也〔注云異本後部〇後部能致元（異本兄に作）之後也ナルヘシ後部ハ未定雜姓ニ後部高ハ後部高千金之後也又後部高ハ後部乙牟之後也トアル後部ト同シ又能ハ前文福當連ハ前部能韋之後也トアル能ト同シキカ元ハ一本兄トアル方正シカランカナホ考ヘシ〕

出レ自ニ高麗〔同上〕國人高〔異本高字なし〕福俗ニ〔異本裕に作且之後字あり〕也

男抹〔一本床に作〕連〔續紀神龜元年五月從八位上高益信賜ニ男抄連ー〇男抹一本男床トカケリサレハ抹ハ誤ニテ牀字也正シクハ牀ト書ヘシ拾芥抄ニヲヤカ古本ニヲユカト訓リ〕

出レ自ニ高麗〔同上〕國人高道士ー〔異本之後字あり〕也

福當造〔注ニ福當連ー〇一本此福當造日置造ノ次ニアリ〕

出レ自ニ〔異本なし〕高麗〔和學所本國字あり〕人前郡

加須流氣二〔異本此下之後字あり〇加須流氣雄略紀
百濟加須利君（盖鹵王同人乎）也
飛鳥造〔雄略紀 河内國飛 鳥戸部和名抄安宿（安須加
倍）郡〇右京下飛鳥戸造出レ自二百濟國比有王一（蓋
同祖乎）〇續後紀 承和六年十一月左京人正六位上
御春宿禰春長等十一人改二宿禰一賜二朝臣一是百濟王
之種飛鳥戸等之後也〇三代實錄貞觀四年七月左京
人飛鳥戸 造禰道賜二 姓百濟宿禰一 百濟國混伎 之後
也〕
出レ自二百濟〔異本此四字なく同字あり〕國人〔此下
異本國字あり〕木吉〔異本古に作〕志〔木吉志上文木
貴公同人乎〇百濟王嗣注二右京下一〕之後一也
高麗〔倭名古末〇神功紀元年十月高麗百濟二國王聞下
新羅收二圖籍一降中於日本上云々從レ今以後永稱二西
蕃一不レ絕二朝貢一故因以定二内官家一是所レ謂之三韓
也應神紀七年九月高麗人來朝（始見）〇古事記仲哀
段新羅國者定二 御馬甘一百濟國者定二 渡屯家一（高麗
國無レ所レ見）〇好古曰考二東國通鑑一神功庚辰歲當二
于新羅奈解王五年 高麗山上王四年百 濟肖古王三
十五年一〇天智紀七年十月大唐大將軍英公打二滅高
麗一高麗仲牟王初建レ國時欲レ治二千歲一也母夫人云
若善治レ國可レ得也但當レ有二七百年之治一也今此國
亡者當レ在二七百年之末一也〇又云十年正月高麗遣二
上都大相可婁等一進レ調不レ記二其王名字一〕
高麗朝臣〔續紀天平勝寶二年二月從四位上背奈王福
信守等六人賜二高麗朝臣姓一又寶龜十年三月從三位
高麗朝臣福臣賜二姓高倉朝臣一又延曆八年七月高倉
朝臣福信薨福信武藏國高麗郡人也本姓背奈其祖福
德屬二唐將李勣一拔二平壤城一來二歸國家一居二武藏一焉
福信卽福德之孫也〇一本加筆云天平十九年六月正
五位下背奈福信外正七位下背奈大山從八位上背奈
廣山等八人賜二背奈王姓一〕
出レ自二〔異本なし〕高句〔異本勾に作〕麗王好台七
世〔世字元なし和學所本に據て補〕孫延興〔異本典
に作〕多二〔和學所本之後字あり〕也
豐原連〔續紀天平寶字五年三月高麗人云々上部王蟲
麻呂賜二姓豐原連一 上部王彌夜太理等十人賜二姓豐
原造一同紀延曆元年四月右京人少初位下壹禮比福
麻呂等一十五人賜二姓豐原連一〕
出レ自二〔異本なし〕高麗國人上郡〔異本部又都に作〕

美作國勝田郡人從八位上家部國持等六人賜二石野連一癸亥美作備前兩國家部母等理部二氏人等盡レ頭賜二姓石野連一○按依二備前國石生藤野之地一而賜二石野氏一乎應レ訓二伊波乃一〕

出レ自二百濟〔異本此四字なく同の字あり〕國人近速王〔異本肖古王に作○肖古王 古事記應神段照古王神功紀四十九年見二百濟肖古王及王子貴須一〕孫憶賴〔異本欸に作○信友按天智紀ニ憶禮トアルト此ニ憶賴トアルトオモヒ合スルニ賴禮共ニライト唱タルナリ〕福留之後一〔異本之後字なし〕也〔天智紀二年九月憶禮福留並二國民等一至二於五禮城一發レ船明日始向二日本一〕

神前(カムサキノ)連〔神前和名抄 近江國神崎〈加無佐伎〉○天智紀四年二月 百濟百姓男女四百餘人居二于近江國神前郡一又同年三月給二神前郡百濟人田一○續紀神龜元年五月正六位下賈受君賜二神前連一〕

出レ自二百濟〔異本此四字なく同字あり〕國人正六位上賈受〔異本賈受に作る〕君一〔此下異本之後字あり〕也

沙田(マスタノ)史〔百木云 沙田ハマスタト訓ナラム和名抄安藝國沙田〈萬須多〉郡アリ陸奥國磐井郡ニ沙澤郷アリマスサハト唱フ村名帳ニ鱒澤村トアルコレ也内山氏サタトヨマレツルハ如何○信友云マスタハマサコタノ轉ナルヘシ今モ小石ノアル田地ヲマサコ田トモ石田トモ云ヘリ〕

出レ自二百濟〔異本此四字なく同字あり〕國人〔人字異本なし〕意保屋王一〕此下異本之後字あり〕也

大丘(オホヲカノ)造〔三代實錄貞觀六年八月 左京人大丘造塵繼大丘連田刈等四人賜二姓宿禰一〕

出レ自二百濟〔異本此四字なく同字あり〕國連〔一本速に作又異本肖に作〕〔吉王十二世孫恩率〕右京下清道連は恩率云々之後也○信友按恩率ハ百濟國ノ官名ナルヘシ上文香山連ノ下ニ達率トアルタクヒトキコユ〕高難延子一〔異本此下之後字あり〕也

小高(コタカノ)使主〔百木云和名抄常陸國行方郡 小高郷アリ寛和集ニ小高村アリ常陸誌云小高古多加又陸奥國磐城郡小高郷又上野國綠埜郡山高郷トアルハ小高ノ誤也三代實錄ニ貞觀五年上野國正六位上小高神トアルハコレナリ〕

出レ自二百濟〔異本此四字なく同字あり〕國人毛甲姓

能美二〕

水海連同祖〔一本此五字なし〕百濟國努〔異本奴に作〕理使主之後也譽田天皇〔諡應神○諡應神三字元大字一本に據て改〕御世歸化孫阿久大〔和學所本太に作〕男彌和次賀夜次麻利彌和爾〔古事記傳弘につくる〕計〔異本億又憶に作〕天皇諡〔異本稱以下乃五字なし〕顯宗御世蠶織献ニ絁絹之樣一仍賜ニ調首姓一

林連(ハヤシノ)〔林訓波夜志顯宗紀爲ニ室壽一曰御心之林　萬葉御筆波夜志和名抄山城國拜志（訓ニ波以之一者音訛也）○續紀神龜元年五月從五位下能兄麻呂賜ニ林連正七位上荊軏武香山連二〕

出レ自ニ百濟〔異本此四字なく同乃字有〕國人木貴公二〔此下異本之後字あり○木貴公下文木吉志同人乎雄略五年　混支王來朝而後有ニ五子一也按木貴公應ニ其後孫二〕也〔杜氏通典云百濟國大姓有ニ八族一沙氏燕氏劦氏解氏眞氏木氏苩氏國氏劦音狹苩音白○信友按ニ林氏ハ木氏ヲトリナホシタルナランカ〕

香山連(カグヤマノ)〔式大和國十市郡古事記景行段歌比佐迦多能阿末能迦具夜麻○續紀卷九荊軏武賜ニ香山連一（注レ前）○續後紀承和二年十一月從八位上香山連清貞改レ連賜ニ宿禰一其先百濟國人也〕

出レ自ニ百濟〔異本此四字なく同の字あり〕國人達率荊員常二〔此下異本之後字あり〕也〔杜氏通典云百濟國云々官有ニ十六品一左率一品達率二品云々〕

高槻連(タカツキノ)〔古事記仁德段菟寸河之西有ニ一高樹一其樹之影當ニ旦日一者逮ニ淡路島一當ニ夕日一者越ニ高安山一云云按今攝津國高槻村是也注ニ國號考一○續紀神龜元年五月正七位下高昌武賜ニ殖槻連一高槻同氏乎〕

出レ自ニ〔異本なし〕百濟國人達率名〔異本各に作〕進二〔異本此下之後字有〕也

廣田連(ヒロタノ)〔右京下廣田連同（作ニ辛臣君二）○廣田神功紀廣田國式和名抄攝津國武庫郡廣田（比呂多）○續紀天平寶字二年九月右京人正六位上辛男床等一十六人賜ニ姓廣田連二〕

出レ自ニ百濟〔異本此四字なく同の字あり〕國人帝〔一本爭に作又辛に作右京下廣田連同〕臣君二〔異本此下之後字あり〕也

石野連(イハノ)〔續紀天平寶字五年三月百濟人憶頼子老等四十一人賜ニ姓石野連一又神護景雲三年六月備前國藤野郡人母止理部奈波志坂郡人外少初位上家部大水

君ニ(混支王也)曰汝宜下往ニ日本ニ以事中天皇上軍君對曰願賜ニ君婦ニ而後奉レ遣加須利君則以ニ孕婦ニ嫁ニ與軍君ニ云々六月孕婦於ニ筑紫各羅島ニ産レ兒仍名ニ此兒ニ曰ニ島君ニ於レ是軍君卽以ニ一船ニ送ニ島君於國ニ是爲ニ武寧王ニ百濟人呼ニ其島ニ曰ニ生島也(生作レ王誤)秋七月軍君入レ京既而有ニ五口子ニ(百濟新撰同)○雄略廿三年冬高麗王發ニ軍兵ニ伐ニ盡百濟ニ(百濟紀曰蓋鹵王云々沒ニ敵手ニ)○廿一年三月文淵王薨天皇以ニ混支王五子中弟二末多王ニ使レ王ニ其國ニ是爲ニ東城王ニ○繼體紀十七年　五月百濟國王武寧薨十八年正月百濟太子明卽レ位○欽明紀十五年十二月見ニ百濟國聖明王其子　餘昌次王子惠ニ○聖明王欽明十五年十二月見レ殺レ于新羅奴手ニ其子餘昌見ニ欽明十八年百濟ニ王子餘昌嗣立是爲ニ威德王ニ王子惠欽明十六年二月奏曰聖明王爲レ賊見レ殺)也

百濟朝臣(クタラノ)(續紀天平寶字二年六月造ニ法華寺ニ判官從六位下余東人等四人賜ニ百濟朝臣姓ニ○續後紀承和七年六月備中介外從五位下余何成右京人屬正六位下余禍成等三人賜ニ姓百濟朝臣ニ其先百濟人也)出レ自ニ百濟國孝慕王ニ(異本此八字なく同王字あり○孝慕王百濟國大祖也續紀卷四十作ニ都慕王ニ注レ前)三十世孫惠(異本思に作)王ニ(異本此下之後字あり○惠王聖明王之子欽明紀百濟王子餘昌(爲ニ威德王ニ)遣ニ王子惠ニ奏(王子惠者威德王之弟也)○信友按ニ續紀ニ余東人續後紀ニ余何成余禍成ナトミエタル余ハ姓ニテ餘昌王ノ餘ヲ繼稱オリシナルヘシ)也

百濟公(續紀天平寶字五年三月百濟人余民善女等四人賜ニ姓百濟公ニ○續後紀承和六年八月改ニ加賀國人正六位上百濟公豐貞本居ニ貫ニ附左京四條三坊ニ豐貞之先百濟國人也○又十三年三月播磨國揖保郡人百濟公清永並男一人女一人改ニ本居ニ貫ニ附左京三條二坊)出レ自ニ百濟國孝慕王(異本此八字なく同王字あり)二十四世孫汶淵王ニ(此下異本之後字あり○汶淵王(蓋鹵王之女子也)雄略廿一年三月與ニ其國ニ雄略廿三年薨(注レ前))也

調連(ツキノ)(古事記傳首に作○調調布和名抄都伎手作也○水海連河內國諸蕃出レ自ニ百濟國人努理使主ニ也調曰佐同○努理使主古事記仁德段見ニ筒木韓人奴理

姓氏錄廿二日都慕王二十四世孫
汶洲王〔雄畧廿年百濟紀曰蓋鹵王沒同廿一年三月汶洲王興其國蓋鹵王之母弟也同廿三年汶淵王薨混伎王五子中弟第二末多王是爲東城王〕

東城王〔東城王一名末多王〕

聖明王〔繼體紀十八年見百濟太子明卽位○欽明十五年十二月聖明王見殺于新羅軍〕

威德王〔欽明十八年百濟王子餘昌嗣立是爲威德王〕

姓氏錄廿二都慕王世孫
王子惠〔威德王之弟欽明十六年二月見使於日本〕

義慈王〔按續日本紀舒明天皇朝〕註前

豐璋王〔註前〕

禪廣王〔持統紀五年正月增封百濟國禪廣王百戸通前二百戸云々

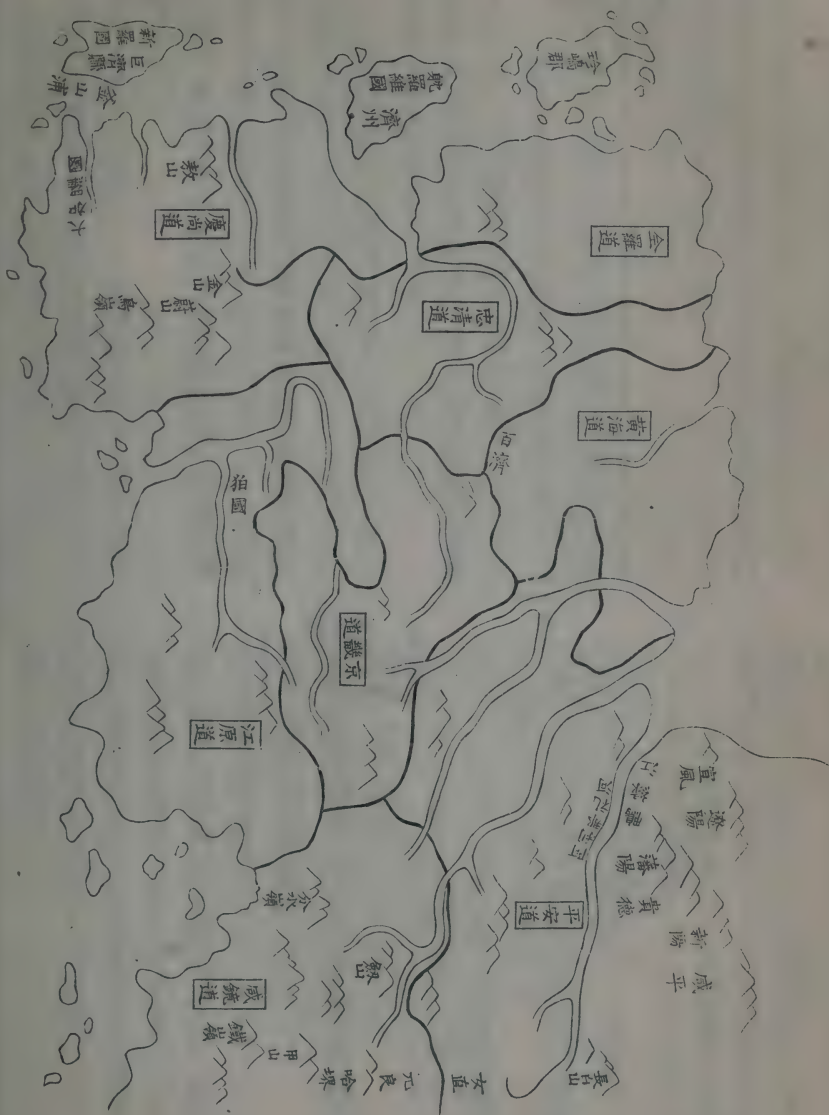
百濟王昌成〔藤原朝廷賜號曰百濟王毎年隨父歸朝先父而卒、天武紀三年正月百濟王昌成薨〕

高敬福〔聖武帝授從三位天平神護二年六月薨時年六十九〕

和朝臣〔和倭通用訓夜萬止〕○武烈紀六年又七年百濟國遣麻那君進調云々留而不放○七年四月百濟王遣斯我君進調別表曰前進調使麻那者非百濟國主之骨族也故謹遣斯我奉事於朝遂有子曰法師君是和名之祖也○續紀延曆二年四月左京人和史國守等三十五人賜姓朝臣又八年十一月皇太后姓和氏諱新笠賜正一位乙繼之女也母大枝朝臣眞妹后先出自百濟武寧王之子純陀太子云々天宗高紹(光仁)天皇龍潛之日娉而納焉生今上(桓武)早良親王能登内親王寶龜中改姓爲高野朝臣今上卽位尊爲皇太夫人九年追上尊號曰皇太后其百濟遠祖都慕王者河伯之女感日精而所生皇太后則其後也因以奉謚焉曰天高知日之子姬尊又延曆九年二月授百濟王玄鏡從四位下百濟王仁貞正五位上百濟王鏡仁從五位下是日詔曰百濟王等朕之外戚也今所以擢一兩人加授爵位〕

出自〔異本此二字なし〕百濟國孝慕〔異本都慕に作〕王十八世孫武寧王〔異本此下之後字あり○雄略紀五年四月百濟加須利君〔蓋鹵王也〕告其弟軍

朝鮮國圖

宣風
遂陽
新陽
咸平
藩陽
貴德
長白山
平安道
女直
兀良
哈堺
甲山
盤山
分水嶺
咸鏡道
鐵嶺
京畿道
江原道
黃海道
全羅道
忠清道
珍嶋郡
耽羅維國
濟州
慶尚道
教山
金山
蔚山
鳥嶺
新羅國
釜山浦

王一便立二阿花一爲レ王〕

阿花王〔應神朝（七年八月）百濟人來朝十四年弓月君自二百濟一來歸同十六年阿花王薨○阿直支王嗣レ位〕

阿直岐〔應神十五年來朝○古事記應神段阿知吉師者阿直史等之祖也〕

王仁〔應神十六年來朝○古事記應神段和邇吉師者文首等之祖〕

阿直支王〔應神十六年嗣レ位同廿五年阿直支王薨其子久爾辛立爲レ王〕

久爾辛王〔應神廿五年爲レ王○續日本紀卷四十延曆十年四月曰二王仁同時一百濟人素王是乎〕

○一本加筆云背古王—貴須王—枕流王—辰斯王—知宗—阿花王—眞支王—新齊都媛—久爾辛王

酒君〔仁德紀四十一年酒君來〕

努理使主〔姓氏錄卷廿二曰應神天皇御世歸化孫阿久太男彌和次賀夜次麻利云々賜二調首姓一〕

麻那君〔武烈紀六年七月來朝進レ調〕

斯我君〔同上〕

智宗王〔續日本紀卷四十延曆九年七月見二智宗王一一名辰孫王貴須王之宗族也應神天皇御世入朝〕

太阿良王〔同紀見辰孫王之長子也仁德天皇御世爲二侍臣一子亥陽君其子午定若生二三男一別爲二三氏一各因レ所レ職以命レ氏〕

午定君之長子 味沙〔賜二若井宿禰一〕

仲子 辰爾〔賜二船史一敏達紀元年見二船史祖王辰爾一〕

季子 麻呂〔賜二津史一〕

百濟國主 比有王〔姓氏錄卷廿八見二飛鳥戸造一〕

蓋鹵王〔雄略紀五年四月見二百濟加須利君一（蓋鹵王也）同廿年爲二高麗一沒二敵手一〕

混支王〔雄略五年百濟加須利君云々其弟軍君（混支王也）軍君入レ京有二五口子一○姓氏錄曰比有王男混支王〕

姓氏錄廿二曰都慕王十八世孫 武寧王〔雄略五年產二於筑紫各羅島一仍名二島君一是爲二武寧王一○繼體十七年五月武寧薨○續日本紀卷四十光仁天皇皇太夫人其先出レ自二武寧之子純陀太子一〕

持二內外典樂書明堂圖等百六十四卷佛像一軀〔佛像度二日本國一者見ニ欽明紀一十三年十月百濟聖明王献二釋迦佛金銅像一軀幡蓋若干經論若干卷別表讃一（委佛度傳）〕伎樂調度一具等一入朝男善那〔異本郡に作〕使主天萬豐日天皇〔論孝德○此三字元大字に書異本に據て改〕御世依レ献二牛乳一〔献二牛乳一者書紀无レ所レ見續紀和銅六年五月始令下山城國點中乳牛戸五十戸上○信友按醫心食性ニ牛乳和名宇之乃知〕賜二姓和藥使主一奉レ渡二本方書一百三十卷明堂圖一卷〔異本卷字なし〕藥臼一及伎樂一具一今在二大寺一〔大寺天平以後每國在二四大寺一〕也

大石（オヒシ）

高丘宿禰〔河內國諸蕃高岳宿禰出レ自二百濟國公族大夫高侯之後廣陵高穆一也〕同祖廣陵〔異本陵字なし〕高穆之後也〔以上漢人之戸枚書紀無レ所レ見焉以下三韓任那者欽明紀高麗百濟新羅任那編戸籍惣七千五十三戸〕

百濟（クタラ）

或今按曰朝鮮國初無二傳記一史記曰武王既克レ殷乃封二箕子於朝鮮一〔按都ニ于平壤一也箕子之孫四十代箕丕丕之子箕準立而二十四年燕人衛滿入二于朝鮮王城一奪レ國箕準沒落是漢惠帝之世也衛滿三世而亡○姓氏錄雜姓燕衛滿公之後爲二箕氏一〕西漢五世孝武皇帝元封三年朝鮮國降二於漢一乃置二樂洛浪臨屯豚玄菟眞番婆郡一○新唐書曰樂浪郡下韓之地〔三韓及三國之地不レ詳〕

百濟國王書紀入朝人名

百濟大祖都慕王〔見二續日本紀卷四十一姓氏錄書二孝慕王一應二同人一〕

背古王〔神功紀四十六年見二百濟背古王一同五十五年背古王薨○信友按ニ背古王ノ背ハ肖ノ誤ニテ肖古王ナランカ〕

肖古王（通鑑百濟第六世）〔神功紀四十九年見二百濟王肖古及王子貴須一古事記應神段見二百濟國主照古王一〕

貴須王（姓氏錄都慕王十世）〔神功紀五十六年立爲レ王同六十四年薨王子枕流王立爲レ王貴須王之宗族辰孫王應神天皇御世來朝○十世誤二七世一〕

枕流王〔神功紀六十五年枕流王薨王子阿花少年也叔父辰斯奪爲レ王〕

辰斯王〔應神紀三年見下辰斯王失レ禮百濟國殺二辰斯

主八釣前出雲大目正七位下村主貞成等賜二姓廣階宿禰一自言魏陳思王曹植之後也○廣階連右京上魏武皇帝子陳思王植之後也○陳思王植文選注曰曹植字子建魏武帝弟三子也初封二東阿王一後改封二雍丘王一〕廣〔異本唐に作〕階連同祖陳思王植之後也

筑紫史〔攝津國竺志史同祖○續紀延曆四年二月近衞將監外從五位下筑紫史廣鳥賜二姓野上連一〕陳思王植〔注云一本號東阿王〕之後也

右第二十一卷

左京諸蕃下

起二吉水連一盡二清水首一三十七氏

漢

吉水連〔續紀天應元年八月左京人正七位下善麻呂等三人賜二姓吉水連從七位下善三野麻呂等三人吉水造一〕

出レ自二前漢魏郡人蓋寬饒一〔蓋寬饒字次公魏郡人傳見二漢書一〕也〔也上和學所本之後字あり〕

牟佐村主〔牟佐欽明紀倭國高市郡置二韓人大身狹屯倉一式牟佐神社〔同地〕○雄略紀八年二月遣二身狹村主靑一云々使二於呉國一按村主對レ連其大者稱二大連一其小者號二須久里一○和泉國蜂田藥師呉王孫權王之後也〕

出レ自二〔和學所本此二字なし〕呉孫權男高一〔和學所本之後字あり〕也

和藥使主〔和藥使主訓二夜万止乃久須志乃於美一對二和泉國蜂田藥師一○三代實錄貞觀六年八月左京人右近衞將曹正六位上和藥使主弟雄式部位子從八位下和藥使主安主兵部位子從八位下和藥使主黑麻呂等改二使主一賜二宿禰一其先呉國人智聰也〕

出レ自二呉國主照淵孫智聰一也天國排開廣庭天皇〔諡欽明○此三字元大字に書異本に據て改む〕御世隨二〔異本隋に作〕使大伴佐尼〔異本手又弖に作〕比古一〔佐尼比古宣化紀二年詔二大伴金村大連一遣二其子磐與二狹手彥一以助二任那一狹手彥往鎭二任那一加救二百濟一○萬葉卷五大伴佐堤比古特被二朝命一奉二使蕃國一云々松浦佐用比賣嗟二此別易一歎二彼會難一卽登二高山之嶺一遙望二離去之船一云々遂脫二領巾一麾レ之因號二此山一曰二領巾麾之嶺一也○欽明紀廿三年八月大將軍大伴連狹手彥領二兵數萬一伐二于高麗一云々得二珍寶貨賂七織帳鐵屋一還來〔鐵屋在二高麗西高樓一〕

當宗忌寸(サムネノ)〔式河内國志紀郡當宗神社〕

後漢〔按に孝字脱するか〕獻帝四世孫山陽〔元湯に作る和學所本に據て改〕公之後也〔山陽公注二河内國當宗忌寸一〕

丹波史(タハノフヒト)

後漢靈帝八世孫孝日〔異本日字なし和學所本白に作〕王〔異本王字なし按に尊卑分脉丹波氏靈帝ノ九世孫孝子トアルコレナルヘシ〕之後也

尊卑分脉丹波氏云後漢靈帝　正王石秋　王阿智王─

─高貴王 始而爲本朝來害(本マヽ)住二當國阿多信一號二都賀使王一(本ノマヽ)　志拏直 於二本朝一出生住二丹波國一賜二坂上姓一

─駒子弓束首孝子大國康頼 針博士醫博士左衞門醫佐從五上始而賜二丹波宿禰一云々

─重明─忠明 典藥頭從四位下侍醫丹波介改二宿禰一賜二朝臣一

─誰忠(雅カ)

大原史(オホハラノ)〔攝津國大原史同祖○續後紀承和三年五月右京人大原史河麻呂改レ史賜二姓宿禰一其先出レ自二後漢孝靈帝之後麗王一也〕

漢〔漢上一本出自字あり〕人西姓令貴之後也

桑原村主(クハハラノスグリ)〔和名抄大和國葛上郡桑原○天武紀朱鳥元年四月侍醫桑原村主訶都授二直廣肆一因以賜レ姓曰レ連○續紀文武三年正月詔授二內藥官桑原加都直廣肆一賜二姓連一○村主注二村主氏一○天武紀文武紀ト同シキハイツレカ混ヒタルナルヘシ〕

漢〔漢上一本出自字あり〕高祖七世孫萬德使主之後也

下村主(シモツ)〔右京上下村主同○和名抄河内國安宿郡大和國吉野郡又宇智郡加美那珂資母○續紀養老四年六月河内國若江郡人正八位上河内手人刀子作廣麻呂改二下村主姓一免二雜戸號一又天平六年十二月外從五位下烏安麻呂賜二下村主姓一○續後紀承和三年五月河内國人美濃國小目下村主氏成云々等賜二姓春瀧宿禰一其先遠祖出レ自二後漢光武帝之後一者也〕

後〔後上一本出自字あり〕漢光武帝七世孫愼〔異本惟又塡に作〕近王之後也

上村主(カムツ)〔攝津國上村主同祖○續紀神護景雲三年七月河内國大縣郡人從五位上村主五百公賜二姓上連一○三代實錄貞觀八年閏三月左京人左少史正六位上村

ナリ〕張道光入朝焉沈惟〔惟同上〕岳同時也〔也乃印字印本なし一本を以補〕

榮山忌寸〔續紀延暦三年六月唐人賜緑晏子欽賜緑徐公卿等賜姓榮山忌寸、又同六年四月唐人王維淸朱政等賜姓榮山忌寸〕

・唐人正六位上〔古本下に作〕注云本國岳賜祿〔國異本及又司に作岳字異本なし又一本倉又兵に作祿緑に作〕晏子欽入朝焉沈惟〔惟同上〕岳同時

長國忌寸〔續紀延暦三年六月唐人正六位下吾税兒賜永國忌寸（嵩山忌寸同時）〕

唐人正六位上〔注云大神宮賜祿〔大異本本に作神押に作宮官に作祿緑に作〕〕正〔異本五又吾につくる〕税〔異本㮤又祝に作〕兒入朝焉沈惟〔惟同上〕岳同時也〔也字異本を以て補け〕

榮山寸忌〔注レ前〕

唐人正六位上〔注云本判官賜祿〕徐公卿入朝焉沈惟〔惟同上〕岳同時也〔也字異本を以て補〕

嵩山忌寸〔注レ前〕

唐人正六位上〔注云本丑食賜祿〔丑食異本及倉に作祿緑に作〕〕孟惠芝入朝焉沈惟〔惟同上〕岳同時〔按に也の字有へし〕

淸川忌寸〔續紀延暦五年八月唐人盧如津賜姓淸川忌寸〕

唐人正六位上〔注云本賜緑〔印本祿に作異本に據て改〕〕盧〔異本虚に作〕如津入朝焉沈惟岳同時〔按に也の字有へし〕

淸海忌寸

唐人正六位上〔元上字なし異本に據て補注云本賜緑〕沈庭四勛〔四勛異本昴に作〕入朝焉沈惟〔惟同上〕岳同時也〔也字本を以て補○上作自清海宿禰迄清海忌寸賜八氏者沈惟岳入朝同時也續紀天平寶字五年八月迎藤原河淸使高元度等至自唐國云々元度等向蘇州與刺史李岵平章造船一隻〔長八丈〕並差押水手官越州浦陽府折衝賞紫金魚袋沉惟岳等九人水手越州浦陽府別將賜緑陸張什等三十八人等送元度等歸朝於太宰府安置云へリ

新長忌寸〔續紀延暦七年五月唐人馬淸朝賜姓新長忌寸〕○信友云新長ハ今譯語ノ義ナランカ〕

唐人正六位上馬淸朝〔元朝字なし異本に據て補〕之後也

年十二月玄蕃頭從五位上袁晋卿賜ニ姓淨村宿禰ト晋卿唐人也天平七年隨ニ我朝使ニ歸朝時年十八九學ニ得文選爾雅音ト爲ニ大學音博士ト○一本加筆云於レ後曆ニ大學頭安房守ニ」

陳〔陳上異本出自字あり〕袁〔異本表に作る〕濤塗之後也〔之後也三字異本なし○一本出レ自ニ陳袁濤塗正五位下李元環ニ（異本懷に作）也に作○信友按空海力性靈集爲ニ藤眞川峯清豐ニ啓一首トアル文草ニ曰如今故中務卿親王之學正六位上淨村宿禰淨豐者故從五位上勳十一等晋卿之弟九男也父晋卿遙慕ニ聖風ヲ遠辭ニ本族ヲ誦ニ兩京之音韻ヲ改ニ三呉之訛響ヲ口吐ニ唐言ヲ發ニ揮嬰學之耳目ヲ遂乃位登ニ五品ニ職踐ニ州牧ニ男息九人任中而生弘秀兩人則任經ニ中外ニ俸食ニ判官ニ並皆降年短從不幸而殞宦弟一身孑然孤留是則眞川等受業之先生也云々」

清宗宿禰〔續紀天平勝寶二年二月唐人正六位上李元環授ニ外從五位下ニ又天平寶字五年十二月唐人外從五位下李元環賜ニ姓李忌寸ニ又寶龜二月十一月秦忌寸元環授ニ正五位下ニ○一本加筆云天平寶字七年正月元環爲ニ織部正ニ」

唐人正五位下李元環之後也

清海宿禰〔續紀天平寶字十一年五月左京人從六位上斯蕭行麻呂賜ニ姓清海造ニ又十一月授ニ唐人正六位上沈惟岳從五位下ニ又寶龜十一年十二月唐人從五位下沈惟岳賜ニ姓清海宿禰ニ編ニ附左京ニ」

唐〔唐上異本出自字あり〕人從五位下沈惟〔印本雅に作異本に據て改〕岳之後也〔之後也三字異本なし○一本出レ自ニ唐人沈惟岳ニ也に作○沅惟岳續紀天平寶字五年八月迎ニ藤原河清使高元度等ニ至レ自ニ唐國ニ云々沈惟岳等九人送ニ元度等ニ歸ニ朝於太宰府ニ又同六年正月饗ニ唐人沈惟岳等於太宰府ニ」

嵩山忌寸〔嵩山音須勢○續紀延曆二年六月唐人正六位上孟惠芝正六位上張道光等賜ニ姓嵩山忌寸ニ三河國八名郡嵩山今云ニ須勢ニ」

唐人外從五位下船典賜祿〔祿異本綠に作祿ノ字ノ事異本書入ニ尙按賜祿或作レ錄共非也當レ作ニ綠字ニ見ニ續日本紀ニ信友云此考可レ用賜綠トアル本云々賜綠トアリ本國ニアリシトキ云々綠色衣ヲ免サレタル由ナルヘシ○船以下四字に異本細字に書次信友按ニ例ニ因ルニ船ノ上ニ本ノ字アルヘシ脱タル

高野天皇〔稱德天皇ナリ〕神護景〔一本慶に作〕雲三年依ニ居地ニ〔異本汶に〕改賜ニ大崗忌寸姓ニ也

幡(ハタノ)〔異本播に作〕文造(フミノ)〔續紀慶雲元年十月正六位上幡文通爲ニ遣新羅大使ニ云々幡文通賜ニ造姓ニ〕

同上〔異本大崗忌寸同祖安貴公之後也に作〕

揚隻〔異本公亦候に作〕忌寸〔和泉國楊公史達率楊公阿了王之後也トモ云ヘリ○續紀神護景雲二年正月左京人從五位下楊胡毘登人麻呂等男女六十四人賜ニ姓楊胡忌寸ニ○續後紀承和三年木工寮師八戸史議益云々等廿人賜ニ姓常澄宿禰ニ其先高麗人也出レ自ニ隋〔印本木に作和學所本によりて改〕煬〔異本光字あり〕帝之後達〔印本遠に作異本に據て改〕率楊隻〔古本候異本公に作〕阿子〔異本了又部に作〕王ニ也〔異本阿子王也乃四字なし○達率ハ和泉國楊候直及左京下香山連又高槻連右京下城篠連ニミユサテ率ニ遠率思率德率杆率ノ品アリ〕

楊〔一本陽に作〕胡史〔異本後段木津忌寸の次に入○續紀文武四年八月勅僧通德惠俊並還俗賜ニ通德姓陽侯史名久爾曾ニ〕

同上〔異本楊隻忌寸同祖に作〕

木(コ)津(ヅノ)忌寸〔異本前段楊胡史乃前に入○續紀延曆元年十二月倭漢忌寸木津吉人等八人言吉人等是阿智使主之後也是以蒙ニ賜忌寸之姓ニ可レ注ニ倭漢木津忌寸ニ而誤記ニ倭漢忌寸ニ木津姓字繁多唱謂不レ穩望請除ニ倭漢二字ニ爲ニ木津忌寸ニ許之〕

後漢靈帝三世孫阿智使主〔元王に作異本に據て改○阿智使主應神紀廿年九月倭漢直祖阿智使主其子都加使主並率ニ已之黨類十七縣ニ而來歸焉〕之後也〔尊卑分脉波氏ニ後漢靈帝——正王——石秋王阿智王高貴王（始而爲ニ本朝來害仕當國阿多信ニ號ニ都賀使王ニ）志拏直（於ニ本朝ニ出生住ニ丹波國ニ賜ニ坂上姓ニ）○河內和泉ノ火撫ノ直ニハ靈帝四世孫阿智王トアリ續紀天平寶字八年九月ニ後漢靈帝之曾孫阿智王云々トアレハ尊卑分脈ナル正王ヨリカソヘテ叶ヘリ古書ニ何世孫ト云ルニ大祖ヨリカソフルト其次ヨリカソフルト二ヤウアリ○百木按木津ハ山城ノ木津カ大和長谷寺驗記ニ三條院御宇ニ山城國泉ノ木津トミユ今モ木津村アリ○拾芥抄コツト訓メリ水泉和名抄相良郡水泉（以豆美）鄕〕

淨村(キヨムラ)宿禰〔元此二字なし異本に據て補○續紀寶龜九

同郡ニ高負神社アリ又常陸誌山川條ニ云武生山ハ國訓多介布佐牟在ニ久慈郡武生村北ニト見ユ〕

同祖〔異本文宿禰同祖に作〕王仁孫河〔異本阿に作〕浪古首之後也〔一本仁孫以下乃十字なし〕

櫻野首

同上〔一云武生宿禰同祖阿浪古首之後也〕

伊吉連〔伊吉壹岐同（注ニ國號考壹岐島ニ）天武紀壹岐史賜レ姓曰レ連○續後紀承和二年九月河内國人左近衞將監伊吉史豐宗及其同族惣十二人賜ニ姓滋生〔野誤〕宿禰ニ唐人揚雍之孫貴仁之苗裔也〕

出レ自ニ長安人劉〔異本列に作和學所本此下家字あり〕揚雍ニ也

常世連〔式河内國大縣郡常世岐姬神社○續紀天平十九年八月正六位上赤染造廣足赤染高麻呂等九人賜ニ常世連姓ニ又寶龜八年四月右京人從六位上赤染國持等四人河内國大縣郡人正六位上赤染人足等十二人遠江國蓁原郡人外從八位下赤染長濱因幡國八上郡人外從六位下赤染帶縄等十九人賜ニ姓常世連ニ〕

燕〔此上異本出自字あり〕國王公孫〔古本此下闕字あり〕淵之後也

山代忌寸〔和泉國凡人中家山代忌寸同祖白龍王之後也○續紀天平勝寶八年七月河内國石川郡人漢人廣橋漢人刀自賣等十二人賜ニ山背忌寸姓ニ○續後紀承和十四年八月山城國愛宕郡人散位從五位下山代宿禰祖繼等五人改ニ本居ニ貫ニ左京三條ニ〕

出レ自ニ魯國白〔一本百に作〕龍王ニ也

大崗忌寸〔大崗和名抄大和國添上郡於保乎加○續紀神護景雲三年五月左京人正六位上倭畫師種麻呂等十八人賜ニ姓大崗忌寸ニ〕

出レ自ニ魏文帝〔文帝諱丕姓曹氏武帝子〕之後貴公ニ〔異本王に作〕也大泊瀨幼武〔印本雄畧に作一本に據て改〕天皇〔謚雄畧○印本謚雄畧字なし一本に據て補〕御時〔和學所本世に作〕率ニ四〔異本部字あり〕衆ニ歸化男龍〔一名辰貴○一本貴字なし〕善ニ繪工ニ小泊瀨稚鷦鷯天皇〔謚武烈○印本謚武烈字なし一本に據て補〕美ニ其能ニ賜ニ姓首ニ五世孫勤大壹惠〔異本慧に作る〕尊亦工ニ繪才ニ天智〔天智字一本天命開別に作〕天皇〔一本分注謚天智字あり〕御世賜ニ姓倭畫師ニ〔和學所本名乃字ありまた一本無の字あり〕

上人名和迩吉師（此和迩吉師者文首等ノ祖）應神紀十六年所謂王仁者是書首等之祖也○天武紀十年十二月書直智德賜レ姓曰レ連又十二年九月川内漢直文首云々賜レ姓曰レ連又十三年六月河内漢直秦連書連云々賜レ姓曰二忌寸一○應神紀二十年秋九月倭漢直祖阿知使主其子都加使主並率二已之黨類十七縣一而來歸焉○續紀延暦四年六月坂上大忌寸苅田麻呂等上表言臣等本是後漢靈帝之曾孫阿智王之後漢祚遷二魏阿智王一云々携二七姓氏一歸化來朝是則譽田天皇治二天下一之御代也今在二諸國一漢人亦是其後也臣苅田麻呂等云々望請改二忌寸一蒙レ賜二宿禰姓一詔許之坂上内藏平田大藏文調文部谷民佐太山口等忌寸十姓一十六人賜二姓宿禰一○續紀延暦十年四月左大史正六位上文忌寸最弟播磨少目正八位上武生連眞象等言文忌寸等元有二二家一東文稱レ直西文稱レ首相比行レ事其來遠焉今東文擧家既登二宿禰一西文漏レ恩猶沈二忌寸一云々有レ勅責二其本系一最第等言漢高帝之後曰レ鸞々之後王狗轉至二百濟一久素王時聖朝遣レ使徵二召文人一久素王卽以二狗孫王仁一貢焉是文武生等之祖也於レ是最第及眞象等八人賜二姓宿禰一○神祇令義解曰東漢文直西漢文首○古語拾遺曰輕島豐明朝百濟王貢二博士王仁一是河内文首始祖○泉州志一云東原大明神云々在二云々向井北一或云當社王仁大神也云々河内志交埜郡云河内文首始祖博士王仁墓者在二藤坂村東北御墓谷一今稱二於爾墓一〕出二〔按に自字脱するか〕漢高皇帝之後鸞王一也〕

文忌寸（フミノイミキ）〔天武紀書連賜レ姓曰二忌寸一○續後紀承和元年五月左京人文忌寸歳主同姓三雄等賜二姓淨野宿禰一河内國人文忌寸繼立改（按に此下忌字脱するか）寸賜二宿禰一先百濟國人也〕

文宿禰同祖宇爾古首之後也〔一本宇より以下の七字なし〕

武生宿禰（タケフノ）〔武生催馬樂律歌詠二美知乃久知多介不乃古宇一者越前國也式近江國建部神社○續紀天平神護元年十二月右京人外從五位下馬毘登國人河内國古市郡人正六位上馬毘登益人等四十四人賜二姓武生連一○同紀延暦十年四月漢高帝之後曰レ鸞々之後王狗狗孫王仁武生等之祖也○注二文宿禰一○和名抄武藏國横見郡高生多介布式ニ横見郡高負比古神社又和名抄ニ但馬國氣多郡高生ハ多加布トモヨメリ式

本大鷦鷯に作〕天皇〔異本分注に謚仁德乃三字あり〕御世以二百二十七縣秦氏一〔異本民に作〕分二置諸郡一即使二養レ蠶織レ絹貢一之天皇詔曰秦王所レ献絲綿絹〔此下異本帛字あり〕朕服用柔軟溫二煖肌膚一賜二姓波多公一〔以上乃七字元如次登召志公の六字に作異本に據て改む〕秦公酒〔一本云酒ハ酒公ノ誤トモ云ヘリ百木云誤ニハアラス左京下秦人ノ注考ヘシ〕大泊瀨幼武〔元此五字を雄略二字に作異本によりてあらたむ〕天皇〔謚雄略○元此分注なし異本に據て補〕御世絲綿〔此下異本絹字あり〕帛悉〔異本委に作〕積如レ岳天皇喜〔和學所本嘉に作〕之賜二〔和學所本此下號曰字あり〕禹都萬佐一

秦長藏連(ハタノ)〔古語拾遺至二長谷朝倉朝一秦氏分散寄二隷他族一秦酒公進仕蒙レ寵詔聚二秦氏一賜二於酒公一仍率二領百八十種勝部一蠶織貢調充二積庭中一因賜二姓宇豆麻佐一自レ此而後諸國貢調年々盈溢更立二大藏一云々秦氏出二納其物一○山城諸蕃（秦忌寸傳）大鷦鷯（仁德）天皇御世賜レ姓曰二波陀一今秦字之訓也云々普洞王男秦公酒大泊瀨（雄畧）天皇御世賜二號禹都萬佐一役二諸秦氏一搆二八丈大藏於宮側一納二其貢物一故名二其地一曰二長谷朝倉宮一時始置二大藏官員一以レ酒爲二長官一〕

太秦公同祖融通王之後也〔融通王前文曰一曰弓月王〕

秦忌寸(ハタノイミキ)〔天武紀十四年六月秦連賜二姓忌寸一○山城國諸蕃（秦忌寸傳）天平廿年在二京畿一者咸賜二伊美吉姓一○續後紀承和三年右京少屬秦忌寸安麻呂賜二姓朝原宿禰一○一本加筆云寶龜七年十二月左京人從六位下秦忌寸長野等廿二人賜二姓奈良忌寸山脊國葛野郡人忌寸箕造等九十七人朝原忌寸一〕

同王五世孫丹照之後也〔一云太秦公宿禰同祖融通王五世孫〕

秦忌寸〔續紀天平神護二年十二月大和國人正八位下秦勝古麻呂等四人賜二姓秦忌寸一〕

同王四世孫大藏秦公志勝〔異本膳に作〕之後也〔一云太秦公宿禰同祖〕

秦造(ハタノミヤツコ)

始皇帝五世孫融通王〔王字元なし和學所本に據て補〕之後也

文宿禰(フミノスクネ)〔古事記應神段百濟國主照古王云々受レ命以貢

秦公祖弓月率ニ百廿縣民ニ而歸化矣至ニ長谷朝倉朝ニ秦氏分散寄ニ隸他族ニ秦酒公進仕蒙ニ寵詔聚ニ秦氏ニ賜ニ於酒公ニ乃率ニ領百八十種勝部ニ蠶織貢調充ニ積庭中ニ因賜ニ姓宇豆麻佐ニ○續紀天平十四年八月詔授ニ造宮錄正八位下秦下島麻呂從四位下ニ賜ニ太秦公之名ニ○三代實錄元慶七年十二月秦宿禰云々秦忌寸云々秦公云々等男女十九人賜ニ姓惟宗朝臣ニ云々秦始皇十(誤字)二(一本三)世孫切滿王子融通王之苗裔也○禹豆麻佐今有ニ山城國葛野郡ニ地名也按續紀延曆三年十一月山城國葛野郡人外正八位下秦忌寸足長築ニ宮城ニ(蓋因ニ功田ニ負ニ地名ニ乎)○山城國秦忌寸宜ニ考合ニ○姓氏錄ニ秦氏ヲ扶蘇ノ子孫トアリ扶蘇ハ始皇ノ死セル時北方ノ上郡ヘ三十万ノ兵ノ監軍トノ外ニアリ趙高二世帝ノ命也ト僞リテ死ヲス、メ扶蘇遠方ニ在テ事疑シク思ヒケレトモウマレ付小氣ナル人ナリケレハヤミ〳〵ト自殺セル由史記ニ書タリサレト三十万ノ大兵ヲ帥ヒテ北方ノ鎭ニ向ヒタリ監軍トシテコトニ始皇カ嫡子ナルユヘサル疑シキ命ヲキ、テ其マ、自殺スヘキニアラスコハ自殺ト欺キ稱シテ幸ヒ上郡ハ遼東ニ隣レルユヱ三韓地エ隱タルモノナルヘシ朝鮮ノ邊ニ扶餘國トテアルハコノ時扶蘇カ隱タル所ニテ其子孫ノ在タル國ナルヘシソノ子孫ノ後ニ三韓ヨリ皇國ヘ參渡リタルナルヘシサテ三韓ノ時辰韓馬韓ノ外ニ秦韓ト云ヘル一種ノアリシモ扶蘇ノ子孫ナルヘク亦扶餘モ其種ニテアルヘシサラテハ秦ノトキ皇國ヘ直ニ扶蘇ノ子孫ノ來ルヘキニアラスカシ○信友云右新井君美主ノ說也トテ室直清主ノ書束ニ見エタルヲ要ヲツミ出テ取ナホシテ書タルナリ此說ニヨリテナホ考フヘキ事アリ別ニ云ヘシ胡亥ノ後ノコト大和諸蕃ニ已智氏アリ扶餘國ノコト右京諸蕃御池ノ造ノ下ニアリ」

秦始皇帝三世〔此下異本孫字あり〕孝武王之後也男功滿正〔此下異本帝字あり〕仲哀〔異本彥に作〕異本天皇字あり〕八年〔一本仲哀八年字なし〕來朝男融通王〔一曰弓月王〕應神〔一本譽田に作〕天皇〔異本分注に論應神乃三字あり〕十四年來朝〔異本朝字なし〕率ニ二十七〔異本七字なし〕縣百〔新井氏云百ハ猶ノ誤寫信友云漢ノ部秦忌寸ノ下猶姓トアリ新井主說可ナリ〕姓ニ歸化獻ニ金銀玉帛等物ニ仁德〔一

神社在二大村一也陶邑今陶器庄也接國造本紀須惠國造與二末使主一同祖神也〕

天津彥根命子彥稲勝命之後也

穴師神主（アナシノカンヌシ）〔式和泉國和泉郡泉穴師神社○玄蕃式和泉國安那志一社〕

天富貴命〔古語拾遺天富命同神乎〕之五世孫古佐麻豆知〔和學所本智に作〕命之後也〕

坂合部（サカアヒ）〔坂合堺也接津國皇別坂合部造ニ立國境之標一因賜二姓坂合部連一○火闌命異說也○左京下坂合部宿禰火明命八世孫邇倍足尼之後也〕

火闌降命七世孫夜麻等古命之後也

地祇

長公〔按に長下柄字脫乎大和國長柄首天之八重事代主神之後也〕

大奈年智神兒積羽八重事代主命之後也

右第二十卷

第三帙

左京諸蕃上

起二太秦公宿禰一盡二筑紫史一三十五氏

漢〔後漢書東夷傳云辰韓耆老自言秦亡人避二苦役一適二韓國一馬韓割二東界地一與之其名レ國爲レ邦馬爲レ孤賊爲レ冦行レ酒爲レ行レ解相別爲レ從有レ似二秦語一故或名之爲二秦韓一トアリ○梵語雜名曰梵語ニ謂レ絹爲二鉢吒一トアリタマ〳〵皇國言ノ云々ノ狀ト相似タルナルベシ

太秦公宿禰（ウツマサ）〔應神紀十四年是歲弓月君自二百濟一來歸因以奏之曰臣領二己國之人夫百二十縣一而歸化然因二新羅人之拒一皆留二加羅國一爰遣葛城襲津彥ニ而召二弓月之人夫於加羅一十六年八月新羅王率ニ弓月之人夫與二襲津彥一共來焉○雄略紀十五年秦民分散臣連等各隨レ欲駈使勿レ委二秦造一由レ是秦造酒甚以爲レ憂而仕二於天皇一天皇愛寵之詔聚二秦民一〔一本氏に作〕賜二於秦酒公一仍領二率百八十種勝部一奉レ獻二庸調御調一也絹縑充二積朝庭一因賜レ姓曰二禹豆麻佐一○欽明紀元年八月召二集秦人漢人等諸蕃投化者一安二置國郡一編二貫戶籍一秦人戶數惣七千五十三戶以二大藏掾一爲二秦伴造一○天武紀十二年九月秦造賜レ姓曰レ連又十四年六月秦連賜レ姓曰二忌寸一○古事記應神段秦造之祖及一本漢直之祖知レ釀レ酒人名仁番無名二須々許理一○古語拾遺應神條輕島豐明朝

天穗日命十四世孫野見宿禰之後也

民直〔式大鳥郡美多彌神社○按諸國美多彌地名廢乎其存者注于茲出雲風土記出雲國美談郷云々所造天下大神御子和加布都努志命天地初判之後天御領田之長供奉坐之即彼神坐郷中故云三太三（神龜三年改字美談）〕

同神十七世孫若桑足尼之後也

若犬養宿禰〔河内國若犬養宿禰同神十六世孫尻綱根命之後也○天孫本紀（六世孫）建多乎利命（若犬甘連十六世孫）尾治古利命（當允恭天皇御世）〕

火明命十五世孫古利命之後也〔天香語山命六世之孫建多乎利命若犬甘連等祖〕

丹比連〔式大鳥郡多治速比賣命神社○和名抄丹比隸攝津國〕

同神男天香山命之後也〔天孫本紀天香語山命（五世孫）建筒草命（多治比連等祖）〕

石作連〔註左京下石作連〕

同上

津守連〔註攝津國津守宿禰○天武紀十三年十二月津守連賜姓曰宿禰○續紀養老五年正月見從五位下津守連通王○萬葉集卷二大津皇子竊婚石川女郎時津守連通占露其事皇子歌大船之津守之占爾將告登波益爲爾知而我二人宿之〕

同上

網津守連〔網接津國住吉郡依羅池而謂依網津守乎〕

同上

椋連〔椋久良謂住吉神社地接津國風土記（住吉條）沼名椋之長岡之前○播磨風土記（速鳥船條）歌曰住吉之大倉向而飛者許曾速鳥登云々○式和泉國穗椋神社○天武紀十三年倉連〕

同上

綺連〔綺和名抄加無波太〕

津守連同祖天香山命之後也〔天孫本紀香語山命之後建田背命（神服連祖）〕

高市縣主〔天武記十二年十月高市縣主賜姓曰連〕

天津彥根命十二世孫建許呂命之後也〔古事記上天津日子根命（高市縣主云々之祖）○建許呂命注大和國三枝部連〕

末〔古本拾芥抄末に作〕使主〔末作未非未陶同訓須惠○末地名見崇神紀茅渟縣陶邑○式大鳥郡陶荒田

部守屋大連資人捕鳥部萬將ニ一百人一守ニ難波宅一云
云向ニ茅渟縣有眞香邑一○泉州志泉南郡條ニ云萬之
私宅在ニ日根郡鳥捕鄕一云々又云日根郡ノ下ニ波太
宮ハ在ニ石田村一鳥取鄕惣社也緣起云波太宮鳥取氏
祖神角凝命也末社有ニ天湯河板擧之社一ト云ヘリ○
後和泉國風土記日根郡鳥取鄕ノツヽキニ有ニ鷹飼
村一往昔仁德天皇與ニ酒君一成ニ放鷹之遊一初取ニ雉
子一之所也トアリ〕

角凝命三世孫天湯河桁命之後也

川枯首（カハカレノ）〔三代實錄貞觀四年八月和泉郡人白丁川枯首
吉守叙ニ位一階一奬ニ力田一也〕

阿目加枝〔和學所本伎に作〕表〔一本表に作〕命四世
孫阿目夷沙比止命之後也

荒田直（アラタノ）〔式和泉國大鳥郡陶荒田神社○天武紀十年四
月荒田能麻呂賜レ姓曰レ連〕

高魂命五世孫劒根命之後也

天孫

土師宿禰（ハジノスクネ）〔山城國土師宿禰同○注ニ右京下土師宿禰一
○和名抄大鳥郡土師（波爾之）○和泉志ニ大鳥郡云
土師村ハ上古土師氏居地云々〕

秋篠朝臣同祖天穗日命〔異本此下十字あり〕四世孫
野見宿禰之後也

土師連

同上

山直（ヤマノアタヘ）〔山直訓ニ夜麻乃阿多比一於ニ地名一訓ニ也末多
倍一○式和泉郡山直神社○和名抄同郡山直（也末多
倍）○續後紀承和三年十二月和泉國人山直池作弟
池永等改ニ本居一貫ニ附左京五條一○同紀承和六年十
一月左京人山直池作等十人改ニ直字一賜ニ宿禰一池作
之先出レ自ニ穗日命之後一也○百木云和名抄近江國
甲賀郡山直也末奈保トヨメリ舊ハ山タヘナリケン
ヲ字ニツキテ後ニ唱ノカハリタルナランカヽル例
ナホアリ〕

天穗日命十七世孫日古〔異本吉に作〕曾日〔和學所
本日字なし〕乃己名〔異本呂に作〕命之後也

石津連〔仁德紀六十年十月幸ニ河內國石津原一云々號ニ
其處一曰ニ百舌耳原一○式大鳥郡石津太神社○和名
抄同郡石津（以之都）○泉州志ニ大鳥郡條ニ石津鄕
上石津村下石津村云々續紀曰天平勝寶元年十月石
津王云々〕

郡人外正八位下白猪臣證人等四人賜二姓大庭臣一○泉州志ニ大鳥郡大庭寺在二大庭寺村一相傳行基開基也余按大庭氏建之歟村南有レ池池中島有二碑石一云々蓋大庭氏之墓歟天神本紀曰大庭造饒速日尊稟二天神御祖詔一天降之時供奉神也ト云テ此大庭造ヲ引ケリ〕

神魂命八世孫天津麻良命之後也

神直〔注ニ大和國大神朝臣一○和名抄大鳥郡上神（加無都美和）○文德實錄齊衡元年九月侍醫外從五位下神直虎主散位正七位下神直木並大初位下神直已卉等賜二姓大神朝臣一〕

同神五世孫〔異本孫字なし〕生王兒日子命之後也

紀直〔注ニ河内國紀直一〕

神魂命子御食持命之後也〔舊事記云神魂尊兒天御食持命紀伊直等祖云々○河内國紀直ハ神魂命五世孫天道根命之後也トミユ〕

大村直〔大村和名抄和泉國大鳥郡（於保無良）〕

紀直同祖大名草彥命男枳彌〔此下和學所本都彌字あり又一本都珍に作る〕命之後也〔右京下大村直天道根命六世孫若積命之後也河内國大村直田建天道根命之後也名草紀伊國也和名抄名草郡（奈久佐）○神武紀軍至二名草邑一則誅二名草戶畔一者〕

川瀨造〔元造乃字なし異本に據て補ふ○天神本紀天道根命（川瀨造等祖）○雄略紀十一年五月近江國栗太郡白鸕鷀居二于谷上濱一因詔置二川瀨舍人一○天武紀十二年九月川瀨舍人造賜レ姓曰レ連○尾張國風土記春部郡ニ國造川瀨連ト云ケルモノ云々トアリ〕

神魂命五世孫天道根命之後也〔舊事記云神魂尊兒天道根命川瀨造等祖云々〕

直〔異本並に拾芥抄眞に作〕尻家〔泉州志ニ大鳥郡云直尻村ハ在二河内國八上郡一余按此村鄰二土師村一上古和泉國也後世並爲二河內國一トカキテ此直尻家氏ヲ引ケリ〕

大村直同祖

高野〔和泉志日根郡ニ高野村アリテ曰二新家庄一ト記セリ〕

大名草〔按に此下彥字脫するか〕命之後也

鳥取〔垂仁紀天湯河枝擧賜レ姓曰二鳥取造一亦定二鳥取部鳥養部譽津部一○天武紀鳥取造賜レ姓曰レ連○和名抄和泉國日根郡鳥取（止々利）○鳥取崇峻紀云物

大伴宿禰同祖日臣命之後也
爪(ツマ)〔元瓜ニ作る和學所本に據て改〕工連(タクミノ)〔左京中爪工連同祖○天武紀爪工連賜レ姓曰ニ宿禰一○三代實錄貞觀四年七月伊勢國安濃郡人右辨官史生正七位上爪工仲業賜ニ安濃宿禰一神魂命之後也〕
神魂命男多久豆玉命之後也　雄略天皇御世造ニ紫蓋爪一並奉レ餝ニ御座一仍賜ニ爪工連姓一〔按爪略字爬也和名抄翳(云波)謂造ニ紫盖爪一者華蓋也倭名抄曰青盖車皇太子皇子皆朱輪靑蓋故曰ニ青蓋車一〕
掃守連(カモリノ)〔異本首ニ作○注ニ左京中掃守連一○和名抄和泉國和泉郡掃守(加爾毛利)○百木云古語拾遺ニ掃除事ヲ神代ノ彥火々出見尊ノ時トセリコヽニ雄畧天皇ノ御代トセルハ異傳也泉州志四泉南郡掃守鄕〔加守村〕云々掃守村ハ全按古掃守氏之居地也トアリテ此掃守連ヲ引ケリ又和泉國皇別掃守田ノ首ヲ引テ云掃守田居地同所乎異所乎未ニ分明一トイヘリ○信友云雄略ノ御代ナリシハ異時ニテ神代ノトハ別也〕
振魂命四世孫天忍人〔元日に作和學所本に據て改〕命之後也
雄略天皇御代監ニ掃除事一賜ニ姓掃守連一〔舊事記云振魂尊兒前玉命掃部連等祖次天忍立命云々〕
物部連(モノヽベノ)〔舊事記天神本紀天道根命(川瀨造等祖)○國造本紀神皇產靈命五世孫天道根命定ニ賜紀伊國造一○天武紀物部首賜レ姓曰レ連○和泉皇別物部ヲ考合ヘシ〕
神魂命五世孫天道根命〔神魂ノ子歟〕之後也
和山守首(ヤマトヤマモリノ)〔和山守(爾岐夜麻毛利)○古事記應神段定ニ賜山部山守部一○仁德記倭屯田者元謂ニ山守地一者倭山守而異也〕
同上
和田首(ワタノ)〔和田和名抄大鳥郡(爾木多)今有ニ和田村一○依ニ仁德紀一則應レ訓ニ夜萬止乃夜麻毛利一又夜萬止乃美多而不レ合ニ于此地一○和田基饒田命乎〕
同上
高家首(タカイヘノ)〔式安房朝夷郡高家神社〕
同上
大庭造(オホニハノ)〔依ニ和名抄一美作國大庭(於保無波)郡大庭○續紀天平神護二年十二月美作國人從八位下白猪臣大足賜ニ姓大庭臣一又神護景雲三年五月美作國大庭

後也〔按舊事記宇麻志麻治命七世孫建新川命者倭志紀縣主等祖同弟大咩布命者若湯坐連等祖云々又云八世孫物部弟岐美連公志紀縣主等祖云々〕

若櫻部造〔注ニ右京上若櫻部造ニ〕

速〔按に此上饒字あるへし〕日命十〔異本七に作〕世孫止知〔異本智に作〕尾〔知學所本尼に作〕大連之後也履中天皇御世採ニ櫻花ー獻之仍改ニ物部連ー〔物部連公十市根命歟〕賜ニ姓若櫻部造ー〔異本連に作〕

榎井部〔天孫本紀（四世孫弟）大矢口宿禰命（廬戸宮御宇天皇御世爲ニ宿禰ー）難波（孝德）朝御世物部荒猪連公（榎井臣等祖）弟物部弓梓連公（榎井臣祖）弟物部加佐夫連公（榎井臣等祖）弟物部多都彥連公（榎井臣等祖）近淡海朝（天智）御世爲ニ大連ー〇續紀養老三年五月榎井連挎麻呂賜ニ朝臣姓ー〇續後紀卷十五和泉國日根郡人戸主春世宿禰云々等賜ニ榎井（作ニ復中ー誤）朝臣ー貫ニ右京二條一坊ニ〕

同神四世孫太〔異本大に作〕矢口根大臣之後也

物部〔河內國物部同祖〇天孫本紀六世孫伊香色雄子大新河命纏向珠城宮御宇（垂仁）天皇御世賜ニ物部連公姓ー〇和泉國皇別物部考へし〕

同神六世孫伊香我色雄命之後也

網〔印本綱に作和學所本に據て改〕部〔左京上依羅連下文網津守連同祖也按網部脫文依網部乎推古紀見ニ物部依網連ニ〕

同上〔天孫本紀物部吳足尼連依羅連等祖〕

衣縫〔左京上衣縫造同祖同注〇和泉諸蕃ニ衣縫アリ〕

同上

高岳首〔古事記繼體段物部荒甲之大連〇天孫本紀物部麁鹿火大連〕

同神十五世孫物部鹿火大連之後也

安幕〔異本墓に作一本安墓物部に作〕首〔元此一字なし和學所本に據て補〇泉州志四泉南郡云阿間河庄ハ按古記曰有眞香阿理莫安幕者皆此地ト云ヒテ此安幕ヲ引リ又式和泉國和泉郡阿理莫神社ハ泉州志ニ在ニ瀧村ー今稱ニ雨近明神ー者阿莫轉也トアリ〇拾芥抄首部ニ安幕トアレハ首トアルニ從フヘシ〇崇神紀茅渟縣有眞香邑〕

同神七世孫十千尼〔異本元ニ作〇物部連公十市根命乎〕大連之後也

大伴山前連

韓國連（天孫本紀物部監古連公（葛野韓國連祖）弟物部金子連公（三島韓國連等祖）○續紀延曆九年十一月韓國連源等言巳等是物部大連等之苗裔也夫物部連等各因居地行事別爲百八十氏是以源等先祖鹽兒以父祖奉使國名故改物部連爲韓國連然則大連苗裔是日本舊民今號韓國還似三韓之新來至於唱噵每驚人聽因地賜姓古今通典伏望改韓國二字蒙賜高原（作厚非）依請許之○按高原竹原續紀卷十五竹原井離宮同地○和泉志三和泉郡唐國村韓國氏居地也トアリテ此姓ヲ引リ）采女臣同祖武烈天皇御世被遣韓國復命之日賜（和學所本此下姓字あり）韓國連（宇麻志麻志命十四世鹽古連公葛野韓國連等祖金石連公三島韓國連等祖云々）

阿刀連（注山城國阿刀連）

同上

宇遲部（異本連字あり又一本部字連に作○河內國宇治部同祖同注）

同上（宇麻志麻治命十四世孫物部臣竹連公肩野連宇遲部連等祖）

巫部（異本連字あり○注右京上巫部宿禰○續後紀承和十二年七月右京人巫部宿禰公成云和泉國大鳥郡巫部連繼麻呂云々賜姓當（常歟）世宿禰公成者饒速日命苗裔也○天武紀巫部連賜姓曰宿禰）同上雄略天皇御體不豫因茲召上筑（按に此下紫字脫するか）豐國安（異本奇に作）巫令源（一本源字なし）眞椋（源眞椋和學所本眞源椋に作椋下一本大連字あり）率巫仕奉仍賜姓巫部連（宇麻志麻治命十一世孫物部眞椋連公巫部連等祖）

曾禰連（左京上右京上曾禰連同祖○式和泉國和泉郡曾禰神社）

采女臣同上（異本祖に作○泉州志三和泉郡曾根村アリテ此姓ヲ引ケリ）

志貴縣主（式河內國志紀郡志紀縣主神社○天武紀磯城縣主賜姓曰連○天孫本紀（七世孫弟）建新川命（倭志紀縣主等祖）弟大咩布命（若湯坐連等祖）此二命纒向珠城宮御宇（垂仁）天皇御世並爲侍臣○神武紀二年弟磯城名黑連爲磯城縣主依之則志紀地者磯城彥之所住也）

饒速日命七世孫大賣布（按に此下命字あるへし）之

云天古移根命十一世孫大野臣從二筑紫一來往觀レ此則大野來二大鳥里一齋二大鳥神一自稱二大鳥姓一奉二祖神一耶神鳳寺大鳥神宮寺也トアリテ此大鳥連ヲ引ケリ又云大鳥大明神緣起帳云夫當社者景行天皇二子日本武尊也云々日本武尊云々崩二伊勢國能褒野一云々葬二能褒野陵一尊化二八尋白知鳥一從レ陵出之指二和國一而飛之云々遣二使者一追尋二白鳥一則停二於倭琴彈原一仍於二其處一造レ陵焉白鳥更飛至二河內國古市郡一亦其處造レ陵焉然造二宮於同國大野里一（今大鳥也）鎭坐以爲二八尋白知鳥化迹一奉レ號二大鳥大明神一云々○後ノ和泉國風土記ニ大鳥郡（本字衰（本ノマヽ））云々古老傳云昔素佐能烏尊御子衞杵命ヲ而留比古命巡二行此國一詔吾御體衰坐詔而靜坐故云二於登利一今謂二大鳥一者訛也トアリ按衞杵命ハ出雲風土記秋鹿郡多太鄕ノ條ニ見エ玉ヘリ○篤胤曰此風土記ノ說信シカタシ古老傳云ノ字遣ノ大形出雲風土記ノ狀ナルコトニ怪ムヘシ後人ノ託乎」、

同上

中臣部（ナカトミヘ）

同上

民直（タミノアタヘ）〔式大鳥郡美多彌神社〕

同上

許（コマノ）〔拾芥抄評に作按に此下麻字脫するか〕連〔式河內國澁川郡許麻神社○百木云按ニ拾芥抄評連トアルコレ也郡首モアレハ評連ナルヘシ泉州志ニ大鳥郡大鳥神社條ニ正三位井瀨社云々在二郡里一マタ日根郡ニ郡神祠ハ在二日根野庄一今稱二野宮一トアリ〕

同上

畝尾連（ウネヲノ）

同上

中臣表連（ウヘノ）

同上

采女臣（ウネメノ）〔右京上采女朝臣同祖○天武紀十三年十一月采女臣賜レ姓曰二朝臣一○續紀天平神護元年二月攝津職島下郡右大舍人采女臣家麻呂采女司采女臣家足等四人賜二姓朝臣一〕

神饒速日命六世孫伊香我色雄命之後也〔古事記神武段邇藝速日命娶二登美毘古之妹登美毘賣一生二子宇摩志麻遲命一○天孫本紀大水口宿禰命（云々采女等祖）〕

古今要覽稿卷第二十五

●姓氏部 姓氏錄校正五

●新撰姓氏錄下之本

和泉國神別

起ニ宮處朝臣一盡ニ長〔按に此下柄字脫するか〕公一六十氏

天神

宮處(ミヤトコロノ)朝臣〔允恭紀造ニ宮室於河內國茅渟一而衣通郎姬令レ居幸ニ茅渟宮一○續紀元正天皇靈龜二年三月見ニ珍努宮一同年四月割ニ大鳥和泉日根三郡一始置ニ和泉監一○類史見レ置ニ和泉國一○宮處氏依ニ茅渟宮處一乎〕

大中臣朝臣〔二字元之乃一字に作異本に依て改〕同祖天兒屋〔按に此下根字有へし〕命之後也〔左京上中臣宮處朝臣同祖○大中臣注ニ左京上一〕

狹山(サヤマノ)連〔狹山和名抄河內國丹比郡佐也萬○靈龜二年割ニ河內國三郡一置ニ和泉國一○式狹山神社〕

同上

和大(ワタノ)〔異本大に作〕連〔和名抄和泉國大鳥郡和田（爾木太）〕

同上

志斐(シヒノ)〔異本非に作〕連〔注ニ左京上中臣志斐連一〕

同上

蜂田(ハチタノ)連〔式和泉國大鳥郡蜂田神社○和名抄蜂田（波知太）○三代實錄貞觀六年九月和泉國大鳥郡人民部少錄正七位下蜂田連瀧雄改ニ本居一隷ニ左京職一〕

同上

殿來(トノクノ)連〔式大鳥郡等乃伎神社○和名抄大鳥郡常凌コレ也續紀天平勝寶四年無位中臣殿來連竹田賣授ニ外從五位下一○和泉志大鳥郡富木村今大鳥鄕六村ノ中ニ收レリ〕

同上

大鳥(オホトリノ)連〔式大鳥郡大鳥神社○和名抄大鳥（於保止利）○按鳥取之河上宮在ニ大鳥郡一也大鳥鵠也○垂仁紀曰天湯河板擧獻レ鵠敦賞賜レ姓曰ニ鳥取造一依之則元鳥取之功田乎○泉州志二云大鳥郡大鳥神社云々余按昔大鳥大明神禰宜神主皆大鳥氏也神鳳寺緣起帳

又凡川内直賜レ姓曰レ連又凡川内連河内漢連賜レ姓曰二忌寸一〕
同上
大縣主〔和名抄河内(加不知)大縣(於保加多)○續紀養老四年十一月河内國堅下堅上二郡更號二大縣郡一〕
同上
地祇
宗形君〔和名抄筑前國宗像郡(牟奈加多)○天武紀二年二月次納二胷形君德善女尼子娘一生二高市皇子命一又十三年十一月胷形君賜レ姓曰二朝臣一○注二右京下宗形朝臣一〕
大國主命六世孫吾田片隅命之後也〔吾田片隅命注二攝津國神人一○舊事記卷四大國主神八世孫阿田賀田須命九世孫大田田禰古命十世孫大御氣持命十一世孫大鴨積命礒城瑞籬朝御世賜二賀茂君姓一大友主命同朝御世賜二大神君姓一次田田彥命同朝御世賜二大神部直姓一〕
安曇連〔注二右京下安曇宿禰及攝津國阿曇犬養連一〕
綿積神命〔按に神命字外に所見なしいかヽ〕兒穗高〔元穗字なし一本に據て補ふ〕見命之後也〔右京下安曇宿禰海神綿積豐玉彥神子穗高見命之後也〕
等禰直〔等禰職員令舍人○廣瀨大忌祭式倭國乃六御縣能刀禰男女○直謂レ君〕
椎根津彥命之後也〔古事記云此三柱神綿津見命者阿曇連等之祖神以伊都久神也故阿曇連等者其綿津見神之子宇都志日金折命之子孫也〕
右第十九卷

姓氏錄中の末終

火明命兒天香山命之後也〔天孫本紀天香語山命亦名高倉下命○天香語山命六世孫建斗和邇命（身人部連等祖）〕

身人部連〔注右京下六人部〕

火明命之後也〔天孫本紀天戸目命子建斗米命次妙斗米命（六人部連等祖）建手和邇命（身人部連等祖）〕

尾張連〔注左京下尾張宿禰○神代紀下火明命（是尾張連等始祖也）○又曰天火明命兒天香山（是尾張連等遠祖也）○天孫本紀十一世乎止與命娶尾張大印岐女子眞於刀婢生一男○十二世孫建稻種命○熱田緣起曰宮簀媛弟○熱田緣起接社乎止與命宮簀媛之御父○天武紀尾張連賜姓曰宿禰〕

同神〔元火明命三字に作異本に據て改む〕十四世孫小豐命之後也

五百木部〔此下和學所本連字あり○仁德紀四十年伊勢蔣代野次見廬杵河○雄略紀三年四月湯入廬城部連武彦於廬城河捕魚○安閑紀安藝國過部廬城郡屯倉○伊勢安藝二國之廬城並記○式河內國若江郡意（イホ約）伎部神社〕

同上〔元火明命之後也六字に作異本に據て改○天香語山命九世孫若都保命五百木部連祖○天孫本紀若都保命五百木部連祖〕

出雲臣〔異本臣字なし○注右京上出雲臣諸記合〕

天穗日命十二世孫宇賀都久野命之後也

額田部湯坐連

天津彦根命五世孫乎〔異本乎字なし〕田部連之後也〔左京下額田部湯坐連天津彦根命子明立天御影命之後也○按舊事記御陰命凡河內連等祖也〕

津夫江連〔津夫江與積組同地乎又按風俗歌奈波乃川不良衣是乎（名寄顯昭歌）雪布禮婆蘆乃宇良葉爾浪許衣弖難波母和我受繩乃津夫良江〕

天津彦根命之後也〔一本天穗日命十二世孫宇賀都久野命之後也〕

凡河內忌寸〔注攝津國凡河內忌寸○三代實錄元慶七年六月丹波介清內宿禰行卒雄行河內國志紀郡人也本姓凡河內忌寸後賜清內宿禰○按賜清內宿禰者天平年間唐人李元環沈惟岳袁晉卿等歸化而賜於之清宗清海淨村等氏蓋監當蕃客之送迎及館舍而負清內乎○天武紀川內直縣賜姓曰連

先御刀所生之神〕
神人〔神人訓ニ美和ニ和泉國上神訓ニ加無都美和ニ准之〕
御手代首同祖可〔異本和學所本阿に作〕比良命之後
也
天孫〔按に此下十六氏印本後卷に附するもの誤なる
に依て神人の下に連書す〕
襷多治比宿禰〔襷異本襟に作○襷和名抄多須伎○神
代紀上手繦（此云多須枳）○新撰字鏡襁（多須支）○
天孫本紀五世孫建筒草命（多治比連云々祖）○天武
紀十三年十二月手繦連丹比連靫丹比連云々賜レ姓
曰ニ宿禰ニ○和名抄河内國丹比（太知比）郡〕
火明命十一世孫殿諸〔異本請に作〕足尼命之後也男
兄男庶〔異本男庶字なし信友云ナキニ從ヘシ〕其心
如レ女故賜レ襷〔異本襟に作〕爲ニ御膳部ニ次弟男庶其
心勇健其力足レ制ニ〔按に此下四の字脫するか〕十千
軍衆ニ故賜レ靫號ニ四十千健彥ニ因負ニ姓靫負ニ
丹比連
　火明命之後也
若犬養宿禰〔天武紀十三年十二月縣犬養連稚犬養連
賜レ姓曰ニ宿禰ニ〕

同神十六世孫尻調〔異本綱に作〕根命之後也〔和泉
國若犬養宿禰火明命十五世孫古利命之後也○天孫
本紀建多乎利命（若犬甘連等祖）○天香山命六世孫
建多斗（異本乎に作）利命竹田連若犬甘連等祖○百
木云天孫本紀十三世孫尻綱根命ハ譽田天皇御世
爲ニ大臣ニトアリ按ニ本文十六世ハ十三世ノ誤ニテ
尻調根ハ尻綱根トアル正シカラムサレト天孫本紀
に若犬養ノ祖トハ不レ見〕
笛吹連手〔異本連手の二字なし又異本連字あり手字
なし○有ニ大和國添上郡笛吹神社ニ○天孫本紀建多
乎利命（笛連若犬甘連等祖）○百木云式添上郡穴吹
神社一本穴次神社共ニ舊訓フエフキトアリコハ景
行紀ニ春日穴咋邑トアル所ニテ穴咋ノ誤ナルヘシ
信友云此事別ニ考アリ穴吹笛吹同地ニテアナウト
ヨムヘクオホユ○河内志云良枝清上本姓大戶首河
内國人善吹レ笛云々弟子和邇太田麻呂者右京人也
云々天長初任ニ雅樂百濟笛師ニ云々〕
　火明命之後也
吹田連〔吹異本次に作○天武紀十年四月次田倉人椹
足賜レ姓曰レ連〕

同神子于摩志摩治命之後也
若湯坐連〔古本連字なし○注ニ左京上若湯坐宿禰ニ〕
膽杵磯〔異本磯に作〕丹杵穗命之後也〔天孫本紀饒速日尊〔亦名膽杵磯丹杵穗命〕兒宇摩志麻治命之後孫大咩布命〔若湯坐連等祖〕〕
勇山連〔安閑紀物部大連尾輿獻ニ筑紫國膽狹山部ニ○和名抄豐前國京都郡諫山下毛郡諫山是等乎〕
神饒速日命〔命字異本なし〕三世孫出雲醜大使主命之後〔按に也字脱するか○天孫本紀輕地曲峽宮御宇〔懿德〕天皇御世爲ニ大臣ニ十三世孫物部尾輿連公〔同時〕弟物部建彥連公〔古本云勇山連云々等祖〕〕
物部首〔天武紀物部首賜レ姓曰レ連〕
同神子味島乳命〔天孫本紀宇麻志麻治命〕之後也
津〔按に門字脱するか〕首〔和名抄攝津國武庫郡津門〔都止〕〕
同神六世孫伊香我色男命之後也〔天孫本紀〔色雄命後〕物部建彥連公〔都刀連云々祖〕〕
掃守宿禰〔注ニ左京中掃守連ニ○和名抄河內國高安郡掃守〔加爾毛利〕○天武紀掃部連賜レ姓曰ニ宿禰ニ○和泉志高安郡云式外掃部神祠在ニ黑谷村ニ貞觀十六年十二月授ニ從五位下ニ云々〕
振魂命之後也
掃守連〔注ニ左京中掃守連ニ○續後紀承和二年二月河內國人右少史掃守連豐永云々等賜ニ姓善世宿禰ニ天忍人命之後也○或本ニ掃守宿禰掃守連ノ二氏ヲ下上ニ作ナルヘシ〕
同神四世孫天忍人命之後也
守部連〔續紀神龜五年二月勅正五位下鍛冶造大隅賜ニ守部連姓ニ〕
振魂命之後也
掃守造
同神四世孫天忍人命之後也
浮穴直
移〔篤胤云ヤノ音ナルコト上ニイヘルカ如シ〕愛年〔和學所本受牟に作〕受比命之後也〔左京中浮穴直移受牟受比命五世孫弟緒連之後也〔同注〕〕
服〔按に部字脱するか〕連〔攝津國服部連熯之速日神十二世孫麻羅宿禰之後也○麻羅綏靖紀見ニ倭鍛部ニ注レ前○河內志高安郡服部川村アリ〕
熯〔異本饒に作〕之速日命之後也〔熯之速日命神代

同神十四世孫伊己布都大連之後也〔宇麻志麻治命十三世孫（伊莒弗連公四世孫〇物部建彥連公高橋連等祖）〕

宇治部〔異本連字あり〇注ニ山城國宇治宿禰ニ〕

同神六世孫伊香我色乎命〔天孫本紀伊香我色雄命子多辨宿禰命（宇治部連交野連等祖）伊香我和名抄河內國茨田郡伊香（以加鄕）今枚方邊有伊賀香村應ニ色雄命之本居ニ〕之後也〔伊香我色雄命之子多辨宿禰命宇治部連交野連等祖〕

物部依羅連〔依羅和名抄河內國丹比郡（與佐美）〇天孫本紀物部多波連公（依羅連等祖）物部吳足尼連公（依羅連等祖）此連公磯城島宮御宇（欽明）天皇御世爲ニ宿禰ニ〇注左京上右京上依羅連〇續紀天平四年五月物部依羅連會賜ニ朝臣姓ニ〕

神饒速日命之後也〔宇麻志麻治命十二世孫物部多波連公依網連等祖又十三世孫物部吳足尼連公依網連等祖〕

矢田部首〔注ニ左京上矢田部連ニ〕

同神六世孫伊香我色雄命之後也

物部〔左京上物部同祖（同注）〕

同神十三世孫物部布都久呂大連〔物部布都久留連公者伊莒弗連公之子也〇物部布都久留連公大長谷朝御世（雄略）爲ニ大連ニ〕之後也

物部飛鳥〔姓脫〇物部注レ前〇飛鳥履中紀太子到ニ河內國埴生坂ニ云々自ニ大坂ニ向レ倭至ニ于飛鳥山ニ〇雄略紀河內國飛鳥郡同地〇式河內國安宿郡飛鳥戶神社〇和名抄河內國安宿（安須加倍）郡〕

同神六世孫伊香我色雄命〔伊香我注ニ前文宇治郡ニ〕之後也

積組造〔百木按ニ積組古本訓ツクミトアリ〇積組式河內國高安郡都夫久美神社同地〕

阿刀宿禰〔阿刀注ニ左京上阿刀宿禰ニ〕同祖同〔同字元なし一本を以て補〕神子于摩志摩治命之後也

日下部〔注ニ攝津國日下部ニ〕

神饒速日命孫比古由支命之後也〔天孫本紀饒速日尊兒宇摩志麻治命子彥湯支命此命葛城高丘宮御宇（綏靖）天皇御世云々日下部馬津名久流久美女阿野姬爲レ妻生ニ一男大禰命ニ〕

栗栖連〔式河內國若江郡栗栖神社〇一本加筆云天武紀十二年九月栗隅首等三十八氏賜レ姓曰レ連〕

名抄河内國大縣郡云々○古事記垂仁段鳥取之河上宮按今和泉國大鳥郡也〕
同神三世孫天湯河桁命之後也
多米連〔注ニ左京中多米連ニ〕
神魂命兒天石都倭居命之後也〔前文多米連者神魂命五世孫天日和志命之後也石都倭居命者一祖也○天太玉命之子有ニ天石戸明命ト是高魂命之孫也〕
城原
同神五世孫大廣目命之後也
紀直〔續後紀天長十年三月紀伊國名草郡人正七位上湯直國立同姓眞針國作等三人賜ニ姓紀直ト又卷四紀伊國人外正八位上紀直繼成等十三人賜ニ姓紀宿禰ト○三代實錄貞觀五年九月紀伊國名草郡人內竪從八位下紀直貞吉改ニ直字ト賜ニ宿禰姓ニ〕
神魂命五世孫天道根命之後也〔舊事記卷一天御氣持命〔紀伊直等祖〕○國造本紀天道根命定ニ賜紀伊國造ト者合ニ于玆ニ〕
大村直田連〔和名抄河内國大縣郡大里〔大村大里也爲ニ大縣郡ト○續紀養老四年十一月河内國堅下堅上二郡更號ニ大縣郡ニ〕〕

大村直同祖天道根命之後也〔右京下大村直天道根命六世孫若積命之後也〕
氷〔異本水に作〕連〔注ニ左京上氷宿禰ニ〕
石上朝臣同祖饒速日命十〔異本此下一字あり〕世孫伊己灯宿禰〔物部五十琴宿禰連公歟〕之後也〔伊己灯宿物天孫本紀禰部五十琴宿禰連公〔神功皇后御世元爲ニ大連ト次爲ニ宿禰ニ〕物部五十琴宿禰連公三世孫大前宿禰連公水連等祖〕
鳥見連〔神武紀鵄邑今云ニ鳥見ト○古事記神武段登美毗古○式大和國城上郡等瀰神社〕
同神十二世孫小前宿禰〔天孫本紀物部大前宿禰弟物部小前宿禰連公飛鳥八釣宮御宇爲大連云々○古事記允恭段輕太子逃ニ入大前小前宿禰之家ニ〕之後也
高屋連〔式河内國古市郡高屋神社○按今譽田西方有ニ高屋古城ト同地〕
同神十世孫伊己止足尼〔伊己止足尼前文氷連注之〕大連之後也〔天香語山命六世孫建彌阿久良命高屋大分國造等祖〕
高橋連〔注ニ山城國高橋連ニ〕

〔玉祖連等之祖〕○天武紀玉祖連賜レ姓曰二宿禰一〕
同神十三世孫建荒木命之後也又大荒木又大荒田
〔異本又大荒田四字なし〕
林宿禰〔續紀神護景雲三年二月外從五位下林連佐比
云々賜二姓宿禰一○續後紀承和二年九月河內國人散
位正六位上林連馬主賜二姓伴宿禰一又改二本居一貫二
附右京一○式河內國志紀郡伴林氏神社○和名抄同
郡拜志〕
大伴宿禰同祖室屋大連公男御物宿禰之後也〔神代
紀下大伴連遠祖天忍日命○又云大伴氏之遠祖日臣
命〔名爲二道臣一〕○室屋大連及御物宿禰之傳注二左
京中佐伯宿禰一〕
家內連
高魂命五世孫天忍日命〔天忍日命者高魂命之子也
五世又有二同名一乎〕之後也
佐伯首
天押日命十一世孫大伴室屋大連公之後也
葛城直〔注大和國葛木忌寸○續紀天平勝寶八年十二
月勅収二集京中孤兒一而給二衣糧一養之至レ是男九人
女一人成人因賜二葛城連姓一編二附紫微少忠從五位
上葛城連戸主之戸一以成二親子之道一矣〕
高魂命五世孫劒根命之後也
役直
高御魂尊孫天押〔和學所本神に作○天神立ハ高御
魂ノ子也〕立命之後也
恩智神主〔式河內國高安郡恩智神社二座○今有二恩智
村一按恩智與二奄知一同謂二大穴牟知神社一曰大神訓二
於保知一又訓二美和一也〕
高魂命兒伊久魂命之後也
倭文宿禰〔注二大和國倭文宿禰一○按に印本倭委に作
る省字なり〕
角凝魂命之後也
美努連〔式河內國若江郡御野縣主神社○天武紀十三
年正月三野縣主賜レ姓曰レ連○又同年十二月美野連
賜レ姓曰二宿禰一○續後紀承和十二年九月筑前國宗
形郡人難波部主足改二本姓一爲二美努宿禰一貫二河內
國若江郡一〕
同神四世孫天川田奈命之後也〔天川田奈負二地名一
交野郡渚院天川美野相倂〕
鳥取〔右京上鳥取部連山城國鳥取連同祖〔同注〕○和

起二菅生朝臣一盡二等禰直一〔禰直印本宿禰に作和學所本に據て改〕六十三氏

天神

菅生朝臣

大中臣朝臣同祖津速魂命三世孫天兒屋根命之後也

中臣連〔神代紀上中臣連遠祖天兒屋命○天武紀十三年十一月中臣連賜レ姓曰二朝臣一〕

同神十四世孫雷〔按に雪の誤か〕大臣命之後也〔雷大臣〔按雪國雷大臣〕左京上中臣志斐連右京上壹岐直攝津國神奴連生田首雜姓中臣栗原連等之祖也〕

中臣酒屋連〔河內國丹比部酒屋神社〕

同神十九世孫眞人連公之後也

村山連

中臣連同祖

中臣高良比連〔高良比高麗字音○和名抄若江郡有二巨麻鄕一〕

津速魂命〔命字印本なし一本を以補ふ〕十三世孫巨〔和學所本臣に作〕狹山之後也〔式許麻神社○狹山命負二丹比郡狹山一〔狹也末〕〕

平岡連〔式河內郡枚岡神社○和名抄讃良郡枚岡〔比良乎加〕〕

同神十四世孫鯛身臣之後也

川跨連〔式若江郡川股神社○和名抄川俣○應神紀御製歌瀰豆多摩蘆豫佐瀰能伊戒珥奴那波區利破陪鷄區辭羅珥委愚比菟區伽波摩多曳能比辭餓羅能佐辭鷄區辭羅珥云々按伽波摩多曳川股江也〕

同神九世孫梨富命之後也

中臣連〔神武紀天皇至二筑紫國菟狹一時有二菟狹國造祖一號曰二菟佐津彥菟佐津媛一云々勅以二菟狹津媛一賜二妻之於侍臣種子命一天種子命是中臣氏之遠祖也〕

天兒屋根命之後也

中臣

中臣高良比連同祖

弓削宿禰

天高御魂乃命孫天毗和志可氣流夜命〔元知に作異本に據て改○按に知誤字左京上書二天日和志命又左京下天日鷲翔矢命一〕之後也

玉祖宿禰〔式河內國高安郡玉祖神社和名抄同郡云々○神代紀下玉作上祖玉屋命○古事記上玉祖命者

宿禰ニ十一世孫御物足尼之後也

凡海連〔注ニ右京下凡海連ニ〕

安曇宿禰同祖綿積命六世孫小栲〔異本栲に作〕梨命之後也

阿曇犬養連〔右京下安曇宿禰海神綿積豐玉彥神子穗高見命之後也同注〕

海神大和多羅〔按に罪の誤か〕神三世孫穗已都久命之後也

物忌直

椎根津彥命九世孫矢代宿禰之後也

鴨部祝〔續後紀承和三年五月河内國人散位鴨部船主武散位同姓氏成等賜ニ姓賀茂朝臣ー速須佐男命之苗裔也○按和泉國茅渟縣陶邑乃大田田禰古命之所在也故有ニ陶荒田神社鴨田神社等ー也鴨部祝應レ齋ニ此神社ニ〕

賀茂朝臣同祖大國主神之後也〔大和國賀茂朝臣大國主神後大田田根子命孫大賀茂都美命奉ニ齋賀茂神社ニ〕

我孫〔古事記開化段見ニ依網之阿毗古ー今住吉郡依網神社在ニ于吾孫村ー又吾孫山大聖寺在ニ于吾孫村ー○續紀天平十八年九月正六位上依羅我孫忍麻呂授ニ外從五位下ー○續後紀承和三年十一月河内國人我彥公諸成同姓阿比古道成等賜ニ姓秋原朝臣ニ〕

大己貴命〔大己貴神代紀上大國主神亦名大物主神亦號國作大己貴命〕孫天八現津彥命之後也。

神人〔神人訓ニ美和ー和名抄和泉國大鳥郡上神〔加無都美和〕○續紀延暦四年攝津國能勢郡大領神人爲奈麻呂授ニ外從五位下ー〕

大國主命五世孫大田田根子命之後也〔崇神紀八年大田田根子今三輪君等之始祖也○五世孫〔古事記崇神段〕大物主大神子櫛御方命子飯肩巣見命子建甕槌命子意富多多泥子○舊事記大國主神八世孫阿田賀田須命九世孫大田田根古命〕

神人〔一本云人當レ作レ直神直舊事記四大國主神〔九世孫〕大田田禰古命〔十世孫〕大御氣持命〔十一世孫〕大鴨積命次大友主命次田田彥命〔磯城瑞籬朝御世賜ニ大神部直姓ー〕

同上

右第十八卷

河内國神別

〔右京下阿多御手養火闌降命六世孫薩摩若相樂也〕
凡河内忌寸〔安閑紀大河内直味張（更名ニ里梭ニ）○天武紀十年四月河内直縣賜レ姓曰レ連又十二年九月凡河内直賜レ姓曰レ連又十四年六月凡河内連賜レ姓曰ニ忌寸ニ○續後紀天長十年二月攝津國人凡河内忌寸紀主賜レ姓曰ニ清内宿禰ニ○凡河内謂ニ堀江ニ河今河内郡也額田郷有ニ其郡内ニ注ニ國號考ニ
額田部湯坐連同祖〔右京下額田部湯坐連天津彦根命明立天御影命之後也○古事記上天津日子根命（凡河内國造額田部湯坐連等之祖）
國造〔續紀慶雲四年十月攝津國造從七位上凡河内忌寸石麻呂又和銅七年六月若帶日子姓爲レ觸ニ國諱ニ改因ニ居地ニ賜ニ之國造人ニ除ニ人字ニ
天津彦根命男天戸間見命之後也〔古事記上天津日子根命（凡河内國造云々等之祖）
山直〔山直式和泉國和泉郡山直神社○和名抄也末多陪（按に山直今はヤマタヒとよめり又山直郷もあり）〕
天御影命〔天津彦根命之子也〕十一世孫山代根子之後也〔續後紀承和六年十一月左京人山直池作等十人改ニ直字ニ賜ニ宿禰ニ池作之先出レ自ニ天穗日命之後ニ也○依レ此則天津彦根命子明立御影命者別神〕
土師連〔注ニ右京下土師宿禰ニ〕
天穗日命十二世孫飯入根命之後也〔崇神紀六十年出雲臣之遠祖出雲振根其弟飯入根子鸕濡渟云々
凡河内忌寸〔注ニ前文凡河内忌寸ニ〕
同神十三世孫可美乾飯根命之後也〔可美乾飯根命崇神紀飯入根弟甘美韓日狹同人乎○按舊事記饒速日尊天降之時高皇産靈尊令ニ神人卅二人供奉ニ之其内天御陰命凡河内直等祖云々
羽束〔和名抄攝津國有馬郡羽束（波都加之）○天武紀十二年九月羽束賜レ姓曰レ連
天佐鬼利命三世孫斯鬼乃命之後也
地祇
大和連〔天武紀十二年九月倭直賜レ姓曰レ連又十四年六月大倭連賜レ姓曰ニ忌寸ニ○續紀神護景雲三年六月攝津國菟原郡人正八位下倉人水守等十八人賜ニ姓大和連播磨國明石郡人海直溝長等十九人大和赤石連ニ〕
神知津彦命〔神知津彦一名椎根津彦注ニ大和國大和

社○和名抄同郡服部（波止里）」
熯之速日命十二世孫麻羅宿禰之後也允恭天皇御世
任二織部司一摠二領諸國織部一因號二服部連一〔大和國
谿部大炊祖麻羅同○綏靖紀倭鍛部天津眞浦允恭天
皇御世任二織部司一乎」

天孫
津守宿禰〔和名抄兎原郡及西生郡津守○古事記仁
德天皇段定二墨江津一○職員令曰攝津職帶二津國一○
後紀卷一及三代格曰昔難波有二大宮一故置二此職一延
曆十二年三月九日勅曰難波大宮既停宜下改二職名一
爲中國上（注二國號考二）○按津守攝津守也和名抄有二兎
原郡津守鄕名一者應神紀五百船悉集二於庫水門一當二
此時一置二津守司一○天武紀十三年十二月津守連賜
レ姓曰二宿禰一」
尾張宿禰〔宿禰印本之に作和學所本に依て改〕同祖
火明命八世孫〔天孫本紀火明命（五世孫）建筒草命
（津守連祖）八世孫倭得玉彦命（亦云市大稻日命）」
大御〔本紀市大稻に作〕日足屋之後也〔天香吾山命
四世孫建筒草命多治比連津守若倭部葛木厨直祖
六人部連〔注二右京下六人部二〕
同神五世孫建刀米命之後也〔天香語山命五世孫妙
斗米命（建斗米命之弟也）六人部連等祖」
石作連〔注二左京下石作連二〕
同神六世孫武機〔異本槐に作〕根命之後也〔天香吾
山命六世孫建麻利尼命石作連桑因連小邊縣主等
祖」
蝮部〔注二大和國蝮壬部首二〕
同神十一世孫蝮壬部犬手之後也
刑部首〔和名抄攝津國有馬郡忍壁（於之加倍）遠江國
引佐郡刑部（於佐加部）○允恭紀二年二月爲二皇后
忍坂大中姫一定二刑部一○古事記同○天武紀忍壁連
賜レ姓曰二朝臣二」
同神十七世孫屋主宿禰之後也〔天孫本紀物部石持
連公（刑部連刑部造等祖）○宇麻志麻治命十一世孫
物部石持連公刑部造等祖」
津守〔注二前文津守宿禰二〕　火明命之後也
日下部〔日下古事記序日下謂玖沙訶○神武紀河内國
草香邑○古事記神武段日下之蓼津○式和泉國大鳥
郡日部神社今堺宿東南有草部村
阿多御手犬〔一本犬字なし〕養　同祖火闌降命後也

物部韓國連〔天孫本紀(目大連之子)物部鹽古連公(葛野韓國連等祖)弟物部金子連公　(三島韓國連等祖)○和泉國韓國連武烈天皇御世被ㇾ遣二韓國一復命日賜二姓韓國連一〕
伊香我色雄命之後也〔伊香我色雄命九世孫物部鹽古連公葛野韓國連等祖物部金古連公三島韓國連等祖〕

矢田部造〔注二左京上矢田部連一○續後紀承和二年十一月攝津國人矢田部連聰耳々等賜二姓與野宿禰一〕
同上〔天孫本紀伊香我色雄命子大新河內命子矢田部造遠祖武諸隅命○伊香我色雄命五世孫物部大別連公賜二矢田部連公姓一〕

佐夜部首〔續紀養老六年二月遠江國佐益部○式及和名抄書二佐野一〕
同上〔天孫本紀物部大小木連公(佐夜部直久奴直等祖)物部印岐美連公(遠江國造久奴直佐夜直等祖)〕

小山連〔注二左京中小山連一○遠江國周智郡小山(和名抄訓乎也萬)〕
高魂命子櫛玉命之後也

多米連〔注二左京中多米連一○式攝津國住吉郡多米神社神魂命五世孫天比和志命之後也

犬養〔注二左京中縣犬養宿禰一〕
同神十九世孫田根連之後也

目色〔異本包に作〕部眞時〔續紀和銅二年六月宗形部堅牛賜二益城連姓一○又天平神護元年三月見二尾張益城宿禰一目色與二益城一同○眞時二字衍文乎〕
同神十二世孫大足〔異本見に作〕尼命之後也

倭文連〔神代紀倭文神(此云斯圖梨俄未)○天武紀倭文連(倭文此云之頭於利)賜ㇾ姓曰二宿禰一○注二大和國倭文宿禰一〕
角凝魂命男伊佐布魂〔此下異本命字あり〕之後也〔舊事記天神本紀伊佐布魂命(倭文連等祖也)〕

竹原〔竹原未ㇾ詳按續紀天平十六年十月太上天皇行二幸珍努及竹原井離宮一蓋竹原井同地與〕
同上

額田部宿禰〔注二大和國額田部連一〕
同神男五十狹經魂命之後也

額田部
額田部宿禰同祖明日名田〔異本門に作〕命之後也

服部連〔注二大和國服部連一○式攝津國島上郡神服神

大荒木臣ニ神龜四年以來不レ着ニ大字ニ至レ是復着ニ大字ニ〕

同上

中臣東〔一本東に作〕連

天兒屋根命九世孫鯛身命之後也

神奴連

同神十〔此下異本一の字あり〕世孫雷大臣命之後也

中臣藍連〔藍和名抄攝津國島下郡安威（阿井）○式阿爲神社○陵式島下郡三島藍野陵〕

同神十二世孫大江臣之後也

中臣大〔一本太に作〕田連〔太田訓ニ多陀ニ○式攝津國太田神社今有ニ多田村ニ又有ニ阿部郡多太神社ニ〕

同神十三世孫御身宿禰之後也

生田首〔生田和名抄攝津國八田部郡（以久多）○式生田神社○神功紀稚日女尊誨之曰吾欲レ居ニ活田長峽國ニ因ニ海上五十狹茅ニ令レ祭○峽元峽に作日本紀に據て改海上に元以の字なし日本紀に據て補〕

同神九世孫雷大臣命之後也

若湯坐宿禰〔注ニ左京上若湯坐宿禰ニ

石上朝臣同祖神饒速日命六世孫伊香我色雄命之後也〔伊香我色雄命之子大咩布命若湯坐連等祖〕

巫部宿禰〔注ニ山城國巫部連和泉國巫部連ニ○續後紀承和十二年七月右京人巫部宿禰公成大和國山邊郡人巫部宿禰諸成和泉國大鳥郡人巫部連繼麻呂巫部連繼足白丁巫部連吉繼等賜ニ姓當（按に常の誤か）世宿禰ニ公成者神饒速日命苗裔也〕

同上〔伊香我色雄命六世孫物部眞椋連公巫部連文島連須佐連等祖〕

田田內臣〔異本內田臣に作○田田式攝津國河邊郡多太神社同地八部郡宇治郷與內淸濁混雜一本內田臣に作不レ詳〕

同上

阿刀連〔阿刀連左京上阿刀宿禰山城國阿刀宿禰同祖同注○續後紀承和十年十二月攝津國豐島郡人迹連繼麻呂迹連成人迹連淨足迹連淨水等十七人除迹字賜阿刀連姓高祖阿刀連生羽也祖父乙淨天平年中誤以迹一字爲姓矣撿庚午年籍復本姓焉〕

神饒速日命之後也〔也字元なし一本に依て補○印本味麻知命子味饒田命阿刀連祖の十三字あり和學所本に據て削る〕

國栖〔續紀寶龜元年十一月見ニ正六位上國栖小國授ニ外從五位下ニ〕
出レ自ニ石穗押別神ー也〔古事記神武段國神名曰ニ石押分之子ー（此者吉野國樔之祖）〕神武天皇行ニ幸吉野ー時川上有ニ遊人ー于レ時天皇御覽卽入レ穴須臾又出遊竊窺之喚問答曰石穗押別神子也〔神武紀臣是磐排別之子此則吉野國樔部始祖也〕爾時詔賜ニ國栖名ー〔此下和學所本然字あり○應神紀十九年十月幸ニ吉野宮ー時國樔人來朝之因以ニ醴酒ー獻ニ于天皇ー而歌之曰伽辭能輔珥豫區周烏茹區利豫區周珥伽綿蘆淤朋瀰枳宇摩羅珥枳虛之茂知烏勢麻呂俄智歌之旣訖則打口以仰咲今國樔獻土毛之日歌訖卽擊口仰咲者蓋上古之遺則也樔國樔者其爲レ人甚淳朴也每取ニ山菓ー食亦煮ニ蝦蟆ー爲ニ上味ー名曰ニ毛瀰ー其土自レ京東南之隔レ山而居ニ于吉野河上ー峯嶮谷深道路狹巘故雖レ不レ遠ニ于京ー本希ニ朝來ー然自レ此之後屢參赴以獻ニ土毛ー其土毛者栗菌及年魚之類焉○古事記應神段擊ニ口皷ー爲レ伎〕後孝德天皇御世始賜レ名人國栖意世古次號世古二人允恭天皇御世乙未年中七節進ニ御贄ー仕ニ奉神態ー〔ー本態に作〕至レ今不レ絕〔按に允恭天皇元年は壬子にて御宇の間乙未なし御紀を終る迄見閲せしかとも所見なし疑しきこと也〕

右第十七卷

攝津國神別

起ニ津島朝臣ー盡ニ神人ー四十五氏

天神

津島朝臣〔津島國號有ニ上縣下縣ー也中臣志斐連祖天兒屋命十一世孫雷大臣命領ニ此縣ー乎雷命神社在ニ此島ー○按式河內國茨田郡在ニ津島神社ー又有ニ雷大臣之後津島直ニ〕

大中臣之〔和學所本之字なく朝臣字あり〕同祖津速魂命三世孫天兒屋根命之後也〔神代紀上中臣連遠祖興台產靈兒天兒屋根命〕

椋垣朝臣〔續紀大寶三年五月倉垣連子人高祖根緖以來子孫私小田私比都云々訴得レ免ニ雜戶ー○又慶雲四年正月從六位上椋垣直子人賜ニ連姓ー〕

同上

荒城朝臣〔式大和國宇智郡荒木神社大荒木森同地○續紀寶龜四年八月荒木臣忍國養老五年以往籍爲ニ

月大和國葛上郡人正六位上賀茂朝臣清濱賜二姓高賀茂朝臣一）
大神朝臣同祖大國主神之後也大田田禰古命（神代紀上大巳貴神曰汝是吾幸魂奇魂今欲二何處住一耶對曰吾欲レ住二日本國之三諸山一故卽營二宮彼處一使二就而居一此大三輪之神也此神之子（大田田根子五字脫文乎）卽甘茂君大三輪君等（遠祖也三字脫乎）孫大賀茂都美命注云一名大賀茂足尼（舊事記大鴨積命磯城瑞籬朝御世賜二賀茂君一）奉二齋賀茂神社一也
和仁古（式大和國添下郡和仁坐神社和爾下神社）
大國主六世孫阿太賀田（和學所本太に作）須命之後也（舊事記地神本紀阿田賀田須命（和仁古等祖）次健飯賀田須命（鴨部美良姬爲レ妻生二一男一）九世孫大田田禰古命（傳注レ前））
大和宿禰（大和和名抄於保夜万止注二國號考一○國造本紀以二椎根津彥命一初爲二大倭國造一○神武紀珍彥爲二倭國造一○天武紀十年四月倭直龍麻呂賜レ姓曰レ連○又十二年九月倭直賜レ姓曰レ連○又十四年六月大倭連賜レ姓曰二忌寸一○續紀天平九年十一月大倭忌寸水守二人賜二姓宿禰一自餘族人連姓爲レ有二神宣一也○又廿年正月大倭連深田魚名並賜二宿禰姓一○續後紀承和七年八月大和國人戶主大和宿禰吉繼大和宿禰舘子等賜二姓朝臣一貫二附左京三條一坊一）
出レ自二神知津彥命一也神日本磐余彥天皇從二日向地一向二大倭洲一到二速吸門一時有二漁人一乘レ艇而至天皇至問曰汝誰也對曰臣是國神也（一本也字なし）名宇豆彥聞二天神子來一故以奉レ迎卽牽二納皇船一以爲（此下一本海字あり）導仍號二神知津彥一（一名椎根津彥○神武紀天皇東征至二速吸之門一時有二一漁人一乘レ艇而至天皇招之因問曰汝誰哉對曰臣是國神名曰二珍彥一釣二魚於曲浦一聞二天神子來一故卽奉レ迎又問之曰汝能爲二我導一耶對曰導之矣天皇勅授二漁人椎檣末一令レ執而牽二納於皇舟一以爲二海導一者乃特賜レ名爲二椎根津彥命一此卽倭直等始祖也）能宣二軍機之策一天皇嘉之任二大倭國造一是大倭（此下和學所本直字あり）始祖也（古事記神武段槁根津日子（此者倭國造等之祖））○垂仁紀大倭直祖長尾市宿禰）
長柄首（柄訓レ江○古事記中葛城長江是也○式大和國葛上郡長柄神社）
天乃八重事代主神之後也

其人二貢進爾天皇問賜之汝者誰子也答曰僕者大物主大神娶三陶津耳命之女活玉依毗賣一生三子名櫛御方命之子飯肩巣見命之子建甕槌命之子僕意富多々泥古白云々即以意富多々泥古命一爲二神主一而於二御諸山一拜二祭意富美和之大神前一云々此謂意富多々泥古人所三以知二神子一者上所レ云活玉依毗賣其容姿端正於レ是有レ神壯夫其形姿威儀於レ時無レ比夜半之時儵忽到來故相感共婚供住之間未レ經二幾時一其美人姙身爾父母怪二其姙身之事一問二其女一曰云々答曰有二麗美壯夫一不レ知二其姓名一每夕到來供住之間自然懷姙是以其父母欲レ知二其人一誨二其女一曰以二赤土一散二床前一以二閇蘇紡麻一貫レ針刺二其衣襴一故如レ敎而旦時見者所レ著針麻者自二戸之鉤穴一控通而出唯遺レ麻者三勾耳爾卽知下自二鉤穴一出之狀上而從レ絲尋行者至二美和山一而留二神社一故知二其神子一故因二其麻之三勾遺一而名二其地一謂二美知一也（此意富多々泥古命者神君鴨君之祖也）○又云大國主神系圖建速須佐之男　八島士奴美神　布波能母遲久奴須奴神　深淵之水夜禮花神　淤美都衣神　天之冬衣神　大國主神（神代紀上亦名大物主神）〕初大國主神娶二三島溝杭耳之女玉櫛姫一〔神代紀上事代主神通二三島溝橛姫二（或曰玉櫛姫）○神武紀事代主神共二三島溝橛耳神之女玉櫛媛一所レ生兒號曰二媛蹈鞴五十鈴媛命二〕夜未〔一本來に作〕レ曙去不二〔和學所未に作〕會晝到一於レ是玉櫛姫績〔和學所本續に作〕苧係衣至レ明隨レ苧尋覓經二於茅渟縣陶邑一直指二大和國〔此下一本眞穗字あり〕御諸山一還視二苧遺一唯有二三縈一因之號二姓大三縈二〕垂仁紀三輪君祖大友主○天武紀十三年十一月大三輪君賜レ姓曰二朝臣二〕

賀茂朝臣〔式大和國葛城郡鴨神社一言主神社大穴持神社高鴨神社鴨山口神社等賀茂之祖神也注二攝津國鴨部祝一○天武紀十三年鴨君賜レ姓曰二朝臣一○續紀天平寶字八年十一月祠二高鴨神於大和國葛上郡一高鴨神者法臣圓興與其弟中衞將監從五位下賀茂朝臣田守等言昔大泊瀨天皇獵二于葛城山一時有二老夫一每與二天皇一相逐爭レ獲天皇怒之流二其人於土佐國一先祖所レ主之神化成二老夫一爰被二放逐一於レ是天皇乃遣二田守一迎之令二祠二本所一○又神護景雲二年十一月從五位上賀茂朝臣諸雄從五位下賀茂朝臣田守從五位下賀茂朝臣萱草賜二姓高賀茂朝臣一○又三年五

に作〕天皇勅此馬額如二田町一仍賜二姓額田連一

奄知造

同神十四世孫張凝命之後也

伊蘇志臣〔續紀天平勝寳二年三月駿河國主從五位下楢原造東人等於二部内廬原郡多胡浦濱一獲二黃金一獻レ之於レ是東人等賜二勤臣姓一○又五月伊蘇志臣東人之親族卅四人賜二紀伊蘇志臣一○仲哀紀伊蘇國伊蘇志者日杵之苗裔而異祖也○續後紀承和二年三月右京人近江少目從七位下伊蘇志臣廣成大和國人同姓人麻呂紀伊國人紀直繼成等十三人賜二姓紀宿禰一○文德實錄仁壽二年二月滋野朝臣貞主卒貞主者右京人也曾祖楢原東人天平勝寳元年爲二駿河守一于レ時土出二黃金一東人採而獻之帝美二其功一曰勤哉臣遂取二勤臣之義一賜二姓伊蘇志臣一父尾張守家譯延暦中賜二姓滋野宿禰一○三代實錄貞觀元年十二月攝津守滋野朝臣貞雄右京人也父從五位上家譯延暦十七年改二伊蘇志臣一賜二滋野宿禰一弘仁十四年改二宿禰一賜二朝臣一〕

滋野宿禰同祖天道根命之後也〔右京下滋野宿禰紀直同祖神魂命五世孫天道根命之後也〕

地祇

吉野連〔天武紀十二年十月吉野首賜レ姓曰レ連○吉野和名抄大和國訓〔與之乃〕注二國號考一〕

加彌比加〔一本加字なし〕尼之後也勅〔異本謚に作〕神武天皇行二幸吉野一到二神瀬一遣レ人汲レ水使者還曰有二井光女一天皇召問之汝誰人答曰臣〔一本妾に作〕是自レ天降來白雲別神之女也名曰二豐御富一天皇即名二水光姬一今吉野連所レ祭水光神是也〔古事記神武段天皇到二吉野河之河尻一云々生レ尾人自レ井出來其井有レ光爾問汝者誰也答曰僕者國神名謂二井氷鹿一〔此者吉野首等祖也〕○神武紀臣是國神名爲二井光一此則吉野首部始祖也〕

大神朝臣〔舊事記卷四大友主命磯城瑞籬朝御世賜二大神君姓一○續紀神護景雲二年三月大和國人從七位下大神引田公足人大神私部公猪養大神波多公石持等廿人賜二姓大神朝臣一○式大和國城上郡大神大物主神社又神坐日向神社〕

素佐能雄命六世孫大國主之後也〔古事記神武段三島湟咋之女名勢夜陀良比賣其容姿麗美故美和之大物主神見レ感○又崇神段云於二河内之美努村一見二得

德段爲ニ水歯別命之御名代ニ定ニ蝮部ニ○壬部爲ニ太子伊邪本和氣命之御名代ニ定ニ壬生部ニ古事記以ニ蝮字ニ當ニ多治比辭ニ又訓ニ美波良ニ者當ニ淡路國三原郡ニ○反正紀曰天皇生ニ于淡路宮ニ於レ是有レ井曰ニ瑞井ニ則汲之洗ニ太子ニ時多遲花落有ニ于井中ニ因爲ニ太子名ニ也（多遲花今虎杖花）故謂ニ多治比瑞歯別天皇ニ○按上件瑞井者有ニ淡路國三原郡ニ古事記仁德段書ニ蝮之水歯別命ニ○反正紀元年十月都ニ於河內丹比ニ是謂ニ柴籬宮ニ）

火明命孫天五百原命之後也

工造

同祖十世孫大美和都禰（古本禰字なし按に禰は彌の誤か）乃命之後也

二見首

富須洗利命之後也

大角隼人（大角和名抄（於保須美）○景行紀曰熊襲國是也○續紀和銅六年割ニ曰日向國肝坏贈於大隅始羅四郡ニ始置ニ大隅國ニ注ニ國號考ニ○隼人注ニ山城國阿多隼人ニ）

出レ自ニ火闌降命ニ也（神代紀下火闌降命是隼人等始祖也（火闌降此云褒能須素里）」

大坂直（大坂和名抄大和國葛上郡○式葛下郡有ニ大坂山口神社ニ○履中紀自ニ大坂ニ向レ倭云々御歌曰於朋佐箇珥阿布夜烏等謎烏瀰知度沛麼哆駄珥破邏𦖋哆耆摩知烏能流）

天道根命之後也（道根命滋野宿禰同祖○國造本紀曰橿原朝御世神皇産靈命五世孫天道根命定ニ賜紀伊國造ニ）

三枝部連（住ニ左京下三枝部連ニ）

額田部湯坐連同祖天津彥根命十四（傍注云一無ニ四字ニ）世孫達巳呂命之後也（建許呂命國造本紀（師長國造須惠國造馬來田國造石背國造石城國造）見ニ建許呂命之後ニ）顯宗天皇御世諸氏賜ニ饗醮ニ于レ時宮庭有ニ三莖草ニ獻之因賜ニ姓三枝部造ニ

額田部佊田（一本田字なし又一本佊田字なし）連（注ニ左京下額田部湯坐連ニ○天武紀十三年額田部連賜レ姓曰ニ宿禰ニ○佊田此二字一本无按誤ニ河字ニ乎續紀卷廿見ニ額田戶川田連ニ）

同神三世孫意富伊我都命之後也允恭（印本泰に作和學所本に據て正す）天皇御世獻ニ額田馬ニ（異本長

當二此社之神戸直一〕
天事代主命之後也〔古本云右京下伊與部ハ高媚牟須比命三世孫天辭代主命之後也トアリ殘編風土記大和國高市郡飛鳥郷土地中肥民用不レ少云々マタ大和志高市郡ニ飛鳥郡見ユ〕

大田祝山直
天枝〔異本杖に作〕命子天爾支命之後也

踰部大炊
天之〔異本之字なし〕三穗〔異本種に作〕命八世孫意富麻羅之後也〔麻羅訓ニ万宇良一〇古事記上鍛人天津麻羅〇綏靖紀倭鍛倭天津眞浦造眞麛鏃〕

天孫

土師宿禰〔土師河内志曰河内國志紀郡道明寺村舊名土師又名ニ秋篠一〇神代紀卷一天穗日命〔是出雲臣土師連等祖〕〇天武紀十三年十二月土師連賜レ姓曰ニ宿禰一注ニ右京下土師宿禰及秋篠朝臣一〕
秋篠朝臣同祖天穗日命十二世孫可美乾飯根命之後也〕

贄土師連〔贄土師連贄訓ニ爾閇一〇万葉集卷廿爾閇乃宇良催馬樂爾閇人〇神武紀和名抄爾倍〇雄略紀十七年詔ニ土師連等一使レ進下應レ盛ニ朝夕御膳一清器上者於レ是土師連祖吾笥仍進ニ攝津國來狹々村山城國内村俯見村伊勢國藤形村及丹波但馬因幡私民部一名曰ニ贄土師部一〕
同神十六世孫意富曾婆〔古本娑に作〕連之後也

尾張連〔按大和國尾張者葛城高尾張邑也左京下尾張連同祖同注〕
天火明命子天香山命之後也〔神代紀下天火明命兒天香山是尾張連等遠祖也〕

伊福部宿禰〔注ニ左京下伊福部宿禰一〇和名抄大和國宇陁郡伊福郷大和志云已廢存ニ井足福西二村一殘編風土紀大和國宇陀郡下野伊福庄公穀云々假粟云々貢云々〕
同上

伊福部連〔天武紀十三年十二月伊福部連賜レ姓曰ニ宿禰一〕
伊福部宿禰同祖

蝮〔異本蝮に作〕壬部〔印本王許に作一本に依て改〕首
〔蝮王許首王許誤ニ壬部一左京下丹比須加布同祖〇天孫本紀天忍男命〔大蝮壬部連等祖〕〇蝮古事記仁

天押日命〔押日命注二左京中大伴宿禰一〕十一世〔十一世誤二十一乎〕孫大伴室屋大連公〔雄畧紀大伴連家屋爲二大連一〕之後也

仲丸子（ナカノワニコ）〔仲地名和名抄宇陀郡那珂吉野郡 那珂忍海郡仲村○續後紀承和二年三月大和國仲丸子連乙成同姓眞當等賜二姓仲宿禰一○丸子下文見二和仁古氏一〕日臣命〔日臣大伴氏之遠祖注二左京中大伴宿禰一〕九世孫金村大連之後也〔金村武烈紀大伴金村連爲二大連一○宣化紀二年詔二大伴金村大連一遣二其子磐與狹手彥一以助二任那一是時磐留筑紫執其國政○欽明紀二十三年八月大將軍大伴連狹手彥領二兵數萬一伐二高麗一注二大伴連一〕

大家臣（オホヤケ）〔大家大宅同訓武烈紀影媛歌於裒野 該○和名抄添上郡大宅 ○天武紀十三年十一月大宅臣賜レ姓曰二朝臣一〕

大中臣之〔古本和學所本之字なくして朝臣字有〕同祖津速魂命〔津速魂命見二左京上藤原朝臣一〕之後也

添縣主（ソフ）〔添縣主 神代紀曆富縣○繼體紀書二匝布一○欽明紀見二倭國添上郡一○和名抄添上添下（曾不乃加美曾不乃之毛）○續紀天平神護元年二月大和國添下郡人左大舍人大初位下縣主石前賜二添縣主一○式添御縣坐神社○祈年祭祝詞亦謂二御縣一者以二此縣一卽爲二神號一也〕

出レ自二津速魂命男武乳遺（タケチ）〔古本遺に作〕命之後一〔二字元なし異本に據て補○武乳遺命は左京上藤原朝臣ニ系圖ヲ引ケリ○舊事記卷一津速魂尊兒天兒屋命（中臣連等祖）次武乳遺命（添縣主等祖）〕也

御手代首（ミテシロ）〔續紀天平十年七月大倭御手代連麻呂女賜二宿禰姓一〕

天御中主命十世孫天諸神命之後也

掃守（カニモリ）〔注二左京中掃守連一〕

振魂（フルタマ）命四世孫天忍人命之後也

飛鳥直（アスカノアタヘ）〔飛鳥式大和國高市郡飛鳥坐神社万葉集卷二一書二明日香一○古事記履中段水齒別命到二大坂山口一云々明日上幸二石上神宮一故號二其地一謂二近飛鳥一也上到二于倭一詔之今日留二此間一爲二祓禊一而明日參出將レ拜二神宮一故號二其地一謂二遠飛鳥一也○直謂レ君古事記垂仁段御子大中津日子命（飛鳥君之祖者姓氏錄皇別不レ載）○按式神賀詞見賀夜奈流美命能御魂乎飛鳥乃神奈備爾坐豆皇御孫命能近守神登貢置

○天武紀十三年十二月田目連賜レ姓曰二宿禰一〕
同神二十二世孫意保止命之後也
葛木忌寸〔天武紀十二年九月葛城直賜レ姓曰レ連又十四年六月葛木連賜レ姓曰二忌寸一○河內國神別葛城直同祖○所三以號二葛木一者神武紀高尾張邑有二土蜘蛛一云々皇軍結二葛網一而掩襲殺之因改號二其邑一曰二葛城一○古事記仁德段大后歌迦豆良紀多迦美夜○和名抄大和國有二二郡一葛上(加豆良岐乃加美)葛下(加豆良木乃之毛)〕
高御魂命五世孫劔根命之後也〔神武紀二年二月劔根者爲二葛城國造一○國造本紀橿原朝御世以劔根命初爲二葛城國造一注二國號考一〕
門部連〔門部式大和國宇陀郡門僕神社同地○天武紀十年四月門部直大島賜レ姓曰レ連○文德實錄齊衡三年十一月侍醫正六位上門部連名繼等賜二姓與道宿禰一〕
牟須比命兒安牟須比命之後也
服部連〔和名抄大和國山邊郡服部(波止利)○式城下郡服部神社○天武紀十二年九月殿服部造賜レ姓曰レ連又十三年十二月神服部連賜レ姓曰二宿禰一○續紀文武二年九月服部連佐射爲二氏上一同紀神護景雲三年二月奉二神服於天下諸社一〕
天御中主命十一世孫天御桙〔古本杵に作〕命之後也〔國造本紀曰瑞籬朝御世(崇神)大和直同祖御戈命定二賜久比岐國城一(按神武紀大和直祖椎根津彥也)伊豆國造祖神功皇后御世物部連祖天御杵命也(同名異神也)〕
白堤首〔式大和國山邊郡白堤神社○用明紀見二三輪君逆一同姓白堤者訓議不レ詳蓋誤二玉堤一乎〕
天櫛玉命〔櫛玉命天孫本紀天火明櫛玉饒速日命○式高市郡在二櫛玉神社一○按稱二櫛玉者一不レ限二一神之神名一式神賀詞曰大穴持命乃和魂乎倭大物主櫛𤭖玉命登名乎稱豆大御和乃神奈備爾坐仍之則三輪君逆同姓白堤等之祖櫛玉命也〕八世孫大〔異本天に作〕熊命之後也
高志連〔高志談士高師等訓二多加志一○和泉國大鳥郡也○續紀卷十七大僧正行基俗姓高志氏和泉國人也○式和泉國大鳥郡高石神社○續紀天平神護二年十二月和泉國人外從五位下高志毗登若子麻呂等五十三人賜二姓高志連一〕

伊香我色乎命之後也
長谷山直〔長谷和名抄大和國城上郡波都勢○總國風土記大和國長谷鄉云々古老傳云此地兩山澗水相夾而谷間長故云二長谷一也〕
石上朝臣〔石上式山邊郡石上坐布留御魂神社同地○石上朝臣注二左京上一〕同祖神饒速日命六世孫伊賀〔或本香に作る〕我色男命之後也
矢田部〔式大和國添上郡矢田坐久志玉比古神社二座○矢田部和名抄大和國添下郡矢田○注二山城國矢田部一〕
饒速日命七世孫大新河命〔天孫本紀（七世孫弟）大新河命此命纏向珠城宮御宇（垂仁）天皇御世賜二物部連公姓一○又云（十世孫弟）物部大別連公此連公難波高津宮御宇（仁德）天皇御世立爲二皇后一而不レ生二皇子一爲二御名代一后號爲レ氏便爲二氏造一改賜二矢田部連公姓一〕之後也〔大新河命四世孫物部大連速公賜二矢田部連公一〕
縣使首〔縣御使當レ訓二安賀多乃美都加比一○按職員令巡察使諸國司等謂三奉レ勅行二國縣一也准二御使朝臣一首訓二意吡登一意夫登同〕

宇麻志摩遲命之後也
長谷部造〔古事記雄略段定長谷部舍人一者註二長谷置始連一〕
神饒速日命十一〔異本和學所本二に作〕世孫千速見命〔天孫本紀千速見命見エス〕之後也
倭文宿禰〔訓二之都於利又之止利一○神代紀下倭文神建葉槌命（倭文神此云斯圖梨俄未）○天武紀十三年十二月倭文連（倭文此云之都於利）賜レ姓曰二宿禰一○式大和國葛下郡葛城倭文坐天羽雷命神社○和名抄淡路魂三原郡倭文（之止里）〕
出レ自二神魂命之後大味宿禰一也
田邊宿禰〔神名式伊勢國員辨郡多奈閇神社○天武紀十三年十二月櫻井田部連賜レ姓曰二宿禰一蓋是乎櫻井及田邊地名在二河內國一〕
同神五世孫天日鷲命之後也〔國造本紀曰橿原朝云云天日鷲命勅定二賜伊勢國造一〕
多米宿禰〔多米味物也左京中多米宿禰同祖神魂命五世孫天日和志命之後成務天皇御世仕二奉炊職一賜二多米連一右京上多米宿禰神魂命五世孫天日鷲命之後成務天皇御世仕二奉大炊寮御飯一香美特賜二嘉名一

狛人野〔狛和名抄山城國相樂郡有二大狛下狛郷一○欽明紀卅一年三月高麗使人來二於山城國相樂郡一起レ舘淨治又秋七月更饗二高麗使者於相樂館一○三代實錄貞觀八年五月醫得業生從六位上狛人野宮成進レ位二階又元慶元年正月侍醫狛人野宮成授二外從五位下一○催馬樂山城歌曰也末之呂乃已末乃和太利乃宇利川久利和禮乎保之止伊不伊加爾世牟○石川曲曰伊之加波乃古末宇止爾於比乎止良禮天加良支久以須留〕

大物主〔異本同に作〕命兒櫛日方命之後也

右第十六卷〔印本六卷字なし古本幷に和學所本に據て補ふ〕

大和國神別

起二佐爲連一盡二國栖一四〔一本二に作誤なり〕十四氏

天神

佐爲連〔左京上佐爲連山城國佐爲宿禰同祖同注〕

石上朝臣同祖神饒速日命十七〔古本七字なし〕世孫伊已止足屋之後也〔天孫本紀（神功御世）物部五十琴連公（元爲大連次爲宿禰）物部石持連公（佐爲連等祖）物部御辭連公（佐爲連等祖）〕

志貴連〔志貴神武紀記二磯城縣一○古事記崇神段師木水垣宮（垂仁）倭者師木登者同地也○皇極紀見二志紀上郡一○和名抄有二城下城上二郡一○天武紀十二年十月磯城縣主賜レ姓曰レ連〕

同神孫日子湯支〔支異本友に作〕命之後也〔印本彥湯支命者麻（異本麻上宇字あり一本味字に作る）志摩治命子也七世（此下異本之字あり）孫建新川命倭志紀縣主彥祖（此下古本云々字あり）の文字ありけたし後人の加筆なるへし和學所本によりて刊る○舊事記又古本傍注に八世孫物部弔（異本印に作）岐連公志紀縣主遠江國造久努直佐夜直等祖云々の字あり○天孫本紀七世孫弟建新川命（倭志紀縣主等祖）又八世孫物部印岐美連公（志紀縣主云々等祖）トアリ〕

眞神田首〔眞神田大和國高市郡飛鳥同地万葉集卷二見二明日香乃眞神之原一○崇峻紀飛鳥眞神原亦名飛鳥苫田天武紀五年八月大三輪眞上田子人君卒謚曰二大三輪眞上田迎君一○三代實錄貞觀四年三月右京人左大史正六位上眞神田朝臣全雄賜二姓大神朝臣一大三輪大田田根子命之後也〕

伊福部〔注ニ左京下伊福部宿禰ニ〕
同上
石作〔此下或本部字あり○式及和名抄山城國乙訓郡
石作(以之都久利)○天孫本紀 建麻利尼命(石作連
祖)○左京下石作連火明命六世孫建眞利根命之後
也垂仁天皇御世奉ニ爲皇后日葉酢媛命ー作ニ石棺ー獻
之仍賜ニ石作大連公ー也〕
同上
水主直〔直異本首に作○水主訓ニ毛比止里ー○水取和
名抄取水司(毛比止里乃豆加左)○古事記神武段宇
陀水取○神武紀書ニ菟田主水部ー○和名抄及式山城
國久世郡水主(今唱ミヅシ)○直謂レ君見ニ皇別佐伯
直ニ〕
同上〔異本天香吾山命九世孫 玉勝山代根古命山代
水主雀部連輕部造蘇宜部首等祖に作る〕
三富部〔富一本福に作○異本訓ニ三富部ー百木云ミト
ヘカ式山城國久世郡水度神社又愛宕郡ニ末刀神社
アリ○續紀天平寶字二年七月三富戸憶志本姓額田
部川田連也以ニ額田部宿禰姓ー便書ニ位記ー賜之〕
同上

山背忌寸〔神代紀上天津彦根命(是凡川內直山代直等
祖也)○古事記上天津日子根命(凡川內國造山代國
造云々等之祖也)○天武紀十二年九月山背直賜レ姓
曰レ連○同紀十四年六月山背連賜レ姓曰ニ忌寸ー○續
後紀天長十年四月山城國人山代忌寸淨足同姓五百
川等八人改ニ忌寸ー賜ニ宿禰ー淨足等天津彥根命之苗
裔也〕
天都比古禰命子天麻比止都禰命之後也
阿多隼人〔阿多薩摩國郡鄉名也○隼人和名抄波夜比
止○萬葉集卷三詠ニ隼人乃薩摩乃迫門ー○職員令義
解曰隼人者分番上下一年爲レ限○續後紀承和三年
六月山城國人阿多隼人逆足賜ニ姓阿多忌寸ー〕
富乃須佐利乃命〔大和國神別ニハ富須洗利命トア
リテ富乃トハナシ〕之後也〔神代紀下火闌降命(是
隼人等始祖也火闌降此云 褒能須素里)○舊事記卷
六火進命(亦云火闌降命亦云火酢芹命隼人等祖)○
古事記上火照命(此者隼人阿多君之祖)按異說也〕
地祇
石邊公〔左京下石邊公同祖○同注〕
大物主命子久斯比賀多命之後也

留坐〕仍賜二姓宮能賣〔異本神以下の七字なし〕公一然後庚午年籍〔庚午年天智紀九年庚午二月造レ籍續紀神龜四年七月諸國庚午籍七百七十卷以二官印一印之戶令曰凡戶籍恒留二五比一其遠年者仍レ次除但近江大津宮庚午年籍不レ除〕註二神宮部〔部異本御に作〕造一也

菅田首〔式播磨國加茂郡菅田神社〕
天久斯麻比土〔土異本士に作又異本上に作共に止の誤なるへし信友云本のことく土なるへし〕都命〔百木云天久斯麻比止都命ト下文天麻比止都禰命トハ別神ナリ天神ト天孫ト別タルニテモ知ルヘシナホ大和國葦田首考ヘシ〕之後也

天孫

土師宿禰〔注二右京下土師宿禰一〕
天穗日命十四世孫野見宿禰之後也

出雲臣〔式山城國愛宕郡出雲井上神社○和名抄同郡出雲按在二上下二鄕一今賀茂鄕內○注二左京中出雲宿禰一○續紀大寶二年九月出雲狛賜二臣姓一又天平十九年六月出雲屋麻呂賜二臣姓一〕
同神子天日名鳥命之後也〔古事記上天菩比命之子建比良鳥命〔此出雲國造云々等之祖〕〕

出雲臣〔注二右京上出雲臣一〕
同〔衍字なるへし〕天穗日命之後也

尾張連〔天孫本紀十四世孫尾治弟彥連〔以後稱二尾治一〕○註二右京下尾張連一〕
火明命子天香山命之後也〔神代紀下火明命〔是尾張連等始祖也〕又火明命兒天香山命是尾張連等遠祖也○天孫本紀曰天火明命兒天香語山命〔天降名手栗彥命亦名高倉下命○神武紀見二熊野高倉下一〕〕

六人部連〔山城國乙訓郡向明神ノ神主ニ世ニ六人部氏ノ人アリ向明神ノ文書ノ中ニ當家六人部ハ火明命ノ末ニテ崇神天皇ノ御宇我祖安毛建身命ヘ祝祠ノ勅命ヲ蒙ル同勅額ニ依テ本社御建立アリ其後神勅有テ養老年中ニ二座ノ相殿ニ合祭シテ三座トス云々六人部ハ安毛建身命ヨリ世々連續シテ今ニ向日明神ニ仕奉ルナリ云々大和守從五位下六人部忠篤トアリ○山城國乙訓郡ノ一ノ宮六人部社ト銘アルワニクチ薩摩國ヨリ網ニカヽリテ上リシヲ今薩摩國連光院ト云修驗者ノモトニアリトイヘリ○注二右京下六人部一〕火明命之後也

部等同訓〕
同上
西泥土《ニシヒヂリコ》〔異本土字なし又一本西遅に作又一本西泥部に作〕部〔西按學令謂三居在二皇城左右一也西河内東大和也○遅部欽明紀傍訓丈部古事記作二間人一○職員令宮内省土工司見二遅部使部一依レ是則應レ訓二河内乃波自倍一○天武紀十二年九月遅部造賜レ姓曰レ連
鴨縣主同祖鴨建玉依彦之後也〔玉依彦命父加茂建角身命母丹波國伊可古夜日女見二山城風土記一〕
祝部《ハフリヘ》〔和名抄祝部（波布理倍）又上野國新田郡祝人（波布利）鄉
同祖建角身命之後也
税部《チカラヘ》〔訓二知加良倍一和名抄主税（知加良）○職員令民部省主税寮掌二倉廩一出二納諸國田租舂米一云々
神魂命子〔一本古本此下磨滅して見えす按に角凝魂命の字なるへし百木云角凝魂命は神魂命の御子なり〕之後也
呉公《クレ》〔呉公使二其國之人一賜二氏公一謂レ直○孝德紀白雉五年七月西海使吉士長丹賜レ姓爲二呉氏一○雄畧紀十四年安二置呉人於檜隈野一因名二呉原一云々○呉和名抄久禮〕
天相《アマアヒ》命十三世孫香太《カタ》〔香太異本雷大に作古本雷の一字に作信友云雷大臣命トアル是也此コト正ト考ニ云ヘシ〕臣命之後也
神宮部《カンミヤヘ》造〔神宮部造舊號宮能賣神則准二内侍一也古語拾遺大宮賣神侍二御前一古注云是太玉命久志備所レ生神如二今世内侍一〕
葛城猪石岡天下〔下異本降に作〕神天破〔按に破は辟の誤にて立を落したるなるへきこと上の宮部造の下にいへりさて此氏の正說は大三輪神社注進狀に見えたり〕命之後也六世孫吉足日命礒〔異本磯に作〕城瑞籬宮御宇〔崇神○崇神元大字一本に據て改〕天皇御世天下有レ災〔天下有レ災崇神紀五年國内多二疾疫一六年百姓流離七年二月有二神明一憑談以二大田々根子一爲下祭二大物主大神一之主上亦以二市磯長尾市一爲下祭二倭國魂神一主上〕因遣二吉足日命一令レ齋二祭大物主神一災異即止天皇詔曰消二天下災一百姓得レ福自今以後可レ爲二宮能賣神一〔神上異本公字あり○式大殿祭祠曰大宮賣命登御名乎申事波皇御孫命乃

郡角野ハ都乃又土佐國大角ハ於保都ト訓セリ信友云此說モサルコトナレトモ角ヲツヌト古クヨリ云ヒテ後ニツノトモ云ヘハ和名抄ノ方ハ後ノ訛言ナランカ」

鴨縣主〔山城國風土記曰可茂稱ニ可茂ニ者日向曾峯天降坐神加茂建角身命也神倭石余比古之御前立坐而宿ニ坐大倭葛木山之峯ニ自レ彼遷坐至ニ山代國岡田之加茂ニ隨ニ山城川下ニ坐ニ葛野河ト與ニ加茂河ニ所レ會立坐迥見ニ加茂河ニ而言雖ニ狹小ニ石川淸河仍曰ニ石川瀨見小河ニ自ニ彼川上ニ定ニ坐久我國之北山基ニ從ニ爾時ニ名曰ニ加茂ニ也加茂建角身命娶ニ丹波國神野伊可古夜女ニ生レ子名ニ玉依日子ニ次曰ニ玉依比賣ニ玉依比賣於ニ石川瀨見小河之ニ遊爲レ時丹塗矢自ニ川上ニ流下乃取挿ニ置屋邊ニ遂感孕生ニ男子ニ至ニ成人之時ニ外祖父建角身命造ニ八尋屋ニ竪ニ八戶扉ニ釀ニ八腹酒ニ而神集之而七日七夜樂游然與レ子語言汝父將レ思人令レ飮ニ此酒ニ卽擧ニ酒杯ニ向レ天爲ニ祭酒ニ飮遊時分ニ穿屋甍ニ而升ニ於天ニ乃因ニ外祖父之名ニ號ニ可茂別雷命ニ（注ニ國號考ニ）」

賀茂縣主同祖神日本磐余彥天皇〔註云神武○按に神武の上諡字有へきか」後也〔異本後也の字なし」欲レ向ニ中洲ニ〔洲異本州に作」之時山中嶮絕跋涉失レ路於レ是神魂命孫鴨建津〔津一本須に作る」之身〔或本之字なし之身字異本顚倒して書す」命〔元之の字有和學所本に據て刊」化如ニ大烏ニ〔元烏に作異に據て改」翔飛奉レ導遂達ニ中洲ニ〔洲異本州に作」時天皇喜ニ〔喜古本嘉に作」其有功ニ特厚褒賞天〔天の字元なし古本に據て補」八咫烏（ヤタカラス）之號從レ此始〔始異本姓に作」也〔神武紀二年定レ功行レ賞云々頭八咫烏亦入ニ賞例ニ其苗裔卽葛野縣主主殿部是也」

矢田部（ヤタベ）〔和名抄大和國添下郡矢田攝津國八田部（夜多倍）注ニ左京上矢田部連ニ○古事記仁德段爲ニ八田若郞女之御名代ニ定ニ八田部ニ○天孫本紀物部大別連公難波高津宮御宇（仁德）天皇御世詔爲ニ侍臣ニ云々矢田皇女爲ニ皇后ニ而不レ生ニ皇子ニ之時詔ニ侍臣大別連公ニ爲ニ皇子ニ代ニ后號ニ爲レ氏便爲ニ氏造ニ改賜ニ矢田部連公姓ニ」

鴨縣主同祖鴨建津身命〔印本命字なし一本を以て補○異本命の上之の字あり」之後也

丈部（ハセツカベ）〔丈部和名抄（波世豆加倍）伊勢國杖部安房國丈

文公貞直 兄豐後大目 大初位下 筑紫 公文公貞雄等賜二姓忠世宿禰一貫二附左京六條三坊一〕

饒速日命男味眞治命〔印本命字なし 和學所本に依て補〕之後也

秦忌寸〔秦注ニ諸蕃忌寸山城國諸蕃ニ曰天平廿年改ニ賜伊美吉姓一續紀天平寶字三年十月天下諸姓着ニ君字一者換以ニ公字一伊美吉以ニ忌寸一〕

神饒速日命之後也

錦部首〔錦部和名抄山城國愛宕郡錦部（爾之古利）近江國錦部（爾之古利）〕

同神十二世孫物部目大連之後也〔目大連天孫本紀有ニ三連公一未レ辨〕

鳥取連〔天武紀十二年九月鳥取造賜レ姓曰レ連○注ニ右京上鳥取部連一〕

天角巳利〔利異本斯に作〕命八〔八異本三に作〕世孫天湯河板擧〔印本擧字なし 一本を以て補 ○垂仁紀廿三年十月鳥取祖天湯河板擧（板擧此云ニ拕儺一）〕輿〔按誤ニ擧字一乎不レ然則衍也〕命之後也

今木連〔今木注ニ山城國皇別今木一○左京中宮部造ノ注文考ヘ合スヘシ

神魂命五世孫阿麻乃西乎乃命之後也

巨椋連〔椋異本掠に作 ○式山城國久世郡巨掠神社○按に大椋置始連長谷置始連等同祖而負ニ長谷之大藏一乎〕

今木連同祖止與波知命之後也

額田部宿禰〔右京上額田部宿禰明日名門命三世孫天村雲命之後也○額田義見ニ左京下額田部湯坐連一○天武紀十三年額田部連賜レ姓曰ニ宿禰一〕

明日名門命六世孫天申〔申或本に甲又由につくる〕久富命之後也

賀茂縣主〔賀茂山城國也 ○和名抄相樂郡加茂式岡田鴨神社○和名抄愛宕郡賀茂○式鴨川合社等是也○舊事記神代本紀天神玉命（葛野鴨縣主等祖）○續紀寶龜十一年四月山城國愛宕郡人鴨禰宜眞髮部津守等十一人賜ニ姓加茂縣主一〕

神魂命孫武津之身命之後也〔異本に舊事記云 神皇産靈尊兒天神天（異本玉に作）命葛野鴨縣主等祖に作○百木云下ナル祝部及山城國風土記ニ建角身命トアリ角ハツヌ後ニツノトモ云トモコヽハツトノミ訓ヘシ角ヲツトノミ訓ル例ハ和名抄近江國高島

奈矣〔矣和學所本矣につくる〕和連〔連一本造につくる異本奈若私造に作る按に若字キとはよめかたし誤寫なるへし〕

同上

眞髮部造〔眞髮部元是白髮部也古事記雄略段爲二白髮太子之御名代一定二白髮部一〇淸寧紀二年二月置二白髮部舍人白髮部膳夫白髮部靫負一〇天武紀十二年九月白髮部造賜レ姓曰レ連〇續紀延曆四年五月詔曰先帝御名〔光仁天皇諱白壁〕及朕之諱〔桓武天皇諱山部〕云々自今以後宜二並改避一於レ是改二姓白髮部一爲二眞髮部一山部爲レ山〕

神饒速日命七世孫大賣布乃命〔宇麻志麻志命七世孫大咩布命〕之後也〔天孫本紀〔七世孫弟〕大咩布命〔若湯坐連等祖〕此命纏向珠城宮〔垂仁〕御宇天皇御世爲二侍臣一〇式攝津國河邊郡高賣布神社賣布神社〕

今木連〔連異本造に作〇今木新來漢人之居處負二地名一雄略紀用二新漢字一欽明紀〔七年七月〕書二倭國今來郡一齊明紀〔四年五月〕建王薨殯二今城谷上一歌曰伊麼紀那屢乎武例我禹杯爾云々又詠二伊麻紀能禹知一〔高市飛鳥邊也〕而後延曆年間以二倭國今來座大神一遷二奉山城國葛野郡平群一式平野祭祝詞曰今來與利仕奉流皇大神云々續紀延曆元年十一月田村後宮今木大神和名抄山城國葛野郡田村鄕是平野之地也〕

同上〔天孫本紀今木金弓若子連公〔今木連等祖〕麁甲火連公之子物部石弓若子連公〔今木連等祖〕十六世孫物部耳連公〔今木連等祖大人連公之子〕弟物部金弓連公〔今木連等祖〕〕

奈癸〔癸印本矣に作一本に依て改拾芥抄吳に作る〕勝〔百木云奈矣ハ奈若ヲ誤カ上ナル奈矣和モ一本及拾芥抄奈若私ト作リ又按ニ拾芥抄無尸姓部ニ奈吳勝トアリテナイキカチト訓ヲツケタリ〕

佐爲宿禰同祖

額田臣〔和名抄筑前國早良郡額田〔奴加多〕云々等負レ氏〇注二左京下額田部湯座連一〕

伊香我色雄命之後也

筑紫連〔筑紫義注二國號考一万葉集卷廿都久志能佐伎都久之乃之麻又卷五都久紫能君仁〇續後紀承和十五年八月肥前國養父郡人太宰少典從八位上筑紫公

之後也〔異本伊香色雄命之子多辨宿禰命宇治部連等祖に作る○下文宇治山守連同祖〕

佐爲宿禰〔武大和國城上郡狹井坐云々神社○天孫本紀物部石持連公（佐爲連等祖）○天武紀十三年狹井連賜レ姓曰二宿禰一○左京上佐爲連同祖（委注）〕

同上〔異本伊香色雄命五世孫物部石持連公佐爲連等祖に作る〕

佐爲連〔天孫本紀物部麥入宿禰連公此連公遠飛鳥宮（允恭）御宇天皇御世元爲二大連一次爲二宿禰一云々弟物部石持連公（佐爲連等祖）〕

同神八世孫物部牟伎利足尼之後也〔異本宇麻志麻志命十一世孫物部麥入宿禰連公之子辭連公佐爲連等祖に作る〕

中臣葛野連〔中臣注二左京上一○葛野和名抄山城國葛野（加度乃）郡○天孫本紀（七世孫弟）十市禰命子物部膽咋宿禰系圖注二左京上一）○續紀天平二十年七月中臣部千稻麻呂賜二中臣葛野連姓一〕

同神九世孫伊久比足尼之後也〔異本物部膽咋宿禰八世物部奈西連公葛野連等祖に作る〕

巫部連〔和名抄巫加牟奈岐祝女也○右京上巫部宿禰同祖○和泉國巫部同神孫云々雄略天皇御體不豫因レ茲召二上筑紫豐國奇巫一令二眞椋大連率レ巫仕奉一仍賜二巫部連一○天武紀巫部連賜レ姓曰二宿禰一〕

同神十世孫伊巳布都乃連公之後也〔異本宇麻志麻治命十世孫物部伊莒弗連公之男眞椋連公巫部連文島連須佐連等祖に作る○天孫本紀（十世孫）物部伊莒弗連公（五十琴宿禰之子也）此連公稚櫻（履中）柴垣（反正）二宮御宇天皇御世爲二大連一（十一世孫）物部眞椋連公（巫部連云々等祖伊莒宿禰之子也）〕

高橋連〔高橋武烈紀歌曰擧暮摩矩羅挖箇播志須擬云云○式大和國添上郡高橋神社和名抄遠江國城飼郡高橋（多加波之）○右京上高橋連河內國鳥見連等同祖〕

同神十二世孫小前宿禰之後也〔古事記允恭段木梨輕太子逃二入大前小前宿禰大臣之家一於レ是穴穗御子興レ軍圍二大前小前宿禰之家一○同段歌曰意富麻幣袁麻幣須久泥賀云々○天孫本紀十二世合小前宿禰連公（田部連等祖）物部建彥連公（高橋連等祖）〕

宇治山守連〔前文宇治宿禰同祖〕

同神六世孫伊香我色雄命之後也

古今要覽稿卷第二十四

●姓氏部 姓氏錄校正四

●新撰姓氏錄中之末

山城國神別

起ニ阿刀宿禰ー盡ニ狛人野ー四〔四元三に作異本に據て改〕十五氏

天神

阿刀宿禰〔天武紀十三年阿刀連賜レ姓曰ニ宿禰ー○續紀養老三年五月阿刀連人足等三人並賜ニ宿禰姓ー○式山城國葛野郡阿刀神社○注ニ左京神別上ニ〕

石上朝臣同祖饒速日命孫味饒田〔田一本日に作〕命之後也

阿刀連〔攝津國及和泉國阿刀連同祖○續紀慶雲元年二月從三位上村主百濟改賜ニ阿刀連ー○又靈龜元年四月上村主通改賜ニ阿刀連ー○三代實錄貞觀六年八月左京人阿刀連粟麻呂阿刀連石成阿刀連禰守右京人阿刀物部貞範等並賜ニ姓良階宿禰ー神饒速日命之裔孫也○阿刀注ニ左京上ニ〕

同上〔天孫本紀味饒田命（阿刀連等祖）〕

熊野連〔式紀伊國牟婁郡熊野坐神社熊野早玉神社○熊野連百木云牟婁郡圖ニ口熊野奧熊野アリ凡口熊乃ハ日高郡ニ隣リ奧熊乃ハ大和國ニ隣レリ又口熊乃ニ熊乃村アリ○南紀名勝志ニ新宮庄ニ上熊乃村中熊乃村下熊乃村アリ今ノ新宮村ト云ハ元ハ熊乃村ノ内ナレトモ新宮大明神御鎭座以後處ノ名トセルカ諸書ニ熊乃村ト云ヘルモ此處ナルヘシ惣テ牟婁一郡ヲ熊乃ト云ルハ此熊乃村ニ因テ云トミエタリ云々按牟婁ト云ルハ室ノ義也地勢室ノ如シト國人ハ云ヘリ〕

同上〔國造本紀熊野國造志賀高穴穗朝御世饒速日命五世孫大阿斗足尼定ニ賜國造ー○按阿斗足尼蓋熊野連子阿斗地名轉爲ニ阿提ー持統紀紀伊國阿提郡類史大同元年七月改ニ紀伊國阿提郡ー爲ニ在田郡ー〕

宇治宿禰〔天武紀十三年十二月菟道連賜ニ姓宿禰ー○式山城國宇治郡宇治神社彼方神社○和名抄宇治郡宇治鄕又久世郡宇治鄕〕

饒速日命六世孫伊香我色雄命〔色雄命注ニ左京上ニ〕

刺宮ニ臨レ朝秉レ政自稱ニ忍海飯豐青尊ニ○大和國神別大和宿禰宜ニ考合ニ）
椎根津彥命之後也ニ〔古事記神武段椎根日子此者倭田造等之祖○神武紀珍彥賜名爲椎根津彥〕
八太〔印本木に作一本によりて改〕造〔式大和國高市郡波多神社和名抄波多〕
和多羅〔羅一本罪に作〕豐〔按に此下玉彥字あるへきか〕命兒布留多摩乃命之後也
倭木〔木一作本○異本太に作又一本倭の一字に作る信友云前文右京神別下注に書入たる一本には大字太とあり考へし○和名抄大和國十市郡飫富〕
神知津彥命〔椎根津彥之一名○大和國神別大和宿禰出レ自ニ神知津彥命ニ云々神知津彥（一名推根津彥）是大倭始祖也○國造本紀天孫問汝誰哉對曰吾是皇祖彥火々出見尊孫推根津彥云々〕
右第十五卷

姓氏錄中之本終

三年胷方君賜レ姓曰二朝臣一○古事記上胷形之與津宮中津宮邊津宮此三柱神者胷形君等之以伊津久三前大神也○天武紀二年胷形君德善女尼子娘爲レ妃

○胸形義注二國號考一〕

大神朝臣同祖吾〔吾異本吉に作〕田片隅命之後也

〔大和國大神朝臣素佐能雄命六世孫大國主之後云云號二姓大三榮一河內國宗形君大國主命六世孫吾田片隅命之後也○舊事記卷四大國主神八世孫阿田賀田須命九世孫太田々禰古命十世孫大御食持命十一世孫大鴨積命磯城瑞籬朝御世賜二賀茂君姓一〕

安曇宿禰〔和名抄信乃國安曇（阿津美）郡筑前國阿曇○式信乃國安曇郡穗高神社○續紀天平十六年二月幸二安曇江一遊二覽松林一云々取二三島路一行二幸紫香樂宮一仍之安曇當レ有二于攝津國兎原住吉邊一○應神紀三年十月阿曇連祖大濱宿禰爲二海人之宰一○天武紀十三年十二月阿曇連賜レ姓曰二宿禰一○安曇義大綿津見阿於保轉綿二音略○攝津國凡海直ハ安曇宿禰同祖綿積命六世孫小栲梨命之後也ト注セリ○信乃地名考上云安曇郡穗高神社ハ保高村ニ坐云々保高嶽雲ニソビヘテ連山左右ニ峙立ス神號モ爰ニヨルカ云々加茂翁曰アツミハ海テウコトソ綿積タツノ約ツナリワカ通シテ阿曇ナリアツヲ約レハウトナレリ今大町ノ奧ニ海猶殘レリ上ナルヲ青木海ト云ヒタリ三十町餘次ヲ中ツナノ海ト云フ次ヲ海ノ口ト云フ二三ノ海ハ大キサ上ナルモヽノ半ト云フ云々ト云ヘリ〕

海神〔海神國海神宮等注二國號考一〕綿積〔古事記上底津綿津見神中津綿津見神上津綿津見神此三柱綿津見神者阿曇連等之祖神以伊津久神也故阿曇連等者其綿津見神之子宇都志日金拆命之子孫也〕豐玉彥神子穗高見命之後也

海犬養〔和名抄信乃國海部（安末無倍）筑前國海部○天武紀十三年十二月海犬養連賜レ姓曰二宿禰一〕

海神綿積命之後也

凡海連〔和名抄丹後國加佐郡凡海於布之安万假字違○攝津國凡海連同祖○天武紀十三年十二月凡海連賜レ姓曰二宿禰一〕

同神男穗高見命之後也〔卷卅凡海連火明命之後〕

青海首〔青海按大和國忍海舊名○古事記履中段青海皇女亦名飯豐皇女○顯宗紀飯豐青皇女於二忍海角

皇產靈命（五世孫）天道根命定二賜國造一○河內國神別紀直同祖（道根命注二國號考紀伊國一）〕

大村直（オホムラ）〔和名抄和泉國大鳥郡大村諸國大村（於保無良）○續後紀承和二年十月丹波國人大村直福吉及其同族並五人賜二姓紀宿禰一焉武內宿禰之枝別也〕

天道根命〔按道根命者爲二紀伊國造一也建內宿禰之毋木國造之祖宇豆比古之妹也仍レ是則宇根比古與二道根命一同人〕六世孫若積（ワカツミ）命之後也

大家首（オホヤケ）〔大家武烈紀歌於裒野該○和泉國皇別云々天智庚午年依居大家負二大宅臣姓一〕

天道尼（ミチネ）乃命孫比古麻夜眞止（ヒコマヤマト）乃命之後也〔和泉國皇別大家臣紀角宿禰之後也〕

高市連（タカイチ）〔一本連字なし○高市和名抄（多介知）○天武紀十二年十月高市縣主賜レ姓曰レ連○續紀養老七年十二月放二官婢花一從良賜二高市姓一○又天平廿年八月外從五位下高知大國賜二連姓一○或本ニ八本高市トアルハ八太ノ高市ヲ誤ルカ和名抄大和國高市郡八太（波多）又式ニ同郡波多神社アリ○又按八本ト異本ニ書ルヲ誤タルカ拾芥抄ニモ高市連ハアレトモ八太高市ハ見エス又拾芥抄ハ八太ノ二字ノ落タル本モテ記セルモシラス拾芥抄ニハ其例イクラモミユ○信友云本ヲ太マタ太ヲ木ニ誤レル例古書ニ多シ近江ノ栗本郡ヲハ何ノ古書ニモ多クハ栗太ト作リ若クハ太ヲモト、訓ナレタルヤサテ後文ニ倭木トアルヲモ一本ニハ倭太又一本ニハ倭大トモ作ル考ヘシ〕

額田部同祖天津彥根命三世孫彥伊賀都（ヒコイカツ）命之後也〔古事記上天津日子根命云々高市縣主云々等之祖也〕

桑名首（クハナ）〔和名抄伊勢國桑名（久波奈）郡○式桑名神社二座○伊勢國神名帳考曰桑名神社齋神天津彥根命天久之比乃命也今號二三島明神一在二大夫村一○首注二左京皇別上布師首一○孝德紀村首長也○續紀天平寶字九歲改二首史一爲二毗登一於レ事不レ穩宜レ從二本字一〕

天津彥根命男天久之比乃命之後也〔神代紀上天津彥根命次活津彥根命次熊野櫲樟日命○古事記上熊野久須毘命〕

地祇

宗形朝臣（ムナカタ）〔和名抄筑前國宗像（牟奈加多）○天武紀十

朝來直〔按に常陸ニ朝來ト書テイタコト云處アリトソ信友云今潮來ト書〕

同上

若倭部〔左京下若倭部神饒速須比命十八世孫子田知之後也前文若倭部連神魂命七世孫天筒草命之後也凡謂ニ神魂ニ者非ニ一神名ニ高神號也○式遠江國麁玉郡若倭神社〕

同神四世孫建額明〔明前文丹比宿禰の注又舊事記赤に作る〕命〔命字元なし一本に依て補ふ○天孫本紀四世孫建額赤命五世孫建筒草命(若倭部連祖)之後也〕

川上首〔川上古事記垂仁段印色命坐鳥取之河上宮定河上部○垂仁紀茅渟菟砥川上是也○雄略紀二年十月置ニ河上舍人部一○續後紀承和元年十二月川上造吉備成賜ニ姓春道宿禰一伊香我色雄命之後也〕

火明命之後也

坂合部宿禰〔坂合境也攝津國皇別依ニ坂合部一○雄略紀坂合部連贄宿禰○天武紀十三年二月境部連賜レ姓曰ニ宿禰一〕

火闌降命八世孫邇倍足尼〔邇倍足尼本紀贄古連公同人歟〕之〔之字異本によりて補ふ〕後也〔左京神別下坂合部宿禰火明命八世孫邇倍足尼之後也〕

阿多御手犬養〔犬字元なし攝津國日下部注文に據て補○阿多和名抄薩摩國阿多郡○神代紀下日向國吾田長屋又吾田鹿葦津姫○神武紀吾田村○安閑紀婀娜國(注ニ國號考ニ)○神代紀下火闌降命〔是隼人等始祖〕又曰吾田君小橋等之本祖也

同神六世孫薩摩〔摩異本麻に作〕若相樂後也

滋野宿禰〔滋野文德實錄仁壽二年二月滋野朝臣貞主卒貞主者右京人也曾祖父大學頭楢原東人天平勝寶元年賜ニ姓伊蘇志朝臣一父尾張守從五位上家譯延曆年中賜ニ滋野宿禰一○後紀弘仁十四年正月滋野宿禰貞主與ニ父家譯一共賜ニ朝臣姓一○三代實錄貞觀元年十二月攝津守滋野朝臣貞雄卒貞雄右京人也父從五位下家譯延曆十七年改ニ伊蘇志臣一賜ニ滋野宿禰一弘仁十四年改ニ宿禰一賜ニ朝臣一○大和國伊蘇志臣同祖〕

紀直同祖神魂命五〔五一本六に作〕世孫天道根命之後也〔天神本紀天道根命川瀨造等祖(天武)紀及和泉國川瀨造祖合○國造本紀紀伊國造橿原朝御世神

水ト云フトソ旱ニモ絶ス清水ニテ近キ村鄕ヨリ朝夕汲侍ル也古史ニ淡路島ノ清水淡路瑞井ト稱スルハ此水ナルヘシ産宮ヘモ近キ處也〕

尾張連〔尾張義註ニ左京下尾張宿禰ニ○古事記崇神段尾張連之祖意富阿麻比賣○續後紀卷一右京人尾張連年長尾張連豐野尾張連豐山等賜ニ姓忠宗宿禰ニ〕火明命五世孫武礪目命之後也〔神代紀下火明命是尾張連等始祖也○天孫本紀饒速日命五世孫建斗目命天戸目命之子十三世孫尻綱根命品太天皇御世賜ニ尾張連姓ニ〕

伊與部

同上〔此二字元なし一本に依て補ふ〕

六人部〔三代實錄貞觀四年五月美乃國厚見郡人六人部重成云々賜ニ姓善淵朝臣ニ天孫火明命之後武礪目命之裔孫與ニ伊豫部連次〔一本吹に作一本笛に作〕田連等ニ同祖也○百木云和名抄丹波國天田郡六部鄕○御領目六ニ丹波國六人部アリ同地○廿四輩順拜圖會ニ越前國今立郡云々出雲山毫接寺ハ云々創建開基ハ乘專大德也大德ハ元丹波國云々六人部ノ邑ニ行ヒ玉ヒケル云々始メ丹州六人部ニ毫攝寺ヲ開キ云々トアリ○神鳳抄ニ尾張國ニ三人部御園ト云モアリ〕

同上

子部〔式大和國十市郡子部神社遠江國敷智郡許部神社○三代實錄貞觀十六年十二月山城國久世郡人從七位下子部貞本從八位下子部氏雄等賜ニ姓子部宿禰ニ其先御中主尊之後也○續紀天平寶字元年三月勅自今以後改ニ藤原部姓ニ爲ニ久須波良部ニ君子部爲ニ吉美侯部ニ〕火明命三〔攝津國神別並に前後文及舊事記五に作る〕世孫建刀米命之後也〔天孫本紀(五世孫)建斗目命(子部无ニ所見ニ)〕

大炊刑部造〔右京下大炊刑部同祖○大炊(於保比)和名抄假字誤職員令宮内者有ニ大炊寮ニ可レ考○刑部允恭紀二年爲ニ忍坂大中姫皇后ニ定ニ刑部ニ和名抄諸國有ニ刑部鄕ニ〕同神四〔印本三に作左京神別下及舊事記四に作によりて改〕世孫天礪目命〔天孫本紀(四世孫)天戸目命(天忍人命之子此命葛木避姬爲レ妻生ニ二男ニ)又(五世孫)建斗目命次妙斗目命〕之後也

母土師宿禰並追ニ贈正一位一其改ニ土師氏一爲ニ大枝朝臣一亦宜三菅原眞仲土師菅麻呂等同爲ニ大枝朝臣一矣」

同上

丹比宿禰〔丹比和名抄河内國（太知比）天孫本紀三世孫天忍男命子建額赤命子建筒草命（多治比連云々祖）○天武紀十三年丹比連賜レ姓曰ニ宿禰一○按反正紀元年十月都ニ于河内丹比一是謂ニ柴籬宮一此宮所者今丹比郡松原庄廣庭天神社地也註ニ宮所記及國號考二」火明命三世孫天忍男命之〔印本後也二字有一本に據て刋」男武〔武舊事記建に作」額赤命七世孫御殿宿禰男色鳴大鷦鷯天皇御世〔世字元なし一本に依て補ふ」皇子瑞歯別尊誕ニ生淡路宮一之時淡路瑞井水奉レ灌ニ御湯一〔瑞井古事記仁徳段淡路島之寒泉同地而今由良湊有ニ清瀧寺山上之冷泉一乎淡路宮同地爲レ寺」于レ時虎〔元再に作一本に據て改」杖〔元枝に作和學所本に據て改む○虎杖舊名多遲新撰字鏡伊太登利和名抄伊太止里」花飛入ニ御湯瓮中一〔瓮新撰字鏡保止支」色鳴宿禰稱ニ天神壽詞一奉レ號曰ニ多治比瑞歯別命一〔命一本尊に作○反正紀天皇初生ニ于淡路宮一云々於レ是有レ井曰ニ瑞井一則汲レ之洗ニ太子一時多遲花落有ニ于井中一因爲ニ太子名一也多遲花者今虎杖花也故稱謂ニ多遲比瑞歯別天皇一」乃定ニ多治部於〔於字一本に依て補ふ」諸國一爲ニ皇子湯沐邑一即以ニ色鳴一爲レ宰令レ領ニ丹比部戸一因號ニ丹比連一〔連字元なし和學所本に據て補ふ」遂爲〔同上本此下氏字あり」レ姓其後庚午年依レ作ニ新家一加ニ新家二字一爲ニ丹比新家連一也〔續紀寶龜八年五月丹比新家連稻長大膳々部大初位下東麻呂賜ニ姓丹比宿禰一○淡路常盤艸三原郡ノ條ニ云産宮ハ櫟田村ニアリ社領若干寛文年中國君ヨリ營建シ玉フ云々此社ノ邊ニ産ノ池トテ小池アリ又此社近キ邊ニ松本水トテ名水アルヲ以テ思フニ反正天皇ノ産地ナルヘシ云々又産ノ水ハ同ク社傍ニアリ産衣池トモ穢ノ池トモ云フ孕婦此池ノ苔ヲ取テ服スレハ産時安泰也ト云フ安産ヲ祈テ驗アリトテ産宮ニ詣ル人多シ又云松本清水ハ江尻浦ニアリ潮清水トモ云フ古キ楠ノ空木徑六尺深七尺ナル物ヲモテ井筒トセリ古ハ此邊マテ潮ノ漲リ入リシ也醴泉其中ニアルユヱニ潮清

姓ニ也（神代紀上天穗日命（是出雲臣土師連等祖也）又曰天穗日命（此出雲臣武藏國造土師連等祖）○續紀天應元年六月遠江介從五位下土師宿禰古人云々一十五人言土師之先出レ自ニ天穗日命ニ其十四世孫名曰ニ野見宿禰ニ昔纏向珠城宮御宇云々率ニ土師三百餘人ニ自領取レ埴造ニ諸物象ニ進之帝覽甚悅以代ニ殉人ニ號曰ニ殖輪ニ云々望諸因ニ居地名ニ以爲ニ菅原姓ニ勅依レ請許レ之

菅原朝臣（注レ上○式大和國添下郡菅原神社菅原伏見陵等同名○按遠江國長上郡茅原鄉草菅所生之地也土師宿禰古人爲ニ遠江介ニ之時因ニ居地名ニ爲ニ菅原姓ニ者當ニ是地ニ也今在ニ菅原天神社ニ號ニ天神町ニ○續紀延曆九年十二月菅原宿禰道長秋篠宿禰安人等並賜ニ朝臣ニ○殘編大和風土記添下郡菅原鄉云々三鄉中有ニ寺一宇ニ號ニ菅原寺ニ聖武天皇御宇行基菩薩造建ナリ傳云此地菅原氏始祖所出也故以ニ菅原ニ爲レ氏也トアリ

土師朝臣（異本宿禰に作る○土部臣野見宿禰主ニ喪葬之事ニ皇太子（景行）詔充ニ陵戸ニ兼ニ山守ニ也爾來土部氏萬葉居ニ菅原伏見村ニ）同祖乾飯根命七世孫大保慶連之後也（飯入根命ノ子ウカツクヌノ命甘美乾飯根命子野見宿禰垂仁天皇崩菅原伏見山陵ニ葬）

秋篠朝臣（續紀延曆元年五月土師宿禰安人等言臣等遠祖野見宿禰云々土師宿禰古人等前年因ニ居地名ニ改ニ姓菅原ニ當時安人任在ニ遠國ニ不レ及ニ預列ニ（異本例に作）望請ニ土師之字改爲ニ秋篠ニ詔許之於レ是安人兄弟男女六人賜ニ姓秋篠ニ○又四年八月右京人土師宿禰淡海其姉諸主等改ニ本姓ニ賜ニ秋篠宿禰ニ安人等並賜ニ姓朝臣ニ又土師宿禰諸士等賜ニ姓大枝朝臣ニ其土師氏惣有ニ四腹ニ中宮母家者是毛受母也故毛受腹者賜ニ大枝朝臣ニ自餘三腹者或從ニ秋篠朝臣ニ或屬ニ菅原朝臣ニ矣○後紀弘仁二年三月河內國人土師宿禰常磐賜ニ姓秋篠朝臣ニ○續後紀天長十年二月左京人秋篠朝臣雄繼右京人秋篠朝臣吉雄賜ニ姓菅原朝臣ニ）

同上

大枝朝臣（大枝陵式山城國乙訓郡三代實錄貞觀八年十月改ニ枝字ニ爲ニ大江ニ○和名抄乙訓郡大江（於保江）○續紀延曆九年十二月朕外祖父高野朝臣外祖

神門臣〔神門和名抄出雲國神門（加無止）郡○出雲風土記出雲郡建部鄕曰纏向檜代宮御宇天皇勅云々健部定ニ賜爾時神門臣ノ古禰健部定給○所ニ以號ニ神門ノ者神門臣伊賀曾熊之時神門貢之故云ニ神門ノ即神門臣等自レ古至レ今常居ニ此處ノ故云ニ神門ノ（注ニ出雲風土記解ニ）〕

同上

右第十四卷

右京神別下

起ニ若倭部ニ〔按に此下連字あるへきか〕盡レ倭〔按に此下木字あるへきか〕二十八氏〔按に八は九の誤ならん今其數をかそふるに廿九氏あり

天神

若倭部連〔若倭部神社式遠江國麁玉郡○神魂祖神之稱號也此當ニ饒速日命ノ

神魂命七世孫天筒草命之後也〔神饒速日命平津守若倭部連葛木厨直祖○舊事紀云天香吾命五世孫建筒草命多治比連○天孫本紀（速日命五世孫）建筒草命（若倭部連祖）○左京下若倭部神須比（一本饒速）命十八世孫子田知之後也

伊與部〔伊與國號出湯國也謂愛比賣湯姬也注ニ國號考ニ○和名抄伊豫（伊與）國○國造本紀書ニ伊余ニ

高媚牟須比命三世孫天辭代主命之後也〔下文伊與部尾張連同祖火明命五世孫武礪目命之後也○令集解序曰從五位下伊與部連馬養等撰傳曰是舊宰伊豫部馬養連所レ記無ニ相乖ニ云々

天孫

土師宿禰〔垂仁紀三十二年出雲國野見宿禰造ニ土物ニ云々天皇厚賞稱ニ野見宿禰之功ニ亦賜ニ鍛地ニ卽任ニ土部職ニ因改ニ本姓ニ謂ニ土師部臣ニ是土師連等主ニ天皇喪葬ニ之緣也所レ謂野見宿禰是土師連等之始祖也○天武紀十三年土師連賜レ姓曰ニ宿禰ニ○續紀神護景雲三年十二月河內國志紀郡人土師連智毛智賜ニ姓宿禰ニ○三代實錄貞觀九年四月河內國丹比郡大政官史生土師宿禰長雄土師宿禰常見改ニ本居ニ貫ニ右京職ニ○和名抄河內國和泉國上野國土師（波遲之）又備前國邑久郡土師（波之）又阿波國土師（反之）河內國志紀郡道明寺村舊名土師又號ニ秋篠ニ

天穗日命十二世孫可美乾飯根命之後也光仁天皇天應元年改ニ土師ニ賜ニ菅原氏ニ有レ勅改賜ニ大枝朝臣

防國佐婆郡玉祖神社○和名抄河內國高安郡周防國佐波郡玉祖（多末乃於也）○古事記上玉祖命者〔玉祖連等之祖〕○神代紀下玉作上祖玉屋命○天武紀十三年玉祖連賜レ姓曰ニ宿禰一〕

高御牟須比乃命十三世孫大荒木命之後也

忌玉作〔一作ニ玉作連一〕○神代紀上玉作部遠祖豐玉者造レ玉又曰玉作遠祖伊弉諾尊兒天明玉作ニ八坂瓊之曲玉一、又下、曰櫛明玉神爲ニ玉作一者○古語拾遺櫛明玉命出雲國玉作祖也○古事記上玉祖命者玉祖連等之祖○式大殿祭齋玉作等我持齋麻波利持淨麻波利造奉仕禮留瑞八尺瓊能御吹支乃五百都御統乃玉○式出雲國意宇郡玉作湯神社（注出雲風土記解）○和名抄駿河國土佐國安藝郡玉造（多末都久里）

高魂命孫天明玉命之後也天津彥火瓊々杵尊降ニ幸於葦原中國一時與ニ五氏神部一陪ニ從皇孫一降來是時造ニ作玉璧一以爲ニ神幣一故號ニ玉祖連一亦號ニ玉作連一〕

波多門部造〔出雲風土記飯石郡波多鄉波多都美命天降坐處也○天武紀土佐國田苑○和名抄（波多）〕

神魂〔此下和學所本命字あり〕十三世孫意富支閇連公〔意富支閇者負ニ地名一乎古事記上道尻岐閇國國造本紀道口伎閇國注ニ國號考一〕之後也

壹伎直〔壹伎直伊吉由伎通用和名抄壹伎島（由伎）○萬葉集卷十五壹岐島雪連宅麻呂又正六位鯖麻呂歌曰由伎能阿末能保都手乃宇良敞乎可多夜伎亘○顯宗紀三年二月壹伎縣主先祖伊見宿禰○應神紀壹伎直眞根子○三代實錄貞觀十四年四月伊伎宿禰是雄卒是雄者壹伎島人也本姓卜部改爲伊伎始祖忍見足尼命始自神代供ニ龜卜事一〕

天兒屋根命九世孫雷〔按に雷は雪の誤ならん〕大臣之後也

天孫

出雲臣〔出雲國號和名抄（以豆毛）注ニ國號考及出雲風土記解一○河內國神別出雲臣同祖○神代紀上天穗日命是出雲臣土師連等祖也○注ニ左京神別中出雲宿禰一○崇神紀六十年出雲臣之遠祖出雲振根主ニ于神寶一是往ニ筑紫國一而不レ遇矣其弟飯入根則被ニ皇命一以ニ神寶一付ニ弟甘美韓日狹與ニ鸕濡渟一而貢上〕

天穗日命十二世孫鸕濡渟命之後也

村雲命之後也〔天村雲命ハ左京下伊勢朝臣ニ系圖ヲ引ケリ又豐受大神宮禰宜補任次第ニ皇大神並天津彥火瓊々杵尊筑紫日向襲高千穗乃敷士留嶺爾天降坐時天牟羅雲命御供爾仕奉云々トアリ信友按乃敷士留ハ久士敷留ノ誤寫ナルヘシ〕

額田部㻋玉〔㻋和名抄美加○祝詞式神賀曰大名持命乃申給久已命和魂乎八咫鏡爾取託天倭大物主櫛㻋玉命登名乎稱天大御和乃神奈備爾坐○依之奉レ齋ニ大御和神ニ而賜ニ姓㻋玉ニ乎○額田注レ前

額田部宿禰同祖明日名門十一世孫御支宿禰之後也

久米直〔左京中久米直高魂命八世孫味耳命之後也注ニ久米直ニ〕

神〔左京中久米直の注高に作る〕魂〔按に此上御字あるへきか〕命八世孫味日〔左京中には日字耳に作る本居宣長云コノ味日ト上ノ味耳トハ一ツトキコユレ上方ハ誤字ナルヘシ〕命之後也

屋連〔按に屋連未レ詳玉屋連脫文歟〕

神御魂命十世孫天御行命之後也

多米宿禰〔多米宿禰注ニ左京中多米連一○天武紀十三年田目連賜レ姓曰ニ宿禰一

同神五世孫天日鷲命之後成務天皇御世仕奉大炊寮御飯香美特賜ニ喜〔按に賜の上に嘉字あるへし喜字は衍文ならん〕名一

齋部宿禰〔和名抄阿波國麻殖郡忌部（伊無倍）○天武紀九年正月忌部首賜レ姓曰レ連又十三年十二月忌部連賜レ姓曰ニ宿禰一○續紀神護景雲二年七月阿波國麻殖郡人忌部連方麻呂忌部連須美等十一人賜ニ姓宿禰一忌部越麻呂等十四人賜ニ姓連一○又天平寳字三年十二月外從五位下忌部首黒麻呂等云々賜ニ姓連一忌部首融麻呂云々賜ニ姓造一○式阿波國麻殖郡忌部神社（或號ニ麻殖神一或號ニ天日鷲命一）○和名抄麻殖郡忌部（伊無倍）

高皇產靈命子天太玉命之後也〔古事記上布刀玉命者（忌部首等之祖）○神代紀上忌部遠祖太玉者造レ幣○古語拾遺曰高皇產靈神所レ生之男名曰ニ天太玉命一（齋部宿禰也）太玉命所レ率神名曰ニ天日鷲命一（阿波國忌部等之祖）手置帆負命（讚岐國忌部祖也）彥狹知命（紀伊國忌部祖）櫛明玉命（出雲國玉作祖也）天目一箇命（筑紫伊勢兩國忌部祖也）〕

玉祖宿禰〔河內國玉祖宿禰同祖○式河內國高安郡周

伴談連談此云二箇陀利一〕
高神命六世孫天押日命之後也〔此一段異本に依て補ふ○信友按高神ハ高魂ノ寫誤ナルベシ○異本天押日命十一世孫談士（異本士字なし）連之後也に作〕

大伴大田宿禰〔大伴攝津國也注二左京中大伴連一○續紀神護元年二月左京人正六位上大伴大田連沙彌麻呂賜二姓宿禰一○三代實錄貞觀三年八月左京人散位外從五位下伴大田宿禰常雄賜二伴宿禰姓一云々常雄歎偁謹稽二家諜一伴大田宿禰同祖金村大連公第三男狹手彥之後也○注二大伴連一〕
天押日命十一世孫談連之後也〔印本高魂命六世孫天押日命之後也佐伯日奉造天押日命十一世孫誤（異本談に作）士連之後也誤士異本（按にこの下脫文あるへしかつ校正の詞を本文に入るは誤なり）高志連高魂命九世孫日臣命之後也云々とあり異本に依て改む○異本高志連以下を一本云として次なる高志壬生連とある下に分書す〕

高志連〔百木按に大和國高志連ハ天押日命十一世孫大伴室屋大連公之後也ト見ユ持統紀三年秋八月云云准河内國大鳥郡高脚海トカケリ後和泉國トナレリ又垂仁紀卅九年秋九月遣二五十瓊敷命于河内國一作二高石池一焉トモカケリ〕
高魂命九世孫日臣命之後也〔高志萬葉一詠二大伴乃高師能濱一和泉國大鳥郡也日臣下注○佐伯日奉造以下異本によりて改む〕

高志壬生連〔高志訓二多加志一注二前文一○壬生和名抄爾布○仁德紀七年八月爲二大兄去來穗別皇子一定二壬生部一○推古紀十五年二月定二壬生部一〕
日臣命〔命字和學所本に依て補ふ○日臣神武紀大伴氏之遠祖有二導之功一是以爲二道臣一（左京中大伴連傳）高皇產靈尊（五世孫）天押日命○（神武紀大伴連祖）日臣命（爲二道臣一垂仁紀景行紀）大伴遠祖武日（雄略紀清寧紀）大伴連室屋（繼體紀曰在昔道臣爰及二室屋一助レ帝）（武烈紀繼體紀欽明紀萬葉集）大伴連金村子大將軍大伴連狹手彥（三代實錄貞觀三年八月日金村大連公第三男狹手彥之後也）〕七世孫室屋大連之後也

額田部宿禰〔山城國神別額田部宿禰同祖○天武紀十三年額田部連賜レ姓曰二宿禰一〕明日名門命三世孫天

河桁一尋求詣二出雲國宇夜江一捕貢之天皇大喜〔喜異本嘉に作〕即賜二姓鳥取連一〔鳥取部連皇子年向二三十一不二言語一尾張國風土記曰品津別皇子生而七歳不レ語○垂仁紀廿三年譽津別王是生年既三十云々常不レ言冬十月有二鳴鵠一度二太虛一皇子仰觀レ鵠曰是何物耶天皇則知皇子見レ鵠得レ言而喜之詔二左右一曰誰能捕レ是爲レ獻之於レ是鳥取造祖天湯河板擧〔板擧此云拕難〕奏曰臣必捕而獻即天皇勅二湯河板擧一曰云云時湯河板擧遠望二鵠飛之方一追尋詣二出雲一而捕獲云々欽賞二湯河板擧一則賜レ姓曰二鳥取造一因亦定二鳥取部鳥養部譽津部一○古事記垂仁紀遣二山邊之大鶙一令レ取二其鳥一故是人追二尋其鵠一自二木國一到二針間國一亦追越二稻羽國一即到二丹波國多遲麻國一追廻二東方一到二近淡海國一乃越二三野國一自二尾張國一傳以追二科野國一遂追二到高志國一而於二和那美之水河一張レ網取二其鳥一而持上獻〕

三島宿禰〔三島雄略紀見二三島郡藍原一○式三島鴨神社○陵式三島藍野陵○和名抄分二島上島下一爲二二郡一○續紀神護景雲三年二月攝津國島上郡人三島縣主廣訓等賜二姓宿禰一○又寶龜元年七月三島縣主宗麻呂賜二姓宿禰一〕

神魂命十六世孫建日穗命之後也

天語連〔天語訓阿麻按古事記歌曲之者而名焉後曰二天語連一○古事記雄略段伊勢國三重歌太后之御歌等此三歌者天語歌也凡有レ歌者夷振本岐都歌志良宜振天田振神語宇岐歌來目歌思國歌讀歌等見二古事記日本紀一○天武紀十二年九月語造賜レ姓曰レ連○續紀養老三年十一月少初位上朝妻子午人龍麻呂賜二海語連姓一除二雜戶號一〕

縣犬養宿禰同祖神魂命七世孫天日鷲命之後也〔異本神魂命後也とあり七世以下の十字なし○鷲命注二右京中多米連一〕

佐伯造〔注二右京皇別下佐伯直一○仁德紀卅八年猪名縣佐伯部移二鄉安藝渟田一此命渟田佐伯部之祖也○仁賢紀五年三月普求國郡散亡佐伯部以二佐伯部仲子之後一爲二佐伯造一○雄略紀市邊押磐皇子帳內佐伯部賣輪更名二仲子一〕

天雷神孫天神〔按に神は押に作るへし〕人命之後也

佐伯日奉造〔佐伯前注日奉敏達紀六年二月詔置二日祀部私部一和名抄有二筑前國三宅郡日奉鄉一雄略紀大

枝船於磐余市礒池（元地に作古本據て改）與皇妃分駕遊宴是時膳臣余礒獻酒櫻花飛來浮于御盞天皇異之遣物部長眞膽連（物部長眞膽連者不見本紀按履中紀（五十琴宿禰之子）物部伊莒佛大連（麥入宿禰之子）物部大前宿禰等同祖而同時奉仕若櫻宮也）尋求乃俘（俘古本採に作又一本櫻に作）得掖上室山獻之天皇歡之改長眞膽連之本姓曰稚櫻部造（一本賜長眞膽姓稚櫻部造又賜余磯姓稚櫻部臣也の字あり改長按以下十三字印本なし履中紀によりて補ふ）賜余礒姓稚櫻部臣（賜余磯姓稚櫻部臣也の字あり改長按以下十三字印本なし履中紀によりて補ふ）賜余礒姓稚櫻部臣（賜余磯姓稚櫻部臣之八字當有皇別若櫻部朝臣○履中紀三年十一月天皇泛兩枝船于磐余市磯池與皇妃各分乘而遊膳宴臣余磯獻酒時櫻花落于御盞天皇異之則召物部長眞膽連詔之曰是花也非時而來其何處之花矣汝自可求於是長眞膽連獨尋花獲于掖上室山而獻之天皇歡其希有即爲宮名故謂磐余稚櫻宮其此之緣也是日長眞膽連之本姓曰稚櫻部造又號膳臣余磯曰稚櫻部臣也（異本余礒より以下八字なくして長眞膽連賜姓稚櫻部造十字あり）

大宅首（左京上大宅首同祖同注）

同祖六世孫（以上一本に依て補）大閇蘇彌（彌異本衣に作又杵に作禰に作）命孫建新川命之後也（按に建新川命者大綜杵命二世之孫也）

神麻續（續和學所本績に作）連（麻續和名抄伊勢國多氣郡麻績○崇績訓袁美依仁德紀歌○舊事紀三乳速日神廣沸神麻績連等祖○神祇令神衣祭義解曰麻績連等績麻以織敷和衣以供神明故曰神衣敷和者宇津波多也○神宮式曰荒妙衣者麻績氏織造○續紀神護景雲二年二月左京人神麻績宿禰廣目等賜姓宿禰○又三年十一月左京人神麻績宿禰廣目女等復爲神麻續連）天（異本大に作）物知命之後也

鳥取部連（鳥取越中丹後因幡備前和泉和名訓止止利○天武紀十二年九月鳥取造賜姓曰連）

角凝魂命三（三の上十の字あるへし）世孫天湯河桁命之後也垂仁天皇皇子譽津別命年向三十不言語于時見飛鵠問曰此何物爰天皇悅之遣天湯

水取連〔和名抄取水司（毛比止里乃豆加左）○注ニ左京上水取連一○職員令（宮內省）主水司有ニ氷戸水戸一○古事記仁德段旦夕酌ニ淡路島之寒泉一獻ニ大御水一○播磨風土記赤石驛家駒手御井者難波高津宮天皇之御世云々朝夕爲レ供ニ御食一汲ニ此井水等一水取仕之也〕

同神六世孫伊香我色雄命之後也

小治田連〔小治田連右京神別下尾張宿禰可ニ考合一○天孫本紀六見宿禰命小治田連等祖注左京上○續紀神護景雲二年十二月尾張國山田郡人小治田連藥等八人賜ニ姓尾張宿禰一〕

同上〔宇麻志麻遲命三世孫出雲醜大臣命之男也六見宿禰命小治田連等祖〕

依羅連〔和名抄河內國丹比郡依羅（與佐美）○注ニ左京上依羅連一〕

同神十世孫伊己布都大連之後也〔宇麻志麻遲命十世孫物部伊莒弗連公三世孫物部多波連公衣網連等祖父同四世孫物部呉足尼連公依網連等祖○天孫本紀（十世孫）物部公（十二世孫弟）物部多波連公（依網連等祖）物部呉足禰（依羅連等祖）此連公磯城島宮（欽明）御宇天皇御世爲ニ宿禰一〕

曾禰連〔左京上曾根連同祖〕

同神六世孫伊香我色雄命〔孫以下の字元闕たり上文和泉國神別によりて補ふ〕之後也

肩野連〔左京上物部肩野連同祖○天孫本紀多辨宿禰宇治部連交野連等祖物部臣竹連公肩野連宇遲部連等祖○和名抄河內國交野（加多乃）○式交野郡片野神社〕

同上〔伊香我色雄命之子多辨宿禰命宇治部連交野連等祖又同九世孫物部臣竹連公肩野連宇遲部連等祖〕

若櫻部造〔和泉國神別若倭部造同祖○若櫻宮大和國十市郡也注ニ宮所考一〕

同神三世孫出雲色〔元包に作異本によりて改〕男命〔出雲色男命 天孫本紀饒速日命三世孫出雲醜大臣命（母出雲色多利姬）此命輕地曲峽宮御宇（懿德）天皇御世元爲下申ニ食國政一大夫上次爲ニ大臣一奉ニ齋大神一其大臣之號始起ニ此時一也〕之後〔或本後字なし〕四世孫物部長眞膽〔元瞻に作異本に依て改〕連初去來穗別天皇謚履中〔此三字一本細字に書す〕泛ニ兩

レ妃誕ニ生二兒一味饒田命阿刀連等祖弟彥湯支命亦名木開宿禰〕

中臣熊凝朝臣〔續紀養老三年五月中臣熊凝連古麻呂等七人賜ニ朝臣姓一○同紀天平十七年八月中臣熊凝臣百島除ニ中臣一爲ニ熊凝朝臣一○扶桑略記平群郡熊凝精舍○百木云三代實錄平群郡熊凝寺又雲感寺神名式雲甘寺、坐ニ檜本神社一〕

同上

巫部宿禰〔巫和名抄加牟奈岐祝女也○天武紀十三年巫部連賜レ姓曰ニ宿禰一○續後紀承和十二年七月右京人中務少錄正五位下巫部宿禰公成大和國山邊郡人巫部宿禰諸成和泉國大鳥郡人巫部連繼麻呂巫部連繼足白丁巫部連吉繼等賜ニ姓當世宿禰一公成者神饒速日命苗裔也昔屬ニ大長谷稚武天皇一時公成始祖眞椋大連奏迎ニ筑紫之奇巫一奏救ニ御病之膏肓一天皇寵之賜ニ姓巫部一後世疑レ謂ニ巫覡之種一故今申改之〕

同神六世孫伊香我色雄命之後也〔按天孫本紀伊香我色雄命之後物部眞椋連公巫部連祖〕

箭集宿禰〔和名抄駿河國矢集（也都女）○天武紀十三年矢集連賜レ姓曰ニ宿禰一〕

同上〔伊香色雄命三世孫物部大母隅連公矢集連等祖○天孫本紀大新河命子物部大母隅連公矢集連等祖〕

內田臣

同上

長谷置始連〔長谷置始連右京神別中、注ニ大椋置始連一雄略天皇御世始置ニ大藏官員一則爲レ氏○古事記雄略段定ニ長谷部舍人一者是乎○長谷和名抄大倭國城上郡波都勢注ニ國號考一○大藏與ニ朝倉一通音（山城國諸蕃秦忌寸氏傳）雄略天皇御世積ニ八丈大藏於宮側一故名ニ其地一曰ニ長谷朝倉宮一（注ニ宮所考一）○式伊勢國安濃郡置染神社〕

同神七世孫大新河〔印本阿に作異本に依て改〕命〔大新河命本紀系圖注ニ左京神別上一〕之後也

高橋連〔高橋連式大和國添上郡高橋神社○武烈紀影媛之歌伊須能箇瀰賦屢嗚須擬底擧慕摩矩羅枕箇幡志須擬云々○和名抄遠江國城飼郡高橋（多加波之）○天孫本紀物部建彥連公高橋連云々祖〕

同上

知村ニ〔古事記上天津日子根命倭淹知造云々祖也〕
額田部湯坐連同祖
額田部
同命孫意富伊我都命之後也〔神代紀上天津彦根命此茨城國造額田部連等遠祖也〕

地祇

弓削宿禰
出レ自下天押穗根命〔命は尊に作へきか○百木云未定雜姓ニ島首は天押穗耳尊之後トアリテ天孫ニ收タリ〕洗ニ御手ニ〔按に此下時字脱するか〕水中化生神爾伎都麻上〔異本此下呂字あり〕也
石邊公〔山城國神別石邊公同祖○石邊地未レ詳○和名抄和泉國石津〔以之津〕同地乎○神代紀上大國主神亦名大物主神○古事記崇神段大物主大神娶ニ陶津耳命之女活玉依毗賣ニ生子名櫛御方命之子飯肩巣見命之子建甕槌命之子僕意富多々泥子○崇神紀天皇問ニ大田々根子ニ曰汝其誰子對曰父曰ニ大物主太神ニ母曰ニ活玉依媛ニ陶津耳之女亦云奇日方天日方武茅渟祇之女也〕
大物主命男久斯比賀多命之後〔按に大物主の上元大國主古記一云の七字有或本によりて改〕

右第十三卷

右京神別上

起ニ采女朝臣ニ盡ニ神〔元御に作今下文と異本とによりて改〕門臣ニ三十六氏〔按に六は四の誤なるへし〕

天神

采女朝臣〔采女朝臣和泉國采女臣同祖○古事記雄略段伊勢國三重采女○和泉志三重郡采女〔宇彌陪〕○凡采女者孝德紀、貢ニ郡少領以上姉妹及子女形容端正者ニ以ニ一百戸ニ宛ニ采女一人粮ニ、諸國貢ニ采女ニ者雄略紀伊勢采女葛城采女等是也職員令宮内省采女司掌レ檢ニ校采女ニ也○天武紀十三年十一月采女臣賜レ姓曰ニ朝臣ニ○續紀天平神護元年二月攝津職島下郡人右大舍人采女臣家麻呂采女司采部采女臣家足等四人賜ニ姓朝臣ニ〕
石上朝臣同祖神饒速日命六世孫大水口宿禰之後也
中臣習宜朝臣〔續紀養老二年五月從八位上中臣習宜連笠麻呂等四人賜ニ朝臣姓ニ〕
同神孫味瓊杵日〔日舊事記田に作〕命之後也〔天孫本紀宇麻志麻治命活目邑五十呉桃女子師長姫爲

アル井ハ比トアルヲ寫アヤマリタルナルヘシサレト餘ニ古キモノニ比トセルヲ見ス内山氏ハナニヽヨラレタルニヤ比ハ伊比ノ約ニテ大飯ノ義ナルヘシ」

火明命四世孫阿麻刀禰〔禰は彌なるへし〕命之後也〔天孫本紀(四世孫)天戸目命(天忍人命之子)〕

坂合部宿禰〔坂合境也成務紀曰隔ニ山河一而分ニ國縣一隨ニ阡陌一以定ニ邑里一○攝津國皇別坂合部大彥命之後允恭天皇御世造ニ立國境之標一因賜ニ姓坂合部連一○天武紀十三年境部連賜レ姓曰ニ宿禰一雄略紀(坂合黑彥皇子眉輪王共被ニ燔死一之時云々)坂合部連贄宿禰抱ニ皇子屍一而見ニ燔死一〕

火明命八〔八或本四に作〕世孫邇倍足尼之後也〔異本云舊本邇倍以下の字なし○按に右京神別下坂合部宿禰の注火闌降命八世孫につくる〕

額田部湯坐連〔額田(奴加多)和名抄諸國有ニ額田鄉一○部屬也俗謂ニ部番一曰ニ加支一番此云レ倍○湯坐湯人湯殖仝訓前文注ニ湯母竹田連一〕

天津彥根命子明立天御影命之後也允恭天皇御世被レ遣ニ薩摩國一平ニ隼人一復奏之日獻ニ御馬一疋一額有ニ町形廻毛一天皇喜〔鴨本異本嘉に作〕之賜ニ姓額田部一也〔廻毛和名(都無之)○古事記上天津日子根命凡河內國造額田部湯坐連云々三枝部造等之祖○下文額田部及大和國額田郡河田連同祖意保伊賀部命之後也○舊事記卷三天御陰命凡河內直等祖也〕

三枝部造〔元連に作る或本によりて改○百木云元は造ニテ後ニ連トナサレタレハ一本ニ連トアルハワロシ○和名飛驒國大野郡三枝(佐以久佐)○三枝部連訓(佐韋久佐倍)○三枝(佐韋久佐)○神祇令三枝祭○大和國城上郡狹井坐神社○古事記神武段狹井山由理草之本名云ニ佐韋一也前文注ニ佐爲連一○顯宗紀三年三月上巳幸ニ後苑一曲水宴同年四月置ニ福草部一○天武紀十二年九月福草部造賜レ姓曰レ連〕

額田部湯坐同祖顯宗天皇御世喚ニ集諸氏人等一賜ニ饗醼一于レ時三莖之草生ニ於宮庭一採以奉レ獻仍負ニ姓三枝部造一〔古事記上天津日子根命三枝部造之祖○造異本連に作百木云元造後連ナレハ一本ニ連トアルハワロシ〕

奄智造〔奄知連安無知和名抄奄訓ニ安無一安與通音恩地同地也○式大和國城下郡在ニ倭恩智神社一又有ニ奄

舍人造賜レ姓曰レ連○續紀神護景雲元年九月上總國海上郡人檜隈舍人直建麻呂賜ニ上總宿禰ー○續後紀承和七年十二月武藏國加美郡人檜前舍人直由加麻呂男女十八貫ニ附左京六條ー」

火明命十四世孫波利那乃連公之後也〔天孫本紀十四世孫尾張弟彥連次尾治針名根連○式尾張國愛智郡針名神社備前國御野郡尾治針名眞若比賣神社〕

榎室連〔榎室與ニ榎本ー有ニ山城國ー相似而異レ祖〕

火明命十七〔七古本四に作〕世孫呉足尼之後也山猪子〔子異本公に作〕連等仕ニ奉上宮豐聰耳皇太子御杖代ー爾時太子巡ニ行山代國ー于レ時古麿家在ニ山城國久世郡水主村ー其門有ニ大榎樹ー太子曰是樹如レ室大雨不レ漏仍賜ニ榎室連ー〔天孫本紀（宇麻志麻治命十三世孫第）物部呉足尼連公磯城島宮御宇「欽明」天皇御世爲ニ宿禰ー○水主和名抄久世郡上田百木云按饒速日命九世孫玉勝山城根古命モ此處ニ住居坐リシナルヘシ天孫本紀ニ此命ハ山城水主云々等祖トアリ又神名式ニ久世郡水主神社十座注ニ就レ中云々水主坐ニ山城ー大國魂命ニ坐預ニ相嘗祭ートミエタリ山城根古トモ云ヒ水主等祖ナリトモ云ヒ式ニ水主坐ニ山城ー大國鬼トモ云フト思ヒ合スヘシサレトモ山背ノ大國魂命ノ神ト玉勝山代根古命トハ別神ナルヘシトサテ饒速日命ノ末ノ山猪子連モ此處ニ住居坐リシモユヱアルコトナリ〕

丹比須〔按に此下加字を脫するか〕布〔丹比和名抄太知比○式河內國丹比郡丹比神社菅生神社和名抄丹比郡菅生（須加布）今有ニ丹南郡菅生村ー〕

火明命三世孫天忍命之後也〔天孫本紀（三世孫）天忍人命次天忍男命孫天戶目命（大蝮壬生連等祖）五世孫建箇草命（多治比連津守連云々祖）○信友云神代紀ニ火明命ハ天忍穗根尊ノ御子ナリ天忍分命モ高祖父ノ名ニ似カヨヒテ稱タリ〕

但馬海直〔但馬多遲摩依ニ古事記ー但馬海直、式但馬城崎郡海神社〕

火明命之後也〔天香山命（舊事記五饒速日命此己下同）六世孫建田背命神服連海部 直丹波國造 但馬國造等祖〕

大炊刑部造〔大炊於保比刑於佐加倍○右京下大炊刑部造同祖○大炊見ニ職員令宮內省ー○刑部允恭紀ニ年爲ニ皇后ー定ニ刑部ー信友云和名抄ニ大炊於保井ト

江國引佐郡伊福「以布久」又備前國御野郡伊福「伊布久」○神鳳抄尾張國伊福部御厨○按諸國伊福今人曰二福地一○天武紀十三年伊福部連賜レ姓曰二宿禰一」

尾張連同祖火明命之後也

湯母〔異本陽丹に作〕竹田連〔湯母由於茂仁賢紀六年母訓二於幕一○神代紀下葺不合尊生之時取二婦人一爲二乳母湯母及飯嚼湯坐一凡諸部備行以奉養焉○古事記垂仁段本智和氣御子生之時取二御母一定二大湯坐若湯坐一湯殖訓二由惠一雄略紀湯人此云二臾衞一天武紀同○天孫本紀天火明命云々建斗米命子建多乎利命〔竹田連云々等祖〕」

火明命五世之孫〔元後に作る或本によりて改〕也建刀米命之後也〔按に後也の二字衍文なるへし〕男武田折命〔建多利乎命者建斗米命之第三男也竹田連若大耳連等祖〕景行天皇御世擬レ殖〔按に殖上湯字あるへし〕賜レ田夜宿之間菌生二其田一天皇聞食而賜二姓菌田連一〔竹菌同訓和名多介〕後改爲二湯竹連一〔按に湯母竹田なるへし湯母一本陽丹に作る〕

竹田川邊連〔竹田川邊連竹田式大和國十市郡竹田神社○神武紀皇獅立誥之處是謂二猛田一、川邊和名抄十市郡川邊（加波乃邊）○天孫本紀（五世孫）建斗目命（六世孫）建多乎利命（竹田連等祖）

火明命五世之〔此下一本孫建刀米命之男武田折命の字あり〕後也仁德天皇御世大和國十市郡刑坂川之邊〔刑坂城上郡忍坂（於佐加）〕有二竹田神社一因〔因或本門に作〕以爲二氏神一同居住焉緑竹大美供二御箸竹一因レ茲賜二竹田川邊連一

石作連〔式山城國乙訓郡石作神社○和名抄同郡石作（以之都久利）○天孫本紀（六世孫）建麻利尼命（石作連云云祖）」

火明命六世孫建眞利根命〔舊事記建麻利尼命石作連桑田連山邊縣主等祖〕之後也垂仁天皇御世奉二爲皇后日葉酢媛命一作二石棺一獻之仍賜二姓石作大〔和學所本大字なし〕連公一也〔古事記垂仁段大連作石棺獻二大后比婆須比賣命一之時定二石祝作一〕

檜前舍人連〔檜前和名抄大和國高知郡檜前（比乃久末）○宣化紀檜前廬入二野宮一○古事記檜坰各同地○舍人和名抄訓二止禰利一○天武紀十三年九月檜隈

慶二年九月但馬國美含郡人從七位上若倭部氏世貞氏貞道等三人賜ニ姓楓朝臣一〕

神饒速〔一本饒速の字須に作る〕比命十八世孫子田知之後也〔神饒速日命右京下稱ニ神魂命一〇百木云右京下ニ若倭部連ヲ神魂命云々後也ト注シタレハコヽモ一本ニヨリテ神牟須比命ト正スヘシ〇天香五山命五世孫建額草命多治比連津守若倭部葛木尉直祖〕

天孫

尾張宿禰〔尾張國號和名抄乎波利 〇古事記景行段歌袁波理〇按神武紀高尾張邑有ニ赤銅八十梟帥一〇天孫本紀火明命之後尾治第彥連移ニ住于美乃國一與美乃尾張元一國也景行紀見ニ美濃國有ニ善射者一曰ニ第彥公一於レ是日本武尊遣丙葛城人宮戸彥喚乙第彥公甲〇神代紀下火明命「是尾張連等始祖也」又曰天忍穗根尊娶ニ高皇產靈尊女子栲幡千々姬命一而生ニ兒天火明命一（說々多）〇古事記上天火明命御母高木神御女萬幡豐秋津師比賣〇天孫本紀天火明櫛玉饒速日尊御母與ニ古事記一同天孫本紀天火明命十三世孫尻綱根命十四世孫尾治第彥連〔以下稱ニ尾張連一〕〇天武紀十三年尾張連賜レ姓曰ニ宿禰一〇續紀大寶二年十一月尾治連若子麻呂牛麻呂賜ニ姓宿禰一〇又天平十九年二月尾張宿禰小倉授從四位下爲ニ尾張國國造一〇又天平寶字二年三月尾張連馬身云々馬身子孫並賜ニ宿禰姓一〇又神護景雲二年十二月尾張國山田郡人從六位下小治田連樂等八人賜ニ姓尾張宿禰一〕

火明命二十七〔古本鴨本異本みな七字なし〕世孫阿曾〔曾異本魚に作〕連之後也

尾張連〔尾張連祖天香吾山命系圖注ニ大和國神別尾張連一〇天孫本紀曰天火明櫛玉饒速日命妃天上誕ニ生天香語山命一〔天降名乎栗彥命亦名高倉下命〕此命云々自レ天降ニ坐於紀伊國熊野村一〇神武紀熊野高倉下〕

尾張宿禰同祖火明命之男天賀〔賀古事記傳香に作〕吾山命之後也〔天香吾山命四世孫瀛津世襲命尾張連等祖〇神代紀下天香語山命是尾張連等遠祖也〕

伊福部宿禰〔伊福部宿禰按元海部直伊改爲ニ福部一乎天孫本紀〔四世孫〕瀛津世襲命〔尾張連等祖〕建田背命〔海野直等祖〕〇和名抄尾張國海部郡伊福部又遠

延暦十年九月近衛將監正六位下出雲臣祖人言臣等本系出ㇾ自二天穗日命十四世孫一曰二野見宿禰一野見宿禰之後土師氏人等或爲二宿禰一或賜二朝臣一臣等同爲二一祖之後一獨漏二均養之仁一伏望與二彼宿禰之族一同預二改ㇾ姓之例一於ㇾ是賜二姓宿禰一○天穗日天夷鳥等之天訓二阿麻一見二神名式及竟宴歌一也出雲國號等注二出雲風土記解及國號考一〕

出雲〔出雲下臣字脱乎○右京上出雲臣ニ注ス〕

天穗日命五世孫久志和都命之後也

入間（イルマ）宿禰〔和名抄武藏國入間「伊留末」郡○續紀神護景雲二年閏六月武藏國入間郡人正六位上勳五等物部直廣等六人賜二姓入間宿禰一〕

天穗日命〔異本此四字なくして同神の二字あり〕十七世孫天日古曾乃日〔一本日字なくして已呂字あり〕命之後也〔信友按中末和泉國皇別山直云々日古曾乃古呂命後也トアリ入間氏ト同祖ナリ〕

佐伯（サヘキ）連〔天武紀十三年佐伯連賜ㇾ姓曰二宿禰一○續紀天平勝寶三年十月佐伯諸魚賜二連姓一〕

木〔異本大に作〕根乃命男丹波眞太玉〔異本王に作るは誤なるへし〕之後也

右第十二卷

左京神別下

起二伊勢朝臣一盡二石邊公一二十氏

天神〔伊勢國風土記曰伊勢國者天御中主尊之十二世孫天日別命之所二平治一天日別命神倭磐余彦天皇自二彼西宮一征二此東州一之時隨二天皇一天日別命奉ㇾ勅東入數百里其邑有ㇾ神名曰二伊勢津彦一云々天日別命壞二築此國一復二命天皇一云々詔曰國宜ㇾ取二國神之名號一伊勢、卽爲二天日別命之村、云々賜二宅地于大倭耳梨之村一焉「注二國號考一」〕

伊勢朝臣〔古事記應神段定二賜伊勢部一○續紀天平十九年十月伊勢國人從六位上伊勢直大津等七人賜二中臣伊勢連姓一又天平寶字八年九月中臣伊勢連老人賜二中臣伊勢朝臣一又天平神護二年十二月外從五位下中臣伊勢連大津賜二姓伊勢朝臣一〕

天底立（ソコタチ）命孫天日別命之後也

弓削（ユゲ）宿禰

高魂命孫天日鷲翔矢（カケルヤ）命之後也

若倭部〔若倭地名〕式遠江國麁玉郡若倭神社○天孫本紀「五世孫」建筒草命「若倭部連祖」○三代實錄元

神鳳寺緣起ニ天古移根命トヤノ音ニ用タレハナリサテ大和國天神ニ門部連牟須比命兒安牟須比命之後也トアル安モヤスト訓ヘシ」

宮部造〔宮部造山城國神別神宮部造相似不レ同○百木按山城國今木連ハ神魂命五世孫阿麻乃西乎乃命之後也トアリコレコヽノ天背男命ト同神ナリシカレハ天壁立命ハ神魂命ノ四世ノ孫ニ當リ坐リ又按ニ宮部ハ美夜能辨ト唱ヘシ山城國神宮部造ニ賜ニ姓宮能賣公ニトアリ」

天壁立〔異本立字なし〕命子天背男命之後也

間人宿禰〔舊事紀卷三天玉櫛命（間人連等祖）○天武紀十三年十二月間人連賜レ姓曰ニ宿禰ニ」

神魂命五世孫玉櫛比古命之後也

瓜工連〔天武紀十三年瓜工連賜姓曰ニ宿禰ニ○和泉國神別爪（一本瓜に作る）工連同祖雄略天皇御世造ニ紫蓋瓜ニ（異本爪に作る）幷奉レ餝ニ御座ニ仍賜ニ（異本瓜に作る）工連ニ○案爪略字爬「音派」○和名抄翳「訓波」注ニ和泉國瓜工連ニ」

神魂命子多久都玉命三世〔此下孫字有へし〕天仁木命之後也

多米連〔多米味物也貞觀式大嘗曰多米酒多毎米是也○式攝津國住吉郡多米神社○右京上多米宿禰云々成務天皇御世仕ニ奉大炊寮ニ御飲香美特賜ニ嘉名ニ○神代紀上粟國忌部遠祖天日鷲神作ニ木綿ニ○天武紀十三年十二月田目連賜レ姓曰ニ宿禰ニ○系圖云「伊勢外宮神主祖神」天村雲命孫天波與命子天日別命「一名天日鷲命又名天日起命」○國造本紀伊勢國造天牟羅雲命孫天日鷲命」

多米宿禰同祖神魂命五世孫天日和志命之後〔此下也字有へし○古語拾遺太玉命所率神名曰天日鷲命（讃岐國忌部祖也）」成務天皇御世仕ニ奉炊職ニ賜ニ多米連ニ也」

天孫

出雲宿禰

天穗日命子天夷鳥命之後也〔出雲臣系圖云武鶕鳥子櫛瓊命子津狹命子櫛瑥前命子櫛月命櫛月ハ櫛曰ナルヘシ○出雲國號古事記上伊豆毛○神代紀天穗日命「是出雲臣土師連等祖也」○古事記上天菩比命之子建比良鳥命「此出雲國造云々等祖也」○崇神紀六十年武日照命「一云武夷鳥一云天夷鳥」○續紀

束脛命之後也

掃守連〔和名抄和泉國和泉郡河内國高安郡掃部（加爾毛利）○大和國掃守河内國掃守連掃守造（イ連）和泉國掃守連（イ首）同祖○和泉國掃守連云々雄略天皇御世監ニ掃除事一賜ニ姓掃守連一○古語拾遺天祖彦火尊娶ニ海神女豐玉姫命一生ニ彦瀲尊一誕育之日海濱立レ室于レ時掃守連遠祖天忍人命供奉陪侍箒掃レ蟹仍掌ニ鋪設一以爲レ職號ニ蟹守一「今俗謂ニ之掃守一」○續後紀承和二年二月河内國人右少史掃守連豐長等賜ニ姓善世宿禰一忍人命之後也〕

振魂命四世孫天忍人命之後也〔舊事記卷一振魂尊兒前玉命「掃守連等祖」次天忍立命○職員令大藏省掃守司掌ニ薦席牀簀苫及鋪設洒掃蒲藺葦簾等事一〕

小山連〔攝津國小山連同祖今有ニ河内國丹比郡界小山村狹山神社等一也〕

高御魂命子櫛玉命之後也

畝尾連〔古事記上坐ニ香山之畝尾ノ木本名泣澤女神○式大和國十市郡畝尾都多本神社（今有ニ木本村一）〕

天辭代命子國辭代命之後也〔按同第十五卷天辭代命者高御牟須比命三世孫也〕

久米直〔和名抄大和國高市郡久米○式久米御縣神社（今有ニ久米村一）○神武紀二年使ミ大久米居ニ于畝傍山以西川邊之地一今號ニ來目邑一又曰來目歌此的取ニ歌者一而名之也○續紀養老三年十一月忍海手人廣道賜久米直姓除ニ雜戸號一〕

高〔下文神に作百木云神ノ字シカルヘシナホ奇靈大本圖考ニイヘリ〕御魂命八世孫味耳〔耳下文日に作〕命之後也〔古事記神武段久米直等之祖大久米命○右京上久米直神魂命八世孫味日命之後也〕

浮穴連〔連一作レ直○古事記安寧段片鹽浮穴宮同地乎大和國城下郡有ニ宮古村一續後紀承和元年五月伊豫國人正六位上浮穴直千繼云々等賜ニ姓春江宿禰一千繼之先者大久米命也百木按此浮穴連モ神魂命ノ後也○百木云和名抄伊豫國浮穴宇城安奈郡民部式古本ウケナトアリ〕

移愛〔愛按に受なるへし○愛字下卷十九、有牟字、古本作レ台亦牟字誤〕受〔此下異本愛の字あり〕比命五世孫弟〔弟異本茅に作〕意孫〔孫異本諸に作〕連之後也〔百木云一本、移受牟受比命トアルニ從フヘシ○篤胤云ヤスムスヒ命ト訓ヘシソハ泉州志ニ引ル

同上

神松〔松或本私に作〕造〔神松造大伴金村大連三代實錄卷五注ニ大伴宿禰ニ〕道臣〔此下或本命字あり〕八世孫金村〔此下一本大字あり〕連公之後也

日奉連〔和名筑後國三毛郡日奉○天武紀十三年日奉造賜レ姓曰レ連○敏達紀六年二月詔置ニ日祀部私部一○用明紀元年酢香手姫皇女歷ニ三代一以奉ニ日神一○和名抄筑後國三宅郡有ニ日奉之名一而於ニ諸國一者脫乎○萬葉集卷廿見ニ海上郡海上國造他田日奉直得太理一者蓋大伴同祖乎○右京上佐伯日奉造大伴同祖押日命之後也〕

高魂命之後

縣犬養宿禰〔縣犬養宿禰縣安加多和名抄伊勢國鈴鹿郡英田河內國河內郡英多同郡○犬養蓋謂ニ能田獵一、馬養能養レ馬者續紀卷廿六馬養造人上祖能養レ馬上宮太子被レ任ニ馬司一庚午籍編ニ馬養造一〔准之〕○天武紀十三年縣犬養連賜レ姓曰ニ宿禰一○續紀神龜四年十二月正三位縣犬養橘宿禰三千代言縣犬養連五百依安万呂小山守大麻呂等是一祖子孫骨肉孔親請共沐ニ天恩一同給ニ宿禰姓一詔許之○又寶龜二年九月復ニ犬養內万呂本姓縣犬養宿禰ニ〕神魂命八世孫佐〔佐異本阿に作また河に作〕居太都命之後也

大椋〔椋一本掠に作る〕置始連〔大椋朝倉〔於與レ阿通音〕山城國諸蕃秦忌寸氏云大伯瀨稚武天皇〔雄略〕御世構ニ八丈大藏於宮側一、故名ニ其地一曰ニ長谷朝倉宮一是時始置ニ大藏官員一○清寧紀廿三年星川皇子取ニ大藏宮一者是也○右京上長谷置始連同議○伊勢國安濃郡置染神社〕

縣犬貝〔貝異本養に作〕同祖居〔此上一本阿字ありまた一本河字あり〕太都命之後也

雄儀連〔雄儀連〔拜荻同訓〕○攝津國諸蕃有ニ溫義氏一○續紀天平神護元年四月左京人從七位下手人造石勝賜ニ姓雄儀連ニ〕角凝命十五世孫乎〔乎異本平に作〕伏〔按に儀なるへし伏誤字仮ト作ヨリアヤマレル也〕連之後也

竹田連〔竹田連按竹田川邊同地乎式大和國十市郡竹田神社○神武紀皇師立誥之處是謂ニ猛田ニ〕神魂命〔元命の字なし或本によりて補〕十三世孫八

八月左京人散位外從五位下伴大田宿禰常雄賜二伴宿禰姓一先レ是伴宿禰善男等奏言常雄稽二家諜一伴大田宿禰同祖金村大連公第三男狹手彥之後也〕

高皇產靈尊〔舊事記云高皇產靈尊兒天忍日命大伴連等祖亦云二神狹日命一〕五世孫天押日命之後也初天孫彥火瓊々杵尊神駕之降也天押日命大來目部立二〔此下古本於の字あり〕御前一降二于日向高千穗峰一然後以二大來目部一爲天〔元天乃字なし一本によりて補ふ〕靫負部一天靫負之號起二於此一也雄略天皇御世以二天〔一本天の字入部に作る〕靫負一賜二大連公一奏曰衞レ門開闔之務於レ職已重若〔此下一本有乃字あり〕一身難レ堪レ望〔望一本坐に作る〕與二愚兒一語相〔一本相の字なし〕併〔併異本伴に作る〕奉レ衞二左右一依レ勅〔依勅の字異本顚倒して書す○一本首書云勅上下疑有脫字〕奏是大伴佐伯二氏掌二左右開闔一之緣也

佐伯宿禰〔佐伯宿禰注二右京皇別下佐伯直一○天武紀十三年佐伯連賜レ姓曰二宿禰一○三代實錄貞觀三年十一月讃岐國多度郡人故佐伯直鈴伎麻呂故正六位上佐伯直酒麻呂故正七位下佐伯直魚主鈴伎麻呂男從六位上佐伯直貞持云々十一人賜二佐伯宿禰姓一卽隷二左京職一先レ是佐伯直豐雄欵曰先祖大伴建日連景行天皇御世隨二倭武命一平二定東國一功勳盖レ世賜二讃岐國一以爲二私宅一、健日連公之子健持大連公之子室屋大連公之第一男御物宿禰之胤倭故連公允恭天皇御世始任二讃岐國造一云々孝德天皇御世國造之號永從二停止一同族云々貫二京兆一賜二姓宿禰一〕

大伴宿禰同祖道臣〔臣異本信に作る〕命七世孫室屋大連公之後也

大伴連〔大伴注レ上○神武紀改二日臣一爲二道臣一注レ前○三代實錄貞觀三年八月左京人伴大田宿禰常雄謹稽二家諜一伴大田宿禰同祖金村大連公第三男子狹手彥之後也○佐弖彥宣化紀二年詔二大伴金村大連一遣二其子磐與二狹手彥一、以助二任那一、是時磐留二筑紫一執二其國政一以備二三韓一狹手彥往鎭二任那一加二救百濟一○欽明紀廿三年八月大將軍大伴連狹手彥領二兵數萬一伐二高麗一狹手彥乃用二百濟計一打二破高麗一〕

道臣〔臣異本信に作〕命十世孫佐弖彥之後也

榎本連〔和名抄山城國乙訓郡榎本○下文榎室氏相似異レ祖〕

旣神社〕
大宅首（オホヤケ）〔和名抄大和國添上郡大宅○武烈紀影媛歌曰云々幕能婆幡儞於裒野該須擬云々○右京上大宅首同祖〕
大閇蘇禰（オホヘソキノ）〔禰古本杵に作る〕命孫建新川（タケニヒカハ）命之後也〔天孫本紀大綜杵命兒伊香色雄命兒建新川命此命纒向珠城宮御宇（垂仁）天皇御世爲二侍臣一〕
猪名部造〔雄略紀猪名部御田又木工猪名部眞根○和名抄伊勢國員辨（爲奈陪）郡攝津國河邊郡爲奈○後紀天長五年十一月文章生猪名善繩爲二文章得業生一賜二姓春澄宿禰一○三代實錄貞觀十二年二月參議從三位春澄朝臣善繩薨善繩字名レ達左京人也本姓猪名部造爲二伊勢國員辨郡人一達冠之後移二隷京兆一祖財麻呂爲二員辨郡少領一云々天長五年賜二姓春澄宿禰一後改二宿禰一爲二朝臣一〕
伊香〔香異本賀に作る〕我色男命之後也

右第十一卷

左京神別中

起二大伴宿禰一盡二佐伯連一二十三氏

天神

大伴宿禰（オホトモ）〔大伴攝津國也官船集二于玆一古事記仁德段定二墨江津一萬葉集卷四詠二大伴乃見津一敏達紀有二大伴村一又萬葉集卷一太上天皇（持統）幸二難波宮一時歌大伴乃美津又大伴乃高師能濱云々集中詠二住吉乃御津難波乃御津等一各同地也蓋大伴氏遠祖住二難波國一而爲二地名一歟○古語拾遺曰高皇靈神其名曰二天忍日命一（大伴宿禰祖也）（古事記上天忍日命天津久米命二人云々立二御前一而仕奉故其天忍日命（此者大伴連等之祖）天津久米命（此者久米直等祖）○神代紀下大伴連遠祖天忍日命帥二來目部遠祖天槵津來大目一云々而立二天孫之前一○古事記神武段大伴連之祖道臣命○神武紀大伴氏之遠祖日臣命汝有二導之功一是以改二汝名一爲二道臣一垂仁紀廿五年大伴連遠祖武日○景行紀日本武尊居二于酒折宮一以二靫部一賜二大伴之遠祖武日一○天武紀十三年大伴連賜レ姓曰二宿禰一○續紀天平寶字元年七月詔曰大伴佐伯宿禰等波自遠天皇御世内乃兵止爲而仕奉來又大伴宿禰等波吾族爾母在諸同心爾爲而皇朝乎助仕奉牟○後紀弘仁十四年四月改二大伴宿禰一爲二伴宿禰一觸レ諱也（淳和天皇諱大伴）○三代實錄貞觀三年

郡曾禰神社〕

石上同祖

越智直〔拾芥抄越智宿禰又直○和名伊豫國管越智○陵式越智岡上陵（皇極）大和國高市郡也○萬葉集卷一詠ニ玉垂乃越乃大野一○直謂レ君見ニ皇別佐伯直一○續紀延曆十年十二月伊豫國越智直廣川言廣川七世祖紀博世小治田朝庭御世被レ遣ニ於伊豫國一博世之孫忍人便娶ニ越智直之女一生ニ在手一在手庚午年之籍誤從ニ母氏一自レ爾以來負ニ越智直姓一○三代實錄貞觀五年十二月左京人外從五位下行助敎越智直廣峯賜ニ姓善淵朝臣一其先出レ自ニ神饒速日命之後一也○續後紀承和二年十一月左京人正六位上越智直廣成等七人改レ直賜ニ宿禰一〕

石上同祖

衣縫造〔衣縫訓ニ伎沼奴比一○和泉國衣縫同祖○職員令縫殿寮曰裁ニ縫衣服一者是也○天武紀十三年正月內藏衣縫造賜レ姓曰レ連〕

石上同祖

輕部造〔和名抄和泉國加留倍注ニ皇別輕吾孫一○式輕樹村神社等各大和國高市郡也今大輕村在ニ十市郡一○古事記曰輕之境岡宮（懿德）輕之境原宮（孝元）○萬葉集卷二輕市輕路○天孫本紀（九世孫）玉勝山代根古命（山代水主雀部連輕部造蘇宜部首等祖）〕

石上同祖〔異本氏に作る○異本天香吾山命九世孫玉勝山代根古命山代水主雀部連輕部造蘇宜部首等祖に作る〕

物部〔河內國物部同祖○古事記武部段邇藝速日命娶ニ登美毗古之妹登美比賣一生ニ子宇麻志麻遲命一（此者物部連穗積臣采女臣祖）○天孫本紀十市根命此命纏向珠城宮御宇天皇御世賜ニ物部連公一○續紀養老七年三月常陸國信太郡人物部國依改賜ニ信太連姓ニ〕

石上同祖〔祖異本氏に作る〕

眞神田曾禰連〔眞神田崇神紀元年大和國高市郡飛鳥眞神原同地○氣津別式內高市郡氣都和既神社○按舒明紀境部臣摩理勢之男毛津入ニ畝傍山一云々時人歌曰于泥備耶麻虛多智于須家苫多能彌介茂氣菟能和區呉能虛茂邏勢利祁牟蓋氣津別命之後歟〕

神驍速日命六世孫伊香我〔印本我香に作る異本によりて改〕色乎命男氣津別命之後也〔高市郡氣都和

孫伊香我色乎命〔元命の字なし異本によりて補ふ〕之後也

葛野連〔和名抄山城國葛野（加度乃）郡○天孫本紀物部奈西連公葛野造等祖押田大連之子〕

同上〔異本宇麻志麻治命十五世孫 奈西連公葛野祖等祖に作る〕

登美連〔式大和國城上郡等彌神社○神代紀邑之本號長髓亦以爲二人名一及三皇軍之得二鵄瑞一也時人仍號二鵄邑一今云二鳥見一是訛也（注二眞人二）○古事記垂仁段倭者師木登美者同〕

同上

水取連〔和名抄取水司毛比止里乃豆加佐○古事記神武段宇陀兄宇迦斯弟宇迦斯 其弟宇迦斯（此者宇陀水取等之祖也○神武紀二年第猾是菟田主水部遠祖也○右京上水取連同祖○天孫本紀物部大前宿禰連公（水取連等祖）○天武紀十三年八月水取造賜レ姓曰レ連○三代實錄貞觀六年四月左京人 散事從五位下水取連夏子水取連柄仁水取連繼男等賜姓朝臣神饒速日命之後也又云左京人水令吏水取連繼人水取連繼主賜二姓宿禰一〕

同上

大貞連〔一作二大眞連一○天孫本紀（十四世孫）物部大市御狩連公（尾輿大連之子）十五世孫物部大人連公（御狩大連之子）弟物部目連公（大貞連等祖）○後紀承和四年四月大和國人 內藏史生大俣連福山賜二大貞連一○按大和國添上郡楊生鄕名基二于大俣楊樹一乎〕

速日命十五世孫珍〔一本無二珍字一また異本彌に作る〕加利利〔異本一の利の字なし〕大連之後也上宮太子攝政之年任二大〔按に大は卷なるへし〕椋〔異本掠に作る〕宮一〔一本任大掠官に作る 大藏ノ官ニ任ズル義カ〕子レ時家邊有二大俣楊樹一太子巡二行卷向宮一之時親指二樹〔此下異本問の字あり〕問一〔異本此下之の字あり〕即詔二阿比大連一賜二太俣連一 四世孫正六位上千繼等天平神護元年改レ字賜二大貞〔貞異本眞に作る〕連一〔異本宇麻志麻治 命十四世孫大市御狩連公之男物部目大連公大貞連等祖に作る〕

曾禰連〔異本連の字なし○右京上曾禰連和泉國曾禰連同祖眞神田曾禰同地大和國高市郡也（注レ下）又按和名抄攝津國武庫郡有二曾禰鄕一○式和泉國和泉

集連等祖に作る〕
物部肩野連〔右京上肩野連同祖○和名抄河內國交野〔加多乃〕郡○式交野郡片野神社○天孫本紀多辨宿禰命〔交野等祖〕物部臣竹連公〔肩野連宇遲部連等祖〕〕
同上〔異本宇麻志麻治命十四世孫物部臣竹連公肩野連宇遲部連等祖に作る〕
柏原連〔續紀延曆四年十一月祀二天神於交野柏原一○陵式柏原陵〔桓武〕在二山城國紀伊郡一○和名抄櫟柏同訓加之波〕
同上〔異本宇麻志麻治命十二世孫物部多波連公依綱連等祖又同十三世物部呉足尼連公依連等祖に作る〔按に依下綱字脫歟〕〕
依羅連〔右京上依羅連河內國依羅連同祖○和名抄河內國丹比郡依羅〔與佐美〕○古事記仁德段作二依羅池一○天孫本紀物部布都久留連公大長谷部御世爲二大連一云々依羅連柴垣女太姬爲レ妻生二一兒一物部木蓮子連公〔布都久留大連之子〕弟物部多波連公〔依羅連等祖〕又曰物部呉足尼連公〔依羅連等祖〕○推古紀十六年物部依羅連抱○續紀神護景雲元年七月河內國志紀郡人依羅造五百世麻呂丹比郡人依羅造里上等十一人賜二依羅連一〕
饒速日命十二〔二舊事記一に作り河內國物部乃段三に作る〕世孫〔布都久留大連〔舊事記〕河內國神別物部注ニ布都久呂大連トアリ〕懷大〔依二舊事記一懷大當レ作二多波一〕連之後也
柴垣連〔古事記反正段多治比之柴垣宮○反正紀河內國丹比柴垣宮○天孫本紀物部小事連公〔柴垣連等祖〕〕
同上〔異本宇麻志麻治命十二世孫物部小事連公志陀連柴垣連田井連等祖に作る〕
佐爲連〔山城國神別佐爲宿禰同祖○佐爲古事記神武段伊須氣余理比賣之家在二狹井河之上一〔山由理草之本名曰二佐韋一〕○式大和國城上郡狹井坐大神荒魂神社○神祇令三枝祭義解云謂二率川社一也按春日之伊邪河宮同地○天孫本紀物部石持連公〔佐爲連等祖〕○天武紀十三年狹井連賜レ姓曰二宿禰一〕速日命〔信友云饒ノ字ヲ脫セルナラムトオモハルレトサニアラス略ケルナルヘシ末ニモ如レ此アリ神饒速日トモ饒速日トモアリカヽル例ナホアリ〕六世

宿禰ニ又寶龜六年二月曰天平寶字八年以ニ弓削宿禰ニ爲ニ御淨朝臣ニ連爲ニ宿禰ニ至レ是皆復ニ本姓ニ又寶龜七年三月弓削宿禰薩摩仍レ舊勿レ故○三代實錄元慶元年十二月右京人外從五位下行陰陽權助弓削連是雄賜ニ姓宿禰ニ神饒速日命之後也

石上同祖〔左京下弓削宿禰 河内國弓削宿禰高魂命孫大日鷲命之後也又左京下弓削宿禰ハ地祇ノ部ニ收レテ出レ自ニ云々爾伎都麻呂ニ也ト注セリ〕

氷宿禰〔攝津國神別氷連同祖○天孫本紀曰麥入宿禰子物部大前宿禰連公（氷連等祖）此連公石上穴穗宮御宇（安康）天皇御世爲大連次爲ニ宿禰ニ○天武紀十三年十二月氷連賜レ姓曰ニ宿禰ニ○職員令（宮内省主水司）掌ニ氷室事ニ氷部四十八○百木云河内國氷連ハ石上同祖饒速日命十世孫伊巳灯宿禰之後也トアリ〕

石上同祖〔異本宇麻志麻治命十一世孫大前宿禰連公氷連等祖に作る〕

穗積臣〔攝津國島下郡保津美注レ前○天孫本紀（宇麻臣麻遲命之末）大水口宿禰穗積臣釆女臣等祖也注レ前）○古事記成務段穗積臣等之祖建忍山垂根（景行紀弟橘媛之父也）〕

伊香賀色雄命〔命字元なし一本に據て補ふ〕男大水口宿禰之後也〔異本出石心大臣命男大永口宿禰命穗積臣栗女臣等祖に作る異本云大水口宿禰非ニ伊香色雄之男ニ〕

矢田部連〔和名抄大和國添上郡矢田攝津國八田部郡八部（也多倍）○天孫本紀物部大別連公難波高津宮御宇天皇御世詔爲ニ侍臣ニ菟遲稚郎子同腹妹矢田皇女難波高津宮御宇天皇立爲ニ皇后ニ而不レ生ニ皇子ニ之時詔ニ侍臣大別連公ニ爲ニ皇子代ニ后號爲レ氏便爲ニ氏造ニ改賜ニ矢田部連公姓ニ○古事記仁德段天皇戀ニ八田若郎女ニ御歌夜多能比登母登須宜波古母多受云云故爲ニ八田若郎女之御名代ニ定ニ八田部ニ○崇神紀矢田部造遠祖武諸隅○天孫本紀物部武諸隅連公○天武紀十二年九月矢田部造賜レ姓曰レ連〕

伊香我色乎命之後也

矢集連〔和名抄駿河國駿河郡矢集（也都女）○天孫本紀物部大母隅連公（矢集連等祖）○天武紀十三年矢集連賜レ姓曰ニ宿禰ニ〕

同上〔異本宇麻志麻治命八世孫物部大母隅連公矢

香色雄命之後也

阿刀宿禰〔山城國阿刀宿禰攝津國阿刀連同祖○式山城國葛野郡阿刀神社熊野國造大阿刀宿禰持統紀紀伊國阿提郡按舊阿刀郡轉爲二在田一雄略紀吾礪廣來津者大和國也○舊事紀天神本紀梶取阿刀造等祖大麻良○又天孫本紀味饒田命（阿刀連祖）○天武紀十三年阿刀連賜レ姓曰二宿禰一○續紀養老三年五月正八位下阿刀連人足賜二宿禰姓一○又神護景雲三年七月左京人阿刀連粟麿阿刀宿禰石成阿刀連稱守右京人阿刀物部貞範等並賜二姓良階宿禰一神饒速日命之裔孫也〕

石上同祖

若湯坐宿禰〔天孫本紀（伊香色雄命子）大咩布命（若湯坐連等祖）○神代紀（葺不合尊段）取二婦人一爲二乳母湯母及飯嚼湯坐一○古事記垂仁段定二大湯坐若湯坐一○雄略紀三年四月湯人廬城部連武彥（湯人此云二臾衞一）○天武紀十三年大湯人連若湯人連賜レ姓曰二宿禰一○續紀養老三年五月若湯坐連家主賜二宿禰姓一○式河邊郡有二賣布神社一因二本牟智和氣御子一按湯坐木綿殖也爲レ造二衣服一〕

石上同祖〔異本に伊香色雄命男大咩布命若湯坐等祖につくる〕

舂米宿禰〔仁德紀十三年始立二茨田屯倉一因定二舂米部一○天武紀十三年舂米連賜レ姓曰二宿禰一〕

同上〔一本石上同祖に作る〕

小治田宿禰〔續紀天平神護元年十月大和國高市郡小治田宮○式同郡治田神社○推古紀小墾田宮廢帝紀小治田岡本宮○天孫本紀（出雲醜大臣命之子）六見宿禰命（小治田連等祖）○小治田連賜レ姓曰二宿禰一〕

石上同祖欽明天皇御代依レ墾二開小田〔此下異本治の字あり〕鮎田一賜二小治田大連一〔異本宇麻四世孫六見宿禰命小治田連等祖に作る〕

弓削宿禰〔和名抄河內國若江郡弓削（由介）○式同郡號弓削神社○續紀河內國弓削行宮同地本紀弓削連祖倭古連（女子阿佐姬爲二物部尾輿連君之妻一）○雄略紀七年官者吉備弓削虛空云々○天武紀十三年十二月弓削連賜レ姓曰二宿禰一○續紀天平寶字八年七月從八位上弓削連淨人賜二姓弓削宿禰一又九月弓削宿禰淨人賜二弓削御淨朝臣一又寶龜元年四月弓削宿禰牛養等九人賜二姓弓削朝臣弓削耳高等三十八人

大中臣同祖〔祖異本氏に作る〕

中村連〔和名抄大和國忍海郡中村又式有二河內國若江郡中村神社一〕

己己都牟〔牟異本生に作る〕須比命子天乃古矢根之後也〔津速魂尊市千魂尊興登魂尊天兒屋根尊或本ニ如レ此アリ後ノ加筆也又異本ニ大書ニツ、ケタルハソレヨリ誤レルナリ〇神代紀中臣連遠祖興台產靈兒天兒屋根命（興台產靈此云許語等武須毗）〕

石上朝臣〔和名抄大和國山邊郡石上（伊曾乃加美）〇式石上坐布留神社（後遷二奈良一）〇武烈紀歌曰伊須能箇瀰賦屢嗚須擬底〇古事記神武段邇藝速日命娶二登美毘古之妹登美夜毗賣一生二子宇麻志麻遲命一（此者物部連云々祖）〇天孫本紀饒速日命十七世孫物部連公麻侶此連公淨御原朝御世改賜二石上朝臣姓一〇同紀大倭國山邊郡石上村今有二石上村一〇神武紀天皇素聞饒速日命是自レ天降者而今果立二忠効一則褒而寵之此物部氏之遠祖也〇崇神紀天皇母曰伊香色謎命物部氏遠祖大綜麻杵之女也〇垂仁紀石上神宮之神寶授二物部十千根大連一而令レ治故物部連等至二于今一治二石上神寶一是其緣也〇天武紀十三年物部連賜レ姓曰二朝臣一〇續紀天應元年六月石上朝臣宅嗣薨宅嗣寶龜初賜姓物部朝臣改賜二姓石上朝臣一〇寶龜十年十一月勅中納言從三位物部朝臣宅嗣宜下改二物部朝臣一賜中石上（一本太字あり）朝臣上〇養老元年三月左大臣正二位石上朝臣麻呂薨云々泊瀨朝倉朝庭大連物部目之後難波朝衞部大華上宇麻乃之子也〇寶龜四年十二月從三位石上朝臣宅嗣賜二姓物部朝臣一以二其情願一也〕

神饒速日命之後也〔注云宇麻志麻治命十六世孫物部連公麻侶賜二物部朝臣姓一改賜二石上朝臣姓一〇此細字一本無之是亦可レ除レ之〇又或一本朱書也〕

穗積朝臣〔和名抄攝津國島下郡穗積（保津美）〇神鳳抄尾張國穗積〇古事記神武段宇麻志麻遲命（此者物部連穗積臣采女臣祖也）又孝元段穗積臣等之祖內色許男命又成務段穗積臣等之祖建忍山垂根〇景行紀穗積氏忍山宿禰之女弟橘媛〇開化紀穗積臣遠祖鬱色雄命〇崇神紀穗積臣遠祖大水口宿禰〇天武紀十三年穗積臣賜レ姓曰二朝臣一〕

石上同祖神饒速日命五〔五舊事紀六に作る〕世孫伊

狹山命桓武紀天應元七月下作ニ意美佐夜麻一○和名近江國管伊古（伊加古）○信友云伊香連ノコト正ト考ニ辨ヘタリ〕

大中臣同祖天兒屋根命十〔十古本七に作る〕世孫臣知〔知異本智に作る〕人命之〔元之字一本によりて補〕後也〔注云天兒屋根命天押雲命天多禰子命宇佐（此下或本津字あり）臣命大御食津臣命伊香津臣命臣知人命○或曰細書三十三字後人加筆也○又云此細字後人之加筆也可ニ除却一信云所々ニアルモミナ後人ノ加注ナルヘシ舊クヨリアリタルトミユ〕

中臣宮處連〔和泉國神別宮處朝臣同祖○續紀天平元年二月中臣宮處連東人等告ニ長屋王之密一授ニ外從五位下一○和名肥前國神崎郡宮所〔美也止古呂〕〕

大中臣同祖

中臣方岳連

大中臣同祖

中臣志斐連〔續紀和銅二年六月筑前國島郡少領中臣部加比賜中臣志斐姓又神龜二年正月漢人法麻呂賜ニ中臣志斐連一○雷大臣右京上壹岐直攝津國神奴連生田首河內國中臣連雜姓中臣栗原連等同祖也○雷與レ雪誤字可レ考○信友云雷大臣ノコト正ト考ニ委ク辨ヘオケリ〕

天兒屋根命十一世孫雷大臣命男第子之〔元之の字なし一本によりて補〕後六世孫意富乃古連雄略御世東夷有ニ不臣之民一每レ人強〔強異本脅に作る〕力押ニ防朝軍一於レ是意富〔富異本當に作る〕乃古連甲冑五重跨ニ進敵庭一無レ勞ニ官軍一朝夷滅天皇悅ニ其功績一〔績異本續に作る〕更加ニ名字一號ニ暴〔暴異本恭に作りまた一本曰恭の字に作る〕代連一〔或曰代ハ伐ノ誤歟○信友按本ノママ、暴代ニテアラテナルヘシ軍ニ荒手ノ兵ナト云モ古言ナルヘシ新手ト書テ其字ノ意トスルハタカヘリ古書ニ御方トアルヲ後ニ味方ト書カ如シ〕

殖栗連〔連一本臣に作る○續紀和銅二年六月殖栗物部名代賜ニ姓殖栗連一又神護景雲元年三月幸ニ藥師寺一放ニ奴息麻呂一賜ニ姓殖栗連一○和名抄山城國久世郡殖栗〕

大中臣同祖

中臣大家連〔連異本臣に作る○和名抄大和國添上郡大宅春日地相並〕

靈尊津速魂命市千魂尊興登魂尊天兒屋命（中臣連等祖）トアルニ叶ヘリ○信友云藤原ノ祖先ノ事已カ著タル正ト考ニクハシク纂論ヘリ〕二（一本三に作る〕十三〔異本二に作る〕世孫內大臣大織冠中臣連鎌子古記〔古記の二字一本細字に書す〕曰鎌足云云天命開別天皇〔謚天智○三字元大字に書す一本によりて改む〕八年賜二藤原氏一男正一位贈太政大臣不比等天渟中原瀛眞人天皇〔謚天武○三字元大字一本によりて改む〕十三年賜二朝臣姓一〔續日本紀文武天皇二年八月丙午詔曰藤原朝臣所レ賜姓宜レ令二其子不比等承一之但意美麻呂等者緣レ供二神事一宜レ復二舊姓一焉〕

大中臣朝臣〔天武紀十三年中臣連賜レ姓曰二朝臣一○續紀文武二年八月詔曰藤原朝臣所レ賜之姓宜レ令二其子不比等承一之但意美麻呂等者緣供神事宜レ復二舊姓一焉○又神護景雲三年六月詔因二神語一有レ言二大中臣一而中臣朝臣清麻呂兩度任二神祇官一供奉無レ失是以賜二姓大中臣朝臣一又延曆七年七月癸酉前右大臣正二位大中臣朝臣清麻呂薨曾祖國子小治田朝小德冠父意美麻呂中納言正四位上清麻呂天平末授二從五位下一補二神祇大副一云々神護元年仲滿平後加二勳四等一其年十一月爲二神祇伯一景雲二年拜二中納言一優詔賜二姓大中臣一寶龜二年拜二右大臣一授二從二位一尋加二正二位一清麻呂歷二事數朝一爲二國舊老一云云今上卽レ位重乞二骸骨一詔許之薨時年八十七〕

藤原朝臣同祖

中臣酒人宿禰

大中臣朝臣同祖天兒屋根命十世孫巨〔巨古本臣に作る延喜中內宮禰宜系譜大に作る〕狹山命之後也〔皇字沙汰文に延喜七年天照皇大神宮禰宜譜圖帳云國摩大鹿島命二男大狹山兒命天見通命云々トアリ巨狹山大狹山一ッ也天見通命は內宮祠官荒木田上祖垂仁天皇御代奉仕レリ○信按巨狹山トアルハ巨ハ臣ノ誤也此事證ヲ引テ正ト考ニ云ヘリ○巨狹山桓武紀天應元七月下作二意美左夜麻一〕

伊香連〔光仁紀伊賀都臣是中臣遠祖天御中主命廿世之孫意美佐夜麻之子也○天兒屋命子天押雲命孫天之多禰伎禰命三世孫宇佐津臣命四世孫大御食臣命五世孫伊香津臣命六世孫梨迹臣命七世孫神聞勝命八世孫久志宇賀主命九世孫四座大鹿島命十世孫臣

古今要覽稿卷第二十三

●姓氏部 姓氏錄校正三

●新撰姓氏錄中之本

左京神別上

起二藤原朝臣一盡二猪名部造一三十八氏

天神

藤原朝臣〔孝德紀曰以二大錦冠一授二中臣鎌子連一爲二內臣一○天智紀八年十月天皇遣二東宮大皇弟於藤原內大臣家一授三大織冠與二大臣位一仍賜レ姓爲二藤原氏一自レ此以後通曰藤原大臣 辛酉藤原內大臣薨日本世紀曰內大臣春秋五十碑曰春秋五十有六○天武紀十三年中臣連賜レ姓二曰朝臣一○舊事記卷一津速魂尊兒天兒屋命(中臣連等祖)○藤原大和國高市郡允恭紀十一年定二藤原部一○續紀天應元年七月右京人正六位柴原勝子公言子公等之先祖伊賀都臣是中臣遠祖天御中主命二十世之孫意美佐夜麻之子也伊賀都臣神功皇后御世使二於百濟一便娶二彼土女一生二一男一名二日本大臣一遙尋二本系一歸二於聖朝一時賜二美濃國不破郡柴原地一以居焉厥後因レ居命レ氏遂負二柴原勝姓一伏乞蒙二賜中臣栗原連一於レ是子公等男安十八人依レ請改賜○信友云扶桑略紀鎌足公ノ事ヲ云ル下ニ其家傳ヲ引テ云大臣者是大倭高市郡人也 其先自二天兒屋根命一世掌二天地之祭一相二知人神之間一仍命二其氏一曰二大中臣一美氣卿之長子母大伴夫人トアリ又祝詞式伊勢齊內親王奉入時宣命ニ大中臣茂杵中持弖云々大中臣本系ニ皇神之御中皇孫之御中執持云々稱二之中臣一云々大嘗會中臣壽詞茂杵乃中執持弖奉仕トアルモ此氏ノ幽契アル職ナリナホ此中臣テフ義ハ記傳十五ニ委シクミエタリ○藤原系圖ニ藤原地名在二大和國一鎌足之所レ住也○大織冠ハ正統記ニ正一位之名トアリ○按ニ元ノ名鎌子後ニ鎌足ト改玉ヘリト見タリ孝德五年紀ニ鎌足冠トアリテソノ以前ハ鎌子トシルサレタリ〕出レ自二津速魂命(ツハヤムスヒ)三世孫天兒屋根命一也〔百木曰舊事記ニ天兒屋命ヲ津速魂尊ノ兒トセルハ誤也此書ニ津速魂三世孫 天命兒屋 根命トモ巳巳 都牟須比命子天兒屋命トモアルハヨロシ藤原氏系圖ニ神皇產

臣〕
縣主（アガタヌシ）〔縣和名抄訓ニ安加多ニ訓議謂ニ分田ニ也按珍努縣主平續後紀承和三年和泉國人縣主益雄云々賜ニ姓和氣宿禰ニ又改ニ本居ニ貫ニ附右京二條二坊ニ又承和八年四月右京人正六位上縣主前利連氏益賜ニ姓縣連ニ倭盤余彦天皇第三皇子神八井耳命之後也〕
和氣公同祖日本武尊之後也

酒部公（サカベ）〔酒部造レ酒人賜レ氏云ニ酒部ニ也公姓也注ニ右京下讃岐公酒部公ニ〕
讃岐公同祖神櫛別（カンクシワケ）命之後也〔古事記景行段御子神櫛王者木國酒部阿比古宇陀酒部之祖〕

池田首（イケタ）〔和泉志云泉南郡池田王子祠ハ下池田村、見ニ御幸記ニ、今曰ニ熊野權現ニトアリ○和名和泉國和泉郡池田〔以介多〕〕
景行天皇皇子大碓命之後也日本紀漏

聟木（ムコギ）〔木異本本に作る○見本云拾芥無木字阿祇奈君之誤○泉州志云按ニ和名抄ニ聟木ハ五加也昔此郷此木多而得レ名乎近義者聟木之轉後附ニ好字ニ乎トアリテ此聟木ト未レ定雖姓ナル近義首ヲ引ケリ百木按ニ聟木ト近義トハ訓異ナルヘシ猶近義首考合スヘシ予初メ近義ハ迦義ヲ誤リタルニテ聟木ト一ツナルヘク思ヒシカトモ然ニハアラシ又按ニ和泉志日根郡五加近義庄出トアレハ聟木近義、一ツナルカ猶ヨク尋ヌヘシ○聟和名抄訓無古字鏡毛古和名抄和泉國和泉郡近義按聟木轉謂ニ近義ニ乎今近木王子之祉在ニ于日根郡王子村ニ〕
倭建尊三〔右京上及大和國には豐城入彦命四に作る〕世孫大荒田〔百木云此下別の字脱するか〕命之後也〔百木按倭建尊誤豐城命也右京上及大和國曰豐城入彦命四世孫大荒田別命注本與〕

山公（ヤマ）
垂仁天皇皇子五十日足彦別（タラシヒコワケノ）〔右京下讃岐公攝津國山守共無ニ別字ニ〕命之後也

右第十卷

姓氏錄上之末終

登美(トミ)首〔首異本公に作る〇神武紀(倭國)鵄邑〇式添下郡登彌城上郡等彌〇八綱田命注左京下上毛野朝臣〕

佐代公同祖豐城入彥命男倭日向建日向八綱田(ヤマトヒムケタケヒムケヤツナタ)命之後也日本紀漏

葛原部(カツラハラベ)〔葛原元藤原也〇允恭紀十一年衣通郎姬居二于藤原宮一時天皇詔二大伴室屋連一曰云々冀其名欲レ傳二于後葉一奈何室屋連依レ勅而奏可則科二諸國造等一爲二衣通郎姬一定二藤原部一〇同紀七年搆二殿屋於藤原一而衣通姬居レ之天皇始幸二藤原宮一八年天皇則更興二造宮室於河內茅渟一而衣通郎姬令レ居因レ此以屢遊二獦于日根野一〇天武紀十二年九月藤原部造賜レ姓曰レ連〇續紀天平寶字元年三月勅自今以後改二藤原部姓一爲二久須波良部一君子部爲二吉美候部一〕

佐代公同祖豐城入彥命三世孫大御諸別(オホミモロワケ)命之後也日本紀漏

茨木(ムハラキ)〔和名抄常陸國茨城牟波良岐又曰草名夜末宇波良〇國造本紀茨城國造天津彥根命孫筑紫刀禰定二賜國造一〕

豐城入彥命之後也〔本書卷末和泉國茨木造天津彥根命之後也〕

丹比部(タチヒヘ)〔和名抄河內國丹比ハ大知比〇古事記履中段多遲比努云々〇泉州志云々南郡田治宋村ハ多治部ノ轉言也ト云テ此丹比部ヲ引リ和泉志同郡多治宋神同ハ多治宋村ト記セリ〕

同上日本紀漏

輕部(カルヘ)〔和名抄和泉國和泉郡加留倍〇古事記允恭段爲二輕太子御名代一定二輕部一〕

倭(ヤマト)日向建(ケタケ)日向八綱多〔異本田に作る〕命之後也雄略天皇御世獻二加里乃郡一〔異本鄉に作る〕仍賜二姓輕部君一〔八綱命ハ豐城命男也垂仁紀上野君遠祖八綱田同人也注二左京下上毛野朝臣一〇信友按獻二加里鄉一ト訓ヘシ是ハ己カ領ル內ニテ狩ニ幸アル鄉ヲ天皇ヘ獻ルヲ賞メテ姓賜ヘルナリサレハ輕字ヲ加利ト唱フヘキニヤサレトナホ加留ニテモアルヘキ歟〕

和氣(ワケ)公〔續紀大寶三年四月從七位下和氣坂本賜二君姓一〇泉州志云和泉郡和氣村アリ〕

犬上朝臣同祖倭建尊之後也〔左京上犬上朝臣出レ自二謚景行皇子日本武尊一也〇注二左京上犬上朝

同上

櫛代造（クシロノ）〔式石見國美濃郡櫛代賀姫命神社○和泉志曰日根郡櫛代祠在二澤村一相傳古昔調二進伊勢齋主御櫛于此一〕

同上

日下部首（クサカベ）〔和名和泉國大鳥郡日部（久佐倍）信友按久佐ノ下加字ヲオトセルコト決シ○丹後國風土記曰與謝郡日置里此里有二筒川村一此人夫日下部首等先祖名云二筒川嶼子一云々所謂水江浦嶼子ト云フ者也云々〕

日下部宿禰同祖彦坐命之後也

日下部〔和名抄和泉國大鳥郡日下（久佐倍）○注二山城國日下部宿禰一〕

日下部首同祖〔攝津國日下部宿禰同祖〕

佐代公（サテ）〔代異本氏に作る○佐代和名抄漁釣具、纚、佐天如二箕形一○万葉集一上瀬爾鵜川乎立下瀬爾小網刺渡山川母依氐奉流神乃御代鴨○百木云佐代ハサテト訓ヘシ二本佐氏ハ佐代ノ誤カト思フニ猶佐代ヲ誤タルナラン信友云氏代字相似タリ○泉州志云日根郡朝代村ハ余按佐代轉語歟ト云テ此佐代公ヲ引ケリコ、ハ別ナルヘシ〕

上毛野朝臣（カンツケノ）同祖豐城入彦命之後也敏達天皇行二幸吉野川瀬一之時依レ有二勇事一負賜二佐代公一〔勇事應レ訓二伊佐奈取依一万葉集○信友云コ、ニ引タル万葉集ノ歌上瀬等ノ句ノ上ニ芳野川ト云フ句アリコレヲ引ヘキ也サテ勇事ヲイサナトリト訓ルハ甚誤リニテ言フニタラス按フニ當時吉野川ニ行幸マシテ漁セ玉フトキ纚レナトモテ魚ヲトルトテ淵ナトヲ勇メル事ノ有シヲ賞玉ヘルナルヘシ今ノ世ニモ國ノ守ナトノ漁ニサル事狀ノ事イト多キ也〕

珍縣主（チヌアガタヌシ）〔珍古事記崇神段河内之菟野村○又神武段五瀬命到二血沼海一洗二其御手之血一故謂二血沼海一○崇神紀茅渟縣陶邑○雄略紀根使主至二日根一爲二官軍一見レ殺分二子孫一賜二茅渟縣主一○續紀靈龜二年三月割二河内國和泉日根兩郡一令レ供二珍努宮一注二國號考の宮所記一○御諸別命注二左京下上毛野朝臣一○光仁記天應元三月戊辰正六位下珍努縣主諸上云々〕

佐代〔代異本氏に作る〕公同祖豐城入彦命之〔元之の字なし一本によりて補ふ〕三世孫御諸別命之後也日本紀漏〔異本日本紀漏の字なし〕

宇太〔異本多に作りまた一本大に作る〕臣松原臣阿倍〔異本部に作る〕朝臣同祖大鳥膳臣等并〔異本并の字なし〕大彥命之後也〔宇太臣松原朝臣姓氏錄不レ載○古事記孝元段大毗古命之子建沼河別命者阿倍臣等之祖也次比古伊那許志別命者膳臣之祖也〕

他田〔敏達紀四年六月營ニ宮於譯語田ニ○式大和國城上郡他田坐神社○左京上他田廣瀨朝臣大彥命之子大稲輿命之後ト云ヘリ○和名抄駿河國有度郡他田乎佐多〕

膳臣同祖

葦占臣〔葦占信友云丹後ニ足占山アリ名區也近江郡ニ葦浦ト云フ處アリ万葉ニ足占トアルハ占ヲスル方也神代紀下火酢芹命ノ俳優ノ狀ノ事ヲ云ヘル處ニ潮漬レ足時則爲ニ足占ニトアリ〕

大春日〔按に朝臣の字あるへき歟〕同祖天足彥國押人命之後也

物部〔泉州志云和泉郡藥師寺ハ云々高野出兼澄傳云澄姓ハ物氏泉州人云々掌領泉之穴師神祠ノ藥師寺云々道範承レ風傾悅云々余按物氏者物部也トアリテ此物部及和泉國神別ナル物部又物部連ヲ引タリ又云今兼澄世系不レ詳ニ何物部ニ想兼澄道範共物部氏也大鳥郡船尾村有ニ道範之族裔ニ物部氏也ト記セリ又和泉志和泉郡物部布留神祠在ニ春木村ニ俗稱ニ布留堂ニ〕

布留宿禰同祖天足彥太〔異本大に作る〕彥命〔太彥誤ニ國押人ニ也○攝津國物部河內國物部大和國布留宿禰等同祖也〕之後也

細〔異本納に作り又一本網に作る〕部物部

同レ上日本紀漏

根連〔續紀天平寶字二年七月見ニ根連靺鞨授ニ從五位下ニ○按根連與ニ根使主ニ者異姓也根臣之後爲ニ坂本臣ニ武內宿禰之後也注ニ坂本臣ニ○號レ根者按雄略紀和泉國日根也今有ニ日根鄉十三村ニ○雄略紀十四年四月天皇云々責ニ根使主ニ云々乃將レ斬レ之根使主逃匿至ニ日根ニ造ニ稻城ニ而待戰遂爲ニ官軍ニ見レ殺天皇云ニ二ニ分子孫ニ一分爲ニ大草香部民ニ以封ニ皇后ニ一分賜ニ茅渟縣主ニ爲ニ負囊ニ者泉州志五云按根使主之宅地在ニ日根郡ニ故至ニ於日根ニ造ニ稻城ニ待戰歟今日根郡不レ詳ニ其處ニ根使主之後坂本臣之宅在ニ和泉郡ニト云ヘリ〕

建内宿禰男紀角宿禰之後也
大家臣〔和名抄河内國河内郡大宅大和國添上郡大宅○武烈紀歌於裒野該〕
建内宿禰男紀角宿禰之後也謚天智庚午依レ居ニ大家ニ負ニ大宅臣姓ニ〔庚午ハ天智九年也天智紀九年二月造ニ戸籍ニ○續紀神龜四年七月筑紫諸國庚午籍七百七十卷以ニ官印ヲ印之〕
掃守田首〔和名和泉國和泉郡掃守（加爾毛利）〕
武内宿禰男紀角宿禰之後也
丈部首〔和名抄伊勢國朝明郡杖部（鉢世都加倍）安房國長狹郡丈部（波世豆加倍）〕
同上
雀部臣〔和名抄上野國佐位郡雀部佐々伊倍三河國寶飫郡雀部散々倍○古事記神武段神八井耳命意富臣小子部連坂合部連云々雀部臣雀部造云々等之祖也○左京上雀部朝臣異祖○天武紀十三年雀部臣賜レ姓曰ニ朝臣ニ○泉州志ニ大島郡云家原城蹟近世有云々雀部治兵衛者築ニ城於家原ニ云々永祿十二年正月元日云々見ニ後太平記及江源武鑑ニ余按雀部ニ氏者累世和泉國人歟トテ此雀部臣ヲ引ケリ〕

多朝臣同祖神八井耳命之後也
小子部連〔和名抄越中國婦負部小子知比佐古○古事記神武段小子部連雄略紀六年三月命ニ蜾蠃ニ賜レ姓爲ニ小子部連ニ○天武紀十三年小子部連賜レ姓曰ニ宿禰ニ○靈異記上小子部栖輕之傳注ニ左京上子部宿禰ニ〕
同神八井耳命之後也
志紀縣主〔注ミ右京下志紀首與ニ河内國志紀縣主ニ〕
雀部臣同祖
膳臣〔膳臣阿倍臣膳臣孝元段大彦命之後也○注ニ左京上膳大伴部ニ○三代實錄貞觀六年二月越後介高橋朝臣文室麻呂卒文室者左京人膳臣又姓錦部信濃國人也五代祖膳臣金持娶ニ信濃國人錦部氏女ヲ生ニ男倭ヲ於レ是倭不レ尋ニ本族ニ以ニ母姓ニ爲ニ己姓ニ便作ニ信濃國人ニ○天武紀十三年膳臣賜レ姓曰ニ朝臣ニ○景行紀五十三年膳臣遠祖名磐鹿六雁賜ニ膳大伴部ニ○雄略紀見ミ膳臣長野能作ニ害膾ヲ又兎田御戸部眞鋒田高天狹穗子鳥別等爲ニ害人部ニ○百木云害ハ實ノ誤ナラム○泉州志ニ和泉郡膳部尾在ニ松尾山ニ古膳部居地也トアリテ此膳臣ヲ引タリ〕

記同○神代上紀曰素盞嗚尊降到於新羅國居曾尸茂梨之處按曾枳曾尸横通高麗樂蘇志麻利等指新羅謂遠境曰蘇冝者丹後風土記歌田夜麻等敝爾加是布企阿義天所企遠理等母子和遠須良須奈古事記仁德段歌玖毛婆那禮曾岐遠理登母同万葉集三詠天雲乃曾久敝能極者各退遠境之辭也○右京皇別下新良貴氏稻飯命之後者准之〕

仲哀〔元衰に作る一本によりて改〕天皇皇子譽屋別命之後也日本紀漏

磯部臣

同上

蓁原〔注攝津國蓁原公同祖〕

譽田天皇皇子大山守命之後也

右第九卷

和泉國皇別

起道守朝臣盡山公三十三氏〔道守朝臣注左京上道守朝臣〕

道守朝臣〔式外大鳥郡乳守社○泉州志云乳守社在南半町余按守氏族祭祖社也云々社邊町〕

波多朝臣同祖八多八代宿禰之後也日本紀合

坂本朝臣〔和名抄和泉國和泉郡坂本（佐加毛止）○泉州志郷庄（古ハ坂本ノ郷）云々坂本村トカキテ此坂本朝臣ヲ引ケリ○古事記孝元段木角宿禰者木臣都奴坂本臣之祖○天武十三年坂本臣賜姓曰朝臣○左京上坂本朝臣攝津國坂本臣同祖〕

紀朝臣同祖建内宿禰男紀角宿禰之〔元之の字なし一本によりて補〕後也〔元也字なし一本によりて補〕男白〔白異本日に作また曰に作る〕城宿禰三世孫建日臣因居賜姓坂本臣日本紀合

的臣〔注山城國的臣〕

坂本朝臣同祖建内宿禰男葛城襲津彦命之後也

布師臣〔注左京上布師首○和泉志泉南布池、在野村舊名布師、廣三百畝〕

同上

紀辛〔異本辛の字なし〕梶臣〔泉州志日根郡云舊墓在淡輪村云々余按一箇紀船守墓也此村有紀船守社又一箇紀小弓宿禰墓歟云々紀氏起武内宿禰男紀角宿禰本居大和國也後胤相別居國々紀辛梶臣見和泉國姓氏錄自紀小弓宿禰到紀船守居此邑歟〕

是也〕
彥八井耳命之後也
守公〔左京下牟義公守公同同祖併注同〕
牟義公同祖大碓命之後也日本紀漏
阿禮首〔阿禮荒鄕同地○和名抄攝津國西成郡安良蕃攝津國荒鄕冝二考合一○万葉集詠二阿禮乃崎一者遠江國濱名郡之地名也○大碓命之後阿禮首者未レ考〕
守公同祖大碓命之後也
尋來津公〔注二大和國廣來津公及左京下上毛野朝臣一○續紀廿四河内國丹比郡人尋來津公開麻呂配二出羽國小勝柵戸一〕
上毛野朝臣同祖豐城入彥命之後也〔元也の字なし異本によりて補ふ〕三世孫赤麻里〔續紀の文呂に作る〕依二家〔一本家の字なし〕地名一負二尋來君津一者
止美連〔止美神武紀倭國鵄邑○式城上郡等見神社○依二舊地一賜二止美連一○安閑紀元年五月百濟來貢同年十二月見二上毛野君小熊一○欽明紀元年八月高麗百濟任那幷貢云々召二集秦人漢人等諸蕃投化者一安二置國郡一編二貫戸籍一秦人戸數惣一千五十三戸以二大藏椽一爲二秦伴造一○信友云仁德紀五十三年新羅不二朝貢一夏五月遣二上毛野君祖竹葉瀨一云々重遣二竹葉瀨之弟田道一則詔之曰若新羅拒者擧レ兵擊之云々○又五十五年蝦夷叛之遣二田道一令レ擊云々死二伊寺水門一云々其妻云々〕
尋來津公同祖豐城入彥命之後也〔元也の字なし一本によりて補〕四世孫荒田別命男田道公被レ遣二百濟國一娶二止美邑吳女一生男持君三世孫熊次新羅等欽明天皇御世參來新羅男吉〔異本古に作る〕雄依レ居賜二姓止美連一也日本紀漏
林〔古本村に作る〕擧首〔林一作レ村○拾芥抄ニモ村擧トアリ〕
豐城入彥命之後也
佐伯直〔佐伯、針間國神埼郡本氏針間別佐伯直也○注二右京下佐伯直一〕
大足彥忍代別天皇皇子稻背入彥命之後也日本紀不レ見
蘇冝部首〔蘇冝部譽屋別命御母古事記仲哀段曰息長帶比賣命仲哀紀曰娶二來能田造祖大酒主女弟媛一生二子譽屋別皇子一舊事記同○蘇冝部式出雲國出雲郡曾枳能夜神社次同社韓國伊太氐神社出雲風土

月河內國志紀郡人外從五位下志紀縣主貞戍〔一本貞成に作〕志紀縣主福主志紀縣主福依等三人賜ニ姓宿禰一卽改ニ本居一隷ニ左京職一神八井耳命之後與ニ多朝臣一同祖也と云へり○和名河內郡名志紀○式同郡志貴縣主神社〕

多朝臣同祖神八井耳命之後也

紺口縣主〔一本縣主の字なし○和名抄河內國石河郡紺口○式同郡咸古神社○仁德紀堀ニ大溝於咸玖一乃引ニ石川水一○紺口蘆口也大和國諸蕃有ニ薦口造一水邊蔣所ν生之地名也和名抄薦蔣〔古毛〕萬葉集及三代實錄〔淸和紀〕薦枕武烈紀歌擧暮摩矩羅○催馬樂歌薦枕高瀨之淀〔按高瀨川同國茨田郡也〕〕

志紀縣主同祖神八井耳命之後也

志紀首〔注ニ右京下志紀首〕〕

志紀縣主同祖神八井耳命後也

下家連〔異本ワタケシと讀む誤なりシツヤにても有へきにや下家神樂哥前張哥志都夜又依ニ大和國下養公之例〕〕

彥八井耳命之後也

江首〔拾芥抄首部ニ江人トアリ○尊卑分脈加茂氏ニ江人と云フ人アリ〕

江人附〔記傳所ν引三字无異本此三字小字に書す又異本ニ文に書す〕彥八井耳命七世孫來目津彥〔按に此下命の字有へきか異本此下之後世の三字あり〕大雨〔雨異本田に作る〕宿禰大碓〔碓異本雄に作る一本大碓の二字なし〕命之後也〔愼按江首〔江人附〕注來目津彥ノ下脫文ニシテ大雨ハ大田ノ誤ニシテ守公ノ前ニ大田宿禰有シカ誤テ江首注ニ混セシナルヘシ古事記ニ大碓命ハ大田君ノ祖也ト有ルユヱ然云也去レトモ國史ニモ大田ノ氏見ネハ改カタシ弘賢按に續紀神護景雲元年二月辛卯左京人正六位上大伴大田連沙彌麻呂賜ニ姓宿禰一と見えたり○愼按上文ニ起ニ阿閇朝臣一盡ニ秦原公一四十六氏トアリテ今四十五氏ヲ以テ見ニ大田宿禰補ヘハ其數モ合ルナリ江人ハ附トアレハ一氏ニ立タルニモ有ルマシ江人附ノ字他氏ニ附ナク江氏ニ限テ附アルモ疑ハシ拾芥抄首部ニ江人ト江ト二ツ載ルニ據レハ首字缺テ付ナリシヲ阝傍タルカ大雨宿禰ト云フ人何ニソ出ルヤ否○末ニ行本ノマヽ〕

尾張部〔和名抄河內國安宿郡尾張○神武紀高尾張邑

川〔異本河に作る〕俣公〔式河內國若江郡川俣神社〇和名抄同郡川俣鄕〇注大和國川俣公及下文豐階公〕

日下部連同祖彥坐命之後也

豐階公〔三代實錄貞觀三年九月豐階眞人安人卒安人者元河內國大縣郡人後爲左京人也本姓川俣公延曆十九年河俣公御影改姓豐階公仁壽二年安人上疏言安人河內國云々〇注大和國川俣公〇文德實錄仁壽二年十二月丹後權守從五位上豐階公安人賜姓眞人〕

川俣公同祖彥坐命男〔異本此下津の字あり〕澤道彥命之後也〔記傳廿二ニ云沙本毘古王ノ同母妹沙本毘賣命ノ亦ノ名佐波遲比賣ト申スニ准ラヘテ見レハ此澤道彥命ハ沙本毘古王ナルヘシ〕

酒人造〔和名抄攝津國東生郡酒人〕

日下部〔按に此下連の字あるへきか〕同祖日本紀不見

日下部〔神武紀河內國草香邑〇注山城國日下部宿禰〕

日下部連同祖

忍海部〔忍海部開化紀妃丹波竹野媛生彥湯彥隅命亦名彥蔣簀命〇按開化紀及古事記等田牟須美命之後忍海部脫而混下文波豆羅和氣王之後〇建豐波豆羅和氣王者道守臣忍海部造御名部造稻羽忍海部丹波之竹野別云々祖〇清寧紀見〔播磨國赤石郡縮見屯者）忍海部造細目者〇天武紀十年四月忍海造賜姓曰連〇和名抄大和國忍海於之乃美〇百木云和名抄ニ忍海ヲオシノミト訓ルハ元オシノウミヲ約タレハオシヌミナルヲ後ニ轉シタルナリ〕

開化天皇皇子比古由〔異本田に作る〕牟須美命之後也

茨田宿禰〔茨田注右京下茨田連〇仁德紀十一年十月築茨田堤云々河內人茨田連衫子（衫子此云莒呂母能古）〇天武紀十三年十二月茨田連賜姓曰宿禰〇續紀天平十九年六月茨田弓束茨田牧野賜姓宿禰〇和名河內國郡名茨田（萬牟多）〕

多朝臣同祖彥八井耳命之後〔此下異本也の字あり〕

男野現宿禰〔異本莒呂母能古に作る〕仁德天皇御代造茨田〔茨田今守口是也〕堤日本紀合

志紀縣主〔注右京下志紀首〇三代實錄貞觀四年二

天皇ニ曰葛城縣者元臣之本居也故因ニ其縣ニ爲ニ姓名ニ是以冀之常得ニ其縣ニ以欲レ爲ニ臣之封縣ニ天皇不レ聽○依ニ上文ニ則當ニ宗我大家有ニ于葛城ニ也賜ニ宗我地ニ時代不レ詳蘇我爲ニ七氏ニ者稻目宿禰之後也○蘇我臣注レ前○川邊朝臣右京上武内宿禰四世孫宗我宿禰之後也○川邊大和國十市郡又高市郡飛鳥川邊乎○田中朝臣右京上武内宿禰五世孫稻目宿禰之後也○高向朝臣右京上武内宿禰六世孫猪子宿禰之後也○小治田朝臣右京上武内宿禰稻目宿禰之後也○小治田高市郡治田○櫻井朝臣右京上稻目宿禰之後也⦿櫻井河内國佐久良井○岸田朝臣左京上武内宿禰五世孫稻目宿禰後男小祚臣孫耳高家ニ居岸田村ニ因負ニ岸田臣號ニ○岸田安閑紀膏腴雌雉田仁德紀幸ニ百舌鳥野ニ而遊獵時雌雉多起云々按依レ此號ニ雌雉田ニ乎今當ニ和泉國岸和田ニ也〕

孝元天皇皇子〔異本此六字なし〕彥太忍信命〔大忍命注レ前〕之後也

大宅臣〔和名抄河内國河内郡大宅大和國添上郡大宅○古事記孝照段天押帶日子命者春日臣大宅臣云々之祖也○記傳ニ云攝津國に皇別ありイカ、〕

大春日同祖天足彥國押人命之〔異本之の字なし〕後也

壬生臣〔和名抄諸國有ニ壬生鄉ニ遠江國壬生〔爾布〕○古事記仁德段爲ニ大子伊邪本和氣命之御名代ニ定ニ壬生部ニ○仁德紀同○推古紀十五年定ニ壬生部ニ○續紀神護景雲元年三月常陸國筑波郡人從五位下壬生連小屋主賜ニ姓宿禰ニ○三代實錄貞觀十二年八月上野國云々外散位正八位上壬生公石道賜ニ姓壬生朝臣ニ○和名抄上野國甘樂郡丹生〕

大宅〔按に此下臣の字有へきか〕同祖

物部〔攝津國物部同祖系圖注ニ左京下小野朝臣ニ〕

天足彥國押人命七世孫米餅搗大使主命〔異本此下の字あり〕之後也

日下部連〔神武紀河内國草香邑○注ニ山城國日下部宿禰ニ古事記開化段沙本毗古王者日下部連云々祖○雄略紀十三年見ニ狹穗彥玄孫齒田根命ニ○天武紀十二年草壁吉士賜レ姓曰レ連○續紀神護景雲二年河内國河内郡日下戶意卑麻呂賜ニ日下部姓ニ○又同三年二月正六位上日下戶連意卑麻呂賜ニ姓宿禰ニ〕

彥坐命子狹穗彥命之後也

○古事記孝元段建內宿禰之子木角宿禰者木臣都奴臣坂本臣之祖○神功紀直豐耳次小竹祝天野祝者所謂紀祝者是乎○按阿備柏原日高郡小竹祝那賀郡天野山下竈山村〕

紀部(キベ)　建內宿禰男紀角(ツノ)宿禰之後也

建內宿禰男都野(ツノ)宿禰之後也

蘇何〔何異本我に作る〕○蘇我〔大和〕古事記孝元段建內宿禰之子蘇我石川宿禰者蘇我臣川邊臣田中臣高向臣小治田臣櫻井臣岸田臣等之祖也○三代實錄元慶元年十二月石川朝臣本村言始祖大臣武內宿禰男宗我石川生二於河內國石川別業一故以二石川一爲レ名賜二宗我大家一爲レ居因賜二姓宗我宿禰一淨御原天皇十三年賜二姓朝臣一○蘇我石川宿禰之後櫻井朝臣出二左京下一應神段曰天皇娶二櫻井田部連之祖島垂根之女糸井比賣一爲レ妣生二御子速總別命一○蘇我石川宿禰之時代當二應神仁德二御世一也同氏所見注レ下○蘇我滿智宿禰履中紀二年十月見レ執二國事一○蘇我韓子宿禰雄略紀九年射二墜韓子宿禰於中流一而死○宗我宿禰右京上川邊朝臣武內宿禰四世孫宗我宿禰之後也○蘇我稻目宿禰宣化紀元年爲大臣舒明紀大臣如レ故父無レ傳○公卿補任云蘇我稻目宿禰滿智宿禰之曾孫韓子之孫高麗之子也○欽明紀卅一年三月稻目宿禰薨○蘇我馬子宿禰用明紀爲二大臣一崇峻紀推古紀同推古三十四年五月薨葬二于桃原墓一稻目宿禰之子也家二於飛鳥河之傍一乃庭中開二小池一仍與二小島於池中一故時人曰二島大臣一○舒明紀元年蘇我氏諸族下悉集爲二島大臣一造レ墓而次二于墓所一爰摩理勢臣壞二墓所之廬一退二蘇我田家一○蘇我蝦蛦大臣舒明紀爲二大臣一皇極元年大臣如レ故○皇極紀蘇我大臣蝦蛦立二己祖廟於葛城高宮一皇極紀二年十月蘇我大臣蝦蛦緣レ病不レ朝私授二紫冠於子入鹿一擬二大臣位一○蘇我入鹿臣皇極紀蘇我大臣蝦蛦兒入鹿更名二鞍作一自執二國政一皇極二年十一月入鹿燒二班鳩宮一同三年十一月蘇我大臣蝦蛦兒入鹿臣雙起二家於甘檮岡一云々更起二家於畝傍山本一○同四年六月入鹿臣見レ害云々蘇我臣蝦蛦等臨レ誅悉燒二天皇記國記珍寶一○所レ謂石川者和名抄河內國石川郡宗我大家蘇我田家者式大和國高市郡宗我坐宗我都比古神社同地乎又按推古紀卅二年蘇我馬子宿禰令レ奏二

道守朝臣同祖武內宿禰男葛城〔異本木に作る〕曾都比古命之後也

鹽屋連〔齊明紀四年十一月見二鹽屋連鯯魚一〕○和名下野國郡名鹽屋〔之保乃夜〕〕

同レ上日本紀漏〔漏一本作合○異本云道守連〔異本臣に作る〕同祖武內宿禰男葛木曾都比古命之後也日本紀合に作りて同上日本紀漏の六字なし〕

小家連〔和名抄河內國讃良郡山家鄕○按に山は小の誤寫にてもあるへきや〕

鹽屋連同祖武內宿禰男葛城襲津彥命之後也

原井連

同レ上續日本紀漏

早良臣〔和名抄河內國讃良〔佐良鄕〕○欽明紀河內國更荒郡○天武紀娑羅鄕馬飼造賜レ姓曰レ連○河內國諸蕃一本佐良々連○古事記孝元段平羣臣佐和良臣云々等之祖也○續紀天應元年十一月無位佐和良臣靜女授二外從五位下一○和名抄筑前國早良訓佐波良異之〕

平群〔異本郡に作る〕朝臣同祖武內宿禰男平郡〔異本群に作る〕都久宿禰之後也

布忍首〔河內國丹比郡有二布忍鄕七村一○注二左京上布師首一○百木云舊訓ニヌノシト訓ルヨロシ　河內志丹比郡村里條ニ云々六村呼曰布忍庄ト誌セリ郎此處也サテ布忍ハヌノオシナレモノニオノ韻アレハオヲ省キテヌノシトハ云也カヽル例古言ニハ常多カリケルヲ內山氏フトミテヨマレタルハイカヽナリ〕

的臣同祖武內宿禰之後也日本紀漏〔異本合に作る〕

額田〔異本額田首に作る○額田和名抄河內國沼加多○神功紀遣二新羅一使者令下二武內宿禰行上議曰于熊長彥一曰武藏國人今是額田部槻本首等之始祖也ト云ヘリ

早良臣同祖平郡〔異本羣に作る〕木〔異本木に作る〕兎宿禰之後也不レ尋二父氏一負二〔異本此下田氏の字あり〕姓額田首一

紀祝〔紀國號注ニ國號考一○祝仕神社者神主祝部相共仕大神宮式同○職員令義解曰祝部爲祭主二贊辭一者也○祝訓二波布里一義未レ詳○景行紀三年屋忍男武雄心命詣二紀伊國一居二于阿備柏原一而祭二祀神祇一仍住九年則娶二紀直遠祖菟道彥女影媛一生二武內宿禰一

四郡隷二和泉國一按所謂四郡和名抄住吉百濟東生西生是也注二國號考一○攝津國吉志難波忌寸同祖大彦命之後也○古事記仲哀段見二難波吉師部之祖伊佐比宿禰一者○安康紀元年難波吉師日香蚊父子並仕二于大草香皇子一○雄略紀十四年求二難波吉士日香鄉子孫一賜レ姓爲二大草香部吉士一天武紀十二年十二月草壁吉士賜レ姓曰レ連○又十三年正月草香部吉志大形賜レ姓曰二難波連一○又十四年六月難波連賜レ姓曰二忌寸一○上伊吉士當二大彦命之後一然則吉士應レ訓二得彦一也○得彦延曆儀式帳曰竹首吉比古同人乎注二左京竹田臣一○忌寸續紀天平廿年五月秦老等一千二百餘烟賜二伊美吉姓一〕

大彦命〔命異本に據て補ふ〕之後也阿倍氏遠祖大彦命磯城瑞城〔城異本籬につくる〕宮御宇天皇御世遣レ治二蝦夷一之時至二於兎田黑(ウタスミ)〔異本墨に作る〕坂(サカ)一忽聞二嬰兒(ワカコノ)啼泣一即認不レ見獲二棄(ステシ)嬰兒一大彦命見而大歡即訪二求乳母一得二兎〔異本兎に作る〕田弟〔古本弟の字なくして茅原の二字あり〕媛一使〔異本便に作る〕レ就二〔異本付に作る〕嬰兒一曰能養(ヒトヽナサハ)長安爵レ功於レ是成レ人奉レ送之大彦命爲レ子愛育號二〔異本日に作る〕得彦(エヒコ)宿禰一者異說並存

難波〔攝津國三宅人大彦命孫波多武日子命之後也○波多式河內國飛鳥部郡伯太彦伯太姬神社文德實錄天安二年二月從五位下伯太彦伯太姬神並預二宮社一云々〕

難波忌寸同祖大彦命孫波多武彦(ハタタケヒコ)命之後也

道守(チモリ)朝臣〔注二左京上道守朝臣一〕

波多朝臣同祖武內宿禰男八多八(ヤタノヤ)〔異本矢に作る〕代(シロ)宿禰之後也日本紀合

山口朝臣〔古事記履中段大坂山口履中紀自二大坂一向レ倭至二于飛鳥山口一○按自二河內國一越二葛城山之山門一其山口也○續紀神護景雲元年九月河內國志紀郡人山口犬養等三人賜二朝臣一〕

道守朝臣同祖武內宿禰之後也續日本紀合

林(ハヤシ)朝臣〔和名抄河內國志紀郡拜志波以之左京上林朝臣同祖同注〕

同上

道守(チモリ)臣〔注二左京上道守朝臣一〕

道守朝臣同祖武內宿禰男波多八代宿禰之後也

的(イクハノ)臣〔注二山城國的臣一〕

〔按に呂の誤なるへし〕別命孫現古君氣長足比賣〔按に此下尊の字あるへきか右京皇別眞野臣注ニ息長足姫皇尊トアリ〕謚神功〔三字一本細字に書す〕筑紫橿冰宮御宇之時海中有レ物差ニ覘〔異本現に作る〕古君ニ遣レ見復奏之日率ニ韓蘇使王〔按に主の字ならんか〕等ニ參來因レ玆賜ニ韓矢田部造姓ニ日本紀漏

車持公〔注ニ左京下車持公ニ〕

同豐城入彦命之後也〔異本此九字なくして上野朝臣同祖の六字有り〕

右第八卷

河内國皇別

起ニ阿閉朝臣ニ盡ニ蓁原ニ四十六〔五乎〕氏〔異本首書云尙按今所見四十五氏有之但江首之下江人附云々疑江人共四十六氏乎○信友云此按是也ナホ其條ヲミルヘシ〕

阿閉〔古事記傳閇に作る〕朝臣〔注ニ左京上阿倍朝臣ニ〕

阿閉〔閇同上〕朝臣同祖孝元天皇皇子大彦命之後也〔注ニ左京上阿閉臣ニ○古事記系圖〕

孝元天皇第一皇子

大彦命──建沼河別命
　　　　└比古伊那許志別命

阿閉〔按に閇か〕臣

阿閉〔閇同上〕朝臣同祖大彦命男彦〔異本彥の字なし〕瀨立大稻越〔異本起に作る〕命之後也

日下連〔神武紀河内國草香邑○注ニ山城國日下部宿禰ニ〕

阿閉朝〔異本朝字なし〕臣同祖〔異本氏に作る〕大彦命〔命異本に據て補ふ〕男紐〔異本紕に作る〕結命之後也〔異本也の字なし〕日本紀漏

大戸首〔和名抄河内國河内郡大戸鄕○續後紀承和元年十二月散位外從五位下大戸首淸上云々等十三人賜ニ姓良枝宿禰ニ安倍氏之枝別也○三代實錄貞觀七年十月外從五位下和邇宿禰大田麻呂卒右京人也本姓大戸首河内國人也○雜姓大部首宜ニ考合ニ〕

阿閉朝臣同祖大彦命男比毛由比命之後也謚安閑御世河内國日下大戸村造ニ立御宅ニ爲レ首仕奉レ行〔異本行の字なし〕仍賜ニ大戸首姓ニ日本紀漏

難波忌寸〔古事記仁德段歌那爾波皇極紀難波郡孝德紀爲ニ大郡小郡ニ日本後紀天長二年三月攝津國江南

同前〔一本上に作る〕氏

山邊公〔和名抄大和國郡名夜麻乃倍〕

和氣朝臣〔和氣注ニ右京下和氣及山邊公ニ〕同祖大鐸〔異本鐸に作る〕和〔異本此上石の字あり〕居命之後也

山守〔和名大和廣瀬郡山守○仁徳紀曰倭屯田者元謂ニ山守地ト○古事記應神段此之御世定ニ賜山部山守部ト○顯宗紀來目部小楯拜ニ山官ト改賜ニ姓山部連氏ト以ニ山守部ト爲レ氏狹々城山君韓帒兼守山削ニ除籍帳ト隷ニ山部連ニ〕

垂仁天皇皇子五十日足彥命之後也〔按垂仁天皇皇子之後負山守者諸記不レ見〕

豐島連〔和名攝津國郡名豐島（天之萬）○古事記神武段日子八井耳命者茨田連手島連之祖〕

多朝臣同祖彥八井耳命之後也日本紀漏

松津首〔松津誤ニ基肄ト也肥前國基肄也國造本紀作ニ松津ト是亦誤ニ其肄ト也○百木云按ニ津ハ浦ノ誤ナリ松浦首ナルヘシ和名抄肥前國松浦郡ハ萬豆良コレ也國造本紀ニモ松津國造トアルモコ、ト同シク誤也サテ彼本紀ニ松浦國造又末羅國造アリサレトモカク同國ノ造二ッ擧タル例モアリ内山氏基肄ノ誤トモ云ヒ延佳神主ハ杵肆ノ誤也ト云ハレタレトモ共ニ誤リ也○尊卑分脈十二嵯峨源氏及渡邊云々渡邊ノ眞下松浦源四郎大夫松浦祖住ニ肥前松浦ト又云松浦源直肥前國下松浦郡御厨庄七百五十町自ニ父久讓領ト云ヘリ此時代ニハ松浦郡ヲ上下二郡トセル趣也○信友云百木主ノ說從ヒカタシ拾芥抄ニモ松津首トアリ國造本紀ニモ又此錄ノ諸異本トモニモ悉ク松津トアレハ誤トハオモハレヌ何國ニカアラン地名トキコエタリナホ考ヘシ弘賢曰攝津國皇別なれは他國にては有へからす〕

豐島連同祖

道守臣〔注ニ左京上道守朝臣及右京下道守臣ニ〕

道守朝臣同祖武葉判〔異本頬に作る信云列ノ誤カ〕別命之後也

韓矢田部造〔和名抄大和國添下郡矢田○式同○和名抄攝津國八部也多倍○古事記仁德段八田若郎女之御名代定ニ八田部ニ〕

上毛野朝臣〔系圖注ニ左京下上毛重朝臣ニ〕同祖豐城入彥命之後〔此下一本也の字あり〕三世孫彌母里

リ此布敷川ハ兎原郡ナル布曳瀧ノ末ニヤ和名抄攝津國兎原郡布敷郷攝津志云今呼ニ葺屋庄ト云ヘリ內山氏の說ヨロシカラス〕

玉手同祖葛木襲津彥命之後也

井代〔一本出に作る〕臣〔續紀云藤原朝臣種繼男湯守賜ニ姓井手宿禰ニ〕

大春日朝臣同祖米餅搗大使主命之後也居ニ大和國添上郡井手村ニ因負ニ姓井出臣ト

津門首〔和名抄攝津國武庫郡都止〕

櫟井臣〔櫟井大和國添上郡春日鄉注ニ櫟井臣ニ〕同祖米餅搗大使主命之後也

物部首〔垂仁紀卅九年一曰石上神寶從ニ忍坂ト移之藏ニ于石上神宮ニ是時神乞之言春日臣族名市河令レ治因以命ニ市河ト令レ治是物部首之始祖也○天孫本紀十市根命合之○文德實錄齊衡元年十月物部首廣泉賜ニ姓朝臣ニ〕

大春日朝臣同祖也〔異本此字なくして孝照天皇皇子天帶彥國押人命之後の十五字あり

和邇部〔注ニ左京下ニ○記傳廿一云大宅臣云々トアルハコヽノ和邇部ノ三字大宅臣ナルヘシ〕

大春日朝臣同祖天足〔古本彥の字あり〕國忍人命之後也

物部〔河內國物部同祖系圖左京下〕

物部首同祖米餅搗大使主命之後也

羽束首〔和名抄攝津國云々和名山城乙訓郡羽束〔波豆賀之〕○天武紀十二年九月羽束造賜レ姓曰レ連〔蓋同姓乎〕〕

天足彥國押人命男彥姥津命之後也

日下部宿禰〔注ニ山城國日下部宿禰ニ〕

出レ自ニ開化天皇皇子彥坐命ニ也日本紀合

依羅〔異本四綱に作る〕宿禰〔式攝津國住吉郡依羅神社開祭神彥坐命和名抄住吉郡大羅保於與佐美相併爲ニ依羅二郷ニ○古事記仁德紀依網池○仁德紀十四年見ニ依網屯倉阿弭古ニ○續紀天平勝寶二年八月攝津國住吉郡從五位下依羅我孫忍麻呂等五人賜ニ依羅宿禰姓神奴意支奈祁長月等五十三人依羅物忌姓ニ○河內丹比郡依羅〔與佐美〕〕

日下部宿禰〔異本朝臣につくる〕同祖彥坐命之後也

續日本紀合

鴨君〔左京下鴨縣主同祖同注○式攝津河邊郡鴨神社〕

皇子
太忍信命 御母鬱色謎命 大忍河内國丹比郡今有二太忍鄕七村一○弘賢曰太上彥字有へし

子
屋主忍男武雄心命 出二景行紀一三年居二于紀伊國阿備柏原一而祭祀神祇仍住九年

子
武内宿禰命 母紀直遠祖菟道彥之女影媛生二武内宿禰一 古事記孝元段建内宿禰之子男七女二

子
木角宿禰 古事記日木臣都奴臣 坂本臣等之祖也

子
日坂宿禰 左京上坂本朝臣紀朝臣同祖 紀角宿禰男白城宿禰之後也

後一孫一此一間一无二傳一記一
根臣 古事記安康段坂本臣等之祖根臣○安康紀元年坂本臣祖根臣○雄略紀十四年根使主至二于日根一爲二官軍一見レ殺

子
小根使主 雄略紀十四年曰小根使主根使主之子也夜臥謂レ人曰天皇城不レ堅我父城堅天皇傳二聞是語一使三人見二根使主宅一實如二其言一故收殺之根使主之後爲二坂本臣一自レ是始焉○淸寧紀見三河内三野縣主十根事二星川皇子一○天武紀十三年坂本臣賜レ姓曰二朝臣一

伊我水取（イガモヒトリ）〔伊我國號水取古事記神武段見二宇陀水取一和名抄主水訓毛比止里〕
阿部〔異本倍に作る〕朝臣同祖大彥命之後也
吉志（キシ）〔吉志古事記仲哀段難波吉師部之祖伊佐比宿禰

○安康紀元年及雄略紀十四年見二難波吉志日香鄕者一爲二大草香部吉士一注二河内國難波忌寸一宜二考合一〕
難波忌寸同祖大彥命之後也
三宅人（ミヤケ）
大彥命男波（ハ）〔異本彼に作る〕多武日子（タタケヒコ）命之後也
雀部（サヽイベ）朝臣〔左京上雀部朝臣同祖同注〕
巨勢（コセ）朝臣同祖建内宿禰命之後也
坂本臣（サカモト）〔坂本和名抄河内國高安郡○坂本臣紀臣同祖○注二左京上一〕
紀朝臣同祖〔異本姓に作る〕彥太忍信命孫武内宿禰〔和學所本命の字あり〕之後〔異本也の字あり〕
阿支奈臣（アキナ）〔大和國阿祇奈君同祖同注○古事記孝元段建内宿禰之子葛城長江曾都毗古者玉手臣的臣生江臣阿藝那臣等之祖〕
玉手朝臣同祖武内宿禰男葛城曾豆比古命之後也
布敷首（ヌノシキノ）〔和名抄攝津國兎原郡布敷○左京上布師首河内國布忍首和泉國布師首各同祖同訓（不止之）御祖布都押之信命注二左京上布師首一○百木云殘編風土記攝津國有馬郡ノ條ニ布敷庄云々布敷川云々トア

右第七卷

攝津國皇別

起二川原公一盡二車持公一二十九氏

川原公〔三代實錄貞觀五年十月攝津國河邊郡人九世散位正六位上川原公清宗正七位上川原公清貞從八位下川原公清方十一世大膳大進正六位上爲奈眞人菅雄等五人之戶並蠲二課役一清永等宣化天皇皇子火焔王之後計二其世數一未レ可レ徵二課役一○又元慶三年十月免二攝津國河邊郡人九世從七位下川原公福繼有馬郡人无位川原公千被河邊郡人十世從八位下川原公夏吉大初位下川原公有利等五戶課傜一福貞等自言宣化天皇第二皇子火焔親王是川原公爲奈眞人等之祖○注二爲奈眞人一〕

爲奈眞人同祖火焔親〔異本親の字なし〕王之後也天智天皇御世依レ居賜二川原公姓一日本紀漏〔異本合に作る〕

榛原公〔和名抄遠江國蓁原（波伊波良）○應神段大山守皇子是土形君榛原君凡二族之始祖也○古事記應神段大山守命者土形君幣岐君榛原君等之祖也○土形幣岐榛原各遠江國之地名也○河內國蓁原同祖〕

息長眞人同祖大山守命之後也

高橋〔和學所本此下朝の字有〕臣〔注二左京上高橋朝臣一○舊事記云大彥命阿倍臣高橋臣等祖〕

阿部〔異本倍に作る〕朝臣同祖大彥命之後也日本紀不レ見

同レ上

佐々貴山君〔佐々貴山君注二左京上佐々貴山公一〕

同レ上

久々智〔久智式攝津有馬郡公智神社〕

同レ上

坂合部〔大和國坂合部首同祖○立二國境一者茅渟與二河內一之境和泉與二攝津一之境等是也和泉國境宿者當二國堺一爲レ名〕

同大彥命之後也允恭天皇御世造二立國境之標一因賜二姓坂合部連一〔記傳二十二連ノ姓ヲ玉フト云ヒナカラ此戶ヲ擧サルハ如何ソヤモシ脫タルニヤトアリ〕

孝紀元系圖

●大日本根子彥國牽天皇 諡孝元

なり和名抄豐後國埼郡ト大分郡トニ武藏アリサレハ武藏臣モ豐後國ナルヘシサテ又肥前風土記ニ三根郡物部郷此郷之中有ニ神社ニ名曰ニ物部經津主之神ニ曩者小墾田宮御宇豐御食炊屋姫天皇令ミ來目皇子爲ニ將軍ニ遣征ニ新羅ニ于レ時皇子奉レ勅到ニ筑紫ニ乃遣ニ物部若宮部ニ立ニ社於此村ニ鎭ニ祭其神ニ因曰ニ物部郷ニトアリテコレモ豐前國ト隣リタレハコヽナル物部首トアルニ由アリ和名抄ニモ三根郡ニ物部郷アリ又按ニ國造本紀ニ松浦(松津ニ作ルハ誤)國造難波高津御世物部連祖伊香色雄命孫金連定ニ賜國造ニトアリ」

久米臣(久米地神武紀二年曰定レ功行レ賞使下大來目居中于畝傍山以西川邊地上今號ニ來目邑ニ○古事記神武段久米直等之祖大久米命○按諸國定ニ置久米郷ニ者諸紀脫漏○和名抄大和國高市郡久米○式同○天武紀十三年來目臣賜ニ姓朝臣ニ○和名抄大和高市郡久米○殘編大和國風土記高市郡來目郷云々古老傳云此地往昔神日本磐余彥天皇臣來目臣之所知也故云ニ來目ニトアリ」

柿本(按に朝臣の字あるへきか)同祖天足彥國押人命五世孫大難波命之後也

肥直(和名抄肥後國八代郡紀伊(肥義注ニ國號考ニ)直注ニ右京下佐伯直ニ○古事記神武段神八井耳命者意富臣云々火君大分君阿蘇君筑紫三家連云々等之祖也」

多朝臣同祖神八井耳命(異本之の字あり)後也

下養公(下養未レ考和名抄大和國吉野郡有ニ加美那珂資母郷ニ又按神樂歌有ニ志都夜乃小菅之哥ニ○河內國下家連宜ニ考合ニ」

上毛野朝臣同祖豐城入彥命之後也

廣(異本詩に作る)來津公(雄略紀七年倭國吾礪廣津邑(廣津此云ニ比盧岐頭ニ)○河內國廣來津公豐城入彥命之後三世孫赤麻里依ニ家地名ニ負ニ詩來津君ニ者○廣字見ニ那須國造之碑ニ○注ニ右京下上毛野朝臣ニ下養公同祖豐城入彥命之(異本之の字なし)四世孫大荒田別(此下和學所本命の字あり)之後也

川俣公(川俣式大和國高市郡川俣神社○和名抄河內國若江郡川俣○河內國川俣公及豐階公同祖同注○注ニ山城國日下部宿禰ニ」

日下部宿禰同祖彥坐命之後也

坂合部首〔式播磨加茂方坂合神社○攝津國坂合部同祖同注〕

阿部〔異本倍に作る〕朝臣同祖〔異本氏に作る〕大彥命之後也

柹下〔異本本に作る〕朝臣〔古事記孝照段御子天押帶日子命者春日臣大宅臣粟田臣小野臣柹本臣云々祖也○注二左京下春日朝臣一○天武紀十三年柹本臣賜レ姓曰二朝臣一○式山城國紀伊本郡飛鳥田神社一名柹本社○天武紀十三年十一月戊申柹本臣賜レ姓曰二朝臣一〕

大春日朝臣同祖天足彥國押人命之後也敏達天皇御世〔異本代に作る〕依三家門有二柹樹一爲二柹本臣氏一

布留宿禰〔布留大和國山邊郡石上鄉布留村○顯宗紀見二石上振之神楫一○米餅搗大使主命注二左京下朝臣一○布都努古事記上建御男神亦名建布亦名豐布津神武紀此刀名云佐士布都神亦名云甕布都神亦名布都御魂此刀者坐二石上神宮一也○式大和國山邊郡石上坐布留御魂神社○按神武紀劔名曰レ韴靈韴斷聲布都布留同○天武紀十三年布留連賜レ姓曰二宿禰一○續後紀承和四年二月勅聽下大春日布留粟田三氏五位已上准二小野氏一春秋二祠時不レ得二官符一向中在二近江國滋賀郡一氏神社上○攝津國物部首注云垂仁紀卅九年一曰石上神寶從二忍坂一移之藏二于石上神宮一是時神乞之言春日臣族名市河令レ治因以命二市河一令レ治是今物部首之始祖なり〕

柹本朝臣同祖天足彥國押人命七世〔異本此下之の字あり〕孫米餅搗大使主命之後也男木事命〔異本此下男の字あり〕市川朝〔和學所本朝の字なし〕臣大鷦鷯天皇御世達〔一本遷また建につくる〕レ倭賀二布都〔按に努の字あるへきか記傳所引一本奴字有〕斯神社於石上御布瑠村高庭之地一以二市川臣一爲二神主一四世孫額田臣武〔異本物に作る〕藏臣齋〔異本齊に作る〕明天皇御世宗我蝦夷大臣號二武藏一臣二〔按に曰なるへし〕物部首並神主〔異本主の字なし〕首一因レ茲失二〔異本に因に作る〕因姓一爲二物部首男正五位上日向一天武〔此二字一本に據て補ふ〕天皇御世〔異本代に作る〕依二社地名一改二布瑠宿禰姓一日向三世孫邑智等也〔文德實錄齊衡元年十月物部首廣泉賜二姓朝臣一○百木按國造本紀國前國造云々午佐自命定二賜國造一トある午牟に作るへし諸本作レ午誤

石川同氏〔同氏ハ左京ノ下池原朝臣ノ條ニ云ヘリ〕
建内宿禰〔此下異本男の字あり〕若子(ワカゴ)宿禰之後也日
本紀合〔印本漏に作誤〕
内臣(ウチノ)〔古本公に作る ○續紀天平寶字三年冬十月辛丑
天下諸姓著ニ君字ー者換以ニ公字ートアルコレヨリシ
テ君ノ姓ミナ公ノ字ヲカケリ記傳ノ說也○和名大
和郡宇智○古事記孝元段御子比古布都押之信命子
味師内宿禰(此者山城内臣之祖也)○式山城國綴喜
郡内神社○和名抄同郡有智〕
孝元天皇皇子彥太忍信命之後也〔異本也の字なし〕
山公(ヤマノ)〔山和名抄大和國平羣郡夜麻添上郡山村(也末無
良)○續紀延曆四年五月先帝御名(光仁天皇諱白壁
及ニ朕之諱ー(桓武天皇諱山部)云々於レ是改ニ姓白髮
部ー爲ニ眞髮部ー山部爲レ山○顯宗紀元播磨國司來目
部小楯(更名ニ磐楯ー)改賜ニ姓山部連氏ー(與ニ山邊
公ー異)〕
内臣同祖味(ウマシ)内宿禰之後也
阿祇奈君〔阿祇奈商人之古語乎 ○攝津國阿支奈臣武
内宿禰男葛城曾豆比古命之後也〕
・玉手朝臣〔注ニ左京上玉手朝臣ー〕同祖〔一本姓に作
る〕彥太忍信命孫武内宿禰〔一本命の字あり〕之後
也
馬工連(マイサラノ)〔古事記孝元段平郡都久宿禰者(平羣臣佐和良
臣馬御織連等祖也)○和名抄筑前國嘉厂郡馬見(牟
馬美)古事記中云馬御樴連〕
平郡(ヘクリ)〔異本羣に作る〕朝臣同祖平郡〔羣同上〕木兎(ツクノ)宿
禰之後也
日(ヲ)〔異本曰に作る〕佐(サ)〔山城國曰佐同祖同注〕
紀朝臣同祖武内宿禰之後也
池後臣(イケノシリノ)〔池後陵式曰狹城盾列池後陵 ○按大和國 添下
郡也池上同地〕
建内宿禰之後也日本紀不レ見
巨勢械(コセカシケ)〔異本城に作る〕田臣(タノ)〔巨勢云々 城各械一本械
一本誤字 ○巨勢式及和名抄大和國高市郡○注ニ右
京上巨勢㭬田朝臣ー〕
池後朝臣同祖〔巨勢械田朝臣同祖〕武内宿禰〔此下
一本命の字あり〕之後也
音太(オトフト)〔異本習太に作る〕部(ヘ)
高橋朝臣同祖大日子(オホヒコ)〔異本子の字かさね書す〕命之
後也〔異本也の字なし〕

今木〔今木和名抄山城國葛野郡田村鄕也○續紀延曆元年十一月見二田村後宮今木大神一○今木訓齋明紀哥伊鷹紀○今木議新來漢人所レ居之地名也○欽明紀及齋明紀大和國今木同義〕道守〔異本朝臣の字あり〕同祖建豐羽頰別命之後也

間人造〔左京上間人宿禰同祖同注〕間人宿禰同祖譽屋別命之後也

布勢公〔布勢式越中國射水郡布勢乎古事記應神段品陀天皇御子若野俣王子意富富杼王者三國君波多君息長君酒人君筑紫之末多君布勢君等之祖也〔紀天平寶字十月布勢眞蟲姓〕〕仲哀天皇皇子忍稚命之後也續日本紀不レ見

茨田連〔注二右京下茨田連及河內國茨田宿禰一幷同祖○續日本紀文武天皇二年八月朔茨田足島賜二姓連一○式山城乙訓郡茨田神社〕茨田宿禰同祖彥八井耳命之後也

茨田勝〔茨田注二右京下茨田連一〕景行天皇皇子息長彥人大兄磯〔印本端に作異本瑞に作る皆誤〕城命之後也〔古事記景行段伊那毗能若郞女生二御子日子人之大兄王一〔可二考合一〕○弘賢曰紹運錄之字なし〕

息長竹原公〔息長陵式近江國坂田郡○萬葉集十三都久佐野方息長天武紀近江軍戰二息長橫河一〔各坂田郡也〕○竹原續紀天平六年三月見二河內國竹原井頓宮一〕應神天皇三世孫阿居乃王之後也

右第六卷

大和國皇別

起二星川朝臣一盡二川俣公一十八氏

星川朝臣〔和名抄大和國山邊郡保之加波○天武紀十三年星川臣賜レ姓曰二朝臣一〕石川朝臣〔注二左京上石川朝臣一〕同祖武內宿禰之後也敏達天皇御世依レ居改〔改の上異本地の字ありまた一本改字地に作る〕賜二姓星川臣一日本紀合

江沼臣〔和名加賀郡江沼○和名抄加賀國江沼又越前國足羽郡江沼○欽明紀卅一年四月越國人江淳臣裙代詣レ京○古事記孝元段建內宿禰之子〔男七女二〕若子宿禰者〔江野間臣之祖〕○國造本紀江沼國造柴垣朝御代〔反正〕武內宿禰四世孫志波勝足尼定二賜國造一〔註二國號考一〕〕

云歟ト傍書セルヲ不圖誤テ書入タル本ヲ寫ツタヘタルナルヘシ此コ、ロハヘヲ以テナホ考フヘキコトナリ〕大和國添上郡日〔異本曰に作る〕佐等祖也〔一本山代國相樂郡山村日佐等祖也に作るまた山村の字なき本もあり〕○欽明紀元年二月百濟人己智部投化置ニ倭國添上郡山村ニ今山村己知部之先也○一本傍注云山村ノ二字當レ在ニ添上郡之下ニ百木云此說是也從フヘシト云ヘリ信友云和名抄大和國添上郡山村トアリ○又二年七月百濟紀臣奈卒等云々注曰紀臣奈卒者蓋是紀臣娶ニ韓婦ニ所レ生因留ニ百濟ニ爲ニ奈卒ニ者也トモ云ヘリ〕

出庭(テ)臣〔和名抄出羽(以天波)○續紀和銅元年九月越後國言新建ニ出羽郡ニ許之○又和銅五年九月始置ニ出羽國ニ○國造本紀國造脫按に出羽國造ト擧テソノ國造ヲオカレタルコト文ニ洩タリト云フコト也○式田川郡伊氏波神社〕

孝元天皇皇子太(フト)〔異本大に作りまた太の上一本彥の字あり〕忍信命(オシマコトノ)之後也〔弘賢曰日本紀紹運錄を按するに大に作るは誤太の上彥字有は正〕

日下(クサカ)部宿禰〔古事記仁德段日下王之御名代定ニ大日下部ニ爲ニ若日下部王之御名代ニ定者○神武紀河內香邑○古事記同段日下之蓼津同序曰姓日下謂ニ玖沙訶ニ○和名抄和泉國日部久佐部○式大鳥郡日部神社祭ニ神彥坐命ニ也○古事記開化段日子坐王之子沙本毗古王者日下部連甲斐國造之祖○天武紀十三年草壁連賜レ姓曰ニ宿禰ニ○續紀神護景雲三年二月正六位上日下部連意卑麻呂賜ニ姓宿禰ニ○以下日下部攝津國(一氏)河內國(三氏)和泉國(二氏)合六各同祖〕

開化天皇皇子彥坐命之後也日本紀合

輕我孫(カルアヒコ)公〔注ニ左京下輕我孫ニ〕

治田連同祖彥今(ヒコイマ)〔異本命に作る〕簀(スノ)命之後也

堅井(カタノ)公〔續紀天平神護二年九月山城國人堅井公三立等十一人賜ニ姓諸井公ニ〕

彥坐命(ヒコイマス)之後也日本紀合〔按に堅井公日本紀に見えすとあるは誤か〕

別(ワケ)公

同上

道守(チモリノ)臣〔注ニ左京上道守朝臣及右京下道守臣ニ〕

道守朝臣同祖武波都良和氣(タケハツラワケ)命之後也

天足彥國押人命之後也

度守首〔度守地難レ定仁德紀見ニ菟道河度子ニ歌曰于泥能和多利○羅渡古事記同○天武紀元年命ニ菟道守橋者ニ文武紀四年山背國宇治橋道照和尚創造○神功紀元年阿布瀰能瀰齊多能和多利〕

村公同祖

阿閉臣〔注ニ左京上阿倍朝臣阿閉臣ニ〕

阿倍〔一本閉につくる〕朝臣大彥命之後也

的臣〔的臣的訓以久波○和名名射椝（以久波止古呂）又淡路國津名郡（以久波）○仁德紀十二年高麗國貢ニ鐵盾鐵的ニ云々的臣祖盾人宿禰射ニ鐵的ニ通焉云々美ニ盾人宿禰ニ而賜レ名曰ニ的戶田宿禰ニ○同紀卅年十月見ニ的臣祖國持臣ニ○應神紀十六年的戶田宿禰〕

石川朝臣〔石川注ニ左京上石川朝臣ニ〕同祖彥太〔異本大に作る〕忍信命三世孫葛城襲津彥命之後也〔古事記孝元段建內宿禰之子幷九葛城長江曾都毗古者玉手臣飯臣生江臣阿藝那等之祖也〕

與等連〔與等式山城國乙訓郡與杼神地〕

鹽屋連同祖彥太忍信命之後也〔鹽屋社同連河內國的臣同祖武內宿禰男葛城曾都比古命也〕○齊明紀見ニ連鯯魚者ニ之後鹽屋〕

日佐〔抄本曰に作る〕〔欽明紀十五年曰佐分屋○式丹波船井郡幡日佐神社○信友按ヲサハ元物ノ亂レ結レタルヤウノ事ヲ分チテトリスフルサマノ意ノ言也治メ長〔人村舟〕ナトノヲサハヲサムルコトヲ司ル者ノ稱也箴ハ糸ノ亂レタルヲ分チスツル意也譯語ハ彼國ノ言ヲ分別テ此方ヘ聞取也ヲサ十シハ右ノツラニテ物ノワキタメナキヲ云ナルヘシ〕

紀朝臣同祖武內宿禰之後也〔記傳卄二ノ三十九丁云此大臣ノ男等ノ韓國ニ罷行タリシ事書紀ニ多ク見エタレハ其彼國ニ在シ間ニ生タリシ子ノ末ニソアリケム〕欽明天皇御世率ニ同族四人國民三十五人ニ歸化天皇務〔抄本矜に作る〕以ニ〔抄本務以の字なし〕其遠來ニ勑ニ〔此下異本珍の字ありまた稱の字あり〕勳臣ニ爲ニ三十九人之譯ニ時人號曰ニ譯氏ニ男諸石臣次麻奈臣是近江國野洲〔抄本州につくる〕郡日〔異本曰につくる〕佐山代國相樂郡山村日佐歟〔抄本歟の字なし○信友云コノ歟ノ字故ナキ衍字ニハアルヘカラス曰佐ノ字ナトノ脫タル本ハ後人ノ云

ル文ナリ以下河內國皇別難波忌寸條云號ニ得彦宿禰一者異說並ニ存スマタ同上皇別ニ廣來津公ノ條ニ云々負ニ尋來津一者ナト者ノ字ノ用格ナホ例アリ○鈴屋大全云上ノ出字ハ坐ヲ誤レルニモアラムカ下ノ出於二字モ衍ナルヘシサテ又此姓ハ葺不合命ノ御子ノ後ナレハ神別天孫部ニ收ルヘキニ神武天皇ノ御兄弟ナルヲ以テ皇別ニハ收レルナルヘシ○同大人鉗杻人ニ姓錄氏古本二本ヲ以テ校合シテ云ヘラク是於ニ新良國一卽爲ニ國子一〕

右第五卷

山城國皇別

起ニ小野朝臣一盡ニ息長竹原公一二十四氏

小野朝臣〔注ニ左京小野朝臣一〕

孝昭〔異本照に作る〕天皇皇子天足彦國押人命之後也

粟田朝臣〔粟田和名抄山城國愛宕郡 阿波多○古事記孝昭段天押帶日子命者春日臣大宅臣粟田臣小野臣云々之祖○天武紀十三年粟(今本作レ栗誤)田朝臣賜レ姓曰ニ朝臣一〕

天足彦國押人命三世孫彦國葺命之後也〔彦國葺命注ニ左京下小野朝臣一〕

小野臣〔式山城國愛宕郡小野神社○和名抄同郡小野(平乃)○注ニ左京下小野朝臣一〕

天足彦國押人〔異本此六字なくして同に作る〕命七世孫〔此下異本人の字あり〕花命之後也

和邇部〔注ニ左京下和邇部朝臣一乃小野朝臣〕

小野朝〔異本朝の字なし〕臣同祖天足彦國押人命六世孫米餅搗大使主〔異本三に作る〕命之後〔一本此下也の字あり〕一本彦姥津命三世孫難波宿禰之後也日本紀漏

大宅〔異本臣の字あり○大宅注ニ大宅眞人一○古事記孝照段天押帶日子命云々大宅云々小野臣云々之祖也○反正紀曰大宅臣祖木事之女津野媛爲ニ皇夫人一○天武紀十三年大宅臣賜レ姓曰ニ朝臣一〕

小野朝臣同祖

葉栗〔和名抄山城國久世郡羽栗又尾張國波久利○續紀寶龜七年八月山城國乙訓郡羽栗翼賜ニ姓臣一〕

小野同祖彦國葺命之後也

村公〔村諸國有ニ牟禮鄕一下文有ニ山城國相樂郡山村日佐一○和名抄有ニ尾張國村國鄕一〕

〔元より以下一本細字に出す〕續日本紀合

息長連（オキナガノ）〔息長注ニ左京息長眞人一○續紀天平神護元年七月息長連淸繼賜ニ姓眞人一〕應神〔應神一本同に作る〕天皇皇子稚渟毛二俣〔俣異本派に作る〕王之後也

大私（オホキサイチ）〔私印本松に作異本私に作に據て改〕部〔大私敏達紀六年二月詔置ニ日祀部私部一（訓無レ所レ見）欽明紀謂帝王本紀多有ニ古字一撰集之人屢經ニ遷易一後人習讀以レ意刊改傳寫既多遂到ニ舛雜一之類乎○三代實錄仁和三年七月大和國城下郡人右近衞將監正六位上私造万福改ニ本居一貫ニ右京四條三坊一○大私部百木按拾芥抄阿祇奈條ニ大私部トアリテ古本ニ訓オホキサイチヘトアリ○信友按前漢書ニ私官トアルヲ服虔カ注ニ私官ハ皇后ノ官ナリトアリ后ノ意私ノ字ヲ用ヒタル也サルハ雅ニハ於保岐佐幾倍ト唱フヘシサレトオホキサイチヘト訓ナラヒタル今ノ人ノ氏ニ私市ト云フカアルヲオモヒ合スレハ舊私市部ナルヘシサラハナホキサイチト云ナルヘシ中世ノ軍記ニ私市氏ノ黨ト呼ナラヘリサテキサイハキサキノ音便也〕

開化天皇皇子彥坐命之後也〔彥坐命系圖注ニ左京下小野朝臣一〕日本紀漏〔古本合に作る〕

新良貴（シラキ）〔古事記上御毛沼命跳ニ波穗一渡ニ坐于常世國一稻氷命者爲ニ妣國一而入ニ坐海原一也○神武紀稻飯命云々拔レ劍入レ海化ニ爲鋤持神一三毛入野命云々蹈ニ波秀一而往ニ于常世之鄕一矣○新羅國傳曰王本百濟人自レ海逃ニ入新羅一遂主ニ其國一〕彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊男稻飯命之後也是出ニ〔異本出の字なし〕於新良〔此下一本卽爲の二字あり〕國〔此下一本卽爲國の三字あり〕主一稻飯命出ニ於新羅國王〔一本主に作る〕者祖一令〔一本合に作また今につくる〕日本紀不レ見〔信友按是出於新良國卽爲國王稻飯命出於新羅國王者祖合トヨムヘキ歟出於テヨリイツノ義ト見ルカラ疑アレトモヨリイツノ義ニハ出自ノ字ヲ書ケル例ニテモ序ニモ其ヲ云ハレタリサテ是出ハ稻飯命ヲサス此皇國ヲ避リ出マシテノ意也國主ノ主ハ王ノ誤也主ニテモ聞ユレトモスヘテ外蕃ノ國主ヲ王ト作ルハ此書ノ例也下ノ王ノ字ハ漢文ニ云ニシテ王タリナト作文法ニ似テ王トナルト云ヘル義也者ハト云ヘルハノ義ニ用タ

なし〕命之〔異本之の字なし〕日賜二號島田臣一也〔信友按子上は古加牟ト唱フヘキカ式尾張國海部憶感神社トアルハ意加牟ト唱フヘシ大上小上ト對ヒタル名ニテ憶感ハ子上ノ父カナラスハ兄ナトナルヘシ其ヲ子上カ氏神トシテ記セルナラン古書ニ小ノ意ハ多クヲトイヘレド古ト云タル例モアリ〕

茨田連〔案に連當レ作二宿禰一乎〇茨田和名抄河內郡名万牟多〇河內國茨田宿禰及山城國茨田連同祖〇古事記神武段日子八井耳命〔茨田連手島造之祖也〕〇古事記日本紀姓氏錄不レ同〇仁德記紀十一年十月見ニ河內茨田連衫子一者〇續紀文武元年茨田足島賜二姓連一〇天武紀十三年茨田連賜レ姓曰二宿禰一〇續後紀承和六年四月右京人正六位上茨田連魚麿等七人賜二姓忠宗朝臣一

多朝臣同祖神八井耳命男彥八井耳命之後也日本紀漏〔舊事紀以二彥八井耳命一爲二神武天皇皇子神八井耳命弟一〇古事記爲二神八井耳命兄一〕

志紀首〔河內國志紀縣主紺口縣主志紀首同祖〇志紀和名抄河內國志紀郡〔之岐〕〇式同郡志貴縣主神社同地〇大和國之志貴者出二神別一〇河內國志紀縣主可二考合一〕

多朝臣同祖神八井耳命之後也

園部〔園部和名抄河內國交野郡園田同地乎〕

同氏

火〔火肥國注二國號考一改レ肥者續紀和銅六年五月諸國郡鄉名著二好字一〇古事記神武段神八井耳命者火君云々祖也〇信友云肥前國風土記云昔磯城瑞籬宮御宇御間城天皇之世云云勅遣二肥君等祖健緒組一代之云々可レ謂二火國一即擧二健緒組之勳一賜二姓名一曰二火君健緒純一便遣レ治二此國一因レ火曰二火國一トアリ〕

同氏

日置朝臣〔日置古事記應神段大山守命者土形君幣岐君榛原君等之祖也〇按土形比木榛原各遠江國之地名注二遠江國記一〕

應神天皇皇子大山守王之後也續日本紀合

高圓朝臣〔高圓續紀天平寶字四年二月從五位下石川朝臣廣成賜二姓高圓朝臣一〇高圓按万葉有二大和國春日鄉中一〕

出レ自二正六位上〔一本下に作る或本正五位下〔八本モ同シ〕高圓朝臣廣世一也元就二母氏一爲二石川朝臣一

孝靈天皇—皇子稚武彥命（考靈紀曰稚武彥命男是吉備臣之祖也）男吉備武彥命—

- 兄浦凝別（應神紀廿二年九月御友別其兄弟子孫爲二膳夫一而奉レ饗焉天皇於レ是割二吉備國一封二其子等一注レ前封苑縣是苑丘之始祖也〇景行天皇御世被レ遣二東方一伐二毛人一到二于阿倍廬原一復命之日以二廬原國一給〇景行紀日本武尊歷二武藏上野一西逮二于碓日坂一分レ道遣二吉備武彥於越國一）
- 御友別（三代實錄曰吉備武藏命第二男）—
  - 稲速別（封川島縣是下道臣之祖）
  - 仲彥（封二上道縣一是上道臣香屋臣之始祖）
  - 弟彥（封二三野縣一是三野臣之始祖也）
  - 兄媛（賜二織部縣一〇應神紀廿二年曰兄媛者吉備臣御友別別之妹之始祖）
- 弟鴨別命（三代實錄曰吉備武彥命第二男御友別命第二男鴨別命〇封波區藝云縣是笠田臣之始祖）

宇自可（ウシカノ）臣〔宇自可播磨國也安閑紀置播摩國揖保郡牛鹿屯倉應神紀鹿子水門同地乎〇孝靈紀妃其弟生二彥狹島命稚武彥命一〇古事記孝靈段蠅伊呂杼王生二御子日寤間命一次若日建吉備津日子命云々日子寤間命者針間牛鹿臣之祖也〇舊事記孝靈段彥狹島命海直等祖次稚武彥命宇自可直等祖是異傳也〇續後紀承和二年九月右京人散位宇自可臣良宗賜二姓䄇庭宿禰一〇文德實錄齊衡二年八月宇自可武雄改二姓笠朝臣一〇三代實錄貞觀六年八月右京人宇自可臣吉人賜二姓笠朝臣一〇三代實錄貞觀六年八月右京人宇自可臣吉人賜二姓笠朝臣一彥狹島臣命之後也又元慶元年十二月右京人宇自可臣秋田等男女十四人賜二姓笠朝臣一彥狹島命之後也〕

孝靈天皇皇子彥狹島命之後也

道守（チモリノ）臣〔道守注二左京上道守朝臣一〇續紀養老七年二月但馬國人寺人小君等五人改賜二道守臣姓一〇舊事紀云開化天皇皇子武齒頰命注云道守臣等祖云々〕

道守朝臣同祖豐葉頰別命之後也

島田臣〔和名抄尾張國海部郡鄉名〇古事記神武段神八井耳命者（尾張丹羽臣島田臣等之祖也）〇文德實錄齊衡二年九月散位從五位下島田朝臣清田正六位上村作之子也云々弘仁十四年改二臣姓一爲二朝臣一〇多朝臣同祖神八井耳命之後也五世孫武惠賀前命孫仲臣子上稚足彥〔印本彥の字なし異本に據て補ふ〕天皇諡成務〔三字異本細字に書す〕御代尾張國島田上下二縣有二惡神一遣二子上一平服之復〔異本復の字

白〔異本自に作る〕別命以レ狀復奏天皇詔曰宜ニ汝爲レ君治ニ之卽賜ニ氏針間別佐伯直〔佐〔異本左に作る〕伯者〔此下異本前の字あり異本所の字なし〕賜氏也〔異本也の字なし〕〕姓ニ也直者謂レ君也爾後至ニ庚午年ニ脫ニ落針間別三字ニ偏佐〔按に佐の上爲の字有へきか〕伯直〔庚午注左京〕

笠カサノ朝臣〔仁德紀五十七年於ニ吉備中國川島河派ニ有ニ大虬ニ笠臣祖縣守擧レ劔入レ水斬レ虬〔注ニ國號考ニ〕〇天武紀十三年笠臣賜レ姓曰ニ朝臣ニ〇續紀天平神護元年六月山背國宇治郡少領外從五位下笠臣氣多麻呂賜ニ姓朝臣ニ〇應神紀二十一年九月天皇幸ニ吉備ニ云云移ニ居於葉田葦守宮ニ時御友別參赴之云々割ニ吉備國ニ封ニ其子等ニ也云々〕

孝靈天皇皇子稚武彥命之後也〔稚武彥命古事記孝靈段御子若日子建吉備津日子命者吉備上道笠臣祖〇書紀孝靈紀系圖注ニ下文廬原公ニ〕應神天皇巡ニ達〔異本幸に作る〕吉備國ニ登ニ加佐米山ニ〔加佐米山未考〕之時飄風吹ニ放御笠ニ天皇恠之鴨別命言神祇欲レ奉ニ天皇ニ故其狀衍天皇欲レ知ニ其眞僞ニ令レ獵ニ〔古本鴨本異本獵に作るまた獨に作る〕其山ニ所レ得甚多天皇大悅賜ニ名賀佐ニ

笠臣〔笠注レ前〕

笠朝臣同祖稚武彥命孫鴨別命之後也〔〇鴨和名抄備前國津高郡賀茂〇神功紀吉備臣祖鴨別〇信友按國造本紀笠臣國造輕島〔應神也〕豐明朝御世元封ニ鴨別命ニ八世孫笠三ニ枚臣定ニ賜國造ニトアリ三代實錄吉備臣武彥命第二男御友別命第三男鴨別命トアリ〕

吉キビ備〔此下異本臣の字あり〇吉備孝靈紀曰稚武命是吉備臣之始祖也〇御友別注レ前〕

稚武彥命孫御文〔異本与に作り又友並に支又歺に作る〕別命之後〔此下異本也の字あり〕

眞髮部〔注ニ山城國神別眞髮部造ニ〕

同命男吉備武彥命之後也

廬イホハラ原公〔和名抄駿河國廬原〔伊保波良〕〇古事記孝靈段刺肩別命者五百原君角鹿海直之祖也〇按日本紀頰肩別命亦名吉備建彥乎〇國造本紀志賀穴穗朝代〔成務〕吉備武彥命兒意加部彥命定ニ賜廬原國造ニ〇續後紀承和二年九月賜ニ右京人遣唐譯語廬原公有子兄散位柏守等朝臣姓ニ〕

景行天皇皇子五百木入彦命之後也續日本紀合〔異本漏に作る〕

佐伯直（サヘキノアタヘ）〔佐伯和名抄佐倍木○直謂君也（古注也）○直着費字續紀廿八凡費卅二長費三代實錄着費字者改正于直〕

景行天皇皇子稻背入彦命之後也〔○稻背入彦景行紀御母妃五十河媛生稻背入彦皇子是播磨別之始祖也○國造本紀曰針間國造志賀高穴穗朝（成務）代稻背入彦命孫伊許自別命定賜國造○續後紀承和四年十月左京人從七位上佐伯直長人正八位上同姓直持等賜姓佐伯宿禰〕男御諸別〔此下異本命の字あり〕稚足彦天皇諡成務〔諡以下三字一本細字に書す〕御代中分針問國給之仍號針間別〔中分針問國者分神崎川以西賜諸別所謂針問國也以東號鴨國赤石國也（注國號考）〕男阿良都命〔一名伊許白分○白分異本自別につくる〕譽田天皇爲定國堺車駕巡遂〔異本幸に作りまた異本鴨本達に作る〕到針間國神崎〔異本堺に作りまた埼に作る按に上本の內神堺ありそこにも崎かとあり〕郡瓦村東崗〔異本山岡に作る〕上于時青菜〔異本葉に作る〕葉自崗〔異本山岡に〕邊川流下天皇詔應川上有人也仍〔異本依に作る〕差伊許白分〔異本自別に作りて命の字ありまた鴨本には自命に作る〕往〔異本征に作る〕問卽答曰己等是日本武尊平東夷時可俘〔一本所俘に作る〕蝦夷之後也散遣於針間阿蘇〔鴨本異本また景行紀共に藝に作る〕阿波讃岐伊豫等國仍居此〔異本地に作る〕氏〔異本氐に作る百本云氏の上爲の字あるへきか〕也後改爲佐伯〔後より以下五字一本細字に書す○蝦夷之後者景行紀四十年日本武尊入陸奧國蝦蛦賊首島津守國津守等屯於竹木門而欲距云々蝦夷等悉面縛服罪故免罪因以俘其首師而令從身也○又五十年八月蝦夷令班邦畿之外是今播磨讃岐伊豫安藝阿波凡五國佐伯部之祖也仁德紀卅八年猪名縣佐伯部移于安藝沼田續紀卌七右京人外從五位下佐伯部三國等賜姓佐伯沼田連○仁德紀四十年見播磨佐伯直阿我能胡者○嘉祥三七十讃岐國人大膳佐伯直正雄賜姓佐伯宿禰隸左京職實錄仁和三七十七播磨國印南郡人散位從五位下佐伯直是繼改本居貫附山城國葛野郡〕伊許

酒部公(サカヘノ)〔古事記景行段神櫛王者本國之酒部阿比古宇陀酒部之祖〇大鷦鷯天皇以下別傳〇古事記應神段秦造之祖及漢直之祖知釀酒人名仁番亦名須々許理等參渡來也故是須々許理釀大御神者相似焉〕

同皇子三世孫足彥大兄王之後也 大鷦鷯天皇〔この下異本之の字あり〕御代從韓國參來兄人曾〔異本曾の字かさねたり〕保利弟曾曾保利二人天皇勅有何才皆有造酒之才令造御酒於是賜麻呂號酒看郎〔郎本郎に作る一本に據て改一本都に作るは非なり〕子賜山鹿比咩號酒看郎〔本郎に作る例に據て改〕女因以酒看郎〔郎同上〕爲氏

建部公(タケヘノ)〔建部景行紀四十三年定武部和名抄國々有建部鄕〇古事記景行段倭建命娶近淡海之安國造之祖意富多牟和氣之女布多遲比賣生御子稻依別王稻依別王者犬上君建部君等之祖〇景行紀同〇式近江國栗太郡建部神社〇和名抄近江國犬上以奴加三〇續紀天平寶字八年建部公伊賀麻呂賜姓朝臣〇又延曆三年十一月建部朝臣人上等言臣等始祖息速別皇子〔垂仁皇子〕就伊賀國阿保村居焉逮於遠津明日香朝廷詔皇子四世孫須珍都斗王由地賜阿保君之姓其胤子意保賀斯武藝超倫足示後代是以長谷旦倉朝廷改賜建部公按上件文者祖異而負同氏也謂續紀合者依此文歟〇續後紀承和十四年三月建部公弟益男女等五人賜姓長統朝臣貫附左京三條〕

犬上朝臣同祖日本武尊之後也續日本紀合

別公(ワケノ)

建部〔異本公の字あり〕同氏〔建部公同氏者犬上朝臣建部公出自倭建命也神功紀犬上君祖倉見別之後乎又按古事記景行段倭建命娶吉備臣建日子之妹吉備建比賣生子建見兒王建見兒王者讃岐綾君伊勢之別登表志別麻佐首宮首之別等之祖〕

御立史(ミタチノフンビト)〔御立三河國衣鄕御舘村乎〕

御史〔異本使に作る御使注左京上御使朝臣〕同氏

氣入彥命之後也持統天皇御代依居參州〔異本參河國に作る〕靑海郡御立地賜御立史姓日本紀漏

高篠連(タカシノノムラジ)〔高篠和名抄三河渥美郡高蘆（多加之）今有高足鄕五百木入彥命古事記景行段御母八坂入日賣命〇日本紀同〇續紀延曆三年八月左少史正六位上衣揖首廣浪等賜姓高篠連〕

事記作ニ伊許波夜和氣ニ垂仁紀作ニ池速別ニ〇續紀延暦三年十一月從五位上建部朝臣人上等言臣等始祖息速別皇子就ニ伊賀國阿保村ニ居焉逮ニ於遠明日香朝廷ニ詔ニ皇子四世孫須珍都斗王ニ由レ地賜ニ河保君之姓ニ其胤子意富賀斯武藝超レ倫足レ示ニ後代ニ是以長谷旦倉朝廷改賜ニ建部君ニ云々望請返レ本正レ名蒙レ賜ニ阿保朝臣之姓ニ詔許之於レ是人上等賜ニ阿保朝臣建部君黑麻呂等阿保公ニ〕

垂仁天皇皇子息速別命之後也息速別命幼弱之時天皇爲ニ皇子ニ築ニ宮室於伊賀國阿保村ニ以爲ニ封邑ニ子孫因家之焉充恭天皇御代以ニ居地名ニ賜ニ保阿君姓ニ廢帝天平寶字八年改レ公賜ニ朝臣姓ニ續日本紀合

羽咋(ハクヒノ)公〔羽咋式及和名抄能登國羽咋波久比上古號ニ羽咋國ニ〇國造本紀泊瀨朝倉朝御世三尾君祖石撞別命兒石城別王定賜ニ羽咋國造ニ〇續紀養老二年五月割ニ越前國之羽咋能登鳳至珠洲四郡ニ始置ニ能登國ニ〇又天平十三年〇二月能登國幷ニ越中國ニ〇天平寶字元年五月依レ舊分立〇羽咋議端洞也萬葉集十七之本路可良多太古要久禮婆波久比能海云々〇古事記垂仁段石衝別王者羽咋君三尾君之祖也〇細注神櫛別命也七字下文誤出續紀不合〕

同〔異本垂仁に作る〕天皇皇子磐衝別命之後〔異本也の字有〕亦名神櫛〔異本拂に作る〕別命也〔亦の以下七字異本細字に書す又異本此七字なし〕續日本紀

讃岐(サヌキ)〔古本岐に作る〕公〔讃岐和名抄佐奴幾〇古事記上讃岐國謂ニ飯依比古ニ義早麥也〔注ニ國號考ニ〕〇景行紀曰神櫛皇子是讃岐國造之始祖也〇國造本紀輕島豐明朝御世景行天皇兒神櫛王三世孫須賣保禮命定ニ賜國造ニ〇和泉皇別曰酒部公讃岐公同祖神櫛別命之後也〕

大足彦忍代別天皇皇子五十香足彦命之後〔按に此下也の字あるへし〇五十香足彦五字誤〇續後紀承和三年讃岐公永直同姓永成等廿八烟改レ公賜ニ朝臣ニ永直是讃岐國寒川郡人今與ニ山田郡人外從七位上同姓全雄等ニ二烟改ニ本居ニ貫ニ附右京三條二坊ニ永直等遠祖景行天皇第十皇子神櫛命也〇三代實錄貞觀六年八月右京人讃岐朝臣高作讃岐朝臣時雄讃岐朝臣時人等賜ニ姓和氣朝臣ニ其先出レ自ニ景行天皇二子神櫛命ニ也〕

島運其島石而造之則毎人令取兵而待皇后〇垂仁紀十五年妃丹波道主王之女渟葉田瓊入媛生鐸石別命(無子孫之傳古事記同)〇弟彦王吉備臣之祖御友別之子也〇應神紀廿二年天皇幸吉備國云々以三野縣封弟彦是三野臣之始祖也(三野御野也和氣同地)〇續紀寶龜五年九月從五位下和氣宿禰麻呂廣虫賜姓朝臣〇又神護景雲三年五月從五位下吉備藤野和氣眞人淸麻呂賜姓輔治能眞人外從八位上吉備藤野宿禰子麻呂從八位下吉備藤野宿禰牛養等十二人輔治能宿禰近衞無位吉備石成別宿禰國守等九人石成宿禰〇又同年六月備前國藤野郡人別部大原少初位上忍海部與志財部黑士邑久郡人別部比治御野郡人物部麻呂等六十四人賜姓石生別公〇又天平神護元年三月備前國藤野郡人正六位下藤野別眞人廣虫女右兵衞少尉從六位上藤野別眞人淸麻呂等三人賜姓吉備藤野和氣眞人藤野郡大領藤野公子麻呂等十二人吉備藤野宿禰近衞從八位下別公薗守等九人吉備石成別宿禰〕

垂仁天皇皇子鐸石別命之後也神功皇后征伐新羅凱旋歸〔旋歸の二字異本なし〕明年車駕還〔異本還に作る又还に作る〕都于時忍熊別皇子等竊構逆謀於明石堺〔異墧本に作る〕備兵待之皇后鑑識遣弟彦王於針間吉備堺造關防之所謂和氣關是〔異本是の字なし〕也太平〔平の字鴨本古本ともに之の字有〕後錄從駕勳酬〔異本酬に作る〕以封地仍被〔按に披か〕吉備磐〔異本盤に作る〕梨縣始家之焉光仁天皇寶龜五年改賜和氣朝臣姓也續日本紀合〔〇大系圖六云和氣氏　垂仁天皇鐸石別命　稚鐸(異說云始賜吉備磐梨別君姓)田守別王(一云健眞別王)云々トアリ〕

山邊公〔山邊和名抄大和國山邊夜麻乃倍古事記垂仁段大中津日子命(按沼帶別名)者山邊之別云々吉備之石无別云々等祖也〇續紀寶龜二年九月和氣王男女大伴長岡王山階王采女王幷復屬籍從四位上三島王之男林王從四位下三使王之男女三直王眉取王三宅王畝火王石部女王從四位上守部王之男笠王何鹿王猪名王賜姓山邊眞人〕

和氣朝臣同祖

阿保朝臣〔和名抄伊賀國伊賀郡阿保郷〇息速別命古

居ニ住近江國志賀郡眞野村ニ庚寅年負ニ眞野臣姓ニ也
和ワ邇ニ部〔和邇式大和國添上郡和邇坐赤坂比古神社和邇下神社同地○古事記崇神段建波邇安王起ニ邪心ニ之時和邇臣之祖日子國夫玖命卽於ニ九邇坂ニ居ニ忌瓮ニ而罷往於レ是到ニ山城之和歌羅河ニ云々○崇神紀和珥武鐰坂按和邇當レ在ニ奈良鄕中ニ○孝照紀天足彥國押人命此和珥臣等始祖也○崇神紀和珥臣遠祖彥國葺〔垂仁紀內〕○三代實錄貞觀五年八月左京人外從五位下雅樂少允和邇部大田麻呂賜ニ姓宿禰ニ大田麻呂自言天帶彥國押人命之後也○又云播磨國飾磨郡播磨博士大初位上和邇部朝臣宅繼賜姓邇宗宿禰自言天帶彥國押人命之後也○又云播磨國飾磨郡人播磨權醫師正八位上和邇部臣宅貞式部小錄從八位上和邇部臣宅守等賜ニ姓邇宗宿禰ニ〕
天足彥國押人命三世孫彥國葺命之後也
安ア郡〔異本那に作る〕公〔安那穴本國山陽道之國號注ニ國號考ニ穴太近江和泉大和諸國有ニ同名ニ○古事記孝昭段天押帶日子命者阿那臣多紀臣羽栗臣知多臣云々之祖也○式大和國城上郡穴師神社同地乎○續紀天應元年三月授ニ安那臣御實外從五位上ニ○按に此氏ハ臣ノ姓ナルニ公トアルハイカナルコトニカ○百木云眞野和邇安那皆近江ノ地名也野中モ近江ナルヘシ左京下大春日ト小野ト考合ヘシ〕
同上〔異本上同に作る〕
野ノ中ナカ〔古事記天押帶日子命者阿那臣之祖也和名河內丹比郡野中〔乃奈加〕○百木云彥國押人命ノ後也トアリコレモサルコトナレトモ或本ニ彥國葺命トアルヨロシ〕
同彥國押〔或本葺に作る〕命〔命の上和學所本古本人の字あり〕之後也
和ワ氣ケ朝臣〔和氣和名抄備前國和氣郡藤野鄕〔在ニ河東ニ〕磐梨郡和氣石生御野郡御野鄕〔各在ニ河西ニ〕和氣負ニ鐸石別命之名ニ乎鐸石小豆島亦名謂ニ大野手比賣ニ也○續紀神龜三年十一月攻ニ備前國藤原郡ニ名ニ藤野郡ニ又神護景雲三年六月改ニ藤野郡ニ爲ニ和氣郡ニ○神功紀皇后伐ニ新羅ニ之明年〔神功元年〕春二月皇后移ニ于穴門豐浦宮ニ卽收ニ天皇〔仲哀〕之喪ニ從ニ海路ニ以向レ京時麛坂王忍熊皇子聞ニ天皇崩亦皇后西征幷皇子新生ニ而密謀之云々乃佯爲ニ天皇ニ作レ陵詣ニ播磨國ニ興ニ山陵於赤石ニ仍編レ船絚ニ于淡路

古今要覽稿卷第二十二

●姓氏部 姓氏錄校正二

●新撰姓氏錄上之末

右京皇別下

起二粟田朝臣一盡二新良貴一三十四氏

粟田朝臣〔文德實錄卷八云山城國宇治郡粟田山和名抄愛宕郡粟田（阿波多）古事記孝照段天押帶日子命者粟田臣云々之祖也（注二左京下大春日朝臣一）○天武紀十三年粟田臣賜姓朝臣○續紀天平寶字三年七月從七位下粟田臣道麻呂賜二姓朝臣一同天平神護元年三月近江國坂田郡人粟田臣之始瀨眞瀨斐太人池守等四人賜二姓朝臣一同神護景雲元年六月左京人散位從八位上粟田臣第麻呂少初位上粟田臣種萬呂正七位上粟田臣乎奈美麻呂三人賜姓朝臣○續後紀承和四年二月勅聽下大春日布瑠粟田三氏五位以上准二小野氏一春秋二祠時不レ待二官符一向中在二近江國滋賀郡一氏神社上〕

大春日朝臣同祖天足彥國忍人命之後也日本紀合

山上朝臣〔續紀神護景雲二年六月右京人從五位上山上臣船主等十人賜二姓朝臣一〕

同氏日本紀合

眞野臣〔按に異本朝臣につくる○眞野和名抄近江國滋賀郡眞野（末乃）○三代實錄貞觀五年九月眞野臣永德姪男眞野臣道緒等賜二姓宿禰一大和國山邊郡人上野權少椽正六位上民首廣門右京人太宰醫師正七位上民首方宗木工醫師正六位上民首廣宅等賜二姓眞野臣一永德廣門等之先出レ自二天足彥國押人命一也〕天足彥國押人命三世孫彥〔異本彥の字なし〕國葺命之後也〔押人命注二左京下大春日朝臣一○彥國葺命古事記崇神段丸邇臣之祖日子國夫玖命云々射建波邇安王而死○崇神紀同〕男大口納命男難波宿禰男大矢田宿禰後氣長足姫皇尊謚神功〔三字異本に小字に書す〕征二伐新羅一凱旋之日便〔異本使に作る〕留爲二鎭守將軍一于レ時娶二彼國王猶榻之女一生二二女一〔異本男に作る〕云々〔異本二女に作る〕兄佐久〔異本元に作る〕命次武義命佐久命九世孫和珥部臣鳥務〔一本鵜に作る〕大肆〔一本津に作る〕忍勝等

阿閉臣〔古事記大毗古命之子沼河別命者阿倍臣等之祖〕
大彦命男彦背立大稲輿命之後也日本紀合

伊賀宿禰〔按に異本宿禰の字なし○天武十三年伊賀臣曰朝臣○孝元紀曰大彦命是伊賀臣等之始祖也〕
大稲輿命男彦屋主田心命之後也日本紀合

阿閉間人臣〔按に桓武延暦四年六月辛巳有ニ阿閉間人臣人是ニ〕

同氏

他田廣瀬朝臣
同氏續日本紀伊〔一本伊の字なし〕加廣瀬ニ〔一本字の字あり〕不レ見

道公〔按に仁明紀承和二年正月癸丑道公廣持賜ニ姓當道朝臣一是道君首名之孫也道君首名見ニ元正養老二年四月丙辰下一○仁明承和二年十二月己亥道公安野云々〕
同氏〔一本祖に作〕大彦命孫彦屋主田心命之後也

音太部
高橋朝臣同祖彦屋主田心命之後也

會加臣
孝元天皇皇子大彦命之後也

杖部造
同氏

猪使宿禰〔天武十三年十二月己卯猪連賜レ姓曰ニ宿禰一〕
安寧天皇皇子紀〔按に紀の上志の字あるへきか〕都比古命〔安寧紀磯城津彦命是猪使連之始祖也○舊事記磯城津彦命猪使連等祖新田部等祖○古事記曰師木津日子命之子二王坐一子孫者伊賀須知之稲置那波理之稲置三野之稲置之祖一子和知津美命者坐ニ淡道之御井宮一〕之後也日本紀合

右第四卷

姓氏錄上之末終

同五世孫稲目宿禰後也男小祚臣孫耳高家居ニ岸田村一因負ニ岸田臣號一日本紀合

久米朝臣

武内宿禰〔按にこの下五世の字あるへきか〕孫稲目宿禰之後也日本紀合

御炊朝臣

武内宿禰六世〔成信云六世當作四世六世馬子宿禰也蘇我馬子敏達元年四月大臣推古三十四年五月丁未薨〕孫宗我馬背宿禰之後也日本紀漏

玉手朝臣〔按に古事記葛城長江曾都毗古者玉手臣等之祖也〕

同宿禰男葛木曾頭日古命之後也日本紀合

掃守田首

武内宿禰男紀部〔按に此下奴字あるへきか〕宿禰之後也

上毛野朝臣

崇神天皇皇子豊城入彦命之後也日本紀合

佐味朝臣〔天武紀十三年佐味君曰ニ朝臣一〕

上毛野朝臣同祖豊城入彦命之後也日本紀合

大野朝臣〔天武十三年大野君曰ニ朝臣一〇應神紀上毛野君祖荒田別別神功巫皇后遣荒田別鹿我別〕

同豊城入彦命四世孫大荒田別命之後也日本紀合

垂水公〔按に文武大寶元年四月癸丑遣唐大通事大津造廣人賜ニ垂水君姓一〕

豊城入彦命四世孫賀表眞稚命之後也六世孫阿利眞公謚孝元〔成信按孝元可レ疑時代不レ合〕天皇御世天下旱魃河井涸絶于レ時阿利眞公造ニ作高樋一以垂ニ水四山一基レ之〔此下一本水の字あり〕令レ通ニ水宮内一供ニ奉御膳一天皇美ニ其功一便賜ニ垂水公姓一掌ニ垂水神社一也日本紀漏

田邊史〔按に孝謙天皇勝寶二年三月戊戌田邊史難波等賜ニ上毛野君姓一〇光仁寶龜八年正月戊午田邊史廣本賜ニ姓上毛野公一〕

豊城入彦命四世孫大荒田別命之後也

佐自努公

豊城入彦命孫大荒田別命之後也〔一本この十四字なくして同上とあり〕日本紀漏

若櫻部朝臣

阿部朝臣同氏大彦命孫伊波我加利命〔景行紀膳臣遠祖名磐鹿六雁〕之後也日本紀合

巨勢朝臣
　石川同氏巨勢雄柄宿禰〔古事記許勢山柄〕之後也日本紀合
巨勢楲田朝臣
　雄柄宿禰四世孫稻茂臣〔按に欽明紀許勢臣稻持○持統紀在昔難波宮治天下天皇崩時遣巨勢稻持等告喪之〕之後男荒人天豐財重日足姬天皇謚皇極〔三字一本小字に書す〕御世遣佃葛城長田其地野上漑水難至荒人能鮮機〔異本杬に作る〕術始造長楲川水灌田天皇大悅賜楲田臣姓也日本紀漏
巨勢斐太臣
　巨勢楲田同氏巨勢雄柄四世孫稻茂男荒人之後也
紀朝臣〔按に古事記木臣〕
　石川朝臣同氏屋主忍雄建猪心命〔私云武內之父也又名屋主忍男武雄命景行天皇時之人〕之後也日本紀合
平群朝臣
　石川朝臣同氏武內宿禰男平群都久宿禰之後也日本紀合
平群文室朝臣
　同都久宿禰之後也日本紀漏
都保朝臣
　平群朝臣同祖都久足尼之後也
高向朝臣〔按に古事記蘇賀石河宿禰者高向臣等之祖也〕
　石川同氏武內宿禰六世孫猪子臣之後也日本紀合
田中朝臣〔按に古事記田中臣〕〔武田ハ武內歟〕
　武田宿禰五世孫稻目宿禰〔家牒歷事宣化欽明兩朝爲大臣○宣化紀元年二月壬申爲大臣欽明三十一年春三月甲申薨〕之後也日本紀合
小治田朝臣〔按に古事記蘇賀石河宿禰者小治田臣等之祖也〕
　同上日本紀合
川邊朝臣〔按に古事記蘇賀石河宿禰者川邊臣等之祖也〕
　武內宿禰四世孫宗我宿禰〔成信按宗我宿禰脫名家牒曰四世孫蘇我馬背宿禰韓子宿禰男亦曰高麗宿禰〕之後也日本紀合
岸田朝臣〔按に古事記蘇賀石河宿禰云々〕

葛城襲津彥命之後也日本紀續日本紀官符改姓並合（按に仁明紀曰國牽天皇三世孫武内宿禰第六男葛木襲津彥云々）

稻城壬生公

出自垂仁天皇皇子鐸石別命也垂仁紀母淳葉田瓊入姬○古事記沼帶別命

小槻臣

同天皇皇子於知別命（垂仁紀祖別命舊同○古事記落別王又曰小目之山君三川之衣之祖也）之後也

牟義公（按に古事記天皇聞看定三野國之祖神大根王之女娶弟比賣生子押黒弟日子王此者牟宜都君等之祖○舊事記弟別命牟宜難君祖○景行紀四十年七月戊戌身毛津君○和名抄曰美濃國武藝郡（牟介）元正紀務義郡）

景行天皇皇子大碓命之後也

守公（按に拾芥抄連に作る從へし○景行紀舊事記古事記守君）

牟義公同氏大碓命之後也

治田連（按に和名抄近江國淺井郡益田（末須田栗本郡治田）（發多）齊明紀注近江國墾田）

開化天皇皇子彥坐命之後也四世孫彥命征（此下異本北の字あり）夷有功劾因割近江國淺井郡地賜之爲墾田地大海眞持等墾開彼地以爲居地大海六世孫之後熊田宮（異本官に作る）平等因行事賜治田連姓也

輕我孫（按に古事記曰日子坐王又娶春日建國勝戸賣之女沙本大闇見戸賣生子沙本毗古王次袁邪本王者葛野之別近淡海蚊野之別祖也○神名式近江愛智郡輕野神社○和名抄曰近江國愛智郡蚊野）

治田連同氏彥坐命之後四世孫白髮王初彥坐命未賜阿彌古姓成務天皇御代賜輕地三十千代是負輕我孫姓之由也

鴨縣主

治田連同祖彥坐命之後也

右第三卷

左京皇別上

越八多朝臣盡猪使宿禰三十三氏

八多朝臣（按に古事記波多八代宿禰者波多臣等之祖也）

石川朝臣同祖武内宿禰命之後也日本紀合

上毛野同祖氏〔按に姓氏衍か〕豐城入彥命五世孫多奇波世君之後也日本紀賜レ姓合也依二續日本紀一合

池原朝臣

住吉同氏多奇波世君之後也

上毛野坂本朝臣〔按に和名抄上野國碓氷郡坂本〔佐加毛土〕〕

上毛野同祖豐城入彥命十世孫佐大公之後也續日本紀合

車持公

上毛野朝臣同祖豐城入彥命八世孫射狹君之後也雄略天皇御世供二進乘輿一仍賜二姓車持公一

大網臣〔異本公に作る〕

上毛野朝臣同祖豐城入彥命六世孫下毛君奈良弟眞若君之後也〔按に國造本紀下毛野國造云々豐城命四世孫奈良別初賜二國造一〕

桑原臣〔異本公に作る〕

上毛野同氏〔異本祖に作る〕豐城入彥命五世孫多奇波世君之後

川合〔異本公の字あり〕

上毛野同氏多奇波世君之後也

垂水史

上毛野同氏豐城入彥命男彥狹島命之後

商長首

上毛野同氏多奇波世君之後也三世孫久比泊瀨部天皇謚崇峻〔三字一本細字に書す〕御世被レ遣二呉國一〔此下一本口あり〕雜寶物等獻レ物令レ爲二交易一其名云二波賀理一〔物の下十一字一本なし〕於二天皇一其中有二呉權一天皇勅二此物一也久比奏曰呉國以懸二定萬一〔異本に物令爲交易其名云二波賀理一の十一字あり疑らくは上に入しは錯亂〕天皇勅之勿レ令二他人同一久比男宗麻呂舒明天皇御世負二商長姓一也日本紀漏

吉彌侯〔印本隻に作る異本に據て改〕部

上毛野朝臣同祖豐城入彥命六世孫奈良君之後也〔按に淸和實錄貞觀五年十二月十六日吉彌侯部豐野云々〕

申〔一本甲に作る〕能

從五位下御方大野之後也續日本紀合

葛城朝臣

○懷風藻從五位下出雲介吉智首○文武紀曰四年八月乙丑勅僧通德惠俊竝還俗代度各一人云々賜二惠俊姓吉名宜一授二務廣肆一爲レ用二其藝一也○懷風藻曰正五位下內藥正吉田連宜〕男從五位下知須等家二居奈良京田村里河一〔一本間に作る〕仍天璽國押開豐櫻彥天皇〔謚聖武〕神龜元年賜二吉田連姓一〔吉本姓田取二居地名一也〕二今上弘仁二年改賜二宿禰姓一也續日本紀合

凡〔異本丸に作る〕部〔按に丸邇部か〕

和安部同祖彥姥津命男伊富都久命之後

丈部〔按に光孝仁和三年七月十七日戊子左京人右大史正六位上丈部谷直忠直式部少錄正六位上丈部谷直永世男女合九人賜二姓春淵朝臣一忠直自言大日本根彥國牽天皇之後與二阿倍朝臣一同祖也今檢二姓氏錄一安倍朝天之別無二丈部谷直一但後漢孝靈皇帝後坂上大宿禰等之氏族有二姓丈部谷直者一也成信按檢二姓氏錄一不レ見二丈部谷直一右京諸蕃有二谷宿禰一山城諸蕃有二谷直一〕

天足彥國押人命孫比古〔異本古に作る〕意祁豆命〔按に姥津命なり〕後也

下毛野朝臣

崇神天皇皇子豐城入彥命之後也〔按に古事記豐木入日子命者上毛野下毛野君等之祖也〕

上毛野朝臣

下毛野朝臣同祖豐城入彥五世孫多奇波世君〔按に日本紀仁德紀竹葉瀨に作る〕之後也大泊瀨幼武天皇謚雄略〔謚以下一本細字に書す〕御世努賀君男百尊〔日本紀伯孫に作る〕爲二阿女彥一向二〔按に一本爲より以下の五字なく聞二女產レ兒往賀の六字有〕聟家一犯レ夜而歸於二應神天皇御陵邊一逢二騎レ馬人一相共語話換レ馬而別明日看二所レ換馬一是土馬也因負二姓陵邊君一百尊男德尊孫斯羅謚皇極御世賜二河內山下田一以解二文書一爲二田邊史一〔寶字〕○〔寶字の字一本本文に書す〕稱德孝謙皇帝天平勝寶二年改賜二上毛野公一〔天武十三年十一月戊申朔賜レ姓曰朝臣〕今上弘仁元年改賜二朝臣姓一續日本紀合

池田朝臣

上毛野朝臣同祖豐城入彥命十世孫佐太公之後〔天武十三年十一月曰二朝臣一

住吉朝臣

小野村一因以爲レ氏〔按に仁明承和元二月辛丑小野氏神社〕日本紀合

和安部朝臣

大春日朝臣同祖彦姥津命三世孫難波宿禰之後也〔成信按仁德紀有和珥臣祖難波根子武振熊蓋是乎〕續日本紀合

和爾部宿禰〔按に高野紀天平神護元年七月甲辰左京人甲斐員外目丸部（按に邇の誤か）臣宗人等二人賜二姓宿禰一〇孝照紀天足彦國押人命此和珥臣等始祖也〇舊事記曰天足彦國押人命大春日臣等祖開化紀曰和珥臣遠祖姥津命〇古事記曰丸邇臣之祖日子國意祁都命〕

和安部朝臣同祖彦姥津命四世孫矢田宿禰之後也續日本紀合

櫟井臣〔按に古事記曰天押帶日子命者壹比韋臣等之祖也〇天武十三年十一月戊申曰二朝臣一〕

和安部同祖彦姥津命五世孫米餅舂大使主命之後也

和安部臣

和安部朝臣同祖彦姥津命五世之孫也

葉栗臣〔按に古事記曰天押帶日子命者羽栗臣等之祖也〇光仁紀曰寶龜七年八月丙辰朔癸亥山背國乙訓郡人外從五位下羽栗翼賜二姓臣一〇類史百八十七曰延曆十七年五月丙午正五位下羽栗臣翼卒云々〕

和安部朝臣同祖彦姥津命三世孫建穴〔異本安に作る〕命之後也

吉田連

大春日朝臣同祖觀松彦香殖稻天皇〔諡孝昭〕皇子天帶彦國押人命四世孫彦國葺命〔按に崇神紀和珥臣遠祖彦國葺古事記丸邇臣之祖〕之後也昔磯城瑞籬宮御宇御間城入彦天皇御代任那國奏曰臣國東北有二三巳汶地一上巳汶中巳汶下巳汶〔上より以下九字一本細注〕地方三百里土地民亦富饒與二新羅國一相爭彼此不レ能二攝治一兵戈相尋民不レ聊レ生臣請將軍令レ治二此地一卽爲二貴國之部一也天皇大悅勅二群卿一令レ奏二應レ遣之人一卿等奏曰彦國葺命孫鹽乘津彦命頭上有レ贅三岐如二松樹一〔因號松樹君〕其長五寸〔異本尺に作る〕力過二衆人一性亦勇悍也天皇令二鹽乘津彦命遣一奉レ勅而鎭二守彼俗一稱レ宰爲レ吉故謂二其苗裔之姓一爲二吉氏一〔聖武紀曰神龜元年五月辛未從五位上吉宜從五位下吉智首竝賜二姓吉田連一

改槻本賜坂田宿禰今上弘仁四年同奈氏麿等改賜朝臣姓也〔按に日本紀略弘仁九年二月乙卯朔戊午散位從四位下坂田朝臣奈氏麻呂卒○公卿補任曰弘仁十四年十二月辛巳朔乙未坂田朝臣弘貞永河等改姓賜南淵朝臣○文德天安元年十月丙子南淵朝臣永河卒〕

間人宿禰〔天武十三年十二月己卯間人連賜姓曰宿禰○神別左京亦有間人宿禰○仲哀紀曰聚來熊田造祖大酒主之女弟媛生子譽屋別皇子〕

仲哀天皇皇子譽屋別之後也

新田部朝臣〔天武十三年十二月己卯新田部連賜姓曰宿禰〕

安寧天皇皇子磯津彦命之後也日本紀合〔按に舊事記曰磯城津彦命猪使連等祖新田部等祖〕

右第二卷

左京皇別下

起大春日朝臣盡鴨縣主三十二氏

大春日朝臣

出自孝照天皇皇子天帶彦國押〔異本押國につくる〕人命也〔按に舊事記天足彦國押人命大春日丸等〔按に丸邇か〕祖〕件臣令家重千金委積爲堵于時大鷦鷯天皇〔謚仁德〕臨幸其家詔號糟垣臣後改爲春日臣桓武天皇延曆二十年賜大春日朝臣姓〔按に桓武以下の十六字疑へし○天武十三年十一月戊申大春日臣曰朝臣元明和銅二正月丙寅大春日朝臣赤兄元正養老七正月丙子大春日朝臣家主聖武神龜元二月壬子大春日朝臣果安高野神護景雲元年正月庚午大春日朝臣五百世桓武延曆三正月己卯大春日朝臣諸公八年正月己酉大春日朝臣清足○文德齊衡三年八月丁酉大學博士兼越中權守從五位上春日朝臣○清和貞觀四年七月廿八日乙未左京人從四位下行參河介壹志宿禰吉野賜姓大春日朝臣天足彦國押人命之後也〕

小野朝臣〔按に古事記曰天押帶日子命者小野等之祖也〕

大春日朝臣同祖彦姥津命〔按に開化紀和珥臣遠祖姥津命〕五世孫米餅搗大使主命之後也大德小野臣妹子〔按に推古十五年七月庚戌遣於大唐十六年四月至自大唐曰蘇因高成信按紹運錄妹子爲敏達之孫春日皇子之子蓋誤〕家于近江國滋賀郡

利）時御友別（信友按吉備臣祖）參赴レ之〕

吉備朝臣同祖稚武彦命之孫吉備武彦命之後也

道守(チモリ)朝臣〔按に舊事記云開化天皇皇子武歯頬命道守臣等祖云々○古事記建豐波豆羅和氣王者道守臣云云〕

開化天皇皇子武豐葉列(トヨハワ)〔異本頬につくる〕別命之後也

御使(ミツカヒノ)朝臣

出レ自二諡景行皇子氣入彦命之後一也〔成信按氣入彦不レ載二日本紀一舊事記景行紀有五十狹城彦皇子舊事記作二五十狹城入彦一爲二參河長谷部直祖一疑是乎○舊事記曰佐伯命參川御使連等祖○按日本武尊子也〕譽田天皇御世御〔異本御の字なし〕室雜使大王生等逋逃不レ仕天皇遣レ使尋求並不二復命一於レ是氣入彦奉レ詔括〔異本拈に作る〕追二於參河國一捕獲參來天皇嘉合二使者一〔異本旨に作る〕賜二姓御使連一也續〔異本續字なし〕日本紀合〔按に日本紀に御使君續日本紀には御使朝臣とみえたり〕

犬上(イヌカミノ)朝臣〔天武十三年十一月犬上君曰二朝臣一〕

出レ自二諡景行皇子日本武尊一也〔按に景行紀日本武尊娶二兩道入姫皇女一爲レ妃生二稻依別王一是犬上君武部君凡二族之始祖也

坂上宿禰

息長眞人同祖應神皇子稚渟毛二派王之後也天渟中原瀛(チキノ)眞人天皇〔諡天武〕御世出家入道法名信正娶二近江國人槻(ツキ)本公轉戸女一生二男石村一附二母氏姓一曰二〔異本冒に作る〕槻本公一男外從五位下老〔按に光仁寶龜九年正月癸亥外從五位三月丙辰爲二右兵衞佐一〕男〔異本右に作る〕從五位上奈氏麻呂次從五位下豐成次豐人等皇統彌照天皇〔諡桓武〕延曆二十二年賜二宿禰姓一〔按に類聚國史七十九延曆二十二年春正月癸丑朔壬戌外從五位下槻本公奈氏麻呂授二從五位上一弟正七位上豐人豐成從五位下並賜二姓宿禰一奈氏麻呂父故右兵衞佐外從五位下老天宗高紹天皇之舊臣也初庶人居二東宮一暴虐尤甚與帝不レ穆遇之無レ禮老竭レ心奉レ帝陰有二輔翼之志一庶人及母廢后聞二老爲レ帝所レ昵甚怒喚之切責者數矣及三后有二巫蠱之事一老按二檢其獄一多發二奸狀一以レ此母子共廢（此下異本故の字あり）社稷以寧帝追思二其情故有二此授一〕於レ是追二陳父志一取二祖父生長之地名一

日本紀合

雀部朝臣

巨勢朝臣同祖〔家牒以二巨勢小鞆〔當作柄〕宿禰一爲二雀部朝臣之祖一〕建內宿禰之後也星河建彥宿禰諡應神御世代二於皇太子大鷦鷯尊一繫二木綿襷一掌レ監二御膳一因賜レ名曰二大雀臣一日本紀合

生江臣

石川朝臣同祖〔按に古事記葛城長江曾都毗古者生江臣等之祖〕武內宿禰之後也日本紀合〔異本漏に作る〕

布師首

生江臣同祖武內宿禰之後也

箭口朝臣

宗我石川宿禰四世孫稻目宿禰之後也

多朝臣

出レ自二謚神武皇子〔按に綏靖紀多臣之始祖也舊事記意保臣古事記意富臣〕神八井耳命之後一也日本紀合

小子部宿禰

多朝臣同祖神八井耳命之後也大伯瀨幼武天皇御世〔雄略六年三月丁亥命二蜾蠃一〕所レ遣二諸國一收二歛蠶兒一誤聚二小兒一貢レ之天皇大哂賜二姓小兒部連一日本紀合

吉備宿禰〔按に孝靈紀曰妃倭國香媛〔亦名絚某姊〕生二倭迹迹日百襲姬命彥五十狹芹命〔亦名吉備津彥命〕倭迹迹稚屋姬命一亦妃絚某弟生二彥狹島命稚武彥命一是吉備臣之始祖也〇舊事記曰彥五十狹芹彥命亦名吉備津命吉備臣等祖〇古事記曰大吉備津日子命與二若日子建吉備津日子命一二柱一相副而於二針間氷河之前一居二忌瓮一而針間爲二道口一以言向和二吉備國一也故此大吉備津日子命者吉備上道臣之祖也次若日子建吉備津日子命者吉備上道臣笠臣祖〕

大日本根子彥太瓊天皇皇子稚武彥命〔孝靈紀吉備臣之始祖也〕之後也

下道朝臣〔按に景行紀四十年七月戊戌天皇則命三吉備武彥與二大伴武日連金一從二日本武尊一〇古事記曰副二吉備臣等之祖名御鉏友耳建日子一而遣レ之〇應神紀二十二年九月庚寅移二居於葉田〔和名抄備前國上道郡幡多〕葦守宮一〔備中國賀夜郡足守、安之毛

七日癸巳石川朝臣木村云々〕

孝元天皇皇子彦太忍信命之後也日本紀合〔按に孝元紀彦太忍信命屋主忍男武雄心命武內○古事記比古布都押之信命子建內〕

田口朝臣

石川朝臣同祖武內宿禰大臣之後也蝙蝠臣豐御食炊屋姬天皇諡推古御世家ニ於大和國高市郡田口村ニ仍號ニ田口臣ニ日本紀漏

櫻井朝臣

石川朝臣同祖蘇我石川宿禰四世孫稻目宿禰大臣〔按に宣化元年二月爲ニ大臣ニ欽明三十一年三月薨〕之後也日本紀合

紀朝臣〔按に仁明承和元年八月庚子賜ニ紀伊國人從七位下紀臣國奈須等五人朝臣姓ニ○九年三月丙申朔癸卯右京人侍醫外從五位下紀臣國守弟從八位上同姓魚守等三人改ニ臣字ニ賜ニ朝臣ニ○十一年八月辛巳朔乙未紀伊國名草郡人右兵衞從六位下紀堤臣淸繼賜ニ姓紀朝臣ニ○嘉祥二年夏四月甲申朔辛亥大和國添上郡人從七位下紀朝臣核繼正六位下紀朝臣核主太宰帥親王家令文學從七位下紀朝臣核吉越中博士從七位下紀朝臣生永從八位下紀朝臣實等改ニ本居ニ貫ニ附左京六條一房ニ○陽成元慶元年十二月廿五日辛卯右京人從五位下行織部正紀臣開雄賜ニ姓朝臣ニ其先紀角宿禰之苗裔也○天武十三年十一月戊申紀臣賜レ姓曰ニ朝臣ニ○舊事記彦太忍信命紀臣等祖〕

石川朝臣同祖建內宿禰男紀〔按に古事記木臣〕角宿禰之後也

角朝臣〔按に雄略紀九年小鹿火宿禰從ニ紀（紀氏家牒紀白城宿禰男）小弓宿禰喪ニ來〕

紀朝臣同祖紀角宿禰之後也日本紀合

坂本朝臣

紀朝臣同祖紀角宿禰男白城宿禰之後也

林朝臣〔按に類聚國史六十六曰天長九年秋七月戊午從四位下林朝臣山主卒云々性平直無ニ愛憎ニ家之舊臣國之元老其先別レ自ニ八多朝臣之氏ニ十年有レ勅追除ニ名字ニ卒時年八十四〕

石川朝臣同祖武內宿禰之後也日本紀合

道守朝臣〔成信按蓋波多朝臣乎〕

波多〔波多按に林か〕朝臣同祖波多矢代宿禰之後也

入しものなるへし下同〕
完人朝臣〔按に古事記曰大毗古命之子建沼河別命者阿倍臣等之祖次比古伊那許志別命此者膳臣之祖也〇天武紀十年四月庚戌完人造老云々賜姓曰連〇十三年十一月戊戌朔完人臣云々賜姓曰朝臣〕
阿部朝臣同大彥命男彥背立大稻腰命之後也日本紀合
高橋朝臣〔按に天武十三年十一月曰朝臣〕
阿部朝臣同祖大稻輿命之後也景行天皇巡狩東國供獻大蛤于時天皇善其奇美賜姓膳臣天〔印本大に作誤なり〕渟中原〔一本瀛の字あり〕眞人諡天武〔三字一本細字に書す〕十二年改膳臣賜高橋朝臣
許曾倍朝臣〔按に孝德紀阿倍渠曾倍臣〇天武紀上社戸臣大口〕
阿部朝臣同祖大彥命之後也日本紀漏
阿閉臣
阿倍朝臣同祖〔按に孝元紀曰大彥命是阿倍臣阿閉臣凡七族始祖也〕
竹田臣
阿倍朝臣同祖大彥命之男武渟川別命之後也
名張
阿倍朝臣同祖大彥命之後也
佐佐木山公〔按に孝元紀狹狹城山君〕
阿倍朝臣同祖
膳大大伴部〔按に古事記比古伊那許志別命此者膳臣之祖也〇天武十三年十一月戊申膳臣曰朝臣〕
阿倍朝臣同祖大彥命孫磐鹿〔異本麻に作る〕六雁命之後也景行天皇巡狩東國至上總國從海路渡淡水門出〔按に於の誤りか〕海中得白蛤於是磐鹿〔同上〕六雁爲膳進之故美六雁賜膳大伴部
阿倍志斐連
大彥命八世孫稚子臣之後也自孫臣八世孫名代諡天武御世獻之楊花勅曰何花哉名代奏曰辛夷花也群臣奏曰是楊花也名代猶强奏辛夷花因賜阿倍志斐連姓也日本紀漏
石川朝臣〔按に古事記比古布都押之信命娶木國造之祖宇豆比古之妹山下影日賣生子建内宿禰此宿禰之子有蘇賀石河宿禰〇陽成元慶元年十二月廿

上五百枝王上表請賜ニ春原朝臣姓一勅許之

天智天皇皇子〔按に懷風藻云皇子者淡海帝之第二子也云々位終于淨大參時年三十五〕淨廣〔按に大なるへし〕壹〔按に參なるへし〕河島王之後也

三原朝臣

天武天皇皇子一品新田部王之後也

永原朝臣

同天皇皇子淨廣壹高市王之後也續日本紀合

橘朝臣〔按に孝謙天平勝寶二正月乙巳左大臣正一位橘宿禰諸兄賜ニ朝臣姓一〕

甘南備眞人同祖敏達天皇難波皇子男贈從二位栗隈王男治部卿從四位下美努王〔按に天武紀二年十二月戊戌美濃王持統紀八年九月癸卯三野王文武紀大寶元十一月丙子彌努王大寶二年正月乙酉美努王慶雲二八月戊午元明和銅元三月丙午五月辛酉美努王卒〕美努〔努の下異本王の字あり〕娶下從四位下縣犬養宿禰東人女正一位縣犬養橘宿禰三千代〔按に元正紀養老元正月戊申縣犬養宿禰三千代〇成信按に三千代初嫁ニ于美努王一而離別後適ニ不比等一生ニ光明皇后一橘諸兄異父之子也〕太夫人上生ニ左大臣諸兄中宮大夫佐爲宿禰贈從二位牟漏女王女王適ニ贈太政大臣藤原房前一〔按に不比等之子〕生ニ〔按に此下贈字入へきか〕太政大臣永平〔按に手字か〇靈龜二年二月己酉薨〕大納言眞楯等一〔天平神護二年三月薨〕和銅元年十一月己卯大嘗會二十五日癸未曲宴賜ニ橘宿禰姓於大夫人一〔按に是と國史に見えす〕天平八年十二月〔按に聖武紀十一月丙戌と有〕丙子〔異本に十一月十九日甲午とあり又異本に十一月朔共あり〕詔ニ參議從三位行左大辨葛城王一賜ニ橘宿禰一諸兄〔按に萬葉六賜ニ姓〔此は衍字也〕橘氏一之時御製一首あり〕初名號ニ葛城王一云々〔異本初名以下の六字なくして橘諸兄始名葛城王の八字あり〕

淡海朝臣

春原朝臣同祖河島親王之後也

阿部朝臣〔按に垂仁紀阿部臣遠祖武淳川別〕

孝元天皇皇子大彥命之後也日本紀合〔合の上和學所本續日本紀の四字あり〕

布勢朝臣〔按に布勢朝臣御主人見ニ于天武紀持統紀文武紀一〇持統紀相模國司布勢朝臣色布智〕

阿部朝臣同祖日本紀漏〔按に日本紀漏の文後人書

本紀合也
攝津國皇別
爲奈眞人
宣化皇子火焰王之後也續日本紀合也
右第一卷
左京皇別上
起源朝臣盡新田部宿禰四（印本三につくる誤なり）十二氏
源朝臣
源朝臣信年六（腹廣井氏）弟源朝臣弘年四（腹上毛野氏）弟源朝臣常年四弟源朝臣明年二（已上二人腹飯高氏）妹源朝臣貞姫年六（腹布勢氏）妹源朝臣潔姫年六妹源朝臣全姫年四（已上二人當麻氏）妹源朝臣善姫年二（腹百濟氏）信等八人是今上親王也而依弘仁五年五月八日勅賜氏姓貫於左京一條坊即以信爲戸（異本戸に作る）主
良岑朝臣（文男曰良岑は姓朝臣は姓也）
從四位下良岑朝臣安世是皇統（按に公卿補任曰弘仁六年秋七月壬午從四位下良峯朝臣安世任左京大夫更改貫左京○又曰淳和天皇天長七年秋七月戊寅大納言正三位良峯朝臣安世薨皇統彌照天皇皇子母女孺從七位下百濟宿禰永繼所生焉云々）彌照天皇謚桓武（謚桓武の三字一本細字に書す）御宇（按に子なるへし）繼爲（按にこの下女字入へきか）嬬而供奉所生也延暦二十一年十二月二十七日特賜氏姓良峯朝臣貫於左京
長岡朝臣
正六位上長岡朝臣岡成是皇統彌照天皇謚桓武（謚桓武の三字一本細字に書す）之御東宮也多治比眞人豐繼爲（按に此下女の字あるへし）嬬而供奉所生也延暦六年特賜氏姓長岡朝臣貫於左京
續日本紀合
廣根朝臣
正六位上廣根朝臣諸勝是光仁天皇龍潛（異本滯につくる）之時女孺從五位下縣犬養宿禰勇耳（按に光仁天應元正月庚午授女孺無位縣犬養宿禰勇耳從五位下）侍御而所生也桓武天皇延暦六年特賜廣根朝臣續日本紀合
春原朝臣（按に公卿補任延暦廿五年五月己卯從四位

日本紀合

右京皇別〔一本自二右京皇別一至二大和國酒人眞人一十三氏無之〕

山道眞人

息長眞人同祖應神皇子稚渟毛二服親王之後也

息長丹生眞人

息長眞人同祖

三國眞人

謚繼體皇子椀子王之後也日本紀合也

坂田眞人

出レ自二謚繼體皇子仲王之後一也日本紀合也〔按に繼體紀曰中皇子是坂田公之先也天武十三年十月己卯坂田公賜レ姓曰二眞人一〕

多治眞人〔按に仁明紀天長十年夏四月庚午丹墀眞人〇清和貞觀八年二月廿一日丁卯多治眞人〕

宣化天皇皇子賀美惠波王之後也〔按に宣化紀上殖葉皇子亦名椀子是丹比公偉那公凡二姓之先也〕

爲名眞人〔按に舊事記曰上殖葉皇子亦名椀子丹比椎田君祖次火焰皇子偉那君祖〇古事記曰火穗王者志比陀君之祖惠波王者偉那君多治比君之祖也〕

同天皇皇子火焰王之後也日本紀合也

春日眞人

敏達天皇皇子春日王之後也

高額眞人

春日眞人同祖春日親王之後也

當麻眞人

用明皇子麻呂古王〔古事記當麻王に作る〕之後也日本紀合也

文室眞人

天武天皇皇子二品長屋王〔按に天武紀長皇子に作る〇元明紀靈龜元年六月甲寅長親王薨〕之後也續日本紀合也

豐野眞人

同天皇皇子淨廣壹高市王之後也續日本紀合也

山城國皇別

三國眞人

繼體皇子椀子王之後也日本紀合也

大和國皇別

酒人眞人

繼體皇子兎王之後也〔按に繼體紀兎皇子に作る〕日

池上眞人〔孝謙天平寶字二年二月辛亥左大舍人廣野王賜ニ池上眞人姓一〕

海上眞人

大原眞人同祖

大原眞人同祖依ニ續日本紀一附

清原眞人〔成信按天武天皇之後有下賜ニ清原眞人姓一者上不レ可レ混〕

桑田眞人同祖百濟親王後也

香山眞人

出レ自ニ諡敏達皇子春日王一也

登美眞人

出レ自ニ諡用明皇子春〔異本來につくる〕目王ニ〔用明紀來目皇子古事記久米王〕也續日本紀合

蜷淵眞人

出レ自ニ諡用明皇子殖栗王一也

三島眞人

出レ自ニ諡舒明皇子賀陽王一也續日本紀合

淡海眞人〔按に孝謙天平勝寶三年正月辛亥賜ニ無位御船王淡海眞人姓一桓武紀延暦四年七月庚戌三船卒大友親王之曾孫也〕

出レ自ニ諡天智皇子大友末ニ〔一本續日本紀合の五字あり〕

三園眞人

出レ自ニ諡天武皇子淨廣磯城親王〔按に天武紀朱鳥元八月己巳朔癸未芝基皇子磯城皇子各加ニ封二百戸一〕之後一也成信云天智紀云道君伊羅都賣生ニ施基皇子者一是爲ニ田原天皇一不レ可レ混焉〕

笠原眞人

三國眞人同祖磯城親王之後也

高階眞人

出レ自ニ諡天武皇子淨廣壹太政大臣高市王一也續日本紀合

氷上眞人

出レ自ニ諡天武皇子一品大總管新田部王一也續日本紀合〔按に淡路天平寶字二年八月庚子氷上眞人鹽燒成信按鹽燒王者新田部親王子也道祖王兄也國史不レ載下賜ニ氷上眞人氏姓一之年月上也蓋因ニ祖氷上娘之名一以爲ニ之姓一乎〕

岡眞人

出レ自ニ諡天武皇子一品贈太政大臣舍人親王一也續

人二〕
出レ自二謚應神皇子稚野毛二俣王一也日本紀合也〔古事記曰若野毛二股王子意富杼王波多君祖仁明紀承和四年五月己巳人多眞人清雄言云々〕
三國眞人〔天武十三年冬十月己卯朔三國公眞人○繼體紀曰椀子皇子是三國公之先也〕
謚繼體皇子椀子〔古事記丸高王〕王之後也依二日本紀一附〔舊事記曰稚沼筒二股皇子命三國君等祖古事記曰若野毛二股王子意富杼王者三國君等之祖也成信云此錄云依二日本紀一附者可レ看〕
路眞人〔天武十三年十月己卯路公賜レ姓曰二眞人一〕
出レ自二謚敏達皇子難波王一日本紀合
守山眞人〔天武十三年十月守山君眞人〕
路眞人同祖難波親王之後也日本紀合
甘南備眞人〔聖武天平十二年九月己丑從五位下神前王賜二氏姓甘南（文男曰コレ氏）備眞人（文男曰コレ姓ナリ以下略之）○淡路天平寶字五年十月壬子甘南備眞人伊香〕
路眞人同祖續日本紀合〔同の下祖の字元脫 一本によりて補ふ〕

飛多眞人
路眞人同祖
英多眞人
路眞人同祖
大宅眞人
路眞人同祖依二續日本紀一刊定
大原眞人
出レ自二謚敏達孫百濟王一也續日本紀合
島根眞人
大原眞人同祖百濟親王之後也
豐國眞人〔孝謙天平勝寶七年四月丁未從五位下丘基眞人（見二于六年閏十月庚戌下一）秋篠等二十一人更賜二豐國眞人姓一〕
大原眞人同祖續日本紀合
山於眞人
大原眞人同祖
吉野眞人
大原眞人同祖
桑田眞人
大原眞人同祖

或載本系而（而字和學所本に據て補ふ）漏古記書曰同祖之後宗氏古記雖云遺漏而立祖不謬但（異本祖につくる）事渉狐疑書曰之後所以辨遠近示親疎是爲三例世夫寸璞尺木尙有瑕節況乎後生叵知前世故祖次相變世數頗誤則不爲大失（印本夫に作和學所本に據て正す）討論而載成眞人是皇別之上氏也幷集京畿以爲一卷附皇別首未定是諸氏之末明也惣爲一卷附諸蕃尾又有諸姓漏本系而載古記則抄古記以寫附本系之與古記違則據古記以删定今按之中證引古記則雖文駮而不必改所以存其文取辭達也京畿之氏大體牢籠諸國之氏或不必入京畿臣等奉勅謹加研精捃摭群言沙汰金礫截舊記之煩蕪採會新之機要除新系之塗說撮通古之折中思所以令文約辭易冷然示掌煥乎指南起自神武迄乎弘仁温故知新能事粗畢凡一千一百八十二氏惣爲三十卷勒（印本勒に作和學所本に據て正す）成三部名曰新撰姓氏錄雖非韋編耽樂之義（和氣所本氣につくる）玉板翫好之文抑亦（異本是につくる）人倫之樞機國家之檃括也唯京畿未進幷諸國且進等類一時難盡闕而不究其諸姓目列於別卷云爾

新撰姓氏錄（錄下一本及和學所本抄字あり）

第一帙

左京皇別

起自左京息長眞人盡攝津國爲奈眞人三十三氏〔按に四十四氏なるへし〕

息長（オキナカノ）眞人

出自譽（ホンタ）田天皇諡應神〔三字分注なるへし〕皇子稚（ワカ）渟（ヌ）毛（ケ）〔應神紀云河派仲彥女弟姫生稚野毛二派皇子〕二俣（フタマタ）王之後也〔國造本紀曰竺志末多國造（成信按筑前國夜須郡下座郡共有馬田和名抄曰無萬多）志賀高穴穗朝臣長公同祖成務天皇與稚沼毛二股命不合未詳〕

山道（ヤムチノ）眞人

息長眞人同祖稚渟毛二俣親王之後也日本紀合也〔按に日本紀合也の文後人書入しものなるへし下同〕

坂田（サカタ）酒人（サカウドノ）眞人〔成信考國史未見坂田酒人眞人姓盍坂田眞人酒人眞人二氏誤混乎〕

息長眞人同祖

八（ヤ）多（タ）眞人〔天武十三年十月己卯朔羽田公賜姓曰眞

夏東征之年人物漸滋梟師（和學所本帥に作る）間起洎乎神劍下授靈烏于飛歸首星陳（印本陣に作和學所本に據て正す）群凶霧散膺受明命光宅中州泰階平齊海內淸謐既而謹德考功昨（按に祚の誤なるへし）土命氏國造縣主始號於斯垂仁撫運惠澤彌新擧措得中姓氏稍分況復任那嚮（異本和學所本欽につくる）風新羅歸寶（タカラ）爾來諸蕃仰德無思不來懷遠賜姓是時著明允恭御宇萬姓紛紜時下詔旨盟神探湯（文彙之訓）首實者冒全虛者害自茲厥後（和學所本氏姓自定更無詐人と云八字あり一本此八字自茲下厥後上にあり）涇渭別流皇極握鏡國記皆燔幼弱迷其根源狡強倍其僞說天智天皇儲宮也船史惠尺（印本天に作和學所本に據て正す）奉進燼書至庚午年編造戶籍人民氏骨各得其宜自茲以降歷代帝王隨時改正聯綿不絕勝寶年中時（按に特か）有恩旨聽許諸蕃任願賜之遂使前姓後姓文字斯同蕃俗和俗氏族相疑萬方庶氏（異本民につくる）陳高貴之枝葉三韓蕃賓稱日本之（文字和學所本に據て補ふ）神胤時移人易罕知而言實字之末其爭猶繁仍聚名儒撰氏族志抄案弗半逢時有難諸儒解體輟而不興皇統彌照聖明生而叡哲自體性仁威被日出之崖德光月腦之域停烽廢關（印本開に作和學所本に據て正す）文軌爲一慮周品物思切正名廼降絲（絲字和學所本に據て補ふ）綸撰勘本系細帙未畢鳳輿登遐天朝至明紹脩前業至聖（印本聖字なし和學所本に據て補ふ）承聖垂脊後謀（印本課に作和學所本に據て正す）爰勅中務卿四品（按に臣字あるへきか）萬多親王右大臣從二位兼行皇太（印本大に作和學所本に據て正す）弟傅臣藤原朝臣園人參議正四位下右衛門督兼近江守臣藤原朝臣緒嗣正五位下行陰陽頭臣阿倍朝臣眞勝（正五位以下和學所本に據て補ふ）從五位上行尾張守臣三原朝臣弟平從五位上行大外記兼因幡介臣上毛野朝臣穎人等追慕前志推弘此文開書府之秘藏尋諸氏之苑丘（異本芸拉につくる）臣等歷探古記博觀舊史文駮辭蹐音訓組雜會釋一事還作楯矛搆合兩說則有牴牾新進本系多違故實或錯綜兩氏混爲一祖或不知源流倒錯祖次或迷失己祖過入他氏或巧入他氏以爲己祖新古煩亂不易芟（印本華に作和學所本に據て正す）夷彼此謬錯不可勝數是以雖欲成之不日而猶十歲於茲京畿本系未進過半今依見進（頭書云進他本無之）以類詮夫（異本矣につくる）本其元生則有三體跡其群分則有三例天神地祇之胄（印本曾に作和學所本に據て正す）謂之神別（有三體以下和學所本に據て補ふ）天皇皇子之派謂之皇別大漢三韓之族謂之諸蕃所以別同異序前後是爲三體也枝別之宗特立之祖書曰出自或古記本系並錄而載或載古記而漏本系

古今要覽稿卷第二十一

●姓氏部（姓氏錄校正一）

●新撰姓氏錄上之本

上二新撰姓氏錄一表

臣萬多等言臣聞陰陽定レ位裁二萬物一以先二人倫一叡聖正レ名叶二五音一而甄二姓氏一是以因レ生之本自遠昨（ムクフ）（按に祚の誤なるへし）レ土之基增崇治二（和學所本沿につくる）帝道一而汗隆襲二王風一而興替者也伏惟國家降二天孫一而創レ業橫二地軸一以開レ邦一統架レ宗環二八洲一以御レ宇辨二五運一無レ代跨二億載一而期レ圖高門接レ軫甲姓聯レ衡枝葉寔繁派流彌衆既而德廣所レ覃占（異本者につくる）雲靡レ輟情願二編戶一（按に戶か）星陣相尋或撰二（異本擬につくる）丘陵一而挺レ峻或飛二軒蓋一以騰レ華又有下僞レ會冒レ祖妄認二膏腴一證レ神引レ皇虛託中藪冕上先朝鑒二其假濫一留二慮根源一昧旦臨レ軒仄景忘レ膳今臣等謹奉二綸言一追二遂前旨一徒對二（異本勤につくる）三絕一空淹二四時一矧夫才非二博物一識謝二通瞻一何以溫二知本枝一抑二揚緒聞一（異本閱につくる和學所本閱につくる）然書府舊文見進新系讐校合レ之則總以入レ錄其未レ詳者則集爲二別卷一年肇二神武一人兼二倭漢一凡一千一百八十二氏幷レ目三十一卷名二新撰姓氏錄一譬窺レ井談レ星取レ蠡議レ海恐二綜覈疏訛撰緝謬違一謹詣レ闕奉進伏增二谷水一（異本氷につくる）謹白（異本言につくる）

弘仁六年七月二十日

中務卿四品萬多（印本多の下等の字あり和學所本に據りて刪る）親王

右大臣從二位兼行皇太弟傅（印本傅字なし和學所本に據りて補ふ）勳五等臣藤原朝臣（印本朝臣二字なし一及和學所本に據て補ふ）園人

參議從三位行宮內卿兼近江守臣（印本臣字なし和學所本に據て補ふ）藤原朝臣緒嗣

正五位下行造東太（異本大字なし）寺長官臣（印本臣字なし和學所本に據て補ふ）阿部（アヘ）（異本和學所本倍につくる）朝臣眞勝

從五位上行尾張守臣三原朝臣弟平

從五位上行大外記兼因幡介臣上（異本上字なし）毛野朝臣頴（異本款につくる）人（異本以につくる）等上表（異本表字なし）

新撰姓氏錄序

此者第一卷之序也不レ載二於官書目錄一而載二此卷一又抄二姓氏錄文一註二於此卷一是皆爲レ備二指掌一私所レ爲（印本此三字なし異本に據て補ふ）也（或云此文後人抄二姓氏錄一者之所レ書也）

蓋聞天孫降二襲西化一之時神世伊開書記靡レ傳神武臨

田樂條

釘つけに𛀙たるさしきの倒るゝは
かち井の宮の不覺也けり

按梶井に鍛冶をいひかけたり

同書卷卅五
他　畠山

南方蜂起條

御敵のたねをまきおく畠山
うち返すへき世とは𛀙らすや

何ほとのまめをまきてか畠山
日本國をはみそになすらむ

同書同卷
他　湯川(ユカハ)

同條

宮方の鴨頭になりし湯の川は
みやこに入て何の香もせす

他
高橋(タカハシ)
小早川(コハヤカハ)
隅田(スタ)
笠置軍の條落書うた
木津川のせゝのいは浪早けれは
かけてほとなくおつる高橋
かけもえぬ高橋おちてゆく水に
うき名をなかす小早川かな
同書卷六
わたなへの水いかはかり早けれは
高橋おちて隅田なる覧
同書卷五
他　大塔宮(タイタフノミヤ)
大塔宮熊野落條
大般若のひつの中をよく〳〵さかしたれは大塔宮は
いらせ玉はて大唐の玄弉三藏こそおはしけれとたは
ふれけれは
按世に大塔宮をおほたふのみやと申すはあやまり
也しか申奉るへきよしもなき上にこゝに大唐と秀
句にいひかけたれは大塔と申奉るへき事しるしさ
て大般若は玄弉三藏の翻譯し玉へれはかくいへる
也
同書卷十五
他　新田(ニタ)
主上山門還幸條
二すちの中の白みをぬりかくし
新田新田しけな笠しるしかな
按似たく〳〵といひかけたり
同書卷十六
他　正成(マサシゲ)
正成首送故鄉條
うたかひも人によりてそ殘りける
まさしけなるは楠かくひ
同書卷十七
他　宇都宮
還幸供奉人々禁殺せらるゝ條
山からのさのみもとりをうつの宮
都にいりて出もやらねは
同書卷廿七
他　梶井宮

のくひをとりてそ入にける

源平盛衰記卷廿三

宗盛
平家(スケ)
權亮

平家ト書テハヒラヤトヨム家ノマロヒ倒レント
スルニハ助(スケ)ト云テ柱ノ代ニ大(ダイ)ナル木ヲ以テサヽ
ヘ直事(ナホス)アリ平家ノ大將軍ニ下(クダシ)給ヘル權亮少將落
ケレハ右大將宗盛ノ騷歎給フラント云ニソヘテ

ヒラマナルムチモリイカニ騷ラン
柱トタノムスケヲ落シテ　　讀人不知

同書卷卅一

年頃ノヒラヤヲ捨テ鳩ノハニ
ウキ身ヲ藏スイケルカヒナシ

同書同卷

自　忠清上總

又源氏推寄タレトモ敵モナシ富士川ノハタヲ見
レハ物具多捨タル中ニ忠清(上總五郎兵衛ナリ)ト銘書タル
鎧唐櫃一合アリ武者ノ具ヲハ既ニ捨ヌ今ハ遁世
シテ墨染ノ衣ヲキヨトモ讀タリ

富士川ニ鎧ハステツ墨ソメノ
衣タヽキヨノチノヨノタメ

又上總介トイヘハ其國ノ器ニヨソヘテモ讀タリ

忠清ハニケノ馬ニヤ乘ツラン
懸ヌニ落ルカツサシリカイ

同書卷四十一

那須與一　　讀人不知

扇ヲハ海ノモクツトナスノ殿
ユミノ上手ハ與一トソキク

同書卷四十六

他　義經(ヨシツネ)
行家(ユキイヘ)

義經行家出都條　何者カ讀タリケン義經カ宿所
堀川門ノ柱ニカク

ヨシツネハサテモトミツル世中ニ
イツクヘツレテユキイヘヲサハ

按縱常(ヨシツネ)はといひかけし也いつくへつれてゆくとい
ふへきを名にいひかけたれはゆきいへとかよはし
いへる也

太平記卷三

朽果ヌ其名計ハ有木ニテ身ハ墓ナクモナリチカノ卿

同書卷十五

自 省(ハブク)

播磨二郎源省我モ御伴申サントテ

君故ニ身ヲハハフクトセシカトモ

名ハ宇治川ニ流シヌル哉

同書卷十六

自 頼政(ヨリマサ)

鳥羽院御時ニ宇治川藤鞭桐火桶頼政ト四題ヲ下サセ給一首ニ隱シテ進ラセヨト勅定アリケルニ

宇治川ノセヽノ淵々落タキリ

ヒヲケサイカニヨリマサルラン

按此端詞いかゝ宇治川藤鞭火桶の四題を頼政によませ玉へる時みつからの名をもよみ入しなるへし頼政の名を題とて玉ふよしあらねはなり

按に頼政の名もよめと仰ありしにてもあるへし

同書卷卄

他 八牧(ヤマキ)　北條時政

法華經ノ序品ヲタニモシラヌ身ニ

ヤマキカ末ヲ見ルソ嬉シキ

諷誦ノ歌五歳小兒コレヲヨミトク

法華終開八巻心成佛身(ノリノハナツヒニヒラクルヤマキニハコヽロホトケノミトゾナリヌル)

按いつれも八卷に八牧の氏をそへたり

同書卷卄三

他 平氏(ヘイシ)

東國下向ノ討手ノ使空シク上(ノボ)リケル時太政入道殿ノ門ニ落書アリ奈良法師讀ケリ

富士川ノセヽノ岩越水ヨリモ

早クモ落ルイセ平氏カナ

按平氏に伊勢瓶子をいひかけたり

平家物語卷一卷鹿の谷の條

大納言けしきかはつてさつとたゝれけるか御前にたてられたりけるへいしを狩衣の袖にかけて引たふされたりけるを法皇えいらむ有てあれはいかにと仰けれは大納言立かへりてへいしたふれ候ぬと申されける法皇もゑつほに入せおはしましものともまゐりてさるかくつかまつれと仰られけれは平判官やすよりつと參つてあらあまりにへいしのおほく候にもてゑひ候と申す俊寛僧都さてそれをはいかゝ仕るへきやらん西光法師たゝくひをとるにはしかしとてへいし

治物語にも入たり

平治物語

俵藤太

義朝梟木の落書をみてある者の申けるは昔將門か首をこくもんにかけられけるを藤六左近とい

ふすきものかみて

將門は米かみよりそいられける

田原藤太かはかりことにて

同書

他　鎌田壹岐守　美濃　尾張

長田父子刑せらるゝとき落書うた

きらへともいのちはかりはいきのかみ

みのをはりをは今そたまはる

かりとりし鎌田かくひのむくひにや

かゝるうきめを今はみるらん

源平盛衰記卷一

他　清盛きよくさかゆる

清盛行大威德法條上略七箇年滿タルヨ道場ノ上

ニ聲アリテ云

ツトメント思フ心ノキヨモリハ

花ハ咲ツヽ枝モサカエン

同書卷廿六

忠盛入條熊野詫宣歌

夜泣ストタヽモリタテヨミトリ子ハ

清クサカユル事モコソアレ

同書同卷

自他　忠盛

同條殿上ニテ一人ノ女房ノ袖ヲヒカヘタル時ヨ

メル女房ノ歌ノカヘシニ

雲間ヨリタヽモリキヌル月ナレハ

オホロケニテハイハシトソ思フ

同書同卷連歌

薯蕷弦枝ニ懸リタル零餘子ヲ折テ進ラストテ

忠盛

這程ニイモカヌカコハナリニケリ

白川院打ウナツカセ御座シテ

タヽモリトリテヤシナヒニセヨ

按にもりとりとは今世にいふもきとりの古言也

同書卷十

他　成親

そのはらさへにうとましき哉
此僧此歌をみてあからさまに立出る樣にてなかく
うせにけりさすかにはちは有けるにこそ

同書卷十六

他　賴武(ヨリタケ)

隨身下野武守か娘を秦賴武むかへけるに中略此
賴武何事故に侍りけるやらん周防大夫判官秀國
に預け玉ひけるにかくなんよみ侍ける
風をいたみすはうの浦によりたけか
　　ゑやうあらんとてひちりきそふく

砂石集卷五

他　あやめ

故鎌倉ノ右大將家京ヨリアヤメトイフハシタモ
ノ、美人ナリケルヲ召下シテ隱シ置レケルヲ梶
原三郎兵衞所望シテミタリケレハ同齡ノ十七八
ハカリナル女房美女ノミモシラヌヲ十人裝束サ
セテナラヘスヱオキテ此中ニアヤメヲ見シリタ
ラハ可給ト仰ラレケレハ見ワキカタクテ
　　イツレアヤメトヒキソワツロフ
薦草(マコモ)アサカノ沼ニ茂リアヒテ
トイヒタリケル時アヤメカホヲアカメテ袖ヲヒ
キツクロヒケルヲ見テアレコソト申テヤカテ給
リケリ

按太平記卷廿一鹽冶判官讒死條上略眞如と覺一撿(ヘイ)
校と二人つれ平家をうたひけるに中略まことや賴
政藤壺のあやめに心をかけてたえぬ思ひにふし沈
むなる今夜の勸賞には此あやめを下さるへし下略
さみたれに澤邊のまこも水こえていつれあやめと
ひきそわつらふかくあれとも今平家物語ぬえの條
に此事なし砂石集の撰者無住法師は梶原景時の末
子にて三郎兵衞尉景茂か弟なれは兄の事をかける
にあやまりは有ましき事也太平記の傳へはゑたか
ひ難し此事俗說辨といふ書にもすてに辨しおけり

愚管抄卷五

他　義朝(ヨシトモ)下野紀伊守

　義朝梟木の時の落書歌
下野はきのかみにこそなりにけれ
　　よしともみえぬかけつかさ哉
按木(キ)の上(カミ)に紀伊守をよせたりかけつかさは兼官也
義朝もと下野守なりしかはかくいへりけりとそ平

春へにあひたるこゝちやすらんとをかしくて

辨内侍

春をみるわか身ひとつの名におひて

さくやと人にいはれぬるかな

袋冊子

他　濱こそ

濱コソト云童ノ四十九日ニ誦經文ニ書テ送歌

慈心上人 清豪

おしてるやよさのはまこそこひしけれ

なみたをよする方のなけれは

同書

自　俊頼(トシヨリ)

歌有レ詠ニ吾事一今殿下俊頼朝臣詠ニ卯花一歌ニ云

卯の花のみなしらかとも見ゆる(も無名抄)かな

しつかき(寄カ)ねはとしよりにけり

位署不レ書シテ獻之人々奇思之處其名載ニ歌中一

云々是獨歩之時事也

按此歌の事長明無名抄にも見えたり殿下は法性寺

忠通　殿也此時の講師兼昌痛く感心したる由見えたり

著聞卷五

他　うれしさ

宇治殿にさふらひけるうれしさといふはしたも

のを顯輔卿けさうせられけるにつれなかりけれ

はつかはしける

われといへ耻らくも有哉うれしさは

人にしたかふ名にこそ有けれ

入道殿きかせ玉ひて秀歌にかへしなしとくゆけ

とてつかはしける

按砂石集も同しくうれしさとあれと上文にあけた

る後拾遺集のうれしきなれはみやつかへ女のとほ

り名にて是もうれしきにてはなきにや但後拾遺な

るは童なれは童名はき文字を下につくる例にてう

れしきといへるにや考へし

同書卷五

他　信濃

解脱上人のもとに信濃といふ僧有けりいま／＼

しきえせものにてなん侍りけれとも上人慈悲に

よりておかれけれともおもひあまりてや硯の蓋

にうたをかゝれたりける

おそろしや信濃うみけむはゝきゝの

也とていつとても花やきてのみあらむやと返事云
たるなり

同書八十三段

他　うちふし

こきてんとは閑院太政大臣の女御とそきこゆる其御かたうちふしといふもの丶むすめ左京といひてさふらひけるを源中將かたらひて思ふなと人わらふ頃中略まことに人はうちふしやすむ所のあるこそよけれさるあたりには云けくまゐり玉ふなるものを下略

按まことに以下は清少納言か詞なりうちふしかむすめの左京か事を秀句にかくうけし也

大鏡卷八

自　衆樹(モロキ)

此宰相衆樹〇良峯安世子なりは五十まてさせる事もなくほとほとおほやけに捨られたるやうにていますかりけるか八幡にまゐり玉ひたるに雨いみしうふる石清水の坂のほりわつらひつ丶まゐり(らせ給)玉へるにおまへの(木)橘のすこし枯たりけるに立よりて

千早ふる神のおまへの橘も
もろ木も共に老にける哉

增鏡むら云くれ卷

他　東海ひんかし

山法師も戰なとして東海とかやいふ兵討れたり事の始にひんかしうせぬるめてたしなとそいふめる

按關東をひんかしといひかけたる也

古本今昔物語卷廿四

他　佐太(サタ)

播磨國郡司家女續和歌語今昔高階爲家朝臣ノ播磨守ニテ有ケル時サセルコトナキ侍有ケリ名ハ不知テ字ヲハ佐太トソ云ケル下略

ワレカミハタケノ林ニアラネトモ
サタカコロモヲヌキカクルカナ

按此歌は郡司かもとの女のうた也佐太か衣を縫せむとて切かけより投こしたるを此歌をそへて投かへしたる也こ丶の文いと長けれははふけり

辨內侍日記

他　さくや

さくやといふ雜仕を具したりしを公役(ためなは さたむら)云やくとりてもてなし今は春へとさくやこのはなとえたいをとりてはやしたりしまことにおのか

みえしかしなといひけれはなとてかさふらはさらむぬしおはせすともさふらひなんなといひゐたり女ぬしにせうそこえは申てんやふみはよくも見玉はしたゝことはにて申せよと言けれはいとよく申さふらはんといひけれはかくいひける

ふねもいぬまかちもみえしけふよりは
　うき世の中をいかて渡らん

按古本今昔物語にフネモコシマカチモコシナとありさて此歌槽に舟をよせ童名のまかちに眞梶といひかけたり

空穗物語たゝこそ　左大臣橘千蔭

白浪のまさこをすゝくたこの浦に
　おくれてなそもなけく舟ひと　左近中將

ひまもなく浪かゝるてふたこの浦に
　よするなる（か）名や形みにはせん　左衛門佐

するかなる浦ならねとも白浪は
　たこといふ名にもたちかへりけり

按此三首いつれもたゝこそをつゝめてたこといひて地名の田子にいひかけたりたゝこそは左大臣橘千蔭のひとり子なり

同書　初秋

他　すゝし

なかたゝかれはたそといふすゝしといらへていふなかたゝおはせねといふくめり（吹）すゝしとて秋風にもなし玉ふかなこゝにこそかくれられたりけれ

按涼か名より秀句に仲正のいはれしなりふくめりとは涼かをられねとも秋風は吹となり

枕冊子五十段

他　時柄（トキカラ）

はやうおほきさいの宮にゐぬたきといひて名たかき下つかへなん有ける美濃守にてうせにける藤原時柄藏人なりける時ゑもつかへともある所にたちよりてこれやこの高名のゐぬたきなとさもみえぬといひける返事にそれはときからもさもみゆる名なりといひたりけるなんかたきにえりてもいかてかさる事はあらん云々

按時柄か名を秀句にいひかけて時節によりてよき時もありあしき時もある也とて此ゐぬたきも高名

きくこゝちして身にそしみける

返歌三首を一首にかきて

ことのねもきりしか法もたち聞し

　わかことをさへわれそわすれぬ

同家集

せんづる「たつあしたつ」元本小字

　二條院かくれさせおはしまして後おめのとの大納言三位ほとなくみまかりぬときゝて女房せむつるかもとへつかはしける

雲の上に別れしたつはおりゐても

　ひとかたならぬねをやなくらん

かへし

わかれにし雲井をこふるあしたつは

　澤邊にひとり音をのみそなく

山家集

他　みやたて

みやたてと申けるはしたもの年たかくなりてさまかへなとしてゆかりにつきて芳野に住侍けるおもひかけぬやうなれともくやうをのへむれうにくた物を高野の山へつかはしたりけるにはなをりひつに花のくたものつみてけり

　といふくたもの侍りけるみてつかはしける

　よしのゝ人のみやたてにして

按夫木集に入たり下句いかにいひかけたるにか考へし

三條院女藏人左近家集

他　朝光(アサミツ)

伊勢の海のあさみつ汐のつらけれは

　かつきわひぬと蛋もいふなり

按新千載集戀五　題しらすとて入たり

大和物語百五十九段

他　まかち

下野國に男女住わたりけり年ころ住けるほとに男女をまうけて心かはりて此家に有ける物ともを今のめのかりかきはらひもてはこひいく心うしとおもへと猶させてみけりちりはかりの物も殘さす皆もていぬたゝ者はうまふねのみなん有けるそれを此男のすさまかちと言けるわらはをつかひけるして此ふねをさへとりにおこせたりこのわらはに女のいひけるきんちも今はこゝに

へ來り予かもたる難後拾遺の古抄本にもかなかきにてなかたふとかけり亠かるを家集にかく二首まてなかよしといひかけてよめれはなかたふとはいふましき事也かし

和泉式部家集

和泉

袖ぬれていつみといふ名は絕にきと
　聞しをあまた人のくむなる

かへし

かけ見たる人たにあらしくまぬとも
　いつみてふ名のなかれ計は

藤原顯輔家集

他　秋萩

越前守忠盛秋萩といふはしたものに物いふをいといたう亠のふときゝてつかはす

いつはらて亠かとこたへよ秋萩を
　亠からみふすときくは誠か

同家集

他　淡路

或所に淡路といふ女房にたひ〳〵せうそこすれとかへりこともなけれは

いかにせん飛火も今はたえわひぬ
　聲も通はぬ淡路亠まやま

按袖中抄に此歌を引て三句たえわひぬとあるをよろしとすへし

源賴政家集

他　ことち

他　きりし

ことちといふ歌うたひ念佛所によもすからうたうたひてきりしといふ尼經よみなとせしを伊賀入道聞て輿に入て我門といふ催馬樂うたひなとしてわすれかたくしておもひ給ふ事を門むかひとよみ侍し事なとを思ひ出られけるにやのほりてのち入道のもとより歌三首よみてつかはしたりける

ゆきやすくつとめてゐたる極樂の
　門むかひこそおもひいてけれ

おもひいつや秋のきりしの法の聲
　立居につけてわすれやはする

すみのほるよるのことちは松風を

年ふれは朽こそまされ橋柱
　むかしなからのなたにかはらて（は袋）

按袋册子に以上三首ならひあけて童名は名多也とありさて年ふれはの歌新古今集雜中になからのはしをよめる忠峯とて書たれと誤也忠峯家集にはいらすして忠見家集にかくたしかなれはこれにしたかふへし契冲河社に此贈答のうたをあけて遊女の歌の心は忠見を歌よみときゝて忠峯か播磨に住める事なれは高名をひゝきのなたによせし也ひゝきのなたの在所此歌にて分明也かへしの心は此時忠見津國に住てしつみ有けれはなからの橋によせたる也（以上河社）此三首のうちにみな童名のなたといふをよみ入たり

曾禰好忠（ヨシタヽ）家集　夏長歌

自　好忠

うきみひとつのつたなさをなほよしたゝと名つけつつはくゝむことのかなしさに（下略）

藤原長能（ナカヨシ）家集

他　長能

他　かけつら

他
　よしまさ

かけつらといひ侍りける人のものいひ侍りける女にしのひて物いひそめてまかりたりけるに來あひにけれは一品宮の九條にかけつらみんとききて

こす浪に袖打ぬらし歸しも
　あはれとおもひかけつらむやそ

かへし

よし思へなかよしとたにみましかは
　浪こし島とみせましやそは

同家集

はやう賀茂の祭見侍とてあやしき人を車にのせ侍しをむかへによしまさの朝臣たちてかくいひはへりし

そのかみのなかよしとたゝ知ぬれは
　人の數ともおもほへぬかな

かへし

ことわりやしかうき身なり然は有共
　よしまさゝ（のイ）らん人は誰そは

按長能は先達たれも皆なかたふとよむ事といひ傳

底のみるめはうたかひもなし

源順家集

自　順(シタカフ)

庚申夜奉歌序

今のいにしへをのちの人もみよとてかきゑるし奉るはおほせことにゑたかふなり

藤原仲文家集

うみうまのかみ

國茂かしき此使にありきける時にされたる所の若き人々聲ゑけれはそれうけさせ玉へといひいれたりけれはさうしの畵に女のかた有けるをやりてこれたまへといひ出し玉へりけれは國茂源生(ウミ)か子ともと聞て

たらちめの昔の親の顔みれは
　うみのこともそ思ひやらるゝ

女かへし國茂か父はうまのかみにてなん有ける

たらちめの昔の親はさも有はあれ
　偖やはうまのかみのこはよき

壬生忠見家集

他　忠峯(タヽミネ)

うちのおほせことにてちゝ忠峯か歌たてまつれとめしあるにかきあつめて奉る

君か代にさかゆくへしと思ひせは
　とはまし物をたゝみねの道

按君か代にいたりてかく父の歌をめし玉ふ事とゑりなは父のなからへ有しほとに父の好みし道の奥儀をもとめきはめおくへかりしをくやしき事也とおのれか心を卑下してよめり坂と峯ともよみ入てあやをなせり

同家集

自他　なた　忠見幼名

さて(宣旨)せしたまはりてみつしところにさふらひてまゐらす

年をへてひゝきのなたに沈む舟
　浪のよするを待にそ有ける

同家集

伊豫にいきたるによしあし(ある)うかれめのいひたる

音にきゝめに未たみす播磨なる
　響のなたときくはまことか

かへし

（くちし印本）
くれなゐの色好みといふ名はたてゝ
　　ゐての山吹さかり過すな
　これはゐてといふみかはやうとに山吹の花もたせ
　ていろめきたる人にやる（のおこせたり）へし
　（けるかへし也古本）
　按印本歌落字おほしこゝにあけゝるは貫之朝臣の
　筆といひつたへたる本にてのせたり

同家集

他　むきまき

他　うま
　わらは名むき（ま　貫）と人のうまといふ女に仕けるにかくや（に仕けるをすこしかれける頃かくや）（人貫に貫）
　（るとて　古）
　たきになりにけるにかれけるころ女にかくいひ（貫）
　（れ〱か）
　やれとて
　　（と　貫）
みまくさのたねとおほせかまつかきの（うま）
　　むきとや人の今はかるらん（はつまさ貫）
　按印本誤おほし古本によりて末るしぬ貫之朝臣筆
　の本にて異同をそへたり

藤原敦忠家集

他　あつま
　すけまさの母君うみおきてうせたるを丶はのも
　とにやしなふかふたつはかりなるを見におはし
　たるにものかたりなときこえけるにいみしうな
　き玉ひてちこの名はあつまとなんいひける
むつこともまたいひ出して別にし
　　人の形みはあつま成けり
　按むつことに琴をいひかけてさて下にあつまとい
　へるなり

源公忠（キンタヾ）家集

自　公忠
　延喜御時殿上人の人々おのか名をそへて歌よみ
　ける
から衣ぬきすてかたき我（たイ）やきん
　　たゝ目のまへにかけてこそみめ

藤原清正家集

他　すま
　廣はたのみやすん所の御さうしにあこきといふ
　わらはに文つかはすとてすまといふとのもりつ
　かはして
すのあまをゑるへとおもへはわたつみの

納言一家所祭也　公事根源云この社は中納言山蔭卿貞觀の頃ほひ建立して一條院永延元年よりはしめて官幣をたてまつらせ玉ふなとありてさてはしめは山の木かけにいさゝかなりし社の今は官幣をたて玉ふ社となりたりといふに山蔭の名いひかけしなるへし

新千載集戀四

自他　すゝ

八月はかりにうちのとのゐにさふらふに兵衛內侍といふ人ものいはんといふ頭の中將のたのめつるをきゝてそれとおもひたるよとをかしくておまへなるすゝきを折て書つけて遣しける

權中納言定賴

さためなくまねきつる哉花すゝき
ほに出て結ふ人もこそあれ

かへし

おしなへて靡かぬのへの花すゝき
ほには出とも誰かむすはむ

此人わらは名すゝきとなんいひけるとなん

玄々集

東三條院に侍ひけるたきゝといふ人の許に源時明讃岐守

世をすてゝよゝを昔のひしりたに
たきゝはかりは拾ふとそきく

素性家集

他　良因(ヨシヨリ)素性字(アザナ)

天曆の御かりせさせ玉ひて河內の國にやすませ給ふにまかりかへりなんと申しを惜ませ給ひて素性のあさなをよしよりとつけたまふに

旅に出ておくことの葉にいひしかと
よしよりおもへこゝろくたけぬ

按偁册子云素性は住二石上良因院一仍寛平法皇宮の瀧遊覽の間號二之良因一とあり契冲云此天曆のみかりせさせ玉ひてとあるは時代相違せりいかゝよしよりとは素性のすまれたるいそのかみの良因院なれは良因を和訓してつけさせ玉ひて素性をよしわれによりて今ゑはしとまれとの御こゝろなるへし
以上契冲素性家集標注

藤原兼輔家集

他　ゐて

帥前内大臣

あさちふにあれにけれとも故郷の
　松は木高くなりにける哉
　按榮花物語浦々の別卷にあさちふと有り

金葉集戀下
他　多聞（タモ）
　多聞といへるわらはをよひにつかはしたりける
　にみえさりけれは月のあかゝりける夜よめる
まつ人の大空わたる月ならは
　ぬるゝたもとに影は見てまし
按するにたもとの三言に多聞をよせてよめるなり

續詞花集聯歌
他　道風（ミチカゼ）
　道風の手本をかりける中に人の歌のもとをよみ
たりけれは　讀人志らす
櫻花みちかせふかはいかゝせん
　散さぬ手をそ先ならふへき

新勅撰集雜三
他　のべ
　うちわたりのさうしにのへといふわらはにつた
へてふみなとつかはしけるにのへ身まかりにけ
る秋讀侍ける　謙德公
白露は結ひやすると花すゝき
　とふへきのへも見えぬ秋かな

玉葉集神祇
　松
櫻はなちりなん後のかたみには
　松にかゝれる藤をたのまむ
これは熱田大明神の御歌となん昔彼社の大宮司尾
張氏代々なりきたれりけるに員職か女の名を松と
申けるか藤原季兼志たしくなりて季範をうめりけ
るのち明神かく託宣せさせ玉ひにけるによりて彼
季範はしめて大宮司になりてその末今にたえすと
なん以上玉葉古注也

同集神祇
他　山蔭
　吉田社を　從三位爲實
すへらきも賴む宮居と成にけり
　たゝ山かけのなこり計りに
按江次第裏書云吉田祭は永延元年始之元（モト）者山蔭中

るにあはせおもへはゑほなきにゑたゝみあへてと
侍りけれはとありしならんかいかにもうたにはゑ
たゝみとはよますたゝみとのみいひかけたり猶此
歌解は別に考あり

同集離別
自他　うま
伊勢へまかりける人とくいなんと心もとなかる
ときゝて旅のてうとなととらするものからたゝ
うかみにかまてとらする名をはうまといひける
に　讀人不知
をしと思ふ心はなくて此たひは
行うまに鞭をおほせつる哉
かへし
君か手をかれ行秋の末にしも
野かひに放つうまそかなしき

拾遺集雜上
他　隱岐
對馬守小野のあきみちか妻隱岐かくたり侍ける
時ともまさのあそんの妻肥前かよめる
おきつ島雲ゐのけしき行かへり
文かよはさんまほろしもかな

同集雜賀
他　とみはた
子をもちてとみはたとつけて侍けるに袴きすと
て　元輔
世中にことなる事はあらすとも
とみはたしてんいのち長くて
按家集とあることしとみはたしなんとある

後拾遺集戀一
他　うれしき
うれしきといふわらは(童)にふみかよはし侍けるに
と人にいはれてほともなくわすれにけりときゝ
てつかはしける　源政成朝臣
うれしきを忘るゝ人も有ものを
つらきを戀る我やなになり

同集雜五
他　松
筑紫よりのほりて道雅三位のわらはにて松君と
いはれ玉ひけるを膝のうへにすゑて久しう見さ
りつるなといひてよみ侍ける

袖

人のつらくなりにけれは袖といふ人を使にて

よみ人しらす

人しれぬわか物思ひの涙をは
袖につけてそみすへかりける

按源信明家集　袖といふ女つかひたる人に其女に
つけていふとはし書して此歌を載たり

同集戀四

他　近江

ある所にあふみといふ人をいと忍ひてかたらひ
侍けるを夜あけてかへりけるを人みてさゝやき
けれは其女のもとにつかはしける

坂上恒蔭

鏡山あけてきつれは秋霧の
けさやたつらんあふみてふ名は

同集雜一

他　みるみるめ

志賀の唐崎にてはらへしける人のしもつかへに
みる（め古）といふはへりけり大伴黒主そこにまて來て
彼みるに心をつけていひたはふれけりはらへは
てゝ車より黒主に物かつけゝりその裳のこしに
書付てみる（め古）におくりはへりける

黒　主

なにせんにへたのみるめを思ひけん
おきつたまもをかつく身にして

按六帖大和物語同海松（ミル）に女の名をいひかけたりみ
るめのめは女の名の下へそへていふ例也

同集雜一

自　忠見（タヾミ）

しほなきとしたゝみあへてと侍けれは

忠見　一本ニ忠峯トアルハアヤマリナリ

しほといへはなくてもからき世中に
いかてあへたるたゝみなるらん

按此歌印本忠見と有抄本忠峯とあり忠見家集にみ
えす古本忠峯集に入たりされとおのれか名をよみ
入たれは忠見のうたなる事うたかひなしさて舊説
蓼味（タヽミ）にいひかけたるなりといへと誤也細螺（シタヽミ）にいひ
かけしなり細螺（シタヽミ）は萬葉集卷十六長歌によめりさて
したゝみをたゝみとのみもいふへし又按に忠峯（ケイ）家
集古本はしかきにしほのなかりけるよみめるとあ

伊菟斗毛能布爾余牟飛止波哆珥也宇珥古禮手无爾止（イツトモノフミヨムヒトハタニヤウニコレテムネト）
曾度毛爾乃利止流（ソトモニノリトル）
按いつとものふみは五經也五經をは段揚爾を師として常にならひよむよしをおのか名にいひよせたる也

古今集別
他　公利（キミトシ）
ひたちへまかりける時に藤原のきみとしによみてつかはしける　　寵
朝なけにみへきゝみとしたのまねは
おもひたちぬる草枕也

同集長歌
自他　伊勢
七條のきさきうせ給ひにける後によみける　　伊勢
おきつなみあれのみまさる宮のうちはとしへて住しいせのあまも船なかしたるこゝちして
按六帖家集同

後撰集戀五
題しらす　　仲平朝臣
いせの海に遊ふあまともなりにしか
波かきわけてみるめかつかん
かへし
おほろけのあまやはかつくいせの海の
浪高き浦におふるみるめを

同集雜四
伊勢か亭子院にまゐりてさふらひけるに御ときのおろし給はせたりけれは　　伊勢
いせの海に年經て住しあまなれと
かゝるみるめはかつかさりしを
按六帖あまなれはいつれのもかるはかつきのこせ（本ノマヽ）子家集は集に同し一本いつれのもかはかつきのこさん　弘賢曰古今六帖流布の本には此歌見えず

同集哀傷
他　載春（トシハル）
ありはらのとしはるかみまかりけるを聞て
かけてたに我身の上と思ひきや
こんとしはるの花をみしとは
家集同

同集戀三

古今要覽稿卷第二十

●姓氏部

●和歌

萬葉集卷第三

山部宿禰赤人歌

美沙居石轉爾生名乘藻乃名者告志五余親者知友

或本歌曰

美沙居荒礒爾生名乘藻乃告名者告世父母者知友

笠朝臣金村鹽津山作歌二首

又卷第七

寄藻

奧浪依流荒磯之名乘藻者心中爾疾跡成有

紫之名高浦乃名告藻之於礒將靡時待吾乎

荒礒超浪者恐然爲蟹海之玉藻之憎者不有手　一本此一首ナシ

又卷第十二

寄物陳思歌

住吉之敷津之浦乃名告藻之名者告而之乎不相毛恠

三佐吳集荒礒爾生流勿謂藻乃吉名者不告父母者知鞆

羈旅發思歌

然海部之礒爾苅干名告藻之名者告手師乎如何相難寸

又卷第十八

賀陸奧國出金詔書歌一首并短歌

大夫乃伎欲吉彼名乎伊爾之敝欲伊麻乃乎追通爾奈我

佐敝流云々祖名不絶云々

爲幸行芳野離宮之時儲作歌一首

毛能乃敷能夜蘇等母能乎毛於能我於敝流於能我名負

名負大王乃麻氣能麻久麻久云々可久之許曾都可倍麻

都良米伊夜等保奈我爾

日本紀竟宴和歌　得日臣命〇以下濟水濱臣集人名和歌抄

他稱　道臣　　學生蔭子從八位下葛井宿禰鑒

伊佐袁志久多陀斯岐彌知乃於牟迦斯佐斗亘曾我那毛

岐徵波多末比斯

按書紀云是時日臣命帥元戎中略改名爲道臣とある

によりて題には日臣命と出して歌には道臣とよめ

りさて導功といひかけたり

同書　得段揚爾

自稱　惟宗具範　　從五位上博士兼備中權介惟宗具範

日向山藥師堂勸進帳に雲居叟　希膺操㆓毫於鵲巢院內㆒と書しるしたり西土にもそのことあり雲谷雜記に押字の下に拜咨の二字ありといふことと見えたり

雲谷雜記云予頃在㆓武陵㆒於㆓畢文簡公諸孫處㆒見㆘文簡與㆓寇萊公㆒一帖㆖尾用㆓押字㆒押字之下却有㆓拜咨二字㆒此正以㆓押字㆒代㆑名也景德間士大夫質厚故此風尚存至㆓元豐間㆒相去方七十餘年已爲㆓罕見㆒今固不㆓復有㆒矣

草名刻木

判を木にえりて用ること今は盛なり西土にては元の時よりありとみえたれとも皇國にては實に近世のことなり判の本意は前文はたとひ代筆を用るともこれのみ眞蹟を以信を示すことなれは意得あるへきことなり新井君美の引し輟耕錄後周の李穀か故事を以權輿とすれともこれはその由來を尋しのみにて誠の花押にはあらす只名を刻し印のことなり

輟耕錄云今蒙古色目之人爲㆑官者多不㆑能㆑執㆑筆花押例以㆓象牙或木㆒刻而印㆑之宰輔及近侍官至㆓一品㆒者得㆑旨則用㆓玉圖書押字㆒非㆓特賜㆒不㆓敢用㆒按周廣順二年平章李穀以㆑病㆑臂辭㆑位詔令㆑用㆓刻㆑名印㆒據㆑此則押字用㆑印之始也

按に李穀か故事を以押字刻印の始とすることは聊穩當ならす官人は名を自署すへきことなるを臂を病るに因て名の印を用ることを許されしなり其字體花押の如にはあるへからす

藤貞幹所藏文書建久元年七月十四日賣地券也

女官三條加判也

水戸吉田藥王院所藏文書

弘賢所藏常子內親王御押

或人所藏信濃善光寺本願上人押字

左文草名

用る所何のゆゑと云ことをしらす東大寺溫室施入帳東寺所藏の古文書に左文の花押あり

東寺寶泉院所藏文書康平二年己巳十二月　日田券連署七人中二人左書

東大寺溫室施入帳永久五年七月十五日連署中一人左書

草名連辭

たとへは官位の下に判を書その下に記之書之なと丶かくこと皇朝に　尊朝　尊純　遺塵親王ては多くあると

記之　誌之なとなり梁園法帖に　又　見え相州

郭若虛畫論云如下世之相二押字一之術上謂二之心印一本自二心源一想二成形迹一迹與レ心合是之謂レ印又曰押字且存二諸貴賤禍福一

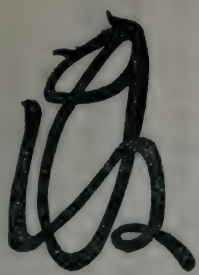
通雅云托レ人相二花字一似二是通人一蔽一則花字尋常者用レ之云々

鶴岳八幡宮所藏源頼朝花押

高野山金剛峰寺所藏同上花押

出雲杵築大社所藏同上花押

元暦元年十月二十八日

豐臣秀吉花押

女子草名

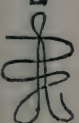
漢土には如何あるへき未みる所あらす皇國には花押藪載る所尼如大或人所藏經筒銘しるす所宗岡重房女京都藤貞幹所藏女官三條水戸吉田藥王院所藏比丘尼浄音予所藏常子内親王或人所藏信濃善光寺住持妙譽の花押あり是等親しく目擊せるものなり

續花押藪所載尼如大花押

經筒銘

信心大法主前散位宗岡重房

今沙弥重仁女丸氏

建保三年七月廿五日

に用ることとなり

消息耳底抄云消息判事證文ノ外ハ或下劣ノ人ノ許ヘ判ヲハスル也而朝隆卿判ヲ好タル也

弘安禮節問答云或條ノ注ニハ公家ニハ先狀後狀ト云武家ニハ先判後判ト云武家ハ筆硯ニ不レ足ニ依テ用ニ判形ニト注シ候然所ニ右ノ禮節ニ多分判形アルヤウニ見エ候コト如何其外公家ノ御連署ナト判形御座候又物ニヨリ官ハカリ被レ載候テ判ノ有モアリ或官實名計ニテ判ノナキモ有之又ハ尸ノ下ニ判ノアルモ候自書ト見エ候ニハ實名二字ハカリニテ判ノナキモ候又奥ノ書トメニ也トアリテ判ノアルモ候云々

草名帶印

皇朝近世に至ては判の肩に印をおすこと常にあることとなり故實にては有へからすその始いまた詳ならす西土にもあることのよし刊謬正俗に代醉編を引てそのことと見えたり

刊謬正俗云今人或署レ押而又下レ印漢亦有ニ其法一云々凡公文皆先書レ押而後レ印故印在ニ書上一此乃先レ印後レ書必有レ奸也

按に印在ニ書上一と云ときは位置の上下にはあらて印を以て押字の上に覆下なり皇國近世の俗のことときも寛文以往は如レ此文書あるを見しかそれは何れも朱記にてありし今の墨記のことときは押字の右の肩に印を添ることになりたり

草名吉凶

講習餘筆に押花のことを說てさて其畫間の空穴の數にて吉凶を云其生の性に叶へりの叶はさるのと云る附會の說共をなせりこれらは陰陽占卜家のする所にて從へからす唯實名の字を以これを變化してなすへきことなりと實にさあるへきことなり一の明證あり皇國古今の間源賴朝卿ほと危を免て威名宇宙にあまねく武家の權をとられしはなく豐臣太閤ほと賤より出て貴を極め心の欲る所得さることなき人はなし今試に其花押を見るに何れも穴數に相生を撰はす點畫に吉凶禍福を必とせす共に花押藪にあり是を以て常に花押の禍福を言ものをさとすへきなり

按に筆勢ありて其形狀よく連綿せるを吉とし筆勢なく物に象り過て其形狀不正なるを凶とせんか西土にても愚夫は吉凶を撰む說あるよし郭若虛畫論通雅等に見えたり

シヤウヤノ上ニアル所ノ押字ハ紙ノ續メノ裏ニ書シモノ乳字畫分明ナラス前ニモ一ツアリ［押］如此コレ漢土ニ所謂押縫ノ類ナリ

正和貳年四月八日

從四位下行神朝臣康光

從　位下行藤朝臣定行

從　位上行平朝臣高廣

正　位上行江朝臣公經

正　位上行源朝臣光房

攝津國上郡眞上村在地判文書

文和元年二月十日

[illegible]

東福寺所藏聖一國師牒度

承久元年己卯十月廿日

治部郎藤原信行

正六位上行平貞

正五位上橘成恒

正六位上行源盛慶

從五位紀頼成

鎌倉報國寺所藏開祖天岸和尚度牒

弘安九丙戌年十一月八日

從三位藤原朝臣茂重

正五位上行橘朝臣行繁

從三位高階朝臣冬俊

正三位藤原朝臣光任

從二位源朝臣公隆

藤原幹藏長寛元年在地署判賣領地ノ券ナリ

者其上下必加二一字一者群談採餘云國朝押字之製上下多用二一畫一盖取二地平天成之意一予嘗觀二前代官人簽署文字一必題二某官某姓一而下書二花押一不レ書レ名盖花押皆破二自名一故不二復贅一也

草名具名

西土にては書牘の類に名を書し終に押字をのするよし（癸辛雜識）見えて宋人佛光國師名の下に花押を書る花押藪にあり皇朝にては古よりもあることにて押字考に引たる古文書並に承久元年弘安九年正和二年の度牒又長寛元年在地署判攝津國上郡眞上村の文和四年の文書等多くの連署皆花押の上に名を具せり是平生の例にはあらすしてたま〳〵あることなり思ふにその名と判と具することと名はもとより識すへき所以判は後代の證となるへき爲に用ることとならんか然るに今のことく當座の書札に用ることとも京都將軍の比よりあることにて伊勢貞孝の書狀にも見えたりさて名と判と具する時も必別に制するにあらすして草名にて用らるゝもあり別字にやと思はるゝもあれとも南嶺か草名の外に判と云ものありといへるは通論にあらす後代の證の爲に判することは消息耳底抄弘安禮節問答等に見えたり南流別志同文通考押字考等に近代のことにて誤のよし見えたるは考索の委しからさるなり弘安禮節問答に公家にはなきことなりと見えたるは古をうかゝふことの廣からさるなり花押藪古押譜載る所名と花押と具せる數多あり枚擧にいとまあらす慶長以後に至ては武家はこと〳〵く名と花押と具せりこれは此に云所の證にはなりかたしされとも今は又風俗となれるなり

癸辛雜識後集云余近見二先朝太祖　太宗時　朝廷進呈文字一往々只押字而不レ書レ名初疑爲二檢底一而末乃有二御書批一殊不レ能レ曉後見下前輩所レ載乾淳間禮　部　有中申二祕省一狀押字而不レ書レ名者上或者以爲二相輕致一レ憾范石湖聞レ之笑二其陋一云古人押字謂二之花押一印

按二印字ハ郎字ノアヤマリナリ

是用三名字稍花之如二韋陟五朶雲一是也豈惟　是前輩簡帖亦止レ是前面書レ名其後押字雖二刺字一亦是前是姓某起二居其後一亦是押字士大夫不下用二押字一代レ名方是百餘年事爾

按にこれを以てみれは漢土にて唐以後には貴賤に通して用ることとなり皇朝には貴より賤にあたふる

與名用之無レ異上表章亦爾
七修類藁引二石林燕語一云王荊公押二石字一作レ圈常不レ圓容齋五筆載熙寧中柳應辰嘗押字盈レ丈刻二於浯溪等處一使下人莫上レ識二何字一以レ恠取レ名實應辰二字也已」
續書斷云陟晩而多レ縱常以二五采牋一爲二書記一使二侍妾主一レ之其裁答受レ意而已陟唯書レ名自謂所レ書陟字若二五采雲一時人慕レ之號二郇公五雲體一
來禽雜集云邢侗淳化帖右軍書評云行李帖智果書二一果字省レ筆乃押字劉次莊釋文誤作二智永一

草名結構

西土にては草名を以て花押とすと（東觀餘論）見えたれはたた名の字を草書せるよりこと起りて遂には奇異の字形を結構せるやうになれるなるへし皇朝にても古は名の字を行草の筆意にて二字を合て點畫をかねやつし撇捺の末をまとひつくるやうにかきなせしものなるを或は一字を用ひ或は別字を用ひ或禽蟲の形にかたとるなと云ること出來れり花押藪同續編古押譜等を見て古今の巧拙を知へし其結構連綿として粲然たると支離にして茸々たると大に巧拙あるものなり西土にても王魯齋か古貴人押字跋に說あり

東觀餘論云與二劉無言一書云々劉又言頃謁二蘇子容一丞相未レ出間見下傳二唐人一一書上中云文皇令二羣臣上奏一任レ用二眞草一惟名不レ得レ草後人遂以二草名一爲二花押一韋陟五朶雲是也
七修類藁云大抵破レ眞爲レ草取二其便一レ書若二柳之恠一王之歪一亦異也國朝押字之製雖レ未二必名一而上下多用二畫一蓋取二地平天成之意一凡釋レ褐入レ官者皆以二吏部一畫レ字三日以驗二異時文移之眞僞一故京都有下賣二花字一者上隨二人意一欲三必有二宛轉藏頓一苟知レ所レ本則當レ以レ名庶不レ乖二古義一云
香祖筆記云石林燕語記王安石作レ押先橫二一畫一左引レ脚中爲二一圈一圈多不レ圓時謂押二歹字一予謂以レ歹爲レ石與二安石爲一レ人名實亦自相副前輩有下集二古名臣花押一爲二一書一者上唐謂二之花書一
刊謬正俗（簽押類）云簽字彙簽書文字也押韻會署也檢訓蒙字會簽押防範也事物紀原古者書レ名破レ眞從レ草取三其便二於書記一難二於模倣一唐書曰韋郇公毎書二陟字一自號二五雲體一俗習相緣率以爲レ常後有下不レ取二其名一出二於機巧心法一者上此押字之初也云々祖擇之押字直作二一口字一人問レ之答云口無二擇言一（江鄰幾雜誌）是取レ義爲レ押

右奉レ入如レ件
十一月十九日　　權大納言判
權大外記局
弘安禮節問答云或裏ニ判ヲ加候事モ候又傍ヘ引ノケテ判ヲ加候武家ノ狀モ見及候樣ニ當時ハ悉名ノ下ニ加レ判候是又已ニ流例候間不レ及ニ左右一候哉公家ニハ大臣ハ一切判ヲ用候連署ノ時ハ藤原トモ源トモ其姓マテヲ大臣ニハ書テ置候所ニ朝臣ノ二字ヲ大臣ノ自筆ニテ書加候判ヲモ不書候大納言以下ハ實名ノ二字ヲ連署ニハ自筆ニテ書之加候奥書ナト自分ニ書候ニハ誰々モ只官判或官姓判ナトヲ載候後代ノシルシノタメハカリニテ候但又實名ナト書テ猶後證ニモ思事候ヘハ傍ニ判ヲ副候事モ候歟人ノ心ニヨリテ可ニ沙汰一候歟

高橋家所藏文書

二日ノ草書ナルヘシ

御厨司所預高橋釆女正ナリ

小山孝山文書

草名撰字

西土にては名をも字をも草書して花押と云名にも字にもあらさる字を用ゆるはあやまりなるよし諸書に論しおけり韋陟は陟の字を用ひしよし續書斷に見え智果は果の字を用ひしよし來禽雜集に見え王安石は石の字を用ひしよし石林燕語に見え柳應辰は應辰の二字を用ひしよし七修類藁に見え別字を用ゆるはあやまりなるよしは東觀餘論に見えたり皇朝にては名を草書することにて別字を用るは常の例にあらす今も堂上にては名の二字を交へ書したまへ〳〵は下の一字を用らるゝもあるなりされとも武家には多く別字のみを用ゆるやうになれり

東觀餘論云唐人及國初前輩與レ人書牘或只用ニ押字一

古今要覽稿卷第十九

●姓氏部

●草名書式

西土にて始は私の書にのみ用たりしを唐の世よりは上奏の類にも用遂に檄移にも施けるよし東觀餘論に見えたり皇朝にては古より官府文書にも用ひられたり大臣は中文なとにも用ひらるゝこと薩戒記見えたり思ふに大臣の外は下輩へ與ふる消息ならてはいたく見及はすいつれも判を用ひらるゝ時は名はかゝれす上輩へ奉る物には必す名はかり行書に筆畫正しくかかるゝなり堂上は今も此定なりなを弘安禮節問答にその品を別てり今武家は一般に用て玄かも必名と判と具することも亦久しき習はしなり但後代の證となるへき物には却て草名を用るなり是はなを正しかるへきを草名を用ゆることは自書を示すなるへし或贋作せんことをもおそれてにやあるらん草名にては贋かたきゆゑなり古文書に多くあるを見て知へし又草名の所に二合と書こともあり弘安禮節問答康富記高橋家所藏文書等のことし是は草名をかくよりも今一等下輩へのことか又判といふ字をかくこともあり小山孝山の書狀のことし是は常の例にはあらす抑西土にて花押を名の代りに用る心得にて上奏移檄すら如レ此なれは尺牘手簡には多く行はれしことにて貴賤を別つことは聞えす東觀餘論云近世遂施二押字一於檄移一或不レ書二己名字一而別作二形摸一非也

薩戒記云應永卅三年三月廿七日記內府申文被レ用レ判定有二所存一乎之間撰入了者子云此事有レ例判者草二名字一也仍不レ爲レ難之由見二舊記一者後日大內記爲清朝臣來臨談曰內府申文加二草名一事右府被レ仰云宿德大臣間有レ例故成恩寺殿准后之后一度有二此儀一而今內府者可レ極二相國一之人歟然則內大臣又爲二一位一年齡四十未滿三十七只今如レ此之儀不二甘心一事也者後日大外記師勝朝臣同示二此旨一

康富記云宣一枚奉之早可レ被三下知一之狀如レ件

十一月十九日　權大納言二合

權大外記局

宣旨一枚

なひとつことなり今この體裁こと〳〵くわかれかたし

又云二合體是ハ草名ノ體一轉シテ二字ヲ左右ニ並ヘテ點畫ヲ交錯シテ一字ノ如ク作ル也然レハ二合ト云ハ押字ノ事也云々

按に二合トハ押字ノ事也とは固に然ることなれ共押名ノ體一轉シテ二字を左右ニ並ヘテ點畫ヲ交錯シテ一字ノ如ク作ルヲ二合ト云フは證文なきことなり殊に左右に並へたるにはかきらす上下に書たるも有弘安禮節に二合とあるは直に二合とかくことなりといへとも又草名の一名のやうにもみえたれは別に一體の名とはなしかたきか

又云明朝體秉燭譚曰今時ノ人花押ノ上下ニ一文字スルヿ明ノ太祖ヨリ始ルヨシ先人（伊藤仁齋ナリ）常ニ物カタリアレトモ何ニ出ルト云フコトヲ語リオカス近頃群談採餘ヲ見レハ第二卷ニソノ事アリ國朝押字之製上下多用二一畫一蓋取二地平天成之意一ト云々

弘賢按に押字の上下に一畫を置こと明太祖に始ることその出所をしらす秉燭談によつてこの名を立られしなれとも宋朝既にこの體あり太祖英宋欽宋などの花押也我朝佐竹忠義（治承の比）北條熙時（正和の比）古利基氏（貞治の比）文和の文書中の押字等皆天地に一畫ありて明朝に先つこと數十年なれはかた〳〵この名いかゝあるへき

又云彼佐理卿ノ押字ハ理ノ字ニテ藤原行成ハ成ノ字ヲ用大江匡房ハ匡ノ字ヲ用ヒラレタリ源頼朝卿ノ用ヒラレシ所モ頼ノ字トソ見エタル
按に是說大にたかへり佐理卿の押字は花押藪にのする形は理の字也といへとも其外は佐理の二字行成卿匡房卿頼朝卿もともに省名の二字を用給ひし也
又云花押藪ヲ按スルニ源義仲朝臣平義時朝臣ノミ判ノ上ニ名ヲ署セラル其餘ニハ見ル所ナシ
按に花押藪の中判の上に名を署する人この二人にかきらすその說草名具名の條にのへたり
伊勢貞丈云此時代（貞觀十三年を云ふ）イマタ押字アラス只名ヲ自筆ヲ以テ書加ルノミ也史官ハ名ヲ書キ辨官ハ名ヲ書スシテ朝臣ノ二字ヲ書ク是押字ノ所レ萠也
按に此時既に押字あり是よりさき天平勝寳中良辨僧正の押字あり又承和中に弘法大師廣祥禰麿等の草名あり
押字考云貞觀以後昌泰以前ノ間ニ押字始リシナルヘシ貞觀元年ヨリ昌泰元年マテ四十年ノ間也
弘賢曰これよりさき承和中に押字ありしこと上にいへるかことし承和は昌泰に先たつこと六十餘年也消息耳底抄にも見えたり
又云押字トハ名ヲ書ク事ナレトモ字ノ正體ヲ省略シ草書ノ法ヲ以テ字體ヲ異樣ニ作リタルモノ故書字ト云スシテ押字ト云也又花押トハ字ヲ草法ヲ以テ省略シテ形ヲ作リ其體花文ヲナスカ故也ハナヤカニカサル意也
按に押の字の解穩ならす東觀餘論に或謂二之押縫一或謂二之押尾一秖是謂レ書レ名耳後人花押乃以二草書一記二其自書一故謂二之押字一とあるは魏晋の法書の押縫押尾は楷書にて名をしるせしことを云なれは押の字もたゝ書ことゝみて穩當ならんのみ又按に押は署也とて名しるしといふことなり
又云草名體吾國ニテ押字ヲ草名トモ云名ノ字ヲ大ニ省略シテ草ニ書故也云々
按に名の字を竪に重ぬて連綿草にかきたるを草名體と立られたる其意を會せすたとへいかほと異形に作りなし或一字を略して一字を用或誤て別字を用ゆるも草名にあらさるはなし薩戒記云內府中文被レ用レ判判者草二名字一也とありて草名も二合もみ

マシキヿ也とあるもその意を得す
輟耕錄云今蒙古色目之人爲レ官者多不レ能ニ執レ筆花押ニ例以ニ象牙或木ニ刻而印レ之宰輔及近侍官至ニ一品ニ者得レ旨則用ニ玉圖ニ書ニ押字ニ非ニ特賜ニ不ニ敢用ニ按周廣順二年平章李穀以レ病レ臂辭レ位詔令レ用ニ刻レ名印ニ據レ此則押字用レ印之始也
按に李穀か故事を以押字刻印の始とするとは聊穩當ならす官人は名を自署すへきことなるを臂を病るに因て名の印を用ることを許されしなり其體花押の如にはあるへからず
述書賦云梁滿鶱押署如ニ盤石臥虎ニ
按に東觀餘論所謂梁御府の法書に人々の押縫ありと云もの今絳帖王徽之の書の尾に姚懷珍滿鶱の題名あるをみる押署は未見る所あらす
同文通考云後ノ世ノ人ノ花押ハ草書ヲ以テ其名ヲ書スユヱニ押字ト云フ蓋古ノ押縫押尾等ノ體ニヨレルナルヘシ
按に押字を押縫押尾等の體によれるならんとは云かたし押縫押尾は楷にても行にても名を記せしのみなり本書にも蓋沿ニ習此ニ耳とありて體をうつせりとはみえす朱异唐懷充沈熾文姚懷珍滿鶱か輩は皆梁の世の人にて魏晉以來の法書を梁の代に至て御府に藏めらるゝ時に臨て此人々の名を首尾紙縫の間にかきゑるせしことなり
又云范石湖カコトハニ古人ハ字ヲ押ス是ヲ花押ト云印ハコレ名ヲ用フ云々
按に印は是名を用といふ時は押字は字を用と云に似たれともこの印の字はもと誤寫なるを筑後守心付す引用ひしなり本書に古人謂ニ之花押ニ印是用ニ名字ニ稍花之とあれは印の字は卽の字の誤なること明けし
又云後周ノ廣順二年平章事李穀臂ヲ病テ其位ヲ辭シケルニ太祖詔シテ名ヲ刻ル印ヲ用シメ給フト云事アリコレ押字ヲ刻ル印ヲ用ル事ノ初ナルヘシト輟耕錄ニ見エタリ
按に李穀か故事を以押字を刻る印の始とすることは輟耕錄の說いさゝか精からぬ所あり仕官の人はいかに書吏をして書しむるとも名のみは自ら署すへきことなるを臂を病るによつて名の印を用ひしめられしなり其體花押の如にはあるへからす

命撰ノ花押藪續花押藪紀州家命撰ノ古押譜ト云書共ニ印板ニアリ代々ノ草名花押二別二合𪜈ニ不レ殘被レ載タリ乍レ然押トハカリ云ハ草名ニモカヨフヘシ花ト云ハ作リモノ、心ニナリテ名乘書ト云ヿニハ不レ可レ成花ハタテニオスモノヲ作ル謂ナルヘシ偖印判ヲ用ルヿ日本上古何ノ代ヨリ始ルト云コトヲシラネトモ文武天皇大寶年中ノ令ニ天子ノ神璽太政官ノ印ナトノ寸法ミエタリ延喜式ニ天子ノ神璽ヲオス作法ナトモアリ然レハ古キヿ也共ニ赤印トテ赤土ヲ用ル朱砂𪜈不レ見今ハ銀朱ヲ交テ用ラル墨印ノ始慥ナラス延喜式ニハ印ヲオスト云オスノ字ニハ捺ノ字ヲ用タリ右下知狀ナトハ我ヨリ下ヘノ示ナレハ實名ハ不レ可レ有草名ノ二合タルヘキヲ後世武家ハ花押ノミ有テ草名ノ法捨レタリ古書ニ下知狀ニ草名ナルヲミテ過テ花押ヲオスヿ一向實名ナキニ至レリ草名ナレハ其中ニ實名有夫故公家ハ今ニ花押ト云モノヲ狀ニ不レ書草名ニ紛レテ不禮ニナル故不レ書也

按に是說すへてとりかたしわけて妄なること五あり一には二別と云ことついにきかさることなり二には判と草名を二にわくること證據なきことなり三には唐書に劉熈なし漢にあれとも花押を作ると云ことは見えす宋に劉熈古あれとも又そのことききこえす四には天武帝の前後とさすこと何によれるやたしかならす五には古押譜は松平紀伊守信庸の集めたるものなるを紀州家命撰といへるはあやまりなり

簡禮集云判ト云事名乘ヲ日ノ下ニ書テヤツシタル形也其故ニ公家ニ判ナシト云說アリ又ハ判ハ物ヲ二ツニワリタル形也其ユヱニ下ニ一有テワリフノスカタ也トモイヘリ但判ニ鏡蝶ノ習ナト云コトアリ亦判ニ公家ヤウノ判ト云アリ

按に判ハ物ヲ二ツニワリタル形ナリ云々判ニ鏡蝶ノ習ナト云ヿアリ等ノ說とるにたらさるなり

弘安禮節問答云然ル間實名ノ下ニ判ヲ加候事ハ公家ニハナキ事也云々冷泉爲相卿和歌ノ抄物書候ニ多實名ト判トヲ載タル見及候シ但是モサシテ諸人ノ指南ニハ淺マシキ事ニテ候

按に實名の下に判を加候事は公家にはなき事なりと決定してはいひかたし後代の證になるへき事には實名の下に判を用ゆる事有又諸人ノ指南ニハ淺

利トカナト眞名相交テ書ト也是不レ足ニ信用一者歟若シカラハ康富記トタカヒヌヘシ且不審アリ弘安禮節ニ合ハ一段ト異タツノ儀ニテ判スルソト申タルホトルコトニテ我ヨリ遙劣タル法ナリ是ヲカナマナマシヘタル事トセハ豈禁裏院中ノ奏ニ女房ノ方ヘ高下ヲ論セス皆カナマナマシヘタル名乘ヲ書コト憚ニアラスヤ其或人ニ尋ヌヘシカナ眞名マシヘタル名乘ヲ用ルコトハ男ノ方ヨリスヘテ女中ニツカハス書式ニテ別ノコト也然ルニ是ヲ二合トイヘルハ甚迂說罔人ナルヘシ

按にこれも又名字と判と一所に用すと決せるは見る所の廣からさるなり

武家百箇條云書判ヲ認ニ名乘ヲ判ノコトク作リテ書ヲ草名ト云此草名ニ二別二合ノ差別アリ公家ハ如何樣ノ儀ニモ實名ヲ書人ノ處ヘ遣ス狀ニモ譬ハ中山大納言殿ナレハ兼家ナト、實名ハカリ也我方ヘ出入スルトハイヘトモ一向被官ニモ不レ有或夫ヨリモ下官ナル人ニ誰殿ト書テ實名ヲ上ニ一字ハ名乘字ニテ書下一字ハ不レ讀樣ニ判ノコトク書又一向我子カ家來ヘハ二字ヲ一所ニ促テ判ノ樣ニ書依之公家ハ俗ヨリミレハ判二ツ有樣也右ノ上一字ヲ字ニテ書下一字ヲ判ニシタルヲ二別ト云二字トモニ判ニ作リテ書タルヲ二合ト云武家モ昔ハ爲レ用トミエタリ庭訓往來ニ伊賀守平石見守源ナト、計有ハ草名アル心也此草名カ名乘ナレハ也京都所々ニ所司代ノ制札有之備後守源朝臣在判トアリ本紙ニハ判アリ夫ヲ寫シテ寺社ヨリ出シ置故ノ在判ノ二字也此判ト云カ草名ニテ名乘ナレハ源朝臣誰ト名ヲカヽサル也是ヲ古來書札禮ノ方ニテモ御草名ニ別ニ認可レ申哉二合ニ可レ仕哉ト尋ル事右筆方ノ習也二別ハ中二合ハ下也依之足利時代ハ一向賤シキ者ヘハ直書ヲ遣ス時播磨守二合ト書タルコト有小笠原家ノ禮書ニミエタリ是ヲ小笠原ニテハ二合傳トテ大事ニスル也偖亦割符合文ノ爲古來ヨリ草名ノ外ニ判ト云物アリ判ハワカツトヨミテ割符ノコト也是ハ異國ニモ有花押ト號ス何ナリトモ作リ物也魚鳥ノ形有花器ノ形有一概ナラス異國ニモ上代ハナシ李唐ノ代ヨリ起ル唐書劉熈傳ニミエタリ事物紀原ニモ花押ノコト出タレトモ其依テ起ル所ハ漢三國ニ證文不レ見日本ニテハ天武前後ヨリ有之ニヤ武士ハ經基滿仲時代ヨリモ有之ヿトミエタリ水戸光圀卿

消息耳底抄禮節抄康富記○判をかくかはりに二合とかくなり

○正誤

鶴山集云宋文彦博一帖雖史牘而緘封乃公花書唐人初未レ有ニ押字一但草ニ書其名一以爲ニ私記一故號ニ花書一如ニ韋陟五雲體一是也

按に唐人初未有押字といふものは無稽の言のみ

秉燭譚云カキ判ヲ花押ト云又押字ト云日本ニテ判ト云ハアヤマリ也判ト云ハ奉行役人ナトノ下ヘ出ス裁判カキ也スミ狀ナト、モ云判斷ノ意也文ノ一體ニ判語ト云アリソノ判ニ花押シタルヲ五花判ト云故事アリソノヤウナル事ヨリ轉シアヤマルニヤ今時ノ人花押ニ上下ニ一文字スルコト明ノ太祖ヨリ始ルコト先人常ニ物カタリアレトモ何ニ出ルト云コトヲ語リオカス近頃群談採餘ヲ見レハ第二卷ニソノコトヲ云國朝押字之製上下多用ニ一畫一差取ニ地平天成之意一ト云コノ外ニモ又本書アルヘシ

南留別志云花押ハ名ヲ草書ニ書タル也花押ノ上ニハ姓ヲ書コトナルヲ今ノ世誤テ名ノリヲ書也庭訓ナト見ルヘシ今世ハ奉行ノ輩面々ニ私印ヲ用ユ官印ナキユヱ也古ハ官印アリ官府ニ一ツナラテハナシ是ヲ月日ノ下ニ押テ面々ノ花押ヲカク也官ノ文書ハミナ物書役ノ書コトニテ名ノリ計ヲ面々ニ草ニテ書ヲ花押ト云也

按に是二書或は判と云はあやまりなりと云或は花押の上に名のりを書は誤り也と云は共に却てあやまり也轉し用る事古今多くあることなりなんそ判のみをいふかるへき名と判と用ること一概にあやまりとは言かたし

官職知要云弘安禮節名字判二合之品弘安禮節者公家書札式也不レ得ニ口傳一者難ニ心得一事オホシ就レ中此三ノ品ハ人コトニ不審セリ故ニ粗記レ左ソレ名字トハ今イフ名乘ナリ公家方ニ名字ト判ト一所ニハ用ヒ玉ハサルナリ名字アレハ判ナシ判アレハ名字ヲ用給ハサル也名字モ眞行草ノ品ニテ敬不敬カハルナリ又判トハ名字ヲ略シタルモノニテ是ヲ草名トモ花押トモイフ也コレ下輩ヘハカクノ如シ又二合トハ則二合トカク也康富記禮節秘抄等ニモ判ト二合ノ差別委見エタリ畢章二合ト書テ有秘訓コレアル御家ノ秘說テレハシルサス或人說ニ二合トハ假令ハ元利ナラハ元ト

し草書の法を以て字體を異樣に作りたるもの故書字と云すして押字と云よしいひたれと穩ならさる說なり具に正誤に辨す

花書

　書苑菁華高似孫緯略刊謬正俗

花字

　刊謬正俗○花といへるはその形狀花文をなすによりて名つくるなり

草字

　東觀餘論

草名

　吉部秘訓抄○晋人草書牘劉穆之[illegible]義之頓首[illegible]獻之[illegible]　皇朝義朝[illegible]　定家[illegible]等の類は皆一家の文字にて他に施すへからす常々書なれたる上には覺えす文字省簡に至りて自ら奇々の體をなし他人も夫を目志るしとせる如に至るこれ花押の起る所にて西土にても草二書其名一以爲二私記一故號二花書一と云俗以レ草二書名一爲二押字一とも云以二草名一爲二花押一なとも云たるゆゑなり

判

　簡禮集官職知要○薩戒記に判者草二名字一也と云是なり判といふ義は同文通考に有司の判署する所なれはかく名つけしにやあらんとみえたりさもあるへきにや

華判

　貞傳集○これ唐の五花判より轉訛せるにや此邦にて判といふことも是に本つけるならん

判形

　融通念佛緣起

書判

　講習餘筆武家百箇條

在地判

　今昔物語

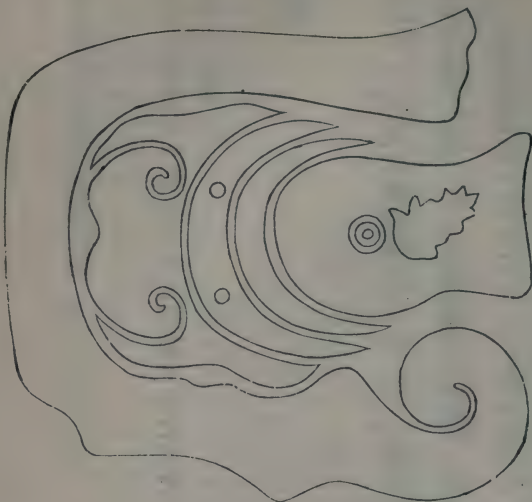
在地署判

　藤貞幹藏文書

國判

　弘法大師遺告眞然大德等狀

二合

國判

守從五位下藤原朝臣

長官上行介伴宿禰

掾從七位上守掾藤原朝臣

目從七位上內藏朝臣

大目從七位下守內藏忌寸

釋迦如來華判

東大寺古文書 文詞略之

貞觀十三年八月十七日正六位上行左大史伴連貞宗

參議右大辨從四位上藤原朝臣

貞觀十三年閏八月廿四日左大史正六位上坂上宿禰助丈

參議右大辨從四位上藤原朝臣

戲鴻堂法帖

晉顧愷之書女史箴眞跡

顧愷之畫

[illegible]

東大寺所藏定山堺四至文書

良

天平勝寶八歲六月九日良弁及辨官等ノ連

署文書ノ裏ニ此草名アリ即良弁ノ良字

弘法大師遺告眞然大德寺狀

承和二年

三月十五日

入唐求法沙門空海

聖武天皇勅書 文詞略之

天平感寶元年閏五月二十日

貞觀十八年二月五日左京少進正六位上清江宿祢貞直

従五位上守左少辨兼東宮學士橘朝臣

同連署

奉勅 正一位行左大臣兼大宰帥橘宿祢諸兄

右大臣従二位藤原朝臣豊成

大僧都法師行信

雲谷雜記云昨得張安道書不稱名但著押字莘老曰某亦得書尙未啓封令取視之亦押字也其事人罕知故記之予按東觀餘論又孫公談圃云先朝人書狀簡尺多用押字非自尊也從簡省以代名耳今人不復識見押字便怒則書用押字其來亦久矣

無寃錄某年某月某日司吏某押字注云押署也俗以草書名爲押

高似孫緯略云齊高帝使江夏郡王學鳳尾一學便工盖諸侯箋奏皆批曰諾諾字有尾若鳳焉盖花書也

靈異小錄云潁州張龍圖嘗見州牒押字多團下拽一畫有人云押字如蒸餅樣

容臺集云予見永師千文後有永師押字

書苑菁華云花書河東山胤所作

歷代名畫記云前代御府自晋宋至周隋收聚圖畫皆未行印記但備列當時鑒識藝人押署

又云貞觀中褚河南等監掌裝背並有當時鑒識人押署跋尾官爵姓名

刊謬正俗云唐人初未有押字但草書其名以爲私記故號花書韋陟五雲體是也葉夢得石林燕語謂見唐誥書名未有一楷字今人押字或多押名猶是此意歐陽氏曰俗以草書名爲押字云々或稱花押或稱花字花書皆一也王荊公押石字性急作圈多不圓公加意作圈（燕語）是一名者押下一字也云云今人已書自名亦下花押其押亦不必破已名復古者須用心焉或認判爲押者尤誤矣

釋迦如來華字宋眞宗皇帝讃曰鶴質龜形勢未休五天文字鬼神愁孔門弟子無人識碧眼胡僧笑點頭

相州建長竺梵仙自序云舊傳謂義淨三藏取經得此釋迦如來親手華判於西天也眞宗皇帝製此嚴讃矣凡有華判之處若能頂戴供養去惡驅邪利益無窮故繡梓永爲流行也貞和三丁亥建長竺梵仙始摹印傳之四方應永七庚辰春重彫因緣于將來矣

○釋名

花押

東觀餘論輟耕錄七修類藁

押署

七修類藁格古要論歷代名畫記

押字

東觀餘論桯史七修類藁○押は署也と訓する故名書と云ほとのことなり伊勢貞丈說に字の正體を省略

ヲナセリコレラハ陰陽占卜家ノスル所ニテ從ヘカラス唯實名ノ字ヲ以コレヲ變化シテナスヘキヿ也按スルニ周密カ癸辛雜識ニ宋ノ十五帝ノ御押ヲ記セリソノ形今ノ書判ニ似タリ今コヽニ略シヌ禮節抄云左大臣ニ合ナト書ハ左大臣判ノ心ナリ判ト名ノ廿サルニ依テ二合ト書也官ナト書時ノ狀ニ用ヘシ

桯史云慶元元年五月大雨隤ニ其巔一古冢出焉云々有ニ匠者姓名一曰ニ張某一下有レ文如ニ押字一隸或得之以獻莫レ知レ所ニ從來一云々在レ晉以ニ此官一顯者不レ著ニ於史一又無ニ名氏可レ見甓範必有レ字古人作レ事如レ此不レ苟ニ押字之制一世以爲レ起ニ於唐韋陟五朶雲一而不レ知ニ晉已有レ之余因疑ニ其似而非一又不レ可ニ强識一亦可レ異也

東觀餘論云有ニ朝士施結者一喜收ニ古今人押字一不レ遠ニ千里一求レ之所レ藏甚多類而成レ書嘗欲ニ爲作レ序偶忘ニ此事所レ出遂不レ用予云魏晉以來法書至ニ梁御府一藏レ之皆是朱异唐懷充沈熾文姚懷珍等題ニ名於首尾紙縫間一故或謂ニ之押縫一或謂ニ之押尾一秪是謂レ書レ名耳後人花押乃以ニ草書一記ニ其自書一故謂ニ之押字一或謂ニ草書一蓋沿ニ習此一耳

七修類藁云古人花押所ニ以代レ名故以ニ名字一而花之凡官府文移人間私簡俱前書レ名後止ニ押字一宋末士大夫方始不レ用ニ花押一代ニ名於文一故范石湖有解其故於省職者唐韋卿般陟署レ名自謂如ニ五朶雲一時號郇公五雲體桯史晉岔扞有ニ押字一則又非レ起ニ於唐一而晉已有レ之云云又王魯齊柏有ニ古貴人押字一碑跋其云司馬文正之押署名而小レ花爲レ不レ失ニ製レ押之原一自ニ唐末五季一諸人莫レ不ニ飄蕩傾欹一亦因可ミ以見ニ當時之人物世變一據レ此則押字必以レ名也而變化機巧則出ニ於其人一云々

池北偶談云獻賊破ニ荊州一時民家有下漢昭烈帝借ニ富民金一充ニ軍餉一劵上武侯押字紙墨如レ新見

按にこれは明末に書しものゆゑ押字とゑるしたれと今の花押のことさものにはあらすして右筆の書し文書に武侯の名のみ自筆にてかゝれしものなるへし

格古要論云古人之押字實書レ名而花之後世乃不レ然與ニ其名一而不ニ相似一直着ニ其心之精微一寓ニ於數畫之中一字者與レ人同未レ足ミ以深知ニ其人一押則我之所レ獨人焉瘦哉予觀ニ司馬文正之押署一名而小花既不レ失ニ其製レ押之原一而精神風致自然見ニ於誠意之表一特此法未レ易ニ盡識一之耳

り
公式令云詔旨謂下用二於小事一之辭卽授二五位以上一之類上也云々咸聞（クニタマヘ）
年月御畫日
吉部祕訓抄云建久四年二月廿四日午尅許向二結政一爲二頭辨宗賴朝臣習禮一也云々報牒可レ加二草名一近代眞名也
又云長元三年十二月廿五日經賴卿記云々吉書署事中少辨次第云內案加二眞名一正文加二草名一
今昔物語云今ハ昔夏比ヨキ瓜ヲ得タリケレハ人ニ贈ラントテ十顆ハカリヲ厨子ニ入テ此瓜不レ可レ取ト云テ出ニケリ云々家內ノ者共コハ何故ニ喚タマフニヤト思フ程ニ鄕ノ人トモ喚集テ父瓜ヲ取タル兒ヲ永ク勘當シテ此人々ノ判ヲ取也判スル者共イカナル事ソト問ヘハ思フ所侍ルト云テ判ヲ取ケリ云々廳ノ下部トモ用ヒスシテ怒リ罵リケレハ父ソコタチ此事ヲ虛言ト思ハヽ其證ヲ見スヘシトテ在地判ヲ取タル文ヲ取出シテ下部トモニ見セカノ判シタル人共ヲ喚テ此旨ヲ云ヘハ判シタル人トモ正シク先年カヽル事アリキト云
融通念佛緣起云去し承安の頃疫癘おこりて人多く病死せり云々然らは番帳を披見すへしといふ主則是を見するに疫神隨喜しける氣色にて結衆の名字の下ことに判形を加へてけり云々其夜明て番帳を見れは名字の下ことに判形あり
消息耳底抄云二合字事我ヨリ下樣下人程ノ者ナントニ仰書スレハ恐申ニヨリテ二合ト草ニ書也何名ニモ讀成故也奈良ノ朝小野篁等始テ作出給也此事普通ニハ知及ヌコト也常ニハ此ヲ不レ可レ用也秘事也
講習餘筆云今ノ書判ハ押字ト稱シ又花押トモ云東觀餘論ノ說ニ唐ノ文皇群臣ノ上奏スルニ眞草ヲ用ルニ任ス惟名ハ草スルヿヲ得ス遂ニ名ヲ草スルヲ花押トス後人ノ花押ハ乃草ヲ以ソノ自書ニ記ス故ニ押字ト云唐人及宋ノ初前輩與レ人書牘ニ或只押字ト名トヲ用或ハ己カ名字ヲ書セスシテ別ニ形摸ヲナスハ非ナリト云リ又孫公談圃ニ先朝ノ人書狀簡尺ニ多クハ押字ヲ用ルハ簡省ニ從テ代レ名ナリト云リ然レハ押字ハ我名ヲ書スル處ニ略シテコレヲ草書スルヿヨリ起レリサアルヿナルニ今ノ人ハ種々ノ形ニ書ナシテ全ク字體ニアラスサテ其畫間ノ空穴ノ數ニテ吉凶ヲ云其生ノ性ニ叶ヘリノ叶ハサルノト云ル附會ノ說トモ

古今要覽稿卷第十八

●姓氏部

●すゑ判　草名　花押　押字

すゑ判は本名草名と云漢名を花押とも押字ともいへり西土にての始未た詳ならすといへとも晉の代の押字あるよしは程史に見え又戯鴻堂法帖に顧愷之の押字あるときは晉の代には慥かに行はれたることしられたり池北偶談に見えし諸葛武侯の押字といへるは正しく花押の形狀ならんとも思はれすさりなから三國の比に權輿せしものにやとは思はるゝなり我朝にては奈良の朝小野篁等始て作出給ふ也と消息耳底抄に見えたり奈良の朝とは平城天皇の御宇なるへしされとも東大寺の文書に良弁僧正の花押あるときははやく其前よりもありしなるへし又高野山什物承和二年の弘法大師の遺告に押字あり其尾に國判といふもの見ゆ五人連署の中二人は正しく草名なりこれ古文書中において草名の所見最古きものなり新井筑後守曰異朝の押字は天子の畫諾と云事より始れりと云なり此説通雅に見ゆ凡諸侯より奉る所の議奏に天子自ら諸の字を草書にてしるし賜るを畫諾とは云なり皇朝にも古より天子詔勅に御畫と云事ありしなれは其由て來ることは久しきことにや（同文通考）伊勢貞丈云御畫とは太政官より詔書勅書等を書て御覽に備へ奉る時天子筆を取て其書の年月の下に何日と書加給ふこともあり其法式は公式令禁祕抄等に見えたり又聖武天皇感寶元年閏五月廿日佛事の勅書の模本を見れは年號の上に勅の字を書給へり是又御畫也又橘の諸兄公藤原豐成大僧都法師行信の連署あり何れも位署は他筆なれとも名は少し大字にて自筆と見ゆ又東大寺所藏の古文書の模寫を見れは貞觀年中の文書には押字なくして是も位署は他筆にて史官の名は自筆と見ゆ辨官は名を書すして姓の下に朝臣の二字を少し大字にかけり是自筆と見ゆ是等自筆を以證とすること晝諾御畫と一意なり是等の事轉變して終に押字出來るなるへし（押字考）これ實に花押の由て來る所也二子の考盡せり仍てこれを取てあへて弘賢か言をついやさす今も攝家なとの書札は多く代筆にて草名のみ自筆な

山岡明阿彌曰此文によれは姓は百官の正統を繫て天子より賜はるものなり氏はその姓より分れて出たるものにて子孫の旁出を別つ故とし族はまたその氏中より分れて旁文なるものなれとも漢已後はまた悉混雜して族も姓となりしといへり姓氏も三代の後は合て一つになれるかことし今此方の俗にていへは姓は重くして云々

釋例云、別而稱之、謂二之氏一、合而言之、則曰レ族、例言二別合一者、若二宋華向出戴桓公一、獨擧二其人一、則曰二華氏向氏一、並指二其宗一、則云戴族桓族、記謂二之庶姓一者、以二始祖一爲二正姓一、高祖爲二庶姓一、庶姓亦氏族之別名也、姓則受二之天子一、族則稟二之時君一、其不レ賜者各從二其父之姓族一、黃帝之子、兄弟異レ姓、周之子孫皆姬姓者、古今不レ同、賜レ姓者亦少、惟外姓嬀滿之徒、賜レ族者、有二大功德一、宜二世享祀一者方賜之、王朝大夫不三封爲二國君一者、王賜二之族一、春秋尹氏之徒、魯挾鄭宛、未レ賜レ族、故單稱レ名、其士會之帑、處秦者爲二劉氏一、伍員之子在レ參爲二王孫氏一、知果自別二其族一爲二輔氏一、皆身自爲レ之、

○釋名

族

續日本紀周禮左傳通志略○族は屬也聚也又類也ともあり一族なといふは親子兄弟血族の一類まとまりたるをいふ他人に對していふなり屬はつゝく義類はたくひなれは皆したしみちなむ義なり周禮に三族と見ゆるは父子孫の三をいひ書經に九族とみゆるは高祖より玄孫までをいひ詩經に公族と詠するは同祖をいふなり今氏々のわかれたるを族といふは一類同屬の枝葉なる故にいふ

苗字

藝苑日渉○苗は草の新に生出たるをいふなれは子孫旁出の人の號といふ意なり字はわかれの人の名といふ義なるへし

ものを遠藤といひ近江にあるものを近藤と云類其枝葉次第にわかれ繁庶なるに從ひて號を別ち立つ通俗苗字といふもの卽是なるよし藝苑日涉記す西土にては苗字も天子より賜ふことは和漢制度の異なる所以なり春秋傳に魯羽父其君隱公に諡族とを請ひ求むる時隱公其臣衆仲に謀る衆仲のいへる字アザナを以て諡とし又以て族とすといふに隨ひ無駭の祖公子展といへれは其字を取て展氏と族を賜ふ隱公八年この類卽同氏よりわかれたるものゝ稱跡なることゝえるし故に族者類聚藝苑日涉なといふことと見えたり

續日本紀孝謙紀云、高麗百濟新羅人等云々、其戶籍記、無二姓及レ族字一、於レ理不レ穩、宜レ爲二改正一、

藝苑日涉云、族則屬也、子孫連屬、其傍支別屬、則各自立氏、孔穎達左傳疏云故氏族對レ文爲レ別、散則通也、左傳云、問二族於衆仲一、下云、公命以字爲二展氏一、是也、日知錄云又云、氏則不三必受二之天子一、人々有之、後世子孫、傍支別屬、則或以レ地、或以レ事、各自命レ氏、俗謂二之苗字一、苗字卽族也、

周禮春官小宗伯云、掌二三族之別一、以辨二親疏一、註曰、三族謂二父子孫一、人屬之正名一、

詩經周南云、振々公族、傳曰、公族公同祖也、

書經堯典云、以親二九族一、註曰、高祖至二玄孫一之親、

又同上云、方レ命圮レ族、傳曰、族類也、

春秋左氏傳隱公八年云、無駭卒、羽父請二諡與一レ族、公問二族於衆仲一、衆仲對曰、天子建レ德、因レ生以賜レ姓、胙二之土一而命二之氏一、諸侯以レ字爲レ諡、因以爲レ族、官有二世功一、則有二官族一、邑亦如レ之、公命以レ字爲二展氏一、

史記酷吏列傳云、義從遷爲二河立酎一、至則族二滅其豪穰氏之屬一、云々、南陽吏民、重足一レ跡、而平氏朱彊杜衍杜周、爲二從牙爪之吏一、

通志略云、得レ姓受レ氏者、三十二類、云々、十曰以レ族、如二丁氏癸氏祖氏稱氏第五氏第八氏之類一、云々

通雅云、姓非二天子一、不レ可二以賜一、而氏非二諸侯一、不レ可二以命一、姓所三以繫二百官之正統一、氏所三以別二子孫之旁出一、族則氏之所レ聚而已、蓋別レ姓則爲レ氏、別レ氏則有レ族、族無レ不レ同レ氏、氏有レ不レ同レ族、故八元八愷出二于高陽氏、高辛氏一、而謂二之十六族一、是氏有レ不レ同レ族也、高氏華氏謂二之戴族一、向氏謂二之桓族一、是族無レ不レ同レ氏也、蓋古以レ國爲二氏號一、故旁支謂二之族一、自レ漢己後族卽一姓矣、

無謚者何、無爵故無謚、或曰夫人有謚、夫人一國之母、修閨門之內、群下亦化之、故設謚以彰其善惡、春秋傳曰、葬宋秦姬、傳曰其稱謚何、其賢也、又云、所以謚之爲堯何、爲謚有七十二品、禮記謚法曰、翼善傳聖謚曰堯、仁聖盛明謚曰舜、慈惠愛民謚曰文、强理勁直謚曰武、風俗通云姓有九、云々以謚戴武宣也、

○里名

おくりな釋謚

姓氏錄釋日本紀大鏡周禮禮記通志略○按に謚は說文に行之跡也と見え釋名に曳也白虎通引也と解す死後に其人の行跡を表して号を命す人これを見はけみて善をなさしむる所以なりおくりなの義は辭のことくにて人死後に贈り名つくるいひなり文今俗謚に作るは誤なり音エキなり諡の音シ又字典イの音もゑるしたり又省字謚に作ることもあるよしは字典に類篇をひけり

○正誤

古今原始云、後漢明帝皇太后陰氏崩、上其謚曰光烈、○后有謚始于此、婦人從夫禮也、今曰光、仍用帝謚、後世四字二字、始去其王之謚而專稱之、失亦甚矣

山岡明阿彌云穆天子傳に盛姫に謚して哀淑人といふ事見ゆ是夫人に謚あるの始とやいふへき后の謚は漢高祖にはしまれり

安齋隨筆云謚陌韻伊昔切音エキ集韻笑貌と見えたりエキの音によめは笑ふ貌なりオクリナにはならす謚號をエキ號と云は誤なりエキの音は謚を諡に作りしより益の聲に諧てエキの音とするなるへし後代の音ならん

按に謚はエキの音にあらさることをいへるは當れりたゝしエキの音に續は笑貌オクリナにはならすといへるは聊違へる歟謚は自分諡は自分…にて各別なり字典に正字通を引て俗用爲諫行之謚非と記したるを見てゑられたり

族　苗字

皇國にてはかはねとうちは天皇より賜ひ苗字は自ら稱する號なり清和天皇の流滿仲朝臣攝津國多田郡に住するに依て多田と稱す其他溝杭井上小野能勢倉垣等の稱號みな其類なり族は氏族と連書して氏より分れたる人の稱謂なり譬は氏の藤原なる人遠州にある

又云得姓受氏者三十二類云々、十七曰以謚、如文武哀
繆莊僖康、是也、
又云上謚法　神　聖　賢　文　武　成　康　獻　懿
元　章　釐　景　宣　明　昭　正　敬　恭　莊　肅
穆　戴　翼　襄　烈　桓　威　男　毅　克　壯　圉（或作御）
魏　安　定　簡　貞　節　白　匡　質　靖　眞　順
思　考　曷　顯　和　玄　高　光　大　英　睿　傳
憲　堅　孝　忠　惠　德　仁　智　愼　禮　義　周
敏　信　達　寛　理　凱　淸　直　欽　益　良　度
類　基　慈　齊　深　溫　讓　密　厚　純　勤　謙
友　祁　廣　淑　儉　靈　榮　厲　比　絜　舒　賁
逸　退　訥　偲　述　懋　宜　哲　察　通　儀　經
庇　協　端　休　悅　綽　容　確　恒　熙　洽　紹
世　果
右百三十一謚、用之君親焉、用之君子焉、
又云中謚法　懷　悼　愍（亦作閔）　哀　隱　幽　冲　夷
懼　息　攜　鄰　愿　儆
右十四謚、用之閔傷焉、用之無後者焉、
又云下謚法　野　夸　躁　伐　荒　煬　戾　刺　虛
蕩　墨　惰　亢　千　褊　專　輕　苛　介　暴　虐
愎　悖　凶　慢　忍　毒　惡　殘　[illegible]　擾　頑　昏
驕　酗　湎　僥　不　侈　惑　靡　溺　僞　妄　譏
謟　誣　詐　譎　詡　詭　姧　邪　慝　蠱　危　圮
懦　撓　覆　敗　數　疵　饕　費
右六十五謚、用之殲夷焉、用之小人、
凡上中下謚共二百十言以備典禮之用
按に通志略載する所上中下三等の謚法取用ゐるへきにもあらされとも古謚法とて立たることを見るへきためしはらくこれをあくるのみ
白虎通云、謚者行之跡也、所以別於後代、著善惡垂無窮、無自推觀施後世、皆以勸善著、戒惡明不勉也、又云、謚者何也、○之爲言引也、引烈行之跡也、所以進勸成德使上務節也、故禮特牲曰、古者生無爵、死無謚、此言生有爵死當有謚也、死乃謚之何言人行終始不能若一、故據其終始從可知也、士冠經曰、死而謚之、今也所以臨葬而謚之何、因衆會欲顯揚之也、云々、謚或一言或兩言何、文者以一言爲謚、質者以兩言爲謚、故尙書曰高宗也　也、湯死、後世稱成湯、以兩言爲謚也、云云臣當受謚於君也、卿大夫老歸、死有謚何、謚者別尊卑彰有德也、卿大夫歸無過、猶有祿位、故有謚也、夫人

族、云々

通志略總序（惟期盛世序）云、謚法一家國之大典、史氏無其書、奉常失其旨、周人以諱事神、謚法之所由起也、古之帝王、存亡皆用名、自堯舜禹湯至于桀紂、皆名也、

　顧炎武日知錄に紂號也とあり其說別號部に辨す

周公制禮、不忍名其先君、武王受命之後、乃追謚太王王季文王、此謚法所由立也、本無其書、後世僞作周公謚法、欲以生前之善惡、爲死後之勸懲、且周公之意、既不忍稱其名、豈忍稱其惡、如是則春秋爲尊者諱爲親者諱、不可行乎周公矣、此不道之言也、幽厲桓靈之字、本無凶義、謚法欲名其惡、則引辭以遷就其意、何爲皇頡制字、使字與義合、而周公作法、使字與義離、臣今所纂、並以一字見義、削去引辭而除其曲說故作謚法、

又（謚略）云、周人卒哭而諱、將葬而謚、有諱則有謚、無諱則謚不立、蓋名不可名已、則後王之語前王、後代之及前代、所以爲昭穆之次者、將何以別哉、生有名、死有謚、名乃生者之辨、謚之死者之辨、初不爲善惡也、以謚易名、名尚不敢稱、況可加之善惡乎、非臣子之所安也、

又云、父在觀其志、父歿觀其行、三年無改於父之道、可謂孝矣、不若是、是不當於人心、子議父、臣議君、秦人之所厭而削之也、今先儒之所爲謚者、正秦人之論耳、不合乎古道、

又云、厲王過矣、使厲王而有暴虐無親之名、則宣王不得爲孝子、幽王過矣、使幽王而受擁遏不通之責、則晋文侯鄭武公不得爲良臣、成周之法、初無惡謚、謚之有惡者、後人之所立也、由有美刺之說、行然後人立惡謚、

又云、謚法、惡謚莫如桀紂、其次莫如桓靈、其次莫如幽厲、此古今之所聞也、以臣所見皆不然、桀紂是名耳、非謚也、名者生之所命、而非死之所加也、當夏之季、當周之興、雖有謚法、然得謚爲榮、不得謚爲辱、

又云、謚法行而其□紀々其書見於世者、有周公謚法、有春秋謚法、有廣謚、有古文尚書、有大戴記、有世本、獨斷、有劉熙之書、有來奧之書、有沉約之書、有賀琛之書、有王彥威之書、有蘇冕之書、有扈蒙之書、有蘇洵之書、其實皆由漢魏、十來儒生取古人之謚、而釋以己說、集而爲法也、

又云、孔文子何以謂之文也、子曰、敏而好學不恥下問、是以謂之文也、然則文子之謚、初無謚法、仲尼則因問、而即其人之行事以釋之、奈何先立其法、

續かせ給ひたる二所は出家し給ひつれは謚おはせす

類聚名物考云おくりなを印本にはいみなとのみかけるは其事のたかひたるうへに古本には必しも謚と有に從ふへし

昆陽漫錄云、蔡邕、朱公叔謚議云、古之以子配レ謚者、魯之季文子孟懿子衞之孫文子公叔文子、皆諸侯之臣也、至二于王室之卿大夫一、其尊與二諸侯一並、故以レ公配ト是ニテ子ヲ以テ謚ニ配スルノ義知ヘシ

又云、文昌雜錄云、唐德宗貞元十年七月、賜二故唐安公主一曰二莊穆一、蓋公主賜謚、始二於此一也、

舜水文集云、問守約、嘗欲下謚二楠公正成一爲中忠武上、庶人議レ謚、得レ無レ罪乎、荅柳下惠之稱、乃其妻謚之、文中子乃門生謚之、但要公而當耳、於レ禮無レ戾也、易名之典、在二於人心一、人心思慕哀傷之、謚爲二忠武一、適得二其宜一

和訓栞云宇多帝以後は謚を奉らす國忌を止めらる遺勅によるなり正統記に國忌山陵を置れたる事君父のかしこき道なれと尊號をとめらるゝ事は臣子の義にあらすといへり日本紀に神武より皆細書にしたるは三船の撰といへは後の事なれは桓武まて五十代謚號ありし聖武孝謙は在位の時奉りし尊號平城はなしとみえて和州の所名嵯峨は山城の地名なり淳和は一院の號にして謚にあらすされと仁明文德の謚號あり淸和陽成は又院號なり光孝は謚を奉る宇多已後は離宮をもて稱す六十三代冷泉院より天皇の號なし後世崇德安德は謚號あり天皇と稱し奉る後の字を用ゆるは後一條已後の製なり

類聚名物考云穆天子傳に天子盛姬か謚を爲て哀淑人といへる事あり是夫人に謚あるの起ならん后の謚は漢の高祖に始れり

周禮（春官大史）云、小喪賜レ謚、疏云、賜レ謚制、實始二於周一也、

禮記（檀弓）云、死而謚、周道也、疏云殷以上有二生號一、仍爲二死後之稱一、周則死後別立レ謚

史記（正義謚法解）云、惟周公旦太公望、開二嗣王業一、建二功于牧野一、終將レ葬、乃制レ謚、遂叙二謚法一、謚者行之迹、號者、功之表、（古者有二大功一則賜二之善號一以爲レ稱也）車服者、位之章也、是以大行受二大名一、細行受二細名一、行出二於己一、名生二於人一、（名謂二號謚一）

春秋左氏傳（隱公六年）云、羽父請二謚與一レ族、公問二族於衆仲一、衆仲對曰、天子建レ德云々、諸侯以レ字爲レ謚、因以爲

古今要覽稿卷第十七

●姓氏部

●おくりな諡

諡は死後に尊ひて設たる稱號にて諱に對して起るなり皇朝にては孝德天皇の淡海御船に勅ありて神武天皇以來の諡を定給ひしこと釋日本紀見えたれは此時そ始なるへき后の諡は桓武天皇の御母に奉られしや始なるへき續日本紀西土には周武王の世に其先祖をあかめ生前の名を稱するを諱み其德行を表して諡を作是臣子の厚意よりいつる所なりしかるを諡法に善惡の文字分ちあくるは後世の僞作にて古にかつてなき物なり其祖先を尊ひ名をたに唱ふるを諱て諡を作る人君父に惡行あれはとて何そ臣子の分として其惡學を諡に施すへきや通志略たゝし諡は爵ある人に命することと古意なるよし禮記郊特牲見えまた德ある人は爵なきにも諡を命することも見えたり皇國にては太政大臣には必諡有それも入道せらるれは諡なし今佛家にていふ戒名はけたし諡の轉したるものなるへし大鏡

釋日本紀述義五云、神武天皇云々、私記曰、師說、神武等諡名者、淡海御船、奉ㇾ勅撰也

姓氏錄山城國神別云、鴨縣主云々、賀茂縣主本同祖、神日盤余彥天皇諡神武後也、云々

續日本紀桓武紀云、八年十二月乙未廿八皇太后薨、明年正月十四日奉ㇾ誄上ㇾ諡曰二天高知日之子姬尊一、皇太后、姓和氏、諱新笠、贈正一位乙繼之女也、母贈正一位大枝朝臣眞妹、后先出ㇾ自二百濟武寧王之子純陁太子一、云云、天宗高紹光仁天皇、龍潛之日娉而納焉、生二今上桓武早良親王能登內親王一、寶龜中改ㇾ姓爲二高野朝臣一、今上即位、尊爲二皇太夫人一、九年追二上尊號一、曰二皇太后一、其百濟遠祖都慕王者、河伯之女、感二日精一而所ㇾ生、皇太后則其後也、因以奉諡焉、

大鏡云太政大臣になりぬる人はうせ給ひて後かならす諡と申もの有けり然りといへとも大友皇子やかて御門に立かへり高市皇子の御諡おほつかなし又太政大臣といへと出家しつれは諡なしされは此十一人

十一人とは忠仁公(良房)より閑院大臣までをいふ系圖詳ならす後の考をまつ

レ不レ爲二上趙壹之子一儻不レ作レ一便是下レ筆卽妨是書皆觸也

又引二新唐書一云韋皐爲二西川節度使一沒蜀人德レ之見二其遺像一必拜凡刻レ石著二皐名一者皆鑱二其文一尊諱レ之

又引二兼明書一云二十爲レ念吳主之女名二十而江南人呼二二十一爲レ念而北人不三爲レ之避二也以上天中記引

宗諱怕以二怕山一爲二常山一
又引二宋朝事實一云大中祥符有レ神降自稱二宗祖名玄
朗一詔二中外一不レ許二斥犯一
又引二埜語一云朗山改爲二確山一高宗諱構避二嫌名一者
仍二其字一更二其音一者勾濤是也加二金字一者鈎光祖是也
加二絲字一者約紡是也加二草頭一者苟諶是也改爲二句字一
者句思是也增二勾龍一者如淵是也句龍去二上一字一者太
淵是也
又引二雲麓漫抄一云梁朱溫父諱誠改レ城曰レ墻又改曰
レ州如二東都州南州北一是也閔人避二王審知諱沈氏一去
レ水爲レ尤
又云司馬遷以二父諱談一史趙世家以二張孟談一爲二孟同一
季布傳貴人趙談爲二趙同一與二任安一書同子參乘爰絲變
色　王羲之祖諱正每書二正月一爲二初月一或作二一月一餘
則以二政字一代レ之　范曄父名泰後漢書郭林宗爲二郭太
鄭一公業爲二鄭太一　李翺父名楚金故爲レ文皆以レ今爲
レ茲蘇子瞻祖名序故以レ序爲レ叙或改作二引字一
又引二晉禮志一云太元十三年召二孔安國一爲二侍中一表
以三王瑜名犯二私諱一不レ得二連署一求レ解有司議云名終
諱レ之有レ心所レ同聞レ名心瞿亦明二前語一而禮復云君所
無二私諱一大夫之所有二公諱一無二私諱一王祐名犯二父諱一
聽二許換レ曹盖是恩出二制外一耳夫皇朝禮大百僚備レ職
編官列署動相經涉若以二私諱一人遂二其心一則移レ官易
レ職遷流莫レ已
又引二齊書一云始安貞王道生字孝伯太祖次兄也子鳳字
景慈卒二於宋世一明帝贈二始安靖王一改二華林鳳莊門一
爲二望賢門一太極東堂畫二鳳鳥一題爲二神鳥一而改二鸞鳥一
爲二神雀一
又引二南史一云王亮王攸之子爲二晉陵太守一在レ職淸公
有二美政一時有二晉陵令沈巑之一性麁踈好犯レ諱亮不
堪遂啓代レ之
又引二顏氏家訓一云梁世謝擧甚有二聲譽一聞レ諱必哭爲二
世所一譏又臧逢世臧嚴之子也篤學脩レ行不レ墜二門風一
孝元經牧二江州一遣三往建二昌督事一郡縣民庶兢脩二牋
書一朝夕輻輳几案盈二積書一有下稱二嚴寒一者上必對レ之流
レ涕不レ省取記多廢二公事一物情怨駭竟以不レ辨而還此
竝過レ事也
又同上云劉縚緩綏兄弟竝爲二名器一其父名昭一生不レ
爲二照字一唯依二爾雅一火傍作レ炤耳然凡文與二正諱一相
犯當自可レ避其有二同音異字一不レ可二悉然一呂尙之兒如

其亭曰浩然亭咸通中鄭誠謂賢者名不斥改號曰孟亭皮日休作記

又曰唐憲宗方爲太子王紹避諱改名時議者以爲諂

左傳魯大夫申繻曰晉以僖侯廢司徒宋以武公廢司空先君献武廢二山

注云僖侯名司徒武公名司空二山具敖献公名具武公名敖

五代史曰郭崇韜父諱弘宰相豆盧革等皆諂事之因他事奏改弘文舘爲崇文舘

南史曰王琨避諱過甚父懌母名恭心不得犯焉時咸謂矯枉過正

唐書曰賈曾除中書舍人固辭以父忠字同音議者以爲中書是曹司名又與曾父音同子異於禮無嫌曾乃就職（顏氏家訓以下淵鑑類函引）

天中記云景帝諱啓史記微子啓作微子開宣帝諱詢以荀卿爲孫卿至唐楊倞改孫卿新書爲荀卿子元帝諱奭比爲盛氏

又云明帝諱莊相襲謂莊爲嚴莊光爲嚴光莊君平爲嚴君平後書君平博覽亡不通依老子嚴周之指著書十餘萬言殤帝諱隆以隆慮爲林慮安帝父諱慶以慶氏爲賀氏

又云吳黃龍三年嘉禾生于由拳改縣曰禾興後孫皓父名禾改曰嘉興

又云司馬師諱師以師保爲保傅以京師爲京都司馬昭諱昭以昭穆爲韶穆昭君爲明君韋昭爲韋曜愍帝諱業以建業爲建康

又云隋帝諱忠凡郎中皆去中字侍中爲侍內中書爲內史中廬爲次廬魏徵隋書凡忠字皆謂之誠、謂死事之臣爲誠節傳唐太宗詩疾風知勁草板蕩識誠臣煬帝諱廣以廣樂爲長樂廣陵爲江都

又云高祖父諱昞北史丙以景字代之如景子景午景戌之類云々北齊趙文淵爲趙文深太宗諱世民凡言世皆曰代民皆曰人南史王規傳俊民作俊人

又云高宗諱治凡言治皆曰理章環云至理之主不代出陸贄曰與理同道罔不興脇從罔理韓文策問垂衣裳而理無爲而理玄宗諱隆基太一神君基民基幷改爲其字隆州爲閬中代宗諱豫以豫章爲鍾陵以薯蕷爲薯藥德宗諱适改括州爲處州穆

在秘閣王弘好其書日對千客不犯一人諱

又云唐高祖之祖諱虎李延唐人也作南北史易石虎以季龍易韓擒虎以韓擒成

又云徐積以父名石平生不用石器過石則避不踐

又云尙書省文字下六司諸路例皆言勘會曾魯公爲相始作勘當以其父名會避之也　京師舊有平準務自漢以來有是名蔡魯公以其父名準亦改爲平貨務以上事文類聚引

顏氏家訓曰凡避諱者皆須得其同訓以代換之桓公名白傳有五皓之稱厲王名長琴有修短之目不聞謂布帛爲布皓腎腸爲腎修也

史宋世家注曰莊子曰宋桓公行未出城門其前驅呼辟蒙人止之以爲狂也司馬彪云呼辟使人避道蒙人以桓公名辟而前驅呼辟故爲狂也

四朝聞見錄曰晉簡文鄭后諱阿春以春秋爲陽秋武后諱瞾以詔書爲制書鮑照爲鮑昭金鳳花中都謂鳳兒花光宗后慈懿李氏名鳳娘六宮避諱稱曰好兒女花

輿地志曰晉東海王越世子名毗中宗爲越所表遣渡江故改毗陵爲晉陵

又曰趙辟石勒諱羅勒爲蘭香馬勒爲轡錢武肅王諱鏐劉家爲金家留住爲駐住

埜語曰王元后父諱禁以禁中爲省中武后父諱華以華州爲太州

翰府名談曰楊行密據江淮至今滁人謂荇溪爲菱溪杏爲甜梅揚州民呼密爲蜂糖

青箱雜記曰宋太祖諱匡胤語訛近香印故賣香印者不敢斥呼鳴鑼而已仁宗諱禎語訛近蒸故呼蒸餠爲炊餠

又曰劉溫叟父名岳終身不聽樂不遊嵩岱每赴內宴聞鈞奏則涕泣移時曰若非君命則不至是

賓暇集杜恕篤論云杜伯度名操字伯度曹魏時以其名同武帝故隱而擧字後人見其姓杜字伯度又刪去伯字呼爲杜度

山堂肆考曰吳孫權立立蔣子文廟於鍾山因避祖諱改爲蔣山

又曰唐韋暢父皐沒蜀人德之凡刻石著皐名者皆鑱去其文以諱之

又曰唐王維初過郢州畫孟浩然像於刺史亭因名

ことありされは君前にて我家諱を避ることなきよし（同上）見えたりまた詩書にあたりては至尊の御名もいます故に詩に克昌ニ厥後ー駿發ニ爾私ー邦其昌等の句ありまた文章を作るにあたりて諱に觸る字あるともさけす魯僖公の名申なれとも戊申と書し莊公の名同なれとも同盟と書してさくるところなしまた祖廟のうちにて樂歌を唱へなとするに忌ことなきはみな古禮なりかの諱のおこるゆゑんは父母歿後にあたりその名をきけは父母をおもひ出すことあるによりてその名をさけて呼さるなり故に曾皙羊棗を嗜て曾子これを食ふを憚ること（孟子）見え禮に卒哭してより父母の名を諱と記したれは死後にその名をいむこと諱の本意たるへしされとも晉僖公の名司徒なるによりて司徒の官を廢し宋武公の名司空なるによりて司空の官を廢すること（左傳）見えたれは生人のためにいむこともあるへくしてこれは尊記を敬する心にいつるなりされは生死ともに父母の名はいむへきを却て父母歿後にとり以て我名とする類は大に古に反けるといふへし

禮記（曲禮）云君所無ニ私諱ー大夫之所有ニ公諱ー詩書不レ諱臨レ文不レ諱廟中不レ諱夫人之諱雖レ質ニ君之前ー臣不レ諱也婦諱不レ出レ門大功小功不レ諱

又（同上）云禮卒哭而諱

疏云古者生不ニ相諱ー卒哭乃有ニ神諱ー也

又（同上）云卒哭以ニ木鐸ー狗ニ於路ー捨レ故而諱レ新

注云故謂ニ高祖之諱ー新謂ニ新死者之諱ー

又（檀弓）云二名不ニ偏諱ー夫子之母名徵在言レ在不レ稱レ徵言レ徵不レ稱レ在

左傳（桓公六年）云周人以レ諱事レ神名終將レ諱レ之

疏云自レ殷以往未レ有ニ諱法ー諱始ニ於周ー

孟子（盡心下篇）云諱レ名不レ諱レ姓姓所レ同也名所レ獨也

事文類聚後集云漢呂后諱雉令ニ臣呼レ雉爲ニ野鷄ー武帝諱徹改ニ徹侯ー爲ニ通侯ー　光武諱秀改ニ秀才ー爲ニ茂才ー　明帝諱莊改ニ莊助ー爲ニ嚴助ー　唐高祖諱淵改ニ劉淵ー爲ニ劉元海ー改ニ戴淵ー爲ニ戴若思ー

又云司馬遷報ニ任少卿ー云同子驂乘盖指ニ趙談ー與ニ其父ー同レ諱故曰ニ同子ー

又云羊祜爲ニ荊州刺史ー及レ卒有ニ遺愛ー州人懷レ之爲諱ニ其名ー改ニ戸曹ー爲ニ辭曹ー焉

又云梁武帝詔ニ王僧孺ー改ニ百家譜ー合一百七十二卷藏

闕畫行れてより避諱の事兩途に分る又おのつから偏諱せるに至る歎ても猶歎へき事也東都には幸に未た此制あらす中古以來公武制を殊にす京都に拘らすして後來此制なからん事を希のみ

江次第親王宣下條云載ニ及レ唐偏諱之說一然則古來亦有ニ其例一況復當時昇平年久禮儀日廢何獨膠レ柱然漢朝有ニ之字ニ本朝無下用ニ之字一例仍不レ得レ止則省ニ一畫一書レ之而可也此說見ニ于唐六典一

其文曰爲字不成不レ云省畫、不成云者謂レ不レ成ニ就其字體一也、然則假令省ニ數畫一若ニ尚成ニ其字體一、是乃略レ字耳、不レ可レ謂レ不レ成レ字歟

唐六典禮部注云若寫ニ經史羣書及撰錄舊事一其文有下犯ニ國諱一者上皆爲字不成

避諱不及曾高

天子の御諱をさくるは皇祖より以下をさくへくして曾高に及さるよし職員令見ゆ西土にては父より高祖にいたりいみて稱せさるなりこれは五世にして親竭るといふ義によれるならん禮記曲禮に捨レ故而諱レ新といふこと見えて注に故は高祖之諱新は新死者之諱とあるにて知らるかの逮レ事ニ父母一則諱ニ王父母一不レ逮レ事ニ父母一則不レ避ニ王父母一といふは年幼にして父母を知に及はされは祖父母の諱はさけさるよし禮記見ゆるは庶人のことにて天下の通禮にはあらさるなり

職員令云諱

義解云謂諱避也言皇祖以下名號諱而避之也

公式令云過所式某事云々度ニ其關一往ニ其國一云々皇祖

義解云不レ及ニ曾高一也○弘賢曰これは平出の式にて諱の事にはあらされとも皇祖を平出して曾高に及はすといふ事を徵すへきなり

禮記曲禮云逮レ事ニ父母一則諱ニ王父母一不レ逮レ事ニ父母一則不レ諱ニ王父母一云々

西土所避諱

諱は周初にはしまりたる禮にて殷より上世にはこのことなし左氏傳注疏そのいむ樣皇朝は訓を以し西土は音を以てすされとも音の嫌はしきは忌さることにて禹と雨丘と蓲(キウ)とのことき音似たれ共います禮記また二字熟したる名はその一字を忌ことなし孔子の母徵在なれとも徵といひ在といふはさらにさくることなし同上

拟諱は至尊の御名をいみてさくるは天下一般のことにてまた家々に我祖父母を尊ひてその名をさくる

東鑑文治二年閏七月十日云義經者與二殿三位中將殿一經良依レ爲二同名一被レ改二義行一

正安大嘗會記云正安三年十一月廿三日叙位從五位上藤原行房俄改レ名元名敦長渉二後朱雀院御諱之訓一漏二叙位一之間改名之上可レ被レ叙之由申沙汰了御諱敦良

陸奥話記云頼義朝臣應二朝選一專二征伐將帥之任一拜二陸奥守兼鎭守府將軍一令レ討二賴吉一入レ境著レ任之初俄有二天下大赦一賴吉大喜改名稱二賴時一同二大守名一有レ禁之故也

春日社三十講寂初御願文云弘安十一年四月廿一日太上天皇久―敬白後深草院御諱久仁

公卿補任云菅原道―天滿宮諱道眞源義―鹿苑院殿諱義滿

山槐記仁安二年六月廿五日云有二威儀師盛仁官府一件名字訓通二二條院御諱一仍外記來前之時懸二右食指於宮一外記驚屈立大理被レ仰可レ跪之由一外記跪拔レ笏候盛仁事若有二沙汰一哉之由被レ問而申旨不二分明一仍可レ相二尋大外記一之由被レ仰仍偁唯經二本路一問大外記一歸參申曰爲二自レ上被レ下之文一被レ印可レ宜歟上聊被レ命曰相二尋沙汰之有無一也然者可レ印之由示レ之返給

權記長保六年七月廿日云有二陣定一改元事也寛弘云々初以二寛仁一被レ定而左大辨申仁字爲二當時諱一可レ避歟云々

爲字不成

文書の内御諱の字にあへは其字を書しなから闕畫しし他字に替るに及はすと云事は唐の制なり西土にて漢の世には諱に替て行ふへき字を豫め定しを唐に及て斯の如く改しは尤簡易の法從へき事なり是を爲字不成と云六典に見えたり夫より以來今にいたるまて因循せり西土に在ても二名を偏諱せよと云る制は聞えされと世々偏諱せるは其俗の禮に過たるにて盟て學ふへからさる事なり皇國律令格式の設偏に唐の制度によりて取捨せられし所なり然るに此闕畫の事のみ行れさるは固より皇國の俗に從て訓を以避よとありし故なりそれも日本紀一部には諱を避る制なく却て御名を以國郡の名官職の名姓氏の名とせられしあり是を名代と云續日本紀より避譯の制ありて今日に至る但し江家次第に六典を引きて闕畫の沙汰ありしかとも行はれしにはあらす然るに近世朝廷に闕畫の事行る故實にはあらさるなり此事何の年よりと云事をえらすおもふに陽明家に六典を上木せられて普く翫はれしより始りけるにや往昔六典をえらさるにはあらす和漢制度差別ある事仰ても猶餘ある事也一度

今分數姓望請依勅改史字因蒙同姓於是桑原史大友桑原史大友史大友部史桑原史戶史六氏同賜桑原直姓船史船直姓（淡海公諱不比等）

又（稱德紀）云神護景雲二年五月丙午勅入國問諱先聞有之況從今何曾無避頃見諸司入奏名籍或以國主國繼爲名向朝臣名可不寒心或取眞人朝臣立字以氏作字是近冒姓復用佛菩薩及賢聖之號每經聞見不安于懷自今以後宜勿更然昔里名勝母曾子不入其如此等類有先著者亦即改換務從禮典

又（桓武紀）云延曆四年五月丁酉詔曰臣子之禮必避君諱頃者先帝御名及朕之諱公私觸犯猶不忍聞自今以後宜並改避於是改姓白髮部爲眞髮部山部爲山（光仁御諱白壁　桓武御諱山部）

三代實錄云元慶元年四月廿一日壬辰先是去三月廿九日今上奉表請太上天皇御封戶欲被許納是日太上天皇勅答曰云々太上天皇（諱惟仁）此勅書年月日下注惟字先是勅參議從三位大江朝臣音人令議太上天皇送天皇之書可注御諱將否音人奏議言謹按禮經君前臣名父前子名故周公告文王皆稱武王名又云見似目瞿聞名心瞿夫父者子之天也故其禮節之相去如天地之懸隔豈有父爲子稱其名乎夫天子之禮雖與庶人異而至于父子之間未有差別云々案諸家書儀父母與子書皆云爺告孃告遂無注其名者然則書御諱事未知攸據也謹奉勅命古今於勅書只書御書曰又無注御諱見之者可知誰書論之物情理不可然謹案摯虞決疑要云古者臨文不諱而今猶以爲諱嫌名不諱而今猶以爲諱二名不偏偉孔子母名徵在言徵不言在言在不言徵今亦不偏諱若據孔聖之前蹤唯注御諱之一字隨禮隨俗儻得其宜哉於是勅從之

職員令云治部省卿一人掌本姓云々諱（謂諱避也言皇祖以下名號諱而避之也）

類聚國史云大同元年七月戊戌改紀伊國安諦郡爲在田郡以詞涉天皇諱也（平城御名安殿（アテ））四年九月乙巳改伊豫國神野郡爲新居郡以觸上諱也（嵯峨御諱神野）

又云弘仁十四年四月壬子改大伴宿禰爲伴宿禰觸諱也（御諱大伴）

又云天長七年七年癸巳天下諸國人民姓名及郡鄉山川等號有觸諱者皆令改易（御諱正良）

古今要覽稿卷第十六

●姓氏部

●避諱

至尊の御名をさくる事臣子の禮なる事は論なし其避るに和漢の差別あり凡漢には其字をさけ和には其訓をさくるはこれ風土自然の事也皇國にて御諱を避られし事の史に見えしは元明天皇の御時若帶日子(ワカタラシヒコノ)姓を國諱に觸るに因て國造の姓に改られし始にて(續日本紀)孝謙天皇の御時には桑原史(ノフビト)年足と云もの大臣の名を忌て姓を改(同上)稱德天皇の御時には勅を下して避る事なきをいましめ給ひ(同上)桓武天皇の御時には臣子たる者君諱を避へき旨の詔あり(同上)平城天皇嵯峨天皇の御時には郡名の諱に觸るを改られ(類聚國史)淳和天皇の御時には氏を改(同上)仁明天皇の御時には廣く天下諸國人民姓名及地名に至まて諱を避へき由を宣ひ(同上)後鳥羽院の御時には前伊豫守源義經を追はるゝに臨て殿下の子息の名を避て義行と改(東鑑)後伏見院御時には藤原敦長諱を避て行房と改む(正安大嘗會記)是皆朝廷の議によりて改られし所也又私に改しは安倍の賴吉國守の名を避て賴時と名乘し類是なり(陸奥話記)是等皆其訓によりて避しところなり然といへとも二名偏諱せさると云に據て二字の御名を一字宛憚事は有ま敷事なり陽成天皇の御時太上天皇より參らせられし御書に御諱一字を記させ玉ひ(三代實錄)又臣下至尊の御名を寫す時も亦一字を書して一字を略す(春日社御願文)又至尊ならても憚へきは皆かくのことし(公卿補任)草子物語の讀法にすら後嵯峨院御名邦仁を憚て國人の字をクニタミと讀後宇多院御名世仁を憚て世人の字をヨノヒトと云或はヨビトと濁り靈元院御名識仁を憚て里人と云詞をさけ桃園院御名遐仁を憚て詠歌に問人と云る詞をよまさるも皆是偏諱せさる證なり

續日本紀(元明紀)云和銅七年六月己巳若帶日子(ワカタラシコ)姓爲レ觸ニ國諱ニ改因ニ居地ニ賜ニ之國造人姓ニ除ニ人字ニ(成務御諱稚足彦)

又(孝謙紀)云天平寶字二年夏五月乙丑云々桑原史年足等男女九十六人云々桑原史人勝等一千一百五十五人同書曰伏奉ニ去天平勝寶九歲五月廿六日勅書ニ偁(イハク)内大臣太政大臣之名不レ得レ稱者今年足人勝等云々本是同祖

皇後（一昨后）稍加慈氏越古天冊金輪聖神等號中宗踐祚號應天神龍元宗即位號開元神武後稍加爲開元天地大寶聖文神武則天以女主臨朝荀順臣子一時之請受尊崇之號自後因爲故事允文允武乃聖乃神皇王盛稱莫武踰此既以爲祖父之稱又以爲子孫之號雖顚之倒之時有變易曷嘗離此數代之後持無所回避貞元初主上超然覺悟乃下詔去其徽號直稱皇帝合于古矣近歲百僚復請加尊號上守謙冲意不之許昔光武皇帝詔群臣上書不得言聖孔子曰若聖與仁則吾豈敢其謙冲之意大矣哉

文撰典引（班孟堅）云厥有氏號紹天闡繹莫不開元於太昊皇初之首云々注蔡邕曰所依爲氏也號功之表也

○釋名

號（禮記疏周禮白虎通通志略日知錄）

別號

學山錄丹鉛錄○號は號令なりこれを以て名とするものその德を表しいさほしをあらはし萬民に號令し示す義をとりていふにやまた號はさけふ義なれは人より呼ふために設けたる義にもやこれを學山錄に別號といふもの名字の外別に設けたる稱謂なるか故なるへし字典に集韻を引て號又唬に作るも氏の說を引て号また號に作る體あれともみな俗字なるよし見えたり

下之大體號以自別於前所以表著己之功業也必改號者所以明天命已著欲顯揚己於天下也云云故受命王者必擇天下美號表著己之功業明當致施是也

又云春秋傳曰王者受命而王必擇天下之美號以自號也

通志略諡略云義皇之前名是氏亦是號亦是至神農氏則有炎帝之號軒轅氏則有黃帝之號一二帝之號雖殊名氏則一焉堯曰陶唐舜曰有虞禹曰夏后湯曰殷商則氏己異於名堯曰放勳舜曰重華禹曰文命湯曰武王則號己異於氏然是時有名號之別者不過開基之祖耳

日知錄云夏后氏之季而始有以十干為號者桀之癸商之報丁報乙報丙主壬主癸皆號以代其名自天乙至辛皆號也白虎通曰殷質以生子名子商之王著號不著名而名之見於經者二天乙之名履辛之名受是也曰湯曰紂則亦號也號則臣子所得而稱故伊尹曰惟尹躬暨湯頌曰武湯曰成湯曰湯孫也曰文祖曰藝祖曰神宗曰皇祖曰烈祖曰高祖曰高后曰中宗曰高宗而廟號起矣曰玄王曰武王而諡立矣曰大舜曰神禹曰大禹曰成湯曰寧王而稱號繁矣自夏以前純乎質故帝王有名而無號自商以下寖乎文故有名有號而德之盛者有諡以美之於是周公因而制諡自天子達於卿大夫美惡皆有諡而十干之號不立然王季以上不追諡猶用商人之禮焉

丹鉛錄云幼名冠字長而伯仲沒則諡古之道也未聞有所謂別號也杜甫李伯倡和互相稱名張仲吉甫雅什但聞舉字近世士夫多稱別號厥名與字懵然不知傳云々又近日民風澆猾白衣市井亦輒稱號永昌有鍛工戴東坡巾屠宰號一峯子

瑯琊代醉編云石林詩話云四海習鑿齒彌天釋道安之類舊不解梁惠皎高僧傳鑿齒與安書曰夫不終朝而雨六合者彌天之雲也弘淵源而潤八極者四海之流也故摘其語以為戲耳

按にこれは時に臨みて別號を作り唱へて一座の興となすことなり

封氏聞見記云秦漢以來天子但稱皇帝無別徽號則天垂拱四年得瑞石于洛水文曰聖母臨人永昌帝業號其石為寶圖于是群臣上尊號請稱聖母神

して居地を以號するもあるひは死後に門人その師を尊ひて設けたる號もありみな自分設くる所の號にあらす宋末に至り別號の稱すたれり同上 皇朝にても文字に携る人は號ある人もあり然るに後世のことにて古には所見なしその號は美稱なれはにや人に對していふは倨傲に近けれは卑賤に對するは別なり同輩以上の人には憚るへきことなり

學山錄云別號權輿乎戰國秦惠王時有寒泉子（注云秦處子之號）又若甘茂號樗里子范蠡自稱鴟夷子計然自號海濱漁父此別號之所昉也宋黃東發答請安張知縣書曰前輩道尊德盛爲世所宗仰恬於仕進者則有道號如濂溪則追記其舊地也如明道則其身後門人所以尊其師也如伊川則門人不敢指稱其師而以其地稱之也如六一居士則致仕後自戲之言也如東地涪翁則罪謫中自託名於蕭散者也如南渡後三先生道號最爲顯著近世始多慕用之然南軒先生但稱廣漢張某未嘗稱南軒也晦庵先生但稱新安朱某未嘗稱晦庵也云々嘗觀三代盛時士大夫止有姓名官稱至戰國亂世遂有雲陽君等之號游士東西奔走不復稱人之官不料我今聖世亦復有此怪事甚至丐徒賤隸倡優技藝莫不標榜自謂道號此又戰國亂世之所未聞者

又云閭市村曲細夫未有嘗無別號者而其所稱非庸淺則狂怪又重可笑兄山則弟必水伯松則仲叔必竹梅父此類則子孫引此物於不已噫愚矣哉至於近者則婦人亦有之云々別號自宋末盛有之而至于明朝極矣云々朝鮮國來聘于東朝其士大夫莫不有別號者而到于僕從亦復有號豈不爲濫哉或曰居其國無號者來此國則必制別號不知何謂也

禮記檀弓云死而諡周道也疏云殷以上有生號仍爲死後之稱周則死後別立諡

周禮（春官大祝）云掌辨六號註云號謂尊其名更爲美稱公羊傳疏云春秋貴賤不嫌同號註云通同號稱

風俗通云姓有九云々以號唐虞殷也

白虎通云帝王者何號也號者功之表也所以表功名（明イ）德號令臣下者也

又云所以有夏殷周號何以爲王者受命必立天下之美號以表功自克明易姓爲子孫制也夏殷周者有天下之大號也百王同天下無以相別改制天

通志略云得レ姓受レ氏者三十二類云々七曰以レ字如下鄭子駟之孫曰二駟帶一宋子魚之孫曰中魚莒上事文類聚云古者名以正レ體字以表レ德名終則諱レ之字乃可三以爲二孫氏一孔子弟子記レ事者皆稱二仲尼一呂后微時嘗字二高祖一爲レ季至レ漢爰種字二其叔父一曰レ絲王丹與二侯霸子一語字レ霸爲二君房一江南至レ今不レ諱レ字

又引二朱子語錄一云或問子思稱二夫子爲二仲尼一先生曰古人未三嘗諱二其字一云々愛日齊叢抄云年二十有下爲二人父一之道上同等不レ可三復呼二其名一故冠而加レ字年至二五十一艾轉尊又捨二其二十之字一直以二伯仲一別レ之云々又云故家惟晁氏群居相處呼二外姓尊長一必曰二某姓弟幾叔若兄一諸姑尊姑之夫必曰二某姓姑夫某姓尊姑夫一未二嘗敢呼一レ字也

○釋名

あさな　字

日本書紀源氏物語萬葉集日本書紀通證易紀禮記漢書白虎通天中記事物紀原○あさなは和訓栞に交名の義とす按に交名はませ名なりあとまは横音通しさとせは通音なるによりてあさなといふあさなは人に交るにより設けたる稱號にして自ら唱ふるものにあらされはかくいふならんこれを字といふもの字者孳也やしなひそたつる義又同音にて滋にも通すれはふえまさる意あり字は名の外にましてつけたるものなる故にいふなるへし

號別號

號は人君の成德を表しいさほしをあらはし臣庶に號令し示すものなり白虎通上代に伏羲神農燧人といひ黄帝顓頊帝嚳帝堯帝舜といふ如きこれなり同上○堯といひ舜といふは名にて號にはあらされとも帝を加へて稱するもの臣下より尊稱する所以なり白虎通に帝者諦也衆可レ承也又德象二天地一稱レ帝といふにてあきらけし

夏の代にいたりては十干を以て號を立つまた文祖藝祖といひ神宗皇祖といふは廟號なり日知錄代移りて有二天下一號といふは夏といひ殷といひ周といふ類なりこれ前代にわかちいさほしをあらはし後世に示す所以なり戰國の世に及ひ秦惠王の時處士に寒泉子と號する人あり又樗里子或は鴟夷子なと自ら號せしそ今世別號の與なるへき學山錄その他周茂叔に濂溪程氏兄弟に明道伊川等の號あれとも敢てその名を指さす

其名ニ也といへる字にはあらすと知へし
類聚名物考云あさなといふに二つのわかちあり名字とて漢さまに儒生のつけるは名をいふましきか爲につくる也これは俗にいふあたなにて實名に對へて假名なれはいふ也萬葉に遊行女歸之字也といへるか如き是なりあるは盜人の名に袴垂または大殿小殿なともいひ云々一時のたはむれ秀句なとによりて名付おふするをいふ也是はたはふれより出たることなり
和訓栞云學生入學の時文章院の堂監か書くたす名籍にあさなを書りよて儒者たるもの必すあさなつくといふ事源氏の抄に見えたり後世の俗諱名をもゑかいへり宇治拾遺にも見えたりよてあさなの義也ともいへり
易屯卦云女子貞不レ字十年乃字
禮記曲禮云男子二十冠而字
儀禮士冠禮云冠而字之敬ニ其名ニ也君父之前稱レ名他人則稱レ字也
又同上云女子許嫁笄而字註曰亦成人之道也
又同上云女許嫁曰レ字
又同上云禮儀既備令月吉日昭告ニ爾字ニ字曰某父叜字孔嘉髦士攸レ宜宜之于レ嘏永言保之
漢書丞相衡傳云字以表レ德豈人所ニ自稱ニ抑不レ當レ辭レ字
風俗通云姓有レ九云々以レ字伯仲叔季也
白虎通云人所ニ以有レ字何冠レ德明レ功敬ニ成人ニ也故禮士冠經曰賓北面字之曰ニ伯某甫ニ又曰冠而字之敬ニ其名ニ也所下以五十乃稱中伯仲上者五十知ニ天命ニ思慮定也能順ニ四時長幼之序ニ故以ニ伯仲ニ號レ之
天中記云君之於レ臣先生之與ニ其門人ニ名(ナイフ)レ之可也至下於同官之於ニ僚黨ニ同姓之於ニ昆弟ニ同門之於中朋友下可三以稱ニ其字ニ而不レ可レ斥ニ其名ニ故公羊傳曰名不レ如レ字者非レ謂下其人之名不上如ニ其字尊ニ乃謂爲ニ人所レ字則近ニ乎見レ尊爲ニ人所レ名則近ニ乎見レ卑也古之君子之名レ子也必以ニ信義ニ而擇ニ淑令ニ所三以祥ニ其名ニ也不レ以ニ官職ニ所三以殊ニ其名ニ也云々冠而有レ字所三以尊ニ其名ニ也名成ニ乎禮ニ字依ニ乎名ニ名字之本字名之末也爲レ本故尊爲レ末故卑尊故其禮詳卑故其事略也云々字則己之所ニ以接レ卑卑者所ニ以稱レ已未レ有下用ニ之於尊ニ而爲レ卑用中之於卑ニ而爲レ尊者上也
事物紀原云冠而字成人之道也字所ニ以貴レ名帝王世紀曰少皞帝名摯字靑陽則自ニ金天氏ニ始爲レ字也

湖月抄云師云日本の字の事漢家に用ゆるとは異侍るなり

素性家集云天暦の御狩せさせ給ひて河内國にやすませ給ふに罷歸りなんとありしをしませ給ひて素性かゐたなをよくはりとつけさせ給ふに旅に出ておしことのはにいひしかとよし（頁因）より思へ心くたけぬ

山岡明阿彌云今思ふに是字にてや侍らん俗にもいふあたなといふかことし假名なり集にはあたなさないまたさたかにも見えわかす

日本書紀通證云又古者不㆓必字㆒偶稱㆑字（顯宗紀改㆑字曰㆓丹波小子㆒仁賢紀字曰島郎）亦似㆓所㆑謂小字㆒（揚雄子小字童烏之類）而讀曰㆑那（蓋與名同程郊清曰字即是名古人誠有之如韋應物即名應物孟浩然即名浩然是也）無㆓阿弉那之訓㆒（阿弉那交名也交人之稱也或謂阿弉那梵語然字梵云乞叉囉乃文字也此間文字亦讀云那見天武紀周禮掌書名於四方註古曰名今曰字）後世儒士或字㆑之（阿弉那見源氏談抄云爲儒者必有之）然亦與㆓西土法㆒少異（如菅原道眞字三文屋康秀字琳三善清行字耀之類又如字治拾遺云字袴垂似所謂諸名）

藝苑日涉云此方古來有㆑名無㆑字學士輩倣㆓唐人㆒偶爲㆑之而多用㆓單字㆒合㆑姓呼㆑之如㆓菅三紀寛三耀之類㆒是也然平日無㆑所㆑用之故古人少㆓命以㆑字者㆒嘗聞㆓之先人之言㆒中村惕齋先生曰蔫仲世家蔭子五歲命㆑名云々禮有㆓冠而字之說㆒今以㆓有㆑名而冠㆒誤以㆑名爲㆑字故名必用㆑雙而字必單蓋以㆑此也未㆑知㆓是否㆒至㆓近世儒生輩皆用㆑字然唯施㆓之其者流㆒而已

又云春秋左氏所㆑稱氏族名字如㆓祭封人名足字仲㆒或稱曰㆓祭足㆒曰㆓祭仲㆒曰㆓祭仲足㆒曰㆓祭封人仲足㆒士會字士季初受㆑隨後更受㆑范或稱曰㆓隨季㆒曰㆓范會㆒曰季氏㆒曰㆓范武子㆒云々

盍簪餘錄云冠而字周之道也取㆑字之義與㆑名相通但與㆓後世㆒不㆑同楚屈建字子木孔門諸子回字子淵甲字子路雍字仲弓耕字伯牛皆名用而字體後世則與㆑此反陸子名九淵字子靜王應麟字伯厚等皆名體而字用周人之制必有㆑取㆑義

安齋隨筆引㆓名乘秘傳抄㆒云既に弱（ハタチ）になり元服を賀る時冠賓（エホシヲヤ）を請して字を命（ツケ）しむ字は他人より我を呼ふ稱也其禮儀禮禮記に具れり本邦にも元服の禮古記に見えたり云々但中夏には幼童の時名をつけ元服して字をつく事なれと本邦には古より名乘計にして字はなき也古人の中たゝ紀長谷雄字寛三清貫字耀文屋康秀字琳菅聖廟字三と申奉る僅此儒臣の字のみ後世に用ひ給へり今の世には名を實名と云名乘とも云を（按に上字の字なのおつるか）假名といひ俗名といへと禮記に冠而字㆑之敬㆓

古今要覽稿卷第十五

●姓氏部

●あさな字

あさなは皇朝いふ所と西土稱する所と趣を異にす然るに漢學に入人は必あさなつかるゝ事也されは菅原道眞公の字を三といひ文屋康秀の字を琳三善清行の字を耀といへる如きこれなり故に儒者になるとては必字ありなといふこと源氏物語の抄（細流）等にみえたり日本紀に改レ字曰二丹波小子一また字島郎と見え萬葉集に字曰二石麻呂一なとを見るに當今の假名のことし故に讀曰レ那盖與レ名同と（日本書紀通證）いふまた一時の戲れに出たるあたなをも字といふこともあり（類聚名物考）西土の所謂字に敬二成人一稱なり（白虎通）盛年の人を呼に名を以てするは不敬にあたれは其爲に字をつくるなり禮記曲禮に二十冠而字つくと見え女子も許嫁して字つくは成人の道なるよしされは人より稱する名にして自分名乘にはあらさるなり

日本書紀（顯宗紀）云天皇尙不レ識二使主所一レ之勸二兄億計王一向二播磨國赤石郡一俱改レ字曰二丹波小子一就二仕於縮見屯倉首一

又（仁賢紀）云億計天皇諱大脚字島郎弘計天皇同母兄也

又（孝德紀）云卽自詣二於法興寺佛殿與レ塔間一剔二除髯髮一披二著袈裟一云々于レ時大伴長德（字馬飼）連帶二金劍一立二於壇右一

日本紀略云安和元年九月十九日巳亥右大臣已下遊二覽桂河西字南院殿一

帝王編年記云淨住寺葛野郡字葉室

萬葉集云有二吉田連老一字曰二石麻呂一

源氏物語（乙女卷）云あさなつくることはひんかしの院にてし給ひんかしのたいをしつらはれたり云々

河海抄云禮記云已冠而字レ之成人之道也（字所二以相尊一也）

細流云字（アザナ）なり儒者になるとては必ある事なり文章院にて堂監（タウゲン）と云ものか簡にかきつくるなり文屋康秀を古今の序に文琳とかけるもあさな也

花鳥餘情云學生の入學の時文章院の堂監か書くたす名簿（メウフ）に字を書たり聖廟御字を菅三三善清行かあさなは三耀といへり夕霧か字も良なにと有へき也

別なきか如しいかゝ
又云仁字を御名と必として用ゐらるゝ事古へはなし六十六代一條院を懷仁と申奉りしを初とすれとも又この御次にはさる定めもなかりしか七十世後冷泉院を親仁と申奉りしこれよりその後は必仁字をつかせ給ふ事にて百世の今に至るまてかならすこのおきてを守らせ給ふ事とはなれり
按に仁字を御名に用ゐさせ給ふこと一條院を初とあれとも清和天皇御名惟仁とあれは一條帝より前に仁字用ゐさせ給ひしなり
又云國人世人文書よむうへにこの字をは今は必そのまゝには訓すして國人をはクニタミとよむなり是は後嵯峨院の御諱邦仁と申奉りし故にさけ奉るなり
按に唐太宗の諱を世民といふこの時民の字に換るに人の字を以てす故に人をタミと訓したるなりその原は西土よりうつされしなり

本名

類聚名物考云本名といふ事西土にも有然れとも今俗に云とはその意異なり俗の意は今假名有に依てその本體の名をさして本名と云本假の反對也西土のはもとの名にて今改めて稱する所の名にむかへて本名と云古今と云に似たり唐の顏眞卿の撰書る浪跡先生玄眞子張志和の碑に云玄眞子姓張氏本名龜齡東陽金華人と有次下に改名志和字子同と有にむかへて昔の名龜齡とはいへるなり

別名

同上云これは名二つ有をいふたとへは同人異名ある人有または名をかへし人を物にしるしたるに二所三所に見えしに三の名有てその人は異ならさるも有又は傳への異にして二名あるも有也たとへは宇治山の喜撰を基泉と同人ともいひ或は別人といふか如きも有又は西行法師を中頃は圓位上人ともいひしを初は佐藤兵衞憲清といひしか如し

作名

同上云除目の作名といふ事その人はなきを姓名を書出す也是を揚名といふ後京極攝政殿の秋篠月清といふ作名を出されしをその頃殊にめて〻やかて揚名關白といひし事有西土にもまた此事有書を著述するにも作り名をする事有世繼物語の世繼の翁の類ひ源氏物語の人の姓名の類ひも亦同し云々

法名

慈恩傳

○正誤

和漢三才圖會云、字本朝所レ謂名乘而多用二二字一上爲二父字一下爲二母字一取二用其一字一以爲二子孫世々通字一如二頼光頼家義家等一是也今多用二張氏之韻鏡一考二二字輕重相生相剋及歸納之音訓一用レ之唯名用二代々同名一庶子新レ名

按に皇朝の名乘は卽ち西土の名なり字はおのつから別なること西土はもとより皇朝にても菅原道眞字三文屋康秀字琳といへる類ひなりしかるを字本朝所謂名乘といへるは誤なり

類聚名物考云、程郊倩曰、字卽是名、古人誠有レ之如二韋應物卽名二應物一孟浩然卽名二浩然一

按に名と字は自ら別なり應物浩然の類は名と字とおなしきなりしかるを字卽名といひて名と字の差

其名一

慈恩傳云、令月嘉辰皇子載誕、天枝廣茂、瓊萼增敷、卒土懷生莫レ不ニ慶賴一、在ニ於玄裝一、特迫ニ恒情一、豈直喜ニ聖后之平安一、實亦欣ニ如來之有一レ嗣、伏願不レ違ニ前勅一、卽聽ニ出家一、移ニ入王之胤一、爲ニ法王之子一、披ニ著法服一、制ニ立法名一、授以ニ三皈一、列ニ於僧數一、紹ニ隆像化一、闡ニ播玄風一、云々

〇釋名

名

古事記日本書紀續日本紀萬葉集〇古事記傳云名と云言の本の意は爲なり爲とは爲りたるさま狀を云其は常に爲人と云も爲りたる形狀と云事叉物の形を那理と云も同意にて名と云もゝと其物のある狀なりたとへは筆は文を書手なる由の名硯は墨を摩る由の名なるか如し萬の物の名皆然り人の名も其ある狀に依て負たるものなり

なのり

古事記萬葉集傍訓

名告

古事記萬葉集

名乘

萬葉集

名謁

東鑑〇告はつくる乘は假字謁は我名を告て人に謁する義三字みなノリと訓りノリはつけるの古語にて我名をのりて人につく故の義なり

實名

北條九代記〇なのりのことをよへり實といふは假名に對しての稱なり

假名

日本書紀通證

呼名

同上

俗名俗稱

〇類聚名物考云假名はかりの名にて實名に對していふことなりこれは古へはなきを後世の俗の習はしに出たり故に今も公家堂上の家にはこの事なし武家士庶の間に有事也たとへは和田小太郎義盛といふか如き和田は氏(氏まさに苗字に作るへし)小太郎は假名義盛は實名也

さなといふへし今昔物語に字太郎介又は京太夫なといへるは今の世のあさなと同しいひさまなり

又云今の世の人のあさなに何右衛門なに左衛門といふ事のよしを考るにこはみかとにて左衛門なとのあまたありてまきらはしきを平氏の右衛門なるをは平右衛門藤原氏にて内舍人かけたる左衛門をは藤内左衛門なといひてよひつるにて左衛門右衛門はもと官なれとかくつらねて字のやうにいひなしたるかはしめにてのち／＼はしもさまにてその官ならぬ人にもいへるなり甲陽軍鑑にそも／＼男か四十五十にあまり赤口關左衛門寺川四郎右衛門なと丶官途受領まて仕る侍か云々といへり赤口寺川は今名字といふものにてそれをもつらねいふさま今の世と同したゝし官途受領といへるをみれは朝廷に申てなりわたくしにものせるにはあらすかゝれは今の世のならひにしたかふとてもむけにいやしきものつくる民あき人なとのあさなにはこゝろしてつくましき事なりかし

盍簪餘錄云冠而字周之道也取㆑字之義與㆑名相通但與㆓後世㆒不㆑同楚屈建字子木孔門諸子回字子淵由字子路雍字仲弓耕字伯牛皆名㆑用而字㆑體後世則與㆑此反陸子名九淵字子靜王麟字伯厚等皆名㆑體而字㆑用周人之制必有㆑取㆑義

漢事始云名は帝王世紀に云神農の母名は女登とあり又大皞の母名は華胥と云時は疑らくは名は伏羲の前に始るならん

顏氏家訓云、名以㆑體㆑正字以表㆑德名終則諱之、

前漢書（司馬相如傳）云、少時好㆑讀㆑書學㆑擊㆑劍名㆓犬子㆒（注師古曰、父母愛㆑之不㆑欲㆑稱㆓斤㆒故爲㆓此名㆒也）

匡謬正俗云、元者始也、孟者長也、伯仲叔季、亦以㆓次序㆒相承、是以古人立㆓名字㆒多依㆑此爲㆓義理㆒元將中、元方、季方、孟丙、仲壬、孟堅、仲叔、伯符、仲謀之類、是也、今流俗君子不㆑思㆓其義㆒或兄弟四五同稱㆓一仲㆒昆季十數但連㆓一叔㆒失㆑之遠矣

愛日齋聚抄云、禮檀弓、幼名、冠字、五十以㆓伯仲㆒孔子曰、人始生、三月而加㆑名故云㆓幼名㆒年二十有㆘爲㆓人父㆒之道㆖同等不㆑可㆔復呼㆓其名㆒故冠而加㆑字

螢雪叢記云、古者人名自貶損、或曰㆑愚曰㆑魯或曰㆑拙曰㆑賤皆取㆓謙抑之義㆒也、

老學菴筆記曰、古人以㆓小名㆒稱㆓父母伯父兄之前㆒曰㆓阿戎㆒曰㆓岷々㆒曰㆓馬奇㆒之類、今人稍長、不㆑欲㆔人呼㆓

る事なりきされとそのあさなのやうもろこしのとはことにて其人の氏かはねのもしによりてつけゝるを高野天皇の御心にかなはすして神護景雲二年のみことのりに或取二眞人朝臣一立レ字以レ氏作レ字云々自今以後宜レ勿二更然一とありこれはひたふるにからのやうにせまほしくおほしよりたるにて御國こゝろにあはぬみことのりなれはゑはしこそあれつひにはみな人ゑたがひたてまつらすなほ氏かはねによれり氏によれるは菅原のおとゝの君の御字菅三三善清行の字三耀のたくひそかはねによれるは氷宿禰繼麻呂の字宿榮といひしたくひなり此繼麻呂の字は文德實錄八巻に見えたり高野天皇のみことのり續日本紀の二十九巻にありてさてのちはからふみまなひする人ならてもたゝしきそのほかにつくる名をあさなとてそのこもをんなもなへてつくる事となれりきそのあさなのやうは今の世に名字にあざなをつらねいふに似たり今昔物語に姓は文忌寸字は上田三郎と云其人妻あり姓は上毛野公字は大橋の女とあるをみるへしたゝしこれは氏姓によらされと同物語に源宛といふものの字を田源二といひ藤原秀鄕の字田原藤太といへり

そのゝちも梶原平三なと平氏にて氏によりて字つきたれは氏姓によりてつくるならひは後鳥羽院の御代まてもひたふるにはやまさりきさて又名字といふもの日本書紀の顯宗天皇の巻に帳内日下(クサカ)部連使主(ベノムラジオミ)云々使主(オミ)遂改二名字一曰二田疾來(タトク)一とかきたまへるは正しき名のことなるに中むかしにては字(アザナ)にまかへり東鑑に以二景季一令レ問二名字一給之處佐藤兵衛尉憲清法師也とあり又同書に名字（時連五郎）と見えたるなとを思ふにおほよそ八百とせのむかしよりはすへて正しき氏のほかなる名のほかなる名をひとつにつらねてあさなとも名字ともいひしにそありけるされと事のよしを考ふれは中頃よりの名字はその人のすみ所の莊名のなによりて氏のやうなるものをものしてゑかいひしそ多きさるは同し氏のあまたになりてまきらはしきゆゑにそありけん高綱か氏は源にて近江の佐々木にゐつれは佐々木四郎高綱といへるにてゑるへしむかしは郡のうちに某(ナニ)名といふありきかゝれはあさなと名字とはわきていふそ正しかるへきたれもさおもへはにやあらん今の世には名字とは氏のほかなる氏をのみいへりしかわきていはんには名のほかなる名をあ

北條九代記（尼御臺政子諫言條）云尼御臺所彼狀を賴家卿に參らせり此次を以て申さしめ給ふ云々そのうへ源氏は將軍の御一族北條は我親屬なれは故殿ゑきりに芳情を施され常に御座にまねき寄て業を共にし給ひて候只今はさせる優賞はなくして剩さへみな實名を呼しめ給ふの間各恨をのこすよし內々その聞え云々

又云正嘉元年二月廿六日相州時賴入道の嫡子正壽丸七歲にして將軍家の御所に於て元服あり武藏守長時以下一門御家人參り集ふ親王將軍家すなはち宗字を下されて時宗と號せらる

紫芝園漫筆云楚子累世ニ名間有ニ三名者一莊王而下始有ニ二名一其ニ三名而曰ニ熊某一者ニ十九君蓋以ニ熊猶之氏族一也荊蠻之俗乃爾如ニ王羲之六世名レ之則古今一奇事己我日本人必ニ名而亦必累世同ニ其一名一如三楚子累世同ニ熊之名一實亦夷俗也然此中古以來之事上世不ニ必然一名

古事記傳云凡て古の御代々々の王等（皇子皇女男王女王等を古は凡て王と云り）の御名に種々の色あり今玆に其大概をいはゝ三種なり一には由緣（ユヱヨシ）に就て諸物名なと以つけられたる二には居地名（キマヤトコロノナ）を以申せる三には美稱（ホメタヽヘ）て付奉れるなり王等のみならす凡人の名とも丶大方此三種なり

日本紀通證云又有ニ假名實名之稱一假名俗呼也實名卽名也實名多ニ二字一故謂ニ之二字一

又云又名ニ麻呂一者多矣對レ人自稱亦曰ニ麻呂一麻呂或曰自謙之辭古人有ニ小屎糟蟲一後世紀貫之幼名阿古久曾蓋同意

類聚名物考云女房の名字古へはまさしく訓を用ゐられたり直子をは奈保伊古（ナホイコ）といひ彰子をは阿幾良計伊古（アキラケイコ）といふか如しさるに後世には訓にはえよまれぬ文字有たとへは媞子內親王式子內親王の如き是なりさらはその比はみな音にのみ唱へしかと思ふにまたまた訓用られしも有明月記に長子を奈賀子とよめるか如しさらは中比は時により人の好みに隨ひて心のままに音訓互に用ゐしとみえたりさたまれる事にはあらすと思はる

松の落葉云いにしへは名をいふをいむことはなかりしかは神の御名なとひとはしらにかす／＼申もありつれとあさなはなしからふみのわたり來てよろつのことからのふりのうつれる世になりてそのかたのかくもんする人は名をいふをなめしとしてあさなつく

生二聖子武王一子孫衆多而周祚長久也

多

夫婦之義以レ愛爲レ先文既重レ夕情同レ專レ夜加以子孫衆多后妃至德也又反音且何且日一何人可我朝日本爲レ號既日下有二一人一可之(也カ)尤叶二其宜一矣

頌

聖主在レ上人頌二其德一以レ此文字爲二其義一名者定爲二天子之(表カ)裏一者歟

荃信西

文選曰荃不レ察二余之中情一兮反信レ讒濟レ怒是屈原之詞也此文不吉歟若是以爲二東三條院御名同音之字一擇申歟抑後宮以從レ草合字爲レ名之人贈后茂子茨子等於二皇胤一吉例也至二其御身一者平生不レ備二后位一吉否之間可レ在二御定一

多

訓釋雖レ無レ吉多子之義可レ謂レ宜歟

頌

破字云頁公子然則公子之義不レ可二帝子之心一歟

八日癸亥以二成通卿雅敎信西師安所レ對之書一奏二法皇一曰從二衆議一將レ用二多字一他小學生多持二多字一其書以二鄙口一不レ上以二消息一奏也畢書報詔曰尋了多字事人々多字無レ難之由令レ申侍者可レ被レ用二件字一侍事歟如レ此事者無二治術一侍事也以二他事一不レ被二押計一侍事也端書曰只打間侍にめてたくこそ覺侍巳刻使三親佐親佐成佐弟問二荃字訓於成佐一對曰王逸楚辭注云荃君也加之勘二楚辭一云荃不レ察二余之中情一云々其文勢似二訓レ荃爲レ君因之先師春宮亞相師賴讀經君復告先師平生常言汝若有レ撰二貴女名一(者カ)色以二荃頌等字一就レ中荃字音同二東三條院御名詮字一可レ謂二吉例一焉臣今至二於此一故守二先師之命一而已

東鑑文治五年七月八日條云行平申云是曩祖秀鄉朝臣佳例也其上兵本意先登也進二先登一時敵者以二名竭一知二夫仁一吾家自レ後見二此簡一可三必知二其先登一之由者也

又正治元年八月廿日條云尼御臺所御二逗三留于盛長入道宅一召二景盛一被レ仰云々北條者我親戚也仍先人頻被レ施二芳情一常令レ招二座右一給而今於二彼輩等一無二優賞一剩皆令レ喚二實名一給之間各以貽レ恨之由有二其聞一

源平盛衰記鷲尾三郎谷案内條一云汝を鷲尾三郎といふへし名乘は我片名に父か片名を取て經春と付へし片岡と同名なれとも多き人なれは事かけし云々

レ此沙汰候之條且面目無レ極且怖畏不レ少候者也幼少之昔雖レ志ニ鑽仰一強仕之今都以廢忘疾逐レ年侵レ性經レ日慵候之故也就レ中於ニ如レ此事一者不レ知ニ子細一候難ニ計申一候者也但廻ニ愚案一茎字與ニ東三條院御名一同音雖レ可レ爲ニ吉例一本文屈原詞頗不レ快候歟多字宜候歟字作ニ重夕一孝武本紀天子如郡拜泰一朝々日夕々月云々頌字作ニ頁公一也然則公子之義不レ叶ニ皇胤之心一候歟偏不レ申候者又依レ有ニ其恐一如レ形所レ令ニ言上一也且所勞之間委不レ能ニ引勘一候也以ニ其旨一可レ然之樣可下令ニ定上一給上候者也雅敎誠恐謹言

八月八日　　民部權大輔雅敎上

修理大夫殿

茎字

訓不ニ分明一委可レ被ニ尋問一

頌字

似レ無ニ其難一

多字

女以ニ多子一可レ爲レ勝何覽又說文重レ夕爲レ多云々付レ之重レ夕者專レ夜之儀也彌可レ爲ニ最吉一

右三字之中隨ニ管見所一レ及注申之狀如レ件

久安四年八月七日前備前權守源俊通

御名字勘文拜見返上之愚案之所レ及多字優候歟名字多可レ用ニ平聲一云々又親王幷婦人名訓未レ慥之字不レ用云々是出(於カ)ニ公御前一不レ可レ讀レ聲可レ讀レ訓之故云々而近代間々訓不レ慥字等見候如何就レ中多字萬佐留(マサル)云訓候歟彌神妙覺候子細只今參入可レ令ニ言上一候之狀如レ件

八月七日　　大外記中原師安請文

茎蘭茎一物也

左傳

鄭文公有ニ賤妾一曰ニ燕嬉一（嬉名燕姓）夢天使レ與ニ己蘭一（蘭香草）曰余爲ニ伯鯈一余而(ナンヂ)祖（伯鯈南燕祖也）以レ是爲ニ而子一（以レ蘭爲ニ汝子名一）以ニ蘭有ニ國(タモツ)香一人服媚之如レ是（媚愛也欲レ令ニ人愛一之如レ蘭也）既而文公與ニ之蘭一而御之

久安四年八月七日　　散位孝善

多

玉篇云且何反（且字日下有レ一、何字人可也、日下一人可也、反音既佳歟）

說文曰重夕爲レ多（后妃有ニ王寵一子御重夕尤可ニ優美一）

毛詩序云螽斯后妃之子孫衆多也

螽斯之篇述ニ后妃子孫衆多一也大姒爲ニ文王之正后一

以レ書獻レ之卽問二名於禪閤攝政殿下侍從中納言成通卿一大外記師安駿河守雅敎前少納言俊通前能登守孝能前肥前介賴業陰孫菅原登宣又泰親問二擇信西一（問二嘉事於法師一、專可レ忌之、是以如（本ノマヽ）余告其名猶泰親問二信西一不レ受二餘命一故不レ構レ使也）各所レ對續二載狀左一又權中納言公能卿所レ對不レ詳

勘申

御名字事

荃

唐韻曰此緣反香草也　王逸楚辭注日荃君也

李善文選注曰香草也以レ諭レ君也人君被二芬香一故以二香草一爲レ諭

多

玉篇曰且何反衆也重也大有也

說文曰重夕爲レ多

子夏詩序曰螽斯后妃子孫衆多也

鄭玄詩箋曰君其子孫衆多將二日々以盛一

尙書曰成レ周既成二周公一作二多士一

頌

玉篇曰似用反形容（爲イ）也頌二其成德一

公羊傳曰什一行而頌二聲作一矣何休頌聲者大平歌頌聲帝王之高致也

文選序曰頌者所下以游二揚德業一襃中讃成功上

毛詩正義曰王功既成德流非レ庶下民歌二德澤一卽是頌聲作矣又曰頌之言容天子之德光二被四表一格二于上下一無レ不二覆燾一無レ不二持載一此之謂レ容比レ是和樂興焉頌聲乃作

右勘申如件

久安四年八月七日式部權少輔藤原朝臣成佐如レ此事計申條尤見苦侍仍不二申侍一也

女子名字床（本ノマヽ）上之可レ被二計仰一候自二其殿一可レ被レ仰候付二御使一令レ申候也以二此旨一可レ被レ申謹言

八月七日　賴―

日記賜預ー大法之比抄出件日　失之條日記本（文カ）見歟重爲二引檢一遣レ召了未（本ノマヽ、所カ）二持來一之間自以遲引名字勘之一見了返奉之字作幷取引之文皆以神妙不具謹言

荃多頌三字之中於二多字一者雖レ無三指釋一連多子巳時頗可レ宜歟名實賓之故也

適蒙レ仰不參仕候之條極恐思給維所勞之條境節申限不レ候者也

昨日所二下給候一之御名字勘文一通謹以返上之先反如

云々但省二來啓一無レ稱二臣名一仍尋二高麗舊記一國平之日上レ表文云々
又同上云秋七月己巳勅授刀舍人考選賜レ祿名籍者悉屬二中衞府一其人數以二四百一爲レ限闕卽簡補但名二授刀舍人一勿レ爲二中衞舍人一其中衞舍人亦以二四百一爲レ限
又元正紀云詔曰其負而可二仕奉一姓名賜
又淡路廢帝紀云詔曰先祖乃大臣止之天仕奉之位名乎繼止念豆云々先祖乃名乎興繼比呂米武止不念阿流方不在云云
三代實錄云元慶元年二月廿二日甲子從五位上春澄朝臣高子改二名給子一以レ觸二中宮諱一也
又云同閏二月七日己卯正五位下安倍朝臣高子改二名基子一外從五位下葛木宿禰改二名賀美子一以レ觸二中宮諱一也
文德實錄云先朝之制每二皇子生一以二乳母姓一爲二之姓一焉故以二神野一爲二天皇諱一
大鏡云太政大臣實賴おとゝの御わらは名をは牛かひと申きされはその御さうは牛飼をはうしつきとの玉ふなり
又云太政大臣公するゑ御孫むかしの御童名は宮を君とこそ申しか云々
大和物語云本院の北方の御おとうとのわらはなをおほつふねといふいまそかりけり
長祿寛正記云こゝに義就畠山右衞門佐方の衆徒の進出て申けるはその儀不可然義就に於て更に朝敵にあらす只一家の相論なり此義就は古德本の實子なり元服の時も政長畠山に下字を賜ひしかとも義就は各別にて上字を賜ひしなり
宗五大册子云人々名乘字をいたす事上の字をいたす義は賞翫なり下の字いたす事不賞事なりかきやうも有之こゝろ得又可有之事也
和事始云開闢の初め洲壤の浮漂事游魚の水上にうけるか如し時に天地の中に一物なれり狀葦牙の如しすなはち神と化爲國常立尊と號す神代卷是名有始なり
又云名乘の片名を臣に賜る事盛衰記の内に多し本三位中將平重衡の家臣平左衞門尉重國も重衡のおさなきより不便に思はれ自ら烏帽子をきせ片名を給はりて重國と呼れけるとありゑかれはその前より有事ならし
台記別記云久安四年七月十三日戊戌夫人名字可二擇獻一

屯結於菟狹川上云々

又(神功皇后紀)云先日教天皇者誰神也願欲知其名逮于七日七夜乃答曰神風伊勢國之百傳度逢縣之拆鈴五十鈴宮所居神名撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命焉

又(應神紀)云初天皇在孕而天神地祇授三韓既產之宍生腕上其形如鞆是肖皇太后爲雄裝之負鞆(肖此云阿叡)故稱其名謂譽田天皇(上古時俗號鞆謂褒武多焉一云初天皇爲太子行于越國拜祭角鹿笥飯大神時大神與太子名相易故號大神曰去來紗別神太子名譽田別尊然則可謂大神本名譽田別神太子元名去來紗別尊然無所見也未詳)

又(同上)云冬十月科伊豆國令造船長十丈船既成之試浮于海便輕泛疾行如馳故名其船曰枯野(由船輕疾名枯野是義違焉若謂輕野後人訛與)

又(同上)云時命武內宿禰領諸韓人等作池因以名池號韓人池

又(孝德紀)云大化二年八月始王之名名臣連伴造國造分其品部別彼名々云々遂使父子易姓兄弟異宗夫婦更互殊名

又(同上)云天皇名々或別爲臣連之氏或別爲造等之邑云々各守名々

續日本紀(元明紀)云夏四月丁巳詔先是郡司主政主帳者國司任便申送名帳隨而處分云々

又(同上)云一年之內賣米一百斛以上者以名奏聞又賣買田以錢爲價云々

又(同上)云五月甲子畿內七道諸國郡鄕名着好字其郡內所生銀銅彩色草木禽獸魚蟲等物具錄色目及土地沃塉山川原野名號所由

又(同上)云丁酉沙門義法還俗姓大津連名意毗登授從五位下爲用占術也

又(元正紀)云智鑒冠時衆所推讓可爲法門之師範者宜擧其人顯表高德又有請益無倦繼踵於師材堪後進之領袖者亦錄名薦擧而牒之

又(同上)云詔檢和銅四年十一月廿日勅出擧私稻者自今以後云々今其子姪易名重擧依此姧計取利過本云々

又(聖武紀)云丙辰以朝廷路頭屢投匿名書下詔敎誡百官及大學生徒以禁將來

又(同上)云挂畏天皇大御名乎受賜利退氏波婆々大御祖乃御名乎蒙氏之云々種々治賜比禮等母女不治賜是以所念波男能未父命負氏女波伊婆禮奴物爾阿禮夜

又(孝謙紀)云天皇敬問渤海國王朕以寡德虔奉寶圖

於味白檮之言八十禍津日前居玖訶瓮而云々
又云故坐日向時娶阿多之小椅君妹名阿比良比賣(自阿以下五字以音)
又云次大鞆和氣命亦名品陀和氣命柱此太子之御名所以負大鞆和氣命者初所生時如鞆宍生御腕故著其御名是以知坐腹中定國也
又云然告其名爾各告名而彈矢於是答曰吾先見問故吾先爲名告吾者雖惡事而一言雖善事而一言言離之神葛城之一言主之大神者也
日本書紀(神代巻)云一書曰伊弉冊尊且生火神軻遇突智之時悶熱懊惱因爲吐此化爲神名曰金山彥次小便化爲神名曰罔象女次大便化爲神名曰埴山媛
又(同上)云所塞磐石是謂泉門塞之大神也亦名道返大神矣
又(同上)云已而素戔嗚尊以其頸所嬰五百箇御統之瓊濯于天渟名井亦名去來之眞名井而食之
又(同上)云彼處有神名曰脚摩手摩其妻名曰稻田宮主簀狹之八箇耳此神正在姙身云々
又(同上)云素戔嗚尊乃以蛇韓鋤之劔斬頭斬腹其斬尾之時劔刃少缺故裂尾而看卽別有一劔焉名爲草薙劔此劔昔在素戔嗚尊許云々
又(同上)云一書曰大國主神亦名大物主神亦號國作大已貴命云々
又(同上)云故仍遣其子大背飯三熊之大人(大人此云于志)亦名武三熊之大人云々
又(同上)云一書曰天神遣經津主神武甕槌神使平定葦原中國時二神曰天有惡神名曰天津甕星亦名天香々背男請先誅此神然後下撥葦原中國
又(同上)云妾是大山祇神之子名神吾田鹿葦津姬亦名木花開耶姬云々
又(同上)云所以兒名稱彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊者以彼海濱產屋全用鸕鷀羽爲草葺之而甍未合時兒卽生焉故因以名焉
又(垂仁紀)云五十瓊敷命居於茅渟菟砥川上宮作劔一千口因名其劔謂川上部亦名曰裸伴(裸伴此云阿箇播娜我等母)
又(同上)云昔丹波國桑田村有人名曰甕襲則甕襲家有犬名曰足往是犬咋山獸名牟士那而殺之云々
又(景行紀)云是月天皇聞美濃國造名神骨之女兄名兄遠子弟名弟遠子並有國色云々
又(同上)云唯有殘賊者一曰鼻垂妄假名號山谷響聚

古今要覽稿卷第十四

●姓氏部

●な　名

人の名は往古よりしてあり渾沌初てひらくる時に國常立尊國狹槌尊と申奉るすなはち御名なり西土にてもまたしかり少昊の名を摯といひ帝堯の名を放勳といへるこれなりたゝし太古にては子孫といへとも御名を憚るところなく後に西土の制を移させ給ひしより憚りて御名を稱せす（委は松廼落葉にみえたり）人の天地間にあること名の別つへきものなかるへからすたゝ人のみにあらす天下にあらゆるものは大は高山大河小は禽蟲魚鱗に至り一として名なきはあらす後世に至りてうちかはね（氏姓）の類ひおこり字號の屬生するは文華の盛なるなりたゝ又論といふことあり崩後に改め名つく神武と申綏靖と申奉るこれなり今の俗稱は假名（カリナ）あるひは呼名（ヨビナ）ともいふこれ保元平治の比よりやはしまりけん某郎なといふこと多しこれ通稱にて伯仲をわかつに數の序次を以てすこれにむかへて實名といふ稱はおこれりまた名乘ともいふ名乘はもと人に對して我名を唱ふることなり古事記萬葉集に名告ナノリと傍訓し東鑑に名謁ともかけり皆人に對して我名をなのる義なりのりはのりことなとののりにて言語にあらはすなりされはわか名をなのることよりしてつひに實名を名のりといふことにはなりたりさてその名後々は家々の通り字ありて代々同字を用ゆ古にも淳和天皇の御子たち多く上に恒字を置れ仁明天皇の御子たち下に常字を置文德のは上に惟字を置れし類又淸和天皇を惟仁と申せしより始まりて醍醐天皇を敦仁一條天皇を懷仁なと申すより以後皇子たち凡て某仁とつけらるゝことにはなれり通り字のはしめこれらに本つけるならんまた尊上の人卑賤の者に名の一字をあたふること源平盛衰記北條九代記等に見え當世に至りては恒例となりぬまた女の名古代は男子と同しく某命（ミコト）といひ中古は某子といひ後世は於の字をつく於は阿にかよひて助辭なりこれ婦女の名は簡易なれは唱よき爲にいひつけしにや

古事記云於是天皇愁天下氏々名（ウヂ〳〵ナ）々人等之氏姓（ウヂカハネ）忤過而

しなり

史

同上云史は書人の意也布美毘登と訓へし又淡海公の名史なりしを不比等とも書りしかは美を省きて布比登とも訓へしと師はいはれき寳龜元年九月壬戌、以去天平寳字九歳、改二首史姓一、幷爲二毘登一、彼此難レ分、氏族混雜、於レ事不レ穩、宜レ從二本字一、とみえたれはひとたひは毘登といはれしかともまきれぬるをもてもとにかへされし也云々史とたにいへは書籍のかたにのみ拘れること丶思ふは漢風俗のころうつしにてこなたのさまにたかへり本源は書讀むわさをしもいふことなから各道に玄るしたるふみとものありて其をしも見明めぬるをわさとせることとなれは布美比登の號はありし云々

道師

同上云道師姓は文字のことく諸道の師といふ意にて置れし姓にやさならむには伴造を如此大號にいはれしにてあるへし伴造は旣云しことく種々の職をなせるものを集へてそのこと丶もつくり出て貢進れるなれは造をさして諸道の師匠なりとの意にて道師といはれしならめ

稲置

同上云稱置は伊良君の意ならむ良と那とは通へる例あり伊良は郎女なとの伊良なりといはれき故思ふに稲置は稱號にはあらさるへく太古國用のむねとせられしものは稲米なりしかはことに重きものにせられし也然れは諸國に作出せる稲米ともは各地に納置て國用を辨へられしなへに安閑朝廷二年五月丙午服甲寅に二十六處の屯倉を諸國に置れ云々如此重きものにせられし稲米にしあれは其を納置る丶屯倉の司をやかて稲置と云しか後に屯倉の制改替られて此職の自然まれ〳〵になりゆきしならむ◎按に拾芥抄中卷姓尸部云、朝臣、眞人、宿禰、連王公、首、臣、造、直、忌寸、縣主、村主、神主、使主、人伊美吉、史、勝、部、氏、伊吉、阿祇奈君、倉人、と擧て本文氏の末の阿祇奈君山科家本勸助大僧正本此四字無其次の阿祇大君小科本無爲姓と言事を注せり道師稲置は天武天皇定させ給ひし八色の內なるにこの頃は絕たる故に記さ丶りしにや

しみえたり）阿多比は授にて授兄又は予兄の意なるへしさるから其意を得て直或費字を當し也（阿多比のことのこゝろをいはんに物を得て其替りをまたせるを今も阿多比といへりこはたゝに其物に相替れるの義なり直の職なりしときも其闕たる職々に相替るの義にとれる號なり）

村主

同上云村主をしも孝德紀に村首とかゝれしは主首相通へるもて然かゝれたる也そは姓氏錄に縣使主を縣使首とかけるにて知へし村主は須久理と訓へし和名抄に伊勢國安濃郡村主（須久利）とみえたれは也其義は佐都久理にて得物撰の意なり佐都を約れは須となれは故須久利といへり佐都の都こゝろは萬葉集第一舍人娘子の歌に丈夫之得物矢手挿立向射流圓方波見爾淸潔之とある得物矢の佐都とひとつことはなりけるさるを得物矢は幸矢なりとて神代紀彦火火出見尊の山の幸おはしませし故事に引あてゝ幸弓幸矢なりといへれとそはいみしき強言也幸は佐知佐伎とは訓れと佐都と訓ることなし得物矢の正しくみえしは萬葉集第二十下野國防人大田部荒耳の歌に佐都夜奴伎（得物矢拔なり）又第五衰ニ世間難ㇾ住歌に佐都由美乎多爾伎利物知提（得物弓を手握持てなり）と見ゆ萬葉雜第三志貴皇子の御歌に足日木乃山能佐都雄爾と見えし佐都雄は第十に山邊爾射去薩雄者又山邊庭薩雄乃禰良度恐跡見えしに同きを薩雄は薩摩人にて薩摩國人は雄雄しきものなれは如此云といへり其もてる弓矢なれは薩弓薩矢なりといふは其末をのみ云て本源をたつねいはさるもの也すへて佐都と云はよくものをみとゝめて其美物を擇とれるの古言也村主は諸國の邑里の長として各地の美物を撰定て貢進れるものをさしての美稱なりしか則姓になれる也故其美物を撰得るをもて佐都に得物字を當しならめ（今も物を撰り出ることを須具流と云はこのことのなこりなるをおもへ）久理はつき／＼にものを見るにいふことなから撰定むるの意こもれりものを久理かへし／＼いふはことをよくとゝのふへきことにて彼丁寧反復の義也又絲を久流書籍を久流なといふことのもとは同きをや須久理は諸國の各邑に居て其職をなせれは意を得て村主字を當られ

國附子の謂なり造字を當しものは其事を爲の義にいへり事を爲は事を執行へるをいふ事を作り出るの謂ならす云々國造は各國のこともを執行へるからやかて造字を當しもの也なめて國造と云は既云し如く公國造縣主村主稻置まてをいふこと也國造も伴造もたゝ造とのみいふへきをさいては二種の造のあるなへにことのまかへれは云別へく料に國事に預れるには國字をそへ職事に預りて伴雄を率るには伴字をそへいへるもの也國附子伴附子の謂なるから詞には久邇の都古止毛の都古といふへきなり（すへて如此其國の事をなし其伴男のことをなせれは國にも伴にも意あることとなるにはの字をそへ云こと例なり

伴造

同上云伴造は其各部を司るをさしての謂なりことの意は伴附子也伴とは其部曲の人をいへり太古掌職人は自其事をなせしから各部にありて職をなせしものをは某部と云りし部は止毛とも牟禮とも訓て其職をなす人等をひとつらになしての謂なり各各にことわけて云には某作といへり

縣主

同上云縣と云はもと御上田より起れる名にて又其に准へて諸國にある朝廷の御料地を云云々推古朝廷三十一年冬十月癸卯朔、大臣、遣二阿曇連阿部臣摩侶二臣一、令レ奏二于天皇一曰、葛城縣者元臣之本居也、故因二其縣一爲二姓名一、是以冀之、常得二其縣一以欲レ爲二臣之封縣一、於レ是天皇詔曰、今朕則自二蘇我一出之、大臣亦爲二朕舅一也、故大臣之言、夜言矣夜不明、日言矣日不晩、何辞不レ用、然今當二朕之世一、頓亡二是縣一、豈獨朕不賢耶、大臣亦不忠、是後葉之惡名、則不レ聽とみえしにてことにこの縣ともは朝廷にゆゑありしならめと其傳の亡失しは遺憾ならすや

直

同上云直は書紀に阿多比延と訓る處あると（皇極紀に長直とあり）和名抄和泉國和泉郡の郷名に山直（也末多部）とあるを合せて阿多閉と訓へし（かの阿多比延の比延を約て閉と云なり山直は山のまに阿韵ある故に阿を略きて多閉なり）名義未考得す延は兄なるへし（直字は借字なり續紀第廿八に庚午年籍に直姓に費字をかゝれしこともありしよ

へ

首

同上云首は意毘登と訓へし元明紀に大津連意毘登と云人名を元正紀聖武紀には首とかゝれたり書紀私記にも忌部首讀ニ於比止一とありこはもと尊稱にて大人の意なるへし（首を意宇とよむは音便にて正しからす）太古のさまを思ふに首は官名なりしものゝやかて姓になりしなるへし正しく司にてみえしは清寧紀に播磨國赤石郡縮見屯倉首忍海部造細目とみえたり（屯倉は諸國處々にありて其部曲の民を司れる人をさして屯倉首といへり）故上古は其職の部曲を統領るを首とはいへりし其職は廢れてやかて氏となりしものゝ云々又首を意毘登と云れす毘登と云れしことありそは寶龜元年九月壬戌以去天平寶字九歳改ニ首史姓一並爲ニ毘登一彼此難レ分氏族混雜於レ事不レ穩宜レ從ニ本字一とあるにて知るへし

國造

同上云國造は久邇能美夜都古と訓へし其由はまつ上代に諸仕奉人等を總擧るには臣連伴造國造と竝云りその國造は諸國にて其國の上として各其國を治る人を云姓なり名義は御臣也稱德紀の詔に貞久淨伎心乎以天朝廷乃御奴止奉仕之米天云々また丈部姉女乎波內御奴止爲弖冠位擧給比なとあるをもて夜都古は臣の意なることを知るへし國造を國宮司の意とする說は大誤なり又加茂縣主大人は國造を久邇都古と訓て其說に國造は其國を草創し意にて即造と云ことなりと云れつれとわろし今考るに書紀なとに多くは久爾能美夜都許と訓又久爾都古と訓る所も稀にはあり國造は上代には職にて即加婆禰なりしをやゝ後には姓は別に有て其氏の中に國造あり云々臣は稱言には意美と云ひ君に對ては夜都古といへり夜は發語にて都古ともいへり（都古は附子の意にて君に附る子の義なり附を都とのみ云るは體言なり吾友北村久備の云るは都古は仕子なるへし都加閉を約れは都氣となれるか轉れるかといへり）是を稱言には御字をそへて美夜都古といへれとたゝなるときは夜都古とも都古ともいへりさるから國造を稱言には久邇の美夜都古といふへけれと平生なるには久邇の都古といふへし即

意にはあらす君に對ていふ臣は夜都古と云ひて書紀なとにも然訓と師はいはれき故考思ふに意美はもと稱言の姓になりしもの也稱言の意美は臣姓の出來にける後に云るはみな使主とかけり然れとも臣の意に云ること也臣と使主の相通へるよしを云は古事記下卷穴穗宮の段に坂本臣等之祖根臣とみえしを安康紀には坂本臣祖根使主としるし此人を雄略紀には根臣とかけり又履中紀に圓大主とみえしを雄略紀には圓大臣としるしたり古事記下卷穴穗宮の段には都夫良意富美とかけり故臣と使主のかよへることをしるへし使主をしも意美と訓ることは顯宗紀に使主此云二於彌一とみえたれは勿論臣は大身の意なりと師はいはれたれとそはもとを考られさりしから如此いはれしにてうけかたしもと臣姓は稱言よりなれるものにてたゝへことなるは使主とかけりことの意も則使主にて大身にはあらす連を郡主なりと師のいはれしにむかへて思ふに使主は使人の中の主といふ義なるへし如此れは意美の稱は君に對へて云るものにて傍より云ふに非すとすへし又直に臣字を以て稱號にかきしものは仁德紀に小泊瀨造賢遺臣的臣祖口持臣なとみえたり

連

同上云連牟良自と訓群主の意にて其群の中の主と云意也

公

同上云公姓は舊は君と云ひしを天平寶字三年冬十月辛丑天下諸姓着二君字一者換以二公字一とみえしより公字を用ることゝなれり公は伎美と訓へし舊は諸國處々にありて其地に公として治めし人を云りさるから皇子達に諸國を賜へるに此姓を負へるか多く公姓なるは地號をもて氏とせしもの多し古事記中に皇子達は君姓をいへるもの三十九氏なるにみな地號を以て氏とせられし也云々諸蕃の氏々にも百濟公市往公岡屋公多々良公三林公荒々公秦原公等みえたれともみな某王といへるの末にて王といふへきを文字をかへて公といへり云々王公相通はしいふよしは仁德紀に百濟王之孫酒君とみえしを姓氏錄和泉國諸蕃百濟公出レ自二百濟國一酒王之後也とみえしにて王公君みな相通へることを思

代にしも文字は改められし也師（本居大人）の云はれしは朝臣を阿曾美と訓は吾兄臣の意なり阿佐意美の訓を借るのみにてさらに此字の義にはあらす此字をしも當られたるは朝廷の臣といふ意を含められたることもあるへし天武天皇の御世に始めてこの姓を賜へる氏々は多くはもと臣姓の氏々なれは吾兄臣の意なるゆゑなるへしといはれきことのさまはいとよく聞えたれとなほことのもとにいふへきこととものあれはそへいふへし阿曾美はもと阿勢袁臣の約れるもの也阿勢袁は古事記中卷日代宮の段倭健命の御歌又下卷長谷朝倉宮の段袁杼比賣の獻歌なとにみえて吾兄男といへる義なり又阿勢袁を約めて阿曾ともいへり

宿禰

同上云宿禰は古事記に須久泥とみえたれは然訓へし寶龜四年五月辛巳足尼爲二宿禰一とみえたれは舊は足尼といへりし也ことの意は書紀私記に昔稱二皇子一爲二大兄一又稱二近臣一爲二少兄一也宿禰之義取二少兄一也とある此義の稱言なりと師のいはれきけに須久那延を約れは須久泥となれり

忌寸

同上云忌寸姓も舊は稱言なりしなるへしそのよしは異國より投化の人をは神宮に奉るゝ例にて齋置の意也（すへて神宮に奉れるものには齋字をそへ云ことは齋服殿齋斧齋鉏齋柱なといと多かり齋忌相通へることは延暦廿二年三月乙丑右京人忌部宿禰濱成等改二忌部一爲二齋部一とみえ姓氏錄にも忌部氏を齋部とかけり寸置かよへることは稻置を稻寸と書るにて可知）其稱言もてやかて姓とせらるゝことは宿禰の例とすへし忌寸は伊美伎と訓へし舊は伊美吉とかけりしを天平寶字三年冬十月辛丑天下諸姓伊美吉以二忌寸一とみえたれはこゝに改められしを思へ天武朝廷十四年六月乙亥朔甲午に忌寸姓を賜へる十一氏のうち半は諸藩の氏々なれは諸藩の氏人のむねとせし人々には忌寸を賜へるを知るへし

臣

同上云臣は意美にて大身の意にいへり此は朝廷に仕奉る人を傍より尊みて云稱なり朝廷に仕奉る人なるを以て臣字はかくなれと君に對へて云ふ臣の

上訓下音姓八氏

公侯　國覔　毛乃　多布　下耳　土師　大師一氏を脱す

三字訓姓五十六氏

中臣部　栗田部　三枝部　額田部　飛鳥部　日可部　身人部　秦人部　長谷部　猪名部　春日部　日根部　凡人部　倉持部　荒田部　田髪部　湯坐部　葛原部　大私部　八俣部　神礒部　大田部　坂今部　大荒部　中臣藍　大中臣　大春日　凡河内　若湯坐　秦小沙治田　海犬養　秦大屋　秦忌寸　秦河邊　秦小宅　上毛野　下毛野　上村主　下村主　小長谷　若帯孫　中臣丸　若麻續　六人部　舍人部　大原部　若櫻部　若倭部　大伴部　大屋子　荒田井　狛倉下　御手代　曳田部　狹長面一氏を脱す

三字音倭七氏

甘南備　多治比　阿須波　牟偈都　宇自可　阿佐波　阿刀岐

上二字音下一字訓如十二氏

伊香原　宗我部　蘇宜部　品治部　伊福部　許世部　爲奈部　依智秦　印南部　佐沙前　宇治部　吉備部

上下訓中一字音姓一氏

馬師部

上一字訓二字音姓二氏○二上下字可有歟

和惠師　秦谷務

上二字訓下一字音姓一氏

若湯氣

四字訓姓四氏

五百木部　高安漢人　小椅馬創本ノマヽ　辛島秦勝

四字音姓三氏

阿倍志斐　巨勢飛驒　秦加々牟

五字訓姓三氏

大神眞神田　中臣高良比　佐々岐山公

○釋名

眞人

姓序考云眞人は麻比登と訓へし天皇を現神といへるに對て眞人といへるにて漢土の眞人のことにな思ひまかへそ

朝臣

同上云朝臣姓は舊は阿曾美と云しを寶龜四年五月辛巳阿曾美爲二朝臣一と光仁紀にみえたれはこの御

峰　長岡　晴岡　日本　荒木　船木　矢木　葛木
木津　豐津　豐階　良階　高階　廣階　稻城　日置
高橋　高岑　高村　高岡　高向　高根　高篠　飯
高　百濟　有宗　廣宗　歌宗　進宗　忠宗　燒村
山村　安遲　膳伴　倭土　村國　豐國　辛國　國中
國瀨　生江　螺江　藤江　横江　堀江　大江　夏
身　凡海　淡海　忍海　春澄　春日　春枝　春死（本ノマヽ）
春良　千谷　小宅　小子　小家　小槻　息長　小瓜
小山　味酒　味眞　箭口　箭集　藁集（本ノマヽ）　依羅　忠
世　當世　永世　當世　桑水　水取　鳥取　山代
物代　高木　柹本　槻本　槐井　車持　板持　深根
島根　衣縫　楯縫　射水　葛澤　鏡作　楮佐　玉作
帶作　神門　神山　葛城　川俣　川邊　江沼　宗
岡　三村　鵜養　大養（犬歟）　山邊　泰堤　土形　滋丘
穴太　上道　下道　針間　苫連　文室　金刺　徒者
定羽　呉川　飽海　伴林　西林　豐宗　清江　長
瀨　山高　山道　風早　風見　竹野　稻景　白柏
栗原　飛鳥　利波　穗積　內藏　甚目　名草　宮處
浮穴　桑內　桑石　尾張　出雲　山口　川口　片
山　角山　鈴鹿　熊代　井鹿　鹿取　河上　河瀨

河內　角鹿　朝倉　麻幹　錦織　岡午（本ノマヽ）　立明　新羅
是善　善淵　室香　韓室　常澄　永背　馬踏　殖
栗　氏使　今來　熊漆　船遲　廣幡　屋代　金見
赤淺　黃父　屋形　水渟　村主　櫻島　八木　火撫
葦占　神社（百卅五氏を脫す）

二字音姓八十三氏

當麻　丹墀　佐伯　賀茂　依智　志斐　及岐　讃岐
志紀　多紀　阿岐　賀陽　伊陽　多米　久米　番
良　安倍　伊香　伊勢　伊須　武庫　阿刀　阿保
巨勢　布勢　越智　和氣　佐太　波多　難波　布瑠
平郡　念林　美㸃（本ノマヽ）　吉備　陽胡　武射　武雲　登
美　能登　奈良　巨賀　阿波　塔木　薩摩　壹志
都努　迺珖　安濃　百寸　阿那　丹波　久賀　甲賀
志賀　蘇賀　雲梯　卯岐　伊吉　高志　曾禰　久
利　八多　牟氣　久務　武藏　前禰　西牟　氣多
宇治　志都　怡士（土歟）　君子　伊禰　壹陸　志知　壹岐
爲余　武王（四氏を脫す）

上音下訓姓十四氏

南淵　番御　伊部　凡部　佐井　珍別　伯根　阿那
阿孫　香山　紀提　士生（土歟）　伊公　奈柄

館　狛　官　於　仲　下　道　上　長　馬　宗
寺　猶　堤　吳　度　津　內　路　道　氷　舟　袁
食　漆　凡　工　雲　貞　良　埶（本ノマヽ）　私　勝
七十二氏とありて六十八氏なれは餘の四氏は脫せるか今本書に從ひて疑をかく下これにならへ

一字音姓七氏

紀　金　鄭　珍　戶　十　王

二字訓姓五百六十八氏

藤原　菅原　淸原　大原　朝原　井原　中原　美原　桑原　時原　春原　廣原　葛原　永原　柏原　烟原　意原　宮原　石原　蓼原　刑部　喬部　守部　錦部　膳部　物部　西部　倄部（本ノマヽ）　鱷部（本ノマヽ）　鳥部　茜部　門部　人部　靡部　雀部　椋部　家部　礒部　瓊部　占部　漆部　夜部　園部　竪部　侯部　忌部　綾部　爪部　鴨部　服部　私部　丈部　的部　射部　幡部　秦部　田部　味部　蹹部　縣部　山部　出部　壬生　良峰　大枝　大和　大秦　大貞　大屋　大宅　大沼　大石　大里　大史　大火　大友　大鳥　大辟　大藏　大市　大辛　大忝　大椋　大田　大山　大神　大伴　田使　大村　大邊　大井　大口　大後

島田　池田　粱田　理田　蜂田　栗田　稗田　他田　矢田　竹田　益田　沙田　曳田　額田　高田　茨田　神田　麻田　山田　吸田　長田　岡田　黑田　坂田　均田　善道　常道　春道　興道　眞道　淸道　川道　下道　宮道　有道　大日（科敷）　道祖　道守　淸峰　淸瀧　淸內　淸澄　淸料　淸宗　淸春　淸瀨　淸岡　淸身　淸海　淸山　淸淵　淸江　間人　藏人　神人　漢人　舍人　客人　酒人　宗人　邑人　唐人　大戶　和戶　噉戶　酒戶　子戶　神戶　結戶　津守　掃守　橘守　坂舍　坂上　坂本　坂井　長井　平招　湯坐　弁栗　羽栗　羽林　羽於　井上　山於　瓜上　穴掎　御長　御船　御使　御春　御館　御輔　御室　御宗　御井　御野　弓削　茅田　我孫　帷良（惟敷）　三國　三善　三島　三統　三尾　三津　滋野　菅野　松野　安野　眞野　小野　吉野　永野　興野　貞野　蕨野　阿野　柏野　科野　大野　朝野　貢野　藤野　石井　石才　石川　石作　石上　堂昨（本ノマヽ）　白馬　高生　舟生　菅生　滋生　栗前　山前　檜前　高島　榮島　漆島　洞咋　酒井　遠市　高市　石栗　采女　麻續　淺井　泰長　岡屋　葦屋　長

物部　聞(聞同上作レ圓)　三歲祝　良階　蹹部　大炊　長我孫
加良姓　蓁原　水津　任那　惠戒　額田部　琝玉
以上二姓同上作二一姓一　百濟伎彌(彌同上作レ禰)　角鹿　後部高　能彌(彌同
上作レ禰)　日佐　調金　大石林　蝮部　足奈　伯彌　玉
井　山守　眞尻家　阿多隼人　鴨部祝　朝戶　反主
伏丸　伊豆　巳智　紀祝　小谷　巨知　高用　佐
渡　子部　秦姓　勝部　宇佐　川間　下神　伊氣
帶王　村禮　大辛　藤井　小長谷　日吉野　野中
陸奥　和久　川瀨　有麻　且部　武美部　布等　御
長　置始　道島　新良貴　蜂田藥師　波多郡　水谷
市井　井於伊豆(同上作二井伊美一)　大村眞田邊(村眞同上作二祠直一)　縣
使　若小見　不知山　國瀨　溫義　倉桓　高屋　宗
安　秦冠　豐岳　豐　大賀良田使　岳屋　綺　火
工　倭島　智　郡　高　句　縣　良　原　士　都
王　膳　鷹取　柿宇(柿同上作レ橘○以上姓名錄抄所レ載)　安都　守保
三津　三池　生池　生夷　滋生　清井　酒井　酒浪
吉侯　日置　桑原　但部　武義部　服部　卜部
守部　刑部　建部　綾部　渡部　日下部　稅部　神
服　支主　村主　大縣　大鹿　善世　善努　氷部
桑名　調舍　弖秦　山城　文山　伊香　伊水　水合

小槻　長尾　我孫　高市　高安　高田　竹田　麻
田　麻績　佐太　河內　河合　吉川　澁川　小神
和仁古　御船　櫻島　宇母　宗岡　難波　播磨　丹
比　丹波　藏人　間人　土師　出雲　甲可　豐綺
板持　志貴　忍海　石栗　若江　中野　奈癸　石城
上勾　礒上　石作(以上八十一姓拾芥抄有)

無戶姓三十五

品治　遠澤　淺島(淺拾芥抄作レ漆)　尾寒(寒同上作レ塞)　凡部(凡同上作レ丸)
十市　各務　風早　早可　吉身　鷹取　帶玉(玉同上作レ壬)
都保　牟久　內原　浮穴　國不見　赤染　穴太　沙
田　公子　城上　勒連　美努　御浦　不知山　五百
井　上　財　長　言　良　貞　都　下(以上姓名錄抄所レ載)　天
神　地祇　穴師　吉志　天孫　鴨君　冬智　膳大伴
茨田勝　奈𠳐勝(彌カ)　阿多隼人　阿祇奈君　三宅人
葛原部　吉彌侯部　穴師神主　音太部　榎本　足羽
西　面　綺(以上廿二姓拾芥抄有)

一字訓姓七十二氏(以下姓名錄抄所レ載)

源　橘　平　笠　船　伴　常　和　臺　都　秦　錢
藏　林　神　父　太　國　郡　縣　射　園　木
語　喑　氏　山　海　河　膳　狩　贄　錦　別　金

宗　石占　貞根　眞上　賎田本ノマヽ以上姓名錄抄所レ載　河内　葛木
志賀以上三姓拾芥抄有
縣主六
紺口　添　志紀　鴨　賀茂　大志貴以上姓名錄抄所レ載　志貴
大彌　珍以上三姓拾芥抄有
村主九
錦織　牟佐　穴太　葦屋　古市　高安下拾芥抄無下字　下
志賀　穴太以上姓名錄抄所レ載
神主三
荒木田　度會　恩智以上三姓拾芥抄有
使主七
末拾芥抄作米　和藥　小高　長田　穴師　恩智　後部藥
藥同上作レ樂〇以上姓名錄抄所レ載　雜此一姓拾芥抄有
雜十三〇拾芥抄作レ人
人神　大角集　伯大首神　葦屋漢　河原藏　日置藏
國背完完拾芥抄作レ穴　池上椋　川內漢　高漢　柏以上作レ狛
凡　漢以上姓名錄抄所レ載　閑漢　神以上二姓拾芥抄有
伊美吉四
倉門部　國不見本ノマヽ大池邊大拾芥抄作レ文　狩以上姓名錄抄所レ載
史十一

島岐　朝明　沙田　楊胡　竹志　己改改拾芥抄作レ汝　道
祖本ノマヽ大里　武丘　亮　眞城眞同上作レ直〇以上姓名錄抄所レ載　楊公　髙
勝五
御丘　豐津　八戸以上五姓拾芥抄有
上　木　奈癸　酒中　宮以上姓名錄抄所レ載
部廿六
上　秦人　葛原　小子　阿刀　納石作拾芥抄無二納字一　吉
彌侯彌同上作レ禰　雜田　鴨　丹比　日置　三宮　坂戸物
西泥土同上無二土字一　祝　伯津　園　鷹養養同上作レ殞　相槻
物相同上作レ祖　眞髮　二田物　紀　納部物　音太　尾張
榎井以上姓名錄抄所レ載　狛染　上網以上二姓拾芥抄有
氏九
半昆　吉拾芥抄作レ古　賈　加羅　面　堅祖　吳　筆　改
斯同上作二汝斯一〇以上姓名錄抄所レ載　猪養　阿祇奈君以上二姓拾芥抄有
阿祇奈君百廿七
伊我水取　志王作志拾芥抄作レ忌　大小見　猪養　目包部
眞時　都保　史戸　阿多御手養　三祖　丸人中家
丸同上作レ凡　田井　三川眞　大石椅立　笛吹　波多祝
大田史　陽侯　柏人野柏人同上作二狛久一　武佐　時原　千部
勝大伴　齋部　大私部　神主　大辟　三並　荒良

肥氣多　石生別　金以上姓名錄抄所載　堅井　乘　大綱　稻
城　氣多　荒　呉　服以上八姓拾芥抄有

首六十九

和田　高家　橋樑部　猪甘　鳥甘部　志紀　牟古
尋來津　原　蝮壬部壬拾芥抄作王　羽束　靫編　度守　布
師部　部家　苑部　韓海部　大戸　和山寺寺同上作守　掃
守田　韋田　村擧　櫻野　辟田　民使　信太　御手
代　大家　川上　園人　江　生田　安幕　大市　清
水　長柄　眞神田　河内民　近義　川枯　白堤　船
子　布忍　菅田　佐夜部　蘇宜部本ノママ　井代　津門　阿
禮　錦部民　松津　小豆　青海　二見　住道　新木
郡　清海　番長　酒　佐野　錦民　佐波部　内呉
神門　川邊　英保牟同上無牟字　川　義部以上姓名錄抄所載
池田　新家　布敷　酒部　刑部　爲奈部　大麻　川
合　江人　縣使　高岳　江郡　川津以上十三姓拾芥抄有

臣廿八

池後　伊蘇志　膳　穗積　田々内　葦占　巨勢　斐太
内田　會加　他田廣瀬　紀辛梶　出庭　早良　巨勢
棫田棫拾芥抄作城　音太部　内　眞野　宇自可　櫟井
和安部安同上作爾　葉束束同上作栗　阿支奈　金　蝮椿

三尾　大前　武射　埋田以上姓名錄抄所載　葛野　伊賀　生
部　和太部　阿閇　生江　他田　的　江沼　井代
布師　神門　良以上十三姓拾芥抄有

造四十四

韓矢田部　幡文　忍海部　大丘　大炊刑部　八坂
奈若私　櫛代　小橋　高野　若櫻部　波多門部　高
井　工　奄智　神私私拾芥抄作祓　茨木　宮部　大庭
波多　日根　薦本ノママ　宇努　御池　扮田田同上作谷　長倉
取石　矢作　豐津　薦集薦同上作鷹　朝妻　豐村　坏作
坏同上作柸本ノママ　海原　秋部　呉部部同上作服　高安　神官部
官同上作宮　伊部　積組　糸井　衣縫　輕部　猪名部
以上姓名錄抄所載

直十八

大村　等彌　尾津　池邊　大撫大撫拾芥抄作史撫　大田　祝
山　臺　倪作役倪同上　大坂　但馬海　浮穴　津島　荒
田　壹岐　水主　吾川　朝倉以上姓名錄抄所載　直部　山代
物忌　内原　長谷山　絕　大田稅以上七姓拾芥抄有

忌寸十七

淨山　高山高拾芥抄作嵩　榮山　大津大同上作木　大山　大
岡　高尾　山村　倭川原　長國　清川　新長　當

比　中臣酒人以上廿六姓拾芥抄有
連百六十
他田　大私　津保江　槻本　志太　散吉　舍人　桃
原　中臣　藍以上二姓拾芥抄爲二一姓一　風早　生江　大鳥　河瀨
山前　若倭　山河　爪工　孔士部土同上作レ玉　弘世
大井　長背　忌部　中跡　蓼原　物部　肩野　柏
原　柴垣　葛野　大貞　曾禰　中臣高良比　平岡
川跨　評　貞神　畝尾　田曾禰　中臣表　中臣方岳
中臣　志斐　殖栗　中村　中臣大家　額田部陽生
陽生同上作二湯坐一　津大江　吉水　御笠　出水　福當　志我
閇本ノママ長野　吹田　身人部　湯母竹田　竹田川邊　廣
津　清道　錦部　廣井　檜前舍人　榎室　殞　丹比
須布　長谷置部部同上作レ始　神前　肩野　忍坂　櫻田　野實
高槻　廣田　築紫　宇努　今木　巨椋　竹原
伊吉　神麻績　佐良　廣階　平松　高篠　狹山　志
悲　蜂田　殿來　韓國　宇遲　不破　廣海　春野
神努　中臣大田　鳥見　高室　村山　物部依網　中
臣酒屋　高道　春井　松野　八清水　物集　日奉
岡　大椋　置始置始同上作二景始一　雄儀　小山　門部　馬工
熊野　吉田　阿曇犬養　栗栖　山田　勇山　中臣葛

野　宇治山寺　細津守　椋河原　野上　贄土師　新
城　子部　高志壬生　中臣栗辰　屋　道田　黃文
與等　佐伯日奉　高市　家內　楊津　仲丸子　若倭
部　安勅　椋椅部　小家　三枝部　額田部位甲　中
臣宮處　鹽屋　原井　長背　石津　物部韓國　根阿
部志斐同上無根字　大伴山前　止美本ノママ秦長藏　中臣東　下
家　矢集　男床　水海　伊與部以上姓名錄抄所レ載　治田　麻
田　大狛　丹比　古志　岡原　城原　河內　草部
凡海　宇治部　中臣藍　長野　中跡　石野　吉野
石作　氷取　坂茂　神好　春日　和太　城篠　豐島
雲掃　天語　佐々爲　佐々良　調　岡　根　草
泙　物部依紕本ノママ　中臣志斐　大村直田　物部依羅　以上三十
六姓拾芥抄有
公四十三
安那　牟義　岡屋　羽咋　酒部本ノママ別　三林　荒々
牟佐呉　佐自努　市往　三間合　銃師銃拾芥抄作レ銃　壬生
部　息長　竹原　石邊　稻城壬生　車持　輕我孫
呉堅井　佐代　川俣　豐階　豆良豆同上作レ豆　佐々貴山
垂水　阿閇門人山　廣幡　廬原　首　下養　多々
良　廣來津　川原　榛原　壬生　丸子　角山　牟禮

宿禰二百六十三
漢人　呉漢　井原　東部　張六定　長峯　常世　凡
海　羽束志 志拾芥抄作レ忠　大日子　小治田　栗安　淺井
新家　磯部　伊賀　清岡　栗前　石内　長我　伯耆
朝束 束同上作來　御野　矢俣田部　御立　大友　羽栗
長部　伊岐　能登　八戸　田使　錦　神田　志賀
榎井　十市　宮原　井上　達部　若湯坐　各務
三宅　小長谷　豐岡　清田　神　丈部　雀部　太春
道　大國　大仁　秦　高志　清世　額田　太秦　良
枝　縣主　常澄　商長　金刺　美　櫻島　山城　眼
部　主夷　清井　漆　若江寺　奈美 本ノマヽ　我彌　麻績
守保　坂合部　上勾　三池　飛鳥部　村主　麻田
河内　美麻那　勝　卜部　佐太　刑部　御船　石城
竹田　縣犬養　石作　灘波　生池　日置　長　宗
岡　藏人　酒波　長尾　高尾　高田　税部　穴太
掃守　安名　服　有道　田邊　吉志　鳥井　凡部
五百木部　民　吉身　海　椿部　榎本　巨智　當世
上村主　安曇　丹生　椋橋　若狹　猪　越智　石
野　坂上　狛　深根　漢部　大石　品治　清内　尾
張　春日戸　國　縣　葛井 本ノマヽ　日下　滋善　津守　船

木　靱　阿刀　金集　八木　守　幡美　委文　大田
部　津伊福部　守部　私　高市　大鹿　倉橋部　建
部　直　問人　珍　中野　三津　甲可　的　忍海
吉川　調　礒上　武藝津　上　船　道　高安　綾部
出雲　渡津　土師　善世　丹波　桑名　文山　小
槻　酒井　日下部　桑原　語　滋生　播磨　丹比
川合　文　大縣　伊香　吉侯　六人部　安都　澁川
板持　依智　秦 以上二姓同上爲一姓　美努　狩　伊水　石栗
神服　志貴　三野　藏垣　直髮部　葛木　赤坂
新井　宇自可　池上　物部　宇治　矢田部　春米
入間　氷　佐爲 爲同上作井　中科　雁高　高丘 丘同上作岳
山田　榮井　吉井　大和　額田部　大伴　大田
以上二姓同下爲一姓　太秦公　齋部　玉祖　谷　布留　海犬養
酒人　巫部　武生　畝火　檜原　平田　礒多　治
比　箭集　新田部　依羅　二島　和介部　淨村　清
宗　清宇　猪使　小子部　眞神　若犬養　高村　中
臣　田部　祝部 以上姓名錄抄所載　日本　間人　丈部　委部
掃部　丸部　阿部　下部　伊福部　春日部　石材部
猪名部　長谷部　曾我部　常世　凡河内　見池
上野　大春日　椿戸　三枝　宇禰備　善　襷田　治

古今要覧稿卷第十三

●姓氏部 姓

●箇條

朝臣百四十六

藤原 源 平 橘 大中臣 菅原 良峰 大江 在
原 紀 高階 中臣 南淵 賀陽 三善 貞 巨勢
大枝 高橋 宮道 小野 令宗 大藏 惟宗 菅
野 秋篠 和氣 林 佐伯 賀茂 雀部 滋野 安
部 清科 伴 内藏 山 粟田 百濟 和 菅生
伊勢 笠 大神 高麗 廣根 采女 宗形 柿本
道守 山口 石上 高圓 池田 住吉 池原 阿閇
山上 星川 石川 田口 櫻井 角 阿保 多米
長岡 春原 三原 永原 椋垣 荒城 淡海 阿部
布勢（勢拾芥抄作レ施） 朝野 宍人 甲能 葛城 掃守 讃
岐 坂本 大宅 朝宗 水取 滋原 島田 伊統
綾 長綾 家原 善茲 春澄 坊本 春 葛原
御室 朝原 忠宗 御春 經通 安部 弓削 平野

中原 都努 善淵 飯高 上道 春日 宗岳 立
野 久賀 鳥取 高額 大上 吉備 下道 箭口
多御使 玉手 八多 宮處 佐味 大野 高向 田
中 川邊 岸田 久米 御炊 許曾部 和安部 上
毛野 下毛野 大春日 石村部 中臣習宜 中臣熊
凝 若櫻部 平群 平群文室 上毛野坂本 巨勢械
田（械同上作城） 豐原 篁 丹波（以上姓名錄抄所載） 時原 茲原 清原
大野 大豆 平原 平都 滋岳 夏身 阿蘇 阿
保 足羽 瓱取 長流 長統 津島 晴 角 良
都 唁 西 戸（以上廿三姓拾芥抄有）

眞人四十八

清原 文室 息長 山道 三國道（道拾芥抄作レ豐） 守山 飛
鳥 飛鳴（鳴同上作レ多） 英多 大原 豐國 香山 蜷淵 笠
原 登美 四止 當麻 吉野 氷上 坂田 爲名
豐野 酒人 成相 島根 大和 島 茨田 登見
爲奈 御原 槻田 多治 清篠 酒爾 甘南備 宗
形 坂田酒人 息長丹生 高向 吉野 大坂上 朝
原 多治比 井上 三島 滋岡 秋篠（以上姓名錄抄所レ載） 山
於 國豐野 池上 海上 桑田 酒爾川 路 酒人
小川（以上八姓拾芥抄有）

斷ニ公卿侍中尙書衣レ帛而朝曰ニ朝臣ニ諸營校尉將ニ大夫以下ニ亦爲ニ朝臣ニといへるを思ひしなるへし
答に朝臣はかは禰にて朝の臣と申處に氣をつけ候へはあしきなりとはいまたしきなり朝臣はしめは阿曾美とかけり日本紀私記に我身に副の義帝王相親む詞なりとみえたり和訓栞に後に朝臣と塡しはあさおみの義なから其本義を以訓せるそよきといへり此卿は當世有職の聞えは有けれとも本書にうとくしてかゝるあやまち有しなり又越智は姓にて宿禰は尸にて候と有も正字と假借との差別をしられさるなり

俗說辨云姓も氏も元一なり姓は體にて氏は用なりしかれとも分つていへは源平藤橘は姓なり姓（萬世まてかはらす）新田足利北條菊池楠は氏なり（これはところにより代によつてかはる事あり）故ニ源氏平氏藤氏橘氏とはいへとも新田姓足利姓北條姓なとゝはいはさる也又新田足利なとを名字と覺たるものあり甚た非なり是家號なり名字には非す考へしるへし
按に姓はかはねとよみて朝臣眞人の類氏はうちとよみて源平藤橘の類なる事上にしるすことし然るを體用に分つ事は古書に暗き故なり又新田足利の類を氏といふことは俗稱にて取にたらす名字の義を下に辨す

南留別志云異國姓氏名字號の五つあり姓は姓祖已來の姓なり日本源平藤橘の如し氏と云は子孫の分るによつて其領知するところ或は出所の地所を取て其一族の稱號とするなり是を氏族と云日本新田足利なと云か如し今の世名字と云是なり名と云は父のつけたる名なり賴朝尊氏の如し云々
按に源平藤橘を姓といひ稱號を氏とせるなと皇朝の典故にうとく論するにたらさるなり

日本紀通證云今士庶以ニ家稱號ニ爲レ氏又謂ニ之名字ニ以呼ニ其鄕里ニ本名田字之故也作ニ苗字ニ者不レ是
按に家號稱號を名字と書て呼其鄕里本名田地之故也と云て作苗字者不是とはあやまれり名字とは名とアサナの事也苗字は祖より受て其苗裔のアサナといふ意にて稱號の義に叶ふへきなり

かはね

類聚名物考に賀茂眞淵の說を引てかはねは阿加馬奈の意にて阿は發語にて米を姿に通はしいへるならん馬は吳音め漢音ばなれは相通ふ事にて崇名の事なるへしといへり續日本紀に高名とあり是徵すへし加波禰名の稱奈を約めて禰とのみいふなりといへりかはねの訓義先かくも有へきにや和訓栞には皮骨之義也とありされはかはほねを約してかはねといふなり皮骨の意はけたし一身の主たる義なるへし秇苑日涉云國字力音加凡字之掠礫撇二過其筆一者謂二之波禰一今力字長二左旁一、作レ尸字、形與レ尸相似、因呼二尸字一、爲二加波禰一耳、按尸主也詩召南誰其尸レ之又古者祭祀皆有レ尸以依レ神亦以爲二所レ祭之主一也云々今以二眞人朝臣之類一爲レ尸者蓋以レ爲二一族之王一也刑部親王姓氏錄曰源朝臣信弟妹凡八人弘仁五年各賜レ姓以レ信爲二尸主一其義可レ見已又姓氏錄序以二氏骨二字一訓二加波禰一骨之爲レ言主也氏骨者言三氏族之所二以爲一レ主也なといへるはおほつかなし

骨名 續日本紀 根可波禰 同上 之軻波禰 日本紀通證 尸 定基卿說

○正誤

新野問答定基卿答云日本にて姓氏差別は分明にみえ不申候如被示候國史に賜姓なと候は姓の字かはねと訓多候得共此假名付候もの未見及候得者押てかはねとも訓かたく候又朝臣宿禰の類をかはねと申すことはいかなる義とも未勘得候如被示朝臣宿禰の類にて姓氏高下をわかち申候事に候問朝臣は朝の臣下と申こゝろにて候哉答朝臣はかはねと申ものにて朝の臣と申所にきをつけ候へはあしく候尸は人の尸骨と申て人の種姓の根本にて候か數廿四有之候うち朝臣第一にてよく候たとへは丹後守越智宿禰とかき申候越智は姓にて候宿禰は尸にて候越前守淸原眞人是も淸原は姓眞人は尸にて候

按に日本にて姓氏差別は分明に見え不申とはきのとくなる事なり國史に賜姓云々賜源朝臣姓とある源は氏朝臣はかはねにて姓は氏より重き故に賜姓と書れしなり姓の字かはねと訓この假名付候モノ未見及とは續紀に根可婆禰と假名書有しことは心つかれさりしや但この根の字は衍文なるへし朝臣は朝の臣下と申こゝろにて候やと問れしは蔡邕獨

禰眞人ナトノ部ニテナキハミナ外姓ナリ内叙ト云ハ入内ノコナリマサシク從五位下ニ叙スルヲ内階ト云ナリ寳石類書引

倭事始云安康天皇四年氏姓の混亂してその實を失ふ事を憂ひ云々神に誓ひ探湯してその氏姓の眞僞を定めらる日本紀に出たり是氏姓を定給ひし始也

日本紀通證云、姓訓ニ之軻波禰一、蓋骨族之謂、姓氏錄序、所レ謂人民氏骨此義也、

又云、今士庶以ニ家稱號一爲レ氏、又謂ニ之名字一、以呼ニ其鄕里一、本名田字之故也、作苗字者不是、

忍海記云、以ニ朝臣宿禰臣連一爲ニ日本四姓一

○和歌

萬葉集卷第六

石上乙麿卿配ニ土佐國一之時歌三首并短歌

父公爾吾者眞名子叙、妣刀自爾吾者愛兒叙、參昇八十(ヤソ)氏人(ウヂヒト)乃、手向爲等恐乃坂爾、幣奉吾者叙追、遠杵土左道矣

後拾遺和歌集卷第七賀

宇治前太政大臣の家に卅講の後歌合し侍けるによめる

藤原爲盛女

おもひやれやそ氏人の君かためひとつ心に祈るいのりを

續古今和歌集卷第七賀歌

家に歌合し侍けるに春の祝のこゝろをよみ侍ける

攝政太政大臣

春日山都のみなみしかそ思ふきたの藤なみ春にあへとは

袖中抄卷第十九

みちのくのえびすの身よりいたすちのことうちなれや逢ぬ戀かな

○釋名

うち

うちは山岡明阿彌の說にいつと音通にて出るの義なり字も口出たてよこに書わくるのみの差別なれはかた〳〵いつるの義としるへきよしいへり氏は子々孫々百世にいたりてもはなれさらしめかつその先祖の出るを知らするためなるものなれはいづといふ義相當なるへし

姓氏錄（左京皇別上）云、源朝臣　源朝臣信年六（腹廣井氏）弟源朝臣弘年四（腹上毛野氏）弟源朝臣常年四弟源朝臣明年二（以上二人腹飯高氏）妹源朝臣貞姫年六（腹布勢氏）妹源朝臣潔姫年六、妹源朝臣全姫年四（已上二人腹當麻氏）妹源朝臣善姫年二（腹百濟氏）信等八人、是今上親王也、而依弘仁五年五月八日勅、賜姓、貫於左京一條一坊、即以信爲戸主

水鏡云垂仁天皇そのほと世のならひにてちかくつかうまつれる人々を生なから御はかにこめられにけり云々いまよりこの事なかく止むへしとのたまひてその後土師の氏の人土にて人かたけ物のかたなんとをつくりてなん人のかはりにこめはへりしおほやけ是をよろこひて土師といふ姓をたまはせしなり

類聚國史云、七月乙卯勅、頃年京職輙賜諸王姓、即著籍帳以成常、自今以後六世以下之王、情願賜姓所願姓、先以申請、然後行之、

江家次第云、次一々叙之、（雖下姓不叙外姓）

明月記云、三條宮配流事日來云々　夜前檢非違使相具軍兵固彼第（賜源氏之姓其名以光）先是主人迯去（不知其所）同宿前齋宮（亮子內親王）又迯出給

河海抄云、弘仁五年五月八日遂下明詔男女都屬三十五、初賜源朝臣姓、其名、男皆用一字其爵、女同叙從四位（弘仁源氏本系源順作）云々嵯峨之御後寛平元年十二月廿三日初定七代源氏年爵次第

弘仁　承和　天安　貞觀　元慶　仁和　寛平是也

弘仁源氏、隔二年預爵權大納言兼行右近衛大將民部卿中宮大夫源朝臣、云々、宣奉勅天曆六年　正月初加延喜御後代々源氏（大臣外除之）

左大臣信　左大臣常　左大臣融（以上弘仁）　右大臣多　右大臣寛（以上承和）　右大臣能有（天安）　左大臣高明　左大臣兼明（延喜）　此外貞觀元慶仁和寛平源氏

東鑑（正治三年十一月四日條）云、伊勢國三日平氏跡、新補地頭等、募武威、停止大神宮御上分米之由、本宮訴申之、

又（元久三年七月一日條）云、伊勢平氏等蜂起之時、朝政朝臣爲大將軍、相催近國御家人云々

長秋記云、保延元年正月四日朝覲行幸、云々、左衞門督被申曰、光則忠方、同日依勸賞叙爵、然而多依爲朝臣、叙內位、猶依下姓、叙外位、右忠方爲上﨟也、

職原鈔之抄云外姓トテイヤシキ者ヲハ先外從五位下ニ叙シテ後年ノ叙位入內トテ從五位下ニ叙ルナリ宿

臣鹿取薨、云々、叔父從六位上朝野宿禰道長、爲レ子出身、延暦十一年自言レ歸二父戸（戸カ）一追賜二父鷹取姓宿禰一、卽入レ京

三代實錄云、左中辨正五位下丹墀眞人貞峯等、賜二姓多治比眞人一、先レ是貞峰等、上表曰、云々飛鳥淨御原天皇十三年十月一日、定二八姓十三氏一、

又云、貞觀八年丙戌三月二日戊寅、云々、伏聞嵯峨遺旨、母氏有過者、其子不レ得レ爲二源氏一、

又云、私檢二吉野宮御宇一宣化天皇皇子加美惠波皇子、生二十市王一、十市王、生二多治比古王一、此王生產之夕、忽多治比花飛二浮湯浴釜一、以二斯冥感一名二多治比古王一、成長之後固執謙退、奏請求レ姓、因賜二姓多治比公一、便以レ名爲レ姓、存二其舊意一

又云、弘仁五年特蒙二明詔一、諸皇子未レ爲二親王一者、皆賜二姓源朝臣一、定是源氏之第六郞也、其源之命レ氏、始二於此一矣

文德實錄云、爲レ除二凶服一、先遣二大中臣氏人於五畿內七道諸國一、以修二大祓一

公式令云、凡授レ位任レ官之日、喚辭、（謂在二御所一而授任之辭其在二官省一亦准二此例一也）三位以上先レ名後レ姓（謂假令喚云二秦萬呂宿禰一之類）四位以下、（謂二五位以上一也）先レ姓後レ名、以外三位以上直稱レ姓、（謂直稱二秦宿禰一之類也）若右大臣以上稱二官名一、四位先レ名後レ姓、五位先レ姓後レ名、（謂喚云二秦宿禰萬呂之類一也）六位以下、去レ姓稱レ名、（謂直言二秦萬呂一不レ稱二宿禰一也卽授任之日及以外並皆通稱也）唯於二太政官一、三位以上稱二大夫一、四位稱レ姓、五位先レ名後レ姓、其於二寮以上一、（謂二辨官以下一也）四位稱二大夫一、五位稱レ姓、六位以下稱二姓名一司、及中國以下五位、稱二大夫一（謂一位以下通用二此稱一）

延喜式（式部省）云、凡改レ姓爲レ臣之徒、五世已上同叙二正六位上一、七世已上承レ嫡叙二正六位下一、自餘同二庶人一

弘仁私記序（釋日本紀引）云、神胤皇裔指掌灼然、（注云中臣朝臣忌部宿禰等爲二神胤一也息長眞人三國眞人等爲二皇裔一也）慕化、古風、擧目明白、（東漢西漢史及百濟氏等爲二慕化一高麗及東部後部氏爲二古風一也）

古語拾遺云、令下天富命率二齋部諸氏一、作中種々神寶鏡玉矛盾木綿麻等上、云々又令下天富命率二供作諸氏一、造中作大幣上

又云、更令下齋部氏率二石凝姥神裔天目一箇神裔二氏一、更鑄レ鏡造上レ劍

又云、神祇官神部、可レ有中中臣齋部猨女鏡作玉作盾作神服倭文績等氏上、而今唯有二中臣齋部等二三氏一、自餘諸氏、不レ預二考選一、神裔亡散、其葉將レ絕

又（同上）云、政稱無道、謂何等事、歟云、造東大寺、人民苦辛、氏々人等亦是爲憂、又置劍奈羅爲己大憂、問所稱氏々指何等氏、又造寺、元起自汝父時、云云

又（同上）云、今天下亂人心無定、若有他氏立王者、吾族徒將滅亡、願率大伴佐伯宿禰、立黄文而爲君、以先他氏爲萬世基

又（同上）云、上道臣斐太都、賜姓朝臣

又（同上）云、淨御原朝廷、定八姓之時、被賜雀部朝臣姓、然則巨勢雀部、雖元同祖、而別姓之後、被任大臣、當今聖運不得改正、遂絕骨名之緒、永爲無原之氏、望請改巨勢大臣爲雀部大臣、云々

又（淡路廢帝紀）云、勅曰太師正一位藤原惠美朝臣押勝、幷子孫起兵作逆、仍解免官位、幷除藤原姓字

又（同上）詔曰、逆（仁）穢（岐）奴仲末呂云々、諸氏々人等（乎毛）進（都可方須已止）云々、氏々門（方）絕（多末方須）

又（稱德紀）云、五月丙午、勅入國問諱、先聞有之、況從今何曾無諱、頃見諸司入奏名籍、或以國主國繼名、向朝臣名、可不寒心、或取眞人朝臣立字以氏作字、是近冒姓

又（同上）云、丈部姉女（乎波）內（都）奴（止）爲（氐）冠位擧給（比）根可婆禰改給（比）治給（伎）、一等降（弖）其等（我）根可婆稱替（弖）遠流罪（爾）治賜（布止）宣（布）

又（同上）云、以去天平寶字九歲、改首史姓、並爲毗登、彼此難分、氏族混雜、於事不穩、宜從本字、云々

又（光仁紀）云、寶龜四年五月辛巳、阿波國勝浦郡領長費人立言、云々、國司從五位下豐野直人篠原、以無記驗、更爲長費、官判依庚午籍、爲定、又其天下氏姓、青衣爲采女、身中爲紀、阿曾美爲朝臣、足尼爲宿禰、諸如此類、不必從古

又（同上）云、從五位上因幡國造淨成女、爲因幡國國造

又（桓武紀）云、臣苅田麻呂等、失先祖之王族、蒙下人之卑姓、望請改忌寸、蒙賜宿禰姓、云々

又（同上）云、韓國連源等言、己等是物部大連之苗裔也、夫物部連等各因居地行事、別爲百八十氏、是以源等先祖鹽兒、以父祖奉使國名、故改物部連、爲韓國連、然則大連苗裔、是日本之舊民、今號韓國、還似三韓之新來、至於唱導、每驚人聽、因地賜姓古今通典、伏望改韓國二字、蒙賜高原、依請許之

續日本後紀（仁明紀）云、參議從三位勳六等兼越中守朝野朝

汙清名一、遂郎民心不レ整、國政難レ治
又天智紀云、八年十月庚申天皇遣二東宮大皇弟於藤原内
大臣家一、授二大織冠與一大臣位一、仍賜レ姓、爲二藤原氏一、自
レ此以後、通曰二藤原大臣一、辛酉藤原内大臣薨、
又天武紀云、十三年冬十月己卯朔詔曰更改二諸氏之族
姓一、作二八色之姓一、以混二天下萬姓一、一曰二眞人一、二曰二朝
臣一、三曰二宿禰一、四曰二忌寸一、五曰二道師一、六曰レ臣、七曰
レ連、八曰二稻置一、
又同上云、八年春正月壬午朔戊子、詔曰凡當二正月之節一、
諸王諸臣及百寮者、除二兄姉一以上親及已氏長以外、莫
レ拜焉、其諸王者、雖レ母非二王姓一者莫レ拜
又同上云、十一月戊申朔、大三輪君、云々、笠朝臣、凡五
十二氏、賜レ姓曰二朝臣一
續日本紀文武紀云、初年閏十二月庚申、禁三正月往來行二
拜賀之禮一、如有二違犯者一、依二淨御原朝庭制一、決二罰之一、
但聽レ拜二祖兄及氏上者一、
又同上云、二年九月戊午朔、以二無冠麻績豐足一、爲二氏上一、
無冠大贄爲二助進一廣肆服部連佐射爲二氏上一、無冠功子
爲レ助、
又同上云、詔曰藤原朝臣、所レ賜之姓、宜レ令二其子不比等
承レ之、但意美麿等者、緣レ供二神事一、宜レ復二舊姓一焉、
又同上云、大寶二年九月乙丑、詔甲子年定二氏上一、時不
レ處レ載レ氏、令レ被レ賜レ姓者、自二伊美吉一以上並悉令レ
申、又聖武紀云、命婦從五位下尾張宿禰小倉、授二從四位
下一、爲二尾張國々造一、
又同上云、和銅元年十一月二十一日、供二奉擧レ國大嘗一、
二十五日御宴、天皇譽二忠誠之至一、賜二浮杯之橘一、勅曰
橘者菓子之長上、人所レ好、柯凌二霜雪一而繁茂、經二寒
暑一而不レ彫、與二珠玉一共競レ光、交二金銀一以逾美、是以
汝姓者、賜二橘宿禰一也、是以臣葛城等願賜二橘宿禰之
姓一、戴二先帝之原命一、流二橘氏之殊名一、萬歲無レ窮千葉相
傳、云々
又孝謙紀云、天平寶字元年春正月戊午、從五位下石津王、
賜二姓藤原朝臣一、爲二大納言從二位麻呂之子一、
又同上云、天下鰥寡孤獨篤疾廢疾不レ能二自存一者、量加二
賑恤一、其高麗百濟新羅人等、久慕二聖化一、來附二我俗一、志
願レ給レ姓、悉聽許之、其戶籍記無二姓及族字一、於レ理不
レ穩、宜レ爲二改正一、
又同上云、乙未、始制二伊勢太神宮幣帛使一、自今以後差二
中臣朝臣一、不レ得レ用二他姓人一、

治一者、蓋由レ是也、朕雖二不賢一、豈非レ正二其錯一乎、群臣議定奏之、群臣皆言、陛下擧レ失正レ枉而定二氏姓一者、臣等冒レ死奏可、戊申詔曰、群卿百寮及諸國造等、皆各言、或帝皇之裔、或異之天降、然三才顯分以來多歷二萬歲一、是以一氏蕃息、更爲二萬姓一、難レ知二其實一、故諸氏姓人等、沐浴齋戒各爲二盟神探湯一云々、自レ是之後、氏姓自定、更無二詐人一

又紀崇峻云、大連之軍忽然自敗、合レ軍悉被二皂衣一、馳二獵廣瀨勾原一而散、是役大連兒息與二眷屬一、或有下逃二匿葦原一改レ姓換レ名者、或逃亡不レ知レ所レ向者上

又同上云、此大世所二希聞一、可レ觀二於後一、須下使二萬族一作レ墓而葬上、由レ是萬族雙二起墓於有其香邑一、葬二萬與レ犬焉、河內國言、於二餌香川原一有二被レ斬人一、計將二數百一、頭、身既爛、姓字難レ知、但以二衣色一收二取其身一者云云

又同上云、冬十二月巳卯朔壬午、差二紀男麻呂宿彌、巨勢臣比良夫、狹臣大伴齧連、葛城烏奈良臣一、爲二大將軍一、率二氏々臣連一、爲二裨將部隊一、領二二萬餘軍一、出二居筑紫一、

又紀推古云二月辛亥朔庚午改二葬皇大夫人堅鹽媛於檜隈大陵一、云々第四大臣引二率八腹臣等一、便以二境部臣摩理勢一、令レ誅二氏姓之本一矣

又同上云、皇太子遊二行於片岡一時、飢者臥二道垂一、仍問二姓名一而不レ言

又紀皇極云、大臣使二長直於大丹穗山一、造二桙削寺一、云々、恒將二五十兵士一繞レ身出入、名二健人一、曰二東方儐從者一、氏氏人等、入侍二其門一、名曰二祖子孺一者、漢直等全侍二二門一

又紀孝德云、始王之名名、臣連伴造國造分二其品部一、別二彼名名一、復以二其民品部一交雜使レ居二國縣一、遂使二父子易レ姓兄弟異レ宗、夫婦更互殊レ名、一家五分六割、由レ是爭競之訟、盈レ國充レ朝云々

又同上云、凡王者之號、將下隨二日月一遠流上、祖子之名、可下共二天地一長往上、如レ是思故宜之始二於祖子一、奉仕卿大夫臣連伴造氏氏人等云々咸可二聽聞一

又同上云、既而頃者、始三於神名一天皇名、名或別爲二臣連之氏一、或別爲二造等之色一、由レ是率土民心、固執二彼此一、深生二我汝一、各守二名々一、又拙弱臣連伴造國造、以レ彼爲レ姓、神名王名、逐二自心之所一レ歸妄付二前々處々一、（前々猶レ謂二人人一也）爰以二神名王名一、爲二人賂物一之、故入二他奴婢一、穢二

姓の序次を正しくいは丶天武朝廷十三年冬十月己卯朔詔曰更改ニ諸氏之族姓一作ニ八色之姓一以混ニ天下萬姓一一曰眞人二曰朝臣三曰宿禰四曰忌寸五曰道師六曰臣七曰連八曰稻置といはれたれとこの制にたかへることのたちましりたりこの八種姓を定め給ひしのち眞人姓を給へるもの十三氏朝臣姓を給へるもの五十二氏宿禰姓を給へるもの五十氏忌寸姓を給へるもの十一氏のみにて道師より以下を改賜ことはみえす故思ふに臣連稻置の三姓は太古のまゝなれは其上なるへき姓を此御代に定められしとやいふへきされと道師といへる姓は國史及姓氏錄にもみえされは此時の制はことゆかさりしにこそあらめ作ニ八色之姓一以混ニ天下萬姓一といはれたれは外姓ともはみなとゝめらるへきこととなるになほ君首二造直史縣主村主等の姓國史及姓氏錄にいと多くみえたりこたひ國史にみえし十四種姓をつとへて其序次を考得しものは一曰眞人二曰朝臣三曰宿禰四曰忌寸五曰臣六曰連七左曰公七右曰首八左曰國造八右曰伴造九左曰縣主九右曰直十左曰村主十右曰史となせりこれはしも己心におもひ定めしにはあらす國史ともにみえしを彼是に思ひかよはして如此考定めてしこの十四種姓は後世までも傳れるもの也

姓の序次を七より左右にこと別しものは彼も是も上にも下にも序次しかたきものにて二なからひとしくならふへき姓ともなれは左右にならへて序次せしなり

古事記云此時之後、將爲豐樂之時、氏氏之女等、皆朝參云々、於是、大后石之日賣命、自取大御酒柏、賜諸氏氏之女等

又云、於是天皇愁天下氏氏名名人等之氏姓忤過、而於味白檮之宮八十禍津日前、居玖訶瓮、而（玖訶二字以音）定賜天下之八十友緒氏姓也、又爲木梨之輕太子御名代定輕部、爲大后御名代定刑部、爲大后之弟田井中比賣御名代、定河部也

日本紀（神代卷）云、時皇孫勅ニ天鈿女命一、汝宜下以ニ所レ顯神名一爲中姓氏上焉、因賜ニ猿女君之號一、故猿女君等男女、皆呼爲レ君、此其緣也

又（允恭紀）云、四年秋九月辛己朔己丑、詔曰、上古之治人民得レ所、姓名勿レ錯、今朕踐ニ祚於茲一四年矣、上下相爭百姓不レ安、或誤失ニ己姓一、或故認ニ高氏一、其不レ至ニ於

月癸酉朔己卯以二武內宿禰一爲二大臣一也初天皇與二武內宿禰一同日生之故有二異寵一焉とみえしそはしめなるらむこのつき〳〵に任るゝはみな武內大臣の子孫のみなり然るに阿部臣內麻呂中臣連金を大臣に任れしことは心得かたきは中臣連金なり是は神別の人なり太古の例ならんには大連なるへきを大臣に任し給へるは殊恩にやありけん中臣の氏人に朝臣姓給へることは天武朝廷十三年十一月戊申朔のことなれはやや後のことなり太古には大なるわさことあれは大臣大連立並てことをなし給へりそは顯宗紀に元年春正月己巳朔大臣大連等奏言云々とみえしにて知るへしさて二造は大宮に仕奉る伴男を並て伴造と云ひ諸國の宰を並て國造といへり內人外人のけちめはあれとみなともに一班のもの也伴造國造をいたくけちめあることとな思ひそ敏達紀に仕奉朝列臣連二造（二造者國造伴造也）下及百姓とみえしにて勝劣なきを知れさるから書紀中にも伴造國造とも國造伴造とも互にして玄るせりこの臣連伴造國造の四姓は太古の氏々の階級にて此外に官班のことはなかりし其氏人等を統領せしさまは大臣の人は臣姓の氏々より其氏なる伴造國造まてをうけもち大連の人は連姓の氏々より其氏なる伴造國造までをうけもてり臣姓の人々等連姓の人々等は無姓氏人より部曲民までを各氏々にて統領せし也臣連二造の上に君別の二姓下に縣主村主稻置の三姓あれと此五種姓は諸國のことに預れるものにしあれはひとつらになしていへはみな國造といへり又首史直なといふもあれと太古の序次さたかならす孝德紀に別臣連伴造國造村主とみえ又同紀に國造伴造縣主稻置とみえたれと君姓の序を記せしものみることなし別と一班のものにやといふへけれと古事記中に皇子達の御末をいへるに某君といへるもの三十九氏某別といふもの二十五氏なれは君のかたは多かりしかと諸國にのみありて朝廷に侍てことをなさゝりしなへにきこゆることなかりしならむされと太古はことに威稜ありしもの也

君別の二姓は諸國の縣邑に君として各部曲民を治め給へるものなるからことに威稜ありたれと各國に居住して京に出て仕奉ることなかりしなへにことにいてゝ云ことなけれは國史に多くみえさるなり

百八十部云々又其臣連等伴造國造各置ニ巳民ー恣レ情駈使云々又集ニ侍卿等臣連國造伴造及ニ諸百姓又公卿臣連伴造國造ニなとみえこの餘なほ多かれとさのみはわつらはしけれはいはす是そ太古の臣達の集侍序次なりける公卿大夫または諸卿大夫公卿なとしるされしものは書紀のかさりことはにて孝德紀の百官としるされしは詞のまゝなれはみな毛毛乃都加佐毘登と訓へきもの也このしるし出し臣連二造は太古よりありし姓にて是にて尊卑の階級を別定められし也

太古には公卿大夫なとの號あることなし書紀にかくしるされしものはそのつかさ〳〵のことをかさりことはにいはれしなれは孝德紀に百官とかゝれたるを正しといへるなり

さて太古のさまは臣姓の人々の上には大臣ありて統領連姓の人々の上には大連ありて統領り其正しくものにみえしは雄略紀に以ニ平群臣眞鳥ー爲ニ大臣ー以ニ大伴連室屋物部連目ー爲ニ大連ーとしるされし也この後つき〳〵に大連大臣に任るゝことみえたりもと臣姓の人ならては大臣に任ることなく連姓の人ならぬには大連に任るゝことなし然れは中臣連鎌子を擧用給へりしかとも內臣と云ひて大臣とはいはれすこは臣姓の人々を統領ことにあらされは也鎌子連病大甚に至りて授ニ大織冠與ニ大臣位ー仍賜レ姓爲ニ藤原氏ー自レ此以後通曰ニ藤原大臣ーとみえしにて思ふへし大臣に任せ給はんの料に新しく藤原氏を給へり藤原氏には姓のあらされは新に臣姓を給ひさて大臣に任せ給へるもの也書紀のかきさまの漢意にすきたれはかくは聞えかたきなれと太古のてふりに是彼思ひわたして然はいへり大連は大伴氏物部氏をむほと任れしことなり大臣大連相並へるつかさひとなから大臣の闕るときは大連の人のみにて臣連をも統領せる也そは清寧紀に大伴室屋大連卒ニ臣連等ー奉ニ璽於皇太子ーとみえし此後にこそ平群臣眞鳥を大臣に任るゝことみえたれ後に物部氏大伴氏二の氏人のおとろへてより左右に大臣を置るゝことになれり孝德紀に以ニ阿倍內麻呂爲ニ左大臣ー蘇我倉山田石川麻呂臣爲ニ右大臣ー又天智紀に以ニ蘇我赤兄臣ー爲ニ左大臣ー以ニ中臣金連ー爲ニ右大臣ーとみえしにて知るへし故思ふに大臣にはかならす皇別の人を任れ大連にはかならす神別の人を任れしなるへし大臣の號の始は成務紀に三年春正

號にせられしもの多し其は道守壬生膳衣縫倭文なとのたくひみな其職を氏に負へるもの也また氏に地號を負へるものあり其は息長甘南備英多大宅桑田なとのたくひ也是は其地に公たるによりても負ひ其地の本居なるによりても負へり又其氏人の居地なるに依てかへりて地號となれるものありてひとむきに云定めかたしなほこのけちめとものことは姓氏考に委にいふへし

くたれる代となりては氏と職とのわきため出來て舊は職なりしも其職をもて仕奉ることなく其類族を分別る號とのみなれるものは職を失ひてたゝ舊の職の號をのみ負ひて其をもて系統を別ぬることゝなりゆきしから姓もて尊卑のけちめを定むることも廢れたり

もとは衣縫倭文なとのたくひは直に其人々は衣を縫ひ倭文を織ることなりしか後世には衣縫人倭文織人の職別に出來て太古よりのは氏號となれり故氏と職とのわきためありといへり

如此ことゝほくなれる姓なから太古は臣達のうへにはなるへきものにあらさりしかは史籍ともにいと多くみゆることなれはゆゑよしを知得されはこゝろをえかたきこと多しさて氏は宇遲と訓み姓は加婆禰と訓へし其ことの由をは考得す

加婆禰に姓字を當るは字意にたかへれは尸字を當へきよしなれと古書に然かきしもの多からねはことのまかひて直に其とは聞えかたし文字の當否はさしおきて古のまゝなるそよかるへき

太古は姓の序次によりて臣達及諸氏部曲下民までを統領せし也是そ太古の治道なりける如此大なるわさにしもあれは其序のものにみえしをいふへし書紀雄略卷に二年冬十月丙子幸二御馬瀬一命二虞人一縱レ獵云云問二群臣一曰獵場之樂使二膳夫割一レ鮮何與自割群臣忽莫二能對一云々皇太后知二斯詔情一奉レ慰二天皇一曰群臣不レ悟下陛下因二遊獵場一置二宍人部一降中問群臣上群臣默然理且難レ對今貢未レ晩以レ我爲レ初膳臣長野能作二宍膾一願以レ此貢天皇云々臣連伴造國造又隨續貢とみえしそ臣連二造の序の正しくしるせる始なりける又顯宗紀に二年春三月上巳幸二後苑一曲水宴是時喜集二公卿大夫臣連國造伴造一爲レ宴皇極紀に凡諸皇子諸王諸卿大夫臣連伴造國造云々孝德紀に百官臣連國造伴造

んか爲なれは輕からさることとなり人に姓氏の類を別つことなけれは人類明らかならすされは人倫を亂り我祖先をもえらさる過を生せり故に氏姓の混亂して本實を失ふを憂ひたまひて氏姓の眞僞を定めらるゝこと安康天皇の四年に見えたり又飛鳥淨御原天皇十三年に定めらるゝ十三氏といへるは守山路高橋三國當麻茨城丹比猪名坂田羽田息長酒人山道等なり（三代實錄）また四種姓といふこと弘仁私記序に見ゆ神胤皇裔蕃化古風の四ッにて中臣朝臣忌部宿禰等を神胤とし息長眞人三國眞人等を皇裔とし東漢西漢史及百濟氏等を蕃化とし高麗新羅及東部後部氏等を古風とするよし注に見えたりまた三別と姓氏錄に見えたるは神別皇別諸蕃の三ッにてその由出る所によりてわかちたるなりまた朝臣宿彌臣連を日本四姓とすること忍海記に見ゆ今世に四姓といへるは源平藤橘なり年をかさねその末葉次第に多くさま〳〵にわかるれは種々の稱起れり尊卑分脉に其稱をのすこれ今のいはゆる苗字なり姓氏の事西土にては諸家の辨說そなはれりこれ前卷に論すへきなり

姓序考（細井貞雄撰）云太古は質純なりしかは心編にえて貴はいよ〳〵尊く賤はます〳〵卑し故尊卑のけちめ正しかりしかとやゝくたりゆきては卑もなりのほり尊も其處をさりぬることのあるなへに其階級を別定むへく官班の制位次の事おこれり官班の制なかりし御代にも尊卑の階級を分列られぬることはありしかと官位の制とはやゝたかへり官位は其職を奉其序を別るものにして彼より此に轉任し是より彼に補任すれは其奉守れる職事に貴賤の階級ありて彼身に尊卑のけちめあるにあらす太古の姓の制は然ならす其姓を賜へれは榮を子孫の八十のつゝきに傳へ天罪かゝむれは其姓を貶れ衰を類族まて致せり是以て職位とはたかへることを知るへし如此れは太古は姓に尊卑のけちめありて職に貴賤のわきためあることなかりし也太古は職せしも世々に仕奉て是彼に轉任ことはさらになく今世の制にいとよくかよひたり故太古は其職を以て氏とせしものそ多かりける

姓といへるは眞人朝臣の類をいひ氏といへるは源橘藤原なとの類をいへり源橘藤原の類を姓なりと思ふは漢意にてこなたにたかへりもと氏は其類族を分別へくて號られしなへに仕奉りし職を直に氏

古今要覽稿卷第十二

屋代弘賢著

●姓氏部

●うぢ　かばね

うぢとは源平藤橘の類千三百四十六氏有かばねとは朝臣眞人の類廿三姓有うぢかばね共に天子より賜はりてのち稱することとなり人みつからつくへき物にあらす朝臣眞人の類は氏の下につけて源朝臣某清原眞人某なと自身には書し他を稱するには四位に限りて名の下にかばねをつけて某朝臣なといふ舊規なり先源氏は嵯峨仁明文德清和光孝宇多醍醐村上花山三條後三條順德後深草の十三氏よりわかるこれを賜ふは嵯峨天皇弘仁五年に詔ありて皇子皇女に源朝臣の姓を賜はり（姓氏錄）平氏は桓武仁明光孝の三氏よりわかれこれを賜ふは桓武天皇皇孫大納言高棟卿に天長二年閏七月二日初て平朝臣の姓を賜はり（紹運錄）藤原は天智天皇の八年はしめて大織冠鎌足に藤原氏を賜ふそれより藤原統の人諸國にわかる橘氏は和銅元年に三千代大夫人に橘宿禰姓を賜ひし始なり其他菅原清原中原小槻和氣丹波賀茂安部卜部兒玉宮道等の氏あり姓を給ふことは神代に始り（神代卷）其後天武天皇の御宇八色の姓を作らせ給ふ一曰眞人二曰朝臣三曰宿禰四曰忌寸五曰道師六曰臣七曰連八曰稻置と（日本紀）見ゆこれ天子より賜はりて稱することなりされとも卑賤の人に賜はることはあるましきなり續日本紀に本姓に復せしむ姓を改めしむること見えまた命婦從五位下尾張宿禰小倉授二從四位下一爲二尾張國々造一とあるを見れは諸臣の婦人にも姓を賜ふことしられたりまた氏上といふこともみゆ日本紀に氏長と見え姓氏錄に戸主としるされたるは氏々の中にて上たる人といふことなるへし誰々を氏上とす氏上を定むなといふにて推はからるこれ後世長者といふに同し意なるへしまた江家次第長秋記に下姓といふこと見ゆこれは姓の下賤なる義にや雖三下姓一不レ叙二外位一（江家次第）狛依二下姓一叙二外位一（長秋記）といふこと見えたりまたそれ人に姓あるは百世の後に至りても各其類をわかり（ちカ）その統を知らしめ

○和歌

新古今和歌集卷第

大將にはへりける時勅使にて　太神宮にまうてて讀はへりける

攝政太政大臣

神風やみもすそ川のこのかみに契りしことの末を違ふな

太神宮歌の中に

太上天皇

なかめはや神路の山に雲消えて夕の空にいてん月かけ

神風やとよみてくらになひかしてかけて仰くといふも畏し

題志らす

西行法師

宮はしら志たつ岩根に敷立て露も曇らぬ日のみかげ哉

神路山月さやかなる契り有て天の下をは照すなりけり

入道前關白家百首歌よみはへりけるに

皇太后宮大夫俊成

神風やいすゝの川の宮柱いくちよすめとたてそめにけん

俊惠法師

神風や玉くしのはをとりかさし內外の宮に君をこそ祈れ

五十首歌奉りし時

越前

神風や山田の原の榊はに心の志めをかけぬ日そなき

校正兼淨寫　檜山坦齋源義愼
圖書兼淨寫　岡田嘉右衛門源忠貞
大河戸晋平藤原儀成
榊原猪右衛門源長行
山本林藏源清任
鈔錄兼淨寫　松井鐵藏源英信
校正兼淨寫　三輪善太郎三輪正賢
校正　石井內藏之丞平盛時
編修兼圖書　岩崎源藏源常正
編修兼淨寫　橋本藤太郎藤原常彥
編修兼淨寫　栗原孫之丞源信充
總判　屋代太郎源弘賢

なし皇國の內なるか故なり
又云一云天皇以二倭姬命一爲二御杖代一貢二奉於天照大神一是以倭姬命以二天照大神一鎭二坐於磯城嚴橿之本一而祠レ之然後隨二神誨一取二丁巳年冬十月甲子一遷二于伊勢國渡遇宮一とある丁巳年は垂仁天皇廿六年にて其十月は丁丑朔なれは其月に甲子日なし十はまさに九に作るへし九月戊申朔にして甲子十七日也是によりて今にいたるまて九月十七日皇太神宮神嘗會なりと云り此考よく當れるかことくなれとも信かたしまつ廿五年三月丁亥朔廿六年八月戊寅朔とあるを以て推ときは廿六年九月朔戊申にあたれとも凡て後世の暦法をもて上代いまた暦なかりしほとの年月を推て干支を配ることは諺に雲を握むとか云たくひにていとうきたることにていまたしきさたたり此事尙別に論あり然れは丁巳年十月甲子とあるも一說又其年八月戊寅朔とあるも一說にて何れを正しとも定むへきことにあらすされは暦法をもて推時其年の九月十七日甲子に當るもたまたまのことにして本より其故を以て神嘗會十七日に定れるにはあらすかし猶其ほとの委き事ともは彼宮の延暦の儀式帳また倭姬命世記なとにみえたり又書紀に日神方開二磐戶一而出焉是時以レ鏡入二其石窟一云云此卽伊勢崇秘之大神也また神功の卷に大御神の御誨言に神風伊勢國之百傳度逢縣之拆鈴五十鈴宮所居神云云なともありさて神名帳に伊勢國度會郡太神宮三座（相殿坐神二坐並大預二月次新嘗等祭一）とある相殿に坐す二柱は儀式帳に同殿坐神二柱坐二左方一稱二天手力神一靈形弓坐坐二右方一稱二萬幡豐秋津姬命一也是皇孫之母靈形劔坐とあり（一說に天兒屋命大玉命なりと云は非なり）此記と相照して思ふに左方に坐すを天手力男神とは思金神を誤り傳へたるものなるへしさて五十鈴宮に坐す神はかく三柱なるを此二柱神はと云るは如何にと云に此は天照大御神と思金神と二御靈の鎭坐處を注せる詞にして五十鈴宮の神を注せるにはあらされはなりさてかくのことく此大宮は天照大御神の御靈を齋き奉る大宮にし坐せは皇國人は更にもいはす狛唐天竺其餘も天地の裏にあらゆる國々其王ともをはしめ國民ともまてもはるかにたに拜み奉りて限りなき大御德を謝（カタジ）けなみ奉るへき理なるに今にいたるまて外國々の人等はさることわりをもつゆしらすて過往なるはいとあさましきわさなるかも

は心得す此五十鈴宮を磯宮と申せること此外にさらに見えたることなし故思に是は儀式帳なとに五十鈴宮に鎭坐むとせし前に磯宮坐とある其は神名帳に度會郡磯神社和名抄にも同郡に伊蘇郷ありて今も磯村と云此地にしはらく坐しゝを磯宮といふ但し其磯宮は度會郡なるには非す多氣郡の相可郷のあたりなりとも云り其はいかにもあれ此は其伊蘇といふと伊須受と云と名の似たる故に混ひし傳なりされはこそ決めて磯宮とは云へきにあらす謂五十鈴宮とこそ有へきことなれ次に天照大神始自ㇾ天降之處也と云ことはいと〳〵心得がたかりしを近きころ思得たりさるは古傳の趣にはよらすしてたゝ例の己か心に隨せて云る說ともはくさ〳〵あれどもそはみなわたくしことなれは取にたらぬを己か思ひ得たりと云は先初に猿田彥神の答に吾先啓行云云天神之子則當ㇾ到二筑紫日向一吾則應ㇾ到二伊勢一と申し賜へるそも〳〵皇孫命の日向國に降坐むにその啓行の神の伊勢にしも降給ふこと深き所以あり豐受宮儀式帳に天照坐皇大神度會乃伊須々乃河上爾大宮仕奉爾時大長谷天皇御夢爾誨覺賜久吾高天原坐弖見志眞岐賜志處爾志都眞利坐奴云云

とありかゝれは此御靈鏡を後遂に此地に鎭坐しめむとは大御神御自高天原にして豫てより所念設けたることなりそれは猿田彥神の啓行ひなから此伊勢に到有以矣と見えたることとく本より此由緣あるゆゑに此御靈鏡を終に鎭坐へき所へ先導送り奉らんためなり故其御天降の時に皇御孫命に附そひて此御鏡を戴齋奉れる御從神は彼啓行神の導きのまに〳〵おのつから先此伊勢國に降着しなり始自ㇾ天降とは此時の事なりけり若しからすは先日向へ降賜ふ御孫命の啓行神の伊勢へ降賜ふは何の由もなく徒ならすやさて右のことく此御鏡は先伊勢に降着賜ひしを日向に着賜ふ御孫命の御許に送り奉り置て猿田彥神は御暇を賜はりて又伊勢に歸り賜ひしなり此間の事なほ下に委く云へし抑此御鏡はしはらくも皇御孫命の大御許を離ち奉り給ふましきことなるに日向と伊勢と分れて降着賜へらんことはいかゝと疑ふ人あるへけれとも天上より遙に降賜ふなれは日向と伊勢とさかるといへとも同しく葦原中國の內にしあれはなほ一つ處に降着給へるなりされは後に又伊勢にうつし奉り賜へれともはしめの大御神の詔旨に違はせ賜はさるもお

鈴原なとも云り名けたる由は詳ならす倭姫命世記に猿田彦神裔宇治土公祖大田命參相支云云倭姫命問給久有ニ吉宮處ー哉答白久佐古久志呂宇遲之五十鈴之河上者是大日本國之中仁殊勝靈地侍奈利其中翁世八萬歳之間仁毛未ニ視知ー留有ニ靈物ー照輝如ニ日月ー奈利惟小縁之物不レ在志定主出現御坐爾時可レ献止念比弖彼處爾禮祭申勢利即彼處仁往到給大御覽介禮婆往昔大神誓願比天豐葦原瑞穗國之内仁伊勢加佐波夜之國波有ニ美宮處ー利止見定給比從ニ天上ー志天投降給比志天之逆太刀逆鉾金鈴等是也其喜於懷比天言上給比支と云へれとも中に疑はしきこととも有て全は信られす　さて天照大御神の御靈鏡は此の詔旨の如く御々代々皇御孫命の同大殿内に拜祭賜ひ來にしを水垣宮御宇天皇御世よりそ別處に祭給へりける其は書紀彼御卷崇神に六年云云先レ是天照大神倭大國魂二神並祭ニ於天皇大殿之内ー然畏ニ其神勢ー共住不レ安故以ニ天照大神ー託ニ豐鍬入姫命ー祭ニ於倭笠縫邑ー仍立ニ磯堅城神籬ー云云それより伊勢に遷幸しゝは垂仁御卷に二十五年三月丁亥朔丙申云云離ニ天照大神於豐耜入姫命ー託ニ于倭姫命ー爰倭姫命求下鎮ニ坐大神之處上而詣ニ菟田篠幡ー更還レ之入ニ近江國ー東廻ニ美濃ー到ニ伊勢國ー時天照大神誨ニ倭姫命ー曰是神風伊勢國則常世之浪重浪歸國也傍國可怜國也欲レ居ニ是國ー故隨ニ大神教ー其祠立ニ於伊勢國ー因興ニ齋宮于五十鈴川上ー是謂ニ磯宮ー則天照大神始自レ天降之處也此文にまきらはしき事ともありよくせずは誤りぬへしまつ其祠立ニ於伊勢國ー因興ニ齋宮于五十鈴川上ーとある齋宮即大御神宮なりしかるを古語拾遺倭姫命世記なとに文を少し換て此を倭姫命の坐宮の如く記せるは御々世々の齋王の宮をも齋宮と申す故に其と心得たるひかことなり齋王の宮を云は其王の坐宮と云意此は大御神を齋奉る宮といふことにて同名なから意異なり抑此には大御神の宮をこそ委曲には記すへきことなるに其をは只祠立ニ於伊勢國ーとのみ大かたに云て齋王の坐宮をば却て具に五十鈴川上といふへきに非す萬葉なる人麻呂の長歌に渡會の齋宮とよめるも必大御神の宮とこそ聞えたれ且倭姫命に宮と云て大御神に宮とは云へくもあらす然れは立字は定を誤れるなるへし神の夜志呂には皇國にては凡て社字を用ひ又宮といふ其中に此大御神なとには必宮と申す例なるに祠とあるは字義はさることなれともたゝに其宮を申せるにはあらずその祭るへき處をいへるなり雄略卷に椎足姫皇女侍ニ伊勢大神祠ーとある祠も拜祭給ふ意を帶たる故に此字を書り故みやともやしろも訓すしてイハヒとは訓るなり然れは此も祠るへき處を伊勢國と定めてさて五十鈴川上に其宮を興と云るなり次に是謂ニ磯宮ーとある

國名何問賜支白久草蔭安濃國止白支卽神御田並神戸進支次壹志藤方片樋宮坐只其在ニ阿佐鹿ー惡神平驛使阿倍大稻彥命卽御共仕奉支彼時壹志縣造等遠祖建呰子乎汝國名何問賜支白久宍往呰鹿國止白只卽神御田並神戸進支次飯高縣造乙加豆知乎汝國名何問賜只白久忍飯高國止白支卽神御田並神戸進支而飯野高宮坐支彼時佐奈乃縣造御代宿禰乎汝國名何問賜支白久許母理國志多備乃國眞久佐牟氣草向國止白支卽神御田並神戸進支而多氣佐々牟遲宮坐支彼時竹首吉比古乎汝國名何問賜只白久百張蘇我乃國五百枝刺竹田乃國止白支卽櫛田根椋神御田進支次玉岐波流礒宮坐只次百船乎度會國佐古久志呂宇治家田上宮坐支爾時宇治大內人仕奉宇治土公等遠祖大田命乎汝國名何問賜支白久百船乎度會國是川名波佐古久志留伊須々乃川止申須是川上好大宮地在止申卽所見好大宮地定賜支此朝日來

皇大神宮雜例集云崇神天皇世爾波宮中大庭穗椋作令ニ出坐ー奉レ齋皇女以ニ豐鉏入姬命ー供奉按に是より前天皇の同殿にましましけるを此天皇の御代より外にうつし奉りしことみるへし大和志に十市郡十市新本二村の間に古太神をまつりし跡とて小社あり是古の笠縫邑なるへしといへり

太神宮諸雜事記云垂仁天皇卽位廿五年丙辰天照坐皇太神天ニ降坐於大和國宇陁郡ー于レ時國造進ニ神戸等ー今號ニ宇陁神戸ー是也是已皇太神宮始天降坐本所也其後奉レ鎮ニ坐伊勢國度會郡宇治鄉五十鈴川上下都磐根御宮所ー也抑皇太神宮勅託宣偁我天宮御宇之時天下四方國攝口錄可ミ天下宮所放ニ光明ー見定置先畢仍彼所可ニ行幸御ー之由宣ニ倭姬內親王ー奉レ載天先伊賀國伊賀郡一宿御坐卽國造奉ニ其神戸ー次伊勢國安濃郡藤方宮御ニ座三年ー之間國造奉レ寄ー神戸六箇處ー也所レ謂安濃一志鈴鹿河曲桑名飯高神戸等也次尾張國中島郡一宿御座國造進ニ中島神戸ー次三河國渥美郡一宿御坐國造進ニ渥美神戸ー次遠江國濱名郡一宿御座國造進ニ濱名神戸ー從ニ此等國ー更還天伊勢國飯高郡御ニ坐三月ー之後差ニ度會郡宇治鄉五十鈴之川頭ー仁進參來稱申云此河上最勝地侍其妙不レ可レ比ニ他處ー早速可レ垂ニ照鑒御ー也卽奉レ迎而大田命神御共奉レ仕令ニ照鑒ー早畢于レ時皇太神宮託宣偁此地者於ニ天宮ー所ニ見定ー之宮所是也者奉ニ鎮座ー既畢卽神代祝大命神也宇治土公遠祖大田命神當土乃土神也然而爲ニ玉串大內人ー卽與荒木由禰宜ー相並供ニ奉於祭庭ー之例也

古事記傳云伊須受能宮これ伊勢大御神宮なり書紀神功卷に五十鈴と書れたり此は地名にて五十鈴川五十

類聚國史云弘仁十四年十一月癸丑天皇御二大極殿一奉二幣帛伊勢太神宮一爲レ御二大嘗一
續日本後紀云承和元年六月丁未奉二伊勢太神宮及畿內七道名神幣一以祈レ雨也
又云承和二年七月戊申奉二幣於伊勢太神宮一亦爲レ防二風雨之災一也
又云承和三年九月丁丑遣二左兵庫頭從五位上岡野王等於伊勢太神宮一申二今月九日宮中有レ穢神嘗幣帛不レ得レ奉レ致之狀一
又云承和三年十二月庚子天皇御二建禮門南一奉レ遣二伊勢太神宮幣帛一
又云承和四年三月乙酉依二遣唐使進發一內匠頭正五位下楠野王等奉二幣帛於伊勢太神宮一
又云承和五年七月甲申天皇御二八省院一奉二幣伊勢太神宮一以禱二豐年一也
又云承和十年八月丙午奉二幣伊勢太神宮一
又云承和十四年三月乙卯天皇御二八省院一奉レ遣二幣於伊勢太神宮一
古語拾遺云就二倭笠縫邑一殊立二磯城神籬一奉レ遷二天照大神及草薙劒一

皇太神宮儀式帳云天照坐太神月讀之神二柱所稱伊弉諾尊伊弉冊尊伊爲二夫婦一合所レ生神御形鏡坐供奉行事天照坐皇太神乃伊勢國度會郡宇治里佐古久志留伊須々乃川上爾御幸行坐時儀式磯城島瑞籬宮御宇御間城天皇御世以往天皇同殿御座而同天皇御世天爾以二豐耜入姬命一爲二御杖代一出奉支豐耜入姬命御形長成支以次纒向珠城宮御宇活目天皇御世爾倭姬內親王遠爲二御杖代一齋奉支美和乃御諸原爾造二齋宮一出奉天齋始奉支爾時倭姬內親王太神乎頂奉天願給國求奉時爾從二美和乃御諸宮一發弖令二出坐一支爾時御送驛使阿倍武渟川別命和珥彦國葺命中臣大鹿島命物部十千根命大伴武日命合五柱命等爲レ使弖令二入坐一天彼時宇太乃阿貴宮坐天次佐々波多宮坐只其爾即大和國等神御田並神戸進只次伊賀穴穗宮坐只次阿閉拓植宮坐只其爾即伊賀國造等神田並神戸進支次淡海坂田宮坐只次美濃伊久良賀波宮坐只次伊勢國桑名野代宮坐只其宮坐時爾伊勢國造遠祖建夷方乎汝國名何問賜只白久神風伊勢國止白支即神御田並神戸進支次鈴鹿小山宮坐支彼時川俣縣造等遠祖大比古乎汝國名何問賜只白久味酒鈴鹿國止白支其爾即神御田並神戸進支次安濃縣造眞桑枝乎汝

神祇伯從四位下中臣朝臣名代右少辨從五位下紀朝臣守美陰陽頭從五位下高麥太賓二神寶一奉二于伊勢太神宮一

類聚國史云延暦十一年三月戊寅造二伊勢國天照大神宮一以レ遭二失火一也

日本紀略云延暦十二年戊子遣二參議壹志濃王等一奉二幣於伊勢太神宮一告以二遷都之由一

又云延暦十三年正月辛卯遣二參議大中臣諸魚一奉二幣於伊勢太神宮一爲レ征二蝦夷一

類聚國史云延暦十三年三月辛卯遣二大監物從五位上石淵王參議從四位上守兵部卿兼近衞大將行神祇伯近江守大中臣朝臣諸魚等一奉二幣帛於伊勢太神宮一

又云延暦十五年二月丁丑遣レ使奉二幣於伊勢太神宮一以二齋内親王退一也

日本後紀云延暦十八年五月辛未遣二神祇大祐正六位上大中臣朝臣弟枚一改二伊勢太神宮正殿一

又云延暦十八年八月丙申奉二幣帛於伊勢太神宮一以二齋内親王將レ入二齋宮一也

又云大同元年四月己酉遣レ使奉二幣於伊勢太神宮一以二齋内親王歸レ京也

類聚國史云大同五年四月戊子遣二使於伊勢太神宮一告下定二齋内親王一之狀一也

又云大同五年七月戊辰遣二右大辨從四位上藤原朝臣藤嗣一奉二幣於伊勢太神宮一以二聖體不豫一也

日本後紀曰大同三年十一月辛卯奉二幣帛於伊勢太神宮一以レ行二太嘗事一也

又云弘仁二年六月乙丑奉二幣於伊勢太神宮一

又云弘仁三年七月戊午御二大極殿一奉二幣於伊勢太神宮一爲レ救二疫旱一也

又云弘仁六年八月辛丑遣レ使奉二幣於伊勢太神宮幷賀茂大神一以二霖雨不一レ晴也

類聚國史云弘仁七年九月戊辰奉二幣於伊勢太神一去八月十六日夜爲レ停二大風一所レ禱也

又云弘仁十四年六月丙戌天皇御二太極殿一獻二幣帛於伊勢太神宮一爲レ停二齋内親王一　八月己丑天皇御二大極殿一奉二幣帛伊勢太神宮一　九月壬戌御二大極殿一奉二幣帛伊勢太神宮一

日本紀略云弘仁十四年四月乙巳奉二幣帛伊勢太神宮一告二卽位一也皇太子始著二黃丹服一帶レ劔參二入内裏一再拜舞踏

侍二祀於伊勢大神一後坐レ奸二皇子茨城一解
又云敏達天皇七年春三月壬申以二菟道皇女一侍二伊勢
祠一卽奸二池邊皇子一事顯而解
又云皇極天皇四年正月或於二阜嶺一或於二河邊一或於二
官寺間一遙見レ有レ物而聽二猿吟一或一十許或二十許就
而視レ之物便不レ見尙聞二鳴嘯之響一不レ能レ獲レ覩二其
身一舊本云是歲移二京於難波一而板蓋宮爲二墟之兆一時人曰此是伊勢大神之使也
又云天武天皇元年六月丙戌旦於二朝明郡迹太川邊一
望二拜天照大神一云云
又云天武天皇元年六月丙戌旦於二朝明郡迹太川邊一
望二拜天照大神一是時益人益到レ之奏所レ置關者非二山
部王石川王一是大津皇子也使隨二益人一參來矣云云
又云天武天皇二年云云夏四月己巳欲レ遣二侍大來皇女
于天照大神宮一而令レ居二泊瀨齋宮一是先潔身稍近二神
之所一也
又云天武天皇三年十月丁丑朔乙酉大來皇子自二泊瀨
齋宮一向二伊勢神宮一
又云天武天皇四年二月丁亥十市皇女阿閇皇女參二赴
於伊勢大神宮一
又云天武天皇朱鳥元年四月丙申遣二多紀皇女山背姬
王石川夫人於伊勢神宮一
又云持統天皇卽位年十一月壬子奉二伊勢神祠一皇女大
來還至二京師一
續日本紀云大寶二年四月戊辰奉二杠谷樹於伊勢太神
宮一
又云大寶三年十一月庚寅遣二從五位上忌部宿禰子首一
供二幣帛鳳凰鏡窠子錦于伊勢太神宮一
又云慶雲三年閏正月戊午奉二新羅調於伊勢神宮及七
道諸社一　八月庚子遣二三品田形內親王一侍二于伊勢太
神宮一　十二月丙子遣二四品多紀內親王一參二于伊勢太
神宮一
又云和銅元年十月庚寅遣二宮內卿正四位下犬上王一
奉二幣帛于伊勢太神宮一以告下營二平城宮一之狀上也
又云養老五年九月乙卯天皇御二內安殿一遣レ使供二幣帛
於伊勢太神宮一並以二皇太子女井上王一爲二齋內親王一
又云天平二年閏六月甲午制奉二幣伊勢太神宮一者卜食
五位已下充レ使不レ順二六位已下一
又云天平九年夏四月乙巳遣二使於伊勢太神宮一奉レ幣
以告二新羅無禮之狀一
又云天平十年五月辛卯使二右大臣正三位橘宿禰諸兄

くひにて正史に合ぬくたりもみゆれは疑しきものなり

日本書紀一書云于時諸神憂之乃使鏡作部遠祖天糠戸者造鏡忌部遠祖太玉者造幣云云是時以鏡入其石窟者觸戸小瑕其瑕於今猶存此即伊勢崇秘之大神也

又云一書云是時天照大神手持寶鏡授天忍穗耳尊而祝之曰吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齋鏡（按に此みことのりによりて崇神天皇の御時まて同し御殿の内に齋はれしなるへし）

又云崇神天皇六年先是天照大神大和國魂二神並祭於天皇大殿之內爲畏其神勢共住不安故以天照大神託豐鍬入姬命祭於倭笠縫邑仍立磯堅城神籬（神籬此云比莽呂岐）

又云垂仁天皇二十五年三月丁亥朔丙申離天照大神於豐耜入姬命託于倭姬命爰倭姬命求鎭坐大神之處而詣菟田篠幡更還之入近江國東廻美濃到伊勢國時天照大神誨倭姬命曰是神風伊勢國則常世之浪重浪歸國也傍國可怜國也欲居是國故隨神教其祠立於伊勢國因興齋宮于五十鈴川上是謂磯宮則天照大神始自天降之處也

又一書云天皇以倭姬命爲御杖代貢奉於天照大神是以倭姬命以天照大神鎭坐於磯城嚴橿之本而祠之然後隨神誨取丁巳年冬十月甲子遷于伊勢國渡遇宮

又云垂仁天皇丁巳年云云大初之時期曰天照大神悉治天原

又云景行天皇二十年春二月辛巳朔甲申遣五百野皇女令祭天照大神

又云景行天皇四十年十月癸丑日本武尊發路之戊午枉道拜伊勢神宮仍辭于倭姬命曰今被天皇之命而東征將誅諸叛者故辭之

又云雄略天皇元年三月壬子云云是月立三妃元妃葛城圓大臣女曰韓媛生白髮武廣國押稚日本根子天皇與稚足姬皇女（更名栲幡娘姬皇女）是皇女侍伊勢大神祠云云

又云繼體天皇元年二月癸酉納八妃云云次息長眞手王女曰麻績娘子生荳角皇女（荳角此云沙佐礙）是侍伊勢大神祠

又云欽明天皇二年春三月納五妃云云次蘇我大臣稻目宿禰女曰堅鹽媛（堅鹽此云岐拕志）生七男六女其一曰大兄皇子是爲橘豐日尊其二曰磐隈皇女（更名夢皇女）初

古今要覽稿卷第十一

●神祇部　諸國

○伊勢大神宮

伊勢大神宮は鏡作部遠祖天糠戸神のつくれる鏡にして（日本書紀一書）天照大神みつから天忍穗耳尊にさつけ給ふ時吾兒この鏡をみること吾をみることくなるへしと勅ありしのち大殿の内にいつきまつられて崇神天皇の五年まておはしき崇神天皇神の勢をおそれたまひ豐鋤入姫命につけ奉りて倭の笠縫邑にうつしまつらる（崇神紀）そののち垂仁天皇の二十五年三月にいたり天照大神を豐耜入姫命をはなちまつりて倭姫命につけたまふ姫倭命大神の鎮座ましますへき所をもとめ大和國菟田の篠幡よりして近江美濃をへて伊勢國にいたりたまふ時に天照大神倭姫命に教てこの國におはすへきよしのたまはすかくてその宮を五十鈴川上にたつ是を磯の宮といふ（日本書紀○磯宮のこと古事記傳にくはし）たゝし延暦二十一年大神宮司大中臣眞繼等か解狀によれは倭姫命を御杖代とせさせ給ふ時は大和國美和の御諸原にいはひまつられしとみゆそののち宇田の阿貴宮にまし〳〵そののちさゝはたの宮にまし〳〵そののち伊賀の穴穗宮にまし〳〵そののち阿閇の拓植宮にまし〳〵そののち近江の坂田宮にまし〳〵そののち美濃の伊久良賀波宮にまし〳〵そののち伊勢の桑名野代宮にまし〳〵そののち飯野高宮にまし〳〵そののち磯宮にまし〳〵そののち佐古久志呂宇治家田上宮にまし〳〵終にこゝを大宮處と定めたまふといへり（延暦儀式帳）是によれば笠縫宮より五十鈴宮にいたるまてすへて十二度宮處をかへられしなりまたある說に大倭國宇陀郡より伊賀國伊賀郡にうつり伊勢國安濃郡藤方宮にまし〳〵のち尾張國中島郡にうつりまし〳〵のち三河國渥美郡にうつりまた遠江國濱名におはしそれより又伊勢國飯高郡にうつりまし〳〵三月ののち度會宮にうつりましますといふ（太神宮雜事記）互に參考するに書紀と儀式とは詳略の差別はあれとその行幸の國々も大かたおなしければ正しき說といふへし雜事記の說はかの倭姫世記のた

や然れとも後撰和歌集に越へ罷りけるにぬさ袋なと遣はすとあれは其頃より別に作れる物も出來しなるへし但このぬさは旅行の道のほとりの神にたてまつる料のぬさなり色々のきぬのきれを裁て用ゆ袋は網袋を用ゆへし（むすひ袋共すき袋ともいひし皆網袋のことなり）そのよしは顯昭の古今和歌集注及ひ後撰集拾遺集源氏物語延喜式圓融院御受戒記等に見えたり古今和歌集顯昭抄云ぬさとは旅行の道のほとりの神に手向るもの也みちのほとりの神を道祖神とも云さえの神ともいひ手向の神とも申色々のきぬのきれなんとをたてまつるなり手向とは手にて取て神にわけたてまつる也されはやかてたむくともいふ（花鳥餘情にはぬさはいろ／＼の紙をきりてとみえたりその頃は紙を用けるにやまたは絹の字の書たかへにや）

後撰和歌集云あひかたらひける人のあからさまにこしへまかりけるにぬさ袋なとつかはす

拾遺和歌集云ものへまかりける人のもとにぬさをむすひふくろに入てつかはす（弘賢曰この詞をひかよみしてぬさをむすひと一句に意得てあさのきれをほそくたらてむすひたるぬさを造りもしの袋にいれたるなとあるはあやまり也結袋とはあみふくろなり又すき袋ともいふぬさの形はいろ／＼の絹を花紅葉又は鶴なとの形に切へし）

能宣集

ひうかのかみすかはらのとしもとかくたるにむすひ袋にぬさ入てつかはす

淺からぬ契むすへる心葉は手向の神そしるへかりける

貫之集下

つるのかたにぬさいるゝことのをしてかける

千とせをは鶴に任せて別るとも逢みんことはあすもとそ思ふ

源氏物語云れいのおさまらぬけはひともしていろいろこほれ出たるみすのつま／＼すきかけなと春のたむけのぬさ袋にやとおほゆ

河海抄云ぬさ袋はすき袋なり花鳥餘情云ぬさはいろいろのかみをきりて すきたる ふくろに 入たる にや（弘賢曰このすき袋といふをあみ袋のこととは志らてもしなと用ろはあやまりなり）

○釋名

ぬさ袋（後撰和歌集）　むすひ袋（拾遺和歌集○弘賢曰むすひふくろはアミフクロなり其ゆゑは延喜式主鈴飛驛儲料生絲二兩二分結袋料と見えたりこれ飛驛の函をいるゝ網袋の料也又圓融院御受戒記ニ鍮石水瓶一口納ニ藤村濃結袋ニとみえたりこれ皆アミフクロの徴なり）　すき袋（河海抄○弘賢曰すきふくろはアミフクロの異名なりいれたるものゝすきてみゆるをいふ透筥なといへるもおなし意なり）

なん
いとまたきみゆる紅葉は君かため思染てしぬさにそ有ける
そめたちて祈れるぬさの思ひをは手向の道の神やしる覽
紅葉はをぬさと手向にちらしつゝ秋と共にや行んとす覽　刑部垂麻呂
今はとていほへそまかるさかりちに手向の神に麻たまはらむ

○釋名

●白丹寸手（シラニキテ）　青丹寸手（アヲニキテ）古事記　白和幣（シラニキテ）　青和幣（アヲニキテ）　和幣（ニキテ）日本書紀古語拾遺○和訓栞云大殿祭詞に古語云爾伎氏にきは精細をいふ也てはたへの反なり古語拾遺に穀にて作るを白にきてといひ麻にて作るを青にきてといふ塙前總撿校保己一曰ゆふはさきたるまゝにきてはあらたへに對せる名にて和やかに織たるをいふ平田篤胤曰上代には同じ麻布にても細かに和やかなるをば和妙といひ荒くこはきをば荒妙と云ることとくさ〳〵證あり穀木皮をもてをれる布を白にきてといひ麻もてをれるを青にきてと云にてその種は何にまれ和なるを和妙といふことは灼然し

●木綿（ユフ）日本書紀萬葉集古語拾遺○按に古語拾遺に穀木を木綿と云

●布刀御幣（フトミテクラ）古事記　幣帛（イハヒノミテクラ）日本書紀　大（オホ）幣（ミテクラ）古語拾遺　幣帛（ミテクラ）延喜式　幣（ミテクラ）和名抄○塙保己一曰みてくらのみはまにかよひてほめたる詞てはたへの義くらはちくらのをきくらのくらにて臺にすへたる義にてもあるへきにや古事記傳云いにしへ神に獻るもの及ひ人に贈りなどするものをすべてくらといふ後世の語に人に物を與るをくるといふも是より出たることとなるへしといへと他に例ありや猶考へし

●大奴佐（オホヌサ）古事記　幣（ヌサ）　幣帛（ヌサ）萬葉集　切麻（キリヌサ）貞觀儀式　たらぬさ六帖　あさぬさ新撰六帖○弘賢曰ヌサは麻にて其訓義はフサの轉ぜしなるへし然るに幣帛の字をもよむは假借なるへきなり

○正誤

和訓栞云萬葉集に幣と訓せり神に獻るものにいふはもと五色の絹布なとを用ひし事とみえたり未レ織の木綿麻を通しよへりよて後世麻をもよめり又祓麻とも書れはぬきあさの義にや　按に木綿麻をそのまゝに獻るかはしめにてのち織たる布をも獻りをしうつりて五色の絹をも獻るなれはこの説いさゝか違へるにやかつぬさといふものすてに神代に起り文字にかゝれし時幣字にあてられしは假借にて麻字を用ひられしはその物によりてあてられしなれば後世麻をもよめりといふは例ことなり
古事記傳云奴佐は神に手向る物をも云又祓に出す物をもいふ禱布佐にて泥疑布を切むれはぬとなる事を乞禱とて出すよしなり　弘賢曰ニキテミテクラともに乞禱おりも奉るへきをヌサに限りてネキフサと名つけんことはいかゝ有へき
萬葉集木綿たゝみの畧解に織たる布をたゝみて手にさゝけて神に奉るなり　弘賢曰此説うけかたし其故はあらたへにきたへこそ織たる物なれゆふとぬさとは織すしてかけてもたゝみてもたてまつるへけれはなり手向とつゝきたれはとて手にさゝくるにはかきるましきをや

○ぬさ袋　むすひ袋　すき袋

ぬさ袋のはしめ定かならす大中臣能宣日向守俊基か下るにむすひふくろにぬさいれて遣はすといふ能宣集によれは當時別にぬさ袋とて定まりたる物無りしに

久堅之天原從生來神之命奥山乃賢木之枝爾白香付木綿取付而齋戸乎忌穿居云云

卷第六

天平九年夏四月大伴坂上郞女奉レ拜二賀茂神社一之時便超二相坂山一望二見近江海一而晚頭還來作歌

木綿疊手向乃山乎今日越而何野邊爾廬將爲子等

古今和歌集卷第九羇旅

朱雀院のならにおはしましける時にたむけ山にてよめる

菅原朝臣

此たひはぬさもとりあへす手向山紅葉の錦神のまにまに

後撰和歌集卷第十九離別

あひしりて侍ける人の東のかたへまかりけるに櫻の花のかたにぬさをしてつかはしける

よみ人しらす

あた人の手向におれる櫻花あふ坂迄はちらすもあらなん

中務集

西へ行人につるのかたをぬさにして

君か行雲路おくれぬあしたつは祈るこゝろの知べ也けり

拾遺和歌集卷第十神樂歌

榊葉にゆふしてかけて誰世にか神のみ前にいはひそめけん

古今和歌六帖

ぬさ　　土師宿禰水道

ち早振神の社に我かけしみぬさはたまへ妹にあはなくに

人まろ

すへかみにぬさとり向て我こえん行あふ坂の山越る哉

つらゆき

わたつ海のちひろの神に手向するぬさの追風やますに吹かなん

按に夫木和歌集にわたつ海のちひろのそこに手向するとあり

ふる雪を空にぬさとそ手向たる春のまかひに年の越れは

たちぬさのわか思をは玉ほこの道のへ毎に神もつけ

位右中辨　　位右少史

天曆五年正月廿二日

驛鈴貳口各三尅

廣瀨龍田祭使

式部省

差ニ進今月四日廣瀨龍田兩社祭使一諸大夫事

廣瀨社

從五位下爲清王　從五位下藤原朝臣榮光

龍田社

從五位下信忠王　從五位下三善朝臣興光

右使依レ例所ニ差進一如レ件

長和四年四月一日　正六位上行少錄麻田宿禰光貴

正六位上行大丞藤原朝臣隆佐

左辨官下ニ大和國一

使從五位下爲清王　從肆人

從五位下藤原朝臣榮光　從肆人

從五位下行神祇大祐直宿禰是盛　從肆人

神部　壹人　從壹人

巳上廣瀨使

從五位下信忠王　從肆人

從五下三善朝臣興光　從肆人

正六位上行神祇小祐卜部宿禰兼忠　從參人

神部　壹人　從壹人

執幣　各貳人

御馬　參匹

右來月四日爲レ奉ニ廣瀨龍田兩社幣帛一差ニ件等人一宛レ使發遣如レ件者國宜承知依レ件行レ之使者經レ彼之間依レ例供給路次之國亦宜下准ニ此官符一追下上

長和四年三月廿九日　少史紀朝臣行信

○和歌

萬葉集卷第一

寄レ神

木綿懸而祭三諸乃神佐備而齋尒波不在人目多見許增

木綿懸而齋此神社可超所念可毛戀之繁尒

旋頭歌

三幣帛取神之祝我鎭齋杉原燎木伐殆之國手斧所取奴

卷第三

長屋王駐ニ馬寧樂山一作歌

佐保過而寧樂乃手祭爾置幣者妹乎目不離相見染跡衣

大伴坂上郎女祭レ神歌

安和元年九月三日少史兼春宮　主卜部兼延
少祐兼宮主直氏茂
中納言橘朝臣好古宣以二件友則一宜レ令二供奉一者
權少外記鴨連量奉

太政官符神祇官
應レ預二祈年祭幣大原野神社肆座一事
右祈年祭者京畿外國名神靈社皆享二禮奠一各預二幣帛一
而件社自漏二彼祭一已忘二如在一今加二斟量一盍レ備二其
數一
右大臣宣奉　レ勅宜預二案上幣一列二春日社下一自レ今以
後立爲二恒例一者官宜二承知一依レ宣行レ之符到奉行
從四位上行權左中辨藤原朝臣　從五位下行左大史惟
宗朝臣
長元三年二月廿日

宇佐使
太政官符太宰府幷山陽道諸國司 内印
使左衞門權佐從五位上藤原朝臣克忠
卜部從七位上卜部宿禰方本
右中納言從三位兼行陸奧出羽按察使藤原朝臣在衡宣
奉　レ勅爲レ奉二幣帛並神寶等於八幡大菩薩宮並香椎
廟一差二件等人一宛レ使發遣者府國承知依レ宣行レ之仍
須下路次之國設二潔齋人一祇候上遞送不レ得下疎略以致中
雜穢上符到奉行
位　左　大　史
天曆四年九月十三日
驛鈴貳口 一口伍尅 一口參尅

太政官符太宰府 外印
調綿貳佰屯
右奉二八幡大菩薩宮並香椎廟幣帛一左衞門權佐從五位
下藤原朝臣克忠祿料如レ件中納言從三位兼行陸奧出
羽按察使藤原朝臣在衡宣奉　レ勅宜以二府庫綿一給レ之
者府宜承知依レ宣行レ之符到奉行
位右少辨
天曆四年九月十三日

鹿島使
太政官符下總常陸兩國司 内印
學生正六位上藤原朝臣行葛
内藏史生從　位上秦公連扶
右爲レ奉二鹿島香取兩社幣帛一差二件等人一宛レ使發遣如
レ件兩國宜承知依レ例行之符到奉行

王中臣某官某位某姓名乎爲レ使氐忌部弱肩爾太繦取懸持齋波理令ニ捧持一氐進給布御命乎申給久止申

延喜四時祭式云、神祇官所レ祭幣帛一依ニ前件一具レ數申レ官ニ后太子御巫祭神各八座並奠ニ幣案上一但臨時加減仍不レ入ニ恒數一太神宮度會宮各加ニ馬一疋一(籠頭料庸布一段)御歲社加ニ白馬白猪白鷄一各一高御魂神太宮女神及甘樫飛鳥石根忍坂長谷吉野巨勢賀茂當麻大坂膽駒都祁養布等山口並吉野宇陀葛木竹谿等水分十九社各加ニ馬一疋一其神祇官人以下鬘料安藝木綿一斤中臣宣ニ祝詞一料庸布五段短帖一枚(月次大嘗鬘料祝詞料及短帖准レ此)前レ祭十五日充ニ忌部八人木工一人一令レ造ニ供神調度一(但戲者歟編氏作楯)(木者讃岐國送納前レ祭五日令ニ木工寮受レ之)當曹忌部官一人監造若曹內無ニ忌部官人一及神部之中忌部不レ足ニ九人一者兼取ニ諸司一充レ之其潔衣料布人別二丈七尺(官人細布一段)一人日米二升酒六合(五位一升)鮨三兩(五位五兩又加ニ東鰒烏賊煮堅魚各一兩一)一勺(五位五夕)海藻二兩但木工者不レ給ニ潔衣及食一致齋之日平明奠ニ幣物於齋院案上並案下一(所司預敷ニ案下幣薦一)掃部寮設ニ座於內外一(諸祭設レ座准レ此)神祇官人率ニ御巫等一入レ自ニ中門一就ニ西廳座一東面北上大臣以下入レ自ニ北門一就ニ北廳座一(大臣南面參議以上就ニ廳東座一西面王大夫就ニ廳西座一東面)御巫就ニ廳下座一群官入レ自ニ南門一就ニ南廳座一北面東上神部引ニ祝部等一入立ニ於西廳之南庭一既而神祇官人降就ニ廳前座一大臣以下及諸司共降就ニ廳前座一中臣進就レ座宣ニ祝詞一每ニ一段畢一祝部稱唯宣訖中臣退出大臣以下諸司拍手兩段不ニ稱唯一然後皆還ニ本座一伯命云奉レ班ニ幣帛一史稱唯忌部二人進夾レ案立史以ニ官次一唱御巫及社祝祝稱唯進忌部頒ニ幣帛一畢(太神宮幣帛者置ニ別案上一差レ使進レ之)史還レ座申ニ頒レ幣訖一諸司退出(月次祭儀准レ此)

延喜式祈年月次大嘗等祝詞云忌部能弱肩爾太多須支取掛氐持由麻波利仕奉禮留幣帛乎神主祝部等受賜氐事不レ過捧持奉登宣

類聚符宣抄曰、右大臣宣奉　勅今月十二日可レ奉ニ臨時幣帛於伊勢太神宮一宜王五位已上者依レ例令レ卜中臣使用ニ月次使一忌部者別令ニ差奉一者

延喜十六年六月九日大外記伴宿禰人永奉

神祇官

請以ニ散位正六位上齋部宿禰友則一令レ供ニ奉伊勢太神宮當月神嘗祭奉幣使忌部一事

右件神嘗祭奉幣使齋部官人所ニ供奉一也而今無レ有ニ彼氏官人一望請以ニ件友則一將レ令レ供ニ奉件奉幣使忌部一謹請ニ處分一

若心經萬卷一大宰府司於二城山四王院一轉二讀金剛般若經三千卷般若心經三萬卷一以奉三謝神心一消二伏兵疫一夏四月十四日戊子勅去閏三月十日夜應天門及東西樓觀忽有二火災一皆悉灰燼求二之著龜一猶見二火氣一自非二神助一災何消伏宜レ令下二五畿七道一奉中幣境內諸神上仍須下長官潔齋躬向二社頭一敬以奉進必致中如在上　九月十一日丁未遣二使於賀茂御祖別雷松尾稻荷貴布禰丹生川上住吉水主大神長田乙訓等神社一奉幣先月祈二五穀一今以賽焉

又云貞觀十年閏十二月十日己亥遣二使於攝津國廣田生田社一奉レ幣

又云貞觀十二年十二月十二日戊子月次神今食祭天皇御二神嘉殿一親奉レ幣祭

又云陽成天皇貞觀十九年二月廿一日癸亥遣二從五位下行主殿權助在原朝臣友于一向二豐前國八幡大菩薩宮香椎廟一奉二幣劒等物一告以二天皇卽位一　丙寅遣二使於賀茂神社一奉レ幣告以レ定二齋王一（三代實錄作二齋內親王一）告文云天皇我詔旨止掛畏岐賀茂大神乃廣前爾申賜倍止申忝以二拙劣一天天日嗣乎受賜利恐美懼利大坐須皇大神乃厚護爾依天天皇朝廷波平久無レ事久有倍之自レ今以後毛助賜比明護賜牟爾依天之食國乃天下波愈益爾平久可レ有岐又前爾侍之儀子內親王波身乃安美重岐爾依天大上天皇乃御時爾令二退出一岐天今新爾嗣レ位天波相替天可レ令二奉仕一岐物奈利止爲奈毛敦子內親王乎卜定天阿禮乎度女爾進狀乎參議刑部卿正四位下兼行勘解由長官近江守菅原朝臣是善乎差使天宇豆乃大幣乎令二捧持一天進良久乎恐美恐美毛賜波久止申

又云元慶六年五月十五日丙辰遣レ使奉二幣伊勢太神宮及賀茂神社一告以レ定二齋內親王并齋王一也云々　參議正四位下行右衞門督藤原朝臣諸葛爲二賀茂神社使一

又云光孝天皇元慶八年四月廿五日乙卯遣二從四位下行山城守和氣朝臣彝範一向二大宰宇佐八幡大菩薩宮一奉二幣帛綾錦等物一告以二天皇踐祚一也

又云仁和三年四月七日庚戌奉二石淸水八幡大菩薩宮一使從三位行刑部卿基棟王到二東京四條一墮レ馬傷二支體一不レ達二神宮一更遣二從四位下行中務大輔兼加賀權守十世王一奉レ之其幣物不レ改焉

貞觀儀式云祈年祭中臣進就二庭坐一讀二祝詞一訖退出忌部二人進夾レ案立監二頒幣事一

又云神嘗祭祝詞　九月之神嘗乃大幣帛乎某官某位某

又云仁壽三年七月丁未遣二散位從五位下全世王神祇大副從五位上中臣朝臣逸志散位從五位下齋部宿禰件主等一向二伊勢太神宮一奉レ幣攘二災殄一也

又云天安元年十月癸巳冷然院南大庭大祓緣下奉二幣八幡大菩薩宮一使進發上也

又云清和天皇天安三年二月三十日丙辰大三祓於建禮門前一以明日可レ發下奉二幣八幡大菩薩一使上也　三月丁巳朔遣二散位從五位下和氣朝臣巨範一向二豐前國八幡大菩薩宮一奉二幣帛財寶神馬等一告以二卽位之由一也

又云清和天皇貞觀元年九月八日庚申山城國月讀神木島神羽束志神水主神樺井神和岐神大和國大和神石上神大社神一言主神片岡神廣瀨神龍田神巨勢山口神葛木水分神賀茂山口神當麻山口神大坂山口神膽駒山口神石村山口神耳成山口神忍坂山口神宇陀水分神飛鳥神飛鳥山口神畝火山口神吉野山口神吉野水分神丹生川上神河內國枚岡神恩智神和泉國大鳥神攝津國住吉神大依羅神難波大社神廣田神生田神長田神新屋神垂水神名次神等遣レ使奉レ幣爲二風雨祈一焉　十月七日己丑畿內畿外諸國遣レ使班二幣於天神地祇一去　九月祈レ無二風雨之災一誠有二感徹一歲以二有年一仍賽レ之

又云貞觀六年七月十七日辛丑頒二下五畿七道諸國一班二幣境內大小諸神一爲レ穀祈也

又云貞觀七年二月十四日丙寅勅遣二從五位下行木工權助和氣朝臣彝範一奉二幣於豐前國八幡大菩薩一告文云天皇我詔旨爾坐掛畏支八幡大菩薩乃大前爾申賜倍止申久去　正月爾差使天大幣乎奉出先止志岐然乎忽爾依レ有レ穢天奉レ出古止不レ得奈利爾支今吉日良辰擇定天木工權助從五位下和氣朝臣彝範乎差使天禮代乃大幣乎令二捧持一天奉出須四月十七日丁卯遣二從五位下行木工權助和氣朝臣彝範向二石清水八幡菩薩宮一奉二楯矛幷御鞍一告文云天皇我詔旨止掛畏支石清水爾座八幡大菩薩乃廣前爾申給止申久新宮構造天支楯桙及種々神財可二奉出一而神財波且奉出己止畢太利楯桙幷御鞍等乎奈毛怠利介留此乎令二造飾一天禮代大幣帛乎令二捧持一天云々

又云貞觀八年二月七日癸丑神祇官奏言信濃國水內郡三和神部兩神有二忿怒之心一可レ致二兵疫之災一勅國司講師處誠潔齋奉幣幷轉三讀金剛般若經千卷般若心經萬卷一以謝二神怒一兼厭二兵疫一　十四日庚申神祇官奏言肥後國阿蘇太神懷三藏忿氣一由是可下發二疫癘一擾中隣境兵上勅國司潔齋至誠奉幣幷轉三讀金剛般若經千卷般

追採期所以人無疵癘世致雍熙而明信未孚咎徵斯應太宰府言肥後阿蘇郡邊神靈池涵一定之盈科歷水旱以自若而今無故涸減卌文靜思厥咎朕甚懼焉詢之著龜告以旱疫今欲因循往烈則象前規施以德政防玆災青宜每寺齋戒共致薰修毎社奉幣式祈靈祐天下蒸民今年雜傜縱雖事多莫過廿日至於有閑遂又省之鰥寡惸獨不能自存者量加振濟凡厥國宰咸自策勉詳求人瘼使無寃滯且夫旱暵之來或關恒數自非巨變唯在勤救而已宜修理陂池勿乏溉灌又太宰府者匪啻古來鎭邊之區兼復當時恠見之地也返須先愼以備不虞布告遐邇俾知朕意　六月辛酉詔曰天皇我詔旨止掛畏支伊勢度會乃五十鈴之川上爾坐大神乃廣前爾申賜倍止申久云々令擇吉日良辰弖大監物從五位下島江王中臣民部大丞正六位上大中臣朝臣楫雄等乎差使天禮代乃大幣乎令捧持天奉出　五月己丑遣從四位下勘解由長官和氣朝臣仲世奉幣八幡太神及香椎廟是爲令寶位無動國家太平也　七月甲午天皇御八省院奉幣帛於伊勢太神宮以祈豐年

又云承和九年二月丙寅朔己巳遣使奉幣伊勢太神宮及諸社祈年也　八月壬申勅今玆百穀生長未期收藏不豫祈禱何防非常宜奉幣於伊勢太神宮攘災未前必致豐稔

又云承和十年七月戊子朔丁酉奉幣於天下名神令祈百穀　庚戌遣使奉幣於伊勢太神宮爲祈秋稼也　十一月丙申遣參議左大辨從四位上正躬王奉幣帛於賀茂神社爲令國家昌泰也

又云承和十一年閏七月壬申奉幣伊勢太神宮祈防風雨災

又云承和十五年六月丁酉勅曰陰陽寮申云今玆秋雨應爲害者若不豫防恐損年穀宜令五畿內七道諸國奉幣於名神以防止雨害

又云嘉祥元年六月庚子大臣就八省院大臣奉幣帛於伊勢太神宮及賀茂上下松尾社並告依瑞改元兼令祈防水殃也　十二月甲寅遣使奉幣香椎廟（其由不詳）

又云仁壽元年十月己酉遣大藏少輔從五位下藤原朝臣良方向香椎八幡太菩薩宮奉幣

又云仁壽二年七月壬辰遣散位從五位上安宗王從五位下利見王向廣瀨龍田神社奉幣馬爲祈年也

豫權守和氣朝臣眞綱奉御釼幣帛於八幡大菩薩宮及香椎廟告新即位也　乙卯遣參議從四位下右大辨藤原朝臣常嗣奉幣於賀茂太神宮以告高子內親王定齋院之狀　六月癸亥使神祇伯正四位下大中臣朝臣淵魚奉幣於賀茂太神又命天下諸國修理寺塔破壞者及神社　閏七月乙卯朔勅至于秋序洪水敗稼大風害物古來尙在宜令天下諸國奉幣名神豫攘防勿損年穀　八月丙午奉幣伊勢太神宮　十一月庚申爲行大嘗會事奉伊勢太神宮幣帛　丁卯天皇御八省院脩禋祀之禮

又云承和二年七月乙巳走幣於天下名神預攘風雨之災　戊申奉幣伊勢太神宮爲防風雨之災也

又云承和三年七月壬午勅曰方今時屬西成五穀垂穗如風雨愆序恐損秋稼宜令五畿內七道諸國奉幣名神攘災未萌其幣帛料用正稅長官率僚屬自親齋戒祭如神在必致徵應

又云承和四年六月巳未勅令五畿內七道諸國奉幣名神豫防風雨莫損年穀　戊辰勅令式部少輔良岑朝臣木連賚幣帛向八幡太神宮元有所禱今以奉賽

續日本後紀云承和五年二月庚戌武藏國都筑郡杉山神社預之官幣以靈驗也

類聚國史云承和五年七月壬申分幣內外諸國名神以祈秋稼　丁丑勅從彼青春終此朱夏雲膚慶興雨旬液應候隴畝之苗秋稼可期宜奉幣帛於伊勢太神宮以祈成熟　甲申天皇御八省院奉幣伊勢太神宮以禱豐年也

又云承和六年八月庚戌朔丙辰勅令內外諸國奉幣神祇以期西成焉

又云七年六月乙巳朔癸酉勅頃者澍雨頻降嘉穀滋茂如有風災恐損農業宜令五畿內七道諸國奉幣於名神豫防風雨焉　七月甲戌朔戊寅奉幣帛於伊勢太神宮以祈秋實也　十二月已酉遣使於伊勢太神宮宣詔曰頃月之間御心有所思將奉供幣帛而國家諒闇不果御意加之今年在肥後國神靈池涸盡卅餘丈足以爲國異因茲令祈禱之也

又云承和八年三月已亥詔曰聖哲凝範應天心以運行昊穹演鑒隨人事而通感故殷王修德桑穀自枯宋景崇善法星遽退朕以寡昧祇膺寶圖虛已勵精日愼一日先王經國之道水言涉求列聖綏民之方載深

又云弘仁九年九月壬辰奉ニ幣帛於伊勢太神宮ニ祈レ除ニ疫癘ヲ也

又云弘仁十二年八月丙寅勅今嘉穀垂レ穗多稔方熟恐風水爲レ災致ニ其傷害ニ宜下奉ニ幣名神ニ以護中秋稼上也

又云弘仁十四年四月乙巳奉ニ幣帛伊勢太神宮ニ告ニ卽位ヲ也　六月丙戌天皇御ニ大極殿ニ獻ニ幣帛於伊勢太神宮ニ爲レ停ニ齋内親王ニ　八月己丑天皇御ニ大極殿ニ奉ニ幣帛於伊勢太神宮ニ　九月壬戌御ニ大極殿ニ奉ニ幣帛伊勢太神宮ニ　十一月癸丑天皇御ニ大極殿奉ニ幣帛伊勢太神宮ニ爲レ御ニ大嘗ニ也　甲戌差ニ左兵衛督從四位上藤原朝臣綱繼ニ充レ使奉ニ幣帛於八幡太神樫日廟ニ使以ニ大宰府綿三百屯ニ賜レ使　癸丑天皇御ニ大極殿ニ奉ニ幣幣帛伊勢太神宮ニ爲レ御ニ大嘗ニ也

又云淳和天皇天長元年八月丁丑朔奉ニ幣帛名神ニ祈レ除ニ風雨損ニ也　癸巳遣レ使奉ニ幣伊勢太神ニ爲レ調ニ風雨ニ也

又云天長四年四月癸己御ニ大極殿ニ奉ニ幣帛伊勢太神宮ニ制曰禮代之大幣帛乎忌部弱肩爾太手次取掛持齋波理捧介レ持弖進給布

又云天長五年二月壬子御ニ小安殿ニ遣レ使奉ニ幣太神宮ニ　八月辛未爲レ有ニ天地災變ニ奉ニ幣柏原先陵ニ祈ニ請之ニ

又云天長七年七月甲申遣ニ使十八寺ニ令ニ讀經ニ奉ニ幣五畿内七道諸國名神ニ爲レ攘レ灾也　九月丁丑天皇御ニ大極殿ニ奉レ獻ニ幣帛伊勢太神宮ニ依ニ齋王參入ニ也

又云天長八年八月戊寅皇帝御ニ大極殿ニ奉ニ幣伊勢太神宮ニ祈レ防ニ風雨之災ニ也　庚午奉ニ幣名神ニ爲レ防ニ風雨之災ニ也　戊寅皇帝御ニ大極殿ニ奉ニ幣於伊勢太神宮ニ祈レ防ニ風雨之災ニ也　九月丙午御ニ大極殿ニ奉ニ幣于伊勢太神宮ニ　十二月壬申替ニ賀茂齋内親王ニ其辭曰參議左大辨正四位下藤原朝臣愛發乎差使弖申給波久申幷奉幣止

又云天長九年七月乙巳奉ニ幣五畿内七道諸國名神ニ防ニ風雨ニ也　壬子御ニ八省院ニ奉ニ幣帛伊勢太神宮ニ防ニ風雨ニ也

又云仁明天皇天長十年閏七月乙卯朔勅至ニ于秋序ニ洪水敗レ稼大風害レ物古來尙在宜令ニ天下諸國ニ奉ニ幣名神ニ豫爲ニ攘防ニ勿レ損ニ年穀ニ

續日本後紀云天長十年四月甲午是日頒ニ使諸國ニ奉ニ幣天神地祇ニ以レ有ニ卽位事ニ　壬戌遣ニ從四位下行伊

忌部之職也然則以二忌部氏一爲二幣帛使一以二中臣氏一可預二祓使一彼此相論各有レ所レ據是日勅命據二日本書紀一天照太神閇二天磐戸一之時中臣連遠祖天兒屋命忌部遠祖太玉命掘二天香山之五百箇眞坂樹一而上枝懸二八坂瓊之五百箇御統一中枝懸二八咫鏡一下枝懸二青和幣白和幣一相與致二祈禱一者然則至二祈禱事一中臣忌部並可二相預一又神祇令云其祈年月次祭者中臣宣二祝詞一忌部班二幣帛一踐祚之日中臣奏二天神壽詞一忌部上二神璽鏡劔一六月十二日晦日大祓者中臣上二御祓麻一東西文部上二祓刀一讀二祓詞一訖中臣宣二祓詞一常祀之外須下向二諸社一供中幣帛上者皆取二五位以上卜食者一充レ之宣常祀之外奉幣之使取三用兩氏一必當二相半一自餘之事專依二令條一

類聚國史云大同二年十一月辛卯奉二幣於伊勢太神宮一以行二大嘗事一也是夜御二朝堂院一行二大嘗之事一

日本後紀云大同三年十一月辛卯奉二幣帛於伊勢太神宮一以行二大嘗事一

類聚國史云嵯峨天皇大同五年七月丙辰勅夏苗已茂秋稼始熟恐風雨失レ時嘉穀被レ害宜下遣二使畿內一奉中幣名神上戊辰遣二右大辨從四位上藤原朝臣藤嗣一奉二幣於伊勢太神宮一以二聖體不豫一也

又云嵯峨天皇弘仁元年十二月壬午遣二參議正四位下巨勢朝臣野足一奉二幣帛於八幡太神宮樫日廟一賽二靜亂之禱一也

日本後紀云弘仁二年六月乙丑奉二幣於伊勢太神宮一

又云弘仁三年七月戊午御二大極殿一奉二幣於伊勢太神宮一爲レ救二疫旱一也

又云弘仁五年八月辛丑遣レ使奉二幣於伊勢太神宮幷賀茂大神一以二霖雨不晴一也

類聚國史云弘仁七年七月癸未勅風雨不レ時田園被レ害此則國宰不レ恭二祭祀一之所レ致也今聞今玆青苗滋茂宜敬二神道一大致二豐稔一庶俾二嘉穀盈レ畝黎元殷富一宜仰二畿內七道諸國一其官長淸愼齋戒奉二幣名神一禱三止風雨一莫レ致二漏失一九月戊辰奉二幣於伊勢太神一去八月夜爲下停二大風一祈禱上也

又云弘仁八年二月丙申神祇官言祈年月次等祭日諸社祝部等事須下參二集祭庭一受レ幣供上レ神而此年之間未レ有二參會一仍幣帛一百四十二嚢收二諸官庫一無二人預付一伏望准二寶龜六年格一頒幣之日不參祝部不レ論二有位無位一一切還本許レ之

以㆓炎旱經㆑月公私焦損㆒詔奉㆓幣畿內名神㆒以祈㆓嘉澍㆒焉　九月甲戌奉㆓伊勢太神宮㆒相嘗幣帛常年天皇御㆓大極殿㆒遙拜而奉而在㆓諒闇㆒不㆑行㆓常儀㆒故以㆓幣帛㆒直付㆓使者㆒矣

古語拾遺云爰思兼神深思遠慮議曰宜㆑令㆘太玉神率㆓諸部神㆒造㆗和幣㆖仍令㆘石凝姥神（天糠戸命之子鏡作遠祖也）取㆓天香山銅㆒以鑄㆗日像之鏡㆖令㆘長白羽神（伊勢國麻續祖今俗衣服謂㆓之白羽㆒此緣也）種㆑麻以爲㆗青和幣㆖（古語爾伎弖）令㆔天日鷲神津咋見神穀木種殖㆑之以作㆓白和幣㆒（是木綿也已上二物一夜蕃茂也）令㆓天羽槌雄神（倭文遠祖也）織㆓文布㆒令㆔天棚機姫神織㆓神衣㆒所㆑謂和衣（古語爾伎多倍）

又云令㆘天富命率㆓供作諸氏㆒造㆗作大幣㆖

日本記畧云　延曆十一年六月戊子奉㆓幣於畿內名神㆒以㆓皇太子不悆㆒也

續日本紀云延曆十二年七月戊子遣㆓參議壹志濃王等㆒奉㆓幣於伊勢太神宮㆒告以㆓遷都之由㆒

又云延曆十三年正月辛卯遣㆓參議大中臣諸魚㆒奉㆓幣於伊勢太神宮㆒爲㆑征㆓蝦夷㆒也　三月辛卯遣㆓大監物從五位上石淵王參議從四位上守兵部卿兼近衞大將行神祇伯近江守大中臣朝臣諸魚等㆒奉㆓幣帛於伊勢太神宮㆒　九月戊戌奉㆓幣帛於諸國名神㆒以㆘遷㆓于新都㆒及欲㆖㆑征㆓蝦夷㆒也

類聚國史云延曆十五年二月丁丑遣㆑使奉㆓幣於伊勢太神宮㆒以㆓齋內親王退㆒也

又云桓武天皇延曆十六年六月壬申遣㆑使奉㆓幣畿內七道諸國名神㆒皇帝於㆓南庭㆒親臨發焉以祈㆓萬國安寧㆒也

日本後紀云延曆十八年八月丙申奉㆓幣帛於伊勢太神宮㆒以㆓齋內親王將㆑入㆓齋宮㆒也

日本記畧曰延曆廿二年六月庚子奉㆓幣於丹生㆒爲㆑止㆓霖雨㆒也

日本後紀云延曆廿四年二月庚戌造石上神宮使正五位下石川朝臣吉備人等支㆔度功程㆒申上單功一十五万七千餘人太政官奏㆑之詔曰天皇御命（爾）坐石上乃太神（爾）申給（波久）禮代乃幣帛並鏡令㆑持（弖）申出給　四月甲辰令㆓諸國㆒奉㆔爲崇道天皇㆒建㆓小倉㆒納㆓正稅卅束㆒幷預㆓國忌及奉幣之列㆒謝㆓怨靈㆒也

又云大同元年四月己酉遣㆑使奉㆓幣於伊勢太神宮㆒以㆓齋內親王歸㆑京也　八月庚午先㆑是中臣忌部兩氏各有㆓相訴㆒中臣氏云忌部者本造㆓帛幣㆒不㆑申㆓祝詞㆒然則不㆑可㆘以㆓忌部氏㆒爲㆗幣帛使㆖忌部氏云奉幣祈禱是

散位外從五位下土師宿禰犬養奉幣于香椎廟以爲征新羅調習軍旅也　壬寅遣使奉幣於天下群神

又云天平寶字七年五月庚午奉幣帛于四畿內群神其丹生河上神者加黑毛馬旱也

又云天平寶字八年九月丁未遣正親正從五位下茨田王少主鈴中臣朝臣竹成神部鴨田連島人奉幣帛於伊勢太神宮　十一月癸丑遣使奉幣於近江國名神社先是仲麻呂之走據近江也朝廷遙望禱請國神而莫出境內即伏其誅所以賽宿禱也

又云天平神護二年五月辛未奉幣帛於大和國丹生川上神及五畿內群神以祈澍雨也　丙寅奉幣於畿內群神旱也

又云神護景雲三年七月庚辰遣使奉幣於五畿內風伯

又云寶龜三年六月壬申奉幣帛於畿內群神旱也

又云寶龜四年五月乙亥朔奉幣於畿內群神旱也

又云寶龜五年六月壬申奉幣於山背國乙訓郡乙訓社以豺狼之恠也

又云寶龜六年四月己巳遣使奉幣於諸國群神

六月丁亥其畿內諸國界有神社能興雲雨者亦遣使奉幣　九月辛亥奉幣帛於伊勢太神宮　十月乙酉奉幣帛於伊勢太神宮

又云寶龜七年八月丙辰朔遣使奉幣於天下群神其天下諸社之祝不勤洒掃以致蕪穢者收其位記與替

又云寶龜八年十二月壬寅皇太子不悆遣使奉幣於五畿內諸社

又云寶龜九年三月癸酉奉幣伊勢太神宮及天下諸神

類聚國史云光仁天皇寶龜九年六月辛丑特詔遣參議正四位上左大辨藤原朝臣是公肥後守從五位下藤原朝臣是人奉幣帛於廣瀨龍田二社爲風雨調和秋稼豐稔也

續日本紀云延曆三年六月壬子遣參議近衞中將正四位上紀朝臣船守於賀茂大神社奉幣以告遷都之由焉

又云延曆三年十二月癸酉遣使畿內七道大祓奉幣於天神地祇

又云延曆九年五月丙戌遣使五畿內祈雨焉　甲午

レ幣以告二新羅无禮之狀一八月甲寅詔曰朕君二臨宇內一稍歷二多年一而風化尙擁黎庶未レ安通且忘レ寐憂勞在レ玆又自レ春已來災氣遽發天下百姓死亡實多百官人等闕卒不レ少良由二朕之不德一致二此災殃一仰レ天慚惶不二敢寧處一故可乙優二復百姓一使甲レ得下存濟上免二天下今年租賦及百姓宿負一公私稻公稻限二八年已前私稻七年已前一其在二諸國一能起二風雨一爲二國家一有レ驗神未レ預二幣帛一者悉入二供幣之例一給二大宮主御巫坐摩御巫生島御巫及諸神祝部等爵一（按に古語拾遺に天平中に至て神帳を勘造すといふに此時のことなるへし）

又云天平十二年九月乙未奉二幣帛于伊勢大神宮一　十一月丙戌奉二幣帛於太神宮一

又云天平十三年正月癸巳遣二使伊勢大神宮及七道諸國社一奉レ幣以告下遷二新京一之狀上也

又云天平十五年五月辛丑奉二幣帛于畿內諸神社一祈レ雨

又云天平十七年五月乙丑奉二幣帛伊勢太神宮一　六月庚寅奉二幣帛伊勢太神宮一　九月癸酉奉レ幣祈二賀茂松尾等神社一

類聚國史云聖武天皇天平十七年九月甲戌令二播磨守正五位上阿倍朝臣蟲麻呂一奉二幣帛於八幡神社一

又云天平十九年七月辛巳奉二幣帛名山一祈レ雨

又云天平勝寶元年四月戊戌因遣二民部卿正四位上紀朝臣麻呂神祇大副從五位上中臣朝臣益人少副從五位下忌部宿禰鳥麻呂等一奉二幣帛於伊勢太神宮一

又云天平勝寶三年四月丙辰遣二參議左大辨從四位上石川朝臣年足等一奉二幣帛於伊勢太神宮一又遣レ使奉二帛於畿內七道諸社一爲レ令二遣唐使等平安一也

又云天平勝寶七年十一月丁巳遣二少納言從五位下厚見王一奉二幣帛于太神宮一

又云天平勝寶八歲四月乙巳遣レ使奉二幣帛于伊勢太神宮一　壬子遣二從五位下日下部宿禰古麻呂一奉二幣帛于八幡太神宮一　乙卯遣二左大辨正四位下大伴宿禰古麻呂幷中臣忌部等一奉二幣帛於伊勢太神宮一

又云天平寶字二年八月戊午奉二幣帛伊勢太神宮及天下諸國神社等一遣レ使奉幣以二皇太子卽位一故也

又云天平寶字六年十一月庚子奉二幣及弓矢於天下神祇一　丁丑遣二御史大夫正三位文室眞人淨三左勇士佐從五位下藤原朝臣黑麻呂神祇大副從五位下中臣朝臣毛人從五位下忌部宿禰呰麻呂等四人一奉二幣于伊勢太神宮一　庚寅遣二參議從三位武部卿藤原朝臣巨勢麻呂

統一中枝懸二八咫鏡一（一云二眞經津鏡一）下枝懸二青和幣（和幣此云二尼枳底一）白
和幣一相與致二其祈禱一焉（是にきての物に見えし始なり）
又一書云忌部遠祖太玉者造レ幣云々
又一書云科二罪於素盞嗚尊一而責二其祓具一是以有二手
端吉棄物足端凶棄物一亦以レ唾爲二白和幣一以レ洟爲二青
和幣一
又一書云下枝懸以二粟國忌部遠祖天日鷲所レ作木綿一（木綿は穀木なり其證は古語拾遺に天日鷲命之孫造二木綿及麻幷織布一云々好麻所レ生故謂二之總國一穀木所レ生故謂二之結城郡一とあれは麻を古語にふさといひ穀を木綿といひしなり）
又一書云天日鷲神爲二作木綿一以祭二此神一
又云大化元年七月庚辰蘇我石川麻呂大臣奏曰先以
祭二鎭神祇一然後應レ議二政事一是日遣下倭漢直比羅夫
於二尾張國一忌部首子麻呂於中美濃國上課二供神之幣一（幣をまぬなひといふはしめ也）
又云天武天皇十年正月辛未朔壬申頒二幣帛於諸神
祇一
又云朱鳥元年七月癸卯奉下幣於居二紀伊國一國懸神飛
鳥四社住吉大神一八月辛巳遣二秦忌寸石勝一奉二幣於土
佐大神一
又云持統天皇四年正月庚子班二幣於畿內天神地祇一七
月戊寅班二幣於天神地祇一
又云六年五月庚寅遣二使者一奉二幣于四所伊勢大和住
吉紀伊大神一告以二新宮一
又云八年三月乙巳奉二幣於諸社一
大寶神祇令云凡天神地祇者神祇官皆依二常典一祭レ之
仲春（祈年祭）季春（鎭花祭）孟夏（神衣祭）季夏（月次祭）孟秋（大忌祭）季
秋（神衣祭）仲冬（上卯相嘗祭）季冬（月次祭）
前件諸祭供神調度及禮儀齋日皆依二別式一其祈年
月次祭者百官集二神祇官一中臣宣二祝詞一（謂宣者布也祝者贊辭也言以告二神祝詞一宣二聞百官一故曰レ宣二祝詞一）忌部班二幣帛一（謂班猶レ頒其中臣忌部者當司及諸司中取二用之一）
續日本紀云慶雲元年七月甲戌奉二子住吉社一十二月辛
酉供二幣帛于諸社一
又云慶雲三年二月庚子是日甲斐信濃越中但馬土佐等
國一十九社始入二祈年幣帛例一（其神名具二神祇官記一）
又云靈龜元年六月癸亥奉二幣帛於諸社一
又云神龜三年七月乙未遣レ使奉二幣帛於石成葛木住吉
賀茂等神社一
又云天平九年四月癸亥奉二幣帛於伊勢太神宮一　乙巳
遣二使於伊勢神宮大神社筑紫住吉八幡及香椎宮一奉

古今要覽稿卷第十

●神祇部

○幣帛

神祇に幣帛をたてまつることは神代より所見あり（日本書紀）にきてといひ（日本書紀古語拾遺）ゆふといひ（日本書紀一書）まゐなひといひ（同上）みてくらといふ（同上）みな幣帛の異稱也その麻にてつくるを青にきてといひ穀にて作るを白にきてといふ（古語拾遺）はしめ天照大神天の岩戸にとち籠らせ給ひし時中臣連遠祖天兒屋命忌部遠祖天太玉命天日鷲命と相計りて幣帛を作り祈禱せしか故に人皇の代となりても幣帛を作り幣帛を奉らるゝ使は忌部氏の職にして祝詞は中臣の掌る所也（神祇令續日本紀）しかるに寶龜延曆の際しきりに他姓の人をして幣帛使たらしめしかは（天平寶字六年藤原巨勢麻呂土師犬養香椎廟に使し寶龜九年藤原是公藤原是人廣瀨龍田に使し延曆三年紀船守賀茂に使し十二年壹志濃王伊勢に使し廿四年石川吉備人石上神宮使せし類なり）大同元年にいたりて中臣忌部兩氏の訴起れり但その訴中臣は忌部をしてたゝ幣帛をつくるとのみをなさしめて奉幣の使をとゝめらるへきよしなり忌部の訴には奉幣祈禱こと忌部の職なりされは奉幣の使は忌部の司る所にして中臣はたゝ祓の使たるへきよしなりしかるにその年八月庚午勅ありて常祀の外に諸社に幣帛を供らるゝ時は五位以上のト食ものをとりて是にあてられ常祀奉幣の使は兩氏人を用ひらるゝを令條の如くなされたり（日本書紀）そのゝち終にあらためらるゝことなき也その官の幣帛を作らるゝ時は事に先たつこと十五日忌部八人木工壹人差てこれを造らしむ幣帛すてに作り畢りて致齋の日平明に齋院の案上案下に奠く時神祇伯班幣のことを命する時忌部とりて御巫及び祝にさつくるなり（延喜四時祭式）たゝし伊勢賀茂齋主の禊せさせ給ふ時及ひ六月十二月解除の日神祇官の中臣ぬさをとることあり（齋宮齋院式）是は齋王の親ら神に供らるゝへき料の麻をとりて奉るなるは自ら事別なり

古事記云於二下枝一取三垂白丹寸手青丹寺手一而（訓レ垂云二志殿一）此種種物者布刀玉命布刀御幣登取持而

日本書紀云中臣連遠祖天兒屋命忌部遠祖太玉命掘二天香山之五百箇眞坂樹一而上枝懸二八坂瓊之五百箇御

神社	國郡
大山祇神社	伊豫越智郡
都佐神社號ニ高賀茂大明神ニ味鉏高彦根	土佐土佐郡
筥崎宮八幡大神二聖母神后三竈門號筥崎八幡	筑前那珂郡
高良玉垂神武内宿禰	筑後三井郡
宇佐宮應神天皇比賣神大帶姫吾朝宗廟	豐前宇佐郡
西寒多神社號ニ大分宮ニ宮崎同體也又名柞原八幡	豐後大分郡
與止日女神社號ニ河上大明神ニ八幡伯母神功神后妹也	肥前佐嘉郡
健磐龍神社人皇十二代景行帝御出現阿曾都彦也	肥後阿蘇郡
都農神社大己貴命	日向兒湯郡
鹿兒島神社號ニ大隅正八幡宮ニ兼右云神功皇后也	大隅桑原郡
和多都美神社號ニ枚聞神社ニ鹽土老翁猿田彦神	薩摩頴娃郡
天手長男神社天思兼神一男	壹岐石田郡
和多都美社八幡宮也	對馬上縣郡

右諸國一宮神社如レ此秘中之深秘也

淺間神社同富士　甲斐八代郡
寒川神社八幡也　相模高座郡
氷川神社素盞嗚命　武藏足立郡
安房神社號洲崎大明神太玉命也　安房安房郡
玉前神社高皇產靈弟生產靈一男前玉命　上總埴生郡
香取神社齋主命也於春日第二殿祭之　下總香取郡
鹿島神社武甕槌神春日第一殿祭之　常陸鹿島郡
建部神社大己貴命也三輪一體　近江栗太郡
南宮神社金山彥命也　美濃不破郡
水無神社大己貴命女御歲神也　飛驒大野郡
南方刀美神社大己貴二男建御名方刀美命也號諏訪大明神　信濃諏訪郡
拔鋒大明神經津主神也　上野甘樂郡
二荒山神社大己貴命男事代主神　下野河內郡
都々古和氣社大己貴男高彥根　陸奧白河郡
大物忌神社倉稻魂神也　出羽飽海郡
遠敷大明神號若狹彥神上社彥火々出見下社豐玉姬妹玉依姬　若狹遠敷郡
氣比神社號笥飯宮人皇十四代仲哀天皇也　越前敦賀郡
白山比咩神社下社伊弉冊尊上社菊理媛號白山權現　加賀石川郡
氣多神社大己貴命　能登羽咋郡
氣多神社同上　越中礪波郡

伊夜日古社饒速日尊皇子天香久山命也　越後蒲原郡
渡津神社大己貴命兒五十猛神名大屋彥神　佐渡羽茂郡
出雲社大己貴命妻玉穗津姬也文高皇產靈尊　丹波桑田郡
籠神社一名籠守權現住吉一體也　丹後與謝郡
粟鹿神社上社彥火々出見中社籠神下社玉依媛　但馬朝來郡
宇倍神社武內大臣也　因幡法美郡
倭文神社大己貴命女下照媛也　伯耆川村郡
杵築宮大己貴命素盞嗚命　出雲出雲郡
物部神社饒速日尊皇子宇麻志摩千命　石見安濃郡
由良比咩社大己貴嫡后須勢利媛　隱岐智夫郡
伊和神社大己貴御魂也　播磨宍粟郡
中山神社同上　美作苫東郡
吉備津宮孝靈皇子吉備津彥命者非也孝靈三世吉備武彥命也備前備中備後三國一宮也　備中賀夜郡
伊都岐島神社天照與素盞嗚誓給生三女內市杵島姬　安藝佐伯郡
玉祖神社伊弉諾男玉屋命　周防佐波郡
住吉神社底筒男中筒男表筒男也　長門豐浦郡
日前國懸宮天兒屋孫石凝姥　紀伊名艸郡
伊佐奈岐神社號多賀社　淡路津名郡
大麻比古神社猿田彥神　阿波板野郡
田村社　讃岐香川郡

丹生（近江或云大和一前）　貴布禰（山城已上一社使ニ神祇官差ニ遣之一）

宣命紙　伊勢用ニ青色一　賀茂用ニ紅梅一　石清水
　已下用ニ黄紙一

○一宮　二宮

一宮といふは國々官社の中にて神位第一の社をいふなり山城國に正一位の神四社賀茂別雷賀茂御祖二神平野神松尾神なりたゝし賀茂二神は大同二年正一位にすゝみ給ひ餘社はみな貞觀の時になり給へれは賀茂二社を以て一宮と稱すること理なり大和國には三輪神河內國には枚岡神のみ正一位なり餘はみな從二位以下にましませは三輪枚岡を一宮とすることまたむへなりその次を二宮といふそのはしめ詳かならすたゝし能因法師伊豫の三島の神に雨をいのりし歌の詞書に一宮にまいらせてとあれは（金葉和歌集）それよりはやくいふことなるへし

金葉和歌集卷第十雜下

範國朝臣に具して伊豫國にまかりたりけるに正月より三四月まていかにも雨のふらさりけれはなはしろもせてよろつにいのりさはきけれとかなはさりけれは守能因歌よみて一宮にまいらせて雨いのれと申けれは參りていのり申ける歌　能因法師

あまの川苗代水にせき下せ
　あまくたります神ならば神

按に清輔袋草子に伊豫三島明神とあれは此一宮は卽三島明神也

一宮記云大日本國一宮

鴨大明神（號ニ下社一大山咋父故號ニ御祖一又曰ニ糺宮一大己貴命也）　山城愛宕郡
賀茂大明神（號ニ上社一大山咋神也號ニ別雷一母玉依姫武角身命女）
三輪大明神（號ニ大神一大物主神大己貴命也父素盞嗚母稻田姫）　大和城上郡
平岡大明神（號ニ枚岡一天兒屋命也又於ニ奈良春日第三殿一祭レ之）　河內河內郡
大鳥神社（日本武尊也）　和泉大鳥郡
住吉神社（底筒男中筒男表筒男三坐後加ニ神功皇后一四坐也）　攝津住吉郡
敢國神社（號ニ南宮一金山姫命也）　伊賀阿拜郡
都波岐神社（猿田彦神也）　伊勢河曲郡
伊射波神社　志摩答志郡
眞墨田神社（眞清田大明神是也大己貴命）　尾張中島郡
砥鹿大明神（大己貴神）　參河寶飯郡
已等乃麻知神社（號ニ事任神一猿田彦命）　遠江佐野郡
淺間大明神（號ニ富士權現一大山祇女木花開邪比咩）　駿河富士郡
三島大明神（大山祇命）　伊豆賀茂郡

以上三社ニ被レ奉ニ獻官幣一爲ニ十九社一
吉田廣田北野次第事可レ爲ニ住吉次丹生之上一之由宣下
同五年二月十七日祈年祭時加ニ梅宮一被レ奉レ獻ニ官幣一爲ニ二十社一
梅宮事可レ爲ニ吉田之上住吉の次一由宣下
第六十六代一條院治十年長德元年乙未二月廿五日被レ奉レ獻ニ臨時官幣一之日加ニ祇園社一爲ニ廿一社一
祇園社事可レ爲ニ廣田之次北野之上一由宣下
第六十九代後朱雀院長曆三年己卯八月十八日被レ奉レ獻ニ官幣一之日加ニ日吉社一爲ニ二十二社一
日吉社事可レ爲ニ住吉之次梅宮之上一由宣下
二十二社次第幣數
上七社　伊勢　石清水三本賀茂二本松尾同　平野四本
稻荷三本春日四本
中七社　大原野四本大神一本石上一本大和同　廣瀨一本
龍田二本住吉四本
下八社　日吉　梅宮　吉田四本廣田　祇園　北野
丹生　木船一本
以上廿二社

日本中國三千餘座預ニ年中四度官幣並臨時祭祀一者也
其中於ニ廿二社一者以ニ勅使一被レ奉レ獻ニ幣帛一者也
二十二社本緣日伊勢石清水賀茂松尾平野稻荷春日大神大倭石上廣瀨龍田大原吉田住吉日吉廣田梅宮祇園北野丹生貴船祈雨止雨乃時和奉幣勢羅留廿二社止號也此二十二社仁上中下乃品於被レ定事中古已來事也
拾芥抄曰二十二社
伊勢 度會郡五十鈴川號ニ太神宮一王一人中臣一人卜部一人太神宮內宮齋部一人勅使豐受宮外宮也
石清水 山城國男山源氏四位勅使幣三前
賀茂下上 山城國參議一人五位一人勅使下鴨御祖皇太神二前上賀茂別雷皇太神一前
松尾 同上二前　平野 同上四前
稻荷 山城四位一人勅使三前　春日 大和藤氏五位勅使四前
大原野 山城同上四前　大神 五位一人勅使一前
石上 大和同上一前號ニ之布留社一　大和 同上三前
廣瀨 同上二前或一延久六始預ニ官幣一中絕永保元
龍田 同上二前或一　住吉 同上四前或一
日吉 近江同上八棒　梅宮 橘氏五位一人勅使四前
吉田 山城藤氏五位一人勅使四前
廣田 攝津五位一人勅使一前或二前世俗號ニ西宮一
祇園 同上感神院無前八王子八前　北野 山城菅家五位一人勅使一前

永長二年四月十七日庚子吉田祭也又被レ立二祇園行幸御祈伊勢已下十社奉幣使一
康和五年四月十二日庚申平野松尾等祭也又被レ立二祈年穀奉幣使一
七月祈年穀奉幣事（廢務廿二社）
十一月春日神輿御二宇治一間於二本社一可レ行レ祭哉事
延久二年六月八日丁卯被レ立二廿一社奉幣使一依二天變怪異御祈一也
永保元年六月十二日丁卯被レ立一廿一社奉幣使一被レ申二辛酉並天台園城寺鬪亂一事
又云騎射延引事
永承二年五月五日廿一社奉幣左近騎射延引大將卿也同七日行レ之

○二十二社

二十二社といふは伊勢石清水賀茂松尾平野稻荷春日大原野大神石上大和廣瀬龍田住吉日吉梅宮吉田廣田祇園北野丹生木船なり（廿二社註式拾芥抄）抑この二十二社はしめよりその數をさためられしにはあらす村上天皇康保二年閏八月伊勢石清水賀茂松尾平野稻荷春日大原野大神石上大和廣瀬龍田住吉丹生木船の十六社に官幣を奉られ雨を止めむことを祈申されしをはしめとす一條院正暦二年六月旱魃しきりなりしかはこの十六社に吉田廣田北野の三社を加へてまた官幣を獻し雨を祈られたり同五年二月祈年の祭行はれしときまた梅宮を加へて二十社とし長德元年二月臨時官幣を獻らるゝ時祇園社を加へて二十一社とし後朱雀院長暦三年八月日吉社を加へて二十二社とせられたり（二十二社註式）その後損益あることなく二月七月祈年穀の祭行はるる時は此等の社に奉幣ありまた世間靜ならさる時奉幣ありし例もあり（年中行事秘抄）

二十二社註式曰二十二社事
人皇六十二代村上天皇治十九年康保二年（乙丑）霖雨經レ月九天覆レ雲依レ之閏八月廿一日被レ奉二獻官幣於十六社一止雨
伊勢　石清水　賀茂（上下）　松尾　平野　稻荷　春日
大原野　太神　石上　大和　廣瀬　龍田　住吉
丹生　木船等是也
第六十六代一條院治五年正暦二年（辛卯）炎天送レ日萬物變レ色依レ之六月廿四日祈雨奉幣時加二吉田廣田北野

民部卿藤原朝臣冬嗣宣奉レ勅依請若致二闕怠一罪如二
貞觀四年十二月五日格一

元慶六年九月廿七日

太政官符

應下二月祈年六月十二月月次祭國司一人率二禰宜神
主等一向二神祇官一受中取幣帛物上事

右可下受二取幣物一如レ法愼祭上之狀去年三月二日下二符
五畿内七道諸國一已畢今聞國司緩怠不レ勤祝部疎畧無
レ愼中納言兼右近衞大將從三位行春宮大夫藤原朝臣
時平宣奉レ勅國之大事莫レ過二祭祀一不レ守二符旨一怠
在二主司一須下畿内並近江紀伊等國選二國司椽目若史生
品官之中謹厚恭敬者一人一宛二使者一率二禰宜祝部等一
向二神祇官一受中取幣帛物上即便每レ社如レ法愼祭祭畢之
狀差レ使言上若致二闕失一殊處二科法一又其見參祝部等
交名者前レ祭一日使者等進レ官事據二祈福一不レ得二乖
違一自レ今以後立爲二恒例一

寛平六年十一月十一日

年中行事秘抄云二月祈年祭以前僧尼重輕服人不レ可二
參内一事

祈年穀奉幣事

前十許日上卿奉レ仰定二申廿二社使一

桓武天皇延暦十七年九月癸丑定下可レ奉二祈年幣帛一
之社上云々

依二一社穢一諸社奉幣延引例

天仁二年十月廿三日可レ被レ立二一代一度大神寶使一
而依三賀茂別雷社俄有二丙穢一延引廿九日被レ立二一
代一度大神寶使一

永久二年二月十四日今日可レ有二祈年穀奉幣一權大
納言家忠卿着二仗座一内記覽二宣命草一之間春日社穢
氣沙汰出來忽延引廿二日祈年穀奉幣

長寛二年五月八日今日依二地震御祈一可レ被レ立二廿
二社奉幣使一而依二平野社五體不具穢一延引同廿四
日可レ被レ立二同奉幣使一而依二太神宮穢一當日又延引
六月廿九日廿二社奉幣也

承安三年二月十八日祈年穀奉幣也而依二平野社五
躰不具穢一延引

天承六年十二月十四日辛卯大神祭也被レ立二廿一社
奉幣使一依二世間不一レ靜也

嘉保三年四月廿日己卯廣瀨龍田祭也又被レ立二臨時
廿二社奉幣使一

菊多郡一前　磐城郡十一前
標葉郡二前　行方郡一前
宇多郡七前　伊具郡一前
亘理郡二前　宮城郡三前
黒河郡一前　色麻郡三前
志太郡一前　小田郡一前
牡鹿郡一前

右得二鹿島神宮司解一偁禰宜外正六位上中臣部道繼解偁大神苗裔之神在二陸奥國一古老傳云延暦以往割二大神封物一宛二幣帛料一奉二件諸神一弘仁以來止而不レ奉因レ之玆諸神成レ崇物恠頻示仍去嘉祥元年辨二備幣帛一請二富國移文一向二於彼國一而稱レ無二舊例一不レ聽二通關一爰道繼身留二關下一不得レ向レ社所レ賚幣物祓二弃河頭一空以廻來者頃年夏月寒風秋稼不レ稔部內疫癘連年有レ聞宮司下レ筮件神成レ崇仍可レ奉二幣帛一之狀禱祈已畢望請下二知彼國一奉二件幣帛一但其料用二太神宮封物一謹請二官裁一者右大臣宣依レ請

貞觀八年正月廿日

太政官符

應レ附二送稅帳大帳朝集等使一諸社不受祈年月次新嘗等祭幣帛事

右得二神祇官解一偁件等祭幣帛依二祝部不參一納二置官庫一謹案齊衡二年五月廿一日格偁武藏下總安房常陸若狹丹後播磨安藝紀伊阿波等國不レ受二幣帛一自今以後宜下附二貢調大帳等使一送上之者而貢調使不レ着二此官一但稅帳大帳朝集使等爲レ例來着今如二格條一外國諸社不レ受二幣帛一未レ被二處分一望請畿內外國不レ受幣物同附二件三箇使一班送但頒二幣帛一之日不參祝部者須依二格先一科レ祓令レ愼二將來一若猶不レ悛將レ從二解却一謹請二官裁一者右大臣宣依レ請

貞觀十七年三月廿八日

太政官符

應レ令下山城國司祇中承奉二伊勢太神宮一幣帛使上事

右得二神祇官解一偁謹案二格條一云奉二伊勢太神宮一九月十一日神嘗祭並二月四日祈年六月十二月月次祭及臨時幣帛使等出二宮城一之日左右京職主典已上率二坊令兵士一相迎二外門一送二於京極一上近江伊賀伊勢等國每レ二至彼堺一目已上一人率二郡司健兒等一相迎祇承者而今出レ自二京極一至二近江堺一無二人祇承一不レ掃二汙穢一望請令三件國司祇二承境內一謹請二官裁一者大納言正三位兼行

小二千二百七座東海道六百八十座東山道三百四十座北陸道三百卅八座山陰道五百廿二座山陽道百廿四座南海道百卅四座西海道六十九座

座別絲二兩綿二兩

右國司長官以下准レ例散齋三日致齋一日共會祭レ之祭日并班レ幣儀並准二神祇官一

延喜式神名帳云天神地祇惣三千一百三十二座

大四百九十二座

三百四座並預二祈年月次新嘗等祭之案上官幣一就レ中七十一座預二相嘗祭一

一百八十八座並預二祈年國幣一

小二千六百四十座

四百三十三座並預二祈年案下官幣一

二千二百七座並預二祈年國幣一

延喜臨時祭式云凡祈年賀茂月次神嘗新嘗等祭前後散齋之日僧尼及重服奪情從公之輩不レ得レ參二入內裏一雖二輕服人一致齋並散齋之日不レ得二參入一自餘諸祭齋日皆同二此例一

類聚三代格云

太政官符

應レ奉二祈年月次新嘗等祭幣一事

右得二神祇官解一偁檢二案內一武藏下總安房常陸若狹丹後播磨安藝紀伊阿波等國神社幣須二依レ格祝部受取供レ祭而頃年緩怠曾不レ勞受レ從積二庫底一無レ由二走奉一斯固程途遼遠往還難澁之所レ致也望請差レ使令レ奉レ謹二請官裁一者右大臣宣奉レ勅依レ請但自今以後宜下附二貢調大帳藤原良房等使一送上之仍須下官長齋敬躬奉不上レ得二疎略一

齊衡二年五月廿一日

太政官符

應レ令下掃二清路次雜穢一並目以上祇承上事

右得二神祇官解一偁檢二案內一奉二伊勢太神宮一九月十一日神嘗祭並二月四日祈年六月十二月月次祭及臨時幣帛使等出二宮城一之日左右京職主典以上率二坊令兵士一相二迎外門一送二於京極一近江伊賀伊勢等國每レ至二彼堺一目以上一人率二郡司健兒等一相迎祇承而今件等國頃年之間不レ勞二祇承一不レ掃二汙穢一路頭多有二人馬骸骨一既見一人祇承并掃二清穢惡一若有レ致レ怠准レ闕二祭事一科二上祓一者右大臣宣依レ請

貞觀四年十二月五日

天政官符

應レ聽下奉二諸神社一幣帛使出中入陸奧國關上事

（八座河內國九十座和泉國六十一座攝津國四十九座）

社三百七十五所

座別絁三尺木綿二兩麻五兩四座置八座置各一束楯一枚槍鋒一口庸布一丈四尺裹葉薦三尺就レ中六十五座各加二鍬一口靫一口一廿八座各鍬一口三座各靫一口（並見二神名帳一）

前五十八座

座別絁三尺木綿二兩麻五兩四座置八座置各一束楯一枚槍鋒一口裹葉薦三尺

右神祇官所レ祭幣帛一依二前件一具數申レ官三后皇太子御巫祭神各八座並奠二幣案上一但臨時加減仍不レ入二恒數一太神宮度會宮各加二馬一疋一（籠頭料庸布一段）御歲社加二白馬白猪白鷄各一一高御魂神大宮女神及甘樫飛鳥石村忍坂長谷吉野巨勢賀茂當麻大坂膽駒都祁養布等山口并吉野宇陀葛木竹谿等水分十九社各加二馬一疋一其神祇官人以下鬘料安藝木綿一斤中臣宣二祝詞一料庸布五段短帖一枚（月次大嘗鬘料祝詞及短帖准レ此）前レ祭十五日充二忌部八人木工一人一令レ造二供神調度一（但數者靫編氏作槍木者讃岐國送納前レ祭五日令二木工寮一受レ之）當曹忌部官一人監造若曹內無二忌部官人一及神部之中忌部不レ足二九人一者兼二取諸司一充レ之其潔衣料布人別二丈七尺（官人細布一段）一人日米二升酒六合（五位一升）鮨三兩（五位五兩又加二東鰒烏賊煮堅魚各二兩一）鹽二勺（五位五勺）海藻二兩但木工者不レ給二潔衣及食一致齋之日平明奠二幣物於齋院案上并案下一（所司預敷二案下幣薦一）掃部寮設二座於內外一（諸祭設レ座准レ此）神祇官人率二御巫等一入レ自二中門一就二西廳座一東面北上大臣以下入レ自二北門一就二北廳座一（大臣南面參議以上就二廳東座西面一王大夫就二廳西座東面一）御巫就二廳下座一群官入レ自二南門一就二南廳座一北面東上神部引二祝部等一入二立於西廳之南庭一既而神祇官人降就二廳前座一大臣以下及諸司共降就二廳前座一中臣進就レ座宣二詞祝一每二一段畢一祝部稱唯宣訖中臣退出大臣以下諸司拍手兩段不二稱唯一然後皆還二本座一伯命云奉レ班二幣帛一史稱唯忌部二人進夾レ案立史以二官次一喝二御巫及社祝一祝稱唯進忌部頒二幣帛一畢（大神宮幣帛者置二別上案一差レ使進レ之）史還レ座申二頒幣一訖諸司退出（月次祭儀准レ此）

國司祭祈年神二千三百九十五座

大一百八十八座（東海道卅二座東山道卅八座北陸道十三座山陰道卅六座山陽道十二座南海道十九座西海道卅八座）

座別絲三兩綿三兩

十一年二月四日壬辰

十二年二月四日丙戌

十三年二月四日庚辰

十四年二月四日甲辰祈年祭如㆑常

十五年二月四日巳亥

十六年二月四日甲午

十七年二月四日戊午

三月五日戊子

十八年二月四日壬子

陽成天皇貞觀十九年二月四日丙午

元慶二年二月四日庚午

三年二月四日甲子

九日己巳

四年二月四日戊子

五年二月四日壬午

六年二月四日丁丑

九日壬午

七年二月四日辛丑

光孝天皇元慶九年二月四日庚寅

仁和二年二月四日甲寅

三年二月四日戊申

延喜神祇式（四時祭）云二月祭祈年祭神三千一百三十二座大四百九十二座（三百四座案上官幣一百八十八座國司所㆑祭）小二千六百四十座（四百三十三座案下官幣二千二百七座國司所㆑祭）

神祇官祭神七百三十七座

奠㆓幣案上㆒神三百四座（宮中卅座京中三座畿内山城國五十三座大和國一百二十八座河内國二十三座和泉國一座攝津國廿六座東海道伊勢國十四座伊豆國一座武藏國一座安房國一座下總國一座常陸國一座東山道近江國五座北陸道若狹國一座山陰道丹後國一座山陽道播磨國三座安藝國一座南海道紀伊國八座阿波國二座）

社一百九十八所

座別絁五尺五色薄絁各一尺倭文一尺木綿二兩麻五兩庸布一丈四尺倭文纏刀形（倭文三寸）絁纏刀形（絁三寸）布纏刀形（布三寸）各一口四座置八座置各一束楯一枚槍鋒一竿弓一張靫一口鹿角一隻鍬一口酒四升鰒堅魚各五兩腊二升海藻滑海藻雜海菜各六兩鹽一升酒坩一口裹葉薦五尺

前一百六座

座別座五尺五色薄絁各一尺倭文一尺木綿二兩麻五兩倭文纏刀形絁纏刀形布纏刀形各一口四座置八座置各一束楯一枚槍鋒一竿裹葉薦五尺

不㆑奠㆓幣案上㆒祈年神四百卅三座（並小宮中六座畿内山城國六十九座大和國一百五十

古今要覽稿卷第九

●神祇部

○祈年幣神社

二月祈年の祭行はるゝ時幣帛を奉らるゝ神社凡三千一百三十二座ありその内に大社四百九十二座小社二千六百四十座ありたゝし幣帛を案上に奠るにその神によりて案上案下の差別ありまた神祇官の祭る神と國司のまつる神とのわかちあり神祇官の祭る神に奉らるゝ幣は官に申てこれを作らしめ國司の祭る神に奉る幣は當國の正税をもてこれを作らる（神祇式）これも舊は當國の祝とも入京して官より幣帛をうけて歸り祭りせしか道路僻遠にして煩多きか故に當國の物を用ふへきよし延暦十七年にさためられたりけたしこれより前祈年の幣奉る神社さたまらさりしかこれもこのとしに定められしなり（類聚國史）

續日本紀云慶雲三年二月庚子是日甲斐信濃越中但馬土佐等國一十九社始入二新年幣帛例一（其神名具二神祇官一）

類聚國史云桓武天皇延暦十七年九月癸丑定下可レ奉二祈年幣帛一神社上先レ是諸國祝等毎レ年入レ京各受二幣帛一而道路僻遠往還多レ艱今便用二當國物一

嵯峨天皇弘仁八年二月丙申神祇官言祈年月次等祭日諸社祝部等事須下參二集祭庭一受レ幣供上レ神而此年之間未レ有二參會一仍幣帛一百四十二裹收二諸官庫一無レ人二預付一伏望准二寶龜六年格一頒幣之日不參祝部不レ論二有位無位一一切還本許レ之

清和天皇天安三年二月四日庚寅

貞觀二年二月四日乙酉

三年二月四日戊申

四年二月四日癸卯

五年二月四日丁酉

三月五日丁卯

六年二月四日辛酉

七年二月四日丙辰

八年二月四日庚戌

九年二月四日甲戌

十年二月四日戊辰

大國玉神社　爾自神社
見上神社　國津意加美神社
物部布都神社

●對馬島小廿三座

上縣郡小十四座

島大國魂神社　能理刀神社
天諸羽命神社　天神多久頭麻命神社
宇努刀神社　小枚宿禰命神社
那須加美乃金子神社　伊奈久比神社
行相神社　胡禄神社
胡禄御子神社　島大國魂神御子神社
大島神社　波良波神社

下縣郡小九座

銀山上神社　雷命神社
多久頭神社　社麻氐留神社
和多都美神社　平神社
敷島神社　都々智神社
銀山神社

早吸日女神社
●肥前國小三座
松浦郡小一座
志々伎神社
基肆郡小一座
荒穗神社
佐嘉郡小一座
與止日女神社
●肥後國小二座
阿蘇郡小二座
阿蘇比咩神社　國造神社
玉名郡小一座
疋野神社
●日向國小四座
兒湯郡小二座
都農神社　都萬神社
宮崎郡小一座
江田神社
諸縣郡小一座
霧島神社

●大隅國小四座
囎唹郡小三座
大穴持神社　宮浦神社
韓國宇豆峯神社
馭謨郡小一座
益救神社
●薩摩國小二座
穎娃郡小一座
枚聞神社
出水郡小一座
加紫久利神社
●壹岐島小十七座
壹岐郡小八座
水神社　阿多彌神社
國片主神社　高御祖神社
手長比賣神社　佐肆布都神社
同佐肆布都神社　角上神社
石田郡小九座
彌佐支刀神社　國津神社
津神社　與神社

室津神社　多氣神社
坂本神社
天忍穗別神社　小松神社
香美郡小四座
深淵神社　大川上美良布神社
長岡郡小五座
豐岡上天神社　朝峯神社
殖田神社　小野神社
石土神社
土佐郡小四座
葛木男神社　葛木咩神社
郡頭神社　朝倉神社
吾川郡一座
天石門別安國玉主天神社
幡多郡小三座
伊豆多神社　高知坐神社
賀茂神社
●西海道神小六十九座
●筑前國小三座
怡土郡小一座

志登神社
上座郡小一座
麻氐良布神社
夜須郡小一座
於保奈牟智神社
●筑後國小二座
三井郡小一座
伊勢天照御祖神社
御原郡小一座
御勢大靈石神社
●豐前國小三座
田川郡小三座
辛國息長大姬大目命神社
忍骨命神社　豐比咩命神社
●豐後國小五座
直入郡小一座
建男霜凝日子神社
速見郡小三座
宇奈岐日女神社　火男火賣神社二座
海部郡小一座

志太張神社　布勢神社
神前神社　多和神社
大蓑彦神社
三木郡小一座
和爾賀波神社
阿野郡小二座
鴨神社　神谷神社
鵜足郡小二座
飯神社　宇閇神社
那珂郡小二座
櫛梨神社　神野神社
多度郡小二座
大麻神社　雲氣神社
苅田郡小五座
高屋神社　山田神社
加麻良神社　於神社
黑島神社
大内郡小一座
水主神社
三野郡小一座

大水上神社
●伊豫國小十七座
新居郡小一座
黑島神社
桑村郡小三座
佐々久神社　布都神社
周敷神社
越智郡小四座
大須伎神社　伊加奈志神社
大野神社　樟本神社
風早郡小二座
國津比古命神社　櫛玉比賣命神社
溫泉郡小三座
出雲崗神社　湯神社
伊佐爾波神社
伊豫郡小三座
伊曾能神社　高忍日賣神社
伊豫豆比子命神社
●土佐國小廿座
安藝郡小三座

岸河神社　河上神社
三原郡四座
笶原神社　湊口神社
久度神社
板野縣小三座
鹿江比賣神社　宇志比古神社
岡上神社
阿波郡二座並小
建布都神社　事代主神社
美馬郡小十二座
鴨神社　田寸神社
横田神社　伊射奈美神社
建神社　天椅立神社
天都賀佐毗古神社　八十子神社
彌都波能賣神社　波爾移麻比禰神社
倭大國玉神大國敷神社二座
麻殖郡小七座
天村雲神伊自波夜比賣神社二座
伊加々志神社　天水沼間比古神社
天水塞比賣神社二座
秘羽目神足濱目門比賣神社二座
名方郡小八座
天石門別豐玉比賣神社
麻能等比古神社　和多都美豐玉比賣神社
大御和神社　天佐自能和氣神社
御間都比古神社　多祁御奈刀彌神社
意富門麻比賣神社
勝浦郡小八座
勝占神社　事代主神社
山方比古神社　宇母理比古神社
阿佐多知比古神社　速雨神社
御縣神社　建島女祖命神社
那賀郡小七座
和耶神社　宇奈爲神社
和奈佐意富曾神社　室比賣神社
八桙神社　賀志波比賣神社
建比賣神社
●讃岐國小廿一座
寒川郡小五座

御調郡小一座
賀羅加波神社
世羅郡小一座
和理比賣神社
三谿郡小一座
知波夜比古神社
三次郡小一座
知波夜比賣神社
●周防國小十座
熊毛郡小二座
熊毛神社　石城神社
佐婆郡小六座
玉祖神社二座　出雲神社二座
御坂神社　劒神社
吉敷郡小一座
仁壁神社
都濃郡小一座
二俣神社
●長門國小二座
豐浦郡小二座

忌宮神社　村屋神社
●南海道神小一百卅四座
●紀伊國小十八座
伊都郡小一座
小田神社
那賀郡小三座
荒田神社二座　海神社
名草郡小十座
香都知神社　加太神社
伊久比賣神社　朝椋神社
刺田比古神社　麻爲比賣神社
竈山神社　高積比古神社
高積比賣神社　堅眞神社
牟婁郡小四座
海神社三座　天手力男神社
●淡路國小十一座
津名郡小九座
伊勢久留麻神社　石屋神社
築狹神社　賀茂神社
由良湊神社　志筑神社

鴨神社　田土浦坐神社

●備中國小十七座

窪屋郡小三座

百射山神社　足高神社

菅生神社

賀夜郡小三座

古郡神社　野俣神社

鼓神社

下道郡小五座

石疊神社　神神社

麻佐岐神社　横田神社

穴門山神社

小田郡小三座

在田神社　神島神社

鵜江神社

後月郡小一座

足次山神社

英賀郡小二座

比賣坂鐘乳穴神社　井戸鐘乳穴神社

●備後國小十七座

安那郡小二座

多祁伊奈太伎佐耶布都神社

天別豐姫神社

深津郡小一座

須佐能表能神社

奴可郡小一座

爾比都賣神社

沼隈郡小三座

高諸神社　沼名前神社

比古佐須伎神社

品治郡小一座

多理比理神社

葦田郡小二座

賀武奈備神社　國高依彦神社

甲奴郡小一座

意加美神社

三上郡小一座

蘇羅比古神社

惠蘇郡小一座

多加意加美神社

御坂神社
神埼郡小二座
新次神社　田川神社
多可郡小六座
荒田神社　兵主神社
古奈爲神社　加都良乃命神社
大津乃命神社　天目一神社
賀茂郡小八座
崇健神社　石部神社
坂合神社　住吉神社
菅田神社　木梨神社
垣田神社　乎疑原神社
●美作國小十座
大庭郡小八座
佐波良神社　形部神社
壹粟神社二座　横見神社
久刀神社　兇上神社
長田神社
苫東郡小一座
高野神社

英多郡小一座
天石門別神社
●備前國小廿五座
邑久郡小二座
美和神社　片山日子神社
赤坂郡小六座
鴨神社三座　宗形神社
石上布都之魂神社　布勢神社
和氣郡小一座
神根神社
上道郡小四座
大神神社四座
御野郡小八座
石門別神社　尾針神社
天神社　伊勢神社
天計神社　國神社
石門別神社　尾治針名眞若比女神社
津高郡小二座
鴨神社　宗形神社
兒島郡小二座

美濃郡小五座
菅野天射若子命神社　佐毗賣山神社
染羽天石勝命神社　櫛代賀姫命神社
小野天大神之多初阿豆委居命神社
●隱岐國小十二座
知夫郡小六座
大山神社　海神社二座
比奈麻治比賣命神社　眞氣命神社
天佐志比古命神社
海部郡小一座
奈伎良比賣命神社
周吉郡小四座
賀茂那備神社　水祖神社
玉若酢命神社　和氣能須命神社
隱地郡小一座
天健金草神社
●山陽道神小一百廿四座
●播磨國小四十三座
明石郡小六座
宇留神社　物部神社
彌賀多々神社　林神社
赤羽神社　伊和都比賣神社
賀古郡小一座
日岡坐天伊佐々比古神社
餝磨郡小四座
射楯兵主神社二座　白國神社
高岳神社
揖保郡小四座
阿宗神社　祝田神社
阿波庭神社　夜比良神社
赤穗郡小三座
伊和都比賣神社　八保神社
鞍居神社
宍粟郡小六座
御形神社　庭田神社
雨祈神社　與比神社
大倭物代主神社　邇志神社
佐用郡小二座
佐用都比賣神社　天一神玉神社
美囊郡小一座

比那神社　阿須利神社
神彥魂命子午日命神社
鹽冶日子命御子燒大刀天穗日子命神社
飯石郡小五座
三屋神社　多倍神社
飯石神社　須佐神社
川邊神社
仁多郡小二座
伊我多氣神社　三澤神社
大原郡小十三座
宇能遲神社　同社坐須美彌神社
神原神社　八口神社
御代神社　布須神社
斐伊神社　同社坐斐伊波夜比古神社
來次神社　加多神社
佐世神社　西利太神社
海潮神社
能義郡小一座
天穗日命神社
●石見國小卅四座

安濃郡小十座
物部神社　苅田神社
刺鹿神社　朝倉彥命神社
新具蘇姬命神社　邇弊姬神社
佐比賣山神社　野井神社
靜間神社　神邊神社
邇摩郡小五座
城上神社　山邊八代姬命神社
霹靂神社　水上神社
國分寺霹靂神社
那賀郡小十一座
多鳩神社　津門神社
伊甘神社　大麻山神社
石見天豐足柄姬命神社
大祭天石門彥神社　大飯彥命神社
櫛色天蘿箇彥命神社　大歳神社
山邊神社　夜須神社
邑智郡小三座
天津神社　田立建埋根命神社
大原神社

阿須伎神社　同社神韓國伊大氐神社
同社天若日子神社　同社須佐袁神社
同社神魂意保刀自神社
同社神阿須伎神社　同社神伊佐那伎神社
同社神阿麻能比奈等理神社
同社神伊佐我神社　同社阿庭須伎神社
同社天若日子神社　御碕神社
因佐神社　久佐加神社
同社大穴持海代日古神社
同社大穴持海代日女神社
伊努神社　同社神魂伊豆乃賣神社
同社神魂神社　同社比古佐和氣神社
意布伎神社　都我利神社
伊佐波神社　美談神社
同社比賣遲神社　縣神社
同社和加布都努志神社
卯波神社　都武自神社
宇加神社　美努麻神社
布勢神社　意保美神社
出雲神社　同社韓國伊大氐神社

斐代神社　韓竈神社
鳥屋神社　神代神社
曾只能夜神社　同社韓國伊太氐奉神社
伊佐賀神社　文武神社
加毛利神社　御井神社
伊甚神社　波知神社
立蟲神社　阿吾神社

神門郡小廿七座

彌久賀神社　阿禰神社
佐志武神社　多伎藝神社
多伎神社　同社大穴持神社
國村神社　那賣佐神社
同社坐和加須西利比賣神社
佐伯神社　智伊神社
比布智神社　同社坐神魂子角魂神社
朝山神社　阿利神社
同社坐加利比賣神社　八野神社
大山神社　久奈爲神社
鹽沼神社　富能加神社
鹽冶比古神社　鹽冶比古麻由彌能神社

同社坐韓國伊太氏神社
筑陽神社
同社坐波夜都武自和氣神社
山狹神社　同社坐久志美氣濃神社
布辨神社　都辨志呂神社
野城神社　同社坐大穴持神社
同社坐大穴持御子神社
佐久多神社　同社坐韓國伊大氏神社
志保美神社　意多伎神社
同社坐御譯神社　市原神社
由貴神社　勝日神社
勝日高守神社　田面神社
久米神社

島根郡小十四座

布自伎美神社　多氣神社
久良彌神社　同社坐波夜都武自神社
河上神社　長見神社
門江神社　横田神社
加賀神社　爾佐神社
爾佐能加志能爲神社　法吉神社

生馬神社　美保神社

秋鹿郡小十座

佐陀神社　宇多紀神社
大井神社　日田神社
御井神社　内神社
垂水神社　惠曇神社
許曾志神社　大野津神社

楯縫郡小九座

玖潭神社　佐香神社
宇美神社　多久神社
御津神社　能呂志神社
許豆神社　許豆神社
水神社

出雲郡小五十七座

大穴持神社　杵築同社大神大后神社
同社坐伊能知比賣神社
同社神魂御子神社　同社神魂伊能知奴志神社
同社神大穴持御子神社
同社大穴持伊那西波伎神社
同社大穴持御子玉江神社

八上郡小十九座
大江神社三座　都波只知上神社二座
鹽野上神社二座　都波奈彌神社二座
伊蘇乃佐只神社二座　多加奈久神社二座
意非神社　賣沼神社
和多理神社　久多美神社
布留多知神社　美幣沼神社
邑美郡小一座
中臣崇健神社
高草郡小七座
伊和神社　倭文神社
天穗日命神社　天日名鳥命神社
阿大賀都健御熊命神社
大和佐美命神社　大野見宿禰命神社
氣多郡小五座
利川神社　幡井神社
加知彌神社　板井神社
志加奴神社
●伯耆國小六座
川村郡小二座
倭文神座　波々神社
久米郡小二座
倭文神社　國坂神社
會見郡小二座
胷形神社　大神山神社
●出雲國小百八十五座
意宇郡小四十七座
前神社　熊利刀神社
田中神社　楯井神社
速玉神社　布吾彌神社
磐坂神社　佐久佐神社
眞名井神社　鷹日神社
山代神社　賣豆紀神社
野白神社　布自奈大穴持神社
布自布神社　久多禰神社
玉作湯神社　同社坐韓國伊太氐神社
賣布神社　東持神社
佐爲神社　佐爲高守神社
宍道神社　守留布神社
須多神社　揖夜神社

神門神社　伊智神社
須谷神社
城崎郡小廿座
物部神社　久麻神社
穴目杵神社　女代神社
與佐伎神社　布久比神社
小江神社　久々比神社
耳井神社　桃島神社
兵主神社　深坂神社
兵主神社二座　氣比神社
久流比神社　重浪神社
縣神社　酒垂神社
西刀神社
美含郡小十二座
佐受神社　鷹野神社
伊伎佐神社三座　法庭神社
美伊神社　椋橋神社
阿故谷神社　桑原神社
色來神社　丹生神社
二方郡小五座

二方神社　大家神社
大歳神社　面沼神社
須加神社
七美郡小十座
多他神社　小代神社二座
志都美神社二座　伊曾布神社
等余神社　高坂神社
黑野神社　春木神社
●因幡國小四十九座
巨濃郡小九座
恩志呂神社　大神社
佐彌乃兵主神社　高野神社
許野乃兵主神社　二上神社
御湯神社　日野神社
甘露神社
法美郡小八座
多居乃上神社　意上奴神社
槻折神社　荒坂神社
手見神社　服部神社
美歎神社

伊豆志彌神社　矢田神社
丸田神社　賣布神社
衆良神社　三島田神社
神谷神社　村岳神社
聞部神社

●但馬國小百十三座

朝來郡小八座
朝來石部神社　刀我石部神社
兵主神社　赤淵神社
伊由神社　倭文神社
足鹿神社　佐嚢神社

養父郡小廿七座
夜夫坐神社小三座　宇留波神社
淺間神社　屋岡神社
伊久刀神社　楯縫神社
兵主神社　男坂神社
佐伎都比古阿流知命神社二座
井上神社二座　手谷神社
坂蓋神社　保奈麻神社
葛神社　大與比神社
桐原神社　盈岡神社
更杵村大兵主神社　御井神社
名草神社　杜内神社
和奈美神社　夜伎村坐山神社

出石郡小十四座
桐野神社　諸杉神社
須流神社　佐々伎神社
日出神社　須義神社
小野神社　手谷神社
中島神社　大生部兵主神社
阿牟加神社　比遲神社
石部神社　小坂神社

氣多郡小十七座
多麻良伎神社　氣多神社
葦田神社　三野神社
賣布神社　鷹貫神社
久刀寸兵主神社　日置神社
楯縫神社　井田神社
思往神社　御井神社
高負神社　佐久神社

天照玉命神社　荒木神社
何鹿郡小十二座
須波伎部神社　阿比地神社
阿須々伎神社　御手槻神社
佐陀神社　河牟奈備神社
伊也神社　赤國神社
高藏神社　佐須我神社
島萬神社　福太神社

●丹後國小五十八座

加佐郡小十座
奈具神社　伊知布西神社
彌加宜神社　倭文神社
高田神社　阿良須神社
笶原神社　麻良多神社
三宅神社　日原神社
與謝郡小十七座
物部神社　彌刀神社
須代神社　布甲神社
宇豆貴神社　阿知江神社
久理陀神社　多由神社
宇良神社　矢田部神社
阿知江岩部神社　倭文神社
三重神社　木積神社
板列神社　杉末神社
吾野神社
丹波郡小九座
咋岡神社　波彌神社
多久神社　稻代神社
名木神社　矢田神社
比沼麻奈爲神社
竹野郡小十三座
大宇加神社　奈具神社
溝谷神社　久爾原神社
網野神社　依遲神社
大野神社　竹野神社
生王部神社　志布比神社
深田部神社　床尾神社
發枳神社　賣布神社
熊野郡小十一座
熊野神社　意布伎神社

雜太郡小五座
引田部神社　物部神社
御食神社　飯持神社
越敷神社
賀茂郡小二座
大幡神社　阿都久志比古神社
●山陰道神小五百二十三座
●丹波國小六十六座
桑田郡小十七座
桑田神社　三宅神社
三縣神社　神野神社
山國神社　阿多古神社
小幡神社　走田神社
松尾神社　伊達神社
大井神社　石穗神社
與能神社　多吉神社
村山神社　鍬山神社
稗田野神社
船井郡小九座
船井神社　志多非神社

出石鹿岩部神社　島物部神社
幡日佐神社　志波加神社
辨奈貴神社　酒治志神社
多沼神社
多紀郡小七座
神田神社　川内多々奴比神社二座
大賣神社　佐々婆神社
二村神社　熊按神社
氷上郡小十七座
高座神社　狹官神社
苅野神社　岩部神社
知乃神社鍬　伊尼神社
佐地神社　阿陀岡神社
楯縫神社　芹田神社
兵主神社　新井神社
奴々伎神社　蘆井神社
加和那神社　伊都伎神社
神野神社
天田郡小四座
生野神社　奄我神社

●越後國小五十五座

頸城郡小十三座

奴奈川神社　大神社

阿比多神社　居多神社

佐多神社　物部神社

水島礒部神社　菅原神社

五十君神社　江野神社

青海神社　圓田神社

斐太神社

古志郡小六座

三宅神社二座　桐原石部神社

都野神社　小丹生神社

宇奈具志神社

三島郡小六座

御島石部神社　物部神社

鵜川神社　多岐神社

三島神社　石井神社

魚沼郡小五座

魚沼神社　大前神社

坂本神社　伊米神社

川合神社

蒲原郡小十二座

青海神社二座　宇津良波志神社

伊久禮神社　槻田神社

小布勢神社　伊加良志神社

長瀬神社　中山神社

且飯野神社　船江神社

土生田神社

沼垂郡小五座

大形神社　市川神社

石井神社　美久理神社

川合神社

磐船郡小八座

石船神社　蒲原神社

西奈彌神社　荒川神社

多伎神社　漆山神社

桃川神社　湊神社

●佐渡國小九座

羽茂郡小二座

度津神社　大目神社

菅忍比咩神社　加夫刀比古神社
天日陰比咩神社　鳥屋比古神社
荒石比古神社　久氐比古神社
能登生國玉比古神社　白比古神社
伊須流支比古神社　餘喜比古神社
阿良加志比古神社　久志伊奈太伎比咩神社
伊夜比咩神社　御門主比古神社
宿那彦神像石神社

鳳至郡小九座
鳳至比古神社　石瀨比古神社
神杉伊豆牟比咩神社　石倉比古神社
美麻奈比古神社　美麻奈比咩神社
神目伊豆伎比古神社　奥津比咩神社
邊津比咩神社

珠洲郡小三座
須須神社　古麻志比古神社
加志波良比古神社

●越中國小卅三座

礪波郡小七座
高瀨神社　長岡神社
林神社　荊波神社
比賣神社　雄神神社
淺井神社

射水郡小十二座
道神社　物部神社
加久彌神社二座　久目神社
布勢神社　速川神社
櫛神社　礒部神社
箭代神社　草岡神社
氣多神社

婦負郡小七座
姉倉比賣神社　速星神社
白鳥神社　多久比禮志神社
熊野神社　杉原神社
鵜坂神社

新川郡小七座
神度神社　建石勝神社
櫟原神社　八心大市比古神社
日置神社　布勢神社
雄山神社

家津神社　大湊神社
絲前神社

●加賀國小四十二座

江沼郡小十一座

篠原神社　刀何理神社
御木神社　宮村岩部神社
服部神社　菅生石部神社
忌浪神社　日置神社
出水神社　氣多御子神社
潮津神社

能美郡小八座

狹野神社　多太神社
石部神社　滓上神社
幡生神社　兎橋神社
多伎奈彌神社　熊田神社

石川郡小十座

白山比咩神社　本村井神社
額東神社　額西神社
御馬神社　佐奇神社
檜本神社　笠間神社

味知神社　神田神社

加賀郡小十三座

小濱神社　野間神社
三輪神社　賀茂神社
神田神社　下野間神社
郡家神社　須岐神社
野蛟神社　波自加彌神社
大野湊神社　野蚊神社
笠野神社

●能登國小四十二座

羽咋郡小十三座

相見神社　志乎神社
神代神社　羽咋神社
瀬戸比古神社　手速比咩神社
椎葉圓比咩神社　奈豆美比咩神社
諸岡比古神社　百沼比古神社
久麻加夫都阿良加志比古神社
藤津比古神社　大穴持像石神社

能登郡小十七座

能登比咩神社　藤原比古神社

麻氣神社　枚井手神社
大山御板神社　伊佐牟志神社四座
小蟲神社　雷神社
今立郡十四座並小
凧山神社　國中神社二座
石部神社　岡太神社
須波阿須疑神社三座　丹津神社
刀那神社　小山田神社
鵜甘神社　加多志波神社
敷山神社
足羽郡十三座並小
杉杜郡神社　士輪神社
直野神社　麻氣神社
登知爲神社　推前神社
與須奈神社　山方神社
御門神社　分神社
神傍神社　於神社
足羽神社
大野郡九座並小
磐座神社　篠座神社

椛神社　大槻磐座神社
坂門一事神社　風速神社
國生大野神社　高於磐座神社
荒島神社
坂井郡卅三座並小
布久漏神社　坂名井神社
御前神社　都那高志神社
多禰神社　久米多神社
意加美神社　阿治波世神社
國神神社　井口神社
楊瀨神社　己乃須美神社
片岸神社　大溝神社
比古奈神社　弊多神社
紀倍神社　枚岡神社
毛谷神社　柴神社
英多神社　鵜屎神社
伊伎神社　保曾呂伎神社
横山神社　三國神社
石田神社　味坂神社
高向神社　笠間神社

曾尾神社　許波伎神社
苅田比古神社　苅田比賣神社
大飯郡小七座
青海神社　伊射奈伎神社
香山神社　靜志神社
日置神社　大飯神社
佐伎治神社
三方郡小十八座
須可麻神社　御方神社
伊牟移神社　多由比神社
丹生神社　織田神社
和爾部神社　佐支神社
高那彌神社　仁布神社
須部神社　木野神社
彌美神社　於世神社
常神社　能登神社
闇見神社　山都田神社
●越前國小百十八座
敦賀郡小卌六座
加比留神社　劔神社

丹生神社　田結神社
久豆彌神社　野坂神社
志比前神社　角鹿神社
大椋神社　和志前神社
市振神社　金前神社
五幡神社　阿蘇村利椋神社
白城神社　横椋神社
伊多伎夜神社　横山神社
伊部磐座神社　質覇村峯神社
鹿蒜神社　高岡神社
大神下前神社　鹿蒜田口神社
三前神社　織田神社
石田神社　天八百萬比咩神社
天利劔神社　天比女若御子神社
伊佐奈彥神社　天國津彥神社
天國比咩神社　天鈴神社
玉佐々良彥神社　信露貴彥神社
丹生郡小十三座
兄子神社　雨夜神社
斗布神社　長岡神社

子松神社
磐瀬郡小一座
桙衝神社
會津郡小一座
蠶養國神社
小田郡小一座
黄金山神社
瑯磨郡小一座
磐椅神社
斯波郡小一座
志賀理和氣神社
氣仙郡小三座
理訓許段神社　登奈孝志神社
衣太手神社
安積郡小二座
飯豐和氣神社　隱津島神社
伊具郡小二座
熱日高彦神社　鳥屋嶺神社
磐井郡小二座
配志和神社　儛草神社

江刺郡小一座
鎭岡神社
●出羽國小七座
飽海郡小一座
小物忌神社
田川郡小三座
遠賀神社　由豆佐賣神社
伊氐波神社
平鹿郡小二座
鹽湯彥神社　波宇志別神社
山本郡小一座
副川神社
●北陸道神小三百卌八座
●若狹國小卌九座
遠敷郡小十四座
多太神社　小浴神社
石按比古神社　石按比賣神社
椎村神社　波古神社
久須夜神社　彌和神社
丹生神社　阿奈志神社

溫泉石神社
亘理郡小四座
鹿島伊都乃比氣神社　鹿島緒名太神社
安福河伯神社　鹿島天足和氣神社
信夫郡小四座
鹿島神社　黑沼神社
東屋國神社　白和瀨神社
志太郡小一座
敷玉早御玉神社
磐城郡小七座
大國魂神社　二俣神社
溫泉神社　佐麻久嶺神社
住吉神社　鹿島神社
子鍬倉神社
標葉郡小一座
苕野神社
牡鹿郡小八座
香取伊豆乃御子神社　伊去波夜和氣命神社
曾波神社　鳥屋神社
鹿島御兒神社　大島神社

久集比奈神社　計仙麻神社
桃生郡小五座
飯野山神社　日高見神社
二俣神社　石神社
小鋭神社
行方郡小七座
高座神社　日祭神社
冠嶺神社　御刀神社
鹿島御子神社　益多嶺神社
押雄神社
栗原郡小六座
表刀神社　雄鋭神社
駒形根神社　和我神社
香取御兒神社　遠流志別石神社
膽澤郡小七座
磐神社　駒形神社
和我叡登擧神社　石手堰神社
膽澤川神社　止止井神社
於呂閇志神社
新田郡小一座

●上野國小九座
片岡郡小一座
小祝神社
甘樂郡小一座
宇藝神社
群馬郡小二座
椿名神社　甲波宿禰神社
山田郡小二座
賀茂神社　美和神社
那波郡小二座
火雷神社　倭文神社
佐位郡小一座
大國神社
●下野國小十座
都賀郡小三座
大神社　大前神社
村檜神社
芳賀郡小二座
大前神社　荒樫神社
那須郡小三座
健武山神社　溫泉神社
三和神社
寒川郡小二座
阿房神社　胷形神社
●陸奥國小八十五座
白河郡小六座
伊波止和氣神社　白河神社
八溝嶺神社　飯豐比賣神社
永倉神社　石都都古和氣神社
名取郡小二座
多加神社　佐具叡神社
宮城郡小二座
伊豆佐賣神社　多賀神社
黑川郡小四座
須伎神社　石神山精神社
鹿島天足別神社　行神社
賀美郡小二座
飯豐神社　賀美石神社
玉造郡小三座
溫泉神社　荒雄河神社

大野郡小三座
水無神社　槻本神社
荏名神社
荒城郡小五座
大津神社　荒城神社
高田神社　阿多由太神社
栗原神社
●信濃國小四十一座
伊那郡小二座
大山田神社　阿智神社
筑摩郡小三座
岡田神社　沙田神社
阿禮神社
安曇郡小一座
川會神社
更級郡小十座
布制神社　波閇科神社
佐良志奈神社　當信神社
長谷神社　日置神社
清水神社　氷鉋斗賣神社

頤氣神社　治田神社
水内郡小八座
美和神社　伊豆毛神社
妻科神社　小川神社
守田神社　栗野神社
風間神社　皇足穂命神社
高井郡小六座
墨坂神社　越智神社
小内神社　笠原神社
小坂神社　高杜神社
埴科郡小五座
粟狹神社　坂城神社
中村神社　玉依比賣命神社
祝神社
小縣郡小三座
山家神社　鹽野神社
子檀嶺神社
佐久郡小三座
英多神社　長倉神社
大伴神社

大處神社　麻希神社
弓削神社　志呂志神社
波爾布神社　大水別神社
大野神社　小海神社
大寸神社　荒椋神社
三重生神社二座　槻神社
長田神社　宇伎多神社

●美濃國小卅八座

多藝郡小四座
多伎神社　大神神社
御井神社　久久美雄彥神社

不破郡小二座
大領神社　伊富岐神社

池田郡小一座
養基神社

安八郡小四座
宇波刀神社　加毛神社
墨俣神社　荒方神社

大野郡小三座
花長神社　花長下神社
來振神社

方縣郡小二座
方縣津神社　若江神社

厚見郡小三座
比奈守神社　茜部神社
物部神社

各務郡小七座
伊波乃西神社　村國神社二座
飛鳥田神社　村國眞墨田神社
加佐美神社　御井神社

賀茂郡小九座
縣主神社　坂祝神社
大山神社　太部神社
阿夫志奈神社　神田神社
佐久太神社　多爲神社
中山神社

惠奈郡小三座
坂本神社　中川神社
惠奈神社

●飛驒國小八座

淺井郡小十四座　湯次神社
鹽津神社　小江神社
波久奴神社　矢合神社
下津鹽神社　片山神社二座
岡本神社　麻蘇多神社
比伎多理神社　大羽神社
上許曾神社
都久夫須麻神社
伊香郡小四十五座
乃彌神社　神前神社
大澤神社　天八百列神社
乎彌神社　走落神社
足前神社　久留彌多神社
賣比多神社　意波閇神社
阿加穗神社　櫻市神社
等波神社　橫山神社
多太神社　兵主神社
赤見神社　波彌神社
櫻椅神社　甘櫟前神社
佐味神社　椿神社

佐波加刀神社　伊香具坂神社
與志漏神社　布勢立石神社
乃伎多神社　石作神社
玉作神社　意富布良神社
伊波太岐神社　高野神社
鉛練日古神社　大椋神社
黑田神社　丹生神社二座
神高槻神社　天石門別命神社
大比比岐命神社　草岡神社
意太神社　大浴神社
大水別神社　天川命神社
高嶋郡卅二座
阿志都彌神社　與呂伎神社
田部神社　熊野神社
箕嶋神社　大川神社
小野神社　麻知神社
櫟原神社　大田神社
鞆結神社　日置神社
津野神社　大荒比古神社二座
大前神社　坂本神社

夷針神社　羽梨山神社
主石神社
多珂郡小一座
佐波波地祇神社
●東山道神小三百四十座
●近江國小一百四十二座
滋賀郡小五座
那波加神社　倭神社
石坐神社　神田神社
小椋神社
栗太郡小六座
蘆井神社　意布伎神社
小槻大社　小槻神社
高野神社　卯岐志呂神社
甲賀郡小六座
矢川神社　水口神社
石部鹿鹽上神社　飯道神社
川枯神社二座
野洲郡小七座
小津神社　下新川神社
比利多神社　上新川神社
馬路石邊神社　巳爾乃神社二座
蒲生郡小十座
大嶋神社　奥石神社
石部神社　大屋神社
比都佐神社　長寸神社
沙沙貴神社　菅田神社
馬見岡神社二座
神埼郡小二座
乎加神社　川桁神社
愛智郡小三座
輕野神社　石部神社二座
犬上郡小七座
阿自岐神社二座　多何神社二度
日向神社　都恵神社
山田神社
坂田郡小五座
山田神社　日撫神社
伊夫伎神社　岡神社
山津照神社

●上總國小四座

長柄郡小一座

橘神社

海上郡二座並小

島穴神社　姉埼神社

望陀郡小一座

飯富神社

●下總國小十座

千葉郡二座並小

寒川神社　蘇賀比咩神社

匝瑳郡小一座

老尾神社

印幡郡小一座

麻賀多神社

結城郡二座並小

高椅神社　健田神社

岡田郡小一座

桑原神社

葛飾郡二座並小

茂侶神社　意富比神社

相馬郡小一座

蛟蝄神社

●常陸國小廿一座

眞壁郡小一座

大國玉神社

信太郡二座並小

楯縫神社　阿彌神社

久慈郡小六座

長幡部神社　薩都神社

天之志良波神社　天速玉姫命神社

稻村神社　立野神社

筑波郡小一座

筑波山神社二座名神一大一小

那賀郡小五座

大井神社　青山神社

阿波山上神社　藤内神社

石船神社

新治郡小二座

鴨大神御子神主神社　佐志能神社

茨城郡三座並小

多磨郡八座並小

阿伎留神社　小野神社

布多天神社　大麻止乃豆乃天神社

阿豆佐味天神社　穴澤天神社

虎柏神社　青渭神社

足立郡小三座

足立神社　調神社

多氣比賣神社

横見郡三座並小

横見神社　高負比古神社

伊波比神社

入間郡五座並小

出雲伊波比神社　中氷川神社

廣瀬神社　物部天神社

國渭地祇神社

埼玉郡四座並小

前玉神社二座　玉敷神社

宮目神社

男衾郡三座並小

小被神社　出雲乃伊波比神社

稻乃賣神社

播羅郡四座並小

白髪神社　田中神社

楡山神社　奈良神社

賀美郡四座並小

長幡部神社　今城青八坂稻實神社

今木青坂稻實荒御魂神社

今城青坂稻實池上神社

秩父郡二座並小

秩父神社　椋神社

大里郡小一座

高城神社

比企郡小一座

伊古乃速御玉比賣神社

那珂郡小一座

瓺𤭖神社

●安房國小四座

朝夷郡四座並小

天神社　莫越山神社

下立松原神社　高家神社

部多神社　佐波神社二座
布刀主若玉命神社　國杜命神社
稻宮命神社　石倉命神社
國玉命神社　璁玉命神社
國玉命神社　豐御玉命神社
青玉比賣命神社
●甲斐國小十九座
山梨郡九座並小
神部神社　物部神社
甲斐奈神社　黑戸奈神社
金櫻神社　松尾神社
玉諸神社　大井俣神社
山梨岡神社
巨麻郡五座並小
神部神社　穗見神社
宇波刀神社　倭文神社
笠屋神社
八代郡小五座
佐久神社　弓削神社
表門神社　中尾神社

桙衝神社
●相模國小十二座
足上郡小一座
寒田神社
餘綾郡小一座
川勾神社
大住郡四座並小
前鳥神社　高部屋神社
比比多神社　阿夫利神社
愛甲郡小一座
小野神社
高座郡小五座
大庭神社　深見神社
宇都母知神社　有鹿神社
石楯尾神社
●武藏國小四十二座
荏原郡二座並小
薭田神社　磐井神社
都筑郡小一座
杉山神社

伊大氐和氣命神社　阿豆佐和氣命神社
多祁美加々命神社　波夜多麻和氣命神社
伊波例命神社　伊豆奈比咩命神社
阿米都氣命神社　波夜志命神社
優波夷命神社　片菅命神社
久良惠命神社　夜須命神社
奈疑知命神社　加彌命神社
氐良命神社　許志伎命神社
多祁伊志豆伎命神社　久爾都比咩命神社
伊波乃比咩命神社　杉桙別命神社
多祁富許都久和氣命神社
伊波久良和氣命神社　意波與命神社
阿米都加多比咩命神社
阿治古神社　伊波比咩命神社
志理太乎宜神社　南子神社
伊波氐別命神社　穗都佐氣命神社
大津往命神社　波治神社
布佐乎宜神社　佐々原比咩命神社
竹麻神社三座　加毛神社二座
田方郡小廿三座

荒木神社　文梨神社
輕野神社　倭文神社
高椅神社　長濱神社
久豆彌神社　石德高神社
伊加麻志神社　廣瀨神社
小河泉水神社　大朝神社
玉作水神社
加理波夜須多祁比波預命神社
劔刀乎夜爾命神社　火牟須比命神社
白波之彌奈阿和命神社
金村五百君和氣命神社
引手力命神社　金村五百村咩命神社
阿米都瀨氣多知命神社
劔刀石床別命神社　鮑玉白珠比咩命神社
那賀郡廿二座並小
箕勾神社　伊志夫神社
伊那上神社　仲神社
井田神社　伊那下神社
仲大歲神社　多爾夜神社
哆胡神社　宇久須神社

生雷命神社　天御子神社二座
御祖神社　御子神神社二座
矢奈比賣神社　須波若御子神社
周知郡三座並小
芽原川內神社　小國神社
馬主神社
山名郡四座並小
山名神社　許彌神社
島名神社　郡邊神社
佐野郡四座並小
眞草神社　巳等乃麻知神社
阿波々神社　利神社
城飼郡二座並小
奈良神社　比奈多乃神社
蓁原郡小四座
大楠神社　服織田神社
片岡神社　飯津佐和乃神社
●駿河國小廿一座
益頭郡四座並小
神神社　飽波神社

那閇神社　燒津神社
有度郡三座並小
伊河麻神社　池田神社
草薙神社
安倍郡七座並小
足坏神社　神部神社
建穗神社　中津神社
小梳神社　白澤神社
大歲御祖神社
廬原郡三座並小
御穗神社　久佐奈岐神社
豐積神社
富士郡小二座
倭文神社　富知神社
駿河郡二座並小
丸子神社　桃澤神社
●伊豆國小八十七座
賀茂郡小四十二座
波布比賣命神社　伊賀牟比賣命神社
佐伎多麻比咩命神社

碧海郡六座並小
和志取神社　酒人神社
日長神社　知立神社
比蘇神社　糟目神社
播豆郡三座並小
久麻久神社二座　羽豆神社
寶飯郡六座並小
形原神社　御津神社
菟足神社　砥鹿神社
赤日子神社　石座神社
八名郡小一座
石巻神社
渥美郡小一座
阿志神社
遠江國小六十座
濱名郡小四座
彌和山神社、英多神社
猪鼻湖神社　大神神社
敷智郡六座並小
歧佐神社　許部神社

津毛利神社　息神社
曾許乃御立神社　賀久留神社
引佐郡六座並小
渭伊神社　乎豆神社
三宅神社　蜂前神社
須倍神社　大致神社
麁玉郡四座並小
於侶神社　多賀神社
長谷神社　若倭神社
長下郡四座並小
長野神社　大張神社
登勒神社　猪家神社
長上郡五座並小
大歳神社　邑勢神社
服織神社　朝日波多加神社
子倉神社
磐田郡十四座並小
入見神社　鹿苑神社
淡海國玉神社　田中神社
豐雷命神社　豐雷賣命神社

蟲鹿神社　立野神社
井出神社　小口神社
鹽道神社
春日部郡十二座並小
非多神社　乎江神社
外山神社　片山神社
訓原神社　牟都志神社
味鋺神社　物部神社
伊多波刀神社　高牟神社
內々神社　多氣神社
山田郡十九座並小
片山神社　大目神社
羊神社　深川神社
川島神社　小口神社
伊奴神社　金神社
和爾良神社　多奈波太神社
綿神社　澁川神社
太乃伎神社　尾張神社
別小江神社　大井神社
坂庭神社　尾張戸神社

石作神社
愛智郡小十三座
日置神社　上知我麻神社
下知我麻神社　御田神社
高牟神社　川原神社
針名神社　伊副神社
成海神社　物部神社
八劔神社　火上姉子神社
青衾神社
知多郡三座並小
阿久比神社　入見神社
羽豆神社
●參河國廿六座並小
賀茂郡七座並小
野見神社　野神社
兵主神社　射穗神社
狹投神社　廣澤神社
灰寶神社
額田郡二座並小
稻前神社　謁播神社

長谷神社　立坂神社

●志摩國小一座

答志郡小一座

粟島坐神乎多乃御子神社

●尾張國小一百十三座

海部郡八座並小

漆部神社　諸鍬神社

國玉神社　藤島神社

宇太志神社　由乃伎神社

伊久波神社　憶感神社

中島郡小廿七座

坂手神社　見努神社

波蘇伎神社　針熊神社

野見神社　淺井神社

裳咋神社　知除波夜神社

小塞神社　石刀神社

室原神社　高田波蘇伎神社

大口神社　賣夫神社

川曲神社　酒見神社

淺井神社　久多神社

堤治神社　石作神社

千野神社　鹽江神社

布智神社　宗形神社

尾張大國靈神社　大御靈神社

鞆江神社

葉栗郡十座並小

穴太部神社　阿遲加神社

若栗神社　黑田神社

大野神社　石作神社

宇夫須那神社　川島神社

伊富利部神社　大毛神社

丹羽郡小廿一座

阿豆良神社　田縣神社

稻木神社　石作神社

伊賀々原神社　山那神社

爾波神社　前利神社

諸鑒神社　阿具麻神社

針綱神社　生田神社

宅美神社　鳴海杜神社

削栗神社　託美神社

河曲郡廿三座並小

高市神社　彌都加伎神社
貴志神社　鬼太神社
川神社　矢椅神社
岡太神社　奈加等神社
小川神社　都波岐神社
飯野神社　久々志彌神社
高岡神社　大木神社
須伎神社　深田神社
阿自賀神社　夜夫多神社
土師神社　大鹿三宅神社

三重郡六座並小

江田神社　加富神社
神前神社　小許曾神社
足見田神社　椿岸神社

朝明郡廿四座並小

伊賀留我神社　能原神社
伎留太神社　石部神社二座
兎上神社　太神社
多比鹿神社　鳥出神社
八十積椋神社　志氐神社
耳利神社　耳常神社
穆田神社　櫛田神社
井手神社　殖栗神社
布自神社　穗積神社
櫻神社　井後神社
長倉神社　苗代神社
長谷神社

員辨郡十座並小

鴨神社　石神社
平群神社　多奈閇神社
猪名部神社　鳥取山田神社
鳥取神社　大谷神社
賀毛神社　星川神社

桑名郡十四座

桑名神社二座　佐乃富神社
尾津神社二座　小山神社
野志里神社　尾野神社
深江神社　額田神社
宇賀神社　中臣神社

大櫛神社
飯野郡四座並小
意非多神社　神山神社
石前神社　神垣神社
飯高郡九座並小
立野神社　大神社
物部神社　加世智神社
意悲神社　丹生神社
丹生中神社　堀坂神社
久爾都神社
壹志郡小十座
波多神社　物部神社
稻葉神社二座　須加神社
須氏神社　小川神社
射山神社　川併神社
敏太神社
安濃郡十座並小
置染神社　大市神社
志夫彌神社　小舟神社
美濃夜神社　阿由太神社

小川内神社　比佐豆知神社
加良比乃神社　船山神社
奄藝郡十三座並小
伊奈富神社　加和良神社
多爲神社　大乃己所神社
事忌神社　酒井神社
尾前神社　比佐豆知神社
石積神社　彌尼布理神社
服織神社　横道下神社
久留眞神社
鈴鹿郡十九座並小
那久志里神社　倭文神社
川俣神社　眞木尾神社
志婆加支神社　縣主神社
天一鍬田神社　椿大神社
小岸大神社　大井神社二座
三宅神社　江神社
布氣神社　石神社
長瀬神社　忍山神社
片山神社　彌牟居神社

湯田神社
奈良波良神社
大水神社
津大長水神社
大國玉比賣神社
御食神社
大土御祖神社
田上大水神社
國津御神社
坂手國生神社
粟皇子神社
久々津比賣神社
川原坐國生神社
大間生神社
江神社
神前神社
朽羅神社
榎村神社
度會國御神社
度會乃大國玉比賣神社
清野井庭神社
志等美神社
川原神社
山末神社
大川內神社
棒原神社
川原神社
宇須乃野神社
小俣神社
川原淵神社
大神乃御船神社
雷電神社
荻原神社
官舍神社

多氣郡五十二座並小

須麻漏賣神社
佐那神社二座
櫛田神社
加須夜神社
竹神社
仲神社
麻續神社
服部伊刀麻神社
相鹿牟山神社二座
奈々美神社
魚海神社二座
林神社
相鹿上神社
守山神社
宇爾櫻神社
宇爾神社
服部麻刀萬神社二座
天海田水代大刀自神社
相鹿木太御神社
紀師神社
宇留布都神社
天香山神社
穴師神社
流田神社
畠田神社三座
流田上社神社
石田神社
火地神社
佐伎栗栖神社二座
竹大與杼神社
竹佐々夫江神社
棒屋神社
伊佐和神社
牟禮神社
有貳神社
國生神社
大國玉神社
大分神社
國乃御神社
櫃倉神社
伊蘇上神社
伊呂上神社
櫛田槻本神社
牛庭神社

多太神社　小戸神社
賣布神社
武庫郡小二座
名次神社鍬靫　岡太神社
菟原郡三座並小
河內國魂神社　大國主西神社鍬靫
保久良神社鍬靫
八部郡小一座
汶賣神社
有馬郡小二座
有馬神社　公智神社鍬靫
能勢郡小三座
岐尼神社　久佐々神社
野間神社
●東海道神小六百八十座
●伊賀國小廿四座
阿拜郡小八座
陽夫多神社　宇都可神社
波太伎神社　須智荒木神社
佐々神社　穴石神社

眞木山神社　小宮神社
山田郡三座並小
鳥坂神社　阿波神社
葦神社
伊賀郡十一座並小
木根神社　田守神社
比地神社　大村神社
比々岐神社　比自岐神社
依那古神社　猪田神社
乎美禰神社　高瀨神社
坂戸神社
名張郡二座並小
名居神社　宇流富志禰神社
●伊勢國小二百三十五座
度會郡小四十四座
朝熊神社　蚊野神社
鴨神社　狹田國生神社
田乃家神社　草名伎神社
園相神社　礒神社
多伎原神社　月夜見神社

曾禰神社　泉井上神社
阿理莫神社　山直神社
矢代寸神社二座　穗椋神社
和泉神社　楠本神社
淡路神社　意賀美神社
波多神社　積川神社五座鍬
丸笠神社　舊府神社鍬
聖神社鍬

日根郡十座並小

男神社二座　神前神社
火走神社　日根神社靫鍬
加支多神社靫鍬　波太神社
國玉神社　意賀美神社
比賣神社鍬

●攝津國小十九座

住吉郡小十二座

草津大歳神社靫鍬　神須牟地神社靫鍬
楯原神社　須牟地曾禰神社
止杼侶支比賣命神社　赤留比賣命神社
天水分豐浦命神社　努能太比賣命神社
大海神社二座元津守安久神　多米神社
船玉神社

東生郡小一座

阿遲速雄神社

島上郡三座並小

阿々刀神社　野身神社
神服神社

島下郡小十二座

天石門別神社　須久久神社二座靫鍬
阿爲神社靫鍬　井於神社靫鍬
走落神社靫鍬　佐和良義神社
幣久良神社靫鍬　牟禮神社
三島鴨神社　溝咋神社靫鍬
太田神社靫鍬

豐島郡小三座

爲那都比古神社二座
細川神社

河邊郡七座並小

伊佐具神社靫鍬　高賣布神社
鴨神社　伊居太神社

若江郡小廿二座
坂合神社二座　矢作神社
若江鏡神社　御野縣主神社二座靫鍬
石田神社三座　川俣神社靫鍬
都留美島神社鍬　長柄神社鍬
意伎部神社　彌刀神社
宇婆神社　澁川神社
栗栖神社　加津良神社
仲村神社
澁川郡六座並小
鴨高田神社　横野神社
波牟許曾神社　路部神社
許麻神社　都留彌神社
志紀郡小八座
長野神社鍬　黑田神社
志疑神社
樟本神社三座靫鍬　伴林氏神社靫鍬
辛國神社
丹比郡小八座
丹比神社靫鍬　阿麻美許曾神社靫鍬

大津神社三座靫鍬　酒屋神社
櫟本神社靫鍬　田坐神社
●和泉國小六十一座
大鳥郡小廿三座
山井神社靫鍬　大鳥神社靫鍬
美多彌神社　押別神社
生國神社靫鍬　火雷神社
石津太社神社　等乃伎神社靫鍬
蜂田神社鍬　陶荒田神社二座
國神社　鴨田神社
高石神社　大鳥美波比神社
多治速比賣命神社　大鳥井瀨神社
大鳥濱神社鍬
坂上神社　開口神社
櫻井神社　大歲神社鍬
日部神社
和泉郡廿八座並小
男乃宇刀神社二座　博多神社
夜疑神社　泉穴神社二座
兵主神社　粟神社

山邊郡小六座

白堤神社　夜都伎神社

祝田神社　石上市神社

下部神社　出雲建雄神社

●河內國小九十座並官幣

石川郡九座並小　咸古神社靫鍬

科長神社　建水分神社

大祁於賀美神社　美具久留御玉神社

佐備神社　咸古佐備神社

壹須何神社

鴨習太神社

古市郡二座並小

利鷹神社　高屋神社

安宿郡小二座

伯太彥神社鍬　伯太姫神社

大縣郡十一座並小

天湯川田神社　宿奈川田神社

金山孫神社　金山孫女神社

鐸比古神社　鐸比賣神社

大狛神社　若倭彥命神社

若倭姫命神社鍬　石神社

常世岐姫神社

高安郡小六座

都夫久美神社　玉祖神社

御祖神社　鴨神社

佐麻多度神社　春日戶社坐御子神社

河內郡小六座

津原神社　梶無神社鍬

大津神社　栗原神社鍬

石切劔箭命神社二座

讃良郡小五座

須波麻神社靫鍬　御机神社

津桙神社　高宮大杜祖神社

國中神社

茨田郡五座並小

堤根神社　津島部神社靫鍬

細屋神社鍬　高瀬神社

意賀美神社

交野郡二座並小

片野神社靫鍬　久須々美神社鍬

宇陀郡小十六座

阿紀神社靫鍬　門僕神社靫鍬

丹生神社靫鍬　御杖神社

椋下神社靫　高角神社二座

八咫烏神社靫鍬　味坂比賣命神社

御井神社　岡田小秦命神社

神御子美牟須比命神社

櫻實神社　劒主神社

室生龍穴神社　都賀那木神社

城上郡小二十座

狹井坐大神荒魂神社五座靫鍬

等彌神社　殖栗神社

水口神社　桑内神社二座靫鍬

秉田神社二座靫鍬　宇太依田神社

玉烈神社　伊射奈岐神社

綱越神社　稔代神社

穴師大兵主神社

若櫻神社　堝倉神社

城下郡小十四座

千代神社　岐多志太神社二座靫鍬

倭恩智神社靫鍬　服部神社二座靫鍬

比賣久波神社靫鍬　富都神社靫鍬

糸井神社鍬　村屋神社二座

鏡作伊多神社　鏡作麻氣神社

久須々美神社

高市郡小廿一座

巨勢山坐石椋孫神社　鷺栖神社靫

治田神社靫鍬　加夜奈留美命神社

飛鳥川上坐宇須多伎比賣命神社

東大谷日女命神社　呉津孫神社

氣都和既神社　大歳神社二座

波多神社靫鍬　御歳神社靫鍬

於美阿志神社　鳥坂神社靫鍬

瀧本神社　許世都比古命神社

天津石門別神社　久米御縣神社三座

十市郡小八座

竹田神社　坂門神社

畝尾都多本神社靫鍬　皇子神命神社

姫皇子命神社　小杜神命神社

屋就神命神社已上四神大社皇子神　下居神社

奈良豆比古神社靫鍬　高橋神社
神波多神社鍬　宅布世神社
太和日向神社靫鍬　春日神社
賣太神社　島田神社
赤穂神社　御前社原石立命神社
天乃石立神社　五百立神社
天乃石吸神社
添下郡小六座
菅田比賣神社二座靫鍬　佐紀神社
菅原神社　登彌神社
菅田神社
平群郡小八座
龍田比古龍田比女神社二社
久度神社　猪上神社
船山神社　御櫛神社
神岳神社　雲甘寺坐楢本神社
廣瀬郡小四座
讃岐神社　櫛玉比女命神社
穂雷命神社　於神社鍬
葛上郡小五座

多太神社鍬　長柄神社靫鍬
大穴持神社　葛木大重神社
大倉比賣神社
葛下郡小五座
深溝神社　火幡神社名神大月次新嘗
志都美神社　伊射奈岐神社
當麻都比古社二座
忍海郡小一座
爲志神社
宇智郡十一座並小
宇智神社　阿陀比賣神社
荒木神社　丹生川神社
二見神社　宮前霹靂神社
火雷神社　高天岸野神社
落杣神社鍬　高天山佐太雄神社鍬
一尾背神社
吉野郡小五座
高桙神社鍬　川上鹿鹽神社鍬
伊波多神社　波寶神社鍬
波比賣神社

向神社　茨田神社
石井神社　神川神社
久我神社　簀原神社
入野神社　神足神社
葛野郡小六座
堕川神社　阿刀神社
深川神社　堕川御上神社
櫟谷神社
愛宕郡小十三座
出雲高野神社　賀茂山口神社
賀茂波爾神社　小野神社二座鍬靫
久我神社　末刀神社
須波神社　鴨岡本神社
伊多神社　太田神社
大柴神社　高橋神社
紀伊郡小五座
御諸神社　大椋神社
飛鳥田神社一名柿本社　眞幡寸神社二座
宇治郡小五座
宇治神社二座　天穗日命神社

日向神社　宇治彼方神社鍬靫
久世郡小十座
荒見神社　雙栗神社三座
水度神社三座鍬靫　且椋神社
伊勢田神社三座鍬靫　巨椋神社
室城神社
綴喜郡小十一座
朱智神社　咋岡神社鍬靫
高神社鍬靫　內神社二座
粟神社　佐牙乃神社鍬靫
酒屋神社　甘南備神社
天神社　地祇神社
相樂郡小二座
綺原坐健伊那大比賣神社
相樂神社
●大和國小一百五十八座並官幣
添上郡小廿八座
鳴雷神社　率川坐大神御子神社三座
狹岡神社八座　率川阿波神社
穴次神社　和爾下神社二座

天長二年十二月廿六日符偁承二前之例一諸國小社或置レ祝無二禰宜一或禰宜祝並置舊例紛謬准據無レ定加以或國獨置二女祝一永主二其祭一左大臣冬嗣宣旨自今以後禰宜祝並置社者以レ女爲二禰宜一但先置者令レ終二其身一者諸國依レ格遵來年久而太政官齊衡三年四月二日符偁得二神祇官解一偁檢二案內一住吉平岡鹿島香取等神主幷祝禰宜皆是把レ笏自餘神社未レ預二此例一祭祀之日拱レ手從レ事望請三位已上神社神主幷祝禰宜等同預二把笏一以增二神威一謹請二官裁一者右大臣宣奉レ勅入色者依レ請白丁者不レ在二此限一者如今諸國神社其數巨多國司偏稱二靈驗一請二增爵位一二三年間或叙二三位以上一因レ茲諸國雜色人等皆補二禰宜祝一莫レ非二把笏一差使二之一人職此之由熟尋二物情一諸社有レ祝專主二祭事一至二于禰宜一有レ職無レ務伏望除下非二先置社一之外上新叙二三位已上一神社禰宜依二天長二年十二月廿六日符一停二把笏一以レ女補任然則於レ公有レ益於レ社無レ損者中納言兼左近衛大將從三位藤原朝臣基經宣奉レ勅依レ請

貞觀十年六月廿八日

延喜式神名帳云　小二千六百四十座

四百三十三座 並預二祈年案下官幣一

二千二百七座 並預二祈年國幣一

●宮中神

大膳職坐神三座 並小

御食津神社　火雷神社

高倍神社

造酒司坐神六座 小二座

酒殿神社二座 並小

酒彌豆男神　酒彌豆女神

主水司坐神一座 小

鳴雷神社

●京中坐神

左京四條坐神一座

隼神社

●畿內神

●山城國小六十九座

乙訓郡

與杼神社　大井神社

石作神社　走田神社

御谷神社　國中神社

古今要覽稿卷第八

●神祇部

小社

小社といふに四つあり裔神をいふあり勸請の神をいふあり臣下及ひ諸蕃の神をいふありその裔神をいふは大和國高市郡飛鳥神を大社としその御子神賀夜奈留美神宇須多岐比賣神を小社とするにて知へし（類聚三代格）また外にうつしまつれるものは大社の神といへともみな小社なり御食津神神祇官の西院にましますす時は大にして大膳職にうつしまつれる時は小なり（神名帳）火雷神山城國乙訓郡にましますす時は名神大社にして大膳職及ひ大和上野なとにうつし祀れる時は小なり（同上）その臣下の神をいふは山城國宇治郡宇治神社は宇治宿禰の祖神にして饒速日命六世の孫伊香我色雄命をまつる伊香我色雄命は崇神天皇に仕へし人なり（日本書紀）また河内國志紀郡伴林氏神社は天押日命の後御物宿禰の祖神なれは宇治神社と同しく人臣の神にして共に小社なりその諸蕃の神をいふは造酒司に座す神六座の內大宮賣神は大にして酒彌豆男酒彌豆女神は小なり大宮賣神は大年神の御子酒彌豆男酒彌豆女神は韓國より參來し兄曾々保利弟曾々保利をまつれはなり（姓氏錄酒部公の注にみゆ）筑前國怡土郡志登神社は高麗國日桙之裔五十跐手をまつり豐前國田川郡辛國息長大姬大目命神は新羅國の神なれは共に小社なり（二社の祭神は其社の緣起にみゆ）さてこの小社の神をまつらるゝには官幣を案下に奠るゝなり（四時祭式）社の數凡二千六百四十座ありその內四百三十三座は祈年祭の時官幣を奉られ二千二百七座は國司のまつる所なり然るに從五位より正五位までの神を小社といふは（造殿儀式）さらに國史の神位とあはねはうけかたし

法曹至要抄云衞禁律云闌二入大社門一者徒一年中社小社各減二一等一案レ之稱二大社一者伊勢大神宮八幡宮也中社者賀茂住吉社之類也自餘小社也

類聚三代格云太政官符應下以二大社封戶一修中理小社上事云々貞觀十六年六月廿八日（全文大社の條に出す）

太政官符

應三以レ女爲二禰宜一事　右撰格所二起請一偁太政官去

社㆒以㆓從四位以上㆒爲㆓中社㆒以㆓從五位以下㆒爲㆓小社㆒といへれと此帳中に中といふものなく國史の神位にも合されはこゝにとらす（按に藤原信景か神名帳集說を引しは未しき說なり造殿儀式をは見さりしにやかつ神社の大小とあるは殿舍の制造をよひ幣を案上におく謂のみにあらす神名帳に大四百九十二座とありて四時祭式に三百四座案上官幣とあり餘の百八十八座はこの定めにあらされは大社といへともことごとく案上に幣をおかるゝにもあらさるなり）

とせられんには別に大社の宣旨あるへきいはれなししかるに山城國貴布禰社は弘仁十年五月大社に列すその神位を考ふるに弘仁六年從五位下に叙し承和十年十二月正五位下貞觀元年正月正五位上より從四位下同十五年五月正四位下にのほり給へりこれみな正史に載する所にして疑ひなきものなりこれによれは弘仁十年は五位の社なるに大社にすゝまし給ふは此官符の制度にたかへることとまたあやしむへし又この符中に大社正殿一宇高一丈二尺とありしかるに伊勢皇太神宮は並びなき大社なれはその正殿高さ一丈二の制なるへきに延暦二十三年の儀式帳に正殿壹區高壹丈壹尺とあり寶龜二年二月に定められし處の制度はや延暦の時に改られし事は有ましきにや

神祇寶典序云文武帝御宇淡海公奉レ詔撰レ令而神祇在レ中然後大祀及大社中社小社位階勳等各有レ差（按に神祇令には大社中社小社のこと更に見えす大祀中祀はおのつから別なりたゝし公式令に大社陵號之類並闕字といひ衞禁律に大社中社小社の目あるを以て文武の御時よりと云なるへし）

伊豆志稿云寶龜初諸國ニ官符ヲ下シ大社中社小社ノ制ヲ定メラル延喜式ニハ但大小二等ニ分ツ是ソノ神德及ヒ爵位ノ貴賤ニ因テ預祭ニ多少アリ官幣ニ上下有リ以テ大小ノ等ヲ分ツ悉クハ延喜式ニ見ユ必スシモ其祠ノ大小ニヨラサルカ如シト雖モ爵位貴キ神ハ位田多ク其營造官費ニ出ル多カルヘケレハ其祠モ亦必ス大ナリ本州大社五坐今唯三島明神ノミ其名ニ稱フヘシ村々ノ土神祠ハ茅屋ナカラ大カタハ本社幣殿或ハ廳屋アレ𪜈其他ハ至小ノ叢祠數フルニ足サルモノヽ如シ而ルニ今悉ク擧テ曰廣瀨神社白鳥明神ナト打聞タル處ハ何トヤラムコト〳〵シク大社ノヤウニ思ハルレトモ諺ニ聞テ千金見テ一文ト云カ如クナレハ名ニ因テ實ヲ失ハンヿヲ恐ル（按に大社中社小社の制寶龜の時にさたまりしと云は造殿儀式によりし誤なり）

神名帳攷證再考（度會正身神主）云神社大小とあるは殿舍の制造社域の廣狹に付て云詞にて大社は幣を案上に奠てまつり小社は案下におくの尊卑次第あり蓋是は神德の尊卑にて神位を以て云にあらさる故上下とはせする猶預二月次相嘗祭一あり靫鍬を供するあり名神と記するあり皆神德の次第なり藤信景が尾張國神名帳集說に寶龜明主初定二諸社大中小一以二正三位以上一爲二大

正一位正三位以上爲大社
從三位從四位以上爲中社
正五位從五位以上爲小社

一大社四至限ニ九町一
三間檜皮葺正殿一宇（高一丈二尺在板敷戸一本）堅魚木八丸（長五尺徑九寸）千木四支（長一丈三尺）瑞垣一重方二丈（高七尺）內外鳥居二基（內一本高九尺口徑八寸外一本高一丈口徑九寸）三間檜皮葺幣殿一宇（高一丈一尺在板敷戸一本）五間草葺拜殿一宇（高八尺）五間板葺直會殿二宇（高八尺）萱葺板倉二宇三間草葺屋二宇（在戸二本）左右板葺廊二宇（各高七尺）五間外舍二宇（高八尺）五間廐二宇

一中社四至限ニ八町一
三間檜皮葺正殿一宇（高一丈一尺在板敷戸一本）堅魚木六丸（長四尺徑七寸）千木四支（長一丈）瑞垣一重（方二丈五尺高七尺）珠垣一重（方三丈五尺高八尺）內外鳥居二基（高八尺徑七寸）三間板葺幣殿一宇（高七尺戸一本）三間板葺拜殿一宇（高七尺）五間外舍二宇五間板葺舞殿一宇（高七尺）三間板葺直會屋一宇（高七尺）

一少社四至限ニ四町一
二間板葺正殿一宇（高八尺在板敷戸一本）堅魚木四丸（長四尺徑七寸）千木四支（高八尺）瑞垣一重（方二丈高五尺）鳥居一基（高六尺徑六寸）三間草葺拜殿一宇（高七尺）三間板葺舞殿一宇（高七尺）五間雜舍二宇（同尺）

右被ニ左大臣宣一稱奉レ勅諸國神社正殿雜舍並四至町數所レ定如レ件宜下仰ニ在國司一以ニ正稅物數一令中造進上自今以後不レ可ニ違失一若有ニ破損一者應レ令ニ社司修造一無ニ其勤一者科ニ大祓一解ニ却見任一官宜ニ承知依レ宣行レ之符到奉行寶龜二年二月十三日正四位上行左大辨兼右兵衞督藤原朝臣（百川）左大史外正六位上阿陪志斐連（東人）

按に此官符續日本紀に載られす北畠准后何によられしやいまた考されともいふへきことありそのゆゑは藤原朝臣百川はしめ雄田麻呂といふ寶龜元年八月四日庚巳從四位上藤原朝臣雄田麻呂授ニ正四位下五年正月丁未正四位上一とあり然る時は二年二月の比は正四位下なりまた二年三月庚午正四位下藤原朝臣百川〔本名雄田麻呂〕爲ニ大宰帥一右大弁內竪大輔右兵衞督越前守並如レ故といふこゝに左大弁とあるは右大弁の誤なるへしことに內竪大輔越前守をは何故に落せしにやあやしむへしゑかのみならす正一位正三位以上云々とかけるも語をなさすかつ正三位以上を大社とし從四位以上を中社とし從五位以上を小社

御笠郡

筑紫神社（名神大）　竈門神社（名神大）

下座郡

美奈宜神社三座（名神大）

●筑後國四座（大二座）

三井郡

高良玉垂命神社（名神大）　豐比咩神社（名神大）

●豐前國六座（大三座）

宇佐郡

八幡大菩薩宇佐宮（名神大）　比賣神社（名神大）

大帶姬廟神社（名神大）

●豐後國六座（大一座）

大野郡

西寒多神社（大）

●肥前國四座（大一座）

松浦郡

田島坐神社（名神大）

●肥後國四座（大一座）

阿蘇郡

健磐龍命神社（名神大）

●大隅國五座（大一座）

桑原郡

鹿兒島神社（大）

●壹岐島廿四座（大七座）

壹岐郡

住吉神社（名神大）　兵主神社（名神大）

月讀神社（名神大）　中津神社（名神大）

石田郡

天手長男神社（名神大）　天手長比賣神社（名神大）

●對馬島廿九座（大六座）

上縣郡

和多都美神社（名神大）　和多都美御子神社（名神大）

下縣郡

高御魂神社（名神大）　和多都美神社（名神大）

太祝詞神社（名神大）　住吉神社（名神大）

○正誤

造殿儀式（北畠准后親房卿）云大中小社差別事

太政官符　神祇官幷五畿七道諸國司

應㆔早定㆓劃天下諸社大中小神殿雜舍瑞垣珠垣鳥井並四至內地㆒町數事

津名郡
淡路伊佐奈伎神社名神大
三原郡
大和國魂神社名神大
●阿波國五十座大三座
板野郡
大麻比古神社名神大
麻殖郡
忌部神社名神大月次新嘗或號麻殖神或號天日鷲神
名方郡
天石門別八倉比賣神社大月次新嘗
●讃岐國廿四座大三座
寒川郡
田村神社名神大　城山神社名神大
苅田郡
粟井神社名神大
●伊豫國廿四座大七座
宇摩郡
村山神社名神大
新居郡

伊曾乃神社名神大
越智郡
大山積神社名神大　姫坂神社名神大
多伎神社名神大
野間郡
野間神社名神大
溫泉郡
阿沼美神社名神大
伊豫郡
伊豫神社名神大
●土佐國廿一座大一座
土佐郡
都佐坐神社大
●筑前國十九座大十六座
宗像郡
宗像神社三座並名神大　織幡神社三座名神大
那珂郡
住吉神社三座並名神大　八幡大菩薩筥崎宮一座大
糟屋郡
志加海神社三座並名神大

穩地郡
伊勢命神社名神大　水若酢命神社名神大
●播磨國五十座大七大座
明石郡
海神社三座名神大月次新嘗
揖保郡
粒坐天照神社名神大　中臣印達神社名神大
家島神社名神大
宍粟郡
伊和坐大名持御魂神社名神大
●美作國十一座大一座
苫東郡
中山神社名神大
●備前國廿六座大一座
邑久郡
安仁神社名神大
●備中國十八座大一座
賀夜郡
吉備津彥神社名神大
●安藝國三座並大

佐伯郡
伊都伎島神社名神大　多家神社名神大
●長門國五座大三座
豐浦郡
住吉坐荒御魂神社三座並名神大
●紀伊國卅一座大十三座
伊都郡
丹生都比女神社名神大月次新嘗
名草郡
日前神社名神大月次相嘗新嘗　國懸神社名神大月次相嘗新嘗
伊太祁曾神社名神大月次相嘗新嘗
大屋都比賣神社名神大月次新嘗
都麻都比賣神社名神大月次新嘗
鳴神社名神大月次相嘗新嘗　伊達神社名神大
靜火神社名神大
在田郡
須佐神社名神大月次新嘗
牟婁郡
熊野早玉神社大　熊野坐神社名神大
●淡路國十三座大二座

●越後國五十六座 大一座

蒲原郡

伊夜比古神社 名神大

●丹波國七十一座 大五座

桑田郡

出雲神社 名神大　小川月神社 名神大

船井郡

麻氣神社 名神大

多紀郡

櫛石窓神社二座 並名神大

●丹後國六十五座 大七座

加佐郡

大川神社 名神大

與謝郡

籠神社 名神大　大蟲神社 名神大

小蟲神社 名神大

丹波郡

大宮賣神社二座 名神大

●但馬國一百卅一座 大十八座

朝來郡

栗鹿神社 名神大

養父郡

夜夫坐神社五座 名神大二座　水谷神社 名神大

出石郡

伊豆志坐神社八座 並名神大　御出石神社 名神大

氣多郡

山神社 名神大　戸神社 名神大

雷神社 名神大　獨椒神 名神大

城崎郡

海神社 名神大

●出雲國一百八十七座 大二座

意宇郡

熊野坐神社 名神大

出雲郡

杵築大社 名神大

●隱岐國十六座 大四座

知夫郡

由良比女神社 名神大元名和多須神

海部郡

宇受加命神社 名神大

●下野國十一座大一座
河内郡
二荒山神社名神大
●陸奥國一百座大十五座
白河郡
都々古和氣神社名神大
苅田郡
苅田嶺神社名神大
宮城郡
志波彥神社名神大　鼻節神社名神大
色麻郡
伊達神社
信夫郡
東屋治神社名神大
牡鹿郡
零羊埼神社名神大　拜幣志神社名神大
桃生郡
計仙麻大島神社名神大　多珂神社名神大
栗原郡
志波姫神社名神大
安積郡
宇奈已呂和氣神社名神大
柴田郡
大高山神社名神大　子眉嶺神社名神大
●出羽國九座大二座
飽海郡
大物忌神社名神大　月山神社名神大
●若狹國四十二座大三座
遠敷郡
若狹比古神社二座名神大
三方郡
宇波西神社名神大月次新嘗
●越前國一百廿六座大八座
敦賀郡
氣比神社七座並名神大
丹生郡
大蟲神社名神大
●越中國卅四座大一座
射水郡
射水神社名神大

吉田神社名神大
酒烈礒前藥師菩薩神社名神大
新治郡
稻田神社名神大
●近江國大十三座
滋賀郡
小野神社二座名神大
日吉神社名神大
栗太郡
佐久奈度神社名神大
建部神社名神大
甲賀郡
石部鹿鹽上神社
川田神社並名神大月次新嘗
野洲郡
御上神社名神大月次新嘗
兵主神社名神大
蒲生郡
奥津島神社名神大
伊香郡
伊香具神社名神大
高島郡
水尾神社並名神大月次新嘗
●美濃國卅九座大一座

不破郡
仲山金山彥神社名神大
●信濃國四十八座大七座
諏訪郡
南方刀美神社名神大
安曇郡
穗高神社名神大
更級郡
武水別神社名神大
水內郡
健御名方富命彥神別神社名神大
小縣郡
生島足島神社二座名神大
●上野國十二座大三座
甘樂郡
貫前神社名神大
群馬郡
伊加保神社名神大
勢多郡
赤城神社名神大

蓁原郡
敬滿神社名神大
●駿河國廿二座大一座
盧原郡
淺間神社名神大
●伊豆國九十二座大五座
賀茂郡
伊豆三島神社名神大月次新嘗　伊古奈比咩命神社名神大
物忌奈命神社名神大　阿波神社名神大
田方郡
楊原神社名神大
●甲斐國廿座大一座
八代郡
淺間神社名神大
●相模國十三座大一座
高座郡
寒川神社名神大
●武藏國四十四座大二座
足立郡
氷川神社名神大月次新嘗

兒玉郡
金佐奈神社名神大
●安房國六座大二座
安房郡
安房坐神社名神大月次新嘗　后神天比理乃咩命神社大元名洲神
●上總國五座大一座
埴生郡
玉前神社名神大
●下總國十一座大一座
香取郡
香取神宮名神大月次新嘗
●常陸國廿八座大七座
鹿島郡
鹿島神宮名神大月次新嘗
大洗磯前藥師菩薩明神社名神大
久慈郡
靜神社名神大
筑波郡
筑波山神社二座一名神大一小
那賀郡

中臣須牟地神社大月次新嘗　生根神社大月次新嘗

東生郡

難波坐生國國魂神社二座並名神大月次相嘗新嘗

比賣許曾神社名神大月次相嘗新嘗

西成郡

坐摩神社大月次新嘗

島下郡

新屋坐天照御魂神社三座並名神大月次新嘗就中天照御魂神一座預ニ相嘗祭一

伊射奈岐神社二座並大月次新嘗

豐島郡

垂水神社名神大月次新嘗　阿比太神社大月次新嘗

武庫郡

廣田神社名神大月次相嘗新嘗　伊和志豆神社大月次新嘗

八部郡

生田神社名神大月次相嘗新嘗　長田神社名神大月次相嘗神嘗

有馬郡

湯泉神社大月次新嘗

●伊賀國廿五座大一座

阿拜郡

敢國神社大

●伊勢國二百五十三座大十八座

度會郡

太神宮三座相殿坐神二座並大預月次新嘗等祭

荒祭宮大月次新嘗　瀧原宮大月次新嘗

伊佐奈岐宮二座伊佐奈彌命一座並大月次新嘗

月讀宮二座荒御魂命一座並大月次新嘗　度會宮四尾相殿坐神三座並大月次新嘗

高宮大月次新嘗

桑名郡

多度神社名神大

●尾張國一百廿一座大八座

中島郡

大神神社名神大　眞墨田神社名神大

丹羽郡

大縣神社名神大

愛知郡

熱田神社名神大　日割御子神社名神大

孫若御子神社名神大　高座結御子神社名神大

●遠江國六十二座大二座

濱名郡

角避比古神社名神大

輕樹村坐神社二座並大月次新嘗　天高市神社大月次新嘗
太玉命神社四座並大月次新嘗　櫛玉命神社四座並大月次新嘗
川俣神社三座並大月次新嘗　波多甕井神社大月次新嘗
氣吹雷響雷吉野大國栖御魂神社二座並名神大月次新嘗

十市郡

多坐彌志理都比古神社二座並名神大月次相嘗新嘗
目原坐高御魂神社並大月次新嘗
石寸山口神社大月次新嘗　畝尾坐健土安神社大月次新嘗
耳成山口神社大月次新嘗　子部神社二座並大月次新嘗
天香山坐櫛眞命神社大月次新嘗

山邊郡

大和坐大國魂神社三座並名神大月次相嘗新嘗
石上坐布留御魂神社大月次相嘗新嘗
都祁水分神社大月次新嘗　山邊御縣坐神社大月次新嘗
都祁山口神社大月次新嘗

●河内國一百十三座大廿三座

安宿郡

杜本神社二座並名神大月次新嘗　飛鳥戸神社名神大月次新嘗

高安郡

恩智神社二座並名神大月次相嘗新嘗
天照大神高座神社二座並大月次新嘗元號春日戸神

河内郡

枚岡神社四座並名神大月次相嘗新嘗

讃良郡

高宮神社大月次新嘗

若江郡

弓削神社二座並大月次相嘗新嘗

志紀郡

志貴縣主神社大月次新嘗　志紀長吉神社二座並大月次新嘗
當宗神社三座並大月次新嘗

丹比郡

狹山堤神社大月次新嘗　狹山神社大月次新嘗
菅生神社大月次新嘗

●和泉國六十二座大一座

大鳥郡

大鳥神社名神大月次新嘗

●攝津國七十五座大廿六座

住吉郡

住吉座神社四座並名神大月次相嘗新嘗
大依羅神社四座並名神大月次相嘗新嘗

廣瀨坐和加宇加賣命神社名神大月次新嘗

葛上郡

鴨都波八重事代主命神社二座名神大月次相嘗新嘗

葛木坐一言主神社名神大月次新嘗　葛木水分神社名神大月次新嘗

巨勢山口神社大月次新嘗　高天彦神社名神大月次相嘗新嘗

鴨山口神社大月次新嘗

高鴨阿治須岐託彦根神社四座並名神大月次相嘗新嘗

葛下郡

葛木倭文坐天羽雷命神社大月次新嘗

片岡坐神社名神大月次新嘗　長尾神社大月次新嘗

石園坐多久虫玉神社二座並大月次新嘗

調田坐一事尼古神社大月次新嘗　金村神社大月次新嘗

葛木御縣神社大月次新嘗　大幡神社名神大月次新嘗

大坂山口神社大月次新嘗　葛木二上神社大月次新嘗

忍海郡

葛木坐火雷神社二座並名神大月次相嘗新嘗

吉野郡

吉野水分神社大月次新嘗　吉野山口神社大月次新嘗

大名持神社名神大月次新嘗　丹生川上神社名神大月次新嘗

金峰神社名神大月次新嘗

宇陀郡

宇太水分神社大月次新嘗

城上郡

大神大物主神社名神大月次相嘗新嘗　神坐日向神社大月次新嘗

穴師坐兵主神社名神大月次相嘗新嘗

卷向坐若御魂神社大月次相嘗新嘗

志貴御縣坐神社大月次新嘗　忍坂坐生根神社大月次新嘗

長谷山口坐神社大月次新嘗　忍坂山口坐神社大月次新嘗

高屋安倍神社三座並大月次新嘗　宗像神社三座並名神大月次

城下郡

村屋坐彌富都比賣神社大月次相嘗新嘗

池坐朝霧黃幡比賣神社大月次相嘗新嘗

鏡作坐天照御魂神社大月次新嘗

高市郡

高市御縣坐鴨事代主神社大月次新嘗

飛鳥坐神社四座並名神大月次相嘗新嘗

宗我坐宗我都比古神社二座並大月次新嘗

飛鳥山口神社大月次新嘗　甘樫坐神社四座並大月次新嘗

稻代坐神社大月次新嘗　牟佐坐神社大月次新嘗

畝火山口坐神社大月次新嘗　高市御縣神社名神大月次新嘗

葛野坐月讀神社 名神大月次新嘗
木島坐天照御魂神社 名神大月次相嘗新嘗
松尾神社二座 並名神大月次新嘗
梅宮坐神四座 並名神大月次新嘗
天津石門別稚姫神社 名神大月次新嘗
伴氏神社 大月次新嘗　大酒神社 元名大辟神

愛宕郡

加茂別雷神社 亦若雷名神大月次相嘗新嘗
出雲井於神社 大月次相嘗新嘗
加茂御祖神社二座 並名神大月次相嘗新嘗
鴨川合坐小社宅神社 名神大月次相嘗新嘗
貴布禰神社 名神大月次新嘗　三井神社 名神大月次新嘗
片山御子神社 大月次相嘗新嘗

紀伊郡

稻荷神三社 並名神大月次新嘗　飛鳥田神社 一名柿本社

宇治郡

許波多神社三座 並大月次新嘗　山科神社二座 並大月次新嘗

久世郡

石田神社 大月次新嘗

綴喜郡

樺井月神社 大月次新嘗　月讀神社 大月次新嘗
棚倉孫神社 大月次新嘗

相樂郡

祝園神社 大月次新嘗
和伎坐天乃夫支賣神社 大月次新嘗
岡田鴨神社 大月次新嘗　岡田國神社 大月次新嘗

●大和國二百八十六座 大一百廿八座

添上郡

宇奈太理坐高御魂神社 大月次相嘗新嘗
和尒坐赤坂比古神社 大月次新嘗
太祝詞神社 大月次新嘗　春日祭神四座 並名神大月次新嘗

添下郡

矢田坐久志玉比古神社二座 並大月次新嘗
添御縣坐神社 大月次新嘗　伊射奈岐神社 大月次新嘗

平群郡

龍田坐天御柱國御柱神社二座 並名神大月次新嘗
往馬坐伊古麻都比古神社二座 並大月次新嘗
平群石床神社 大月次新嘗　伊古麻山口神社 大月次新嘗
平群神社五座 並大月次新嘗　平群坐紀氏神社 名神大月次新嘗

廣瀬郡

宮大夫藤原朝臣時平宣奉　勅、自今以後京内諸國社所帶諸司殊加檢察、畿内外國當國官長相共監臨祭禮之日必致齋敬、若祭事不愼監察有怠者官司處之重責、神主禰宜祝部等科祓解職一如貞觀十年六月廿八日格、曾不寛宥、寛平五年三月二日

二十二社註式云日本後紀 弘仁十年五月貴布禰爲大社

年中行事秘抄云 松尾祭事舊紀云大寶元年 秦都理始造立神殿、立河紀君齋子、供奉天平二年預大社、者

又云川合神件神社立始祭祀之由無所見、但依天安二年八月七日太政官符預大社、

延喜式神名帳云大四百九十二座

三百四座並預祈年月次新嘗等祭之案上官幣、就中七十一座預相嘗祭、

一百八十八座並預祈年國幣、

神祇官西院坐御巫等祭神廿三座並大月次新嘗

御巫祭神八座並大月次新嘗中宮東宮御巫亦同

神産日神　高御産日神

玉積産日神　生産日神

足産日神　大宮賣神

御食津神　事代主神

座摩巫祭神五座並大月次新嘗

生井神　福井神社

綱長井神　波比祇神

阿須波神

御門巫祭神八座並大月次新嘗

櫛石窓神四面門各一座　豐石窓神四面門各一座

生島巫祭神二座並大月次新嘗

生島神　足島神

宮内省坐神三座並名神大月次新嘗

園神社　韓神社二座

造酒司坐神六座大四座

大宮賣神社四座並大月次新嘗

山城國一百廿二座大五十三座

乙訓郡

羽束師坐高御産日神社大月次新嘗

乙訓坐火雷神社名神大月次新嘗　大歳神社大月次新嘗

小倉神社大月次新嘗

白玉手祭來酒解神社名神大月次新嘗

葛野郡

神にましますこれらをさして中社と稱せられんには諸臣下の神はみな小社と稱せられしなるへしされはもと大中小の制度は皇親の親疎貴賤より定められしものにして位階及ひ社の大小にはあつからさることとゝろへし

古語拾遺曰至二大寶年中一初有二記文一神祇之簿猶無二明案一望秩之禮未レ制二其式一至二天平年中一勘二造神帳一中臣專レ權任レ意取捨有レ由者小祀皆列先レ緣者大社猶廢

こゝに所謂大社小祀は大小のことく聞ゆれともすてに以前に定められし律令によりて考ふれはこれはたゝ遠國に散存する皇親の社をさしていふことゝなるへし

類聚三代格云太政官符應下以二大社封戶一修中理小社上事　右撰格所二起請一偁太政官去弘仁十三年四月四日下二大和國一符偁得二彼國解一偁檢二案內一太政官去弘仁三年五月三日符偁有レ封之社令下神戶百姓修中造無レ封之社上令下禰宜祝部等永加中修理上國司不レ存檢校有下致二破壞一者上遷替之日拘二其解由一者國依二符旨一行來尙矣而今有レ封神社已有二治力一無封神社全無二修料一仍貪幣祝部無レ由二修社一吏加二檢責一各規二遁隱一推二其苦跡一誠有二所以一仍檢二神苗裔本枝相分一其祖神則貴而有レ封其裔神則微而無レ封假令飛鳥神之裔天太玉臼瀧賀屋島比女四社此等類是也望請以二無封苗裔之神一分二付有封始祖之社一則令下有封神主鎭中領無封祝部上然則社有二修掃之勤一國無二祟咎之兆一者右大臣冬嗣宣奉レ勅依レ請者事施二一國一遵行有レ便伏望下二知四畿內及七道諸國一者中納言兼左近衛大將從三位藤原朝臣基經宣奉レ勅依レ請貞觀十六年六月廿八日

按に此符によりて考ふれは大和國飛鳥坐神を大社としその神の裔天太玉神臼瀧賀屋等の社を小社とせらるゝなりこれを神名帳に校するに飛鳥神四座は高市郡の名神大社にましまし〳〵別に天太玉命神社四座(並大)とありその外に賀夜奈留美神飛鳥川上坐宇須多伎比賣神社ありともに小社なりかゝれは天太玉命賀夜奈留美神宇須多伎比賣神はみな飛鳥神の裔神にましますことしるへしたゝし天太玉命は高皇產魂神の御子賀屋奈留美神は大穴持命の御子なりしかれは飛鳥神は高皇產魂神と大穴持命とを合せ祭ることとしるへく高皇產魂神大穴持命にましませは是また皇族の親神にましますか故に大社とせらし也

又曰太政官符　應下殊加二檢察一敬中禮四箇祭上事　右檢二案內一二月祈年六月十二月月次十一月新嘗祭等者國家之大事也欲レ令二歲災不レ起時令順度一預二此祭一神京畿外國大小通計五百五十八社因レ玆之特致二潔齋一愼令二祭祀一而敬惟疎簡禮非二如在一每レ至二祭日一奸濫雲集至レ獻二幣帛一老少挐攫徒有二陳設之營一曾無二神供之實一禰宜祝部須下向二神祇官一敬受中幣物上虔奉二其社一而件等人無レ致二其敬一或雇二出身代一不二自參進一或雖二躬受取一無レ心二奠祭一頑愚之輩狎二黷神禁一神靈之祟職此之由凡祭神之禮以二神主禰宜祝部一爲二其齋主一而不レ勤二職掌一疎二畧神事一非二唯神主等之怠一還又齋官不レ加二糺勘一之所レ致也中納言兼右近衛大將從三位行春

の御神なりされは神位の輕重にかゝはらすともに大とせられしなるへし坐摩巫のまつる神五座は貞觀元年正月廿七日ともに從四位上になさせ給ふ三代實錄かの造殿儀式にいはゆる從三位以上を大社といふによれはこの五座は大にあらさるへしたゝしこの五座のうち生井神福井神綱長井神はともに伊弉諾命の御子波比岐神阿須波の神は大年の神の御子なれはこれも神族につきて共に大となされしならん宮内省にまします神三座はともに素盞嗚尊の御子なれは大となさるへきこととむへなり造酒司にまします神六座のうち四座は大なり二座は小なり大四座は大宮賣神にして大年神の御子也小二座は酒彌豆男酒彌豆女の神にして大鷦鷯天皇の御代に韓國より參來し兄曾々保利弟曾々保利の事姓氏錄なれは小となるされしなるへし是らをもつて考ふるにすへて天御中主神の御裔にして高產魂神神產魂神の御末の神をすへて大社としその餘の臣神の裔を小となされしなるへし官幣を案上に奠るゝものおのつから皇祖の親屬を敬崇し給ふの故なり延喜の時にいたりて大社のかす凡四百九十二座ありそのうち三百四座は祈年月次新嘗の祭にあつかり給ひ中に就て七十一座は相嘗の祭まてあつからせ給ふその外一百八十八座は祈年の祭にのみあつからせ給ふなり

公式令云大社陵號乘輿云々右如レ此之類並闕字伊勢大神宮八幡宮の類をさす大社なり

法曹至要抄云八虐六曰大不敬名例律注云謂下毀二大社一及盜中大祀神御之物上云々賊盜律云毀二大社一者遠流

又云毀二燒神社一事賊盜律云謀レ毀二大社一者徒一年毀者遠流衞禁律大社條疏云賊盜律云毀二大社一者遠流雜律云延二燒閤內宮闕及大社一者遠流說者云故燒二大社一者遠流若贓滿二十端一處二絞刑一云案レ之稱二大社一者伊勢大神宮八幡宮之類也

又云闌二入神社一事衞禁律云闌二入大社門一者徒一年中社小社各減二三等一　案レ之稱二大社一者伊勢大神宮八幡宮也中社者賀茂住吉社之類也自餘小社也而闌入之時皆得二其罪一但中小社有レ所レ減而已　按に此に所謂大社は伊勢八幡の類といへは皇親に付て尤尊貴の神をいひしかも祖宗の神靈にましませは陵號と共に闕字するほとの神の社なり賀茂は大己貴神の妻玉依姫と御子別雷神なれは皇親といへとも祖宗の列にはましまさす住吉神は底筒男中筒男表筒男神なれはこれまた傍親にして賀茂と同列の

古今要覽稿卷第七

●神祇部

大社

大社といふに三つあり一つは伊勢皇大神宮八幡宮の類にしてかの陵號及ひ乘輿の字と共に闕字すといへるものなり（公式令法曹至要抄）これ極て皇親の尊神にましますかゆゑに大社と崇め奉る也一つは祈年月次のまつりの時官幣を案上に奠るゝ神社をいふ（延喜式）たゝし案上の幣にあつかり給ふ神はみな皇族の尊神にして臣下及諸蕃の神にあらす一つはすへて祖神を大社とし裔神を小社とす（類聚三代格）されとも山城國乙訓郡高御産日神は大社にましましてその御子神葛野郡月讀神天照御魂神は名神大社にましますまた乙訓坐火雷神社は加茂別雷神の祖神にましますに二社共に名神大社なりかつ格文に引ところの飛鳥神社は高皇産魂神にましませは祖神ゆゑに大社たりしにはあらすして卽皇族の神なるかゆゑ也ゑかるを正三位以上の神社をいふといひ（造殿儀式）あるひはその神社の營造の大小によるといひ（伊豆志稿）あるひは神の高下によりまたは千木の丈尺に別ありといふ（神道名目類聚抄）はみなうけかたし其皇祖族の神にも皇祖と傍親の別あり伊勢皇大神宮八幡宮の類は皇祖なり加茂住吉の類は傍親也されは皇祖を大社とし傍親を中社とすること（衞禁律）は大寶の時の定めにして皇親をすへて大社とせらるゝことは何の時にはしまるといふことをゑらす但天平の比より所見（年中行事秘抄）ありて延喜の時には中社といふものをのそかれて大小の二つとなされたりその延喜の時皇親の神をすへて大社となされしことは神祇館の西院にまします神八座のうち神産日神高御産日神玉積産日神生産日神足産日神は貞觀元年丁亥ともに正一位にのほり給へり大宮賣神事代主神は神位みえす御食津神は貞觀三年五月甲戌從五位下になさせ給ふ從五位下の神と正一位の神と共に並ひて大とあり（神名帳）けたし大宮賣神は大年神の御子御食津神は伊弉諾伊弉冊命の御子事代主神は大己貴命の御子なれは神族の親疎はあれとももと同しつゝき

社ト稱ス　按に明神號は勅許といふことその據をしらすかつ大神といふは伊勢八幡等の如き神をさしていふ辭にて最尊き神のことなり勅許なきは何某の大神といふは最誤なり

安齋隨筆云大明神悲華經云我滅度後於惡世中現大明神廣度衆生○大明神の號佛經より出たり卽權現と同意歟○文德實錄卷三文德天皇仁壽元年六月甲寅詔以近江國散久難度神列於明神云々此文をみれは以前より明神の號あり來りし故列於明神と云事もありしなるへし然れ共前々の國史には見えす延喜式神名帳に名神と云稱あり又公式令の詔書式の發言に明神御宇とあり（アカラカミトアメノシタシロシメスとよむ）續日本紀の宣命には顯神とあり明神と同じ總て大事の宣命には明神御宇の詞を發言とせり帝德の淸明神聖なるを自賛したまふには非す淸明神聖ならん事を欲し恭敬して宇內を統御し給ふ意なるへしされはこそアカラカミトアメノシタシロシメス云々との勅語あり是は大明神と異なり　按に大明神の稱弘仁三年走湯山緣起にみえ明神の字日本後紀にみえ宣命に明神の文字を用ひらるゝことすてに書紀に出つ

爲ニ鎭護國家ニ經ニ奏聞ニ申ニ度卅三人ニ度者毎國於ニ諸明神社ニ各遣ニ僧一人ニ令レ奉レ祈ニ願國家ニ也

熱田大神宮緣起 寛平二年 云天渟中原瀛眞人天皇朱鳥元年丙戌夏六月己巳朔戊寅卜ニ天皇御病ニ草薙劒爲レ祟卽勅ニ有司ニ還ニ置于尾張國熱田社ニ自レ爾以來始置ニ社守七員ニ並免ニ徭役ニ凡奉レ祀ニ劒神於此國ニ者總緣ニ宮酢媛與ニ建稻種命ニ也宮酢媛下世之後建レ祠崇ニ祭之ニ號ニ氷上姉子天神ニ其祠在ニ愛智郡氷上邑ニ以ニ海部氏ニ爲ニ神主ニ海部是尾張氏別姓也因レ玆以ニ熱田明神ニ爲ニ尾張氏神ニ 按に熱田社は草薙劒をもつて主とせられしはのちの事にして宮酢媛及建稻種命を相殿にまつる處なり稻種命は火明命十一代之孫尾張國造乎止與命之子とあれは皇統親戚の神にして然も當國の國神なれは神名帳に名神大とあるか正しき神品にてましますをこゝにては神を親しくさし奉るか故に熱田明神といふなり

宇都宮大明神緣起 文明年中 云天慶年中將門追罰之後正一位勳一等位記一鳥居額等是也

額文云正一位勳一等日光山大明神　凡當社之根元者稱德天皇神護景雲元年顯ニ現日光山ニ其後仁明天皇御宇承和五年戊午溫左郞麿奉レ懷ニ大明神ニ奉レ移ニ河内郡小寺峰號ニ補陀洛大明神ニ 延喜式神名帳臨時祭式名神祭等二荒山神社名神大とあるを正しとすへし

神名帳頭注云伊豫國越智郡大山祇俗稱ニ三島大明神ニ土佐國土佐郡都佐座神一宮也俗號ニ高賀茂大明神ニ 按に大明神をさして俗稱といふにあらす三島高加茂なと稱し奉るをいふなるへし

中御門宣胤卿記云永正三年八月三日云々多武峰社頭云々大織冠後花園院之御代被レ奉レ授ニ明神號ニ云々

藤森社緣起曰弘仁七年大師稻荷大明神爲ニ勸請ニ藤森天王敷地之内所望之由被レ達ニ叡聞ニ云々

○釋名

●名神 續日本紀○名は名譽高名の義にあらす郡鄕に某々名とあるとおなしもと民の名田よりいてたる言にしてその名を司とるを後に名主といふかことくその名の神にして他よりうつしまつれるものにあらさるを名神とはいふなり

●明神 日本書紀 大明神 走湯山緣起○名神の音便によりて文を互にせられたるものにして結句今の世になりては名神の稱はうせて明神の稱呼のみのこれりたゝし明神といふ文字は日本書紀續日本紀日本後紀なとに記されたるは枚擧にいとまあらすみな明神御宇倭根子天皇といつも〳〵かゝれたるは日本書紀に現爲明神御八島國天皇といひ續日本紀に現御神止大八島國所知ス皇またば現神ともかゝれたるとおなしこゝろにて神德現在の義なれは名神とは字義大きに異なりたゝしこの明神といふもなへての神をいふにはあらす孝德天皇二年三月の詔に朕總臨而御寓今我親神祖之所知とあることく皇統に親しき祖神のみをいふなれはかの名神たちをさしての給ふことなるへし神とたにいへは何の神もおなしことのごとく聞ゆれと神の内にも親疎貴賤ありて一般ならざることは名神官社大社中社小社の別あるにてしるへし宣命に明神とさゝせ給ふもの何そいやしき小社以下の神たちに及はるへけんや

○正誤

神道名目類聚抄云神宮ヲ上トシ明神是ニ次今世俗都テ諸社ヲ稱シテ何某ノ大明神ト稱スルモノハ誤ナリ明神ハ勅許ノ號ナリ勅許ナキハ何某ノ大神何某ノ神

成語をとられしなるへし

日本後紀云弘仁五年九月戊子奉ニ幣明神一報ニ豐稔一也

按に是より前七月庚午勅ニ畿內近江丹波等國一頃年旱災頻發稼苗多損國司默然百姓受レ害自今以後若有レ旱者官長潔齋自禱ニ嘉澍一務致ニ肅敬一不レ得ニ猥汚如一不レ應者乃言ニ上之一立爲ニ恒例一とあるは祈雨の祭を怠りしによりて出されし勅なり延喜臨時祭式に祈雨神八十五座と擧られたるは加茂別雷御祖松尾稻荷大神石上廣瀨龍田丹生川上牧岡恩智住吉大依羅の神等にしてみな畿內の名神なり水主樺井神の如き名神ならぬ大社もましませと大かたは名神なれは弘仁の前後に祈らるゝ所も此等の神なるへし殊に續日本紀に天平寶字七年五月庚午奉ニ幣帛於四畿內群神一其丹生川上神者加ニ黑毛馬一旱也といひ延曆九年五月甲午以ニ炎旱經一レ月公私焦損ニ詔奉ニ幣畿內名神一以祈ニ嘉澍一とあるとを合考ふれは四畿內群神といふも畿內名神といふもともにかの祈雨八十五座の神等をいふこと明らけし然れはこゝに明神とあるは名神の音便なることまたしるへし

走湯山緣起弘仁三年大江政文所記云弘仁元年二月十五日爰地主明神託ニ巫女一曰我奉ニ爲權現勸請一去天應年中投ニ高麗一然未レ叙ニ思緒一彼國廟神等奠以ニ美酒一供以ニ醒宍一醉酷之餘忘ニ素意一既迭ニ多年一康寧高麗年號歟始奉ニ勸請一世人號ニ來大明神一是也奉レ還ニ權現一故以レ來爲レ名依レ之來明神憎ニ酒味一不ニ容受一權現再來此明神之秘計也云々四十八代稱德天皇御宇當山鳴動神殿戶開巫女託宣云吾是地主明神也

文德實錄云齊衡二年二月癸亥備中國言吉備津彥名明神庫內鈴鏡一夜三鳴按に延喜神名帳備中國吉備津彥神社名神大とあり吉備津彥神は孝靈天皇の皇子建吉備津日子命を祀るなれは續日本後紀承和十四年十月の條に備中國無位吉備津彥命神とあるを正といふへし然るをこゝに吉備津彥名明神とある名字は衍文にて明字と命字とは音便によりて書あやまりしなるへし

類聚符宣抄云奉レ授ニ神位記一事

太政官符神祇官

正五位下橫山明神坐ニ□□□一

今奉レ授ニ從四位□一

延喜十八年□月十七日下

正六位上大津高結槻本地祇坐ニ讚岐國一

今奉レ授ニ從五位下一

延喜廿年二月十五日下

從五位上瀧倉明神坐ニ大和國一

今奉レ授ニ從四位下一

正六位上屋東明神

大神明神並在ニ肥前國一

並今奉レ授ニ從五位□一

延喜廿年十一月　日下

右得ニ中務省解一偁件叙位依レ例申送如レ件者官宣ニ承知依レ例行レ之符到奉行

位左少辨　　位左少辨

延喜廿一年二月廿七日

石淸水八幡宮護國寺略記貞觀五年正月十一日云貞觀三年正月

天手長男神社名神大　天手長比賣神社名神大

●對馬國

上縣郡

和多都美神社名神大　和多都美御子神社名神大

下縣郡

高御魂神社名神大　和多都美神社名神大

太祝詞神社名神大　住吉神社名神大

類聚符宣抄云太政官符神祇官

應レ預ニ祈年祭幣大原野神社□座一事

右祈年祭者京畿外國名神靈社皆享ニ禮奠一各預ニ幣帛一而件社自漏ニ彼祭一已忘ニ如在一今加ニ斟量一盍レ備ニ其數一右大臣宣奉レ勅宜下預ニ案上幣一列中春日社上自今以後立爲ニ恒例一者官宜ニ承知依レ宣行レ之符到奉行　從四位上行權左中辨藤原朝臣　從五位下行左大史惟宗朝臣

長元三年二月廿日

○明神

名神は社をさし奉る號明神は神をさし奉る號なりたゝし名神はその宮地の主神と勸請の神とをわかち奉らん爲の號にして明神といふはその宮地の主神勸請の神の差別をいは親しくす神の御名を稱し奉る時はいつも明神といふなりその明神の文字は日本書紀孝德紀に出てのち〳〵の書共に見えたるはかそふるにいとまあらすもと西土の成語をとられし文字にて國語神魂の現はにましますこゝろなり佛經にいてたりといふは安齋隨筆僻事なりしかるに弘仁の頃より名神と明神と文を互にして記されしかは日本後紀のち終に名神明神の義わきかたくなりたり大明神といふことも弘仁の頃より走湯山緣起所見ありこれはたゝ明神といふへきを崇めて大の字を加へられたるものなりされと官符延喜十八年同廿年勅額に天慶年中明神とも大明神ともしるされたれは某大明神と稱し奉るを俗稱なりといふはあやまりなるへし神名帳頭注後花園院の御時多武峰社に神號を授けられしははしめて神とあかめられし宣胤記ことにしてその頃より明神號といふことの出來しにはあらすまた神宮を上とし明神是につく神道名目類聚抄といひ又明神號は勅許なり同上なといふはあやまりなり

日本書紀曰孝德天皇大化元年七月丙子詔ニ於高麗使一曰明神御宇日本天皇詔旨　按に明神の文字これをはしめとすと國語に明神其殛レ之とある類の

伊曾乃神社名神大

越智郡

大山積神社名神大　姫坂神社名神大

多伎神社名神大

野間郡

野間神社名神大

溫泉郡

阿沼美神社名神大

伊豫郡

伊豫神社名神大

●西海道

●筑前國

宗像郡

宗像神社三座並名神大　織幡神社一座名神大

那珂郡

住吉神社三座並名神大

糟屋郡

志加海神社三座並名神大

御笠郡

筑紫神社名神大　竈門神社名神大

下座郡

美奈宜神社三座名神大

●筑後國

三井郡

高良玉垂命神社名神大　豐比咩神社名神大

●豐前國

宇佐郡

八幡大菩薩宇佐宮名神大　比賣神社名神大

大帶姫廟神社名神大

●肥前國

松浦郡

田島坐神社名神大

●肥後國

阿蘇郡

健磐龍命神社名神大

●壹岐國

壹岐郡

住吉神社名神大　兵主神社名神大

月讀神社名神大　中津神社名神大

石田郡

多家神社名神大

●長門國

豐浦郡

住吉坐荒御魂神社三座並名神大

●南海道

●紀伊國

伊都郡

丹生都比女神社名神大月次新嘗

名草郡

日前神社名神大月次相嘗新嘗

國懸神社名神大月次相嘗新嘗

伊太祁曾神社名神大月次相嘗新嘗

大屋都比賣神社名神大月次新嘗

都麻都比賣神社名神大月次新嘗

鳴神社名神大月次相嘗新嘗

伊達神社名神大

志磨神社名神大

靜火神社名神大

在田郡

須佐神社名神大月次相嘗

牟婁郡

熊野坐神社名神大

●淡路國

津名郡

淡路伊佐奈伎神社名神大

三原郡

大和國魂神社名神大

●阿波國

板野郡

大麻比古神社名神大

麻殖郡

忌部神社名神大月次新嘗或號麻殖神或號天日鷲神

●讃岐國

香川郡

田村神社名神大

阿野郡

城山神社名神大

苅田郡

粟井神社名神大

●伊豫國

宇摩郡

村山神社名神大

新居郡

海神社名神大

●因幡國

法美郡

宇倍神社名神大

●出雲國

意宇郡

熊野坐神社名神大

出雲郡

杵築大社名神大

●隱岐國

知夫郡

由良比女神社名神大元名和多須神

海部郡

宇受加命神社名神大

穩地郡

水若酢命神社名神大　伊勢命神社名神大

●山陽道

●播磨國

明石郡

海神社三座名神大月次新嘗

揖保郡

粒坐天照神社名神大　中臣印達神社名神大

家島神社名神大

宍粟郡

伊和坐大名持御魂神社名神大

●美作國

苫東郡

中山神社名神大

英多郡

天石門別神社名神大

●備前國

邑久郡

安仁神社名神大

●備中國

賀夜郡

吉備津彦神社名神大

●安藝國

佐伯郡

速谷神社名神大月次新嘗　伊都伎島神社名神大

安藝郡

敦賀郡
氣比神社七座並名神大
丹生郡
大蟲神社名神大
●能登國
羽咋郡
氣多神社名神大
●越中國
射水郡
射水神社名神大
●越後國
蒲原郡
伊夜比古神社名神大
●山陰道
●丹波國
桑田郡
出雲神社名神大　小川月神社名神大
船井郡
麻氣神社名神大
多紀郡
櫛石窓神社二座並名神大
●丹波國
加佐郡
大川神社名神大
與謝郡
籠神社名神大月次新嘗　大蟲神社名神大
小蟲神社名神大
丹波郡
大宮賣神社二座名神大
●但馬國
朝來郡
粟鹿神社名神大
養父郡
夜父坐神社五座名神大二座　水谷神社名神大
出石郡
伊豆志坐神社八座並名神大　御出石神社名神大
氣多郡
山神社名神大　戸神社名神大
雷神社名神大　欘椒神社名神大
城崎郡

●下野國

河内郡

二荒山神社名神大

●陸奥國

白河郡

都々古和氣神社名神大

苅田郡

苅田嶺神社名神大

宮城郡

志波彥神社名神大　鼻節神社名神大

色麻郡

伊達神社名神大

信夫郡

東屋沼神社名神大

牡鹿郡

零羊埼神社名神大　拜幣志神社名神大

桃生郡

計仙麻大島神社名神大

行方郡

多珂神社名神大

栗原郡

志波姬神社名神大

會津郡

伊佐須美神社名神大

安積郡

宇奈己呂和氣神社名神大

柴田郡

大高山神社名神大

宇多郡

子負嶺神社名神大

●出羽國

飽海郡

大物忌神社名神大　月山神社名神大

●北陸道

●若狹國

遠敷郡

若狹比古神社二座名神大

三方郡

宇波西神社名神大月次新嘗

●越前國

酒烈礒前藥師菩薩神社名神大

新治郡

稻田神社名神大

●東山道

●近江國

滋賀郡

小野神社名神大　日吉神社名神大

栗太郡

佐久奈度神社名神大　建部神社名神大

甲賀郡

川田神社二座並名神大月次新嘗

野洲郡

御上神社名神大月次新嘗　兵主神社名神大

蒲生郡

奥津島神社名神大

伊香郡

伊香具神社名神大

高島郡

水尾神社二座並名神大月次新嘗

●美濃國

不破郡

仲山金山彦神社名神大

●信濃國

諏訪郡

南方刀美神社二座名神大

安曇郡

穗高神社名神大

更級郡

武水別神社名神大

水內郡

建御名方富命彦神別神社名神大

小縣郡

生島足島神社二座名神大

●上野國

甘樂郡

貫前神社名神大

群馬郡

伊加保神社名神大

勢多郡

赤城神社名神大

孫若御子神社（名神大）
高座結御子神社（名神大）

●遠江國
濱名郡
角避比古神社（名神大）
蓁原郡
敬滿神社（名神大）

●駿河國
富士郡
淺間神社（名神大）

●伊豆國
賀茂郡
伊豆三島神社（名神大月次新嘗）
伊古奈比咩命神社（名神大）
物忌奈命神社（名神大）
阿波神社（名神大）
楊原神社（名神大）

●甲斐國
八代郡
淺間神社（名神大）

●相模國
高座郡
寒川神社（名神大）

●武藏國
足立郡
氷川神社（名神大月次新嘗）
兒玉郡
金佐奈神社（名神大）

●安房國
安房郡
安房坐神社（名神大月次新嘗）

●上總國
埴生郡
玉前神社（名神大）

●下總國
香取郡
香取神宮（名神大月次新嘗）

●常陸國
鹿島郡
鹿島神宮（名神大月次新嘗）
大洗礒前藥師菩薩明神社（名神大）
那賀郡
吉田神社（名神大）

安宿郡

杜本神社二座並名神大月次新嘗　飛鳥戸神社名神大月次新嘗

高安郡

恩智神社二座並名神大月次相嘗新嘗

河內郡

枚岡神社四座並名神大月次相嘗新嘗

●和泉國

大鳥郡

大鳥神社名神大月次新嘗

●攝津國

住吉郡

住吉坐神社四座並名神大月次相嘗新嘗

大依羅神社四座並名神大月次相嘗新嘗

東生郡

難波坐生國國魂神社二座並名神大月次相嘗新嘗

比賣許曾神社名神大月次相嘗新嘗

嶋下郡

新屋坐天照御魂神社三座並名神大月次新嘗就中天照御魂神一座預二相嘗祭一

豐島郡

垂水神社名神大月次相嘗

武庫郡

廣田神社名神大月次相嘗新嘗

八部郡

生田神社名神大月次相嘗新嘗　長田神社名神大月次相嘗新嘗

●東海道

●伊勢國

壹志郡

阿射加神社三座並名神大

桑名郡

多度神社名神大

●志摩國三座

答志郡

粟嶋坐伊射波神社三座並大

●尾張國

中島郡

大神神社名神大

丹羽郡

大縣神社名神大　眞墨田神社名神大

愛智郡

熱田神社名神大　日割御子神社名神大

賀茂別雷神社亦若雷名神大月次相嘗新嘗
賀茂御祖神社二座並名神大月次相嘗新嘗
鴨川合坐小社宅神社名神大月次相嘗新嘗
貴布禰神社名神月次新嘗　三井神社名神大月次新嘗

紀伊郡

稻荷神三社並名神大月次新嘗

●大和國

添上郡

春日祭神四座並名神大月次新嘗

平群郡

龍田坐天御柱國御柱神社二座並名神大月次新嘗
平群坐紀氏神社名神大月次新嘗

廣瀨郡

廣瀨坐和加宇加賣命神社名神大月次新嘗

葛上郡

鴨都波八重事代主命神社二座名神大月次相嘗新嘗
葛木御歳神社名神大月次新嘗
葛木坐一言主神社名神大月次新嘗
葛木水分神社名神大月次相嘗　高天彥神社名神大月次相嘗新嘗
高鴨阿治須岐託彥根命社四座並名神大月次相嘗新嘗

葛下郡

片岡坐神社名神大月次新嘗　火幡神社名神大月次新嘗

忍海郡

葛木坐火雷神社二座並名神大月次相嘗新嘗

吉野郡

大名持神社名神大月次相嘗新嘗　丹生川上神社名神大月次新嘗
金峰神社名神大月次相嘗新嘗

城上郡

大神大物主神社名神大月次相嘗新嘗
穴師坐兵主神社名神大月次相嘗新嘗
宗像神社三座並名神大月次新嘗

高市郡

飛鳥坐神社四座並名神大月次相嘗新嘗
高市御縣神社名神大月次相嘗
氣吹雷響雷吉野大國栖御魂神社二座並名神大月次新嘗

十市郡

多坐彌志理都比古神社二座並名神大月次相嘗新嘗

山邊郡

大和坐大國魂神社三座並名神大月次相嘗新嘗

●河內國

右得ニ神祇官解一偁大和神主大和人成解狀偁別社丹生川上雨師神祝禰宜等解狀偁謹檢ニ名神本紀一云不レ聞ニ人聲一之深山吉野丹生川上立ニ我宮柱一以敬祀者爲ニ天下一降ニ甘雨一止ニ霖雨一者依ニ神宣一造ニ件社一自レ昔至レ今奉幣奉馬仍四至之内放ニ牧神馬一禁ニ制狩獵一而國栖戸百姓幷浪人等寄ニ事供御一奪ニ妨神地一屢觸ニ汙穢一動致ニ咎崇一爰祝禰宜等依レ稱ニ供御一不ニ敢相論一既犯ニ神禁一何謂ニ如在一望經ニ言上一敢被ニ禁制一者陳有覺仍申送者官依ニ解狀一謹請ニ官裁一者大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傅陸奥出羽按察使源朝臣能有宣下宜下ニ知彼國一令上レ加ニ禁制一

寛平七年六月廿六日

又云太政官符

應下國内諸神不レ論ニ有位無位一叙中正六位上上事

右太政官去年十二月廿八日下ニ五畿内七國諸國一符偁右大臣宣奉　レ勅特有レ所レ思天下大小諸神或本預ニ官社一或未レ載ニ公簿一有位更增ニ一階一無位新叙ニ六位一唯大神幷名神雖レ云ニ無位一奉レ授ニ從五位下一者而今推量六位之中其階有四至于奉行必應レ有レ疑宜丙除下奉レ授ニ五位一之外上不レ論ニ有位無位一共叙乙正六位上甲

嘉祥四年正月廿七日

按に大神幷名神雖レ云ニ無位一奉レ授ニ從五位下一とあるをみれば無位の名神もありしことあきらかなりたゞし名神は無位といへとも從五位下を授け奉るといふは選叙令に凡蔭ニ皇親一者諸王子從五位下其五世王者從五位下とある例にて皇統に親しき神なるをもて直に五位にならせ給ふなり是にて自餘の神とおもひ混すましくまた無位の名神ましますにて靈驗高名の神といふにあらさることをしるべし

延喜臨時祭式云凡諸神預ニ名神官社等一者待ニ官符下一更修ニ下國符一請ニ内印一

神名帳云宮内省坐神三座並名神大月次新嘗

園神社　韓神社二座

●山城國

乙訓郡

乙訓坐火雷神社名神大月次新嘗

自玉手祭來酒解神社名神大月次新嘗元名山崎社

葛野郡

葛野坐月讀神社名神大月次新嘗

木島坐天照御魂神社名神大月次相嘗新嘗

松尾神社二座名神大月次相嘗新嘗　平野祭神四社並名神大月次新嘗

梅宮坐神四社並名神大月次新嘗

天津石門別稚姫神社名神大月次新嘗

愛宕郡

又云貞觀七年十一月四日辛巳勅遣二使者於伊勢大神宮井明神十一社一奉幣告以二　天皇遷二御内殿一十二月九日丙辰勅甲斐國八代郡立二淺間明神祠一列二於官社一即置二祝禰宜一隨レ時致レ祭先レ是彼國司言往年八代郡暴風大雨雷電地震雲霧杳冥難レ辨二山野一駿河國富士大山西峯忽有二熾火一燒二碎巖谷一今年八代郡擬大領無位伴直貞託宣云我淺間明神欲レ得二此國齋祭一頃年爲二國吏一成二凶咎一爲二百姓病死一然未二曾覺悟一仍成二此恠一須下早定二神社一兼任二祝禰宜一潔奉祭上眞貞之身或伸可二八尺一或屈可二二尺一變體長短吐二件等詞一求二之卜筮一所レ告同二於託宣一於レ是依二明神願一以二眞貞一爲レ祝同郡人伴秋吉爲二禰宜一郡家以南作二建神宮一且令二鎭謝一雖レ然異火之變于レ今未レ止遣二使者一檢察埋二剗海一千許町仰而見レ之正中最頂飾二造社一宮垣有二四隅一以二丹青石一立二其四面一石高一丈八尺許廣三尺厚一尺餘立石之間相去一尺中有二一重高閣一以レ石構營彩色美麗不レ可二勝言一望請齋祭兼預二官社一從レ之 按に駿河國富士淺間神の名神に列せられしは仁壽三年七月甲午なりされとも甲斐國にうつしては名神にはあらされともなを駿河國にて淺間名神といひしを音便に明神といふなるへし

又云貞觀十七年六月丁丑下二知太宰府一班二幣肥後國境内明神一攘二謝大鳥群鳥之恠一也

類聚三代格云太政官府四箇條内

一應レ任二用神主一事

右太政官弘仁十二年正月四日下二大和國一符偁彼國解偁部内名神其社有レ數或爲レ農禱レ歲或爲レ旱祈レ雨至レ排二災害一莽有二徵應一假令大和大神廣瀨龍田賀茂穴師等大神是也頃年之間事乖二潔齋一不祥之徵間々不レ息本尋レ所二由黷一依二神主一太政官延曆十七年正月廿四日下二五畿以諸國一符偁奉　レ勅掃レ社敬レ神鎭レ禍致レ福今神主等一任終身侮黷不敬崇咎屢臻宜自今以後簡下擇彼氏之中潔淸廉貞堪二神主一者上補任限以二六年一相替秩滿之代點定言上者國依二符旨一選點言上而或點上之外被レ任二佗人一愚吏商二量事一背二符旨一望請點上之人一切任用以尋二凋酌之信一且待二神聽之聲一者左大臣宣奉　レ勅依レ請

貞觀十年六月廿八日

按に此官符に農禱莽有二徵應一なとみえたろによりて靈驗名譽の名とおもふ人あるはあやまりなり

又云太政官符

應レ禁二制大和國丹生川上雨師神社界地一事

四至　東限二鹽匂一　南限二大山峯一　西限二板波瀧一　北限二猪鼻瀧一

庚午以二尾張國多天神一預二於名神一甲戌以二伊與國村上山神一預二於名神一七月甲午以二駿河國淺間神一預二於名神一十一月癸丑以二遠江國敬滿神一預二名神一
又云齊衡元年四月丁已遣三傳灯大法師位智戒興智眞秀傳灯法師位明昭玄永傳灯滿位僧基藏基秀一向二七道諸國名神社一轉二讀般若一祈二民福一也
又云齊衡二年正月壬寅以二伊勢國阿那賀神一預二於名神一四月乙卯遣二使者一向二備中國一奉二幣吉備津彥名神一五月丁卯加二筑後國高良玉垂名神位田四町一九月癸亥以二園韓神一列二於名神一按に宮内省坐神なるへし江次第頭書に園韓神口傳云件神は延暦以前坐レ此選都之時遣二官使一欲レ奉レ移二他所一神託宣云猶坐二此處一奉レ護二帝王一仍鎭二座宮内省一といへり
文德實錄云天安元年二月乙酉遣二使内外諸名神社一賀二木連理白鹿等之瑞一宣制曰天皇我詔旨止掛畏支諸大神乃廣前爾恐美恐美毛申賜幣止申久維齊衡三年十月廿日爾公卿奏久常陸國木連理乎獻同年十二月十三日爾美作國白鹿乎獻良久奏世利如是支嘉瑞波聖皇乃御世爾天地乃示賜布物止奈毛聞食須是薄德乃能令二感致一幣支物爾波非須善是波皇太神乃慈賜比示賜幣留物奈利止爲天奈毛貴嘉比受賜利御代乃名乎改天天安元年止爲留事乎申賜爾差使天禮代乃大幣帛乎令二捧持一天奉レ出須此狀乎神奈可良聞食天風雨乃災無久、天下饒足之女天皇朝庭乎今毛今毛彌益々爾常磐爾堅磐爾夜守利日守利爾護賜幣止恐見恐見毛申賜波久止申
又云天安元年十月丁卯在二筑後國一從三位高良玉垂命名神從五位下豐比咩神等宛二封戶並位田一己卯在二常陸國一大洗礒前酒列礒前兩神號二菩薩名神一
又云二年四月辛丑於二冷泉院南路一大祓爲レ遣下諸名神社奉二幣帛一之使上八月丁未在二山城國從五位上鴨川合神一預二名神一
三代實錄云貞觀八年七月六日又班二幣南海道諸神一告文云天皇我詔旨止南海道諸名神乃廣前爾申給久云々名神達爾波京庫乃幣帛乎差使天奉乎天神地祇仁波國別長官親自潔齋天以二正稅一天交易天可レ奉狀乃官符乎下給布○按に名神には官幣を奉られ天神地祇は其列にあらぬも神の尊卑によることとしるへし
又云貞觀七年四月十七日丁卯勅奉レ充二諸明神神田松尾神五段賀茂御祖神五段別雷神五段稻荷神三段平野神五段大原野神五段一並以二山城國愛宕紀伊乙訓葛野郡得度除帳田一充レ之松尾平野賀茂御祖別雷稻荷神はみな名神大社にまします大原野神は春日と同神にましましくて仁壽元年二月二日依二太皇太后御祈一山城國葛野郡大原野仁宮柱廣知立春冬乃御祭加賜と此社の舊記にいひまたその時文德實錄に仁壽元年二月二日別制大原野祭儀一準二梅宮祭一なとみえたれは此神を諸名神の列にいれたるはまつたく藤原氏の私にして神祇官の詔訣なるへし

又云九年七月乙巳奉ニ幣五畿内七道諸國名神一防ニ風雨一也

又云承和元年七月乙巳奉ニ幣於天下名神一預攘ニ風雨之災一

續日本後紀云承和二年九月辛未以ニ上野國群馬郡伊賀保社ニ預ニ之名神一

類聚國史云四年六月己未勅令下五畿内七道諸國奉ニ幣名神ニ預防ニ風雨ニ莫上損ニ年穀一

又云承和七年六月乙巳朔癸酉勅頃者澍雨頻降嘉穀滋茂如有ニ風災一恐損ニ農業一宜レ令下五畿内七道諸國奉ニ幣於名神ニ預防中風雨上焉

又云承和八年七月己丑勅令下五畿内七道諸國奉ニ幣名神ニ務祈中嘉穀上

續日本後紀云承和九年三月丁巳遣レ使奉ニ幣松尾鴨御祖鴨別雷乙訓等名神一祈レ雨也是日雨降通宵不レ綏十一月乙卯讃岐國栗井神預ニ之名神一

又云承和十年四月己未朔坐ニ梅宮一正五位下酒解神從五位下大若子神從五位下小若子神三前並奉レ授ニ從四位下一從五位上自玉手祭來酒解神預ニ名神一丁丑山崎神預ニ之名神一七月丁酉奉ニ幣於天下名神一令レ祈ニ百穀一

又云承和十五年三月壬申勅奉レ充ニ山城國乙訓郡山崎明神御戸代田二町一 按に是より前名神の列にあつからせ給ひ是のち延喜名神祭にものせられたれは音便によりて明神といへるのみ異なる義にあらす 五月辛未奉レ授ニ陸奧國從五位下勳九等苅田嶺名神正五位下一餘如レ故庚辰奉レ授ニ武藏國无位杉山名神從五位下一

類聚國史云承和十五年六月丁酉勅曰陰陽寮申云今茲秋雨應レ爲レ害者若不ニ豫防一恐損ニ年穀一宜レ令下五畿内七道諸國奉ニ幣於名神一以防中止雨害上

又云嘉祥元年十一月壬申隱岐國伊勢命神預ニ明神例一緣ニ屢有ニ靈驗一也 按に神名帳に名神大とあれは是も名明の音便なるへし

文德實錄云嘉祥三年五月丙戌是日有レ制爲ニ諸名神一令レ度ニ七十人一各爲ニ名神一發願誓念其得度者皆以ニ神字一被ニ於名首一九月庚子下ニ知五畿七道諸國一班ニ幣名神一同告ニ賀瑞之由一

又云仁壽元年六月甲寅詔以ニ近江國散久難度神一列ニ於明神一 按に神名帳に名神とあり 秋七月乙亥遣ニ使者一向ニ賀茂松尾稻荷貴布禰名神一奉幣祈レ雨即日得ニ甘澍一

又云仁壽三年六月己巳以ニ大和國金峰神一預ニ於名神一

社にてましますなりこれをもつて考ふれはその國處にひさしく鎭座まします神といへとも臣下の神外蕃の神にてはまた名神の列にいれられさることしるへしさてこの名神をまつらるゝは常祀にはあらねとも時ありてまつらるゝことあるへき時は辨官處分してこれをまつらるゝなり（臨時祭式）今世に某の大明神といふか中にけにそのかみの名神をまつれるありまた名神ならでも明神といふありけたし貞觀七年大原野神を名神の列にいれられしなとや初めなるへき（三代實錄）名神と明神の差別はのちにいへり

續日本紀云天平二年十月庚戌遣レ使奉二渤海信物於諸國名神社一（按に是名神の文字のはしめて國史にいてたるなり）

又云天平寶字八年十一月癸丑遣レ使奉二幣於近江國名神社一先レ是仲麻呂之走據二近江一也朝廷遙望禱二請國神一而莫レ出二境內一即伏二其誅一所三以賽二宿禱一也

又云延曆七年五月己酉詔二羣臣一曰宜差レ使祈二雨於伊勢神宮及七道名神一是夕大雨其後雨多遠近周匝遂得二耕殖一矣

又云九年五月甲午以二炎旱經一レ月公私焦損一詔奉二幣畿內名神一以祈二嘉澍一焉

類聚國史云桓武天皇延曆十六年六月壬申遣レ使奉二幣畿內七道諸國名神一皇帝於二南庭一親臨發焉以祈二萬國安寧一也

又云嵯峨天皇大同五年七月丙辰勅夏苗已茂秋稼始熟恐風雨失レ時嘉穀被レ害宜遣二使畿內一奉二幣名神一

日本後紀云弘仁二年七月己酉安藝國佐伯郡速谷神伊都伎島神並預二名神例一兼二四時幣一（按に延喜式神名帳には速谷神のみ月次新嘗に預り給ひ伊都伎島神はたゝ名神大とばかりあり此のちとゝめられしにや）

又云弘仁五年九月戊子奉二幣明神一報二豐稔一也（按に明神と名神と文を互にされし始といふへし）

類聚國史云弘仁十二年八月丙寅勅今嘉穀垂レ穗多稔方熟恐風水爲レ災致二其傷害一宜下奉二幣名神一以護中秋稼上也

又云淳和天皇天長元年八月丁丑朔奉二幣帛名神一祈レ除二風雨損一也

續日本後紀云天長十年七月戊子越後國蒲原郡伊夜比古神預二之名神一以二彼郡每旱疫致レ雨救一レ病也

類聚國史云七年七月甲申遣二使十八寺一令二讀經一奉二幣五畿內七道諸國名神一爲レ攘レ災也

又云八年八月庚午奉二幣名神一爲レ防二風雨之災一也

古今要覽稿卷第六

●神祇部

名神

名神といふは國神をいふ（國神といふは日本書紀に素戔嗚尊自天而降到於出雲國簸之川上時有一老公與老婆曰吾是國神とあるを稻田宮主神の主神と號を賜ひしを思合すれは國神と云は其國地の主神と云こと也といふをは明らかなるへし）天平寶字八年藤原仲麻呂か叛きて近江國に赴きし時朝廷より國神に境より外へ出させ給ふなと祈申されしかは仲麻呂誅せられてのち近江國の國神に賽せさせ給ふ處に近江國の名神に幣を奉るとあり（續日本紀）はしめには國神といひのちには名神といふ文を互にせしにて異なることなきなり今いふ地主神とおなしきなりされは宮內省にましま す園韓神を遷都の時にうつし奉るへきよし官使を立られしになをこの處に鎮座まし〳〵て長く帝王の御まもりたるへきよし託宣ありしかはうつし奉ることなくそのまゝに鎮座ありて齊衡二年にいたりて名神に列せられし（文德實錄江次第）をおもひ合すへし

されは同じ神にても他にうつし祀れるものは名神の列にいらせ給はすまつ山城國にて園韓神は宮內省酒解神は乙訓郡松尾平野梅宮木島座天照御魂神天津石門別稚姫神は葛野郡貴布禰神は愛宕郡稻荷神は紀伊郡の名神にまし〳〵て他に鎮座あることなし（但是は官社の限りをいふ私にうつし祀れる者にこの限にあらず）乙訓郡火雷神は伊弉冊尊の化去ませし時胸になりし神なり大和國宇智郡廣瀨郡上野國那波郡和泉國大鳥郡に同神の社あれとも名神にはましまさす其外葛野郡月讀神は伊勢國度會郡に同神三座ましますといへとも小社なり愛宕郡賀茂別雷神は上野國山田郡加賀國加賀郡に同神まし〳〵三井神は美濃國多藝郡各務郡但馬國養父郡氣多郡に同神ましますといへともみな小社にてましますこれによつて例せは大和國春日龍田廣瀨の神のことときはいふに及はすすへてその國にふるくより鎮座まします御神を名神とあかめられしこと論なきかことしたゝしたゝ其國處にひさしく鎮座ましますといふのみにもあらすこの名神の列にいり給ふかきりは神統もまた正しく臣下の神及ひ外蕃の神にあらさるか故にこと〳〵くみな大

又云仁壽三年六月丁卯以尾張國大國靈神大御靈神憶感神等列於官社

又云齊衡元年十月戊辰以山城國神足神列於官社

又云齊衡二年二月癸丑以陸奥國永倉神列於官社

三代實錄云貞觀元年五月四日己未丹波國荒木神列於官社　七日壬戌和泉國舊府神聖神比賣神等列於官社　十七日壬申雷電雨雹肥後國從四位下阿蘇比咩神列於官社　七月五日戊午大和國從五位下氣吹雷神從五位下響雷神並列於官社　八月十七日庚子上野國正六位上倭文神列於官社

又云貞觀二年三月辛亥朔近江國建部神列於官社　五月廿日己巳讃岐國從五位下雪氣神列於官社　六月九日戊子能登國兩像石神二前並列於官社

又云貞觀九年二月廿六日丙申以河內國大縣郡石神常世岐姬神志紀郡林氏神辛國神若江郡加津良郡中村神並預官社

廢

日本後紀曰延暦十五年八月甲戌上野國山田郡賀茂神美和神那波郡火雷神並爲二官社一

又云延暦二十四年十二月乙卯甲斐國巨麻郡弓削社預二官社一以レ有二靈驗一也

續日本後紀曰承和四年正月辛卯在二石見國五箇郡中一神總十五社始預二官社一以能應二吏民之禱一久救二旱疫之災一也其神名具在二神祇官帳一

又云承和五年九月辛酉下野國那須郡三和神預二之官社一

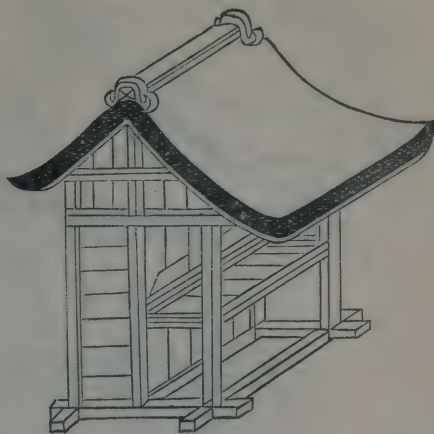
又云承和七年七月庚子以二肥後國玉名郡疋石神一預二官社一

又云承和八年八月辛丑以二土佐國美良布神古土神一並預二官社一

文德實錄云嘉祥三年五月丙申詔以二武藏國奈良神一列二於官社一先レ是彼國奏請檢二古記一慶雲二年此神放レ光如二火熾一然其後陸奥夷虜反亂國發二控弦一赴救二陸奥一軍士載二此神靈一奉以擊レ之所レ向無レ前老弱在レ行免二於死傷一和銅四年神社之中忽有二湧泉一自然奔出漑田六百餘頃民有二疫癘一禱而愈人命所レ繫不レ可レ不レ崇レ之從レ之　六月己酉詔以二武藏國廣瀬神常陸國鴨大神御子神主玉神一並列二於官社一　庚戌壹岐島角上神列二於官社一　八月戊申詔以二遠江國角避比古神一列二於官社一先レ是彼國奏言此神叢社瞰臨二大湖一湖水所レ漑擧レ土賴レ利湖有二一口一開塞無レ常湖口塞則民被二水害一湖口開則民致二豐饒一或開或塞神實爲レ之請加二崇典一爲レ民祈レ利從レ之　九月甲申詔以二伊勢國多度大神一列二於官社一　丁卯詔以二壹伎島天手長男天手長比咩兩神一列二於官社一　十一月甲戌朔詔以二伊豆國伊古奈比女安房物忌奈三神一列二於官社一　十二月庚戌詔以二上野國甲波宿禰神一列二於官社一

又云天安元年五月丙辰在二相模國一從五位下石楯尾神預二官社一　六月甲申在二出雲國一從五位下天穗日命神預二官社一　八月辛未在二常陸國一大洗磯前酒列磯前神等預二官社一　丁亥在二播磨國一從五位下天一神預二官社一

又云天安二年二月丙戌在二伊勢國一正六位上葭原神預二官社一　己丑在二河內國一從五位下伯太彥伯太姬神並預二官社一　三月乙丑在二大和國一從五位下波實神波比賣神並預二官社一

禿倉造

●官社

官社といふは神祇官の帳簿にのせらし神社なりその帳簿大寶年中にはしめて作られ天平の時にいたりて全くなりしといへり古語拾遺たゝし官帳を作らるる時中臣權を專にして取捨正しからさるよしいへり同上このゝちまた靈驗あるによりて官帳にのせられし神もまたすくなからす延喜の時にいたりてすへて三千一百三十二座あり延喜式これを今式内の社と稱しこの外を式外の社といふ

續日本紀曰慶雲三年二月庚子是日甲斐信濃越中但馬土佐等國一十九社始入二祈年幣帛例一其神名具二神祇官記一〇按に神祇官記といふは古語拾遺にいはゆる至二大寶年中一初有二記文一といふものなるへくその神名を具く注されたりといふによれは即延喜式神名帳のごときものなるへし續日本後紀に承和四年石見國神十五社始預二官社一とありてその分注に神名具在二神祇官帳一とあるを合考ふれはこの官記にのせられたる神社即官社なること疑なし

又曰寶龜三年八月甲寅是日異常風雨拔レ樹發レ屋卜レ之伊勢月讀神爲レ崇於レ是每年九月准二荒祭神一奉レ馬

又荒御玉命伊佐奈伎命伊佐奈彌命入二於官社一

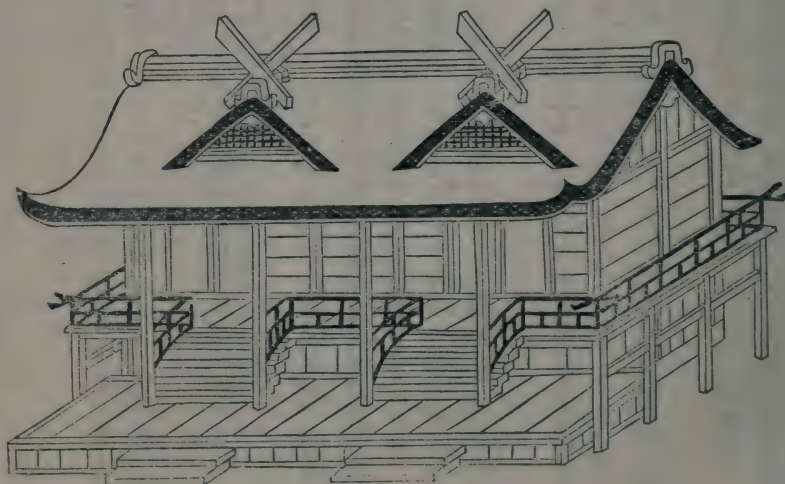
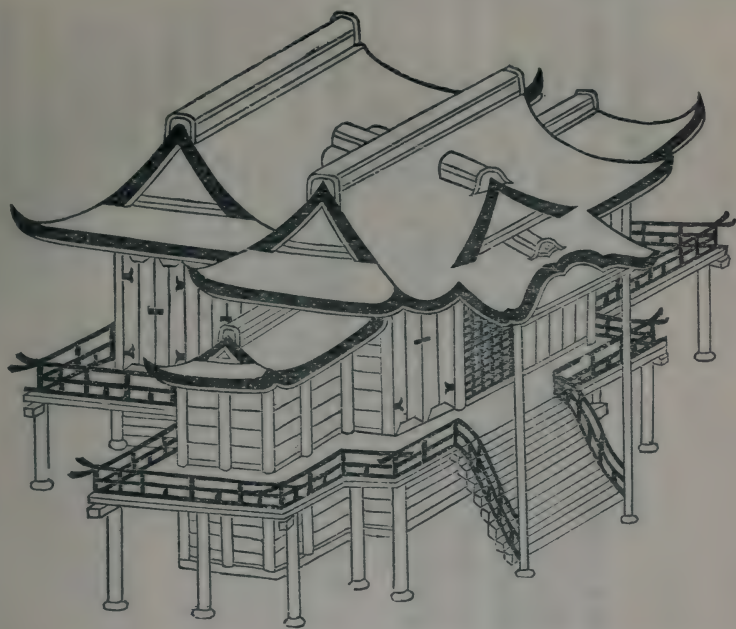
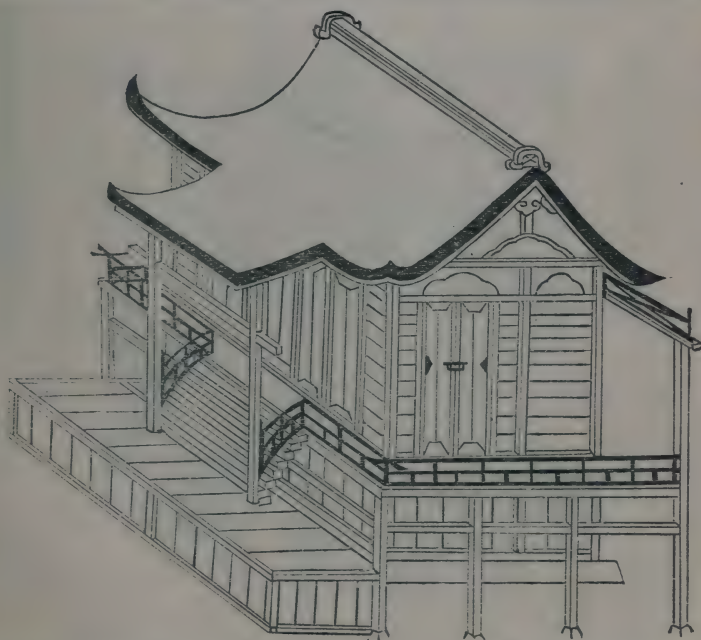
又云寶龜九年十二月甲申去神護中大隅國海中有レ神造レ島其名曰二大穴持神一至レ是爲二官社一流布印本には官字なし古寫本によりて是を補ふ

又云延曆二年十二月丁巳大和國平群久度神叙二從五位下一爲二官社一

又云延曆九年十一月丁亥陸奧國黑川郡石神山精社並爲二官社一

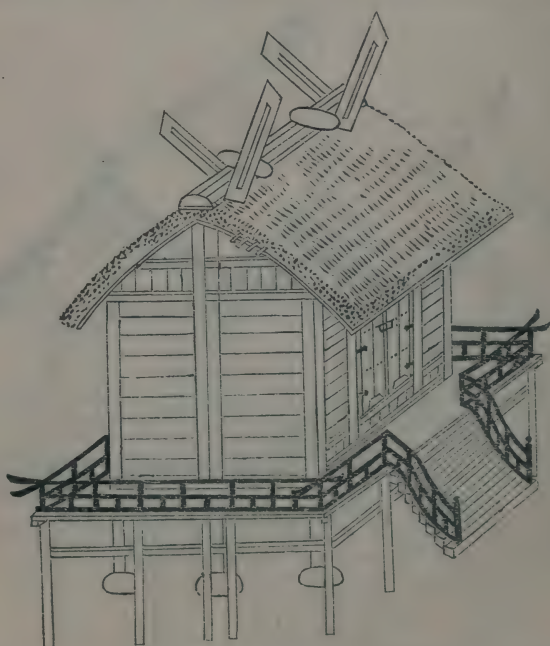
古語拾遺曰至二大寶年中一初有二記文一神祇之簿猶無二明案一望秩之禮未レ制二其式一至二天平年中一勘二造神帳一中臣專レ權任レ意取捨有レ由者小祀皆列無レ緣者大社猶

皇子造　春日造

相殿造　二間社トモ

石間造 俗ニ八棟造ト云

権現造 堂社造

齋內親王殿壹宇長四丈廣二丈高一丈
女嬬侍殿壹間長四丈廣二丈高一丈
御門肆間長各二丈廣各一丈五尺高各一丈
瑞垣壹重廻長五十丈高一丈
宿直屋參間長各一丈四尺廣各八尺高各六尺
玉垣貳重一重廻長六十二丈一重廻長九十六丈高各一丈
板垣壹重廻長百十六丈高一丈
蕃垣參重長各二丈

大三輪神三社鎭座次第云當社古來無二寶倉一唯有二三箇鳥居一而已

日吉社神道秘密記云神道神門大事口傳種々事總合神門中神門大神門皆大宮之御分之由口傳又三聖御分之由口傳又三神門皆大宮ノ御分聖眞子客人ハ大宮之內ニテ神門无之由也又馬場小ノ小神門又下八王子邊神門小比叡御分八王子三宮小比叡之內ニテ神門无之由也非二一說一種々口傳有レ之

神道名目類聚鈔所載神明造

正殿一區長四丈廣一丈七尺高一丈葺檜皮　御裝束宿殿一間長二丈弘一丈高八尺　御輿宿殿一間長二丈廣一丈高八尺　御厠殿一間長一丈弘八尺高七尺　防往籬一重長廻四十丈

御膳宿一院

殿二間長各二丈弘一丈高八尺　廻防往籠一重長廻十五丈

直會院　防往籬一重長六十三丈

禰宜齋舘一院

齋殿一間長二丈弘一丈高八尺　炊屋二間齋火炊屋一間大炊屋一間並長一丈五尺高八尺　倉一宇長一丈八弘一丈五尺高一丈廣一丈

厨一間長二丈弘一丈高八尺

厩一間長二丈弘一丈五尺高一丈　防往籬一重長廻五十丈

宇治大内人齋舘一院

齋殿一間長二丈弘九尺高八尺　忌火炊屋一間長二丈弘九尺高八尺

厨屋一間長三丈弘一丈高八尺　防往籬一重長廻卌丈　右禰宜幷宇治大内人二人常食二忌火物一不レ食二他火物一

大内人二人宿舘二院

齋侍屋二間長各四丈弘各一丈六尺高八尺五寸　厨大炊屋二間長各三丈弘一丈二尺高八尺　防往籬一重長廻四十丈　右二人大内人忌火物不レ食但齋御供奉與二宇治内人一同

物忌幷小内人宿舘五院

大物忌齋舘一間長二丈弘九尺高八尺　齋火炊屋一間長二丈弘九尺高八尺　厨屋一間長二丈弘九尺高八尺　大炊屋一間長二丈弘九尺高八尺

宮守物忌齋舘屋一間長二丈弘九尺高八尺　齋火屋一間長二丈弘九尺高八尺

地祭物忌齋舘屋一間長二丈弘九尺高八尺　齋火炊屋一間長二丈弘九尺高八尺

荒祭物忌齋舘屋一間長二丈弘九尺高八尺　齋火炊屋一間長二丈弘九尺高八尺

已上四人常食忌火物供奉

諸物忌小内人常宿齋舘屋一十二間

五間長各三丈高八尺弘一丈二尺　七間長二丈弘一丈高八尺　防往籬廻一重長廻七十五丈

右清酒作物忌以下御巫内人以上齋舘院食但齋敬供奉與二大内人一同

止由氣宮儀式帳曰大宮壹院

正殿壹區長三丈廣一丈六尺高一丈

寶殿貳宇長各一丈六尺廣一丈二尺高一丈

御饌殿壹宇長一丈廣一丈高一丈

幣帛殿壹宇長一丈廣一丈二尺高一丈

底津石根一宮柱布刀斯理於二高天原一氷椽多迦斯理而居レ是奴也云々僕住所者如二天神御子之天津日繼所知之登陀流天之御巢一而於二底津石根一宮柱布刀斯理於二高天原一氷木多迦斯理而治賜者僕者於二百不足八十坰手一隱而侍

大神宮儀式帳云大宮壹院

正殿一區長三丈六尺高一丈一尺　廣一丈八尺

御橋一枚長六尺廣五尺　高欄四方廻高三尺廣二尺五寸　鐺金花形

幷戶具於二坩殿扉金鏁壹具　鐺金御鎰壹勾　已上從　朝廷官庫奉入　上搏風長二丈八尺八寸厚四寸弘　號稱比木釘覆大坩堅魚木十枚長各七尺經一尺七寸　材木別端以金鐺

寶殿二宇長各二丈一尺廣各一丈四尺　並搏風上　鏁二具打立四隻　目塞四枚　戶具鎰一勾鉤六勾椎立二枚引手二勾伍四枚戶坏四枚蟹目釘十二隻　臥堅魚木各八枚　瑞垣一重長廻卌九丈高一丈　宿衞屋四間長各二丈

御門十一間

於ウヘ葺御門三間各長一丈五尺弘一丈高九尺　於ウヘ不葺御門八間各長一丈三尺高九尺

王垣三重

一玉垣長十四丈　二玉垣廻六十丈　三玉垣廻百二十丈

齋內親王侍殿一間長四丈弘一丈六尺長一丈　番垣一重長三丈

女孺侍殿一間長四丈弘一丈七尺高一丈一尺　板垣廻長一百卅八丈六尺

幣殿一院

殿一宇長一丈五尺弘一丈二尺高八尺　玉垣一重廻長十六丈二尺

御倉一院

倉四宇長各一丈八尺弘各一丈五尺高一丈　臥堅魚木各四枚

玉垣廻長卅八丈

御輿宿殿一間長三丈弘一丈四尺高九尺

御廐一間長四丈弘二丈高九尺　船一隻長三丈弘三尺

直會殿一院

九丈殿一間長十丈弘二尺高一丈一尺　五丈殿一間長五丈四尺弘二丈高一丈一尺

四丈殿一間長四丈弘一丈六尺高九尺　已上葺檜皮　御門一間高九尺長一丈三尺　防往離一重長廻六十丈

齋宮親王御膳屋四間長各二丈廣一丈高八尺　防往離一重長廻廿四丈

御酒殿一院

酒殿一間長四丈弘一丈七尺高八尺庇一面　務所廳一間長三丈弘一丈七尺高一丈

倉二宇長各一丈八尺弘一丈五尺高一丈　盛殿一間長五丈廣一丈七尺高八尺

大炊屋一間長二丈弘一丈高七尺　防往離一重長卅四尺

齋內親王川原殿一院

於茅停菟砥川上宮一作二劒一千口一因名二其劒一謂二川上部一亦名曰二裸伴一藏二于石上神宮一也

又曰垂仁天皇八十七年二月辛卯昔丹波國桑田村有レ人名曰二甕襲一則甕襲家有レ犬名曰二足往一犬咋二山獸名牟士那一而殺レ之則獸腹有二八尺瓊勾玉一因以獻レ之是玉今有二石上神宮一

又云垂仁天皇八十八年七月戊午是後出石刀子自然至二于淡路島一其島人謂レ神而爲二刀子一立レ祠是於レ今所レ祠也

又曰景行天皇四十年十月昔日本武尊向レ東之歲停二尾津濱一而進レ食是時解二一劒一置二於松下一遂忘而去今至二於此一劒猶存故歌曰云々逮二于能保埜一而痛甚之則以二所レ俘蝦夷等一獻二於神宮一

又曰景行天皇五十一年八月壬子初日本武尊所レ佩草薙橫刀是今在二尾張國年魚市郡熱田社一也於是所レ獻二神宮一蝦夷等晝夜喧嘩出入無レ禮時倭姬命曰是蝦夷等不レ可レ近二就於神宮一則進二上於朝廷一

又云神功皇后元年己卯令二諸國一集二船舶一練二兵甲一時軍卒難レ集皇后曰必神心焉則立二大三輪社一以奉二刀矛一矢軍衆自聚

又云履中天皇八十七年正月皇太子便居二於石上振神宮一於レ是瑞齒別皇子知二太子不一レ在尋レ之追詣

又云天武天皇十年正月己丑詔二畿內及諸國一修二理天社地社神宮一

●神社制作

上古神社の制度いかなりしや考ふる處なしたまたま宮柱(ミヤハシラ)氷神(ヒギ)椽籬(ヒモロギ)などの語によりておもふに大方は知べしといへどもいまだその詳かなることを得ず延曆二十三年太神宮司大中臣朝臣眞繼注進する處の儀式によりて考ふれば伊勢內外宮の制作をしるべしまづ正殿に御橋あり四方に高欄あり屋根に比木堅魚木ありその廻りの垣を瑞垣といふその外にあるを玉垣といふ三重なりたゞし外宮には板垣蕃垣の名あれども別に垣あるにあらず二三の玉垣をいふのみ此垣に門あり門に上ふくと上ふかざるとの差別ありこれをもつて當時神社のさまおもひやるべしその後神明作り石間作り皇子造り（又春日造り）堂社造り（又權現造り）相殿造り（二間社とも云）禿倉造り（神道名目類聚抄）等のわかちあり

古事記曰謂二大穴牟遲神一曰於二宇賀能山之山本一於二

入中洲上時長髓彦聞レ之曰夫天神子等所二以來一者必將レ奪二我國一則盡起二屬兵一徼二之於孔舍衞坂一與レ之會戰有二流矢一中二五瀨命肱脛一皇師不レ能二進戰一天皇憂レ之乃運二神策於沖衿一曰今我是日神子孫而向レ日征レ虜此逆二天道一也不レ若退還示レ弱禮二祭神祇一背負二日神之威一隨レ影壓躡如此則曾不レ血レ刃虜必自敗矣云々九月戊辰天皇是夜自祈而寢夢有二天神一訓レ之曰宜下取二天香山社中土一以造二天平瓮八十枚幷造嚴瓮一而敬中祭天神地祇上亦爲二嚴咒詛一如レ此則虜自平伏天皇祇二承夢訓一依以將レ行時弟猾又奏曰倭國磯城邑有二磯城八十梟帥又高尾張邑（或本云葛城邑也）有二赤銅八十梟帥一此類皆欲下與二天皇一距戰上臣竊爲二天皇一憂レ之宜今當取二天香山埴一以造二天平瓮一而祭二天社國社之神一然後擊レ虜則易レ除也

又曰崇神天皇六年先レ是天照大神大和國魂二神並祭二於天皇大殿之内一然畏二其神勢一共住不レ安故以二天照大神一託二豐耜入姫命一祭二於倭笠縫邑一仍立二磯堅城神籬一（神籬此云比莽呂岐）

又曰崇神天皇七年十一月丁卯命二伊香色雄一而以二物部八十手所レ作祭神之物一卽以二大田々根子一爲下祭二大物主大神一之主上又以二長尾市一爲下祭二倭大國魂神一之主上然後卜二祭他神一吉焉便別祭二八十萬群神一仍定二天社國社神地神戸一於レ是疫病始息國内漸謐五穀既成百姓饒之

又云崇神天皇六十年七月己酉詔二群臣一曰武日照命（一云武夷鳥　又云天夷鳥）從レ天將レ來神寶藏二于出雲大神宮一是欲レ見焉

又云垂仁天皇二十五年三月丙申天照大神誨二倭姫命一曰是神風伊勢國則常世之浪重浪歸國也傍國可怜國也欲レ居二是國一故隨二大神敎一其祠立二於伊勢國一

又云垂仁天皇二十七年秋八月己卯令二祠官一卜二兵器一爲二神幣一吉レ之故弓矢及橫刀納二諸神之社一仍更定二神地神戸一以レ時祠レ之

古事記曰爾日子番能邇々藝命將二天降一之時云々副二賜其遠岐斯（此三字以レ音）八尺勾瓊鏡及草那藝劒一亦常世思金神手力男神天石門別神而詔者此之鏡者專爲二我御魂一而如レ拜二吾前一伊都岐奉次思金神者取二持前事一爲レ政此二柱神者幷二祭佐久々斯侶伊須受能宮一（自レ佐至レ能以レ音）

又曰次登由宇氣神此者坐二外宮之度相一神者也

日本書紀云垂仁天皇三十九年冬十月五十瓊敷命居二

古今要覽稿卷第五

●神祇部

神社　殿(トノ)　宮　祠(ホコラ)　神籬(ヒモロギ)　社

神社の國史に見えたるは磤馭盧島の八尋殿をはじめとす日本書紀是後世神社を殿といふよりところなるべし熊野證誠殿熱田八劔殿の類なりまた宮といふは日之少宮稻田宮石上振宮なとぞはじめなるべき八幡宮天滿宮の類なりまた神宮ともいへり石上神宮日本書紀香取神宮鹿島神宮延喜式のたぐひ也また天社國社といふは天神のやしろと國神のやしろとをいふなるべし日本書紀またひもろぎともいふ天津神籬磯堅城神籬日本書紀のたぐひなりまたほこらといふ垂仁天皇紀に隨二大神敎一其祠立二於伊勢國一とあるたぐひなり又たゞやしろともいへり日本書紀

日本書紀曰戈鋒垂落之潮結而爲レ島名曰二磤馭盧島一二神降二居彼島一化二作八尋之殿一又化二天柱一古事記もまた同じく八尋之殿に作る

又曰伊弉諾尊功既至矣德亦大矣於是登レ天報命仍留二宅於日之少宮一少宮此云二倭訶美野一

又曰素戔嗚尊遂到二出雲之淸地一焉乃言曰吾心淸淸之於二彼處一建レ宮乃相與遘合而生二兒大己貴神一因勅之曰吾兒宮首者卽脚摩乳手摩乳也故賜二號於二神一曰二稻田宮主神一

又曰大己貴神曰唯然廼知汝是吾之幸魂奇魂今欲二何處住一耶對曰吾欲レ住二於日本國之三諸山一故卽營二宮彼處一使二就而居一此大三輪之神也

又曰時高皇産靈尊乃還遣二二神一勅二大己貴神一曰今者聞汝所レ言深有二其理一故更條々而勅之夫汝所レ治顯露之事宜二是吾孫治一レ之汝則可三以治二神事一又汝應レ住二天日隅宮一者今當二供造一卽以二千尋栲繩一結爲二百八十紐一其造レ宮之制者柱則高大板則廣厚

又曰高皇産靈尊因勅曰吾則起二樹天津神籬一及天津磐境當下爲二吾孫一奉上齋矣汝天兒屋命太玉命宜下侍二天津神籬一降中於葦原中國上亦爲二皇孫一奉レ齋焉乃使三二神陪二從天忍穗耳尊一以降レ之

又曰神武天皇元年夏四月甲辰皇師勒レ兵步趣二龍田一而其路狹嶮人不レ得二並行一乃還欲下東踰二膽駒山一而

傳見上
若沙那賣神
同上
彌豆麻岐神
同上
夏高津日神
同上
秋毘賣神
同上
久々年神
同上
久々紀若室葛根神
同上
古事記云上件羽山戸之子自二若山咋神以下一若室葛根神以前幷八神

一白日神

一聖神

古事記曰故其大年神娶二神活須沼毘神之女伊怒比賣一生二子大國御魂神一次韓神次曾富理神次白日神次聖神五柱

一山戸臣神

一御年神

古事記曰大年神又娶二香用比賣一生二子大香山戸臣神一次御年神二柱

一奧津日子神

古事記云大年神又娶二天知迦流美豆比賣一生二子奧津日子神一

一奧津比賣命

古事記曰奧津日子神次奧津比賣命亦名大戸比賣神此者諸人以拜竈神者也

一大山上咋神

古事記曰奧津比賣命云々次大山上咋神亦名山末之大主神此神者坐二近淡海國之日枝山一亦坐二葛野之松尾一用二鳴鏑一神者也

一庭津日神

一阿須波神

一波比岐神

一香山戸臣神

一羽山戸神

古事記云羽山戸神娶二大氣都比賣（自レ氣下四字以レ音）神一生二子若山咋神一次若年神次妹若沙那賣神（自レ沙下三字以レ音）次彌豆麻岐神（自レ彌下四字以レ音）次夏高津日神亦名夏之賣神次秋毘賣神次久々年神（久々二字以レ音）次久々紀若室葛根神（久々紀三字以レ音）

一庭高津日神

一大土神

古事記曰大山上咋神云々次庭津日神阿須波神（此神名以レ音）次波比岐神（此神名以レ音）次香山戸臣神次羽山神次庭高津日神次大土神亦名土之御祖神九神上件大年神之子自二大國御魂神一以下大土神以前并十六神

一若山咋神

傳見上

一若年神

古事記云阿遲鉏高日子根神次妹高比賣命亦名下光比賣命

事代主神
古事記云大國主神亦娶二神屋楯比賣命一生二子事代主神一

鳥鳴海神
古事記云大國主神亦娶二八島牟遲能神（自レ牟下三字以レ音）之女鳥耳神一生二子鳥鳴海神一（訓レ鳴云二那留一）

國忍富神
古事記云鳥鳴海神娶二日名照額田吡道神之女伊許知邇神一（田下毘又自レ伊下至レ邇皆以レ音）生二子國忍富神一此神娶二葦那陀迦神一（自レ那下三字以レ音）亦名八河江比賣一生二子速甕之多氣佐波夜遲奴美神一（自レ多下八字以レ音）

速甕之多氣佐波夜遲奴美神
古事記云此神娶二天之甕主神之女前玉比賣一生二子甕主日子神一

甕主日子神
古事記云此神娶二淤加美神之女比那良志毘賣一（此神名以レ音）生二子多比理岐志麻流美神一（此神名以レ音）

多比理岐志麻流美神
古事記云此神娶二比々羅木之其花麻豆美神（木上三字花下三字以レ音）之女活玉前玉比賣神一生二子美呂浪神一

美呂浪神
古事記云此神娶二敷山主神之女青沼馬沼押比賣一生二子布忍富鳥鳴海神一

布忍富鳥鳴海神
古事記云此神娶二若晝女神一生二子天日腹大科度美神一（度美二字以レ音）

天日腹大科度美神
古事記云此神娶二天狹霧神之女遠津待根神一生二子遠津山岬多良斯神一

遠津山岬多良斯神
古事記云右件自二八島士奴美神一以下遠津山岬帶神以前稱二十七世神一

大國御魂神

韓神

曾富理神

神一夫大己貴命與二少彥名命一戮レ力一レ心經二營天下一復爲二顯見蒼生及畜產一則定二其療レ病之方一又爲レ攘二鳥獸昆蟲之災異一則定二其禁厭之法一是以百姓至レ今咸蒙二恩賴一嘗大己貴命謂二少彥名命一曰吾等所造之國豈謂二善成一之乎少彥名命對曰或有レ所レ成或有レ不レ是談也蓋有二幽深之致一焉云々自後國中所レ未レ成者大己貴神獨能巡造遂到二出雲國一乃興言曰夫葦原中國本自荒芒至二及磐石草木一成能强暴然吾已摧伏莫レ不二和順一遂因言今理二此國一唯吾一身而已其可三與レ吾共理二天下一者蓋有之乎于レ時神光照レ海忽然有二浮來者一曰如吾不レ在者汝何能平二此國一乎由二吾在一故汝得レ建二其大造之績一矣是時大己貴神問曰然則汝是誰耶對曰吾是汝之幸魂奇魂也大己貴神曰唯然廼知汝是吾之幸魂奇魂今欲二何處住一耶對曰吾欲レ住二於日本國之三諸山一故卽營二宮彼處一使二就而居一此大三輪之神也此神之子卽甘茂君等大三輪君等又姬蹈鞴五鈴姬命又曰事代主神化二爲八尋熊鰐一通二三島溝樴姬一或云玉櫛姬而生二兒姬蹈鞴五十鈴姬命一是爲二神日本磐余彥火火出見天皇之后一也初大己貴神之平レ國也行二到出雲國五十狹狹之小汀一而且當飮食是時海上忽有二人聲一乃驚而求レ之都無レ所レ見頃時有二一箇小男一以二白蘞皮一爲レ舟以二鷦鷯羽一爲レ衣隨二潮水一以浮到大己貴神卽取置二掌中一而翫レ之則跳齧二其頰一乃怪二其物色一遣レ使白二於天神一于レ時高皇產靈尊聞レ之而曰吾所レ產兒凡有二一千五百座一其中一兒最惡不レ順二敎養一自二指間一漏墮者必彼矣宜二愛而養一レ之此卽少彥名命是也

木俣神

古事記云故其八上比賣者雖二率來一畏二其嫡妻須世理比賣一所レ生子者刺二狹木俣一而返故名二其子一云二木俣神一亦名謂二御井神一也

阿遲鉏高日子根神

古事記云大國主神娶下坐二胷形奧津宮一神多紀理毘賣命上生二子阿遲二字以音鉏高日子根神一云々此之阿遲鋤高日子根神今謂二迦毛大御神一者也

高比賣命

夜賀斯多爾多久夫須麻佐夜具賀斯多爾阿和由岐能和加夜流牟泥遠多久豆怒能斯路岐多陀牟岐曾陀多岐多々岐麻那賀理麻多麻傳多麻傳佐斯麻岐毛々那賀邇伊遠斯那世登與美岐多氏麻都良世如レ此歌即爲二宇岐由比一（四字以レ音）而宇那賀氣理氐（六字以レ音）至レ今鎭坐也此謂二之神語一也故此大國主神娶下坐二胷形奥津宮一神多紀理毘賣命上生二子阿遲（二字以レ音）鉏高日子根神次妹高比賣命亦名下光比賣命一云々大國主神亦娶二神屋楯比賣命一生二子事代主神一亦娶二八島牟遲能神（自レ牟下三字以レ音）之女鳥耳神一生二子鳥鳴海神一云云故大國主神坐二出雲之御大之御前一時自二波穗一乘二天之蘿摩船一而內二剝鵝皮一爲二衣服一有二歸來神一爾雖レ問二其名一不レ答且雖レ問二所レ從之諸神一皆白レ不レ知爾多邇具久白言（自レ多下四字以レ音）此者久延毘古必知之即召二久延毘古一問時答白此者神產巢日神之御子少名毘古那神（自レ毘下三字以レ音）故爾白二上於神產巢日御祖命一者答告此者實我子也於二子之中一自二我手俣一久岐斯子也（自レ久下三字以レ音）故與二汝葦原色許男命一爲二兄弟一而作二堅其國一故自レ爾大穴牟遲與二少名毘古那二二柱神相並作二堅此國一然後者其少名毘古那神者度二于常世國一也故顯二白其少名毘古那神一所レ謂久延毘古者於今者山田之曾富騰者也此神者足雖レ不レ行盡知二天下之事一神也於是大國主神愁而告吾獨何能得レ作二此國一孰神與レ吾能相二作此國一耶是時而有二光レ海依來之神一其神言能治二我前一者吾能共與相作成若不レ然者國難レ成爾大國主神曰然者治奉之狀奈何答言吾者伊二都岐奉于倭之青垣東山上一此者坐二御諸山上一神也

○日本書紀云素戔嗚尊云々遂到二出雲之淸地一焉（淸地此云二素鵝一）乃言曰吾心淸淸之（此今呼二此地一曰レ淸）於二彼處一建レ宮（或云時武素盞嗚尊歌之曰夜句茂多菟伊都毛夜覇餓岐菟磨語味爾夜覇餓枳菟倶盧贈廼夜覇餓岐廻）乃相與遘合而生二兒大己貴神一因勅之曰吾兒宮首者即脚摩乳手摩乳也故賜二號於二神一曰二稻田宮主神一已而素戔嗚尊遂就二於根國一矣

○一書曰是時素戔嗚尊下二到於安藝國可愛之川上一也云々而所生兒之六世孫是曰二大己貴命一（大己貴此云二於褒娜武智一）又云大國主神亦名大物主神亦號二國作大己貴命一亦曰二葦原醜男一亦曰二八千戈神一亦曰二大國玉神一亦曰二顯國玉神一其子凡有二一百八十一

陀登加受氐淤須比遠母伊麻陀登加泥婆遠登賣能那須夜伊多斗遠淤曾夫良比和何多々勢禮婆比許豆良比和何多々勢禮婆阿遠夜麻邇奴延波那伎佐怒都登理岐藝斯波登與牟爾波都登理迦祁婆那久宇禮多久母那久那留登理加許能登理母宇知夜米許世泥伊斯多布夜阿麻波勢豆加比許登能加多理其登母許遠婆爾其沼河日賣未レ開レ戶自レ內歌曰夜知富許能迦微能美許等怒延久佐能賣邇志阿禮婆和何許々呂宇良須能登理叙伊麻許曾婆知杼理邇阿良米能知婆那杼理爾阿良牟遠伊能知波那志勢多麻比曾伊斯多布夜阿麻波世豆迦比許登能加多理基登母許遠婆阿遠夜麻迩比賀迦久良婆奴婆多麻能用波伊傳那牟阿佐比能惠美佐迦延岐氐多久豆怒能斯路岐多陀牟岐阿和由岐能和加夜流牟泥遠曾陀多岐多々岐麻那賀理麻多麻傳多麻傳佐斯麻岐毛々那賀邇伊波那佐牟遠阿夜爾那古斐岐許志夜知富許能加微能美許登許登能迦多理碁登母許遠婆故其夜者不レ合而明日夜爲二御合一也又其神之嫡后須勢理毘賣命甚爲二嫉妬一故其日子遲神和備氐三字以レ音自二出雲一將三上二坐倭國一而來裝立時片御手者繫二御馬之鞍一片御足蹈二入其御鐙一而歌曰奴婆多麻能久路岐美祁斯遠麻都夫佐爾登理與曾比淤岐都登理牟那美流登岐婆多々藝母許禮婆布佐波受幣都那美曾邇奴岐宇氐蘇邇杼理能阿遠岐美祁斯遠麻都夫佐邇登理與曾比淤岐都登利牟那美流登岐婆多々藝母許母布佐婆受幣都那美曾邇奴棄宇氐夜麻賀多爾麻岐斯阿多尼都岐曾米紀賀斯流邇斯米許呂母遠麻都夫佐邇登理與曾比淤岐都登理牟那美流登岐婆多々藝母許斯與呂志伊刀古夜能伊毛能美許等牟良登理能和賀牟禮伊那婆比氣登理能和賀比氣伊那婆那迦士登波那波伊布登母夜麻登能比登母登須々岐宇那加夫斯那賀那加佐麻久阿佐阿米能疑理邇多々牟叙和加久佐能都麻能美許登許登能加多理碁登母許遠婆爾其后取二大御酒坏一立依指擧而歌曰夜知富許能加微能美許登夜阿賀淤富久邇奴斯許曾波遠邇伊麻世婆宇知微流斯麻能佐岐邪岐加岐微流伊蘇能佐岐淤知受和加久佐能都麻母多勢良米阿波母與賣邇斯阿禮婆那遠岐氐遠婆那志那遠岐氐都麻波那斯阿夜加岐能布波夜賀斯多爾牟斯夫須麻爾古

也故隨詔命而參到須佐之男命之御所者其女須勢理毘賣出見爲目合而相婚還入白其父言甚麗神來爾其大神出見而告此者謂之葦原色許男命即喚入而令寢其蛇室於是其妻須勢理毘賣命以蛇比禮（二字以音）授其夫云其蛇將咋以此比禮三擧打撥故如教者蛇自靜故平寢出之亦來日夜者入吳公與蜂室亦授吳公蜂之比禮教如先故平出之亦鳴鏑射入大野之中令採其矢故入其野時即以火廻燒其野於是不知所出之間鼠來云內者富良富良（此四字以音）外者須須夫々（此四字以音）如此言故蹈其處者落隱入之間火者燒過爾其鼠咋持其鳴鏑出來而奉也其矢羽者其鼠子等皆喫也於是其妻須勢理毘賣者持喪具而哭來其父大神者思已死訖出立其野爾持其矢以奉之時率入家而喚入八田間大室而令取其頭之虱故爾見其頭者吳公多在於是其妻以牟久木實與赤土授其夫故咋破其木實含赤土唾出者其大神以爲咋破吳公唾出而於心思愛而寢爾握其神之髮其室每椽結著而五百引石取塞其室戶負其妻須世理毘賣即取持其大神之生太刀與生弓矢及其天詔琴而逃出之時其天詔琴拂樹而地動鳴故其所寢大神聞驚而引仆其室然解結椽髮之間遠逃故爾追至黃泉比良坂遙望呼謂大穴牟遲神曰其汝所持之生太刀生弓矢以而汝庶兄弟者追伏坂之御尾亦追撥河之瀨而意禮（二字以音）爲大國主神亦爲宇都志國玉神而其我之女須世理毘賣爲嫡妻而於宇迦能山（三字以音）之山本於底津石根宮柱布刀斯理（此四字以音）於高天原氷椽多迦斯理（此四字以音）而居是奴也故持其太刀弓追避其八十神之時每坂御尾追伏每河瀨追撥而始作國也故其八上比賣者如先期美刀阿多波志都（此七字以音）故其八上比賣者雖率來畏其嫡妻須世理毘賣而其所生子者刺狹木俣而返故名其子云木俣神亦名謂御井神也八千矛神將婚高志國之沼河比賣幸行之時到其沼河比賣之家歌曰夜知富許能迦微能美許登波夜斯麻久爾都麻々岐迦泥氐登々富々斯故志能久邇々佐賀志賣遠阿理登岐加志氐久波志賣遠阿理登岐許志氐佐用婆比爾阿理多々斯用婆比邇阿理迦用婆勢多知賀遠母伊麻

以レ音亦名謂ニ葦原色許男神一（色許二字以レ音）亦名謂ニ八千矛神一亦名謂ニ宇都志國玉神一（宇都志三字以レ音）竝有ニ五名一故此大國主神之兄弟八十神坐然皆國者避ニ於大國主神一所ニ以避一者其八十神各有下欲レ婚ニ稻羽之八上比賣一之心上共行ニ稻羽一時於ニ大穴牟遲神一負レ帒爲ニ從者一率往於是到ニ氣多之前一時裸菟伏也爾八十神謂ニ其菟一云汝將レ爲ニ本菟一者浴ニ此海鹽一當ニ風吹一而伏ニ高山尾上一故其菟從ニ八十神之敎一而伏爾其鹽隨レ乾其身皮悉風見ニ吹拆一故痛苦泣伏者最後之來大穴牟遲神見ニ其菟一言何由汝泣伏菟答言僕在ニ淤岐島一雖レ欲レ度ニ此地一無ニ度因一故欺ニ海和邇一（此二字以レ音下傚レ此）言吾與レ汝競欲レ計ニ族之多少一故汝者隨ニ其族在一悉率來自ニ此島一至ニ于氣多前一皆列伏度爾吾踏ニ其上一走乍レ讀度於是知下與ニ吾族一孰多上如レ此言者見レ欺而列伏之時吾踏ニ其上讀一度來今將レ下レ地時吾云汝者我見レ欺言竟即伏ニ最端一和邇捕レ我悉剝ニ我衣服一因レ此泣患者先行八十神之命以ニ誨告一浴ニ海鹽一當レ風伏故爲レ如レ敎者我身悉傷於是大穴牟遲神敎ニ告其菟一今急往ニ此水門一以レ水洗ニ汝身一即取ニ其水門之蒲黃一敷散而輾ニ轉其上一者汝身如ニ本膚一必差故爲レ如レ敎其身如レ本也此稻羽之素菟者也於レ今者謂ニ菟神一也故其菟白ニ大穴牟遲神一此八十神者必不レ得ニ八上比賣一雖レ負レ帒汝命獲レ之於是八上比賣答ニ八十神一言吾者不レ聞ニ汝等之言一將レ嫁ニ大穴牟遲神一故爾八十神怒欲レ殺ニ大穴牟遲神一共議而至ニ伯伎國之手間山本一云赤猪在ニ此山一故和禮（此二字以レ音）共追下者汝待取若不ニ待取一者必將レ殺レ汝云而以レ火燒ニ似レ猪大石一而轉落爾追下取時即於ニ其石一所ニ燒著一而死爾其御祖命哭患而參ニ上于天一請ニ神產巢日之命一時乃遣下𧏛貝比賣與ニ蛤貝比賣上令レ作レ活爾𧏛貝比賣岐佐宜（此三字以レ音）集而蛤貝比賣持レ水而塗ニ母乳汁一者成ニ麗壯夫一（訓ニ壯夫一云ニ袁等古一）而出遊行於是八十神見且欺率ニ入山而切ニ伏大樹一茹レ矢打ニ立其木一令レ入ニ其中一即打ニ離其木自矢一而拷殺也爾亦其御祖命哭乍求者得レ見即折ニ其木一而取出活告ニ其子一言汝在ニ此間一者遂爲ニ八十神一所レ滅乃速遣ニ於木國之大屋毘古神之御所一爾八十神覓追臻而矢刺之時自ニ木股一漏逃而去可三參ニ向須佐能男命所レ坐之根堅州國一必其大神議

狹漏彦八島篠。一云清之繫名坂輕彦八島手命又云清之湯山主三名狹漏彦八島野此神五世孫即大國主神

大年神

古事記曰又娶大山津見神之女名神大市比賣生子大年神次宇迦之御魂神云々故其大年神娶神活須沼毘神之女伊怒比賣生子大國御魂神次韓神次曾富理神次白日神次聖神（五柱）又娶香用比賣（此神名以音）生子大香山戸臣神次御年神（二柱）又娶天知迦流美豆比賣（訓天如天亦自知下六字以音）生子奥津日子神次奥津比賣命亦名大戸比賣神此者諸人以拜竈神者也次大山上咋神亦名山末之大主神此神者坐近淡海國之日枝山亦坐葛野之松尾用鳴鏑神者也次庭津日神次阿須波神（此神名以音）次波比岐神（此神名以音）次香山戸臣神次羽山戸神次庭高津日神次大土神亦名土之御祖神九神

宇迦之御魂神

古事記曰大年神次宇迦之御魂神

須勢理毘賣

古事記曰大國主神故隨詔命而參到須佐之男命之御所者其女須勢理毘賣出見爲目合而相婚

布波能母遲久奴須奴命

古事記曰八島士奴美神娶大山都津見神之女名木花知流比賣生子布波能母遲久奴須奴神

深淵之水夜禮花神

古事記曰布波能母遲久奴須奴神娶淤迦美神之女名日阿比賣生子深淵之水夜禮花神（夜禮二字以音）

淤美豆奴神

古事記曰深淵之水夜禮花神娶天之都度閇知泥上神（自都下五字以音）生子淤美豆奴神（此神名以音）

天之冬衣神

古事記曰淤美豆奴神娶布怒豆怒神（此神名以音）之女名布帝耳上神（布帝二字以音）生子天之冬衣神

大國主神

古事記曰天之冬衣神娶刺國大上神之女名刺國若比賣生子大國主神亦名謂大穴牟遲神（牟遲二字

—天津日子根命（天照大神ハ子）

古事記云亦乞度所纏右御美豆良之珠而佐賀美迩迦美而於吹棄氣吹之狹霧所成神御名天津日子根命

日本書紀曰次天津彥根命（是凡川內直山代直等祖也）

○一書曰次天津彥根命此茨城國造額田部連等遠祖也

—活津日子根命（天照大神爲子）

古事記云又乞度所纏左御手之珠而佐賀美迩迦美而於吹棄氣吹之狹霧所成神御名活津日子根命

—熊野久須毘命（天照大神爲子）

古事記曰亦乞度所纏右御手之珠而佐賀美迩迦美而於吹棄氣吹之狹霧所成神御名熊野久須毘命（自久下三字以音）幷五柱於是天照大御神告速須佐之男命是後所生五柱男子者物實因我物所成故自吾子也先所生之三柱女子者物實因汝物所成故乃汝子也如此詔別也

○日本書紀曰正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊次天穗日命次天津彥根命次活津彥根命次熊野櫲樟日命凡五男矣是時天照大神勅曰原其物根則八坂瓊之五百箇御統者是吾物也故彼五男神悉是吾兒乃取而子養焉

○一書曰天照大神謂素戔鳴尊曰以吾所帶之劔今當奉汝汝以汝所持八坂瓊之曲玉可以授予矣如此約束共相換取云々於是素戔鳴尊以所持劔浮寄於天眞名井嚙斷劔末而吹出氣噴之中化生神號天穗日命次正哉吾勝勝速日天忍骨尊次天津彥根命次活津彥根命次熊野櫲樟日命凡五男神云爾

又云天津彥根命云々次活目津彥根命次熯速日命次熊野大隅命凡六男矣

—八島士奴美命

古事記云故其櫛名田比賣以久美度迩起而所生神名謂八島士奴美神（自士下三字以音下傚此）云々八島士奴美神娶大山津見神之女名木花知流（此二字以音）比賣生子布波能母遲久奴須奴神

日本書紀一書曰素戔鳴尊自天而降到於出雲簸之川上則見稻田宮主簀狹之八箇耳女子號稻田媛乃於奇御戸爲起而生兒號淸之湯山主三名

古今要覽稿卷第四

●神祇部

神代系譜下

○建速須佐男命

ー正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命（天照大神爲子傳見於上）

ー天之菩卑能命（天照大神爲子）

古事記曰速須佐男命乞二度天照大御神所レ纏左御美豆良八尺勾璁之五百津之美須麻流珠一云々亦乞二度所レ纏右御美豆良之珠一而佐賀美邇迦美而於二吹棄氣吹之狹霧一所レ成神御名天之菩卑能命（自レ菩下三字以レ音）云々故此後所レ生五柱子之中天菩比命之子建比良邊命云々爾高御產巢日神天照大御神之命以於二天安河之河原一神二集八百萬神一集而思兼神令レ思而詔此葦原中國者我御子之所レ知國言依所レ賜之國也云云故遣二天菩比神一者乃媚二附大國主神一至二于三年一不二復奏一

○日本書紀曰乞二取天照大神髻鬘及腕所レ纏八坂瓊之五百箇御統一濯二於天眞名井一齰然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧所生神號曰二正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊一次天穗日命（是出雲臣土師連等祖也）一書曰素戔嗚尊復含二右瓊一置二之右掌一而生レ兒天穗日命此出雲臣武藏國造土師連等遠祖也

又曰時高皇產靈尊乃還遣二二神一勅二大己貴神一曰今者聞二汝所レ言深有二其理一故更條々而勅之夫汝所治顯露之事宜二是吾孫治一之汝則可三以治二神事一云々又當二主汝祭祀一者天穗日命是也於是大己貴神報曰天神勅敎慇懃如レ此敢不レ從レ命乎吾所レ治顯露事者皇孫當レ治吾將退治二幽事一云々高皇產靈尊因勅曰吾則起二樹天津神籬及天津磐境一當爲二吾孫一奉レ齋矣

ー建比良邊命

古事記云天菩比命之子建比良邊命此出雲國造旡耶志國造上菟毛野國造下菟毛野國造伊自牟國造津島縣直遠江國造等之祖也

何處坐耶次火盛時躡誥出兒亦言吾是天神子之名火進尊吾父及兄何處在耶次火炎衰時躡誥出兒亦言吾是天神之子名火折尊吾父及兄等何處在耶次避㆓火熱㆒時躡誥出兒亦言吾是天神之子名彥火火出見尊吾父及兄等何處在耶然後母吾田鹿葦津姬自㆓火燼中㆒出來就而稱㆑之曰妾所㆑生兒及妾身自當㆓火難㆒無㆑所㆓少損㆒天孫豈見㆑之乎天孫報曰我知㆓本是吾兒㆒但一夜而有㆑身慮㆑有㆓疑者㆒欲㆑使㆘㆓衆人㆒皆知㆖是吾兒幷亦天神能令㆘㆓一夜㆒娠㆖亦欲㆑明㆘汝有㆓靈異之威㆒子等復有㆗超㆑倫之氣㆖故有㆓前日之嘲辭㆒也

又云兄火酢芹命能得㆓海幸㆒故號㆓海幸彥㆒弟彥火火出見尊能得㆓山幸㆒故號㆓山幸彥㆒兄則每㆑有㆓風雨㆒輙失㆓其利㆒弟則雖㆑逢㆓風雨㆒其幸不㆑惑時兄謂㆑弟曰吾試欲㆓與㆑汝換㆑幸弟許諾因易㆑之時兄取㆓弟弓矢㆒入㆑山獵㆑獸弟取㆓兄釣鉤㆒入㆑海釣㆑魚俱不㆑得㆑利空手來歸兄卽還㆓弟弓矢㆒而責㆓己釣鉤㆒時弟已失㆓鉤於海中㆒無㆑因㆓訪獲㆒故別作㆓新鉤數千㆒與㆑之兄怒不㆑受急㆓責故鉤㆒云々

天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命

古事記云天津日高日子波限建鵜葺草葺不合尊娶㆓其姨玉依毘賣命㆒生㆓御子名五瀨命㆒次稻氷命次御毛沼命次若御毛沼命亦名豐御毛沼命亦名神倭伊波禮毘古命四柱故御毛沼命者跳㆓波穗㆒渡㆓坐于常世國㆒稻氷命者爲㆓妣國㆒而入㆓坐海原㆒也

○日本書紀一書曰先生㆓彥五瀨命㆒次稻飯命次三毛入野命狹野尊亦號㆓神日本磐余彥尊㆒所㆑稱㆓狹野㆒者是年少時之號也後撥㆓平天下㆒奄㆓有八洲㆒故復加㆑號曰㆓神日本磐余彥尊㆒　又曰先生㆓五瀨命㆒次三毛野命次稻飯命　次磐余彥尊亦號㆓神日本磐余彥火火出見尊㆒　又曰先生㆓彥五瀨命㆒次稻飯命次神日本磐余彥火火出見尊次稚三毛野命　又曰先生㆓彥五瀨命㆒次磐余彥火火出見尊次彥稻飯命次三毛入野命

- 五瀨命
- 稻氷命
- 御毛沼命
- 若御毛沼命

水因擧目視之乃驚而還入白其父母曰有一希客者在門前樹下海神於是鋪設八重席薦以延內之坐定因問其來意時彥火火出見尊對以情之委曲海神之集大小之魚逼問之僉曰不識唯赤女（赤女鯛魚名也）比有口疾而不來固召之探其口者果得失鈎已而彥火火出見尊因娶海神女豐玉姬仍留住海宮已經三年彼處雖復安樂猶有憶鄉之情故時復太息豐玉姬聞之謂其父曰天孫悽然數歎蓋懷土之憂乎海神乃延彥火火出見尊從容語曰天孫若欲還鄉者吾當奉送便授所得釣鈎因誨之曰以此鈎與汝兄時則陰呼此鈎曰貧鈎然後與之復授潮滿瓊及潮涸瓊而誨之曰漬潮滿瓊則潮忽滿以此沒溺汝兄若兄悔而祈者還漬潮涸瓊則潮自涸以此救之如此逼惱則汝兄自伏及將歸去豐玉姬謂天孫曰妾已娠矣當產不久妾必以風濤急峻之日出到海濱請爲我作產室相待矣彥火火出見尊已還宮一遵海神之敎時兄火闌降命既被危困乃自伏罪曰從今以後吾將爲汝俳優之民請施恩活於是隨其所乞遂赦之其火闌降命卽吾田君小橋等之本祖也後豐玉姬果如前期將其女弟玉依姬直冒風波來到海邊逮臨產時請曰妾產時幸勿以看之天孫猶不能忍竊往覘之豐玉姬方產化爲龍而甚慙之曰如有不辱我者則使海陸相通永無隔絕今既辱之將何以結親昵之情乎乃以草裹兒棄之海邊閉海途而徑去矣故因以名兒曰彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊後久之彥火火出見尊崩葬日向高屋山上陵

○一書云天孫幸大山祇神之女子吾田鹿葦津姬則一夜有身遂生四子故吾田鹿葦津姬抱子而來進曰天神之子寧可以私養乎故告狀知聞是時天孫見其子等嘲之曰妍哉吾皇子者聞喜而生之歟故吾田鹿葦津姬乃慍之曰何爲嘲妾乎天孫曰心之疑矣故嘲之何則雖復天神之子豈能一夜之間使人有身者哉固非吾子矣是以吾田鹿葦津姬益恨作無戶室入居其內誓之曰妾所娠若非天神之胤者必亡是若天神之胤者無所害則放火焚室其火初明時蹋誥出兒自言吾是天神之子名火明命吾父

其和邇之頸送出故如期一日之內送奉也其和邇將返之時解所佩之紐小刀着其頸而返故其一尋和邇者於今謂佐比持神也是以備如海神之敎言與其鉤故自爾以後稍愈貧更起荒心迫來將攻之時出鹽盈珠而令溺其愁請者出鹽乾珠而救如此令惱苦之時稽白僕者自今以後爲汝命之晝夜守護人而仕奉故至今其溺時之種々之態不絕仕奉也於是海神之女豐玉毘賣命自參出白之妾已妊身今臨產時此念天神之御子不可生海原故參出到也爾卽於其海邊波限以鵜羽爲葺草造產殿於是其產殿未葺合不忍御腹之急故入坐產殿之時白其日子言凡佗國人者臨產時以本國之形產生故妾今以本身爲產願勿見妾於是思奇其言竊伺其方產時者化八尋和邇而匍匐委蛇卽見驚畏而遁退爾豐玉毘賣命知其伺見之事以爲心恥乃生置其御子而白妾恒通海道欲往來然伺見吾形是甚怍之卽塞海坂而返入是以名其所產之御子謂天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命（訓波限云那藝佐訓葺草云加夜）然後者雖恨其伺情不忍戀心因治養其御子之緣附其弟玉依毘賣而獻歌之其歌曰云々爾其比古遲（三字以音）答歌曰云々故日子穗々手見命者坐高千穗宮伍佰捌拾歲御陵者卽在其高千穗山之西也

日本書紀曰兄火闌降命自有海幸（幸此云左知）弟彥火火出見尊自有山幸始兄弟二人相謂曰試欲易幸遂相易之各不得其利兄悔之乃還弟弓箭而乞己釣鉤弟時既失兄鉤無由訪覓故別作新鉤與兄兄不肯受而責其故鉤弟患之卽以橫刀鍛作新鉤盛一箕而與之兄忿之曰非我故鉤雖多不取益復急責故彥火火出見尊憂苦甚深行吟海畔時逢鹽土老翁老翁問曰何故在此愁乎對以事之本末老翁曰勿復憂吾當爲汝計之乃作無目籠內彥火火出見尊於籠中沈之于海卽自然有可怜小汀（可怜此云于麻師汀此云波麻）於是棄籠遊行忽至海神之宮其宮也雉堞整頓臺宇瓏門前有一井井上有一湯津杜樹枝葉扶疏時彥火火出見尊就其樹下徒倚彷徨良久有一美人排闥而出遂以玉鋺來當汲

古事記曰次生子御名火遠理命亦名天津日高日子穗々手見命云々火遠理命者爲二山佐知毗古一而取二毛麁物毛柔物一爾火遠理命謂下其兄火照命各相二易佐知一用上三度雖レ乞不レ許然遂纔得二相易一爾火遠理命以二海佐知一釣レ魚都不レ得二一魚一亦其鈎失レ海於是其兄火照命乞二其鈎一曰山佐知母己之佐知佐知海佐知母己之佐知知佐今各謂レ返二佐知一之時佐知二字以レ音其弟火遠理命答曰汝鈎者釣レ魚不レ得二一魚一遂失レ海然其兄強乞徵故其弟破二御佩之十拳劒一作二五百鈎一雖レ償不レ取亦作二一千鈎一雖レ償不レ受云三猶欲二得其正本鈎一於是其弟泣患居二海邊一之時鹽椎神來問曰何虛空津日高之泣患所レ由答言我與レ兄易レ鈎而失二其鈎一是乞二其鈎一故雖レ償二多鈎一不レ受云三猶欲二得其本鈎一故泣患レ之爾鹽椎神云我爲二汝命一作二善議一即造二无レ間勝間之小船一載二其船一以敎曰我押二流其船一者差暫往將有二味御路一乃乘二其道一往者如二魚鱗一所レ造之宮八重敷二具上一坐二其上一而具二百取机代物一爲二御饗一即令レ婚二其女豐玉毗賣一故至二三年一住二其國一於是火遠理命思二其初事一而大一歎故豐玉毗賣命聞二其歎一以白二其父一言三年雖レ住恒無レ歎今夜爲二大一歎一若有二何由一故其父大神問二其聟夫一曰今旦聞二我女之語一云三年雖レ坐恒無レ歎今夜爲二大歎一若有レ由哉亦到二此間一之由奈何爾語二其大神一備如下其兄罸二失鈎一之狀上是以海神悉召二集海之大小魚一問曰若有下取二此鈎一魚上乎故諸魚白之頃者赤海鯽魚於レ喉鯁物不レ得レ食愁言故必是取於是探二赤海鯽魚之喉一者有レ鈎即取出而淸洗奉二火遠理命一之時其綿津見大神誨曰之以二此鈎一給二其兄一時言狀者此鈎者淤煩鈎須々鈎貧鈎宇流鈎云而於二後手一賜淤煩及須々亦宇流六字以レ音然而其兄作二高田一者汝命營二下田一其兄作二下田一者汝命營二高田一爲レ然者吾掌レ水故三年之間必其兄貧窮若恨二怨其爲レ然之事一而攻戰者出二鹽盈珠一而溺若其愁請者出二鹽乾珠一而活如レ此令二惱苦一云授二鹽盈珠鹽乾珠幷兩箇一即悉召二集和邇魚一問曰今天津日高之御子虛空津日高爲三將出二幸上國一誰者幾日送奉而覆奏故各隨二己身之尋長一限レ日而白レ之中一尋和邇白僕者一日送即還來故邇告二其一尋和邇一然者汝送奉若渡二海中一時無レ令二惶畏一即載二

之曰云々是後神吾田鹿葦津姬見皇孫曰妾孕天孫之子不可私以生也皇孫曰雖復天神之子如何一夜使人娠乎抑非吾之兒歟木華開耶姬甚以慙恨乃作無戶室而誓之曰吾所娠是若他神之子者必不幸矣是實天孫之子者必當全生則入其室中以火焚室于時焰初起時共生兒號火酸芹命次火盛時生兒號火明命次生兒號彥火火出見尊亦號火折尊

又曰初火燄明時生兒火明命次火炎盛時生兒火進命又曰火酸芹命次避火炎時生兒火折彥火火出見尊凡此三子火不能害乃母亦無所少損時以竹刀截其兒臍其所棄竹刀終成竹林故號彼地曰竹屋

又曰天孫又問曰其於秀起浪穗之上起八尋殿而手玉玲瓏織紝之少女者是誰之子女耶答曰大山祇神之女等大號磐長姬少號木花開耶姬亦號豐吾田津姬云々皇孫因幸豐吾田津姬則一夜而有身皇孫疑之云々遂生火酢芹命次生火折尊亦號彥火火出見尊母誓已驗方知實是皇孫之胤然豐吾田津姬恨皇孫不與共言皇孫憂之乃爲歌之曰云々

又曰天饒石國饒石天津彥火瓊々杵尊此神娶大山祇神女子木花開耶姬命爲妃而生兒號火酢芹命次彥火火出見尊

又曰兄火酢芹命能得海幸弟彥火火出見尊能得山幸時兄弟欲互易其幸故兄持弟之幸弓入山覓獸終不見獸之影迹弟持兄之幸鉤入海釣魚殊無所獲遂失其鉤是時兄還弟弓矢而責己鉤弟患之乃以所帶橫刀作鉤盛一箕與兄兄不受曰猶欲得吾之幸鉤於是彥火火出見尊不知所求但有憂吟乃行至海邊彷徨嗟嘆

又曰兄既窮途無所逃去乃伏罪曰吾已過矣從今以往吾子孫八十連屬恒當爲汝俳人一曰狗人請哀之弟還出涸瓊則潮自息於是兄知弟有神德遂以伏事其弟是以火酢芹命苗裔諸隼人等至今不離天皇宮墻之傍代吠狗而奉事者也世人不債失針此其緣也

火遠理命

以侍送焉時皇孫勅天鈿女命汝宜以所顯神名爲姓氏焉因賜猿女君之號故猿女君等男女皆呼爲君此其緣也高胸此云多歌武娜娑歌頗傾也此云歌弔志

古事記曰是以名其所産之御子謂天津日高日子波限建鵜葺草葺不合尊（訓波限云那藝佐訓葺草云加夜）然後者雖恨其伺情不忍戀心因治養其御子之緣附其弟玉依毘賣而獻歌之其歌曰阿加陀麻波袁佐閇比迦禮抒斯良多麻能岐美何余曾比斯多布斗久阿理祁理爾其比古遲（三字以音）答歌曰意岐都登理加毛度久斯麻邇和賀葦泥斯伊毛波和須禮志余能許登基登邇故日子穂々手見命者坐高千穂宮伍佰捌拾歲御陵者卽在其高千穂山之西也

火照命

古事記曰火照命（此者隼人阿多君之祖）云々故火照命者爲海佐知毘古（此四字以音下傚此）而取鰭廣物鰭狹物火遠理命者爲山佐知毘古而取毛麁物毛柔物爾火遠理命謂其兄火照命各相易佐知用三度雖乞不許然遂纔得相易爾火遠理命以海佐知釣魚都不得一魚亦其鉤失海於是其兄火照命乞其鉤曰山佐知母己之佐知佐知海佐知母己之佐知佐知今各謂返佐知之時（佐知二字以音）其弟火遠理命答曰汝鉤者釣魚不得一魚遂失海然其兄強乞徵故其弟破御佩之十拳劔作五百鉤雖償不取亦作一千鉤雖償不受云猶欲得其正本鉤

火須勢理命

古事記云故後木花之佐久夜毘賣參出白妾姙身今臨産時是天神之御子私不可産故請爾詔佐久夜毘賣一宿哉姙是非我子必國神之子爾答白吾姙之子若國神之子者産不幸若天神之御子者幸卽作無戸八尋殿入其殿内以土塗塞而方産時以火著其殿而産也故其火盛燒時所生之子名火照命云々次生子名火須勢理命（須勢理三字以音）次生子御名火遠理命

○日本書紀一書云大山祇神乃使二女持百机飮食奉進時皇孫謂姉爲醜不御而罷妹有國色引而幸之則一夜有身故磐長姬大慙而詛

夷曲既而天照大神以思兼神妹萬幡豐秋津姫命配正哉勝々速日天忍穗耳尊爲妃令降之於葦原中國是時勝速日天忍穗耳尊立于天浮橋而臨睨之曰彼地未平矣不須也頗傾凶目杵之國歟乃更還登具陳不降之狀故天照大神復遣武甕槌神及經津主神先行駈除時二神降到出雲便問大己貴神曰汝將此國奉天神耶以不對曰吾兒事代主射鳥遨遊在三津之碕今當問以報之乃遣使人訪焉對曰天神所求何不奉歟故大己貴神以其子之辭報乎二神二神乃昇天復命而告之曰葦原中國皆已平竟時天照大神勅曰若然者方當降吾兒矣且將降間皇孫已生號曰天津彥火々瓊々杵尊時有奏曰欲以此皇孫代降故天照大神乃賜天津彥火々瓊々杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劒三種寶物又以中臣上祖天兒屋命忌部上祖太玉命猨女上祖天鈿女命鏡作上祖石凝姥命玉作上祖玉屋命凡五部神使配侍焉因勅皇孫曰葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可王之地也宜爾皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當與天壤無窮者矣已而且降之間先驅者還白有一神居天八逵之衢其鼻長七咫背長七尺餘當言七尋且口尻明耀眼如八咫鏡而艴然似赤酸醬也即遣從神往問時有八十萬神皆不得目勝相問故特勅天鈿女曰汝是目勝於人者宜往問之天鈿女乃露其胸乳抑裳帶於臍下而笑噱向立是時衢神問曰天鈿女汝爲之何故耶對曰天照大神之子所幸道路有如此居之者誰也敢問之衢神對曰聞天照大神之子今當降行故奉迎相侍吾名是猨田彥大神時天鈿女復問曰汝將先我行乎將抑我先行乎對曰吾先啓行天鈿女復問曰汝何處到耶皇孫何處到耶對曰天神之子則當到筑紫日向高千穗槵觸之峰吾則應到伊勢之狹長田五十鈴川上因曰發顯我者汝也故汝可以送我而致之矣天鈿女還詣報狀皇孫於是脫離天磐座排分天八重雲稜威道別道別而天降之也果如先期皇孫則到筑紫日向高千穗槵觸之峰其猨田彥神者則到伊勢之狹長田五十鈴川上即天鈿女命隨猨田彥神所乞遂

浮渚在之平地、膂完空國自頓丘覓國行去到於吾田長屋狹之御碕。時彼處有一神。名曰事勝國勝長狹。故天孫問其神曰國在耶對曰在也因曰隨勅奉矣故天孫留住彼處。其事勝國勝神者是伊弉諾尊之子也亦名鹽土老翁

又曰天照大神勅天稚彥曰豐葦原中國是吾兒可王之地也然慮有殘賊强暴橫惡之神者故汝先往平之乃賜天鹿兒弓及天眞鹿兒矢遣之天稚彥受勅來降則多娶國神女子經八年無以報命故天照大神乃召思兼神問其不來之狀時思兼神思而告曰宜且遣雉問之於是從彼神謀乃使雉往候之其雉飛下居于天稚彥門前湯津杜樹之杪而鳴之曰天稚彥何故八年之間未有復命時有國神號天探女見其雉曰鳴聲惡鳥在此樹上可射之天稚彥乃取天神所賜天鹿兒弓天眞鹿兒矢便射之則矢達雉胸遂至天神所處時天神見其矢曰此昔我賜天稚彥之矢也今何故來乃取矢而咒之曰若以惡心射者則天稚彥心當遭害若以平心射者則當無恙因還投之卽其矢落下中于天稚彥之高胸因以立死此世人所謂返矢可畏之緣也時天稚彥之妻子從天降來將柩上去而於天作喪屋殯哭之先是天稚彥與味耜高彥根神友善故味耜高彥根神登天弔喪大臨焉時此神形貌自與天稚彥恰然相似故天稚彥妻子等見而喜之曰吾君猶在則攀持衣帶不可排離時味耜高彥根神忿曰朋友喪亡故吾卽來弔如何誤死人於我耶乃拔十握劍斫倒喪屋其屋墮而成山此則美濃國喪山是也世人惡以死者誤己此其緣也時味耜高彥根神光儀花艷映于二丘二谷之間故喪會者歌之曰或云味耜高彥根之妹下照媛欲令衆人知映丘谷者是味耜高彥根神故歌之曰阿妹奈屢夜乙登多奈婆多迺汙奈餓勢屢多磨迺彌素磨屢迺阿奈陀磨波夜彌多儞輔柂和柂邏須阿泥素儞多伽避顧禰又歌之曰阿磨佐箇屢避奈菟謎迺以和多邏素西渡以嗣箇播箇柂輔智箇柂輔智儞阿彌播利和柂嗣妹慮豫嗣儞豫嗣豫利據禰以嗣箇柂輔智此兩首歌辭今號

摩比能徵(此五字以レ音)坐故是以至二于今一天皇命等之御命不レ長也故後木花之佐久夜毘賣參出白妾妊身今臨二產時一是天神之御子私不レ可レ產故請爾詔二佐久夜毘賣一一宿哉妊是非二吾子一必國神之子爾答白吾妊之子若國神之子者產不レ幸若天神之御子者幸卽作二無レ戸八尋殿一入二其殿內一以レ土塗塞而方產時以レ火著二其殿一而產也故其火盛燒時所レ生之子名二火照命一(此者隼人阿多君之祖)次生子名須勢理命(須勢理三字以レ音)次生子御名火遠理命亦名天津日高日子穗々手見命

日本書紀一書曰天忍穗根尊娶二高皇產靈尊女子栲幡千千姬萬幡姬命一亦云高皇產靈尊兒火之戸幡姬兒千千姬命而生二兒天火明命一次生二天津彥根火瓊瓊杵根尊一云々及レ至レ奉レ降二皇孫火瓊々杵尊於葦原中國一也高皇產靈尊勅二八十諸神一曰葦原中國者磐根木株草葉猶能言語夜者若二熛火一而喧響之晝者如二五月蠅一而沸騰之云々是時高皇產靈尊乃用二眞床覆衾一裹二皇孫天津彥根火瓊々杵根尊一而排二披天八重雲一以奉降故稱二此神一曰二天國饒石彥火瓊々杵尊一于レ時降到之處者呼曰二日向襲之高千穗添山峰一矣及二其遊行之時一也云々到二于吾田笠狹之御碕一遂登二長屋之竹島一乃巡二覽其地一者彼有レ人焉名曰二事勝國勝長狹一天孫因問之曰此誰國歟對曰是長狹所住之國也然今乃奉二上天孫一矣天孫又問曰其於二秀起浪穗之上一起二八尋殿一而手玉玲瓏織紝之少女者是誰之子女耶答曰大山祇神之女等大號二磐長姬一少號二木花開耶姬一亦號豐吾田津姬云々皇孫因幸二豐吾田津姬一則一夜而有レ身皇孫疑レ之云々遂生二火酢芹命一次生二火折尊一亦號二彥火火出見尊一母誓已驗方知實是皇孫之胤然豐吾田津姬恨二皇孫一不二與共言一皇孫憂レ之乃爲歌之曰云々

又曰高皇產靈尊以二眞床覆衾一裹二天津彥國光彥火瓊々杵尊一則引二開天磐戸一排二分天八重雲一以奉降之于レ時大伴連遠祖天忍日命帥二來目部遠祖天槵津大來目一背負二天磐靫一臂著二稜威高鞆一手捉二天梔弓天羽羽矢一乃副二持八目鳴鏑一又帶二頭槌劒一而立二天孫之前一遊行降來到二於日向襲之高千穗槵日二上峰天浮橋一而立二於

祖玉祖命者玉祖連等之祖故爾詔天津日子番能邇々藝命而離天之石位押分天之八重多那（二字以音）雲而伊都能知和岐迩知和岐弖（自伊以下十字以音）於天浮橋宇岐士摩理蘇理多々斯弖（自宇以下十一字以音）天降坐於竺紫日向之高千　穗之久　士布流多氣（自久以下六字以音）故爾天忍日命天津久米命二人取負天之石靭取佩頭椎之太刀取持天之羽士弓手挾天之眞鹿兒矢立御前而仕奉故其天忍日命此者大神連等之祖天津久米命此者久米直等之祖也於是詔之此地者向韓國眞來通笠沙之御前而朝日之直　刺國夕日　之日　照國也故此地甚　吉地詔而於底津石根宮柱布斗斯理於高天原氷椽多迦斯理而坐也故爾詔天宇受賣命此立御前所仕奉　猿田毘古大神者專所顯申之汝送奉亦　其神御名者汝負仕奉是以猿女君等負其猿田　毘古之男神名而女呼猿女君之事是也故其猿田毘古神坐阿娜訶（此三字以音地名）時爲漁而於比良天具（自比至天以音）其手見咋合而沈溺海鹽故其沈居底之時名謂底度久（度久二字以音）御魂其海水之都夫多都時名謂都夫多都御魂（自都下四字以音）其阿和佐久時名謂佐久御魂（自佐至久以音）於是送猨田毘古神而還到乃悉追聚鰭廣物鰭狹物以問言汝者大神御子仕奉耶之時諸魚皆仕奉白之中海鼠不白爾天宇受賣命謂海鼠云此口乎不答之口而以細小刀拆其口故於今海鼠口拆也是以御世島之速贄獻之時給猨女君等也於是天津日高日子番能迩々藝命於笠沙御前遇麗美人爾問誰女答白之大山津見神之女名神阿多都比賣（此神名以音）亦名謂木花之佐久夜毘賣（此五字以音）又問有汝之兄弟乎答白我姉石長比賣在也爾詔吾欲目合汝奈何答白僕不得白僕父大山津見神將白故乞遣其父大山津見神之時大歡喜而副其姉石長比賣令持百取机代之物奉出故爾其姉者因其凶醜見畏而返送唯留其弟木花之佐久夜毘賣以一宿爲婚爾大山津見神因返石長比賣大耻白送言我之女二並立奉由者使石長比賣者天神御子之命雖雪雨零風吹恒如石而常堅不動坐亦使木花之佐久夜比賣者如木花之榮榮坐宇氣比弖（自宇下四字以音）貢進此令返石長比賣而獨留木花之佐久夜毘賣故天神御子之御壽者木花之阿

平ニ訖葦原中國ト之白故隨ニ言依賜ト降坐而知者爾其太子正勝吾勝々速日天忍穗耳命答白僕者將レ降裝束之間子生出名天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇々藝命此子應レ降也此御子者御ニ合高木神之女萬幡豐秋津師比賣命ト生ニ子天火明命ト次日子番能邇々藝命二柱ト也

○日本書紀云乞ニ取天照大神髻鬘及腕所レ纏八坂瓊之五百箇御統ト濯ニ於天眞名井ト齰然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧所レ生神號曰ニ正哉吾勝々速日天忍穗耳尊ト

天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇々藝命

古事記云爾天照大御神高木神之命以詔ニ太子正勝吾勝々速日天忍穗耳命ト今平ニ訖葦原中國ト之白故隨ニ言依賜ト降坐而知者爾其太子正勝吾勝々速日天忍穗耳命答白僕者將レ降裝束之間子生出名天邇岐志國邇岐志自レ邇至志以レ音天津日高日子番能邇邇藝命此子應レ降也此御子者御ニ合高木神之女萬幡豐秋津師比賣命ト生ニ子天火明命ト次日子番能邇々藝命二柱也是以隨レ白之科ニ詔日子番能邇々藝命ト此豐葦原水穗國者汝將レ知國言依賜故隨レ命以可ニ天降ト爾日子番能邇々藝命將ニ天降ト之時居ニ天之八衢ト而上光ニ高天原ト下光ニ葦原中國ト之神於レ是有故爾天照大御神高木神之命以詔ニ天宇受賣神ト汝者雖レ有ニ手弱女人ト與ニ伊牟迦布神ト自レ伊至布以レ音面勝神故專汝往將レ問者吾御子爲ニ天降ト之道誰如レ此而居故問賜之時答白僕者國神名猨田毘古神也所ニ以出居ト者聞ニ天神御子天降坐ト故仕ニ奉御前ト而參向之侍爾天兒屋命布刀玉命天宇受賣命伊斯許理度賣命玉祖命幷五伴緒矣支加々而天降也於是副下賜其遠岐斯此三字以レ音八尺勾璁鏡及草那藝劒亦常世思金神手力男神天石門別神上而詔者此之鏡者專爲ニ我御魂ト而如レ拜ニ吾前ト伊都岐奉次思金神者取ニ持前事ト爲レ政此二柱神者拜ニ祭佐久々斯侶伊須受能宮ト自レ佐至レ能以レ音次登由宇氣神此者坐ニ外宮之度相ト神者也次天石戶別神亦名謂ニ櫛石窓神ト亦名謂ニ豐石窓神ト此神者御門之神也次手力男神者坐ニ佐那那縣ト也故其天兒屋命者中臣連等之祖布刀玉命者忌部首等之祖天宇受賣命者猿女首等之祖伊斯許理度賣命者作鏡連等之

木神之命以問使之汝之宇志波祁流(此五字以音)葦原中國者我御子之所知國言依賜故汝心奈何爾答白之僕者不得白我子八重言代主神是可白然爲鳥遊取魚而往大御神之前未還來故爾遣天鳥船神徵來八重事代主神而問賜之時語其父大神言恐之此國者立奉天神之御子卽蹈傾其船而天逆手矣於青柴垣打成而隱也(訓柴云布斯)故爾問其大國主神今汝子事代主神如此白訖亦有可白子乎於是亦白云亦我子有建御名方神除此者無也如此白之間其建御名方神千引石擎手末而來言誰來我國而忍如此物言然欲爲力競故我先欲取其御手故令取其御手者卽取成立氷亦取成劒刃故爾懼而退居爾欲取其建御名方神之手乞歸而取者如取若葦搤批而投離者卽逃去故追往而迫到科野國之洲羽海將殺時建御名方神白恐莫殺我除此地者不行他處亦不違我父大國主神之命不違八重事代主神之言此葦原中國者隨天神御子之命獻故更且還來問其大國主神汝子等事代主神建御名方神二神者隨天神御子之命勿違白訖故汝心奈何爾答白之僕子等二神隨白僕之不違此葦原中國者隨命既獻也唯僕住所者如天神御子之天津日繼所知之登陀流(此三字以音下效此)天之御巢而於底津石根宮柱布斗斯理(此四字以音)於高天原氷木多迦斯理(多迦斯理四字以音)而賜者僕者於百不足八十坰手隱而侍亦僕子等百八十神者卽八重事代主神爲神之御尾前而仕奉者違神者非也如此之白而於出雲國之多藝志之小濱造天之御舍(多藝志三字以音)而水戸神之孫櫛八玉神爲膳夫獻天御饗之時禱白而櫛八玉神化鵜入海底咋出底之波爾(此三字以音)作天八十毘良迦(此三字以音)而鎌海布之柄作燧臼以海蓴之柄作燧杵而鑽出火云是我所燒火者高天原者神產巢日御祖命之登陀流天之新巢之凝烟(訓凝烟云州須)之八拳垂摩弖燒擧(摩弖二字以音)地下者於底津石根燒凝而栲繩之千尋繩打延爲釣海人之口大之尾翼鱸(訓鱸云須受岐)佐和佐和邇(此五字以音)控依騰而打竹之登遠々登遠々邇(此七字以音)獻天之眞魚咋也故建御雷神返參上復(下)奏言向和平葦原中國之狀(上)爾天照大御神高木神之命以詔太子正勝吾勝々速日天忍穗耳命今

其鳴音甚惡故可二射殺一出進即天若日子持二天神所レ賜天之波士弓天之加久矢一射二殺其雉一爾其矢自二雉胸一通而逆下射上逮中坐二天安河之河原一天照大御神高木神之御所上是高木神者高御產巢日神之別名故高木神取二其矢一見者血著二其矢羽一於是高木神告レ之此矢者所レ賜二天若日子一之矢即示二諸神等一詔者或天若日子不レ誤レ命爲レ射二惡神一之矢至者不レ中二天若日子一或有二邪心一者天若日子於二此矢一麻賀禮此三字以レ音云而取二其矢一自二其矢穴一衝返下者中下天若日子寢二胡床一之高胸板上以死亦其雉不レ還故於レ今諺曰二雉之頓使一本レ是也故天若日子之妻下照比賣之哭聲與レ風響到レ天於是在レ天天若日子之父天津國玉神及其妻子聞而降來哭悲乃於二其處一作二喪屋一而河雁爲二岐佐理持一自レ岐下三字以レ音鷺爲二掃持一翠鳥爲二御食人一雀爲二碓女一雉爲二哭女一如レ此行定而日八日夜八夜以遊也此時阿遲志貴高日子根神自レ阿下四字以レ音到而弔二天若日子之喪一時自レ天降到天若日子之父亦其妻皆哭云我子者不レ死有祁理此二字以レ音下傚レ此我君者不レ死坐祁理云取二懸手足一而哭悲也其過所以者此二柱神之容姿甚能相似故是以過也於レ是阿遲志貴高日子根神大怒曰我者愛友故弔來耳何吾比二穢死人一云而拔二所御佩之十掬劒一切二伏其喪屋一以レ足蹶離遣此者在二美濃國藍見河之河上一喪山之者也其持所レ切大刀名謂二大量一亦名謂二神度劒一度字以レ音故阿治志貴高日子根神者忿而飛去之時其伊呂妹高比賣命思レ顯二其御名一故歌曰阿米那流夜淤登多那婆多能宇那賀世流多麻能美須麻流美須麻流迩阿那陀麻波夜美多迩布多和多良須阿治志貴多迦比古泥能迦微曾也此歌者夷振也於是天照大御神詔之亦遣曷二神一者吉爾思金神及諸神白レ之坐二天安河之河上之天石室一名伊都之尾羽張神是可レ遣伊都二字以レ音若亦非二此神一者其神之子建御雷之男神此應レ遣且其天尾羽張神者逆二塞上天安河之水一而塞レ道居故佗神不レ得レ行故別遣二天迦久神一可レ問故爾使三天迦久神問二天尾羽張神一之時答白恐之仕奉然於二此道一者僕子建御雷神可レ遣乃貢進爾天鳥船神副二建御雷神一而遣是以此二神降二到出雲國伊那佐之小濱一而伊那佐三字以レ音拔二十掬劒一逆刺三立于浪穗一趺二坐其劒前一問二其大國主神一言天照大御神高

也於是日神先食其十握劒化生兒瀛津島姫命云々又食九握劒化生兒湍津姫命又食八握劒化生兒田霧姫命云々卽以日神所生三女神者使降居于葦原中國之宇佐島矣今在海北道中號曰道主貴此筑紫水沼君等祭神是也

正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命

古事記云速須佐之男命乞度天照大御神所纒左御美豆良八尺勾璁之五百津之美須麻流珠而奴那登母母由良爾振滌天之眞名井而佐賀美邇迦美而於吹棄氣吹之狹霧所成神御名正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命云々天照大御神告速須佐之男命是後所生五柱男子者物實因我物所成故自吾子也先所生之三柱女子者物實因汝物所成故乃汝子也如此詔別也云々天照大御神之命以豐葦原之千秋長五百秋之水穗國者我御子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命之所知國言因賜而天降也於是天忍穗耳命於天浮橋多々志(此三字以音)而詔之豐葦原之千秋長五百秋之水穗國者伊多久佐夜藝弖(此七字以音)有那理(此二字以音下傚此)告而更還上請于天照大御神爾高御產巢日神天照大御神之命以於天安河之河原神集八百萬神而思金神令思而詔此葦原中國者吾御子之所知國言依所賜之國也故以爲於此國道速振荒振國神等之多在是使何神而將言趣爾思金神及八百萬神議白之天菩比神是可遣故遣天菩比神者乃媚附大國主神至于三年不復奏是以高御產巢日神天照大御神亦問諸神等所遣葦原中國之天菩比神久不復奏亦使何神之吉爾思金神答白可遣天津國玉神之子天若日子故爾以天之麻迦古弓(自麻下三字以音)天之波々(此二字以音)矢賜天若日子而遣於是天若日子降到其國卽娶大國主神之女下照比賣亦慮獲其國至于八年不復奏故爾天照大御神高御產巢日神亦問諸神等天若日子久不復奏又遣曷神以問天若日子之淹留所由於是諸神及思金神答白可遣雉名鳴女時詔之汝行問天若日子狀者汝所以使葦原中國者言趣和其國之荒神等之者也何至于八年不復奏故爾鳴女自天降到居天若日子之門湯津楓上而言委曲如天神之詔命爾天佐具賣(此三字以音)聞此鳥言而語天若日子言此鳥者

永就乎根國如不與姉相見吾何能敢去是以跋涉雲霧遠自來參不意阿姉翻起嚴顏于時天照大神復問曰若然者將何以明爾之赤心也對曰請與姉共誓夫誓約之中（誓約之中此云宇氣譬能美難箇）必當生子如吾所生是女者則可以爲有濁心若是男者則可以爲有清心於是天照大神乃索取素戔嗚尊十握劒打折爲三段濯於天眞名井齰然咀嚼（齰漢咀嚼此云佐我彌爾加武）而吹棄氣噴之狹霧（吹棄氣噴之狹霧此云浮枳于都屢伊浮岐能佐擬理）所生神號曰田心姬次湍津姬次市杵島姬凡三女矣既而素戔嗚尊乞取天照大神髻鬘及腕所纏八坂瓊之五百箇御統濯於天眞名井齰然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧所生神號曰正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊次天穗日命（是出雲臣土師連等祖也）次天津彥根命（是凡川内直山代直等祖也）次活津彥根命次熊野櫲樟同命凡五男矣是時天照大神勅曰原其物根則八坂瓊之五百箇御統者是吾物也故彼五男神悉是吾兒乃取而子養焉

—多紀理毗賣命

—市寸島（上）比賣命

—多岐都比賣命

古事記曰天照大御神先乞度建速須佐之男命所佩十拳劒打折三段而奴那登母母由良爾（此八字以音下效此）振滌天之眞井而佐賀美邇迦美而（自佐下六字以音下效此）於吹棄氣吹之狹霧所成神御名多紀理毘賣命（此神名以音）亦御名謂奧津島比賣命次市寸島（上）比賣命亦御名謂狹依毘賣命次多岐都比賣命（三柱此神名以音）云々於是天照大御神告速須佐之男命是後所生五柱男子者物實因我物所成故自吾子也先所生三柱女子者物實因汝物所成故乃汝子也如此詔別也故其先所生之神多紀理毘賣命者坐胷形之奧津宮次市寸島比賣命者坐胷形之中津宮次田寸津比賣命者坐胷形之邊津宮此三柱神者胷形君等之以伊都久三前大神者也云々故此大國主神娶坐胷形奧津宮神多紀理毘賣命（上）生子阿遲（二字以音）鉏高日子根神次妹高比賣命亦名下光比賣命

○日本書紀一書云日神與素戔嗚尊隔天安河而相對乃立誓約曰汝若不有賊之心者汝所生子必男矣如生男者予以爲子而令治天原

酒於是飲醉死由伏寢爾速須佐之男命拔其所御佩之十拳劔切散其蛇者肥河變血而流故切其中尾時御刀之刃毀爾思怪以御刀之前刺割而見者在都牟刈之大刀思異物而白上於天照大御神也是者草那藝之大刀也（那藝二字以音）故是以其速須佐之男命宮可造作之地求出雲國爾到坐須賀（此二字以音下傚此）地而詔之吾來此地我御心須賀須賀斯而其地作宮坐故其地者於今云須賀也茲大神初作須賀宮之時自其地雲立騰爾作御歌其歌云夜久毛多都伊豆毛夜弊賀岐都麻碁微爾夜弊賀岐都久流曾能夜弊賀岐袁於是喚其足名椎神告言汝者任我宮之首且負名號稲田宮主須賀之八耳神故其櫛名田比賣以久美度邇起而所生神名謂八島士奴美神（自士下三字以音下傚此）又娶大山津見神之女神名大市比賣

日本書紀云伊弉諾尊伊弉冊尊共議曰吾已生大八洲國及山川草木何不生天下之主者歟於是共生日神云々次生月神云々次生素盞嗚尊（一書云神素盞嗚尊速素盞嗚尊）此神有勇悍以安忍且常以哭泣爲行故令國內人民多以夭折復使青山變枯故其父母二神勅素盞嗚尊汝甚無道不可以君臨宇宙固當遠適之於根國遂逐之

○一書曰伊弉諾尊曰云々廻首顧眄之間則有化神是謂素盞嗚尊云々性好殘害故令下治根國

又曰日月既生次生蛭兒云々次生素盞嗚尊此神性惡常好哭恚國民多死青山爲枯故其父母勅曰假使汝治此國必多所殘傷故汝可以馭極遠之根國

又曰素盞嗚尊者可以御滄海之原也

日本書紀曰於是素盞嗚尊請曰吾今奉教將就根國故欲暫向高天原與姉相見而後永退矣勅許之乃昇詣之於天也云々始素盞嗚尊昇天之時溟渤以之鼓盪山岳爲之鳴呴此則神性雄健使之然也天照大神素知其神暴惡至聞來詣之狀乃勃然而驚曰吾弟之來豈以善意乎謂當有奪國之志歟夫父母既任諸子各有其境如何棄置當就之國而敢窺窬此處乎云々素盞嗚尊對云吾元無黑心但父母已有嚴勅將

爾速須佐之男命白于天照大御神我心淸明故我所生之子得手弱女因此言者自我勝云而於勝佐備（此二字以音）離天照大御神之營田之阿（此阿字以音）埋其溝亦其於聞看大嘗之殿屎麻理（此二字以音）散故雖然爲天照大御神者登賀米受而告如屎醉而吐散登許曾（此三字以音）我那勢之命爲如此又離田之阿埋溝者地矣阿多良斯登許曾（自阿以下七字以音）我那勢之命爲如此登（此一字以音）詔雖直猶其惡態不止而轉天照大御神坐忌服屋而令織神御衣時穿其服屋之頂逆剝天班馬剝而所墮入時天衣織女見驚而於梭衝陰上而死（訓陰上云富登）云々於是八百万神共議而於速須佐之男命負千位置戶亦切鬚及手足爪令拔而神夜良比爾夜良比岐又食物乞大氣津比賣神爾大氣津比賣自鼻口及尻種々味物取出而種々作具而進時速須佐之男命立伺其態爲穢汚而奉進乃殺其大氣津比賣神故所殺神於身生物者於頭生蠶於二目生稻種於二耳生粟於鼻生小豆於陰生麥於尻生大豆故是神産巢日御祖命令取茲成種故所避追而降出雲國之肥上

河上名鳥髮蛇此時箸從其河流下於是須佐之男命以爲人有其河上而尋覓上往者老夫與老女二人在而童女置中而泣云々爾問賜之汝等者誰故其老夫答言僕者國神大山上津見神之子焉僕名謂足上名椎妻名謂手上名椎女名謂櫛名田比賣亦問汝哭由者何答白言我之女者自本在八稚女是高志之八役遠呂智（此三字以音）每年來喫今且可來時故泣爾問其形如何答白彼目如赤加賀智而身一有八頭八尾亦其身生蘿及檜椙其長度谿八谷峽八尾而見其腹者悉常血爛也（此謂赤加賀知者今酸醬者也）爾速須佐之男命詔其老夫是汝之女者奉於吾哉答白恐亦不覺御名爾答詔吾者天照大御神之伊呂勢者也（自伊下三字以音）故今自天降坐也爾足名椎手名椎神白然坐者恐立奉爾速須佐之男命乃於湯津爪櫛取成其童女而判御美豆良告其足名椎手名椎神汝等釀八鹽折之酒且作廻垣於其垣作八門每門結八佐受岐（此三字以音）每其佐受岐置酒船而每船盛其八鹽折酒而待故隨告而如此設備待之時其八役遠呂智信如言來乃每船垂入己頭飮其

天照大神怒甚之曰汝是惡神不須相見乃與
月夜見尊一日一夜隔離而住

建速須佐之男命

古事記云洗御鼻時所成神名建速須佐之男命云云次詔建速須佐之男命汝命者所知海原矣事依也故各隨依賜之命所知者之中速須佐之男命不治所命之國而八拳須至于心前啼伊佐知伎也（自伊下四字以音下傚此）其泣狀者靑山如枯山泣枯河海者悉泣乾是以惡神之音如狹蠅皆滿萬物之妖悉發故伊耶那岐大御神詔速須佐之男命何由以不治所事依之國而哭伊佐知流爾答白僕者欲罷妣國根之堅洲國故哭爾伊耶那岐大御神大忿怒詔然者汝不可住此國乃神夜良比爾夜良比賜也云云於是速須佐之男命言然者請天照大御神將罷乃參上天云云速須佐男命乞度天照大御神所纏左御美豆良八尺勾璁之五百津之美須麻流珠而奴那登母母由良爾振滌天之眞名井而佐賀美邇迦美而於吹棄氣吹狹霧所成神御名正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命亦乞度所纏右御美豆良之珠而佐賀美邇迦美而於吹棄氣吹之狹霧所成神御名天之菩卑能命（自菩下三字以音）亦乞度所纏右御迦豆良之珠而佐賀美邇迦美而於吹棄氣吹之狹霧所成神御名天津日子根命又乞度所纏左御手之珠而佐賀美邇迦美而於吹棄氣吹之狹霧所成神御名活津日子根命亦乞度所纏右御手之珠而佐賀美邇迦美而於吹棄氣吹之狹霧所成神御名熊野久須毘命（自久下三字以音）并五柱於是天照大御神告速須佐之男命是後所生五柱男子者物實因我物所成故自吾子也先所生之三柱女子者物實因汝物所成故乃汝子也如此詔別也故其先所生之神多記理毘賣命者坐胷形之奥津宮次市寸島比賣命者坐胷形之中津宮次田寸津比賣命者坐胷形之邊津宮此三柱神者胷形君等之以伊都久三前大神者也故此後所生五柱子之中天菩比命之子建比良遪命此出雲國造无耶志國造上[illegible]毛野國造下菟毛野國造伊自牟國造津島縣直遠江國造等之祖也次天津日子根命凡河內國造額田部湯坐連木國造倭田中直山代國造馬來田國造道尻岐閇國造周芳國造倭淹知造高市縣主蒲生稻寸三枝部造部等之祖也

雷神返參上復奏言向和平葦原中國之狀爾天照大御神高木神之命以詔太子正勝吾勝々速日天忍穗耳命今平訖葦原中國之白故隨言依賜降坐而知看爾其太子正勝吾勝々速日天忍穗耳命答白僕者將降裝束之間子生出名天邇岐志國邇岐志（自邇至志以音）天津日高日子番能邇々藝命此子應降也云々是以隨白之科詔日子番能邇々藝命此豐葦原水穗國者汝將知國言依賜故隨命以可天降云々於是副賜其遠岐斯（此三字以音）八尺勾璁鏡及草那藝劔亦常世思金神手力男神天石門別神而詔者此之鏡者專爲我御魂而如拜吾前伊都岐奉次思金神者取持前事爲政此二柱神者拜祭佐久々斯侶伊須受能宮（自佐至能以音）次登由宇氣神此者坐外宮之度相神者也

○日本書紀曰既而伊弉諾尊伊弉冊尊共議曰吾已生大八洲國及山川草木何不生天下之主者歟於是共生日神號大日孁貴（大日孁貴此云於保比屢咩能武智孁音力丁反一書云天照大神一書云天照大日孁尊）此子光華明彩照徹於六合之內故二神喜曰吾息雖多未有若此靈異之兒不宜久留此國自當早送于天而授以天上之事是時天地相去未遠以天柱擧於天上也

月讀命

古事記曰次洗右御目時所成神名月讀命云々次詔月讀命汝命者所知夜之食國矣事依也

○日本書紀曰次生月神（一書云月弓尊月夜見尊月讀尊）其光彩亞日可以配日而治故亦送之于天

○一書曰伊弉諾尊云々往至筑紫日向小戸橘之檍原而祓除焉云々復洗右眼因以生神號曰月讀尊云々已而伊弉諾尊勅任三子曰云々月讀尊者可以治滄海原潮之八百重也

又曰伊弉諾尊勅任三子曰云々月夜見尊者可以配日而知天事也云々既而天照大神在於天上曰聞葦原中國有保食神宜爾月夜見尊就候之月夜見尊受勅而降已到于保食神許保食神乃廻首嚮國則自口出飯又嚮海則鰭廣鰭狹亦自口出又嚮山則毛麁毛柔亦自口出夫品物悉備貯之百机而饗之是時月夜見尊忿然作色曰穢矣鄙矣寧可以口吐之物敢養我乎廼拔劔擊殺然後復命具言其事時

照明一於是八百万神共議而於二速須佐之男命一負二千位置戸一亦切二鬚及手足爪一令レ拔而神夜良比岐云々天照大御神之命以豊葦原之千秋長五百秋之水穗國者我御子正勝吾勝々速日天忍穗耳命之所レ知國言因賜而天降也於是天忍穗耳命於二天浮橋一多々志（此三字以レ音）而詔之豊葦原之千秋長五百秋之水穗國者伊多久佐夜藝弖（此七字以レ音）有那理（此二字以レ音下效レ此）告而更還上請二于天照大御神一爾高御産巢日神天照大御神之命以於二天安河之河原一神二集八百万神一集而思金神令レ思而詔此葦原中國者我御子之所レ知國言依所レ賜之國也故以下爲於二此國一道速振荒振國神等之多在上是使二何神一而將二言趣一爾思金神及八百万神議白之天菩比神者可レ遣故遣二天菩比神一者乃媚二附大國主神一至二于三年一不二復奏一爾以高御産巢日神天照大御神亦問二諸神等一所レ遣二葦原中國一之天菩比神久不二復奏一亦使二何神一之吉爾思金神答白可レ遣二天津國玉神之子天若日子一故爾以二天之麻迦古弓（自レ麻下三字以レ音）天之波々（此二字以レ音）矢一賜二天若日子一而遣於是天若日子降二到其國一卽娶二大國主神之女下照比賣一亦慮レ獲二其

國一至二于八年一不二復奏一故爾天照大御神高御産巢日神亦問二諸神等一天若日子久不二復奏一又遣二曷神一以問二天若日子之淹留所一レ由於是諸神及思金神答白可レ遣二雉名鳴女一時詔之汝行問二天若日子一狀者汝所三以使二葦原中國一者言二趣和其國之荒振神等一之者也何至二于八年一不二復奏一故爾鳴女自レ天降到居二天若日子之門湯津楓上一而言委曲如二天神之詔命一爾天佐具賣（此三字以レ音）聞二此鳥言一而語二天若日子一言此鳥者其鳴音甚惡故可二射殺一卽進天若日子持二天神所レ賜天之波士弓天之加久矢一射二殺其雉一爾其矢自二雉胷一通而逆下射上逮中坐二天安河之河原一天照大御神高木神之御所上云々於是天照大御神詔之亦遣二曷神一者吉爾思金神及諸神白之坐二天安河々上之石室一名伊都之尾羽張神是可レ遣（伊都二字以レ音）若亦非二此神一者其神之子建御雷之男神此應レ遣且其天尾羽張神者逆二塞上天安河之水一而塞レ道居故佗神不レ得レ行故別遣二天迦久神一可レ問故爾使三天迦久神問二天尾羽張神一之時答白恐之仕奉然於二此道一者僕子建御雷神可レ遣乃貢進爾天鳥船神副二建御雷神一而遣云々故建御

勝佐備（此二字以音）離天照大御神之營田之阿（此阿字以音）埋其溝、亦其於聞看大嘗之殿屎麻理（此二字以音）散故雖然爲天照大御神者登賀受而告如屎醉而吐散登許曾（此三字以音）我那勢之命爲如此、又離田之阿埋溝者地矣阿多良斯登許曾（自阿以下七字以音）我那勢之命爲如此登（此一字以音）詔雖直猶其惡態不止而轉天照大御神坐忌服屋而令織神御衣之時穿其服屋之頂逆剝天斑馬剝而所墮入時天衣織女見驚而於梭衝陰上而死（訓陰上云富登）故於是天照大御神見畏閉天石屋戶而刺許母理（此三字以音）坐也爾高天原皆暗葦原中國悉闇因此而常夜往於是万神之聲者狹蠅那須（此二字以音）滿万妖悉發是以八百万神於天安之河原神集集而（訓集云都度比）高御產巢日神之子思金神令思（訓金云加尼）而集常世長鳴鳥令鳴而取天安河之河上之天堅石取天金山之鐵而求鍛人天津麻羅而（麻羅二字以音）科伊斯許理度賣命（自伊下六字以音）令作鏡科玉祖命令作八尺勾璁之五百津之御須麻流之珠而召天兒屋命布刀玉命（布刀二字以音下傚此）而內拔天香山之眞男鹿之肩拔而取天香山之天波々迦（此二字以音木名）而令占合麻迦

那波而（自麻下四字以音）天香山五百津眞賢木矣根許士爾許士而（自許下五字以音）於上枝取著八尺勾璁之五百津之御須麻流之玉於中枝取繫八尺鏡（訓八尺云八阿多）於下枝取垂白丹寸手靑丹寸手而（訓垂云志殿）此種々物者布刀玉命布刀御幣登取持而天兒屋命布刀詔戶言禱白而天手力男神隱立戶掖而天宇受賣命手取繫天香山之天之日影而爲繩天之眞折而手草結天香山之小竹葉而（訓小竹云佐々）於天之石屋戶伏汙氣（此二字以音）而蹈登杼呂許志（此五字以音）爲神懸而掛出胷乳裳緖忍垂於番登也爾高天原動而八百万神共咲於是天照大御神以爲怪細開天石屋戶而內告者因吾隱坐而以爲天原自闇亦葦原中國皆闇矣何由以天宇受賣者爲樂亦八百万神諸咲爾天宇受賣白言益汝命而貴神坐故歡喜咲樂如此言之間天兒屋命布刀玉命指出其鏡奉天照大御神之時天照大御神逾思奇而稍自戶出而臨坐之時其所隱立之天手力男神取其御手引出卽布刀玉命以尻久米（此二字以音）繩控度其御後方白言從此以內不得還入故天照大御神出坐之時高天原及葦原中國自得

古今要覽稿卷第三

神祇部

神代系譜中

天照大御神

古事記云於是洗左御目時所成神名天照大御神次洗右御目時所成神名月讀命次洗御鼻時所成神名建速須佐之男命（須佐二字以音）此時伊耶那岐命大歡喜詔吾者生生子而於生終得三貴子即其御頸珠之玉緒母由良迩（此四字以音下傚此）取由良加志而賜天照大御神而詔之汝命者所知高天原矣事依而賜也故其御頸珠名謂御倉板擧之神（訓板擧云多那）云々於是速須佐之男命言然者請天照大御神將罷乃參上天時山川悉動國土皆震爾天照大御神聞驚而詔我那勢命之上來由者必不善心欲奪我國耳即解御髮纏御美豆羅而乃於左右御美豆羅亦於御鬘亦於左右御手各纏持八尺勾璁之五百津之美須麻流之珠而（自美至流四字以音下傚此）曾毘良迩者負千入之靫（訓入云能理下傚此自曾至迩者以音）附五百入之靫亦所取佩伊都（此二字以音）之竹鞆而弓腹振立而堅庭者於向般踏那豆美（三字以音）如沫雪蹶散而伊都（二字以音）之男建（訓建云多祁夫）踏建而待問何故上來爾速須佐之男命答白僕者無邪心唯大御神之命以問賜僕之哭伊佐知流之事故白都良久（三字以音）僕欲往妣國以哭爾大御神詔汝者不可在此國而神夜良比爾夜良比賜故以爲請將罷往之狀參上耳無異心爾天照大御神詔然者汝心之清明何以知於是速須佐之男命答白各宇氣比而生子（自宇以下三字以音下傚此）故爾各中置天安河而宇氣布時天照大御神先乞度建速須佐之男命所佩十拳劒打折三鋌而奴那登母々由良爾（此八字以音下傚此）振滌天之眞名井而佐賀美爾迦美而（自佐下六字以音下傚此）於吹棄氣吹之狹霧所成神（三神）云々於是天照大御神告速須佐之男命是後所生五柱男子者物實因我物所成故自吾子也先所生之三柱女子者物實因汝物所成故乃汝子也如此詔別也云々爾速須佐之男命白于天照大御神我心清明故我所生之子得手弱女因此言者自我勝云而於

神（訓ㇾ上云二宇閉一）次上筒之男命此三柱綿津見神者阿曇連等之祖神以伊都久神也（伊以下三字以ㇾ音下效ㇾ此）故阿曇連等者其綿津見神之子宇都志日金拆命之孫也（宇都志三字以ㇾ音）其底筒之男命中筒之男命上筒之男命三柱神者墨江之三前大神也

―天照大御神

―月讀命

―建速須佐之男命

古事記曰於ㇾ是洗二左御目一時所ㇾ成神名天照大御神次洗二右御目一時所ㇾ成神名月讀命次洗二御鼻一所ㇾ成神名建速須佐之男命（須佐二字以ㇾ音）

右件八十禍津日神以下速須佐之男命以前十柱神者因ㇾ滌二御身一所ㇾ生者也

此時伊耶那岐命大歡喜詔吾者生二生子一而於二生終一得二三貴子一卽其御頸珠之玉緒母由良邇（此四字以ㇾ音下效ㇾ此）取由良迦志而賜二天照大御神一而詔之汝命者所二知高天原一矣事依而賜也云々故其伊耶那岐大神者坐二淡海之多賀一也

日本書紀一書曰伊弉諾尊曰吾欲ㇾ生二御㝢之珍子一以二左手一持二白銅鏡一則有二化出之神一是謂二天日孁尊一右手持二白銅鏡一則有二化出之神一是謂二月弓尊一又廻ㇾ首顧眄之間則有二化神一是謂二素盞嗚尊一卽大日孁尊及月弓尊並是質性明麗故使ㇾ照二臨天地一素戔嗚尊是性好二殘害一故令三下治二根國一珍此云二于圖一顧眄之間此云二美屢摩沙可利爾一

―宇都志日金拆命

一邊津那藝佐毘古神

一邊津甲斐辨羅神

古事記曰是以伊耶那伎大神詔 吾者到ニ於伊耶那志許米上志許米岐(此九字以レ音)穢國ニ而在祁理(此二字以レ音)故吾者爲ニ御身之禊ニ而到ニ坐竺紫日向之橘小門之阿波岐(此三字以レ音)原ニ而禊祓也故於ニ投ニ棄御杖ニ所レ成神名衝立船戸神次於ニ投ニ棄御帶ニ所レ成神名道之長乳齒神次於ニ投ニ棄御裳ニ所レ成神名時量師神次於レ投ニ棄御衣ニ所レ成神名和豆良比能宇斯能神(此神名以レ音)次於レ投ニ棄御褌ニ所レ成神名道俣神次於レ投ニ棄御冠ニ所レ成神名飽咋之宇斯能神(自レ宇以下三字以レ音)次於レ投ニ棄左御手之手纏ニ所レ成神名奧疎神(訓レ奧云ニ淤伎ニ下效レ此訓レ疎云ニ奢加留ニ下效レ此)次奧津那藝佐毘古神(自レ那以下五字以レ音下效レ此)次奧津甲斐弁羅神(自レ甲以下四字以レ音下效レ此)次於ニ投ニ棄右御手之手纏ニ所レ成神名邊疎神次邊津那藝佐毘古神次邊津甲斐弁羅神

右件自ニ船戸神ニ以下邊津甲斐弁羅神以前十二神者因レ脱ニ著身之物ニ所レ生神也

一八十禍津日神

一太禍津日神

古事記曰於レ是詔之上瀨者瀨速下瀨者瀨弱而初於ニ中瀨ニ隨迦豆伎而滌時所ニ成坐ニ神名八十禍津日神(訓レ禍云ニ摩賀ニ下效レ此)次大禍津日神此二神者所ニ到其穢繁國ニ之時因ニ汚垢ニ而所レ成神之者也

一神直毘神

一大直毘神

一伊豆能賣神

古事記曰次爲レ直ニ其禍ニ而所レ成神名神直毘神(此字以レ音下效レ此)次大直毘神次伊豆能賣神(并三神也伊以下四字以レ音)

一底津綿上津見神

一底筒之男命

古事記曰次於ニ水底ニ滌時所レ成神名底津綿上津見神底筒之男命

一中津綿上津見神

一中筒之男命

古事記曰於ニ水中ニ滌時所レ成神名中津綿上津見神次中筒之男命

一上津綿上津見神

一上筒之男命

古事記曰於ニ水上ニ滌時所レ成神名上津綿上津見

入見之時宇士多加禮許呂々岐弖（此十字以音）於頭者大雷居於胷者火雷居腹者黑雷居於陰者拆雷居於左手者若雷居於右手者土雷居於左足者鳴雷居於右足者伏雷居並八雷神成居於是伊耶那岐命見畏而逃還其妹伊耶那美命言令見辱吾卽遣豫母都志許賣（此六字以音）令追爾伊耶那岐命取黑御鬘投棄乃生蒲子是摭食之間逃行猶追亦判其右御美豆良之湯津々間櫛引闕而投棄乃生笋是拔食之間逃行且後者於其八雷神副千五百之黃泉軍令追爾拔所御佩之十拳劒而於後手布伎都々（此四字以音）逃來猶追到黃泉比良（此二字以音）坂之坂本時取在其坂本桃子三箇待擊者悉迯返也爾伊耶那岐命告桃子汝如助吾於葦原中所有宇都志伎（此上四字以音）青人草落苦瀨而患惚時可助告賜名號意富加牟豆美命（自意至美以音）最後其妹伊耶那美命身自追來焉爾千引石引塞其黃泉比良坂其石置中各對立而度事戶之時伊耶那美命言愛我那勢命爲如此者汝國之人草一日絞殺千頭爾伊耶那岐命詔愛我那迩妹命汝爲然者吾一日立千五百產屋是以一日必千人死一日必千五百人生也故號其伊耶那美神命謂黃泉津大神亦云以其追斯伎斯（此三字以音）而號道敷大神亦所塞其黃泉比良坂之石者號道反大神亦謂塞坐黃泉戶大神故其所謂黃泉比良坂者今謂出雲國之伊賦夜坂也

日本書紀一書曰伊弉冊尊脹滿太高上有八色雷公云々所謂八雷者在首曰大雷在胸曰火雷在腹曰土雷在脊曰稚雷在尻曰黑雷在手曰山雷在足上曰野雷在陰上曰裂雷

衝立船戶神

道之長乳齒神

時量師神

和豆良比能宇斯能神

道俣神

飽咋之宇斯能神

奧疎神

奧津那藝佐毘古神

奧津甲斐辨羅神

邊疎神

劒斬輌遇突智爲三段此各化成神也復劒
刃垂血是爲天安河邊所在五百箇磐石也即此經
津主神之祖矣復劒鐔垂血激越爲神號曰甕速日
神次熯速日神其甕速日神是武甕槌神之祖也亦
曰甕速日命次熯速日命次武甕槌神復劒鋒垂血
激越爲神號曰磐裂神次磐筒男命一曰磐筒男
命及磐筒女命復劒頭垂血激越爲神號曰闇龗
次闇山祇次闇罔象

正鹿山上津見神
淤縢山津見神
奧山上津見神
闇山津見神
志藝山津見神
羽山津見神
原山津見神
戸山津見神

古事記云所殺迦具土神之於頭所成神名正鹿
山上津見神次於胸所成神名淤縢山津見神（淤縢二字以音）
次於腹所成神名奧山上津見神次於陰所成
神名闇山津見神次於左手所成神名志藝山津
見神（志藝二字以音）次於右手所成神名羽山津見神次
於左足所成神名原山津見神次於右足所成
神名戸山津見神（自正鹿山津見神至戸山津見神并八神）

大雷
火雷
黑雷
拆雷
若雷
土雷
鳴雷
伏雷

古事記曰故所斬之刀名謂天之尾羽張亦名謂
伊都之尾羽張於是欲相見其妹伊耶那美命追
往黃泉國自殿縢戸出向之時伊耶那岐命語詔
之處我那迩妹命吾與汝所作之國未作竟故可
還爾伊耶那美命答白悔哉不速來吾者爲黃
泉戸喫然愛我那勢命（那勢二字以音下傚此）入來坐之事恐
故欲還且具與黃泉神相論莫視我如此白而
還入其殿內之間甚久難待故刺左之御美豆良（三字以音下傚此）湯津々間櫛之男柱一箇取闕而燭一火

又曰伊弉冊尊且生火神軻遇突智之時悶熱懊惱因爲吐此化爲神名曰金山彥次小便化爲神名曰罔象女大便化爲神名曰埴山媛

豐宇氣毘賣神

泣澤女神

石拆神

根拆神

石筒之男神

甕速日神

樋速日神

武御雷之男神

闇淤加美神

阿比賣（布波能母遲久奴須奴神妻）

闇御津羽神

古事記曰故迩伊耶那岐命詔之愛我那迩妹命乎（那迩二字以音下效此）謂易子之一木乎（上）乃匍匐御枕方匍匐御足方而哭時於御淚所成神坐香山之畝尾木本名泣澤女神故其所神避之伊耶那美神者葬出雲國與伯伎國堺比波之山也於是伊邪那岐命拔所御佩之十拳劔斬其子迦具土神之頸爾著其御刀前之血走就湯津石村所成神名石拆神次根拆神次石筒之男神（三神）次著御刀本血亦走就湯津石村所成神名甕速日神次樋速日神次建御雷之男神亦名建布都神（布都二字以音下效此）亦名豐布都神（三神）次集御刀之手上血自手俣漏出所成神名（訓漏云久伎）闇淤加美神（淤以下三字以音下效此）次闇御津羽神

上件自石拆神以下闇御津羽神以前幷八神者因御刀所生之神者也

日本書紀一書曰又飢時生兒號倉稻魂命又生海神等號少童命山神等號山祇水門神等號速秋津日命木神等號句句廼馳土神號埴安神然後悉生萬物焉至於火神軻遇突智之生也其母伊弉冊尊見焦而化去于時伊弉諾尊恨之曰唯以一兒替我愛之妹者乎則匍匐頭邊匍匐脚邊而哭泣流涕焉其淚墮而爲神是卽畝丘樹下所居之神號啼澤女命矣遂拔所帶十握

國之闇戸神

大戸惑子神

大戸惑女神

古事記曰此大山津見神野椎神二神因山野持別而生神名天之狹土神（訓土云豆知下效此）次國之狹土神次天之狹霧神次國之狹霧神次天之闇戸神次國之闇戸神次大戸惑子神（訓惑云麻刀比下效此）次大戸惑女神（自天之狹土神至大戸惑女神并八神）

神大市比賣（速須佐之男命妻）

木花知流比賣（八島士妓美神之妻）

鳥之石楠船神

古事記曰次生神名鳥之石樟船神亦名謂天鳥船

大宜都比賣神

古事記曰次生大宜都比賣神（此神名以音）

火之夜藝速男神

古事記曰亦名謂火之炫毘古神亦名謂火之迦具土神（加具二字以音）因生此子美蕃登（此三字以音）見炙而病臥

日本書紀一書曰次生火神軻遇突智時伊弉冊尊爲軻遇突智所焦而終矣其且終之間臥生土神埴山姫及水神罔象女即軻遇突智娶埴山姫生稚產靈此神頭上生蠶與桑臍中生五穀罔象此云美都波

金山毘古神

金山毘賣神

波迩夜須毘古神

波迩夜須毘賣神

彌都波能賣神

和久產巢日神

古事記曰美蕃登（此三字以音）見炙而病臥在多具理（此三字以音）生神名金山毘古神（訓金云迦那下效之）次金山毘賣神次於屎成神名波夜迩須毘古神（此神名以音）次波迩夜須毘賣神（此神名以音）次於屎成神名彌都波能賣神次和久產巢日神此神之子謂豐宇氣毘賣神（自宇以下四字以音）故伊耶那美神者因生火神遂神避坐也（自天鳥船至豐宇氣比賣神并八神）

日本書紀一書曰伊弉冊尊生火產靈時爲子所焦而神退矣亦云神避其且神退之時即生水神罔象女及土神埴山姫又生天吉葛天吉葛此云阿摩能與佐圖羅一云與曾豆羅

速秋津日子神

速秋津比賣神

古事記曰生二風木津別之忍男神一次生二海神一名大綿津見神次生二水戸神一名速秋津日子神次妹速秋津比賣神（自二大事忍男神一至二秋津比賣神一並十神）

沫那藝神

沫那美神

頰那藝神

頰那美神

天之水分神

國之水分神

天之久比奢母知神

國之久比奢母知神

古事記曰此速秋津日子速秋津比賣二神因二河海一持別而生レ神名二沫那藝神一（那藝二字以レ音下傚此）次沫那美神（那美二字以レ音下傚レ此）次頰那藝神次頰那美神次天之水分神（訓レ分云二久麻理一下傚レ此）次國之水分神次天之久比奢母知神（自レ久以下五字以レ音下傚レ此）次國之久比奢母智神（自二沫那藝神一至二國之久比奢母智神一並八神）

風神

古事記曰次生二風神一名二志那都比古神一（此神名以レ音）日本書紀一書曰伊弉諾尊與二伊弉冊尊一共生二大八洲國一然後伊弉諾尊曰我所生之國唯有二朝霧一而熏滿之哉乃吹撥之氣化二爲神一號曰二級長戸邊命一亦曰二級長津彦命一是風神也

木神

古事記曰次生二木神一名二久々能智神一（此神名以レ音）

山神

古事記曰次生二山神一名二大山上津見神一

野神

古事記曰次生二野神一名麻鹿屋野比賣神亦名謂二野椎神一（自二志那津比古神一至二野椎一并四神）日本書紀曰次生レ山次生二木祖句句廼馳一次生二草祖草野姫一亦名二野槌一

天之狹土神

國之狹土神

天之狹霧神

國之狹霧神

天之闇戸神

洲次筑紫洲次吉備子洲次大洲

- 大倭豐秋津島
- 吉備兒島
- 小豆島
- 大島
- 女島
- 知訶島
- 兩兒島

古事記曰次生隱岐之三子島亦名天之忍許呂別（許呂二字以音）次生筑紫島此島亦身一而有面四每面有名故筑紫國謂白日別豐國謂豐日別肥國謂速日別日向國謂豐久士比泥別（自久至泥以音）熊曾國謂建日別（曾字以音）次生伊伎島亦名謂天比登都柱（自比至都以音訓天如天）次生津島亦名謂天之狹手依比賣次生佐度島次生大倭豐秋津島亦名謂天御虛空豐秋津根別故因此八島先所生謂大八島國然後還坐之時生吉備兒島亦名謂建日方別次生小豆島亦名謂大野手比賣次生大島亦名謂大多麻流別（自多至流以音）次生女島亦名謂天一根（訓天如天）次生知訶島亦名謂天之忍男次生兩兒島亦名謂天兩屋（自吉備兒島至天兩屋島幷六島）

日本書紀曰次生筑紫洲次雙生隱岐洲與佐度洲世人或有雙生者象此也次生越洲次生大洲次生吉備子洲由是始起大八洲國之號焉卽對馬島壹岐島及處々小島皆是潮沫凝成者矣亦曰水沫凝而成也

- 大事忍男神
- 石土毘古神
- 石巢比賣神
- 大戶日別神
- 天之吹上男神
- 大屋毗古神
- 風木津別之忍男神

古事記曰既生國竟更生神故生神名大事忍男神次生石土毘古神（訓石云伊波亦毘古二字以音下效此）次生石巢比賣神次生大戶日別神次生天之吹上男神次生大屋毗古神次生風木津別之忍男神（訓風云加邪訓木以音）

- 大綿津見神

次吉備子洲由此謂之大八洲國矣瑞此云彌圖妍哉此云阿那而惠夜可愛此云哀太古此云布刀磨爾

又曰伊弉諾尊伊弉冊尊二神立于天霧之中曰吾欲得國乃以天瓊矛指垂而探之得磤馭盧島則拔矛而喜之曰善乎國之在矣

又曰伊弉諾伊弉冊二神坐于高天原曰當有國耶乃以天瓊矛畫成磤馭盧島

又曰伊弉諾伊弉冊二神相謂曰有物若浮膏其中蓋有國乎乃以天瓊矛探成一島名曰磤馭盧島

又曰以磤馭盧島爲胞生淡路洲次大日本豐秋津洲次伊豫二名洲次筑紫洲次吉備子洲次雙生隱岐洲與佐度洲次越洲

淡道之穗之狹別島

伊豫之二名島

古事記曰於是二柱神議云今我所生之子不良猶宜白天神之御所即共參上請天神之命爾天神之命以布斗麻邇爾（上此五字以音）卜相而詔之因女先言而不良亦還降改言故爾反降更往廻其天之御柱如先於是伊邪那岐命先言阿那邇夜志愛袁登賣袁後妹伊邪那美命言阿那邇夜志愛袁登古袁如此言竟而御合生子淡道之穗之狹別島（訓別云和氣下傚此）次生伊豫之二名島此島者身一而有面四每面有名故伊豫國謂愛上比賣（此三字以音下傚此也）讚岐國謂飯依比古粟國謂大宜都比賣（此四字以音）土左國謂建依別

日本書紀曰先以淡路洲爲胞意所不快故名之曰淡路洲廼生大日本（日本此云耶麻騰下皆傚此）豐秋津洲次生伊豫二名洲

隱伎之三子島

筑紫島

伊伎島

津島

日本書紀一書曰先生淡路洲次大日本豐秋津洲次伊豫二名洲次隱岐洲次佐度洲次筑紫洲次壹岐洲次對馬洲

佐度島

日本書紀一書曰以淡路洲爲胞生大日本豐秋津洲次淡洲次伊豫二名洲次隱岐三子洲次佐度

棄

淡島

日本書紀曰凡八神矣乾坤之道相參而化所以成此男女自國常立尊迄伊弉諾尊伊弉冊尊是謂神世七代者矣

一書曰男女耦生之神先有埿土煑尊沙土煑尊次有角樴尊活樴尊次有面足尊惶根尊次有伊弉諾尊伊弉冊尊樴橛也

日本書紀曰伊弉諾尊伊弉冊尊立於天浮橋之上共計曰底下豈無國歟廼以天之瓊（瓊玉也此曰努）矛指下而探之是獲滄溟其矛鋒滴瀝之潮凝成一島名之曰磤馭盧島二神於是降居彼島因欲共爲夫婦產生洲國便以磤馭盧島爲國中之柱（柱此云美簸肯邏）而陽神左旋陰神右旋分巡國柱同會一面時陰神先唱曰憙哉遇可美少男焉（少男此云烏等孤）因問陽神不悅曰吾是男子理當先唱如何婦人反先言乎事既不祥宜以改旋於是二神却更相遇是行也陽神先唱曰憙哉遇可美少女焉（少女此云烏等咩）因問陰神曰汝身有何成耶對曰吾身有一雌元之處陽神曰吾身亦有雄元之處思欲以吾身元處合汝身之元處於是陰陽始遘合爲夫婦

一書曰天神謂伊弉諾尊伊弉冊尊曰有豐葦原千五百秋瑞穗之地宜汝往循之廼賜天瓊戈於是二神立於天上浮橋投戈求地因畫滄海而引擧之卽戈鋒垂落之潮結而爲島名曰磤馭盧島二神降居彼島化作八尋之殿又化竪天柱陽神問陰神曰汝身有何成耶對曰吾身具成而有稱陰元者一處陽神曰吾身亦具成而有稱陽元者一處思欲以吾身陽元合汝身之陰元云爾卽將巡天柱約束曰妹自左巡吾當右巡既而分巡相遇陰神乃先唱曰妍哉可愛少男歟陽神後和之曰妍哉可愛少女歟遂夫婦先生蛭兒便載葦船而流之次生淡洲此亦不以充兒數故還復上詣於天具奏其狀時天神以太占而卜合之乃教曰婦人之辭其已先揚乎宜更還去乃卜定時日而降之故二神改復巡柱陽神自左陰神自右既遇之時陽神先唱曰妍哉可愛少女歟陰神後和之曰妍哉可愛少男歟然後同宮共住而生兒號大日本豐秋津洲次淡路洲次伊豫二名洲次筑紫洲次隱岐三子洲次佐度洲次越洲

淤母陀琉神
訶志古泥神

古事記云大斗乃辨神次淤母陀琉神次妹阿夜上訶志古泥神（此二神名皆以レ音）

日本書紀曰大苫邊尊次有レ神面足尊惶根尊（亦曰二吾屋惶根尊一亦曰二忌橿城尊一亦曰二青橿城根尊一亦曰二吾屋橿城尊一）

一書曰次有二面足尊惶根尊一

伊邪那岐神
伊邪那美神

古事記云訶志古泥神次伊邪那岐神次妹伊邪那美神（此二神名亦以レ音如レ上）

上件自二國之常立神一以下伊邪那美神以前并稱二神世七代一（上二柱神各云二一代一次雙十神各合二二神一云二一代一也）

於是天神諸命以詔二伊邪那岐命伊邪那美命二柱神一修理固成是多陀用幣流之國賜二天沼矛一而言依レ賜也故二柱神立二（訓レ立云二多々志一）天浮橋一而指二下其沼矛一以畫者鹽許々袁々呂々邇（此七字以レ音）畫鳴（訓レ鳴云二那志一）而引上時自二其矛末一垂落鹽之累積成レ島是淤能碁呂島（自レ淤以下四字以レ音）於二其島一天降坐而見二立天之御柱一見二立八尋殿一於是問二其妹伊邪那美命一曰汝身者如何成答曰吾身者成々不二成合一處一處在爾伊邪那岐命詔我身者成々而成餘處一處在故以二此吾身成餘處一刺下塞汝身不二成合一處上而爲レ生二成國土一生奈何（訓レ生云二宇牟一下效レ此）伊邪那美命答曰然善爾伊邪那岐命詔然者吾與レ汝行二廻逢是天之御柱一而爲二美斗能麻具波比一（此七字以レ音）如レ此之期乃詔汝者自レ右廻逢我者自レ左廻逢約竟以廻時伊邪那美命先言阿那邇夜志愛上袁登古袁（此十字以レ音下效レ此）後伊邪那岐命言阿那邇夜志愛上袁登賣袁各言竟之後告二其妹一曰女人先レ言不レ良雖レ然久美度迩（此四字以レ音）興而生二子水蛭子一此子者入二葦船一而流去次生二淡島一是亦不レ入二子之例一

水蛭子

日本書紀一書曰日月既生次生二蛭兒一此兒年滿二三歲一脚尚不レ立初伊弉諾伊弉冊尊巡レ柱之時陰神先發二喜言一既違二陰陽之理一所以今生二蛭兒一云々次生二鳥磐櫲樟船一輙以二此船一載二蛭兒一順レ流放

子ニ溟涬而含レ牙及其淸陽者薄靡而爲レ天重濁者淹滯而爲レ地精妙之合摶易重濁之凝場難故天先成而地後定然後神聖生ニ其中一焉故曰開闢之初洲壤浮漂譬猶三游魚之浮ニ水上一也于レ時天地之中生ニ一物一狀如ニ葦芽一便化ニ爲神一號ニ國常立尊一（至貴曰レ尊自餘曰レ命並訓ニ美擧等一也下皆倣レ此）

一書曰天地初判一物在ニ於虛中一狀貌難レ言其中自有ニ化生之神一號ニ國常立尊一亦曰ニ國底立尊一

又曰可美葦芽彥舅尊次國常立尊

又曰天地初判始有ニ俱生之神一號ニ國常立尊一

又曰天地未レ生之時譬猶下海上浮雲無上所ニ根係一其中生ニ一物一如ニ葦芽之初生一泥中一也便化ニ爲人一號ニ國常立尊一

又曰次可美葦芽彥舅尊又有レ物若ニ浮膏一生ニ於空中一因レ此化神號ニ國常立尊一

豐雲野神

古事記曰國之常立神次豐雲野神

日本書紀曰國常立尊次國狹槌尊次豐斟渟尊凡三神矣乾道獨化所以成ニ此純男一

一書曰次豐國主尊亦曰ニ豐組野尊一亦曰ニ豐香節野尊一亦曰ニ浮組野豐雲尊一亦曰ニ豐國野尊一亦曰ニ豐齧野尊一亦曰ニ葉木國野尊一亦曰ニ見野尊一

宇比地邇神

須比智邇神

古事記云豐雲野神云々次成神名ニ宇比地邇神一次妹須比智邇去神（此二神名以レ音）

日本書紀曰次有レ神泥土煑尊（泥土此云ニ于毗尼一）沙土煑尊（沙土此云ニ須毗尼一亦曰ニ泥土根尊沙土根尊一）

一書云男女耦生之神先有ニ泥土煑尊沙土煑尊一

角杙神

活杙神

古事記云須比智邇去神次角杙神次妹活杙神

日本紀一書云男女耦生之神先有ニ泥土煑尊沙土煑尊一次有ニ角樴尊活樴尊一

意富斗能地神

大斗乃辨神

古事記云活杙神次意富斗能地神次妹大斗乃辨神（此二神名亦以レ音）

日本書紀曰沙土煑尊次有レ神大戸之道尊（一云大戸之邊）大苫邊尊（亦曰ニ大戸摩彥尊大戸摩姬尊一亦曰ニ大富道尊大富邊尊一）

古今要覽稿卷第二

●神祇部

神代系譜上

天之御中主神

古事記曰天地初發之時於高天原成神名天之御中主神（訓高云阿麻下效此）次高御産巣日神次神産巣日神此三柱神者並獨神成坐而隱身也

日本書紀一書云天地初判始有倶生之神號國常立尊次國狹槌尊又曰高天原所生神名曰天御中主尊

高御産巣日神

古事記曰天之御中主神次高御産巣日神

日本紀一書曰高天原所生神名曰天御中主尊次高皇産靈尊皇産靈此云美武須毗

神産巣日神

古事記曰高御産巣日神次神産巣日神

日本紀一書曰高皇産靈尊次神皇産靈尊

宇麻志阿斯訶備比古遲神

古事記曰次國稚如浮胎而久羅下那洲多陀用弊琉之時（琉字以上十字以音）如葦牙因萌騰之物而成神名宇麻志阿斯訶備比古遲神（此神名以音）次天之常立神（訓常云登許訓立云多知）此二柱神是亦獨神成坐而隱身也

日本紀一書云古國稚地稚之時譬猶浮膏而漂蕩于時國中生物狀如葦牙之抽出也因此有化生之神號可美葦牙彥舅尊

又云天地混成之時始有神人焉號可美葦牙彥舅尊云々彥舅此云比古尼

又云天常立尊次可美葦芽彥舅尊

天之常立神

古事記云宇麻比阿斯訶備比古遲神次天之常立神

日本紀一書云天地初判有物若葦芽生於空中因此化神號天常立尊次可美葦芽彥舅尊

國之常立神

古事記曰天之常立神云々次成神名國之常立神（訓常立亦如上）次豐雲野神此二柱神亦獨神成坐而隱身也

日本書紀曰古天地未剖陰陽不分渾沌如雞

大國主神
又 大穴牟遲神
八千戈神
大物主神
葦原醜男
顯國玉神
葦原色許男神
宇都志國玉神
國作大己貴命
大國玉神

日本書紀一書
淸之湯山主三名狹漏彥八島野大國主神

木俣神 又御井神
阿遲鉏高日子根神
高比賣神 又下光比賣
事代主神
鳥鳴海神
國忍富神
速甕之多氣佐波夜遲奴美神
甕主日子神
多比理岐志麻流美神
美呂浪神
布忍富鳥鳴海神

天日腹大科度美神
遠津山岬名良斯神

大國御魂神
韓神
曾富理神
向日神
聖神
山戸臣神
御年神
奧津日子神
奧津比賣神
大山上咋神
庭津日神
阿須波神
波比岐神
香山戸臣神
羽山戸神
庭高津日神
大土神

稚三毛野命

又

彥五瀨命
磐余彥火火出見尊
彥稻飯命
三毛入野命
磐余彥尊

建速須佐之男命

奥津島比賣命
市寸島比賣命
多岐都比賣命

日本書紀
田心姬
湍津姬
市杵島姬

日本書紀一書
瀛津島姬
湍津姬
田心姬

又

市杵島姬命
田心姬命
湍津姬命

日本書記
大己貴命

日本書紀一書
五十猛命
大屋津姬命
抓津姬命

八島士奴美神
大年神
宇迦之御魂神

布波能母遲久奴須奴神
深淵之水夜禮花神
淤美豆奴神
天冬衣神

正哉吾勝勝速日天忍穗根尊
天穗日命
天津彥根命
活目津彥根命
熯速日命
熊野忍蹈命

天迩岐志國迩岐志天津日子番能迩々藝命
日本書紀一書
勝速日命
天大耳尊
火瓊々杵尊

天火明命

火照命
火須勢理命
火遠理命
日本書紀
火闌降命
彥火火出見尊
火明命
日本書紀一書
火酸芹命

又
火明命
彥火火出見尊

又
火明命
火進命
火折彥火火出見尊

天津日高子波限建鵜葺草葺不合命

五瀨命
稻氷命
御毛沼命
若御毛沼命
日本書紀一書
五瀨命
三毛野命
稻飯命
又
彥五瀨命
稻飯命
神日本磐余彥火火出見尊

大直日神
底土命
大綾津日神
底津少童命
底筒男命
表中津少童命
中筒男命
表津少童命
表筒男命
天照大神
月讀尊
素盞嗚尊

天照大神御
月讀命
建速須佐之男命

正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命
天之菩卑能命
天津日子根命
活津日子根命

能野久須毘命
建比良邊命

日本書紀一書

正哉吾勝勝速日天忍骨尊
天津彥根命
活津彥根命
天穗日命

又

勝速日天忍耳尊
天穗日命
天津彥根命
活津彥根命
熯之速日命

又

天穗日命
正哉吾勝勝速日天忍骨尊
天津彥根命
活津彥根命

又

磐筒女神―――經津主神

闇龗
闇山祇
闇罔象
志藝山津見神
羽山津見神
原山津見神
戸山津見神
衢立船戸神
道之長乳齒神
時量師神
和豆良比能宇斯神
道俣神
飽咋之宇斯能神
奥疎神
奥津那藝佐毗古神
奥津甲斐弁羅神
邊疎神
邊津那藝佐毗古神
邊津甲斐弁羅神

八十禍津日神
大禍津日神
神直毗神
大直毗神
伊豆能賣神
底津綿上津見神
底筒之男命
中津綿上津見神
中筒之男命
上津綿上津見神
上筒之男命
宇都志日金折命

日本書紀一書
八十枉津日神
神直日神
大日直神
又
速玉之男
磐土命

土雷
稚雷
黑雷
山雷
野雷
裂雷
泣澤女神
石拆神
根拆神
石筒之男神
日本書紀
根拆神
磐筒男
磐筒女
經津主神
甕速日神
日本書紀
綾威雄走神
甕速日神
熯速日神
武甕槌神
樋速日神
建御雷之男神
建布都神
豐布都神
闇淤加美神
闇御津羽神
正鹿山上津見神
淤縢山津見神
奥山上津見神
闇山津見神
日本書紀一書
啼澤女命
五百筒磐石
經津主神
甕速日神
武甕槌神
熯速日神
磐裂神
根裂神
磐筒男神
又
磐筒男神
磐筒女神
又
磐裂神
根裂神
磐筒男神

又
水神 罔象女

又
火神
金山彥
罔象女
埴山媛

又
火産靈
水神
土神
天吉葛

又
句々廼馳 木神
埴安神 土神
火神 軻遇突智

軻遇突智
雷神
大山祇神
日本書紀一書

高龗
大山祇
中山祇
麓山祇
正勝山祇
䨄山祇

素戔嗚尊

和久産巣日神
豐宇氣毘賣神

大雷
火雷
黑雷
折雷
若雷
土雷
鳴雷
伏雷
日本書紀一書

大雷
火雷

天之狹土神
國之狹土神
天之狹霧神
國之狹霧神
天之闇戸神
國之闇戸神
大戸惑子神
大戸惑女神
石長比賣
神阿多都比賣
遠津待根神
鳥之石楠船神
大宜都比賣神
火之夜藝速男神
金山毘古神
金山毘賣神
波邇夜須毘古神
波邇夜須毘賣神
彌都波能賣神

海　日本書紀
川
山
日本書紀一書
級長戸邊命　又級長津彥神風神也
倉稻魂命
少童命　海神
山祇　山神
速秋津日命　水門神
木祖句々廼馳
草祖草野姫　野槌
日神
月神
蛭兒
日本書紀一書
蛭兒
鳥磐櫲樟船
火神　軻遇突智
土神　埴山媛
稚產靈

隱岐洲
佐度洲
佐度洲
越洲
日本書紀一書
佐度洲
筑紫洲
吉備子洲
大洲
大洲
吉備子洲
對馬島
壹岐島
處々小島
日本書紀一書
壹岐洲
對馬洲
大事忍男神
石土毘古神
石巢比賣神

大戸日別神
天之吹上男神
大屋毗古神
風木津別之忍男神
海神　名大綿津見神
水戸神　名速秋津日子神
速秋津比賣神
沫那藝神
沫那美神
頰那藝神
頰那美神
天之水分神
國之水分神
天之久比奢母知神
國之久比奢母知神
風神　名志那比古神
木神　名久々能智神
山神　名大山上津見神
野神　名鹿屋野比賣神　亦名野椎神

淡道之穗之狹別島
伊豫之二名島
隱岐三子島
筑紫島
伊伎島
津島
佐度島
大倭豐秋津島
吉備兒島
小豆島
大島
女島
知訶島
兩兒島

日本書紀

淡路洲

日本書紀一書

淡洲
大日本豐秋洲

又

淡路洲
淡洲
大日本豐秋津洲
大日本豐秋津洲

日本書紀一書

淡路洲

又

淡洲
伊豫二名洲
筑紫洲
隱岐洲

日本書紀一書

伊豫二名洲
隱岐洲
佐度洲
筑紫洲

又

伊豫二名洲
筑紫洲
吉備子洲

古今要覽稿卷第一

屋代弘賢撰

●神祇部

神代系圖

神代系圖は釋日本紀紹運錄等にみえたり然るにともに日本書紀によりてしるせしなれは國常立神より前五代の神をは載られす日本書紀は正史なれとも古事記は先たちたれは最よりところとすへし依て古事記日本書紀によりて併せ記して參考に備ふ

天之御中主神　高御産巣日神

神産巣日神　宇麻志阿斯訶備比古遲神

天之常立神

日本書紀一書

天常立尊　可美葦牙彦舅尊

國常立尊

國之常立神　豐雲野神

宇比地迩神　須比智迩神

角杙神　活杙神

意富斗能地神　大斗乃辨神

淤母陀琉神　阿夜訶志古泥神

伊耶那岐神

伊耶那美神

日本書紀

國常立尊　國狹槌尊

豐斟渟尊　埿土煑尊

沙土煑尊　大戸之道尊

大苫邊尊　面足尊

惶根尊　伊弉諾尊

伊弉冊尊

日本書紀一書

靑橿城根尊

伊弉諾尊　伊弉冊尊

水蛭子

淡島

同詩賦　以上二冊戊八月四日上ル

古今要覽稿卷第時令部

門まつ

卯づえ

くす玉

軒のあやめ　以上四冊戊十二月廿四日上ル

古今要覽稿卷第時令部

卯づち

かゆ杖

あやめのかづら

ちまき

あやめ酒

すゝ拂

儺　一

同　二　以上八冊亥十二月廿九日上ル

古今要覽稿卷第冠服部

烏帽子

立烏帽子

平禮

折烏帽子

薄塗烏帽子

侍烏帽子

佐比烏帽子

柳佐比　以上八冊未十二月上ル

古今要覽稿卷第冠服部

萎烏帽子　以上一冊申十二月上ル

古今要覽稿卷第冠服部

萎烏帽子　此一冊酉十二月廿四日上ル

古今要覽稿卷第魚介部

いしぶし

かじか

とぼ

からかご　以上四冊申十月上ル

古今要覽稿卷第災異部

火雨　以上一冊申十二月上ル

古今要覽稿卷第文具部

紙

紙造法　以上二冊庚子八月廿四日上ル

古今要覽調進目錄　終

古今要覽稿卷第龍魚部
かつを　以上一冊亥十月廿九日上ル
古今要覽稿卷第龍魚部
えび
かちきとふし　以上二冊天保十三壬寅年二月廿六日上ル
古今要覽稿卷第時令部
月建
むつき
きさらぎやよひ　以上三冊午十二月上ル
古今要覽稿卷第時令部
うづき
さつき　以上二冊未九月上ル
古今要覽稿卷第時令部
みなつき
ふつき
はつき
ながつき　以上四冊未十二月上ル
古今要覽稿卷第時令部
かみなつき
しもつき
しはす　以上三冊申十月上ル
古今要覽稿卷第時令部
七夕
同　詩賦
同　和歌一
同　二
同　三
同　四　以上六冊申十二月上ル
古今要覽稿卷第時令部
七夕祭
同　詩
六日乞巧
七夕正誤　以上四冊酉七月十七日上ル
古稿要覽稿卷第時令部
なぬかのよ
七遊
玉はし
菊のきせ綿　以上四冊酉十二月廿四日上ル
古今要覽稿卷第時令部
のちの月

ひつじ草
ひし
ひるむしろ
も　以上五冊子十二月上ル
蓮
同圖
双頭蓮　天保十二丑年以上三冊八月十六日上ル
古今要覽稿卷第草木部
うき草
みつふゝき
ひし　以上三冊天保十三壬寅年二月廿六日上ル
古今要覽稿卷第菜蔬部
うはき
こみら　以上二冊卯十月廿九日上ル
古今要覽稿卷第菜蔬部
すゞな
なづな
あしなづな　以上三冊巳十二月廿六日上ル
古今要覽稿卷第菜蔬部
せり

母子草
はくべら
田平子
すゞしろ
こぼね　以上六冊午九月十三日上ル
古今要覽稿卷第菜蔬部
やまあらゝき
ゆすら
はゝか
やまもゝ
くみ　以上五冊庚子八月廿四日上ル
古今要覽稿卷第菜蔬部
ぬなは　以上一冊子十二月
古今要覽稿卷第雜藝部
ご
猿樂
田樂
くさあはせ　以上四冊戊八月四日上ル
古今要覽稿卷第伎藝部
あしで書　右一冊午九月十三日上ル

古今要覽稿卷第草木部
さたつき
いよかつら
山茶花　以上三冊未十二月上ル
古今要覽稿卷第草木部
椿　上
同　下
同圖一
同　二
同　三
同　四
くたに　以上七冊申十月上ル
古今要覽稿卷第草木部
油料一
同　二　以上二冊申十二月上ル
古今要覽稿卷第草木部
みつのかしは
水仙
蠟梅
はりの木

へみのあぶら
あけびかつら
あさ
かはちさ　以上八冊酉十二月上ル
古今要覽稿卷第草木部　花信風
ちんちやうげ
古今要覽稿卷第草木部　油料
からかしは
たふ　以上三冊戊八月四日上ル
古今要覽稿卷第草木部　菜
ひゆ
たうはせ
わうはい
そめしす
もけ
ちや　以上七冊亥十月廿九日上ル
古今要覽稿卷第草木部
からもゝ　此一冊子十二月上ル
古今要覽稿卷第草木部水草
うき草

琺瑁竹　以上六册辰九月廿一日上ル

古今要覽稿卷第草木部
呉竹
黄金竹
南京竹
ふたまた竹
臺明竹
一種大名竹
四方竹
疎節竹
篔篷久
むらさき竹
竹詩一
同　二
同和歌　以上十三册辰十二月廿四日上ル

辰年迄三百三十四卷

古今要覽稿卷第草木部
竹
ゑゆろ竹　以上二册巳九月上ル

古今要覽稿卷第草木部
はぎ
同和歌上
同　中
同　下
すゝき
同和歌上
同　下
くす
同和歌
なでしこ
同和歌　以上十一册午十二月上ル

古今要覽稿卷第草木部
尾花
女郎花
同和歌
朝貌
木槿
岡とゝき
牽牛子
同和歌　以上八册未九月上ル

うど
大葉獨活
みらのねくさ
ゐのくつち
すくなひこのくすね
のせり
蘭一
蘭二
蘭三
蘭四
蘭和歌　以上廿冊寅八月晦日上ル

古今要覧稿巻第草木部
まゆみ　紅葉九
槻　同十
歌仙一　同十一
同　二　同十二
同　三　同十三
同　四　同十四
後歌仙一　同十五
同　二　同十六
同　三　同十七
同　四　同十八
追歌仙上　同十九
同　中　同二十
同　下　同廿一
櫻十八　和歌
櫻十九　和歌
櫻二十　和歌　以上十六冊寅十二月廿五日上ル

古今要覧稿巻第草木部
なまゐ
ひらのにんじん
やまついも
めと
つしたま　以上五冊卯十月廿九日上ル

古今要覧稿巻第草木部
すゝ
の
布袋竹
さゝ
川竹

古今要覽稿卷第草木部 松九
和歌五
古今要覽稿卷第草木部
をと〳〵し
古今要覽稿卷第草木部
すまろ草
古今要覽稿卷第草木部
やますげ
古今要覽稿卷第草木部
をけら
以上六冊子十二月上ル
古今要覽稿卷第草木部
ちゝのみ 生木添上ル
なき
さをひめ
ゑぐ
おほゑみ
かたかこ
あまき
ゑみぐさ
以上八冊丑十月三日上ル
古今要覽稿卷第草木部

かはらよもぎ
同 釋名
同 和歌
同 白菊和歌
あやめぐさ
同 和歌
同
こくさ
かのにけくさ
同 釋名
以上十冊丑十二月廿五日上ル
古今要覽稿卷第草木部
櫻一 總論
櫻十六 和歌
櫻十七 和歌
とりのあしくさ 升麻一
とりのねぐさ二
いはくみ一
ひかげかづら二
あふひくさ
同 和歌

古今要覽稿卷第草木部梅二中
和歌
古今要覽稿卷第草木部梅二下
和歌
古今要覽稿卷第草木部
梅六
古今要覽稿卷第草木部
梅七
古今要覽稿卷第草木部
梅八　以上五冊亥十二月上ル
古今要覽稿卷第草木部松一
くろ松
古今要覽稿卷第草木部松二
五葉松
古今要覽稿卷第草木部松三
かしま松
古今要覽稿卷第草木部松四
され松
古今要覽稿卷第草木部松五
和歌一

古今要覽稿卷第草木部松六
和歌二
古今要覽稿卷第草木部松七
和歌三
古今要覽稿卷第草木部竹一
竹
古今要覽稿卷第草木部竹二
とらふ竹
古今要覽稿卷第草木部橘一
橘
古今要覽稿卷第草木部橘二
紀伊國蜜柑
古今要覽稿卷第草木部橘三
咬𠺕吧(ジヤガタラ)密柑
古今要覽稿卷第草木部橘四
佛手柑
古今要覽稿卷第草木部橘五
和歌　以上十四冊子八月上ル
古今要覽稿卷第草木部松八
和歌四

古今要覧稿巻第草木部
櫻十三
古今要覧稿巻第草木部
櫻十四
古今要覧稿巻第草木部
櫻十五　以上五冊酉十二月上ル
古今要覧稿巻第草木部紅葉一上
和歌一
古今要覧稿巻第草木部紅葉一中
和歌二
古今要覧稿巻第草木部紅葉一下
和歌三
古今要覧稿巻第草木部
紅葉二
古今要覧稿巻第草木部
紅葉三
古今要覧稿巻第草木部
紅葉四
古今要覧稿巻第草木部
紅葉五

古今要覧稿巻第草木部
紅葉六
古今要覧稿巻第草木部
紅葉七
古今要覧稿巻第草木部
紅葉八　以上十冊戌十二月上ル
古今要覧稿巻第草木部
靈芝　此一冊亥八月上ル
古今要覧稿巻第草木部
むべ
古今要覧稿巻第草木部
梅一
古今要覧稿巻第草木部梅二上
和歌
古今要覧稿巻第草木部
梅三
古今要覧稿巻第草木部
梅四
古今要覧稿巻第草木部
梅五　以上五冊亥十月上ル

古今要覧稿巻第蟲介部
同和歌
古今要覧稿巻第蟲介部
きり〴〵す
古今要覧稿巻第蟲介部
同和歌
古今要覧稿巻第蟲介部
こほろぎ　以上五冊子十二月調進
龜
いしがめ
詩歌釋名
白龜
綠毛龜
玳瑁　天保十二巳年以上六册八月十六日上ル
古今要覧稿巻第草木部
櫻一
古今要覧稿巻第草木部
櫻二
古今要覧稿巻第草木部
櫻三

古今要覧稿巻第草木部
櫻四
古今要覧稿巻第草木部
櫻五
古今要覧稿巻第草木部
櫻六
古今要覧稿巻第草木部
櫻七
古今要覧稿巻第草木部
櫻八
古今要覧稿巻第草木部
櫻九
古今要覧稿巻第草木部
櫻十　以上十册酉三月調進
古今要覧稿巻第草木部
をかたまの木　此一册酉九月上ル
古今要覧稿巻第草木部
櫻十一
古今要覧稿巻第草木部
櫻十二

古今要覽稿卷第禽獸部馬十二
ねづみげ馬
古今要覽稿卷第禽獸部馬十三
みづあをげ馬
以上五册子八月上ル
古今要覽稿卷第禽獸部馬十四
れんせんあしげ馬
古今要覽稿卷第禽獸部馬十五
あをひばりげ馬
古今要覽稿卷第禽獸部馬十六
くりげひばりげ馬
古今要覽稿卷第禽獸部馬十七
あかげ馬
以上五册子十二月上ル
古今要覽稿卷第禽獸部
ゐのしゝ
くま
以上二册卯十月二十九日上ル
古今要覽稿卷第禽獸部
うぐひす
同和歌一
同和歌二
ひばり

ぶた
たか
同和歌一
同和歌二
以上八册卯十二月廿五日上ル
古今要覽稿卷第禽獸部
ひつじ一
同　二
かましゝ
むくひつじ
以上四册辰十二月廿四日上ル
古今要覽稿卷第禽獸部
喚子鳥
同和歌
ほとゝぎす
同和歌一
同　二
同　三
同　四
同　五
以上八册巳九月九日上ル
古今要覽稿卷第蟲介部
松蟲鈴蟲

衣紋　此一冊亥三月上ル

古今要覧稿巻第服飾部

かたぎぬ

古今要覧稿巻第服飾部

十徳　以上二冊子十二月上ル

古今要覧稿巻第装束部

ひれ

ひたゝれ　以上二冊亥十二月廿四日上ル

古今要覧稿巻第禽獣部鷹一

總論　身體

古今要覧稿巻第禽獣部鷹二

羽

古今要覧稿巻第禽獣部鷹三

毛斑文　以上三冊未十二月上ル

古今要覧稿巻第禽獣部鷹四

十二顔　此一冊申十二月上ル

古今要覧稿巻第禽獣部

鳥語　此一冊未十二月上ル

古今要覧稿巻第禽獣部

駱駝　此一冊申九月上ル

古今要覧稿巻第禽獣部馬一

馬

古今要覧稿巻第禽獣部馬二

骨度

古今要覧稿巻第禽獣部馬三

旋毛

古今要覧稿巻第禽獣部馬四

古今要覧稿巻第禽獣部馬五

牧馬印　以上五冊酉十二月上ル

馬六釋名、馬此稿總判迄出置候處見失候に付殘置

古今要覧稿巻第禽獣部馬七

和歌　此一冊亥十二月上ル

古今要覧稿巻第禽獣部馬八

くろげ馬

古今要覧稿巻第禽獣部馬九

くりげ馬

古今要覧稿巻第禽獣部馬十

かげ馬

古今要覧稿巻第禽獣部馬十一

あしげ馬

古今要覽稿卷第器財部
いはひべ　以上一冊申十二月上ル
古今要覽稿卷第器財部
火打袋上
同　下
古今要覽稿卷第器財部
矢立硯
古今要覽稿卷第器財部
ほこ
古今要覽稿卷第器財部
大角小角
ほら　以上六冊酉七月十七日上ル
古今要覽稿卷第器財部
はとのつえ
ふぐるま　以上二冊酉十二月廿四日上ル
古今要覽稿卷第器財部
玉はゝき
むかはき　以上二冊戌十二月廿四日上ル
古今要覽稿卷第器財部
たんざく

けうさん
かさ
からかさ　以上四冊亥十月廿九日上ル
古今要覽稿卷第器財部
かうがひ
くつ　以上二冊庚子八月廿四日上ル
机
墨
藤代墨　天保十二丑年以上三册八月十六日上ル
古今要覽稿卷第飲食部
五辛
慈葱
大蒜
蘭葱　以上四冊丑十二月二十日上ル
古今要覽稿卷第飲食部
もちひ
草もちひ
椿もちひ
まがり　以上四冊戌十二月廿四日上ル
古今要覽稿卷第服飾部

今所用ほろ中
ほろ釋名正誤下
さかづらえびら
平やなぐひ
壺胡籙
えびら
以上十六册丑十二月廿日上ル

古今要覽稿卷第器財部
ひをどし甲冑一
小櫻をどし同二
ふしなはめをどし同三
しなかはをどし同四
あかとり
なぎなた
輿
籠輿
以上八册寅十二月廿五日上ル

古今要覽稿卷第器財部
うのはなをどし甲冑五
くれなひすそごをどし同六
ゆみ袋
壁代
うつぼ
以上五册十月廿九日上ル

古今要覽稿卷第器財部
ほこ
やり
以上二册十二月廿五日上ル

古今要覽稿卷第器財部
たて
あぐら
以上二册辰九月廿八日上ル

古今要覽稿卷第器財部
幕
團扇
以上二册辰十二月廿四日上ル

古今要覽稿卷第器財部
檜扇
扇
同詩賦并和歌
以上三册巳九月九日上ル

古今要覽稿卷第器財部
はた
錦旗
のぼり旗
旗紋
竹如意
以上五册巳十二月廿六日上ル

古今要覽稿卷第器財部弓一
かく弓
古今要覽稿卷第器財部弓二
梓弓
古今要覽稿卷第器財部弓三
伏竹弓
古今要覽稿郭第器財部弓四
まゝき弓
古今要覽稿卷第器財部馬具
つらぬき
古今要覽稿卷第器財部
さやまき
古今要覽稿卷第器財部
そや
以上七冊子十二月上ル
古今要覽稿卷第器財部樂器
やまとこと
さうのこと
きんのこと上
同　下
古今要覽稿卷第器財部弓五
重籐弓
古今要覽稿卷第器財部矢一
や　矢一
かぶら矢二
ふためのかぶら三
音なしかぶら四
ひきめ五
かりまた六
一手四目七
以上十二冊丑十月三日上ル
古今要覽稿卷第器財部
つる袋
つる卷
やなぐひ上
やなぐひ中
やなぐひ下
うけ緒
ゆぎ上
ひめゆぎ中
かちゆぎ下
ほろ古制上

古今要覧稿巻第器財部馬具
銜一
古今要覧稿巻第器財部馬具
銜二
古今要覧稿巻第器財部馬具
銜三
古今要覧稿巻第器財部馬具
銜四
古今要覧稿巻第器財部馬具
銜五
古今要覧稿巻第器財部馬具
韉
古今要覧稿巻第器財部馬具
籠頭　以上十一冊戊十二月上ル
古今要覧稿巻第器財部馬具
金覆輪鞍
古今要覧稿巻第器財部馬具
水精地鞍
古今要覧稿巻第器財部馬具
鞍覆

古今要覧稿巻第器財部馬具
馬甲
古今要覧稿巻第器財部馬具
乗沓　以上五冊亥十月上ル
古今要覧稿巻第器財部馬具
逆靼
古今要覧稿巻第器財部馬具
かれい付
古今要覧稿巻第器財部馬具
しりかき
古今要覧稿巻第器財部馬具
手綱一
古今要覧稿巻第器財部馬具
手綱二
古今要覧稿巻第器財部馬具
はら帯
古今要覧稿巻第器財部馬具
杏葉
古今要覧稿巻第器財部馬具
鞭　以上八冊亥十二月上ル

古今要覽稿卷第器財部鷹犬具六
餌囊　以上六冊未十二月上ル
古今要覽稿卷第器財部鷹犬具七
鈴　鷹裝束
古今要覽稿卷第器財部鷹犬具八
狩杖
古今要覽稿卷第器財部鷹犬具九
ふせきぬ　以上三冊申十二月上ル
古今要覽稿卷第器財部鷹犬具十
犬の鈴　此一冊酉九月上ル
古今要覽稿卷第器財部馬具
鞍一
古今要覽稿卷第器財部馬具
鞍二
古今要覽稿卷第器財部馬具
鞍三　以上三冊酉十二月上ル
古今要覽稿卷第器財部馬具
唐鞍
古今要覽稿卷第器財部馬具
移鞍

古今要覽稿卷第器財部馬具
水干鞍
古今要覽稿卷第器財部馬具
雜鞍
古今要覽稿卷第器財部馬具
鐙一
古今要覽稿卷第器財部馬具
鐙二
古今要覽稿卷第器財部馬具
鐙三　以上七冊戌八月上ル
古今要覽稿卷第器財部
寶鐸　此一冊戌十一月上ル
古今要覽稿卷第器財部馬具
和鞍
古今要覽稿卷第器財部馬具
鏡鞍
古今要覽稿卷第器財部馬具
木地螺鈿鞍
古今要覽稿卷第器財部馬具
黑漆鞍

古今要覽稿卷第政事部
同　　六　　以上五冊酉七月十七日上ル
飾馬　　此一冊亥十二月上ル
同　武藝
くらへむま一
競馬　二
同　三
同正誤　四　以上四冊戌八月四日上ル
鳥合
十列　　以上二冊庚子八月廿四日上ル
古今要覽稿卷第政事部
氷樣
若水
御謠初
節分　　以上四冊子十二月上ル
古今要覽稿卷第器財部
度
古今要覽稿卷第器財部
量
古今要覽稿卷第器財部
衡　　以上三冊巳十二月上ル
古今要覽稿卷第器財部
度追補
古今要覽稿卷第器財部
量追補
古今要覽稿卷第器財部
衡追補　　以上三冊午十二月上ル
古今要覽稿卷第器財部
度　　右一冊未九月調進
古今要覽稿卷第器財部鷹犬具一
あし革
古今要覽稿卷第器財部鷹犬具二
大緒　天助
古今要覽稿卷第器財部鷹犬具三
經緒　置繩
古今要覽稿卷第器財部鷹犬具四
架
古今要覽稿卷第器財部鷹犬具五
架布
鷹なふり

古今要覽稿人事部放鷹十五
鷹禮法
以上九冊申十二月上ル
古今要覽稿人事部放鷹十六
調養
古今要覽稿人事部放鷹十七
餌作りやう
古今要覽稿人事部放鷹十八
餌かひやう
犬
以上四冊酉九月上ル
古今要覽稿卷第人事部
御元服
古今要覽稿卷第人事部
御宮參
古今要覽稿卷第人事部
少人騎馬
古今要覽稿卷第人事部
御行始
以上四冊子八月上ル
古今要覽稿卷第人事部
麻疹
古今要覽稿卷第人事部

古今要覽稿卷第姓氏部
たくみ
此一冊午十二月上ル
うぢかばね
古今要覽稿卷第姓氏部
姓氏箇條
以上二冊午九月十三日上ル
名
同和歌
諱
花押一
同　二
以上五冊未九月上ル
古今要覽稿卷第姓氏部
姓氏錄校正一
以上一冊申十月上ル
古今要覽稿卷第姓氏部
字
謚
以上二冊申十二月上ル
古今要覽稿卷第姓氏部
姓氏錄校正二
同　三
同　四
同　五

古今要覽稿卷第時令部
四時
わかな
同和歌上
同和歌下
以上四册巳十二月廿六日上ル

古今要覽稿卷第時令部
春夏
秋冬
とそ
以上三册午九月十三日上ル

古今要覽稿卷第人物部
長八
右一册亥八月調進

古今要覽稿人事部放鷹一
放鷹上
古今要覽稿人事部放鷹二
放鷹下
古今要覽稿人事部放鷹三
鷹詞
古今要覽稿人事部放鷹四
野行幸
古今要覽稿人事部放鷹五
狩使
賜遊獵地
以上五册申七月上ル

古今要覽稿人事部放鷹六
放鷹裝束
野行幸裝束
古今要覽稿人事部放鷹七
療治一目鼻
古今要覽稿人事部放鷹八
療治二
古今要覽稿人事部放鷹九
療治三羽毛
古今要覽稿人事部放鷹十
療治四灸所
古今要覽稿人事部放鷹十一
鷹繫樣
古今要覽稿人事部放鷹十二
鳥附柴
古今要覽稿人事部放鷹十三
山緒
古今要覽稿人事部放鷹十四

神代系譜下　以上四冊午十二月調進

古今要覽稿卷第神祇部五
神社
官社

古今要覽稿卷第神祇部六
名神
明神

古今要覽稿卷第神祇部七
大社

古今要覽稿卷第神祇部八
小社

古今要覽稿卷第神祇部九上
祈年幣神社
二十二社
一宮二宮

古今要覽稿卷第神祇部九下
幣帛
麻袋

古今要覽稿卷第神祇部十　以上七冊未十二月上ル
伊勢大神宮

古今要覽稿卷第地理部
田た畠はた段きた町まち代しろ
河尻　以上一冊卯十月廿九日上ル

古今要覽稿卷第地理部
濱名橋　以上二冊戌八月四日上ル
山崎橋

古今要覽稿卷第曆占部
衰日　徳日

古今要覽稿卷第曆占部
うけむけ　以上二冊子九月上ル

古今要覽稿卷第歳時部
雛祭

古今要覽稿卷第歳時部
嘉定

古今要覽稿卷第歳時部
八朔

古今要覽稿卷第歳時部
十五夜

古今要覽稿卷第歳時部
玄猪　以上五冊亥十二月上ル

古今要覽調進目錄 〔文學博士黑川眞頼翁藏本〕

文政四年巳十二月ヨリ始呈覽　三冊
同　五年午十二月　呈覽　七冊
同　六年未十二月　呈覽　十七冊
同　七年申七月 九月 十二月　呈覽　十九冊
同　八年酉三月 九月 十二月　呈覽　十冊 五冊 十三冊　又一冊
同　九年戌八月 十一月 十二月　呈覽　廿九冊
同　十年亥三月 八月 十二月　呈覽　卅三冊
同十一年子八月 十二月　呈覽　五十冊　百八十七
同十二年丑十月 十二月　呈覽　五十冊　合二百三十七
同十三年寅八月 十二月　呈覽　廿冊 廿四冊　合二百八十一
天保二年卯十月 十二月　呈覽　十冊 十五冊　合二百九十六　合三百〇六冊
同　三年辰九月 十二月　呈覽　十二冊 十五冊
同　四年巳九月 十二月　呈覽　十三冊 十二冊

天保五年午九月 十二月　呈覽　十二冊 十五冊
同　六年未九月 十二月　呈覽　十六冊 十五冊
同　七年申十月 十二月　呈覽　十五冊 十三冊
同　八年酉七月 十二月　呈覽　十五冊 十四冊
同　九年戌八月 十二月　呈覽　十冊 十五冊
同　十年亥十月 十二月　呈覽　十冊 十二冊　合五百二十一冊
同　十一年子庚八月　呈覽　十一冊
同　年十二月　呈覽　十一冊　合五百四十三冊也
同　十二年丑辛八月　呈覽　十二冊
同　十三年寅二月　呈覽　五冊　合五百六十冊

古今要覽稿卷第神祇部一
神代系圖
古今要覽稿卷第神祇部二
神代系譜上
古今要覽稿卷第神祇部三
神代系譜中
古今要覽稿卷第神祇部四

古今要覧

總目

以上

正史實錄に及ばずこれを如何にといふに壯年の時一老人の敎に從て以前の筆記を破りて偏に記憶せんことをつとむといへども暗記しがたくして再び書する所卽これなりとぞ僕これを得て雀躍にたへずことゝゝく取て要覽に入抑僕の學業おほく隅東先生の啓發によれり明阿師の此志僕を俟て成るに至る自らこれ偶然ならざるに似たり

寛政十年九月廿一日

源弘賢識

書の如きは是を混じて一となすに似たり然れども經濟有用なるものは古來相傳の書も亦少からず今こゝに記す所は其要する所類をもつて聚るとその據を志るとにあり又事物の轉訛して本義を失へるに至ては世人の捨て論ぜざる所也僕おもへらく古を去こと日々に遠くよく轉訛せざるものは多からずと其轉訛せる所以もこと〳〵く是をしるすこれ六書轉注假借の遺意にして如斯ならざることあたはざる所以なり

凡此書編集のきざし十餘年の前に在或時隅東先生に此素志をかたる先生曰吾師明阿彌陀佛平生の筆記三百餘卷有あらかじめ册子を儲部門を分ち得るに隨て寫し入類聚名物考となづけて忽忘に備ふ今は足水軒が所に有是を得ば纂集の勞を省べきこと多からんと僕これを聞すみやかに足水に就てこれをかる寔に明阿師の業勤たりといふべし然れども其記する所野史家乘に專にして

是古聖王の敎旨にして其うつし學ぶべきはこれを取うつし學ぶべからざるは是を捨て風土自然の然らしむる所によつて制を立法を設らる禮は人情に本づくといへればこゝに異議なかるべし然るを聞見の馴る所よりして西土近世の法もこと〳〵く據とするに足りといふは議する所なきにしもあらず今此書のしるす所は我古聖王の敎旨より出て西土の法によられし所其證據明確なるものはこと〳〵くこれをのせすべての事物其起る所を初にし沿革を後にし或は名有て物亡び或は物傳はりて名存せざる諸家の考索を得て其所以を知者も亦皆是を識し其考索を失し說をあやまるものも捨ずして其下に分注しこれが是非を辯じて童蒙の惑を解此書部を分つこと十に八を餘し門を分つこと百を以數ふ帙をなすこと殆一千巻に及ぶこれを名づけて古今要覽といふ
凡類書の式經濟有用なる物と文華必備なると自ら二途あり今此

らず然といへども多は浮華の學にして實用に薄く羅山鵞峯二先生及篤信長胤の和漢を兼古今に通ぜしに比すれば及ばざること遠し特に源筑州傑出の才を以口を開けば必邦の爲に說き其著述の如き漢學の末書を作ることかつてなし實に國に功有と謂つべし僕是をしたふこと久し先生歿してより後此のごとく制度を講究する人有ことをきかず竊に其志を繼んと欲するに元來才拙くしかのみならず晩學にして企望に難し又顧ふに筑州の博洽の如きも事に臨て考索を失せること少からず是我邦類書あらざるが致す所也もし歷代の沿革を類聚して便覽に備へたらんには遺憾なきにちかゝるべし類書を作る力は才の拙も學識のたらざるも姑く措て唯孜々として編輯する一途にありこれ我發憤して此書を作る所以なり

凡我邦の經濟隋唐の制に本づかれしよりして今日の太平に至る

古今要覽〔岩崎文庫藏本所載〕

凡例

凡學和漢を兼古今に通ずるにあらざれば言にたらず或は偏に漢學を勸其熟習にひかれて我制度を誹謗し或は專和學を講じ其固陋なるより漢土の法に據て我邦の制度を立られし所以をしらず或は古學と稱し古書を講究せるのみを以て業とし中世以來は捨て論ぜず或は近世の故實を敎ふるを以口實とし往昔の典故を窺ことあたはざる是等の類は皆我とらざる所也凡和漢を兼古今に通ずること容易ならず限ある人才を以て限なき書籍を讀盡すことあたはず若よく讀盡す人有ともよく記憶すること能はず若克記憶する者有とも唯一己の覺悟にして後世に賜ものする事あたはず近世文運大にひらけ享保以來經學紀傳詩文其人世に乏しか

古今要覽稿第壹目錄終

時令部

姓氏部

古今要覽稿第壹目錄

神祇部

ふ所甚だ多し、常に監督指導の勞を執られ、各項排列の順序等も、二氏の意見に基きし所尠からず、これ亦茲に感謝の意を表す

明治三十八年十月

國　書　刊　行　會　識

（岩　本）　岩崎文庫本
（我　本）　我自刊我本

一、屋代氏の凡例は諸本之れを載せず、唯岩崎文庫本にのみ存せり、本書編纂の主旨を明かにし、又編纂の志を起したるは、最初の調進、卽ち文政四年より三十年以前にありしことを知らる、これ岩崎文庫本の賜にして、各部成功の年月と、毎年編纂の成績とを知るを得たるは、黑川翁の藏本たる、調進目錄の賜なり、併せて玆に一言して、感謝の意を表す

一、卷末に掲ぐる總判屋代弘賢以下の署名は、內閣文庫美濃板黃表紙本には、四五卷毎にありて、之れを擧ぐるは煩はしきに似たり、依りて各部門多少署名に異同ある分一二を擧げて、其の他は省略せり

一、又本書謄寫校訂の事に關しては、井上頼圀、佐伯有義の二氏に負

一、二條づゝ抄錄せしほどのものにて、未だ其の體裁整はず、甚だ惜むべしと雖も、之を省略せり

一、本書第一册に、總目錄を擧ぐべきは當然なれども、前述の如く、順次訂正補足の必要あり、此の後も亦各部門に、多少の變更を免れざるべし、故に出板の各册毎に、其の目錄を揭ぐる事にゐたり、猶本編全部の刊行を待ちて、文學博士小杉榲邨氏が、屋代翁の傳をかゝるゝ筈なれば、傳と共に總目錄を附することとすべし、而して其の目錄は、各本とも對照の便を謀るが爲に、左の附號を用ふべし

（內美本）　內閣美濃板黃表紙本
（內半本）　內閣半紙板白表紙本
（圖　本）　帝國圖書館本
（黑　本）　黑川翁藏本

の順に擧げたり
姓氏部は、いづれの目錄も順序整はず、依りて帝國圖書館本目錄、及び、其の他の書を參考して之れを訂正したり
時令部の目錄の順序も、亦各差異あり、春夏より閏月詩歌までは、我自刊我本總目錄に據り、四時以下は、正月の節、五月の節、七月の節、九月の節、十二月の煠拂まで、順次に排列せり、其の中に、正月の屠蘇、卯槌、粥木、七月の生見玉等は、我自刊我本に脫せるが故に、內閣文庫美濃板黃表紙本に據りて補ひたり
地理部は、田の卷の外、諸書多く缺けたり、依りて岩崎文庫本を以て之れを補ひ、江戶莊一卷は、我自刊我本に據りて加へたり
此の他、器財、草木、禽獸等諸本に據りて補正し、二三の順序を改めたる所あれども、大體は我自刊我本總目錄の順に據れり
一、岩崎文庫藏原稿本の中、天文、居處、飮食、器財等未成の卷あれども、

りては、單に提要と釋名正誤とのみを摘録したるに過ぎざれば、眞の抄本にして、本書の面目を窺ふこと能はず

一、調進目録は本篇の脱稿せるごとに、呈覽したる目次にして、殆ど本書の總目録の如し、今呈覽の年時を見るに、文政四年十二月より、天保十三年二月まで、二十二年間、四十五回に五百六十册を獻上ちたるなり、參考の爲に本册に收めたり、又、帝國圖書館本に、古今要覽目録とて一卷あり、奥書に、右は當時有之候處之假目録に御座候弘化二乙巳年十二月岡野祐之とあり、又、我自刊我本の總目録は、内閣文庫の半紙本に據りて、之れを補正せるものなるべし

一、本書目録の順序は、以上上三種の目録に據り、又諸本を對照參按して、改めたる所もあり、其の一二を擧ぐれば

神祇部は、卷數最も多き、内閣文庫美濃板黃表紙本を調進目録

録一巻あり、淺草文庫の印を捺す、前書に比するに、文章もまゝ訂正せりとおぼしき所あり、諸本の中やゝ後に謄寫せるものゝ如し、此の二書、何れが前、何れが後といふこと詳ならざれども、とにかく兩書の中、進獻本たりしことは、殆ど疑なきものゝ如し、黑川眞賴翁藏本合本百册あり、岩崎文庫亦合本七十六册を藏し、不忍文庫の藏印あり、共に未呈覽の原本なりといふ、其の中には、未だ完成せざる卷册も尠からず、以上の四書互に長短ありて、對照校正に益したること頗る多し、共に學界の珍とすべし、此の他、帝國圖書館本三百三卷あれども、各部門とも不足の卷少からず、我自刊我本は、神祇、姓氏、時令、地理、曆占、歲時、器財(一部分)を刊行ゐたれども、神祇部に於ては、九、十、十一の三卷を脫し、姓氏部に於ては、六、七の二卷を脫し、時令部に於ては數册を脫し、器財部の如きは、圖畫の大半を省略せり、殊に存採叢書に收めたる、古今要覽抄に至

の凡例にて明なるが、現に脫稿調進せるは二十四部、卷數五百六十册なり、豫定目錄中、部中の一門となせるものを、更に一部とゐたるものも尠からず、之れを豫定目錄に比較するに、天文、祥瑞、居處、釋教、官職、和歌、小學の各部は、未だ一卷も調進せず、又、神祇、地理、人物、政事の各部の如きも、調進せるは僅に其の一部分に過ぎず、されば、本書全部完成の曉には、遙に千卷以上に上りしなるべし、本書にして完結したらんには、後進に資益すること多大なりしならんに、中道にして屋代氏歿し、完成を見るに至らざりしは遺憾といふべし

一、本書は浩瀚にして、ゐかも寫本なるを以て、完本を藏するもの甚だ尠し、內閣文庫に二本あり、一は白表紙にして半紙本なり、五百十八卷、外に目錄一卷、合本百七十八册、不忍文庫の藏印ありて、目錄の順序もやゝ整へり、一は黃表紙美濃本にて、四百八十三卷、目

古今要覽稿第壹

例言

一、本書は文政天保の頃、幕府の命に因りて、屋代弘賢氏總判となり、屋代通賢、大河戸儀成、志村知孝、橋本好春、山下正房、林高典、栗山定興、南條近行、栗原信充、松岡行義、岩崎常正、池野好謙等數人相會して、編輯、校正、圖畫、淨寫等を分擔し、文政四年より天保十三年に至るまで、二十二年間に、通計五百六十卷を調進せるものなりといふ、其の調進の順序及び年月等は、本册に收めたる黑川眞賴翁の藏本なる、古今要覽調進目錄に據りて明かなり

一、本書は部門を、神祇、天文、地理、祥瑞、時令、居處、釋敎、人物、姓氏、官職、政事、和歌、小學、飮食、器財、禽獸、草木、雜事の十八部に分類し、部中更に門を設け、卷數大凡一千卷にて大成の豫定なりしことは、屋代氏

古今要覧稿

第一